

乾隆朝上諭檔 第一冊 目錄

乾隆元年（丙辰年 公元一七三六年）

正月

初二日	.....	一
初八日	.....	一
初十日	.....	一
十二日	.....	二
十三日	.....	三
十七日	.....	三
十八日	.....	四
二十日	.....	四
二十一日	.....	五
二十二日	.....	六
二十三日	.....	七
二十四日	.....	八

二月

二十八日	.....	八
初四日	.....	八
初五日	.....	〇
初七日	.....	二
初八日	.....	二
初九日	.....	三
初十日	.....	四
十一日	.....	四
十三日	.....	四
十六日	.....	五
十七日	.....	八
十九日	.....	八
二十日	.....	九
二十一日	.....	〇
二十三日	.....	〇
二十四日	.....	一
二十五日	.....	二
二十七日	.....	二
三十日	.....	四

三月

初一日	.....	二五
初三日	.....	二五
初六日	.....	二六
初七日	.....	二六
初八日	.....	二七
初九日	.....	二九
初十日	.....	三〇
十一日	.....	三〇
十三日	.....	三二
十四日	.....	三二
十五日	.....	三二
十七日	.....	三三
十九日	.....	三三
二十日	.....	三四
二十一日	.....	三四
二十四日	.....	三五
二十五日	.....	三五
二十六日	.....	三五
二十七日	.....	三六

四月

二十八日	.....	三六
二十九日	.....	三七
三十日	.....	三七
初二日	.....	三八
初三日	.....	三八
初四日	.....	三九
初八日	.....	四〇
十一日	.....	四〇
十二日	.....	四〇
十三日	.....	四一
十四日	.....	四二
十六日	.....	四二
十七日	.....	四二
十八日	.....	四三
十九日	.....	四四
二十日	.....	四四
二十一日	.....	四四
二十二日	.....	四五
二十三日	.....	四六

五月

二十四日	.....	四七
二十五日	.....	四七
二十七日	.....	四七
二十八日	.....	四九
二十九日	.....	四九
初一日	.....	四九
初二日	.....	四九
初四日	.....	五〇
初五日	.....	五一
初六日	.....	五二
初七日	.....	五三
初八日	.....	五四
初九日	.....	五五
初十日	.....	五七
十一日	.....	五七
十二日	.....	五八
十三日	.....	五九
十四日	.....	五九
十五日	.....	六〇

六月

十六日	.....	六一
十七日	.....	六一
十九日	.....	六二
二十日	.....	六三
二十一日	.....	六三
二十二日	.....	六四
二十四日	.....	六四
二十五日	.....	六五
二十六日	.....	六六
二十七日	.....	六七
三十日	.....	七一
初一日	.....	七二
初二日	.....	七三
初四日	.....	七三
初五日	.....	七三
初六日	.....	七四
初七日	.....	七五
初九日	.....	七七
初十日	.....	七八

七月

十一日	.....	七八
十二日	.....	七九
十三日	.....	八〇
十六日	.....	八一
十七日	.....	八四
十九日	.....	八五
二十日	.....	八五
二十一日	.....	八六
二十二日	.....	八七
二十三日	.....	八八
二十四日	.....	八九
二十五日	.....	九〇
二十七日	.....	九〇
二十八日	.....	九一
二十九日	.....	九二
初一日	.....	九二
初二日	.....	九二
初三日	.....	九五
初四日	.....	九六

八月

初五日	.....	九七
初七日	.....	九七
初九日	.....	九九
初十日	.....	一〇〇
十一日	.....	一〇一
十六日	.....	一〇一
十七日	.....	一〇一
十八日	.....	一〇二
二十一日	.....	一〇二
二十二日	.....	一〇二
二十四日	.....	一〇三
二十五日	.....	一〇三
二十六日	.....	一〇三
二十七日	.....	一〇四
二十八日	.....	一〇四
二十九日	.....	一〇五
初一日	.....	一〇七
初三日	.....	一〇七
初六日	.....	一〇八

九月

初七日	.....	一〇八
初八日	.....	一〇八
初九日	.....	一〇九
初十日	.....	一一〇
十一日	.....	一一一
十六日	.....	一一二
十七日	.....	一一二
十八日	.....	一一二
二十日	.....	一一三
二十四日	.....	一一三
二十六日	.....	一一七
初一日	.....	一一七
初二日	.....	一一七
初三日	.....	一一八
初四日	.....	一一八
初六日	.....	一一九
初七日	.....	一一九
初八日	.....	一二〇
初十日	.....	一二〇

十月

初七日	.....	一二九
初五日	.....	一二九
初四日	.....	一二八
初三日	.....	一二八
初二日	.....	一二七
二十九日	.....	一二七
二十八日	.....	一二七
二十七日	.....	一二七
二十六日	.....	一二六
二十三日	.....	一二五
二十二日	.....	一二五
二十一日	.....	一二四
十七日	.....	一二四
十六日	.....	一二四
十五日	.....	一二二
十四日	.....	一二二
十三日	.....	一二二
十二日	.....	一二〇
十一日	.....	一二〇

初八日	.....	一二九
初九日	.....	一三〇
初十日	.....	一三〇
十二日	.....	一三一
十四日	.....	一三一
十五日	.....	一三一
十六日	.....	一三一
十七日	.....	一三二
二十一日	.....	一三二
二十二日	.....	一三三
二十三日	.....	一三三
二十四日	.....	一三三
二十五日	.....	一三四
二十八日	.....	一三五
二十九日	.....	一三六
十一月		
初一日	.....	一三六
初二日	.....	一三六
初三日	.....	一三七
初五日	.....	一三七

初六日	.....	一三七
初七日	.....	一三七
初八日	.....	一三九
十二日	.....	一三九
十五日	.....	一四〇
十八日	.....	一四〇
二十二日	.....	一四〇
二十七日	.....	一四一
二十八日	.....	一四二
二十九日	.....	一四二
三十日	.....	一四二
十二月		
初一日	.....	一四三
初四日	.....	一四三
初五日	.....	一四四
初六日	.....	一四四
初七日	.....	一四四
初八日	.....	一四五
初九日	.....	一四六
初十日	.....	一四六

乾隆二年（丁巳年 公元一七三七年）

正月

十五日……………一四七  
 二十五日……………一四七  
 二十六日……………一四八  
 二十八日……………一四八

初四日……………一四九  
 初五日……………一四九  
 初十日……………一五〇  
 十一日……………一五〇  
 十六日……………一五一  
 十七日……………一五一  
 二十一日……………一五一  
 二十二日……………一五二  
 二十四日……………一五二  
 二十七日……………一五三

二月

初一日……………一五三  
 初六日……………一五三  
 初三日……………一五五  
 初四日……………一五五  
 初八日……………一五五  
 十一日……………一五五  
 十五日……………一五六  
 十六日……………一五六  
 十八日……………一五六  
 二十日……………一五七  
 二十一日……………一五八  
 二十三日……………一五八  
 二十五日……………一五九  
 二十七日……………一五九  
 二十九日……………一六〇

三月

初二日……………一六〇  
 初三日……………一六〇

四 月	
初六日	一六一
初八日	一六一
初九日	一六一
初十日	一六一
十一日	一六二
十三日	一六三
十六日	一六三
十九日	一六四
二十日	一六四
二十一日	一六四
二十三日	一六四
二十四日	一六四
二十六日	一六六
二十八日	一六八
二十九日	一六八
三十日	一六八
初一日	一六九
初二日	一六九
初三日	一七〇

五 月	
初六日	一七〇
初七日	一七三
初十日	一七四
十二日	一七四
十三日	一七五
十四日	一七五
十五日	一七六
十七日	一七六
十八日	一七八
十九日	一七八
二十日	一八一
二十一日	一八一
二十四日	一八一
二十五日	一八一
二十六日	一八二
二十七日	一八二
初二日	一八三
初四日	一八三
初六日	一八四



初七日	.....	一八四
初八日	.....	一八五
初九日	.....	一八五
初十日	.....	一八六
十一日	.....	一八六
十二日	.....	一八七
十三日	.....	一八七
十四日	.....	一八八
十五日	.....	一八八
十六日	.....	一八九
十七日	.....	一八九
十八日	.....	一八九
十九日	.....	一九〇
二十日	.....	一九〇
二十一日	.....	一九〇
二十二日	.....	一九一
二十三日	.....	一九一
二十四日	.....	一九一
二十五日	.....	一九一
二十六日	.....	一九一
二十七日	.....	一九一
二十八日	.....	一九一
二十九日	.....	一九一
三十日	.....	一九二
六 月		
初二日	.....	一九二
初八日	.....	一九四

初九日	.....	一九五
初十日	.....	一九六
十一日	.....	一九六
十二日	.....	一九六
十三日	.....	一九六
十四日	.....	一九六
十五日	.....	一九七
十六日	.....	一九七
十七日	.....	一九七
十八日	.....	一九七
十九日	.....	一九八
二十日	.....	一九八
二十一日	.....	一九八
二十二日	.....	一九八
二十三日	.....	一九八
二十四日	.....	一九八
二十五日	.....	一九八
二十六日	.....	一九八
二十七日	.....	一九八
二十八日	.....	一九八
二十九日	.....	一九八
三十日	.....	一九八
七 月		
初一日	.....	一九九
初二日	.....	一九九
初三日	.....	一九九
初四日	.....	一九九
初五日	.....	一九九
初六日	.....	一九九
初七日	.....	二〇〇
初八日	.....	二〇〇
初九日	.....	二〇〇
初十日	.....	二〇一
十一日	.....	二〇一
十二日	.....	二〇一
十三日	.....	二〇一
十四日	.....	二〇一
十五日	.....	二〇一
十六日	.....	二〇二

八月

十七日	二〇三
十八日	二〇三
十九日	二〇五
二十一日	二〇五
二十三日	二〇七
二十五日	二〇七
二十七日	二〇七
二十九日	二〇七
三十日	二〇八
初二日	二〇八
初三日	二〇八
初四日	二〇九
初六日	二〇九
初八日	二〇九
初十日	二一〇
十一日	二一〇
十六日	二一〇
十八日	二一〇
二十一日	二一一

九月

二十九日	二一一
初三日	二一一
初六日	二一二
初八日	二一三
初十日	二一四
十一日	二一四
十三日	二一四
十四日	二一四
十五日	二一五
十九日	二一五
二十一日	二一六
二十二日	二一六
二十三日	二一七
二十五日	二一八
二十六日	二一八
二十八日	二一八
三十日	二一九

閏九月

初一日	.....	二一九
初七日	.....	二二〇
初九日	.....	二二〇
初十日	.....	二二一
十一日	.....	二二一
十二日	.....	二二一
十三日	.....	二二二
十四日	.....	二二二
十五日	.....	二二二
十七日	.....	二二三
十八日	.....	二二三
二十日	.....	二二四
二十一日	.....	二二四
二十二日	.....	二二五
二十四日	.....	二二五
二十五日	.....	二二五
二十六日	.....	二二六
二十九日	.....	二二六

十月

初二日	.....	二二六
初三日	.....	二二七
初十日	.....	二二七
十二日	.....	二二八
十三日	.....	二二八
十七日	.....	二二九
十八日	.....	二二九
二十日	.....	二三〇
二十二日	.....	二三一
二十六日	.....	二三二

十一月

初三日	.....	二三二
初五日	.....	二三三
初九日	.....	二三三
十一日	.....	二三四
十二日	.....	二三四
十四日	.....	二三四

十五日 ..... 二三五  
 二十日 ..... 二三六  
 二十七日 ..... 二三六  
 二十八日 ..... 二三七  
 二十九日 ..... 二三七  
 三十日 ..... 二三八

十二月

初八日 ..... 二三九  
 初九日 ..... 二三九  
 初十日 ..... 二三九  
 十一日 ..... 二三九  
 十五日 ..... 二四一  
 十八日 ..... 二四一  
 十九日 ..... 二四二  
 二十日 ..... 二四二  
 二十二日 ..... 二四二  
 二十三日 ..... 二四三  
 二十七日 ..... 二四三  
 二十八日 ..... 二四三

乾隆三年（戊午年公元一七三八年）

正月

初二日 ..... 二四四  
 初八日 ..... 二四四  
 初十日 ..... 二四五  
 十一日 ..... 二四六  
 十二日 ..... 二四六  
 十七日 ..... 二四七  
 十九日 ..... 二四七  
 二十日 ..... 二四八  
 二十二日 ..... 二四八  
 二十三日 ..... 二四九  
 二十八日 ..... 二四九  
 二十九日 ..... 二四九

二月

初二日 ..... 二四九

初三日……………二五〇  
 初四日……………二五〇  
 初七日……………二五〇  
 十二日……………二五一  
 十六日……………二五一  
 二十一日……………二五二  
 二十二日……………二五二  
 二十三日……………二五二  
 二十四日……………二五三  
 二十八日……………二五三

三月

初一日……………二五四  
 初二日……………二五四  
 初三日……………二五五  
 初五日……………二五六  
 初十日……………二五七  
 十四日……………二五七  
 十五日……………二五八  
 十六日……………二五九  
 十八日……………二六〇

十九日……………二六一  
 二十日……………二六一  
 二十五日……………二六一  
 二十六日……………二六二  
 二十八日……………二六二  
 二十九日……………二六三

四月

初二日……………二六四  
 初四日……………二六五  
 初六日……………二六六  
 初七日……………二六六  
 初十日……………二六六  
 十五日……………二六七  
 十七日……………二六七  
 十八日……………二六七  
 十九日……………二六八  
 二十日……………二六八  
 二十二日……………二七〇  
 二十四日……………二七〇  
 二十七日……………二七一

二十八日.....二七二  
二十九日.....二七三

五月

初八日.....二七三  
初十日.....二七三  
十一日.....二七四  
十五日.....二七四  
十六日.....二七四  
十九日.....二七五  
二十日.....二七五  
二十一日.....二七六  
二十二日.....二七六  
二十三日.....二七七  
二十五日.....二七七  
二十七日.....二七八  
二十八日.....二七九

六月

初二日.....二七九  
初三日.....二七九

初四日.....二八〇

初七日.....二八一

初八日.....二八一

初十日.....二八二

十一日.....二八三

十四日.....二八三

十五日.....二八四

十七日.....二八四

十八日.....二八四

十九日.....二八五

二十日.....二八五

二十三日.....二八六

二十四日.....二八七

二十五日.....二八七

二十六日.....二八七

七月

初二日.....二八八

初三日.....二八八

初五日.....二八九

初六日.....二八九

初七日	.....	二九〇
初八日	.....	二九〇
初九日	.....	二九一
初十日	.....	二九一
十一日	.....	二九一
十二日	.....	二九二
十四日	.....	二九三
十五日	.....	二九三
十六日	.....	二九三
十七日	.....	二九四
十八日	.....	二九四
十九日	.....	二九四
二十一日	.....	二九五
二十二日	.....	二九五
二十三日	.....	二九六
二十四日	.....	二九六
二十五日	.....	二九七
二十七日	.....	二九七
二十九日	.....	二九七
三十日	.....	二九七

八月

初一日	.....	二九七
初二日	.....	二九八
初三日	.....	二九八
初四日	.....	二九八
初五日	.....	二九九
初六日	.....	三〇一
初七日	.....	三〇一
初八日	.....	三〇一
初九日	.....	三〇二
十一日	.....	三〇三
十二日	.....	三〇三
十四日	.....	三〇四
十七日	.....	三〇四
十八日	.....	三〇四
二十四日	.....	三〇五
二十五日	.....	三〇六
二十八日	.....	三〇六

九月

初二日	.....	三〇七
初三日	.....	三〇七
初四日	.....	三〇七
初六日	.....	三〇七
初八日	.....	三〇八
初十日	.....	三〇八
十一日	.....	三〇八
十二日	.....	三〇九
十四日	.....	三〇九
十五日	.....	三一〇
十六日	.....	三一〇
十七日	.....	三一〇
十八日	.....	三一〇
十九日	.....	三一〇
二十日	.....	三一〇
二十三日	.....	三一〇
二十六日	.....	三一〇
二十七日	.....	三一〇
二十八日	.....	三一〇

十月

三十日	.....	三一四
初一日	.....	三一四
初二日	.....	三一五
初三日	.....	三一六
初四日	.....	三一六
初六日	.....	三一八
初七日	.....	三一八
初九日	.....	三一八
初十日	.....	三一九
十一日	.....	三一九
十二日	.....	三二〇
十三日	.....	三二〇
十五日	.....	三二〇
十六日	.....	三二〇
十七日	.....	三二〇
十八日	.....	三二〇
二十日	.....	三二〇
二十一日	.....	三二〇
二十二日	.....	三二〇



二十五日……………三二四  
 二十六日……………三二五  
 二十七日……………三二五

十一月

初二日……………三二六  
 十一日……………三二六  
 十六日……………三二七  
 十九日……………三二七  
 二十日……………三二八  
 二十一日……………三二八  
 二十二日……………三二八  
 二十四日……………三二九  
 二十五日……………三二九  
 二十七日……………三二九  
 二十八日……………三三〇  
 二十九日……………三三〇

十二月

初二日……………三三〇  
 初三日……………三三一

初四日……………三三一  
 初五日……………三三一  
 初八日……………三三二  
 初九日……………三三二  
 十一日……………三三二  
 十三日……………三三三  
 十六日……………三三三  
 十七日……………三三四  
 十八日……………三三五  
 二十日……………三三五  
 二十一日……………三三六  
 二十二日……………三三六  
 二十四日……………三三七  
 二十五日……………三三七  
 二十六日……………三三七

乾隆四年（己未年 公元一七三九年）

正月

初五日	.....	三三八
初七日	.....	三三九
初八日	.....	三三九
十二日	.....	三三九
十三日	.....	三四〇
十七日	.....	三四〇
十八日	.....	三四〇
十九日	.....	三四一
二十日	.....	三四一
二十一日	.....	三四一
二十二日	.....	三四二
二十四日	.....	三四二
二十五日	.....	三四二
二十六日	.....	三四三
二十七日	.....	三四三

二月

二十八日	.....	三四三
二十九日	.....	三四四
附錄七件	.....	三四四
初一日	.....	三五〇
初三日	.....	三五〇
初五日	.....	三五〇
初六日	.....	三五一
初七日	.....	三五一
初九日	.....	三五二
十二日	.....	三五三
十五日	.....	三五三
十六日	.....	三五四
十七日	.....	三五四
十八日	.....	三五五
十九日	.....	三五五
二十二日	.....	三五五

附錄七件……………三五六

三月

初一日……………三六三  
初三日……………三六三  
初四日……………三六四  
初六日……………三六四  
初八日……………三六四  
初十日……………三六五  
十一日……………三六五  
十二日……………三六六  
十四日……………三六八  
十六日……………三六八  
十七日……………三六八  
十八日……………三六九  
二十日……………三六九  
二十一日……………三七〇  
二十二日……………三七〇  
二十三日……………三七一  
二十四日……………三七一  
二十五日……………三七二

二十六日……………三七二  
二十七日……………三七二  
二十八日……………三七二  
三十日……………三七三  
附錄十件……………三七三

四月

初一日……………三八四  
初三日……………三八四  
初四日……………三八四  
初七日……………三八四  
初九日……………三八五  
初十日……………三八六  
十一日……………三八六  
十二日……………三八六  
十三日……………三八七  
十六日……………三八七  
十九日……………三八八  
二十一日……………三八八  
二十二日……………三八八  
二十三日……………三八九

五月

二十四日……………三九〇  
 二十五日……………三九〇  
 二十七日……………三九〇  
 二十八日……………三九一  
 附錄十二件……………三九一

初一日……………四〇〇  
 初二日……………四〇〇  
 初三日……………四〇〇  
 初六日……………四〇〇  
 初十日……………四〇一  
 十二日……………四〇一  
 十三日……………四〇二  
 十四日……………四〇三  
 十五日……………四〇三  
 十七日……………四〇四  
 十九日……………四〇四  
 二十日……………四〇五  
 二十二日……………四〇五  
 二十四日……………四〇六

六月

二十六日……………四〇六  
 二十七日……………四〇六  
 二十八日……………四〇六  
 二十九日……………四〇六  
 附錄七件……………四〇七

初一日……………四一一  
 初二日……………四一一  
 初三日……………四一一  
 初四日……………四一二  
 初七日……………四一三  
 初十日……………四一三  
 十一日……………四一四  
 十六日……………四一四  
 十七日……………四一五  
 十八日……………四一五  
 二十一日……………四一五  
 二十二日……………四一五  
 二十三日……………四一五  
 二十四日……………四一六

二十六日.....四一七  
附錄八件.....四一七

七月

初一日.....四二四  
初四日.....四二四  
初六日.....四二四  
初八日.....四二五  
初十日.....四二五  
十一日.....四二五  
十五日.....四二五  
十七日.....四二五  
十八日.....四二六  
二十日.....四二六  
二十二日.....四二六  
二十六日.....四二七  
二十七日.....四二八  
二十八日.....四二八  
三十日.....四二九  
附錄十二件.....四三〇

八月

初二日.....四三九  
初三日.....四四〇  
初七日.....四四〇  
初十日.....四四〇  
十七日.....四四一  
十八日.....四四一  
十九日.....四四三  
二十日.....四四三  
二十二日.....四四四  
二十四日.....四四六  
二十八日.....四四六  
二十九日.....四四七  
三十日.....四四八  
附錄三件.....四四八

九月

初一日.....四五〇  
初二日.....四五〇  
初四日.....四五〇

初五日	四五二
初六日	四五二
初九日	四五二
初十日	四五二
十一日	四五三
十四日	四五三
十五日	四五三
十七日	四五三
十八日	四五四
十九日	四五五
二十日	四五五
二十五日	四五五
二十六日	四五五
二十七日	四五六
附錄三件	四五七

十月

初二日	四六一
初三日	四六一
初四日	四六一
初七日	四六二

十一日	四六二
十二日	四六二
十四日	四六三
十五日	四六三
十六日	四六四
十七日	四六六
二十日	四六六
二十三日	四六六
二十四日	四六七
二十五日	四六七
二十八日	四六八
附錄七件	四六九

十一月

初一日	四七六
初三日	四七六
初五日	四七六
初六日	四七六
初七日	四七七
初八日	四七七
初九日	四七七

十五日	四七七
十六日	四七八
十七日	四七八
十八日	四七九
十九日	四七九
二十日	四八〇
二十一日	四八〇
二十二日	四八〇
二十三日	四八〇
二十四日	四八〇
二十五日	四八一
二十六日	四八一
二十七日	四八一
二十八日	四八一
二十九日	四八一
附錄五件	四八二

十二月

初二日	四八七
初六日	四八七
初七日	四八八
初八日	四八九
初九日	四九〇
初十日	四九〇
十一日	四九〇

十二日	四九〇
十七日	四九一
十九日	四九一
二十一日	四九一
二十二日	四九二
二十七日	四九二
三十日	四九二
附錄十七件	四九三

乾隆五年（庚申年 公元一七四〇年）

正月

初三日	五〇七
初五日	五〇七
初十日	五〇七
十二日	五〇八
二十日	五〇八
二十二日	五〇九
二十三日	五一〇

二十四日	五二一
二十五日	五二一
二十九日	五二二
附錄四件	五二二

二月

初一日	五一四
初二日	五一四
初五日	五一四
初六日	五一五
初七日	五一五
初十日	五一五
十一日	五一五
十二日	五一六
十三日	五一六
十四日	五一七
二十一日	五一七
二十五日	五一七
二十九日	五一七
三十日	五一七
附錄九件	五一八

三月

初一日	五二二
初二日	五二二
初三日	五二二
初六日	五二二
初八日	五二三
初九日	五二三
初十日	五二三
十三日	五二三
十四日	五二四
十八日	五二四
二十日	五二五
二十一日	五二五
二十五日	五二六
二十八日	五二七
附錄十二件	五二七

四月

初二日	五三五
初四日	五三五



五月

初十日	五三七
十四日	五三八
十五日	五三八
十六日	五三九
十八日	五四〇
十九日	五四〇
二十日	五四一
二十一日	五四一
二十二日	五四二
二十四日	五四二
二十五日	五四三
二十六日	五四四
二十七日	五四四
二十八日	五四五
附錄六件	五四六
初七日	五五一
初十日	五五一
十七日	五五一
十八日	五五一

六月

十九日	五五二
二十日	五五二
二十一日	五五三
二十二日	五五三
二十五日	五五四
二十六日	五五四
二十八日	五五五
附錄四件	五五五
初四日	五六〇
初六日	五六一
初七日	五六一
初九日	五六二
十一日	五六二
十四日	五六四
十六日	五六五
十七日	五六五
十八日	五六六
十九日	五六六
二十一日	五六七

二十四日	五六七
二十五日	五六八
二十六日	五六八
二十七日	五六八
附錄十四件	五六九

閏六月

初一日	五八一
初二日	五八二
初四日	五八二
初五日	五八三
初八日	五八三
初十日	五八四
十二日	五八五
十三日	五八五
十四日	五八五
十五日	五八六
十六日	五八六
二十一日	五八七
二十三日	五八七
二十五日	五八八

附錄十二件	五八八
-------	-----

七月

初一日	五九六
初二日	五九六
初三日	五九七
初五日	五九七
初七日	五九七
初九日	五九八
初十日	五九九
十二日	五九九
十四日	五九九
十五日	五九九
十六日	六〇〇
十七日	六〇一
十八日	六〇二
十九日	六〇二
二十日	六〇二
二十二日	六〇三
二十五日	六〇五
二十六日	六〇五

八月

二十八日.....六〇六  
附錄九件.....六〇六

初二日.....六一四

初四日.....六一四

初十日.....六一四

十一日.....六一四

十二日.....六一四

十三日.....六一五

十五日.....六一五

十六日.....六一五

十七日.....六一六

二十一日.....六一七

二十二日.....六一七

二十四日.....六一七

二十八日.....六一八

附錄七件.....六一八

九月

初一日.....六二一

初四日.....六二一

初五日.....六二一

初八日.....六二一

初九日.....六二三

初十日.....六二三

十一日.....六二四

十三日.....六二五

十五日.....六二五

十七日.....六二五

十八日.....六二五

二十一日.....六二六

二十二日.....六二七

二十四日.....六二七

二十五日.....六二八

二十七日.....六二八

二十八日.....六二八

二十九日.....六三〇

附錄十一件.....六三〇

十月

初一日.....六四七

初六日	六四七
初九日	六四七
十二日	六四八
十七日	六四九
十九日	六五〇
二十一日	六五〇
二十六日	六五一
二十九日	六五二
附 十三件	六五三

十一月

初一日	六六一
初二日	六六一
初三日	六六三
初四日	六六三
初五日	六六五
初六日	六六五
初十日	六六七
十二日	六六八
十四日	六六八
十五日	六六八

十八日	六六九
二十一日	六七〇
二十二日	六七〇
二十八日	六七〇
附錄九件	六七〇

十二月

初二日	六七七
初六日	六七七
初七日	六七七
初八日	六七八
初十日	六七八
十一日	六七九
十四日	六八〇
十五日	六八〇
十六日	六八〇
十八日	六八一
十九日	六八一
二十一日	六八一
二十六日	六八一
二十七日	六八二

附录十件……………六八二

乾隆六年（辛酉年 公元一七四一年）

正月

初二日……………六九三  
 初四日……………六九三  
 初六日……………六九三  
 初九日……………六九四  
 初十日……………六九四  
 十二日……………六九四  
 十八日……………六九四  
 二十一日……………六九五  
 二十二日……………六九五  
 二十三日……………六九五  
 二十四日……………六九五  
 二十五日……………六九六  
 二十八日……………六九六  
 二十九日……………六九七

二月

初一日……………六九七  
 初二日……………六九七  
 初五日……………六九七  
 初七日……………六九八  
 初八日……………六九八  
 初九日……………六九九  
 初十日……………六九九  
 十一日……………七〇一  
 十二日……………七〇一  
 十三日……………七〇二  
 十四日……………七〇三  
 十六日……………七〇三  
 十七日……………七〇三  
 二十五日……………七〇三  
 二十七日……………七〇四

三月

初一日……………七〇四  
 初二日……………七〇五

四月

初三日	.....	七〇五
初五日	.....	七〇六
初八日	.....	七〇六
初九日	.....	七〇六
十二日	.....	七〇八
十三日	.....	七〇八
十六日	.....	七〇八
十八日	.....	七〇八
十九日	.....	七〇九
二十日	.....	七一〇
二十五日	.....	七一〇
二十六日	.....	七一二
二十七日	.....	七一二
二十八日	.....	七一三
二十九日	.....	七一三
初一日	.....	七一四
初三日	.....	七一四
初七日	.....	七一四
初十日	.....	七一五

五月

初一日	.....	七一七
初七日	.....	七一七
初十日	.....	七一八
十一日	.....	七一九
十二日	.....	七一九
十五日	.....	七一九
十八日	.....	七二〇
十九日	.....	七二〇
二十六日	.....	七二〇
二十七日	.....	七二一
二十八日	.....	七二一
二十九日	.....	七二二
十四日	.....	七一五
十五日	.....	七一五
十八日	.....	七一五
十九日	.....	七一六
二十一日	.....	七一六
二十二日	.....	七一六
二十八日	.....	七一六

六月

初一日	.....	七二三
初二日	.....	七二三
初三日	.....	七二三
初四日	.....	七二四
初七日	.....	七二四
初九日	.....	七二四
初十日	.....	七二四
十一日	.....	七二四
十三日	.....	七二四
十四日	.....	七二五
十五日	.....	七二五
十六日	.....	七二五
十七日	.....	七二五
十八日	.....	七二六
二十日	.....	七二七
二十一日	.....	七二七
二十二日	.....	七二七
二十三日	.....	七二八
二十四日	.....	七三〇

七月

二十五日	.....	七三〇
二十六日	.....	七三〇
初一日	.....	七三〇
初二日	.....	七三一
初三日	.....	七三一
初五日	.....	七三二
初七日	.....	七三三
初八日	.....	七三三
初九日	.....	七三四
初十日	.....	七三五
十一日	.....	七三六
十二日	.....	七三六
十六日	.....	七三六
十七日	.....	七三六
十八日	.....	七三六
二十日	.....	七三七
二十一日	.....	七三七
二十四日	.....	七三七
二十五日	.....	七三七

二十七日.....七三八  
三十日.....七三八

八月

初二日.....七三八  
初四日.....七三九  
初六日.....七三九  
初八日.....七三九  
初九日.....七四〇  
十一日.....七四〇  
十七日.....七四〇  
十九日.....七四一  
二十一日.....七四一  
二十二日.....七四一  
二十七日.....七四一  
二十九日.....七四一  
三十日.....七四一

九月

初一日.....七四二  
初九日.....七四二

十一日.....七四二  
十二日.....七四二  
十三日.....七四二  
十五日.....七四二  
二十二日.....七四三  
二十三日.....七四三  
二十五日.....七四三  
二十七日.....七四三  
二十八日.....七四四  
二十九日.....七四五

十月

初五日.....七四五  
初六日.....七四五  
初八日.....七四五  
初九日.....七四五  
十二日.....七四六  
十四日.....七四六  
十六日.....七四六  
十七日.....七四六  
二十一日.....七四七



二十二日 ..... 七四七  
 二十五日 ..... 七四八  
 二十七日 ..... 七四八

十一月

初三日 ..... 七四九  
 初五日 ..... 七四九  
 初八日 ..... 七五〇  
 十七日 ..... 七五〇  
 二十一日 ..... 七五一  
 二十三日 ..... 七五一  
 二十八日 ..... 七五一  
 二十九日 ..... 七五一  
 三十日 ..... 七五二

十二月

初二日 ..... 七五二  
 初三日 ..... 七五二  
 初四日 ..... 七五二  
 初五日 ..... 七五三  
 初七日 ..... 七五三

初八日 ..... 七五三  
 初九日 ..... 七五四  
 十一日 ..... 七五四  
 十四日 ..... 七五四  
 十九日 ..... 七五四  
 二十日 ..... 七五四

乾隆七年（壬戌年 公元一七四二年）

正月

初二日 ..... 七五五  
 初四日 ..... 七五五  
 十一日 ..... 七五五  
 十七日 ..... 七五六  
 十八日 ..... 七五六  
 二十日 ..... 七五六  
 二十一日 ..... 七五六  
 二十二日 ..... 七五七  
 二十四日 ..... 七五七

二十五日.....七五八  
 二十七日.....七五八  
 二十九日.....七五八  
 三十日.....七五九

二月

初一日.....七五九  
 初二日.....七五九  
 初四日.....七六〇  
 十三日.....七六〇  
 十四日.....七六一  
 十五日.....七六一  
 十六日.....七六一  
 二十三日.....七六二  
 二十四日.....七六二  
 二十六日.....七六三  
 二十七日.....七六三  
 二十八日.....七六四

三月

初三日.....七六四

初八日.....七六四  
 初九日.....七六五  
 初十日.....七六五  
 十一日.....七六六  
 十二日.....七六六  
 十三日.....七六七  
 十四日.....七六八  
 十五日.....七六八  
 十六日.....七六八  
 十七日.....七六九  
 十九日.....七六九  
 二十一日.....七六九  
 二十二日.....七六九  
 二十五日.....七七〇  
 二十六日.....七七〇  
 二十八日.....七七〇  
 二十九日.....七七〇  
 三十日.....七七一

四月

初二日.....七七一

初四日……………七七二  
 初五日……………七七二  
 初六日……………七七三  
 初八日……………七七三  
 十二日……………七七四  
 十三日……………七七四  
 十六日……………七七五  
 十七日……………七七六  
 十八日……………七七六  
 二十日……………七七七  
 二十二日……………七七七  
 二十四日……………七七七  
 二十六日……………七七八  
 二十七日……………七七八  
 二十八日……………七七九

五月

初一日……………七七九  
 初八日……………七七九  
 初九日……………七七九  
 十一日……………七七九

十四日……………七八〇  
 二十二日……………七八〇  
 二十三日……………七八一  
 二十五日……………七八一  
 二十六日……………七八二  
 二十七日……………七八二  
 二十九日……………七八二

六月

初一日……………七八三  
 初三日……………七八三  
 初四日……………七八三  
 初六日……………七八三  
 初七日……………七八三  
 初九日……………七八四  
 十二日……………七八四  
 二十日……………七八四  
 二十四日……………七八四  
 二十七日……………七八六  
 二十九日……………七八七

七月

初八日 ..... 七八七  
 初十日 ..... 七八八  
 十二日 ..... 七八八  
 十四日 ..... 七八九  
 十五日 ..... 七八九  
 十九日 ..... 七八九  
 二十一日 ..... 七九〇  
 二十三日 ..... 七九〇  
 二十四日 ..... 七九一  
 二十六日 ..... 七九一  
 二十七日 ..... 七九二

八月

初一日 ..... 七九二  
 初二日 ..... 初九三  
 初四日 ..... 七九四  
 初五日 ..... 七九五  
 初六日 ..... 七九五  
 初八日 ..... 七九六

九月

初九日 ..... 七九七  
 十一日 ..... 七九七  
 十二日 ..... 七九八  
 十三日 ..... 七九九  
 十四日 ..... 七九九  
 十五日 ..... 七九九  
 十六日 ..... 八〇〇  
 十七日 ..... 八〇〇  
 十八日 ..... 八〇〇  
 十九日 ..... 八〇一  
 二十六日 ..... 八〇一  
 二十七日 ..... 八〇二  
 二十八日 ..... 八〇二  
 二十九日 ..... 八〇二

初一日 ..... 八〇三  
 初三日 ..... 八〇四  
 初四日 ..... 八〇四  
 初五日 ..... 八〇五  
 初九日 ..... 八〇五

初十日 ..... 八〇五  
 十四日 ..... 八〇六  
 十五日 ..... 八〇七  
 十六日 ..... 八〇八  
 二十一日 ..... 八〇八  
 二十四日 ..... 八〇八  
 二十五日 ..... 八〇八  
 二十八日 ..... 八〇九  
 二十九日 ..... 八〇九

十月

初三日 ..... 八一〇  
 初四日 ..... 八一〇  
 初五日 ..... 八一〇  
 初九日 ..... 八一〇  
 初十日 ..... 八一〇  
 十一日 ..... 八一〇  
 十二日 ..... 八一〇  
 十六日 ..... 八一〇  
 十七日 ..... 八一〇  
 十九日 ..... 八一〇

十一月

二十日 ..... 八一三  
 二十一日 ..... 八一四  
 二十七日 ..... 八一四  
 二十八日 ..... 八一五  
 二十九日 ..... 八一六

初一日 ..... 八一六  
 初四日 ..... 八一六  
 初五日 ..... 八一七  
 初六日 ..... 八一七  
 初七日 ..... 八一七  
 初九日 ..... 八一八  
 初十日 ..... 八一八  
 十二日 ..... 八一八  
 十八日 ..... 八一八  
 二十日 ..... 八一八  
 二十四日 ..... 八一八  
 二十七日 ..... 八一八

十二月

初二日	.....	八二一
初三日	.....	八二二
初十日	.....	八二二
十一日	.....	八二三
十二日	.....	八二三
十三日	.....	八二三
十四日	.....	八二四
十五日	.....	八二四
十六日	.....	八二四
十七日	.....	八二四
十八日	.....	八二五
十九日	.....	八二五
二十一日	.....	八二六
二十二日	.....	八二七
二十六日	.....	八二八
三十日	.....	八二九

乾隆八年（癸亥年 公元一七四三年）

正月

初二日	.....	八三〇
初十日	.....	八三〇
十三日	.....	八三一
二十日	.....	八三一
二十二日	.....	八三一

二月

初八日	.....	八三一
初九日	.....	八三一
初十日	.....	八三二
十二日	.....	八三三
十五日	.....	八三三
十六日	.....	八三三
十七日	.....	八三四
十九日	.....	八三四

二十一日.....八三五  
 二十三日.....八三六  
 二十四日.....八三六  
 二十五日.....八三六  
 二十六日.....八三七  
 二十七日.....八三七  
 二十九日.....八三七

三月

初二日.....八三七  
 初五日.....八三八  
 初六日.....八三八  
 十二日.....八三八  
 十五日.....八三八  
 十六日.....八三九  
 十九日.....八三九  
 二十日.....八三九  
 二十二日.....八四〇  
 二十三日.....八四〇  
 二十六日.....八四〇  
 二十七日.....八四〇

二十九日.....八四〇

四月

初一日.....八四〇  
 初六日.....八四一  
 初七日.....八四二  
 十一日.....八四二  
 十三日.....八四二  
 十六日.....八四二  
 十八日.....八四三  
 二十日.....八四四  
 二十三日.....八四四  
 二十四日.....八四四  
 二十五日.....八四五  
 二十六日.....八四五  
 二十八日.....八四五  
 三十日.....八四六

閏四月

初二日.....八四六  
 初三日.....八四六

初四日	.....	八四七
初五日	.....	八四八
初六日	.....	八四八
初八日	.....	八四八
初九日	.....	八四九
十一日	.....	八五〇
十三日	.....	八五〇
十四日	.....	八五〇
十六日	.....	八五一
二十日	.....	八五一
二十二日	.....	八五一
二十五日	.....	八五一
二十七日	.....	八五二
二十九日	.....	八五二

五 月

初一日	.....	八五二
初二日	.....	八五二
初三日	.....	八五三
初五日	.....	八五三
初七日	.....	八五三

六 月

初八日	.....	八五三
十二日	.....	八五四
十五日	.....	八五四
十七日	.....	八五四
十八日	.....	八五五
二十四日	.....	八五五
二十五日	.....	八五六
二十六日	.....	八五六
二十八日	.....	八五六
二十九日	.....	八五六

初一日	.....	八五七
初二日	.....	八五七
初三日	.....	八五八
初五日	.....	八五九
初六日	.....	八五九
初七日	.....	八五九
初八日	.....	八六〇
初九日	.....	八六一
初十日	.....	八六一



七月

十二日	八六二
十五日	八六二
十六日	八六二
十七日	八六三
十八日	八六四
十九日	八六四
二十日	八六四
二十一日	八六四
二十二日	八六五
二十五日	八六六
二十七日	八六八
二十八日	八六八
初二日	八六八
初三日	八六八
初七日	八六九
初八日	八六九
十一日	八七〇
十七日	八七〇
二十五日	八七一

八月

初四日	八七二
初七日	八七二
初八日	八七三
十一日	八七三
十七日	八七四
二十日	八七四
二十四日	八七四

九月

初五日	八七四
十三日	八七五
十五日	八七五
十七日	八七六
十九日	八七六
二十一日	八七七
二十四日	八七七
二十八日	八七八
三十日	八七八

十月

初一日.....八七八

初五日.....八七九

初六日.....八七九

初八日.....八七九

十三日.....八八〇

十六日.....八八〇

十七日.....八八〇

十九日.....八八一

二十日.....八八一

二十一日.....八八一

二十三日.....八八二

二十四日.....八八二

二十六日.....八八二

二十七日.....八八三

十一月

初一日.....八八三

初三日.....八八四

初四日.....八八五

十二月

初六日.....八八五

初七日.....八八五

初八日.....八八五

初九日.....八八六

初十日.....八八六

十一日.....八八六

十五日.....八八七

二十一日.....八八七

二十九日.....八八七

三十日.....八八七

初一日.....八八七

初三日.....八八八

初五日.....八八八

初六日.....八八八

初九日.....八八九

初十日.....八八九

十一日.....八八九

十二日.....八九〇

十三日.....八九〇

十四日	八九〇
十五日	八九〇
十六日	八九一
十七日	八九二
十八日	八九二
十九日	八九二
二十日	八九三
二十一日	八九三
二十四日	八九三
二十七日	八九四
二十八日	八九四

乾隆九年(甲子年 公元一七四四年)

正月

初二日	八九五
初三日	八九五
初四日	八九五
初六日	八九六

初九日	八九六
初十日	八九七
十一日	八九七
十三日	八九八
十六日	八九八
二十日	八九八
二十一日	八九八
二十二日	八九九
二十三日	八九九
二十四日	九〇〇
二十八日	九〇〇

二月

初二日	九〇一
初三日	九〇一
初九日	九〇一
十一日	九〇二
十三日	九〇三
十四日	九〇三
十五日	九〇三
十八日	九〇三

三月

十九日	九〇四
二十四日	九〇四
二十五日	九〇五
二十九日	九〇六
初五日	九〇六
初六日	九〇六
初七日	九〇六
初八日	九〇六
初九日	九〇七
初十日	九〇七
十五日	九〇八
十九日	九〇八
二十二日	九〇九
二十三日	九〇九
二十四日	九一一
二十五日	九一一
二十六日	九一一
二十七日	九一一

四月

初一日	九一二
初二日	九一二
初三日	九一二
初五日	九一二
初九日	九一二
十三日	九一三
十五日	九一三
十八日	九一三
二十日	九一三
二十二日	九一三
二十三日	九一四
二十四日	九一四
二十七日	九一四
二十九日	九一四

五月

初二日	九一五
初三日	九一五
初四日	九一五

初六日 ..... 九一六  
 初九日 ..... 九一六  
 初十日 ..... 九一七  
 十四日 ..... 九一七  
 二十三日 ..... 九一七  
 二十四日 ..... 九一八  
 二十五日 ..... 九一八  
 二十六日 ..... 九一八  
 二十七日 ..... 九一九  
 二十八日 ..... 九一九  
 二十九日 ..... 九一九

六月

初二日 ..... 九二〇  
 初三日 ..... 九二〇  
 初七日 ..... 九二〇  
 初八日 ..... 九二一  
 十五日 ..... 九二一  
 十六日 ..... 九二一  
 十九日 ..... 九二一  
 二十日 ..... 九二二

七月

二十五日 ..... 九二二

初一日 ..... 九二二  
 初三日 ..... 九二三  
 初五日 ..... 九二三  
 初九日 ..... 九二三  
 十二日 ..... 九二四  
 十六日 ..... 九二四  
 十七日 ..... 九二四  
 二十三日 ..... 九二四  
 二十四日 ..... 九二五  
 二十五日 ..... 九二六  
 二十六日 ..... 九二七  
 二十七日 ..... 九二七  
 二十八日 ..... 九二八  
 二十九日 ..... 九二八

八月

初二日 ..... 九二九  
 初三日 ..... 九二九

初四日	.....	九二九
初八日	.....	九三〇
初九日	.....	九三〇
初十日	.....	九三一
十一日	.....	九三一
十四日	.....	九三一
十六日	.....	九三一
十九日	.....	九三四
二十一日	.....	九三四
二十二日	.....	九三四
二十三日	.....	九三五
二十四日	.....	九三五



圖一：乾隆皇帝朝服像

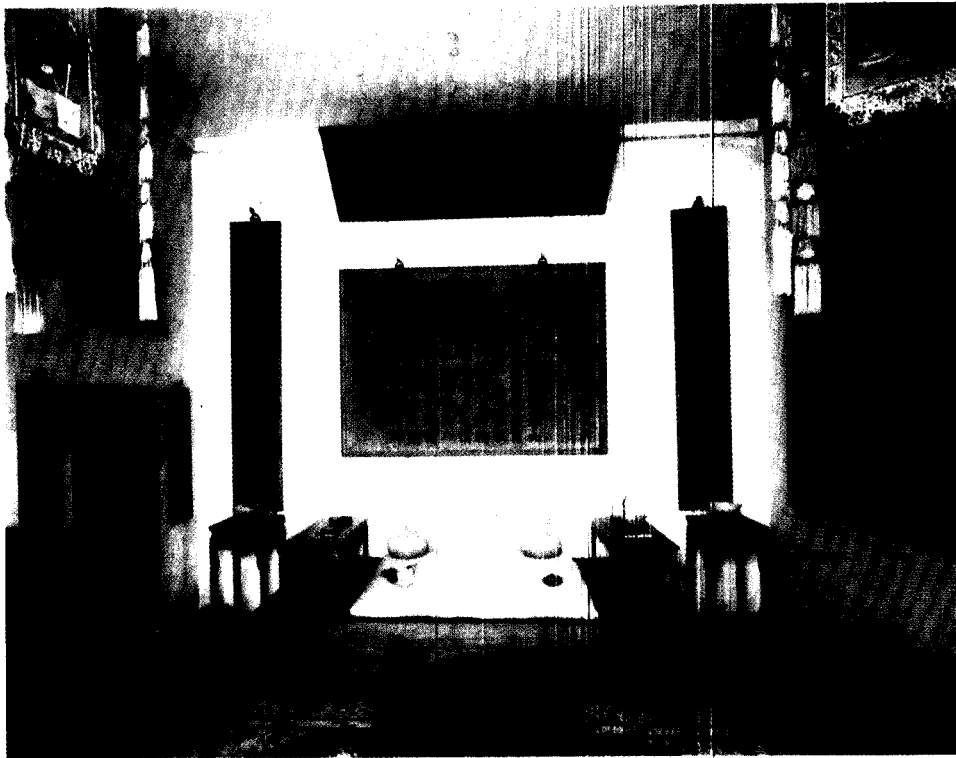


圖二：乾隆皇帝戎裝像

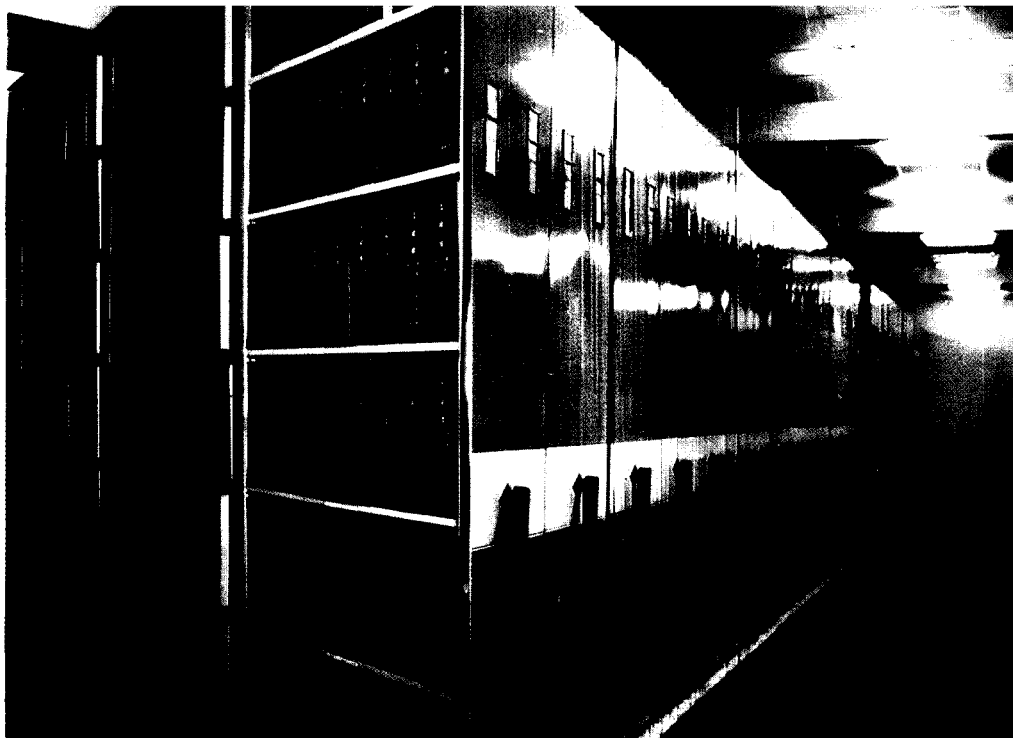




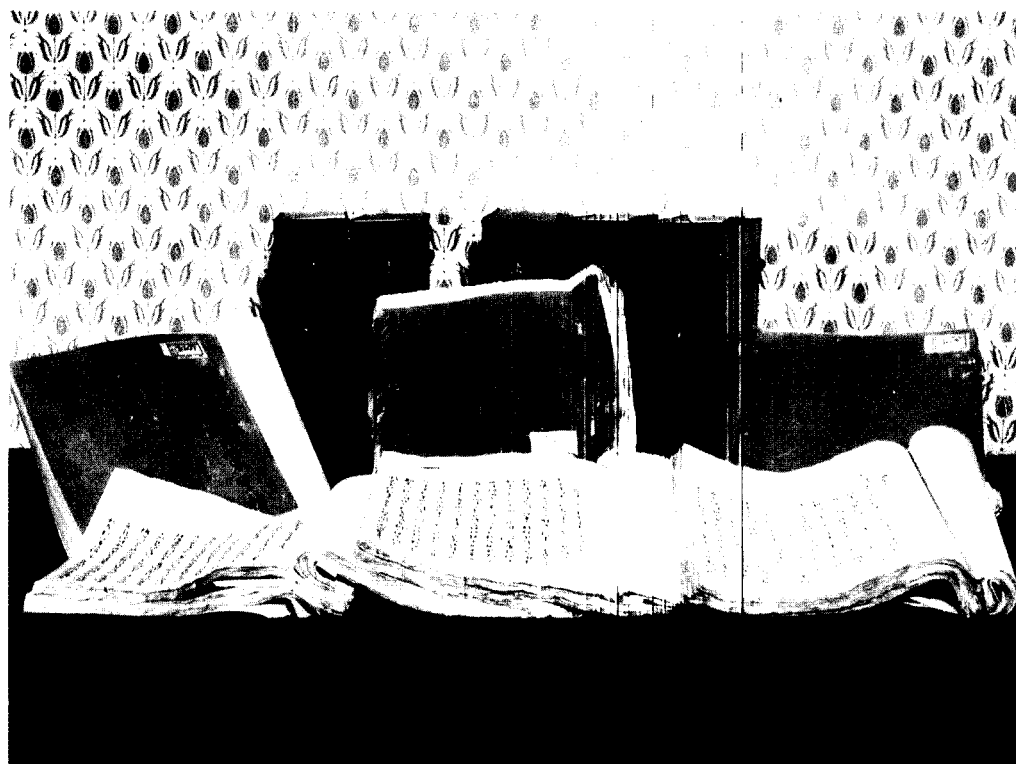
圖三：乾隆皇帝寫字像



圖四：養心殿西暖閣內景



圖五：上諭檔庫房內景



圖六：乾隆上諭檔原檔

## 前言

「上諭檔」是本館所藏清代軍機處匯抄上諭的檔冊之一。

上諭本是泛指皇帝的命令和指示，統稱諭旨。但也是清代皇帝發佈日常政令的載體的總稱。它是清代最高級的下行文書之一，具有權威的法律和行政約束作用，是清王朝實行有效統治的得力工具。

爲了及時貫徹執行皇帝的命令指示，或爲了存檔備查，清代自中央到地方的許多機構和衙署，都有專門抄錄諭旨的檔冊，名稱各不相同。如在清廷中樞的內閣，有絲綸簿、外紀簿、上諭簿；在軍機處有寄信檔、明發檔、綸音檔、剿捕檔、諭旨檔等檔冊。這些檔冊，有的記諭，有的記旨，有的記公開的上諭，有的記機密的上諭，有的專記某一類的諭旨，都從各種不同的角度，記載了皇帝的諭旨。但也正因爲各有分工，所以都只是記錄了某些方面的上諭。軍機處的「上諭檔」，則是綜合性的記載皇帝諭旨的檔冊，兼有上述各類檔冊的內容。但若就某個專題內容來說，它又可能沒有某些專檔詳盡。如就記載乾隆末年鎮壓林爽文起義一事而言，上諭檔沒有「臺灣檔」詳細；就嘉慶中葉的林清起義一事而言，上諭檔也沒有「林清檔」詳盡。再如寄信諭旨，上諭檔內基本全載，但也有一些寄信諭旨，不見於上諭檔，而載在「寄信檔」內。這種情況在乾隆二十五年以前較爲普遍。

清代和我國歷代封建王朝一樣，以皇帝的名義頒發命令文書種類很多，所謂制、詔、誥、敕等類皆是，其形制、質地、顏色及其使用範圍亦各不一樣。上諭，亦即諭旨，是屬於皇帝發佈日常政令的命令性和指示性文書。但嚴格來說，「諭」和「旨」是有所區別的。據清人梁章鉅的《樞垣紀畧》卷十三記載：「凡特降者，曰內閣奉上諭；因所奏請而降者曰奉旨」。這就是說：「諭」是皇帝主動發佈的指示性命令；「旨」是皇帝對臣僚們向上請示的批覆性指示。在軍機處的「上諭檔」內，這兩種內容的上諭都有，它實際上是清代皇帝所發佈的日常政令的總匯。由此可知，「上諭檔」的內容十分重要，涉及的問題非常廣泛。凡清王朝對當時國家政治、軍事、經濟、文化等各項重要事務的最後決策及終極處置情況，都載在「上諭檔」內。但自嘉慶朝以後，清廷鎮壓較大規模的農民起義及有些對外戰爭（如鴉片戰爭等）的一些上諭，因另有「剿捕檔」等專檔記載，「上諭檔」內不

詳細記載這類內容的諭和旨。

清王朝自順治朝以來，就使用上諭文書，但在雍正朝以前，並無固定的辦理上諭文書的機構，沒有嚴格的立卷歸檔制度，以致存留下來的上諭文書很少。當時的上諭文書，有時是由皇帝親自用硃筆撰寫，稱作硃諭（硃諭也有內閣大學士擬稿後，經皇帝同意而用硃筆謄抄者）；有的是由內閣大學士撰寫；有的則是由南書房的侍臣撰擬，通過內閣頒發，或者直接發送有關部院。自雍正七年（一謂八年）設立軍機處後，上諭文書除皇帝偶爾親筆起草的硃諭外，均專歸軍機處撰擬。先是由軍機大臣親自起草，乾隆以後，逐漸改由軍機章京起草。其撰寫的過程是：凡臣工的奏摺到達宮廷，經皇帝硃批「另有旨」或「即有旨」者，均交軍機大臣閱看，然後由皇帝召見軍機大臣，商討應發上諭的要點，稱爲「召對」。召對完畢，軍機大臣回到值房，或親自擬旨，或令軍機章京撰擬成稿，謄清後由軍機大臣送呈皇帝審閱，稱作「述旨」。有時皇帝也用硃筆略作修改，但一般不作改動，即發交軍機處封發。發出諭旨的途徑，一般是兩條：一條是由軍機處送交內閣公佈，稱作明發上諭。這種明發上諭，其開頭第一句都是某年某月某日「內閣奉上諭」或「內閣奉旨」。其內容大都是屬於國家重要政事需要全體臣工甚至中外臣民所共知的，如有關宣戰、議和、大赦、巡幸、謁陵、經筵、蠲賑、高級官員的除授降革、重大案件的處理結果等。另一種是由軍機處直接寄發給有關的官員的寄信諭旨，因其寄自內廷，也稱「廷寄」。這是一種只限於少數或個別臣工所應知道而不適宜於公開的機密諭旨。其內容大都是告誡臣工、指授兵略、查核政事、責問刑罰之失當等。因恐事洩洩露，故不由內閣發抄公佈，而以軍機大臣奉旨的名義，由軍機大臣用寄信的形式，轉達給應該接受和執行上諭的官員。這類上諭，一般均由「軍機大臣寄」或「軍機大臣傳諭」某某人爲開頭，然後接書某年某月某日「奉上諭」或「奉旨」字樣，在將上諭內容轉述完畢之後，則以「欽此。遵旨寄信前來」或「欽此。遵旨傳諭前來。」爲結束。按照制度，這「寄信」與「傳諭」二詞的使用是有嚴格區別的，主要是根據接受上諭者官職的高低。《樞垣紀略》卷十三載有：「寄信，外間謂之廷寄。其式：行經略大將軍、欽差大臣、將軍、參贊大臣、都統、副都統、辦事大臣、領隊大臣、總督、巡撫學政，曰軍機大臣字寄；其行鹽政、關差、藩臬、曰軍機大臣傳諭。」

凡寄信上諭，經皇帝審定批准後，即由軍機處裝入封函。封函書寫式樣也有一定規定：「字寄者，右書辦理軍機處封寄，左書某處某官開拆；傳諭者，居中大書辦理軍機處封，左邊下半書傳諭某處某官開拆。皆於

封口及年月日處鈐用辦理軍機處印。」（梁章鉅：《樞垣紀略》卷十三）寄信上諭除行京內大臣者由軍機處用交片直接封發送達外，行外省官員者，均由軍機處視事情之緩急，於封函上註明，或馬上飛遞、或四百里、或五百里、或六百里加緊。然後交兵部加封，由驛馳遞。

爲了存檔備查，軍機處將上諭原件封發之前，均抄錄一份留存，其底稿、草稿之類，均由每日值班章京與領班章京會同檢齊焚銷。其發出之上諭原件，即歸接受諭令之官員遵照執行和保存，不再退回。但凡硃諭或上諭原件上有皇帝用硃筆親自改動或圈點、勾劃之處者，則於遵照執行之後，必須將原件退回宮中保存。不過，這類上諭爲數甚少。

軍機處每日所錄存的上諭，以一月爲一冊，稱爲「現月檔」，又每三個月合爲一厚冊，稱之謂「四季檔」。現月檔與四季檔，通稱爲「上諭檔」。上諭檔是清廷中央所存留的唯一的一份完整的備查本。清廷日後在檢查上諭執行情形及在其他事項處理過程中需要查考之時，均是根據這一份「上諭檔」。因此，它雖是抄本，仍具有與正本同樣的法律效力和史料價值。

上諭文書自清初使用以來，是清廷中央發佈日常政令的主要手段和形式，直至清末光緒年間採用電報以後，上諭逐漸使用電報發佈，遂有「電旨」、「電寄」等名目出現，在軍機處也相應形成了「電寄檔」。其實質與寄信上諭相同，只是發送手段與方式有所改變而已。但即使如此，也並沒有完全取代傳統的上諭文書，「上諭檔」亦繼續存在，直至清朝滅亡。

根據現存乾隆朝以後歷朝「上諭檔」的內容來看，其中不僅包括明發諭旨、寄信上諭及硃筆上諭等諭旨，而且還附抄有其他文種、其他內容的檔案文件。如歷次殿試及順天鄉試、宗室鄉試的欽命試題；重要案件人犯的供詞，如乾隆年間林爽文起義被鎮壓後，清廷追查柴大紀一案的審訊供詞，即附於上諭檔內；各式各樣的清單，如乾隆年間纂修四庫全書過程中的「禁毀書籍清單」、「文淵閣撤出各書清單」、「閱看書籍名單」、「記過處分名單」等，再如光緒年間的「王大臣年歲生日單」和「緣事遣成文武各員案由單」，道光年間的「斬絞各犯清單」，又如「直省各屬戶口民數清單」、「查辦教案人犯物件清單」、「河工漫口次數單」、「稅銀數目清單」等等，名目繁多，不一而足；上諭檔內還有大量的軍機處奏片，這是軍機處奉旨議覆各項事件的奏呈文書；軍機處致直省將軍督撫大員的咨文、軍機處致俄國薩納特衙門的咨文以及軍機處給有關機構及官員個人的移會、札文、

函件等。這些大都是皇帝隨時交給軍機處辦理各類事件過程中所形成的文件，因為事關欽命交辦，不僅皇帝隨時有查問的可能，軍機處也要隨時向皇帝覆奏辦理的進展情形及其結果，而且日後遇到類似事件，皇帝還可能查詢，而軍機處更要查照成例辦理。於是逐一併匯抄於上諭檔內，以便隨時查考。因此，「上諭檔」不僅是清廷日常政令的總匯，而且其中還包括了豐富的其他具體史實，益加說明了「上諭檔」的史料價值之不同一般，也由此可以瞭解軍機處的作用日益擴大的一般概況。

乾隆朝是清代的鼎盛時期，清代的許多所謂「文治武功」，均於這一時期完成，清代的許多典章制度，也是在這一期形成並固定。乾隆朝又是清代由盛轉衰的轉折時期，清王朝的許多弊政和各種矛盾衝突，也在這一時期有所暴露和發展。因此《乾隆朝上諭檔》的內容尤為豐富，其作為史料的研究和參考價值之大，更不待而言。

本館這一部份珍貴的檔案資料，從未系統地公佈過，為了更快地提供給清史學界及各界學術研究參考，特予影印出版。

本書在編輯出版過程中，得到了中國社會科學院及檔案出版社的有力支持，謹在此表示衷心的感謝。

編者 一九八六年九月

## 編例

一、《乾隆朝上諭檔》是根據我館所藏軍機處全宗乾隆時期的「上諭檔」影印的，起自乾隆元年，止於乾隆六十年。其中除乾隆十三年缺一至七月份和乾隆三十年缺六月份以外，其他年份均完整。全書預計編印十八冊，每冊一千頁左右。

二、乾隆「上諭檔」多數年份原存只有一套檔冊，少數年份則有兩套，個別年份竟多達三套，共計三百三十四冊。此次影印時，發現部份重套檔冊所收文件稍有出入。爲了向讀者提供更多的史料，我們兼收並蓄，互相補充，使之更加完整。對其中個別殘損之件，則予換補，以便閱讀。

三、乾隆「上諭檔」所載主要是內閣的明發諭旨和軍機處的廷寄上諭，同時也收錄了不少軍機處奏片和其他文件。絕大多數年份的檔冊，都是根據每個文件的奉旨日期或發文時間，按照編年體例，混合進行編排的。但也有少數年份的檔冊，則把軍機處奏片等文件，按月照時間的先後，單獨編排，附於每月諭旨之後。爲了使各年在體例上前後一致，同時又維持原檔的面貌，我們對這部份文件仍照原樣付印，但作爲附錄，分別標明，以示區別。

四、爲了保持「上諭檔」內各篇文件的原貌，對其中存在的個別錯字、衍字和簡體字、異體字、古體字，以及一些修改挖補、勾劃貼蓋和缺漏殘損之處，均未予改動增補，請讀者見諒。

五、一些原檔天頭所貼的小黃簽（內容大多是文件的簡單摘要，一般僅二三個字），地角所畫的小圓圈和所寫「已錄」、「未錄」字樣，這些均係後來修書利用檔案時的標記，此次影印時未予保留。

六、爲了方便讀者，對原檔由於裝訂差錯或者抄寫筆誤而造成的一些文件日期錯亂之處，編者經過查核館藏乾隆朝「隨手登記檔」，業已分別加以改正；另外，我們對正文內，每個正文用阿拉伯數字按順序作了編號，附件用※號標明，附錄各件則以帶括號的阿拉伯數字進行編號；每冊在正文前編有按年月日排列的文件簡單目錄，並注明所在頁碼；全書出齊後，另作專題和人名索引，單獨成冊。

本書由俞炳坤同志任主編，主要編選人員有洪雪竹、盧經、張紅、江珊等同志，呂堅、田露汶同志協助

編例

做了部分工作。由於影印出版檔案文獻在我館是一項新的業務，我們編選經驗不足，本書在挑選底本、編排設計等方面肯定存在不少缺點，望讀者不吝指正。

編者



## 本 冊 說 明

《乾隆朝上諭檔》第一冊，起自乾隆元年正月初二日，止於乾隆九年八月二十四日。本冊共計輯錄檔案文件二千八百三十五件，其中正文二千六百一十五件，附錄二百一十八件，另加附件二件。本書第四一八、一零六八、一零七三號三個文件，均係原檔殘缺之件，敬告讀者。本冊由洪雪竹、盧經、張紅三同志編選，由俞炳坤同志審定。

1 乾隆元年正月初二日奉  
旨柘修著在刑部侍郎上行走欽此

2 乾隆元年正月初八日內閣奉

上諭前據高其倬奏年希堯司權准關苛索商民一案比降旨交與該督撫會同總漕碩琮秉公嚴審今聞年希堯於上年出京回淮候審將家口及衣裝搬移出署在板閘地方賃房暫住該督撫等恐其寄頓家貲微行查究而地方官即在板閘地方比戶搜查且將無辜之挑夫脚夫人等嚴刑夫訊至於埠頭船戶亦並株連年希堯苛刻商民且縱容僕役恣肆妄行自有應得之罪若有隱匿寄頓等弊只應嚴審伊之家人自無遁情何得牽連傭工駕船之小民為地方之擾累該督撫諒不如

此辦理但朕既有所聞可傳諭伊等知之欽此

3 乾隆元年正月初十日總理事務王大臣奉

上諭貴州逆苗侵擾內地從前辦事諸臣措置夫宜歷時甚久毫無就緒朕是以特命張廣泗為經畧專其事權俾得悉心辦理據奏現在分兵三路合力並進其上九股與難講首逆各寨分佈并兵四千餘名下九股首逆各寨分佈并兵四千餘名清江下流各逆寨分佈并兵五千餘名同時進剿三方首惡眾悍東固為各處逆苗所倚恃者俱已搗毀其附從黨羽皆知畏怖紛紛求請招安者不下數百寨等語張廣泗辦理苗疆軍務以來一切調度俱合機宜其在事官弁兵丁奮勇戮力甚屬可嘉著詳記檔案俟事竣之日分別議敘具奏該部知道欽此

4 乾隆元年正月初十日總理事務王大臣奉。

上諭從前張照辦理苗疆事務將撥解黔省軍需銀一百萬兩收貯貴東道庫摠不令本省藩司與聞及元辰成因軍需緊急司庫無項可支咨明張照促其協濟乃張照覆稱與伊全無干涉並不理論

身為總理而公然漠視如此誠不知其是何肺腑及至動用錢糧又復錯雜糾謬如運送軍糧並不按照程途里數以致夫役任意延挨所運米數遂減而運費日增徒滋糜費其採買馬匹則將草料銀兩供給馬夫承領以致馬匹倒斃疲瘦者甚多種種任意乘張甚屬可惡今據張廣泗奏前來著該部查明前項糜費應賠錢糧勒限嚴追在張照名下賠還十分之八德喜壽名下賠還十分之二又據張廣泗奏稱現在軍需未竣請撥銀八十萬兩來點以資接濟等語著戶部即撥給銀一百萬兩交與張廣泗料理動用其應動何省錢糧及作何運送之處著該部速議具奏覆給發欽此

5 乾隆元年正月十二日總理事務王大臣奉

上諭河南孟縣地方有小金堤一道捍禦黃河向係民修民築朕思民力不齊工料欠缺則修築多不堅固即使果能堅固而每歲攤派銀錢民間亦未免竭蹶著河東總河將此項堤工確實勘估委員承修其需用銀兩統於歲搶修項下動支報銷毋得絲毫派累欽此

6 總理事務王大臣和碩莊親王等 字寄著山

西提督事巡撫石

乾隆元年正月十二日奉

上諭朕聞山西將弁每將長隨竄入營伍食糧遇有頭目外委千把等缺出即將長隨拔補而該營目兵之實在出力者轉為沮滯不得上進又聞將弁等於屬兵內挑取伴當傳宣旗牌書吏軍守夜不收等項差使且將親戚家人濫入兵額侵占兵糧並不常差以致額設之兵不能實有其數又聞提鎮大員駐劄地方尚知捺演其分駐都守千把外委之嚴兵數原多寡不等有經年累月不知操演者或所設砲手有名無實竟不能施放砲位種種弊端雖未必人人如此而通省標營亦未必能盡行革除也王大臣等可寄信山西提督令通飭所屬將弁嗣後務宜痛改舊習整飭營伍倘敢陽奉陰違仍蹈前轍該提督等即行指名嚴叅毋得玩忽徇隱欽此遵

旨寄信前來

7 乾隆元年正月十二日奉

上諭朕躬此次謁

陵著總理事務果親王大學士鄂爾泰張廷玉朱軾  
尚書海望在京總理一切事務著蒞親王履親  
王平郡王公訥親領侍衛內大臣常明尚書米  
保隨往總理一切事務欽此 此一道清字

8 乾隆元年正月十三日總理事務王大臣奉

上諭國家式崇

太廟並

奉先殿妥侑

列祖神靈歲時祇薦明禋典禮允宜隆備今

廟貌崇嚴而軒楹椽桷久未經增飾理應敬謹相視

慎重繕修以昭黜陟示新之敬著該部會同內  
務府詳議具奏欽此

9 乾隆元年正月十七日奉

上諭甘省百姓連年承辦軍需急公踴躍甚屬可

嘉

皇考屢沛恩膏朕亦深加體恤上年聞有缺兩歉收  
之州縣已諭該督撫加意撫綏務令貧民得所  
除散賑米穀外所有借給口糧籽種之類例應  
秋收徵還者著悉行賞給免其還項該督撫可  
通行曉諭并飭有司實力奉行毋使胥吏土棍  
侵蝕中飽特諭

10 乾隆元年正月十七日奉

上諭朕聞甘省自康熙三十四年起至五十七年

止因供應喇嘛賑濟貧民以及軍需腳價買備

駝馬等項借動銀糧議定扣捐官役俸工還項

迄今未經完補銀糧尚有八萬七千餘兩朕思

俸工銀兩所以賞給官役為養贍之資者在文

職各官有養廉一項雖俸銀捐解尚不至於拮

据至營位將備以及吏役人等或全行扣抵或

捐七留三勢必至於艱窘此項未完錢糧若照

舊扣解尚須數年方得清釐現今官吏未免墮

乏深可憫恤著該部即行文該省督撫將未經

扣完銀糧八萬七千有零自乾隆元年為始停其扣捐以示朕加惠甘省官吏之至意特諭

11 乾隆元年正月十八日內閣奉

上諭河南布政使劉章年老精力不及難勝藩司之任著來京以京員用其布政使員缺著福建汀漳道徐士林補授前曾降旨令徐士林來京引見著該部行文催令來京引見後再赴新任

欽此

12 乾隆元年正月二十日內閣奉

上諭私盜之禁所以除蠹課害民之弊大夥私梟每為盜賊通藪務宜嚴加緝究然恐其展轉株連故律載私盜事發止理人鹽並獲其餘獲人不獲盜獲盜不獲人者概勿追坐至於失業窮黎肩挑背負易米度日不上四十觔者本不在查禁之內蓋國家於裕商足課之中而即以窩除奸愛民之道德意如是其周也乃近見地方官辦理私盜案件每不問人盜曾否並獲亦不

問販盜船數多寡一經捕役汛兵指拏輒根追嚴究以致挾怨誣攀畏刑逼認干累多人至於官捕業已繁多而商人又添私權之盜捕水路又添巡盜之船隻州縣毘連之界四路窳帶此種無賴之徒藪法生事何所不為凡遇奸商夾帶大梟私販公然受賄縱放而窮民担負無幾輒行拘執或鄉民市買食鹽一二十觔者並以售私拏獲有司即具文通詳照擬杖徒又因此互相攀染牽連貽害此弊直省皆然而江浙尤甚朕深為憫惻著直省督撫嚴飭各府州縣文武官弁督率差捕實拏奸商大梟勿令踈縱其有愚民販私四十觔以上被獲者照例逮結不得拖累平人至貧民老幼男婦挑負四十觔以下者概不許禁捕所有商人私僱鹽捕及巡鹽船隻幫捕汛兵俱嚴查停止毋得滋擾地方俾良善窮民得以安堵欽此

13 乾隆元年正月二十一日內閣奉  
旨著照準泰所請給與三品封典該部知道欽此

14 乾隆元年正月二十一日奉

硃筆諭旨江南巡撫高其倬患病著來京調理俟  
伊病愈再行請旨其巡撫印務著提漕顧琮就  
近署理欽此

15 乾隆元年正月二十一日內閣奉

旨路振揚以年逾七十精力衰憊奏請休致情詞  
懇切路振揚著解古北口提督仍回鑾儀使之  
任其提督員缺著正白旗滿洲都統章格前往  
署理欽此

16 乾隆元年正月二十一日內閣奉

旨內外簾官子弟應行迴避者著另行考試乾隆  
元年會試及鄉會恩科准予常額之外寬餘取  
中以示鼓勵其作何另行考試出榜之處著禮  
部速行妥議具奏欽此

17 乾隆元年正月二十一日總理事務王大臣  
奉

上諭西北兩路用兵以來一應軍需皆取給於公  
帑不肯絲毫累民而費用繁多不得不資藉捐  
納以補國用之不足此中外所共知者當日

皇考聖意原欲俟軍務告竣即行停止今大兵漸撤  
軍需簡省著將京師及各省現開捐納事例一  
概停止夫議捐納者未嘗不出於士子之口而  
留生監捐納監一款是士子首以捐納費為進身之  
始矣其應停應留之處著漢九卿及翰詹科道  
會同確議具奏欽此

18 乾隆元年正月二十一日總理事務王大臣  
奉

上諭教職乃師儒之官有督課士子之責素蒙  
皇考世宗憲皇帝加恩優待屢次訓勉且與有司一  
體賞給封典朕即位以來念伊等官秩卑微恐  
以冗散自居不思殫心盡職特加品級以鼓勵

之查舊例教職兩官同食一體未免不敷養廉  
著從乾隆元年春季為始照各員品級給與全  
俸永著為例欽此

19 乾隆元年正月二十二日奉

上諭八旗護軍校驍騎校等多由兵丁挑補原係  
微末窮員遇有事故罰俸恐致養贍無資深可  
軫念嗣後伊等遇有罰俸案件不必即行全扣  
著每月扣除一半支領一半俾伊等尚得藉此  
半俸稍資用度以示朕體恤旗員之至意欽此

20 乾隆元年正月二十二日奉

上諭易名之典古昔所重我朝賜謚尤為謹嚴亦  
有當時未蒙錫予而追謚於數十年之後者蓋  
以事久論定協乎懿好之公也

皇考世宗憲皇帝風勵臣工肇舉賢良祠祀誠曠古  
鉅典其列祠者如一等公福善大學士魏裔介  
將軍佛尼勒莽依圖都統馮國相尚書湯斌徐

潮馬爾漢等其歿時皆有卹而無謚朕思諸臣  
既與賢良之祀似宜遵易名之典其應否追謚  
之處著九卿會議具奏欽此

21 乾隆元年正月二十二日奉

上諭從前八旗世襲官員所領勅書內開載  
太祖高皇帝尊謚之處尚有書寫  
太祖試皇帝者理應更正著該部行知八旗查明彙  
送內閣敬謹改正頒發欽此

22 乾隆元年正月二十二日總理事務王大臣

奉

旨魏定國服制已滿與在任守制者不同著給假  
四個月回籍以盡人子之心再赴西安按察使  
任欽此

23 乾隆元年正月二十二日奉

上諭前降旨令福建布政使張廷枚來京引見其  
布政使負缺著福建益驛道王士任署理湖北  
按察使袁承寵著來京引見其按察使負缺著  
喬學尹前往署理欽此

24 乾隆元年正月二十三日內閣奉

上諭李繩武著補授河南河北鎮總兵官欽此

25 乾隆元年正月二十三日奉

旨福建海關稅務著交與該督管理欽此

26 乾隆元年正月二十三日內閣奉

上諭俞兆岳之子俞良模著照伊父所請帶任任  
所教導學習欽此

27 乾隆元年正月二十三日奉

上諭據新任江西巡撫俞兆岳奏稱母吳氏苦志  
守節歷五十餘年飲荼茹慕備受艱辛朝夕諄  
諄惟訓臣以忠孝臣自十一歲喪父迄今卅勉  
服官不致隕越皆係恪遵母教臣守節之年  
係三十三歲與例未符不得邀恩旌表臣年逾  
七旬荷蒙聖恩深渥懇請照貤封之例將巨應  
得封典及臣子恩應贈卹母氏等語俞兆岳母  
吳氏冰霜節操訓子有方宜錫殊恩以彰淑善  
著該部照例旌獎至俞兆岳應得封典及伊子  
恩廕仍舊賞給特諭

28 乾隆元年正月二十三日內閣奉

上諭朕聞雲南兵餉有搭放錢文之處每制錢一  
千文算餉銀一兩而兵丁領錢千文實不敷銀  
一兩之數未免用度拮据其應如何變通辦理  
以惠養滇省弁兵著雲南督撫會議具奏欽此



29 乾隆元年正月二十四日總理事務王大臣  
奉

上諭聞山西地方糧價昂貴如平陽汾州蒲州等  
府屬米麥價值每石賣至二兩之銀太原潞安  
澤州等府屬亦一兩五錢至一兩九錢不等小  
民無力者雜食雜糧朕心深為軫念務當青黃  
不接之時宜籌惠濟之道查該省常年積穀無  
多而社倉之穀尚有二十餘萬石除照例出借  
外其餘應酌減價值及時糶糴以裕民食俟秋  
成豐稔買補運倉該撫可嚴飭各屬悉心辦理  
毋許鋪戶囤積吏胥中飽俾貧民實需利益可  
諭該部即速行文晉省欽此

30 乾隆元年正月二十八日總理事務王大臣  
奉

上諭朕恭誦

祖陵敬瞻

殿宇規模崇整妥備攸始惟是椽題丹雘多闕年所

似愿重加藻飾以肅視瞻但  
陵寢闕係重大宜詳稽典制敬謹酌議方可舉行朕  
思

祖宗福祚綿長萬年垂裕

山陵廟貌

靈典式憑為子孫者以時修葺庶足以展孝思如典

制應行則速遠崇先誼當均切

永陵

福陵

昭陵殿宇並應一體備繕著總理事務王大臣敬謹

定議具奏欽此

31 乾隆元年二月初四日總理事務王大臣奉

上諭雍正七年

皇考魯降諭旨凡往聖先賢陵墓有應行修葺者令各

該省動用存公銀兩委員料理此誠哉

皇考崇聖重道之至意也聞山東之少昊陵帝堯廟及

周公顏子孟子曾子等廟共計九處迄今致載尚

未興工殊為怠緩著山東巡撫卽委員確估報部  
興修務期工程堅固可垂永久亦不許委員浮冒  
侵欺以致工程草率欽此

32 乾隆元年二月初四日總理事務王大臣奉

上諭任土作貢國有常徑無論士民均應輸納至于  
一切雜色差徭則紳衿例應優免乃各省奉行不  
善竟有令生員充當總甲圍差之類者殊非國家  
優恤士子之意嗣後舉貢生員等着概行免派雜  
差俾得專心肄業倘於本戶之外別將族人借名  
濫免仍將本生按律治罪欽此

33 乾隆元年二月初四日總理事務王大臣奉

上諭陝甘民人自軍興以來急公効力甚屬可嘉除  
屢年叨蒙

皇考疊沛恩膏外朕又降旨將本年應徵錢糧甘省全  
數豁免陝省止徵一半以昭格外之恩但查錢糧  
完納例有定期上年陝省收成未稱大稔今年春

夏之際未免輸納艱難著將應徵一半額賦寬至  
夏禾收成後再行開徵以紓民力<sup>至</sup>該省應用兵馬  
錢糧著該撫預先籌畫另行撥給俟九月徵收之  
後各歸原款報部查核可即傳諭該部知之欽此

34 乾隆元年二月初四日總理事務王大臣奉

上諭陝省州縣被逆苗擾害之處所有雍正十三年  
應徵銀兩米石一概蠲除其米石被擾地方地丁  
銀兩亦俱豁免並令將糧米停止徵收以紓民力  
朕思此等郡縣雖未被擾而運送軍需等事均屬  
勞苦深用軫念今特再頒諭旨將從前停徵之米  
石照下游之例一律豁免以示朕優恤遠戍之至  
意欽此

35 乾隆元年二月初四日總理事務王大臣奉

上諭督撫之於屬員體統雖分尊卑均有辦理地方事務之責屬員惟當實心供職不宜以趨走逢迎為尚督撫亦宜體恤屬員減其傳喚起其末節俾得紓暇以理本任之事朕聞附省之首府首縣不論有無緊要公務每日伺候督撫衙門侵晨而往日午未歸率以為常恬不知恠其督撫同城者撫傳未歸督傳又至僕、於道奔走不遑夫附省部縣催科獄訟較他處更為殷繁即令專心致志猶恐精神不逮乃似此竭蹶趨承必至廢弛本任事務是以拒謁為重而以職事為輕矣朕更聞閩廣督撫司道等官彼此宴會廢時失事屬負效尤此風至今未改凡諸積習甚非大吏之所以董率屬員與有司之所以恪恭厥職也嗣後各宜留心改易凡附省郡縣有司督撫非有面悉之事不得無故傳喚其離省各屬官尤不得輕離職守如有逢迎應酬作無益以害有益并啟齋緣弊實者更玷官方朕必加以嚴懲特諭

36 上諭據大學士嵇曾筠奏稱浙江海防兵備道王柔

久病未痊實難辦事塘工重大未便姑容請令王柔解任回籍調理俟病痊之日赴部引見所遺兵備道員缺查有嚴州府同知今陞江南寧國府知府靳樹德為人棟達現今承修塘坦工程頗能勇往辦事請將靳樹德署理海防兵備道事以觀後效倘能辦理妥協再行請旨實授等語著照大學士嵇曾筠所請王柔准其回籍調理於病痊日赴部引見靳樹德著署理海防兵備道事務如能實心辦理著有成效再行奏聞特諭

二月初四日

37 乾隆元年二月初五日奉

旨履親王誠親王和親王辦理  
雍和官事務原係尚書職掌所有罰俸之案俱著照尚書品級罰俸欽此

上諭二月初三日據直隸總河劉勳副總河定柱奏

稱永定河南岸八工汛內有東估港迤東工程係

上年伏汛漫溢新築之工理應加倍防守者乃署

永定河同知魯錫久署武清縣縣丞王邴漫不經

心以致今年正月二十一日冰凌甫解一經水勢

仍于上年堵築新工之處復漫溢二十四丈且該

縣丞目擊水勢上隄並不奮力搶護猶敢躲懶偷

安一至日暮即散圍歸園顧而該同知全無知覺

尚稟報各汛安瀾似此視漫溢為泛常置要工於

膜外明係有意藐玩若盡僅參疎防不足以盡其

貽誤之事請將魯錫久王邴一併革職再查堤外

本係淤灘幸<sub>及</sub>淹及田舍至巨等具奏稍遲因恭

逢駕謁

陵寢是以未敢冒昧遲陳等語著同知魯錫久署縣丞

王邴係專司河務之員乃敢怠惰玩忽有心貽誤

工程甚屬可惡著革職交與劉勳等勒限賠修如

再遲延著嚴參治罪夫以上年新築之工今歲又

復漫溢則上年之工程不固可知劉勳到任未久

尚有可原至定柱則前後督理皆伊職任其咎安

辭彼意仍欲如向年之誣過屬負以自卸其責可

乎定柱著交部察議至朕展謁

陵寢於一切政務何所不辦而劉勳定柱輕視河工稍

遲不奏乃以不敢冒昧遲陳為辭甚屬昏憤無知

著嚴飭行特諭

二月初五日

39 乾隆元年二月初五日内閣奉

上諭盛京工部侍郎員缺著吳德慎調補七克新著

回京欽此

40 乾隆元年二月初五日内閣奉

上諭江蘇巡撫印務前已降旨著清運總督顧琮著

理其清運總督印務著松江提督補熙署理今年

不必押運進京高斌已補授河道總督其兩淮監

政印務著尹會一署理仍兼管運使事欽此

41 乾隆元年二月初五日奉

旨會試舉人向有賞給茶炭食物之例著照例賞給  
欽此

42 乾隆元年二月初七日

旨這所叅總兵張豹著革職其貪暴不職各款及摺  
內有名人犯著該督會同提督嚴審究擬具奏其  
張豹揭報胡連侵冒營私一摺著一併審明具奏  
欽此

43 乾隆元年二月初七日内閣奉

旨楊夢琰張淑郡浦文焯黃叔琳江邑陳法陳慶門  
郭兆夢親化麟童希睿俱著該部調來引見欽此

44 乾隆元年二月初八日總理事務王大臣奉

上諭聞山西霍州  
中鎮廟殿宇年久未脩就傾圮著該撫委負確估  
簡葺以妥神靈欽此

45 乾隆元年二月初八日奉

旨莊親王之子弘普年已長成著封為貝子欽此

46 乾隆元年二月初八日内閣奉

上諭上年恩詔凡民年七十以上者許一丁侍養  
八十以上者給與八品頂帶以榮其身朕思直省  
生監中有年登耄耄者祇以名列膠庠轉未得邀  
恩錫于引年尚舊之典尚為未備著通行內外直  
省凡屬生監年七十以上者優免一丁年八十以  
上者給與八品頂帶欽此

47 乾隆元年二月初八日總理事務王大臣奉

上諭良鄉縣密邇京師其城垣久未脩理不足以肅  
觀瞻著該督李衛遴選賢員料估奏聞即行興脩  
其工費若干於存項內動支如不敷用即于正項  
錢撥內補足准其報銷欽此

48 乾隆元年二月初九日總理事務王大臣奏

上諭治道貴乎得中矯枉不可過正前已屢降諭旨

訓迪廷臣近見八旂辦事情形及諸臣條奏事件

尚有未合大公至正者如八旂事務頭緒繁多章

程不一朕是以畧加斟酌去其煩冗俾從簡易而

都統副都統等竟于會議之時多不到班更有乾

清門奏事亦不到者且有交辦事件遲至一年半

年而後議奏者有朕面詢所奏之事情節而茫然

不能應對者如此則日漸廢弛鮮能振作豈朕料

理旂務之本意乎又如諸臣條陳關稅者甚多而

皆未得其樞要夫鈔關之弊如額外巧取違例權

徵奸胥滑吏多般需索自當嚴行禁止違者重治

其罪故鄉邨落地稅苛累細民已經特諭革除若

將關稅正項概行議減不過官吏中飽上有損于

國課而下無益于商民乃事理之顯然可見者又

如有請除學校煩苛之弊欲更成例者在國家養

育人才士子原當優恤倘學臣等約束規條過于

嚴厲俾多士有束縛之苦而無優游之樂固不可

行若一味寬縱不繩以禮法則蕩檢闕如前明

之紳衿武斷鄉曲凌虐庶民貽害于風倍入心而

本身亦罹法網豈國家優待士人之意乎其他矯

枉過正與此相類者不一而足是皆徇于一偏而

不知其流弊者也夫

皇祖聖祖仁皇帝時久道化成與民休息而臣下奉行

不善多有寬縱之弊

皇考世宗憲皇帝整頓積習仁育而兼義立臣下奉行

不善又多有嚴峻之弊朕繼承統緒繼述

謨烈惟日孜：正欲明作有功以獎懋大成裕之治近

覘諸臣奉行漸有錯會朕旨而趨于怠弛之意朕

滋懼焉天下之事有一利必有一害凡人之情有

所矯必有所偏是以中道最難先儒謂子莫所執

乃楊墨之中非義理之中也必如古聖帝明王隨

時隨事以義理為權衡而得其中乃可以類萬物

之情成天下之務故寬非縱弛之謂嚴非刻薄之

謂朕惡刻薄之有害于民生亦惡縱弛之有妨于

國事爾諸臣尚其深自省察交相勸勉屏絕揣摩

迎合之私心庶幾無曠厥職而實有補于政教戒之慎之欽此

49 乾隆元年二月初十日內閣奉

上諭禮部奏請二月十三日御門聽政朕思百日之

後雖閱兩月但

皇考梓宮現在

雍和宮朕即御門聽政心竇不忍可俟

梓宮移奉

山陵後再行請旨欽此

50 乾隆元年二月初十日奉

旨安徽布政使負缺著鴻臚寺少卿晏斯威補授欽

此

51 乾隆元年二月初十日內閣奉

上諭聞江南佐雜等官向來未議養廉該省事務繁

多差違絡繹倍於他省徵負俸少力薄未免衣食

艱難查江蘇有不充餉之監規銀兩安徽司庫有

存公耗羨銀兩著總督趙弘恩巡撫顧琮趙國麟  
公同查核仿照江西湖廣之例酌定數目每年賞  
給以為養廉示朕體恤微員之至意欽此

52 乾隆元年二月十一日內閣奉

上諭大學士張廷玉處有寫字監生吳自高繕寫奏  
摺多年為人慎密朕所素知查翰林院有待詔二  
員缺因不得能書之人久懸未補著將吳自高補  
授一缺令其照舊繕寫効力欽此

53 乾隆元年二月十三日總理事務王大臣奉

上諭人臣陳奏事件理宜慎密若有恭劾既非露章  
而用密摺尤不當漏洩於外以自作威福前給事  
中曾一士糾劾王士俊用密摺封奏朕念君不密  
則夫臣之義未曾向一人論及乃數日之後外間  
已共相傳播若非曾一士自向人言則衆人行從  
而知之似此輕浮跡妄自取過愆深負朕求言之  
意著交該部察議以為密奏而漏言之戒此正所

以教勉諸臣而非以沮塞言臨也可一併曉諭知之欽此

54 乾隆元年二月十三日內閣奉

上諭朕聞河南武陟縣木藥店沁河堤工關係居民廬舍每年派民夫修築以防水患里民按款派錢約計二千四百餘兩頗為地方之累若設立長夫三十名歲支工食三百六十兩即可省民間二千餘金之幫貼著該部傳諭河南提河白鍾山照此辦理其設立長夫每年應領工食即動豫省存公銀兩給發不得以毫累民永著為例倘胥吏土棍等仍有借名科派者交與該管官嚴查從重治罪欽此

55 乾隆元年二月十三日總理事務王大目奉

上諭仲春以來農事方興而雪時降表秋有望殊屬可喜但群士入闈衣履未免露濕在群士學古入官上焉者可服在大僚其次亦將膺民社之寄自當以天下之樂為樂不以露濕為苦而朕心不免

軫念著即發庫帑各賜白金三兩為修整衣履之用特諭

56 乾隆元年二月十六日內閣奉

上諭河南開歸河道員缺著黃叔璥前往署理如辦事果優人地相宜著該撫富德題請實履欽此

57 乾隆元年二月十六日奉

上諭朕自繼序以來勤思治理廣開言路俾大小臣工皆得密封摺奏並深慮民隱或瘥庶事失理故公聽並觀以求濟於實用諸臣必宅心虛公見理明徹慮事周詳各行忠悃實有切於國政民休官方吏弊然後可以佐朕不逮故凡言有裨益立見施行而適素諸臣所奏或者不能適合朕中徒有陳奏之名而不計及實有裨於政治與否或瑣屑而昧於大體或空言而無補於國事非朕求言之本意也故前降諭旨諄諄訓迪其中尤可詭怪者



謝濟世請用其自注學庸易朱子章句頒行天下  
獨不自揣已與朱子分量相隔如雲泥而肆口詆  
毀狂悖已極且謂明代以同鄉同姓尊朱子之書  
則直如受下老婢陳說古事雖鄉里小兒亦將聞  
而失笑也孝徽欲以孝經與四書並列為五立家  
支離屬辭鄙淺於宋元大儒所論孝經源流維合  
曾未寓目即欲變軀代論定列於學宮數百年  
不易之舊章亦不自量之甚矣至於在任守制事  
本不可常行者之禮記諸侯既葬王政入於國大  
夫士既葬公政入於家故載德喪服喪陰言古者  
墜降之服其居處飲食哭泣思養一如其常期蓋  
禮有以權而制者若能自書居喪之實亦可無憾  
也今籌海奏請勒令從前在任守制者雖喪期既  
滿仍令解任違服朕今羣臣守制者原以行於將  
未非以論其既往且時過事遠而勒令衰經三年  
於傳所謂喪事即速之義亦未有當至於配享孔  
廟千秋禮教所關典至鉅也兩漢傳經之儒久升  
孔廡後代漢儀繼之者且數：然也陳世倌乃連

聖祖為邊疆久遠之計設兵彈壓本非有耀武窮荒之  
意

皇考念我軍屯戍日久彼國亦甚困敝故遣使宣諭減  
撤戍兵休養士馬皆因時制宜以撫綏中外陳世  
倌請條方略意涉逢迎如謂調兵籌餉之屬可為  
後式則各部具有冊籍何用別為一書凡此類皆  
無當於實用而有關於國體夫此數人者皆輿論  
所推服為讀書人而久不見用者也今朕拔而用  
之而數人之識見若此陳奏若此豈不有愧於士  
林之清議與朕特擢之恩乎朕若因其妄行請奏  
交部議處不為無名但朕志切求言諸臣言雖不  
當不惟從寬免其譴訶亦并不介意然不得不明  
白訓示者恐無知之徒爭相效尤肆行無忌天下  
無識者之聽聞志慮未免為所惑亂則所關于世  
道人心者非淺鮮也故使言者自省而聞者知戒  
各務竭忠効誠指事當物以副朕諄切求言之本  
意特諭

58 乾隆元年二月十六日內閣奉

上諭楊名時著加禮部尚書銜兼管國子監祭酒事  
在阿哥書房課讀並南書房行走欽此

59 乾隆元年二月十六日內閣奉

上諭大學士邁柱著兼管工部尚書事欽此

60 乾隆元年二月十六日總理事務王大臣奉

上諭前因

雍和宮管人疎縱將王貝勒等交宗人府議處後經降  
旨履親王等俱照尚書例罰俸今思履親王等既  
已從輕其貝勒允禩貝子弘曠三人罰俸之  
處亦著照侍郎之例欽此

61 乾隆元年二月十六日內閣奉

上諭朕聞江南淮安府屬之桃源縣徐州府屬之宿  
遷縣睢寧縣濱臨黃河沿河地畝淹涸糜常雍正  
五年因米家口清決之水復循故道其舊淹田地

始得涸出而河臣為地棍所欺遂以此地為新淤  
之腴產睢寧縣報墜地五千三十九頃宿遷縣報  
墜地四千七十二頃桃源縣報墜地三千八百四  
十二頃嗣蒙

皇考世宗憲皇帝勤求民隱特頒

諭旨以淤地勘報不實令河臣會同督臣委員查勘共  
勘地七千二百餘頃萬民感頌所有存留地五千  
七百餘頃俱照各縣成例折算實地三千五百餘  
頃科則亦徑減輕其澤安一衛裁汰改歸州縣徵  
收乃比年以來應納錢糧仍催徵不前蓋此淤出  
之地畝即舊有之糧田是以民力維艱輸將不繼  
也朕以愛養百姓為心既洞悉其中情事自當加  
恩開除以紓民力著將宿遷睢寧桃源三縣現存  
新淤涸復改科地糧額徵銀六千五百四兩全行  
豁免其雍正十三年淤地未完錢糧亦免徵收至  
水沉地畝仍照例歸於每年冬勘該部即遵諭行  
欽此

62 乾隆元年二月十七日總理事務王大臣奉

上諭翰林以讀書為職業然讀書將以致用非徒誦習其文辭也古來制誥多出詞臣之手必學問淹雅識見明通始稱華國之選有裨于政事今翰詹官員甚多於詩賦外亦當留心詔勅學院學士以下編檢以上可各以己意擬寫上諭一道陸續封呈朕覽既可以規其文藝之淺深並可以觀其胸中之蘊蓄倘有切於吏治民生者朕亦即頒發見諸施行則詞曹非徒章句之虛文而國家亦收文章之實用矣嗣後庶吉士散館後即照此例行欽此

63 乾隆元年二月十七日總理事務王大臣奉

上諭北路坐臺人員朕已諭令更換回京或其中尚有一二可用之才亦未可定傳諭該旗於伊等到京之日陸續帶領引見漢官著該部帶領引見欽此

64 乾隆元年二月十七日總理事務王大臣奉

上諭吳應棻來京陛見著仍回兵部侍郎之任辦理部務其湖北巡撫員缺候朕另降諭旨吳應棻既經回任李紱不必兼理兵部事務欽此

65 乾隆元年二月十九日總理事務王大臣奉

上諭閩山東按察使吳騫年老著來京引見其山東按察使員缺著黃琳補授浦文焯命往福建交與總督郝玉麟巡撫盧焯以道府酌量題補欽此

66 乾隆元年二月十九日總理事務王大臣奉

上諭管理浙江杭州織造事務著蘇赫納去其南北兩關稅務仍遵前旨交與大學士嵇曾筠委員管理欽此

67 乾隆元年二月十九日總理事務王大臣奉

上諭翰林院撰擬王貝勒貝子冊文如朕叔朕兄弟皆呼為爾某於朕敬長之意未符此心有不安  
凡遇叔兄弟皆當稱叔稱兄自弟姪以下則用爾字永著為例欽此

68 乾隆元年二月十九日總理事務王大臣奉

旨著照王鈞所請交與直隸總督李衛酌量辦理王鈞著交部議敘具奏欽此

69 乾隆元年二月二十日內閣奉

上諭兩浙鹽務向來廢弛自李衛為浙江總督以來留心整理諸事妥協及李衛離任浙程元章接任其性辦事迂懦益政漸不如前是以

皇考諭令布政使張若震暫行兼管前據張若震奏稱藩司之職徑管通省錢糧頭緒繁多難以兼顧鹽務且緝私全賴官弁協力未免呼應不靈恐悞公事等語張若震准解益政之任俾得專心於職守

大學士崧曾筠現為浙江巡撫著照從前李衛之例改為浙江總督兼管兩浙益政其管轄地方節制官弁等事悉照李衛前例行崧曾筠既為浙江總督却玉麟著以閩浙總督銜專管福建事務朕聞浙省濱海之地向來鹽價每斤不過數文今加一倍且有不止一倍者小民甚為不使其如何先賤今昂之故大學士崧曾筠可悉心體察多方調劑使之平減俾商民均受其益又聞官弁兵後捕緝私益之時每過大梟不敢過問往往縱之使去至於肩挑背負之窮民資以餬口者則指為私販重加懲處種種弊端不可悉數前降諭旨甚明尤當加意稽查實心辦理以除弊竇有應具題者即行具題有應摺奏者即行摺奏欽此

70 大學士張 字寄 山東巡撫岳 乾隆元年

二月二十日奉

上諭朕聞山東沂州府屬之郟城縣蘭山縣一帶地方自雍正八年大水淹浸之後水退沙存凡低窪地畝沙深數尺不產五穀即莠稗青莖亦不生長郟城有一百數十餘頃蘭山有三百餘頃其餘州縣不近大路者尚有十餘處地既不毛糧從何辦小民納賦甚屬艱難此朕得之訪聞者爾可密寄信與岳濬會同鄭禕寶確加訪查具摺密奏不可因朕降旨有心迎合亦不可因伊等未奏回護前非總以秉公據實為主一有不確便是欺罔矣欽

此遵

旨寄信前來

71 乾隆元年二月二十一日總理事務王大臣奉

旨白嵒著補授江南蘇州府知府欽此

72 乾隆元年二月二十一日內閣奉

上諭朕聞得山東文登縣知縣王維幹乃河東總督衙門書吏之子前於署東平州任內杖斃二命題叅革職經田文鏡保留復用其人殘忍刻薄如瘋如狂肆無忌憚且創設不經見之非刑草菅民命劣蹟種種確有証據王維幹著革職將朕訪聞各款一併交與巡撫岳濬嚴審定擬具奏似此酷劣之員岳濬身為巡撫何以不行查叅著伊明白回奏此次奉旨嚴審不得回護前非絲毫容隱自干嚴譴欽此

73 乾隆元年二月二十三日內閣奉

上諭內外臣工所舉博學鴻詞聞已有一百餘人祇因到京未齊不便即行考試其赴考先至者未免旅食艱難著從三月為始每人月給銀四兩資其膏火在戶部按名給發俟考試後停止若有現任在京食俸者即不必支給並行文外省令未到之

人俱於九月以前到京若該省無績舉之人亦即  
報部知之免致欠待欽此

74 乾隆元年二月二十四日內閣奉

上諭朕前以應付僧火居道士竊二氏之名而無修  
持之實甚且作奸犯科難於稽查約束是以酌復  
度牒之法使有志修行者永守清規而無賴之徒  
不得竄入其中以為佛老之玷其情愿還俗者量  
給資產其餘歸公由為養濟窮民之用此亦專為  
應付僧火居道士而言也名山谷剝開戶清修者  
在所不問前降諭旨甚明現交與王大臣九卿會  
議乃聞外省傳述錯誤一切僧道皆有惶惑不安  
之意恐將贖產歸公遂爾弊端百出有將已身田  
宅詭寄他人戶下希圖藏匿者有謀偽書吏分立  
花戶詭名以多報少者有減價速求售賣變銀入  
橐者且有局外匪類從中借名索詐者夫此等僧  
道既謀利應財如是撥之仙佛之法乃糠粃稂莠  
也即收其私橐歸公以養濟貧民亦何不可之有

天下後世自有公論但朕之本意原以天地好生  
之心為心一物不得其所如己推而納之溝中此  
庸愚無知之僧道亦天下之一物耳朕何忍視同  
膜外况朕先所降旨甚明原以護持僧道而非有  
意苛削僧道今觀伊等情形是愚昧無知被人恐  
嚇而不知原降之諭旨也著該部先行曉諭去其  
迷惑至於應付僧火居道士之贖產因無所歸著  
是以有養濟窮民之說究竟國無家養濟窮民豈需  
此區區之財物亦可不必稽查歸公此處著另議  
具奏又聞外間有尼僧一種其中年老無依情願  
削髮者尚無他故其餘年少出家之人心志未定  
而強令窈守空門往：舊開踰檢為人心風俗之  
害且聞江浙地方竟有未削髮而稱稱比丘者尤  
可詫異似亦應照僧道之例不許招受生徒免致  
率引日眾有情願為尼者必待年齒四十以上其  
餘驟行禁止著將此一併入於會議中妥議具奏

欽此

75 乾隆元年二月二十五日內閣奉

上諭河南南汝道楊廷翼著來京引見其南汝道員缺著李慎修補授欽此

76 乾隆元年二月二十五日內閣奉

上諭御史蔣炳條陳二件俱屬應行之事著交部議欽此

77 乾隆元年二月二十七日內閣奉

上諭漕運總督員缺著程元章補授欽此

78 乾隆元年二月二十七日奉

上諭前降旨令趙文英來京引見原欲加恩復用今聞伊行至大同府病故深為可憫著賞銀三百兩交與趙文英之子趙璜為伊父後事並搬移旅櫬回籍之用欽此

于三月初一日補行印文內務府交

筆帖式高泰

79 乾隆元年二月二十七日內閣奉

上諭二格已陞授兵部侍郎仍著署理甘肅提督印務欽此

80 乾隆元年二月二十七日奉

上諭杭奕祿著授為額外內閣學士欽此

81 乾隆元年二月二十七日平郡王奉

旨副都統八十五著調補杭州副都統其鑲紅旗漢軍副都統員缺著隆昇補授欽此

82 大學士張 字寄 湖廣總督史 湖南巡撫鍾 乾隆元年

二月二十七日奉

上諭湖南為產米之鄉向來米價平時每石不過七八錢近聞湖南省城米價騰貴自正月二十四五以後每石貴至一兩七八錢不等民間有艱食之慮爾可密寄信與史昭直鍾保即速計議作何料

理似應將常平倉穀減價平糶以濟民食將來青黃不接之時更宜預為籌畫毋致閭閻受困欽此

遵

旨寄信前來

乾隆元年二月二十七日總理事務王大臣奉  
上諭據經畧苗疆事務張廣泗奏稱清江台拱等處

自鎮將以及備弁皆係新任之員不但才具平常

即詢以苗疆地勢亦茫然不曉自逆苗倡亂以來

坐受攻圍竟至一籌莫展而其中之勦撫乖方庸

劣債事者則都勻協副將馮茂為甚查馮茂駐扎

八寨上年四月間有逆苗數百來至離城十里之

地迫脅順苗從逆而馮茂領兵千餘畏怯坐視不

發一卒以致附近苗人無所倚恃不得不從然尚

未大肆跳梁有七告一寨自將其寨傍木悉行斫

伐毀垣填濠以示不反馮茂貪其易剽反潛夜聚

兵襲而殺之致使苗人憤恨攻城幾至危殆六月

間哈元生檄令馮茂進勦九門等寨查九門等苗

最為怯懦實係附從並非首逆馮茂領兵到日該

苗即相率投誠背負鎗械前赴哈元生軍營檄納

而馮茂差人於中途邀截殺戮數十人又傳集九

門一帶已撫苗人赴營領賞誘至卡烏河下斬殺

六百餘人捏報戰功以致八寨九門等處苗眾結

為死黨抗拒官兵則馮茂殺降冒功之罪已不可

誣又哈元生因丹江缺糧檄令馮茂帶兵三千

名護送糧運而馮茂畏縮不前被逆苗阻截傷損

兵丁馱馬甚多九月間馮茂帶領官兵往凱里接

糧行至開懷地方部伍散亂逆苗伏草殺出官兵

首尾不能相顧竟被圍困賴備弁援救得免從此

丹江圍困愈急兵丁餓斃者數十名似此庸劣欺

詐之負應請革職嚴審以肅軍紀又清江協副將

柳定國本屬庸材於上年五月哈元生委令駐劄

鎮遠總統點楚官兵乃柳定國檄無調度一任逆

苗往返蹂躪並未救援一處及領兵往援青溪途

次聞青溪失守遂駐宿一夕而回反具文捏報斬



殺逆苗多人甚屬欺罔但伊現同焦應林等進勦

清江高坡等寨著有微勞應請天恩將柳定國解

任暫留原銜効力贖罪所遺都司清江二副將員

缺查有貴州定廣協副將曾長治為人老成辦事

謹慎現在經理八寨山苗等處俱屬妥協堪以調

補都司協副將又雲南奇兵營叅將哈尚德奉督

臣尹繼善差委領兵剿賊苗屢著勞績苗

人聞風畏懼伊即係哈元生之子因見伊父貽誤

封疆身獲重譴是以革職圖効倍加努力若蒙恩

准補授清江協副將可收得人之效等語馮茂著

革職交與經署張廣泗嚴審定擬柳定國著革職

暫留副將銜効力贖罪俟事定之後核其功過具

奏請旨曾長治著調補都司協副將哈尚德著補

授清江協副將朕親苗疆用兵以來將帥各持意

見以致賞罰不明號令不一擔延時日遲誤軍機

自張廣泗授為經畧秉公辦理弁兵等始知奮勇

鼓勵所向克捷迅奏膚功向後軍營弁員應聽張

廣泗遴選要用俾事權歸一以濟軍務著照西北

西路軍營之例自副將以下准張廣泗酌量人材  
功績進行題補如不得其人即咨商總督尹繼善  
揀選會題俟軍務竣日停止特諭

84 乾隆元年二月三十日奉

上諭朕聞浙江紹興府屬山陰會稽蕭山餘姚上虞  
五縣有沿江沿海堤岸工程向係附近里民按照  
田畝派費修築而地棍衙役於中包攬分肥用少  
報多甚為民累嗣經督臣李衛檄行府縣定議每  
畝捐錢二文至五文不等合計五縣共捐錢二千  
九百六十餘千計值銀三千餘兩民累較前減輕  
而胥吏等仍不免有借端苛索之事朕以愛養百  
姓為心欲使閭閻毫無科擾著將該畝派錢之例  
即行停止其堤岸工程遇有應修段落著地方大  
員委員確估于存公項內動支銀兩興修報部核  
銷永著為例特諭

85 乾隆元年三月初一日內閣奉

上諭西路軍興以來自京城以至西寧沿邊添設腰站齋送公文雍正九年蒙

皇考世宗皇帝念弁兵等遞送勤苦加恩議叙賞賚但自八年七月起至九年六月止兩次派委弁兵叨蒙恩恤其餘未曾賞及朕思八年以前已安臺站九年以後尚未撤除前後同為効力之人當令均沾恩澤著該部確查辦理將前後坐臺之官弁兵丁遵照雍正九年之例或賞紀錄或賞銀兩一體加恩以示朕一視同仁之意欽此

86 乾隆元年三月初三日奉

上諭朕御極以來時時以愛養百姓為心深恐賜雨不時旱澇為患閭閻疾苦不能上聞所以告誡督撫有司者至詳且悉至於陝甘二省民人屢年轉運軍需急公効力更屬可嘉尤為朕心格外憫恤者內外臣工無不知之上年聞甘省固原環縣等處收成歉薄窮民乏食朕知許容性情褊隘識見

早庸恐但知節省錢糧不思惠養百姓屢次親批諭旨令其寬裕料理勿使災民稍有失所又令資其安插之費寬其散賑之期朕之訓諭已煩朕之心力亦竭矣乃許容刻覈性成不但無痼瘵乃身之意並狀旨亦不祇遵不過循照往例苟且塞責罔計百姓之實能安堵與否是以正當賑濟之時而流移他郡者尚千百為羣相望於道朕訪聞如此合之署督臣查郎阿劉於義所奏亦大畧相同似此膜視民艱之大臣何以稱撫綏懷保之職許容著解任暫留甘省將經手軍需各項銷算清楚來京候旨甘肅巡撫員缺朕一時不得才能出眾之員可以勝任者著劉於義暫行署理俟朕選擇得人再降諭旨此時查郎阿劉於義二人同在肅州公事漸爾酌分一人赴蘭辦理撫事似屬可行其總督事務或應分辦合辦之處著查郎阿劉於義悉心妥議一面管理一面奏聞務期一體相關和衷共濟俾吏治民生均有裨益以副朕眷倚信任之至意特諭

87 乾隆元年三月初三日奉

旨向因各省鹽務辦理未安往往縱放大梟拘拿小  
販以致濱海近場之窮民藉有販以度日餬口者  
皆遭不肖官吏兵役之拖累是以降旨特弛有挑  
背負之禁原以恤養貧民濟其困乏並非寬縱匪  
類使之作奸犯科也乃天津一帶無賴棍徒糾合  
多人公然以奉旨為名肆行不法恣指李衛未奏  
之先朕早已聞知今據李衛陳奏種種弊端與朕  
所聞無異是窮民未必沾恩而法度廢弛閭閻轉  
受奸民之擾矣李衛所奏辦理之處寬嚴得宜甚  
屬妥協著照所奏行畿輔之地如此外省亦必皆  
然其閩粵山東江浙等省如何一體通行之處著  
該部即行妥議具奏李衛此奏具見實心辦事甚  
屬可嘉著交部議叙三保職司鹽政身親其事何  
以日覩地方情形並不奏聞著伊明白回奏欽此

88 乾隆元年三月初六日內閣奉

上諭朕查閱汪景祺等舊案景祺狂悖逆罪不容  
誅但其逆書西征筆記乃出遊秦省時所作其兄  
弟族屬南北遠隔皆不知情今事已十載有餘著  
將伊兄弟之子發遣寧古塔者開恩赦回其族人  
牽連革禁者悉予寬宥查嗣庭本身已經正法其  
子姪等拘繫配所亦將十載亦著從寬赦回欽此

89 乾隆元年三月初七日內閣奉

上諭朕聞滇省鹽價昂貴每百觔自二兩四五錢起  
竟有賣至四兩以上者邊地百姓物力艱難僻壤  
夷民更為窮苦每因鹽價昂貴有終年茹淡之事  
朕心深為軫念查該省鹽課除正項外有增添贏  
餘以備地方公事之用朕思贏餘之名原係出於  
民食充裕之後若民食不充自無仍取贏餘之理  
著總督尹繼善悉心妥辦將贏餘一項即行裁汰  
務令鹽價平減縱使昂貴亦只可在三兩以下若  
裁去贏餘之後公用有不敷處可另行酌議請旨  
欽此

90 總理事務和碩莊親王等字寄

江南總督趙署蘇州巡撫顧

乾隆元年三月初七日奉

上諭據趙之垣奏稱奉命致祭南鎮事竣回京於本年正月十三日行至蘓州地方舟泊虎邱夜被竊賊鑽艙偷去皮衣銀兩等項及行至揚州地方據蘓州巡撫高其倬差送咨文內稱此案竊賊名喚邵隆已經拿獲追出原失皮衣等物并銀十六兩交還餘贓再追等語竊賊擾害地方首宜嚴禁今以奉差大員泊舟省會人烟輻輳之處尚被偷竊則商賈往來以及隻身孤客更難免於失業而鄉鄙僻地尤無所防範可知是額設之兵役均為無用緝捕之文武竟成具員此係高其倬任內之事爾等可傳諭總督趙弘恩巡撫顧琮詢問高其倬何以疎忽至此並嚴飭該地方文武各官務須嚴緝盜賊以靖地方以安行旅毋得仍前玩愒致干嚴譴欽此遵

奇寄信前來

91 乾隆元年三月初八日奉

上諭朕聞姦宄不鋤不可以安善良風俗不正不可以興教化閭閻之大惡有四一曰盜賊三代聖王所不待教而誅者也二曰賭博干犯功令貽害父兄以視周官之罷民未麗於法而繫諸嘉石收之園土者罪有甚矣三曰打架即周公所謂亂民孟子所謂賊民也四曰娼妓則自周以前人類中未嘗有此此四惡者劫人之財戕人之命傷人之肢體破人之家敗人之德為善良之害者莫大於此是以我

皇考愛民之深憂民之切嚴申糾禁戒飭守土之官法在必行日夜捕緝積歲月之久然後道路少响馬馬及老瓜賊而商旅以寧賭博及造賭具者漸次改業而家室以安聚黨打架者斂跡而城市鄉鎮鮮聞鬪鬻娼妓遠歲不敢淹留於客店此

皇考十有三年政教精神所貫注而海內臣民顯見其功效實享其樂利者也朕自嗣位以來調免租賦蠲除賠累裁革積弊增廣教條無非惠保良民使得從容休息衣食滋殖而無識諸臣誤謂朕一切

寬容不事稽察以致大小官吏日就縱弛民間訛言諸禁已開風聞直省四惡皆微露其端倪即如天津一帶私鹽橫行無忌恐其他類此者相繼而起是守土之官敢恃

世宗憲皇帝之明旨墮十有三年之成功而賊賊善良

傷敗風俗也自後州縣官有政令廢弛使四惡復行於境內者該督撫不時訪察即行嚴參督撫司道郡守有不能董率州縣殫心捕治者或被內外臣工核實列奏或朕訪聞得知必以溺職治罪與通包並受賄賂等決不輕貸爾諸臣慎毋泄、吝吝自取殃咎戒之戒之特諭

92 乾隆元年三月初八日內閣奉

上諭據貴州安龍鎮總兵官劉朝貴奏稱年力衰邁難勝封疆重寄懇請罷斥以安愚分又稱前於大定副將任內莖母於黔省懇求入籍大定以遂下情等語劉朝貴老成謹慎從前屢次出師著有勞績今以年逾七旬奏請解退情詞懇切准以原官致仕並准入籍貴州大定府守伊母蔭墓安龍鎮總兵員缺緊要著署開化鎮廣西新太協副將崔

善元補授開化鎮總兵官員缺著雲貴督標中軍副將王大綬署理令該督留心試者如能稱職具題實授雲南臨元鎮總兵官顧純祖著調補鶴麗鎮鶴麗鎮總兵官何勉著調補臨元鎮欽此

93 乾隆元年三月初八日內閣奉

上諭福建福州府知府員缺著童華補授童華向有才幹之名但恃才自用虛詐沽名今朕宥過復用著該督撫留心試者倘舊習不改即行嚴參查童華在肅州知州任內有被叅候審之案著劉於義秉公確查若事屬因公其中尚無情弊即著速赴福建新任若錢糧實有不清之處即行扣留將情由奏聞請旨欽此

94 乾隆元年三月初八日內閣奉

上諭廣東總督鄂彌達奏稱長子勒圖渾因逢恩詔得受廕生例應入監讀書但年齒尚幼可否仍准隨任俾朝夕教導學習成人等語勒圖渾著照伊父鄂彌達所請仍留任所教導俟數年後再行請旨欽此

95 乾隆元年三月初九日總理事務王大臣奉

上諭凡大臣中有引年求退奉旨以原官致仕者均係宣力甚久素為國家優禮之人雖經解組仍當加恩以示眷念著舊之意現在滿漢大學士及曾為部院尚書予告在家者俱著照其品級給與全俸在京於戶部支領在外於該省藩司支領永著為例欽此

96 乾隆元年三月初九日內閣奉

上諭聞直省州縣地方額徵地丁錢糧項下有起解存留二款如官役俸工即在存留款內支給若該省有地畝荒蕪種類豁除即將官役俸工扣減以抵豁除之數名曰扣荒此亦不得已之辦理也但此扣荒一項自應合省大小官員均攤方不悖於情理乃聞外省止扣知府以下及州縣佐雜教職寒苦之負而督撫司道轉不在扣除之內此則大非情理矣著該部通行傳諭各直省督撫若該省有荒缺銀兩應於督撫司道大員及府縣正印官俸工內酌量均攤扣除以抵所缺之數至於佐雜教職等官俸工樂免扣除俾微末官吏得以養

贍若有因地方荒缺而裁減祭祀銀兩者著遵雍正十一年

皇考世宗憲皇帝恩旨於該省存公銀兩內撥補以重祀典俱著各省督撫悉心妥議辦理欽此

97 乾隆元年三月初九日內閣奉

上諭向來廣西鹽引因商人無力承辦以致民間有淡食之苦於雍正元年經督臣孔毓珣題請官運官銷借動庫銀為鹽本赴廣東納價配鹽分給各州縣照部定價值發賣行之二年已有贏餘遂將通省鹽價照部定之數每觔減去二厘發賣百姓稱便雍正五年又經孔毓珣奏稱粵西鹽觔自官運官銷以來已無鹽缺價貴之虞應請仍照原定部價一體銷售不必裁減二厘部議准行至今因之朕思食鹽乃小民日用之需部價既多二厘則民間所費必不止於二厘廣西地瘠民貧道路遙遠應令鹽價平減以惠閭閻自乾隆元年為始著照雍正元年原題每觔減去二厘銷售該督撫可嚴飭各州縣不許加增分毫務使小民均沾實惠倘有高價病民者查出嚴行叅處欽此

98 乾隆元年三月初九日內閣奉

上諭尚書楊名時奏薦進士莊亨陽舉人潘永李蔡德峻秦蕙田吳鼎拔貢生官獻瑤監生夏宗瀾等七人皆留心經學可備錄用等語楊名時現管國子監事務所薦莊亨陽等七人既留心經學著該部調來引見用為該監屬員聽楊名時等分委辦事以收成均課士之益欽此

99 乾隆元年三月初九日總理事務王大臣奉

上諭每月逢五朝期鴻臚寺照例奏請御殿朕雖未准行而未經降旨晚諭蓋此二十七日之內如遇國家重大典禮萬不可已者間一御殿外此概不舉行從前諭旨甚為明晰似此朝會常儀理應停止俟二十七日之後再行奏請欽此

100 乾隆元年三月初十日總理事務王大臣奉

旨都統章格著補授直隸古北口提督其正白旗滿洲都統事務著平郡王管理欽此

101 乾隆元年三月十一日內閣奉

上諭今歲八月舉行恩科鄉試其正副考官必人品端方學問醇正者始足膺衡鑒之寄朕即位之初不能深知諸臣之底蕴著張廷玉鄂爾泰朱軾徐本邵基任蘭枝徐元夢福敏孫嘉淦楊名時於翰林科道部屬內各據所知多舉數員於五日內交送內閣彙奏候朕考試簡用庶得才品兼優之員以副國抡才之大典欽此

102 大學士鄂 張 字寄 各省督撫

乾隆元年三月十一日奉

上諭天下之理惟有一中中者無過不及寬嚴并濟之道也人臣事君一存迎合揣摩之見便是私心而事之失中者不可勝數矣昔我

皇考臨御之初見人心玩愒諸事廢弛官吏不知奉公宵小不知畏法勢不得不加意整頓以除積弊乃諸臣悞以

二心在於嚴厲諸凡奉行不善以致政令繁苛每事刻覈大為閹閹之擾累然則

皇考之意果如是乎朕即位以來深知從前奉行之不

善留心經理不過欲減去煩苛與民休息而諸臣又悞以為朕意在寬遂相率而趨於縱弛一路如盜賊賭博之類漸已露其端倪而天津一帶鹽梟糾合多人肆行無忌若非總督李衛明曉政體恭奏查拿其為地方之害正非淺鮮又如寬賦一事諸臣動輒以關稅為言不知關稅正額本無害於商民其為商民之害者乃胥役之需索額外之誅求耳督撫大吏身任地方於此等事不能留心查禁以甦商困而但欲妄減惟正之供可乎現在各省督撫皆昔年

皇考簡用之人即朕偶有除授亦係從前曾任封疆者乃當年條奏則專主於嚴而近日條奏又專主於寬以一人之身而前後互異如此是伊等胸中毫無定見並不計理之是非事之利病而但以迎合揣摩為事希冀保全祿位固結恩眷而不知己大違乎

皇考與朕之本意適成其為庸鄙之具臣而已若循此以往不知省改勢必至禁令廢弛奸宄復作良善

受其擾害風俗漸就澆漓將我

皇考十三年教養整理之苦心功虧一簣此朕心所大懼者不得不懇懇過慮懇切告誡繼自今務去偏私之錮習各以大中之道佐朕辦理天下事務永底平康之治若因此諭又復錯會意旨以嚴刻苛細相尚則識見更為庸劣其咎不可逭矣可將朕旨各書一道密寄各省督撫其中才識兼長不蹈此弊者原不乏人無庸朕旨訓飭戒勉但伊等既任封疆之重均有化導屬員之責亦一併傳諭知之欽此遵

旨寄信前來

三月十七日衙門中書抄寫封發



103 乾隆元年三月十三日總理事務王大臣奉

上諭聞黔省地方春夏之交多有瘴氣今當用兵之時朕心深為軫念著將內製平安丸太乙紫金錠等藥多多預備從驛遞馳送軍前交與經畧張廣泗分給各踞軍營以備一時之用毋得稽遲欽此

葉房取平安丸萬九萬餘枚五不致延造辦處  
包裏裝於箱于本月十七日庫內大起 等因  
交兵部主事明山領去馳送

104 乾隆元年三月十四日內閣奉

上諭尹會一署理兩淮鹽政職任繁重難以兼管運使事務兩淮運使員缺著江南徐州府知府李根雲補授欽此

105 乾隆元年三月十四日內閣奉

上諭川省所屬內附巴裡二塘及沈冷二邊各番朕念其恭順効力曾降諭旨將本年所納供賦雜糧等項概予蠲免以示優獎其建昌松潘所屬涼山

會川鹽源阿樹木坪各土番等處俱傾心効順遇有徵調奮力奉公毫無違悞所宜一体加恩將本年米折條銀以及本色雜糧貢馬等項照巴裡塘沈冷邊之例通行蠲免再普安安阜酉陽等處現在建造城垣皆資民力所有本年應納貢賦亦照松潘之例概賜豁免該督撫飭令該管官實心奉行勿致中飽滋弊俾得均霑實惠以昭朕懷恤遠夷之意欽此

106 乾隆元年三月十四日內閣奉

旨尚書楊名時在京無居住房屋着內務府總管查官房一所賞給欽此

107 乾隆元年三月十五日奉

旨今科會試落卷內所有薦卷著大學士鄂爾泰張廷玉朱軾侍郎邵基張廷球學士方苞共同閱看欽此

108 乾隆元年三月十五日奉

旨朕前降諭旨二十七月之內遇國家重大典禮間  
一陞殿此外樂不舉行今科殿試傳臚朕亦不陞  
殿著傳諭禮部知之欽此

109 乾隆元年三月十五日總理事務王大臣奉

上諭肅州威虜堡回民自遷移內地以來我

皇考世宗憲皇帝格外加恩撫綏安插查雍正七八年  
間伊等曾借倉種一千二百餘石以作籽種年米  
收穫之糧止敷日食未能還補公項朕思內地民  
間舊欠既已豁免回民亦應一體加恩著將七八  
兩年所借小麥一千二百九十九石二斗悉行寬  
免該督撫可轉飭有司實力奉行毋使胥吏中飽  
俾回民均霑實惠欽此

110 乾隆元年三月十七日奉

旨駐防哈密總統提督著樊廷去其固原提督印務  
著河北總兵李繩武前往署理河北總兵印務兵  
部請旨派員署理駐防哈密總兵著米國正去其

延綏總兵印務著副將豆斌署理駐防赤靖等處  
總兵著沈力學去其肅州總兵印務著查郎阿等  
派員署理餘依議欽此

111 乾隆元年三月十九日內閣奉

上諭昨據尚書傳寫奏稱各省米京會試舉人內有  
年歲七十八以上者四十餘人志切觀光可否  
酌量加恩錄用朕因令查者落卷之大員等一併  
簡閱續取中式五人其餘未取者著交典禮部驗  
看酌量分別作何賞給職銜之處妥議具奏此等  
年老舉人朕格外加恩乃一時之曠典在伊等無  
心適遇則可若心存希冀強赴公車以致皓首寒  
儒跋涉辛苦既啓倖進之心亦非朕愛士恤老之  
意此事後不為例著禮部通行曉諭知之欽此

112 乾隆元年三月二十日內閣奉

旨向米倉場弊實甚多我

皇考加意整理諸弊始得肅清今北新倉吏役輒敢偷盜米石目無法紀甚屬可惡該監督玉福管之宋俱著革職交與刑部並案內有名人犯嚴審定擬具奏該侍郎總理倉場事務漫無約束甚屬不合著交部察議具奏欽此

113 乾隆元年三月二十一日內閣奉

上諭廣東山海與區貧民多以捕魚為業各縣俱有額徵漁課為數無多相沿已久後因歸善縣不肖知縣私取陋規加於額徵十數倍遂經撫臣定議加增魚稅一千餘兩作為贏餘而海豐惠來潮陽三縣亦仿照加增海豐縣則增至四千餘兩惠來縣增至五百兩潮陽縣增至七百餘兩朕思粵東山多田少小民生計艱辛故以捕魚為養贍之計今他縣漁租皆仍舊額而歸善等四縣獨徵收加重恐漁民輸納維艱非國家愛養黎元之意著將

四縣加增之數悉予豁免仍照原額徵收其捕魚小船尤不應在輸稅之內再查粵東有埠租一項亦民間自收之微利前經地方官通查歸公為湊修圍基之費夫圍基既動公項銀兩修築則埠租一項亦著一體免徵以免閭閻之煩擾該督撫可轉飭有司實力奉行毋使奸胥地棍借端私取致窮民不得均沾實惠欽此

114 乾隆元年三月二十一日奉

上諭內閣學士杭奕祿著授為

實錄館副總裁欽此

115 乾隆元年三月二十一日奉

上諭尚書海望著兼管三庫事務欽此

116 乾隆元年三月二十一日奉

上諭提督順天學政著國子監祭酒崔紀去國子監祭酒員缺著李鳳翥補授欽此

117 乾隆元年三月二十四日總理事務王大臣奉  
旨揚名時所請書籍著將武英殿現有者各種發二  
十部餘照所請行欽此

118 乾隆元年三月二十四日奉

上諭雲南貴州廣東廣西四川福建六省舉人赴京  
應試未經中式者著照雍正十一年之例揀選奏  
聞請旨其上次記名二十一人一並入於此內請  
旨欽此

119 乾隆元年三月二十五日總理事務王大臣奉  
上諭各省歷代帝王陵廟均宜嚴肅整齊以昭敬禮  
聞湖廣地方

炎帝神農氏陵廟殿宇墻垣丹雘合度而  
帝舜有虞氏陵廟則規模狹窄丹青剝落不足以  
肅觀瞻著該督撫轉飭有司動用公費即行修葺  
其他處陵廟若有類此者著各該督撫委員查勘

動用存公銀兩酌量修理務令完整再各陵向來  
未設陵戶無人看守者可酌設幾戶令其專司巡  
查灑掃永著為例欽此

120 乾隆元年三月二十五日內閣奉

旨原任湖南布政使趙城原任潮州府知府龍為霖  
降調嶺南縣知縣彭朝佐原任會澤縣知縣王忠  
武俱著調取來京該部帶領引見欽此

121 乾隆元年三月二十六日總理事務王大臣奉  
上諭劉於義所奏許啟盛董仲俱非常赦所不原者

著准其贖罪朕前因官爵有關名器任途不宜冒  
濫是以降旨停止捐納至於贖罪一條原係古人  
金作贖刑之義況在內由部臣奏請在外由督撫  
奏請皆屬斟酌情罪有可原者方准納贖其事尚  
屬可行嗣後將贖罪一條仍照舊例辦理欽此

122 乾隆元年三月二十六日內閣奉

上諭據總督郝玉麟奏稱原任浙江平陽縣知縣張聖訓於泰萃江西廣信府知府蘓祉家人勒索門包案內經部議降級調用查張聖訓年富力強才具頗優操守亦好人品端方委屬可用之才仰請俯准張聖訓帶所降之級留於浙江或福建於人地相宜之缺酌量補用等語該督既稱張聖訓才具可用操守謹慎著照所請交與總督郝玉麟及大學士嵇曾筠於浙閩兩省中人地相宜之缺帶所降之級補用欽此

123 乾隆元年三月二十七日內閣奉

上諭士子倚恃青衿抗欠國課定例稅單追比原以懲戒不率使知禮法至單後如能清完者准予開復所以廣自新之路也今直省所有雍正十二年以前舊欠錢糧俱已豁免此等單生內容有所欠錢糧亦已陸續完納祇緣尾欠未清未曾循例開

復而所欠又奉豁免之恩詔遂令所單衣頂永無開復之期情殊可憫著各省督撫轉飭各州縣查明前經欠糧單退之舉貢生監等實係抗欠不完稅單之後並未完納者仍不准開復若所欠錢糧曾於單後陸續完納祇有未清之尾欠而適逢赦免之恩詔將稅單之業准其開復俾得改過自新並將姓名登記檔冊倘此次邀恩之後將來再有抗欠之事著該督撫嚴叅治罪欽此

124 乾隆元年三月二十八日內閣奉

上諭據大學士嵇曾筠奏稱浙江衢州府知府楊景震因辦銅逾限應照二叅之例題叅治罪但查楊景震所辦係甲寅年銅勛應用癸丑年倭照出洋貿易方能依限起解從前因各商丑年倭照已經辦完遂用寅年倭照製貨出口以本年之照辦本年之銅則其在洋輪番回棹之期已比常例遲逾一年又查浙省承辦銅勛每有好商誑騙那移致

令辦員遲誤現在嚴行查究楊景震解銅遲延之咎實屬有因且該員年力富強實心任事衢州要缺人地相宜可否懇恩將伊仍行革職留任再為寬限四個月勒催辦解倘再逾限不完當嚴恭革任治罪等語大學士崧曾筠既稱楊景震辦銅逾限有因該員平素居官實心任事著照所請將楊景震從寬革職留任展限四個月勒催辦解倘再逾限不完即嚴恭解任治罪以儆怠玩欽此

125 乾隆元年三月二十九日內閣奉

上諭朕查江南泗州地方前經河臣齊蘇勒陞報新

淤地畝九千八百餘頃嗣蒙

皇考察知辦理之員勤報不實

諭令督臣尹繼善再加確勘隨開恩豁免八千六百餘頃止存淤地一千二百七十四頃入額陞科今朕聞得泗州地方濱河臨湖地勢極低凡虹縣桃源之水皆歸入泗州安河入洪澤湖而此等淤地即

在安河兩岸每年水勢漲發淹潤靡常收成無定小民不免賠糧之苦深可憫惻著照淮安府阜寧等縣之例將泗州安河兩岸重糧水淹之淤地一千二百七十四頃九十七頃<sup>以</sup>額徵錢糧一千二百二十二兩三錢麥一百一十石八斗自雍正十三年為始盡予豁免以示朕減賦恤民之至意欽此

126 乾隆元年三月二十九日內閣奉

上諭工部侍郎圖理琛年老昏庸不能勝任著仍為內閣學士其員缺即著內閣學士杭奕祿補授欽此

127 乾隆元年三月三十日奉

上諭督撫有節制重寄而提鎮乃彈壓大員凡到任離任及因公出境入境例應具題者所以慎職守重封疆也查川陝江西等省提鎮與總督隔省駐劄遙遠無越境相見之例惟雲南廣東浙江福建等省有因赴任之初由省而見總督者有因巡查

地方離省不遠順便謁見者蓋因苗疆重地或濱海要區當日軍務倥傯海氛未靖之初是以不行題達竟赴省城與總督面商機務此乃一時權宜遂爾相沿成習此時若不酌定規條恐大小官弁視為固然徒長奔競趨謁之風而不顧職守之曠誤與否是不可不防其漸也嗣後提鎮之於總督若係平常事件祇許文移來往如有緊要公務必須親見總督面言者或總督有應行檄調面議者俱將因公起程及回署日期繕疏題明至所帶兵後仍照部議巡查地方之例不得過三十名免致兵丁擾累汎守空虛永著為例特諭

128 乾隆元年四月初二日內閣奉

上諭江南阜寧鹽城等處州縣上年夏秋之間雨水稀少田禾歉收曾降諭旨著該督撫委員查勘被災情形已將阜鹽興海四州縣之貧窮民等加意賑恤其額徵錢糧各按災傷分數照例扣蠲至應

徵漕糧等項復令緩至今冬帶徵朕思此等地方被災之後既有本年應納之糧又有上年帶徵之項未免新舊交催追呼兩迫輸納維艱著將阜鹽興海四州縣雍正十三年未完緩徵漕糧一例豁免以紓民力再聞阜寧鹽城二縣漕米昨年未降諭旨之先已有按數完納者此等急公良民尤加以恩澤著逐一確查將已完之數准抵今完之項俾得一體霽恩該督撫飭令該州奉行毋使奸胥地棍中飽滋弊欽此

129 乾隆元年四月初三日奉

上諭朕前降旨將

世祖時將恩賜世襲罔替之職絕嗣未襲及後罪革退未襲者令八旗大臣查奏八旗現在辦理但雍正十年查奏

太祖

太宗時恩賜世襲罔替之職祇查絕嗣未襲者未將因罪革退未襲之子孫查奏今著一併查明再從前

辦理時自世襲固替之拜他拉布勒哈番以上之  
官皆始在查奏之列其世襲固替之拖沙拉哈番  
未經入於數內朕思拖沙拉哈番職雖較微然溯  
厥由來其祖父亦係為國宣力致命之臣若不查  
明酌量承襲詳堪憫惻著將拖沙拉哈番之未襲  
者一體查奏欽此 此一道兼清字

130 乾隆元年四月初三日奉

旨黑龍江寧古塔吉林烏喇等處若舉將罪人發遣則該  
處聚集匪類多人恐本地之人漸染惡習有闖風俗朕  
意嗣後如滿洲有犯法應發遣者仍發黑龍江等處外  
其餘漢人犯發遣之罪者應改發於各省烟瘴地方著  
總理事務王大臣會同刑部議奏欽此

131

乾隆元年四月初三日大學士張廷玉奉  
旨順天府通判田爾易著吏部隨便帶領引見

欽此

132 乾隆元年四月初四日總理事務王大臣奉

上諭朕前聞河南鄭州臨河之姚店等保地方于雍  
正元年楊橋河口衝決以後地畝變成鹽鹵賄納  
正元年楊橋河口衝決以後地畝變成鹽鹵賄納  
空糧甚為該地民人之累隨密令該撫富德確查  
據實具奏今據富德查奏鄭州東北境姚店等保  
一帶實在鹽重不可耕種地共三百九十頃八十  
七畝八分四釐實在沙深不可耕種地共六十六  
頃八十三畝九分七釐二項共地四百五十七頃  
七十一畝八分一釐額徵地丁糧銀三千八百八  
十兩五錢三分四釐零所有雍正十二年以前積  
欠已叨恩豁免其十三年未完額銀各該戶實屬  
輸納維艱等語鄭州所屬之姚店等保既據富德  
勘明鹽鹵飛沙地共四百五十七頃七十一畝八  
分一釐實屬不毛地既難耕種自無出著該部將  
該地額徵糧銀三千八百八十五錢三分四釐  
零即予豁免以蘇民困其雍正十三年應徵糧銀  
亦著豁免該撫即行曉諭該地民人知悉仍嚴飭



該地方官毋得私自徵收以副朕加惠豫民之至意欽此

133 乾隆元年四月初四日内閣奉

上諭湖南沅州與黔省壤地相接上年黔苗不法擾害地方居民逃避於沅州者甚眾且募夫運餉等事沅民出力尤多朕已加恩將該州雍正十三年地丁錢糧全行蠲免以示優恤再查蠲免錢糧之例若因水旱災傷赦免者將耗羨一併豁免上年沅民受隣省逆苗之累朕深為軫念外外加恩著將應徵耗羨一體豁免俾閭閻全無催科之擾至於官員養廉不敷之數著該撫於公用項下撥給

欽此

134 乾隆元年四月初四日公訥親奉

上諭翰林任啟運余棟雷鏞俱在阿哥書房行走可賞官房居住著內務府總管酌量伊等家口查給

欽此

135 乾隆元年四月初八日内閣奉

上諭湖北巡撫員缺著高其倬補授湖南巡撫鍾保著來京陛見其巡撫印務著高其倬前往暫行署理俟鍾保回任後高其倬再赴湖北之任欽此

136 乾隆元年四月十一日内閣奉

上諭原任蘇松道王澄慧原任蘭州按察使李元英原任福建泉州府知府王時翔原任雲南昭通府大關同知王廷諱原任山盱通判鈕天麒俱著吏部行文調來引見又原任福建福州府知府胡承謀著刑部釋放交與吏部帶領引見欽此

137 乾隆元年四月十二日内閣奉

上諭杜濱著仍回甘肅原辦事處欽此

138 乾隆元年四月十三日內閣奉

上諭今日朕傳旨前往

雍和宮適值

天賜時雨凡伺候跟隨人等衣履未免濡濕護軍校護

軍拜唐阿步軍等俱著賞給半月錢糧校尉著賞

給一月錢糧欽此

此一道並清字

139 乾隆元年四月十三日奉

旨楊汝毅所奏著抄寄河南巡撫富德確查具奏欽

此

140 乾隆元年四月十三日內閣奉

上諭山東泰安州香稅朕已降旨豁免近聞湖北太

和山凡遠近進香者亦有香稅一項小民虔禮神

明止應聽其自便不宜征收香稅以滋擾累所有

太和山香稅著照泰安州之例永行豁免該督撫

即飭令地方官實力奉行毋使奸胥土棍巧取滋弊欽此

141 乾隆元年四月十三日奉

上諭各省郡縣州邑皆有養濟院以收養貧民此即

古帝王哀矜矜獨之意朕聞歸化城地方接壤邊

關人烟湊集其中多有疲癯殘疾之人無棲身之

所日則乞食街衢夜則露宿荒野甚可憫惻查彼

地舊有把總官房三十餘間可以改為收養貧民

之所每年於牛羊稅內撥銀二三百兩粟米百餘

石為贖粥寒衣之費著該處同知通判揀選誠實

鄉耆經理其事仍不時稽查以杜侵蝕之弊倘地

方有樂善好施者聽其捐助共成善舉但不得藉

涉勉強著該都統會同該同知通判妥貼辦理務

令窮民均沾實惠特諭

142 乾隆元年四月十四日內閣奉

上諭四川巡撫楊嗣著來京陛見其巡撫印務著侍郎王士俊前往署理欽此

143 乾隆元年四月十四日內閣奉

上諭嗣後凡遇考試閱卷俱將尚書楊名時一體開列欽此

144 乾隆元年四月十六日內閣奉

上諭聞河南按察使繆孔昭年老不勝臬司之任著來京引見其按察使員缺著少詹隋人鵬補授王奕清著以正詹銜管少詹事欽此

145 乾隆元年四月十七日總理事務王大臣

臣等奉

上諭直隸不必設立副提河之柱著回京候旨另用直隸河務雖有專辦之提河著總

督李衛兼行管理欽此

146 乾隆元年四月十七日總理事務王大臣奉

上諭哈元生身任貴州提督一切苗疆辦理之事是

其專責乃伊平日暴戾粗疎剛愎自用且與巡撫元展成文武不和諸凡不能預為防範先事綢繆及逆苗蠢動伊仍擁兵觀望不能速為撲滅以致賊勢猖獗百姓受其荼毒而伊身膺揚威將軍之任又復與董芳各懷私意彼此齟齬稽遲軍務不克早奏膚功是哈元生之罪較之董芳元展成為更重從前因苗疆事務未竣伊現在領兵勦賊未便即行拿問自張廣泗為經畧以來悉心料理已漸次就緒若不治哈元生之罪無以服輿情而伸國法哈元生著拿解來京交與總理事務王大臣會同刑部嚴審定擬具奏其提督印務著左江鎮總兵王無黨署理左江鎮總兵印務朕另降諭旨欽此

147 總理事務王大臣 字寄 經畧苗疆署貴州

巡撫張 乾隆元年四月十八日奉

上諭兩月以來未見張廣泗奏報苗疆情形雖用兵事宜不便草率難以尅期告竣但現在情形亦應一面辦理一面奏聞至於安插難民尤屬要務當此春耕夏耘之際如何給與籽種牛具如何安其身家使得盡力於南畝此係萬不可緩之事諒此時必有定局亦當據實具奏慰朕懸念况貴東貴西兩道原係題補之缺甚為緊要不應久曠何以尚未會選請補爾等可寄信詢問張廣泗至於黔省兵革之後恐米價昂貴現貯米石不能數用可令張廣泗預為酌量若有需用米石之處即行咨會湖南巡撫速為接濟朕已降旨諭鍾保笑一併傳諭張廣泗知之欽此遵

旨寄信前來

148 乾隆元年四月十八日奉

上諭凡由捐納候選之貢監舉人例不得與鄉會試從前事例內有捐應鄉會試一款今捐例已概行停止此等貢監舉人有志科名者勢皆不得援例與試矣朕思此等人員尚在需次選曹與既登仕籍者有間不得因捐資候選屏諸場屋之外直隸各省貢監生捐官願與鄉試舉人捐官願與會試者准令一體考試以示鼓舞人材之意特諭

149 乾隆元年四月十八日內閣奉

上諭鄉試文場例應巡撫監臨今張廣泗現在辦理苗疆軍務今科貴州文場鄉試監臨著布政使馮光裕代理欽此

150 乾隆元年四月十八日內閣奉

旨給事中瞻塔海條陳二件尚屬留心事務著交部議叙欽此

151 乾隆元年四月十九日總理事務王大臣奉

上諭據苗疆經畧張廣泗奏稱貴州按察使方顯報  
丁母憂例應回籍守制貴州臬司一缺甚為緊要  
且夷性兇狡必得熟悉風土之員始於地方有益  
查有江西廣饒九南道陳惠榮原任貴州知府於  
苗情素為諳悉且才守兼優老成幹練若陞授貴  
州按察使實能勝任再者黔省州縣以下要缺俟  
應題補者往往難得其人查有張照帶來辦事之  
筆帖式莽凱湖南慈利縣知縣鄔璠此二員者人  
俱明白屢經差委努力辦公又有原任貴州平遠  
州丁憂服滿知州蘇松為人謹飭操守廉潔可否  
將莽凱鄔璠留黔委用將蘇松令其赴黔聽候差  
委俟有伊等相當之缺酌量題補等語黔省正當  
需人之際著照張廣泗所請將陳惠榮補授貴州  
按察使令其速赴新任莽凱鄔璠俱著留黔委用  
蘇松著即赴黔省聽張廣泗差委過有伊等相當

之缺即行題補實授欽此

152 乾隆元年四月二十日奉

上諭由科甲出身之部曾差任學政者

呈考准其帶翰林編檢銜以示優視學臣之意乃該員  
兼銜之後原缺除授有人該部既不使請俸而翰  
林衙門見其止繫虛銜亦未便遽為請俸是部曾  
一任學政而反失其常祿也嗣後部曾出任學政  
帶翰林銜者或照原官論俸由該部支領或照編  
檢論俸由翰林院支領著該部妥議具奏特諭

153 乾隆元年四月二十一日總理事務王大臣奉

上諭陝西河州總兵官員缺著副將張存孝補授欽  
此

上諭八旗為國家根本從前敦崇儉樸習尚淳龐風俗最為近古迨承平日久漸即侈靡且生齒日繁不務本計但知坐耗財求罔思節儉如服官外省奉差收稅即不守本分恣意花消虧竭國帑及至干犯法紀身罹罪戾又復貽累親戚波及朋儕牽連困頓而兵丁閒散人等惟知鮮衣美食蕩費資財相習成風全不知悔旗人之貧乏率由於此朕即位以來軫念伊等生計艱難頓頒賞賚優卹備至其虧空錢糧已令該部查奏寬免其入官之墳塋地畝已令查明給還其因獲罪革退之世職亦令查明請旨似此疊沛恩施者無非欲令其家給人足返樸還淳共享昇平之福也現在日與王大臣等籌畫久長生計次第舉行惟是曠典不可數邀亦不可常恃而旗人等蒙國家教養之厚澤不可不深思猛省自為家室之謀即如喜喪之事原

有恩賞銀兩自應稱家有無酌量經理乃無知之人止圖粉飾虛文過為糜費或過父母大故其意以為因父母之事即過費亦所不惜不知蕩盡家產子孫無以存活伊等父母之心其能安乎否乎他如此等陋習不可悉數在己不知節省但希冀朝廷格外之賞費以供其揮霍濟其窮困有是理乎嗣後務期恪遵典制謹身節用勿事浮華勿耽游惰交相戒勉惟儉惟勤庶幾人人得所永遠充裕可免窘乏之虞况旗員內之老成謹慎者可望擢用外任上為國家効力辦公下亦可得俸祿養廉以贍給家口倘伊等不知痛改前非仍蹈覆轍驕奢侈靡虧帑誤公則是伊等下愚不移自取罪戾不惟恩所不施且為法所不貸朕必仍前按律懲治不少姑息且朕今日所寬者即向日虧空官帑驕泰自恣之人也若不痛自改省謹遵法紀則將來不於伊身必於伊等之子孫又復罹追比之

苦矣又何樂於目前數日之花費乎凡朕之所以  
諄諄訓誡者總為伊等預謀久遠生計八旗大臣  
等可通行曉諭官兵人等其各敬聽朕言熟思審  
計以無負朕之期望欽此

清漢並

155 乾隆元年四月二十三日內閣奉

上諭前據兩淮鹽政尹會一奏摺內稱浙省因上冬  
今春雨水過多鹽斤少產以致價直昂貴查兩淮  
現有盈餘之鹽可以通融接濟鎮江府屬引歸浙  
商行銷課歸浙省完納轉為平價便民等語朕已  
批令照所奏辦理今據大學士嵇曾筠奏稱浙江  
春月天時晴霽上浦旺起各窰趕煎鹽已充支鎮  
江所屬鹽價已平無須准監接濟且現在京口等  
處奸徒希圖販私便越引地若再准兩淮官監通  
融則真偽益難辨別理合奏聞等語朕思辦理鹽  
務原在因時制宜今大學士嵇曾筠既稱目今浙

鹽充裕價值平減無須准監接濟着照所奏停止  
可即傳諭尹會一知之欽此

156 乾隆元年四月二十三日內閣奉

上諭國家封疆重寄端於督撫是賴督撫而官寔為  
一體至於提鎮均任封疆之責文武雖有專司兵  
民雖有專轄而事皆朝廷之事兵皆朝廷之兵民  
皆朝廷之民譬如手足臂指之同在一身也烏可  
以歧而二之存彼此之見分畛域之形哉古人重  
和衷之義蓋兩三人共一事和則成不和則隳易  
曰二人同心其利斷金書曰惟賢讓能庶官乃和  
劉向曰衆賢和於朝則萬物和於野和之收效較  
之如是苟其不和督與撫各持己見互相齟齬則  
教令紛更事務稽滯百姓罔知趨向屬吏無所稟  
承事多歧澤不下逮甚至乖戾之氣上干  
天和而全省受其害矣文武不和則文員藐視武  
弁而存疎遠之心武弁嫉妬文員而懷不平之意

以致兵民不協爭鬪相尋而閭閻行伍皆為之不寧矣凡此不和之故徃一趨於意見之參差而成於屬官之譏構凡人性情好尚不能皆同氣質偏偏亦所不免而不育屬員每利於上官之不睦得以自行其私遂爾乘間伺隙巧於浸潤日積月累嫌隙益深至於不可解釋向來各省大員多蹈此習而不自知其昧哉

皇考屢加訓飭尚有未能悛改者如程元章隆昇元展成哈元生等即目前之顯然昭著者矣

皇考聖諭曰人臣共事斷無公而不和之理此千古不易之大訓也蓋以公心事主則其心祇知有國事不知有己身僚窠之間同心合志唯期有裨于政治有益於民生而愛憎無凌介懷惡怒有所不計又豈區區羨斐諛間之吉所能搖惑於萬一哉朕深慮向來之積習難除人心之蔽錮不覺用是切頒諭旨儆戒提撕凡為封疆大臣者果能各矢公

心屏除私意同舟共濟休戚相關則誠意交孚上行下效官弁皆敦協恭之誼兵民首厥豫順之風和氣致祥受天之祐豈非朕心所厚望於特諭

157 乾隆元年四月二十四日內閣奉

上諭江西廣饒九南道員缺著江南潁州府知府盧見曾補授潁州府知府員缺緊要著各部堂官於屬員內揀選交與吏部帶領引見請旨欽此

158 乾隆元年四月二十五日吏部奉

上諭郭振宜寶容恂著調來引見欽此

159 乾隆元年四月二十七日內閣奉

旨陝西河州鎮總兵官員缺著副將張存孝補授陝西興漢鎮總兵官員缺著王邦寧調補欽此



160 乾隆元年五月二十七日奉

上諭從來經學盛則人才多人才多則俗化茂稽諸  
史冊成效昭然我

皇祖聖祖仁皇帝道隆義頌學貫天人凡藝圖書倉靡  
不博覽而尤以經學為首重

御纂周易折中尚書彙纂詩經彙纂春秋彙纂等編又

有朱子全書性理精義正學昌明著作大備我

皇考世宗憲皇帝至德同符考思不匱

特勅直省布政司將諸書敬謹刊刻准士子赴司呈請

刷印蓋欲以廣

聖教振儒風甚盛典也乃聞各省雖有刊板而士子刷

印寥寥蓋由赴司遲呈以俟批發既多守候之勞

且一生所請不過一部斷不能因一部書而特為

發板開刷士子所以欲多得書而其勢不能也朕

思諸書實

皇祖惠教萬世

皇考頒行天下之典籍安可不廣為敷布著直省撫藩

諸臣加意招募坊賈人等聽其刷印通行鬻賣嚴

禁吏胥阻撓需索之弊但使坊賈皆樂於刷印斯

士子皆易於購買庶幾家傳戶誦足以大廣厥傳

朕又思

聖祖仁皇帝四經之纂實綜自漢迄明二千餘年羣儒

之說而折其中視前明大全之編僅輯宗元講解

未免庸雜者相去懸殊各省學臣職在勸課實學

則莫要於宣揚

聖教以立士子之根柢每科歲案臨時預飭各該學確

訪生童中有誦讀

御纂諸經者或專一經或兼他經著開名冊報俟考試

文藝之後該學政就四經中斟酌舊說有所別異

處摘取數條另期發問只令依義條答不必責以

文采有能答不失指者所試文稍平順童生即予

入泮生員即予補廩以示鼓勵務宜實力奉行以

副朕尊經育才之意特諭

161 乾隆元年四月二十八日總理事務王大臣奉

旨此案雖屬小事但科道官員與部院堂官互相爭競至於糾叅甚非體統此風斷不可長其孰是孰非之處著總理事務王大臣確詢明白據實具奏

欽此

162 乾隆元年四月二十九日總理事務王大臣奉

旨于永世前派出守護

泰陵今伊緣事革職著仍賞副都統銜照原派行走欽

此  
燕清字

163 乾隆元年四月二十九日內閣奉

上諭向來翰林丁憂者有在京修書之例梁詩正著

來京在南書房行走欽此

164 乾隆元年五月初一日奉

上諭朕惟撫安百姓必先嚴察胥吏而修築工程之地弊端尤多關係更屬緊要聞直隸永定河每夏秋間時有衝決修築堤岸夫役物料不能不取辦於民間胥吏朋比作奸其人工物料價值肆意中飽毫無忌憚且將物料令民運送工所往返動經百里或數十里不等腳價俱係自備種種擾累吾民其何以堪嗣後河工諸臣與協辦河務州縣官皆宜實心籌畫嚴行稽察無論歲修搶修凡民夫物料應給價值務照實數給發不得聽任胥吏絲毫扣刻以致貽累百姓如有漫不經心仍蹈前轍者或經朕訪聞或被人題叅必從重處分特諭

165 乾隆元年五月初二日奉

旨翰林院編修顧成天著在南書房行走欽此

166 乾隆元年五月初二日內閣奉

上諭據湖廣署督史貽直奏稱新設恩施一協乃改流地方營伍汛防甚關緊要必得熟悉風土勤慎幹練之員方克勝任新調副將李椅領兵點省俟凱旋方得赴任其舊任遊擊劉策名今陞山西偏關營恭將查該員久任苗疆於邊地情形最為熟悉現在委同文職辦理忠崗安塘事宜甚為妥協仰懇俯准將<sup>劉</sup>策名以恭將陞銜仍留楚省暫署恩施協副將事務俟李椅回任之時酌量人地相當之缺將劉策名另行題補等語劉策名著照吏貽直所請行其山西偏關營恭將員缺著該部另行推補欽此

167 乾隆元年五月初四日奉

上諭自古制治經邦之道揆文必兼奮武誠以兵可百年不用不可一日不備也國家承平既久武備

營伍最宜加意整頓雍正七年間

皇考特降諭旨令各直省訓練戎行精熟技藝即如鎗手演習火器毋許只放空鎗必用鉛子打把演熟準頭<sup>俾</sup>成利器以收實用乃朕聞各直省實力奉行者甚少鎗手仍係空放並未習用鉛子打把之法弓箭手多用軟弓專講虛架並未練挽強貫扎之能藤牌手僅以滾跌花簇見長並未學推鋒破陣之技似此虛文塞責毫無實意並相沿日久恐致營伍廢弛關係非淺嗣後各直省督撫提鎮務各留心整飭俾將士奮勵操演庶幾隊伍兵丁悉成干城扞禦之材乃為無曠職守倘有怠忽因循仍蹈舊習者朕必重加譴責欽此

168 乾隆元年五月初五日內閣奉

上諭據兩廣總督鄂彌達奏稱本年二月內欽奉上諭凡行盜地方大夥私販自宜嚴加緝究其貧窮老少男婦挑負四十觔以下者不許禁捕所有商人私雇盜捕及巡盜船隻幫捕汛兵悉行停止臣遵照部文出示曉諭各梟徒痛加悔改勉為聖世良民乃省城各處竟有梟賊成羣手執印刷小票稱奉廣東按察司明示許令販私不服盤查及查白映棠告示竟未遵奉諭旨分別老幼混稱貧難百姓四十觔以下者不許緝捕倘敢私自查緝許被害之人指名赴本司衙門控告等語以致強壯奸徒無不藉口貧民公然販私成羣結黨目無法紀白映棠以刑名之官攬越盜政率意妄行逞私債事其咎難逭理合奏聞臣今酌定規條凡有近場實在貧難無可資生之人如年過五十以外或在十五以內及並無依靠之裝獨老婦許其挑負

四十觔以下在本境易米度日不許遠越外境違者以私盜論該場埠巡丁如有將貧難合例之人騷擾盤查者即以誣指平民販私治罪其有年屬強壯者即四十觔以下者仍以私盜究擬若有人盜並獲審非大夥私梟仍照舊例立即詳結不得株連至現設之巡丁巡船其界連場地者必須扼要巡查不便概行停止又如廣西銷盜各埠以及界連交趾私盜衝贖之鎮安等處再福建之長汀江西之寧都皆大夥私梟出沒之地尤難遽行停止仍請照前設立惟有責成各地方官隨時稽查倘有生事擾民者嚴加懲治等語朕因各省盜務向來辦理未安不肖官吏往往縱放大梟拘拿小販以致濱海近場之窮民藉有販以度日餬口者胥受擾害是以諭令寬其禁約毋許苛求原以惠養貧民並非縱容匪類聽其作奸犯科也豈知無賴之徒妄稱奉旨肆行無忌在直隸則有天津之事在江南則有鎮江之事在廣東則有廣州之事

遠近一轍不約而同若不速加嚴懲則各處聞風效尤將大為地方之擾害李衛之嚴密查拿鄂弥達之據實奏此二人辦理乃深知朕心而洞悉政體者若天下皆撫皆似此居心而不存觀望之念秉公執法則究暴威知欽跡必無長奸貽患之慮矣鄂弥達著交部議叙其鹽務規條即照所奏行白映棠職司刑憲不能禁約私梟反出示給票縱民為匪甚屬溺職著解任來京候旨朕自臨御以來時時以戒

皇考愛養百姓之心為心凡從前官吏之奉行不善涉於煩苛者皆次第革除務期與民休息若天下民人體朕此意改過遷善化頑為良則朕寬大之政可以永遠施行此天下臣民之福即朕之福也今則不然即如私鹽一事朕本欲酌寬其禁以養恤窮黎而奸民乘機伺隙結黨呼羣凡向來之畏法而不敢輕犯者今則公然肆橫無所憚懾觀此情形是奸頑之民不容朕行寬大之政也朕為天下

主惟有執兩用中期與天下臣民休養生息以成久道化成之治豈肯姑息養奸貽風俗之憂釀閭閻之患哉為此切加曉諭俾遠近百姓各自醒悟洗心滌慮務為良善奉公之民以永受朕恩著各省督撫將朕此旨刊刻頒布務令遠鄉僻壤咸共知之欽此

169 乾隆元年五月初六日總理事務王大臣奉

上諭左都御史孫嘉淦因辦理廢員一案恭奏福敏經年累月不至衙署案卷送閱偏執已見定准之稿槩不畫行等語從來大臣辦理公務惟當一秉公忠和衷商酌於事方為有益若各存意見至於爭競徒有妨於政體毫無裨於國是此風斷不可長前者御史與禮部堂官彼此爭執至於恭奏朕已降旨查問今孫嘉淦與福敏係同堂辦事之大臣亦復參商如此關係更大若不從重議處無以警誡將來兩人孰是孰非之處著總理事務王大

臣東公查問據實具奏至於廢官案件原係都察院承辦之事今福敏既拘執推諉孫嘉淦又欲市美沽名不便令伊二人專辦著將九卿職名開列請旨候朕另簡大臣會同都察院辦理欽此

170 乾隆元年五月初六日奉

旨廣東按察使員缺著江安糧道王恕補授江安糧道員缺緊要著該督撫於所屬事簡道員內揀選一員題補其所出事簡道員之缺著奏聞候朕另降諭旨欽此

171 乾隆元年五月初七日奉

旨朕因李紱保舉新進士過多又聞伊在朝班將新進士派令九卿保舉特降諭旨詢問今據李紱奏稱同在朝房有諮詢擬議者從旁勸助勸助臣實有之且曾向趙之垣言及新進士原承敵文藝頗工勸其保舉等語是李紱將伊私人派令九卿保

舉之處已自認不諱伊又稱凜承訓誨惟有永絕妄言等語朕即位以來並未因臣工多言即加以處分者今李紱明係妄舉乃自謂妄言避重就輕希圖朦混著交部嚴察議奏欽此

172 乾隆元年五月初七日奉

禮部事務王大臣以奏御史奏禮部一宗

旨朕詳閱此案情由其過全在禮部著將禮部堂司官交部察議勵宗萬以禮部而兼知貢舉內場之事乃伊尚責又非各堂官可比著交部嚴察議奏至御史等奏禮部只當就事論事乃於章奏之內過為激迫已甚之詞此風亦不可長著一併交部查議欽此

173 乾隆元年五月初七日奉

上諭國家以科目取士廷試之後分別任用或選授庶常或分部學習或以縣令銓補此因材器使之道欲令士子各展所長裨益政治原非有用舍去

取於其間也聞向來士子因詞林地望資格優於外任每以得預是選為幸及至引見後輒於內用外用妄生計較此徃於習俗見聞之陋而於朝廷優待士子之心實未深也蓋今時縣令所轄土地人民等於古者侯伯子男之國撫綏經理實賴通材故親民之官所係最重果其才猷政績卓然表著類皆不次超擢膺斯任者何得不力圖報稱而更生企羨乎若身預詞林之選者其名實尤難相副蓋文詞不工於館職固為有媿即使詞采可觀尚恐流為浮華無用之士務各砥礪廉隅講求經術漸致淹雅宏通以無負選後儲才之慮至於在部學習人員分曹佐理各有攸司當念外省官吏措置偶或失宜尚有內部為之駁正至部中所定章程一經奏准通行將來即引為成例稍有舛錯貽誤不少安得不倍矢精勤期免隕越總之百司庶府悉非私利之階梯政事文章各有當修之職業務宜屏除私意勉效忠良庶幾識見日增猷為日著士風吏治漸臻上理朕實於爾等有厚望焉

特諭

174 乾隆元年五月初八日總理事務王大臣奉

上諭向來進士候選但於雙月銓補嗣因人多壅滯准於單月亦立班選用近來進士已經疏通不過需次二三年即可得缺惟舉人選班壅積日久現今猶需次至二十年方可得缺以致中年登科者至精力就衰之時方膺民社難收實用朕思進士已經疏通應仍照舊例但於雙月銓補其進士單月班次應改用舉人銓選亦屬疏通舉人之一法著交吏部詳查議奏欽此

175 總理事務王大臣 字寄 廣西巡撫金

乾隆元年五月初八日奉

上諭上年朕奉

皇考諭旨辦理苗疆事務時見廣西巡撫金鉞陳奏事件甚多朕即位之初伊於一兩月間亦連奏事四次今半年以來未見伊陳奏一事巡撫管轄通省

事務繁多豈半年之久地方民生吏治竟無一可  
陳奏之虞耶抑存觀望之見私心揣度以朕欲尚  
簡靜而緘嘿不言為迎合之舉耶為大臣者公忠  
體國只論事之當言與否不必預存意見者來金  
銀竟未能深知朕心此次申飭之後料伊必又將  
不應陳奏之事喋喋敷陳矣若如此存心何以膺  
封疆之重寄爾等可傳旨曉諭之欽此遵

旨寄信前來

176 乾隆元年五月初八日奉

旨各省巡察俱已停止山西巡察亦著停止派往欽

此

177 乾隆元年五月初九日奉

上諭三代以前不言水利溝澮之制時蓄洩備旱潦  
尚書周禮所載為田功計者其利甚溥開渠引水  
溉田育穀始於戰國蓋因阡陌既開溝澮尋尺已

失其舊也歷代言水利者得失參半總以相土宜  
順水勢近不擾民遠可利人為主今江南所屬蘇  
松常鎮四府太倉一州現在興修支河仿河工海  
塘之例督撫分委降革廢員及本籍候選考職人  
等効力承修朕思渠港圩壩附近溉田原宜開濬  
以備旱潦但開濬之法須河身深廣蓄洩得宜其  
挑取塗泥遠移他處或培塚下之地或築堤岸之  
上方為久計若徒夫挑土堆貯河旁雨淋水潦旋  
即入河不久淤塞務名無實徒滋煩擾至古堤舊  
渠倘遇旱潦不為田害便宜仍舊紛更改築甚無  
謂也今蘇松等處內地支河原不比河工海塘之  
險古堤舊渠如元和至和等塘民利往來田資灌  
溉至今受益吳本澤國三江震澤支流四溢如卬  
與權單諤邦亶趙霖夏原吉周忱等所論水利考  
据精核得失瞭然今効力承修人員相度形勢諳  
練自遜前人倘有夾塘蓄水石梁洩河止宜加修  
不必改築若有必應開濬建築之處督撫留心細  
勘并飭州縣協辦工程一應調遣臂指易使至長  
洲等州縣按畝派錢以供大修朕已降旨停止倘



有官吏藉端中飽即絲毫派累經朕訪聞必加嚴處嗣後督撫以至州縣建言為民興利或利小而害大或利在目前而害伏於後或有利無害而其事易創難成皆宜詳審熟籌慎之於始以體朕惠養元元之至意特諭

178 乾隆元年五月初九日總理事務王大臣奉

上諭朕聞河南彰德一府七縣共漕米三萬餘石而臨漳縣辦米三分之一他邑每畝徵米四五合或七八合不等獨臨漳每畝徵米一升三合有奇從前兌糧水次在臨漳境內回隆鎮是以額徵本色獨多今水次移在湯陰縣五陵鎮臨漳運米必越安陽湯陰地方始到五陵且本地產米無多漳民辦運維艱等語朕思臨漳所辦漕米果多於他邑小民不無苦累若欲減運又有關於額賦其可否照附近水次之安陽湯陰等縣則例按畝徵米起運其餘改徵折色之處著傳諭巡撫富德查明酌議具奏欽此

179 總理事務王大臣 字寄 各省督撫

乾隆元年五月初九日奉

上諭據右通政李世倬奏稱社倉一法固以濟民間之缺乏而救荒之法即於是而可通臣在湖北布政使之任查社倉之春借秋還立有社長主其出入蓋一鄉一堡之中其人之貧富業之有無皆社長所深知誠使為有司者於春借之時社長具報之日即備詢其家業名口而自注之於冊或慮家業之消長不時人口之添退無定則再於秋還之候社長具報之日復詢其故而改注之此不過有司一舉筆之勞不必假手胥吏一旦遇有水旱賑濟之事舉前所自注之冊計其男婦大小名口共有若干按多寡之數而賑給之視貧富之等而酌量之自無舛錯遺漏浮冒之弊臣愚欲請定例頒行第恐有司未能留心於平日一朝奉命勢必責令社長另造戶冊籍責令百姓開報花名彼此相傳驚疑易起請勅督撫轉飭有司於社長冊報之時專心查記善為奉行則不動聲色不事煩擾等

語所奏似屬有理但必有司善於奉行方為有益  
否則紛擾閭閻未見其益先受其累矣著傳諭各  
該督撫酌量地方情形密飭有司留心酌辦倘該  
地方有難行處亦不必勉強欽此遵

旨寄信前來

180 乾隆元年五月初十日奉

上諭朕見直省督撫糾劾屬員臚列劣款在督撫自  
必細加訪察而後形之章奏但其間有由道府詳  
揭者豈遂無挾私報怨之弊亦有自行訪聞者或  
得諸胥役家人與幕賓過客之詞豈必事事皆為  
實蹟惟應於叅劾既行奉旨發審之時秉公推問  
務得確實以期平允倘內有屈抑即將起初誤聽  
緣由自行檢舉或撫叅督審督叅撫審者亦勿瞻  
顧同官之情有所假借如此則用法皆得其平屬  
員共知儆惕而督撫改過不吝不愧公而忘私之  
義庶無負朕委任大員體恤下情之心也特諭

181 乾隆元年五月初十日內閣奉

上諭查雍正元年三月間曾奉

皇考諭旨令兵部行文各省督撫提鎮於叅遊都守內  
擇其漢仗好人去得者各據所知秉公保舉將職  
名具奏若無可保之人不必勉強亦不必定數今  
著該部遵照此例行文各省令其保舉俟保舉到  
日其繕摺每月進呈之處亦照前例行欽此

182 乾隆元年五月十一日內閣奉

上諭新科一甲翰林金德銜黃孫懋秦蕙田俱著在  
南書房行走欽此

183 乾隆元年五月十一日總理事務王大臣奉

上諭昨日兵部將八旗廢員三品以上者帶領引見  
見朕着伊等皆係年久大臣為

皇考平日所深知者其放廢緣由皆係應得之罪非微  
末屬負被該管官寬抑叅處者可比自無概准開  
復即行起用之理朕已分別記名將來擇其可以

効力贖罪者再降諭旨可將此旨曉諭知之其文  
實事隸吏部仍著帶領引見欽此

184 乾隆元年五月十一日內閣奉

上諭從前發遣人犯內有因干犯銅禁獲罪者今銅  
禁已弛此等人犯尚在配所應加恩開釋著該部  
查明行文各該處釋放回籍欽此

185 乾隆元年五月十二日總理事務王大臣奉

上諭顧成天家素貧寒今來京供職著賞內庫銀  
百兩資其食用欽此

186 乾隆元年五月十二日奉

上諭朕聞各直省鹽政辦理之法各異如雲南所產  
井鹽俱係府州縣領銷派定額數由各鹽井領運  
分銷辦課不許越界販賣通行已久但府州縣繁  
簡不同民間生齒多寡不一凡兩迤衝繁之處人  
民輻輳不難照常銷引間或缺鹽借之鄰近州縣

通融協濟其山僻州縣鄉村寬遠居民鮮少地方  
官恐踏<sup>踏</sup>墮銷之咎闕碍考成遂將鹽勛分派里甲  
挨戶分食官鹽按限繳課名曰烟戶鹽小民家口  
多者可以照數納銀若貧民家口無多餘鹽未曾  
食盡及期催迫前課未完後派之鹽又至展轉積  
累懸欠難償夫鹽為小民日用必需之物慮民遠  
涉是以因地制宜不徒為銷引計也乃一則患鹽  
之不足一則患鹽之有餘俱非均平之道著該督  
撫酌量變通悉心妥議務使官不墮銷民無偏累  
毋得拘於成見再聞雲南陸涼州地方馬廠等處  
濱水低窪難以樹藝陞科未久其徵收秋糧夏稅  
有無累民之處該督撫一併查議具奏特諭

187 乾隆元年五月十二日內閣奉

上諭聞山東青州府益都縣有前明廢藩更名地一  
項在當日為藩封之產不納課糧召人承種輸租  
各佃止更姓名無庸過割謂之更名地較之民糧  
多二倍至四倍不等在當日居民投靠藩勢借佃

護身積漸增加沿為陋例今則同為民田而納糧  
尚仍舊額名為欽租地糧多賦重小民輸納維艱  
朕心軫念著將欽租名色裁革照依該縣上等民  
地按畝承糧每大畝納銀二錢一分零每小畝納  
銀六分四厘零歸入民糧項下一體徵收俾循惟  
正之供永除偏重之累著該部行文山東巡撫即  
遵諭行欽此

188 乾隆元年五月十三日內閣奉

上諭朕聞江西地方土瘠民貧率多勤儉謀生安分  
自守惟山縣鄉村常有兇蠻爭鬪動輒統眾毒毆  
將人活埋斃命者如南昌府屬之靖安臨江府屬  
之新淦贛州府屬之信豐等縣尤甚且信豐地方  
山鄉鄉鎮有等豪蠻私立禁約規條碑記貧人有  
犯並不鳴官或裹以竹篾沉置水中或開掘土坑  
活埋致死勒逼親屬立服狀不許聲張似此種  
種慘惡駭人聽聞皆從前地方官員失於化導禁  
約以致郊野兇暴藐法橫行若果係奸宄不法之

徒自當呈送官長治以應得之罪豈有御曲小人  
狂逞兇臆單管民命之理著該省文武大員通行  
曉諭嚴加禁止倘有不遵諭旨仍舊前轍者即行  
嚴拿從重定擬不少寬貸欽此

189 乾隆元年五月十四日內閣奉

上諭朕聞河南永城縣地方於本年四月內黃水忽  
發從江南碭邑之毛城鋪閘口汕湧南下將申公  
堤祝家水口冲坍並東首古堤亦冲二缺潘家道  
口等集一帶平地水深三五尺不等雖未損傷人  
口而二麥被淹房屋亦有傾圮者朕已切諭豫省  
巡撫等將被水民人加意賑恤毋令失所外查潘  
家道口一帶地方年來屢遭水患自應亟為疏通  
為又安百姓之計但此水下流多在江南蕭宿靈  
虹睢寧五河等州縣今若止議挑濬上源而無疏  
通下流之策則水無歸宿之區仍于河渠無所裨  
益著河南巡撫富德會同江南總督挖河各委賢

員會勘明確公同妥議速行辦理務令水害永除  
閭閻安堵以副朕為民防患之至意欽此

190 乾隆元年五月十四日總理事務王大臣奉

上諭福敏雖在書房行走而衙門之事亦可兼辦何  
至經年累月不進官署顯係年老惰廢弛事務  
况廢員衆多而福敏只批准五員酌商七員獨不  
思廢員用舍摠俟引見時朕降諭旨並不定于部  
察院之陳奏何必遲迴拘執至此是遲緩之咎全  
在福敏著交部嚴察議奏孫嘉淦身為大臣不能  
與福敏和衷共濟輒於朕前妄行瀆奏且過甚其  
詞亦屬不合著交部察議具奏欽此

191 乾隆元年五月十四日內閣奉

上諭廣東瓊州鎮總兵員缺著福建漳州鎮總兵武  
進陞調補福建漳州鎮總兵員缺著建寧鎮總兵

李蔭樾調補欽此

192 乾隆元年五月十五日奉

上諭各省州縣與民寗親凡大小案件無不始終于  
州縣衙門是以舊制錢糧刑名等項必委丞辦該  
有六房即附於州縣公堂之左右使徑制書吏居  
處其中既專一其心志亦慎重其防閑立法寗善  
乃聞近年以來多有六房傾記不加脩葺書吏棲  
身無所往：抱其老牘收藏于家每遇急需檢閱  
之案有無存貯悉以書吏之口為憑而隱匿抽換  
之弊不可枚舉前後印官雖心知其弊而因循苟  
且或修理無資遂沿習而不知整理此亦有閱吏  
治之一端也著各省督撫飭查所屬州縣內若有  
六房屋宇未備者各按舊基如式建造將一應案  
牘慎密收藏並查明彙件登記總簿以備稽考倘  
書吏換班有私帶文卷出署者從重治罪若本官  
失察一併議處其修造之費著該督撫藩司于本  
省公用銀兩內確估給發特諭

193 大學士張 字寄 各省學政

乾隆元年五月十六日奉

上諭向來各省學政有奏事之例此次新差學政到任後若有應行陳奏之事著具摺陳奏若無可奏之事亦不必勉強可傳諭知之欽此遵

旨寄信前來

194 乾隆元年五月十七日奉

上諭學生之道在於務本而節用節用之道在於崇實而去華朕聞晉豫民俗多從儉朴而戶有蓋藏惟江蘇西浙之地俗尚侈靡往往家無斗儲而被服必期華鮮飲食靡甘澆泊兼之井里之間茶坊酒肆呈列基置少年無知遊蕩失業彼處地狹民稠方以衣食難充為慮何堪習俗如此民生安得不愈艱難朕軫念黎元期其富庶已將歷年各項積欠盡數蠲除小民乘此手足寬然之時正當各勤職業尚朴去奢以防匱乏豈可習于侈靡轉相做效日甚一日積為風俗之憂也地方大吏及守

令有臨民之責者皆當通行化導宣朕德音指紳之家宜躬行節儉以率先之希帛可安不必文綺也粗糲可食不必珍羞物力可惜毋滋浪費終身宜計毋快目前以儉素相先以樽節相尚必能漸返淳朴政去積習庶幾唐魏之風焉又聞吳下風俗篤信師巫病不求醫惟勤禱賽中產以下每致破家病者未必獲痊生者已致坐困愚民習而不悔尤屬可憫地方官亦當由加訓誨告以淫祀無福嚴禁師巫勿令惑亦保民之一端也凡此皆不用嚴峻迫切立法繁苛反致擾民惟誠心訓諭漸以歲月自應遷善而不自知朕保民念切不憚諄切言之官吏士民其皆敬聽毋忽特諭

195 乾隆元年五月十七日奉

從禮部稽天日議覆劉吳龍遵奉四京等

旨依議歸化城現有築城墾種等事稽察歸化城之御史暫停撤回欽此

196 乾隆元年五月十七日總理事務王大臣奉

上諭查奏八旗降單大員內法海李楠俱著賞給副都統銜在咸安宮官學處協同來保辦理事務白清額侯有副都統缺出兵部一併帶領引見韓光基喀爾吉善俱著管理圓明園八旗兵丁鄂昌著在批今處行走鄂宋覺羅佛保額倫忒祿保尚承恩俱著以該旗叅領試用徐琳著以副叅領用賽都著發給李衛以副將試用欽此 清漢兼

197 大學士鄂·張 字寄 江南河道總督高

乾隆元年五月十九日奉

上諭聞河工向設搶修之項例於本年八月估計咨部次年四月題銷每估報丈尺以後即或汎水長發亦不准再咨以致承修各官員懼有賠累往往不肯預備殊非慎重河防之意可密寄信與南北總河令其悉心酌量飭令屬員廣貯物料以備不虞如本年有餘即留為下年之用仍嚴行查察毋得聽其浮冒虛糜公帑如此則有備無患似於河

防有益總在伊等實心辦理欽此遵  
旨寄信前來

198 乾隆元年五月十九日奉

上諭治河之道在因其勢而利導之司河務者必將全河形勢熟悉胸中隄防疏濬在在得宜始可以行所無事而致安瀾之慶也黃河自河南武陟至江南安東入海長隄綿亘二千餘里舊設總河一員駐劄淮安清江浦雍正七年復添設河東總河誠慮鞭長不及故俾南北分隸各有責成惟是河流日久變遷舊隄既去新隄復生其間防濬之宜有病在上流而應於下流治之者有病在下流而應於上流治之者必須通局合算同心辦理庶無顧此失彼之憂若河臣於南北形勢未能洞悉遇有開河築隄等事或至各懷意見彼此參商則上游下游必有受弊之處所關匪細徐州府當南北之衝為兩河關鍵最為緊要現設南河副提河應著移駐徐州以專督率如兩河有應會商事宜就

近可與南北河臣公同踏勘應開濬者即行開濬  
應堵築者即行堵築毋得推諉亦毋得掣肘於河  
務似有裨益著江南總河河東總河會同確議具  
奏特諭

山陵屆期朕俱躬親祇送可預先傳諭各該衙門敬謹  
辦理欽此

199 乾隆元年五月二十日總理事務王大臣奉

上諭各省提督總兵官朕未經認識者甚多今欲令  
其來京陛見但伊等各營伍之責或該地方現  
有應辦公事難以一時概令入覲著兵部行文各  
該總督提鎮就該省提鎮獎員酌量先後輪流來  
京其雲南貴州四川廣西湖南五省提鎮著於苗  
疆事竣之後陸續進京陛見欽此

201 乾隆元年五月二十一日內閣奉

上諭朕聞四川敘州府屬之南溪縣直隸瀘州并瀘  
屬之納谿江安合江九姓司又敘永屬并所屬之  
永寧縣地方於本年三月間偶遇風雹民間田苗  
房舍多所損傷此等被災窮黎深宜軫恤著戶部  
行文該撫即將該地方本年應徵錢糧概行蠲免  
倘有已經完納者准抵明年應納之項至從前未  
完尾欠并令緩征俟來年再令輸納以示朕惠養  
川民之意欽此

200 乾隆元年五月二十一日總理事務王大臣奉

上諭據禮部等衙門選擇本年十月十一日  
皇考世宗憲皇帝梓宮奉移

202 乾隆元年五月二十一日內閣奉

上諭山東巡撫岳濬著來京陛見其巡撫印務照例  
交與布政使護理欽此

山陵明年二月二十二日

皇妣孝敬憲皇后梓宮奉移



203 乾隆元年五月二十一日內閣奉

上諭浙江湖州府知府唐紹祖處州府知府陳沆四川順慶府知府錢大鼎龍安府知府張育苙俱才具平常不勝知府之任著未京以部員用欽此

204 乾隆元年五月二十二日內閣奉

上諭朕聞直隸宣化府屬之懷來縣僻處山邊向有保字號墾荒地七十一頃徵糧八百六十餘石始於前明時防禦邊惠募兵戍守即以近山地土令其耕種每軍士一名種地五十畝者准作半年糧六石種地一頃者准作一年糧十二石彼時應募屯軍不過圖免本身雜差遂不計地之多寡荒熟今歷年既久其間有地荒而糧存者有地少而糧多者官民不免賠累之苦且該縣徵糧科則上地每畝徵糧五升六合中地三升六合獨此項地土則每畝徵糧至一斗二升民力尤難輸納著該督委員確查將山坡地不可耕種無所出者共計若干奏聞豁免其可以耕種之地則按照本縣科則

分別定議俾邊塞黎民永沾實惠欽此

205 乾隆元年五月二十四日奉

上諭朕聞江南江西湖廣地方襟江帶湖廣袤數千百里設立塘汛所以衛商民防盜賊也近訪得不良兵丁疎懶廢弛養盜貽患受其規禮分其贓物為之聲援嚮道及細求其故多因兵丁攜帶家口安土重遷與地方奸匪往來熟識以致事前無忌事後無踪放膽游行竟成盜賊之淵藪夫汛兵頻數更替出其不意則與賊無從結識有縱賊之咎無夥賊之利亦何樂乎為此願任其挈妻孥飽饒整萑苻多警鈴柝空存徒法不能以自行非此之謂歟朕又聞江岸湖邊船隻成羣任意攬載奸良莫辨商民被劫所在多有雍正五年定例令地方官取具船戶隣佑保結編列號次刊刻姓名給以印照不時稽查而漁船出沒無常藏奸更易亦依陸地保甲之法許以公首懲以連坐乃日久怠忽總不奉行夫弁兵竭力防緝則盜賊不致蔓延船

戶隨在清查則盜賊無由混雜然必預封疆大吏  
刻刻留心時時察訪規條賞罰整肅嚴明方能著  
有成效至汛兵更替之法尤當因地制宜俾兵丁  
得顧其室家而地方仍資其防衛是又在封疆大  
臣實心區畫善為經理不徒在文告之虛辭也著  
各該省督撫悉心詳議奏聞特諭

206 乾隆元年五月二十五日總理事務王大臣奉  
上諭昭忠寺崇祀忠節諸巨原屬酬庸之曠典伊等  
子孫內或有侵至衰替不克振其家聲者情殊可  
憫著將崇祀昭忠寺各負之子孫除現有出仕者  
無庸查奏外其子孫內如並無出仕之人而貧乏  
不給其材尚有可用者各該旗查明揀選帶領引  
見候旨以示朕崇獎忠勲之至意欽此

207 乾隆元年五月二十五日總理事務王大臣奉  
上諭據刑部審訊出差朝鮮國正使兆德副使釋伽  
保知伊等頌詔彼國時於餽遺正禮外復開都請  
別請兩單私行需索自認不諱朕已降旨將兆德  
釋伽保交部嚴行治罪因思朝鮮歸順我朝恪守  
藩封之職蒙我

列祖

皇考怙冒深恩至優至渥即如貢獻一節亦屢經裁減  
厚往薄來無非嘉惠遠人之至意朕即位以來又  
將該國餽送使臣禮儀諭令減半以示體恤乃兆  
德等<sup>於正禮之外復受陋規</sup>額外需索其罪固不可宥而該國王<sup>即釋伽</sup>即  
應付亦屬不合若該國王能體狀心自當以恪遵  
諭旨為恭順不當以<sup>和厚</sup>徇使臣乞請為恭順也著  
禮部行文與該國王嗣後凡有使臣奉差彼國務  
宜遵朕前旨將餽送正禮如銀兩物件之類裁減  
一半至陋規所有都請別請等項悉行禁止不得  
私與一件既于功令復負朕懷遠之心<sup>恩</sup>到使臣回  
京之日路經奉天及山海關等處著奉天將軍及

山海關監督盤查行李倘有於正禮之外多帶儀物者即行奏奏若代為隱匿將來發覺之日一併議處欽此

208 乾隆元年五月二十五日總理事務王大臣奉  
上諭據刑部審訊出差朝鮮國正使北德副使釋伽保知伊等頌詔彼國時於餽遺正禮外復照舊日朝鮮陋例開都請別請兩單私行授受自認不諱朕已降旨將兆德釋伽保交部嚴行治罪嗣後凡有使臣回京之日路經奉天及山海關等處著奉天將軍及山海關監督盤查行李倘有於正禮之外多帶儀物者即行奏奏若代為隱匿將來發覺之日一併議處欽此

209 乾隆元年五月二十五日內閣奉

旨這兩奉干摺楊續侯其豐俱著革職交與直督李衛將此案情由並摺內有名人犯嚴審定擬具奏運糧通判袁國霖著交部察議具奏欽此

210 乾隆元年五月二十六日奉

上諭從前各省漕糧從本省運<sup>起</sup>至通因沿途塘鋪兵丁並地方官員催趲不力以致沿途有偷盜攔和等弊且旗丁延挨遲至冬底運船凍阻不能回空後於雍正三四年間嚴行催趲各省漕糧不過六七月間全運抵通不但運船無凍阻之苦而漕糧亦少偷盜之弊此中外所共知者乃本年五月初間漕糧頭帮方運至通其各省運船旗丁等藉口沿河淤淺重運難行且聲言如今皇恩浩蕩又照昔年之例你們塘鋪不必嚴催因而塘鋪兵丁因循懈怠一任旗丁延挨遲緩其中不無勾通盜賣及換和糠土之事且冬底運船凍阻不能回空尤為可慮朕又聞漕糧自通運至大通橋交兌所有運糧經紀每米一石領脚價銀二分四厘後因經紀等任意勒索曾經題定每米一石准旗丁給經紀制錢二十二文其額外勒索等弊嚴禁在案今

經紀等除得制錢二十二文之外仍行勒原以致  
旗丁受累各出怨言漕務官員漫無約束此朕訪  
聞甚確者漕運總督程元章倉場侍郎塞爾赫呂  
權曾乃專管漕務之大員不能悉心整理俾漕艘  
進行弊端永革轉將昔年已定之成規漸致廢棄  
是誠何心著程元章塞爾赫呂權曾自行明白  
回奏特諭

211 乾隆元年五月二十六日總理事務王大臣奉  
上諭署理甘肅提督印務二格著回兵部侍郎之任  
甘肅提督員缺著李繩武補授甘肅為近邊重地  
營伍最為緊要著李繩武加意訓練整飭戎行以  
副委任其固原提督印務著栢之蕃前任署理栢  
之蕃到任後李繩武再赴甘肅李繩武到任後二  
格起程來京欽此

212 乾隆元年五月二十六日總理事務王大臣奉  
上諭京城自雍正八年地震之後房屋傾圮當蒙

皇考世宗憲皇帝軫念施恩賞給銀兩數年以來雖漸  
次修理尚未整齊其在偏僻之處固不能一時概  
行補葺而街市通衢觀瞻所係不可不亟行修理  
著步軍統領詳悉查明並通行曉諭如係官房即  
動正項錢糧修整如係旗民房屋本人力能自修  
者令其自行修理倘本人力不能修即賞給房價動  
用正項修理作為官房以備賞人之用其監修之  
員俟步軍統領查明數具奏到日朕另降諭旨欽  
此 此係清字

213 乾隆元年五月二十七日總理事務王大臣奉  
上諭朕前訪聞得原任江西巡撫常安回京船過仲  
家淺開口於不應放開之時嚇令開閘僕從多人  
開官畏其威勢躲避不敢過問常安遽行越漕起  
板將船放行朕隨傳旨詢問常安伊乃多方掩飾  
朦混回奏朕復降旨詢問總河白鍾山令其據實

奏聞今據白鍾山奏稱常安于三月間船過仲家  
 淺聞僕從多人勒令開夫起板放船開夫不敢私  
 起伊家人復扭開夫蜂擁圍署倚勢嚇逼凌辱開  
 官以致開官躲避常安遂起板前行及將開夫掌  
 嘴洩忿又常安船至安山開時伊家人兩次到開  
 喝令起板開官任其無狀不遵例放行等語常  
 安身為大員於朕即位之初輒敢橫行如此此皆  
 皇考臨御時未經見聞者及朕降旨詢問伊復支吾  
 巧飾不將實情陳奏甚屬可惡常安著革職拿交  
 刑部及伊生事家人一併嚴審定擬具奏朕御極  
 以來見從前內外臣工不能仰體

皇考聖意諸凡奉行不善遂有流于刻覈之慮是以去  
 其煩苛與民休息並非寬縱廢弛聽諸弊之叢生  
 而置之於不問也而內外臣民不喻朕意遂謂法  
 令既寬可以任意疎縱將數年前不敢行為之事  
 漸次干犯即如監禁稍寬乃朕優恤窮民之意而  
 直隸江浙閩廣諸省私梟益棍輒敢招集無藉之  
 徒肆行無忌現在查拿究嚴然此不過編戶小民

不能深悉朝廷德意一時觸法犯禁猶可云愚昧  
 無知至若常安乃封疆大吏豈不知憲典之當遵  
 而亦為此市井跋扈之舉乎朕看此等情形天下  
 臣民竟有不容朕崇尚寬大之勢傳曰寬則得眾  
 易曰元者善之長也朕以

天地好生之心為心豈肯因一二無知之輩即自改其  
 初志但治貴得中若於玩法之徒亦用其寬則所  
 謂糧莠不除將害嘉禾倘不速為整理恐將未流  
 弊無所底止是以近日處分臣工數案如李紱之  
 濫舉進士朕即將伊降級調用勵宗萬之擅將監  
 場御史咨送吏部處分福敏之辦理廢員推諉避  
 誤朕即將伊等交部嚴察議奏又如王常等出口  
 多騎驛馬數匹乃提理事務王大臣偶爾疎忽亦  
 現在交部察議蓋此等事件在

皇考時或可格外從寬而朕此時辦理則不便稍有假  
 借良以玩忽縱肆之風漸不可長而此風一長則  
 寬不成其為寬而民反有受其累者如李紱勵宗  
 萬之事即行私作弊之漸常安之事即日無功令  
 之漸德一微百為治之道固當如是懲一儆百朕豈忽變而

為嚴刻者哉大凡人臣居心惟當以義理為權衡而不可稍存迎合之見君所謂可臣或以為否君所謂否臣或以為可難明者已降尚不可依違遷就而况妄行揣度以為迎合乎且妄行揣度亦未有不至於大誤者即如

皇考當日至仁如天寬大慈祥惠鮮懷保時時以百姓為念上年朕奉

命辦理苗疆事務時

皇考憫郵黔民至於墮淚此朕與諸王大臣所親見者其他不可枚舉乃臣下妄行揣度頗以

皇考意主於嚴此豈能知

皇考之聖心者數月以來又復妄行揣度以朕意在於寬是豈知朕之存心者若見朕於常安李紱玩法營私輩之不稍假借輒復妄行揣度以朕欲轉寬為嚴而於辦理兵民之事有意過刻致百姓或有失所是則私心蔽鋼識見卑污其罪更不可道矣總之治貴得中事求當理不當寬而寬朕必治以廢弛之罪不當嚴而嚴朕又必治以深刻之罪也

內而九卿百職外而督撫臬司咸當洗心滌慮各加警省毋蹈前轍自干咎戾則朕之百姓可以永久受朕寬惠之澤矣欽此

214 乾隆元年五月二十七日奉

上諭朕夙夜孜孜任賢圖治惟期內外大小臣工共破廉隅以襄郵理今列茲庶位者讀書科目之人不少正宜宣力國家以副朕望迺人品不齊拜官除職之際竟有不念官守之當如何而盡政事之當如何而舉輒咨問於缺地之豐嗇計較於養廉之多寡者士大夫聞之恬不為怪良可慨嘆抑或身任繁要而致羨於優閒或位列清華而垂涎於豐贍豈先資拜獻者之所宜出此哉董子曰正其誼不謀其利明其道不計其功士子稽古入官當以遠大自期安可慕食懷居甘自菲薄且朝廷設官各有分司惟當各盡職守主錢穀者必謹出納之數理刑名者必諳律例之條大僚有恭儉惟德之思一命有存心愛物之志豈可萌出位願外之

妄想自曠當官之職業哉為諸臣者務宜痛自警省咸思精白乃心請共爾位不負讀書二字嚴義利之辨立廉恥之防庶幾風俗古而人心端斯吏治清而民生厚朕實有深望焉特諭

215 乾隆元年五月二十七日奉

上諭朕聞甘省以糧載丁從前辦理未善致多偏枯屯民甚屬苦累現有民戶丁銀攤入屯戶者九千二百二十五兩屯戶輸納維艱朕心深為軫念再四思維此種丁銀乃國家維正之供並非無著之項祇因從前岳鍾琪任意增減遂致苦樂不均今應酌籌變通之法以惠甘民著將此多攤九千餘兩暫為豁免俟下屆編審之時將平慶臨鞏四府及新改直隸之秦階二州所屬各州縣新編人戶應完丁銀均勻攤入民地糧內漸次補額即分作二三次編審逐漸補足亦可務令徐徐增補以紓民力俟補足之後即行停止永不加賦著署督查

郎阿劉於義悉心妥議辦事理朕又聞康熙五十七年伏羌通渭秦安會寧等縣及岷州衛有地震傷亡缺額之七千六百八十丁該銀一千四百八十六兩有零人口既無丁銀自應蠲免乃岳鍾琪亦攤入田糧之內尤屬錯謬著該督等即查明豁除毋貽民累朕又思甘省從前多係衛所管轄屯戶其屯戶額徵悉係糧料草束為兵丁必需之物是以蠲免地丁時此項不在蠲免之內惟雍正十年呈考格外加恩將民戶屯戶應徵各色糧草一槩豁免此從未有之曠典也朕意民屯均為赤子所當一視同仁兵食或不敷再當別為籌畫嗣後遇有蠲免地丁之年著將屯戶應納之糧草蠲免三分之一永著為例特諭

216 乾隆元年五月二十七日內閣奉

上諭據尚書署陝甘督撫事務劉於義奏稱上年固原等處歉收蒙恩軫恤窮民訓諭諄切比據許容奏稱於散賑三個月之外再加賑兩個月是前後共應賑給五個月口糧矣乃臣查目前待賑之固原州共四千五百二戶其賑過五個月者僅有一百三十六戶固原廳共一萬四十一戶其賑過五個月者僅有二百八戶其餘俱不過一月或三月不等並不遵照奉旨之數給發此固許容用財過刻待下過嚴而固原同知張夢水固原州知州鄭炳惟恐拂許容意指一味塗飾欺隱蒙蔽啓實難辭除臣現在委負查賑外請將張夢水鄭炳革職究擬以為漠視民瘼者之戒等語張夢水鄭炳俱著革職交與該督查審若該負責有欺隱蒙蔽情弊即按律定擬具奏若過在許容該負責遵奉上司指示以致辦理不善即將許容嚴加議處仍將張

夢水鄭炳送部引見欽此

217 乾隆元年五月三十日奉

上諭書院之制所以導進人材廣學校所不及我

世宗憲皇帝命設之省會發帑金以資膏火息意至渥

也古者鄉學之秀始升於國然其時諸侯之國皆

有學今府州縣學並建而無遞升之法國子監雖

設於京師而道里遠遠四方之士不能齊會則書

院即古侯國之學也居講習者固宜老成宿望而

從遊之士亦必立品勤學爭自濯磨俾相觀而善

庶人材成就之備朝廷任使不負教育之意若僅

攻舉業已為儒者末務況藉為聲氣之資游揚之

具內無益於身心外無補于民物即降而求文章

成名足希古之立言者亦不多得寧養士之初指

耶談部即行文各省督撫學政凡書院之長必選

經明行脩足為多士楷模者以禮聘請範笈生徒

必擇鄉里秀異沉潛學問者肄業其中其恃才放



誕仇違不羈之士不得濫入書院中酌做朱子白  
洞規條立之儀節以檢束其身心做今年讀書法  
子之程課使貫通乎經史有不率教者則擯斥勿  
留學且三年任滿諮訪考核如果教術可觀人材  
興起各加獎勵六年之後著有成效奏請酌量議  
叙諸生中材器尤異者准令薦舉一二以示鼓舞  
特諭

218 乾隆元年五月三十日内閣奉

上諭向來科道官負於奉旨內陞外轉之日即離原  
任俸祿公費俱不支領此舊例也嗣後科道官內  
陞外轉者俟得缺後再離原任其未得缺之先仍  
食原官之俸照舊辦事今年內陞之蔣炳外轉之  
翁藻尚未得缺著照舊給與俸祿公費欽此

219 乾隆元年六月初一日内閣奉

上諭禮部堂官著照五部堂官例給與雙俸欽此

220 乾隆元年六月初一日内閣奉  
上諭戶部侍郎負缺著楊汝毅調補兵部侍郎負缺  
著內閣學士姚三辰補授欽此

221 乾隆元年六月初一日奉

上諭舊冬通智奏運軍糧二萬石已將一萬石運價  
散給領運商人催募駝隻牛車今因大兵已撤此  
項米石停其運送通智所發各商運價自應著落  
收繳但各商業已領運備辦駝隻牛車等項所領  
之價諒必分散斷無即日可以湊齊歸繳之理今  
聞通智令歸化城理事同知勒限嚴追眾怨沸騰  
深為苦累數年以來歸化城商人餬口裕如家資  
殷富全賴軍營貿易生理生理又全藉駝隻牛馬  
脚力即為商人營運之資本今聞各商以迫迫運  
價無償將駝隻牛馬盡行變棄抵補營運既屬艱  
難則所欠運價愈難清繳通智辦理此事甚不安

協大非朕體恤商人之意此項銀兩著通智將商人領去若干今已追繳若干數目據實奏明存貯外其未經完繳若干兩著寬其限期令商人徐徐還繳庶貿易有項婦項亦不致終于無著公私皆便矣特諭

222 乾隆元年六月初二日奉

上諭國家制科取士為主司者務宜矢公矢慎藻鑑不與以襄盛典乃正副考官各有各任已見不能和衷去取之間互相爭執遂有庸格而濫充中額佳文而反遭擯棄夫衡文之道公則生明似此各懷成見各挾私意已失鑑空衡平之義更何以表率房考使之虛心甄別銖兩悉稱乎且分校者取舍未當尚藉主考搜閱落卷以補缺失至於主考剛毅自用致使去取不得其平將誰歸茲當鄉試伊邇凡有衡文之責者各宜一洗積習無負任

使至於三場取士斟酌華實定制已為盡善士子若果知古知今二三場儘足發揮才調至頭場經義本代聖賢以立言自當循矩矱先民是程非四子六經濼洛闕之粹言不可闕入前蒙

皇考世宗憲皇帝特降諭旨以清真雅正為主誠以庸浮者非有物之言而詭異者非立誠之旨文品人品恒相表裏雅鄭之分淄澠之別辨之不可不精也司衡者尤宜留心區擇以得真才實學之士朕實有厚望焉特諭

223 乾隆元年六月初四日奉

旨署大同總兵官南天祥著來京陛見欽此

224 乾隆元年六月初四日奉

旨原任總兵官治大雄著調取來京引見欽此

225 乾隆元年六月初五日奉

上諭朕御極以來日理萬幾早夜孜孜惟恐政事稍有曠廢屢頒諭旨訓誡臣工務期百度具舉無稽留淹滯之弊以副朕勵精求治之心近因天氣炎暑聞八旗六部大臣惟恐朕躬煩勞欲將當奏之事擇其緊要者奏聞引見之人擇其緊要者引見其餘則俟之秋涼之後此則不知朕心者朕辦理天下事務寒暑有所不避豈肯自圖晏安况披閱奏牘引見官僚亦不至過於勞瘁即彼引見之人雖受暫時之熱而得早被錄用諒亦不以為苦嗣後可照常奏事引見不必有意減少即通行傳諭知之特諭

226 乾隆元年六月初五日內閣奉

上諭據大學士仍兼管川陝總督事務查郎阿奏稱臣本恭頌徽員蒙

世宗憲皇帝不次擢用歷任總督署理川陝總督且昇

以統兵重任復蒙

寵命簡入綸扉受

恩至為深厚今西路事務漸次告竣擬於大兵進口之

後將沿途各標營事宜隨路料理至西安之日懇

恩准自馳赴京師叩謁

梓宮以伸蟻懼並將陝甘川三省情形面奏請訓計往

返程途不過一月有餘其提督印務或仍交劉于

義署理或交碩色暫署之處伏候諭旨等語朕覽

查郎阿所奏情辭懇切准予大兵進口之後將一

切事宜料理妥協馳驛來京其提督印務仍交与

劉于義署理欽此

227 乾隆元年六月初五日內閣奉

上諭朕聞本年四月間江南徐州府蕭縣地方因上游祝家水口潰決黃水漫溢以致蕭邑民田被淹南北約長四十餘里東西二十餘里二麥未收秋

未亦被淹浸窮民失業朕心深為軫念著該督撫  
委負確查速行賑濟毋令災民失所其積水作何  
宣洩之處會同河道總督速議辦理毋得稽遲欽  
此

228 乾隆元年六月初五日內閣奉

上諭朕因各省提督總兵官未經識認者甚多是以  
降旨令其酌量先後來京陛見查會典開載有提  
鎮到京赴部投文聽候引見之條但此例不行已  
久著撫提鎮同為封疆大吏督撫既不赴部引見  
則提鎮到京亦准其即赴宮門請安候朕宣召不  
必先行赴部至伊等起程赴京及回任日期仍循  
舊例報部以便稽查欽此

229 乾隆元年六月初五日內閣奉

上諭各省學政俱已賞給養廉資其用度惟雲南舊  
有文武新生餽送贖儀數金之例足敷公署之用

相沿已久是以未嘗議及養廉朕思新進寒生即  
措辦數金仍屬拮据此項應行禁止其學政養廉  
著每年另賞銀四千兩於司庫銅息內照數支給  
永著為例欽此

230 乾隆元年六月初六日奉

一諭自雍正五年有事於準噶爾以策凡大臣官員以及  
兵丁俱各屯勉行間奮効力數年今將大兵撤回  
軍務已定此內有建著勇勇及屯勉建勳及於公務屯勉  
効力者除已經蒙恩人員外有應再加恩典者著  
總理事務王大臣查明將分別加恩之處議奏  
再此次各處辦理軍需虧空案件欵項向因正在料理  
軍需之際不得不嚴故舉行著追但此內情節輕  
重不同其情節重者應行追賠者仍令追賠外其  
情有可原應行寬免者著總理事務王大臣亦行  
查明分別詳議具奏

此道係清字譯漢

231 乾隆元年六月初六日奉

上諭史書詳誌河渠經術兼明水利誠以國計民生所關也果使水道疏通脈絡流注波澤非沮如之藪隄防有蓄洩之方旱澇有備而田廬無虞其有

裨於閭閻誠非淺鮮我

皇考軫恤黎元興行水利凡直省泉源河湖莫不濬導俾民得以灌溉轉漕為股至於蘇松之太湖吳淞白茆劉河歸海要道并淮揚之槐子烏塔河泰州如皋運河串場車路海溝等河尤不惜帑金專員督理將各河故道或為豪強侵占者

諭令嚴查清出始得一一開通建閘築隄按時啟閉使近水田畝均沾膏澤貨船鹽艘通行無阻利賴甚溥但自開浚以來已閱數年圩岸不無坍塌沙淤不無淤積朕思與其歲久落築事難費倍不若逐年疏葺事易費省著江南督撫暨河道總督令管理水利河務各官及濱河州縣各於所屬境內相

視河流淺阻每歲農隙募夫挑挖定為章程逐年舉行必令功施可久惠濟生民毋得視為具文玩誤工作及陽奉陰違絲毫擾累特諭

232 乾隆元年六月初六日奉

旨據阿山等查奏張家口外東四旗地畝應照西四旗之例每畝徵銀一分四釐於乾隆元年起科朕思該處地畝甫經查明若即令於本年起科未免輸納維艱著緩至乾隆三年起科又據奏稱西四旗地畝內從前有徵多報少之弊請交直督李衛查審明確定擬等語此項開墾地畝今既查明嗣後該管官自應據實徵報其從前之隱匿朦混有徵多報少之處事在恩赦以前著從寬免其查究餘著該部查議具奏圖併發欽此

233

乾隆元年六月初六日奉

旨慶復著署理吏部尚書兼管戶部尚書事欽此

234

乾隆元年六月初七日奉

上諭易名以謚古之制也自周公定為謚法後世帝

王未有無謚者明建文為太祖之嫡孫繼承大統

在位四年固儼然天下共主矣及成祖既立有其

天下并去其年號而史官所書則仍稱為建文元

年二年三年四年此國之所賴有信史也然不係

之以謚而稱曰建文皇帝此俗稱非史體也傳之

後世殊為闕典考諸太祖有元之天下而謚元主

為順帝哉

世祖章皇帝代明之天下而謚明主為愍皇帝雖更姓

改物之君尚且追謚而無所嫌忌况當其世者乎

弘治以來如楊循吉諸人屢以為請迄寢不行皆

以後世子孫席有成祖之業故不敢變亂舊章而

不慮其貽譏來世也我國家謚崇禎而不謚建文

者以明史未竣非當時所急今史書既成若不及

此追謚良為遺憾著大學士九卿會議確擬具奏

候朕親加裁定特諭

235

乾隆元年六月初九日內閣奉

上諭朕前降諭旨將丁士傑何祥書齊元輔文與直

督李衛以副叅試用賽都亦交與李衛以副將試

用今據李衛奏稱獨石口副將李之棟辦事平庸

毫無整飭大名協副將李梅年力就衰營伍疲玩

河標中軍副將李達春辦事操守均屬平常此三

員俱不勝副將之任請將何祥書委署獨石口副

將丁士傑委署大名協副將賽都委署河標中軍

副將庶幾人地相宜得收指臂之助等語何祥書

丁士傑賽都俱照李衛所請委署副將試用齊元

輔現在丁憂告假回籍候假滿之日仍往直隸著

李衡酌量試用原任副將李之棟李梅李達春著  
采京引見欽此

236 乾隆元年六月初十日總理事務王大臣奉

上諭貴州苗疆事務自張廣泗經畧以來已漸次就  
緒但善後事宜正須料理必事權歸一始可專其  
責成張廣泗著授為貴州總督兼管巡撫事務尹  
繼善著為雲南提督專辦雲南事務俱另行鑄給  
關防其經畧印信俟軍務告竣時再行繳部欽此

237 乾隆元年六月初十日內閣奉

上諭河南糧道張建德以年老乞休著來京引見其  
糧道員缺著管河道黃叔瓚調補管河道員缺著  
懷慶府知府胡紹芬署理仍令富德留心試看居  
官若好題請實授懷慶府知府員缺著吏部將記  
名人員帶領引見請旨欽此

238 乾隆元年六月十一日奉

上諭國家銓選各官皆總滙於吏部獨沿河一帶地  
方凡同知通判州縣以下佐貳等缺許令河道總  
督會同該省督撫題請補授誠以在工効力人員  
或能諳悉河務俾之因材器使以重河防而收實  
用也乃聞伊等効力之時每與附近地方豪紳劣  
監交通往來無事之時酒食徵逐一遇差遣那移  
借貸巧為營取而本地紳監樂於聯絡以為聲勢  
設該員署理本地之事或係隣近地方即追叙前  
好出入衙署箠鼓口舌飽攬詞訟種種招搖不可  
勝數此皆有玷于官箴貽害于鄉曲之甚者嗣後  
南北兩河凡有効力人員該河道總督嚴加申飭  
不時訪察務令循分自安毋得仍蹈舊習與紳監  
人等密迤親暱以致地方豪猾生事滋擾之漸如  
有干犯禁令文結作弊者該督撫即查明劣蹟據  
實奏奏不得稍為隱徇並將文結之人一併懲治

庶幾在工効力人員各知儆戒紳監各守法度河  
防得人而地方寧輯矣特諭

皇考格外隆恩屢頒

239 乾隆元年六月十二日奉

旨戶部查奏八旗復令入官之房屋地畝共七十二

案俱係從前欽奉

皇考恩旨已經寬免者後因該旗大臣不能仰體

恩施不能下逮此朕所深知者即位以來旗人生計時

幣人負之家產等項已經開報者不准寬免而八  
旗大臣及叅領佐領等又復辦理不善種  
以致

聖意復令交官今既查明造冊具奏著仍給還本人令

其執業再以此項房地內有於交官後已經估變認

買及賞給兵丁官用者若復行撤出未免滋擾著

塵朕懷著將八旗應入官之房屋地畝雖經報部  
而尚未估價及八旗已經估價而尚未交部者照  
前所降諭旨分別情罪令各該處查明給還本人  
俾其執業特諭

該部查明已經估變認買及賞給兵丁官用之房

屋地畝將別項入官之房屋比照間架地畝比照

等次賞給倘有不公不均藉端作弊者一經察出

定從重究治餘照所奏行欽此

241 乾隆元年六月十二日內閣奉

諭據都察院審訊李長泰首告劉回因事行賄刑  
部司官周琬得銀五百兩一案全係步軍統領衙  
門番役等夥同匪類捏詞誣陷供証確鑿都察院  
又稱番役私用之白役人等俗名圓扁子並非額

240 乾隆元年六月十二日內閣奉

上諭從前八旗虧空著追人負荷蒙



設衛後亦無定數每借番役名色嚇詐生事若遂其所欲則將事件消弭否則告知番役捕治得受賞銀飽其賂壑且往：出銀設計誘人犯法民間甚為擾累等語向來提督衙門番役及內務府番役恣行不法往往遇事生風戕賊良善其索詐騙害之惡不可枚舉是以我

皇考特派王大臣等不時約束稽查比時稍知畏法欽跡今則日久廢弛復逞故智如李長泰首告一案即目前之顯然敗露者其他更不知凡幾朕又聞得番役等竟將京城內外地方各人私自分管且將六部等衙門事件各派一人訪查此則可惡之尤甚者從來番役之設不過查捕潛藏之盜賊逃竄之罪人與賭博宰牛等類至於部院之事自有該管之大臣與職司稽察之官負責番役何人而敢於私自窺伺以持其短長乎著步軍統領嚴行禁止並將白役圓扁子之類盡行革退不許私留一人致恣閭閻之擾嗣後倘有被番役等騙害者准

本人赴刑部都察院控告該部院即據實奏聞朕必將番役嚴審治罪不稍寬貸欽此

242 乾隆元年六月十三日奉

上諭明罰勅法國之大典而肆赦所加原以昭法外之仁也恩詔之頒期以息事寧人使遠邇咸知遷善改過共為良民以成太平之治乃聞各直省於一切案件仍行提審駁審嚴刑酷吏恣意株連使無辜之人囿於囹圄細微之事刻為鍛鍊含冤稱屈所在多有夫罪名未定案情未協或有仍復審詳者但既犯在不赦則斷讞亦易成招若使合於赦款之人不得即邀赦免之澤而以酷刑斃命或因拖累破家則後即審明援赦亦已無及是朝廷已生全之有司故戕害之藐視功令殘虐民生莫此為甚且頒詔之後已逾半年而題結咨結批結之案尚屬寥寥遲玩已極著刑部即行文各該督撫速行嚴飭各屬立即詳慎查明逐一詳報歸

結省釋如有仍前濫刑擾累及擔延滋弊以沮抑  
國家德意者一經察出罪有攸歸斷不輕貸卽刑  
部所有案件亦應速為剴晰勿致沉擱以副朕衷  
矜庶徵之意特諭

<sup>243</sup> 乾隆元年六月十六日總理事務王大臣奉

上諭國家以經義取士將使士子沉潛於四子五經  
之書含英咀華發摠文采因以覘學力之淺深與  
器識之厚薄而風會所趨卽有關於氣運誠以人  
心士習之端倪呈露者甚微而微應者甚鉅也顧  
時文之風尚屢變不一苟非明示以準的使海內  
士子於從違去取之介曉然知所別擇專意揣摩  
則大比之期期主司何以操繩尺以度羣才士子豈  
能舍矩矱以應搜羅乎有明制舉之業體備各種  
如王唐歸胡金陳章黃諸大家卓然可傳本朝文  
運昌明英才輩出劉子壯熊伯龍以後作者接踵  
莫不根柢經史各行杼軸此皆足為後學之津梁

制藝之科律者自坊選之禁垂諸功令而大家名  
作不得通行士子無由睹斯文之炳蔚率多因陋  
就簡剽竊陳言襲取腐語間或以此倖獲科名又  
展轉流布私相仿效馴至先正名家之風味邈乎  
難尋所係非淺鮮也今朕欲裒集有明及本朝諸  
大家時藝精選數百萬彙為一集頒布天下以為  
舉業指南學士方苞工於時文著司選文之事務  
將入選文逐一批抉其精微奧窔之處俾學者了  
然心目間用以拳服摩擬再會試鄉試墨卷若必  
俟禮部刊發勢必曠日持久士子一時不得觀覽  
嗣後應弛坊間刻文之禁倘果有學問淹博手眼  
明快者不拘鄉會墨卷房行試牘准其照前選刻  
但不得徇情濫觴及狂言橫議致釀惡俗朕實嘉  
惠士子望各精勤厥業以底大成尚悉敬體朕意  
共相勉欽此

244 乾隆元年六月十六日總理事務王大臣奉

上諭國家以經義取士將使士子沉潛於四子五經之書闡明義理發其精蘊因以現學力之淺深與器識之淳薄而風會所趨即有關於氣運誠以人心士習之端倪呈露者甚微而微應者甚鉅也顧時風文之風尚屢變不一苟非明示以準的使海內學者於從違去取之介曉然知所判擇而不惑於岐趨則天比之期主司何所操以為繩尺士子何所守以為矩矱有明制義諸體皆備如王唐歸胡金陳章黃諸大家卓然可傳本朝文運昌明英才輩出劉子壯熊伯龍以後作者接踵莫不根柢經史各抒杼袖此皆足為後學之津梁制科之標準自坊選冒濫士子率多因陋就簡剽竊陳言雷同膚廓間或以此倖獲科名又展轉流布私相倣效馴至先正名家之法置而不講經史子集之書束而不觀所係非淺鮮也今朕欲聚集有明及本

朝諸大家制義精選數百篇彙為一集頒布天下學士方苞於四書文義法風嘗究心著司選文之事務將入選之文發揮題義清切之處逐一批抉俾學者了然心目間用為模楷又會試鄉試墨卷若必俟禮部刊發勢必曠日持久士子一時不得觀覽可弛坊間刻文之禁果有學問淹博識見明通者不拘鄉會墨卷房行試讀准其照前選刻但不得徇情冒濫或狂言橫議以釀澆風朕實嘉會士子其各精勤修業以底大成敬體朕意共相勉欽此

此一道於乾隆四年四月初九日酌改數字進

呈

頒發刊刻

欽定時文卷首

245 乾隆元年六月十六日內閣奉

上諭方苞年老多病著派太醫常往診視欽此

246 乾隆元年六月十六日奉

上諭朕惟州縣為親民之吏自宜廉平不擾懋著循聲乃獄訟催科之際官民情意易致睽隔百姓潛受苦累而無由自訴者則以書役之為害甚劇州縣官不知所以振刷而剔除之也朕訪聞直省州縣衙門經承之外必有貼寫正役之外每多白役聚此數十輩無賴之徒假託公務橫肆貪婪其為小民擾累何可勝言故有獄訟尚未審結而耗財於若輩之手兩造已經坐困者矣額糧尚未收納而浮費於催徵中飽於蠹胥已什去二三矣其餘勾緝命盜因緣舞弊遇事風生株連無辜賄縱要犯大率貼寫白役之為害居多各直省督撫務宜嚴飭各該州縣將所有吏役按籍鈎考其有私行充冒者悉行裁革設正額書役實不敷用不妨於貼寫幫役中擇其淳謹者酌量存留亦必嚴加約束毋得非時差擾至於經承正役務須時刻稽查

倘有壞法擾民之事立即按律重懲庶使若輩知所顧忌不得肆其伎倆倘或明知故縱姑息養奸又或喜其巧於趨承受其蒙蔽此則不愛百姓而愛吏役即屬戕害吾民之甚者也為民父母其忍出此乎且胥吏之為害不止州縣衙門已也凡徵解錢糧上司書吏輒向州縣書吏索取費用因而縣吏假借司費紙張名色派索花戶又如徵解漕糧時糧道衙門書吏需索縣吏規禮因而縣吏亦遂勾通本縣家人盤踞倉廩於正額外多收耗米稍不遂意百般留難遠鄉小民以得收為幸守候為艱不得不飽其貪壑又聞院司衙門凡州縣中詳事件每先發各房書吏擬批送簽書吏從此作奸射利達達行馭之間得以上下其手蓋衙蠹之為擾自上及下正不自州縣始也是在為督撫者整肅紀綱立闔省之表率而監司守令各奉厥職互相糾正則弊絕風清民安社席朕惠養元元之恩意得以周浹閭閻矣特諭

247 乾隆元年六月十七日奉

上諭昔我

皇祖聖祖仁皇帝闡明經學嘉惠萬世以大全諸書駁

雜雜不純

特命大臣等纂集易書詩春秋四經傳說

親加折衷存其精粹去其枝蔓頒行學校昭示來茲而

禮記一書尚未修纂又儀禮周禮二經學者以無

闕科舉多未寓目朕思五經乃政教之原而禮經

更切於人倫日用傳所謂經緯萬端規矩無所不

貫者也昔朱子請修三禮當時未見施行數百年

間學者深以為憾應取漢唐宋元以來註疏詮解

精研詳訂發其義蘊編輯成書俾與易書詩春秋

四經並垂永久其開館纂修事宜大學士會同該

部定議具奏欽此

248 大學士鄂 張 字寄 各省督撫

乾隆元年六月十七日奉

上諭朕聞廣東有屯糧羨餘一項原係衛所官弁徵

收每正糧一石收穀三四石不等除正米撥支兵

糧外餘穀悉係衛所官弁侵蝕入己嗣經督撫查

出題報歸公留備賑糶之用但屯田糧額本重於

民田今以一石之糧徵收至三四石屯民其何以

堪又聞各省軍田額糧較之民地亦重從前軍田

畝數原多嗣後漸次清釐田主亦屢經更易而糧

石仍輸舊額自屬苦累大學士等可寄信各督撫

詳加確查將如何定額徵收並革除額外加徵之

處密議請旨欽此遵

旨寄信前來

249 乾隆元年六月十九日奉

旨暹羅遠處海洋杼誠納貢除照定例給賞外著特賞蟒緞四疋至採買銅筋一項該國王稱造福送寺之用部議照例禁止不許令其採買固是今特加恩賞給八百斤後不為例欽此

250 乾隆元年六月十九日內閣奉

上諭莽泰著回戶部司官之任翰林嵩壽著在批本處行走欽此

251 乾隆元年六月十九日內閣奉

上諭翰林余棟丁母憂著賞內庫銀五百兩給假六個月回籍料理喪事畢仍來京在書房行走賞給俸祿不算現任欽此

本月二十四日奉旨撤回改發

252 乾隆元年六月十九日內閣奉

上諭翰林余棟丁母憂著回籍守制賞給內庫銀五百兩為喪事之用欽此

253 乾隆元年六月二十日總理事務王大臣奉

上諭國家命官分職亮采宣猷固欲各矢公忠共襄國是然必俯仰無憂而後可以專心効職朕臨御以來洞知京員俸祿所入未足供其日用深為屢念祇以量入為出國有常經必須籌畫周詳始可施行久遠今查得戶部有平餘銀兩係各省與正供隨解之項每年約有十六七萬金不等此項銀兩在內在外原存貯以備公事之用者若即以分給部院辦事之人作為養廉於情理亦為允協著總理事務王大臣等查明部院各衙門事務之繁簡官員之多寡其原有飯銀已足敷用者無庸賞給其不敷者酌量加添其向來並無飯銀者酌量

給與至於翰詹京堂等衙門雖事務不繁而淡薄較部院更甚均當令其一體沾恩可按數分派詳晰妥議具奏再外省武職俸祿之外尚有心紅紙張及親丁名糧之屬而旗員別無養廉此亦久歷朕懷者前已加恩將步軍營之章京等量給空糧資其用度今叅佐等員其有空糧者無庸賞給外其未經賞給者亦應照例分別賞給以昭朕優恤文武臣工之至意總理事務王大臣其一併妥議具奏欽此

<sup>254</sup> 乾隆元年六月二十日總理事務王大臣奉

上諭程元章不勝漕運總督之任著留京署理禮部侍郎事務勵宗萬不必兼管禮部其漕運總督員缺著補熙補授補熙酌量於漕務閒隙之時來京陛見松江提督員缺候朕另降諭旨欽此

<sup>255</sup> 乾隆元年六月二十一日奉

上諭朕聞濱海之鄉土地坍漲不常田無定址於是豪強得恣侵占而爭端日興其責在地方有司熟悉土宜按制定法彌釁於未然而平其爭於初發則可謂良吏矣夫州縣有司非盡不知愛民者特以田土情形未能稔悉不得不寄耳目於吏胥而猾吏奸胥又往往與土豪交通變亂成法予奪任意弱肉強食為厲無窮獄訟繁興端由於此至若沿海新漲之沙隣邑互爭有司又各袒護所屬益滋紛擾此皆徇私而未識大體者朕以天下為一家而州縣官各膺子民之責亦當體朕之心以為心又焉忍伸此屈彼長其奸而導之攘奪哉前此海濱要地增設大員彈壓果其秉公查勘經理得宜應即令界址劃然各歸其產不當遷延歲月仍假奸民之便而使窮黎久致失業也夫奸豪不懲則無以安良善經界不止則無以杜爭端該督撫

應飭所屬親民之員毋以姑息怠緩從事庶令民業各正而爭訟亦自是少息矣特諭欽此

256 乾隆元年六月二十一日奉

上諭自古山川有能出雲雨者天子秩而祀之而五

嶽之禮尤重非有朝命不得致祠然王立大社而

州黨又有各社祭之祭則春秋禱賽庶民各就其

所敬信而竭誠焉亦禮俗之可以情假者也泰山

舊有碧霞靈應宮遠近瞻禮者軌跡相望必先輸

看稅於泰安州然後許其登山稅約歲萬金自前

明以來相沿未革朕思東方物之所生天地盛德

之氣之所發也故傳稱觸石而起膚寸而合不崇

朝而編雨乎天下者惟泰山則春秋報熟庶禱

輟在國家亦宜順達其情若使力艱於輸稅而不

得登山非所以從民之欲也其富民樂施多寡任

意准守祠人存貯以修葺舍宇平治道塗有司不

得干預諭到即鑄石樹祠用垂永久特諭

此  
昔係雍正三年十月于晉下因內中有改更字樣今後改  
發應行交部

聖方尚古語 大清記

257 大學士鄂 張 字寄 江浙督撫

乾隆元年六月二十二日奉

上諭聞江浙地方一應百工技藝奉官役使名為當

官久經嚴禁而地方官並不遵照功令更兼吏胥

從中舞弊凡有工作不論公私總以當官為名短

發工食并有竟不給發者如匠役不能親身應差

則暗中斂錢相助名為貼費官則徇私吏則中飽

種種弊規累民實甚夫百工勤手足之力一日所

得仰事俯畜僅足資給何堪私役滋擾該督撫應

嚴行禁止除公事照例給發工食不得短扣外總

不許以當官名色擾累斯民倘不肖有司陽奉陰

違或經訪聞或經題奏朕必將大小官員分別處



分爾等可寄信該督撫知之欽此遵

旨寄信前來

258 乾隆元年六月十七日奉 本月二十三日發

上諭朕聞三代聖王緣人情而制禮依人性而作儀所以總一海內整齊萬民而防其淫侈救其彫敝也漢唐以後雖粗備郊廟朝廷之儀具其名物歲於有司時出而用之雖縉紳學士皆未能通曉至於閭閻車服宮室飲食嫁娶喪祭之紀皆未嘗辨其等威議其數度是以爭為侈恣而耗敗亦由之將以化民成俗其道無由前代儒者雖有書儀家禮等書而儀節繁委時異制殊士大夫或可遵循而難施於黎庶本朝會典所載卷帙繁重民間亦未易購藏應萃集歷代禮書並本朝會典將冠婚喪祭一切儀制斟酌損益彙成一書務期明白簡易俾士民易守著總理事務王大臣等會同該部

從容定議欽此

此件未發 發出

259 乾隆元年六月二十三日奉

上諭兵民雖分兩途同屬朕之赤子全賴地方文武官弁明曉大體不存絲毫庇護之見使民皆安分守業兵各恪遵紀律始能彼此安輯稱朕一視同仁之意乃文武官弁克體斯意者頗少每見文官有意庇民凡遇兵民互爭之案輒指兵丁為生事而在民之曲直不甚推求武弁則有心庇兵遇有犯違法令擾害百姓者並不即將名糧革除移交有司審理甚至有代為剖白以致兵驕民怨法紀廢弛設有司執法反以為有損顏面心懷不平似此挾私掩骨甚非設官治理兵民之本意也朕思文負通曉文墨者尚多見理稍明且係外籍之人與民尚屬踈遠私意易除武弁則半係本地行伍

出身兵其同類加之平日未嘗學問識見淺陋庇  
兵之風尤為難化嗣後各直省督撫提鎮及駐防  
將軍等都統等官務宜嚴飭屬員一洗積習倘有仍  
存私見袒護兵民者立即嚴叅重處庶官弁各知  
和衷兵民相資為理而地方共享寧輯之福矣特  
諭欽此

260 乾隆元年六月二十四日總理事務王大臣奉

上諭從前北路軍需內有運送料下多截留察漢叟  
爾等處應追腳價銀二萬九千餘兩雖係商人承  
領而起運之時全數給發是以截留之後在於車  
駝戶名下著追已還過銀一萬四千餘兩尚有一  
萬四千餘兩未完朕思車駝戶較商人更為貧苦  
現今大兵既撤營運無多完項自屬艱難且多係  
並無家產之人朕心深為憫惻著將前項未完銀  
一萬四千一百四十四兩九錢俱行豁免又商人  
趙位侯等於觀音保運送十八軍需案內除十二

案李成功腳價應行扣進外其餘數案多係因公  
賠累情節亦有可原且該商從前續辦軍需有節  
省銀二萬餘兩著該部查明即以節省之項抵補  
免其著追欽此

261 乾隆元年六月二十四日內閣奉

旨松江提督員缺著南天祥補授欽此

262 乾隆元年六月二十四日內閣奉

上諭四川松潘鎮屬各者輸誠効力恭順多年朕疊  
沛恩膏俾各休養得所已將口裡口外本年應納  
正賦通行豁免示朕撫恤遠者之意茲聞從前各  
者額賦之外鎮將各衙門有私自派收之項每年  
收谷六族包子寺元壩寒盼七族等寨青稞四百  
餘石以為公務之用又該鎮衙門收西路峨眉七  
布二寨熱霧十二寨紅土坡臘白三寨小麥青稞  
等項又收所屬各寨折草價之青稞及紅花雄溪

雲屯望山等處開墾折租銀兩又漳臘營收羊崗東敗王亞寒盼等寨疊溪營收保黃包喇等寨大姓葫蘆皮袋等寨小麥青稞等項又遇剗挖貝母之年該鎮及鎮標中營平番營等衙門令平番所屬各寨交收貝母似此額外私征甚為番民苦累並宜概予蠲除以甦番困嗣後松潘鎮屬番寨除按年輸納正賦外一切鎮將衙門不得絲毫派徵倘有仍沿陋習暗中索取者經朕訪聞必嚴加治罪著該撫及提督遵朕諭旨嚴行禁革并通行曉諭各番寨地方知之欽此

263 乾隆元年六月二十五日內閣奉

上諭宣化總兵員缺著李質粹補授蔡永文著回正定總兵之任署正定總兵宋愛著回副將之任欽

此

264 乾隆元年六月二十七日奉

上諭外省知縣由正途出身任內無恭罰者按其資俸行取來京以主事補用其有廉明公正之員或因公呈誤典例不符者亦准督撫保題此古三載考績之意所以簡賢能錄功最也但各部主事設有定額一年之中出缺無幾又有應補之人則行取來京之員挨班選授三年內必不能用完而下次行取之期又至日積日多勢將有遲至四五年不能得缺者朕思此等人員服官供職著有成效故特予行取以優待之今令其遞離原任需次選曹在彼既不免守候之苦而外任轉少一請練之縣令殊為可惜所當酌量變通者嗣後行取屆期將合例之人具題後知會督撫照武官保舉註冊註冊之例仍由本任辦事俟年月缺出按俸銓補得缺之後給咨引見再赴新任庶各負不至去官守選轉多壅滯之虞而外吏得以駕輕就熟仍司

九〇

收民之職其如何定例之處吏部詳議具奏特諭  
欽此

265 乾隆元年六月二十八日內閣奉

上諭國家設官所以寧人也京師為輦轂之地五方  
之人雲集輻輳是以於五城分命滿漢御史及兵  
馬司正副指揮吏目等官糾察而稽查之又有步  
軍統領專掌九門巡捕營員查匪類緝盜賊察賭  
博等事犯法者輕則自行懲治重則送部究擬立  
法亦恭詳矣嗣以外城街巷孔多慮藏奸匪各樹  
柵欄以司啟閉因而設巡檢官數十員於在京考  
職候選雜職人員內揀選補用此等之人本係微  
職一庸斯任妄得謂得操地方之權所用衙役率  
皆本地無藉之徒望風應募遂於管轄之內欺詐  
愚民遇事生風多方擾累甚至卑鄙無恥散帖飲  
分苛索銀錢官役烹肥於地方並無查察防範之  
效而司坊各官反得推諉卸咎又安用此冗雜之

員也著將巡檢概行裁革其柵欄仍照舊交與都  
察院五城及步軍統領酌派兵役看守至裁退之  
各巡檢著都察院分別等次交部酌量補用其未  
補者仍歸伊等原班銓選特諭欽此

266 乾隆元年六月二十八日內閣奉

上諭上下兩江及江右鄉村五六月間連值陰雨山  
水驟漲有水淹處所前據各該撫奏報朕已批諭  
速行賑恤安插今據總督趙弘恩將各被水情形  
具摺彙奏朕又批令督率屬員盡心撫恤務使災  
黎浮沾實惠朕思江南江西被水鄉村雜係連陰  
驟漲止屬近山近水之區然被災之家俯仰無資  
甚可憐憫所當加意撫綏毋令少有失所其水勢  
旋即消退之地固可補種雜糧而低窪積水之田  
不能補種秧苗者更宜確加查勘酌免本年額賦  
至房舍量加修葺籽粒應否給助之處俱著悉心  
料理以副朕愛養元元之意欽此

267 乾隆元年六月二十八日內閣奉

上諭王奕鴻着給假六個月回伊本籍俟料理伊父喪葬事畢前往四川欽此

268 乾隆元年六月二十九日奉

旨江南丹徒縣知縣顏紹怡因私鹽案內革職著該督撫出具考語送部引見欽此

269 乾隆元年七月初一日內閣奉

上諭浙江鹽驛道員缺最為緊要聞顧濟美丁憂例應回籍守制鹽驛道員缺著寧紹台道趙佃敷調補所遺寧紹台道員缺該部請旨欽此

270 乾隆元年七月初一日內閣奉

上諭朕前降諭旨將江南淮徐淮揚河營恭將朱永九陞補河南撫標中軍恭將今據高斌奏稱朱永

九在河營年久熟悉河務諸練工程實屬河防得

力之員請以陞銜由河營原任得收臂指之助等

語朱永九著照高斌所請准以陞銜仍由江南淮

徐淮揚河營恭將原任其河南撫標中軍恭將員

缺該部另行揀補請旨欽此

271 乾隆元年七月初二日

上御乾清宮西暖閣

召總理事務王大臣九卿等入見

面諭曰朕受

皇考付託之重踐昨以來兢兢業業無刻不以敬

天勤民為念宵衣旰食日理萬幾務期海宇又安庶政

咸理仰副我

皇考付託得人之聖心以綿

宗社無疆之慶朕思宗社大計莫如建儲一事自古帝

王即位首先舉行所以重國本而定鴻基也朕即

位已逾半載而未經降旨者並非不稽古典而視

此事為緩圖良以後世人心不古往往有因建儲太早以致別生事端者或奉人恃貴驕矜漸至失德或左右逢迎諂媚誘引作非甚且有奸宄之後窺伺讒搆以搖動之是以

皇祖當日於建儲一事大費苦心及授神器於我

皇考時一言而定萬世之業我

皇考御極之元年

聖心即默注朕躬不肯宣布中外而傳集諸王大臣

九卿特加訓諭親書密旨收藏於乾清宮正大

光明匾額之後此我

皇考監古宜今寶愛玉成之妙用也今朕當春秋方盛

之時皇子年齒又尚冲幼揆之事勢雖若可緩而

國本攸係自以豫定為宜再四思維惟有循用

皇考成式親書密旨照前收藏在我

皇考神明化裁創舉於一時而朕繼志述事踵行於今

日此乃酌權劑經之道非謂後世子孫皆當奉此以為法則也將來皇子年齒漸長日就月將識見

擴充志氣堅定萬無驕貴引誘之習朕仍應布告天下明正儲貳之位若夫以建儲為嫌忌而不肯舉行者此庸主卑陋之見朕所深鄙者也今傳集總理事務王大臣九卿等面降此旨非謂諸臣不知朕心必俟朕之諄諄告諭也誠恐天下讀書泥古者以朕不早建儲為疑用是特為宣曉如有拘牽舊制復行奏請者著該衙門將奏章發還今日朕親書密旨著總理事務王大臣親詣宮中總管太監敬謹收藏於乾清宮正大光明匾額之後欽此

272 乾隆元年七月初二日奉

上諭督撫為封疆重臣一省數千里之間吏治民生寄焉所以激濁揚清風示羣吏者莫要於糾劾貪畏剝深苟且昏惰之守令所以移風善俗綏靖良民者莫要於訪拿地棍衙蠹生事不才之生靈庶

是二者真知確見而盡得其實其道甚難何則督撫所以寄耳目者不過二三枚契之監司或朋好族姻及多年相信之家僕凡人公正無欲忠信不欺而才智又能不為人所欺者千百中無十一倘寄耳目者非其人則將以除奸而轉為售奸之藪將以別獎而適開叢弊之門其顛倒枉直擾害閭閻有不可勝言者蓋守令之巧詐者多工於掩飾周旋而安靜悃愾清白自守之吏率不能迎合監司彌縫督撫之左右苟寄耳目者以私意為愛憎以毀譽為公論漫聽浮言捏構條款督撫信為誠然或且惟恐不然則彈章朝上衆口夕譁縱復自悔孰能認過深文苛法務實其事以自直朕所前聞往往若此至於劣生棍黨訪聞不實片紙發行即時扭解縱能虛心體察昭雪釋除而其人已身殘家破矣又况箠楚之下何求不得証證屈服者沉寃豈能更白乎夫政貴有經事求得實督撫果能至忠體國實意為民於所屬守令平日訟獄俸

科取吏臨民之實通一留心而察之其人之明暗公私仁暴十可八九得然後驗以民情之嚮背酌以衆論之參差則舉劾自無大謬矣至於劣生棍黨剝蝕地方良懦編氓莫不痛心切齒特無力告恐轉為所害耳如果諄切曉示凡被害之家許據實上控不以越訴格而不行立即親提證據庶無虛重懲不貸其誣告者罪亦如之則法惡必行民知可信將宿惡寒心朋奸斂跡既無用以蜚語流言循訪拿之故事而懷怨挾仇欲相傾陷以快其私者更何以逞焉繼自今各直省督撫宜爭自砥礪布實德於斯民以無負朕委心倚任俾專制一方之至意也特諭

273 乾隆元年七月初二日內閣奉

上諭湖南驛鹽道卽湖南湖北襄陽府知府宋華金俱著來京照例以京職補用湖南驛鹽道負缺著武昌府知府馬靈阿補授武昌府負缺緊要著該督

於通省事簡知府中揀選一員題補欽此

274 乾隆元年七月初三日內閣奉

上諭湖南沅州接壤黔省黔民被苗擾害就食於沅

州者甚多且該州上年收成稍歉米價昂貴除已

降旨將雍正十三年應徵錢糧及耗羨全行蠲免

外今再沛恩膏將乾隆元年應徵額賦及耗羨銀

兩全行豁免著戶部即速行文該督撫等知之欽

此

275 總理事務王大臣 字寄 貴州總督張

乾隆元年七月初三日奉

上諭貴州苗疆已經張廣泗料理就緒但黔省苗民

雜處如仲家青苗種類甚多皆係久入版圖沾恩

向化者近聞該省訛言暗相傳說云俟古州事竣

之後大兵回黔之日欲將仲家等苗盡行剿捕以

致苗民疑懼不安此皆奸民乘機嚇詐之故地方

官雖出示曉諭終懷疑懼等語此朕得之風聞者

如果有其事張廣泗可即傳朕旨出示曉諭以安

守分熟苗之心若傳聞未確立即據實回奏欽此

遵

旨寄信前來

276 乾隆元年七月初三日內閣奉

上諭據直隸河道總督劉勳奏稱署東安縣主簿効

力州同張人鑑緣事革職於限內完職免罪今在

河工具呈情願効力查該員年力富強通曉河務

實係工員內出眾之才仰懇天恩俯准留工俟秋

汛後果著勞績再懇天恩復還州同職銜等語張

人鑑著照劉勳所請留工効力俟今年秋汛平穩

該員果著勞績給咨赴部引見欽此



大學士張 字寄

江南總督趙 大 學 士 稿

乾隆元年

七月初四日奉

上諭從來經理鹽政以緝私為要蓋緝私所以懲奸懲奸所以安良故必使梟徒斂跡而民間毫無擾

累方不負國家立法之本意也江南鎮江瓜州一帶為淮浙引鹽毗連之地惟恐淮鹽過江故巡查最為緊要近聞督撫提鎮等俱疊檄該地方文武官弁督率兵役各路緝捕而江浙督提等又專差武職帶兵會同文員查拿此在懲治巨梟之道固應如是但兵役四出豈能保其盡皆守法奉公倘約束稍有不嚴稽查稍有未到或借端生釁或恐嚇鄉愚或賄縱巨奸而株連良善或指使詐騙而貽害富民大有關於地方民生不可不防微杜漸也爾可密寄信與總督趙弘恩大學士嵇曾筠令其留心體察切加約束務使官弁兵役實力奉行不得生事滋擾並飭巡查各員隨地隨時宣朕惠

養萬民之意俾惡頑改惡良善安居並令趙弘恩等將朕此旨密諭蘇州巡撫及該管提鎮等一體遵行欽此遵

旨寄信前來

278 乾隆元年七月初四日内閣奉

上諭兩淮鹽務內有從前江廣口岸厘費收受人員數目及甲乙兩綱上下兩江各官收受規禮銀兩歷年既久人多物故前據督臣趙弘恩等題請免追比經戶部議令造冊送部核奪朕思此項陋規餽送皆在昔年未定養廉之前今事隔多年授受之人又多陞遷事故不但銀兩難追即造冊亦無確據不足憑信徒滋地方之紛擾著加恩悉行寬免並免其造冊送部該部可即行文兩淮鹽政衙門知之欽此

279 乾隆元年七月初五日內閣奉

上諭地方偶有水旱之事凡查勘戶口造具冊籍頭緒繁多勢不得不由胥役里保之手其所需飯食舟車紙張等項費用朕聞竟有派累民間並且有取給于被災之戶口者若遇明察之有司尚知稽查禁約至昏惰庸懦者則置若罔聞益滋閭閻之擾矣嗣後直省州縣倘遇查勘水旱等事凡一切飯食盤費及造冊紙張各費俱酌量動用存公銀兩毋許絲毫派累地方若州縣官不能詳察嚴禁以致胥役里保仍蹈故轍舞弊蠹民者著該督撫立即題本從重議處該部即通行曉諭知之欽此

280 乾隆元年七月初五日奉

旨分辦糧運知州范清曠俟到京之時該部帶領引

見欽此

黃清宇

281 乾隆元年七月初七日內閣奉

上諭據貴州總督張廣泗奏稱鎮遠思州黃平施秉餘慶青溪玉屏等府州縣於本年四月後或被水災或遭水雹雖山溪水漲涸不待時水雹所過僅一二里而此一帶之田畝民房多遭傷損已委負星赴各處查勘動撥銀兩即行散賑竭力撫綏等語黔省地方上年被逆苗之擾今鎮遠思州一帶又有被水淹沒之處朕心甚為軫念著該督張廣泗加意賑恤嚴飭各該地方官實力撫綏務使被災民人不致失所至黔省應徵錢糧上年已蒙

皇考聖恩將通省錢糧蠲免一年其被擾之處蠲免三

年今該省又有被水處所而通省民人辦運軍需

等項未免生計維艱著再加恩將乾隆元年分通

省應徵錢糧概予蠲免該督張廣泗即通行曉諭

咸使聞知再黔省自上年軍興以來先後已撥解

帑金二百萬兩雖現今軍務漸竣而善後事宜及

目前賑恤尚在需費即使已敷用而該省藩庫亦  
應富餘儲蓄以備緩急之需著該部再撥銀六十  
萬兩解送黔省毋得遲緩欽此

282 乾隆元年七月初七日內閣奉

上諭孫嘉淦出差江南其吏部侍郎事務著程元章  
暫行署理欽此

283 乾隆元年七月初七日奉

上諭國家三載賓興擇經明學優之士登之賢書以  
儲任用典綦重也而京師首善之區南北貢燕歸  
轅觀光更當樹厥風聲以立四方之準從前北闕  
滋弊相習成風及我

皇考御極釐剔廓清每當大比之年於司衡分校各官  
慎重遴選杜絕弊端訓飭士子提撕防範使皆循  
守規矩無敢生事以故十餘年來科場肅清士氣  
安靜實為向時所未有但恐積久法弛人情生玩

雖色直賄賂未敢即行而或採虛聲以收人望假  
援引以市私恩以為薦拔之人既係寒士又有文  
名推挽游揚並非受賂者可比不知糊名易書乃  
朝廷取士之律令設防維不謹暗通關節則考官  
得以營私舉子得以倖進不畏刑法不安義命豈  
惟獲罪于君抑亦獲罪於

天矣亦思科舉大典乃為國以樹人始進不取人品早  
已不端國家亦安所用之乎考官奉命掄才不能  
登選公明乃罔上舞弊以奸國法無論自困噬臍  
即令彼清夜捫心又何以自容乎朕臨御方始特  
開恩科深期士風醇茂人才日興亦望爾臣工恪  
恭厥職各知自愛以襄盛典自今以後凡與校文  
之任者務各痛洗舊習杜絕請託之私失慎失公  
無負朕之簡用倘有絲毫未改不能謝絕親友情  
面鈎通關節者國法具在朕不能為若輩寬也至  
于士子讀書稽古將以應嘉賓之選尤宜正品端  
醇居心恬澹豈可奔競鑽營妄生憤懣與不肯無

類之徒相等耶倘有場前鑽刺預報元魁及榜後  
生事捏造歌謠為人心風俗之害者著步軍統領  
衙門及五城御史密訪嚴拿按法治罪以昭高賢  
簡不肖之典特諭

284

乾隆元年七月初九日總理事務王大臣奉

上諭貴州古州等處苗衆從古以來未歸王化我

皇考世宗憲皇帝如天之仁特允督臣所請不忍棄置  
漸懷之外遂因伊等俯首傾心輸誠歸順之切收  
入版圖使得沾濡德澤共享昇平之福原非利其  
土地氏人為開拓疆圉之舉也即如從前所定糧  
額本屬至輕至微不過略表其向化輸租之意俟  
數年之後原欲弁此加恩寬免此

皇考撫恤苗民之聖心向朕與諸王大臣曾經再三宣  
諭者詎苗衆生性反覆靡常於上年三月間騷擾  
內地并勾引熟苗攻掠城池燒燬部落百姓被其  
荼毒兇惡頑梗法所必誅是以遣發大兵分路進

討剿撫兼施其中肆逆抗拒者或就誅夷或被擒  
獲而脅從附和之苗寨又各擒縛為首之犯相率  
投赴軍前呈繳器械悔罪歸誠軍務漸次告竣朕  
思此等逆苗孽由自作因王法所當重懲者而在

皇考與朕視之則普天率土皆吾赤子此特赤子中  
不肖者耳今身罹刑辟家口分離朕心仍覺不忍  
且現在就撫苗衆多屬脅從附和其中尚有並未  
從逆始終守法之各寨均當加意撫恤俾得生養  
安全因思苗民人納糧一事正額雖少而徵之於  
官收之于吏其間經手重疊恐煩雜之費或轉多  
于正額亦未可知惟有將正賦悉行豁免使苗民  
與胥吏終歲無交涉之處則彼此各安本分雖欲  
生事滋擾其累無由況蠲免新疆苗賦原屬

皇考聖意朕此時當敬謹遵奉見之施行者也用是特  
頒諭旨著提督張廣泗出示通行曉諭將古州等  
處新設錢糧盡行豁免永不徵收伊等既無官吏  
需索之擾并無輸糧納稅之煩畊田鑿井俯仰優

游承為天朝良順之民以樂其妻孥長其子孫苗  
衆亦具有人心豈有舍衽席而蹈火之理至于建  
五營汛分布官兵乃國家定制原以誥奸禁暴安  
戢善良各省內地且然况苗疆險要防範尤不可  
不嚴且設兵之意所以禁約漢奸播弄搆孽又以  
查察熟苗私入勾引朋比為奸非特以新附之苗  
為不可信而以重兵彈壓之也其故兵事宜仍著  
提督張廣四遵照前旨悉心妥議辦理至駐守弁  
兵均當謹守法度不得借端滋事如有絲毫擾累  
該管官即行詳報題參徑重治罪若或隱匿不報  
經朕訪聞定將該管文武各官一併重處苗民風  
俗與內地百姓迥別嗣後苗衆一切自相爭訟之  
事俱照苗例完結不必絕以官法至有與兵民及  
熟苗閥涉之案件隸文官者仍聽文員辦理隸武  
官者仍聽武弁辦理必秉公酌理毋得生事擾累  
貴州提督張廣泗可一并曉諭知之欽此

285 乾隆元年七月初九日奉

上諭直省秋審內有自康熙五十二年<sup>至</sup>雍正三年  
以前皆係緩決者此等案犯遇赦不准援免論法  
本無可寬而已經擬以緩決閱有年所不復再擬  
情實徒使長繫因國痠斃獄底于情亦屬可憫此  
次秋審著九卿科道等將康熙五十二年以後至  
雍正三年以前秋審各犯逐一詳加查核如有屢  
經情實未勾今仍擬情實者無庸開入外其積  
年俱擬緩決之犯悉心簡閱將伊等情罪應否減  
等之處酌議請旨欽此

286 乾隆元年七月初十日奉

上諭積貯年雜之法原以便民乃聞各省州縣于倉  
穀出入竟有派累百姓者當出糶之時則派單令  
其納銀領穀若干及買補之時則派單令其納穀  
領銀若干納銀則收書重取其贏餘納穀則倉胥

大肆其勒抑甚至以零爛之穀充為乾潔小民畏  
勢不敢不領惟有隱忍結累而已更有山多田少  
之地產穀無多而該地方官不能向他處採買但  
按田註冊籍核算發價派令百姓將田畝歲收之  
穀交倉絕不為民間計及蓋歲至有十餘畝之田  
而亦責其承買穀石者在附郭居民去倉廩不遠  
尚可就近轉輸至於遠鄉僻壤離城或百里或七  
八十里之遙亦一概令其領銀納穀小民肩挑背  
負越嶺登山窮日之力始至交納之所而奸胥蠹  
吏又復任意而難及平糶之日而寫遠鄉即更不  
能均霑實惠是徒有轉運之苦而不獲蒙積貯之  
益夫良法美意行之不善流弊種種其作何變通  
之法使閭閻實受糶糴之益而無有擾累各該督  
撫大臣當悉心籌畫令有司實力奉行以副朕愛  
養斯民之意特諭

287 乾隆元年七月十一日總理事務王大臣奉

上諭章格現在患病著辭任回京調理古北口提督  
員缺著兵部左侍郎德沛補授兵部左侍郎員缺  
著吏部侍郎普泰調補不必兼管吏部事務欽此

288 乾隆元年七月十六日總理事務王大臣奉

一諭從前部議給發僧道度牒一事每歲發給數目  
作何題奏未經議及恐有司視為具文無從稽考  
著各省將給過實數及事故開除者每年詳晰造  
冊報部該部於歲底彙題今年初次奉行其題奏  
之處著於乾隆元年為始至喇嘛給發度牒亦照  
此例行欽此

289 乾隆元年七月十七日總理事務王大臣奉

上諭章格病故著賞銀五百兩為伊歸櫬之用欽此

290 乾隆元年七月十八日內閣奉

上諭據大學士嵇曾筠奏稱浙江海防兵備道員缺責任甚重現在本省屬員中求一可勝此任者實不得其人查有署江南淮揚道未定元才幹優長操守廉潔向在高堰工程著有勞績若以之調補海防兵備道於塘工似有裨益至於淮揚道員缺雖亦緊要但查南河各屬內揀選一可用者尚不乏員等語未定元著照大學士嵇曾筠所請補授浙江海防兵備道其淮揚道員缺著高斌會同趙弘恩於屬員內揀選一員保題請旨欽此

291 乾隆元年七月二十一日內閣奉

上諭聞各直省老民老婦從前經旌賞者遇有恩詔不得再行給賞即如豫省新鄉縣老婦劉氏今年一百十五歲矣因雍正十二年間年登一百一十三歲時曾經題准建坊賞賜此番恩詔不得入冊

朕思劉氏躋此罕有之貞壽自應一體霑恩以昭曠典著該地方官仍造入恩賞冊內使伊得被光榮各直省老民老婦凡年登百歲從前已蒙旌表者俱照劉氏之例仍加賞賜以示朕優待壽氏之意並將此永著為令欽此

292 乾隆元年七月二十二日總理事務王大臣奉

上諭陝甘兩省錢糧耗羨向係加二徵收前已降旨令該督撫等於乾隆元年為始減去五分朕軫恤民力之意現在雍正十二年以前錢糧俱已蠲免其雍正十三年分該省尚有未完民欠恐官吏仍循舊例小民一時未能分晰以致混冒收納亦未可定著將雍正十三年分未完錢糧應徵之耗羨一併減去五分該督撫即通行出示曉諭咸使聞知欽此

293 乾隆元年七月二十四日內閣奉

上諭據廣西巡撫金鉞奏稱布政司張鉞年逾六旬近歲舊疾忽發血氣損耗半載以來臣代伊先事預籌酌委辦理幸無業勝但藩司要任亟需得人查本省司道各有職掌難以兼攝伏乞速簡賢員星馳赴任准令張鉞回籍調治俟病痊之日進京引見等語張鉞既係患病准其回籍調理俟病痊赴部引見廣西布政司員缺著廣東肇羅道楊錫俟前往署理不必來京請訓其肇羅道印務著該督撫委員署理欽此

294 乾隆元年七月二十四日總理事務王大臣奉

上諭固原提督印務前已降旨令栢之蕃前往署理今栢之蕃到京看米不勝固原緊要之任著查郎阿劉于義於陝甘現任總兵內揀選一員令署固原提督印務其所遺總兵印務即令栢之蕃署理

仍留心試看欽此

295 乾隆元年七月二十五日奉

旨額駙策令此摺著抄寄查郎阿劉於義常齊樊廷俾伊等知悉以便防範預備欽此

此道清字解漢

296 乾隆元年七月二十六日內閣奉

上諭鄂善著實授吏部左侍郎欽此

297 乾隆元年七月二十六日內閣奉

上諭通濟人平常不必在八旗志書館行走欽此

298 乾隆元年七月二十六日內閣奉

上諭向來各省直省縣丞主簿典史巡檢等微員革職解任或告病身故無力回籍者令該督撫設法料理令得早還故土此國家軫恤下察之至意也在



督撫辦理此事自應妥議指助俾窮員家口得沾  
恩澤乃聞各省督撫吝惜已費而於通省各微員  
俸俸  
養廉內扣除以為資取之用夫微員俸少祿薄豈  
可再行扣減大於情理未協嗣後微員離任身故  
寔係窮苦不能回籍者著該督撫於存公項內酌  
量賞給還鄉路費每年造冊報銷不得派及現任  
之微員將此通行各省一體遵照辦理欽此

299 乾隆元年七月二十六日奉

上諭據署陝督劉於義奏稱原任西寧府知府黃澍  
前因失察屬員虧空部議革職但為人老成忠厚  
在甘年久熟悉邊地情形可否留甘題補等語著  
照劉於義所請黃澍准其留甘遇有相當缺出該  
督酌量題補欽此

300 乾隆元年七月二十七日奉

旨鍾保著調補湖北巡撫高其倬著調補湖南巡撫  
欽此

301 乾隆元年七月二十八日內閣奉

上諭據直隸總督李衛奏稱直隸地方現今公務繁  
多大差絡繹又南北運河工程緊要在在需員委  
用臣留心既久一時未能得人僅記有原任雲南  
雲州知州之吳元整丁憂回浙曾捐資助修海塘  
部議以應陞之缺即用又有捐員外郎即用之劉  
源長雍正十年

世宗皇帝命往浙江交臣於工程委用効力今所辦工  
程俱已完竣此二員者年力正富才堪驅策俱係  
臣所深知可否飭部調取來直委辦大差或於河  
工委用將來果能實心効力遇有相當缺出酌量  
題補送部引見等語吳元整劉源長俱照李衛所

請著吏部行文調取文與李衛酌量委用試看如  
果著有勞績該督另行具奏請旨欽此

302

乾隆元年七月二十九日摠理事務王大臣及

九卿等奉

上諭昨王士俊密奏一摺朕洞見其巧詐居心背理  
害道沽直言之名以自遂其私披覽之下不勝痛  
恨比即嚴批申飭並將原摺發與摠理事務王大  
臣及是日在乾清門奏事之九卿等公同閱視朕  
意以為王大臣九卿深明大義次日必有恭劾王  
士俊者乃止據口奏其陳奏之非而未劾其巧偽  
之罪今日御史舒赫德封章特恭備陳王士俊喪  
心病狂身發悖論不宜復加寬宥仍畀封疆  
朕用是召入王大臣九卿等面諭之據王士俊第  
一條云近日條陳唯在翻駁前案甚有對衆揚言  
只須將

世宗時事翻案即係好條陳之說傳之天下甚駭聽聞

等語夫指斥臣為翻案是即謂朕為翻案矣此大

悖天理之言也從來為政之道損益隨時寬猛互

濟記曰張而不弛文武勿為弛而不為張文武勿為

一張一弛文武之道文武豈有意于張弛哉亦曰

推而行之與氏宜之耳昔堯因四岳之言而用鯀

鯀治水九載績用勿成至舜而後殛鯀於羽山當

日用鯀者先也誅鯀者舜也豈得謂舜翻堯之案

乎哉

皇考即位之初承

聖祖仁皇帝深仁厚澤垂六十餘年之久休養生息物

熾而豐殷後遂有法網漸弛風俗漸玩之勢

皇考加意振飭使綱紀整肅弊革風清凡此因勢利導

之方正所以成繼志述事之善也又豈得謂翻

皇祖之案乎

皇考初政駿厲至雍正九年十年以來人心已知法度

吏治已漸澄清未始不敦崇寬簡相安樂易見臣

等

或有奉行不善失于苛刻者多救其流弊寬免體恤之恩時時下逮是即十三載之中而劑酌盈虛調造競錄前後已非一轍矣至朕繼承不緒

泣奉

遺詔諭令向後政務應從寬者悉從寬辦理朕祇遵

明訓衣德紹開凡用人行政兢兢以

皇考誠民育物之心為心以

皇考執兩用中之政為政惟恐膠固成見有違時措咸

宜之理弗勝負荷之重臨御以來與廷臣敬慎斟酌

酌庶曰

陟降屢止克綏予子盖

皇祖

皇考與朕心原無絲毫間別安如果內外大小臣工俱

能仰體使政治清平民生業樂可以垂之永久而

無弊又何必更有因時制宜之舉無如法久自必

弊生奉行每多過當不得不因時重時輕之勢而

為之維持調劑以歸于正直蕩平之道此至當不

易之理乃王士俊嘗為翻案駁前案是何言是誠何心耶夫朕躬有所聞失朕惟患諸臣不竭慮盡心直言規切至于事閱

皇考而妄指

前敵有意更張實朕所怵惕靡寧而不忍聞者也又據

王士俊第二條稱大學士不宜兼部之說尤見其

自相矛盾挾私懷詐之情形纖毫畢露者矣大學

士之兼部正

皇考之成憲王士俊欲朕改之是又尊朕以翻案也彼

意不過為大學士鄂爾泰而發以冀惑朕之聽夫

朕豈為僉壬所惑之主哉多見其不知量矣即如

王士俊柯南墾田一事市興利之美名而行利天

之虐政中外共憤人人切齒設使此案敗露於

王考之時豈能稍為寬宥乎彼回京時畏首畏尾一言

不發今見朕之後加擢用欲掩飾巨前之罪且中

傷與已不合之人撰為邪說以覆護之以為前案

不宜翻啟此則其設心之機詐有不可勝誦者至

于第三條所云各部辦事預存一私意計較某省  
猶撫正在褒嘉其事宜准其省督撫方得不是其  
事宜駁不論事理之當否而專以迎合為心及第  
四條所云廷臣保舉人員率多瞻徇情面甚至有  
巧索酬謝之事等語朕思部件題馭懷挾私心或  
所不免保舉徇情濫緣賄屬亦難保其必無即以  
近日廷臣論之如勵宗萬之引薦不但徇情受  
其保舉河員開竟有賄賂之事又傅蔭為人奏求  
恩廕一事亦屬瞻顧情面爾廷臣受朕深恩豈因王  
士俊之妄言而遂不取一人乎惟當清  
夜捫心此等陋習有則痛自肅除無則益加勉勉  
勿為余士王士俊之輩之所訛笑以全朕簡任委  
用之顏面可也古稱為君難即此用人一節已千  
難萬難矣但亦自知其難耳旁無一人可語者而  
王士俊愈邪小人又安足與語哉王士俊為人巧  
詐衆所共知朕格外保全彙錄用原念其尚有  
才幹或可造就姑令署理川撫陞辭之日朕何等

諄諄訓諭乃巧詐之習牢不可破外飾梗直以便  
已私敢將恃理之言妄行陳奏關係重大不可姑  
恕將舒赫德恭奏原摺交與王大臣九卿等會議  
具奏欽此

303 乾隆元年八月初一日內閣奉

上諭前因湖南辦理軍需并賑恤被難黔民著糧道  
李珣前往駐劄沅州署理辰遠永靖道事其糧道印  
務著辰遠永靖道王葉滋暫行署理今黔省軍務漸  
竣李珣王葉滋自應各歸本任但沅州界連黔省  
辰沅靖道一缺最關緊要必得幹負彈壓方有裨  
益聞李珣總理軍需以來諸事妥協李珣著加按  
察使銜調補辰沅靖道其糧道員缺即著王葉滋  
調補實授欽此

304 乾隆元年八月初三日內閣奉

上諭廣西巡撫金鉞著來京陛見其巡撫印務著刑  
部侍郎楊超曾前往署理欽此

305 乾隆元年八月初三日內閣奉

上諭據陳時夏奏稱原署戶部員外郎革職秦嶠在營田効力已滿三年捐修工程俱已完竣查該員諸恙河工營田事務可否准其開復留與直督李衛河臣劉勳於工程緊要之處差委試用等語秦嶠著送部引見候朕再降諭旨欽此

306 乾隆元年八月初六日內閣奉

上諭福敏邵基入閣翰林院事務著大學士張廷玉暫行管理欽此

307 乾隆元年八月初七日內閣奉

上諭西陲用兵以來軍需浩繁有司承辦匪易其中實有浮冒情弊者自應著法賠補若事屬辦公情有可原者則當開恩寬免以示體恤朕聞甘省地方前因岳鍾琪檄令預備喂養馬駝草束有司不得不遵照辦理後因買備多餘責令變價還項

而露積日久草已霉爛隨經岳鍾琪有請照燒柴變價之奏又經許容有十分豁免三分之一請朕恩草束豈能久留事歷多年必至腐朽州縣實多賠累著著總督劉於義悉心確查除從前已經完補外其現在著追者即全行豁免又聞巴爾庫爾駐兵時岳鍾琪檄令臨鞏甘涼等府買驢三萬頭以抵羊隻之用後因驢頭不能遠行將各州縣解過驢一萬四千餘頭止收六千餘頭其餘託言瘦小退回變價所有沿途餵養草束俱不准開銷今價值尚未清結州縣實屬賠累此項亦著劉於義確查將應行豁免者全行寬免俾州縣等同受國恩益得盡心於職守以昭朕優恤甘省有司之至意欽此

308 乾隆元年八月初八日內閣奉

上諭原任廣東按察使方願瑛著調來引見欽此

309 乾隆元年八月初八日內閣奉

上諭任土作貢按則科徵賦稅之重輕惟視地畝之肥瘠朕聞江南崑山新陽二縣有沿江濱湖地畝雖不類於板荒坍沒而蓋葦蕪蕪不堪樹藝或地處低窪十載九荒乃原編科則時分晰未清竟有以以下產而供上賦者以致小民輸納難終歸通欠曾經前任撫臣委員察勘未會上聞著巡撫顏琮確查詳核將如何釐正科則裁減浮糧以紓民困副朕愛養黎民之意悉心妥議具奏欽此

310 乾隆元年八月初八日內閣奉

上諭朕愛養元元凡內地百姓與海外番民皆一視同仁輕徭薄賦使之各得其所聞福建臺灣丁銀一項每丁徵銀四錢七分再加火耗則至五錢有零矣查內地每丁徵銀一錢至二錢三錢不等而臺灣則加倍有餘民間未免竭慶著將臺灣四縣

丁銀悉照內地之例酌中減則每丁徵銀二錢以紓民力從乾隆元年為始永著為例該督撫可速行曉諭實力奉行若因地隔遠洋官吏等有多索濫徵等弊著該督撫不時訪察嚴拿治罪欽此

311 乾隆元年八月初九日奉

上諭朕前已降旨三年之內不行慶賀禮今八月十三日為朕誕辰禮部循例奏請已降旨停止行禮並令朝臣勿穿蟒衣補服所有外省慶賀本章俱著內閣發還是日朕親詣

雍和宮行禮欽此

312 乾隆元年八月初九日奉

上諭緩急借貸人所持有昨有人奏稱銀向買賣人王慎德勒借銀一事朕以事涉微細本不欲深究將原摺發出詢問傳原曾諭云摺內人証確據爾身為大臣據實回奏則已若非實者之事亦不必

引過今晚回奏之辭顯因確有憑據不能推卸而又不肯直行承認據伊云始向王慎德借銀彼云無而中止後王慎德又差人向伊家人說明借給等語夫王慎德既以無銀回覆矣何必又自行借給非抑勒而何明係狡詐無耻甚失大臣誠以事君廉以律已之體著交部嚴察議奏欽此

313 乾隆元年八月初十日內閣奉

上諭昨朕降旨本月十三日親詣

雍和宮行禮今據禮部啓奏儀注照今年元旦之例在

雍和門行禮朕思元旦乃天下臣民公共之大節

只得勉從所請令朕一人誕辰非元旦歲朝可比

是日朕仍詣

梓宮前行禮欽此

314 乾隆元年八月初十日內閣奉

上諭朕御極以來仰體

皇考愛養元元之至意勤求民隱加意撫綏惟恐賦役

不均使閭閻有輸將之苦前訪聞得山東郟城蘭

山等州縣自雍正八年大水淹浸之後水退沙存

冲墜地畝不能樹藝五穀小民納賦甚屬艱難特

降諭旨令巡撫岳濬將此等地方詳悉查勘奏聞

請旨項據岳濬奏稱雍正八年被水之後凡濱河

傍山地畝如歷城等二十八州縣原報冲墜地共

三千二百四十七項零經臣據飭勘墜內有曹州

曹縣曹州沂水四處墜過地九百九十餘項尚有

二千二百五十七項屢飭確查今復遵旨勘明郟城

縣實在冲墜地一百四十七項零蘭山縣冲墜地

三百五項其餘州縣如濟南府屬之歷城章邱淄

川長清長山等縣兗州府屬之滋陽寧陽泗水鄒

縣汶上等縣青州府屬之益都樂安壽光臨朐安

邱博山臨淄等縣萊州府屬之昌邑縣濰縣武定府屬之惠民縣沂州府屬之莒州沂水縣泰安府屬之泰安東平肥城新泰等州縣共計四縣二十八處所有冲墾地共一千三百六十二頃九十八畝零實係積年廢棄人力難施共應免地丁銀五千九百兩零米麥一百五十六石零等語著照舊濟所查實數造冊報部將地丁米麥悉行豁免以除民累其雍正十三年應徵銀米除已經輸納外若有未曾完納者亦著確查豁免務使小民均霽實惠毋使胥吏土棍侵蝕中飽欽此

315 乾隆元年八月十一日內閣奉

上諭朕聞山東章邱縣有缺額糧銀三千九百一十餘兩因從前地方官控報墾荒以致糧無抵補相沿已久事難究追其現在已攤入地畝者雖每畝為數不多而其實則在正供之外民力未免艱難

其未攤入地畝者更屬虛懸無著有司亦難賠墊朕心軫念官民著將已攤入地畝者于乾隆元年查明開除免其徵收其未攤入地畝者從雍正十三年起悉行豁免俾閭閻永無加派之苦而有司亦無賠補之累該撫可董率地方官實力奉行欽此

316 乾隆元年八月十一日內閣奉

上諭各省學政有衡文育材之責關係綦重從前各賞養廉資其用度俾得堅持操守砥礪廉隅衡鑑公平共襄國家作人之鉅典天下人文繁盛應試衆多者莫如江南而江南學政養廉江蘇二千兩安徽一千五百兩較他省為少以此養贍家口延致幕客未免不敷所當加恩體恤者從今秋為始上下兩江學政養廉各賞銀四十兩使伊等周旋從容益得盡心於職業以副朕任官課士之至意欽此



317 乾隆元年八月十六日內閣奉

上諭原任總兵劉朝貴之子劉名譽著兵部隨便帶領引見欽此

318 乾隆元年八月十六日總理事務王大臣奉

上諭後食為事君之心而重祿乃勸臣之道從前在

京文負俸入未足供其日用時原

皇考聖懷是以雍正三年

特旨增添漢官俸米而各部堂官又

加恩給與復俸其餘大小各員原欲次第加恩俾得均

沾渥澤今朕仰體

皇考嘉惠臣工至意彷彿雙俸之例將在京大小文員

俸銀加一倍賞給令其用度從容益得專心於官

守所給恩俸著自乾隆二年春季為始再從前賞

給各部堂官雙俸時欽奉

皇考諭旨遇有罰俸事件止罰正俸其恩俸仍行支給

今各員所加之俸亦照此例行欽此

319 乾隆元年八月十七日總理事務王大臣奉

上諭陝甘之人長於武事其人材之壯健弓馬之嫻  
熟較他省為優向來武闈鄉試中額每省各四十  
名應試之人每以限於額數不能多取其如何量  
行廣額取中之處著該部議奏欽此

320 乾隆元年八月十八日內閣奉

上諭原任侍郎胡煦年逾八旬服官年久著賞給原

銜回籍其繼子胡孟基復還舉人幼子胡季堂賞

給廩生入監讀書以示狀卷念舊臣之至意欽此

321 乾隆元年八月十八日內閣奉

上諭本年四月間河南永城縣潘家道口地方黃河

水發堤岸潰決民間田禾廬舍被水淹浸朕心軫

念切諭巡撫布政使加意賑恤務令貧民得所並

會同江南總督提河患心妥議俾疏通下流以永

除永城之水患其永邑被水應免之錢糧著巡撫

布政使確查具奏今據徐士林摺奏永城縣被淹

田地共一千一百一十三頃六十六畝春麥秋禾俱未耕獲朕思一歲之中春麥既未收成秋禾又未補種小民生計艱難國賦何從輸納目今正值開徵之時著將應徵之丁地漕糧悉行蠲免該撫等即出示通行曉諭並督率有司實力奉行毋使奸胥土棍借端舞弊欽此

322 乾隆元年八月二十日總理事務王大臣奏

上諭朕聞揚州府儀徵縣江口至江都甘泉二縣所轄三汊河一道共計六十餘里為通江達淮要津向例三年大挑一次撈淺一次共需銀一萬六百兩皆商三民七分派捐輸經管里甲不無苛索滋擾而承修各官又復層層侵扣以致撈淺挑濬有名無實無益于工程有累於百姓嗣後著將商民派捐之項永行停止亦不必拘定三年之限如遇應濬之年著該鹽政委員確估實力挑濬所需工費即於運庫一半充公項下動支毋得虛冒侵肥草率塞責欽此

323 乾隆元年八月二十四日奉

旨是依議奏內議稱奉移

梓宮發引時朕隨行出震宇尊親牌樓門跪於街南恭候

梓宮過後朕乘輿出西直門由別路前往恭候至於梓宮到

泰陵三聖橋更換小架時朕先至隆恩門內恭候到陵後安奉

梓宮之次日祭畢即行回京等語

雍和宮奉移

梓宮之日朕不忍於城內乘輿前往應步行送

梓宮出城後再乘輿由別路前往以便跪接至三聖橋

更換小架時朕仍在旁跪候不必先至隆恩門

梓宮到陵之次日祭畢即回朕心實為不安朕欲在彼

居住數日以申哀戀之忱著總理事務王大臣議

奏十月初九日行奉移

梓宮禮告祭畢朕即在

雍和宮居住恭候

梓宮發引欽此

此一道兼清字

324 乾隆元年八月二十四日內閣奉

上諭朕聞浙省屯糧向來每石徵銀一兩因軍丁等輸納維艱於康熙年間特恩減免改徵銀五錢五厘計算每畝徵銀八分有零彼時惟嚴州一兩遺漏開報未經查明減免每畝仍徵銀二錢一分五厘查杭州前右二衛屯田與嚴州地方相距咫尺每畝止徵銀一錢二分八厘零而嚴州地土比通省較薄賦額則比通省較重實屬偏枯所當酌量變通使一體均霑恩澤者為此特頒諭旨將嚴州屯糧循照杭州前右二衛科則徵收以紓軍力其應豁減銀兩若干著大學士嵇曾筠確查報部永著為例欽此

325 乾隆元年八月二十四日奉

上諭浙江濱海地皆斥鹵向來鹽價甚賤居民稱便十餘年來鹽價增長近則加至二三倍不啻夫以

小民日用必須之物而昂貴若此朕心深以為憂即中外之人亦無不知而浙鹽貴之為累者朕屢次切諭大學士嵇曾筠令其悉心經理乃數月以來雖據奏報鹽價漸平然較之十數年前仍屬昂貴朕再四圖維並留心諮訪鹽價之貴固在於場鹽少產也由於商本艱難惟有使商人鹽斤充裕則鹽價自然平減今酌定增斤改引之法將杭嘉紹三所引鹽循照西淮舊額每引加增鹽五十斤連包索共重三百三十五斤至松江一所原屬濱海產鹽之區向因額設季引九萬餘道分別上下三則徵收正課公費銀五萬四千餘兩遂使近場州縣多有鹽貴之苦今循照沿海溫台等處之例改行票引九萬餘道每引給鹽四百斤令商人設店住賣如此增斤改引一為變通則商本寬裕轉輸便易商人不受減價之累百姓多受減價之益大學士嵇曾筠再為多方調劑加意體恤庶可復還十數年前之原價以便民用著該部行文大學士嵇曾筠遵照諭旨辦理特諭

乾隆元年八月二十四日九卿奉

上諭今日爾等因加俸一事具摺奏謝朕特召爾等

面諭國家分職授祿務從優渥俾其日用充裕固

屬體恤臣工之意而為人臣者惟當精白自矢恪

共職守不可徒為身家之計孔子曰事君敬其事

而後其食是即祿廩所頒分所應得者尚不暇計

及况非分之獲有闕名節者乎昔哉

皇祖臨御日久天覆海涵臣工賢否無不洞悉晚年多

所優容大臣中或有徇情納賄之弊豈能逃

皇祖之聖鑒但不欲深究以保全之而見輕於

君上終身不復信用者亦不知凡幾矣我

皇考恐風氣之日靡念紀綱之宜飭御極以來力為整

刷弊絕風清間有一二營私之輩亦逾非從前肆

行無忌者可比今朕之身即

皇考之身也朕之政即

皇考之政也朕所用之人即

皇考所用之人也爾等之事朕亦當如

皇考之時各凜操持各勤職業庶幾大法小廉不負朕

委任之意若謂朕務從寬大遂思改易前操復有  
徇情納賄之事朕自度馭下之才遠不逮

皇祖

皇考之兼容併包掩瑕錄過斷難為之容隱即如傅鶴

之賄徇情面代人求廕勵宗萬之保舉河員暗通

賄賂朕一有聞見即為指出俾眾共知蓋無心之

過尚可原情而有營私漸不可長畧露端倪必

為宣示情罪果實定加重懲至於擯棄之後亦斷

不再行錄用爾等清夜自思何苦徇親朋之情面

而損自己之功名圖一時之小利而致終身之擯

棄乎但當常思國法之宜凜幽獨之難欺各自洗

心滌慮交勉於公爾忘私之誼則可以永保一生

之名節而常受朕優恤之恩矣欽此

此一道不必入彙奏

327 乾隆元年八月二十四日內閣奉

上諭朕因八旗兵丁寒苦者多再四思維特命借給官庫銀兩俾伊等營運有資不虞匱乏伊等自應仰體朕心諸允樽節以為久遠之計乃聞領銀到手濫行花費不知愛惜而市肆貿易之人惟利是圖將紬緞衣服等項增長價值以巧取之獨不思兵民商賈原屬一體兵丁用度寬餘則百貨流通商人可獲自然之利是國家之加恩於兵丁未嘗無益於商賈也何得昧其天良背公平之義而為刻薄之舉使窮苦兵丁暗中受其剝削獲利幾何已干為富不仁之戒繼國法不便遽加亦當各自猛省著順天府五城通行曉諭商人並令八旗大臣等教訓兵丁咸使聞知欽此

328 乾隆元年八月二十四日內閣奉

上諭今年伏秋交會之際南方雨多水勢甚大朕深為黃運海塘等處工程繫念昨據江南河道總督高斌摺奏時過白露黃運湖河各處工程在在保

護平穩且毛城舖北岸於六月間有天開引河一道不費人力自然化險為平人民莫不歡忭等語又據大學士嵇曾筠摺奏今年伏秋海塘水勢雖大因先期修整坦水建築土餞得以護衛平安且江海形勢漸向南趨海寧東西兩塘日夕漲沙將來易於施工比較上年情形已不啻避庭之別等語又據河東總河白鍾山摺奏秋汛已過河東兩省南北兩岸一切埽壩工程均屬穩固等語南北河工與浙江海塘關係國計民生最為緊要且當朕即位元年仰荷

神明默佑數慶重大工程俱各循流順軌共慶安瀾朕心不勝感慶理宜虔修祀典以答神貺所有應行禮儀該部察例具奏此三處總理之大臣督率有方在事各員殫心防護俱屬可嘉著分別議叙具奏欽此

329 乾隆元年八月二十六日內閣奉

旨兵部尚書通智看来不勝尚書之任且伊本身現有議處之案著解任候旨其兵部尚書員缺著奉天將軍那蘇圖補授奉天將軍員缺著寧古塔將軍博第調補寧古塔將軍員缺著前鋒統領吉黨阿補授前鋒統領員缺著護軍統領胡林補授欽此

此道重清字

330 大學士鄂 張 字寄雲貴總督尹雲南巡撫張 乾隆元

年八月二十六日奉

上諭前聞雲南地方今春雨澤短少後據尹繼善等奏報漸次得雨以朕看来仍是不足之象迄今兩月有餘未見尹繼善張允隨奏事滇省雨澤露足與否夏田收成如何朕俱未聞知其為繫念似此關係民生切要之事何得視為泛常假若地方收成歉薄必當悉心籌畫速行奏聞早為料理總之皇考時諸臣奏事太密將不應陳奏之事頻頻續奏今

日則將應奏之事必不陳奏似此怠忽將致懈弛

豈朕所望於封疆大吏者爾等可寄信詢問之欽

此遵

旨寄信前來

本月二十七日發

331 乾隆元年九月初一日奉

旨朕所批李蔭樾奏摺二件著抄寄直省督撫閱看並轉諭各該提鎮及文武大吏欽此

332 乾隆元年九月初二日總理事務王大臣奉

旨王大臣援引禮經及皇考所行成例具奏朕謹遵此禮行欽此

333 乾隆元年九月初二日內閣奉

上諭據福建漳州總兵官李蔭樾奏稱繼母顧氏病故例應丁憂回籍惟是到任未久即聞母訃且自幼即離故鄉服官以來清白自矢原籍寧夏並無

一撮寸土撒喪無力家口嗷嗷伏思上年曾奉有地方職任緊要者酌准在任守制之諭旨可否援照臺灣提兵馬驥之例仍由原任俾仰足以宣力國家俯足以養育妻子忠孝之道得以兩全倘格於成例或將巨胞兄子摠李元侯恩賞守備俾得養贍家口臣庶可拮据遠鄉等語自古求忠臣必於孝子之門未有不能盡孝而能盡忠者至於在任守制之事實因其地其事其任難於更換萬不得已或降特旨或從背撫之請偶一權宜行之耳朕意被留之人不知何如之倉皇迫切輾轉靡寧以冀遂其私情者從前諭旨甚明今李蔭樾乃援引此例陳於朕前貪戀爵位而忍忘其親公然自奏而不以為愧朕從未見世間有此等無恥之人且沾沾以家業貧寒為慮懇將伊兄陞為守備為養贍家口之計更屬貪鄙其據守亦可想見朕不知伊兄有何功績而當邀越格之遷除也朕以孝治天下李蔭樾以不孝之事奏請甚屬可惡著交部嚴察議奏欽此

334 乾隆元年九月初二日總理事務王大臣奉  
上諭尚書楊名時病故著賞內庫銀一千兩差內務府官一員同伊弟姪辦理喪事再派散秩大臣一員帶領侍衛十員往奠茶酒欽此

335 乾隆元年九月初三日內閣奉  
上諭蔡勇著實授海壇鎮總兵官福建漳州鎮總兵官負缺著將廣東高州鎮總兵譚行義調補高州總兵負缺著將任懷德補授欽此

336 乾隆元年九月初四日總理事務王大臣奉  
上諭據辦理  
泰陵事務恒親王弘晳內大臣戶部尚書海望奏稱  
世宗憲皇帝梓宮安奉  
泰陵地宮請照

景陵之例安設龍山石其懸入  
地宮之分位並萬年後應留之分位相應請旨等語朕  
敬萬年後應留分位之處奏請

皇太后懿旨奉

皇太后懿旨

世宗憲皇帝梓宮安奉地宮之後以永遠肅靜為是若

將復行開動揆以尊卑之義於心實有未安况有

我朝

昭西陵

孝東陵成憲可遵

泰陵地宮不必預留分位朕伏承

懿旨仰見

皇太后坤德恭謹

聖慮周詳自當恪敬遵奉做照

昭西陵

孝東陵之例另卜萬年吉壤候朕詳酌再降諭旨至

皇考梓宮安奉地宮時著照例安設龍山石其隨入地

宮之

皇妣孝敬憲皇后梓宮應居左稍後

敦肅皇貴妃金棺應居右比

孝敬皇后梓宮稍後欽此

此道惠清字

337 乾隆元年九月初六日奉

旨陝甘標營派出操演之兵所需器械有應製造添

補者前經大學士仍管川陝提督查郎阿等奏請

借給兵丁銀兩備辦於餉銀內分年坐扣朕思陝

甘各標營自西路用兵以來出征者既効力行間

存營者亦差遣繁重今操演各兵所需器械現據

查郎阿將各項收貯之軍器可以撥給者併堪以

修補者俱逐一查出料理其所需修補工價併添

製器械所用銀兩著免其在各兵餉銀內坐扣俟

工完之日據實造冊報部作正開銷欽此

338 乾隆元年九月初七日總理軍務王大臣奉

上諭十月十一日朕親送

皇考梓宮前往

山陵朕躬編素其隨往之王大臣官員等俱素服冠擗

纓緯到

陵後回鑾時各官冠纓纓緯俱服行衣欽此

此道惠清字



339 乾隆元年九月初七日內閣奉

上諭刑部尚書員缺著慶復補授仍兼管吏部事務  
果親王體氣素弱近因病後尤須調理王既總理  
事務又管理藩院及戶部三庫職任已多刑部事  
務頗繁著不必兼管新授兵部尚書那蘇圖尚未  
來京其兵部事務仍著傳鶴暫行署理欽此

340 乾隆元年九月初八日內閣奉

上諭派出守護

泰陵之貝勒公大臣官員等於本月十一日起身朕於  
十月十一日親送

皇考梓宮前往

山陵此次隨行之兵丁人夫跟役等類甚多難保無在  
途生事或強買物件擾累居民者著各該管官員  
時刻稽查約束手下之人遵守法度嚴謹辦差倘  
有生事擾民者或經朕訪聞或被巡察御史糾參  
除奉人從重治罪外其該管官員亦必加以處分  
著將此旨通行傳諭知之欽此

341 乾隆元年九月初十日總理事務王大臣奏請

隨 駕前往

泰陵奉

旨著莊親王大學士鄂爾泰公訥親尚書海望徐本  
去果親王平郡王大學士張廷玉著在京辦事欽  
此

342 乾隆元年九月十一日總理事務王大臣奉

上諭哈元生漢仗尚好著賞給副將銜前往西路軍  
營交與提督樊廷聽其差委効力贖罪欽此

343 乾隆元年九月十二日內閣奉

上諭朕親送

皇考梓宮前往

山陵地方官員跪迎  
梓宮不必接駕俟回鑾時照例接駕欽此

344 乾隆元年九月十二日內閣奉

上諭朕御極以來仰體

皇考聖心時時以愛養百姓為念前訪聞得豫省瀕河

兩岸堤壑柳佔地畝及鄭州鹽礮地畝每年應徵

額賦小民輸納維艱已降諭旨悉予蠲免以紓民

力繼又聞得尚有鹽礮飛砂河坍水佔地無可耕

糧仍賠納之處隨又降旨令該撫詳確查勘覈實

奏聞今據巡撫富德奏稱遵旨派委府州有司查

得祥符杞縣洧川中牟滎澤陽武封邱蘭陽儀封

鄆陵汜水偃師鞏縣孟津宜陽嵩縣登封內黃新

鄉延津濬縣滑縣孟縣原武濟源武陟淮寧襄城

長葛禹州密縣南陽新野裕州葉縣信陽州汝州

魯山邲縣寶豐伊陽商城等四十二州縣或因飛

沙堆積不堪佈種或因水勢冲刷坍入中流或因

淹浸日久變成鹽礮盡屬不毛或因外高內低水

無去路積為波澤共地二千三十餘頃計該糧銀

共九千八百七十九兩零漕米共三百二十九斗

八升零朕思任土作貢國有常經其欺隱地畝者

自當治以應得之罪若田土荒蕪無地有糧則當  
速沛恩膏以解閭閻之困豫省荒廢地畝既據該  
撫確查奏聞著照所查之數造冊報部將額賦永  
遠豁免以副朕惠鮮懷保之至意欽此

345 乾隆元年九月十二日總理事務王大臣奉

上諭刻經需用板片經內務府奏准於直隸山東出

產梨木地方購買乃近聞地方官奉行不善所解

板片竟有不堪應用者內務府俱行發回朕思此

等板片雖不合式然既已解送到京又復運回原

處其樹木業經砍伐脚價又須重出在地官官豈

能料理妥協勢必貽累小民甚屬未便嗣後解到

板片除合式者收用外其不合式者尚可留為刊

刻書籍之用著內務府亦行收存不必發回再從

前所定價值每片銀二錢二分其中或有不敷可

令地方官酌量增添毋令稍有累民之處即解到

不合式板片亦准照原定價值銷銷以免賠累至

於直隸山東承辦地方官料理不能盡心著該督

撫等嚴行申飭嗣後務須妥協辦理不得絲毫累  
民內務府查收板片亦須公平驗看倘有勒指抑  
捺等弊查出定行究處該承辦地方官不得因有  
此旨遂將不堪應用之板解送有誤刻經之用欽

此

346 乾隆元年九月十三日總理事務王大臣奉

上諭發給黑龍江寧古塔等處披甲為奴之犯原係  
叛逆及強盜減等者此等罪惡重大寬免其死  
發令為奴已屬法外之仁而伊等竟惡性成仍復  
犯法是以定有聽伊主打死勿問之例乃聞各處  
披甲人等竟有圖佔該犯妻女不遂所欲因而斃  
其性命者情甚可惡且其中有曾為職官生監而  
亦受凌辱漫無區別情實堪憫著令該將軍等查  
明現在為奴人犯內有曾為職官及舉貢生監出  
身者一槩免其為奴即於成所另編入該旗該營  
令其出戶當差並出示曉諭披甲人等俾其痛改  
舊習倘有圖佔犯人妻女因而致斃其命者查出

出仍行照律治罪而為奴人犯亦不得捏詞挾制  
伊主嗣後法司定案除真正反叛及強盜免死減  
等人犯外其職官舉貢生監等有罪應發遣者不  
得加以為奴字樣如何分別定例之處該部詳議  
具奏欽此

347 乾隆元年九月十三日內閣奉

上諭元展成董芳德希壽著該部帶領引見欽此

348 乾隆元年九月十四日總理事務王大臣奉

上諭據太醫奏稱大學士朱軾患病危篤朕即欲親  
往者視因係齋戒之期是以暫止著和親王前往  
賞銀一千兩經理其後事朕於明日親往者視欽  
此

349 乾隆元年九月十五日內閣奉

上諭雍正十三年平涼府所屬慶州縣並鞏昌府屬  
西固聽慶陽府屬環縣及寧夏府屬靈州之花馬

池石溝等堡中衛之香山一帶收成稍歉比時朕即降旨令該督撫加意軫恤並將各該處額徵本色糧石緩至次年夏收後看年歲光景奏聞再行徵收今據該督撫奏報各處收成有六七分者亦有八九分者朕思此等地方上年收成歉薄今雖收穫民力未必寬餘若新舊並徵小民不無窘迫著將緩徵本色糧石自本年為始分作五年帶徵還項以示朕加惠秦民之至意欽此

<sup>350</sup> 乾隆元年九月十五日內閣奉

上諭據查郎阿劉於義奏稱前因涼莊道郭朝祚委辦軍營糧餉其道員印務委知府高夢龍署理今高夢龍援例呈請終養查涼莊道一缺甚屬緊要現在建築滿城將未移駐滿兵事務繁劇必得幹負方能勝任查有兵部員外郎阿炳安隨征七載實力辦公歷試俱有成效現在出具考語送部引見仰懇天恩即以阿炳安補授涼莊道於地方實有裨益其涼莊道郭朝祚調赴軍營總理糧餉懋著勤勞且係征員回任無缺即應另補查有臨洮

道吳廷偉才具平庸年老昏憤應請勒令休致其臨洮道員缺即以郭朝祚調補洵屬人地相宜又查延綏道朱一鳳叅革員缺查有西安糧道沈青崖前經臣等調赴肅州辦理軍需數年以來著有勞績其原缺已另補有人請將沈青崖補授延綏道以獎勞員又者得署西安驛監道佟鑿識見福淺情性矜張於外任非其宜請勅令回京以部屬改補所遺驛監道員缺查有戶部郎中武忱為人誠實才具敏練隨征年久勤慎辦公實克稱西安驛監道之任等語著照查郎阿劉於義所請阿炳安補授涼莊道郭朝祚調補臨洮道沈青崖補授延綏道武忱補授西安驛監道吳廷偉勒令休致佟鑿著來京以部屬改補欽此

<sup>351</sup> 乾隆元年九月十五日內閣奉

上諭原任侍郎胡煦在京病故著賞給內庫銀五百兩經理其喪事欽此

352 乾隆元年九月十六日奉

旨

聖德神功碑漢字著果親王寫欽此

353 乾隆元年九月十七日內閣奉

上諭

聖德神功碑著尚書徐元夢繕譯欽此

354 乾隆元年九月十七日內閣奉

上諭董芳著往雲南交與總督尹繼善以副將委署

試用欽此

355 乾隆元年九月十七日內閣奉

上諭張照著在武英殿修書處効力行走欽此

356 乾隆元年九月二十一日總理事務王大臣奉

上諭國家設科道官原以發抒忠悃隨時獻替為專

職而進諫之道莫大乎繩愆糾謬上佐君德其規切用人行政指陳吏治民生者次之此古名臣之所以志在格君而嘉猷碩畫有造于國是民依也  
朕近敬聞

世祖章皇帝實錄見當時言官奏疏尚有骨鯁蹇諤之

風竟能直指君德之得失而不顧一己利害之私朕輒改容誦之以為我朝人物挺生忠良之佐匪躬之節未嘗遠遜古人也朕御極以來求言之詔屢下而司諫之臣從未聞有忠言謹論可藉以為啟沃之助者計其封章條奏不過撫拾細事苟且且塞責而已即欲求其切中政體痛斥官方之言言尚不可得何論上及朕躬塞荒昭德以盡納諫之實乎夫朕之一身豈能保無闕失正賴廷臣直言匡正以勸不逮即云大德不踰而日理萬幾或發歸施令之失其宜或慶賞刑罰威之過其則或進退黜陟之乖其分或輕重緩急之爽其衡皆朕所不能自信者乃朕誠心求之而諸臣不以誠心應之則諸臣不能辭職之咎也雖自今大臣及科道等官務以古處自期各矢忠蓋為上為德

為下為民志盡言無隱以修臣職以繼芳蹤毋使  
先正風骨獨自擅美于前庶稱朕拳拳冀望之心  
至本朝定鼎以來從前臣工章疏有忠謹剴切卓  
然可傳者著內閣翰林院派員精選進呈刊刻以  
垂示將來俾後進奉為模楷其入選章疏諸臣內  
查有素行端絕完名全節者准入祀賢良祠用昭  
朕崇禮直臣風厲百僚之意欽此

357 乾隆元年九月二十一日內閣奉

旨署山西按察使戴永椿著米京引見其按察使員  
缺著元展成補授欽此

358 乾隆元年九月二十一日內閣奉

上諭據湖南巡撫高其倬奏稱湖南沅州地屬苗疆  
且緊接黔省為緊要該知州朱琰循良素著實屬  
賢員今沅州改州為府則該員例應另補惟是要  
地需人朱琰雖官階稍懸而才堪勝任可否格外  
施恩用為沅州府知府於新設苗疆可有裨益等

語高其倬既稱朱琰賢能素著能有益於苗疆著  
照所請實授沅州府知府欽此

此道係張中堂擬文內閣不入實奉

359 乾隆元年九月二十二日吏部奉

上諭王士任著實授福建布政使其監法道員缺著  
準泰補授欽此

360 乾隆元年九月二十三日內閣奉

旨元富陳時賢李世裔李喬林張昉俱著以原品補  
用僧格勒係庶子著大學士等考試請旨玉格以  
旗員試用徐琨解承毓著交與李銜以知縣委署  
試用欽此

361 乾隆元年九月二十三日內閣奉

旨穆善德備阿里雅俱著以原品降二級以旗員試  
用欽此

362 乾隆元年九月二十六日內閣奉

上諭覃泰以母老不能遠離懇請留京効力著照所請留京另用其福建藍法道員缺著漳州府知府高元崑補授漳州府知府員缺著量華補授欽此

363 乾隆元年九月二十六日內閣奉

上諭原任山西布政使溫而遜著該部帶領引欽此

364 乾隆元年九月二十六日奉

上諭朕即位以來屢下求言之詔至再至三出於誠切並非尚納諫之虛文誠以朕躬闕失無由自知必賴直言之匡正而隨時納諫者乃臣子事君之大義苟有所見即當直陳於君上之前使言之果當朕當即時改易可收轉圜之益即使其言不當朕亦得以已意明白辨示釋其疑心亦開誠布公之道也今覽蔣炳所奏直抒所見剴切敷陳不負朕求言之意乃近日言官中所罕見者朕甚嘉之

但伊秦稱哈元生董芳元展成張照等既明知其罪犯顯見其劣跡不宜授以高官大職等語哈元生身為提督貽誤封疆朕所痛恨因念其尚有勇力曾著軍功是以從寬免罪發往西路軍營以副將銜効力贖罪並未畀以現任官職董芳到到黔不久因與哈元生齟齬以致軍務稽遲時日其罪尚輕此中外所知者今發往滇南止以副將効力亦未復其原官元展成本屬中材適當地方最難辦之事遂至經理周章至巡撫無領兵之責情尚可原令補用臬司令其自効而官階已降數等矣至於張照不過令在殿中修書行走亦未授以官職也況棄瑕錄用或降旨訓諭後而仍改用他途予以自新之路者此從古帝王罪疑惟輕愛惜人材之意朕亦或欲而行之若事關名節大玷官箴者朕斷不輕貸也此數人之用舍黜陟原出於朕之大公而並無偏私之見爰因蔣炳之奏將朕意宣示之然先事防微入臣事君之大義設因此而用舍任意則大非慎簡庶僚之意此朕

所時時自警而羣臣皆當隨事繩糾者也蔣炳知朕求言之心直陳已見應加獎賞以為言官勸著交部議叙朕願大臣及言官等時時以巨綱為懷意所欲言即陳無隱言之而當朕自加以優待即言之不當朕亦不加譴責惟是公私之辨不可不嚴倘有借直諫之名以自行其私冀惑亂朕聽者亦斷不能逃朕之洞察也欽此

365 乾隆元年九月二十七日奉

旨明日考試博學鴻詞平郡王等不必監試著派和親王慶復常明海望監試欽此

不必入彙奏

366 乾隆元年九月二十八日奉

上諭據總督李衛面奏乾隆元年直隸河工河流循軌工程平穩實賴神明之佑等語今年江南河東黃運安瀾浙江海塘寧貼前已降旨各令致祭河海之神以答神貺今直隸河神亦應一體致祭著傳諭禮部知之欽此

367 乾隆元年九月二十九日奉

旨僧格勒著補授翰林院編修欽此

368 乾隆元年九月二十九日總理事務王大臣奉

上諭粵西舊有軍屯田畝當日原係給與各屯兵領耕不與民田一例編徵四差等項是以糧額較重於民田其他州縣偏重之數無多又無別項差徭民間尚不至於苦累惟武緣一縣所徵糧額較之下則民田每畝多出銀二錢二分未免過重小民輸納維艱著該撫將武緣縣軍田舊額酌減每畝定以一錢徵收永著為例以示朕優恤閭閻之意欽此

369 乾隆元年十月初二日內閣奉

上諭蘇州巡撫顧琮丁憂其員缺著吏部侍郎邵基補授翰林院掌院事務仍著大學士張廷玉兼管欽此



370 乾隆元年十月初二日內閣奉

上諭據湖廣著督史貽直奏稱湖廣提督楊凱局量  
褊淺居心詭詐自恃粗知文墨遇事平意妄為以  
矜才使氣為能以訓練士卒為耻調度佈置種種  
乖方若令久於其任必致軍務邊防均有貽誤等  
語楊凱朕亦聞其辦事不妥不勝湖廣提督之任  
著解任來京候朕再降諭旨其湖廣提督印務著  
顏清如前往著理欽此

371 乾隆元年十月初三日奉

旨考取博學鴻詞一等五名二等十名應如何授以  
官職之處爾等查例具奏欽此

此道不入彙奏

372 乾隆元年十月初三日奉

上諭據張廣泗奏稱川省瓦斯木坪土兵共一千名  
自本年二月內調赴黔省以來不避苗寨艱險深  
入搜剿實為土兵之最今因不服水土染疫身故

者共二百九十餘名又雲南沙練一千名來黔協  
勦亦甚為出力今已撤回沿途病故者三十餘名  
可否仰懇天恩准照土兵陣亡之例減半恤賞等  
語此等土兵遠調到黔奮勇宣力因染疫病故多  
人深為可憫著照張廣泗所請賞恤欽此

373 乾隆元年十月初四日內閣奉

上諭朕聞外洋紅毛夾板船到廣時泊於黃埔地  
方起其所帶砲位然後交易俟交易事竣再行  
給還至輸稅之法每船按標頭徵銀二千兩左  
右再照則抽其貨物之稅此向來之例也乃近  
來藝人所帶砲位聽其安放船中而於額稅之  
外將伊所攜置貨現銀另抽加一之稅名曰繳  
送亦與舊例不符朕思從前洋船到廣既有起  
砲之例此時仍當遵行何得改易至於加添繳  
送銀兩尤非朕嘉惠遠人之意著該督查照舊  
例按數裁減並將朕旨宣諭各藝人知之欽此

374 乾隆元年十月初五日奉

旨據奏

四朝本紀現在編纂等語我

皇考本紀亦應及時敬謹編輯又據奏稱表志列傳

等項俟

四朝本紀編定之後次第排纂等語表志列傳等若

俟本紀編定之後方行排纂則曠日持久書成

未免太遲著一面辦理本紀一面將表志列傳

等排纂欽此

此道不入彙奏

375 乾隆元年十月初七日大學士查郎阿帶領引

見各官奉

旨武忱阿炳安著照所請補授道員奇書著照所請

補授理事同知丁蔡阮景咸著帶回任所酌量題

補欽此

此道不入彙奏

376 乾隆元年十月初七日內閣奉

上諭今歲江南夏秋之間天雨連綿淮揚一帶各州

縣低窪田畝有被水淹漫者朕恐窮民失所已諭

令督撫等加意賑恤俾獲安居今思此等百姓若

於冬春之交再令傭工以資力作更為有濟查宿

遷桃源清河安東以及高郵寶應等州縣均有應

行挑濬之河道其安東舊益河約估需銀二萬二

千餘兩宿桃清高寶等工約估需銀十二萬餘兩

著於今冬明春次第興工即令催募民夫及時挑

濬則於緊要河道既得深通而寓賑於工窮黎更

得藉以養贍於地方民生大有裨益欽此

377 乾隆元年十月初八日內閣奉

上諭朕聞今年伏秋之際浙省雨水連綿仁和安

吉德清武康四州縣內低窪田畝積水未經涸

出不能栽種秋禾以致西成失望所有應徵地

丁錢糧已經該督照例題請蠲免其漕白南米

向來雖無蠲免之例朕念被地收成歉薄民力輸納維艱著將仁和等四州縣實在被水各戶本年應徵漕白南米亦照地丁之例格外加恩豁免以示朕愛養黎元之至意欽此

378 乾隆元年十月初九日大學士管理浙江總督事務嵇曾筠面奉

上諭內閣學士劉統勳著帶往浙江學習海塘河道工程事務欽此

此道不入崇奉

379 乾隆元年十月初九日內閣奉  
上諭梅欽成著補授順天府府丞欽此

380 乾隆元年十月初十日內閣奉

上諭吏部侍郎員缺著江西巡撫俞兆岳補授江西巡撫員缺著山東巡撫岳濬調補山東巡撫員缺著法敏補授欽此

381 乾隆元年十月初十日內閣奉

上諭聞得安西總兵張嘉翰年老不能勝任著休致安西總兵員缺著副將豆斌補授豆斌所署延綏鎮事務著周開捷前往署理欽此

382 乾隆元年十月初十日內閣奉

上諭內閣學士雙喜在軍前日久年亦衰老著留京其所管軍營糧務著布蘭泰前往管理欽此

383 乾隆元年十月初十日奉

旨明日晚間供酒膳菓子著總理事務王大臣并統辦喪儀王大臣一同進來欽此

交禮部三事官欽註

此道係奉事處傳不必入崇

奉

384 乾隆元年十月十二日總理事務王大臣奉

上諭據提督樊廷奏稱有興漢兵丁孫海龍於雍正  
八年在鏡兒泉出兵受傷被準噶爾擄去屢欲逃  
回為賊所阻今於本年八月始得乘間脫回等語  
孫海龍受傷被擄久羈賊穴今始脫回情屬可憫  
著查郎阿拔補把總在行伍効力欽此

385 乾隆元年十月十二日總理事務王大臣奉

上諭此番恭送  
皇考梓宮隨從侍衛官衛員及太監拜唐阿兵丁校尉  
等俱應加恩賞賚其夫役人等雖係雇覓且免丁  
差一年但今日途中遇雨衣履未免沾濕亦著一  
體恩賞其如何各加恩賞之處總理事務王大臣  
酌議具奏欽此

386 乾隆元年十月十四日總理事務王大臣奉

上諭此番奉移  
皇考梓宮前往  
山陵直隸總督李衛率領所屬官員沿途辦差甚屬齊  
備俱著交部議叙欽此

387 乾隆元年十月十五日奉

上諭內閣學士阿蘭泰原差往肅州協辦軍需  
今軍務漸次告竣劉於義已移駐蘭州其肅州應  
辦之事該督撫已委員辦理阿蘭泰著回京欽此

388 乾隆元年十月十六日總理事務王大臣奉

上諭朕恭送  
皇考梓宮敬詣  
泰陵親行周視見規模宏整工程完固甚慰朕懷總理  
之恒親王常明海望查克旦俱著從優議叙協辦  
之德爾敏偏武雙昂玉山及在工官員等著分別  
議叙欽此

389 乾隆元年十月十七日奉

旨據劉於義奏稱寧夏府屬之新渠寶豐二縣從前招徠戶口多係無業窮民其雍正十一年額賦實由奉文遲緩與十二年同時並徵以致通行拖欠今十二年以前民欠錢糧已荷聖恩全行豁免而十三年未完糧石尚復盈千累萬若責令於今歲照例並徵勢不能如數交納可否仰懇聖恩將雍正十三年民欠糧數分作五年帶徵等語寧夏府屬之新寶二縣雍正十三年分民欠錢糧原係本年應徵之項但從前之拖欠既屬有因若令一時並徵民力未免艱苦著於乾隆元年為始將兩縣民欠糧數分作五年帶徵該部知道欽此

390 乾隆元年十月十七日內閣奉

旨王蘭生著署理刑部侍郎事務欽此

391 乾隆元年十月二十一日內閣奉

上諭浙江糧儲道朱倫瀚著來京候旨其糧儲道員缺著杭嘉湖道劉復補授杭嘉湖道員缺著寧台紹道曹繩柱調補寧台紹道員缺著寧波府知府王坦補授欽此

392 乾隆元年十月二十一日內閣奉

上諭朕查江南河工額設二十河營兵丁九千一百四十五名內戰糧一百四十六名月給銀一兩五錢守糧八千九百九十九名月給銀一兩專供力作修護工程胥手朕足經歲勤勞內有椿手一項更為緊要身冒危險勞苦尤多祇因額設戰糧無幾各營椿手大率照衆食守糧一分勞異而餉同可為軫念著將額設河兵九千一百四十五名改為戰二守八設戰糧一千八百二十九名守糧七千三百一十六名俾勤勞較多之椿手均得領食戰糧以示朕加恩優恤之至意此所改戰糧每名每月增銀五錢共增銀一萬九千餘兩著照例在

於外解河銀內一併動支報銷再查各省標兵俱曾賞給帶銀生息營運以濟緩急此二十河營兵丁著將河庫現貯公項平餘銀內撥一萬兩賞給以為營運之資俾伊等一體沾恩欽此

393 乾隆元年十月二十二日內閣奉

上諭崔琳著調補山東兗沂曹道李梅賓著調補江南常鎮道欽此

394 乾隆元年十月二十三日內閣奉

上諭朕查兩淮鹽法從前浮費繁多商力日困欽奉

皇考諭旨徹底清查革除浮費核定應留之項以備地

方公用乃原任鹽臣噶爾泰於酌定存公之外又

以商人具呈餽送鹽政銀八萬兩名曰公務餽送

運司銀四萬兩名曰薪水奏請歸公蒙

皇考批諭此係噶爾泰等應得之項若有需用之處聽

其自行支用伊若不受即退還衆商不必歸公欽

此噶爾泰又奏稱衆商力量寬裕此項實出情願

又奉

皇考諭旨俟有地方公事將此應用是

皇考聖意不肯令其歸公

諭旨甚為明切後據噶爾泰經手辦理雖每年按綱具

奏而其實商人未能照數完繳丙午丁未兩綱未

完銀十二萬三千餘兩商人具呈分作六年帶徵

經部議准行在案至己酉庚戌未完銀兩曾經鹽

臣題請寬免部議未允朕即位以來仰體

皇考愛養商民之心屢加優恤務使商力寬餘以受國

家恩澤此項公務薪水銀兩既在額課之外著永

行停止以惠商民至從前已庚兩綱未完公務薪

水之項歷年已久著悉行豁免該督該鹽政可即

宣朕諭旨俾衆商等共知之欽此

395 乾隆元年十月二十四日內閣奉

上諭朕聞山東各府今歲秋收俱稱豐稔惟武定府

屬之樂陵縣及濟南府屬之德平縣有低窪被淹

之鄉村若就通縣地畝而論均不及十分之一實

未成災但被水之後補種秋禾收成未免減少所

有本年應納錢糧或有艱於措辦者著該撫轉飭有司將此二縣窪地歉收之戶應納錢糧若干確實查明緩至明年麥秋徵收以紓民力至於來春青黃不接之時若有實在乏食窮民並令有司動支社倉穀石按戶借給以資接濟毋令失所欽此

396 乾隆元年十月二十四日內閣奉

上諭湖北丁隨糧派一案前蒙

皇考疊沛恩膏多方調劑減免以除閭閻之累其江

等十九州縣攤納之重丁原經廷議俟有陞科丁銀可以漸次攤抵則輸納可得其平今朕聞得原墾之荒頗多不實則攤抵之期一時難必念此十九州縣獨受重丁之苦輸納維艱朕心深為軫恤

今仰體

皇考子惠元元之

聖心將江夏等十九州縣未經攤減之丁銀八千三百

零八兩自乾隆二年為始全行豁免著該部行文

史貽直鍾保即遵諭行欽此

397 乾隆元年十月二十五日奉

旨今日王大臣奏辭總理事務朕臨御以來已經一

載敬念

皇考付託之重兢兢業業凡欽

天勤民之大端不敢稍有怠忽一切政務幸無大過但

庶務繁多朕豈能事事熟悉正賴賢王大臣共相

贊助以成郵治况

皇考當日登極年已四十有五在藩邸日久國是民情

無不洞悉尚簡用總理事務王大臣怡賢王等協

理三年然後報罷朕之才識遠不逮

皇考之萬一王大臣正當竭力抒誠仰佐朕躬何可遽

辭總理事務若辭奏之心出於至誠又不若公忠

體國和衷辦事凡朕政事有失即為規諫思慮未

到代為籌畫以克盡股肱心膂之任較之辭解總

理不更善乎著照常辦理不必再辭欽此

398

乾隆元年十月二十八日內閣奉

上諭西陲自用兵以來陝甘百姓轉運糧餉急公勩

力甚屬可嘉已蒙

皇考疊沛恩膏厚加撫恤朕即位之初又將乾隆元年

甘肅額徵錢糧全行豁免西安等屬豁免一半今

朕復思大兵既撤正與民休息之時若再寬一年

額賦則民力更可寬餘安居樂業著將乾隆二年

甘肅錢糧全行豁免西安等屬錢糧蠲免一半以

示朕加惠秦民之至意欽此

此道係中堂文發未入彙奏

399

乾隆元年十月二十八日總理事務王大臣奉

上諭朕聞永平府屬州縣凡徵收錢糧率皆以錢作

銀每銀一兩連加耗銀一錢五分共折交制錢一

千一百五十文現今該處錢價昂貴民間完納錢

文比之完納銀兩為費較重朕思民間完納錢糧

銀數在一錢以下者向例銀錢聽其並用原以便

民若數在一錢以上又值錢價昂貴之時令交

錢轉致多費是便民而適以累民殊未妥協著直隸總督飭行各屬民間完納錢糧在一錢以上者不必勒令交錢在一錢以下者仍照舊例銀錢聽其自便欽此

400

乾隆元年十月二十八日內閣奉

上諭陸隴其著加贈內閣學士兼禮部侍郎照例給

與碑價欽此

401

乾隆元年十月二十八日內閣奉

上諭梁詩正在內廷行走著照現任侍講學士例賞

給俸銀俸米以資養贍不在居官食祿之列欽此

402

乾隆元年十月二十八日內閣奉

旨汪由敦嵇璜俱著在南書房行走欽此



403 乾隆元年十月二十八日內閣奉

上諭江蘇按察使郭朝鼎著未京候旨江蘇按察使事務著戴永椿署理戴永椿即遠來京引見後赴江蘇之任欽此

404 乾隆元年十月二十八日內閣奉

上諭尹會一著加倉部御史銜管理兩淮鹽政兩淮運使李根雲著調補江西廣饒九南道盧見曾著調補兩淮運使欽此

405 乾隆元年十月二十九日內閣奉

上諭戶刑二部奏請遵奉恩詔豁免欠帑人負內查其原案有應行追繳者有不應追繳者朕思不應追繳之案件與其赦免於事後何如詳審於事前使人無拖累而事易辦理即如開欠一節原係借貸交接之私情遇本人或有虧空及應追之項自當聽其自行索討以清公帑今乃令將平日欠銀之人一一開出即按開出之人著令完繳是以私

債而成公項後前辦理殊未妥協其他分賠代賠著賠名色甚多如道府有稽查州縣之責州縣設有虧空道府非屬分肥即係疎縱責令分賠實屬允當若或因錢糧數多一八未能歸結而令旁人必代賠若賠則本屬牽連而歷久難完又不得不為開豁於國帑仍無裨益其應如何分別定例俾事不滋擾而法在必行著戶刑二部妥議具奏欽此

406 乾隆元年十一月初一日內閣奉

上諭劉統勳出差其校對列  
硃批諭旨事著楊炳接管欽此

407 乾隆元年十一月初二日內閣奉

上諭據禮部奏稱本年冬至恭祭  
列祖陵寢

世宗憲皇帝梓宮尚未安奉地宮每日照常供獻應照

昔年

世祖章皇帝之例不行冬至致祭之禮等語朕思冬至

祭祀關係大典若

皇考裨官前不行冬至致祭之禮於心不安於理亦覺

未協著該部再議具奏欽此

408 乾隆元年十一月初三日內閣奉

上諭朕於初五日御門聽政凡奏事官員著穿補服

不必穿朝服嗣後若遇逢五日期俱照此例行欽

此

409 乾隆元年十一月初五日內閣奉

上諭徐本著補授大學士仍兼管刑部尚書事孫嘉

淦著補授刑部尚書楊汝毅著補授都察院左都

御史姚三辰著補授吏部左侍郎於國璽著補授

部侍郎劉永澄著補授都察院副都御史德爾敏

著補授南河副總河欽此

410 乾隆元年十一月初六日奉

上諭王士俊奏摺可抄寄楊秘閱看其應否如此辦理之處著伊悉心定議具奏欽此

本日交徐汝毅等詳

此道不必入彙奏

411 乾隆元年十一月初七日內閣奉

上諭今科武殿試著照該部所擬日期舉行朕在三

年服制之內其考試弓馬等項著派王大臣在紫

觀閣閱看將擬在前列者帶至養心殿候朕親定

揭曉之日照今年文殿試之例傳臚朕不必陞殿

欽此

412 乾隆元年十一月初七日內閣奉

上諭據雲貴總督尹繼善奏稱雲南曲靖澂江臨安

楚雄姚安廣西昭通等府所屬州縣內有裁種稍

遲之地禾稻正在揚花忽遇冷雨多不結實止有

五六分收成其中呈貢昆陽安寧恩安魯甸數處

收成則在四分以下除委員確勘實在成災者即

行具題將應免地丁等項照例請免查秋米一項舊例不在邀免之內已令所屬暫緩徵收謹此奏聞等語滇省遠在天南舟車不通民每艱於謀食今聞本年栽種稍遲州縣內有收成歉薄之處朕心深為軫念其成災地方自應將應免地丁等項照例豁免至於秋米一項雖無邀免之例第恐閭閻力薄輸納維艱著將收成六分以下之州縣所有本年應徵秋米全行緩徵從乾隆二年為始分作三年帶徵以紓民力凡此歉收之處窮民必至乏食其應賑恤者即行動項賑恤務使咸得其所其應平糶者即將存倉米穀減價平糶或將隣近倉儲設法撥運以資接濟至無力之民則借給籽種以助來歲春耕若摺內所開州縣之外尚有似此歉收之處亦照此一體辦理毋得忽視著該部速行傳諭該督撫知之欽此

413 乾隆元年十一月初七日内閣奉

上諭江路風濤之險最為不測聞楚省宜昌以上川省夔州以下凡灘水險逆之處蒙

皇考諭令設立救生船每年多所救濟商民感激但朕

聞川水發源岷山至眉州彭山縣江口而始大自江口至夔州府巫山縣計程二千餘里其中有石險灘不可悉數向來該督撫亦有奏請設立救生船之意遂巡未果著巡撫楊勳遴委賢員詳確查明於灘水險惡之處照夔州府以下事例設立救生船隻以防商民意外之虞其所需經費准於正項內報銷務令該地方官實力奉行毋得草率塞責欽此

414 乾隆元年十一月初七日内閣奉

上諭四川各土司向有貢馬之例其所貢本色則添補各營倒斃之馬而折價之馬每匹納銀十二兩此舊例也查通省營馬近已改照驛馬例每匹給銀八兩而土司貢馬折價仍是十二兩之數豈民未免多費朕心軫念著從乾隆七年為始土司文納馬價每匹裁減四兩只收銀八兩永著為例該督撫將朕此旨通行曉諭咸使聞知欽此

415 乾隆元年十一月初七日內閣奉

上諭黃廷桂著來京候旨四川提督員缺著王進昌  
補授夔陵鎮總兵員缺著施廷壽補授欽此

416 乾隆元年十一月初七日內閣奉

上諭河南布政使徐士林奏稱伊父年逾七旬目下  
患病沉重懇請辭任回籍親視湯藥等語徐士林  
著給假速回原籍省親伊父河南布政使事務著  
溫而遜前往署理徐士林到家後俟伊父病體痊  
愈具摺奏聞再回原任欽此

417 乾隆元年十一月初八日內閣奉

上諭果親王現管理藩院事王有足疾起走微覺艱  
難嗣後朕御門聽政王不親自送本欽此

418 乾隆元年十一月十二日內閣奉

上諭據陝西署督劉於義奏稱寧夏府屬之寧夏新  
渠寶豐等縣今夏雨水甚多黃河泛漲以致衝決

堤岸淹浸民田臣已動支社倉公用銀糧加意賑  
恤念此被災民人今冬明春口糧或有缺乏准布  
政司詳議寧夏縣之何忠僅新渠縣之通吉通義  
通祀清水等僅被災偏重酌借六個月口糧寧夏  
縣之王鏗僅及寶豐縣之紅崗永潤等僅被災較  
輕酌借三個月口糧俟來年收成之後催徵還項  
等語朕子惠元一夫不獲實如已溺已飢而於  
甘肅民人歷年奉公尤深軫念茲覽劉於義奏報  
寧夏被水等僅秋成歉薄民食艱難所當加意撫  
綏者著將各該處額徵糧<sub>賦</sub>確查豁免其所借六  
個月三個月口糧俱准作賑給之項免其來歲交  
還該督撫可出示通行曉諭並飭有司實力奉行  
務令小民均沾實惠欽此

419 乾隆元年十一月十二日總理事務王大臣奉

上諭河南鄭州郭元曾控告一案欽差侍郎吳應茶  
等與巡撫富德各執意見屢次瀆奏於朕前既非  
公平讞獄之道亦甚失大臣辦事之體此案前已

交河道總辦白鍾山就近審訊今思大臣彼此爭執恐白鍾山一人辦理不之以厥服衆心著刑部尚書孫嘉淦前往會同白鍾山秉公確審務得實情將來案情定後則伊等之是非判然應將怙過瀆奏之大臣交部嚴加議處以示懲戒欽此

420 乾隆元年十一月十二日內閣奉

上諭福建泉州府知府員缺著直隸巴溝同知張鏐補授巴溝同知員缺著原任熱河同知瞻泰補授候補知縣朱奎揚著交與直隸提督李衛以知縣題補欽此

421 德山奏禁旗員入園看戲一摺

乾隆元年十一月十二日奉

旨著交與步軍統領併八旗都統查照舊例禁止欽

此

此道不入彙奏

422 乾隆元年十一月十五日內閣奉

上諭張廣泗已授貴州總督伊任內只有巡撫養廉自不敷用著每年賞給養廉銀一萬五千兩欽此

423 乾隆元年十一月十五日內閣奉

上諭馬爾泰著調補刑部侍郎柏修著調補工部侍郎程元章著補授刑部侍郎王蘭生著以刑部侍郎銜管禮部侍郎事欽此

424 乾隆元年十一月十八日內閣奉

上諭詹事府正詹員缺著李紱補授欽此

425 大學士鄂 張 等字寄 貴州總督張

乾隆元年十一月二十二日奉

上諭昨據貴州總督張廣泗陳奏苗種善後事宜三條朕已降旨交總理事務王大臣議政大臣會同該部妥議今朕思張廣泗所奏第一條請於新種

內地添設官兵駐劄裨壓自應照所請行但所添兵丁計一千三百餘名以之分佈各處朕意似少覺不敷現在安設營汛是否足敷巡防之用目前斷不可以節省錢糧而為遷就之舉其第二條請設立郡縣在目前似可不必或因地方遼濶所有同知通判等官難於統轄酌設道員裨壓巡查似尚可行至第三條內奏請將內地新疆逆苗絕戶田產酌量安插漢民領種朕思苗性反覆靡常經此番兵威大創之後雖畏懼伏而數十年後豈能預料若於新疆各處將所有逆產招集漢民耕種萬一苗人滋事蠢動則是以內地之民人因耕種苗地而受其荼毒朕心深為不忍此必不可行者朕意逆苗因罪入官之地自無復賞給逆苗之理與其招集漢人不若添設屯軍即令兵丁耕種俾無事則盡力南畝萬一有警就近即可抵禦且收穫糧石又可少佐兵食以省內地之輓運較屬有益其安設屯軍於額設汛防兵丁之外就地畝之多寡酌量添設或專令屯種或令與汛防兵丁更番屯種則苗種駐劄之兵數較多而兵氣自奮

且省添兵之費朕意如此可先行寄信張廣泗知之苗疆善後事宜關係重大極宜詳慎籌畫俾可永遠遵行張廣泗切不可因從前原欲郡縣其地目今伏此兵威遂欲迴護前議也總之苗疆之事可省而不可繁可拒却而不可招來即今之添兵設防亦不過因已經如此辦理於國家顏面有闕難於全撤耳尚須妥協計議使地方永遠寧謐

欽此遵

寄寄信前來

十一月二十四日抄發

426 乾隆元年十一月二十七日奉

上諭現今兩路大兵已經撤回而鄂爾昆烏里雅蘇台尚有駐防之奉天兵二千名寧古塔兵一千名黑龍江兵二千名綠旗兵二千名喀爾喀兵一千五百名種屯綠旗兵六百名哈密地方尚有駐防綠旗兵五千名共一萬四千一百名俱各戍守邊疆際此嚴冬卡倫瞻望偵探巡查信覺寒苦朕心深為軫念著每名賞給銀三兩為製辦冬衣禦寒

之具該管大臣即於軍營存貯銀內按名散給務令均沾實惠欽此

十一月二十九日抄發

427 乾隆元年十一月二十八日內閣奉

上諭自京師至易州共計七州縣民人供應差役急

公可嘉朕已降旨將本年應徵錢糧全行蠲免並曉諭業戶等酌寬佃人租糧使伊等同沾恩澤今思此七州縣內有入官地畝均係窮民佃種完納租銀雖官租與民業不同而佃戶趨事赴功則與旗民無異亦當一體加恩以示優恤著將入官地畝本年佃戶租銀照定例每一錢者寬免三分該督可即轉飭州縣官遵朕諭旨實力奉行毋使胥吏侵蝕中飽欽此

428 乾隆元年十一月二十九日內閣奉

上諭湖廣襄陽總兵官員缺著李椅補授四川北總兵官員缺著高鈺補授欽此

429 乾隆元年十一月二十九日奉

王安國奏開河宜濬海口一摺之旨

上諭此案前據總河高斌摺奏請於天妃閣下建築閘壩已經廷議先行俟一二年後有無成效再行酌量此摺暫存欽此

430 乾隆元年十一月三十日奉

因提督鄂善奏部察院案本張中堂諭存檔

旨朕將一切事務俱交總理事務王大臣辦理者特欲速行完結之意而伊等所辦之事又不咨行稽察上諭處註銷乃於所交之事每多遲延今將此案復遲至數月之久始行議奏有是理乎著將總理事務王大臣九卿俱交該部院查議具奏欽此

此一道係清字音漢不入彙奏

431 乾隆元年十一月三十日內閣奉

上諭沈竹係獲重罪之人朕開恩釋放交與該管大臣嚴行約束不許在外生事今乃私往天津欲向

盜商詐騙銀兩招搖不法甚屬可惡著將三保泰  
奏之摺交與該旗大臣閱看即速差人前赴天津  
將沈竹拿回候旨其如何疎縱之處著該旗大臣  
明白回奏欽此

432 乾隆元年十二月初一日奉

旨前令布蘭泰往北路管理糧餉事務聞布蘭泰之  
母年已七十有餘著將伊留京侍養其糧餉事務  
著常安自備資斧前往管理欽此

433 乾隆元年十二月初四日奉

上諭朕聞近日督撫中於屬員餽送土宜物件間有  
收受一二者此風斷不可長夫吏治以操守廉潔  
為本而持廉之道莫先於謹小慎微是以懸魚留  
積前史著為美談而陸贄亦云鞭鞫不已必及珠  
玉古名臣持身之謹恪如此哉

皇考世宗憲皇帝宵旰勤勞日以整飭官方澄清吏治

為惠養斯民之要道十餘年來直省督撫類能秉  
守

訓諭砥礪清操用使大法小廉以貪墨為懼而閭閻共  
受其福朕繼緒以來實冀中外臣工恪遵

聖訓實力奉行一如

皇考臨御之時豈可以交際之微開苞苴之漸且從前  
州縣陋規未革所入本豐即餽送上司亦非盡剝  
削小民所得自酌定養廉各有定數多者千金少  
者數百金僅足為養贍家口延致幕客之資安有  
餘力交接上司勢必額外巧取吾民深受其患督  
撫為一省表率既收州縣土宜則兩司道府之餽  
遺又不可却而州縣既送督撫土宜則兩司道府  
之餽送又不可少層累遞及督撫之所收有限而  
屬員之費已不貲矣且哉

皇考酌定養廉之意原欲使上司下屬無絲毫之授受  
則舉劾悉出公心無所撓拘回護至督撫養廉之



項頗為寬裕一絲一粟不必取辦於有司而屬員亦不得藉端獻媚俾皆撫得潔己秉公盡察吏安民之職設因些微土產而於黜陟之間稍干物議抑豈遠嫌之道哉

皇考澄澈整飭之良規萬世所當遵守者何忍稍有踰越漸致縱弛是用特申諭務各凜遵如有暗中收受者或經朕訪聞或被風聞叅劾必嚴加議處以為蓋蓋不飾者之戒特諭

434 乾隆元年十二月初五日內閣奉

上諭西川威茂營叅將員缺著岳鍾璜補授欽此

435 乾隆元年十二月初六日內閣奉

上諭王無黨著實授貴州提督欽此

436 乾隆元年十二月初七日總理事務王大臣奉  
上諭朝鮮歸順我朝恪守藩封之職累世恭謹向來

八旗臺站官兵於每年二八月間攜帶貨物前往中江與朝鮮貿易朕思旗人等俱有看守巡查之責原無暇貿易且必不諳貿易之事遠人到邊恐致稽遲守候多有未便嗣後著內地商民與朝鮮國人貿易即令中江稅官實力稽查務須均平交易毋得勒措滋擾以示朕加惠遠人之至意該并將此傳諭朝鮮國王知之欽此

437 乾隆元年十二月初七日奉

上諭仰惟

皇考世宗憲皇帝德並高深恩覃海宇駿烈鴻功垂裕

萬世允宜配享

郊壇永崇禋祀朕思來年三月之吉

梓宮奉安地宮

山陵事畢升祔

太廟之後配享之禮理宜敬謹舉行第其時夏至伊邇

冬至尚遠若先奉配

方澤恐前後之未協若俟冬至

南郊然後舉行又覺時日之久曠敬稽我朝舊制順治

十四年三月

世祖章皇帝恭奉

太宗配享

園立翼日配享

方澤康熙六年十一月丁未時屆

南郊

聖祖仁皇帝恭奉

世祖配享越十日配享

方澤兩朝典制均係特行禮隆儀備燦垂史冊且稽之

經傳成周郊祀后稷以配天宗祀文王於明堂以

配上帝即月令所謂季秋大享帝也名誥載三月

丁巳用牲於郊釋者謂非常祀而祭天以告定位

也又宋仁宗皇祐二年以火慶殿為明堂合祭天

地三聖並侑一如園丘南郊之儀則是古未因事

郊祀之禮不必定在一至之時明矣我朝舊制盡

考盡誠與古符合來年

世宗配天大禮宜遵照舉行其應行典禮著總理事務

王大臣內閣九卿敬謹詳議具奏欽此

438 乾隆元年十二月初八日內閣奉

上諭湖北鶴峯州長樂縣原係容美土司地方每年

徵秋糧銀九十六兩自前年改土歸流經該督撫

題明俟設立州縣後確查成熟田畝照內地科則

輸糧今鶴峯州成熟田地共六百五十四頃應科

條餉銀四百七十九兩長樂縣成熟田畝<sub>地</sub>一百八

十三項應科條餉銀一百六十七兩朕查雍正八

年湖南永順等土司改土歸流之時蒙我

皇考念其地瘠民貧將土民承種成熟地畝應納錢糧

即照原額秋糧二百八十兩之數分則陞科仍寬

免一年在案今容美事同一例且聞彼地山田帶

礪土瘠水寒物產涼薄若照內地科則徵糧土民

不無拮据著將鶴峯長樂二州縣現報成熟田地亦照容美之例即以原徵秋糧銀九十六兩之數作為定額於乾隆丁巳年為始造冊徵收嗣後若有招徠勸墾荒地再行奏報酌量陞科至於裁改土司以後未經查丈以前雍正二十三年及乾隆元年共應徵秋糧銀二百八十八兩著寬免不必補徵以示朕愛養土民之至意欽此

439 乾隆元年十二月初九日內閣奉

上諭明年二月二十二日朕親送

孝敬憲皇后梓宮前往

泰陵前已頒發諭旨今因禮部奏進儀注欽奉

皇太后懿旨屆期亦欲親送朕思奉移

梓宮之日距安奉地宮之期尚遠

皇太后聖駕可以遲數日啟行少節勞動再三奏懇

不蒙

俞允又降

懿旨

孝敬憲皇后梓宮奉移大事若不親送於禮未盡於心不安欽此傳諭總理事務王大臣禮部工部內務府將一切儀注及途次行走事宜一併詳議具奏欽此

440 乾隆元年十二月初十日總理事務王大臣奉

上諭朕前降旨明年元旦停止陞殿受朝

皇太后前照常行禮今奏聞

皇太后蒙降

懿旨明年元旦尚在二十七月之內皇帝既不受朝其

王大臣等赴慈寧宮行禮之處亦著停止欽此特傳

諭諸王大臣知之欽此

441 乾隆元年十二月十五日內閣奉

上諭四川松茂道周彬著未京該部帶領請旨其松茂道員缺著雅州府知府張植補授雅州府知府員缺著寧遠府同知宋虞凱補授欽此

442 乾隆元年十二月十五日奉

上諭朕聞淮南引鹽自益場捆重由淮揚一帶河路運至儀所掣摯方赴江廣口岸分銷今淮揚運河於未歲糧船回空後築壩挑濬約計半年之期鹽船不能行走民食所關必須先事綢繆預為捆重運至儀所以便源源運往口岸免致缺乏按月計額計得預運鹽七十萬引但商人行鹽原係陸續完課以次轉輸今既預運七十萬之引鹽即須早完七十萬引之正雜錢糧商力未免竭蹶查鹽務正雜錢糧商人向分三次完納首先完銀謂之請單其次完銀謂之呈綱最後完銀謂之加勛此舊

例也今朕寬緩其期將此預運之引鹽所有請單

呈綱兩次應納錢糧准於加勛時一并完納俾商力寬舒得以從容辦課至淮北引鹽亦由運河經過所有預運鹽勛十萬餘引悉照此例行著該鹽政遵照諭旨辦理並通行曉諭衆商知之特諭

443 乾隆元年十二月二十五日內閣奉

上諭大學士徐本著充

實錄館總裁詹事李紱著充三禮館副總裁欽此

444 乾隆元年十二月二十五日內閣奉

上諭廣東右翼鎮總兵員缺著副將王濤補授欽此

445 乾隆元年十二月二十五日內閣奉

上諭楊名時在雲南巡撫任內所有著述著修之項悉著寬免欽此

446 乾隆元年十二月二十五日內閣奉

上諭開濬茅城舖引河情形據淮揚本籍京員公奏一摺又廣東學政王安國條奏一摺俱著發與河道總督高斌會同總督趙弘恩巡撫邵基悉心籌畫此事關係重大伊等不可固執已見久不可曲徇人言務期於運道民生萬全無弊可垂久遠欽此

447 乾隆元年十二月二十六日內閣奉

上諭據江蘇巡撫卞基奏稱蘇州府知府白懌聽訟枉斷濫斃民命輿情不服業經會同督臣具本題叅請旨革審蘇州地方緊要必得廉明強幹之員方能膺斯劇郡查有鎮江府知府黃鶴鳴為人剛直官聲優著克勝蘇州知府之任其鎮江府一缺亦屬緊要一時難得其人查有原任松江知府王喬林辦事明敏才具優長前因承辦銅劬被商侵空革職擬罪蒙恩赦免所有正額銅劬已經全完僅缺秤頭七千餘劬現在竭力措辦倘邀格外之

恩准其委署鎮江府知府之缺俟開復後署理二年著有成效再行題請實授在該員自必倍加奮勉而臣亦收臂指之益等語著照該撫邵基所請黃鶴鳴調補蘇州府知府王喬林署理鎮江府知府印務欽此

448 乾隆元年十二月二十八日內閣奉

上諭據貴州總督張廣泗奏稱貴州台拱鎮改移鎮遠府衝要之地以資彈壓事經改創必需才猷敏練之員方能勝任查有銅仁協副將已陞雲南永北鎮總兵劉永貴為人練達老成明白持重於雍正十年內蒙

世宗憲皇帝諭旨將伊陞授永北總兵仍辦理銅仁協副將事務俟諸事就緒再奏聞前赴新任今苗疆軍務已竣若將劉永貴調補鎮遠總兵於地方實有裨益其所遺永北鎮總兵員缺所轄兵糧僅止千餘名一切營伍地方事務俱有成例可循查現署台拱鎮之副將紀龍為人質實屢經擊退賊苗

449 乾隆二年正月初四日內閣奉

上諭向來江浙等省佐雜微員未曾議給養廉朕因江南地方事務頗繁差遣絡繹已于上年特頒諭旨賞給養廉以資其食用今思浙省事務差遣亦屬繁多微員等俸少力薄所當一体加恩者著大學士嵇曾筠將應給各官查照江南之例從乾隆二年為始賞給養廉之項俾伊等不至匱乏其銀數若干並應動何項銀亦著大學士嵇曾筠定議奏聞欽此

450 同日內閣奉

上諭各省屯糧科則輕重不一朕聞西所屬太谷祁縣徐溝清源交城朔州馬邑左雲右玉偏關等十州縣之屯糧有較之民田過重者有同一屯地而徵糧之本折多寡不同者有同一科則而額糧之重輕相去懸殊者念此屯民皆吾若地<sub>土</sub>產糧重未免輸納維艱著該撫石麟轉飭各州縣有司秉公確查就原額糧則之重者酌量裁減具題請旨俾輕重各得其宜輸糧不至竭蹶以

示朕愛養屯民之至意欽此

451 乾隆二年正月初五日内閣奉

上諭向來臺灣丁銀重於內地朕已加恩仿照內地之例酌中減則每丁徵銀二錢以紓民力今聞臺地番黎大小計九十六社有每年輸納之項名曰番餉按丁徵收有多至二兩一兩有<sub>餘</sub>五六錢不等者朕思民番皆吾赤子原無歧視所輸番餉即百姓之丁銀也著照民丁之例每丁徵銀二錢其餘悉行裁減該督撫可轉飭地方官出示曉諭實力奉行務令番民均沾實惠又聞澎湖糧廳淡防廳均有額編人丁每丁徵銀四錢有零從前未曾裁減亦著照臺灣四縣之例行欽此

452 同日內閣奉

上諭雍正十二年以前各省未完錢糧已於恩詔內悉行豁免查各省截留漕舡有應追之銀米不在恩詔豁免之內但念旗丁近年以來尚屬急公効力其從前掛欠之項事隔數年此時責令全完未

免力量艱難著漕運總督補熙詳悉查明將雍正十二年以前各省截留漕糧應追行糧漕贈盤耗等項除已完外其未完者准照地丁錢糧之例一概寬免以示朕格外加恩之至意欽此

453 乾隆二年正月初十日內閣奉

上諭陝西延安府知府徐洹瀛性情浮躁不宜外任著來京引見延安府知府員缺著直隸北路同知鄭遠補授欽此

454 同日內閣奉

上諭四川崇慶州知州田廷錫不宜外任著調來引見崇慶州知州員缺著大竹縣知縣林良銓補授欽此

455 同日內閣奉

上諭上年臘月將溥奏稱伊父大學士將廷錫蒙恩准入鄉賢祠懇於今年正月內給假回籍辦理將溥著給假四個月前去欽此

456 乾隆二年正月十一日總理事務王大臣奉

上諭據原任江西巡撫俞兆岳奏報乾隆元年江蘇州兩關稅課盈餘銀兩較前任共減收九萬有餘此事現已交與該部及新任巡撫岳濟查核奏聞朕前因各省關稅於正額之外每多無名之費恣意勒索累苦商民是以降旨釐剔弊端將應行減除者概令禁止全在督撫大臣等督率司權之員潔已奉公實力遵行以副朕輕徭薄賦加惠商民之至意今就江西一省言之已少收銀十萬兩推之各省則約計百有餘萬矣如果商民得沾實惠即更逾此數亦朕所樂聞有何吝惜但從來閩樞稅務與百物價值原係相為表裡如果關稅減輕則物價亦必平賤若稅輕而價仍不減羣情亦不能帖服此一定之理也今京師貨物價值日見騰貴而外省亦復不減於前是各關所減課銀商民並未沾被恩澤徒飽吏胥之囊橐耳我

皇考臨御以來澄清吏治凡此等官侵吏蝕之習久已弊絕風清今督撫諸臣如不能稽察屬員被其朦混則庸懦無能有忝封疆之任若或已身稍有染

指則名節有虧朕一經擯斥之後斷不復加錄用  
也可將此旨傳諭各省督撫令其各行稽查深自  
警省若錯會朕釐剔弊端富於民之意又款多  
報贏餘以致商民受困識見鄙陋其罪更不可運  
矣欽此

457 乾隆二年正月十一日總理事務王大臣奉

上諭兩江總督趙弘恩著未京陛見另有用處度復  
著補授兩江總督那蘇圖著調補刑部尚書訥親  
著補授兵部尚書奎儀衛火器營事務訥親下必  
管理其員缺著該部開列請旨欽此

458 乾隆二年正月十六日內閣奉

上諭廣東高雷廉三府素稱產米之鄉即海南瓊州  
一府每年仰食斯地官民隔海買運為常聞今歲  
雨澤愆期又兼颶風一次秋成歉薄且海南買運  
倍於往時雖經督撫撥運廣州府屬倉糧前往瓊  
州接濟而公私採買尚多以致米價漸昂向來每  
一倉石價銀七錢上下者今則增至一兩一錢以  
外若至青黃不接之時勢必更加昂貴小民謀食

艱難朕心深為軫念著該部即速行文與總督鄂  
彌達令其悉心籌畫應如何道融接濟以贍足民  
食之處一面辦理一面奏聞欽此

459 同日內閣奉

上諭楊超曾著實授廣西巡撫金鉉著補授刑部侍  
郎欽此

460 乾隆二年正月十七日內閣奉

上諭王士俊著釋放回籍為民欽此

461 乾隆二年正月二十一日內閣奉

上諭浙江海塘工程上年已令劉統勳前往協同辦  
理汪澂張坦麟著調取回京欽此

462 同日內閣奉

上諭前年黔省逆苗不法調撥兩廣雲南四川湖廣  
兵力會同本省兵丁合力征勦今軍務已竣地方  
寧謐惟是各省及本省兵丁人數衆多其中有擊  
賊陣亡者有染病身故者此等沒於王事之人深



可憫惻其眷屬在家於知照未到本營之時多支月餉若按本兵亡故之日照數扣追則已用之項措辦維艱甚非朕優恤戎行哀矜犒獨之意著該管大臣等查明悉行豁免其本兵名糧若子弟內有可以訓養成材者即令項補以資養贍倘子弟無人眷口無所倚賴著該管大臣設法撫恤之母令失所欽此

463 乾隆二年正月二十一日內閣奉

上諭上年滇省有收成歉薄之州縣米價昂貴民食艱難朕已屢次批諭該督尹繼善等悉心籌畫賑濟貧民並撥運隣米平糶倉穀多方調劑俾歉收地方均不致乏食諒該督等自能仰體朕心經理妥協登斯民於衽席今思青黃不接之時籌畫更為緊要滇南離京甚遠若有應行辦理之處必待具奏奉旨之後方始舉行未免稽延時日著該部即速行文與尹繼善等令其就近酌量將實有裨益貧民者一面奏聞一面即行辦理毋使一夫失所欽此

464 乾隆二年正月二十二日內閣奉

上諭廣東糧驛道陶正中丁憂員缺著海南道潘思渠調補海南道員缺著肇慶府知府王元樞補授欽此

465 乾隆二年正月二十四日內閣奉

上諭朕於二月二十二日親送

孝敬憲皇后梓宮奉移

恭陵沿途一切事宜已勅令照例辦理朕思年來經理山陵大事自京師至易州七州縣民人應差趨役勤慎可嘉上年已蠲免地丁錢糧使閭閻均霑惠澤著將乾隆二年額徵錢糧再行豁免以示朕格外加恩之意該部即行文該督道行曉諭知之欽此

466 同日內閣奉

旨此次隨往

恭陵著莊親王平郡王大學士鄂爾泰張廷玉公訥親尚書海望去大學士徐本著留京辦事果親王現有足疾恐遠間勞苦不便至期再加酌量若精神

健旺即一同隨往如身體尚弱亦不必勉強欽此

467 同日內閣奉

上諭兩淮鹽政尹會一著來京陛見其鹽政印務暫委運使護理欽此

468 乾隆二年正月二十七日內閣奉

上諭據大學士朱軾之子朱必塔等奏稱擇于二月十三日扶送父親由浙河歸里大學士朱軾扼櫬起行之前一日著散秩大臣一員帶領侍衛十員前往奠酒並於十三日送其起程再令該部行文沿途地方文武官弁在二十里以內者俱至櫬前弔奠並遣人護送俾長途安穩早抵故里其柩櫬准入城治喪欽此

469 同日內閣奉

上諭在璣衡以齊七政視雲物以驗歲功所以審休咎脩省先王深敷謹焉今欽天監歷象考成一書於節序時固已推算精明分厘不與而星官之

術占驗之方則闕焉未講但天文家言互有疎密非精習不能無差海內有精曉天文明於星象者直省督撫確訪試驗術果精通著咨送來京該部奏聞請旨欽此

470 乾隆二年二月初一日內閣奉

上諭據江南督撫趙弘恩邵基奏稱揚州府興化縣俗悍民刁頗稱難治必得幹濟之員始於地方有益查有溧陽縣縣丞金秉祚曾經委署儀徵上元印務為人明白辦事諳練堪以委署興化縣知縣為此合詞具奏等語金秉祚著照趙弘恩邵基所請委署興化縣知縣如居官果優著有成效再行題請實授欽此

471 乾隆二年二月初六日內閣奉

上諭前據御史薛韞條奏各款內有限田一條頗有關係是以交與總理事務王大臣閱看今據王大臣等議稱限田之說種種擾亂為害甚大斷不可行而薛韞以此悖謬之說見之章奏理應交部察

議等語朕念切求言若因此加以處分恐阻人進言之路且伊所敷陳者尚有直懇之氣近理之語即如養德性謹好尚二條雖尋常迂濶之談衆人所習聞而朕十二三歲時所熟悉之論君德修明惟在躬行實踐不徒尚喋喋講論之虛文然思此等之言時聞朕耳以補朕之遺忘亦未為不可至所稱起居注冊檔不應進呈御覽等語則自

皇祖

皇考以及朕躬從未披覽記注不知出于何人之訛傳也蓋人君政事言動萬國觀瞻若有闕失豈能禁人之不書倘自信無他又何必觀其記載當時唐太宗索觀記注朕方以為非豈肯躬自蹈之乎又稱法司衙門辦理特交之事必引重律一條朕辦事以來詳閱刑部本章亦並無此弊薛瓘職司言責分宜進言雖限于淺見自呈固陋然言不必其有當意猶本乎抒誠著寬免其察議又今日御史舒赫德奏稱近來九卿多有委靡習氣不實心辦事即如周琬一件九卿中無一人能斷此事者又稱雷霆雨露均屬天恩又稱九卿應時常接見以

察其居心行事激濁揚清等語當日

皇考時時召見九卿諄切訓誨反覆周詳至十三年之

久而能祇承

聖訓深知勉勉者能有幾人且錯會

聖意自以為揣摩得當而失之毫釐謬以千里者不知

其凡幾也朕自分學力識見不逮

皇考之萬一即使朕時常召見諄諄告誡又不能免訓

誨過切啟衆人以非禮待臣工之譏誠不若九卿

追思

皇考之遺訓各自奮勉之為愈也况朕未嘗不接對九

卿諸臣之居心行事豈惟悉其梗概亦能察其所

安其中能失念公忠才識明達可為國家棟梁時

勤咨訪大有裨於政治為朕所深服者尚未見其

人也爾等九卿惟當夙夜勉厚自期待為國家

可倚賴之人慎勿自輕自棄以貽小臣等之訾議

是則朕心所切望者至于御史等所稱既博大成

裕必無明作有功等語其意以博大成裕明作有

功分為兩事不知博大非寬縱之為明作非嚴刻

之謂要惟不統不練無怠無荒大中至正庶可幾

郵隆之上理我君臣其共勉之欽此

472 乾隆二年二月初三日奉

旨據劉於義奏稱西寧鎮有原調援勦撤回官兵二百三十九員名於雍正十二年并乾隆元年節次派撥出口所有原領俸賞銀兩似應准其抵算又大通鎮撤回未經續派兵丁七十七名領過賞銀一千七百兩前曾另行派調將賞銀追給頂派各兵查頂替之兵遠役塞外俱經製辦行裝費用無存可否加恩免其追繳等語征兵借支銀兩前已降旨盡與豁免今西寧大通官兵應追銀兩著照劉於義所請一體加恩免其追繳欽此

473 乾隆二年二月初四日內閣奉

上諭據山東巡撫法敏奏稱兗沂曹道崔琳丁父憂所遺道員一缺甚屬緊要非才具出眾之員不能勝任查有濟南府知府程開業才守兼優為十府中第一賢員若蒙簡用可收得人之效其濟南府缺為省會首郡亦屬緊要查有德州知州王一夔

強幹廉明才堪肆應但知州陞補知府越銜一等今懇俯准試用二年若能勝任再請實授等語著照法敏所請兗沂曹道員缺著程開業補授濟南府知府員缺著王一夔試用如辦事果優二年後再行題請實授欽此

474 乾隆二年二月初八日內閣奉

上諭外省藩臬所以佐督撫理一省錢糧刑名之事責至重也必得才守均優之人方克勝任其中尚有未曾引見者居多著吏部通行傳諭除由京補授及已經引見者無庸赴京外其未經來京之員著該督撫酌量何時令其陛見藩臬不必同來以致曠廢政務欽此

475 乾隆二年二月十一日總理事務王大臣奉

上諭前日果親王奏請隨往泰陵已降諭旨臨期酌量今見王氣體尚弱途間往返未免勞頓且此番留京王大臣甚少果親王著仍留總理事務處提督鄂善現在京城著協同大學

士徐本料理稽查事務欽此

476 同日總理事務王大臣奉

上諭朕登極詔書內赦罪各款本以昭法外之仁所冀有司實力奉行查明案件即予奏聞省釋俾得早沐殊恩及今已屆二年又屢經申飭乃外省尚有未經歸結之案更或闕提待質究詰不已株連濳繫本行諸多未善若非有心羅織而屬任意延疎有違青災肆赦之旨該部即行申飭各督撫令其作速查明通行省釋無得仍前怠緩如尚有波累等弊定將奉行不力之該有司嚴加議處欽此

477 乾隆二年二月十五日內閣奉

上諭朕因外省軍田糧額輕重不等年來留心訪察聞浙江温州衛現徵屯田三百一十二頃每畝額徵銀一錢七分零台州衛現徵屯田二百二十頃每畝額徵銀一錢四分零比本地民田較重丁民輸納未免艱難查杭州前右二衛科則均係一錢

二分八厘溫台二衛屯田著照此例盡徵收永著為例俾沿海丁民受減賦之益該部即遵諭行欽此

478 乾隆二年二月十六日內閣奉

上諭率土商民均吾赤子朕加恩惠養務令力量寬餘得以從容辦課其狡猾頑劣虧欠近年國課者自有國法不容寬貸若係遠年帶徵之項責令虧舊並完則商力未免竭蹶所當酌量變通者查長蘆衆商有舊欠未完銀十六萬有零又商人王至德有舊欠內務府帑銀十萬兩有零俱係從前積累現在帶徵之項非現年額課可比著將衆商所欠之數從乾隆元年為始分作十二年徵收王至德所欠內務府之數從乾隆元年七月為始分限十三年完文以昭朕優恤商民之至意欽此

479 乾隆二年二月十八日總理事務王大臣奉

上諭今年農事將興正百姓力田耕作時也茲二月二十二日恭送

孝敬憲皇后梓宮往

泰陵所過州縣應納錢糧雖免但恐應役多人致妨

南畝其令地方有司毋許先期派民洒道清釐種

種滋擾扈從人員有蹂躪麥苗途中滋事者許直

隸總督即時劾奏以副朕惠愛農民之意欽此

480 同日內閣奉

上諭聞德湖南常德府知府李元英與巡撫高其倬

有甥舅之誼同在一省終屬未便著將李元英交

與督臣史貽直撫臣鍾保以湖北知府缺酌量互

相調補欽此

481 同日內閣奉

上諭廣東提督員缺著福建南澳鎮總兵張天駿署

理南澳鎮總兵員缺著廣東惠州協副將馬成林

署理欽此

482 乾隆二年二月二十日內閣奉

旨聞得天津總兵官孫士魁不能管兵丁著來京署

理臺儀衛臺儀使事務天津總兵官員缺著黃廷

桂前往署理欽此

483 乾隆二年二月二十日署都統事務和碩恒親

王弘旺等議覆總理事務王大臣等所議收取

地租以為貧乏兵丁恒產一案具奏本日

召入王大臣等奉

上諭從前入官旗人之地理應賞還旗人俾得生路

但旗地與民地不同不便交卸是以特交爾等八

旗大臣辦理今爾等議稱入官地畝從前定租額

本輕徒致州縣吏胥中飽請派員前往另行秉公

更定等語現在入官地畝之租較之民人佃種旗

地之租為數實少而此項入官之地原屬旗地與

民人交納錢糧之地不同雖經官定租額而百姓

不知仍納重租以致吏胥中飽今因地定租固為

允協但愚民不明事理或忘生疑意謂增添租額

亦未可定夫旗人人民人均吾赤子朕一視同仁並

無岐待著交與直督出示曉諭若無從前弊端即

令該督保題停止增添又議稱似此一定之後交

與地方官按年照數收租解部等語夫年歲之豐

歎不齊如遇歉收之歲仍照定數徵租則百姓未免受累其早澇之年作何減收豐稔之年作何補納之處著各該州縣官隨年歲之豐歉酌量辦理報明該旂仍報部存案以備稽察倘有藉端朦混不據實辦理者即著該旂該督查奏又爾等議覆內稱查明京城空間之地若可以蓋造房屋即將所得租息蓋造賞給無業貧民人居住之處臣等詳加查勘另行具奏等語所議甚是朕為八旂無業之人不得房屋居住時為籌畫但未知京城有空間之地今既有空地爾等可查勘明白議奏但蓋造房屋若止動用今年之租則所得房屋無幾若俟積年之租始行蓋造則又至遲延在圓明園原有優劣二營官兵居住之房爾等於查明空地議定蓋造房屋之時即將此二營房屋折用其運京腳價及蓋造之費於今年租內動用賞給貧人居住之處詳悉籌畫議奏俟行之數年所有空地蓋造已遍之後再將續得地租作何賞給旂人或另用於旂人有益之地臨期再行議奏至於爾等八旂遠派前查者之恭領等著帶領引見並傳

諭總督李衛於伊所屬之同知等官內揀選八員派定旂分會同旂員與該地方官公同辦理餘依議欽此

484 乾隆二年二月二十一日內閣奉

上諭前據禮部奏稱向來點主有穿蟒袍之例今

世宗憲皇帝點主日期在二十七月服制之內除派出

點主之大臣穿朝服外朕與大臣等俱穿素服不

綴纓等語朕思服制之內以穿素服為但點主乃

係

皇考萬年崇祀之吉禮朕與臣工在

隆恩殿行禮時俱應從吉冠纓纓可傳諭禮部知之

欽此

485 乾隆二年二月二十三日內閣奉

上諭劉於義已奉旨來京甘肅巡撫員缺著古北口

提督德沛補授古北口提督員缺著副都統瞻岱

補授瞻岱所管歸化城工程著玉山前往管理欽

此

486 乾隆二年二月二十三日奉

上諭三月初二日

世宗憲皇帝梓宮奉安

地宮初五日行

升祔大典朕於初四日進京預備迎接行禮

皇太后若亦於兩日內回京途間未免勞頓應從容行

走於初五日進京著預行傳諭各該處知之欽此

487 乾隆二年二月二十五日內閣奉

上諭雲南迤東道員缺朕前降旨將永泰補授今據

總督尹繼善奏稱迤東道一缺分巡十三府地方

甚為緊要非勤慎諳練之人不能勝任查有雲南

府知府儲之盤據守廉謹才具明練上年大計荐

舉卓異現委署迤東道印務可否蒙恩補授則人

地相宜於邊疆甚有裨益等語迤東道印務為滇省要

缺儲之盤又為熟練地方情形之員著照尹繼善

所請將儲之盤補授迤東道奉可於留於滇省俟

有事簡道員缺出再行題補欽此

488 乾隆二年二月二十七日內閣奉

上諭

洞庭湖神福佑一方靈應顯著君山神廟載在祀典

所有春秋祭品禮儀應動用正項錢糧辦理著照

湘江江神之例一體開銷以昭敬禮

明神至意禮部即遵諭行特諭

489 同日內閣奉

上諭前年逆苗不法首先調撥滇省兵丁前往會勦

聞彼時干把外委及兵丁等啟行之際不無繁費

除各項賞費外尚有預借之俸餉及出征年餘時

日既久又有在軍前借支銀兩以助資斧者今大

軍凱還弁兵各回營汛例應於俸餉內按月扣還

朕念弁兵等曾經効力軍前所有現領俸餉止足

供目前之養贍難以抵前項著總督尹繼善查明

悉行豁免以示朕優恤邊遠弁兵之至意特諭欽此



490 乾隆二年二月二十九日內閣奉

上諭安徽巡撫趙國麟陞辭回任奏稱使道過山東  
本籍懇請給假十日祭掃塋墓等語著照所請給  
假十餘日回籍祭掃祖塋可傳諭該部知之欽此

491 乾隆二年三月初二日總理事務王大臣奉

上諭履親王自辦理

皇考大事以來小心恪慎此次恭送

孝敬憲皇后梓宮至

泰陵及奉安地宮

地宮一切典禮王殫心宣力不辭勞瘁悉皆本於敬誠

甚屬可嘉著交宗人府議叙具奏欽此

492 同日總理事務王大臣奉

上諭今日

世宗憲皇帝

孝敬憲皇后梓宮安奉

地宮所有在事官員及匠役等應加恩賞春著該管大

臣查明具奏欽此

493 乾隆二年三月初三日內閣奉

吉據總河高斌奏毛城鋪開濟引河一案有面奏情  
形著准其馳驛來京欽此

494 同日內閣奉

旨程元章著實授刑部侍郎欽此

495 乾隆二年三月初六日内閣奉

上諭大學士張廷玉左都御史福敏俱奉旨入閣所  
有翰林院應奏之文章及應行事件著汪由敦暫  
行管理欵此

496 乾隆二年三月初八日内閣奉

上諭內閣禮部工部欵惟

皇考世宗憲皇帝兼道經猷建中立極思羣海宇溥樂

利於萬方德配

蒼穹詒憲章於百世鴻模駿烈史不勝書今

泰陵大禮告成應恭建

聖德神功碑昭示無極朕祇承基緒敬念

先猷謹於齋居之次灑淚濡臺換述碑文玉揚

懿鏢雖蕩蕩巍巍之盛蹟非言語文字所能傳即竭力

鋪陳莫罄萬一而言言紀實足以傳信千秋光昭

瑰瑛所有相度方位建立碑亭及應行典禮內閣

禮部工部敬謹詳議具奏欵此

497 乾隆二年三月初九日内閣奉

上諭易州

御史

山陵事竣所派巡察恆文給事中陳履平著回京欵此

498 同日内閣奉

上諭福建汀州鎮總兵官王朝璘材具庸常年力衰

邁不稱巖疆要任著留京俟有漢軍副都統缺出

該部請旨其汀州鎮員缺著浙江定海鎮總兵官

林君陞調補所遺定海鎮員缺著大學士稽曾筠

於所屬副將內揀選題補欵此

499 乾隆二年三月初十日内閣奉

上諭滿洲殺死滿洲即行正法當日立法嚴使人不

敢輕犯原屬保全之意今滿洲生齒日繁且知道

守法度相殘之事甚少舊定旂民條例未免輕重

懸殊所當隨時更定酌議畫一著九卿會同八旗

都統詳確定議具奏欵此

500

乾隆二年三月十一日奉

旨原任甘肅巡撫許容著該部帶領引見欽此

501

同日內閣奉

上諭直省設立養濟院收養孤貧月給銀米計口授食俾官主其事吏胥毋得中飽法至周也但聞州縣舊例給發孤貧口糧進小建不扣過閏月不加試思寡孤獨疾痲殘廢之眾既無營生又非乞丐若年歲逢閏一月無糧其何以存活著該部通行直省督撫嗣後孤貧口糧皆計日給發小建可扣閏月糧應加務使均沾實惠以副朕勤求民隱之至意欽此

502 乾隆二年三月十一日內閣奉

上諭給與僧道度牒一事朕前後兩頒諭旨明切曉示莫督撫有司辦理妥協昨聞及安徽巡撫趙國麟據伊奏稱有此一番澄汰嗣後使可不必再給度牒等語朕不知趙國麟之意將以度牒為多事滋擾而不必給耶抑謂釋道之教應行禁絕而嗣

後無庸給發遂不許人為僧道耶恐直省督撫未必能如是精明強固不動聲色遂使天下無一僧道也夫朕之酌復度牒本以僧道徒眾太繁賢愚溷雜其中多童稚孤貧父母親戚主張出家而非其所願者亦有托跡緇黃利其財產仍然蕩檢踰關者甚至匪類作姦犯科不得已而難髮道極以避通詰藏垢納污無所不至是以給發度牒命有所稽考亦如民間之有保甲不致藏奸貢監之有執照不容假冒果能奉行盡善則教律整飭而閭閻亦覺肅清豈欲繁為法禁苦累方外之民耶夫釋道原以異端然誦經讀書而罔顧行檢者其得罪聖賢視異端尤甚焉且如呈相雜流及回回天主等教國家功令原未嘗概行禁絕彼為僧為道亦不過營生之一術耳窮老孤獨多賴以存活其勸善戒惡化導愚頑亦不無小補帝王法天立道博愛無私將使天下含生之類無一不得其所僧道果能閉戶焚修亦如隱逸之士避跡山林於世教非大有害豈忍盡驅遷俗使失業無依或致顛連以終世哉至于少年為尼常起心志未定別生

事端故待年已長成始許披髮亦非盡絕其教也  
若云僧道多一人則盡力南畝者少一人怨目今  
不為僧道者未必皆肯盡力南畝者也朕令直省  
督撫年終彙題即欲徐徐辦理之意而並非謂目  
下盡行禁絕之人之為僧道也據趙國麟此奏悞  
會朕意恐他省督撫尚有似此者故再行申諭務  
體朕撫育群生物各得所之意詳悉妥議徐徐辦  
理又前年以民間喜建寺廟而舊時寺廟傾圮者  
多特諭止許修葺舊寺廟近聞舊址重修者絕少  
間有新建寺廟者地方官並不將朕諭旨宣布闕  
導此亦奉行不謹急忽從事之一端並諭令直省  
督撫知之特諭欽此

503 乾隆二年三月十三日總理事務王大臣奉  
旨著散秩大臣保德為正使頭等侍衛多爾濟為副  
使今

### 世宗憲皇帝配

天在即野有兩次詔書併作一次頒發以省外藩供應  
其直隸各省及蒙古地方所頒詔書亦著併為一  
次以免疲勞驛站欽此

504 乾隆二年三月十六日內閣奉  
上諭原任蘄州廵撫顧琮著不美俸協辦吏部尚書  
事欽此

505 同日內閣奉  
上諭工部尚書涂天相在學士東行走俞兆晟乃降  
調革職之員朕以其曾在部中辦事之人故特加  
錄用乃二人一無建白性以庸懦保位為事大負  
朕擢用之意且年皆老邁著給與三品頂帶各回  
原籍其工部尚書缺著趙弘恩補授欽此

506 同日內閣奉  
上諭國學乃教育人才之地必董率者有方斯俊秀  
之輩出刑部尚書孫嘉淦尚識正學之宗人品亦  
甚端方著提管國子監事欽此

507 戶部請照奉天牛馬稅一本奉  
旨明日帶人引見欽此

508 乾隆二年三月十九日內閣奉

上諭廣東潮州鹽運司運同張士璉著補授惠州府知府欽此

509 乾隆二年三月二十日總理事務王大臣奉

上諭農事方興需雨甚殷雖十五日得雨尚未霑足朕心深為願望著諭禮部虔誠祈禱欽此

510 同日總理事務王大臣奉

上諭單誼所奏二事俱是著交部議叙欽此

511 乾隆二年三月二十一日奉

旨聞得廣州將軍張正興總督鄂彌達結為兒女婿親張正興鄂彌達俱係地方大員既結姻親不便同省辦事張正興著調補福州將軍阿爾賽著調補廣州將軍凡地方大員同省辦事者互結姻親則嫌疑在所不免且於公事亦不事掣肘嗣後各宜留意以免嫌疑之迹欽此

512 乾隆二年三月二十三日內閣奉

上諭朕原因楊昶不勝川撫是以命伊來京而以王士俊代之既而王士俊因事革職以一時不得其人是以仍命彼前往臨行之際復諄諄告誡以吏治民生之故今自回任後並無悛改之心而玩視民瘼一味挾私于吏治民生毫無裨益大負朕權用之恩著革職在川以已力保固瀘寧工程五年再行請旨四川巡撫著碩色調補陝西巡撫員缺著倉場侍郎署理即前往任事不必來京欽此

513 乾隆二年三月二十四日奉

旨湖北巡撫鍾保著來京候旨湖北巡撫員缺著廣東巡撫楊永斌調補廣東巡撫員缺著尹會一前往署理巡視兩淮鹽政著天津鹽政三保去欽此

514 同日奉

上諭道府等官皆屬親民要職必才幹素著廉潔自持者方克勝任是以

皇考當日曾令督撫兩司各行保舉今朕仿照此例着於各省道府官內令督撫藩臬各據所知保舉一二員或二三員俱各密封具奏不得會同商酌如所保之人不當日後劣蹟敗露將保奏上司一併治罪欽此

515 乾隆二年三月二十四日奉內閣奉

上諭自貴州用兵以來楚省運糶軍糈前後共計四十餘萬俱按期備運並無遲悞辦理糧運官頗屬勤勞着湖廣總督史貽直查奏交部分別議叙欽此

516 乾隆二年三月二十四日內閣奉

上諭朕即位以來屢下求賢之詔寔冀科道諸臣各抒忠蓋凡有見聞即據寔陳奏俾無壅蔽乃近見

進言諸臣仍多揣摩迎合之意竟有悉屬浮言毫無實際如御史謝濟世所奏者據稱有罪復用之人如隆昇者國人皆曰不可近來如隆昇者更多等語果如謝濟世所言伊身為言官即應指明事蹟寔舉姓名不應為此含糊之論又稱王士俊速勘赦回項聞清問及之議者以為將來不藩司必臬司等語王士俊之罪彰明較著原無可復用之理前日朕問及者欲令其赴軍臺効力因其已經回籍故未降旨今謝濟世所奏乃謂欲用為藩臬不知何所見而為此臆度之語又稱官員在任守制已奉特諭停止而近日督撫又漸次請行等語近來督撫並未有陳請官員在任守制者惟湖南辰永靖道李珣因承辦貴州軍糧現運在途遇有親喪曾經該撫高其倬題請暫留部議令其事竣回籍守制亦非竟在任守制也今謝濟世漸次請行之語又何所指乎又稱監生不准考職經九卿翰詹科道議准永行停止昨悉詔內有監生仍准考職一款夫考職者入仕之路也既准捐監又准考職者是復開捐之張本等語貢監考授職銜原

屬舊例蓋因州縣佐雜貳既不使用科甲又不便  
用吏員出身之人是以將貢監按年考職挨次補  
用從前候選人員壅滯尚可議停今既不開捐例  
若再永停考職則數十年後佐貳一官無人銓補  
今謝濟世乃以考職為開捐張本夫考職與開捐  
有何關涉而為此支離之語乎又謝濟世奏稱半  
年以來非無可言之事而無進言之人此臣之所  
以不能已於言等語夫半年以來既有可言之事  
謝濟世職司獻納何以不行陳奏且半年以來何  
常無進言之人豈謝濟世獨罔聞知乎乃稱因無  
進言之人而不能已於言則顯懷詭觀望之私且  
多詭譎之意前後語言誕妄支離本應交部嚴加  
議處以為妄行瀆奏者戒但朕念切求言豈因一  
昏愚無知之謝濟世遂阻進言之路故寬免交部  
着嚴行申飭伊若以為事有確據着將伊摺內所  
陳一一明白回奏從來言陋習相沿多由迎合若  
人主意在綜核臣工率刻意吹毛求疵巧避瞻徇  
之跡而置君德于不問若人主意在樂聞已過則  
又往、於朝廷之政事吏治得失不一言及甚有

臣工不能靖共羣僚或植黨援曾不敢一指摘以  
遠嫌避害惟事撫拾陳言以自活能攻君之名是  
其居心之陰巧乃國家之大蠹也朕孜孜、求治常  
恐不及使偶有闕失言官果能切實指陳朕自樂  
於聽受即大臣中或有過青果能據實彈劾亦足  
為用人鑑戒若徒剽襲膚詞則史冊俱在儘足披  
覽何用伊等喋、陳奏乎今觀謝濟世所奏多係  
揣摩迎合之意是以一一剖晰開示諸臣倘錯會  
朕意轉生畏蕙之念則又不知朕推誠布公之心  
者也着傳諭各科道知之欽此

517 乾隆二年三月二十六日奉

上諭昨曾降旨着尹會一署理廣東巡撫今尹會一  
以伊母年逾七旬不能赴任就養為辭情甚懇切  
着調署河南巡撫王夔着前往署理廣東巡撫欽  
此

518 乾隆二年三月二十六日奉  
旨巡視天津鹽政著準泰去欽此

519 同日奉  
旨廣西蒼梧道員缺著德希<sub>詩</sub>補授欽此

520 同日奉

上諭雨澤愆期已逾旬日漸有亢旱之象朕心深為  
憂灼從來雨暘不時類言修省朕思人主敬  
天勤民修省之念固無一時可釋若待災祲已兆然後  
言修省則褻

天已甚朕即位以來兢業之衷無敢少間惟當於此益  
加謹凜耳古人所謂齋居撤樂朕在二十七月之  
內率以為常即減膳等事朕亦惟躬自行之無俟  
宣示臣工也至於九卿大臣等受朕簡畀自應共  
矢敬

天之誠靖共厥職若因亢旱而召入諸臣面加訓諭是  
即委過臣下之意朕所不為亦非所以重待諸臣  
也惟在諸臣自加省惕風夜自勉以邀

上天之垂鑒而已立夏前後若再無雨澤則秋田難於  
播種小民恐有艱食之虞應作何預為籌畫之處  
著總理事務王大臣詳議具奏欽此

521 乾隆二年三月二十六日奉

旨此案稽延已久從前屢經審理總未得有實情以  
成信讞是以特交九卿會議以九卿自能確核詳  
勘實指是非以定此案也今覽所奏仍不能確有  
所見奏請文與新任巡撫查審其鄭州知州陳廷  
謨請革職及承審各官俱秉公細訊其弓勳等輪  
姦屬虛令按察使勒緝正犯等語是九卿等所議  
案情既與孫嘉淦所審約畧相符而孫嘉淦請將  
富德吳應榮等交部分別審議之處又竟不議及  
則九卿等之不無瞻顧亦屬顯然矣夫以九卿不  
能確定之案推與新任巡撫能保新任巡撫之果  
得實情乎九卿尚不能不瞻顧富德吳應榮能必  
新任巡撫之不瞻顧富德吳應榮乎書曰罪疑惟  
輕與其殺不辜寧失不經此案情節既經孫嘉淦  
等審得子勳等均非正犯應另行勒緝若如孫嘉



淦所審結案即有錯悞不過失出亦屬罪疑惟輕之義著照孫嘉淦等所審完結富德著交部嚴加議處吳應茶伊爾敦著交部議處李慎修黃叔璥著交部嚴加察議鄭州知州陳廷謨著革職解京交九卿確審具奏欽此

522 乾隆二年三月二十八日內閣奉

上諭朕以兩澤愆期亢旱有象甚為憂灼不勝省惕因念刑獄一事自大赦之後囹圄所繫無幾而直省通緝人犯在恩赦以前者向以該犯未獲懸案緝拿其中有不應赦者有應赦者其應赦之人雖拿獲到案仍免其罪而該犯已受拘繫之苦殊堪憫惻著該部立連通行各省除必不應赦者仍行通緝外其與赦款相符者一概免其通緝有在本案牽連待質之犯亦即予釋放至現今刑部羈禁之人有似此等牽連待質者無論赦前赦後或釋放或取保著該堂官即行酌量辦理以示矜恤欽此

523 乾隆二年三月二十九日奉

諭時值亢旱兩澤未降凡所以弭災之道俱應籌畫已屢降諭旨矣今思婚姻以時王化所重怨女曠夫宜加優卹現在八旗內務府兵丁閒散人等內男女有年二十八歲以上或已經締姻力不能嫁娶或因家計貧乏井不及議姻者著每名賞銀十五兩以完其婚嫁之事其內務府壯丁有似此者著賞銀七兩其應用何項錢糧作何辦理之處著八旗大臣會同內務府速行詳議具奏欽此

524 乾隆二年三月三十日內閣奉

上諭八旗食錢糧之人所借公庫銀兩其四月分應坐扣者著暫行停扣全結一月錢糧至五月再行坐扣該部即遵諭行欽此

525 乾隆二年四月初一日總理事務王大臣奉

上諭日來廷臣奏事甚稀科道官亦少所建白得毋謂天久不雨朕心憂惻恐重以煩朕以是為愛君耶陽愆陰伏正宜君臣交警恐懼修省勤思至道不敢少自暇逸以仰邀

天鑒若以是為愛君非朕所樂受亦非古賢臣所以愛君之道也總理事務處及九卿八旂所有應辦應奏諸務各當悉心體國日有孜孜科道官於民生之疾苦時政之得失尤當直陳不諱俾朕得納察善言釐清庶務以踐畏

天憫民之實事儻因循緘默懈事廢時不獨非愛君之道且將重朕不德豈朕所望於諸臣亦豈爾諸臣厚於自待之道歟其咸喻朕意毋忽欽此

526 乾隆二年四月初二日內閣奉

上諭前因淮揚運河築壩挑濬計需半年之期兩淮引鹽應預行捆運所有預運鹽勸請單呈綱應納錢糧恐商力不無竭蹶已降諭旨令緩至加勸時一并完納今朕思商人資本盈絀不同而預運與

正運一齊趕辦恐其中仍不免有竭蹶之虞著將淮南丁已綱正運引鹽未築壩以前運到儀所過掣者其應納請單呈綱錢糧各先完納一半餘聽陸續完納總限奏銷之時全數通完俾商人更得通融辦理欽此

527 同日內閣奉

上諭湖北驛鹽道程世綬著調來京引見其員缺著朱倫瀚速行前往署理欽此

528 同日內閣奉

旨山東沂州府知府員缺著保定理事同知派爾察補授欽此

529 同日內閣奉

旨四川瓦寺土司世守恭順効力輸誠數年以來該土司桑朗容忠允遇遺恙能統率所屬奮勇向前著有勞績著賞給宣慰司職銜以示鼓勵欽此

530 乾隆二年四月初三日總理事務王大臣奉

上諭邇來雨澤愆期民間米價較前稍長且因從前

倉場條奏官倉糶米甚多春季官兵祿廩全以糶米  
支給是以老米價值更昂現在五城存廠米石甚  
少而赴買者甚衆當此青黃不接之時若不預為  
籌畫恐奸商居奇市價難平減著戶部作速行文  
倉場將存倉老米每城撥二三千石照減定價值  
發糶如有不敷再行撥給嗣後支放祿廩之時各  
色米石應照舊例搭放不必一季全放糶米如倉  
場各倉老米數少不足支放而糶米過多慮致紅  
朽應令辦漕省分如何通融辦理之處該部詳議  
具奏欽此

531 乾隆二年四月初六日總理事務王大臣奉

上諭雨澤愆期恐有滯獄前已降旨刑部將牽連待  
質人犯及枷責輕罪俱行核明省釋至于雍正十  
三年兩次恩詔後仍行監禁者原係不應赦免之  
人上年秋審時已令九卿科道等將康熙五十二  
年至雍正三年以前不赦之案覆加分別減等其

雍正四年以後十三年以前所有不赦各案其中  
或有介于疑似及屢經秋審緩決之犯或尚有可  
矜亦未可定著總理事務王大臣會同刑部將秋  
審朝審冊詳加覆勘如果有一錢可原應行減  
等者即酌定請旨欽此

532 乾隆二年四月初六日內閣奉

上諭聞得江浙兩省民間輸納白糶較漕糶費用繁  
重甚屬艱難朕心深為軫念諭令該部詳查據奏  
兩省歲運白糶二十二萬餘石太常寺光祿寺各  
賓館需用二千餘石王公官員俸米約需十五六  
萬石內務府禁城兵丁及太監食用等項需一萬  
石尚餘五萬石存倉等語朕思光祿寺等處所支  
原以供祭祀及賓館之用在所必需其王公官員  
俸米應用白糶者可酌量減半以糶米抵給至賞  
給禁城兵丁及太監米石亦可將白糶裁減給以  
糶米如此則每年所需白糶不過十萬石仍照常  
徵收起運其餘十二萬石著漕運總督會同該督  
撫酌行改徵漕糧其經費銀米俱照漕例徵收以

紆民力至減除白糧數內應作何添放種米之處  
著戶部詳議具奏欽此

533 乾隆二年四月初六日總理事務王大臣奉

上諭朕前因蕭永等處屢遭水患應作何辦理為又  
安百姓之計令該督撫總河等勘明妥議嗣據該  
督撫等奏稱疏濬毛城舖迤下一帶河道經徐蕭  
睢宿靈虹等州縣下至泗州之安河陵門經埭曲  
折六百餘里以達於洪澤湖復出清口仍與黃會  
已經該部議行據淮揚京員夏之芳等連名陳奏  
以為未便朕以該員等生長淮揚所奏毛城舖引  
河不便開通之處果有所見亦未可定此事關係  
重大是以復降諭旨令總河會同該督撫悉心籌  
畫不可固執已見亦不可徇人言務期於運道  
民生萬全無弊今據高斌趙弘恩東京進呈河圖  
而奏情事乃知夏之芳等所奏俱非現在情形據  
夏之芳等稱毛城舖引河一開則高堰可危淮揚  
運道生民可慮今據高斌等奏稱毛城舖減水壩  
原因徐州一帶兩岸山勢夾束河水屢屢為患是

以前河臣靳輔於康熙十七年題明建設減下之  
水使歸洪湖以助清刷黃六十年來上下河道民  
生均受其益等語是現今毛城舖濬河乃因毛城  
舖壩以下舊有之河身淤阻量加挑浚使水有所  
歸並非開鑿毛城舖之壩也乃夏之芳等妄行添  
入開毛城舖之一語使朕亦不能無疑曾屢次批  
示高斌以不可固執已見而王大臣遂亦不能定  
此案淮揚百姓因夏之芳等倡議於京遂浮論百  
出而莫可止遏今據高斌趙弘恩東京奏稱乃舊  
有之河並非昔無而今始開通况減下之水紆迴  
曲折六百餘里經由楊疇等五湖為之停蓄一入  
湖邊即已澄清從無挾沙入洪湖之患亦無洪湖  
不能容納之虞又豈至如夏之芳等所言危高堰  
而妨淮揚之民生運道乎朕批閱河圖毛城舖口  
門外近年以來刷深支河十餘道前經高斌奏明  
現將毛城舖上游洩黃近溜支河全行堵閉惟留  
旁流之郭家口支河一道與下游倒勾水之定國  
寺支河一道相機分洩不令過多則將來毛城舖  
所洩之水較之從前尚為減去大半豈從前多洩

之水不為淮揚之害而此後少洩之水轉為淮揚之患乎况今高斌等議於毛城鋪口門中間築亂石深壩俾無冲深奪溜之虞則引河之水勢自不至奔湍迅疾從來洪湖之水蓄以濟運刷黃水少則淮弱黃強水多則高堰可慮數年以來河水微弱黃水每致倒灌入運今清口現議疏濬寬深則清水暢流無阻正慮清水暢洩有傷全湖元氣今益以毛城鋪洩下之水則足以助清刷黃而清水不患其弱且高家堰一堤

聖祖

世宗屢頒帑金修築堅固足為淮揚保障而天然一壩又經總理事務王大臣會同九卿定議非遇異漲不得輕開則淮揚州縣之水患自由此可免此現今毛城鋪引河之應行開濬情形也朕令高斌趙弘恩公同總理事務王大臣與夏之芳等悉心講論而夏之芳等身未親歷其地徒以惑於浮言復固執偏見及王大臣等略與辨論即多遁詞其原無定見可知矣今日忽據御史甄之璜鍾衡抗疏陳奏甄之璜奏稱毛城鋪開河淮揚百萬之衆憂

慮惶恐因致直隸地方雨澤愆期等語夫淮揚與直隸相隔數千里直隸之亢旱與毛城鋪引河何涉而乃為此支離誕妄之語鍾衡條奏二摺皆係毫無裨益之事將毛城鋪一案牽引叙入尤屬巧詐河防重務必須明白指陳尤須詳晰斟酌固不可偏執己見又豈可曲徇人言從前邵基晏斯盛等所奏尚不過徇於衆論拘於讖見而畢誼之奏亦止論衆議紛紜原未指陳可否今甄之璜鍾衡並未親歷河干確知河務且非淮揚本籍乃毅然奏請停止明係受人指使為先入之言挾黨營私豈為公論從來地方重務每妄生議論動有阻撓乃明季相沿之陋習此斷不可長甄之璜鍾衡著革職交部嚴審定議具奏夏之芳等既以冒昧之識阻撓河務於前又以巧詐之私希冀掩過於後此並非尋常奏對不實者比著交部嚴察議奏毛城鋪一案斷自朕見事屬應行者照九卿原議令總督慶復會同高斌確估定議具奏並將現在辦理情形有利無害之虞曉諭淮揚士民知之欽此

534

乾隆二年四月初七日內閣奉

上諭天時亢旱已逾兼旬現在虔誠祈禱尚未得沛甘露朕心深為憂惕

天神

地祇壇應竭誠致祭著禮部太常寺即查明典禮具奏

舉行欽此

535

乾隆二年四月初七日總理事務王大臣奉

上諭從來國家廣開言路原期明目達聰集思廣益

以有裨國是也無如人心不古率多觀望揣摩如不導之使言則緘默苟容以保祿位若屢下求言之詔則又或勒襲膚詞以博能攻君心之名甚且結黨植援欲阻撓公事以遂其私若不加懲創則經理庶務每致衆議紛紜羣言淆亂鮮不至僨事而傷道者此明季之陋習不可不防其漸也比來如河南鄭州一案孫嘉淦富德吳應霖等各持意見周琬一案都察院與鄂善攻相攻訐今毛城鋪一事又復衆論參差若此踵此而行徒有妨于國倖毫無益於公事且毛城鋪一案高斌趙弘恩來

京面陳情形甚為詳晰朕命總理事務王大臣等面問王之考等俱係遁詞伊等見事不能行又有甄之璜鍾衡為之陳奏其指使朋比更屬顯然而雅爾哈善援引漢文帝唐太宗故事歎寬其處分夫甄之璜鍾衡所奏並非規諫朕躬之失也國政所關不容擾亂是以治其阻撓之罪此乃遲退賞罰之大要豈可避有妨言路之嫌而置是非於不問乎雅爾哈善所奏甚屬錯謬因伊尚係拘于識見而非由于請託故從寬免其議處王大臣等可嚴行申飭並將朕旨曉諭之總之言路不可不開而公私不可不辨如果朕躬某事本當能直言其失朕必樂於聽受諸王大臣某事有誤能直指其非朕亦必為之獎許若無稽之言弗詢之謀既古聖人所不聽不庸而懷私挾詐希圖混淆政務尤當懲一警百此並非阻塞言路也科道諸臣中有誠心為國家者必不因一二人所言不當致羅廢今遂阻其直言敢諫之氣自當更有嘉謨嘉猷以圖入告其觀望迎合之輩或因此有所悚惕而不敢進言是亦無忠愛之誠無非為身名之計即使

進言其所進之言亦概可想見曾何足以匡君德而補政務乎朕萬幾在握中有定見必不因拘墟之見而有所清惑也欽此

536 乾隆二年四月初十日內閣奉

上諭淮安府知府楊應璠著調來京該部帶領引見  
淮安府負挾著白嶸著理令該督撫公同試看欽此

537 乾隆二年四月初十日總理事務王大臣奉

上諭京師兩澤愆期朕心深為憂慮聞河南山東兩省與直隸接壤之地兩亦稀少該撫等作何預為籌畫及近日曾否得雨供未詳悉奏聞定為輕視民瘼可著侍衛永興前往河南松福前往山東再各派戶部司官一員馳驛同往面詢該撫將實在情形并如何料理之處一一陳奏永興等亦沿途留心從前得雨分數此時乾旱情形地畝是否播種米價如何騰貴以及百姓情景若何之處著回時據實覆奏欽此

538 乾隆二年四月十二日內閣奉

上諭朕因天時亢旱齋居虔禱憂惕靡寧亦惟引為朕躬之責未嘗諉之臣下在九卿大臣等既膺簡畀重任自當仰体朕心共矢寅恭以邀

天鑒原不待朕之訓飭也今覽春山奏請自內閣部院各大臣及翰林科道即中等官除照常辦事外俱各輪班赴兩壇祈禱夜則於各衙門齋宿等語朕思諸臣宿祈禱齋宿亦祇奉為具文詎能昭格而庶官人數甚多倘有一二人其心以為不便而出於勉强則慢褻尤甚春山所奏無益且未悉朕不諉責臣下之意特曉諭臣下知之欽此

539 乾隆二年四月十二日總河高斌面奏臣

子廕生高恒懇請仍留任所奉  
旨著照所請行欽此

540 乾隆二年四月十三日內閣奉

上諭各省督撫題補人負因格於部例而要地需人  
遂許其摺奏允從所請以致違例陞用者頗多在  
各省督撫心中心乎國家為人材起見者豈無其  
人而因許摺奏遂於其中或同年或同鄉或世誼  
或世誼之同鄉違例摺奏補用者寔繁有徒矣夫  
以朝廷之官階豈可為私門之桃李嗣後督撫摺  
奏補用人負者著於摺內聲明本人科分籍貫以  
憑朕酌奪焉欽此

541 乾隆二年四月十三日內閣奉

上諭聞安徽所屬地方應試童生有完納卷價之陋  
例其費彙交知府直隸州除修葺考棚外其餘則  
補學政養廉之不足雖每童所出不過錢數十文  
而在貧寒書生亦不免拮据之苦且學政養廉朕  
已特頒諭旨加至四十兩甚屬寬裕更不必取資  
於卷價至於修葺考棚乃地方之公事應動存公  
銀兩辦理者著將童生交納卷價一事永行停止  
毋使不肖官貲及胥吏人等借名苛索致滋擾累

欽此

542 乾隆二年四月十三日奉

皇考配

天頒詔尚在二十七月之內所請陞殿慶賀之禮  
不必舉行欽此

543 乾隆二年四月十四日總理事務王大臣  
奉

上諭據朱士俊奏稱秋審可矜人犯減等者皆  
於該犯名下追出埋葬銀兩乾隆元年赦免  
各犯其被害之窮民未加矜恤等語從來命  
犯凡遇赦宥俱追埋葬銀二十兩給付死者  
之家如果十分貧苦則量追一半此定例也  
朕覽刑部本章現在俱照此辦理並無更改  
朱士俊身為御史法司案件例應列銜畫題  
而乃懵然不知冒昧陳奏甚屬不合著嚴行  
申飭將原摺發還欽此



544 乾隆二年四月十五日總理事務王大臣  
奉

上諭昔年

皇考軫念部務繁多之尚書侍郎

特恩加賜雙俸並令遇有罰俸處分免罰加賜之

恩俸此格外之曠典也上年朕將在京文員

俸銀槩加一倍大小均沾雖名<sup>恩</sup>俸實<sup>即</sup>正俸

也若遇處分時亦照從前部堂之例不罰加

增之俸是在京文員竟無罰俸之事何以示

懲且與武員事不畫一未免偏枯勢不可行

嗣後大小京員遇有罰俸案件將本身應得

俸銀按年按月計算不必分晰扣除欽此

545 乾隆二年四月十五日總理事務王大臣  
奉

奉

上諭蘇州巡撫邵基在上書房行走數年資性

聰明頗曉世務朕深知其為人料伊亦必知

朕之用人理政多能照察自當小心奉公恪

守繩墨不敢稍有踰越則封疆重寄尚可勝

任此朕簡用邵基之本意也乃自伊到任以  
來所辦事件尚未見何如而題補官員一節  
則不能無私如臬司戴永椿知府王喬林石  
杰知州褚菊書皆其同鄉道員李梅賓盧見  
曾皆其同年今又具摺將革職通判王延熙  
請署直隸通州知州通州知州張桐請署准  
安知府查王延熙又係伊之同鄉而張桐即  
大學士張廷玉之姪也夫督撫薦舉人材乃  
封疆第一要務即循例保題者尚當稍避嫌  
疑况越格逾例題陞題補而可任意行之乎  
觀邵基意中竟以朕之待彼深信不疑而為  
此舉動不知檢束是朕知邵基而邵基竟不  
能知朕矣若踵此而行將來必致大負朕恩  
爾等可傳旨嚴行申飭嗣後當洗心滌慮痛  
加悔改毋蹈前轍自取罪愆欽此

546 乾隆二年四月十七日總理事務王大臣  
奉

奉

上諭傅爾丹陳泰岳鍾琪貽誤軍機罪無可宥

我

皇考念傅爾丹陳泰祖父俱有功勳而岳鍾琪從前亦曾効力是以未將伊等正法朕仰體

皇考聖心將來秋審時亦必不行勾決但前此用兵之際不便遽行釋放今軍務已竣朕矜恤之意不忍使之久繫囹圄俱着寬釋令其自愧欽此

547 乾隆二年四月十七日奉

上諭這查奏情節稍有可原之王邦彥羅明忠布瞻高生蘭趙子祿楊友安孫芳曹六呂登琰赫赫傳永阿爾布山劉天奇朱九思劉君祥李宗英劉起鳳馬進才徐德公羅八朱成元羅布倉什爾哈薛成徐國泰郝發蘇劉進安吳五安四大眼兒巴金泰俱着照例減等發落其情無可原三格等二十四起該部查明情節具摺奏聞欽此

548 乾隆二年四月十七日總理事務王大臣

奉

上諭據禮部奏稱本月十六日恭奉

世宗憲皇帝配享

園丘禮成辰刻甘霖立沛仰見皇上至孝至敬之

誠感格

天心其應如嚮自後可望雨澤時行今禁屠祈禱

將近彌月可否謝雨之處具奏請旨等語昨

朕奉

皇考配享

園丘禮成辰刻雖經得雨尚未霑足且昨晚今早

仍復多風如我君臣遽以得雨為昭格

天心朕表實為抱愧吾誰欺欺天乎即爾等王大

臣亦當如此存心如此誠奏也但禁止屠宰已

將彌月物價漸致騰貴民間多有未便其僧

道誦經原屬儀文亦非切務著照禮部所請

停止至於朕在齋居躬行減膳虔誠祈禱自

不敢稍減於前况朕屢念農功為民請命當

該部未經求雨之時早已積誠於中無時有

間惟

上天鑒此忱悃朕亦不以此宣示臣民也該部所  
奏謝雨之禮且不必行應俟霖雨既渥之後  
再竭誠叩答

神貺欽此

549 乾隆二年四月十八日總理事務王大臣

奉

上諭今年春夏以來京師及畿輔雨澤稀少而  
山東地方亦有缺雨之郡縣朕已屢降諭旨  
多方籌畫以為先事之備今思節近小滿甘  
霖未降麥秋料已失望民心未免惶懼除已  
經降旨緩徵外著將直隸通省今年應徵地  
丁錢糧蠲免七十萬兩山東通省今年應徵  
地丁錢糧蠲免一百萬兩俾民力寬舒民氣  
愉暢如將來仰蒙

天佑霖雨普施秋成不致歉薄則閭閻霑朕格外  
之恩亦加惠元元之誼所謂百姓足君孰與  
不足者也嗣後如得雨羈遲有妨農事則應  
行賑恤等事仍應加意辦理毋使一夫失所

該督撫當仰體朕宵旰焦勞惠養黎庶之心  
督率有司敬謹奉行務使小民均霑實惠并  
出示通行曉諭知之欽此

550 同日奉

旨此摺內尚有情罪稍輕之三格綽奇厄進泰  
保全馬修天亦著照例減等發落欽此

551 乾隆二年四月十九日總理事務王大臣

奉

上諭朕前因御史夏之芳等陳奏毛城舖之事  
感於浮言復固執偏見王大臣等正在考訂  
間而御史甄之璜鍾衡復為陳奏顯有指使  
附和阻撓公事之意是以將鍾之璜鍾衡革  
職交部嚴審夏之芳等交部嚴察議奏蓋國  
政所關不容紊亂若以私意阻撓則害理而  
傷治此風斷不可長並非以言官所言不當  
而即加以處分也今朕思伊等固有應得之

處分但恐識見卑庸之人謂朕加罪言官或畏蕙觀望即確有聞見亦緘默不言則大非朕求言之本意矣甄之璜鍾衡從寬免其治罪著降三級仍留御史之任夏之芳等以淮揚之人言河工之事雖所言失實而情尚可原著一併免其議處欽此

552 乾隆二年四月十九日總理事務王大臣奉

上諭朕因直隸山東雨澤稀少特降旨平糶以濟民食又遣侍衛等前往察勘地方情形據奏稱山東州縣雖有發賣官穀之舉不過設廠數處糶買人眾在本處居民尚有不能按日得買者至路遠之民往返維艱守候終日曾不得升斗而歸仍向市集糶米糊口以此價值不得平減直隸較理較山稍為妥協等語夫平糶乃利濟貧民第一要務應俾均沾寔惠如離府縣城郭遙遠之鄉村亦當設法運至如脚價無出或動存公銀兩或開銷正項錢糧皆朕所不惜何至遠鄉之人艱於奔赴至于近地居民不能按日得買則明係胥吏為奸棍徒

作弊之所致該有司如何漫不經心草率從事而封疆大吏有牧民之責者置民瘼于不問也此旨到日該撫悉心查察選委幹員寔心奉行毋蹈前轍直隸所辦雖較勝山東總督李衛亦當加意料理毋使一夫失所朕仍不時遣人查察倘有疎忽之處惟該督撫是問著該督撫將朕此旨曉諭百姓務使遠壤均霑實惠欽此

553 乾隆二年四月十九日總理事務王大臣奉

上諭允祹允前通因獲罪削爵圈禁論其獲罪原委並無屈抑之處但朕念伊等為天潢一派自加恩寬釋以來亦皆深知前非自悔自艾安分家居未嘗生事今復加恩賜給伊等公爵空銜不必食俸仍令在家居住其各安靜守法以副朕篤厚宗支之意該衙門即遵諭就第傳諭知之欽此

554 乾隆二年四月十九日總理事務王大臣奉

上諭五城平糶米石原以周濟小民乃有奸民圖利串通胥役轉相販賣甚至運往通州售為燒鍋之用而離廠稍遠之貧民奔赴稍遲即不得升斗且有守候終日忽然停止糶賣貧民含怨空回珠貝朕軫念民食之意步軍統領鄂善侍郎託時即將作弊之人查拿甚屬可嘉至該城御史於糶米要務約束稽查是其專責乃不能督率司員等官親加查察一任弊端疊出怠玩已極著將該城御史及監糶各官並該司坊官交部嚴加議處都察院堂官見朕宵旰焦勞為民壽畫即每日親至米廠逐一釐剔亦分所宜然今既不能親往省視又不覺察弊端伊等所司何事著明白回奏欽此

555 乾隆二年四月十九日總理事務王大臣奉

上諭上年滇省州縣有收成歉薄之處前已降旨將成灾地方應徵地丁等項照例豁免應收秋米從乾隆二年為始分作三年帶徵今雖據雲南督撫

奏報今春雨暘時若可望豐收但朕思滇省百姓既有帶徵之秋米又有應納之正供昨歲歉收之後輸納未免艱難朕心深為軫念著將乾隆元年分滇雲南省所有分作三年帶徵之秋糧全行豁免該督撫等即通行曉諭仍嚴飭州縣實力奉行務使閭閻均沾實惠再滇省有將文職各職俸工銀兩捐抵康熙五十九年以前軍需案內供應出師官兵人役盤費及犒賞等項事已多年現在各官俱非向日之承辦者所有未完銀七萬餘兩著悉行豁免不必再行捐扣欽此

556 乾隆二年四月十九日奉

上諭王奕清為伊父原任大學士王掇求請卹典情詞懇切當日不能深知

聖祖默定儲位之聖心冒昧瀆奏固屬不合但伊身居政府為國本起見尚屬分所應言今朕垂念舊臣加恩宥過其應得卹典該部察例具奏王奕清准給假回籍欽此

557 乾隆二年四月二十日奉

旨這查恭情節稍有可原之高禿子王閏月牛白子

穆葉果穆皮稜賈藝楊自智呂國棟張三魏熿孫

孟林張明旺馬二小劉存兜劉起文李名臣孫進

才孫進保李才順劉爾林劉廣福李祥東秦二王

文燦張國勳薛七石閏月趙相馮旺耿學曾正誠

尹世蘭宋伏保楊道虎路倉兒郭花子李十哥兒

李達子俱著照例減等發落欽此

558 乾隆二年四月二十一日奉

上諭雲南總督尹繼善著來京陛見應於何時起程

令伊自行酌量其總督印務照例交與巡撫張允

隨暫行署理欽此

559 乾隆二年四月二十四日奉

旨這查奏情節稍有可原之盧欽心存胡五孫洪史

四張持于得付李三王柱李會生吳發基安五張

朝佐仇小申徐敬一程加福程加進張樞薄漢三

遲鐸劉玉蕭天保曹五唐進鹿正利張璽宋發劉

洪信官可來奉<sup>成</sup>王二于論李現張涵俱著照例  
減等發落欽此

560 乾隆二年四月二十五日吏部等衙門將驗者

文職廢員帶領引

見奉

旨福長成貴王游金允奕趙永<sup>譽</sup>德馨公善冀映雷

丹已等九員著照伊等原官降一等用卍式恩張

冲之錢應榮等三員著按伊等原官照例補用欽

此

561 同日奉部等衙門將驗者武職廢員帶領引

見奉

旨希圖善劉鈞阿爾納李兆麟魯宗稷史節文張世

英等七員著照伊等原官降一等補用欽此

562 同日奉

旨朕在二十七月服制之內不行騎射之事此廷臣  
所共知者若當服除之後較獵講武之時言官或

如此陳奏則其言雖迂而意尚可取今薛韞於此時以毫無影響之語妄行摺奏明係誣謗本應照議交部嚴加議處姑念伊昏憤無知不足深責著從寬免其交部欽此

563 乾隆二年四月二十五日內閣奉

上諭朕查閩省澎湖地方係海中孤島並無田地可耕附島居民咸置小艇捕魚以糊其口昔年提臣施琅倚勢霸佔立為獨行每年得規禮一千二百兩及許良彬到任後遂將此項奏請歸公以為提臣衙門公事之用每年交納率以為常行家任意苛求漁人多受剝削頗為沿海窮民之累著總督郝玉麟宣朕諭旨永行禁革其現在捕魚船隻飭令該地方官照例編號稽查辦理此項陋規既經裁除若水師提督衙門有公用必不可少之處著郝玉麟將他項銀兩酌撥數百金補之欽此

564 乾隆二年四月二十六日奉

上諭原任翰林院侍講學士戚麟祥於雍正五年犯

罪發遣寧古塔計在配所已經十載聞伊年逾七旬衰邁龍鐘著宥其前愆赦回原籍欽此

565 同日奉

旨這查奏情節稍有可原之尤二谷大彬劉輝祚王玉成劉介眉陳年兒韓德魁許七王秉倫李九長吳士英張文玉辛可成岳信蔡臣張國松岳四劉登任貴兒陳小祁進忠劉文信劉丑兒劉馬兒輩耀趙自智高萬李應選張永兒常昇來福太賈五劉五李文選悟徹韓二漢俱著照例減等發落欽此

566 乾隆二年四月二十七日內閣奉

上諭據直隸總督李衛奏稱廣平府知府周夢錦才識短淺見事遲鈍近復年衰多病精力疲憊當此平糶借穀緊要辦事之時不能待至計典而後劾去又署河間府知事陳起唐向應辦事有才是以請著府篆今則志氣高盈不肯實心任事且常有

駿刺聲名平常似應掣回遇有事繫同知缺出再請補用効力贖愆如不悛改嚴叅治罪其河間府員缺請以奉旨發直補用知府之李鼎望擬補廣平府員缺請以奉旨發直試用知府之趙城署理等語著照李衛所請將周夢錦解任送部引見陳起唐革退署府之任遇有事繫同知缺出再行委署試者其河間府知府員缺著李鼎望補授廣平府知府員缺著趙城署理欽此

567 乾隆二年五月初二日奉

旨這查奏情節稍有可原之謝懋德喬永福張進福高池高金正楊魁甲李業昌樊中花張克耀任慎李晋洽王承統閔一洪楊廷正任世珍段啟祿嚴鳳翔陳二福元棍張義楊祚珍賀奪子裴穩穩梁石張世林郭文秀宋貴奇劉采先陸彩臣顧四品陳賓如孫老團繆申即胡二郎陶沈大姜雄陳鵬萬劉定邦張大經張鎬周大德張永成鄒君紅謝惠斌黃四尹宗孔張奉先顧四張大張登倬李大蔣鳳王永受楊四朱六傑徐效祖閔元伯閔仁伯

楊維林俱著照例減等發落欽此

568 乾隆二年五月初二日內閣奉

上諭朕聞福建丁銀一項雍正二年經原任巡撫黃國材請照各省之例就田勻派每田糧一兩勻丁銀一錢至二錢不等通省頗以為便獨有龍巖州屬之寧洋縣福寧府屬之壽寧縣因地糧少而丁額重若照勻入地畝之例則有田之家即成加賦勢有難行只得仍尋其舊查通省丁銀中則不過二錢而寧壽二邑每丁徵至四錢二三分不等民力未免拮据朕愛黎元欲其均沾膏澤不忍令其竭蹶於輸將著將二縣丁銀照中則每丁徵收二錢其餘盡行寬免諒督撫可督率有司實力奉行俾閭閻得受實惠毋使胥吏棍徒侵蝕中飽欽此

569 乾隆二年五月初四日內閣奉

上諭翰林乃文學侍從之臣所有備制誥文章之選朕者近日翰詹等官其中詞采可觀者固不乏人而淺陋荒疎者恐亦不少非朕親加考試無以鼓



勵其讀書向學之心自少詹講讀學士以下編修  
檢討以上滿漢各員著於本月初七日齊赴乾清  
宮候朕出題親試倘有稱病托詞者著另行具奏  
朕必加以處分考試之日著乾清門侍衛察者欽  
此

上諭昨據戶部奏京城四鄉設立米廠以資平糶原  
議芒種以前得雨即可無庸設立等語今雖屢得  
雨澤尚欠霑足况二麥已無望矣大田雖可佈種  
而尚待有秋設立米廠以資平糶乃亟應行者著  
該部即遵前議速行辦理欽此

乾隆二年五月初六日奉

旨這查奏情節稍有可原之段三張三楊四王拐子  
秦老楊和鮑仙元葛彩章楊大印吳白張三邵廷  
機田湯聘汪得尚三葉存耐張連胡美受楊坤生  
黃樣曾友仁謝聖韜葉作居封永贊賴位千賴世  
元張云之李俊千朱品仲唐受保熊佑曹運才張  
仕旺謝旭日危足謝皆芬謝批七趙崇考陳若俊

林巨陶陳舜日朱大沈三陸靖周錢二陸同卷范  
龍友胡良十一張七李老七張老三祁勝福史阿  
德楊以功王二陸邦璉夏大金大珠王二浦二汪  
廷庚俱著照例減等發落欽此

572 乾隆二年五月初七日總理事務王大臣奉

上諭從前發遣各處之人其情罪尚輕者先於恩詔  
內令該管官查奏請旨其情罪較重者原無赦回  
之例今朕思未經赦回之犯其中有年逾七十者  
雖原案較重而年已衰老且在外年久國法已伸  
仍留遣所情亦可憫著該管官查明除強竊行兇  
等重罪外其餘各犯有年在七十以上者將所犯  
情罪具奏請旨再軍流人犯本身已故其妻子准  
其回籍從前已於恩詔內著為定例今朕思從前  
發遣在外安置及當差之內雖情罪較重然本身  
已故其妻子原係連坐之人著該管官查明報部  
奏聞准其回旗回籍欽此

573 乾隆二年五月初八日奉

旨這查奏情節稍有可原之拉巴利張文魁黃克善  
李四傅三孔成明巴受達色胡二王紹亨劉光兆  
陳耀王云臣梁天秀戴觀侯廖山思楊江兒龍定  
一趙素林雷五李長壽楊德臣毛正養顏志田老  
大田老三魏國佐彭起堯彭志文段茂先朱達保  
黃連生曾端元黃麻子文四張明洪王玉吉魯善  
謀李五兒樊上玉鄒奇戴全一邱南鳳張國樞宋  
可進姚瑞智秦梅王之玉朱廷明崔連韓榮俱著  
照例減等發落欽此

574 乾隆二年五月初九日內閣奉

上諭養民之政多端而莫先於儲備所以使菽粟有  
餘以應緩急之用也夫欲使菽粟有餘必先去其  
耗穀之事而耗穀之尤甚則莫如燒酒燒酒之盛  
則莫如河北五省夫小民日營其生稍有錙銖輒  
以縱酒為快無裨於食祭賓客老病之用而適以  
啓謹詳角鬪之媒特以飲少輒醉其價易售人皆  
樂其便易故造之者多而耗米穀也較他酒甚

者

皇祖

皇考屢嚴燒鍋之禁有司陽奉陰違必待眾口噉始

不得已而稽查禁約及薄有收護仍然公行無忌  
夫已其禁于已飢之後節省於臨時孰若禁于未  
飢之先積貯于平日今即一州一邑而計之歲耗  
穀米少者萬餘石多者數萬石不等則禁止之後  
通計五省所存之穀已千餘萬石矣雖有穀之家  
不能皆分所有以周貧乏而所存之穀自在民間  
可以通融接濟較之無米之炊不啻霄壤矣况遇  
歲稔豐收穀必甚賤貧民之生計益饒家有蓋藏  
之效未必不由于此而無識之人或以造酒之家  
未免失業為慮不知壟斷市利率由黠悍之富民  
因其貲財串通胥役敢于觸禁肆行並非貧民無  
力者之生業也是禁之則貧民裕養生之資不禁  
則富民獲漁利之益其間得失利害較然可視朕  
籌之已熟北五省燒鍋一事當永行嚴禁無可鬆  
者至于違禁私造之人及賄縱之官吏如何從重  
治罪其失察之地方官如何嚴加處分之處着九

御即行定議具奏欽此

575 乾隆二年五月初十日奉

旨這查奏情節稍有可原之楊佳寧雷慶廷標唐練  
林仲馨吳電張良賓雷廣遠湯亞四聶姜妹黃公  
富謝琳師黃待聘范亞晚溫亞三胡亞遇倪阿凱  
劉娘成劉阿陶梁黑子朱啟明朱亞秋林宣發何  
士剛劉超海劉善全梁兼作劉傳世林岳蕃張希  
哲張亞寬劉斌首潘娘賜許堂朱阿兒朱觀長陳  
智羅上耀陳秀華唐元鳳盧成德譚文達羅穎俊  
左賤狗徐兆年馮鈺俱着照例減等發落欽此

576 乾隆二年五月十一日內閣奉

上諭昨於乾清宮考試翰林詹事等官朕親加詳閱  
按其文字優劣分為四等其一等陳大受趙大鯨  
張映宸等三員二等雷鉉敷文吳華孫介福張灝  
張若靄吳應枚世臣朱續暉張鵬翀等十員三等  
鄂容安佟保鄒升恒阮學浩于枋嵇璜張湄楊廷  
棟陳浩張為儀許王猷宋楠王峻沈榮仁金德瑛

朱桓彭登豐儲晉觀李文銳王承堯等二十員四  
等沈澍祖王興吾邱玖華沈昌宇錢本誠馮元欽  
鄂敏程鍾彥陳倏汪師韓張蘭清包祚永黃孫懋  
許希孔楊二酉陶正靖吳履泰林令旭夏廷芝蒿  
壽田志勤喀爾欽陳惠華楊炳昌齡阮學濬梁文  
山羅源漢傳為許韓彥曾王檢雙慶杜謚趙瓚呂  
熾萬承蒼孫灝金相胡定商盤楊秀劉東寧陳仁  
陳中蔣恭棐沈齊禮孫倪城周龍官熊暉吉沈景  
瀾常保柱楊椿沈翼機陶正一保良等五十六員  
其侍讀吳應枚侍講世臣俱着陞授翰林院侍讀  
學士侍講鄒升恒陞授翰林院侍講學士編修陳  
大受檢討敷文俱着陞授翰林院侍讀編修張若  
靄張映宸鄂容安檢討介福俱着陞授翰林院侍  
講賞善趙大鯨陞授司經局洗馬昌齡常保柱熊  
暉吉俱降為翰林院編修昌齡常保柱日講官缺  
着另行開列金相降為右贊善保良着改授員外  
郎杜謚改授主事陳中改授知縣沈翼機楊椿蔣  
恭棐周龍官楊秀劉東寧孫倪城鄂倫沈景瀾王  
檢沈齊禮陶正一俱着休致徐用錫年老亦着休

致餘俱留任楊炳不必在南書房行走欽此

577 乾隆二年五月十一日奉

旨汪澄所奏考試新進士時應令其將本處當行之  
事各據所見明白陳奏王大臣等議以應科考試  
進士具有成式無庸更張朕思古來帝王為治不  
棄芻蕘况伊等既成進士皆係讀書之人於地方  
利弊或有確見亦未可定今年考試進士仍照舊  
例出題若伊等有願將地方事件敷陳者准其擬  
實條奏閱卷大臣等擇其言有可採者進呈朕覽  
欽此

578 乾隆二年五月十二日奉

上諭這查奏情節稍有可原之蔣老八曹哇受李遵  
生曹仕龍陳緒娃子楊朝能陳忠義黃元富楊邦  
傑蒲懷義冉淵明宋元秀阿倫金國祥余淮黃配  
直林文瀆李永祚趙璧容王友祥俱着照例減等  
發落欽此

579 乾隆二年五月十三日內閣奉

上諭向來

列祖實錄聖訓告成之後皆藏之金匱石室廷臣罕得  
見者朕思

列祖聖訓謨烈昭垂不獨貽謀於子孫亦且示訓于臣  
庶自應刊刻頒示俾人人知所法守今朕次第敬  
覽

皇祖

皇考五朝實錄聖訓應將閱過之

聖訓陸續交與武英殿敬謹刊刻欽此

上諭農桑為致治之本我

皇祖聖祖仁皇帝嘗繪耕織圖以示勸農德意

皇考世宗憲皇帝屢下勸農之詔親耕藉田率先天下

所以教本計而即田功意至厚也朕思為耒耜教  
樹藝皆始于上古聖人其播種之方耕耨之節與  
夫條旱驅蝗之術散見經籍至詳且備後世農家  
者流其說亦各有可取所當薈萃成書頒布中外  
庶三農九穀各得其宜望杏瞻蒲毋失其候着南  
書房翰林同武英殿翰林編纂進呈欽此

580 十三日奉

上諭昔者虞廷咨牧食哉惟時而百揆奮庸之後即命棄以播時百穀禮樂兵刑皆在斯後良以食為民天一夫不耕或受之飢一女不織或受之寒而耕九餘三雖過荒年民無菜色今天下土地不為不廣民人不為不衆以今之民耕今之地使皆盡力焉則儲蓄有備水旱無虞乃民之逐末者而地之棄置者亦或有之縱云從事耕耘而黍高稻下之宜水耨火耕之異南人尚多不諳北民直置不講此非牧民者之責抑誰之責欤今之督撫于地方命盜等案或官方吏治兵制夷情能盡其心者有之其以身為之倡課百姓以農桑者本務者誰耶得毋與虞廷命官之意相左乎朕欲驅天下之民使皆盡力南畝而其責則在督撫牧令必身先化導毋欲速以不達毋繁擾以滋事將使逐末者漸少奢靡者知戒蓄積者知勸督撫以此定牧令之短長朕即以此課督撫之優劣至於北五省之民於耕耘之術更為踈畧是以一穀不登即資賑濟斯豈久安長治之道其應如何勸戒百姓或延

訪南人之習農者以教導之牧令有能勸民墾種一歲得穀若何三歲所儲若何視其多寡為激勸非奇貪異酷極昏極庸者毋輕率劾去使久於其任則與民相親而勸課有成將見俗返醇樸家有蓋藏然後禮樂刑政之教可漸以講着該部即會同九卿詳悉定議以聞特諭

581 十四日奉

上諭昨考試翰林詹事官員<sup>為</sup>以君難為臣不易命題雖各就所見敷衍成文朕爰就其文字以定優劣至難與不易立言之本意原有輕重伊等尚未見及人之言曰為君難為臣不易此以見為君甚難為臣亦不易耳蓋為君者以一人立乎萬民之上宗社之安危民生之休戚繫焉崇尚寬大則廢弛之漸稍事振作則長苛刺之風言路不開則耳目壅蔽將欲達聰明目而無稽之言勿詢之謀馳騁並進不惟不足以集思廣益且足以淆亂是非即以理折之論者且謂其厭棄羣言不能容納稽之史冊比之而是試思堯舜在上都俞一堂尚曰

汝無面從退有後言夫面謾腹誹乃人臣莫大之  
罪唐虞之朝豈容有此以聖人之為君又豈忍送  
詐億不信為是過當之言抑且諄、致誠於庶頑  
讒說巧言令色孔子當必非無為而發即此一端  
為君之難概可知矣至為臣者夙夜靖共奉公憂  
國為上為德為下為民苟非鞠躬盡瘁求所以稱  
股肱心膂之任故不為然之為君殫分猷宣力之能不足以盡為臣  
之道然究未至若彼其難也譬之飲食曰不飽刻  
未及饜飶而已曰飢則窮餓困餒不止于不能果  
腹矣此言輕重之分而讀書者不可以不察傳曰  
言豈一端而已固各有當也又曰及之而後知履  
之而後難朕所見如此聊宣示諸臣并衆翰林知之

582 乾隆五月十七日吏部奉

旨紹興府知府葉士寬着調補金華府知府吳琳芳  
著調補紹興府知府欽此

583 乾隆二年五月二十日總理事務王大臣奉

上諭朕自幼齡仰蒙

皇祖慈愛撫育宮中又命

太妃皇貴妃

太妃貴妃提携者視

兩太妃仰體

皇祖聖心思勤備極周至朕心感念不忘意欲為

兩太妃千秋之後另建園寢令王大臣稽查舊例王

大臣奏請古有另建園寢之制今若舉行於典禮

允協朕奏聞

皇太后欽奉

懿旨允行可傳諭該部於

景陵稍近後附近之處敬謹相度擇地營造其規制稍

加展拓以昭朕敬禮之意欽此

584 乾隆二年五月二十二日奏事郎中張文彬等

傳

旨鍾保著署理工部侍郎事欽此

585 乾隆二年五月二十三日總理事務王大臣奉

上諭滿洲進士選授庶常向例俱學習漢書去年因徐夢條奏滿庶吉士復令分習清書朕思滿語係滿洲自幼所習只須漢文通順人人皆能繙譯且授職之後自可令辦翻譯之事清文亦不致荒廢何必於選館之時專令學習乎嗣後滿洲庶吉士習清書之例著停止欽此

586 乾隆二年五月二十四日內閣奉

上諭朕聞得廣東瓊州府知府袁安燧不恤民間疾苦貪贖不堪殺名狼狽即如上年平糶一事袁安燧移至海口發賣民已不使蓋海口逼處海濱之地其御民之由東西南三處而聚者已多十里之路枵腹奔馳而出糶又無定期且衙役又復擇人而責竟有忍飢終日不得升斗者而地棍奸販乘機作孽轉得其利袁安燧又將糶米之錢收入府署不令民間兌換以致錢米俱貴民有怨言傳播道路十月初三日散發米票時民間相擁擠以致踏斃老幼婦女孩童十二口袁安燧又將賣米

之錢運至海北發賣以圖重利私入已獲袁安燧又發奉銀三百兩恰與書辦張鳳翼同私販硝磺人林允美販買谷石前往安南發賣私販硝磺運回被官兵擊獲又袁安燧在省買有家人陳洪五母妻數口未獲服役因其妻少艾欲行姦污屢次差洪遠出洪高之同夥家人王璜欲赴上司告理安燧聞知于上省時途次相遇將洪毒打閉整船檢不與飲食斃其性命洪之母妻與王璜之妻出署殺冤又有馮姓王姓家人一齊出署至同知衙門殺冤訴稱伊等妻子惹被本主玷辱等語此朕得之訪聞者查今春楊永斌奏袁安燧本內止載該員同恤民瘼平糶不善及縱令書役私販硝磺二事請將袁安燧革職至安燧將賣米之錢不令民間兌換竟自運至海北發賣以圖重利及平日居官貪污殺名狼狽奸淫僕婦輕斃人命等情本日俱未奏出至督臣鄂爾達雖有會同字樣而摺摺乃通省表率何以知府大員內有此貪污欺檢之人在任多年平時漫無覺察著鄂爾達明白回奏其各款內有應行查訊之案著鄂爾達會同

署樞王蔘秉公察審具奏欽此

587 乾隆二年五月二十六日內閣奉

上諭廣西桂林府知府楊廷璋著調來引見欽此

588 乾隆二年五月二十八日內閣奉

上諭大學士鄂爾恭張廷玉著為農書總裁官欽此

同日內閣奉

上諭原任四川布政使劉應昂著調取來京引見欽此

589 同日內閣奉

上諭新科進士著總理事務王大臣驗看分別三等具奏候朕親加揀選欽此

591 諭吏部清書庶吉士彭樹葵鄧時敏俱著授為編修

典恭邵鐸胡中藻陳其嵩鶴年李兆鈺俱著授為檢討漢書修撰金德瑛編修黃孫懋已經授職庶

吉士董邦達曹秀先李為棟蔡新徐鐸開棠汪士鏗沈廷芳張麟錫趙青恭楊黼時周資陳滿乙震李清芳張孝程萬年茂俱著授為編修鐘音唐進賢張若潭齊召南廖必琦仲永檀熊鄂宜龔渤葉一棟雙頂吳恭趙允涵侯陳齡洪汝勳俱著授為檢討史積琦壯德胡傑李師中陳亮世陳士璠俱以部屬用顧之麟史園楊度汪季芳督游得宜何達善郭權江漢蘇襄雲張應宿俱以知縣即用羅世芳李脩卿孫略蔣斌之張尹郝世正金門詔全祖望著歸進士原班銓選欽此特諭

592 乾隆二年五月二十九日內閣奉

上諭朕前聞得川省出師黔省病故弁兵有借支銀兩例應扣還者特降諭旨令該撫查明數目具奏以便加恩豁免今據護理四川巡撫邱務布政使寶啟瑛奏稱查有第一次出師黔省病故署副將壽長等借支川庫軍需銀五百兩兵丁借支川庫軍需銀二千八十四兩六錢五分又病故署守備王祿等並兵丁在黔省借支糧務銀三百五十四



兩第二次出師黔省病故署總兵王廷詔等並兵  
丁共借支川庫軍需銀三千三百一十四兩又兵  
丁借支川庫軍需置備鞍馬銀二千二百五十七  
兩六錢五分又在黔省借支糧務銀八十一兩六  
借川黔兩省銀八千五百九十一兩三錢等語此  
等病故弁兵所借銀兩雖有扣還之例但伊等本  
身已故今於家口名下扣還補項未免力量艱難  
著將此項銀兩悉行豁免以示朕優恤弁兵之至  
意欽此

593 乾隆二年五月三十日總理事務王大臣奉

上諭在京八旗文武各官遇有親喪例於持服百日  
之後即入署辦事原以旗員人少若令離任守制  
恐致悞公而伊等在二十七月之內仍各於私居  
持服以自盡其心惟是朝會祭祀之期或有執事  
或應陪祀之處仍俱一體行走未加分別俾盡孝  
思嗣後在京旗員有親喪者二十七月之內凡遇  
朝會祭祀之禮應一概免其行走現今禮部纂輯  
禮書著將此旨交該館載入一體遵行欽此

594 乾隆二年六月初二日內閣奉

上諭提福建總督郝玉麟等奏稱淡水同知趙奇芳  
以先苗脫逃防範不嚴照例降一級調用查趙奇  
芳到任未久雖有疎防之咎旋同副將靳光瀚佈  
置官兵將先苗擒獲僅有餘孽三名脫逃現在搜  
捕該員實係才堪辦事之員海疆要地可否照所  
降之級留於原任謹此奏聞請旨等語趙奇芳著  
照郝玉麟所請帶所降之級仍留淡水同知之任  
欽此

595 乾隆二年六月初二日

上名九卿等面諭曰我

皇考當年時時召見九卿面加訓諭諄切周詳實望在  
廷諸臣共天公忠勉為阜夔稷契以勸至治且欲  
使上下交而志同太和之氣充盈於朝宇也無如  
聽受者多領會者少竟有親承

聖諭而出茫然不知所謂者間有巧偽之人志逞胸臆

以為

聖訓如此

聖意別有所在似此私心揣度其間毫釐千里之謬更

不可言矣我

皇考深悉此弊是以雍正八九年以後召見諸臣不似從前之密此朕當時所熟聞而習見者假使諸臣祇受

聖訓之時果能心領神會身體力行則事竣契契何難再見於今朕臨御以來日與總理事務王大臣辦理一切業務亦非疎遠九卿大臣也以國家政治自有應密而不可概以宣示衆人者如召對九卿而九卿中有能啓心沃心以裨益政教者豈不盡善使九卿而尚待朕之訓誨則縱極反覆叮嚀豈能有加於

皇考聖訓之外至於勸勉之意既殷則訓誨之言必切又恐諸臣以為督責太過非待大臣之體年來言路諸臣頗有以頻接廷臣為請者是不知朕心者也但爾等既置身九列即係朕之股肱心膂俱當視國事為己事休戚相關大者在廷維君德次則於國計民生及本身職業之要務早作夜思一有所見即據實入告毫無欺隱方為無忝厥職今觀九卿中能副朕之期望者甚屬寥寥即如春夏以

來直隸山東兩澤愆期朕宵旰焦勞無一時之或擇而九卿中以此為念者不過十之一二雖應行經理之事朕已與總理事務王大臣多方預籌次第佈置然此乃民命所關至為重大九卿多人豈無有應奏之事豈無有欲陳之言何以科道小臣尚有一二建白者而九卿反緘不語竟似置身局外耶歸愈詩有云中朝大官老于事詎肯感激徒媿媿古今如出一轍矣夫君臣之間必誠意通達始能感召

天和若稍有間隔即于和氣有乖方今致旱之故未必不由於此朕為此言非欲委過於臣下也無非欲我君臣誠意交孚一心一德盡化觀望迎合之習悉屏徇徇固執之私耳即如燒鍋一事朕已降旨嚴禁而孫嘉淦摺奏以為有不便於民之處朕復降旨令九卿毋得曲從朕旨迴護嘉淦再行詳確定議夫以已經降旨之事朕尚不難收回成命爾等九卿又何所用其瞻顧耶九卿于朕躬尚且不必瞻顧則于同朝寮友更何所用其依違耶如果各有所見不能強同何妨兩議三議以待朕之裁

定總之大臣任事以和衷為貴而和必出於公斷  
 未有公而不和者蓋是非曲直本有一定若有意  
 周旋則求合於此必有拂於彼到處皆成掣肘豈  
 非自貽伊戚乎如果能一秉至公即意見偶有不  
 同而事理總歸至當雖有不和之迹而心本無他  
 此聖人所謂和而不同也九卿等受朝廷簡畀之  
 隆為國家所倚賴當竭誠效公以古大臣事君之  
 道厚自期待不可安于苟且其于察察之中善則  
 相勸過則相規互相砥礪以為同舟之誼如此則  
 事君交友兩無所歉將見政治清明太和洋溢不  
 負我

皇考多年教養之深恩朕於爾等實有厚望焉欽此

596 乾隆二年六月初八日內閣奉

上諭新科一甲進士于敏中林枝春任端書已經授  
 職其二甲三甲進士孫宗溥何其睿宋邦綏觀保  
 張若需馮秉仁黃明鈺錢琦周玉章王會汾吳綬  
 郭肇鏞馮祁冀學海程廷棟黃宮德保陸樹本李  
 龍官沈雲蜚劉炯丁一煊胡師直周禮帥家相張  
 九錕盧憲觀王士瀚白灝周煌路斯道劉誕李質

顧蘊霖調到天位歐堪善高維光謝庭瑜納國棟  
 牛琳杜鵬翔辛有堯廖鴻章符祖培郭肇奎林維  
 雍張日恭陳世烈王嵩周連登諾敏張元龍莫世  
 忠李時勉蔣允焄朱若炳孫維彭遵泗覺羅德成  
 格著以庶吉士用馮鈞胡泰著以六部主事用莊  
 大中吳毓芝吳斯鈞朱以成沈毅于文駁楊超恒  
 鄒嶠徐玉田成原潘汝龍繆遵義陳克繩程穆衡  
 田壘楊通唐桂生徐錫仁胡際泰趙開元黃登毅  
 鄭之僑佟濟喬光烈張文莊楊甘雨湯永祚王嘉  
 會施毓暉姚世道郭廢武張繼鏡譚玉秦勳鍾獅  
 林良著以知縣即用吳培源董萬山夏時雍著以  
 教職即用潘弘道著以國子監助教銜管府學教  
 授事該部即行銓選其餘俱歸原班用欽此

597 乾隆二年六月初八日奉

上諭禁止燒鍋一事爾等九卿兩議具奏其大指皆  
 以燒鍋當禁朕前所降諭旨為是而以孫嘉淦陳  
 奏為非夫此論燒鍋當禁而不宜開道則因朕旨  
 是而嘉淦之言非矣且亦無庸朕之頒發是旨矣  
 何則久經禁止而未開之事復何庸更張耶朕以

法久不行視為虛文故欲嚴禁以重穀而孫嘉淦則以為雖行嚴禁不能積穀而反於民間不無紛擾滋弊是兩說不可並行者也今觀王大臣所議尚不無回護朕旨之處殊非朕虛衷求言期於利用厚生之意即如一議內稱燒酒之官最甚本宜嚴禁但加重本犯之罪條嚴定官吏之處分恐小民無知犯法吏昏緣以為奸於民情有所未便應照從前已行之成法為之懲治等語一議內稱燒鍋本犯仍照舊例治罪應將官員處分分別定例其業經造成之燒酒仍准其售賣等語據此則禁止仍屬虛文但嚴官吏之處分而本犯之治罪如舊則造酒之人既無所畏憚而官員或轉以干涉考成多方袒護仍於禁約無益況造成之酒仍准售賣則奸民私造者皆以沽賣陳酒藉口遲延歲月雖禁猶不禁也何用王大臣之兩議為哉若能直指利弊或欲行嚴禁燒鍋則必詳議查察之法以為端本澄源之論若以為比戶搜查轉行滋擾則朕旨可以收回如此兩議朕自然就其中酌一二者而行之斷不固執已見也今兩議名為西而實則一不過向來如是禁止今則添一官員處分

耳試思於嚴禁燒鍋以裕米穀一節為有益乎為無益乎王大臣皆

皇考簡用之人不得為是西可遷就之論尚其詳酌事理或應行嚴禁或因時制宜必期於民生日用之間有利無弊斯稱朕咨訪之意其各抒已見或一議或兩議皆可欽此

598 乾隆二十六年六月九日內閣奉

上諭朕聞各省出借倉穀於秋後還項時有每石加息穀一斗之例朕思借穀各有不同如地方本非歉歲祇因春月青黃不接民間循例借領出陳易新則應照例加息若值歉收之年其乏食貧民國家方賑恤撫綏之不遑所有借領倉糧之人非平時貸穀者可比至秋後還倉時祇應完納正穀不應令其加息將此永著為例各省一體遵行該督撫仍當嚴飭有司體恤民隱平斛收量毋得多取顆粒如有浮加斛面額外多收及胥吏苛索等弊著該督撫嚴恭治罪欽此

599 乾隆二年六月初十日奉

上諭朱鳳英此奏明係瞻徇情面朕前月考試翰  
官員時先於養心殿引見其中有年力衰邁及人  
才不及者皆一一記名及親閱試卷而此十餘人  
文字又復列在四等是伊等人文經朕再三評傷  
而後降旨休致並非因試卷一日之短而遽加損  
斥也朱鳳英如果確知中有可用之人即當舉出  
姓名據實陳奏今乃泛指十二人中不無可用之  
材請朕復行引見是冒中必有注意之人而為此  
含糊之奏以圖僥倖其瞻徇之處甚屬顯然交部  
嚴察議奏欽此

600 乾隆二年六月十三日提理事務王大臣奉

上諭禁止燒鍋一事朕從前降有諭旨因孫嘉淦條  
奏復降諭旨令王大臣九卿集議續經兩議具奏  
朕又降旨令其確議今恐禁止燒鍋乃關係民生  
日用之事該首督撫大臣所當悉心籌畫者著將  
朕屢次所降諭旨及孫嘉淦所奏與王大臣九卿  
所議悉行抄錄交直隸山東河南山西陝西等省

督撫各抒所見陳奏不必會同商酌欽此

601 乾隆元年六月十四日內閣奉

上諭王國炳著賞翰林院編修銜在武英殿行走俟  
有應陞缺出吏部再行請旨欽此

602 奉汪原摺內所奉未有月日

上諭劉元燾所奏李紱張坦麟二事朕實並未降旨  
亦未將旨收回而外邊遽爾傳說此風斷不可長  
伊有風聞言事之責此奏甚屬可嘉著交部議叙  
此等妄行傳說不已將來嚇詐生事之弊皆從此  
出此向來南書房之陋習經

皇考十三年以來教訓殷勤此習已漸改革嗣後九卿

及南書房翰林等務當小心恪遵凡有關係之事  
倍加慎密不可纖毫洩漏遇風影之談尤不可輕  
信傳播以惑衆聽如有仍蹈前轍者經朕訪聞或  
科道等官糾奏必加嚴懲至於汪由敦陳辯一摺  
如伊果有其事雖強辯何益如實無干涉則不辯  
自明亦當靜聽乃朕甫交總理王大臣詢問劉元

變伊何由得知劉元燮奏中有伊名乎即此已足見其耳目頗廣必招搖生事不安分之人也著革去內閣學士在侍讀學士上効力行走欽此

603 乾隆二年六月十四日內閣奉

上諭今年五月間山東雨少運河水淺以致糧艘不能銜尾而進沿運挖淺起剥甚費經營而臨清以北更多阻滯朕細加訪察臨清以北全賴衛水合流濟運而衛水發源于河南衛輝府至臨清五百餘里沿河居民往往私洩以為灌溉之用每致運河水淺糧艘難行經前任河臣靳輔題定每年於五月初一日盡堵渠口使衛水全歸運河以濟漕運此歷年遵行之成法也今因日久法弛衛水來源小民不無偷放之弊運至運河水勢長落不常重運艱於北上目前正當緊要之時所當稽查嚴禁者著北直河南督撫速行辦理務使衛水涓滴不致旁洩糧運進行無阻若地方有司有視為改套者即行查叅欽此

604 乾隆二年六月十七日奉

旨連日仰蒙

上天降賜甘霖眾心感慶朕今日御門聽政復值澍雨再降更為優渥念諸臣衣服未免濡濕大臣等著賞紗二疋凡陪奏侍班引見執事官員及侍衛等俱著賞紗一疋欽此

605 乾隆二年六月十八日內閣奉

上諭本年四五月間京師及畿輔地方雨澤愆期朕虔誠祈禱復命王大臣致祭

天神

地祇

太歲等壇及

四海之神仰冀早賜甘霖綏我兆庶今於十三十四十六十七等日時雨普降既優既渥遠近均霑萬姓歡呼朕心感慶應虔修報謝之禮仰答

明神福祐之恩著禮部即行定議具奏欽此

606 乾隆二年六月二十三日奉

上諭朕因今春雨澤愆期米價昂貴恐小民有艱食之虞令於京城附近地方設立八廠發倉貯米石減價糶賣特派御前侍衛官員等前往辦理伊等敬謹奉行辦理妥協殊屬可嘉著交該部議叙具奏欽此

607 乾隆二年六月二十四日內閣奉

旨吏部侍郎員缺著刑部侍郎程元章補授刑部侍郎員缺著工部侍郎王鈞補授工部侍郎員缺著禮部侍郎王紘補授禮部侍郎員缺著內閣學士方苞補授欽此

608 同日總理事務王大臣奉

上諭御史馬起元所奏山東直隸兩省運河水泉近多湮塞閘壩亦已傾圮請勅河臣督撫悉心籌畫一摺又尚書來保所奏河南衛水固濟漕運亦灌民田請令該撫會同提河詳察地勢務使漕運不患淺阻民田亦得灌溉一摺著侍郎趙殿最侍衛

安寧前往直隸則會同總督李衛山東則會同漕運總督補熙巡撫法敏提河白鍾山河南則會同署巡撫尹會一等查勘妥議具奏欽此

609 乾隆二年六月二十五日內閣奉

上諭聞廣西左江道閻純璽才具平常不勝道員之任著來京引見以部員改補左江道員缺緊要著桂林府知府楊廷璋補授桂林府知府員缺著浙江海防同知張永燾補授欽此

610 乾隆二年六月二十八日總理事務王大臣奉

上諭凡外遣人犯近日改發煙瘴地方者原因此等惡人不宜在盛京等處使滿洲直隸之習有所沾染也但伊等原係發興口外駐防兵丁為奴之犯開彼地兵丁有藉以使用頗得其力者且內地軍流人犯太多地方官亦難管束朕曾向王大臣等諭及今九卿等會議盧焯條奏安揀軍流人犯一疏應將朕前諭外遣人犯作何按其情罪分別內地外地遣發之處一併妥議具奏欽此

611 乾隆二年七月初一日總理事務王大臣奉

上諭春夏以來畿輔地方雨澤愆期自六月十三日  
後疊沛甘霖已極霑溼而近日連陰大雨如注又  
有滌潦之慮此皆朕之不德所以雨暘時能時若  
吾民其何以堪目今低窪之地秋苗恐被水淹著  
總督李衛速委賢員留心查勘或有應加以撫恤  
者或有應借與籽粒令其播種者即督率有司酌  
量辦理賑恤之策及早講求不可稍存踟蹰掩飾  
之心至於河工堤岸宜預為保護以防潰決倘有  
被衝之處即應搶修著李衛劉勛留意不可疎忽  
欽此

612 乾隆二年七月初一日總理事務王大臣奉

上諭近日雨水連綿京城旗民中有家計貧乏房屋  
傾圮不能修葺者著步軍統領邵善查明具奏欽  
此

613 乾隆二年七月初二日總理事務王大臣奉

上諭近因雨水過多開渾河水發蘆溝橋及長新店  
良鄉一帶民房有被水淹浸坍塌之處著派侍衛

塞樁戶部郎中赫赫前往蘆溝橋長新店一帶再  
派侍衛五十七戶部員外卓來前往良鄉一帶會  
同地方官詳細查勘各帶庫銀二千兩查有被水  
窮民房屋傾圮者即行賞給安頓毋使失所欽此

614 乾隆二年七月初二日總理事務王大臣奉

上諭今年春夏之交直隸山東兩省雨澤愆期二麥  
歉收朕已多方籌畫接濟民食且令直隸總督李  
衛查有應興工作俾小民得藉營繕以糊其口今  
思山東民人多仗二麥度日今歲麥秋收穫既薄  
雖屢降諭旨蠲賑平糶仍恐閭閻尚有艱食之虞  
著巡撫法敏悉心計議如開渠築堤修葺城垣等  
事的量舉行使貧民傭工就食兼贍家口庶可免  
於流離失所也再年歲豐歉難以懸定而工程之  
應修理者必先有成局然後可以隨時興舉一省  
之中工程之大者莫如城郭而地方以何處為最  
要要地又以何處為當先應令各省督撫一一確  
查分別緩急預為估計造冊報部將來如有水旱  
不齊之時欲以工代賑者即可按籍而稽速為辦



理不致遲滯於民生殊有裨益並將此諭通行各  
省督撫知之欽此

615 乾隆二年七月初七日奉

旨侍衛馬爾拜等八員前往文安等處查辦被水賑  
恤之事路遠泥濘著賞給驛馬欽此

616 同日奉

旨刑部尚書那蘇圖孫嘉淦俱著兼律例館總裁欽  
此

617 乾隆二年七月初七日奉

上諭從前侵貪那移應追之項已於恩詔內令查果  
家產盡絕力不能完者鑿與豁免今朕思侵貪皆  
係入已賍私罪無可逭至於那移之項或因公事  
緊急不得不為通融或移此就彼為一時權宜之  
計夫錢糧各有款項豈容任那移在那移之人雖  
法無可貸而較之侵貪之人稍有不同情尚可原  
著該部查明雍正十三年九月以前那移各案所

有家產除已經交官及變價外其有已報未估并  
估報而未變交者分別情節查明實係因公確有  
憑據者具題請旨欽此

618 乾隆二年七月初八日內閣奉

上諭朕因畿輔地方山水驟發居民蕩析可憫立遣  
侍衛官員賞帶帑金分六路前往會同該地方官  
撫卹安頓其離京稍遠州縣已據總督李衛奏稱  
飛飭地方官加意撫綏不令一人失所今所據河  
道提督劉勳奏報永定河水漫過石堤冲刷背後  
土堤二百五十餘丈南岸漫溢二十二處附近田  
禾普廬舍悉被衝塌淹潦等語朕思目今伏汛雖  
已將過而節氣尚在大雨時行之候秋汛又復屆  
期沿河堤岸所當竭力保護漫口更當星夜搶修  
著即動用河庫銀兩道備物料該督李衛速行會  
同劉勳督率在工員弁迅速堵築完固務保萬全  
毋得稍有疎忽朕因劉勳人甚平庸不勝河南之  
任是以用為直隸提河以事簡工平諒伊自能竭  
力辦理且屢加訓誨又命提督李衛協助之今年

春夏之間亢旱想李衛辦理一切賑恤事宜無暇  
顧及河工查二十九日之語尚非浸淫霖潦者比  
而一經驟發劉勳遂束手無策且條料又復不全  
不足搶救是伊平時漫不經心甚屬溺職着該部  
嚴察議奏河工各官着李衛分別查奏該部速遵  
諭行欽此

619 乾隆二年七月初九日總理事務王大臣奉

上諭永定等河堤工有衝決之處着協辦吏部尚書  
事務顧琮馳驛前往察看勸其應行搶修事宜著  
會同李衛劉勳速行籌畫欽此

620 乾隆二年七月初十日內閣奉

上諭朕因四川土司舊有貢馬之例其不貢本色而  
交折價者則每匹納銀十二兩查四川驛馬之例  
每匹止給銀八兩獨土司折價較多蠻民未免繁  
費比降諭旨將四川土司貢馬折價照驛馬之數  
裁減四兩定為八兩以示優恤今查廣西土司每  
三年貢馬一次俱係折價交納其所折之價亦是

十二兩之數所當一體加恩使土司均沾惠澤者  
著照四川折價之例每馬一匹減銀四兩定為八  
兩從乾隆三年為始永著為例令該督撫即將此  
旨通行曉諭該土司知之欽此

621 乾隆二年七月十二日奉

上諭嗣後九卿及數部會議事件係何部主稿者著  
於本尾將何部主稿聲明欽此

622 同日內閣奉

上諭前因畿輔地方被水特命策楞等前往賑恤居  
民其各營汛防被水兵丁據策楞等議稱兵丁領  
受餉銀其房屋亦係官給不應在賑恤之內朕思  
兵民均屬一體此番被水室廬坍塌妻子無依情  
殊可憫應每名量行賞銀二三兩為目前贍養以  
待官蓋營房著即將諭六路賑恤之官員等酌量  
輕重作速妥協辦理欽此

623 乾隆二年七月十三日內閣奉

上諭前因黠苗不法擾害地方居民困苦朕心深為  
不忍已疊降諭旨多方賑恤務令窮民復業各遂  
其生曾據元展成議奏被害復業之民一切籽種  
牛具既已無存請每戶借給銀五兩以為置備之  
費此項銀兩應分作五年繳還等語旋經部議交  
與督臣張廣泗等會商妥議具奏續據張廣泗等  
議稱借給銀兩應分別水田山田按畝借給二錢  
一錢不等其交還之期應分作十年每年秋收時  
完納二分則民力寬紓等語朕思黔民所借籽種  
牛具銀兩雖在朕加恩之外例應照數繳還者但  
念小民被擾流離今甫經復業正宜加意撫綏使  
之休息于隴畝共受格外之恩所有借給籽種牛  
具銀兩若有已經交官者難以退還其未經交官  
者悉行賞給以為耕作資本不必催征還項該督  
張廣泗可宣朕此旨通行曉諭咸使聞之並董率  
有司實力奉行務使黔民均沾實惠欽此

624 乾隆二年七月十六日內閣奉

上諭朕覽法司本章各省命案大率開毆居多甚至  
有挾持兇器互相殺傷者小民愚昧無知不忍一  
朝之忿遂致罹於重辟後雖追悔亦已無及深為  
憫惻夫貪生惡死人之常情即在愚氓亦斷無不  
愛惜身命之理摠因平日不知法律而地方有司  
又不能時時化導動其從善去惡之天良申以觸  
法厥今之憲典無怪乎編氓之日蹈法網而不能  
止也嗣後直省督撫督率有司必多方宣諭實力  
勸勉務使閭閻咸知法紀顧恤身家以遠于罪戾  
則教化行而刑罰可省矣欽此

625 同日內閣奉

旨侍衛五十七此次差往查賑著與從前辦理平糶  
官員等一體議叙欽此

626 乾隆二年七月十七日內閣奉

上諭自古致治以養民為本而養民之道必使興利防患水旱無虞方能使蓋藏充裕緩急可資是以川澤陂塘溝渠陔岸凡有關於農事預籌畫於平時斯蓄洩得宜潦則有疏導之方旱則資灌既之利非可諉之天時豐歉之適然而以臨時賑卹為可塞責也朕御極以來宵旰憂勤惟小民之依是咨是詢前後諭旨諄復再三但化導自在有司而督率則由大吏近日直省督撫惟甘肅巡撫德沛到任後即以興水利裕倉儲為請著西安巡撫崔紀亦有勸民鑿井灌田之奏尚能留心民食知本計之所當先其餘能盡心於吏治官方命盜錢糧諸事者尚不乏人而於民生衣食本源未能切實講求地方守令亦惟刑名錢穀自顧考成至以愛養百姓為心留意於稼穡桑麻如古循吏所為者益不可得即如直隸今年夏初少雨深以暎旱為憂及連雨數日尚不甚大而永定河隨有漲溢之患決口至四十餘處低窪之地多被水淹雖因山水驟發然水性就下其經行之地自有定所設預為溝渠以洩之為塘堰以積之自可以分殺水勢

不至滙為洪流衝突漫衍如與之甚是皆平日不能預先籌畫所致也東南地方每有蛟患考之于古季夏伐蛟載在月令今土人留心者尚能預知有蛟之處掘地得卵去之則不為害且蛟行資水遇溪澗而其勢大田疇雖不可移而廬舍堂屋高可遷就高阜之地以避之是亦未嘗不可先事預防惟在實心體察耳該督撫有司務體朕痼疾乃身之意刻刻以民生利賴為先圖一切水旱事宜悉心講究應行修舉者即行修舉或勸導百姓自為經理如工程重大應動用帑項者即行奏聞妥協辦理興利去害俾旱澇不沒倉箱有虞以副朕惠愛黎元至意特諭

627 乾隆二年七月十八日總理事務王大臣奉

上諭直隸地方今年四五月間雨澤愆期近又山水驟發低窪地畝復被淹沒民人遭此旱澇雖多方賑卹而朕心時切軫念今八月二十三日為

皇考世宗憲皇帝再週之期朕躬詣

泰陵行禮其駐蹕營盤前據李衛奏稱已經留出免其

租賦至從前經行之地皆有定所此番請

陵一切平治道路整葺營盤等事俱著智導官率領智

導虎鎗牽駝人等前往量為料理絲毫不可共

民力致妨農事李衛亦不必來京應從可傳諭各員  
處知之欽此

628 同日奉

上諭直隸平糶事宜前據李衛奏明平糶各廠恐路

遠窮民赴糶艱難酌量分廠就近零糶今阿琳又

奏稱聞得糶米地方每處僅設立一所以致人民

壅塞而又有過午不糶等語其應如何分設米廠

糶賣俾小民無耽延守候之艱而又不至有壅塞

之處著提督李衛速行妥酌辦理欽此

629 乾隆二年七月十八日總理事務王大臣奉

上諭本年糧艘因淮揚挑漕運河令其速行北上以

便及早回空乃四五月間山東一帶河道水淺盤

運起剝斫丁未免苦累朕心深為軫念又聞四月

間邳州地方暴風驟發傷損糧艘其中有未滿年

限船七隻例應運丁賠造朕思該丁等一路盤剝

已費多力且此次失風亦非兵弁疎忽所致著准

給價成造免其賠補疎防各官亦免其處分又查

江廣二省向有額外裝帶竹木經漕臣奏明衆丁

已永遠沾恩湖廣省今年並未出運山東河南省

抵通甚近繁費無多惟江南浙江二省本年丁力

拮据向例每船准帶貨物一百二十六石著于明

年准其增帶貨物四十石後不為例以示朕軫卹

旂丁之至意欽此

630 乾隆二年七月十八日總理事務王大臣奉

上諭天下親民之官莫如州縣州縣之事莫切於勤察民

生而務教養之實政夫所謂知州知縣者欲其周

知一州一縣之庶務悉心經理四境即其一家精

神必須貫注有事則在著辦理無事則巡歷鄉村

所至之處詢民疾苦課民農桑宣布教化崇本抑

末善良者加以獎勵頑梗者予以戒懲遇有爭角

細事就近剖斷以省差拘守後之苦烟戶牌甲隨

便抽查使不敢玩法容忍鄉愚無知則面加開導

之庶幾上下之情通達無阻而休戚相關親愛之誠油然而生而提撕易入如此從容歲月始可以收循良之實效不愧為民父母之稱乃今之州縣有司祇以簿書為事平日安坐衙署除相驗人命因公踏勘外足跡不至鄉間以致鄉民非有事旬旬公庭目不覩官長之面身不聞官長之訓無論窮簷疾苦未能周知即四境情形亦茫然莫曉胥役勾保等膝蔽之弊因之以起顧名思義親民之謂何而情誼睽隔如此也凡州縣所管地方大率不過百餘里最廣者不過二三百里週遭廵歷為時亦不甚多即事繁之處亦未必朝朝聽訟日日比糧果能精勤勿怠斷不至於經理無暇遂置閭閻於膜外也至于農田之事尤為養民之要務春耕秋斂之時各宜下鄉察其勤惰稽其豐歉倘有應先事圖維臨時酌辦者悉心計議申詳上司定議舉行但往來鄉村必須輕騎減從紈纈不擾里民方為有益若失於覺察以致書吏鄉保及跟隨人役等借端生事擾累百姓則較之耽逸偷安端居不出者其過為更大朕必加以嚴譴著各省督

撫遵朕此旨董率有司實心奉行務使官民上下情意流通聯為一體以副朕教養斯民之至意特諭

631 乾隆二年七月十九日內閣奉

上諭聞豫省河北守道馬駁雲年力衰邁諸事廢弛不勝要地道員之任著未京以京員照例改補其河北道員缺著白鍾山尹會一會同揀選可以勝任之員具奏請旨欽此

632 乾隆二年七月二十一日總理事務王大臣奉

上諭朕臨御以來凡八旂部院及直省虧空銀兩施恩豁免者已不下數千萬溯其虧空之源或係侵蝕或係挪移侵蝕者以公家之帑金充己身之私橐其罪固無可逭而挪移之項則由辦理不能妥協苟且遷就之所致亦屬罪所應得者是以當年我

皇考世宗憲皇帝分別普追以示懲儆原出於不得已即朕今日之加恩寬免亦出於不得已並非以伊

等數十年之虧欠一旦豁免遂謂人人蒙澤而以為快舉也朝廷體恤臣工詔糈投祿以厚其身家長其子孫即為臣子者服勤宣力亦自應思世沐恩榮長叨覆露豈有以身犯法虧欠帑項累及子孫而倖逃國典轉相慶幸以為得計者乎是朕心實不願於此等事加恩天下臣工亦不當於此等處望恩也且夫公爾忘私國爾忘家乃人臣事君之大義今縱不能屏棄自家之念亦當思所以保全自家為久長之計若苟圖一時之利罔顧後害以致身敗名裂貽累後人則下愚之甚者及至虧空被劾身家已傾子孫並獲罪戾而後希冀豁免又何如謹身節用遵守法紀早自立於無過之地以長沐國家養育之恩乎况虧空國帑必須稽查縱能掩飾於一時必不能不敗露於異日至於敗露之後而得恩免乃朝廷格外之曠典尤非可以屢邀者內外臣工有應得之俸祿養廉於仰事俯育亦足自給所當各自猛省嚴義利之辨審禍福之關毋得縱慾敗度自貽後悔至於題奏虧空案俾動云家產盡絕夫所謂家產盡絕者必上無片

瓦下無立錐飢不得食寒不得衣有不可終日之勢若今所謂家產盡絕之人衣食未嘗虧缺家口仍得支持不無力完帑遂過甚其辭以邀恩免而實非至於此極也夫國家享億萬年無疆之休惟冀大小臣工永沐恩膏於勿替若至於家產盡絕豈厚待臣工之意况本無實事而徒存此虛名又何為者嗣後一切虧空案件仍照舊例辦理如有實在不能完納者但當云無力完帑出其保結不得用家產盡絕字樣著將此旨傳諭內外臣工知之欽此

633 乾隆二年七月二十一日內閣奉

上諭查康熙四十五等年京通各倉囤爛米石甚多以致修理開座核減銀兩大通橋掣欠並坐糧廳虧空案内各役透支脚價共銀二百餘萬兩題明於官役名下分賠又續據倉場侍郎題明運後應賠銀兩於運進京通各倉拉運脚價內每年扣除二成帶銷還項其倉役應賠銀兩於祿米十一倉倉夫抗運脚價每年扣除六成還項於舊大二倉

倉夫脚價內每年扣除八成帶銷還項雍正九年  
內經戶部查奏奉

皇考恩旨將倉場官員虧空豁免而各役應賠銀兩因  
運價寬餘未准豁除朕思此項虧欠歷年已久各  
役已經更替前人作弊而於後人名下扣還未免  
滋累且雍正十二年經鄂善奏明將運價核減而  
帶銷銀兩仍令賠還情稍可憫著將各役未完銀  
兩悉行豁免使伊等均沾恩澤此項既經寬免嗣  
後運役脚價即照雍正十二年鄂善奏明核減之  
例支給其倉役抗夫脚價照倉場原議以五成給  
發令倉場侍郎等嚴飭所屬員役務須恪遵功令  
毋蹈前轍著戶部即遵諭行欽此

634 乾隆二年七月二十三日總理事務王大臣奉  
上諭通州至天津一帶河路向係坐糧廳管理修濬  
聞近年以來淤淺之處甚多糧艘及民船往來殊  
屬艱難前命趙殿最安寧前往直隸等省查勘水  
道事竣回日可會同領琮李衛倉場侍郎詳悉開  
者作何料理開濬之處妥協定議具奏欽此

635 乾隆二年七月二十五日內閣奉  
上諭山東青州府知府董藩著來京引見青州府知  
府員缺著戶部員外郎徐文燾補授欽此

636 乾隆二年七月二十七日奉  
旨王大臣等所奏知道了

皇考再週之期朕親詣  
泰陵行禮仍遵前者行  
皇太后既不前往則隨從官員人等可俱從簡以京師  
至易州之七州縣本年錢糧已經蠲免若驛驛之  
處有妨田禾著李衛查明再酌行給賞欽此

637 乾隆二年七月二十九日奉  
旨諸王大臣既稱萬阜平京禾黍暢茂正當收穫垂  
成之時恐妨人馬踐踏懇請八月停止親詣以順  
民情等語朕只得勉從所請此次停止親詣著果  
親王前往行禮欽此



638 乾隆二年七月三十日奉

上諭蠲免錢糧所以紓民力而惠黎元或偏灾偶見  
尤宜急加寬恤故周禮荒政以薄征為先乃不肯  
州縣一聞蠲免恩旨往往於部文未到之前差役  
四出晝夜催比追呼之擾更甚平時迨詔旨到日  
百姓已完納過半朝廷有賜復之恩而閭閻不得  
實被其澤甚至官吏分肥侵漁中飽情弊種種深  
可痛心哉

皇考世宗憲皇帝洞悉其弊雍正十一年八月內蠲免

甘肅地丁銀兩奉

旨將已完在官之項准抵明年正課此誠萬世之良規  
所當遵奉者嗣後凡有蠲免俱以奉旨之日為始  
其奉旨之後部文未到之前有已輸在官者准作  
次年正賦永著為令如官吏朦混隱匿即照侵盜  
錢糧律治罪欽此

639 同日內閣奉

上諭前命翰林科道官員輪日錄呈經史講說以資  
披覽今科道輪次已週著仍照前與翰林官員分  
日錄進欽此

640 乾隆二年八月初二日內閣奉

上諭天津理事同知員缺著禮部主事富爾敏補授  
通州理事通判員缺著兵部筆帖式雅爾布補授  
欽此

641 同日內閣奉

上諭浙江海防兵備道未定元丁憂俟過秋汛後令  
其回籍守制其員缺著協辦海塘工程之戶部員  
外郎完顏倬補授欽此

642 同日奉

旨吏部月官著於初三日帶領引見欽此

643 乾隆二年八月初三日內閣奉

上諭據山西巡撫石麟奏稱太原府知府劉崇元現  
因患病呈請解任查有直隸平定州知州郭一裕  
操守廉潔辦事明敏于上年計典內薦舉卓異若  
以應陞之銜借補太原府知府于地方實有裨益  
等語太原府知府員缺緊要郭一裕著照石麟所

請補授太原府知府欽此

644 乾隆二年八月初四日內閣奉

上諭向來每年熬審之時凡應杖責者有八折之例內外通行本年福建巡撫盧焯條陳熬審事宜經刑部議稱律文無八折之條地方有司或將笞杖之罪禁行八折則輕重混淆未為允當嗣後每遇熬審之期將一切案件應行杖等寬免之處務令畫一遵照定例不必復行八折等語朕思小民之犯杖責者其罪本輕而盛夏之中量減其數朴之數乃國家寬卹之仁八折之例由來已久不當以有司之偶然奉行不善而輕為改易者著刑部另行妥議具奏欽此

645 乾隆二年八月初六日總理事務王大臣奉

上諭直屬地方夏秋之間雨水過多高阜平原秋成可望低窪之處祇可補種秋麥收穫之期須待未春現今糧價日漸昂貴民食未艱難朕心深為矜念前於天津北倉截留漕米五十萬石原為備賑

之用若於此時即將截留之米酌撥被水州縣減價糶賣以平時價待各處秋成之後糧食流通再酌量停止實於民生有益著派侍衛部員等前往會同該督李衛悉心商酌應撥米石若干其如何減價分糶之處著派出之侍衛部員會同該地方官妥協辦理欽此

646 乾隆二年八月初八日總理事務王大臣奉

上諭數年以來各省督撫往往奏稱某道府不勝外任請調京改補朕欲驗其人才常允所請今送部引見酌量補用今馬宏琦奏稱典陟奉有恆規內外無容偏重微特衰廢者不宜復玷曹司即平常者亦不應數行改補等語朕思內外原屬並重部曹亦為要職督撫等于所屬道府內有不能勝繁劇之任者即當奏請調簡若并不能勝事簡之任即應勒令休致何得輕視京職而為苟且姑容之計以自便其私耶人若日理萬幾時降諭旨豈能必其盡當司言責者果能據理直陳于政務自有裨益殊非托之空言而無濟于實用者可比馬

宏琦所奏可嘉著交部議叙并將伊原奏發各督撫知之馬駁雲到京之日該部帶領引見請旨欽此

647 乾隆二年八月初十日內閣奉

上諭朕聞江南碭山縣段家莊大壩以外一帶河灘因黃河水勢漫溢約長四十餘里寬五六里十里不等居民廬舍被淹田禾受傷不能收獲祇因該縣秋成豐稔不過一隅被災又係堤外河灘是以地方官未經申報朕愛養黎元惟恐一夫不獲其所今此被水民人棲身無所餬口無資深可軫念著該督撫即飭地方有司迅速查明撫綏賑恤務使登之衽席毋得以漫灘被水乃事勢之常稍有忽視欽此

648 乾隆二年八月十一日總理事務王大臣奉

上諭畿輔近地今歲歉收現在嚴禁燒鍋以裕民食而射利之徒反因此囤積米糧希冀開禁或候糧價更長時獲取厚利此等皆係奸民之尤亦有司

不實心奉行之故萬福所奏乃地方實有之情形而非苛刻之論一邑如此其他可知矣王大臣等議令州縣官出示曉諭殊不足以示懲似此等奸民既不恤鄉里之艱又不畏國法之重即治之以罪亦理所宜然何所容其姑息著總督李衛轉飭屬員即行嚴查務使囤積之弊悉除俾貧民得以糴糧餬口毋得仍前忽視欽此

649 乾隆二年八月十六日內閣奉

上諭直隸大名道員缺著浙江杭州府知府秦圻補授仍著來京引見杭州府知府員缺甚屬緊要著大學士崑曾筠于所屬知府內揀選一人調補其所遺之缺著郭廷藩署理若能勝任題請實授欽此

650 乾隆二年八月十八日總理事務王大臣奉

上諭直隸河道水利關係重大若但為目前補救之計而不籌及久遠恐於運道民生終無裨益前覽

顧琮李衛所奏尚非探本清源之論著大學士鄂爾泰親往詳勘形勢籌度機宜應如何改移開濬修築之處熟商妥議酌定規模仍交與顧琮李衛督率所屬該管官員遵照辦理欽此

651 乾隆二年八月二十一日內閣奉

上諭大理寺卿汪澄奏稱

聖祖仁皇帝上諭十六條曉諭兵民人等

世宗憲皇帝教暢其義以為廣訓化民成俗之道無以

復加但直省有司宣講多在城中至集鎮村庄不

過書寫告示民不能遠望者請開闢空地俾得傳佈夫牖民覺世惟在化導

得人

皇祖

皇考洋洋聖謨字字切於民生日用誠使講明切實

力奉行自有革薄從忠之效朕即頒發諭旨其簡

明切要該括無遺豈能加於

聖諭十六條其諄切周詳智愚共曉豈能過於

聖諭廣訓若奉行不力不過地方有司多一具文而已

汪澄所請不必行著傳諭直省督撫督率有司將

聖訓實力宣講多方勸導務使遠鄉僻壤之民共知遵守是訓是行以無負  
教迪提撕至意特諭

652 乾隆二年八月二十九日內閣奉

上諭福建南澳鎮總兵官員缺前命馬成林暫行著

理閩馬成林係陝西人於海洋事宜未能熟練查

有廣東左翼鎮總兵官黃錫中原籍福建平素諳

練水師船務克勝南澳海疆之任著將馬成林調

署廣東左翼鎮總兵官黃錫申調補福建南澳鎮

總兵官欽此

653 乾隆二年九月初三日內閣奉

上諭據大學士管川陝總督事務查即阿奏稱陝西

西安等府今年夏秋雨澤稀少米糧價值漸次昂

貴幸于七月二十七八等日得雨霽足民心慰悅

不意八月初一日後晝夜淫雨河水泛溢咸寧長安

臨潼等縣被水村庄田廬淹沒人口亦傷數名現

在飛飭西安布政使查明賑恤等語西安等屬從

前雨澤愆期朕恐民食維艱已諭令該撫等預為籌畫今咸寧等處又因雨多苦潦村舍被淹朕心深為屢念著廵撫崔紀遵委賢員逐一查勘撫綏安紳俾有屋可以棲身有糧可以餬口何使一夫失所其收成歉薄之地方本年應納錢糧或應緩徵或應蠲免亦著確查定議具奏欽此

654 乾隆二年九月初三日提理事務王大臣奉

上諭御史舒赫德條奏請將各省稅務歸併旗員管理此奏甚無識見彼意以為旗人生計艱難若管理稅務則可沾餘潤以資養贍不知國家設立關隘原以查察奸宄利益商民並非為收稅之員身家之計也若以旗員貧乏而差遣之是導之使貪矣朕日以砥礪廉隅訓勉且工尚恐其不能遵奉而可以謀利之見為之導乎况當日旗員管理關務者亦指不勝屈惟視此以為利藪故貪黷之風侵蝕之弊不一而足因而身罹罪譴籍其家產累及子孫是今日旗員之貧乏未必不由於當日收稅之苛致也豈可使之復蹈前轍且各省委辦稅

務率多道府等官並無滿漢之別如滿洲有任道府而廉潔自愛者何嘗不可派委而必定以為例乎拯之為上者施逮下之仁惟有勵以忠勤示以節儉固其根本之圖而為下者則當早作夜思宣力供職以永受國家惠養之恩方可謂之計長久蓋厚其生計之道不可不思而長貪風以為惠下則利未見其為利且貽害於後日此理甚明非所以教旗員之道亦非所以愛旗員之心也朕御極之初圖理琛即為此奏提理事務王大臣亦以為可行朕並未俞允後此陳奏者紛紛朕鑒不准行亦未交議今舒赫德又條奏及此可得朕旨宣示乎外使咸知朕意毋得以斷不可行之事再行妄奏欽此

655 乾隆二年九月初六日內閣奉

上諭江南淮揚一帶於今冬大挑運河自運口以至瓜州計程三百餘里分隸淮安府之山陽揚州府之寶應高郵甘泉江都五州縣管轄將未築壩開工之後舟楫難通民間輸納漕糧須用車駝陸運

未免竭蹶又淮安府之鹽城阜寧二縣與山陽接壤向於淮城內外交倉兌運則納漕與山陽等五州縣無異朕心為此深切軫念查雍正八年十一年江南所屬漕糧有改徵折色每石納銀一兩之例著將今歲山陽等七州縣應納漕糧照此例改徵折色以紓小民運送之力再查此七州有上年緩徵漕糧二萬餘石原議於今年完納今河道如此亦應一體加恩著寬至明年再行酌量或徵本色或徵折色著收成光景定議交官著該部遵諭速行江南督撫等知之欽此

656 乾隆二年九月初八日內閣奉

旨尚書徐元夢老成望重雖年逾八旬未甚衰憊著照舊供職量力行走不必引退但伊繕譯職掌甚多難於兼顧應酌量減派以便頤養其繕譯日講春秋等書著內閣學士齊密管理一切繕譯研文祭文等事著侍讀學士德通承辦姓氏館事務著內閣學士春山代管稽察咸安宮繕譯著正詹吳拜管理欽此

657 同日內閣奉

上諭聞河營兵丁內有椿手一項下埽簷樁履危踏險較之力作兵丁更為辛苦前將二十河營兵丁改為戰二守八俾椿手均食戰餉以賞勤勞而河南山東兩省河兵尚循舊制可當照江南之例一體加恩著將河東西省河兵亦改為戰二守八使用力較多之椿手得食戰餉以示朕慎重河防優恤戎行之至意欽此

658 同日內閣奉

上諭湖南辰永靖兵備道李珣于上年丁憂今年點省軍需題銷事竣即應離任守制查辰永靖道員一缺駐劄鎮筸控制紅苗地方緊要非才能素著熟悉風土之員不勝任承順府知府楊輔臣久任苗疆辦事妥協昨同武弁勤捕強盜著有勞績即補授辰永靖兵備道其所遺承順府知府員缺著該督撫照例揀選題補欽此

659 上諭

至聖先師孔子天縱聖神師表萬世尊崇之典至我朝而極盛

皇考世宗憲皇帝尊師重道禮敬尤隆闕里

文廟

特命易孟黃瓦鴻儀炳煥超越前模朕祇紹先猷羨塙念切思園子監為首善觀瞻之地辟靡規制宜加崇飾大成門大成殿著用黃瓦崇聖祠著用綠瓦以昭展敬至意特諭

660 乾隆二年九月初十日內閣奉

上諭今歲直隸山東有被水之州縣民食艱難朕已屢降諭旨多方籌畫務使閭閻不致失所其勸明成災之州縣該督撫等自督率有司蠲賑兼施悉心經理而勸不成災之地方普無蠲賑之例但被地二麥既早秋成又薄難保貧民無之食之虞亦當酌量加恩以資力作或應貸與社倉谷或應借給籽種銀兩著直隸總督山東巡撫轉飭該地方官體訪詳確實力奉行毋得視為故事欽此

661 乾隆二年九月初十日內閣奉

上諭江蘇巡撫員缺著楊永斌調補湖北巡撫員缺著張楷前往署理欽此

662 乾隆二年九月十一日內閣奉

上諭廣西按察使員缺著廣東廣南韶連道馮元方補授廣南韶連道員缺著御史薛韻補授欽此

663 乾隆二年九月十三日奉

旨戶部等衙門議覆白石關復一案戶部違延著交部查議欽此

664 乾隆二年九月十四日內閣奉

上諭據福建總督郝玉麟奏稱福州地方於八月十五夜颶風忽作甚為狂烈省城兵屋民房多被吹倒亦有壓傷人口者沿河沿海之商民船隻亦多撞損飄沒現在飭查分別賑恤等語今年六七月間閩省雨水過多州縣有被水之處已諭令該督

撫加意撫綏濟其困乏繼聞水勢消落甚速貧民已獲寧居其他未淹地方禾稼茂盛朕懷稍慰今聞福州一帶又有颶風之災廬舍舟船多有傷損朕心深為軫念著該督撫轉飭有司速行確查安插賑濟務使被災兵民各得棲止不致一夫失所

欽此

665 乾隆二年九月十五日奉

上諭朕以八旗生齒日繁而生計不足日夜為之籌

畫上年諭令總理事務王大臣悉心妥議隨經王大臣等議借官兵俸餉各一年分季扣還俟二年後再為酌量奏請朕思文官已給有雙俸武員亦給有隨甲似可敷用惟兵丁生計向來艱窘不無借貸之事上年借餉時多有償還舊欠者今若待二年後方行找借恐伊等目前艱難又復重利借貸有妨生計除在京官員及

陵寢通州沙河兵丁等毋庸借給外其在京兵丁等著

再借給餉銀半年通前展限二十四個月陸續坐

扣俾得藉以經理度歲之資爾兵民等宜恩國家

之經費有常朝廷之賞賚有節務從儉約以仰事俯育共受國家之恩倘官銀到手快一時之意徒事花銷而不計將來之用度是既負朕恩又自取困苦矣思之思之著將此旨通行曉諭並傳諭該部於閏九月給發欽此

666 乾隆二年九月十九日總理事務王大臣奉

上諭國家設立科道官員專司建言之責必心本無私又能通達治理乃為無忝厥職若識見雖未明通而居心樸誠則其言雖愚戇而尚無害於事理朕亦鑒其忱悃而優容之惟胸懷愛憎之私借章奏以展其巧計者則有玷臺垣國法不可以輕恕即如並未深悉地方民情而奏稱某地某事甚善而承辦之人已暗受其推薦奏稱某地某事不善而承辦之人已隱被其中傷是其敷陳之時並非據實秉公匡勸政事而言在於此意注於彼其居心尚可問乎看來近日科道中此等習氣頗不能免亦難逃朕之洞察今年毛城舖一案即其明驗也



朕所以已勅部糾察而復寬恕者特以伊等職在言官過為<sup>切</sup>汰然寬大之恩不可屢邀而獻納之實所當躬踐至如前日御門御史謝濟世露章奏九卿刑部秋審不公其意本於摠誠尚近于愚慙一流而非出于愛憎之私者此事交總理事務王大臣查奏即使所奏非當朕亦取其慙直斷不以所言未協輒加斥責也其餘科道官員當捫心自問如稍有愛憎之私未泯于中者各宜猛省悛改毋蹈罪戾欽此

667 同日總理事務王大臣奉

上諭史貽直著回部辦事湖廣總督員缺著德沛補授甘肅巡撫員缺著元展成補授欽此

668 乾隆二年九月二十一日奉

上諭八旗護軍校驍騎校等原係食俸之員因欲令伊等用度從容故將俸項改給錢糧而過閏之年不得與兵丁一體支領閏伊等于閏月用度未免拮据著于本年為始凡過閏月照兵丁例一體

支給閏餉欽此

669 乾隆二年九月二十二日內閣奉

上諭京師輦轂之下民人衆多更有外省失業之民來京覓食者定例於十月初一日五城設立飯廠十處以濟貧乏朕思今年適值歲閏天寒較早閏九月十五日便是立冬節令恐待哺貧民不無凍餒之患著加添半月之期于閏九月十五日即行開廠不必拘十月初一之例都察院堂官可督率五城御史稽查經理實心任事務令小民均霑實惠欽此

670 同日總理事務王大臣奉

上諭鄭祥寶著來京山東布政使員缺著黃叔琳補授山東按察使員缺著白映棠補授欽此

671 同日內閣奉

上諭廣東布政使薩哈諒著調補山西按察使廣東  
布政使員缺著江西布政使刁承祖調補江西布  
政使員缺著內閣侍讀學士阿蘭泰補授欽此

672 同日奉

上諭秦道然著釋放其未完銀兩亦著豁免仍令該  
督撫轉飭地方官嚴行管束不許出境生事欽此

673 乾隆二年九月二十三日內閣奉

上諭湖南按察使員缺著嚴瑞龍補授欽此

674 同日內閣奉

上諭前聞陝西西安等處夏秋雨水糧價昂貴七月  
間雖得雨霑足又以河水漲溢民間田廬有淹浸  
之患朕心軫念已屢降諭旨著該撫遴委賢員查  
勘撫綏悉心籌畫毋使一夫失所今聞西安地方  
草束短少秋冬之際芻秣尚可支持明年正二三  
月則草價更昂將軍標下兵丁額領之銀不敷喂

馬之用未免拮据著將春季三個月駐防兵丁所  
有草價加增一倍賞給一交四月青草發生仍照  
舊例支領至督撫標下牧馬草價應否酌添之處  
著該督撫妥議具奏欽此

675 乾隆二年九月二十三日內閣奉

上諭昔年廣西等省派往貴州出征兵丁所借餉項  
已於雍正十三年十月內奉調起程赴黔借支司  
庫銀三百六十一兩零此項在恩詔之後例應扣  
還但朕念兵丁出征勞苦今軍務告竣應與眾兵  
一體寬恩著將所借餉銀豁免不必扣繳又聞土  
田州出征黔省自兵四百六十五名於乾隆元年  
十一月內在軍前監紀處借支銀三百七十二兩  
製備冬衣亦係應行追繳之項朕念伊等隨征効  
力今當加恩休養之時此項亦著豁免不必追繳  
可即傳諭該督撫知之欽此

676 乾隆二年九月二十五日吏部奉

上諭蘇敏著照原官降一等交與河道總督高斌於  
河工試用已查爾著照原官降一等交與該旗以  
旗員補用車柏仍以主事用孔毓銓趙永甃著以  
知縣歸班補用趙之均著以知府歸班補用欵此

677 乾隆二年九月二十六日總理事務王大臣奉

上諭上年八月朕加恩八旗官員兵丁借給一年俸  
餉而京師錢文貨物一時昂貴彼時即降旨曉諭  
令其省改不得蹈為富不仁之戒目下朕又加恩  
借給八旗兵丁半年餉銀以厚其生計乃幣銀尚  
未領出而錢價物價已經驟長此等商民竟不凜  
遵從前諭旨而惟以圖利為心是不奉法之奸民  
矣殊不知兵民原屬一體貿易亦應公平况兵丁  
以銀易錢易貨商賈營運得以流通即照常市賣  
亦儘可獲子母之利益何得借以居奇不知饜足  
為此貪饜剝削之計致使國家加惠兵丁之善舉  
竟為奸民等所阻其罪誠不可逭矣朕思伊等商  
民自營生理或一時為利慾所蔽專務貪取而昧

678 乾隆二年九月二十八日內閣奉

於公平之義然既具有人心則天良未泯尚可望  
其省悟著步軍統領順天府尹五城御史多方曉  
諭速令悔改如仍蹈故轍則國法難寬即照該御  
史所奏從重治罪如兵丁等因此諭旨有向鋪戶  
短價強買者經朕訪聞亦必重治其罪欵此

上諭滇省安寧等地方上年收成歉薄朕屢降諭旨  
令該督撫悉心籌畫多方經理以濟民食除蠲除  
錢糧外並將分作三年帶徵之秋糧全行豁免俾  
閭閻無追呼之擾但聞滇省有夏稅一項久經以  
麥改米同秋糧並徵今秋糧既免而夏稅猶分年  
年完納恐小民難以分別輸將而官役又易於從  
中滋弊非朕加惠遠民之意著將上年歉收各屬  
夏稅共麥收豆折徵米一萬八千二百六十四石  
七斗零共米收折徵銀四千八百五十四兩五錢  
八分永北府未完帶徵麥一百四十一石悉予豁  
豁免該撫張允隨可即宣朕此旨通行傳諭並飭  
有司確實遵行毋使不肖官吏及地棍人等侵蝕

中飽欽此

679 乾隆二年九月二十八日內閣奉

上諭前聞福建閩縣侯官長樂福清連江羅源等六縣於八月十五夜颶風為患廬舍舟船多有傷損已諭令該督撫督率有司安插賑恤務使兵民停所今思此六縣民人從前曾經被水今又被風各為糜蕪室家之計未免拮据其本年額徵未完錢糧輸將竭蹶著該督撫轉飭該縣暫緩催徵着地方收成情形應於何時徵收再令民間完納該部可遵諭速行欽此

680 乾隆二年九月三十日奉

上諭兵部尚書事務著那蘇圖暫行署理欽此

681 乾隆二年九月三十日總理事務王大臣議覆

方苞條奏九卿會議事宜一摺奉

旨依議廷臣會議公務其秉公建白與否皆發于其人之中心非立之章程可迫之使然者若如方苞

所奏不但事有難行即定以為例而不肯視國事如已事之人其緘默仍如故也嗣後九卿等當思受朕簡畀之恩凡遇廷議事件胸有所見即據理直陳互相參酌以歸于至當毋得推諉主稿衙門隨班畫題以了故事有負朕博採衆論之至意欽此

682 乾隆二年閏九月初一日內閣奉

上諭江南黃運兩河堤工之上向有民人蓋房居住者曾經河臣等議令拆毀遷移以防作踐旋以小民安土重遷止令移去險要工所之房屋其餘仍舊存留此國家體卹貧民之恩澤也查各堤所有民房俱無額徵租稅惟高郵寶應江都甘泉山陽五州縣每年有應徵租稅銀三百八十餘兩其間拖欠不完者往往有之朕念此等葺屋茅簷非有力之家可比若留此輸公之項雖為數無多而追呼不免且恐有胥役借端苛索之弊用是特頒諭旨將此項租銀永行停止並將歷年拖欠未楚之數悉予豁免惟是工下堤工乃河渠之保障理宜

加意慎重以固河防除現在已成房屋無碍堤工者免其遷移外將來不許再有增添如有違禁增蓋者即行驅逐治罪並將徇縱容忍之官并分別議處欽此

683 乾隆二年閏九月初一日內閣奉

上諭川省耗羨銀兩向因公用不敷每兩完銀二錢五分朕御極以來加惠閭閻減去一錢止存一五之數無非欲使民力寬餘受國家休養之澤也今據碩色奏稱該省相沿陋例於火耗稅羨外每銀百兩提解銀六錢名為餘平以充各衙門雜事之用等語不勝駭異火耗之報官原以杜貪官汚吏之風若耗外仍聽其提解此非小民又添一交納之項乎一項如此別項可知一省如此他省可知朕思此等浮多之費難為數無幾而取之商民層層剝削其數必不止此難免地方之擾累著巡撫碩色永行革除以杜官吏借端需索之弊倘公用內有必不可少之項著於存公耗羨內支給報銷別省有如此者著各該督撫查明具奏該部即遵諭行欽此

684 乾隆二年閏九月初七日內閣奉

上諭西寧一鎮關係緊要署總兵范時捷現在有疾著來京調理仍回散秩大臣之任其西寧總兵印務著副將王友詢署理欽此

685 乾隆二年閏九月初九日總理事務王大臣奉

上諭浙江金衢嚴道員缺著直隸口北道儲龍光調補口北道員缺著鄂昌補授山東糧道員缺著署廣平府知府趙城補授陝西興安道員缺著西寧府知府岳禮補授欽此

686 乾隆二年閏九月初九日內閣奉

上諭朕因豫省臨河州縣於夏秋之交雨多水溢有淹沒田禾之處諭令該撫悉心查勘撫綏安插今據尹會一摺奏今秋被水各邑係一隅偏災其未淹地畝仍有七八分收成惟西華濬縣臨潁鄆城四縣被水稍寬已確查貧苦民人按戶賑濟三個月並將本年地丁錢糧照例奏請蠲免其永城汲縣新鄉延津淮寧項城扶溝等八縣被淹地畝零

星間錯本屬無多勘明俱不成災但地畝收成未免稍減請將本年錢糧暫行緩征至來年徵收等語尹會一此奏已交該部議具奏朕思西華等四縣被水既寬除應免之錢糧照例蠲免外其餘應納之數尚在催科之內民力未免艱難著將本年額賦緩至明年麥熟後再行徵收以紓民力至永城等八縣雖勘明俱不成災但彼地既有被水之鄉村其中必有乏食之貧戶著該撫委員確查將不能餬口者於冬末春初賑濟兩個月務令均沾實惠毋使一夫失所此朕格外之恩至尹會一所奏該部仍照例速行議覆欽此

687 乾隆二年閏九月初十日內閣奉

上諭荆州將軍秦泰因軍政屆期將年老佐領五十秦等七員照例請交部院議處查文員大計武員軍政有千八法者向來皆一體處分其中有年老一條例應休致朕思文職辦理地方事務非年齒遲暮之員所能勝任故不得不令辭退至若武員分防汛地操練伍固亦需精力強壯之人但此內

不無出兵數次曾經効力具有軍功者若際以年老照文員一體擯斥其情亦屬可憫况現今旗員以老告退查有軍功尚給與半俸此國家優恤武弁之至意夫告退者猶且加恩而現任者遽行罷職朕心殊為不忍嗣後如遇出兵効力之將弁其年齒雖老而精力未至衰憊者或仍留原任或調補簡缺以保全其末路其如何定例之處著九卿會議具奏欽此

688 乾隆二年閏九月十一日內閣奉

上諭浙江處州鎮總兵員缺著湖州協副將丁山補授欽此

689 乾隆二年閏九月十二日總理事務王大臣奉

上諭雲南總督尹繼善來京陛見奏稱伊父年老難以速離情詞懇切著留京補授刑部尚書雲南總督員缺著慶復調補兩江總督員缺著那蘇圖補授那蘇圖現兼辦兵部事務即著尹繼善兼辦欽此

690 乾隆二年閏九月十三日內閣奉

上諭據河南巡撫尹會一奏稱署布政使溫而遜染於浮滑之習居心不實辦理事件多不認真即如今歲豫省間有被水之西華等處自應分別撫卹乃溫而遜以為大局豐收遂爾緩視至今查造冊結尚未送到其餘錯誤難以縷陳若久在豫省恐難收臂指之效等語溫而遜著解任來京候旨河南布政使員缺著江南廬鳳道范璨補授欽此

691 乾隆二年閏九月十四日內閣奉

上諭憲德不必管理

泰陵工部事務著阿克敦管理欽此

692 同日內閣奉

上諭外省有荒缺銀兩之處向例在於知府以下等官俸工內扣除抵補朕念佐雜微員力量單薄不應在扣除之內已于乾隆元年三月內降旨諭令在督撫司道大員及府縣正印官俸工內酌量均攤以抵所缺之數今思官有尊卑役無大小微員

693 乾隆二年閏九月十五日內閣奉

俸工既經免其攤扣其餘各衙門人役皆當差効力之人額支工食數兩藉以養贍其家若因荒缺扣除則伊等餬口無資情有可憫查此項共計銀一十二萬餘兩著于乾隆戊午年為始各省大小衙門人役工食俱准于地丁項下照額定之數全行支給免其扣荒使執役之人均沾恩澤欽此

上諭聞今年夏秋間有小琉球國中山國裝載粟米棉花船二隻遭值颶風斷桅折柁飄至浙江定海象山地方隨經大學士嵇曾筠等查明人數資給衣糧將所存貨物一一交還其船隻器具修整完固咨赴閩省附伴歸國朕思沿海地方常有外國船隻遭風飄至境內者朕胞與為懷內外並無岐視外邦民人既到中華豈可令一夫之失所嗣後如有似此被風飄泊之人船著該督撫督率有司加意撫卹動用存公銀兩賞給衣糧修理舟楫並將貨物查還遣歸本國以示朕懷柔遠人之至意將此永著為例欽此

694 同日內閣奉

上諭大清律載各府州縣

社稷山川風雷雨諸神所在有司以時致祭所以肅祀典而迓休和禮至重也省會之地督撫司道駐劄同城向因律文未載遂不與祭專屬府州縣官行禮朕思督撫司道等官均有封疆守土之任自當虔奉明禋為民祈報凡春秋致祭社稷山川風雷雨等壇督撫應率領屬文武大小官員敬謹行禮提鎮道員駐劄之地一體率屬陪祭其如何分別班次派員監禮及修整壇壝祭器之處該部詳悉定議具奏欽此

695 乾隆二年閏九月十七日內閣奉

上諭光祿寺卿納爾恭奏請將筆帖式黨鄂等五人委署署丞將來遇有署丞等缺出挨次帶領引見補授等語此摺著交吏部議奏朕看近來各部院衙門題補官員太多往往不由資格若似此辦理必致吏部難以銓選有碍選法其如何分別定例之處著吏部妥議具奏欽此

696 乾隆二年閏九月十八日內閣奉

上諭浙江今歲收成頗稱豐稔惟溫台二府屬有濱海被水之縣邑穀價未免昂貴已據大學士嵇曾筠等悉心籌畫動撥省城義倉米穀運往二郡分貯以備將來平糶之用朕思溫台所屬既有被水之處除高阜田禾豐收者自應照常徵收錢糧其窪地薄收之田畝雖不至于成災而貧民力量不足若令依限完糧未免輸將竭蹶著大學士嵇曾筠轉飭有司將薄收之處詳細查明分別緩徵以卹民隱該部即遵諭行欽此

697 同日內閣奉

上諭聞直隸正定總兵官蔡永文不能約束兵丁難勝總兵之任著來京俟有漢軍副都統缺出該部請旨正定總兵官員缺著雲南昭通鎮總兵官徐成貞調補昭通鎮總兵官員缺著雲南騰越協副將鄭文煥補授欽此



698 乾隆二年閏九月二十日總理事務王大臣奉

上諭直屬營田水利昔年蒙

皇考世宗憲皇帝特命怡賢親王大學士朱軾查勘地方情形不惜數百萬金錢興修經理已有成效固當垂之萬年為直屬民人永久之利然溝渠澮洫堤埝園埂之屬必須隨時修葺歲加補治方於田功有益今歲春夏間雨澤愆期各州縣水田多未種植已據直隸總督李衛奏請停止採買米石朕思本年水田既未種植則溝渠各項勢不能無廢壞之處倘地方有司稍或玩忽不隨時整理必誤明歲春耕夫州縣地土原有高下之不同其不能營治水田而從前或出於委員之勉強造報者自應聽民之便改作旱田以種雜糧若附近水次可以營治之因而從前已經開成者倘因本年未曾種稻遂致廢棄殊為可惜著總督李衛飭行各州縣分別查明將實在可垂永久之水田勸諭民人照舊營治無得任其荒蕪其溝渠各項有應行修葺者即於農隙之時酌給口糧督率修治欽此

699 乾隆二年閏九月二十一日總理事務王大臣

奉

上諭據淳郡王弘曠護軍統領柏修奏報修理

陵寢工程告竣朕於十月初四日啓程前往展謁行禮

可傳諭各該衙門知之欽此

700 同日內閣奉

上諭據尚書尹繼善奏稱前經兵部議覆雲南提督蔡成貴與永順鎮總兵蘇應選結親一案奉旨劉永貴調補永順鎮總兵官所遺員缺著蘇應選調補臣查貴州鎮遠一鎮甫經改設控制台拱等處俱係新疆要地劉永貴老成慎重熟悉苗地情形且能文武和衷於鎮遠新設之鎮正為合宜似應將劉永貴仍留原任令其一手辦理實為有益其永順鎮缺接連外域亦屬緊要查有四川重慶鎮總兵張士俊辦事勤慎前任江南遊擊臣所素知可否就近與蘇應選調換謹此奏聞請旨等語著照尹繼善所奏劉永貴仍留鎮遠鎮之任張士俊調補永順鎮總兵官蘇應選調補重慶鎮總兵官

欽此

701 乾隆二年閏九月二十二日內閣奉

上諭豫東兩省河工所用歲搶修之柴薪俱係州縣領銀採辦交工應用每行價值搶修給銀九毫歲修給銀六毫零此十餘年來之例也昨戶部侍郎趙殿最奏差豫省條奏歲修六毫之價不敷採辦請概給九毫以裕民力朕已允行但恐東省與豫省河道毗連壤地相接所需料物價值大率相同豫省既已加增則東省歲修之價亦應照豫省之例給與九毫俾運工車脚數足小民益可踴躍趨事該部即遵諭行欽此

702 乾隆二年閏九月二十四日總理事務王大臣

奉

上諭朕前因各省軍屯額糧過重密諭各省督撫確查今據尹繼善奏稱滇省軍丁一項從前未曾攤入地畝原議俟查有欺隱軍屯田地陸續抵補每丁自二錢八分至六錢二分不等共應納銀一萬

五千三百八十兩內除自雍正四年至十一年抵去銀三千餘兩外尚有應征丁銀一萬二千二百七十餘兩歷年惟按冊載老丁名字征收或已無寸土而追比無休或已絕後嗣而波及同伍等語滇省軍丁一項從前既未曾攤入地畝而現在完納丁銀之人又係無田之戶邊地屯民未免輸納維艱深可憫恤著將應征軍丁銀一萬二千二百七十餘兩自乾隆三年為始概予豁免俾無業屯民永釋苦累該督撫等即通行曉諭務使均沾實惠以副朕加惠邊氓之至意欽此

703 乾隆二年閏九月二十五日奉

上諭諭禮部前因淳郡王弘曠護軍統領栢修奏報修理

陵寢工程告竣朕已降旨於十月初四日起程親往展謁所有應行一切祭祀典禮著禮部敬謹詳議具奏欽此

704 同日內閣奉

上諭今年陝西西安一帶地方收成歉薄糧豆價貴而草價更屬高昂將軍標下兵丁額領之銀不敷喂馬之用已降諭旨將明春三個月草價應否酌添之處妥議具奏今思陝省駐城八旗三標官兵馬匹所有米豆二項俱領折支之價自行採買今年價值昂貴兵丁購買未免艱難除從前已經支給者無庸加增外著將現有應折未支之米豆照原定每石一兩之價加添銀五錢俾兵丁等力量寬餘不致有添價採買之苦此朕格外加恩後不為例欽此

705 乾隆二年閏九月二十六日內閣奉

上諭雲南路程遙遠往返多需時日提督蔡成貴不必來京陛見欽此

706 同日內閣奉

上諭貴州苗疆新定所有善後事宜正須料理總督張廣泗不必來京陛見俟一二年後朕再降諭旨

欽此

707 乾隆二年閏九月二十九日內閣奉

上諭從前雲南布政使陳弘謀摺奏廣西借鑒報捐一事與金鉞所奏互異朕已諭令督臣鄂彌達撫臣楊超曾秉公確查毋得徇徇自今尚未覆奏而陳弘謀又復具摺曉曉責陳弘謀身為滇省藩司此並非任內之事其始初之奏猶云據已知而直陳以備採擇既降旨交與他人查議則伊事已畢惟有靜候無再言之理乃伊不待督撫諸臣議覆而又為是責奏儼然似以為不如伊所奏不止者是誠何心且伊為粵人即所言盡是而從之猶恐鄉紳挾制朝政之漸况未必盡實乎殊屬冒昧之至著交部嚴加議處以為將來之戒欽此

708 乾隆二年十月初二日內閣奉

上諭策楞訥親因伊母之喪奏請守制二十七月情詞懇切凡滿洲大臣官員遇有親喪於百日之後即入署辦事者以旗員人少若皆守制三年則公

事必致有悞亦出於勢之不得已也滿洲服制以百日為期今年朕因穆和林之奏特降諭旨令滿洲大臣於二十七月之內不與朝會宴集之事而持服一節尚在交議未定但思滿洲官員及世職等俱藉其俸祿以贍其家口如皆令離任開缺無以為養贍之資其事亦屬難行雖人子之於親喪盡哀盡禮以答劬勞之德乃出於天性至情初不計及俸薪而朕養育旗人之意則不得不為之籌畫萬全今詢親之奏若抑令祇循舊制人子之心必有輟轉難安者其應作何斟酌分別定制俾公事私情俱得兩盡之處著大學士會同九卿妥議具奏武職自副將以下向無丁憂之例今應如何酌量定制著一併議奏欽此

709 同日批本郎中齊達色傳

旨御史舒輅著仍兼批本處行走欽此

710 乾隆二年十月初三日奉

旨平郡王著留京辦事欽此

711 同日內閣奉

上諭聞浙江嚴州府屬桐廬縣有官抄秋租二項額徵條銀較之民產科則多至三五倍不等前代相沿事隔久遠不知起於何時而此二項田多屬瘠薄又因賦重輸納維艱每至催徵逋逃相繼甚可憫念查此二項原徵銀七百九十九兩若依民科則共應減銀五百八十一兩零著該部即行文與大學士嵇曾筠從戊午年為始減去浮多之數照民產一例徵收俾小民均沾實惠欽此

712 乾隆二年十月初十日總理事務王大臣奉

上諭昨據孫國璽石麟等奏稱晉省被災五州縣請銀米兼賑隨經部駁令其動撥隣縣谷石分別散給如不得已而銀米兼賑令該撫等酌定價值報部已降旨先行朕思積貯之設所以裕民食也當荒歉之歲地方米谷必致缺乏發粟散賑既可令無食貧民藉以糊口而奸商之囤積者亦不得借

以居奇此救荒之常理也且米石出入衆目共覩上亦易于稽查若以銀分給殊非周濟民食之本義而貪官滑吏浮冒侵蝕更弊端百出矣但恐晉省倉糧平日原未必充裕而今年被災之處或尚不止五州縣倘或倉儲無幾輓運需時則災民之迫不及待者不得即沾升斗又非朕軫卹窮民之至意用是再頒諭旨著孫國璽石麟等詳查地方實在情形如果隣邑米多易運即照議撥給若糧少運難著暫行銀米兼賑仍酌定價值報部一面辦理一面奏聞總在多方稽察務使官吏無所容奸窮黎均沾實惠欽此

713 乾隆二年十月十二日內閣奉

上諭福建丁銀從前照各省之例勻入地糧之內合省稱便惟有延平府南平一縣丁口衆多不能通勻數年以來紛更滋擾小民不無賠累之苦查該縣田糧共計銀一萬七千一百三十餘兩應照每田糧一兩勻徵銀二錢之例共勻入丁銀三千四百二十六兩零其浮多丁銀三千三百八十三兩

六錢悉行豁免俾民寬餘永無追呼之擾累該督撫即遵諭行欽此

714 乾隆二年十月十二日內閣奉

上諭崔紀著實授陝西巡撫尹會一著實授河南巡撫張楷著實授湖北巡撫許容著實授山西布政使楊錫紱著實授廣西布政使戴永椿著實授江蘇按察使張坦麟著實授安慶按察使魏定國著實授陝西按察使凌煇著實授江西按察使欽此

715 同日內閣奉

上諭蘇明良著實授福建陸路提督張天駿著實授廣東提督欽此

716 乾隆二年十月十三日內閣奉

上諭今冬挑濟淮揚運河大工齊舉所有員役人夫不下數十萬日用薪米食物所需甚多恐將來物價漸致增長查淮關則例除本地所收米麥雜糧不收稅課其外來客商販賣者按石徵收舊例如

此朕思目下興工之時若裁去一分稅銀自可平減一分物價於沿河居民及在工夫役均有裨益著管理淮關稅務內務府員外唐英將淮安大關并沿河口岸經過之客販食米豆麥雜糧以及煤炭葦柴等物悉免稽查不必納稅俟明年工竣之後照例徵收又聞河南固始縣素稱產米之鄉每年客販運至清江浦地方卸賣其價頗賤今運口築壩固始米船不能直達清江浦而相近清江有老壩口地方可以卸賣著將此地米稅亦照淮關之例暫行寬免該部可一併行文唐英知之欽此

717 乾隆二年十月十三日內閣奉

上諭雲南省之昭通東川元江普洱四府內新闢夷疆人稀土曠從前曾經募民間墾借給銀兩令其分年還納至今尚有未完銀一萬八百六十餘兩朕思滇省去年收成歉薄閭閻生計艱難已經將乾隆元年應徵地丁錢糧俱行寬免以紓民力夫正供尚且蠲除而開墾風道猶令追繳窮黎拮据朕心深為軫念著將滇省未完開墾借給銀兩悉行豁免以示朕加惠邊氓之至意欽此

718 乾隆二年十月十七日內閣奉

上諭據尚書尹繼善奏稱從前奉旨陸續命往雲南試用副將花天立董芳李之棟李梅李逢春等五員以副參試用繆弘一員查雲南副將止有四缺而本省參將又多屬屢經出師著有勞績之員未免缺少人多難於位置董芳曾任雲南於風土頗稱熟悉李梅為人樸實現署雲南城守營參將事務繆弘才具幹練此三員仍應留滇試用其花天立李之棟李逢春等三員於滇省不甚相宜且得缺無期不免守候之苦應奏聞請旨等語董芳李梅繆弘著照尹繼善所請留滇試用遇有相當之缺酌量題補花天立著來京引見李之棟李逢春著命往湖廣交與總督德沛以副將試用欽此

719 乾隆二年十月十八日總理事務王大臣奉

上諭太原滿洲官兵前於雍正九年移駐寧夏其家口有多支口糧銀米現於各名下分年坐扣朕思該官兵等皆藉月餉養贍現今太原米價昂貴若將從前多支之項坐扣伊等日用未免艱難著將

太原滿洲官兵未扣銀米悉行豁免俾得從容度日以示朕加惠戎行之至意欽此

720 乾隆二年十月二十日內閣奉

上諭前據孫國璽石麟奏稱晉省被災州縣懇請銀米兼賑朕以賑濟之道在於發粟若以銀分給恐官吏易生弊端難於查察應詳酌地方情形如果隣邑米多易運仍令撥給穀石以濟民食若糧少運難著暫行銀米兼賑之法已於本月初十日降旨孫國璽石麟矣今據孫國璽石麟奏稱晉省數州縣今年被旱乃一隅偏災方今收穫已畢所在村莊市集皆有粟米雜糧賑責貧民咸稱雜糧之價較減而食之易飽情願半折領銀俾得兼買攪和更可節省至於散賑之法現委道員督率辦理不敢有侵蝕冒銷之弊查晉省倉儲雖數撥用然乘此雜糧湊集之時散銀糴買而留有用之儲於明年青黃不接之時為借糴之用於小民實有裨益等語孫國璽石麟身在晉省目覩地方情形既稱銀米兼賑於窮民有益即照所奏行但極災卹

因乃國家第一要務倘司其事者經理不善查察不周或致不肖官吏侵蝕中飽使恩澤不能下逮則欽差大臣該省巡撫難辭其咎朕必嚴加處分欽此

721 乾隆二年十月二十日摠理事務王大臣奉

上諭據貴州摠督張廣泗奏稱黔省新疆內北各標營添設兵丁現俱撥補安設兵丁家口應即令搬移前往所需搬移之費請照從前撥往古州清江兵丁搬移家口之例每站每大口給銀一錢口糧米八合三勺每小口給銀五分工糧米四合一勺五抄又婦女幼孩每口給夫一名其夫役僱價請照軍需僱夫之例每名每站給銀八分支給僱募不許地方官稍有虧短俾兵民均得沾恩等語黔省兵丁數年以來踴躍奉公頗為効力此番新疆內地撥補各兵有搬移家口者所需口糧路費人夫各項俱著照張廣泗所奏動帑給發俾各兵家口路費有資不至匱乏再朕思撥補新疆兵丁其搬移家口較之內地兵丁更為艱苦應於給與銀

糧夫役之外特沛格外之恩令其從容寬裕以資日用著張廣泗查明新疆前後所設兵丁有未經搬移家口者令於家口到日每兵一名賞給一季口糧免其扣還再借給兩季餉銀分作八季陸續坐扣還項其內地搬移家口之兵丁既有一番遷移亦必需安頓之費每兵一名准借給一季餉銀分作四季扣還張廣泗即轉飭各標營道行曉諭俾各均沾實惠以副朕加恩兵丁之至意欽此

722 乾隆二年十月二十日內閣奉

上諭從來用人之道在於因材器使方可以收得人之效至於武職官員其所關更為緊要蓋武職有水師陸路之分非但服官之後職掌不同自本身生長之鄉與從幼食糧之始其目之所見身之所習即有迥然各異者夫水師之用非船不行其在江湖內地已有風波之險及至海洋巨浸則茫茫無際必能先知風雲之變幻島嶼之向背沙線之順逆而後胸有成竹可以履險如夷雍正十一年六月內曾奉

皇考聖諭云武弁中熟習水性之人甚為難得每見督撫提臣中有將熟習水師人員題請調用陸路者此皆未經周詳籌策之故著通行傳諭嗣後細加體察若在水師中為平常之員而長於陸路者准其調補陸路若係長於水師之員則應留於水師題補不可因陸路一時需人輕為改易以致用違其長若從前有似此誤用者可查明題請改調向後部中推陞之缺亦著聲明請

旨

考諭旨至聖至明所當永遠遵奉者近見各省題補武弁又有如從前之弊著該督撫提臣於各屬武弁內詳查奏聞請旨若陸路弁員內有通曉水師者亦著奏聞以水師調補使之益加練習如此則海疆可得有用之才而戎行亦收器使之益矣欽此

723 乾隆二年十月二十二日總理事務王大臣奉

旨據駐防哈密提督樊廷奏稱本年蔡巴什湖屯種地畝經管之官弁兵丁等人人勉不敢少懈天時人事兩收其效計算收成數自十一分以至



五十三分不均稱豐稔等語口外駐防官兵等於屯墾事務加意經理收獲豐足甚屬可嘉其各官弁兵丁人等俱著交部照例議叙以示獎勵欽此

724 乾隆二年十月二十六日總理事務王大臣奉

上諭國家馬政最關緊要必平時收養蓄息斯緩急

可以備用從前用兵之時需用馬匹俱發給採買

為數甚多且諸王等俱有進獻之馬近年撤兵之

後此項馬匹未見著落即云每年有倒斃者亦每

百匹中不過數匹而已其應存之馬作何辦理清

楚亦未據詳悉妥議夫牧養馬匹必須經理得宜

俾孳生繁庶日見其多方為有益然以無事之時

而頻年飼養不特糜費錢糧且恐畜養過多草料

騰貴於兵民均有未便是在今日而籌議馬政須

不糜費國帑而孳生蕃盛乃為策之善者其如何

分設廠地牧放俾永久有益之處著總理事務王

大臣議政大臣會同八旗大臣該部詳查妥議具

奏至於京師亦需用馬匹而廠地多在口外未免

離京稍遠即如本年八月間朕欲躬詣

秦陵即據兵部奏請將京城八旗出廠馬匹內調回應

用夫以口外馬匹調至京城用後仍須發回則往

返之間已致疲乏又豈能濟一時之用乎附近京

師如密雲熱河諸處有可安設馬廠者亦宜酌議

安設則調用亦屬近便王大臣等可一併議奏欽

此

725 乾隆二年十一月初三日內閣奉

上諭今年近京地方有被水之處收成歉薄以致京

師米價日漸昂貴朕心軫念多方籌畫內而八旗

外而五城皆設廠平糶官米以濟民食乃近來市

價仍未平減朕再四思維向來定例每逢歲閏但

增給兵丁一月餉銀不給米石是以逢閏之年往

往米價稍昂而今歲尤甚者則以畿輔歉收之故

夫漕糧關係天庾出入皆有常制固難格外施恩

輕為賞賚然於歲歉米貴之時又當酌量變通俾

兵丁等不致有貴價糴米之累用是特頒諭旨將

八旗兵丁借給一月米石其應於何時支領將來

作何坐扣還項之處該部速行詳悉定議具奏欽此

726 乾隆二年十一月初五日總理事務王大臣奉

上諭朕恭閱

皇考硃批諭旨內屢有訓飭各省督撫稽查匪類以正人心以厚風俗之

聖諭而彼時督撫敬謹遵奉亦時有以查獲匪類上聞者蓋以此等不法姦民實為國家之蠹不時稽察懲治所以為防微杜漸之計者至深遠也朕即位以來外省督撫未見有留心查拿匪類之奏如果人心至變風俗醇良竟無此等作奸犯科之輩乃朕所樂聞豈不甚善但恐地方大吏苟且姑容妄意朕崇尚寬大於一切匪類等事平時漫不經心寬縱疎忽而偶有發覺者又復草率完結希圖省事不行奏報夫稂莠不剪無以植嘉禾頑梗不除無以安良善似此姑息養奸實與苛細煩擾者等從來法久廢弛之說乃為微末官吏里巷編氓而言彼其志慮卑庸識見短淺

諭諭旨嚴切則勉強奉行稍閱歲時仍復怠玩在伊等

固不足深責若為封疆大臣者膺朝廷股肱之重寄豈可蹈法久廢弛之陋習如果立法之初稍有未當即當據理直陳不應存陽奉陰違之意若係有裨官方有益民生之事則當永遠遵行久而不替方將期於世法世則豈可以數年之間即先後異轍乎至於稽查匪類乃地方要務既不必刻意搜索滋擾累之端亦不得有心隱諱滋養癰之漸可將此旨傳諭各省督撫知之欽此

727 乾隆二年十一月初九日總理事務王大臣奉

上諭三載考績大典攸關在外則為大計在內則為京察所以昭黜陟而示勸懲也但向來直省大計經督撫薦舉卓異之員俱送部引見准其註冊者例得陞用其有干八法等官分別議處至於京察各官才守兼優者列為一等祇與二等三等人員均以應留註冊而無優叙之例惟列在四等者照八法例處分未免有懲無勸不足以示鼓勵朕意京察列在一等之員亦應酌量加恩但京官與外

省職任不同體制亦異其應如何分別定例之處  
著九卿詳悉定議具奏欽此

728 乾隆二年十一月十一日奉

旨王元樞李廷照僧保吉燕桑格萬崑張明教楊新  
民俱照伊等原官降一等用欽此

729 同日奉

旨雙昂富寧四達色馬爾吉羅克多常春楊滙鄂麗  
中俱照伊等原官降一等用崔鴻訓朱永慶張壘  
曹茂先汪紳文陳武嬰俱著以知縣歸班補用欽  
此

730 乾隆二年十一月十二日內閣奉

上諭前侍讀學士世臣從山西祭告回京奏稱晉省  
驛站養馬銀兩有不敷之處未免賠累朕發交廷  
議旋據議稱直省驛站工料向因浮冒裁減今若  
再議加增恐復開浮冒之端應毋庸議今朕查得  
各省料草銀兩每馬一匹河南湖南俱係五分浙

江江南俱係六分山西則四分五分不等晉省地  
狹民稠人多服賈不若江浙等省之舟楫往來  
處可通商販是以糧草價值平時昂貴而又當秦  
蜀之衝差使絡繹所有額支銀兩除去鞍屨各項  
雜用外每馬一匹實支銀不過二三四分不等以  
致各州縣俱藉口價值不足派民採辦甚或從中  
漁利弊竇叢生閭閻受其擾累所當酌量變通者  
著將晉省驛站料草銀兩比照浙江江南之例每  
馬加足六分至鞍屨各費仍照常例無庸議加巡  
撫石麟布政使許容可悉心辦理嗣後養馬料草  
悉照時價採買如有絲毫派累小民者嚴叅治罪  
朕因晉省情形如此特降諭旨他省不得援以為  
例欽此

731 乾隆二年十一月十四日內閣奉

上諭黃有才著實授浙江定海鎮總兵官欽此

732 同日內閣奉

上諭據郝玉麟盧焯奏稱漳州府知府童華現以玩  
災悞賑不恤民瘼經臣等會疏題奉漳州地方素  
稱難治其知府一缺最為緊要非熟悉風土辦事  
勤敏者弗克勝任查有福州府知府王德純才情  
敏練堪以調補漳州府其福州府亦係省城繁劇  
之地查有泉州府知府張鏐老成練達若以之調  
補福州府亦屬相宜至泉州府知府員缺仰懇天  
恩另簡賢員補授等語著照郝玉麟等所請王德  
純調補漳州府張鏐調補福州府其泉州府知府  
員缺著以同知銜管完平縣事王廷諍補授欽此

733 乾隆二年十一月十五日內閣奉

上諭前據兩江總督慶復奏稱兩淮鹽商義倉米較  
揚州倉存十二萬石泰州倉存六萬石其餘三十  
六萬石分派上下江通融撥補此項穀石因今冬  
批濟運河民食維艱仍運赴淮揚平糶將糶出價  
銀分撥上下兩江等語朕已降旨先行令據兩淮  
巡鹽御史三保奏稱淮商連名具呈復懇請減價

併將額存揚倉之十二萬石一併發糶倘此十二  
萬石之內將來買補不敷該商等情願公捐補足  
等語朕思義倉積貯原以惠濟貧民今大工興舉  
河道不通時值隆冬小民生計艱難傭工夫役沾  
體塗足俱堪憫惜現在平糶之米每升制錢七文  
較之市價已為平減今再格外施恩每升減錢二  
文以五文一升計算每石僅糶銀六錢有零於小民  
實有裨益俟糶完之後將糶出價銀分解上下兩  
江如此項穀石不敷糶賣即將揚倉之十二萬石  
一併平糶此十二萬石之內將來買補缺額眾商  
既稱情願捐補伊等從桑梓起見補實倉廩以濟  
民食著照所請行但不必過於急遽其應如何徐  
徐辦理之處著那蘇圖三保議奏至於平糶之事  
在揚城者著三保會同知府辦理其山陽高寶江  
甘等州縣著該地方官辦理仍著總督那蘇圖巡撫  
楊永斌不時查察務使小民均沾實惠欽此

乾隆二年十一月十五日內閣奉

上諭前據兩江總督慶復奏稱兩淮益商義倉米穀揚州倉存十二萬石泰州倉存六萬石其餘三十六萬石分派上下江通融撥補此項穀石因今冬挑濟運河民食維艱仍運赴淮揚平糶將糶出價銀分撥上下兩江等語朕已降旨先行令據兩淮巡鹽御史三保奏稱准商連名具呈復懇請減價併將額存揚倉之十二萬石一併發糶倘此十二萬石之內將未買補不敷該商等情願公捐補足等語朕思義倉積貯原以惠濟貧民今大工興舉河道不通時值隆冬小民生計艱難傭工夫役沾體塗足俱堪憫惜現在平糶之米每升制錢七文較之市價已為平減今再格外施恩每升減錢二文以五文一升計算每石僅糶銀六錢有零於小民實有裨益俟糶完之後將糶出價銀分解上下兩江如此項穀石不敷糶賣即將揚倉之十二萬石一併平糶此十二萬石之內將未買補缺額求商既稱情願捐補伊等從桑梓起見補實倉庾以濟民食著照所請行但不必過於急遽其應如何徐徐辦理之處著那蘇圖三保議奏至於平糶之

事在揚城者著三保會同知府辦理其山陽高寶江甘等州縣著該地方官辦理仍著總督那蘇圖巡撫楊永斌不時查察務使小民均沾實惠欽此

735 乾隆二年十一月二十日尚書海望奉

旨大學士徐本隨駕時多著將戶部三庫飯銀內每年賞給二千兩欽此

736 同日總理事務王大臣奉

旨署直隸河道總督顧琮養廉四千兩稍不敷用現在副總河已經裁缺所有養廉銀二千兩著一併賞給欽此

737 同日內閣奉

上諭紀龍著實授雲南永北鎮總兵官欽此

738 乾隆二年十一月二十七日直隸總督李衛暫

署總河顧琮面奉

上諭陳儀著帶往河工酌量委用六格亦著帶往辦理壩工俟事竣之日令其回京欽此

同日協辦吏部尚書晉理河道總督顧琮面奉  
上諭增修七政時憲書著莊親王總理欽此

乾隆二年十一月二十八日內閣奉

上諭昨莊親王等奏辭總理事務情詞懇切朕勉  
從所請但日前西北兩路軍務尚未全竣且朕  
日理萬幾亦間有特旨交出之事仍須承辦

皇考當日原派有辦理軍機大臣今仍著大學士鄂  
爾泰張廷玉公訥親尚書海望侍郎訥延泰班  
第辦理欽此

上諭諭點主大臣鄂爾泰張廷玉三奏任蘭枝點主

大臣攸關必取其人品望素優老成端慤者俾之  
敬謹將事方克稱尊奉之隆儀卿等皆國家大臣  
夙荷

皇考恩遇倚任有年名望素重故藉卿等襄此鉅典其

體朕哀慕悃忱齋莊儼恪靜慮凝神以對越

皇考在天之靈庶得仰邀

皇考歆鑒朕有厚望焉特諭

上諭大學士鄂爾泰奏辭總理兵部事務大學士張  
廷玉奏辭兼管吏部戶部事務情詞懇切至於再  
三即數年來亦屢有人陳奏大學士不應兼管部  
務者此乃就常例而論不知國家委用大臣隨時  
變通祇期有裨政治難以拘執成規亦多有與例  
不符而出於不得已者諸臣未能盡知也

皇考當日命鄂爾泰張廷玉兼理部務迄今多年朕御  
極以來亦知兼攝為難二臣亦屢以為請而其中  
實有難於更易之情勢蓋兵部尚書訥親雖年力  
精壯實心任事而蒞任未久諸事尚未諳練吏部  
職總銓衡關係甚鉅非謹慎練達者未易勝任此  
二臣者實為朕心之所倚賴今乃辭解部務將來  
之繼二臣辦理者其事之妥協與否尚未預知豈  
肯遽從所請在二臣受國家厚恩當視公事如己  
事亦何可以任事簡少易於盡職而忽視部務往  
復瀆陳也俟數年之後朕酌量再降諭旨大學士  
鄂爾泰仍著兼管兵部大學士張廷玉兼管戶部  
事務實多難於兼顧准其解退戶部仍兼管吏部

其他兼管部務之大學士邁柱徐本不必兼管工部刑部欽此

743 乾隆二年十一月三十日奉

上諭朕御極聽政之時翰林院脩撰編檢與科道一同侍班翰林院次在科道之上科道懸帶數珠而翰林院未有定制朕思侍從之臣理應畫一嗣後脩撰編檢亦著一體懸帶數珠以肅朝儀欽此

744 乾隆二年十一月三十日內閣奉

上諭劉元燮奏辭廣西蒼梧道請仍留御史之任查劉元燮於八月內奉旨外轉旋於閏九月內吏部引見道員劉元燮即隨班入見彼時並未奏請留京今閱五月有餘而忽為此奏明係不願前往廣西控詞規避且伊又稱吏部應夾單請旨不應照康熙年間之例將伊入於月選等語不知缺有繁簡之不同有應請旨補放者有應歸於月選者從前閏九月內有請旨缺出吏部已將劉元燮夾單引見一次朕未降旨補用是以仍在候補之列今

遇有月選之道缺吏部照例銓選此一定之理並無錯悞劉元燮何得挾其私心支離噴奏將前後情節藏匿希圖蒙混以惑朕聽而不自知其矛盾也劉元燮若果欲留京効力何不奏請於奉旨外轉之時又不奏請於初次引見道員之日及至簽掣廣西之後忽為此奏其居心尚可問乎且劉元燮摺內引周昌汲黯自比彼與古人誠偽邪正相去天淵乃不自知其分量而公然引以自況見之章奏其奸邪無耻亦已甚矣又伊今年六月間因外間偶有訛傳李紱張坦麟除官一節曾經奏聞朕降旨嘉獎以鼓勵言官究竟亦極平常之事其餘伊所奏則皆摭拾陳言苟且塞責並無裨政治可見諸施行者今何得大言不慚輒以敢言自詡試思伊所敷陳有一裨於政治切於朕躬可千萬一彷彿周昌汲黯者耶至於月選道府州縣等官由吏部過堂掣籤九卿在干門公同驗看此乃國家定制無人不遵而劉元燮以為凌辱豈有舉朝九卿同在班聯而目擊書吏筆帖式凌辱道員之理此又不問而知其欺罔也似此巧詐狂妄

挾私規避之人竟敢以直言自居是寔有玷於周  
昌汲黯者也朕若再加姑容則將來言路必至於  
不可問而假公濟私朋黨之風因是而起矣不得  
不嚴加處分以示懲儆劉元燮著革職發往廣西  
以佐貳等官令其効力贖罪若再有規避不實心  
盡力處即著該督撫題參從重治罪其蒼梧道員  
缺著黃岳牧補授欽此

745 乾隆二年十二月初八日內閣奉

上諭聞福建鹽法道高元崑不實心任事難勝閩省  
鹽道之任著調取來京引見福建鹽法道員缺著  
總督郝玉麟於所屬道員內揀選一員調補其所  
遺員缺著山西大同府知府屠嘉正補授欽此

746 乾隆二年十二月初九日內閣奉

上諭朕御太和殿時向來大學士俱於殿外簷下站  
立即於殿外賜茶嗣後站立仍照舊例賜茶時各  
携坐褥坐於殿內欽此

747 乾隆二年十二月初十日內閣奉

上諭山西大同府知府員缺著大同府同知盛典補  
授欽此

748 乾隆二年十一月十一日內閣奉

上諭朕聞江南鹽城阜寧二縣有濱河田地三十五  
十一頃應納糧銀四百餘兩此地與水為隣淹涸  
靡定從前有司經理不善誤報水涸陞科究竟荒  
多熟少小民納賦甚覺艱難以致累年積欠未清  
甚可軫念著該督撫即行確查將此三千五十一  
頃應徵之錢糧四百餘兩悉行豁免其從前  
未完之舊欠一併赦除俾閭閻永無賠累之苦昭  
朕愛養黎元之至意欽此

749 乾隆二年十二月十五日內閣奉

上諭據陝西巡撫崔紀奏稱行令民間鑿井以為灌  
田之用此亦有益於稼穡之事朕已先行今聞崔  
紀辦理未善自隴州至潼關一帶井面圓祇合  
抱有餘深者不過二三丈淺者僅有丈餘即間有



深慮又多係淤滯之土甫能及泉旋即壅塞潼關一帶如此則他處可知秦中地勢本高積土深厚今開挖若此倘遇天時亢旱禾苗未見焦枯而各井已先涸矣且以十畝之地勒開三井所起土塊即堆積田中是今歲方萌之秋麥已損傷一二又嚴限四十日告成小民奔走不遑甚苦竭蹶几民間開井砌磚者非數十金不可即土井亦須數金今磚井發價七兩土井發價三兩寔不敷用民有怨言是崔紀欲求速效草率從事而不知其無益有損也朕所聞如此可速傳諭崔紀令其悉心體察詳加籌畫務收鑿井之益而去閘閘之擾倘有地勢不能開挖者亦即聽從民便毋拂輿情欽此

750 乾隆二年十二月十五日內閣奉

上諭從前

世宗憲皇帝軫念八旗滿洲蒙古漢軍前鋒護軍另戶領催披甲閑散內有能繕譯及繕寫清書之人例不准考無有進身之階承

特降

恩旨考試一次著交吏部照從前將八旗前鋒護軍另戶領催披甲閑散內有情願考試繕譯及繕寫清書之人查明數目具奏考試一次內有最優者揀選具奏請旨欽此

751 上諭朕命翰林詹事科道諸臣錄呈經史本欲以明

義理之指歸審設施之體要所望切實敷陳昌言不諱如大易否泰剝復之幾尚書危微治忽之旨風雅正變美刺之殊春秋褒貶是非之實與夫歷朝史鑑興衰理亂所由人才之進退民生之疾苦鑒往古以做無虞善為法而惡為戒庶披覽之下近之有助於正心誠意推之有益於國是民生涑水通鑑之編西山衍義之輯政治所資前規具在若有避諱之心言得不言失言治不言亂則非所謂竭忱納誨之道矣朕於六經諸史誦覽研窮再三熟復義理之精妙固樂於探求急荒之覆轍亦時凜於炯鑒諸臣各就意見所及毋專取吉祥頌美之語論理必極其周詳論事必極其切當務裨實用勿尚膚詞朕虛心採納於諸臣章奏尚屢降

諭旨令勿拘忌諱况經傳之舊文載籍之往事更復何所避忌若以避忌為恭敬是大謬古人獻替之義亦且不知朕兼聽並觀之虛懷矣特諭

752 乾隆二年十二月十五日內閣奉

上諭前據陝西巡撫崔紀奏稱行令民間鑿井以為灌田之用此亦有益於稼穡之事朕已允行今聞崔紀辦理未善自隴州至潼關一帶井面圍圓祇合抱有餘深者不過二三丈淺者僅有丈餘即間深處又多係淤滯之土甫能及泉旋即壅塞潼關一帶如此則他處可知秦中地勢本高積土深厚今開挖若此倘遇天時亢旱禾苗未見焦枯而各井已先涸矣且以十畝之地勒開三井所起土塊即堆積田中是令歲方萌之秋麥已損傷一二又嚴限四十日告成小民奔走不遑甚苦踴躍凡民間開井砌磚者非數十金不可即土井亦須數金令磚井發價七兩土井發價三兩寔不敷用民有怨言是崔紀欲求速效草率從事而不知其無益有損也朕所聞如此可速傳諭崔紀令其悉心體察詳加籌畫務收鑿井之益而去閭閻之擾倘有

地勢不能開挖者亦即聽從民便毋拂輿情欽此

諭禮部

先師孔子聖集大成教垂萬世我

皇祖聖祖仁皇帝

考世宗憲皇帝

詣辟雍登堂釋奠儒臣進講經書諸生園橋觀聽雍

雍濟濟典至盛也朕祇承丕緒嚮慕心殷國學

文廟特命易蓋黃瓦以展崇敬俟工程告竣之日朕

躬詣釋奠用昭重道隆

師作人造士至意應行典禮海部詳議具奏特諭

乾隆二年十二月十八日

乾隆二年十二月十八日奉

旨該部所議開是但晉省民人素善蓄積或本地有米之家不肯輕易糶賣而願交官以為捐監之資亦可以補倉儲之不足於民生似有裨益若照孫國璽所奏將山西捐監事例移回本省令交本色暫行一二年此乃為晉省積貯起見事屬權宜他

省亦不得援以為例也其應行與否及如何酌量  
定例之處著該撫就本省情形悉心妥議具奏欽  
此

755 乾隆二年十二月十八日奉

旨該部所議固是但晉省民人素善蓄積或本地有  
米之家不肯輕易糶賣而願交官以為捐監之資  
亦可以補倉儲之不足於民生似有裨益若照孫  
國璽所奏將山西捐監事例移回本省令交本色  
暫行一二年此乃為晉省積貯起見事屬權宜他  
省亦不得援以為例也其應行與否及如何酌量  
定例之處著該撫就本省情形悉心妥議具奏欽  
此

756 乾隆二年十二月十九日內閣奉

上諭朕聞湖南長沙府之湘鄉瀏陽二縣較附近之  
長沙醴陵湘潭寧鄉等縣每田一畝所完錢糧俱  
重二三分不等小民輸納未免拮据查長沙為省  
城首邑與湘瀏毗連其糧額舊為適中似應將湘

瀏二縣錢糧比照長沙則例則小民力量寬紓又  
聞湘陰縣糧銀較之湘瀏二縣尤重亦當酌量變  
通者著該督撫將此三縣錢糧作何確查減免之  
處悉心妥議請旨欽此

757 乾隆二年十二月二十日大學士鄂爾泰奉

上諭大學士張廷玉在內廷宣力多年輔弼賢勳勞懋著  
朕之視大學士鄂爾泰張廷玉一切恩眷均屬一体今大  
學士鄂爾泰因賞給騎都尉已由一等子照例歸併授為  
三等伯張廷玉亦著加恩由三等子從優授為三等伯仍  
著伊子張若霜承襲欽此

758 乾隆二年十二月二十二日內閣奉

上諭各省兵丁賞給生息銀兩以濟其吉凶之用但聞應賞  
之家有查明即行給發者亦有違遠營汛必待提鎮批准  
而後給發者往還需時寒苦兵丁一時不能濟急難免拮  
据嗣後兵丁應賞銀兩既經查明取具隊長鄰佑甘結若  
附近有恩賞可動之項即行給發再具文申報該提鎮查  
核不得稽延時日務令兵丁早霽恩賜欽此

759 同日內閣奉

上諭朕聞雲南昆明縣有老丁田地一項原係督撫兩標收放營馬之區坐落省會昆海之濱本屬草澤嗣因沙壅土淤漸成可墾之地節年以來定為額收租米一千五百六十八石除完納稅糧條編並給發老丁口糧共需米九百二十三石外尚餘米六百四十四石從前題報歸公遵行在案但此額租數日乃照豐收之年科定者而地處海濱土壤硠瘠若遇水大歉收之時則小民完納甚艱可為軫念除老丁米石並雜條仍應照舊完納外其餘公米六百四十四石零著該督撫查明永行豁免俾租額減輕民力寬裕即從乾隆二年為始該部可遵諭速行欽此

760 乾隆二年十二月二十三日內閣奉

上諭從前恩賞兵丁生息銀兩濟其吉凶事之用八折原議內稱遇有喪事之家如親祖祖母父母及妻室方准給與若干孫多者但視其應得之一人給與其餘子孫不必多領等語此並非為嫁娶而言也乃直隸各標錯認文意以為嫁娶之兵丁止賞長子長女其次子次女俱不在恩賞之列以致近年以來恩澤不能普及八折並不如此辦理也直隸如此或他省有似此者亦未可定著通行傳諭凡兵丁娶媳嫁女無論長次均許遺恩况歷年生息已多公

費該無不足倘有不敷之處各該管大臣亦當酌量均勻料理之欽此

761 乾隆二年十二月二十七日內閣奉

上諭據巡視臺灣給事中董理學政單德模奏稱臺灣考試生童向來未建考棚祇就海東書院之便而地方湫隘不能容遂別門進通于聖廟戟門方搭蓋棚廠未克雅潔竊慮墜于窳慢且憲閱防不容易滋弊端應請照內地之例建立考棚以昭嚴肅等語向曰臺灣應試人少故未建立考棚今人文日甚生童衆多非復曠昔之比著該督撫轉飭地方有司相度地方情形修造試院俾官場肅靜考試謹嚴以重造士育才之典欽此

762 乾隆二年十二月二十八日內閣奉

上諭聞省丁民勾入地畝已歷多年上年朕查出通省缺額田地五萬四千餘畝已降旨將雜銀豁免以紓民力但所勾丁銀未嘗豁免仍屬小民之累著將十一兩悉行免徵永著為例又聞延建節三所有運解減之糧米二萬四千石于耗米之外又徵運費每石一錢二分至五六分不等交官之數若此其官吏需索之費正

恐繁多小民輸將匪易著將此項永遠免徵所有運費三千兩即予存公銀兩內支給以除閭閻之擾欽此

763 乾隆三年正月初二日內閣奉

上諭福敏著補授大學士馬爾泰著補授都察院左都御史欽此

764 同日內閣奉

上諭和碩果親王體素羸弱自去秋以來疾疢纏綿朕命太醫用心調治時將病狀奏聞已漸次痊可朕心方為寬慰頃據太醫奏稱日來病勢增重甚為可憂朕即欲躬親往視因孟春時享正值齋戒未便前往著和親王代朕省視欽此

765 乾隆三年正月初八日內閣奉

上諭時屆清明朕將躬詣

泰陵展謁行禮著欽天監選擇日期併傳諭各該處照

例預備欽此

766 同日內閣奉

上諭二月十五日祭

歷代帝王廟因節近清明正值朕躬謁

泰陵之際是以未及親祭俟秋間祭

帝王廟時朕當親詣行禮可傳諭禮部知之欽此

767 乾隆三年正月初八日內閣奉

上諭昔年各省解京餉銀有隨平陋規一項雍正元年蒙

皇考諭令停止嗣因清查部庫虧空銀二百五十餘萬兩事歷多年難於究問經怡賢親王以各色浮費既已禁革奏請將京餉平餘陸續彌補以重國帑每餉銀一千兩收平餘二十五兩較之從前陋規雜費減省已多至雍正八年虧空補足欽奉

皇考諭旨嗣後解部平餘銀兩著照從前之數減去一半此項原出於錢糧耗羨即留於本省以備地方公事之用欽遵在案是以年來解部之平餘已較原數裁減一半矣朕思平餘即係耗羨並非別有加徵解交部庫與存貯藩庫均為國家公事之需但日前尚有平餘解部之名恐外為官吏或有借

端需索者亦未可定從乾隆三年為始將減半平  
餘銀兩一概停其解部即存貯本省司庫遇有地  
方荒歉及裨益民生之要務確應賑卹辦理者即  
將此項奏明動用報部查核此項既出民力輸將  
仍令一絲一粟均濟百姓之緩急朕何取焉若該  
省大小官員有奉行不善使百姓不沾實惠者朕  
惟於該督撫是問欽此

768 乾隆三年正月初十日

諭禮部朕惟四子六經乃羣聖傳心之要典帝王馭  
世之鴻模君天下者將欲以優入聖域懋登上理  
舍是無由我

皇祖聖祖仁皇帝

皇考世宗憲皇帝時御講筵精研至道

聖德光被比隆唐虞朕夙承

庭訓典學惟殷御極以來勤思治要已命翰林科道諸

臣繕進經史格言正論無日不陳於前特以亮陰

之中經筵未御茲既即吉亟宜舉行爾部其詠日

具儀以聞特諭

769 乾隆三年正月初十日內閣奉

上諭山西自雍正五年至乾隆元年共首報欺隱地  
畝八千頃有零折徵銀二萬六千兩有零俱經撫  
臣石麟題報陞科在案夫則壤成賦國有常經固  
不容奸民欺隱此撫臣經理之本意但朕近日聞  
得從前首報欺隱時有果係畝數浮多情願報出  
陞科者亦有地方官奉行不善按照原額缺額荒  
勒令灑派具詳者即如豫省首報羅壘多屬子虛  
經朕降旨豁免以紓民力恐晉省亦不免此等情  
弊著巡撫石麟轉飭各該地方官曉諭從前首報  
欺隱人等如果畝數浮多應行陞科者再令據實  
首報照數輸將倘地畝並無欺隱浮多而地方官  
按照原額缺荒勒令灑派者亦著據實呈明該州  
縣造冊詳報該撫另委賢員確查題請豁免至地  
方官從前奉行不善之處已在恩赦以前免其交  
議在有司不必回護前非而晉省小民更應各夫  
天良受朕恩澤毋得因朕此旨輒起背公貪利之  
心而昧任土作育之義該撫一併宣諭知之欽此

770 乾隆三年正月十一日內閣奉

上諭閩省丁銀勻入地畝完納數年以來朕留心體察如寧洋壽寧南平等處田少丁重小民難以輸將已降旨減輕以紓民力又如通省缺額田地既將糧銀豁除則丁銀亦應寬免復降旨令該督撫查辦無非欲薄賦輕徭去閭閻之擾累也今閩各州縣丁銀俱已適中惟漳州府之平和縣汀州府之清流縣延平府之永安縣尚有田少丁多之苦每田糧一兩徵丁銀四五錢不等較之別邑多至加倍有餘所當酌量變通俾此三邑一體沾恩者著該督撫斟酌本地情形當如何裁減便民之處悉心定議具奏欽此

771 乾隆三年正月十二日內閣奉

上諭都城西郊地境無煙水泉清潔於願養為宜昔年

皇祖

皇考皆於此地建立別苑隨時臨幸而辦理政務與宮

中無異也朕孝養

皇太后應有溫清適宜之所是以奉

皇太后駐蹕於此不忍重勞民力另築園囿朕即在園

明園而敬葺

皇祖所居暢春園以為

皇太后高年願養之地一切悉仍舊制略為修繕無所

增加伏思我

皇考盱食宵衣勵精圖治親書勤政匾額懸諸殿楹朕

瞻仰思慕時時警惕不敢稍自暇逸庶幾承

先志而踵

前徽文武大臣等當共勵精勤電勉職業若以朕駐蹕

郊圻欲節勞動將應辦應奏之事有意減少遲延

則不知朕心之甚美向來部院及八旗大臣皆輪

班奏事自仍照舊例行至諸臣中有陳奏事件即

行具奏不必拘定輪班日期大學士等可通行傳

諭知之欽此

772 乾隆三年正月十七日內閣奉

上諭國家昇平休養戶口繁滋生聚日多蓋藏未裕儲蓄之方不可不預為籌畫從米積貯以常平為善俱地方有司每以歲久微變易罹恭處折耗補數貽累身家一見積穀稍多即為憂慮而無識之上司亦遂被其搖惑而不為緩急可恃之計獨不思民間既鮮蓋藏而倉庾又無儲備天時旱潦豈能保其必無一旦年穀不登其何賴以無恐予向有常平捐監之例後因浮費太多捐者甚少遂漸次停止歸於戶部乾隆元年朕將捐款盡停而獨留捐監一條者蓋以士子讀書向上者日多留心以為進身之路而所捐之費仍為各省買穀散賑之用西降諭旨甚明今再四思維積穀原以備賑與其折銀交部至需用之時動帑採辦展轉後期不能應時給發曷若在各省捐納本色就近貯倉為先事之備足濟小民之緩急乎去冬侍郎孫國璽從晉省回京請將捐監事例移回本省朕降旨詢問該撫並諭他省不得援以為例今思貯粟養民乃國家第一要務果於民生有益則當因時變

通不必固執前議著各該督撫確查所屬現存倉穀若干足敷本地之用與否若將捐監之例移於本省令捐本色於地方有無裨益各據本省情形悉心妥議若事屬應行即將如何定例定數之處詳議具奏至於在外收捐則有包攬苛索種種弊端而積穀既多則存七難三出陳易新之際其弊更難悉數此皆該督撫所當隨事稽查盡心釐剔俾閭閻實受常平之益而官民無貽累之苦方不負愛養斯民之重寄也欽此

773 乾隆三年正月十九日奉

旨佚李如柏到京之日兵部奏聞請旨欽此

774 乾隆三年正月十九日辦理軍機大臣奉

上諭郭應箕著釋放仍幫范毓運米効力欽此



775 同日內閣奉

上諭本年二月初二日興工修理

太廟正月二十七日先期告祭朕二十六日進宮次日

親詣

太廟行禮欽此

776 乾隆三年正月二十日內閣奉

上諭米藻著補授直隸河道總督仍著顧瑛一同辨

理河道事務俟新修河工告竣之後顧瑛奏聞請

旨回京另用欽此

777 乾隆三年正月二十二日內閣奉

上諭履親王自管理禮部以來恪慎周詳實心任事

三年之內備極勤勞今大禮已成部禮部事務該

堂官自循照辦理履親王不必兼管可傳諭知之

欽此

778 同日內閣奉

上諭河北忠崗等土司改土歸流增設施南一府統

轄恩施宣恩咸豐利川來鳳建始六縣除恩施係

屬舊縣建始係川省改歸并恩施分歸咸利二縣

之田地人丁向有定額無庸另議外其餘改土地

方新入版圖者該督撫現在查勘分別陞科但該

土司向來輸納秋糧不計田地多寡每年統計止

納銀七十三兩六錢四分今若照內地科則徵收

必至加於前數朕心愛養土民望其共受國恩原

不計貢賦之多少乾隆元年曾降諭旨將容美司

改設之鶴峯長樂二州縣成熟田地即照原額秋

糧銀九十六兩之數作為徵收定額今忠崗土司

與容美事同一例著將查明成熟田地即照原額

秋糧銀七十三兩六錢四分之數按田分派作為

定額無庸另擬科則俾土疆黎庶永沾薄賦之恩

至乾隆二年未完秋糧一併豁免該部即遵諭行

欽此

779 乾隆三年正月二十三日內閣奉

上諭朱藻著加都察院副都御史銜欽此

780 乾隆三年正月二十八日內閣奉

上諭朕此次恭謁

泰陵著大學士鄂爾泰張廷玉在京總理諸務欽此

781 乾隆三年正月二十九日內閣奉

上諭去冬北方雨雪短少農家待澤甚殷入春以來

惟山東所報雨雪似已足用至直隸河南山陝等

省雖陸續奏報者來供未霑足京師日前亦曾得

雪稍覺霑潤未為優渥日今東作方興土膏初動

麥秋所恃惟在春霖而雨暘之時若非可預料惟

當備人事以待天時儲蓄之方不可不早為之備

也況去歲收成歉薄今歲青黃不接之候更與往

歲不同所有應行事宜或借貸倉穀或減價平糶

凡可以利益民生者宜多方籌畫先事綢繆向

來祈求雨澤皆在立夏以後但此時正當望雨該

督撫等各宜虔誠備省感召

天和庶甘雨應時麥秋有望朕因直隸歉收去歲曾降

諭旨欲遣侍衛官員分路平糶後據總督李衛奏

稱可以遲至正二月間因李衛未會奏請特降

諭旨詢問今據李衛奏到現交原議之大臣會同

該部速議夫食乃民天所關至重無刻不繫朕懷

各該督撫宜共體此心加意撫綏預為經理以無

負愛養黎元之寄勉之特諭

782 乾隆三年二月初二日內閣奉

上諭果親王持躬耿直賦性剛方辦理公事不避嫌

怨

皇考素敦友愛眷注維殷朕御極以來命王總理事務

方資倚任乃王舊疾時作去歲轉劇朕常加存問

今御醫用心調治今年正月二日太醫奏稱王病

勢沉重朕即欲親往看視因值齋戒之期特著和

親王代往自此以後王疾漸減且精神稍增移住

郊外林亭朕心喜慰方謂從此調理可望痊愈從

容召見今聞薨逝深為震悼著莊親王履親王經

紀其後事朕即於本日親臨其喪一應典禮該部  
速議具奏欽此

783 同日奉

旨王大臣等請將朕弟六阿哥承襲果親王之處朕  
奏聞

皇太后欽奉

皇太后懿旨既經王大臣等定議具奏著照所請令六

阿哥襲封果親王欽此

784 乾隆三年二月初三日內閣奉

上諭果親王喪事著大阿哥永璜前往穿孝欽此

785 乾隆三年二月初四日內閣奉

上諭本年春祭

文廟朕降旨親詣行禮查

文廟春秋二祭舊例俱是違官我

皇考尊師重道始定親祭之禮間年舉行乃從前所未  
有者今覽太常寺奏進儀注朕躬獻爵一次其亞

獻三獻之爵預先陳設香案上朕思既行親祭仍  
當從三獻之儀著太常寺另繕儀注進呈欽此

786 同日內閣奉

上諭和碩莊親王著辦理理藩院尚書事務欽此

787 乾隆三年二月初七日內閣奉

上諭據福建總督郝玉麟巡撫盧焯奏稱原任福寧  
州州同李芬及原任古田縣知縣章瑤先因緣事  
叅革經臣等奏准留閩委辦鹽務繼因効力三載  
均能實心辦事上年保奏送部引見奉旨李芬章  
瑤俱著以知縣歸班補用臣等查李芬章瑤二人  
才具明敏且在閩年久熟悉風土人情若蒙仍發  
閩省容臣等酌量題補似於地方有益等語李芬  
章瑤著照該督撫所請命往閩省以知縣酌量題  
補欽此

788 乾隆三年二月十二日內閣奉

上諭上年直隸等省有收成歉薄之州縣冬春以來雨雪又覺短少惟山東奏報得雨似可足用其餘則尚未霑足朕心甚為憂慮當此青黃不接之時東作方興之候正宜急為籌畫以恤民艱已諭令各該督撫因地制宜或減價平糶或借貸倉糧凡有利益民生者即速定議舉行毋容忽視今思仲春之月即定例開徵錢糧之時若有司遵例催科在有力之家尚可勉強輸將而貧乏之家寔為艱窘深可憫念著直隸等省督撫將去歲歉收之州縣一一確查所有現在應完錢糧暫停徵收俟麥秋時酌看收成情形再行奏聞歸併秋季錢糧項下帶徵完納如此則地方無追呼之擾民力可以寬舒農功不致有曠該部可遵諭速行欽此

789 乾隆三年二月十六日內閣奉

上諭哈元生人材壯勇歷任苗疆頗有勞績後因古州一案獲罪被逮來京朕念其前勞特予寬宥授為副將前往哈密効力其奮勉尚思錄用今樊

廷奏伊已經病故實屬可惜著加總兵銜令大學士查即阿寬裕料理將伊柩擬送回原籍應得卹典該部察例具奏欽此

790 乾隆三年二月十六日內閣奉

上諭朕前以旗人生計貧乏者多令王大臣議將八旗入官地畝立為公產取租解部按折分給以資養贍但思此等入官地畝內有我朝定鼎之初因給八旗官兵將錢糧悉行豁免者亦有旗人與百姓自相交易出銀買置仍在州縣納糧者而種原屬不同祇因旗產入官有糧無糧未經分析一併交官收租是以部冊并造入公產此項民地當契買之時旗人執業民人得價原係彼此樂從之事若以入官之後一概定為公產不准民買殊非朕軫恤畿輔黎赤之本懷用是特頒諭旨除原圈官地為旗人世業自不容民間置買其旗人自置有糧之民地現在入官者如有欲售之人不論旗民一體准照原估價值變賣將銀兩解交司庫陸續咨解戶部交各旗料理生息分給旗人俾沾惠澤

至於民買官地該地方官務須經理得宜毋致中飽壘斷等弊以昭朕一視同仁欲指民兩便之至意欽此

791 乾隆三年二月二十一日內閣奉

上諭直隸宣化府屬懷來保安二縣採辦楊木長柴供

郊壇

宗廟焚帛之用向無開銷之例俱係兩縣捐資繼因添用柴薪又分派宣屬他縣協辦相沿已久朕思州縣公捐易啟借端科派貽累小民之弊不可不防其漸著從乾隆三年為始將每歲需用楊木長柴按照辦解之數動用正項造入地丁冊內報銷令出產之懷來承辦以專責成倘有私行派累等弊該督即行查參從重議處欽此

792 乾隆三年二月二十二日內閣奉

上諭據固原提督樊廷奏稱臣領兵多年舊有腹脹氣喘之氣病自入春以來時常嘔吐精神恍惚欽

食少進難以供職伏祈恩准解任調養或延殘喘等語樊廷効力邊疆十有餘載威勇夙著朕以其久練夷情付以重任乃因勞致疾勢甚沉重披覽來奏朕心深為不忍著即從哈密從容起程回至固原善為調理途次病勢如何著伊奏聞請旨哈密駐防關係緊要著甘肅提督李純武馳驛前往代樊廷之任賞給肅州庫銀五千兩為整備行裝之用其餘應給等項俱照例給與著甘肅提督印務著大學士查即阿於所屬總兵內遴選賢員暫行署理欽此

793 乾隆三年二月二十三日內閣奉

上諭乾隆元年六月朕曾降旨各省出借倉穀與民者舊有加息還倉之例此在春月青黃不接之時民間循例借領則應如是辦理若值歉收之年豈平時貸穀可比至秋收後祇應照數還倉不應令其加息此乃兼常平社倉而言也今聞外省奉行不一凡借社倉穀者照此辦理而借常平倉谷者遇歉收之年仍猶加息之成例似此則非朕降旨

之本意矣嗣後無論常平社倉若值歉收之歲貧民借領者秋後還倉一概免其加息俾節屋均沾恩澤將此永著為例欽此

794 乾隆三年二月二十三日內閣奉

上諭雍正十三年九月間朕以八旗入官地畝房屋從前該管大臣等辦理不妥有將已經豁免之項因該旗查數在先仍行勒逼交官者其間弊竇種種曾降諭旨飭部確查辦理又於乾隆元年六月內降旨將八旗應入官之地畝房屋雖經報部尚未估價已經估價尚未交部者分別情罪令各該處查明給還本人以上二次諭旨屈指已歷三年今朕訪聞仍有稽延遲滯未曾清楚者大約因該管大員從前辦理不善未免回護前非或貧寒孤苦之家無力控訴又或胥吏借端需索有意違回有此弊端以致膏澤不能下逮用是再頒諭旨凡入官田房有與前次旨意相符者許本身及其的屬在各該管衙門據實呈明如果情有可原該管大臣即行具奏請旨毋許仍蹈前轍倘有應奏不

奏者經朕訪聞或別經發覺定行從重議處若本人捏詞妄控亦照誣告例治罪欽此

795 乾隆三年二月二十四日內閣奉

上諭各省漕船載運北上每幫例設隨幫千總協辦運務長途往返費用較多非本營供職者可比查山東河南浙江江西河北等省隨幫弁員均於廩工之外每歲給與養廉以為資資惟江南省向未議及徵弁未免艱難著從乾隆三年為始每員每歲賞給銀二十四兩其應將何項支給之處總督那蘇圖酌定報部欽此

796 乾隆三年二月二十八日內閣奉

上諭上年畿輔之地收成歉薄目下雨澤又未均沾以致米價日漸昂貴朕心憂慮籌畫多端屢降諭旨矣今聞近省商賈米船亦陸續漸至若販運日多則民可無乏食之虞而商民亦收貿易之利所當格外加恩俾其踴躍從事者著將臨清天津二關米豆之船免其納稅至通州張灣馬頭等登

陸處所舊有米豆雜糧落地稅銀亦著免徵俟二  
麥收成之後米價平減再照舊例徵收該督撫及  
司權官員可即出示通行曉諭俾遠近商賈咸知  
朕免稅之恩旨並嚴禁不肖官吏暗中需索等弊  
以副朕通商惠民之至意欽此

797 乾隆三年三月初一日內閣奉

上諭朕訪聞得廣東提督張天駿莅事以來惟事姑  
息以致汛防懈弛弁兵無所忌憚上年十月內有  
奸匪董老大等窺伺博羅縣出產錫礦易於偷取  
賄買把總林士英典史姜明德縱容盜挖又有奸  
匪黃肇等入山爭佔互相格鬪致傷多命此處雖  
提督衙門不過百里而張天駿平時得無覺察及  
至事發難掩又欲曲為遮蓋草率完結似此怠玩  
養奸重負朕委任封疆之至意特降此旨嚴行申  
飭令其悔過自新倘不知悔改仍蹈前轍朕必從  
重處分欽此

798 乾隆三年三月初二日內閣奉

上諭蘇州布政使員缺著山西布政使許容調補山  
西布政使員缺著浙江按察使胡瀛補授浙江按  
察使員缺著原任布政使鄭祥寶補授欽此

799 同日內閣奉

上諭朕聞得廣東鹽運使陳鴻熙在粵十有餘年自  
管理鹽務以來巧取營私無利不搜每當商人納  
餉之時鴻熙並蒙照額收銀即行給發鹽勅名曰  
掛餉及當銷售鹽勅應完稅價之時又不照數交  
收虛報空文存案名曰掛價總令各商將應納之  
餉稅銀兩在外營運迨至獲利之後將正數歸還  
原款餘利婪收入已竟以朝廷正項之錢糧為運  
使放債之資本積年所獲不貲且動向各商攤派  
用一指十藉端網利以充私橐海南道王元樞殘  
忍貪黷兼有惡才前在肇慶府任內承辦銅餉預  
領銀四萬餘兩乘黔省苗疆用兵道路梗阻竟  
將公帑分發各商營運勒令加三加五起息毫無

顧忌其妻收黃岡廠之家人竊後重耗苛徵而粵商民怨聲騰沸此二員之貪污劣蹟朕訪聞如此陳鴻熙王元樞俱著革職差兵部右侍郎吳應棻侍衛安寧馳驛前往廣東將貪劣各款嚴審定擬具奏欽差未到之先著鄂弥達王蒼嚴行查察若陳鴻熙王元樞有抽換文卷若藏匿要證買馮商民等弊將來發覺朕惟於鄂彌<sub>達</sub>王蒼是問欽此

800 乾隆三年三月初三日內閣奉

上諭一品廕生孔繼洞著以員外郎即用候選州同四品執事官孔繼浩著以州同即用仍准用四品頂帶欽此

801 同日奉

旨城內新設三廠著於御前侍衛乾清門侍衛內每廠再派一員前往監羅欽此

802 同日內閣奉

上諭大學士查郎阿於上年前往肅州辦理公務計此時諸務已竣著仍回西安本署欽此

803 同日

命<sup>尚書</sup>任蘭枝孫嘉洽帶領衍聖公孔廣榮等十九人於乾清宮西暖閣引

見奉

上諭爾等<sup>皆</sup>聖賢後裔因朕臨雍來京特行召見爾等既為聖賢之後即當心聖賢之心允學聖賢者非徒讀其書而已必當躬行實踐事事求其無愧方為不負所學況身為聖賢子孫尤與凡人不同若不能實加體驗徒驚讀書之名實於祖德家風不能無忝爾等務須勤思勉勵克紹先傳以副朕誨切期望之意特諭



804 乾隆三年三月初三日內閣奉

上諭陝西鑿井灌田一事從前崔紀辦理不善苟且興工祇務多井之虛名未收灌概之實效經朕訪聞降旨申飭令其聽從民使毋拂輿情乃伊接奉諭旨之後即檄行藩司轉飭地方官務須挖深砌固不得草率從事又差遣佐雜等官分路勘驗凡屬淺井志令掘之使深而土易淤塞者則令修砌堅固其從前開挖而未成井者又復勒令填平以致井底之寒泉無處灌注勢必傾瀉於地中井中之溼土無處搬移勢必堆積於麥上不但麥苗無益亦且大受其損況去冬得雪沾足今值麥田青蔥秀發之時農民及時鋤治轉盼播種秋禾未作方興正田功不遑之候而乃迫令掘井砌井使農民廢時失業人心甚覺徬徨是朕諭令俯順輿情而崔紀則勒令深挖偷砌以掩其非又令填平廢井以掩其過重負朕委任封疆諄切訓誨之意矣再者大學士查卽阿因見陝省收成歉薄谷價昂貴不得已禁止商販運赴他省曾經具摺奏聞而山西蒲州與陝西郃陽韓城等縣僅一河之隔彼

地商販遂串通郃陽韓城等處奸徒指稱縣民報買口糧船艙相接揚帆直下一過河東即達山西地界崔紀未嘗究問陝西之人遂以崔紀庇護棄稗縱違禁之私販噴有繁言觀此情形崔紀不便仍留西安之任著調補湖北巡撫將張楷調補西安巡撫速赴新任張楷到任後崔紀交代再赴楚省至秦省鑿井灌田之事張楷可善體民情妥協辦理欽此

805 乾隆三年三月初五日內閣奉

上諭近京地方上年被水今春少雨民間米價昂貴朕心甚為憂慮悉心細籌添設米廠減價平糶其他有益於民食者莫不慮及原欲使閭閻小民易得升斗以為糊口之計也乃糞米日多而市價並不稍減轉或加增其中必有居奇之人糧買官米展轉難賣獲重利以肥身家是但知有己而不知有人矣獨不思太倉之粟原以備官兵俸餉之需今因民食維艱減價發糶此軫念民瘼之至意諒為中外所共悉凡屬良民見朕如此焦勞如此等

畫供官感發善心，繼不能出其所有以濟窮困，奈何將官家惠養貧民之物，轉為一己圖利之資，而坐視多人之謀食艱難，曾不一動念乎？又如京師錢文昂貴，朕不得已設立官局，以平時價而錢價近復加昂，亦必有奸民囤積，不肯輕售，以待厚利者。夫商賈即百姓也，朕一視同仁，並無區別，乃朕施一利民之政，而伊等即多一營私之謀，何人心之不古難！以化誨遂至此，極耶！至於八折之人，動輒望賞，借以濟匱乏，不知國家經制有常，為政有體，豈有無端賞借以博衆人一時感悅之理？且國家之有恩施，亦如

上天之有雨澤，若雨澤下降而播種不豫，力作不勤，亦不能望收穫。況一時之賞借，猶如一時之驟雨，可暫而不可常能給，而不能足加之伊等，又不知博節愛惜，隨手浪費於生計，無毫無補其裨益。果安在耶？朕寔不忍兵民等之痴愚，不悟特頒此旨，再行曉諭，各該管衙門可刊刻宣布，俾人觸發本心痛改惡習，庶幾感召

天和雨暘，時若不獨蒙福佑于無窮，而人心風俗亦可

望漸歸于淳厚矣。欽此。

806 同日內閣奉

旨：直隸正定鎮總兵官徐成貞派往北路軍營，其員缺著總督李衛於副將內揀選請旨署理。欽此。

807 乾隆三年三月初十日內閣奉

旨：諭林祖成生長福建，熟諳水師，著調補浙江黃巖水師總兵官。雷達春著調補鎮寧鎮總兵官。欽此。

808 乾隆三年三月十四日內閣奉

旨：諭據元辰奏稱，寧夏府屬之寶豐、新渠二縣前奉恩旨，將雍正十二年以前民欠豁免。緣西縣民戶已將應完十三年之正糧儘納，十二年之舊欠是以復欠。十三年之額征銀三萬兩，有奇現在設法徵催，而民力維艱，等語。朕思西邑招墾新戶，業未久，所欠十三年額賦既因儘納舊欠致虧正額，今又新舊併徵，未免拮据。朕心深為憫念，特格外加恩，將雍正十三年以前舊欠悉行豁免。其乾

隆元二兩年有未完正額錢糧著分作十年帶徵以紓民力可傳諭戶部知之欽此

809 乾隆三年三月十五日內閣奉

上諭上年因陝甘地方收成歉薄物價昂貴曾准各營兵丁等預借銀兩糴買糧石以資接濟例應陸續扣還朕念地方歉收之後兵丁力量不敷伊等既有從前所借未曾扣清之項又有借辦軍裝火藥銀兩應行按季扣除合計所扣之數過多兵丁食用未免艱窘著大學士查即酌量本地情形再寬其期酌展三四季以紓兵力朕優卹邊兵之至意欽此

810 同日奉

旨甘肅按察使員缺著山東登萊道包括補授欽此

811 同日內閣奉

上諭李世倬條陳改鑄錢文一事經九卿三議其奏凡廷臣會議之案原令各行已見不必強同至于

隨穀附和之弊乃人臣所當切戒者今此案三議覆奏正得各行已見之義朕深取之不必以互異為嫌但錢文關係重大必須斟酌盡善著大學士悉心定議具奏欽此

812 乾隆三年三月十五日內閣奉

上諭國家宣猷敷政首重得人而以人事若公爾忘私者乃人臣之大義況身列九卿受恩深重彼鞠情妄舉者固不足言而視為具文苟且塞責者亦大虧荐賢為國之道也昔我

皇祖

皇考延攬羣材常降九卿保舉之

旨其濫舉非人劣蹟敗露者每加嚴譴以示懲儆朕臨

御以來六間有謬訪異收得人之益日今各省督

撫皆出朕心斟酌簡用其藩臬二司陸續調來引

見亦知其大緊至于道府等官乃方面大員職任

緊要目前為州縣之表率將來即可遞進于兩司

兩當留意於平日以備擢用于臨時者若九卿將

可為府道之人各據所知秉公舉出一二人或二

三人用露章啟奏不必密封大凡論人之道才品  
薰長固屬甚善但二者不可得兼若才勝于品雖  
一時塗飾可觀而心志不誠根本不固將來蕩檢  
踰關必至難于駕馭若品勝于才雖一時肆應不  
足而心術端方恪守廉潔將來擴充歷練必能不  
愧循良九卿既受國恩又奉朕旨特行詢問其所  
舉之員將來除因公墨誤情有可原者不將保官  
處分外若以劣款被叅審實治罪定將保官照濫  
舉非人例處分不稍寬貸欽此

813 乾隆三年三月十六日內閣奉

上諭我朝國書義蘊精微向未工于繙譯者能得其  
神理於漢文大有裨益昔

聖祖仁皇帝時常將滿洲官員考試分別優劣以示鼓  
舞

皇考世宗憲皇帝特開繙譯之科俾人奮勉嚮學以  
圖進取誠為盛典朕思現任官員不在鄉會試之  
列者若不特加考試則優者無以表見或至怠惰  
日漸荒疎著禮部通行傳諭除三品大臣外現任

職官若有通曉繙譯者在部報名該部奏聞候旨  
考試欽此

814 同日內閣奉

上諭固原提督員缺著甘肅提督李繩武調補仍駐  
防哈密甘肅提督員缺著古北口提督瞻岱調補  
瞻岱未到任之前著柏之蕃暫行署理涼州總兵  
印務著中衛副將盧度理暫行署理欽此

815 乾隆三年三月十六日內閣奉

上諭固原提督樊廷頓兵多年効力邊疆威勇素著  
前因駐防哈密身患痰疾奏請解任調理朕心軫  
念令回固原之任并賞給參藥命太醫馳往診視  
冀其痊可今見遺摺知病已不起而伊彌留之際  
猶於邊防事宜諄切陳奏披覽之下實不勝憫惻  
著大學士查即阿經理其喪將柩送回內地并賞  
帑金五千兩為辦理喪葬之用其應得卹典該部  
從優議奏所有一等輕車都尉即令伊子樊經承  
襲嗣後子孫仍准照世次襲職又伊奏稱父葬成

都母葬涼州祖塋今一子年幼扶柩拮据難以遠  
赴成都懇請恩准葬於母墓之側等語著大學士  
查即阿與伊子熟商如成都舊有產業或將伊  
父骸骨送往合葬如不願送赴成都即將伊父  
骸骨移至涼州於一處一切費用著大學士查  
即阿於恩賜銀兩外另行賞給樊廷所奏邊防  
事宜著辦理軍機大臣定議具奏欽此

816 乾隆三年三月十六日內閣奉

上諭直隸山東河南等省上年收成歉薄穀價昂貴  
今春山東河南得應時雨澤二麥可望有收則本  
省隣省皆可資其接濟無如小民愚昧往往不知  
撙節愛惜而耗費麥石之最甚者莫如灑麩一事  
朕聞每年麥秋之際地方有富商大賈扶持重資  
赴各處大鎮水陸通衢販買新麥專賣與造麩之  
家以圖厚利而造麩之家蓋成坵房廣收麥石唯  
恐其不多小民無知但願目前得價售賣不思儲  
蓄為終歲之計而此輩奸商惟以壅斷為務不念  
民食之艱難此實閭閻之大蠹不可不嚴禁重懲

者如山東之臨清江南之鎮江此弊尤甚中外共  
知朕思商民販賣麥石則糧食流通於百姓有濟  
不必稽查致有阻滯惟查明踴麩之家嚴行禁止  
違者從重治罪則有用之麥不致耗費於無用之  
地於本省隣省均有裨益著該督撫等轉飭各地  
方官實心奉行毋得視為具文苟且塞責倘稽不  
力仍有違禁私躐者經朕訪聞必將地方官從重  
處分不稍寬貸即督撫亦不得辭其咎欽此

817 乾隆三年三月十八日內閣奉

上諭畿輔地方三春雨澤愆期今已立夏甘霖未降  
朕心甚為憂惕日在宮中虔誠祈禱所有應行求  
雨典禮著禮部太常寺擇日敬謹舉行設壇之前  
該部奏聞朕再命大臣前往各壇共攄精誠敬達  
朕為民請命之忱懷欽此

818 同日內閣奉

上諭刑部侍郎劉統勳著回部辦事欽此

819 乾隆三年三月十九日

賜衍聖公孔廣榮之母王氏冰霜勁節匾額

820 同日內閣奉

上諭朕前因八旗人員生計艱難曾降諭旨將應入官之房產地畝有難經報部尚未估價及八旗已經估價而尚未交部者令各該處查明給還本人執業又念欠帑人員那移之項與侵貪不同著該部查明各案內有家產已報未估并報估而未變交者如實係因公確有憑據准其具題請旨及降旨已久而戶刑兩部奏請給還者不過數案推求其故蓋因承辦衙門泥於前旨內估價而尚未變交之語以為凡抵帑之產一經開報即為交官既係交官即不應在給還之列矣又因戶部覆奏房地等項作為已還數內者不應給還毋庸查奏以為凡抵帑之產一經交官即俱扣作完數皆不應在查奏之列矣是以歷數年久而奏請者仍寥寥無幾朕思雍正十三年九月以前抵帑入官之房產現存者不過十之一二久留官所徒滋荒圯於事

無益用是再頒諭旨凡從前各案有情罪稍輕如

那移分賠代賠著賠開欠指欠等項入官之產除已經變價已指俸勒限有人認買者不必查奏外其現存未變價者毋論已未交官已未扣作完數一概查明原案情節將應否給還之處具奏請旨可傳諭戶刑二部行文八旗各省一體辦理欽此

821 乾隆三年三月二十日內閣奉

上諭京師兩澤愆期朕心虔誠祈禱并命禮部太常寺設壇分遣大臣共摠精誠以達朕為民請命之忱懷今思清理刑獄亦導揚和氣之一端著大學士鄂爾泰張廷玉尚書訥親海望會同刑部堂官將現在拘禁枷號人犯內詳加檢閱如有應寬應減之處酌其情節分別具奏請旨欽此

822 乾隆三年三月二十五日內閣奉

上諭古北口提督員缺緊要著馬蘭峪總兵永常署理即速赴任欽此

823 同日內閣奉

上諭山東泰安府知府員缺甚屬緊要著巡撫法敏於所屬事簡知府內揀選一員調補其所遺之缺即將德州知州蔣尚思補授若蔣尚思能勝泰安知府之任著法敏奏聞即將蔣尚思補授四川成都府知府員缺著山西蒲州府同知王時翔補授

欽此

824 同日內閣奉

上諭湖北沔陽州地勢低窪為諸水匯歸之地以致田畝坍塌淤漲靡常小民苦樂不均積有逋賦迨雍正十二年該督題請丈明按實在地畝輸納民累頓除但未經清丈以前有雍正十三年未完銀四千六十餘兩乾隆元年未完銀八千一百餘兩率係被水淹浸之地無力完糧者官吏仍事催科窮民不免敲朴深可憫念著將此兩年未完之項悉行蠲免以息閭閻追呼之擾欽此

825 乾隆三年三月二十六日內閣奉

上諭各省督撫膺封疆重寄不可一日乏人而瀕海臨邊尤關緊要常見督撫等或奉旨陞見或陞調他省即便起程此處尚未允協嗣後督撫等陞調他省者應俟接任之人交代後方可起程其奏請陞見者必將署印之負預先奏明若朕調來陞見者朕臨期酌量降旨倘諭旨內有即赴新任即速來京字樣者不在此例欽此

826 乾隆三年三月二十八日內閣奉

上諭科道為朝廷耳目之司關係甚重向來俱係各部院堂官將合例司負檢選保送翰林院編修檢討亦在檢選保送之列由吏部帶領引見朕親加簡拔用為科道此定例也但思部院司負及翰林編檢人數甚多合堂官保送時就伊等所見舉出統計一衙門官負不過什之一二其餘眾負朕未經過覽此中或有可任科道而不在保送之列者亦未可定朕意欲將例應考選翰林部屬等官一

縣通行引見司負每日在本衙門辦事其才品之短長賢否該堂官皆所熟悉著逐名出具考語有由州縣行取補用者亦著註明即著該堂官帶領引見至編檢官負職司文墨其辦事之能否未經試驗無庸出具考語著掌院學士帶領引見朕自有鑑別現在御史負缺應行考選且記名之人即備將來考選之用至於考選人負著各衙門於圓明園該班奏事之日帶領引見翰林院編檢人多分作三班部院酌量人數分班每班以二三十人為率記名之後陸續交與吏部俟有御史缺出按其品級俸次開列引見候旨補授補用將完之日吏部再將如何考選之虞另行請旨欽此

827 乾隆三年三月二十八日內閣奉

上諭八旗入官之產朕屢降諭旨將情節稍輕者分別給還因其中有已未交官之不同以致承辦未能速竣是以又降旨令該管各衙門查辦今思八旗此等案件有由戶刑工等部行令追變房產者該旗自應照例造冊移送各部聽其核定亦有各

旗自行承辦入官者若聽該旗自行查辦未免彼此互異不能畫一可令等旗都統等一體造冊移送刑部查明具奏庶事有控泄易於歸結至於造冊送部向無定例率多稽遲今著定限兩月逾限者將該管及承查之員交部議處欽此

828 同日內閣奉

上諭今年鄉試屆期昨旨派大臣等各舉教人以備考試簡用今思翰林科道部屬等官應差主考者人數甚多其未與保舉之列者亦著一體考試不願出差者聽其自便欽此

829 乾隆三年三月二十九日內閣奉

上諭山東登萊道負缺著萊州府知府嚴有禧補授陝西延綏道負缺著趙冕補授甘山道負缺著吏部郎中圖爾炳阿補授廣東海南道負缺著雷州府知府王鐸補授欽此



830 同日內閣奉

上諭直隸順德府知府朱鴻緒著調來引見欽此

831 同日內閣奉

上諭顧琮著來京陛見欽此

832 乾隆三年四月初二日內閣奉

上諭各省督撫向來有進貢方物之例朕御極之初即降諭旨令三年之內停止進貢俟即吉後再行請旨數月以來雖各省督撫尚未舉行但朕思此事甚屬無益蓋進貢之意不過曰藉此以聯上下之情耳殊不知君臣之間惟在誠意相孚不以虛文相尚如為督撫者果能以國計民生為務公爾忘私爾爾忘家則一德一心朕必加以獎賞若不知務此而徒以貢獻方物為聯上下之情則早已見輕於朕矣且朕現在諭令督撫等毋得收受屬員土儀誠以督撫取之屬吏屬吏未必不取之民間目前所受雖微久之必滋流弊若進貢方物雖云督撫自行製辦而展轉購買豈能無累閭閻是

所當行禁止者惟織造關差鹽差等官進貢物件向係動用公項製買以備賞賜之用與百姓無涉不在禁例其督撫等有收民之責者著驟行停止貢獻欽此

833 乾隆三年四月初二日大學士九卿面奉

上諭邇來雨澤愆期朕心憂惕本欲在宮中虔誠齋

戒祈

天降賜甘霖昨奉

皇太后諭旨念朕心屢月焦勞朕願清減於昔甚為懸

注

命朕前往圓明園駐蹕朕思竭誠祈禱在內與在外無

異用是仰遵

懿旨以慰

慈懷但自上年以來雨暘未能時若今春各省雨澤俱頗霑足惟京城附近地方一二百里之內尚未得雨我君臣所當夙夜思維恐懼脩省者凡朕用人行政之間豈能一一忠當如有缺失即當據實指陳不但政事之形於外者即朕躬朕心偶有幾微

過誤俱當直陳無隱至尔九卿等事務繁多辦理之際豈能一無差忒各宜細加檢點朕近閱刑名案件尚無大錯但民命至重凡有交議之事皆當悉心商酌務求平允至於散賑平糶截漕等項俱宜預為籌畫務期有備無患議者每謂天庾至重宜積貯豐裕以備不時之需朕思倉儲之設原以為民現今米價騰貴百姓嗷嗷待哺此即所謂不時之需矣若坐視民食之艱而不為通融接濟則積米在倉將欲何所用之易曰損上益下之謂益此不易之至理尔等皆當留心民瘼凡有可以裨益民生之策或公同奏請或各抒己見不必瞻顧吝惜務使閭閻均沾實惠至於朕令科道條陳事件原許伊等各陳所見以裨政治雖所陳奏不能盡合機宜且往；有揣摩朕意有心迎合者此等固不足採但伊等職司言路條陳既多其中豈無可行之事朕初交九卿會議尔等自宜虛公斟酌不可稍有偏執至九卿身為大僚俱係

皇考簡用之人皆當公爾忘私國爾忘家同心一德以佐朕躬近閱諸臣中亦尚無擅權專恣之人但恐

意見各有不同或于滿漢之間稍存分別致有各立門戶之意此即將來朋黨之漸其為國家之患甚大此時雖未顯有形迹但不可不預為防維所謂焔焔不滅炎；若何涓涓不壅將成江河也尔等清夜捫心撫躬自問屏絕依附之私共勵公忠之念斯則朕之所厚望于諸臣者也摠之格

天之道惟在君臣之間共竭誠心不專在章奏之美言敷陳政事之補偏救弊已也朕惟有夙夜警惕深思已過尔諸臣亦當洗心滌慮省疚思愆庶足以感召

天和又安地庶我君臣其共勉之欽此

834 乾隆三年四月初四日内閣奉

上諭四川松潘鎮總兵官甚屬緊要著將廣西右江鎮總兵官潘紹周調補其右江鎮員缺即著馬義調補欽此

835 同日內閣奉

上諭大學士查即阿忝奏沈青崖黃文煒張體義楊  
肇熙等私運侵帑一事案情重大必須質審明確  
方可定擬著左都御史馬爾泰前往會同大學士  
查即阿甘肅巡撫元展成逐一嚴審定擬具奏劉  
於義著解任前往聽候質審欽此

836 乾隆三年四月初六日內閣奉

上諭正藍旗滿洲都統左都御史馬爾泰奏差甘省  
奏帶都察院筆帖式額勒渾前去俱著照例給與  
驛馬欽此

837 乾隆三年四月初七日內閣奉

上諭孫嘉淦補授吏部尚書趙國麟補授刑部尚書  
安徽巡撫員缺著兵部侍郎孫國璽補授欽此

838 乾隆三年四月初十日內閣奉

上諭直隸總督事件繁多難以兼顧河務李衛不必

管理其一切河工事宜應交與總河專辦俾事權  
歸一方有裨益顧琮仍著前往會同朱藻一體悉  
心辦理毋得稍有遲誤欽此

839 同日內閣奉

上諭朕前降旨滿洲現任職員通曉譯者准在禮  
部報名考試今思八旗武職人員內平時講習結  
譯亦不乏人如有情願赴考者准其報名該部一  
體考試欽此

840 乾隆三年四月初十日內閣奉

上諭八旗設立米局原以惠濟旗人從前請裁米局  
者係八旗大臣現在議覆米局者亦係八旗大臣  
從來朝廷立政有治人無治法必須辦理得宜方  
為有利無弊若米局既設而奉行不善有失初設  
之美意則雖屬良法終何益之有著傳諭八旗管  
理米局之大臣務期悉心籌畫隨時調劑毋得稍  
有疎忽致生弊端現今管米局之大臣有止派副  
都統者該都統亦當留心查察不可謂身無責成

膜視公事欽此

841 乾隆三年四月十五日內閣奉

上諭朕思惠養斯民之道以輕徭薄賦為先凡各省田糧偶有微偏重之處悉已陸續查明豁免以紓民力今查得安徽所屬懷遠衛軍田十三頃每畝徵銀八分八釐零又田二頃每畝徵銀六分二釐零較之民田未免稍重著照蒙城縣民田之例每畝徵銀二分一釐零共免銀九十八兩八錢七分又武平衛軍田五千二百九十一頃每畝加徵銀七釐三毫零除現在請禁衛田之私典等事案內每畝應留贍運銀一釐七毫外每畝著減去加徵銀五釐五毫零共免銀二千九百六十二兩六錢五分該部即遵諭行文該督撫從乾隆三年為始永著為例欽此

842 乾隆三年四月初九日奏本日奉

旨新授安徽巡撫孫國璽現在患病調理俟伊赴任後趙國麟交代清楚再行來京趙國麟未到任以

前刑部事務仍著孫嘉淦兼理其刑部滿侍郎員缺即將鍾保調補欽此 刑部奏

843 乾隆三年四月十七日內閣奉

上諭兵部右侍郎二格著調補工部右侍郎兵部右侍郎員缺著班第補授仍兼署工部侍郎事欽此

844 乾隆三年四月十八日奉

旨王保現在出差其理藩院侍郎事務仍著班第暫行署理欽此

845 乾隆三年四月十八日內閣奉

上諭奉天錦州府知府員缺著張景蒼補授廣東南雄府知府員缺著金允彞補授雷州府知府員缺著高澐曾補授貴州思州府知府員缺著史步高補授山東萊州府知府員缺著張桐補授廣西思恩府知府員缺著徐德泰補授欽此

846 乾隆三年四月十九日內閣奉

上諭陝西學政周霽奏稱患病難以供職懇請解任  
調理另簡學臣以司試事等語周霽准解任回籍  
調理提督陝西學政著高壽去欽此

847 同日內閣奉

上諭前因近京雨澤愆期米價昂貴朕令多設官廠  
減價出糶以濟民食遂有奸商潘七等巧為囤積  
壟斷居奇經步軍統領衙門拿獲懲儆令幸甘雨  
普降米價漸平但恐從前私自囤積今畏罪不敢  
發糶者尚不乏人著步軍統領衙門五城御史及  
順天府出示曉諭許伊等及時糶賣以贖前愆若  
有米數過多運糶需時者許其於該管衙門呈明  
存案限以日期照市價發賣完日報查不許番甲  
人等借端滋擾倘再怙過不悛仍懷畏望將來發  
覺之日照潘七等一體治罪欽此

848 乾隆三年四月二十日內閣奉

上諭今日御史李賢經其摺條奏事件其間頌揚之  
辭甚多如德尚寬仁政從簡易廣聞言路納諫如  
流等語朕臨御以來雖夙夜孜孜勤求治理而一  
切敷施措置豈能悉協於中撫已捫心實難自信  
時：者惕今見臺臣極口稱揚益重朕之媿也且  
朕之行事其是非得失當聽天下後世之公論尤  
不在一時進獻之諛詞從前已降旨訓飭令李賢  
經又蹈此習特再曉諭俾衆知之至其條奏內稱  
天下之事繁則擾、則勞、則倦應請嗣後在內  
各部院在外各直省所辦一切瑣屑細務不必盡  
煩睿覽其無益于治道或有傷于政體者請內會  
九卿外飭習撫公同酌議可裁減者裁減宜禁革  
者禁革如果事關重大方請斷自上裁所謂勞于  
求賢逸于任人等語從來為政之體自應撻攬大  
綱不親細務然而因時制宜亦有不可以驟論者  
昔我

皇考即位之初庶務紛繁有不得不兼綜整理之勢是  
以雍正四五年以前殫心竭慮日昃不遑其精勤

勞瘁之心實從古帝王所罕有朕百度維貞之後  
率由舊章遵循維謹較之

皇考之時已覺前任其勞而今享其逸矣然此亦當時  
會之適然耳若使目前有應行辦理整頓之事如

皇考當日之情形則朕亦必勉效法竭歷靡寧詎敢

圖旦夕之暇豫乎朕此時之宣猷布政斟酌緩急  
權衡重輕固不敢廢弛而叢脞亦不至瑣屑而紛  
更此朕心可以自信者若如李賢經所奏將諸事

委之臣僚而朕高居九重之上端拱無為則廢弛  
叢脞之弊必不能免不但心有未安即揆之于理

亦斷乎其不可也况朕春秋方富年力正強乃勵

精圖治之始凡節勞省事之說尤不當陳于今日

也又條奏內稱地土不增稅糧如故經費之數亦

應調停在官吏則職業不加于昔而餽俸已倍于

前在太倉則輸納不益于前而賑糶幾倍于舊源

少易窮後將焉繼等語此奏甚屬錯謬朕之加賞

官僚優渥者原非博惠下之美名異人之感頌也

蓋以厚其養贍方可固其驅馳冀臣下自知興廢

興義恪共乃職之意倘俸祿既增而仍有貪污受

賄不守官箴者朕必按律治罪不稍寬假此正澄  
清吏治之一端不必于臣工養廉之典較此多寡

之數也至于太倉之粟現有三年之蓄不為不裕

况國家儲積以備不虞所謂不虞者正為年歲荒

歉黎民艱食以此平糶散賑惠濟閭閻俾不至于

飢餓若此時而不用倉谷又于何處用之豈有太

平無事之時而必專指兵革之屬以為不虞之備

乎又條奏內稱進退人材之際當嚴邪正之辨必

須權衡在己兼採衆論使好善惡惡輕重長短不

齊之限量一一中乎當然之則無少差謬等語虞

書曰知人則哲惟帝其難之蓋為治之道莫難于

用人而用人之道莫難于分別邪正自古人君斷

無有知其為邪而用之知其為正而斥之者理惟

是隱微難明疑似難辨以致舉錯不當用舍失宜

其辨別之法欲採輿論而輿論每不可憑欲加察

訪而察訪又不可信若立科條以為鑑別進退之

標準則所立之法即為百弊之所叢生矣此實難

之又難有莫可名言者又條奏內稱各省軍政所

荐或弛令嚴明弓馬嫻熟或持已廉潔諳練營伍

不過此數事求其洞曉韜畧謀勇兼長深得士心若吳之孫臏齊之穰苴魏之吳起者其人不多見請于本京設韜畧之科廣為收羅等語夫所謂子馬爛熟營伍請練等事尚係實而可見者至于韜畧運于一心其神明變化之妙全在當機猝應平居無事之日何從試驗而知之若設韜畧之科採其議論便加錄用不過如目前試士之策論半屬紙上空談何以定將材之優劣乎况孫臏穰苴吳起數人乃不世出之材即求之史冊中亦不多得而李賢經乃于近今武途中援以為比不亦大相逕庭耶朕見伊條奏就一時所見指出數事以朕意宣示伊所奏款項甚多或其中不無可採者著大學士會同九卿閱看定議具奏欽此

849 乾隆三年四月二十二日內閣奉

上諭各省所有學田銀糧原為給散各學廩生貧生之用但為數無多或地方偶過歉年貧生不能自給往不免餓餒深可憫念朕思伊等身列膠庠

自不便令有司與貧民一例散賑嗣後凡遇地方賑貸之時著該督撫學政飭令教官將貧生等名籍開送地方官核實詳報視人數多寡即於存公項內量撥銀兩未移交本學教官均勻散給資其餽粥如教官開報不實給散不均及為吏胥中飽者交督撫學政稽察即以不職叅治至各省學租務須通融散給極貧次貧生員俾需實惠此朕體恤生員之意若生員等不知感激自愛因此而干預地方情有生監護符以致肆行種不法之事該督撫等仍應照例查察毋使陷於罪戾欽此

850 乾隆三年四月二十四日內閣奉

上諭前吳金奉差回京密奏楚省事務甚多朕發與總督德沛逐一查察俱屬子虛且稱吳金在楚喜怒無常威福自用每見地方官必曰此番奉命非位祭祀且將察爾等之賢否即總督巡撫未必無分又致書素不相識之雲夢縣知縣傅百揆索借銀五十兩該縣未應至漢口時與鹽商等互相拜往日名吳金遂與凡吳姓商人俱用宗末拜帖楚

人傳為笑談又吳金奏請衡永甯等府銷鹽甚微  
必須專設商人請令卡商方宏源辦理經大學士  
等議駁臣查方宏源本非安分之人吳金去歲至  
漢口時方宏源稱為師生叙談數日踪跡詭秘其  
有無賄賂情弊雖無由得知然以此不倫之舉代  
伊入告其為請託無疑等語凡奉差各省官員於  
地方事務自當留心訪察果能秉公據實陳奏朕  
前有益於民生吏治朕自嘉獎之若無所見聞即  
不敷陳一事亦屬奉使之常令吳金假公濟私妄  
行瀆奏且行止畧鄙招搖恣肆甚屬無恥著交部  
嚴察議奏以為官員奉使挾私妄奏者之戒至方  
宏源一案與吳金有無行賄之處著交與總督德  
沛查明具奏欽此

851 乾隆三年四月二十七日內閣奉

上諭據廣東督撫鄂彌達王暮奏稱崖州牧王錫庭  
恩令李壽年俱于到任數月染瘴身故家口樞樞  
貧難歸籍請定四省邊障病故官員回籍撫卹之  
例此等人員奉職遠遼不幸因瘴殞生深可憫剛

自應酌量加恩但朕意與其加恩極卹於身後何  
如設法保全於生前向例瘴地各缺原係揀選熟  
習水土之員調補則調補人員必其本籍與兩粵  
道路相近水土始為相宜未可漫無分別概行調  
往也將來作何定例極卹并變通之處著大學士  
會同該部詳志定議具奏欽此

852 乾隆三年四月二十七日內閣奉

上諭朕將翰林部屬等官例應考選御史者引見記  
名以備將來數年之用其未用御史以前若該員  
論俸應陞仍著照例陞用若應行開列請旨亦仍  
照舊開列但於本名之下將御史記名之處開注  
奏聞其應出差者亦然著傳諭各該衙門知之欽  
此



853 同日內閣奉

上諭今歲山東河南二省雨澤均調麥秋大稔朕心甚為喜慰但恐小民無知往往有餘之時不知樽節愛惜耗費于無用之地是在地方有司極力化導用心稽查如踴麩耗之弊更當嚴禁于斯時勿以二麥豐收遂可稍弛其禁至於隣省需麥之虞甚多以本地之有餘濟他省之不足而貿易之利即在其中務使商賈流通彼此均受其益如果再有餘糧即著地方官動支庫帑照時價糶買存貯公所以為儲蓄不使有穀賤傷農之慮但不可繩以官法勒令交易致滋擾累著兩省巡撫仰體朕心遍行曉諭善為辦理欽此

854 乾隆三年四月二十七日內閣奉

上諭原任烏蒙鎮標遊擊劉崑於雍正八年間遭值烏蒙逆蠻背叛奮勇殺賊歿於行陣其妻張氏妾吳氏并伊二女皆臨難捐生從容就義一門忠烈實所罕見仰蒙

皇考從優賜卹立碑建坊恩逾常例彼時劉崑之子劉

覺先年甫三歲一切身後之事皆伊義子武舉劉類先為之經理并撫育幼弟以繼劉崑之後今劉類先若照武舉例發往別省補用則離家遠遠劉崑幼子無人照看劉類先著加恩授為守備交與四川撫提以本省員缺題補以示朕加恩忠烈之至意劉類先現在京師著該部帶領引見欽此

855 乾隆三年四月二十八日內閣奉

上諭江南毛城舖工程漸次就緒但此地至洪澤湖河湖水道六百餘里經歷十數州縣土壤相錯若無高員統轄則各邑丞簿微員呼應不靈所有一切堤岸壩座工程未必經久堅固况現在脩防疏濬尚須逐年料理則歲修之費亦當預為籌及者著河道總督高斌會同江南總督那蘇圖悉心妥議於就近廳員中歸并何員管轄並酌定歲修之費若干於每年冬末春初河水未發時相度修治俾地方永受其益欽此

856 乾隆三年四月二十九日內閣奉

上諭朕聞各省現任教諭若中進士現任訓導若中

舉人副榜則有應用之缺便離原有之任以待銓補而銓補往：遲延動輒數載是一中之後轉令退居閒散矣推求其故蓋以從前品級相應故定例令其離任今教職品級既已加增則離任之例亦應酌量變通以示鼓勵嗣後現任教諭會試得中進士例應歸班者仍令回原任以教授銜管教諭事現任訓導鄉試得中舉人副榜者仍回原任以教諭管訓導事若遇該員本班應選時仍照常銓選遇卓異薦舉亦照銜陞轉將此永著為例欽此

857 乾隆三年五月初八日內閣奉

上諭河防兵丁內有樁手一項下埽養較之眾兵更為出力前已降旨將河南山東二省河兵照江南之例改為戰二守八俾樁手均食戰糧以賞勤勞今思直隸河工雖不得與河東二省比並然樁手較眾兵出力為多亦當加恩鼓勵之著將直隸河

兵改為戰一守九俾用力較多之樁手得食戰糧以厚其養贍該部遵諭即行欽此

858 乾隆三年五月初十日內閣奉

上諭湖廣鎮守總兵官員缺甚屬緊要著將福建漳州鎮總兵官譚行義調補漳州鎮總兵官員缺著四川副將龍有印補授欽此

859 乾隆三年五月初十日內閣奉

上諭人君宅中出治建極綏民自有千古不易之理萬年一定之經以為敷政寧人之本至於政務之日陳於前亦惟物來順應初無成見成心若預立意見於事先則寬嚴賞罰之間必有不得其平者矣人臣事君於事之是非可否一當以理為準若存揣摩迎合之念妄希有當上意而不顧事理當然之則則偏陂輕重之弊不可勝數矣數年以來朕屢以此訓戒臣而無如積習已深猝難變化即如朕於當寬之事降一寬恤之旨而諸臣遂以為朕意在寬凡所辦理所條奏之事志過於寬之一

路矣朕於當嚴之事降一嚴厲之旨而諸臣遂以  
為朕意在嚴凡所辦理所條奏之事悉趨於嚴之  
一路矣且有今日之彌令甫頒而明日之摹擬旋  
至一人未改面貌兩事迥異後先人心不古何至  
於茲夫朕本無心而臣工視為有意朕以公心出  
之而臣工以私心測之所謂差之毫厘繆以千里  
豈朕之所望於諸臣者哉即朕已經降旨施行之  
事倘有幾微未協猶當據理直陳不難收回成命  
如此方不愧猷可替否之義朕自嘉獎重待之豈  
可徇流俗之見懷觀望之心揣度意旨以為容悅  
而適為朕之所輕鄙哉用是再頒諭旨願內外諸  
臣各矢惻忱屏除舊習以贊成國家蕩平正直之  
治特諭

860 乾隆三年五月十一日內閣奉

上諭貴州定廣協副將員缺著遊擊陳綸補授欽此

861 乾隆三年五月十五日內閣奉

上諭各省地方偶有水旱朕查蠲免錢糧舊例被災

十分者免錢糧十分之三十分者免十分之

二六分者免十分之一雍正年間我

皇考特降諭旨凡被災十分者免錢糧十分之七九分

者免十分之六八分者免十分之四七分者免十

分之二六分者免十分之一實愛養黎元軫恤民

隱之至意也朕思田禾被災五分則收成僅得其

半輸將國賦未免艱難所當推廣

皇仁使被災較輕之地畝亦得均霑恩澤者嗣後著將

被災五分之數亦准報災地方官查勘明確蠲免

錢糧十分之一永著為例欽此

862 乾隆三年五月十六日內閣奉

上諭黑龍潭

龍神福國佑民靈顯素著每遇京師雨澤愆期祈

禱必應是

明神功德實能膏潤田疇順成年穀為萬姓之所

仰賴昔

皇祖式廓廟貌建立豐碑

皇考又復易以黃瓦用昭敬禮令應議加封號以示尊

崇著大學士會同該部定議具奏欽此

863 乾隆三年五月十九日內閣奉

上諭朕聞陝西今歲二麥收成豐稔惟西安府屬之

咸寧長安臨潼藍田渭南富平鄠縣同官同州府

屬之郃陽蒲城華州白水鳳翔府屬之鳳翔隴州

汧陽直隸商州并所屬之雒南直隸邠州暨直隸

鄜州屬之宜君等共十九州縣於三四月間各有

被雹成災之處向來被雹人戶俱係有借無賒朕

思陝省上年秋成歉薄又遇偏災小民生計未免

艱難殊可憫念著該督撫委員確實查明照上年

賑恤延榆綏德之例將被災十分者賑四個月九

分者賑三個月八分者賑兩個月裨民食寬裕得

盡力田畝以庶有秋以昭朕加恩秦民之至意欽

此

864 同日內閣奉

諭九卿保舉堪任道府等員其在京者著吏部帶

領引見在外任者若奉差來京亦著吏部帶領引

見如遇該員陞轉送部引見時將九卿某人保舉

之實聲明具奏欽此

865 同日內閣奉

上諭各省副將叅將均係武職大員其才具漢仗弓

馬必待朕親見始可得其梗概有從前未經引見

之員著各該督撫提鎮酌量於何時令其輪流來

京引見並將伊等操守辦事及操練營伍如何之

處於本人來京時據實具摺奏聞欽此

866 乾隆三年五月二十日內閣奉

上諭永定河大工日今尚未告竣朕思今春雨澤缺

少恐夏秋之間復有霖潦之虞隄工關係甚重著

朱藻碩琮將時下情形若何並何以先事預防使

渾流安瀾田廬無虞其速行悉心詳議以聞欽此

867 同日內閣奉

上諭楊永斌久歷外任聲名素優是以用為蘓州巡撫近聞伊年將七旬精力不逮難勝繁劇之任著來京署理禮部侍郎事務蘓州巡撫員缺著布政使許容署理蘓州布政使印務著徐士林前往署理朕因蘓藩事務緊要一時不得勝任之人不得已命徐士林往署且伊服制亦將屆期滿況又與實授者有別徐士林可即由本籍起程來京請訓再赴新任不必以服制未滿固辭欽此

868 乾隆三年五月二十一日內閣奉

上諭據福建總督郝玉麟奏稱閩省環山瀕海田少人多所產米糧不敷民食上年郡縣內有水旱風災等患秋收歉薄仰沐皇仁賑借兼行復開倉平糶又裁留浙省漕米十萬石以資接濟萬姓歡呼惟是春夏以來民食兵餉用米甚多邊海倉儲亦須議補以為未雨綢繆之計雍正四年閩省米貴曾蒙

世宗憲皇帝諭令江西將存倉之穀碾米十五萬石運閩濟用仰懇照依此例勅令江西撫臣將倉穀動撥二十萬石運交閩省再令湖南撫臣撥穀十萬石由長江而下至江南由海道至閩更為有益等語閩省上年收成歉薄朕心深為厯念江西湖南素稱產米之鄉年來頗稱豐稔今歲雨澤又調勻所有舊存倉儲可以通融於鄰省著照郝玉麟所請動撥江西倉穀二十萬石湖南倉穀十萬石運往閩省以備用其如何運送之案著岳濬張渠會同郝玉麟盧焯一面妥議辦理一面奏聞欽此

869 乾隆三年五月二十二日大學士鄂 等將

題補內閣侍讀之中書鄭基方觀承帶領引

見奉

旨鄭基補授內閣侍讀欽此

870 乾隆三年五月二十二日大學士鄂 等將考

選御史之服制未滿內閣侍讀赫泰等三員併

實錄館考選御史之開缺員外郎舒敏等九員補行帶

引

見奉

旨赫泰常海舒敏色楞查武俱著記名以御史用欽

此

871 乾隆三年五月二十三日內閣奉

上諭今年三春雨澤缺少有悞東作朕屢次虔誠祈

禱仰蒙

上天鑒佑於四月十二等日得有雷足雨澤麥秋雖減

分數大田仍可播種若繼此雨暘時若則秋成可

望朕心方為稍慰乃夏至以後又復少雨雖旬日

之間即雨一次而旋下旋止總不雷足若再遲數

日則秋田難以播種且前此雨後播種之苗亦望

澤甚殷其令該部竭誠設壇祈禱朕亦虔心自省

仰冀

上蒼垂佑早賜雷足甘霖以慰吾民之望該部即遵諭

行欽此

872 乾隆三年五月二十三日內閣奉

上諭從前各省副恭遊擊等官輪流來京引見者蒙

皇考念伊等遠來嘗給銀兩資其路費其雲南貴州四

川廣東廣西福建六省路途尤遠俱令乘驛來京

此次各省輪流引見之副將恭將保著照前例賞

給銀兩其雲貴等六省輪流引見之員仍著照例

給與驛馬可傳諭兵部知之欽此

873 乾隆三年五月二十五日內閣奉

上諭朱藻顧琮請發帑銀三萬兩存貯道庫以修河

工搶修之用著該部照數給發欽此

874 乾隆三年五月二十五日奉

旨前都察院條奏九卿等驗看月官時有素知其品行端謹或才具優長者即填入名單以為引見時酌酌調繁簡之助朕批准施行令刑部郎中王際奏稱此例一行恐九卿詹事科道中袒護知交曲徇戚誼始以情託繼以賄求而借端招搖指名撞騙之弊俱從此生等語從來人君敷治用人為最要而知人為最難內而訪之九卿外而問之習撫此即詢四岳關四門之義雖諸臣之中公私未必一致將來徇情作弊之事亦不能保其必無然經朕覺察自有國法不容寬貸而未事之先朕則不忍存逆詐億不信之心因噎廢食將徒推公舉一概棄置不用也况自舉行以來九卿驗看月官尚未有填註薦語者豈有出令未久又欲遽議更張朕之令諸臣不時條奏並許司官恭領等亦得奏事者一則欲博採衆論以資治理一則觀其陳奏可以知其人之識見才具如何諸臣既奉旨進言必當有關於國計民生之要務或朕躬闕失或政事乖差據實指陳朕不難收回成命令觀諸臣所

奏並無謹論嘉謨不過就目前一二時事反覆辯論朝更夕改從來國家政務必行之數年而後可以徐收其効焉有取必於旦暮間者即如禁銅一案議論即不一而無所適從若以為當開則既開禁之後錢價未見平減若以為當禁則從前禁止多年銅觔之缺少如故並未見其充盈今日之言當禁者何不早言之於開禁之日也諸臣之條奏朕多勅交部議若部臣皆以不行議覆又似不體朕從善如轉圜之意者若依違遷就姑且准行則後事紛更而無益於政治朕熟察近日情事如此因王際條奏特頒此旨曉諭諸臣共知之王際摺並發欽此

875 乾隆三年五月二十七日內閣奉

諭湖廣總督德沛奏稱湖北屬員內有宜昌府知府李元英與伊有姻戚之誼懇請調補別者以免嫌疑等語李元英著調補江西臨江府佟世虎著調補湖北宜昌府再廣西現出鎮安府知府一缺著四川合州知州韓孝潔補授欽此

876 乾隆三年五月二十八日內閣奉

上諭湖北襄鄖道魯之裕著來京引見欽此

877 同日內閣奉

上諭舒赫德著補授內閣侍讀學士欽此

878 乾隆三年六月初二日內閣奉

上諭朕聞雲南麗江府原係土府於雍正二年間改設流官比時清查田地戶口時有土官莊奴院奴等類共二千三百四十四名伊等並無田糧皆願自納丁銀以比於齊民每名編為一丁每年納銀六分六釐共徵丁銀一百五十四兩七錢零迨滇省民丁改為隨糧派納而此項夷丁不得與有糧之戶一例攤派至今照舊徵收其中不無貧乏之家艱於輸納者著該督撫查明縣與豁免僻遠地夷民永無催科之擾該部即遵諭行欽此

879 同日內閣奉

上諭向例外省主考官開命之日即連就道蒙

皇考世宗憲皇帝念其辦理行裝未免忙迫伊等既奉命典試自知奉法惟謹不必過於防範特命稍寬啟程之期此體恤臣工之厚意也近聞奉差諸臣起身甚遲有至十餘日外者殊非遠嫌之意著禮部酌定日期著為永例欽此

880 乾隆三年六月初三日內閣奉

上諭據王蔭奏稱上年奉旨令督撫藩臬各保府道賢負自行封奏臣於七月內抵任將所屬道府等官留心容察非偏而不全即疑而未信似一時尚無其選蓋粵省剽竊之風未熄健訟之習滋深蒞斯土者無威則令不行過嚴則下多怨求其寬猛相濟輿情懷畏者未見其人也且土稱肥沃風尚奢華蒞斯土者堅毅之守未純則心搖而物誘經介之言可聽或貌是而中非求其表裡如一端方純粹者未見其人也若冒昧列之荐膺毋論日後



改撤敗行甘受濫舉匪人之罪即以目前而論先  
籍荐舉不實之愆所以展轉思維而不敢妄為保  
舉等語從來為政之道安民必先察吏是以督撫  
膺封疆之重寄者舍察吏無以為安民之本則自  
蒞任之始便當細察廣詢詳加甄別循名覈實聽  
言觀行務得分猷布化之才以副朕博採旁求之  
意王蕃署事粵東已及一載而猶以屬員賢否未  
能深知為言則其不留心於察吏可知既不留心  
於察吏朕不知其視為先務者安在也至林粵省  
剽竊之風未熄徒訟之習滋深土稱肥沃風尚奢  
華此非督撫所當殫心竭力以移風易俗為己任  
時刻留意賢員以司整齊化導之職乎夫用人之  
柄操之於朕而察吏之責則不得不委之督撫朕  
御極之初曾有旨著各省督撫將屬員賢否具摺  
奏聞彼時各省督撫皆陳奏一次乃今並無一人  
陳奏者不知督撫等始初有所舉劾及已更換他  
任則又有應舉劾之屬員矣豈必待朕諭旨屢頒  
而始為遵旨敷陳了事已耶即督撫之身不必更  
換他省仍居原任而前後數年之間屬員新舊不

一即就屬員而論彼一人之身亦豈無改行易轍  
者似此均當隨時奏聞惟以秉公據實為主不可  
存苟且塞責之念尤不可有瞻徇回護之私如此  
則激濁揚清不至差忒而於察吏安民之道庶有  
裨補矣並將此旨曉諭各省督撫知之欽此

881 乾隆三年六月初四日內閣奉

上諭朕聞江南州縣徵收錢糧有加增火耗之處可  
傳諭那蘇圖許容等嚴查屬屬如果有增方員暗  
地加耗立即題參治罪以為殃民肥己之戒但以  
朕所聞江南如此恐別省亦有此風不急為查禁  
則貽害百姓將不可言朕御極以來政崇寬大而  
人心澆薄漸啟玩縱之端以為不妨稍有假借不  
知所謂寬大者乃愛養良民俾無失所求盡父母  
斯民之道耳非謂舉殘暴害民之輩而恚寬之也  
即如蠲租稅以裕物力減重賦以卹民艱水旱偏  
災立行賑卹雨暘愆候先事綢繆無一不為民生  
起見至如官吏處分之從寬者非其心有可原則  
由才尚可用刑章議罪之從寬者非其情原可潤

亦必跡在可疑若謂貪官汙吏一切色容惡棍奸民概行釋宥以示寬大是蕪稂莠而坊嘉穀縱虎狼以賊生靈殘忍酷虐無過於此尚何寬大之有前後屢頒諭旨至為明切而尚誤以玩縱為寬大是非誤會朕意直任意行私膠脂膏而肥囊橐乃國法之必不可宥者矣從前火耗未經提解州縣恣意橫征飽其溪壑苦累百姓是以

皇考允各省督撫提解火耗之請而優給各官養廉令不得額外巧取所以懲貪風而紓民力用意誠善即養廉稍薄之州縣當時亦必就其所辦事務酌予足用該員量入為出自無不敷何得暗加重耗剗刑小民以為自潤之計情罪至為可惡該督撫等不時體察如有不肖州縣於應收火耗外絲毫加重者即立題叅嚴行治罪如不行覺察經朕訪聞確實併將該督撫一併嚴加議處斷不姑容欽此

882 乾隆三年六月初七日內閣奉

上諭據盛京刑部侍郎葛森奏稱身有失血之症今夏增劇多方醫治未見痊可且母年七十有餘現在京師亦有殘疾懇請解任調理無得奉母等語葛森所奏情詞懇切准其解任來京便於養病無可省親盛京刑部侍郎缺著吳拜補授欽此

883 乾隆三年六月初八日辦理軍機大臣面奉

上諭據江蘇巡撫楊永斌奏稱嚴禁酒麪一事江蘇地方現今將各酒坊一切造麪器具分別封貯拆毀以杜私酒之源又稱今歲二麥頗獲豐稔民間不無販賣流通誠恐奸徒射利乘機囤積希圖私踴者現通行各屬飭查并刊示分發曉諭委員前往協同查禁又稱未奉上諭禁止以前已經造成陳麪現飭封貯造冊呈報等語朕思從前民間製造酒麪器具皆費工本今既禁止酒麪理應將器具聽民變價或改造別用庶幾稱便若概行封貯則前此製造之費盡歸無用殊非體恤商民之意辦理未為妥協至稱未奉禁之前有造成之陳麪

朕不知伊所謂奉禁者指何時而言朕禁麪之旨久已頒行而尚有如許未售之麪則可見地方大吏有司接到前旨不過視為具文並未實力奉<sub>遵</sub>矣至今歲二麥如果豐收則除民家食用外或應勸民間積貯或應發官價採買必寬有一番布置乃於地方有益豈禁止販賣略不代為籌畫遂可了事耶大凡大臣經理國家之事如有不便於民者即當據實陳奏朕不難收回成命其寬宥利益於民者便當寬心遵奉見之施行雖經數年或數十年常如一日乃以朕斟酌降旨之事而該督撫等始初畧為料理未久即有懈心再久漸至棄置豈必待朕每事每年再三提命而後知警省耶在朝廷固無此政體而在封疆大臣亦不當如此存心今因楊永斌之奏並諭各省督撫知之欽此

884 乾隆三年六月初十日內閣奉

上諭陳儀著來京吏部帶領引見

885 同日內閣奉

上諭從前奉

世宗憲皇帝諭旨將

聖祖仁皇帝御刻經史諸書頒發各省布政司敬謹刊刻准人印刷并聽坊間刷賣原與士子人人誦習以廣敦淳也近聞書板收貯藩庫士子及坊間刷印者甚少著各撫藩留心辦理將書板重加修整俾士民等易於刷印有翻印者聽其自便無庸禁止如

御纂諸書內有為士人所宜誦習而未經頒發者著該督撫奏請頒發刊板派布至於武英殿翰林院國子監皆有存貯書板亦應聽人刷印並從前內府所藏各書如滿漢官負有願購覓誦覽者稟准刷印其如何辦理之處著禮部會同各該處定議請旨晚諭遵行欽此

886 乾隆三年六月十一日內閣奉

上諭太常寺少卿負缺著鄭其儲補授欽此

887 乾隆三年六月十四日大學士九卿議覆御史

陳高翔條奏廣東總督鄂彌達借帑營運修築

民堤倡利滋弊一案兩議請

旨

上召入面諭曰從來利之一字乃聖人之所不諱而為賢者之所謹防易之文言釋元亨利貞曰利者義之和也利物足以和義繫辭曰理財正辭禁民為非曰義論語亦曰因民之所利而利之與周易正相發明惟放利自私則不可耳蓋義利本非兩截用之利物則公而溥是利即義也用以自利則貪而隘是利即害也後人但見言利之害遂將利義判然分為兩途如水炭水火之不相入孟子恐人舍義言利日趨於害而不自覺所以有何必曰利之說也所謂利物者以百姓之貲財謀百姓之衣食上之人不過為之董率經畫而已所謂自利者指剋聚歛取下民之脂膏充朝廷之府庫以致

民力益竭民怨日增其為害孰大焉今鄂彌達奏請廣東潮州府屬海陽六縣民堤請借給商人闕稅銀十萬兩營運生息次第興修經戶部議准御史陳高翔以為督臣不應言利復行條奏朕交爾等會議爾等又各行所見兩議進呈朕覽後議以借帑營運辦理公事為非持論未嘗不正但經理天下之事必須揔攬全局期於可行如海陽等六縣堤岸原係小民自修之二程因其力量不足是以仰賴官修而廣東所有公項又不敷本省公事之用不得已而為營運之舉查廣東商人資本無多往往不惜重利向人借債以圖利息是以向來皆借給帑銀出息收鹽以為裕商之計今借給闕稅銀兩既可少紓商困又可裨益民田頗稱兩便若以借帑築堤為不可行則商人之借帑收鹽亦不可行矣推而至於內外惠濟兵丁銀兩皆營運生息之所出若以生息為非則向來之賞資兵丁以為吉凶之用者可以一旦中止乎兵丁惠濟既不可中止而國家之經費有常又何從措辦此格外之恩賞乎將來有人援照海陽堤工之例以請

停止營運者爾等其將議准予抑議駁乎可知議天下事者本有因時制宜之道識見不可以不廣也夫以義為利以利為利之弊朕籌之已審目前寔有不得不通盤計算權宜辦理之勢如果將來國用充盈百姓家給人足則現在施行之事又何不可變道之有此案著照前議行可將兩議并朕諭旨俱行頒發俾各省督撫知之若非大有於民生之事而輒以生息營運為辦理公事之善法則又不知為政之體者矣欽此

888 乾隆三年六月十五日內閣奉

旨本月二十五日朕御太和殿欽此

889 乾隆三年六月十七日奉

旨這糾叅六法官負內年老之鄭懷德等內閣擬票帶領引見一簽不必帶領引見一簽朕若依帶領引見票簽或有不情願者致往近需用監費徒滋勞苦若依不必帶領引見票簽有情願者又不得來京朕從前於綠旂軍政內有年老官負著詢問

伊等有情願來京者再行送部引見所降諭旨甚明此奉應照綠旂武官之例另駕票簽進呈嗣後此等案件著照綠旂官負之例辦理欽此

890 乾隆三年六月十八日內閣奉

上諭據山東巡撫法敏河東摠河白鍾山奏稱本年南來重運糧船較昔年遲一月有餘臣等恐回空漕阻有怯冬兌擬將東首本年俱運及已經回次之糧船通融接運即令南船自東回次受兌以免遲悞新運等語今年南船北上較昔稍遲法敏白鍾山等籌畫通融接運之法於漕務甚有裨益著即照所請行朕思山東停運之糧船令其轉運南糧尚屬分內之事若已經回次之船復令北上是一年出運兩次矣應加賞賚以示獎勵著法敏白鍾山會同查克丹將運丁運弁及水手等作何加恩之處速行定議一面辦理一面奏聞欽此

891 乾隆三年六月十九日內閣奉

上諭養民之道莫要於積穀積穀之道必先去其耗穀者是以前年有禁止燒燬之旨後因內外諸臣議稱用酒之人比戶皆然一時驟禁不無滋擾不若禁止造麴其事簡而易行朕思移風易俗自當行之以漸禁麴之事正屬漸次轉移之法恐各省督撫視為具文今春特再申飭期於實力奉力乃尚書孫嘉淦復又奏稱禁麴之事多有未便著直隸山東河南江南陝西山西各督撫悉心妥議毋得以朕曾降諭旨稍有迎合亦不必瞻顧孫嘉淦遷就依違務期秉公熟籌於民生確有裨益不負朕拳拳咨詢之意欽此

892 乾隆三年六月二十日內閣奉

上諭一月以來京師喧傳尚書孫嘉淦密奏在朝大臣多人如大學士鄂爾泰張廷玉徐本尚書公訥親尚書海望領侍衛內大臣常明皆在所奏之內是朝中大臣得免者鮮矣諸臣皆係朝廷簡用之人守法奉公寔心盡職並無可指摘之處而鄂爾

秦張廷玉尤深

皇考特簡之大學士為國家之棟梁以孫嘉淦較之識見材猷豈能與二人為比朕特以其操守廉潔向有端方之名故屢次加以擢用非以其才識在二人之上也如果其才識在二人之上朕何難即用為大學士而仍在尚書之列乎且朝廷政務繁多正賴宣猷佐理之羣彥豈有將諸人悉行罷斥而專用孫嘉淦之理乎至於伊察奏之語毫無影響如果諸臣有可奏之事孫嘉淦身為大臣何不可登之露章而乃見之密奏既云密奏則惟有孫嘉淦自知之伊又豈肯洩漏於人以招衆怨乎朕不知造作訛言之人是何肺腑或忌嫉孫嘉淦之人見朕將伊擢用而造為此說以排擠之耶或趨附孫嘉淦之人欲相引重而造為此說以揚其特立獨行之直名耶此語朕聞之已將一月而都察院堂官及科道等遇此等應行奏奏之事何以默無一言即朕若置之不問則造言生事之人方且以為得計而無知識之官負或且疑為寔有其事將見黨援門戶之風從此而起無所底止矣前我

皇考因輦下訛言甚多曾降諭旨令步軍統領五城御

史等訪拏重懲此風稍息今復蹈故轍於國體大

有關係但此傳言已久目前姑不深究祇令步軍

統領巡城御史嚴行禁止之嗣後如有此等造言

之人必當查拏根究其所自來重置于法以杜人

心風俗之害至於大小臣有陳奏事件既不見

之明奉而用密摺便當加意謹慎不令一人知之

方合謀猷入告之義乃如朕降查奏辦入官房

產之旨而外人即知為尹繼善所奏且云尹繼善

從前曾奏過清查虧空之案過于刻薄今為此舉

以憾悔之又如出征陣亡之官兵妻室朕降給與

半俸半餉之旨而外人即知為戶部侍郎楊慶所

奏入查奏入官房產之事由軍機處辦理或辦事

司負人多偶爾宣洩亦未可定爾等當嚴行戒飭

之至於楊慶所奏若非伊自向人言外人何由而

知之且朕見諸臣有奏奏彈劾之類外人每不能

得而加恩沖澤之舉則諭旨未發之前或

諭旨既發之後外人往往傳播知為某人之奏豈

非本人向人陳說以為居功干譽之計乎朕為天

下主一切慶賞刑威皆自朕出即臣工有所違白

而採用之者仍在于朕即朕之恩澤也朕豈以諸

臣市惠為嫌而較量一時之稱道但國家辦事有

體名不正則言不順如事之不當密者即明見之

章奏如用密摺封達朕前者應必係當密之事而

又宣露於人其居心尚可復問乎事君之道當如

是乎朕御極以來崇尚寬大內外臣工當倍加恪

慎益矢公忠以成朕寬大之治若因禁令稍疎始

而廢弛漸且流於蕩闊踰檢是諸臣自干罪戾國

法具在朕豈能曲為寬假耶此意朕于雍正十三

年奈日久怠生今因一二近事並

將朕果宣諭令內外諸臣共知之欽此

893 乾隆三年六月二十三日內閣奉

上諭據貴州總督張廣泗提督王無黨奏稱定番州

之姑盧頑苗不知法紀妄肆跳梁叢爾小醜即量

遣官兵亦可即時撲滅因思該處界在都勻定番

之間苗仲環處從未習見兵威與其兵少而時日

稽遲不若兵多而成擒迅速比即酌撥漢土官兵

三千餘名分路會剿今文武協力弁兵奮勇旬餘之內逆寨悉經焚燬深著遍處窮搜首惡先已成擒餘黨陸續就縛被擄民人等俱已各回故居軍務已經全竣等語姑盧頑苗雖屬小醜然不速行撲滅恐致蔓延為附近居民之累張廣泗王無黨辦理妥協可嘉所有在事官弁兵丁著查明分別議叙賞賚以示獎勵該部即遵諭行欽此

894 乾隆三年六月二十四日內閣奉

上諭前據御史甄之璜條奏各省鄉試中式舉人例給坊銀二十兩而遠省遵行不寔如貴州則給三分之一廣西則全行扣留經部議令該省巡撫藩司確查報部迄今一載有餘尚未給案今朕訪聞得遠省中式舉人有應領之坊銀每見主考長途跋涉即以恩賞之項行其束修之敬而識見淺小之考官亦遂收納不辭此風行之已久今若追溯從前一一清查徒滋繁憤之煩未免擾累究於舉子無補著從寬免其查問後考官等各宜恪遵功令不許收受此項銀兩該藩司亦必照數給

發不得絲毫扣留務使中式舉人寔需恩澤欽此

895 乾隆三年六月二十五日內閣奉

上諭吳應案凌如煥現俱出差兵部漢侍郎事務著程元章暫行署理欽此

896 乾隆三年六月二十六日奉

上諭各部院辦理事務自宜恪慎廉潔奉公守法若推委因循徇私舞弊則官箴有玷國法難容朕聞近來各部院辦事因循成習每遇難辦之事即互相推諉文移往返動經數月迨夫限期已滿則潦草完結以避參處至於易結之事又復稽延時日及至限滿則苟且咨行以期結業吏兵二部於陞遷議處之案未盡平允戶工二部於錢糧工程等事亦不無染指朕續承大統以

皇考之心為心以

皇考之政為政百爾臣工自當仰體朕意恪守成法以襄治理何得怠玩疎忽以負朕委用之恩自甘罪戾而不顧也前此朕已屢降諭旨切加申飭而積



樂未除豈諸臣誤以朕政崇寬大而玩愒以至於此耶著將朕此旨再行曉諭嗣後各部院大臣等務須潔已奉公無忝厥職並嚴加訪察所屬官員如有前項諸弊即行據實指參毋得瞻徇容隱倘該堂官不行參奏或被科道糾參或經朕訪聞定將該堂官一併嚴加議處欽此

897 乾隆三年七月初二日內閣奉

上諭彭維新服制已滿著補授都察院左都御史欽此

898 同日內閣奉

上諭據總河朱藻等奏稱六月二十八日午後下七工地方陡長山水九尺楊家莊水勢泛漲隄頂過水尺餘迴溜漫坍水溝六丈水歸新挑引河二十九日辰時已經水落等語司今天氣雖漸次開晴一切堵築疏導尤當慎之又慎至漫工處所民間廬舍田禾料不無傷損著該督等立速查勘明確一面奏聞一面料理務須加意賑卹毋使一夫失

所以仰副朕勤惕愛養之至意該部即遵諭遠行欽此

899 乾隆三年七月初三日內閣奉

上諭聞得下江地方五月內天時亢旱六月內雖經得雨尚未普遍霑足望澤甚殷如此情形那蘇圖等何以不行奏報著該部即速傳諭那蘇圖等速委賢員察看民間情形應如何緩征賑恤之處速行妥議一面辦理一面奏聞欽此

900 同日內閣奉

上諭據北河總督朱藻顧琮奏稱永定河南岸同知張泰所轄七工汛內隄岸漫溢甚屬踈忽難以姑容但張泰現有經手承辦金門閘壩工尚未完竣合無仰懇將張泰解任仍留金門閘壩工効力行走至南岸同知印務現有搶修工程必得熟練之員方免貽誤查永清縣知縣丁廷植在任年久屢經協辦河務且係地方有司呼應較便若委令暫

行代理則要工可以速竣容臣等再於所屬內遴  
選相宜之員題請補授等語著照朱藻顧琮所請  
將張泰解任仍留金門閘壩工効力行走其南岸  
同知印務著丁廷植暫行代理欽此

901 乾隆三年七月初五日內閣奉

上諭據徐士林奏稱奉旨署理蘇州布政使印務本  
不敢辭惟是母年已屆八旬衰憊日甚目下正在  
患病坐卧不寧臣日侍湯藥不能暫離且父樞卜  
於本年十二月內歸葬現在經營措辦伏懇免臣  
赴任得以視母湯藥安葬父柩計臣服闋之期不  
遠倘母恙得以稍痊但可勉強支持臣當設法迎  
養以盡鶯胎等語朕覽徐士林所奏情辭懇切准  
其在家奉母並完伊父墓事僕明春伊母病痊具  
摺奏聞奉母就養於新任此際蘓州布政使印務  
著署撫許容一併管理欽此

902 乾隆三年七月初六日內閣奉

上諭朕聞雲南學政孫人龍自蒞任以來校閱精明

羣情允服於近夷新設學校尤能整飭士風實心  
化導朕思滇南離京遙遠往返維艱孫人龍既能  
盡職著再留三年今冬不必更換欽此

903 同日內閣奉

上諭據四川巡撫碩色奏稱四川地方今歲春夏以  
來雨水及時收成可望惟是低窪之地有因雨猛  
水泛致傷人口房舍冲損城署田地者已將偏災  
較重之處一面題報一面查勘賑濟其他不成災  
之處未便逐一具題現在查明撫恤等語朕愛養  
兵民欲使無一夫之失所其成災之州縣固應題  
報加意撫綏而不成災之州縣不在題報之內者  
其中豈無被災較重之邨莊望恩孔亟若因該縣  
大勢較輕而使有一夫不被其澤則非朕一視同  
仁之意矣巡撫碩色可委員確查將未曾題報之  
處中有被災較重者照題報之處一體加恩賑恤  
毋得歧視欽此

904 乾隆三年七月初六日內閣奉

上諭朕即位以來為旂人生計多方籌畫凡有裨益之事無不舉行因屢有條奏以為支借庫銀有裨益者是以將餉銀借支一年續又借支半年乃見兵丁等借銀之初未嘗無補而物價一時騰貴所領之銀隨手花費並不能置立產業而每月扣除額餉於生計轉為無益非養贍旂人之善策今特加恩著將扣除未完之餉銀悉行豁免停止再借至於伊等生計如何有益之處朕另為籌計從容辦理欵此

905 乾隆三年七月初七日內閣奉

上諭一月以來畿輔近地雨水過多前因總河朱藻顧琮奏稱六工七工等處水勢泛漲朕心慮及民間廬舍田禾不無傷損已經降旨令該督等立速查勘明確一面辦理一面奏聞今聞天津地方高阜之處禾稼尚屬無虞而平原低地所種高糧穀豆多被淹沒縱將來晴霽水消收成亦未免歉薄著總督李衛於一切被水之地速行確查務期辦

理得宜以副朕不使一夫失所之意欵此

906 同日內閣奉

上諭據大學士查即阿巡撫元辰成奏稱平慶道李桐在任多年贊聲素著今於六月十二日病故其員缺甚為緊要查有甘州府知府馮祖悅明白諳練廉潔恪勤若補授平慶道於地方實有裨益等語馮祖悅著照查即阿等所請補授平慶道其甘州府知府員缺俟朕另降諭旨欵此

907 乾隆三年七月初七日奉

旨盛京年滿回京之司官未遇缺補用者近皆分部學習食俸候補伊等在此部學習將來又補別部豈肯實心辦事嗣後此等人員年滿之時如何補用京缺不致守候學習之處著該部妥議具奏欵此

908 乾隆三年七月初八日內閣奉

上諭據直隸總督李衛奏稱臣標前營守備韓景琦

於六月內推陞山西撫標左營守備但韓景琦在直數年盡心教練兵丁且差遣緝捕盜賊著有勤勞實係臣委用得力之員合無仰懇天恩以陞衛仍留原任則於營伍捕務均有裨益等語該督既稱韓景琦在直有緝捕盜賊教練兵丁之責著照李衛所請以陞衛仍留原任他省不得援以為例欽此

909 乾隆三年七月初九日奉

旨前降諭旨將兵丁扣除未完餉銀悉行豁免其護軍校驍騎校雖在職官之列亦係按月支領餉銀著一體免其扣除欽此

910 乾隆三年七月初十日內閣奉

上諭本年八月二十三日恭遇

皇考世宗憲皇帝三週忌辰朕奉

皇太后親詣

泰陵行禮所有起程日期著欽天監選擇具奏一切應

行事宜著該管衙門先期照例備辦

陟之時正值秋禾在地所有隨從官員人等概從簡少沿途嚴行飭禁毋得踐踏至駐蹕之處如有妨民田禾者著總督李衛查明賞給價值欽此

911 乾隆三年七月十一日內閣奉

上諭各省督撫身任地方皆有父母斯民之責於所屬州縣水旱災傷自應速為訪察加意撫綏朕前屢經降旨訓示諒督撫等自能仰體朕心不致玩視民瘼稽延時日朕念水旱之灾同宜賑救而水為尤甚旱灾之成以漸備可先事預籌水則有驟至陡發之時田禾浸沒廬舍漂流小民資生之業蕩然盡待命旦夕尤當速為賑救庶克安全不至流移失所現在成例分別極貧次貧其應即行賑賑者原係不待部覆但恐各省辦理不一或仍有拘泥遲延致灾民不能及時沾惠其用是再降諭旨嗣後各該督撫可嚴飭地方官凡遇猝被之水灾迅文申報該督撫即刻委員踏勘設法賑濟安置一面辦理一面奏聞務使早霑恩俾各寧

君以副朕憫念災黎之至意倘或怠玩濡遲致傷  
民命或有司奉行不力胥役侵蝕中飽以及借名  
捏飾浮冒開銷等弊該督撫照例嚴恭倘辦理未  
協積弊未除朕惟於該督撫是問將此永著為例  
欽此

912 乾隆三年七月十二日內閣奉

上諭昨據叅領金珩奏稱八旗滿洲蒙古漢軍各省  
駐防官弁子弟離京稍遠應試難艱請嗣後科歲  
兩試令該將軍考試馬步箭即送附近府院考試  
酌量人數多寡以定去取等語朕思此事斷不可  
行雍正十年間曾奉

皇考諭旨國家之設駐防弁兵原令其持戈荷戟以修  
備干城之選非令其攻習文墨與文人學士弟名於  
場屋也在弁兵之子弟有能讀書向學通曉文義者  
原聽其來京應試以廣伊等進取之途並未嘗禁其  
從事文學今若志准其在外考試則伊等  
競尚虛名而輕視武事必致騎射生疎操演怠忽將

來更有何人充駐防之用乎况我

聖祖仁皇帝臨御六十一年所有教養弁  
伍如果應行早已著為令典又何待今日之喋喋敷  
陳乎數年以來陳奏朕前者重見叠出不下百餘次  
其識見甚為庸鄙朕恚置之不論未曾降旨申飭乃  
近日仍有不知而妄竇者是以特行宣諭以覺愚蒙  
欽此仰見我

皇考慮周詳

聖諭至為明晰朕臨御以來亦以此陳奏者概未准  
行蓋以滿洲蒙古漢軍在京者人數衆多就近考  
試原無碍於操演至各省駐防官弁子弟為數無  
幾科歲考時不必來京就近在外應試不但事有  
難行且必至競尚虛名荒廢騎射殊失設立駐防  
之本意背謬已極金珩身為叅領乃煌煌  
聖諭豈竟毫無見聞而復混行讀奏著嚴行申飭並將  
此旨宣諭中外臣工嗣後不得以此謬論再行妄  
竇欽此

913 乾隆三年七月十四日內閣奉

上諭從前八旗事務原設有查旗叅領侍衛等官後俱裁汰每旗惟留御史二員查察是一切旗務皆應綜覈非徒註銷文冊考訂已未完事件已也前經吏部議覆給事中德山條奏八旗案件有未妥協以及錯繆遲延等事該查旗御史不行叅奏別經發覺者將該御史分別議處朕已降旨先行乃數月以來八旗都統副都統等因辦理事務舛錯處分者徃徃有之何以查旗御史並未見一體議處著都察院查明具奏至於內務府向有專設之御史亦經裁汰現在無查察之員著令御史恩特和穆沈瑜稽察照八旗之例不必逐年更換將來頂補伊二人員缺者即著辦理稽察內務府之事

欽此

914 乾隆三年七月十四日奉

旨趙弘恩身為正卿受恩深重乃以納賄敗露殊為大臣之玷情罪可惡照議革職著自備資斧前往

臺站効力凡屬臣工當各自儆省以趙弘恩為戒餘依議欽此

915 同日奉

旨于枋著銷去加二級抵降二級仍降一級調用餘依議欽此

916 乾隆三年七月十五日內閣奉

上諭史貽直著調補工部尚書高其倬著調補戶部尚書欽此

917 乾隆三年七月十六日內閣奉

上諭向來滿漢虧空錢糧分別侵那情罪及虧空多寡之數擬定罪名勒限追賠如果無力完帑者該管官具結保題豁免仍照原擬治罪滿漢原屬一體辦理後因清查八旗虧空曾經部議將無力完帑者於原擬之外加重治罪乾隆二年該部奏請朕因其罪屬重科特行改定仍照舊例辦理惟有豁免之後有查出隱匿者旗人則分別侵那定罪

而漢人則一概從杖一百之本律不但滿漢輕重不同且侵那亦無分別尚屬未協著該部再行妥議具奏欽此

918 同日內閣奉

上諭大學士嵇曾筠奏請將撫標中軍參將李壽演署理嘉協副將查嘉協副將員缺朕已降旨將倪鴻範補授俟浙江丹有副將缺出大學士嵇曾筠將李壽演送部引見請旨欽此

919 乾隆三年七月十七日內閣奉

上諭大學士查即阿在外年久著回內閣辦事川陝總督員缺著廣東總督鄂彌達調補廣東總督員缺著都察院左都御史馬爾泰補授左都御史員缺著漕運總督查克丹補授漕運總督員缺著戶部侍郎托時補授鄂彌達俟馬爾泰到任後起程赴陝查即阿與馬爾泰會審案件清楚馬爾泰即赴廣東查即阿俟鄂彌達到任交代後起程來京欽此

920 乾隆三年七月十八日內閣奉

上諭九卿所保可任道府各員其在京者已令該部帶領引見其在外省者若俟奉差來京恐一時罕值其便著行文該督撫酌量本地情形應於何時來京即咨送吏部帶領引見欽此

921 乾隆三年七月十九日內閣奉

上諭前因徐士林奏稱侍母湯藥安莖父樞不能即赴署事之任朕降旨令許容兼管蘓州布政使印務今據江南總督那蘇圖奏稱許容署理撫篆應委員接署司事查按察使戴永椿事務殷繁難以兼顧蘓松糧道姚孔鈞押運未回今酌量派委驛鹽道孔傳煥前往蘓州暫行署理等語朕思許容現署撫篆任重事繁著照該督所請令孔傳煥暫署布政使印務欽此

922 乾隆三年七月十九日奉

旨周廷燮奏請蠲除米稅以裕民食朕御極以來加惠民生免賦蠲租不下萬計算米糧之稅於國課所增幾何何難槩為蠲除以廣恩澤但為民生計有必須詳加籌畫者蓋各省豐歉不一偶遇歉收之省除賑卹平糶撫綏安頓外又特免闕推米稅俾客商圖利爭趨雲集轉運流通此昔日

皇考屢行之善政近歲朕踵而行之具有成效是蠲免未稅實亦揀荒之一策也若平時概令蠲除則各省地方豐歉盈虛均屬一例富商大賈趨利若鶩歎收之處與豐收之處毫無分別國家又何以操鼓舞之權而使商賈踴躍從事於無米之地哉惟是各省情形或朕一時未及周知該督撫等當仰體朕軫念民瘼之意遇地歎收有藉外省接濟者即行奏聞免收米稅如情形孔亟奏請需時者即一面奏聞一面傳其輸稅將此永著為例欽此

923 乾隆三年七月二十一日奉

旨戶部左侍郎員缺著內閣學士喀爾吉善補授欽此

924 乾隆三年七月二十二日內閣奉

上諭據總督李衛奏稱直隸放水地方已分別輕重賑恤安插盡心經理惟滄州漫口二處淹沒為多若不速行堵禦則秋田既傷明春麥文失望此處堤工原屬天津同知楊灝所管伊尚諳練河務近因轄屬太遠將滄州南皮二處運河分歸新設之通判陳韶兼理該員未志河務而楊灝遂乘機推卸於知州陸福宜通判陳韶至今尚未議動何項銀兩辦料興工臣一面飛調楊灝回工協辦一面飛咨河臣早為定議搶築完固其餘各處漫溢民埵小處已多堵築尚有工程稍大者可否量給口糧銀兩助其工作等語滄州漫口二處田廬受傷此時堵築興修不容刻緩乃該管河員等互相推卸以致遲悞工程甚屬不合著總督李衛河臣朱



藻顧琮查明分別題奏交部議處至民墾工程雖舊例係民間自行修補朕念兩年以來地方疊經水患民力艱難其工程稍大之處著該督等委員確查賞給銀米即寓興工代賑之意俾窮民力作餬口而殘缺堤埝亦得速行告竣該部可即傳諭該督等知之欽此

925 乾隆三年七月二十二日內閣奉

上諭今年

夕月壇舊例係遣官之年但朕即吉之後一切祭祀典禮初次舉行朕皆欲躬親以展誠敬八月初十日

夕月壇朕親詣行禮欽此

926 乾隆三年七月二十二日大學士伯臣鄂爾泰等帶領考試漢軍世家子弟甘運籌等十三人

引

見奉

旨即炳王洸張永焄祖尚書卽九齡王濤著卽在各

部院筆帖式上學習行走俟有缺出補用甘運籌甘士鑑祖尚賓卽士璉范時紀尚玉豐王濤著候筆帖式缺補用欽此

927 乾隆三年七月二十三日內閣奉

上諭署河東鹽運使大理寺少卿高山著回本衙門辦事河東鹽運使員缺著儲龍光補授欽此

928 乾隆三年七月二十四日內閣奉

上諭山東兗州總兵官員缺著高鈺調補四川北總兵官員缺著周一德補授欽此

929 同日內閣奉

上諭朕前降旨令各省副將將未經引見者輪流來京引見並令該督撫提鎮將伊等操守辦事及操練營伍如何之處于本人來京時具摺奏聞但所奏之摺與引見之員往往不能一時同到難于稽查嗣後于具摺之外將該員送部時卽將所出

看語叙于咨部文內兵部于引見之日注於該員名下以便觀覽欽此

930 乾隆三年七月二十五日奉

旨理藩院郎中蘓章阿著記名以御史用欽此

931 乾隆三年七月二十七日內閣奉

上諭江南地方今年五月雨澤短少六月雖經得雨未能霑足朕心甚為憂慮已屢降諭旨令該督撫預為籌畫悉心經理今思冬月即徵收漕糧之期田畝既苦歉收則官糧難以輸納著該督撫出示暫停徵收將是否成災及成災分數逐一確查其成災者自應照例題請豁免即不成災之處收成既薄需米孔殷亦應照雍正十二年之例每米一石折銀一兩徵收計算此時米價在小民辦納已省一半之費而地方多苗米谷於民食又大有裨益該部可即速行文諭江南總督知之欽此

932 乾隆三年七月二十九日內閣奉

上諭朕於八月十九日親詣

奉陵行禮當此禾苗在地之時嚮導官員平治營盤基址不必太早可於起行之先數日前往所有駐蹕之地不過略加收拾止令潔淨毋庸過為修整其有妨民地田禾之處前已降旨賞給價值即著該督李衛委員確估會同嚮導統領照數給發其所需銀兩在內庫支領不必動地方錢糧欽此

933 乾隆三年七月三十日奉

旨中書方觀承著授為兵部額外主事與現任主事一體較俸陞轉欽此

934 乾隆三年八月初一日奉

旨副將楊永著兵部帶領引見欽此

935 乾隆三年八月初二日內閣奉

上諭朕聞陝省所屬郡縣今年六七月間有缺雨之處地方有司現在祈禱未審何時得霽甘霖朕心深為廑念該督撫可預為籌畫悉心經理其應行緩徵之州縣一面出示緩徵一面奏聞向來陝省米糧不足往往取資於豫省著兩省督撫就近商酌將如何轉運接濟以為先事之備即行妥議具奏該部可即行文陝豫二省督撫知之欽此

936 乾隆三年八月初三日奉

上諭朕此次恭謁

泰陵著平郡王大學士鄂爾泰張廷玉在京總理諸務

欽此

937 同日內閣奉

上諭我

皇考廟念舊特立賢良祠於京師俾我朝宣勞輔治完名全節之王大臣永享禋祀垂譽無窮實自古未有之曠典也賢良大臣之子孫已登仕籍者固

多其中或有不能自振漸就零落之人亦屬可憫朕仰體

皇考厚待耆舊之盛心特加恩一次除現在入祠諸臣之子孫有文官七品以上武官五品以上者已經錄用無庸查奏外如子孫並無仕官或有品級而甚屬卑微者著該部行文各府都統及直省督撫查係嫡裔擇其品行材質可以造就者給咨送部帶領引見候朕酌量加恩欽此

938 乾隆三年八月初四日內閣奉

上諭江南下江地方五六月間雨澤短少及至得雨

已在立秋之後且淮安所屬蝗蝻為害田禾亦不免被傷朕心憂慮已屢降諭旨令該督撫悉心區畫預籌民食並將額徵漕糧暫停徵收查明是否成災或應蠲免或改折色分別辦理今思江南戶口繁庶需米甚多此番被旱歉收之處似廣閩閩必至艱難著該督撫查明成災地畝將應徵漕糧照條銀之例按其分數悉予蠲免其被災分數之外仍有應徵漕米著緩至次年麥熟後改徵折色

如此則各屬多留米穀而民力無事輸將於地方自有裨益至於查賑之方在於無遺無濫所有極貧之戶口應於冬初先行賑濟其次則俟寒冬又次則待明春青黃不接之候總在該督撫以實心實政督率有司視百姓之飢寒如己身之疾苦多方計議彈力圖維俾乏食之衆盡得安全不至流移失所此則封疆大臣之責無容旁貸者倘經理不善將來責有攸歸聞上江亦有缺雨歉收之處可酌量照此辦理該部遵諭速行欽此

939 乾隆三年八月初四日內閣奉

上諭聞淮徐道呂維鈞病故其所遺員缺甚屬緊要署淮安府白嵒熟諳河務即著白嵒就近署理淮徐道至淮安府知府員缺亦屬緊要著那蘇圖許容高斌會同揀送賢員題補欽此

940 同日內閣奉

上諭御史王峻參奏彭維新一案經九卿兩議上請朕交與大學士等議今議稱彭維新身在制中聞

命之後違制到任應照後議革職等語彭維新朕素不知其人御極之初曾有言其人才可用者朕因伊係

皇考舊臣所犯罪案尚有可原之情與涂天相張楷俞兆晟等俱加錄用未幾伊即以親喪回籍近因左都御史員缺朕以彭維新服制已滿例應起復原官是以降旨補授亦未有在朕前薦揚之者今經御史參奏大臣等議以革職乃屬循照常例但當時大臣官員在任守制者頗有之即如彭維新此等情節者亦不止伊一人可將大學士九卿等所議原摺暫行存貯至彭維新之為人朕究未深知其從前丁憂後到任之處朕更無從得聞仍著來京候朕召見再降諭旨欽此

941 乾隆三年八月初五日內閣奉

上諭御史穠魯奏稱八旗生<sup>計</sup>艱難請每旗各設一庫每庫用銀五十萬兩借與本旗官員以及包衣兵丁每月每兩令出利銀二分計年終之時每庫可得利銀十二萬兩以五萬兩歸還庫帑餘銀七萬

兩散與本旗兵丁十年以後帑銀歸完即將此項銀兩永作八旗公庫等語朕御極之初加恩借給旗人庫銀本期有益生計乃適年以來細加體察知伊等所領銀兩隨手花費而每月扣除額餉於生計轉覺艱難是以降旨豁免未完之項停止再借所降諭旨至為明晰而稽魯有此奏是誠何心且資本必須營運方能獲利旗人辦事當差日不暇給何術而能坐獲二分之厚息乎原不過隨手花銷而按季按月交納利銀將受永遠無窮之剝削是非欲以厚其生計而轉以蝕其脂膏此乃豪富盤剝小民之計而稽魯反以為養贍資生之良策悖謬極矣又奏稱八旗生齒日繁與其多設養育之方無如廣開登進之路允近京省城府道州縣副叅遊守等官俱宜叅用滿洲京營遊守千把俱以滿洲補用滿洲之人農工商賈俱非所習除居官當兵外別無資身之策等語國家分職授官量材器使必其人之克勝厥任方可擢授年來滿洲中堪任外官者朕未嘗不量行擢補然不可定為成例蓋八旗官員文則六部院寺武則都統叅

佐員缺甚多材畧儘可施展遵循舊例為官擇人尚恐人才不足何必更開外用之一途且其意以登進之路為養育之方尤不可訓文武員弁原藉以分猷宣力為國為民今日資身無策優以官爵將居官者唯利是圖安望其潔己奉公實心任事乎况員缺有限而生齒日繁以此為養贍之法豈非妄亂之甚乎又奏請鑄當十錢每錢一文重四錢當小錢之十現今制錢之五大錢四十文得銅一觔則錢價浮于銅價盜銷之弊可不屏自除并請復設錢行經紀等語錢法一事屢經條奏定議自當漸次清楚若改鑄大錢銅質輕而獲利厚盜鑄之源自此而開奸民私熾制錢改鑄大錢盜銷之弊自此益熾于錢法有益乎無害乎至經紀盡從經御史條奏革除稽魯又請招募此招募之人能必其即愈于所革之人乎彼所奏三摺持論悖謬妄欲變亂成法今畧撮其大要宣示於眾稽魯著交部嚴加議處欽此

942 乾隆三年八月初六日奉

旨太常寺樂舞生等俱係供應祭祀之人伊等所得  
米石雖足食用但每月支領錢糧銀僅三錢九厘  
不敷應用今特加惠每月每人給與錢糧銀六錢  
欽此

943 乾隆三年八月初七日內閣奉

上諭川省遠在西陲道路之難申於天下其中棧道  
偏橋更為險隘每年資藉民力隨時修補未能一  
勞永逸行旅跋涉艱辛深可軫念著四川巡撫碩  
色會同西安巡撫張楷委員確勘將應行修理之  
處分別南棧北棧兩省分任修理即動用該省存  
公銀兩以為工費將來工竣之後交與地方官不  
時稽查如遇暴雨大水冲塌過多之時仍准詳報  
酌動公項修整俾永遠堅固以便行人欽此

944 乾隆三年八月初八日內閣奉

上諭鄂彌和德滕混領俸一粟戶部司官顯有情弊

及至吏部議處之時行文咨查戶部戶部堂官猶  
據司官狡飾之詞曲為袒護甚屬不合著將戶部  
堂官交部嚴加議處欽此

945 同日內閣奉

上諭各省緩徵錢糧例于下年帶徵以完國課朕思  
年穀荒歉有分數多寡不同若本年被災尚輕次  
年幸值豐反則完納帶徵之項尚不至于竭力若  
本年被災較重則民間元氣已虧次年即遇豐收  
小民既完本年應輸錢糧又欲完從前帶徵之項  
力量豈能賸餘必至竭蹶從事朕念切養民閭閻  
生計日籌于懷今思慮及此其如何酌量變通著  
為定例惠濟斯民之處九卿定議具奏欽此

946 乾隆三年八月初八日內閣奉

上諭本月十九日朕奉

皇太后恭詣

泰陵祭奠內外大臣等屢以禾苗在地奏請停止前往  
朕再四思維今年乃

皇考三週忌辰與常年不同若不親行瞻拜之禮心實

不安當亦為臣民之所共諒至於駐宿之地有碍  
民間禾稼者已諭令嚮導官會同地方官詳勘照  
數給與價值其設立營盤之處畧加平治不必過  
於修整沿途隨從人等若有踐踏田禾者著該管  
大臣派員稽查禁約應拿究者即行拿究應題奏  
者即行題奏該督亦派地方官一體查察毋得瞻  
徇此次內廷隨侍之人朕已極力簡省其陪祭扈  
從之大臣官員除欽點外所有宗人府八旗及各  
部院衙門照例派出三分之一人員俱不必前往  
可即傳諭各該處知之欽此

947 同日內閣奉

上諭署禮部侍郎楊永斌已經到京工部侍郎王紘  
不必兼管禮部欽此

948 乾隆三年八月初九日大學士九卿面奉

上諭今日雅爾哈善奏御史邱玖華條奏九卿各  
部及督撫等議事不公一摺之外臣聞外人傳說  
邱玖華另有一摺請將賢良祠大臣之子孫錄用  
現交大學士密議尚未覆奏而邱玖華輒向人傳  
說且邱玖華乃屬宗萬之門生又在伊家居任屬  
宗萬之祖係入賢良祠者故教邱玖華上請以冀  
復用又恐止此一事或啟形迹之疑故以議事不  
公等項漫無實據之套語將內外大臣籠統參論  
以形其剛直不私之概而以此摺並進名為條陳  
公事實欲起用屬宗萬等語朕思加恩賢良祠子  
孫者不過因其家現無出仕之人或給以虛銜或  
予以微秩亦視其人才尚可錄用然後酌量加恩  
以示優禮耆舊之意豈有身為侍郎之人緣事獲  
罪因其父祖在賢良祠而即可復用之理屬宗萬  
雖至愚亦計不出此至於奏泰九卿議事不公一  
摺實切中時弊近日九卿辦事每多瞻顧廢弛如  
伊摺中所奏情節諸臣見之各當深自漸愆倍加

做省若更遽怒於建言之人則全不知愧耻者矣  
朕思雅爾哈善向在辦理軍機處行走明係伊探  
聽邱玖華摺奏賢良祠之事而又坐邱玖華以自  
行宣洩之名以博九卿之歡心不然必九卿中有  
一二不端之人欲中傷邱玖華而示意於雅爾哈  
善令其叅奏不然縱邱玖華自行宣洩彼係跡遠  
新進之臣何以恚知交大學士密議尚未覆奏耶  
此風漸不可長所當究問明晰以示儆戒如邱玖  
華條奏果有情弊或自行宣洩則自有應得之處  
分乃雅爾哈善巧詐居心希圖陷害邱玖華以取  
悅衆人其情實屬欺罔其罪更重雅爾哈善著解  
任此事著莊親王平郡王大學士九卿詹事科道  
秉公詳確嚴察議奏欽此

949 乾隆三年八月十一日奉

旨八旗喂養馬駝黑豆在所必需今戶部因倉貯豆  
少請每月減半支放朕念兵丁等若自行添買不  
無多費且在京收買恐市價益昂今年山東河南  
兩省成尚好應於山東採買五萬石河南採買三

萬石共八萬石足敷支放之用著該部行文東豫  
二省巡撫酌量地方情形動支正項錢糧分令各  
州縣採買嚴禁短價病民及胥役侵蝕等弊務須  
于河凍之前委員運送抵通勿致有誤臘月以後  
支放之用其豆價並腳價等項仍造冊報部核銷  
至東省本年應徵黑豆十一萬石又帶徵乾隆二  
年緩征黑豆五萬三千餘石今又採買五萬石雖  
該省原係產豆之地但恐官收既多則民間交納  
或不能如期全完可將帶徵之五萬三千餘石於  
本年徵收一半於乾隆己未年徵收一半以紓民  
力該部即遵諭行欽此

950 乾隆三年八月十二日內閣奉

上諭今歲江南武闡例應下江巡撫主試但蘓松數  
郡尤早歛收十月間正需籌畫賑恤撫綏諸務許  
容駐劄蘓州便於就料理武闡著總督那蘓圖考  
試後不為例欽此



951 乾隆三年八月十四日內閣奉

上諭據倉場侍郎塞爾赫等奏稱江南興武江淮金山太倉鎮海十二帮在通漕之中最為貧乏本年挽運北上中途又多繁費今旗丁紛紛呈訴無力回南者約船二百餘隻據實奏聞可否量措通濟庫輕齎銀兩以資回空之費等語今年因疏濬運河開兌較遲一月及至渡黃又因滑口淤阻以致途次濡遲弁丁等星夜償行較平時多費工力朕心軫念著漕運總督確查明白將其中努力急公之運弁運丁等量加恩賞以獎其勞至江南興武等十二帮計船二百餘隻按丁每名借給銀十六兩俾路費有資得以早回水次該部即遵諭行欽此

952 乾隆三年八月十七日奉

旨孫嘉淦現在貢院考試刑部無辦事尚書尹繼善此次不必隨去欽此

953 乾隆三年八月十八日莊親王平郡王大學士

九卿詹事科道面奉

上諭朕覽王大臣等所議雅爾哈善恭奏邱玖華一摺全未盡心據雅爾哈善原奏內稱御史邱玖華奏九卿各部及督撫等議事不公一摺奉旨交議越數日臣聞外人傳論云邱玖華是日另有一摺請將賢良祠大臣之子孫錄用交大學士密議尚未覆奏而邱玖華輒向人傳說等語此數語究係出自何人之口並未究詢明白似此緊要之語不行究詢不知爾等所審者何在又雅爾哈善在爾等前供稱陳履平向我說邱玖華另有請用賢良祠大臣之子孫一摺本意專為起用勵宗萬我問此事大約是揣摩之言勵宗萬做過大臣如何因此便得復用陳履平云此事紛紛傳為笑談如何是揣摩之言等語勵宗萬身為侍郎豈為因賢良大臣之子孫便可復官之理此朕前日所降之旨而雅爾哈善捏稱為與陳履平問答之詞藉為支吾之計詐偽顯然若從前果有此語則其心已疑而不信矣既疑而不信安得有此恭奏之舉以此

詰問伊斷無辯處爾等並不置問何也王大臣等皆屢經審詢重大案件之人豈竟見不及此耶雅爾哈善種種應行詰問之處俱含糊了結而一將傳說浮話之陳履平與雅爾哈善一體議以革職明係見朕嚴飭雅爾哈善欲治其罪而爾等遂遷怒於陳履平也且雅爾哈善雖革文官尚有武職陳履平一經革職便屬齊民輕重失倫莫此為甚王大臣等如此辦事殊非朕委任之意姑念此案尚非必應徹底窮究之事特降旨曉諭俾各警省雅爾哈善<sup>著</sup>革職并將佐領革去陳履平著交部議處欽此

954 乾隆三年八月十八日奉

旨議處查旗御史一乘兵部都察院互相摺奏朕思議處都統等官乃兵部之事查旗御史既經定例一體處分雖兵部未便議處文員亦應行文知會吏部乃止將武職查議並未將應行查議之御史行文知會又具摺置辯以為都察院希圖卸責殊屬不合著將兵部堂司官交部嚴察議奏都察院

於定例以後議處八旗各案該御史應否察議之處已經逐案核明即應奏請察議又復請交兵部細查各案補行咨部議處亦屬不合都察院堂官著交部察議具奏餘依議欽此

955 乾隆三年八月二十四日內閣奉

上諭朕聞從前直隸正定府城河水深之時原有魚蘆之利河岸淺灘蘆可種稻每年額編租銀六百兩後因漳沔河水漲流沙淤漫漸致缺額俱係府屬三十州縣公捐起解雍正五年間雖經營治稻田合計新舊田畝之數僅得六頃九十餘畝而舊地亦不過二頃一十餘畝每歲所租銀祇有二百八十餘兩較之原額尚不敷三百一十餘兩其雍正十二年以前舊欠已經豁免今特加恩自雍正十三年以後不敷銀兩概行豁免嗣後每年只照二百八十餘兩之額徵收以紓官民派墊之累著該部行文直隸總督即遵諭行欽此

956 同日內閣奉

上諭朕此次回鑾奉

皇太后在南苑駐驛數日隨駕漢大臣等俱著回京辦事不必隨往內閣本章照例每日進呈各部院有應奏事件著照常具奏欽此

957 乾隆三年八月二十五日奉

上諭今年直隸各州縣收成豐歉不一米價未免稍昂而奉天山東二處年歲俱獲豐收從來隣近省分必須商賈相通以豐濟歉則需穀者既得以餉口而糶販者又藉以營生殊屬兩便之道但奉天山東俱屬海濱地方官吏因向有禁米出洋之例未肯任從民便用是特頒諭旨奉天山東沿海地方商賈有願從內洋販米至直隸糶賣者文武大員毋得禁止但商賈未船放行之時該地方官給與印票仍行文知照直隸總督其沿途巡海官井亦時加查驗毋令私出外洋米船既抵天津卸米之後直隸地方官給與回照仍行文知照奉天山

東西省俾米穀流通以副朕軫恤民瘼一視同仁之意該部即行文奉天將軍府尹山東巡撫知之

欽此

958 乾隆三年八月二十八日奉

上諭據安徽巡撫孫國璽奏稱安省地方今歲夏秋

亢旱得雨後期補種秋糧不能暢達除望江等十八州縣衛已報災傷外續據報到鳳陽壽州舒城無為青陽當塗繁昌貴池南陵霍邱虹縣涇縣銅陵桐城太平臨淮巢縣廬江霍山含山合肥懷遠東流太湖英山等二十五州縣鳳陽鳳中泗州廬州建陽等五衛計共四十八處咸皆被旱輕重不等語孫國璽現在監臨入關向例凡有題奏事件俱行停止今安省各處被旱災黎急需賑救豈容稍緩時日該部可即行文該撫令其速委幹員分路確勘并飛飭各州縣衛分別賑恤及開倉平糶採運米穀接濟之處務須亟為妥協辦理俾災民早沾實惠不致流離失所其被災稍重之地有應蠲及應行停徵者著遵前諭與下江一體辦理

以副朕軫念民瘼之至意欽此

959 乾隆三年九月初二日內閣奉

上諭聞福建學政周學健通曉三禮現在修書需人  
周學健任內科歲考事已竣著將印務照例交與  
巡撫盧焯暫行管理周學健即起身來京修書不  
必候新任學政交代稽遲時日欽此

960 乾隆三年九月初三日奉

上諭廣東右翼總兵員缺現係副將馬成林署理馬  
成林係陸路出身之員不宜此任著雲總兵何勉  
調補何勉所遺之缺即以馬成林補授陝西肅州  
總兵缺甚為緊要看来韓良卿人去得著調補此  
任所遺之缺著福建福寧鎮總兵馬驥調補其所  
遺之缺著原肅州總兵沈力學調補欽此

961 乾隆三年九月初四日內閣奉

上諭天津地方居九河下游今年河淀諸水稍大雨  
水較多田禾被淹比他處為重目今現在查賑聞

有司奉行不善所查者多係有地之家而無業窮  
民轉至嗷嗷待哺以朕所聞如此著總督李衛留  
心確查嚴飭地方官妥協辦理務令被水之戶口  
及無業之貧民均霑恩澤不致失所欽此

962 同日內閣兵部奉

上諭河北總兵官高攀桂年已衰老近復抱病著以  
原品休致河北總兵官員缺著栢之蕃補授栢之  
蕃所署之涼州提兵官印務著大學士查即阿於  
所屬副將內揀選賢員署理欽此

963 乾隆三年九月初六日內閣奉

上諭今年江南地方雨澤愆期田禾被旱朕已多方  
籌畫諭旨屢頒諒皆撫自仰體朕心竭力經理今  
朕聞得下江地方几屬高阜之處受傷實多而平  
土依窪之區收成尚好朕思此等有收之田畝在  
未經得雨以前小民併力車戽工本倍於往日勞  
費加於平時亦當酌量加息以示撫恤用是再頒  
諭旨除被災州縣衛本年漕糧查照分數蠲免俾

徵外其成熟地畝亦著分別折徵蘇州府屬三處折徵十分之三江常鎮淮揚通海七府州屬四十三處折徵十分之五如此則辛苦有收之民亦遠國家格外恩澤而該省又可多存米糧以濟閭閻之匱乏於歉年大有裨益該部可遵諭速行欽此

964 乾隆三年九月初八日內閣奉

上諭今年春月因直隸米價昂貴朕特頒諭旨將臨清天津二關及通州張灣馬頭等處米稅寬免徵收商賈聞風踴躍往來販運民食無缺已有成效嗣因二麥有收經管理天津關準奏報部請示行查隨經督臣李衛覆奏照例開徵在案近因沿河地方被水較重附京一帶米價加昂現在又開海運商販必多仍應免輸稅銀以示鼓舞著將內河前項米糧各稅一并暫停徵收俾商賈爭趨雲集於畿輔民食自有裨益著該部即速行文督臣等知之欽此

965 乾隆三年九月初十日奉

旨內閣八月分註銷摺內刑部未完事件有鑲紅旗叅奏叅領博岱等查送馬爾泰等入辛者庫之案隱匿獲罪緣由一案據刑部咨稱現候揆次彙題等語此案係本年二月交辦之事即揆次具題亦何至遲延半年有餘著刑部明白回奏又宗人府未完事件內有貝勒允禩叅奏貝勒斐蘇鞭責包衣拜唐阿致死一案據宗人府咨稱現行查審理尚未完結等語此案有何應行查審之處以致遲延著宗人府明白回奏欽此

966 乾隆三年九月十一日內閣奉

旨李如栢到京著兵部帶領引見欽此

967 同日內閣奉

上諭向例漕運進京俱派御史前往山東江南巡視稽查今年十一月山東挑濬運河必須過完回空糧艘方可興工著都察院堂官即將派往濟寧查

漕之御史先行帶領引見即令前往山東督押回空尾幫南下一俟尾幫出山東境後即駐劄濟寧協同河道提督白鍾山料理築壩挑河事務欽此

968 同日內閣奉

上諭雲南解京錢文原限八月抵京前聞已至江寧何以在途遲延尚未解到現今京師錢價昂貴民用不使此項錢文解到以之搭放兵餉錢價必至平減著沿途督撫照催趨漕船之例委員嚴行督催速解來京毋得遲滯該部遵諭速行欽此

969 乾隆三年九月十二日內閣奉

上諭原任大學士白潢向在巡撫任內有清廉之名告休以後緣事革職今聞病故著給還大學士職銜以示優待舊臣之意欽此

970 同日內閣奉

上諭廣東庶吉士劉起振年屆九十遠來京師著授

為翰林檢討准其回籍仍著大學士張廷玉帶領引見欽此

971 同日兵部奉

上諭山東兗州鎮提兵高鈺未到任之前其印務著馬世勳暫行署理欽此

972 同日內閣奉

上諭今年山西全省地方二麥豐收秋禾亦稔惟永濟保德二州及河曲一縣麥秋稍覺歉薄今西成之後民力漸舒但查此三州縣有上年停徵之錢糧應於今冬完納者朕念一季之中新舊兼輸閭閻必至竭蹶著將停徵之項緩至明年春夏二季帶徵完納以示朕格外加息之至意欽此

973 乾隆三年九月十四日內閣奉

上諭每年十月京師五城設廠煮粥以濟貧民今歲米價昂貴恐小民乏食者多著照常年設廠早半月之期於九月半後舉行該衙門即速辦理欽此

974 同日内閣奉

上諭舊例禁止燒鍋原為儲蓄米糧以裕民食之計而遇歉收之歲尤當加意奉行今年畿輔地方收成歉薄民食未免艱難而燒鍋不減酒販甚多是必有司奉行不力之故著總督李衛轉飭所屬嚴行查禁毋得視為具文該部即傳諭李衛知之欽此

975 同日内閣奉

上諭畿輔地方今歲歉收米價昂貴朕深為厯念向來口外米穀不令進口留為彼地民食之需今年口外收成頗豐而內地不足所當酌量變通以資接濟如有出口糴糧及販運進口者聽其往來不必禁止管口官弁但行稽查運禁貨物毋得苛索如此則內地民人多得米穀可無艱食之虞而口外餘糧亦獲貿易之利該部可遵諭速行欽此

976 乾隆三年九月十四日内閣奉

上諭漕糧關係天庾不特重運宜速即回空船隻亦必依限抵次方免凍阻之虞今歲河道淤阻途次稍艱旗丁無力回南者朕已加恩賞借銀兩並令漕運總督查明分別賞恤在案頃聞回空之際竟有將船隻棄置河干而本身先回者亦有舵工水手俱無棹蓬俱缺者亦有家口在船而旗丁已去者以致沿河兵役人等代為推輓甚覺苦累查係江南興武衛三幫七幫江淮衛頭幫大河衛三幫之糧艘朕思此等棄船旗丁若因運費不敷力量艱窘該管大臣自應代為籌畫酌量接濟俾其回南有資不致困頓若係無故潛逃藐視法紀者自當按律懲懲何得朦混姑容以長刁玩著倉場總督漕運總督秉公確查分別速行辦理欽此

977 乾隆三年九月十四日内閣奉

上諭戶部事務繁多訥親仍著協辦伊既兼辦兩部之事不必管理內務府趙國麟到京任事之後孫

嘉澮仍著協辦刑部尚書事欽此

同日內閣奉

上諭大學士嵇曾筠在浙年久今海塘工程已漸次就緒著入閩辦事且永定河工關係緊要嵇曾筠熟練河務到京之後往來河干指示機宜於河道自有裨益至伊辦理海塘數年經畫得宜著有成效著交部議叙浙江原俸應差巡撫省分今仍循照舊制改歸閩浙總督管轄都玉麟著改給閩浙總督勅書閩防浙江巡撫員缺著福建巡撫盧焯調補兼管鹽政福建巡撫員缺著福建布政使王士任署理福建布政使員缺著喬學尹前往署理都玉麟既兼管兩省事務繁多其所管閩務著將軍隆昇管理欽此

979 乾隆三年九月十五日內閣奉

上諭據倉場提督塞爾赫等奏稱本年六月十八日有金衢所運丁池斯達漕船在臨清州地方因連日大雨水勢汹涌把總哈倌催促前進以致撞石

沉溺失正耗米七百十二石帶運臨清磚三十塊淹斃副丁水手等五名查裡河漂流者無豁免之例但此次實因水大溜急片板米粒無存運丁以船為家今家破人殞力難賠補理合奏聞等語漕運船隻在裡河漂流者雖有不准豁免之例但念池斯達船糧適值連雨之時水大溜急人力難施把總又復催促前進以致失事魚傷人口情實可憫著將漕米船隻並免賠補其淹斃副丁水手照例賑恤欽此

980 乾隆三年九月十六日奉

上旨親孫嘉澮差往天津查審直隸總督李衛奏奏朱藩一案著攜帶欽差大臣閩防馳驛前往其帶往司員等亦照例給與驛馬欽此

981 同日奉

上諭據廣東高雷廉羅總兵官任懷德奏請給假回籍葬親著照所請回籍葬親給假六個月總兵印務著該督暫委員署理高雷廉羅係最要缺首來



任懷德人地不甚相宜這員缺著陝西興漢提兵  
官王邦寧調補其陝西興總兵員缺即著任懷德  
調補王邦寧現駐防赤靖侯王邦寧替回任懷德  
假滿之時再各赴新任欽此

982 同日內閣奉

上諭刑部尚書尹繼善因伊父患病在家侍奉湯藥  
未能到部辦事孫嘉淦又差往天津審理案件伊  
審事未回之際刑部事務著大學士徐本暫行管  
理欽此

983 乾隆三年九月十七日辦理軍機大臣奉

上諭今年畿輔地方收成有歉薄之處而口外年穀  
順成頗稱豐稔昨已降旨准商人出口往來販運  
以資接濟今思京城米價現在不能平減來春青  
黃不接之時恐益加騰貴著派出戶部司官赫赫  
那爾善內務府官員王常保王慎德於張家口古  
北口二處每處各二員攜帶內庫帑銀前往會同  
地方官將米豆雜糧等項照時價採買運送來京

交八旗米局平糶使都門兵民得資外來之米以  
供糶食而口外有餘之糧亦不致耗費于燒鍋等  
項無用之地實屬兩有裨益其應賣銀兩若干并  
作何挽運之法著該部速行詳悉妥議具奏欽此

984 乾隆三年九月十八日內閣奉

上諭奉天所屬旂民交涉案件查向例由地方旂民  
官畧具案情申送刑部審擬但奉屬地方遠近不  
一應質人犯多屬牽連該部提解駁查往返道路  
稽延時日拖累無辜弊端種種夫地方官身既親  
民駐劄本境平日習知人情臨時自易體訪若令  
會同就近旂民官承審定擬止將有罪人犯解部  
覆訊定案其於一切牽連對質之人於審明之日  
即行省釋則人犯既免拖累而案件亦得速結但  
府州縣遠近不一其地方旂民官如何會同審理  
可以定為成例永遠遵行之處著天將軍刑部侍  
郎府尹會同詳查定議具奏欽此

985 乾隆三年九月十九日內閣奉

上諭隋人鵬病故河南按察使負缺著江西益驛道沈起元補授欽此

986 乾隆三年九月二十日內閣奉

上諭大學士尹秦病故伊子尹繼善穿孝之際刑部尚書事務著來保暫行署理欽此

987 乾隆三年九月二十三日內閣奉

上諭今日編修彭樹葵奏進經史講義引用魏徵十思疏內之語以為人君之德在於慎思且衍十思之義為歲十首詞亦典雅尚近古人歲規之意與泛論經史者不同甚屬可嘉著賞內用緞二匹筆墨二種以示優獎欽此

988 乾隆三年九月二十六日內閣奉

上諭浙江海塘工程為杭嘉湖蘇松常鎮七郡民生之保障前因潮溜北徙冲刷堪虞朕即位之初特

簡大臣碑心區畫仰荷

神明默佑沙塗日廣急溜潛移工作易施塘根堅固朕心慰慶萬姓歡呼理應恭祭

海神以昭靈貺所有應行祀典禮儀該部定議具奏欽此

989 乾隆三年九月二十七日內閣奉

上諭據大學士查即阿甘肅巡撫元展成奏稱涼莊道阿炳安報丁毋憂所遺員缺甚為緊要查涼莊府理事同知奇書在廿年久精明諳練且于邊地情形素所熟悉前者推陞盛京員外郎經臣等保奏以陞銜留任今若署理涼莊道事務臣等留心試看果能稱職另行題請實授則該員益加奮勉於邊方實有裨益等語奇書著照查即阿等所請委署涼莊道印務再加留心試看如辦事果優再行題請實授欽此

990 同日內閣奉

上諭都察院議處考功司司官一本朕已照議降旨  
但一司之中降調多員恐更易之人一時未能熟  
練且所降各員內或有平日才具可用實心辦事  
者爾等可分別出具考語帶領引見候朕降旨酌  
留數員令其帶所降之級在任辦事以觀後效欽  
此

991 乾隆三年九月二十八日內閣奉

上諭山東河南二省今歲收成頗豐日今秋雨需濡  
麥又廣種可為慶幸所有各屬應補之倉穀自應  
乘時購買以為儲積之計但聞去年官倉出糶之  
價原屬平減以便民今年時價較從前糶賣稍覺  
昂貴以致有司採買補項逡巡觀望時日稽延著  
該撫酌量本地情形籌畫如何買補之法督率有  
司務令倉儲不缺官民無賠墊之苦斯為盡善至  
於小民識見短淺既遇有秋又獲善價必至爭相  
售賣以圖一時之利無所留餘又或婚喪嫁娶之

間衣食宴會之際不知檢束任意奢靡聖人食時  
用禮之訓無在不然尤當致謹於豐稔之歲著該  
撫率同地方官多方勸諭俾知年穀順成未可常  
恃儲蓄之道實為吾民養命之源人人樽節愛惜  
共勵儉勤留目前之有餘以補將來之不足則豐  
年有樂利之休而歉歲無艱食之患矣欽此

992 乾隆三年九月三十日內閣奉

上諭湖南長沙府知府員缺著馬金門補授欽此

993 乾隆三年十月初一日內閣奉

上諭朕聞陝省各屬今年俱屬有秋惟延安府屬之  
安定保定二縣榆林府屬之榆林綏德清澗米脂  
四州縣於七月間曾被冰雹有損禾稼雖被雹地  
方舊例有借無賑朕念邊地寒苦近年撤兵之後  
更宜加意休養著格外加恩將此六州縣照上年  
咸寧等處之例分別被災輕重發粟賑恤後不為

例諫督撫可督率有司實力奉行毋使奸胥土棍  
侵蝕中飽欽此

994 同日吏部奉

旨湖北襄鄖道員缺著湖南岳常道謝禮調補岳常  
道員缺著外轉之給事中倉德補授欽此

995 乾隆三年十月初二日內閣奉

上諭朕聞直隸保定河間兩府所屬地方夏月多被  
水淹深秋之後地雖涸出而積水仍未全消推求  
其故則州縣舊有渠淀因歷年久遠附近居民偷  
竊耕種漸有收獲恐被爭占遂報墾墾科有司率  
爾准行並不察其為舊渠舊淀及至耕種既久墾  
培漸高而水不下注矣又聞各處多有涸河每當  
有水之時由此宣洩無地水竟成廢地近河居民  
築埂築壩為蓄聚灌溉之用以致河道阻塞水不  
通流高阜有水歸於卑下而卑下之水無地注之  
此積水難消之由也朕所聞如此著總督李衛留

心體察轉飭各州縣將舊有之渠淀查明造報毋  
得隱匿若有已經墾科者免其賦稅至有涸河之  
處亦行確勘不得築埂築壩以阻河流之故道庶  
積潦不致為害而於地方實有裨益矣欽此

996 乾隆三年十月初二日內閣奉

上諭向令各省督撫保舉所屬教官者原為其文品  
兼優才能出眾是以加恩格外以優待之為督撫  
者當存慎重之心方不負國家甄別人材之典乃  
數年以來各督撫舉荐來京引見者未見有卓越  
之材猶幸所舉不多尚不致於太濫惟戶會一張  
楷二人到任未久而舉荐之員多於他省此不遇  
冀屬官之感激稱頌遂輕忽以從事也如此次張  
楷所舉之候執信乃由署知縣題請改補教職者  
則其人之才具可以舉見戶會一所舉之葉徵麟  
乃從下第舉人中揀選發往者若論俸次則應陞  
知縣之期尚在十數年之後張楷戶會一將此等  
人保荐冀邀逾格之恩甚屬不合著交部議處以

為活名市恩者戒侯執信葉徵麟著回原任不准  
帶領引見欽此

997 乾隆三年十月初三日內閣奉

上諭直隸地方上年歉收今秋又有被水之州縣朕  
心軫念已多方籌畫加意撫綏查雍正十三年乾  
隆元年二年分地方尚有未完之錢糧又有緩徵  
停徵之項此皆將來分年帶徵者朕思連年畿內  
薄收應格外加恩以資休養著將各屬未完及緩  
徵停徵之項悉行蠲免以示優恤欽此

998 同日內閣奉

上諭今年上下江雨澤愆期收成歉薄朕夙夜焦勞  
多方籌畫蠲賑施務閭閻不致失所而上江<sub>北</sub>方  
被災比下江又為較重查雍正十三年乾隆元年  
二年分安徽所屬有未完地糧蘆課及米穀麥豆  
等項例應將來分年帶徵者著該督撫出示一併  
豁免以除日後輸將之累乾隆二年江蘇所屬江  
常鎮淮揚徐海七府州屬有被水題明緩徵停徵

銀米等項亦著該督撫出示豁免以紓將來之民  
力昭朕軫念民艱逾格加恩之至意該部遵諭速  
行欽此

999 乾隆三年十月初四日辦理軍機大臣奉

上諭八旗弁兵等蒙

皇祖六十一年教養之恩不啻天高地厚我

皇考臨御十三年宵旰焦勞施恩沛澤為八旗人籌畫

生計者至周至渥朕即位以來仰體

皇祖

皇考聖心無時無刻不以贍養旗人為念凡有益於伊

等生計者悉已次第舉行即如近年之中借給餉

銀數百萬兩原議按月扣除未幾仍行豁免在國

帑所費已多而於旗人究未能永遠補益今再四

思維八旗生齒日見其繁若于每位領下各添兵

額則食糧者加增于原數而閒曠者自少似為養

贍旗人之本計除各王公屬下包衣外查八旗滿

洲蒙古現有十六歲以上壯丁七千六百餘名十

五歲以下幼丁一萬六千四百餘名漢軍壯丁現

有二萬五千一百餘名幼丁七千一百餘名又圓  
明園八旂壯丁現在五百餘幼丁一千餘名共計  
五萬七千九百餘名著將滿洲蒙古佐領共八百  
八十二個每佐領添食四兩之護軍一名領催一  
名食三兩之馬甲二名食二兩之養育兵十名圓  
明園八旂每旗添養育兵四十二名至於漢軍佐  
領共二百七十個半伊等入丁雖眾其中力能營  
運者尚多且佐雜千把皆可錄用與滿洲蒙古商  
今酌量每佐領添領催一名馬甲二名養育兵六  
通計加添護軍領催馬甲四千三百三十餘名養  
育兵一萬七千七百七十餘名每歲需銀四十三萬九  
千餘兩需米九萬六千三百餘石至于八旗佐領  
人數多少不一若照額加添或佐領人數不敷或  
有人丁而不願披甲者應于人多之佐領下挑補  
其如何辦理妥協之處著軍機大臣會同議政王  
大臣八旗大臣詳加妥議具奏此朕逾格加恩之  
舉旗人等當思國家之經費有常弁兵之額數有  
定將來生齒愈繁豈能更有增益朝廷曠典不可  
屢邀惟有謹身節用崇儉去奢以為仰事俯育之

道不至匱乏則朕之施恩為不虛而旗人亦永享  
安寧之福矣欽此

1000 乾隆三年十月初四日內閣奉

上諭雍正十二年十一月內

皇考以

太祖

太宗

世祖三朝實錄中人名地名字畫音句之屬有與

聖祖仁皇帝實錄未曾畫一者特命大臣等敬謹查對

酌改繕寫以昭示萬年朕即位之初諸臣正在辦

理因將恭加

列祖尊謚字樣增入書中惟

皇祖實錄未有重修之處是以恭加

尊謚未曾增入朕思

四朝實錄理當畫一

皇祖實錄內應將恭加

尊謚增入方與

列祖相符目今正值重繕

列祖寶錄之時教將恭加

皇祖尊謚增入

寶錄內每卷只須換寫前後兩幅亦理之可行者後世子孫不得援以為例著內閣將朕此旨謹記檔冊  
欽此

1001 乾隆三年十月初六日奉

上諭開列國子監祭酒各員於明日帶領引見欽此

1002 乾隆三年十月初七日內閣奉

上諭各營喂養馬匹惟恃馬乾銀兩查直隸河間通州一帶每馬一匹夏秋二季月支銀九錢冬春二季月支銀一兩二錢惟天津鎮標左右城守三營大沽等四營每馬一匹夏秋月支銀五錢冬春月支銀九錢較之別營為數減少蓋以天津地勢窪下水草茂盛便于牧放故酌減其價也但天津鎮標三營及大沽王慶坨二營地處水濱為九河下稍連年遭值水患田禾淹浸非平時可比目下兵

丁採買料草價值加昂深可軫念著將鎮標城守三營并大沽王慶坨二營實在差操馬兵三十四名冬春二季每月應支乾銀九錢外加賞銀三錢與河間通州二協之例相等俟明年夏季仍照舊例開支使兵丁等寒天牧馬不致拮据示朕體恤之意欽此

1003 同日內閣奉

上諭原任大學士戶泰於本月初九日發引先期一日著散秩大臣帶領侍衛十員往奠茶酒發引之日著內閣舊日察屬學士以下官員前往送殯欽此

1004 乾隆三年十月初九日內閣奉

旨李如栢命往陝西交與大學士查郎阿以相當總兵缺題署欽此

1005 乾隆三年十月初十日內閣奉

上諭聞今年外省糧船北上時旂丁等沿途私賣官米恐兵丁等盤詰因而行賄公同隱匿及至抵通交米之際為數不足即在通州現買充數在旂丁希圖賤價採買而漕糧關係天庾豈容盜竊私賣況在通州買補則到京米糧愈見其少於民食甚有妨礙此皆從前該管大員及官弁等不實心查察以致疎縱若此著漕運總督托時嗣後加意嚴查務除此弊如有仍蹈前轍者即行重懲毋得疎忽欽此

1006 乾隆三年十月十一日內閣奉

上諭直隸各省秋審大典乃民命出入攸關寬則失之於縱嚴則失之於苛均非讞獄平允之義必須至詳至慎輕重無偏始可以副獨教明刑欽恤協中之治理今年各省招冊九鄉改定者甚多朕詳加覽閱九鄉所改俱與情罪允當如貴州省該督所擬可務之陳奇芳卜萬年二名九鄉改為緩決

所擬緩決之計保一名九鄉改為可矜四川省該撫所擬情實之張文廣張紹舜二名九鄉改為緩決所擬可矜之羅玉秀李正坤覃成先李占玉熊思宏李連羅斯文周世勳李文政謝士珍徐文發十一名九鄉改為緩決所擬緩決之孫福壽一名九鄉改為可矜廣西省該撫所擬情實之覃跳天一名九鄉改為緩決所擬可矜之黎天慶李益榮王武任趙佛四名九鄉改為緩決廣東省該撫所擬緩決之廖允相榮萬二名九鄉改為情實所擬情實之陳亞雄吳積興張任華三名九鄉改為緩決所擬可矜之李萃春鄭文郭司扶游葉瑞達四名九鄉改為緩決所擬張欽輝謝亞添江氏三名九鄉改為可矜福建省該撫所擬緩決之林振張文傳祥生邱三妹四名九鄉改為情實所擬可矜之陳春謝任俞作宜楊密陳止邱勝耀陳友章周文英丁曇生林猛林唇蔡厚蔣貴蘇訪陳踏十五名九鄉改為緩決陝西省該撫所擬緩決之閻獎兒秦國柱二名九鄉改為情實所擬情實之呂自美一名九鄉改為緩決所擬可矜之董仲仁李承



烈黃登臺高士通劉君治盧廷選王福兒何養統  
馬之成九名九鄉改為緩決湖廣省該撫所擬情  
實之王老施趙國賢二名九鄉改為緩決所擬可  
矜之幸曾周信李公宜道悅陳二田國學王從德  
王爾祿李次韓九名九鄉改為緩決浙江省該督  
所擬可矜之王茂卿陸寶即丁阿法蔣阿徐李孟  
受陳可璘王三宋毛頭八名九鄉改為緩決江西  
省該撫所擬緩決之劉珩一名九鄉改為情實所  
擬可矜之李雄士邱德秀葉一成方新喜姜有俚  
胡茂相李配月羅大女彭嘉孫葉季芳王得馬左  
谷良十二名九鄉改為緩決安徽省該撫所擬緩  
決之張二竇三李四三名九鄉改為情實所擬情  
實之劉麻周程華二名九鄉改為緩決所擬可矜  
之江候朱大鑷夏正華汪從四名九鄉改為緩決  
江蘇省該撫所擬緩決之蔣鳳爵陳君亮蔣阿浦  
卞祥生陸二五名九鄉改為情實所擬情實之顧  
二一名九鄉改為緩決所擬可矜之王之洪葛元  
二名九鄉改為緩決所擬緩決之秦天升一名九  
鄉改為矜河南省該撫所擬緩決之柳六王惟善

二名九鄉改為情實所擬情實之郭金李敬龍二  
名九鄉改為緩決所擬可矜之趙大漢劉壘宋允  
兒三名九鄉改為緩決所擬緩決王朝棟一名九  
鄉改為可矜山東省該撫所擬緩決之劉疇子朱  
天福二名九鄉改為情實所擬情實之高四庖一  
名九鄉改為緩決所擬可矜之陸小兒粟可正張  
廷義張爾科宋小慈謝永瑞劉小有宋美立王小  
青九名九鄉改為緩決山西省該撫所擬情實之  
王綱胡士燦石宗盤三名九鄉改為緩決所擬可  
矜之張光廷趙成魁李二廝趙文璜四名九鄉改  
為緩決直隸該督所擬緩決之高小狗孟大麻劉  
領兒索氏宋憐宋四禿子王開極孫大辛四九名  
九鄉改為情實所擬情實之朱起鳳楊少德張九  
一場二場大儒劉寡嘴王二郭起明八名九鄉改  
為緩決所擬之可矜之齊秉公侯三王法克閏四  
劉二五名九鄉改為緩決此等案件皆督撫親自  
錄囚重加核擬而後題達者如果準情酌理虛衆  
推究何至輕重未協不能合乎人情之大同此皆  
由意見稍偏遂致權衡有爽大旨等受封疆之重

奇化民成俗端以明罰勅法為先若姑息而長刁  
惡之風或刻核而乖和平之氣所聞甚鉅朕是以  
於此番秋審將九卿所改各案親加閱定一一摘  
出曉諭各督撫知之嗣後務仰體朕心讞鞫明允  
毋使絲毫不得其平以副國家刑期無刑之化欵  
此

1007 乾隆三年十月十一日內閣奉

上諭江蘇學政張廷璐在任年久今當差滿更換之  
期著回部辦事提督江蘇學政著劉吳龍去提督  
直隸學政著錢陳羣去欵此

1008 乾隆三年十月十二日和碩莊親王和親王辦  
理軍大臣等奉

上諭二阿哥永璉乃皇后所生朕之嫡子為人聰明  
貴重氣宇不凡當日蒙我

皇考命名永璉隱然示以承宗器之意朕御極以後不  
即顯行冊立皇太子之禮者蓋恐幼年志氣未定

恃貴驕矜或左右諂媚逢迎至於失德甚且有窺  
伺動搖之者是以於乾隆元年七月初二日遵照  
皇考成式親書密旨召諸王大臣面諭收藏於乾清宮  
正大光明匾之後是永璉雖未行冊立之禮朕已  
命為皇太子矣今於本月十二日偶患寒疾遂致  
不起朕心深為悲悼朕為天下主豈肯因幼傷而  
傷懷抱但永璉係朕嫡子已定建儲之計與眾子  
不同一切典禮著照皇太子儀注行元年密藏匾  
內之諭旨著取出將此曉諭天下臣民知之欵此

1009 乾隆三年十月十三日內閣奉

上諭前據安徽布政使晏斯盛奏請截漕一事經大  
學士等議今安徽巡撫查明所屬糧米於蠲免改  
折之外應徵數目具題截留以備地方賑卹平糶  
預籌儲蓄之用今據孫國璽奏稱本年漕糧除蠲  
免改折外應起運約有六萬九千餘石等語著將  
此項米石截留本省照前議辦理該部可即速行  
文該撫知之欵此

1010 乾隆三年十月十五日內閣奉

上諭據漕運總督托時奏稱戶部尚書高其倬舟抵寶應縣病劇身故高其倬係宣力有年之大臣今簡用來京中途溘逝深為悼惜其柩擬回旂著沿途文武官弁護送照舊欽此

1011 同日內閣奉

上諭四川布政使竇啓瑛著來京其員缺著方顯補授欽此

1012 同日內閣奉

上諭今年江蘇漕糧停運者多安徽則全行停運查定例減運之年給與該旗丁一半月糧雍正十一年蒙

皇考特頒諭旨恐一半月糧旂丁不足養贍家口將應支月糧等項悉行賞給後不為例今年江南歉收米價昂貴且漕船停泊不無苦蓋之費若照成例減半支給運丁未免艱難此次著全行賞給以示

特恩嗣後亦不得援以為例欽此

1013 乾隆三年十月十六日內閣奉

上諭江南崇明鎮總兵陳倫炯督運米石赴閩往返需時崇明鎮印務緊要著狼山鎮總兵許仕盛暫行兼理欽此

1014 乾隆三年十月十七日內閣奉

上諭任蘭枝著調戶部尚書趙國麟著調補禮部尚書史貽直著調補刑部尚書趙殿最著補授工部尚書楊永斌著補授吏部右侍郎欽此

1015 同日內閣奉

上諭四川學政陳象樞著調任湖南學政湖南學政張任遇著調任四川學政廣西學政潘允敏著調任河南學政河南學政張考著調任廣西學政欽此

1016 同日內閣奉

上諭今年南河水勢甚大河道總督高斌督率河員  
防範得宜秋汛已過工程平穩甚屬可嘉高斌及  
辦理工程官員俱著交部議叙欽此

1017 乾隆三年十月十八日內閣奉

上諭前據直隸總督李衛奏稱近患黃疸之疾難以  
辦事懇請解任回籍調理朕心軫念特遣太醫王  
炳前往診視今據王炳奏稱病勢一時未能即愈  
必須寬期靜養而李衛又復懇請再三著准其解  
任調治以期速痊即行奏聞來直辦事直隸總督  
印務著吏部尚書孫嘉淦速行前往署理孫嘉淦  
未回部之前著甘汝來暫行協辦吏部尚書事務  
欽此

1018 乾隆三年十月二十日內閣奉

上諭署西寧總兵盧度理著調署涼州鎮總兵印務  
西鳳協副將周開捷著署理西寧鎮總兵印務其

西鳳協副將印務著提標叅將孫建勳署理提標  
叅將印務著大學士查郎阿委員署理欽此

1019 同日內閣奉

上諭蘇霖泓不勝兩淮鹽運使之任著將兩淮鹽務  
道徐大枚調補運使鹽務道員缺著大通道禮山  
調補大通道員缺著蘇霖泓調補欽此

1020 乾隆三年十月二十一日內閣奉

上諭本月二十三日皇太子初祭之期朕躬親往欽  
此

1021 同日內閣奉

上諭貴州學政鄧一桂著再留任三年欽此

1022 乾隆三年十月二十二日內閣奉

上諭各省駐防兵丁生息銀兩皆係咨部轉交八旗  
查核指奏而督撫提鎮則皆具本報銷事不畫一

此項生息銀兩乃國家加惠兵丁之特恩非正項錢糧可比嗣後著各省督撫提鎮每年咨達兵部兵部逐一查核一省彙為一摺陸續奏聞欽此

1023 乾隆三年十月二十二日內閣奉

上諭士人以品行為先學問以經義為重故士之自立也先道德而後文章國家之取士也黜浮華而崇實學我朝養士已將百年漸磨化導培養甄陶所以期望而優異之者無所不至為士者當思國家待士之重務為端人正士以樹齊民之坊表至於學問必有根柢方為實學治一經必深通一經之蘊以此發為文辭自然醇正典雅若因陋就簡祇記誦陳腐時文百餘篇以為弋取科名之具則士之學已荒而士之品已卑矣是在各省學<sup>監</sup>切提撕往復訓勉其有不率教者即嚴加懲戒不少寬貸至於書藝之外當令究心經學以為明道經世之本其如何因地制宜試以經義俾士子不徒視為具文者在學政酌量行之務期有益於膠庠各省亦不必一轍我

皇祖御纂經書多種紹前聖之法集先儒之大成已命

各省布政使敬謹刊刻聽人印刷並准坊間翻刻廣行恐地方大吏不能盡心經理則士子購覓仍屬艱難不獲誦讀著督撫藩司等善為籌畫將士子應讀之書多為印發以為國家造士育材之助欽此

1124 同日內閣奉

上諭孫嘉淦現署直隸總督國子監事務著趙國麟兼行管理欽此

1025 乾隆三年十月二十五日內閣奉

上諭頃據蘇州織造海保奏稱江南總督那蘇圖奏准江蘇地方歲早歉收凡商販米船過閘時詢明前往被災各邑售賣者給與印照免其納稅臣隨即出示通行曉諭已經旬日而願往災邑者甚少及細察其故因商人見部文內有給與印照責令到境呈送地方官鈐印令其回空驗銷之語惟恐稟請鈐印難免守候稽延是以尚多觀望撫臣許

容與且面同商酌稍為變通凡詢明實係運往災  
邑糶賣米船隨時給照免稅隨即開明商名米數  
行知該邑印官查果到境立時申報查考毋得守  
候留難至所給過關免稅照票聽其隨回空繳籍  
地方官不必鈐印在關既有該邑申報到境印文  
即可據以存案報部等語朕因上下兩江民食艱  
難百計籌畫以期接濟外又舉行通商轉運之法  
廣致款款思我黎黎苦其中稍有阻滯稽遲則非  
朕降旨之本意矣今覽海保所奏伊興許容商酌  
辦理之處甚是著該部即連行文與各處關差凡  
有商船販米至被災之州縣者俱照此例行至于  
商船先報前往某縣若此縣販運者多米糧已可  
敷用即不妨准其轉移於隣邑總之歛收之地乏  
食之民皆吾赤子不容岐視也是在該督撫董率  
有司酌量本地情形善為經理以鼓舞商人不必  
拘定前議務使高賈踴躍趨事源源而來獲貿易  
之利無守候留難之苦免吾民艱食之虞此則善  
體朕心克盡父母斯民之職者矣欽此

1026 乾隆三年十月二十六日內閣奉

上諭孫嘉淦著實授直隸總督甘汝來著實授吏部  
尚書楊超曾著補授兵部尚書廣西巡撫員缺著  
湖北布政使安圖署理湖北布政使員缺著湖南  
按察使嚴瑞龍補授湖南按察使員缺著直隸清  
河道彭家屏署理欽此

1025 同日內閣奉

上諭朕降旨將楊超曾補授兵部尚書伊未到京之  
前兵部事務著甘汝來暫行兼管欽此

1028 同日內閣奉

上諭呂耀曾著調補倉場侍郎陳世倌著調補戶部  
左侍郎欽此

1029 乾隆三年十月二十七日內閣奉

上諭福建臺灣道尹士傑在臺期滿著汀漳龍道鄂  
善前往更換其汀漳龍道員缺著該督撫照例題  
補欽此

1030 同日內閣奉

上諭去年八月十五日夜福建福州等處颶風忽發  
聞有水師營快字八號槳船一隻烽火營慶字十  
二號雙蓬船一隻海壇鎮標左營永字十號趕  
繒船一隻俱遭風擊碎因各船非繫出洋遇風不  
應動支錢糧補造應令該管各官賠補朕念去歲  
福州等處風勢與平時不同人力難以防範尚非  
有意疎忽此時責令賠補力量艱難著動支正項  
錢糧成造免在各旗營賠追後不為例欽此

1031 同日內閣奉

上諭碩琮著實授直隸河道總督欽此

1032 乾隆三年十一月初二日奉

上諭從前學士雅爾呼達條奏沿邊內外添駐滿兵  
經議政王大臣議令該督提查看地方形勢朕聞  
古北口外已濟地方廣濶可以添兵駐劄但離邊  
稍遠未必在查看之內其可否添駐滿兵之處著  
該督提一併相度具奏欽此

1033 乾隆三年十一月十一日內閣奉

上諭近據河道總督高斌兩江總督那蘇圖奏報十  
月初十以後黃河漸次平退洪湖清水暢流入運  
運河新淤浮土一見清水隨流洗刷現在清水較  
常年此時大五尺有餘蓄長充裕洗刷浮淤甚為  
得力可無淺淤之虞覽之深慰朕懷今有人奏稱  
今年黃水異漲倒灌運河將近半載頗有淤墊現  
今雖清水入運近清江浦一帶運河水勢湍急自  
能將淤墊之沙洗去而竇應高郵以下水勢平緩  
必不能如上流之急所停沙泥勢難盡刷入江應  
令高斌速行相度淤墊淺深有宜挑濬處即動河  
庫銀兩募工挑濬一面題奏等語此奏與高斌那  
蘇圖所奏不符或為此奏者所聞在先不知近日  
之情形耶或高斌等所奏乃清河等處情形而未  
及竇應高郵以下之水勢耶可傳諭高斌確查奏  
聞有應辦者即行辦理又奏稱近聞新口石閘  
草壩重重鎖固漕船輓運較舊閘甚為艱難商賈  
船隻恐不免守候竊遲可悉心酌量假如舊口便

于新口則仍開新而用舊亦自不妨通變若以為新口去黃水較舊口為遠可免黃水入運之患則今年黃水直達運河是新口亦不能避黃之明驗等語又奏稱康熙六十一年河決武陟之後黃水溢入洪澤湖沙停湖底為患已久加以今年黃河大漲溢入湖中則湖底之日高不問可知將來湖水大漲一遇西風緊急高堰大隄及天然諸壩甚是危險目今湖底之沙斷不能令其復出惟有加意修防保固工程不可少有疎虞以致一時無措等語此二條皆於河工甚有關係其情形果否如是可一併詢問高斌令其妥議具奏欽此

1034 乾隆三年十一月十六日和碩莊親王內大臣

海奉

上諭今據唐英奏報淮關一年差滿請派員接任管理朕前派出準泰今伊母患病求賞假三個月前往接辦是以令三保幫唐英暫行辦理今準泰既不能前往淮關海關稅務即令三保署理著唐英單管宿遷關稅務兼燒造磁器欽此

1035 乾隆三年十一月十九日內閣奉

上諭前據奉天將軍額洛圖等奏稱奉天地方今年山水驟發河水泛溢

福陵石堤土壩被水衝刷應請料佑興修等語朕已勅交議政大臣會同該部定議令淳郡王工部侍郎張廷琛前往相度辦理但此處石堤土壩建築於雍正八年告成於雍正九年屈指至今七八年之間兩次被衝從前未改築堤壩之時亦並無此衝刷之事此或因水勢難容或係堤工不固二者均未可定

陵工關係重大必須籌畫萬全著淳郡王張廷琛再於欽天監中選擇精於地理之人帶去公同敬謹相度作何辦理之處會同奉天將軍五部侍郎等敬謹和衷悉心定議奏聞請旨務令風水工程兩有裨益欽此



1036 乾隆三年十一月二十日內閣奉

上諭李炎曹元仁明保著吏部帶領引見欽此

1037 乾隆三年十一月二十一日內閣奉

上諭本年夏間江蘇巡撫楊永域奏稱禁止晒麩一事臣已委負協同查禁其造麩器具分別封貯折毀所有未奉上諭禁止以前已經造成陳趨現訪封貯等語朕此時以楊永域辦理不善特頒諭旨嚴切曉諭諒各省督撫悉已聞知矣今聞河南地方封貯造成之陳麩甚多商民從前所用之工本悉皆委棄頗有怨言不知尹會一何以見朕諭旨尚如此辦理可傳旨詢問之又據法敏奏稱山東禁止燒鍋晒麩已有成效朕思河南情形如此恐山東亦有封貯器具陳趨之事且聞東省亦不遵因朕旨已頒雖有難行之勢不得不奉行而所謂已有成效者仍屬虛文亦著傳旨詢問之欽此

1038 乾隆三年十一月二十二日內閣奉

上諭上年修理

三陵工程告竣朕特降諭旨躬親展謁經王大臣九卿等議於來年秋間前往嗣奉

皇太后懿旨朕詣盛京時

皇太后亦親往恭謁

祖陵正擬降旨交王大臣等會議今思近年畿輔收成歉薄雖行宮一切所需俱係官辦絲毫不以累民而沿途經過地方預先購備如米糧草束之類恐致價值高昂於民間未便應俟豐稔之年朕另降諭旨前往展謁著原議之王大臣九卿等再行妥議具奏欽此

1039 同日內閣奉

上諭大學士嵇曾筠奏稱舊恙尚未痊愈俟新撫臣到任後束裝起程便道回籍息心調理漸冀痊愈可趨赴闕廷等語著照所請暫回原籍加意調攝務期速痊入閣辦事頒賜人參十兩以為醫藥之用

欽此

1040 乾隆三年十一月二十四日內閣奉

上諭武英殿寫字需人著尚書趙國麟等在園子監  
肄業之正途貢生內有其年力精壯字畫端楷情  
願効力者選取十人送武英殿以備謄錄繕寫之  
用其在監肄業每月所領膏火之資仍照舊給與  
若有缺出該監照例送補俟數年之後行走若好  
該管王大臣秉公具奏酌量議叙欽此

1041 乾隆三年十一月二十五日奉

上諭署涼州鎮總兵盧度理著來京該部帶領引見  
欽此

1042 乾隆三年十一月二十七日內閣奉

上諭據漕運總督托時奏稱浙江紹興前後二幫漕  
船一百五十七隻因乾隆二年截留漕糧十萬石  
接濟閩省將糧船減存在次旗丁等未奉截留之  
先領過漕截銀二萬五千四百兩行月銀四十二  
百兩俱應追還嗣經部議從乾隆己未年為始分

作三年扣完在案但查此項漕船在先領過錢糧  
俱為辦公支用迨減存之後苦蓋漕船養贍家口  
均係各丁設措應用俱待本年應領錢糧清還逋  
負辦理新漕若於減半月糧扣除之外再入年限  
扣除則丁力不無竭蹶倘蒙天恩將該幫應領本  
年減半糧銀七千一百一十三兩零扣除抵作乾  
隆己未年應扣銀兩外其餘未清銀兩自乾隆庚  
申年起分作三年扣完則各丁運費從容不致拮  
据從事等語著照托時所奏將紹興二幫運丁未  
清銀兩自乾隆庚申年起分作三年扣還以紓運  
丁之力該部即行文漕運總督知之欽此

1043 乾隆三年十一月二十七日奉

旨介福慶泰佐領緣由既經王大臣等查明定議著  
照議辦理平郡王策令互相參奏如果從公事起  
見自於旗務有益但因伊等素日有隙而有此舉  
且策令於平郡王參奏之後復行奏辨詞句乖張  
更屬不合策令著交該部嚴加議處平郡王著交  
宗人府察議欽此

1044 乾隆三年十一月二十八日内閣奉

上諭近年以來直隸地方收成歉薄民食艱難從前  
議開海運以資接濟續經奉天將軍額洛圖奏稱  
錦州等處米穀加貴請永禁海運部議准行此時  
朕降諭旨令歲直隸收獲平常仍照朕旨行明年  
再照伊等所請行朕聞秋冬收獲之後各商民携  
帶資奉前赴海城蓋平等處採辦雜糧因時屆  
隆冬海風勁烈舟楫難行已將所買糧石收貯各  
店春融裝運該商民惟恐地方有司遵照明年停  
運之議開過留難甚為惶懼朕思商民此糧購買  
在先暫時存貯各店不應在明年禁止之內且奉  
天素稱產米之鄉雖因販運過多價值視昔加貴  
然較之直隸歉收之地待粟而炊其情形緩急寔  
相逕庭著俟明年內地麥熟之後再將海運禁止  
此亦酌盈濟虛有無相通之道該部可即行文傳  
諭直隸總督奉天將軍等並出示令商民知之欽  
此

1045 乾隆三年十一月二十九日内閣奉

上諭原任浙江海防道朱定元著吏部行文貴州原  
籍調取來京引見欽此

1046 同日內閣奉

上諭朕因畿輔一帶收成歉薄已加恩格外將雍正  
十三年乾隆元年二年分地方未完之錢糧及緩  
徵停徵之項將來分年帶徵者悉行蠲免以資休  
養查宣化永平等各府州屬徵收錢糧有銀兩米  
豆蕪徵者有專徵米豆本色及草束者其米豆等  
項若有未完亦係地糧民欠所當一體加恩蠲與  
豁免以省閭閻將來追呼之擾再旗地畝及入  
官地畝所有租銀租糧寔欠在民者著總督孫嘉  
淦確查明白一併蠲免該部可即行文傳諭知之  
欽此

1047 乾隆三年十二月初二日内閣奉

上諭訥親補授吏部尚書鄂善補授兵部尚書喀爾  
吉善調補吏部侍郎留保補授戶部侍郎欽此

1048 乾隆三年十二月初二日內閣奉

上諭前方苞奏請禁止烟酒一摺朕交與大學士等  
密議隨據大學士等議奏朕思禁止烟酒應令大  
學士會同九卿定議是以命將方苞所奏發出乃  
內閣誤將大學士奏稿一併抄發豈有以大學士  
奏稿復令大學士會同九卿定議之理可將大學  
士議稿及方苞奏摺一併撤回大學士九卿現在  
會議各省禁麪一事麪與烟酒事同一體俟定議  
禁麪具奏之日朕酌量降旨欽此

1049 同日內閣奉

上諭廣東海南道王鐸病故員缺甚屬緊要著廣州  
府知府劉庶補授欽此

1050 乾隆三年十二月初三日內閣奉

上諭今年上下兩江收成歉薄米價昂貴朕屢降諭  
旨多方籌畫並免米船之賦稅使商販流通多得  
米穀以濟民食今聞浙省亦有歉收之處米價較  
昔加增且杭嘉湖等府戶口繁多需米孔亟定望

外省客來以資接濟若有商販由蕪湖浙暨北新  
三關前往浙省者即照江南之例免其輸稅以明  
年四月麥熟為止並傳諭江西湖廣督撫若商民  
有情願赴浙貿易者不得因採買官米阻其販運  
該部可即行文前去欽此

1051 乾隆三年十二月初四日內閣奉

上諭廣東碣石鎮總兵官馬驥著調補福建汀州鎮  
總兵官汀州鎮總兵官林君陞著調補碣石鎮總  
兵官欽此

1052 乾隆三年十二月初五日內閣奉

上諭江蘇按察使戴永椿著來京候旨其按察使負  
缺著江南鹽驛道孔傳煥補授仍兼署江蘇布政  
使事務江南鹽驛道負缺著給事中單德謨補授  
單德謨未到任之先著該督撫委負暫行署理欽  
此

1053 乾隆三年十二月初八日奉

旨前左都御史缺出朕因彭維新係服滿候補之員將伊補授嗣經御史叅奏大學士等以伊服內不應到任議令革職朕以素日不知彭維新之為人諭令來京再降諭旨今彭維新到京奏稱雍正十三年十月十三日命臣署理左都御史臣以未經到任則終制下忱難於仰達是以於十月十八日到任隨繕本奏懇終制等語彭維新於十三日奉旨署印之後十八日未到任之先曾經謝恩奏事並非未到奉任即不能奏達終制下忱者何得引此以卸已過至伊被叅之後雖聞旨亦應在籍具奏辭職今親自來京而辭職之語亦甚泛泛是其戀職之心顯然可見著照大學士等原議革職其左都御史員缺著魏廷珍補授欽此

1054 乾隆三年十二月初九日內閣奉

上諭據寧夏將軍阿魯等奏稱寧夏地方十一月二十四日戌時地動滿城官兵房屋盡皆塌坍等語

朕心深為軫念所有城內官兵人等作何加恩賑恤之處著該將軍作速查明一面奏聞一面辦理其各處被災兵民人等著該地方官即行查明一體賑恤邊地寒冬務令安妥毋致一夫失所欽此

1055 乾隆三年十二月十一日內閣奉

上諭乾隆元年曾借給瓜州回民籽種糧八千石口糧四十石並腳價銀二千二百七十餘兩原定議於豐收之時分年交還乾隆二年大學士查即阿奏稱回民所收穀石僅敷本年食用所有應支公項力量艱難懇請寬期一年再行交納朕已降旨俞允今聞本年口外收成仍非大稔回民遷移未久家鮮蓋藏若責令完公不無拮据之苦朕撫恤回民原欲令其安居樂業永享昇平此所欠籽種口糧腳價若仍留為分年帶完之項伊等心中籌及每歲輸將不免多所顧慮非朕恩養邊民之本意著將此項糧銀全行豁免大學士查即阿等可即遵旨出示曉諭俾惠民等永沾寬惠欽此

1056 乾隆三年十二月十三日辦理軍機大臣奉

上諭前據寧夏將軍阿魯奏報寧夏地方於十一月二十四日戌時地動朕心軫念已降旨令將軍督撫等加意撫綏安插無使兵民失所今據阿魯續奏是日地動甚重官署民房傾圮兵民被傷身斃者甚多文武官弁亦有傷損者朕心甚為慘切惟有敬凜

天變深自修省著兵部侍郎班第馳驛前去即於明日起程動撥蘭州藩庫銀二十萬兩會同將軍阿魯并地方文武大員查明被災人等逐戶賑濟急為安頓無使流離困苦其被壓身故之官弁著照巡洋被風身故之例加恩賜賞恤典其動用銀兩該部另行撥補再寧夏附近之州縣被災者著班第會同地方文武大員一體查賑無得遺漏欽此

1057 乾隆三年十二月十三日辦理軍機大臣奉

上諭寧夏地動搃兵楊大凱視為泛常怠忽殊甚已降旨交部嚴加議處其搃兵員缺著大學士查即阿於通省搃兵內揀選賢能之員調補速令前往

辦事其所遺員缺即著通行題署阿魯親率官兵前往料理彈壓所辦甚屬可嘉著交部從優議叙喀拉同山著交部議叙其派往之滿洲官兵著班第查明從優賞賚欽此

1058 乾隆三年十二月十三日內閣奉

上諭各省水陸孔道之旁設立墩臺駐宿兵丁所以護衛行人稽察匪類朕聞外省情形種種不一其間兵卒成行罷械成列於行旅往來之時留心防護者有之防汛止二三人而不成行列罷械不整者有之營房雖設而闕其無人一任偷竊潛行漫無知覺者亦有之大抵與督撫提鎮駐劄大營相近者尚覺整齊其遠者即多廢弛亦間有副參都遊留心營位而能整頓墩臺防汛者亦有離大營本不甚遠而墩臺曠廢者如直隸之河間獻縣阜城景州江南之瀟縣靈璧浙江之淳安石門江蘇之崑山無錫淮揚之高郵寶應宿遷等處塘汛皆白日不見一人暮夜不聞一柝以朕所聞如此夫防汛兵丁既無差操之勞專司稽察之事而乃懶

情縱逸至此則國家設立汛兵之意要在督該管  
弁負約束不嚴董率不力有以致之其如何添設  
德儆之法令督撫提鎮等轉飭所屬將弁寬心奉  
行俾各勤於職業不似從前之耽延偷安任意曠  
誤著兵部悉心定議具奏欽此

1059 乾隆三年十二月十六日內閣奉

上諭陝西糧道席雍著來京候旨其負缺著戶部顏  
料庫員外郎納敏補授欽此

1060 乾隆三年十二月十六日內閣奉

上諭守令為親民之官最關緊要而邊疆之地民夷  
雜處撫綏化導職任尤重更不得不慎選其人以  
膺牧民之寄查雲貴諸苗向在王化之外為害於  
地方近來改土設流漸次安輯然瘡痍初起元氣  
未復必得循良之負恩信蕪著調劑咸宜者令其  
心志貼服然後可以久安於無事近時督撫於苗  
疆重地多擇能員以資彈壓殊不知矜才喜事之  
輩飾文貌以欺耳目圖聲譽以求陞遷非有寬心

寬政以為撫綏化導之本究於苗疆無所裨補夫  
苗夷雖極頑悍然亦具有人心非不可至誠感動  
者果得廉靜朴質之有司視同赤子勤加撫恤使  
之各長其妻孥安其田里俯仰優游一無擾累諒  
無有不可以羊面羊心者嗣後遇有苗疆要缺應  
令該督撫慎選賢員以居其任三年之後察其漢  
夷相安羣情愛戴者保題陞擢以示優獎其有恃  
才貪功者雖有才幹不得輕任以滋事端其如何  
定例之處著九卿妥議具奏至於文武不和乃地  
方之大患其在苗疆更宜嚴禁而重懲之嗣後若  
有懷挾私意彼此齟齬致悞公事者該督撫提臣  
即行題參從重議處毋得姑容欽此

1061 乾隆三年十二月十七日內閣奉

上諭聞西安道張元懷臨洮道李方勉於地方不甚  
相宜著大學士查即阿巡撫元展成於通省道員  
內揀選二員與張元懷李方勉調補俟調補之後  
勝任與否再留心試着奏聞欽此

1062 乾隆三年十二月十八日內閣奉

上諭直隸正定提兵徐成貞差往北路領兵並管屯種事務聞伊生長南方於口外風土不宜且年齒已邁著休致回籍其所辦事務著直隸提督提督於副將內揀選一員前往更換副將等缺即著該督提選行委署欽此

1063 乾隆三年十二月十八日內閣奉

上諭向來川省火耗較他省為重我皇考暨朕陸續降旨裁減已去其半無非加惠小民使比戶受輕徭薄賦之恩也今聞該省火耗銀雖減而不肖有司巧為營私之計將戩頭暗中加重有每兩加至一錢有餘者彼收糧之書吏傾銷之銀匠又從而侵漁之則小民受剝削之害不小矣川省如此他省可知著各省督撫轉飭布政使遵照徵收錢糧之天平法馬製定畫一之戩飭令各州縣確實遵行仍不時密行稽查倘有絲毫多取者即行嚴參治罪毋得姑容如或失於覺察該督撫藩司不得辭其咎欽此

1064 乾隆三年十二月二十日奉

旨薛鼎著授為欽天監八品博士即准食俸仍隨便帶領引見欽此

1065 同日奉

上諭據兩江總督那蘇圖奏稱十一月間前赴淮揚與河臣撫臣會勘應浚河道於十二月初旬舟抵清江浦勘得署撫臣許容原奏開挑之處於地方水利農田原屬有益惟聞沿海一帶邊土較高與泰寶監等處地土低窪形如釜底必須測重地勢隨宜辦理除應開應築河道開壩約計工程錢糧數目及派委督辦協理人員另與河臣撫臣會奏外此項工程重大如蒙簡差在京熟諳水利工程大員相度董率總理妥辦方為有濟等語朕思大理寺卿汪澹本籍江南於彼地情形自能熟悉且曾監修浙江海塘於水利工程諒亦諳練著伊前往江南總辦此工其有應行商榷事宜即會同督撫河臣妥議興舉務期有益民生以副朕愛養黎元之至意欽此



1066 乾隆三年十二月二十一日內閣奉

上諭江南驛站水夫前經巡察御史條奏裁六留四  
即以裁存工食為大差經臨雇募民夫每百里給  
價一錢之用今朕聞得江南之山清桃宿邳沛等  
六州縣地處衝繁差務既倍於他邑河多閘壩挽  
拽更難於平川其間守候耽延尤多遲滯驛地裁  
夫之後以一錢為雇募之價寔有不敷官民不無  
賠累之苦所當酌量變通者著將此六州縣原裁  
六分水夫之數仍照舊例增復俾民無科派之擾  
官無賠墊之虞該部即行文該督撫知之欽此

1067 同日內閣奉

上諭廣東提督印務著保祝署理即速起身前往  
欽此

1068 乾隆三年十二月二十二日內閣奉

上諭據河南巡撫尹會一奏稱種樹為天地自然之  
利臣於上年欽奉諭旨隨飭地方官責成鄉地老  
農多方勸諭自桑柘榆柳以至棗梨桃杏之屬遇  
有間隙之地不可種穀者各就土性所宜隨處栽  
木 意培養今各府查報一年之內寔在成活之  
樹木共計一百九十一萬有餘茲當冬末春初再  
加申勸期於逐年加增等語夫農田為生民之本  
而樹畜尤王政所先周禮太宰以九職任萬民其  
二曰園圃毓草木可以知所當務矣朕御極以來  
軫念民依於勤農教稼之外更令地方有司化導  
民人時勤樹植以收地力以益民生今覽尹會一

1069 乾隆三年十二月二十四日內閣奉

上諭據廣東提督霍昇奏稱自八月以來感冒嘔吐  
至今未痊限於步履懇請解任回籍以重歲疆等  
語朕覽霍昇所奏情詞懇切准其解任回籍調治  
其提督員缺著譚行義前往署理欽此

1070 乾隆三年十二月二十五日內閣奉

上諭寧夏地方十一月二十四日地動後提兵官署  
火起閣印信被火銷化著該部速行鑄就頒發所  
有王命火牌勘合劄付等件該部一併查給欽此

1071 乾隆三年十二月二十六日內閣奉

上諭湖廣鎮筸鎮提兵官自缺甚屬緊要著將襄陽  
鎮提兵官周儀調補襄陽鎮提兵官自缺著張天  
駿署理周儀未到鎮筸鎮之先其印務著提督德  
沛暫行委署欽此

1072

乾隆四年正月初五日内閣奉

上諭屢軫念江蘇貧民亡命加賑一月但思該地方戶口殷繁需用糧食恐有不足著將江蘇漕糧再留二十萬石以備接濟平糶之用朕思天庾固屬緊要而偶遇豐歉不齊又當變通辦理著該部即速傳諭該督撫知之欽此

1073

同日內閣奉

上諭上年江南地方收成歉薄民食維艱朕勞多方籌畫惟恐一夫不獲其所其賑卹部臣與該督撫定議極貧之戶口賑四者賑三個月又次者賑兩個月俱以本年止朕思三四月間正青黃不接之際在官平糶之米而無力之窮民仍苦糶買無資口良可軫念下江地方著將極貧之民加月上江去歲歉收較下江為甚著將被災重之州縣加賑極貧次貧者一個月被災重下之州縣加賑極貧者一個月該部可

督撫預先籌辦米穀並飭有司實力奉均沾實惠欽此

1074

乾隆四年正月初五日内閣奉

上諭江蘇巡撫許容奏稱伊父患病甚重急欲回籍省視但念江蘇要地又值料理賑濟之時伏懇特簡賢員兼程到蘇准臣速回以盡子情等語朕覽許容所奏情詞懇切但江蘇地方緊要又有賑濟急切辦理之事巡撫印務必得賢員護理著布政使徐士林於此旨到日不必來京請訓即由本籍起身前往蘇州以布政司護理巡撫印務俾許容得以早回省親方於情理允協許容俟伊父病體稍痊奏聞再回原任徐士林服制將滿不得遲回固執稽延公事欽此

1075

乾隆四年正月初五日内閣奉

上諭直隸布政使張鳴鈞著來京以京官照例補用直隸藩司負缺緊要且現有賑濟之事著將河南布政使范燦調補其河南布政使負缺著原任浙江海防兵備道朱定元補授朱定元未到任之先著尹會一暫行委負署理欽此

1076

乾隆四年正月初五日內閣奉  
上諭湖北學政閣泰著再留任三年欽此

1077

乾隆四年正月初七日內閣奉  
上諭據大學士查郎阿巡撫元展成奏稱寧夏為甘  
省要缺且現有賑濟要務經臣等將西寧府知府  
臧珊題明委署臧珊才識幹練辦事勇往若以之  
調補寧夏府於地方可有裨益等語臧珊著照查  
郎阿等所請調補寧夏府知府其西寧府負缺即  
將新用寧夏府知府之申夢璽補授欽此

1078

乾隆四年正月初八日內閣奉  
上諭聞浙江温州鎮總兵官施世澤年近七旬並不  
親赴教場操練兵丁又不能表率矜束將弁諸事  
廢弛著勒令休致回籍温州鎮為濱海要缺著總  
督郝玉麟於總兵官內揀選能勝任者一面調補  
一面具題其所遺之缺即著通行題補欽此

1079

乾隆四年正月十二日內閣奉  
上諭據湖廣總督德沛湖南巡撫張渠奏稱靖州  
列一缺今新改蕪管城步綏寧兩邑徭務彈壓稽  
查均關緊要必得敏幹練達之員方克勝任現任  
州判張崇德性情拘謹於苗疆不甚相宜查有芷  
江縣縣丞孫士捷年力富強為人明白苗情熟悉  
辦事克勤但係監生出身與直隸州州判之例不  
符可否邀恩逾格將孫士捷以縣丞銜管理靖州  
理徭州列事仍照原銜陞轉其所遺芷江縣縣丞  
之缺亦係苗疆查有零陵縣縣丞樊邦俊辦事勤  
練堪以調補其零陵縣縣丞一缺即將張崇德以  
州判管縣丞事亦照原銜陞轉均覺人地相宜等  
語著照德沛張渠所請將孫士捷以縣丞銜管理  
靖州理徭州列事仍照原銜陞轉樊邦俊調補芷  
江縣縣丞張崇德以州判管零陵縣縣丞事亦照  
原銜陞轉該部可即行文該督撫知之欽此

1080 乾隆四年正月十三日內閣奉

上諭工部侍郎王紘前以年老乞休朕未允今又閱三年看伊精力較前不逮准以原品致仕其工部侍郎員缺著韓光基補授欽此

1081 乾隆四年正月十七日內閣奉

上諭雲南勲庄變價一案尚欠銀一千八百二十九兩零聞此項田地屢被水冲沙壓難以耕種承變各戶早經逃散無可著追願為地方之累著將應追未完銀兩准予豁免該部可即行文該督撫知之欽此

1082 乾隆四年正月十八日內閣奉

上諭官負因公出境者向未定有帶印交印分別處分之例朕思坐倖因公遠出印信既已交卸與帶印公出者不同若不分晰概行議處舊例尚屬未周著該部準情酌理分晰定議永著為例欽此

1083 乾隆四年正月十八日內閣奉

上諭上年直隸地方收成歉薄民食艱難多方籌畫諸政必舉務期芽蘗無失所之黎民幸荷天恩屢降瑞雪將來麥秋似有可望惟是青黃不待之時若將賑未停止貧民仍難餬口應行加恩於從前定議之外著該督即行確查將災重之地方各戶加賑一個月其災輕之地方將老弱貧民資生無策者加賑一個月並嚴飭有司實心奉行俾閭閻不至飢餓各盡力於南畝以副朕宵旰焦勞之至意欽此

1084 乾隆四年正月十八日內閣奉

上諭原任陝西興漢鎮總兵官張傑于雍正十二年間調防哈密曾借帑銀二千兩製備行裝伊行至肅州病故應於伊子張良弼參將任內扣俸還項至今尚有未完銀一千七百五十兩朕念張傑調防外邊不幸中途身故其所借帑銀原為製辦行裝之用非尋常借項可比著加恩豁免不必將伊子俸餉扣補該部可即行文該省知之欽此

1085 乾隆四年正月十九日內閣奉

上諭據湖廣鎮守總兵官周儀奏報伊准假回籍  
現已丁母憂鎮守總兵官有缺著貴州安籠鎮  
總兵楊國華調補安籠鎮總兵官有缺候朕另降  
諭旨楊國華著即赴新任安籠鎮印務著總督張  
廣泗暫行選委署理欽此

1086 乾隆四年正月十九日內閣奉

上諭編修余棟因皇太子事來京著即在阿哥書房  
行走雖伊服制未滿此係內廷課讀非現任職官  
可比著照梁詩正例賞給俸銀俸米不在算俸之  
列欽此

1087 乾隆四年正月十九日內閣奉

上諭廣東肇羅道徐涵告病為藉其有缺甚屬緊要  
著戶部郎中赫赫補授欽此

1088 乾隆四年正月二十日內閣奉

上諭上年十一月寧夏地動民人被灾甚重朕聞奏  
即遣大臣星馳前往會同督撫將軍等加意賑恤  
並籌畫撫綏安輯之計日來伊等陸續奏到正在  
多方經理以濟灾黎朕思民人等困苦播遷之後  
縱能勉力耕耘豈能復輸租稅著將軍寧夏寧朔平  
羅新渠寶豐五縣本年應徵地丁及糧米草束雜  
稅等項悉行豁免如有舊欠亦著蠲除倘附近州  
縣有被灾之處應加恩免賦者著欽差及督撫等  
查明奏聞請旨欽此

1089 大學士伯張鄂 字寄 西安巡撫張

乾隆四年正月二十一日奉

上諭朕覽張楷奏報西安各屬糧價摺內延安府屬  
大米每倉石二兩二錢至二兩九錢二分同州府  
屬大米每倉石一兩一錢二分至三兩二分朕思  
大米之價至於二兩九錢三兩則太覺昂貴即小  
米亦有價貴之處恐民人難以餬口將來青黃不  
接之時其勢必逐漸加增可寄信與張楷令其酌

着本地情形留心料理毋得膜視再者伊所開同  
州府屬米價自一兩一錢二分至三兩二分何以  
一府之中貴賤相懸如此或係錯寫或別有緣故  
著一併查明回奏欽此遵  
旨寄信前來

1090 乾隆四年正月二十一日內閣奉  
旨大學士徐本准於紫禁城內騎馬欽此

1091 乾隆四年正月二十二日內閣奉  
上諭上年九月間大學士鄂爾泰以氣體虛弱請假  
嗣攝朕諭令暫解兵部事務今病體已痊其兵部  
事務仍著照舊管理欽此

1092 乾隆四年正月二十二日內閣奉  
上諭據刑部尚書尹繼善奏稱胞兄尹立善原在錦  
州看守墳墓因不守分經父尹泰奏請發往黑龍  
江今已五年洗心改過現在祖父墳墓無人照看  
懇求天恩赦回等語著准尹繼善所請將尹立善

赦回錦州仍令看守墳墓交與該將軍約束不許  
出竟生事欽此

1093 乾隆四年正月二十四日內閣奉  
上諭朕因大學士嵇曾筠諳練河務曾降諭旨俟到  
京後往來畿輔與該督等商權河道機宜會同經  
理不意其患病身故直隸河工關係緊要即著河  
道總督顧琮直隸總督孫嘉淦悉心辦理務期除  
水患以臻實效欽此

1094 乾隆四年正月二十五日內閣奉  
上諭趙國麟著補授大學士其禮部尚書員缺仍著  
任蘭枝調補戶部尚書員缺著陳惠華補授刑部  
侍郎員缺著梁詩正補授欽此

1095 乾隆四年正月二十六日內閣奉

上諭余棟既稱伊父病故尚未安葬仍著回籍欽此

1096 乾隆四年正月二十七日奉

旨據侍郎班第等奏稱寧夏所有滋生本銀二萬兩又利銀八千餘兩俱已借給官兵請分為五十箇月扣完但現有應扣駝價及借支藩庫收拾軍器銀兩應請將此二項應扣之銀暫行停止等語此次寧夏地震甚重與尋常被灾者不同朕心深為憫念前已降旨將寧夏寶豐新渠等處新徵舊欠俱行豁免其滿洲官兵所有應扣駝價及借支藩庫收拾軍器二項銀共一萬九千八百餘兩悉着豁免至所借生息銀兩可分為五十個月扣清但生息銀兩係永遠裨益之項不可空缺今因一時急需借給官兵著班第等將動用何項銀兩即行照數補足以資生息之處妥議辦理奏聞餘俱照班第等所請行欽此

1097 乾隆四年正月二十七日內閣奉

旨此案係密謀事件該撫盧焯理應具摺密奏乃繕本具題殊屬不合將此本發回令其摺奏著大學士等寄信申飭欽此

1098 乾隆四年正月二十七日內閣奉

旨嗣後凡奉旨密謀事件各該督撫等應繕摺覆奏不必具本欽此

1099 乾隆四年正月二十八日內閣奉

上諭據欽差侍郎班第大學士查郎阿等奏稱原任提督俞益謨之子中衛縣武生俞汝亮因見寧夏地動民人困苦情願捐出制錢二千串銀一千兩羊一百五十隻當舖內所存皮棉夾衣二千九百八件以為灾黎療饑禦寒之用臣等已將銀錢衣服等件擇民人之極貧者按名散給理合奏聞等語俞汝亮誼敦桑梓念切灾傷好善樂施急行拯濟俾窮民免於凍餒甚屬可嘉著從優授為守備交與大學士查郎阿以相當之缺即行題補欽此



1100 乾隆四年正月二十九日辦理軍機大臣奉

上諭副將吳開增前往北路換班著賞給總兵職銜  
馳驛前往欽此

附錄

(1) 兩江總督那蘇圖等會勘淮揚河道等因一摺

奉

硃批軍機大臣密議具奏欽此 查淮揚等處應開

應築河道開壩等工該督等遵

旨會同勘商據稱淮揚各屬境內通江通海各河道  
及盬河淤滯之處均宜開濬寬通並應挑引河  
應備開壩堤壩等工均於地方水利農田有益  
可以資灌既蓄淫澇通舟楫興利除害一勞永  
賴等語該督撫河臣等身任地方既據公同勘  
商自係應行修舉之事現在欽奉

諭旨著大理寺卿汪澄前往江南總辦此工具有應  
行商榷事宜即會同河臣妥議興舉務期有益民

生欽此應令汪澄到工之日將前項工程再加詳

勘有應會同督撫河臣商榷者即會商妥議應  
奏

聞者具奏請

旨應辦理者即行辦理至所用錢糧除運鹽各河例

應商人疏濬已據淮甯黃仁德等捐備銀三十

萬兩應聽興工挑浚外該督等請此外仍撥帑

銀七十萬兩便可敷用查此項河開堤岸工程

原為有益民生地方永賴

皇上愛養黎元不惜多費

帑金成此鉅工務令各河道開通之後不致復虞

淤墊各開壩修築之後可保永遠堅固俾旱澇

蓄洩可恃農民有利無患以圖一勞永逸始稱

萬全所需七十萬兩之數尚在未經分別確估

亦難預定應令汪澄會同督撫河臣詳加估計

次第興工此次工役務繁兼可以工代賑尤當

嚴行查察不致有浮冒侵剋包攬等弊則錢糧

皆歸實用而工程益得完善矣再該督等奏稱

安徽臬司張坦麟請練工務出納維動可以委

任協辦更分調蘇松糧道姚孔鈞常鎮道周紹

儒署淮揚道孫鈞署淮徐道白嶠太通道蘇霖  
泓益務道禮山隨地監督並酌派河員暨府州  
縣佐貳等官分司承辦再安徽臬司印務江安  
糧道王之錡可以暫委署理等語查各員既經  
該督等公同遴選堪以委任之員應如所請令  
張坦麟協同汪濬辦理一切工務姚孔鈞等俱  
聽分調監督至需用河官暨府州縣佐貳等員  
應令臨時酌量調工委用再張坦麟赴工協辦  
其安徽臬司印務既據該督等奏稱江安糧道  
王之錡可以暫委署理亦應如所請令王之錡  
暫署安徽臬司印務至請給張坦麟關防之處  
查大理寺卿汪濬奉

命總督辦工程相應請

旨賞給欵差大臣關防一顆以重職守張坦麟乃協  
辦之員事同一體毋庸再行議給可也伏候

聖訓

乾隆四年正月初七日奉

旨依議欵此

(2) 大學士伯臣鄂 等謹  
奏為遵

旨議奏事據戶部查議督張廣泗奏張照糜費  
軍需一案乾隆三年十二月二十二日奉

上諭前據貴州總督張廣泗奏張照在黔糜費軍  
需銀兩摺內特標百萬軍需於前而下文奏其任  
意支領是顯然軍前所用錢糧皆張照經手之項  
是以朕降旨令其賠還十分之八後又有人奏稱  
張照奏稱經手錢糧只派發各府銀十三萬兩之  
數此外與伊無涉朕令戶部行文張廣泗確查具  
奏今據張廣泗查奏張照經手錢糧只發過銀二  
十五萬餘兩是此數與原奏迥不相符且遲至二  
年之久始行覆奏顯有回護原奏礙難措詞之處  
張照在黔辦理軍務與哈元生等意見參差不能  
和協朕是以降旨撤回加以處分又因張廣泗有  
糜費錢糧之奏是以照例責令賠補並非從前  
深惡張照而於不應著追之項罰金以懲之也今  
細覽張廣泗查奏之摺是張照本無應賠之項何  
得強令賠還朕惟以大公辦理天下之事初無成

見厥心並非此時嘉獎張照而欲枉法以寬之也  
若照戶部所議復令張廣泗再查伊仍不免瞻顧  
難於回覆此案著文與辦理軍需機大臣秉公安  
議具奏欽此 查軍需錢糧關係重大經手之大

臣官員如有任意糜費侵欺等情除按律治罪  
外仍照教嚴追賠補乃定例也前據張廣泗奏  
奏張照在黔糜費軍需一摺奉

旨著該部查明嚴追在張照名下賠還十分之八德  
布壽名下賠還十分之二續蒙

諭令戶部行文確查今據張廣泗查奏張照等移駐  
鎮遠發過銀二十五萬六千餘而其係係陸  
續存貯道庫提解藩庫且張照經手之二十五  
萬六千餘兩俱係分發各路為軍需賑務之用  
本無應賠之項已奉

諭旨甚明我

皇上天地為心凡屬臣民不令下情稍有枉抑今張

照糜費軍需一案既據張廣泗查奏仰荷

皇上洞鑒至仁至明臣等秉公酌議所有張照德希

壽名下查追之項合行遵奉

恩旨免其追即令該部行文責督張廣泗遵照辦理

可也伏候

聖訓

乾隆四年正月初八日奉

旨依議欽此

(3) 廣州將軍阿爾賽一摺 據稱廣省距京八千

餘里舊例駐防旗員題補陞缺准騎驛馬進京

近奉部行停止微員俸餉無幾難免拮据其題

補防禦之驍騎校原係預行保送時已經引

見蒙

恩准其記名發回之人應否免其送部等語 查定

例各省駐防每遇缺出該將軍於應陞人員內

揀選一人擬正咨送該旗該旗於在京應陞人

員內揀選一人擬陪引

見補於雍正二年十一月內奉

旨令各省將軍將領催內揀選保送記名發回各省補

放驍騎校若遇防禦缺出即行補用欽遵在案

嗣經恭領金珩條奏凡防禦驍騎校員缺俱由

該將軍預行揀選引

見記名題補然此內有自領催題補騎校投遇防禦缺出並不論其已滿三年未滿三年之員概不送部引

見復行題補防禦者此等人員不但已經揀選之人以為題補有期不以弓馬為事而未經揀選之人亦以為題補有人懶於學習弓馬漸致生疎亦未可定等因經兵部覆准嗣後各省防禦缺出仍遵向例於已滿三年並無飲酒改變之騎校內揀選一人擬正咨送該旗該旗揀選一人擬陪帶領引

見補放寺因現在遵行今據將軍阿爾賽奏稱題補防禦之騎校原係保送記名之人微員俸餉無幾往返盤費難艱請免其送部等情但由領催記名題補騎校之員復行題補防禦或未滿三年遽請補用或已過三年無缺可補閱久改變騎射生疎該將軍等又或因其已經揀選記名不無瞻顧之念均未可定况防禦係五品旗員現在各省俱遵照舊例咨送部旗擬定正陪帶領引

見廣州一省未便遽議更張阿爾賽所奏應毋庸議  
乾隆四年五月初八日奉  
旨知道了欽此

(4) 查湖廣鎮寧鎮實屬要缺臣並無所知可以勝任陞用之員惟查貴州安籠鎮雖係邊境但地方僻小且安靜無事現任總兵官楊國華才具明晰熟諳輿情尤長於撫輯若以調補鎮寧似屬人地相宜其安籠鎮總兵官員缺恭候  
諭旨簡用現今該鎮印務應令該督暫行委署謹擬上諭進呈伏候

聖訓

(5) 大學士仍管川陝總督查郎阿等敬籌寧夏善後事宜請照依甘肅土方之例稍增捐款等因  
一招奉

硃批大學等密議具奏欽此

查寧夏被災兵民已蒙

特遣大臣會同督撫將軍動帑發穀加意賑恤又奉

恩旨將被災州縣本年應徵錢糧及一應舊欠等項

悉行豁免為目前計已備極周詳但城郭倉庫

衙署兵民房屋渠道以及軍裝器械皆須次第

修舉勞費叢繁料理匪易今該督等會奏請照

甘省土方之例稍增款項開捐並稱地方凋瘵

已極雖多費帑金不若財貨之自至者為有益

於寧民等語臣等查捐納一項雖已於乾隆元

年正月內欽奉

諭旨文九卿會議停止惟酌留捐監一欵以為各省

一時歲款賑濟之用續又奉

旨將贖罪一條仍照舊例辦理其餘各項事例俱一

槩停止然時有緩急事有經權寧夏地震實屬

非常之災如果開捐有益亦自不妨變通若徒

冒捐納之名而終鮮利濟之實將復請增欵復

請展限終：攘：徒滋物議則甚無取也伏念

我

皇上心殷保赤獨免賦稅已不可數計邊防重地又

豈惜數百萬

帑金以惠此兵若民即該督撫等以為開捐有益

者亦原為商賈因此易於招集財貨因此易於

流通並非欲僅藉捐項以充費用也今若祇令

捐納人等前往寧夏交納銀兩該省以所收銀

兩發為各項費用是與官發之

帑金何異所稱商賈不招自至寧民不調自足竊

恐非開捐事例交銀在官即能驟致此效也况

查從前甘肅土方捐例自雍正十年七月起至

乾隆元年春季止祇收過銀十三萬三千餘兩

三色糧十五萬三千餘石今即照此例並增欵

捐納繼加數倍收獲其為益幾何應將該督等

所請開捐之處毋庸議其本省各省紳衿富戶

中如有情願携貲前赴寧夏賑卹災民招集人

戶捐辦工程凡有益地方等事此意急公尚義

之舉並非捐納可比應令呈明該督撫衙門即

照所呈准其辦理仍飭地方官善為看視督撫

等核實具題請

旨照樂善好施例交部從優議叙分別錄用俾富人

樂於趨事寧郡亦得以相資是或財貨自至之

一法至若生聚教養以為培植通商惠工以來

財貨凡有應行之良法該督撫自應隨時隨地

加意料理可也伏候

聖訓

乾隆四年正月二十六日奉

旨依議欽此

(6)

少詹事許王猷請將教職照州縣佐貳官例酌給養廉等因一摺 查各省教職蒙

恩特加品級又以教職向例兩官同食一俸未免不

敷養廉

特降恩旨從乾隆元年春李為始照品

賞給全俸是教職一官增秩加俸疊荷

聖恩已極優渥今許王猷奏請照州縣佐貳官例酌

給養廉查教官職司訓課與州縣佐貳等官辦

理地方事務及奉差遣需用者不同是以

向來教職原未議及另給養廉應將許王猷所

奏無庸議

乾隆四年正月三十日奉

旨知道了欽此

(7)

臣等看副都統蘇巴禮摺內稱八旗世管佐領親兄弟之子孫既不准其有分萬一原編佐領

之子孫偶爾無嗣則遠族之人竟可攬奪等語

查八旗世管佐領與勲舊佐領有別勲舊佐

領惟惟原立佐領之人嫡派承襲其親兄弟

之子孫雖經管過亦屬無分至世管佐領專以

管過之世次論故曰世管不但親兄弟之子孫

管過者有分即遠族之人但係曾經管過者其

子孫亦屬有分但此內又須分別支派遠近及

管過世次多寡酌擬正陪及應備用者非親凡

弟之子不論已未管過俱准一概有分也假如

嫡派無嗣其遠族管過人之子孫原應有分如

親兄弟之子孫及遠族之人俱未有管過者則

此佐領即定為公眾佐領雖有近支未經管過

亦不准襲八旗定例遵行已久蘇巴禮因有前

奏偏執已見復行濫陳殊屬舛謀其所奏遠族

之人攬奪等情俱不足為據謹

奏

乾隆四年正月三十日奉

旨知道了欽此

1101 乾隆四年二月初一日奏事郎中張文彬等傳  
旨吏部月官著於初三日帶領引見欽此

1102 乾隆四年二月初三日內閣奉

上諭江蘇巡撫許容丁父憂徐士林以母病沉重不能暫離情詞懇切江蘇地方甚屬緊要着將張渠調補諭旨到日即星馳赴任湖南巡撫員缺着貴州布政使馮光裕補授馮光裕未到任之先著張璪暫護撫印貴州布政使印務着按察使陳德榮署理按察使印務着古州道宋厚署理古州道缺緊要着張廣泗遠選賢員署理其江蘇布政使按察使署理之處仍照前旨行徐士林俟母病稍愈時自行奏聞欽此

1103 乾隆四年二月初五日內閣奉

上諭會試屆期天氣尚覺寒冷凡入場士子除照例賞給棉氈衣及姜湯茶餅外著按名給與木炭許其攜帶手爐以溫筆硯禮部可即出示曉諭入場舉子知之欽此

1104 乾隆四年二月初五日內閣奉  
上諭科場為取士大典士子始進不端安望其實心為國我

世祖

聖祖歷加飭獎特置重科以懲不法

皇考世宗憲皇帝教誨切敷科以來風清弊絕人知義命自安朕御極以來再三申命期考官士子各矢素心無復得萌奔競夤緣之陋習丙辰丁巳兩科亦稱肅清今會試屆期公車雲集風聞士子中竟有不肖之徒行險僥倖希圖夤獲奔走鑽營思逞故智者雖未有實據而浮言不盡無因此種惡習斷不可長為此嚴加訓飭應試士子務當洗心滌慮安命立品主考官留心覺察杜絕弊端著步軍統領衙門密行查訪如確有實據即行拿究立置重典倘有造言生事之徒恣意誣毀並寫匿名榜帖有意陷害者亦並嚴拿究處以肅風紀以端士習欽此

1105 乾隆四年二月初五日内閣奉

上諭科場試士時夾帶文字入闈乃士子最不堪之劣習若不嚴行查禁則荒疎不學之人多得僥倖入彀而真才轉致遺棄於掄才之典大有關係著監試御史先行出示曉諭臨點名時再加告誡務將夾帶之弊盡行革除仍有不肖之徒玩視功令者即行奏交部照例治罪毋得姑容欽此

1106 乾隆四年二月初五日内閣奉

上諭從前借給八旗文武官員一年俸銀資其生計原經王大臣等定議分作八季扣還以清庫項自乾隆二年春季扣起至本年春季共扣過五季尚有二季俸銀未扣目今京師諸物昂貴伊等用度未免拮据若將未扣之三季俸銀展為六季坐扣俾每季多領俸銀以資養贍該部可即傳諭八旗知之欽此

1107 大學士伯鄂 張 字寄 直隸總督孫 乾

隆四年二月初六日奉

上諭天津河間一帶上年積水甚深至今停蓄未嘗

疏放其他地方堤內田中積水處尚多朕思去歲秋冬既未疏放今春二麥已經無望若此時再不設法則夏禾又難佈種目前雖有賑濟將來何以資生孫嘉淦作何料理豈竟未籌及耶况現今情形如何伊並未奏明可即寄信詢問之令其逐一查明具奏欽此遵

旨寄信前來

1108 乾隆四年二月初六日内閣奉

上諭貴州安籠鎮總兵官負缺著貴州裁缺副將張朝宣補授並傳旨詢問張廣泗若張朝宣不稱安籠鎮之任即於所知總兵官內揀選一員請旨調補其所遺負缺將張朝宣補授欽此

1109 乾隆四年二月初七日内閣奉

上諭士子入場者定例給與粥飯近聞辦理草率冷硬不堪充食士子等不能均霑實惠著提調官加意料理務其妥適周備並令監場副都統等留心查看毋得疎忽欽此



1110

乾隆四年二月初九日內閣奉  
上諭大學士鄂爾泰著授為經筵講官欽此

1111

乾隆四年二月初九日內閣奉  
上諭寧夏地方被災已降旨多方賑卹此時正值春耕之際百姓當盡力於南畝以冀有秋但為被災之後伊等牛種力量不足著該大臣等轉飭有司作何商量資助之處速行辦理一面奏聞侍郎班第奉差寧夏其一切賑濟及應辦事宜目前已定有規模俟新督鄂爾達到彼講論明白交伊陸續辦理大學士查郎阿起程入都時班第一同前來  
欽此

1112

乾隆四年二月初九日內閣奉  
上諭戶部所奏各旗省虧空入官未變價之房屋德明等五案俱著給還昔我

皇祖臨御六十餘年政從寬大而內外臣工奉行不善  
怠玩成風遂致辦事暗藏弊端國帑率多虧空我  
皇考欲正人心風俗之大綱有不得不釐剔整頓之勢

此乃出於萬不容已者迨經理十餘年後人心漸知畏法風俗亦覺改遺以時勢觀之可以旌悖大之政朕是以將歷年虧空之案其情罪有一線可寬者悉予豁免即以經入官之房產未曾變價者亦令該管衙門查奏給還在此時之臣工受朕寬宥之恩未嘗不敢激歡欣俯仰舒暢殊不知從前虧空之所由來皆自心無顧忌不復知有法網以致由小而大由寡而多日甚一日本身既獲重罪子孫猶被餘殃其害有不可勝言者矣古人云漸不可長懲不可縱朕看今日內外臣工見朕以寬大為治未免漸有放縱之心即如今日工部奏

太廟慶成燈一事遂大有浮冒而工部司官營私作弊之事屢經提督衙門奏泰其他衙門與此相類者正恐不少謂之無獎可乎國家動用錢糧如果有益於兵民即數百萬金亦所不惜若被官吏侵漁私入囊橐即纖毫亦不可假借此防微杜漸之道也況在京職官俱已加添雙俸外省大小官負又皆給與養廉伊等養贍之資較從前已覺寬裕不應更有營私作弊之念自罹罪譴如果能奉公守

法將來國用充足朕何難再為加恩奈何不勉為清白以受天家優渥之澤而貪圖一時之小利置身家性命於不計乎總之朕施寬大之政而諸臣亦當存謹飭之心諸事秉公絕去弊竇則可以成朕寬大之治而長享福慶於無窮若因寬成玩故智復萌則姑容於此日者朕必綜覈於將來即朕之子孫亦必無聽其玩法欺公不加重懲之理是不肖臣工縱能僥倖於一時仍不能脫然於身後人非至愚亦當猛省及此況我

皇祖

皇考之寬嚴相濟乃審時度勢至當不易之成憲後世

子孫豈能外此以求治天下之道乎云人云水至清則無魚人至察則無徒此言在上者當如此存心耳若人臣不知謹守繩墨而欲以此為自便之術則諸弊源長國法廢弛又豈可以為訓乎將此曉諭內外大小臣工共知之欽此

1113 乾隆四年二月十二日內閣奉

上諭各省漕船載運北上例有隨幫千總協辦運務山東等五省均於原工之外給與養廉以為資斧

前因江南未曾議及已降諭旨每員每歲賞銀二十四兩著為定例今查得湖南一省隨幫千總向例亦無養廉之項未弁既辦公事自當一體加恩著照江南之例每員歲給銀二十四兩從乾隆四年為始於司庫存公銀兩內動支欽此

1114 乾隆四年二月十二日內閣奉

上諭輪進經史講義之御史程盛修所進咏史樂府十二章指事寓規詞意婉摯得獻納之意與泛論經史者不同甚屬可嘉著賞內用緞二疋筆墨二種以示嘉獎欽此

1115 大學士伯鄂 張 宇寄 直隸總督孫 直隸提督永

乾隆四年二月十五日奉

上諭此次派往北路副將不過領兵駐防易於勝任吳開增自北路軍營回京未久今又復將伊派往辦理殊為未協但既已派出不必更換可寄信孫嘉淦永常知之欽此遵

旨寄信前來

1116 乾隆四年二月十六日內閣奉

上諭四川龍安府知府李天祥著來京引見其知府員缺著推爾哈善補授欽此

1117 乾隆四年二月十六日內閣奉

上諭朕從前降旨將代賠祖父虧空已奉恩免人等停選停補者俱准歸入伊等班次銓選其因追賠祖父虧空革職之員亦准一體開復今朕念旗人有因代賠祖父虧空力不能完治以枷責之罪者此等人員與本身虧空及緣事枷責者究屬有間概行擯棄情亦可憫伊等如願考試著該旂查明除原案內載有不准考試字樣外俱准一體考試俾各奮勉自新以昭朕格外加恩之至意欽此

1118 乾隆四年二月十六日內閣奉

上諭各部院堂官到乾清門者朕令開寫名單進呈或因部院之事有所詢問或曰萬幾之暇以備召見今日禮部侍郎木和林既經開送名單及傳伊進見業已散去殊屬不合著交部察議欽此

1119 乾隆四年二月十六日內閣奉

上諭江西九江關稅務著內務府員外郎唐英管理欽此

1120 乾隆四年二月十七日內閣奉

上諭朕前降旨內廷編纂刊刻諸書許各省翻刻刷印廣為傳布蓋以五經通鑑等書為士子誦讀所必需而內廷纂刻者實為善本可以裨益後學為藝苑之津梁也至朕所製樂善堂全集及日之書說乃就朕所知見著為文辭其能闡發聖賢之義蘊與否究未能自信年來頒賜廷臣亦不過令其閱看豈可與經史並列今天下士子奉為誦習之資乎今巡撫石麟法敏先後奏請頒發二書欲為翻刻流傳是不知朕心之甚矣二臣既有此奏恐他省踵至不少朕之批示不勝其煩特降此旨諭令共知之欽此

1121 乾隆四年二月十八日奉

旨山西巡撫石麟有摺奏來時著頒發古文淵鑑一  
部欽此

1122 乾隆四年二月十八日奉

旨諭山東巡撫法敏有奏摺來時著頒發周易折衷一部欽  
此

1123 乾隆四年二月十九日內閣奉

旨果毅公訥親等差往馬蘭峪永平府沿山一帶至  
保定府等處相度吉地所有隨往官員人等俱著  
一併馳驛前往欽此

1124 乾隆四年二月十九日奉

旨閱看進試卷著派尹繼善欽此

1125 乾隆四年二月二十二日內閣奉

旨諭據大學士查郎阿西安巡撫張楷奏報陝西冬  
春以來得雪情形頗不及直隸山東等省之透足

且有雨雪微細現在望雨之州縣從來之後多遇  
歉年朕心早為秦省憂慮向大學士等言之今覽  
奏報情形深為屢念不知目前東作如何將來麥  
秋可望否督撫等當敬謹修省盡人事以感召  
天和其應為小民預先籌畫之處加意料理該部可即  
傳諭知之欽此

1126 大學士鄂 張 徐 字寄 直隸總督孫

乾隆四年二月二十二日奉

旨諭據大學士查郎阿西安巡撫張楷奏稱陝省制  
錢已屬缺少而商民人等竟有將錢文販往湖廣  
河南成馱成車以圖利息者現據潼關商州地方  
官查出合計數日之內出境之錢不下數十萬等  
語朕思陝西地方如此京師此弊更不能免惟是  
四通八達之區難於查禁若朕特降諭旨又恐奉  
行不善轉致滋擾可密寄信與孫嘉淦令其於出  
京要隘之地設法稽查若有裝運多錢於舟車之  
中以圖販賣獲利者即於近京地方押令將錢易  
銀方准前去庶奸商販運之弊可以漸少欽此遵

旨寄信前來

附錄

(1) 卽中徐萬卷一摺 據稱

至聖墓碑尚沿舊篆大成至聖文宣王之墓今神道

碑大書至聖先師孔子神道則墓碑六宜稱至

聖先師孔子之墓以致尊崇等語 臣等伏查

孔林墓碑雖沿舊文但穹碑墓上已歷數百年

之久未可輕議改建如添立新碑則墓上從無

兩碑並立之理况神道已書為先師孔子則墓

碑何妨仍存舊文應將徐萬卷所奏毋庸議

又稱漢河間獻王劉德博購遺書有功經籍似

當從祀

文廟等語 查漢武帝購求遺書河間獻王躬逢其

會兼以性好儒學廣蒐經籍是以史稱其賢然

歷代以來未有議及從祀

孔廟者蓋購求經籍與表章闡發自屬不同河間

獻王著述無傳從祀大典未容輕議徐萬卷所

奏應毋庸議

乾隆四年二月初二日奉

旨知道了欽此

(2)

御史明德條奏一摺二條 據稱督撫保舉屬

員多尚於兩司及探問于道府及保舉之後該

員犯有侵盜貪酷等案在督撫受濫舉之議震

固所難辭而平日掩短飾長表揚夫實之輩反

得超然事外請嗣後督撫保舉人員如係督撫

自行深知者於本內聲明臣實深知字樣如係

某員薦舉者亦於本內聲明某員薦舉字樣併

取薦舉之員之印甘文結隨本送部以憑查照

如保舉陞補後該員有犯侵盜貪酷等案將督

撫及原薦舉官一併交部分別議處等語 查

督撫保舉屬員非係素所深知卽由司道薦舉

其所薦之員果否賾能司道之稱譽有無失實

則全在督撫之自行詳察是其人卽非素所深

知而亦必待深知之後始可列之薦章今該御

史奏稱督撫保舉人員如係自行深知者於本

內聲明臣實深知字樣如係某員薦舉者於

本內聲明某負薦舉字樣是替撫於屬負非素所深知者一經司道薦舉竟可不深知其入即行保舉矣查定例保舉薦舉府州縣官照例開列實蹟倘不自替撫將無實蹟者妄行空填字樣保薦不實別經發覺者照貪酷匪人狗情薦舉車異例將替撫各降二級調用申詳之司道府等官各降三級調用是申詳失實之司道府等官處分已有定例該御史所稱保舉本內將督撫素知深知與保某負薦舉分別聲明之處有乖政體應毋庸議

又據稱嗣後替撫奏題屬員於革職提審之日除重罪審寔輕罪審虛者不議外倘有輕罪審實重罪審虛其所犯不止於革職而先行請革以示威者將替撫及揭報之司道一併交部分別議處等語查替撫奏劾屬員定有替奏撫審撫奏替審之例以防屈抑又定例原奏審係全虛准予開復而不定替撫之處分正恐替撫叅劾或有失實得無回護之心而屬員得有伸理之益也今若於輕罪審實重罪審虛之案將替撫及揭報之司道定以處分則替撫或回護

原奏而承審之負亦不無瞻徇迎合務實其罪是欲嚴叅劾失實之防而反致有偏私屈抑之弊至屬負所犯不至革職則自有應得之處分並無劣蹟款項替撫何得有遠行請革示威之事伏查乾隆元年五月內欽奉

上諭朕見直省督撫糾劾屬負臚列劣款在替撫自必細加訪察而後形之章奏但其間有由道府詳揭者豈遂無核私報怨之弊亦有自行訪聞者或得諸胥役家人與幕賓過客之詞豈必事皆為實蹟惟應於叅劾既行奉旨發審之時秉公推問務得確實以期平允倘內有屈抑即將起初誤聽緣由自行檢舉或撫奏替審替奏撫審者亦勿瞻顧同官之情有所假借如此則用法皆得其平屬負共知儆惕而替撫改過不吝不愧公而忘私之義庶無負朕委任大負體恤下情之心也欽此是替撫奏審屬負等事蒙我

皇上洞照無遺

聖諭已極周詳該替撫自當仰體

聖心凡遇糾劾之案秉公辦理該御史所奏應亦毋

庸議

乾隆四年二月初七日奉

旨知道了欽此

(3) 查張朝宣原係貴州威寧協副將乾隆二年八

月內貴州總督張廣泗題請威寧協改鎮業內  
經部議將張朝宣裁缺另補現今尚未補缺再  
貴州所屬古州鎮遠威寧三鎮較安籠鎮尤屬  
要地似難調補是以將所屬改寫所知合併

奏明

(4) 御史馬昌安一摺 據稱粥廠就食窮黎歸路

無資請照往年饑民之例凡附近州縣民人酌  
令遷還各本處並交該督轉行各州縣著令實  
心安紳設法料理使之不廢務農等語 查五  
城粥廠貧民衆多今賑期將滿自宜散歸種地  
傭工各務本業今該御史奏稱此等窮黎歸路  
無資伏查上年三月內欽奉

恩旨于停賑之日著每名再賞給口米一斗以資前

路食用今年請仍遵照

恩例於停賑之日每名賞給口米一斗交五城御史  
司坊官按照食粥人數散給又查直隸總督孫  
嘉淦奏稱附近各府多有赴京就食之人今春  
融雪降東作方興惟恐小民不能及時回家已  
飭令大宛兩縣就近稽查如有在京別無生計  
應行回籍之人俱令酌給盤費移回本籍仍飭  
該地方官酌借籽種口糧撫綏安紳務使偷寓  
者復業遊惰者歸農等語是就食窮民如何送  
還各本處及各該州縣如何安插料理之處現  
據該督

奏明辦理在案該御史所奏應毋庸再議

又稱每遇水旱之年雖實成災而屬員惟恐上  
司之猜疑必減數詳報上司復慮屬員之侵欺  
必竭力駁查及至散賑州縣官不能周詳妥協  
終至有名無實請於京堂科道內檢派分遣各  
該處協同州縣官辦理如所存倉儲不敷即奏  
明于納粟捐監之外暫開賑捐之例或准給予  
封典或予以項帶榮身酌設捐款等語 查州  
縣詳報水旱成災分數得按例蠲免錢糧事關

民漢州縣非甚不肖，無故為減數詳報者，惟是上司慮所報不實，駁查太過，或所不免查，乾隆三年五月內欽奉

恩旨將被災五分之處亦准報災，蠲免錢糧十分之一，永著為例。該督撫有司如遇地方被災，自當仰體

皇上視民如傷之

聖心查訪確實，加意撫綏，務令茅檐葺屋，均沾膏惠。如有減報成災分數，或散賑減報災民戶口，以致窮民失所，別經發覺，即將該督撫有司查明分別議處。至稱分遣京堂科道辦理賑務之處，京堂科道豈皆諳習外省散賑之事，未必協辦，悉能詳妥。而地方官先增一番供應，周旋徒為滋擾無益，又稱倉儲不敷，請暫開捐賑之例，查各項捐納已於乾隆元年二月內奉

旨停止，即倉儲不敷之地，惟應隨時設法料理，豈可遽議開捐，況成災之地，果係富民，出其餘穀報捐，固於地方有益。若爭相購買，以致穀價騰貴，轉多未便，應將該御史所奏派遣京員及酌開捐例之處，俱無庸議。

乾隆四年二月初八日奉  
旨知道了，欽此。

(5) 考選科道例

順治元年定以中行評博及行取知縣考選

康熙十九年定非正途出身者不准考選

二十年定京官三品以上及督撫子弟不准考選

三十年以從前補授科道有簡用者亦有考用者

言官不全在文字停其考試

四十三年定行取知縣停止督撫選擇查俸滿在

前正途出身知縣三員具題行取

四十四年定行取知縣以主事補用後方准考選

其中行評博等官除知縣陞任者照例考選外

初任者俟陞主事後方准考選凡遇考選時正

途出身部屬照三十六年例令各堂官保送編

修檢討照三十六年例令各堂該衙門保送

四十五年停其由本堂官保送

雍正五年定科員缺出將御史補授所遺御史員

缺以應考選人員補授

又定科道缺出在京則令各部院堂官於各屬司



官內不論科甲貢監保送翰林院於編檢內保  
送其在外州縣官各督撫保送到日帶領引  
見選定南京者以科道補用

十三年科道仍用正途出身

乾隆三年將翰林院部屬通行引

見記名有御史缺出開列引  
見

(6) 臣等看副都統王進泰一摺 據稱八旗有因

代賠祖父虧空力不能完加責人等較之本身  
緣事加責者情有可原且事在屢次

恩赦以前其中有情願考試者查明原案內如無永  
遠不准考試字樣俱准一體考試等語 查八  
旗因代賠父祖虧空停選停補及革職人員俱  
已奉

恩旨准其開復銓用其中有力不能完治以加責之  
罪者固不便與

恩免之人一體開復但代賠父祖虧空與本身緣事  
加責者有間今該副都統奏稱有情願考試者  
查明原案內如無永遠不准考試字樣俱准一

體考試等語該副都統亦係仰體從前所奉  
恩旨而有此奏似屬可行臣等謹擬  
上諭一併進

呈伏候

諭旨

乾隆四年二月十六日奉

旨是欽此

(7) 侍郎方苞奏請

飭發內府舊板經史并令督撫購求送館及校勘事

宜等因一摺 據稱庫內存貯書籍並無監板

經史而現今監板吏剝蝕無一完善可憑以校

對伏祈

皇上飭內府并內閣藏書處備查舊板經史

諭在京諸王大臣及有列於朝者如有家藏舊本即

速進呈以便

頒發校勘等語 查十三經廿一史既重加刊刻自

應多覓善本將謬誤遺缺之處詳志校正以垂

永久應如所請行文內府並內閣藏書處查檢

舊板經史即行彙館以憑校勘如諸王大臣官  
自有家藏秦昌以前舊本或十三經或廿一史  
即令秦明文館仍將所進之書登記檔案俟官

書告成之日查照原書印給一部以示獎賞其

原書仍行給還至稱飭令江南浙江江西湖廣  
福建五省督撫購求明初及秦昌以前監板經  
史送一二部到館彼此互證等語查舊板經史  
多得善本恭查考證自屬有益應令各該督撫  
留心購求不必拘定省分該督撫亦不得勉強  
索取如有情願售賣者即酌量給與價值所費  
無多更屬妥便

又稱孔穎達賈公彥等所引十三經及傳註並  
周秦間諸子已多謬誤請詳悉校勘一一開列  
進呈

御鑒酌定改正等語查十三經註疏現今刻本錯誤  
之處甚多而疏解中並有因誤傳誤者自應細  
心考訂開寫進

呈恭候

聖訓改正以惠後學

又稱前侍講學士何焯曾博訪宋板校正前漢  
書後漢書三國志遺訊並求下江蘇巡撫向其

家索取原書照式改注別本送館原本仍還本  
家毋得損壞等語應如所請行文江蘇巡撫所  
有何焯校正之前漢書後漢書三國志或向本  
家或他處覓取即行照式改注別本送館其原  
本仍行給還

再據所奏校勘事宜五條 一稱經史必更者  
校對一字無訛始可備樣必樣本對清始可登  
板若限期催促一部未成又彙一部必多錯誤  
等語查校對必令一字無訛難期辦理然  
如何分派校對應令該總裁等立定課程始無  
推諉遲延之弊又或書少人多校對易畢寫樣  
刻板之際即可校對別部亦不必拘定一部全  
成之後始及另部也 一稱擬擇原在

殿編校編檢庶吉士十二人合同分派先對十三  
經五稽經傳以考舛誤限八月內將底本全完  
繕摺進呈

御覽次及史記前漢書後漢書三國志四史皆有注  
解亦宜詳勘以下諸史則參伍舊本增改落字  
錯字加功較易等語查校訂經史先後自應如  
是辦理 一稱舊刻經史俱無句讀因此纂  
輯引用者多有破句必熟思詳考務期自讀分

明使學者開卷了然乃有裨益等語查十三經

經文因有註疏詳明句讀易曉唐以後史書亦無難讀者至註疏及史記前漢書後漢書以及三國志魏晉等書俱使句讀分明自屬有益學者但疑似難定之處應令細心審辦不致舛誤

一稱前明所刊經史卷內漢唐先儒姓名卿里及校刊職官姓名款式各殊今擬做馮夢

禡重刻史記之例王大臣監修校勘列於目錄之前漢唐先儒列於每卷之前分校諸臣列於每卷之末卷內若有遺誤謫則分任其責者無可推諉庶幾各竭心力又在

殿翰林內有詹事府正詹陳浩左庶子周學健翰

林院侍讀學士呂熾編修朱良裘行走年久向來一切編校之事承辦居多今擬將諸翰林所對經史仍派令此四員分領以專其責等語查監脩校勘之王大臣列於目錄之前漢唐先儒列於每卷之首分校諸臣列於每卷之末照此款式刊刻眉目既清亦可以專責成應如所奏辦理至陳浩周學健呂熾朱良裘四員既據方

苞奏稱皆在

殿編校年久其派令分領諸翰林所對經史之處

亦應照所請委辦 一稱自來書籍只齊下

線惟

殿中進呈之書並齊上線臨時或烘板使短或衰

板使長數烘數衰板易朽裂伏乞

特降諭旨即進呈之本亦止齊下線不用烘衰度可

久而不敝等語查

殿中進呈之書欲令上下線俱齊因有衰板烘板

之事究之仍屬參差不能俱齊應請

勅諭該總裁等以後刷印進呈書籍或日久板片長

短有不畫一不得仍前烘衰止齊下線刷印裝

釘永遠遵行可也伏候

諭諭旨

乾隆四年二月二十三日奉

旨依議欽此

1127 乾隆四年三月初一日內閣奉

上諭據大學士查即阿奏稱甘州府知府員缺於上年十二月內奉旨著李綿祚補授查甘州地處巖邊兩面逼近番夷城中有重兵駐劄知府為地方之統率必得熟練邊情之幹員方可輯兵民為一體李綿祚初到甘省於邊陲情勢未必即能熟悉今慶陽府知府楊績緒報丁母憂其所遺員缺亦係腹衷疲難要即若以李綿祚調補慶陽亦可藉以振頌有臣從前係奏之階州直隸州知州黃澍老成練達素悉邊情向在西寧知府任內辦理妥協倘蒙准其補授甘州府知府則駕輕就熟邊鄙可收得人之益等語著照查即阿所請將李綿祚調補慶陽府知府黃澍補授甘州府知府欽此

1128 乾隆四年三月初三日內閣奉

上諭兵部現無辦事之滿侍郎吏部侍郎喀爾吉善著暫兼管兵部事務欽此

1129 乾隆四年三月初三日內閣奉

上諭吏兵二部現俱纂修則例八旂與步軍統領衙門閱會事件甚多亦應修定則例以便遵照辦理著步軍統領會同八旂大臣酌議具奏欽此

1130 乾隆四年三月初三日內閣奉

上諭二月二十九日批奉處少交禮部本章一件經內閣詢問批本處據管本即中七達色查出得談班官員奏現交部察議朕思本章出入關係重大防微杜漸不可不慎嗣後凡有應發本章如批本處未發內閣即行奏聞內閣未發部院即行奏聞該部未經行文替換即行奏聞不必相問奏事處亦照此例庶將來朦混遲延之弊可以永杜矣欽此

1131 乾隆四年三月初四日內閣奉

上諭據安徽巡撫孫國璽奏稱廬鳳道畢誼在任貪鄙已經會訊糾參其員缺甚屬緊要查有廬州府知府高越年富力強歷練勤敏堪以署理廬鳳道事至廬州府知府亦係銜繁難最要之地查有宿州知州尤拔世在江年久熟習民情勤慎明敏實宜安詳堪以署理廬州府知府事等語著照孫國璽所請高越署理廬鳳道印務尤拔世署理廬州府知府印務欽此

1132 乾隆四年三月初四日內閣奉

上諭各省藩臬兩司朕已令其陸續來京引見至道府人員亦係地方緊要職任非朕親見無以知其優劣著各省督撫查明除已經引見之道府無庸再行送部外將未經引見者酌量本地情形時可以來京給文送部引見該部可即行文各督撫知之欽此

1133 乾隆四年三月初六日內閣奉

上諭前岳鍾琪派撥寧夏官兵一千名移駐涼州旋因駐涼兵丁已足數用將此兵撤回所有領過賞銀一萬七千兩欽奉

皇考諭旨暫免追繳俟大軍凱旋之後再行奏聞請旨今大學士查即阿具奏請旨前來朕思兵丁等所領賞銀歷年已久此時料難繳還况寧夏地方去冬板定尤當加恩撫卹此所欠應繳銀一萬七千兩悉著豁免該督等可即出示曉諭眾兵知之欽此

1134 乾隆四年三月初八日內閣奉

上諭據大學士查即阿等奏稱寧夏鎮標分發各當生息銀兩自上年地震後查被災甚重之各當舖所領生息本銀共計八千五十七兩零其雖經被災貨物未致全失之各當舖所領生息本銀共計四千五百四十兩零可否分別加恩寬恤謹此請旨等語朕念寧夏此次地震商民同時受災深為憫惻著將被災甚重各商所領八千五十七兩之

本銀併利銀俱著豁免其被災之稍輕各商止令交還所領本銀四千五百四十兩所有應交利銀悉著豁免至此項豁免銀兩有關兵丁緩急之需不便缺少著在蘭州藩庫內照數撥補足額以資生息俾兵民一體均霑恩澤欽此

1135 乾隆四年三月初十日內閣奉

上諭五城散賑例於三月二十日停止貧民自應散歸本籍各務農業上年曾降諭旨每名賞給口米以資歸途食用今年停賑之日著照上年之例仍按食粥人數每名賞給口米一斗勸諭速歸本土勿誤春耕可傳諭都察院知之欽此

1136 乾隆四年三月十一日內閣奉

上諭江南地方上年被旱收成歉薄米價高昂朕已切諭該督撫多方籌畫以濟民食諒不致於失所惟是各營兵丁等雖有額支月餉之項而值此歉收之歲諸物騰貴未免食用艱難朕心深為軫念著於夏月在司庫內借給一月餉銀以卹其困之

俟本年九月秋收之後每放月餉陸續扣除分作十個月清還庫項可即傳諭江南督撫提督等上下兩江俱遵旨一體辦理欽此

1137 乾隆四年三月十一日內閣奉

上諭湖南省城步綏寧二縣淫盜蒲寅山妄行劫殺拒敵官兵一案朕已降旨從寬完結聞各犯家口應行發遣邊外者其中有無依之婦人及十五歲以下之幼小子女若照前議發往長途邊戍等無人恐難保其身命情可憫惻著照昔年黔省安棟之例在於附近省會隔越苗疆之處變賣得價即以分賞有功兵丁該督德沛可遵旨妥協辦理欽此

1138 乾隆四年三月十二日內閣奉

上諭據安徽巡撫孫國璽奏稱宿州鳳臺靈璧石埭等四州縣上年雖未被旱但查有未完雍正十三年乾隆元年二年錢糧均係從前災緩之項例應現在分年帶徵又舊欠錢糧之隨徵耗羨及被災

所屬內尚有未完乾隆元二兩年災緩漕糧亦係帶徵之項其成災太平銅陵壽州貴池桐城涇縣巢縣臨淮懷遠虹縣霍山和州無為望江青陽當塗繁昌合肥廬江鳳陽霍邱泗州全椒含山併長淮衛等二十六州縣衛內勘不成災之田地併上年被旱勘不成災中之潛山宿松東流等三縣及未經被旱中之歙縣休寧祁門黟縣績溪建德阜陽宿州衛等各縣衛均有未完各年錢糧俱應限年催徵非係分年帶徵之項再蘆課向於每歲冬涸之候始行砍伐是以課賦逐年整徵亦非分年帶徵之項合行分晰奏聞等語朕因上年安徽旱災甚重時深屢念曾降諭旨將雍正十三年乾隆元年二年分未完地糧蘆課及米穀麥豆等項例應將來分年帶徵者悉行豁免今宿州鳳臺靈璧石埭四州縣雖未被旱所有未完雍正十三年乾隆元年二年錢糧亦係從前被災緩徵之項現在分年帶徵與江蘇合屬被災緩徵等項相同著一體加恩豁免其舊欠之隨徵耗羨併被災各屬帶徵乾隆元二兩年之災緩漕糧着遵照前旨俱隨正項豁免至成災之太平銅陵等二十六州縣衛

內雖尚有勘不成災之地畝而收成亦屬歉薄且農民工本較之常年自必多費所有舊欠錢糧現在催徵小民未免苦累着該撫查明一併豁免其未經被災及勘不成災之各州縣雖稍有收成而介於成災之區仍不免於物力艱難所有催徵舊欠錢糧亦著加恩分年帶徵以紓民力再蘆課除係過年整徵之項照例徵外如有舊欠力不能完應行豁免者着仍照前旨行戶部可即行文該督撫一一遵照辦理出示曉諭務期實惠均霑以副朕嘉惠元元之至意欽此

1139 乾隆四年三月十二日內閣奉

上諭上年直隸江南地方收成歉薄此時青黃不接之際米糧價貴用度艱難朕軫念兵丁已令江南督撫借給一月餉銀濟其匱乏俟九月初收之後分作十個月扣除還項直隸歉收米貴之處亦當一體加恩著該督孫嘉澍查明每兵借給餉銀一個月亦照江南之例於九月後在本年餉內分作十個月扣還該部可傳諭該督等知之欽此

1140 乾隆四年三月十二日內閣奉

上諭從前河道總督高斌因議疏濬毛城鋪水道之時並請新開新運口堵塞舊運口以避黃河倒灌及至上年秋月黃河水勢盛漲倒灌運河大有淤墊舟楫難通論者以為年係新開運口之所致朕屢降諭旨詢問旋據那蘇圖高斌等奏稱十月以後黃水平退湖水暢流入運新淤浮沙隨流洗刷可無淺澁之虞今年正月高斌又奏稱上年清水微弱適值黃水異漲並非新開運口之故三月間那蘇圖又奏稱近日運河水勢較前更為充裕大船過行無阻此屢次奏報之情形也近據外間傳說及南來之人多言黃水淤墊之慮究竟未曾刷洗淨盡而改新口雖離黃稍遠而上流水勢傍洩其力已弱不能直注黃河將來倒灌阻塞之患終不能免人言如此是否確情朕寔難以遙定此事關係甚為重大必得公直明練之重臣前往詳加閱看定其是非始可以除河渠之患而成久遠之功再三思維惟有命大學士鄂爾泰乘驛前去庶與朕親臨閱視同若高斌所改果是則照依辦理屢

言可息朕亦可以釋疑倘宜仍開舊口則講論明晰高斌亦必心服不固執前見也其附近賑濟之慮著大學士一併就便察看欽此

1141 乾隆四年三月十二日內閣奉

上諭國家興修工作催募人夫原欲使小民寔受價值以為贍養身家之計至於荒歉之年于賑濟之外修舉工程俾窮民赴工力作不致流移更非平時可比其安全撫恤之心亦良苦矣凡為督撫大吏及地方有司自當承宣德意敬謹奉行使閭閻均霑寔惠方不愧父母斯民之職朕訪聞得各省營繕修築之類其中弊端甚多難以悉數或胥吏侵漁或土棍包攬或昏庸之吏限於不知或不肖之員從中染指且有夫頭扣剋之弊處處皆然即如挑濬河道一事民夫例得銀八分者則公然扣除二分應做工一文者則暗中增加二尺或分就工程用夫一千名者寔在止有八九百人以國家養惠百姓之金錢飽貪官污吏奸棍豪強之慾壑其情甚屬可惡是不可聽其積弊相沿而不加意



鑿剔者嗣後凡有興作之舉著該督撫轉飭該管官員實力稽查務使工價全給民夫無絲毫扣剋侵蝕之弊倘該管官員稽查不力督撫即行嚴恭加拘斥屬員或失於覺察朕必于該督撫是問欽此

1142 乾隆四年三月十四日內閣奉

上諭向來李衛為總督時留心武備直隸地方營汛塘舖頗皆整飭近聞日漸廢弛營兵怠於差捺而塘兵疎於巡捕以致行旅往來提防盜竊頗有戒心此往來之人所共知者從前孫嘉淦到任時朕即以此事丁寧告誡今果如朕所料可傳諭總督孫嘉淦提督永常令其加意整理毋令弁兵等偷安怠玩倘再有疎縱之處必將該督提及官弁等嚴加議處兵丁從重治罪欽此

1143 乾隆四年三月十四日內閣奉

上諭朕訪聞得福建漳州府知府王德純居官劣蹟種種著將王德純革職其款蹟抄出發與該署撫王士任令其秉公嚴審定擬具奏欽此

1144 乾隆四年三月十六日內閣奉

旨尚書史貽直著充律例館總裁欽此

1145 乾隆四年三月十七日內閣奉

上諭據兩江總督那蘇圖奏稱常鎮道周紹儒以伊母年老迎養在任不服水土懇請奉母回旗終養等語朕思周紹儒之母不服南方水土若在山東居住自必相宜周紹儒著調補山東督糧道趙城著調補江南常鎮道欽此

1146 乾隆四年三月十八日內閣奉

上諭在京各部院之弊多有于書吏之作奸外省有一事件到部必遣人與書吏講求能飽其欲則引例准行不遂其欲則借端駁詰司官庸懦者往往為其愚而不肖者則不免從中添指至於堂官事務繁多一時難覺察且既見駁稿亦遂不復生疑以致事件之成否悉于書吏之手而若輩肆行無忌矣朕思此等弊竇在京難於查察而在省外省則情節顯然某事用費若干某項係何人經手或督撫著人料理或藩臬等著人料理而督撫亦未有不知者使為督撫者嚴正持躬深知大體不為宵小之所搖惑而遇有評書需索之事即據寔奏聞置之于法則若輩知所畏懼而舞文弄法之風可以漸息昔我

皇考時整飭百度各督撫等又仰體

聖心直陳無隱幾有風清弊絕之意自朕御極以來政尚寬大若輩故智復萌督撫藩臬等以為所費不多何必與之較量止圖案件之完結遂樂為應付而不惜甘為容隱而不言無怪乎奸胥滑吏以詐騙為得計視國法如弁髦也內部之書吏索之督撫而督撫應之則彼此効尤無所底止必致督撫之書吏索之司道司道索之書吏索之府縣層

累而降受其害者仍在吾民也蓋未定養廉以前外官高有贏餘以供意外之費既定養廉以後更無餘資以應苛索不取之百姓將誰取乎各督撫俱有澄清吏治移易風俗之職任豈可視為相沿陋規而躬自蹈之以為官吏之倡貽閭閻之困乎嗣後著嚴行禁止藩臬以下經手之案著督撫嚴查禁約倘書吏有仍前需索者督撫即時奏聞如有不遵朕旨私相授受者必將與受之人照枉法贓治罪督撫容隱不奏亦必嚴加議處各省閭閻差盜政織造提鎮等官俱照此旨一體遵行再朕聞得各省織造解送緞疋于內庫該庫官每疋秤較其分兩稍有不足即駁回不收而重者即置而不論此即需索之一端夫緞疋成于眾手豈能輕重違均畧無差少若此件不足彼件有餘即不得謂之分兩不足矣嗣後交納之時當合摠秤其輕重不當每疋秤較若合秤不足方許駁回將此永著為例欽此

1147 乾隆四年三月二十日內閣奉

上諭直隸地方上年收成歉薄朕多方籌畫蠲賑顯施務使黎庶得以安全不致一夫失所今幸雨澤沾濡麥秋可望朕心稍為慰藉惟是畿輔一帶連

年薄以百姓元氣一時難復其上年勸不成災之  
地方與未被水之州縣雖年穀尚有收成而與成  
災之處壤地相連轉移接濟物產豈能充裕此等  
地方均有緩徵未完之項今當輸納錢糧之期若  
將新舊同時並徵民力未免竭蹶為此特頒諭旨  
著將從前部議成災五分六分二年帶徵之處及  
勸不成災地方緩徵之項俱分作三年帶徵其並  
未被水州縣經徵未完之項分作二年帶徵庶閭  
閻得減輸將之數力量有覺紓該部可即行行文  
該督孫嘉淦遵照諭旨確查分晰辦理欽此

1148 乾隆四年三月二十日內閣奉

旨將候推守備李之麟十總外圖庫陸岐帶領引

見奉

旨李之麟外圖庫交直督孫嘉淦以守備即用陸岐以

守備題補欽此

上諭朕聞泰陵鎮右營守備賀世昌人甚平常不能  
辦理營務且年已六旬精力衰憊此等員弁於營  
伍甚無裨益可寄信與孫嘉淦查明具題照例勒  
令休致欽此遵  
旨寄信前來

1150 乾隆四年三月二十一日奉

上諭現今滿洲大學辦事人少查即阿未到京之際著訥親  
協辦大學士事務欽此

1151 乾隆四年三月二十一日內閣奉

上諭北河効力州同張肇殷通曉醫理著來京在兵部額外  
主事行走欽此

1152 乾隆四年三月二十二日內閣奉

上諭向來新科進士於殿試之前有呈送頌辭之陋習近來  
此風又覺漸熾夫士子進身之始即從事於請托奔競則  
將來服官尚安望其有所樹立以脩國家之用而大臣等  
亦宜清白乃心絕請托之私為國家培正材著該部出示

1149 尚書果毅公訥 字寄 直隸總督孫

乾隆四年三月二十日奉

通行曉諭嚴加禁止倘有違旨仍蹈故轍者經朕訪聞或科道官奏奉必將與受之人一體從重治罪欽此

1153 同日內閣奉

工諭朕念切民生時屢宵旰或各省督撫陞見或遇司道各員請訓務以編氓疾苦憐悉諮詢惟期海隅蒼生培固元氣庶臻家給人足之風比年以來畿輔地方屢遇歉收而江南舊年被旱尤甚此皆朕之不德以致

上蒼亦警遂使吾民有之食之虞朕甚憫焉今年幸賴上蒼恩佑各省春雨頗周足資耕種重念三省之民幸有以

安其心尚未能復其舊其被災處所既已蠲賑須施糜頒諭旨茲當開徵之期在被災者固屬艱難而未被災之地同在一省雖有輕重之分而乏食受困則一用是特頒諭旨將直隸總督所屬今年地丁錢糧蠲免九十萬兩蘇巡撫所屬今年地丁錢糧蠲免一百萬兩安徽巡撫所屬今年地丁錢糧蠲免六十萬兩該督撫將朕旨家喻戶曉俾閭閻均受實惠庶幾和氣致祥以仰答

上天之恩而培生民之本倘有貪官污吏借端苛索或私行征收者該督撫不時查奏該部即遵諭行欽此

1154 乾隆四年三月二十三日內閣奉

上諭聞浙江敷文書院內生童讀書者衆多每歲帑金租息銀僅四百餘兩不足以敷贖糜著加賜帑金一千兩交與該撫經理歲取息銀以資諸生膏火欽此

1155 乾隆四年三月二十四日內閣奉

上諭科道為朝廷耳目之官必知無不言隨時啟督方有裨于政治近來科道官員條陳甚少即有一二奏事者亦皆非切當之務無裨輕重即如鄉會試之夾帶文字殺試之前呈送頌聯朕皆得之訪聞而科道官並未奏陳奏及此自失毋蹈緘嘿陋習以仰副朕簡用言官之意欽此

1156 乾隆四年三月二十四日內閣奉

上諭趙之垣自簡任副都御史以來毫無建白人亦平常鴻臚寺少卿田懋前為科道時尚屬敢言不愧臺諫之職著從優陞授副都御史其鴻臚寺少卿員缺即着趙之垣降補欽此

1157 乾隆四年三月二十五日內閣奉

上諭同知林興泗知州楊大勳知縣高廷獻唐孝本

翰林謝道承陳兆崙徐琳俱著該部帶領引

見欽此

1158 大學士張 徐 協辦大學士訥 字寄 浙

江巡撫盧 乾隆四年三月二十六日奉

上諭朕見工部駁減浙撫修理蘭亭工費一本部駁

甚是蘭亭名勝之區鐫刻

皇祖御書理應修葺以肅觀瞻但係已定之規模略加

整理並非從新建造可比何至須費四千餘兩之

多且此等事只應具摺陳奏不當用本今盧焯且

本核題又經部議題奏難以發還只得就本批發

可傳旨申飭盧焯令其知之欽此遵

旨寄信前來

1159 乾隆四年三月二十六日內閣奉

旨尹會一著頒賜

御製孝經

御註孝經文獻通考紀要大學衍義近思錄各一部

欽此

1160 乾隆四年三月二十七日內閣奉

上諭廣西平樂府知府曾慶龍著調補雲南廣西府

知府雲南廣西府知府周採著調廣西平樂府知

府欽此

1161 乾隆四年三月二十八日內閣奉

上諭廣西右江道張漢以母老告請終養其員缺著

太平府知府李錫泰補授欽此

1162 乾隆四年三月二十八日內閣奉

上諭福建漳州府知府員缺甚屬緊要著總督郝玉

麟於所屬知府內揀選一員調補其所遺之缺著

江西廣信府同知馬世樞補授欽此

1163 乾隆四年三月二十八日內閣奉

上諭四月初一日殿試著莊親王誠親王常明來保  
監試照上科之例賜與食物其侍衛候朕派出前  
往照看欽此

1164 乾隆四年三月三十日內閣奉

上諭前朕聞得天津河間文安一帶積水未消民間  
難以佈種屢諭總督孫嘉淦設法疏濬並將小民  
如何資生之處確行訪察奏聞今據孫嘉淦奏稱  
天津等處卹庄除已經涸出現種麥禾暢茂者不  
開外查天津地方日下雖未涸出將來可涸不悞  
晚禾者四十七處其深窪積水難望消涸者四十  
二處河間地方日下雖未涸出將來可涸不悞晚  
禾者五處其深窪積水難望消涸者三十七處文  
安地方日下雖未涸出將來可涸不悞晚禾者二  
十一處其深窪積水難望消涸者五十三處又靜  
海縣之賈口義渡等十七卹大城縣之王凡固獻  
等十六卹碓縣之孟家齊官等八卹積水尚未全  
消凡此六縣積水之區其可望涸出者止可種植

稗禾晚稻其不能涸出者將來雖有魚葦菱蒲之  
利亦必待至五六月間方可有望目前資生無策  
等語朕覽孫嘉淦所奏甚為明晰地方積潦未消  
其為害更甚于被旱若不施恩於常格之外則停  
賑之後小民仍不免於飢餓朕深憫焉著將此六  
縣內現雖未涸將來可涸之一百一十四卹庄再  
行加賑一個月其深窪積水難望消涸之一百三  
十二卹庄應再加賑兩個月孫嘉淦可督率有司  
遵朕諭旨確速辦理毋得稽遲該部迅速行文前  
去欽此

### 附錄

(1) 大學士伯臣鄂 等謹

#### 奏為遵

旨議奏事直隸總督孫嘉淦為旗園民房一摺 據  
稱直隸地方多被旗園零星村庄在園內者民  
人自住其房而租種旗地旗人止收地租並不  
問及民房通省州縣旗民相安毫無異說突有

樂亭縣庄頭蘇爾岱等以民人房既在園內即係旗房控告已給門面房間租錢又欲按間起租已照上等科則斷給房基地租又欲嚴追從前所欠租銀臣將歷年案卷詳細檢閱園內房是旗是民之處並無

諭旨以及部文檔案租約拜券等項

朝廷既未明加其稅庄頭何可私徵其租仰懇

聖恩將此業房間免其斷給租銀令旗民仍舊各管各業以結塵案嗣後園內房間總以現在管業者為定如民人於租遺房外又佔旗地多益房屋或旗人將民人租遺房屋妄行告許希圖取租者俱照違制律治罪等因奉

旨大學士等密議具奏欽此 臣等查直隸旗園地

內村庄民房有為民人租遺舊業者有係隨地庄房專與佃戶居住者亦有佃戶每年交納房租小數錢數百文者皆係園地之初即已定有成規是旗以旗民相安並無異說其內務府官庄地畝內所有村民房屋或係已業或隨地畝並有租無租亦係久經畫定今蘇爾岱等控告一案以民房既在園內即係旗房為詞如果係

旗房何以八十餘年一任民人居住並未起租直至雍正九年始行控告况控告後經前任直督李衛委員研審以民房雖係民人已業但現旗地應斷給房基地租每畝照上等科則起租再加小數錢一百文等因結案已屬平允今該督請將此案房間免其斷給租銀是並地基亦不准給租查地基給租於民人既無苦累旗人亦可帖服應仍照前斷祇給地基租銀不起房租以結塵案但上地租額各處不同其作何定給租數之處應令該督酌量辦理並飭地方官於查丈之時明白曉諭務令旗民彼此相安毋復糾紛滋事至蘇爾岱等欲通計歷年之租作為舊欠徵追從無此例斷不可行再該督奏稱嗣後園內房間總以現在管業者為定如民人於租遺房外佔旗地多益房屋或旗人將民人租遺房屋妄行告許希圖取租者俱照違制律治罪等語查民房地基既已丈量按畝納租嗣後民人在已納租之地界內添造房屋者旗人不得藉端禁阻如侵佔旗地蓋造房屋者將民人照違制律治罪如有將旗民人房屋妄行告

許希圖得祖起蒙生事者將旗人亦照違制律治罪如此庶旗民各守舊業永遠相安於無事矣伏候

聖訓

乾隆四年三月初四日奉

旨依議欽此

(2) 大學士仍管川陝總督查即阿等為查明寧鎮分發各當舖生息銀兩請分別被災輕重酌與寬恤等因一摺奉

旨軍機大臣等議奏欽此 查寧夏鎮標生息銀兩

據稱從前分發寧夏等處各當舖營運生息所有乾隆三年冬季利銀尚未交納自地震後查未被焚燒之寧夏各當舖共領本銀二千四百四

十一兩零寧朔縣各當舖共領本銀二千九百十九兩零雖係被災貨物未致全失可否仰邀

聖恩將伊等未交利銀免其交納止令將原領本銀

照數交還至於房屋倒塌又被火燒水淹之寧夏寧朔平羅寶豐等縣各當舖共領銀八千五

十七兩零伊等合家資俱被焚溺可否仰邀

聖恩將伊等未交利銀免其交納止令將原領本銀

照數交還至於房屋倒塌又被火燒水淹之寧

夏寧朔平羅寶豐等縣各當舖共領銀八千五

十七兩零伊等人口家資俱被焚溺可否仰邀

聖恩將伊等原領本銀及未交利銀一併豁免等語

臣等公同酌議寧夏地震被災本重今既據

該督等查明領有生意息銀兩之各當舖人口

家資俱被焚溺者一百七家所領生息本銀共

八千五十七兩零已屬無從著追之項應請

加恩將所欠本利銀俱行豁免其雖經被災貨物未

致全失之當舖六十一家所領生息本銀共四

千五百四十兩零自應令其照數交還至未交

之利銀伊等於被災之後資本折耗原屬實情

應請

加恩一併豁免又據稱該鎮標生息本銀請照數在

於蘭州司庫添給足額等語查寧夏將軍衙門

生息銀兩已奉

諭旨生息銀兩係永遠裨益之項不可空缺若班第

第將動用何項銀兩即行照數補足以資生息之



妥議辦理奏聞欽此欽遵今寧夏鎮標所有生息  
本銀懇

恩豁免之項自不便令其空缺應如該督等所請照  
數在于蘭州藩庫內添給足額以資生息臣等

謹擬寫

上諭一併進

呈

御覽恭候

欽定頒發

(3) 直督孫嘉淦查覆前督臣李衛原奏草職提河

朱藻貽誤河工三款等因一摺 查朱藻案內

貽誤河工各款除工程等項已據尚書公訥親

等查勘分晰具題外至事關河務機宜之處於

本年二月內奉

旨即著孫嘉淦確查定議具奏欽此欽遵今據孫嘉淦

奏稱詳細查核所奏情事摠欲遵照原議于半

截河以下疏濬挑挖早建北堤全引濁流歸于

淀河不欲於上游開閘放水復行故道三款情

事大約相同查上游不開閘放水全引濁流歸  
淀攤泥沙別無去路雖千萬人之功不過頃刻

即可填平原議亦欲於上游開四閘四引河以  
分其勢原不專恃半截河以下疏濬挑挖遂為

萬全之策至不早建北堤原以下原積水未消  
難於施工且半截新河尚未開濬則北堤亦屬

緩工原可無庸早建至開金門開引河暗復故  
道之處現今臣與河臣碩琮議于金門關之下

再建草壩四分過水所批引河即在故道之中  
臣再四詳核所奏河務並無裨益河工之處等

語 查河務各款既經該督親履河干詳加查  
勘令據所覆並無裨益等情河工等情節已甚

明晰再前經尚書公訥親與該督合詞條奏於  
南岸金門關上下多建草壩使南洩之水常多

欲其漸復故道已經部議覆准現據該督與河  
臣會勘定議漸次遵行是現在永定河辦理事

宜與從前原奏情事迥不相同毋庸復行置議  
又據該督奏稱金門關壩底太高郭家務草壩

添築子堤不令過水以致下七工决口為患是  
則河臣之過但因原督李衛奏定八分以上方

許過水則是相度失宜原督臣李衛亦難辭咎等語查金門閘郭家務等壩原為漲汎之時分洩水勢是以定議八分過水其建築郭家務草壩之時自係量准分數築成何以復于壩底地面上添築子埝五尺以致水至八分轉不得洩原督臣李衛祇應恭其添築子埝之誤不必參其私創壩底放水亦非八分以上方許過水為相度失宜也至河臣辦理貽誤之處業經尚書公訥親等叙入審案內定議

題結應無庸再議

乾隆四年三月初九日奉

旨依議欽此

(4) 臣等看李錦進

呈經史內稱五城飯廠請再加賑兩月老弱婦女量給盤費使還故土至疲瘵殘疾無處可歸者撥歸養濟院棲流所等語查五城粥廠例于每年三月二十日停賑貧民散歸可以及時種地傭工各務本業且立夏之

後天氣漸熱多人聚集尤非所宜查二年三年因冬寒未肯欽奉

恩旨加賑半月皆于九月內舉行至三月後自不便再行加賑再上年欽奉

恩旨於停賑之日著每名再賞給口米一斗以資前路食用是貧民于停賑之日復得有口米前臣等於議覆御史馬昌安條奏內請今年仍遵照恩例於停賑之日每名賞給口米一斗交五城御史司坊官按照食粥人數散給等因奉

旨依議欽此欽遵臣等酌議三月二十日始行停賑

若  
諭旨頒發太早則近京各處貧民本非就食粥廠者亦希圖得米而來轉致紛擾應于停賑數日之前都察院遵奉

諭旨辦理庶為妥便今已屆期臣等謹擬  
諭旨進呈恭候

頒發仍照上年一例欽遵辦理應將李錦所奏加賑兩月之處毋庸議至稱老弱婦女量給盤費使還故土已據直隸總督孫嘉淦奏稱飭令大宛兩縣查有在京別無生計應行回籍之人俱令

酌給盤費移回本籍等因亦經臣等於御史馬昌安條奏內議覆在案應亦毋庸議又稱疲癯殘疾無處可歸者撥歸養濟院棲流所等語查養濟院棲流所原係收養殘廢無歸之窮民該管官自能照例料理亦毋庸另議

乾隆四年三月初十日奉

旨是欽此

(5)

臣等看御史霍備請定獨子不請終養之處分等因一摺查內外官員獨子許呈請終養久經著有定例若果祖父母年逾七十家無以次成丁既不迎養又不請終養則事關倫紀自應定以處分以示炯戒應請

勅交該部定議具奏伏候

諭旨

乾隆四年三月初十日奉

旨著文部欽此

(6) 安徽巡撫孫國璽為欽奉

諭旨豁免安徽所屬舊欠錢糧分別款項請

旨遵行等因一摺查該撫奏內除太平銅陵等二十六州縣成災田畝未完雍正十三年乾隆元年二年錢糧應遵

旨舉行豁免外其宿州鳳臺靈璧石埭等四州縣據稱雖未被旱但有未完雍正十三年乾隆元年二年錢糧均係災緩之項例應現在分年帶徵可否併請豁免等語伏查前奉

諭旨內江蘇七府州屬有被水題明緩徵停徵銀米米等項亦著豁免以紓將來之民力欽此欽遵在案今宿州等四州縣上年雖未被災亦係按前被災緩徵之項現在分年帶徵與江蘇緩徵等項相同應請一體

加恩豁免又據稱被旱勘不成災之潛山等三縣併未經被旱中之歙縣休寧等縣衛及成災太平銅陵二十六州縣之內尚有勘不成災田地均有未完各年錢糧俱應年限催徵非分年帶徵之項但田畝雖不成災而收成亦皆歉薄且車

庫工本較之往年未免倍費可否應予豁免等語查太平銅陵二十六州縣衛均係上年旱災最重之地其中雖尚有未成災之田畝量屬無多且收成歉薄工本又已多費今該州縣衛錢糧俱已蒙

恩察行豁免似應將此項田畝未完各年錢糧統於成災州縣內一例豁免至未經被旱勘不成災之各州縣衛所有有限年催徵之項自未便槩行豁免但查上江大勢旱歉其未被災處所俱非豐收且鄰近成災之地分耗米穀物力仍屬艱難臣等公同酌議似應將此項田畝未完各年錢糧免其限年催徵今該撫查明照例分年帶徵以紓民力至被災所屬內未完之乾隆元二兩年災緩帶徵漕糧係原奉

諭旨應免之項併舊欠之隨徵耗羨俱應隨正項一併豁免再蘆課一項據稱無論旱潦均有收成向于每歲冬涸之候始行砍伐是以課賦逐年歷徵非分年帶徵之項等語查前奉

諭旨原係將舊欠未完之蘆課准令豁免其邇年歷徵之項自應按年照例徵收所有臣等酌議應

免應徵各項擬寫

諭旨一併進

呈恭候

欽定頒發謹

奏

乾隆四年三月十一日奉

旨是欽此

(7) 臣等看副都統即應星一摺 據稱八旗蒙古額設筆帖式原有二十三缺經副都統鄂齊爾條奏部議增添十七缺在案今漢軍筆帖式每旗僅有十二三缺各班應用人員守候輪班銓選請每旗量增數缺俾得分班選用等語 查額設蒙古筆帖式八旗祇有二十三缺是以議增十七缺共四十缺今漢軍筆帖式共有一百餘缺本不為少况漢軍筆帖式與漢七品小京官一同較俸其應陞亦係漢缺今若將筆帖式每旗增添數缺則八旗共增數十缺將來陞轉之虞勢必又成壅滯且漢軍例用漢缺文官之

外省佐雜武官之干把總皆得銓補是其進身

之途甚寬其筆帖式額缺久經定制何得復議

增添應將即應星所奏毋庸議

乾隆四年三月十二日奉

旨是欽此

(8)

據索柱奏稱直隸河間協營兵因上年地方被水米草價貴度日艱難懇請借給一季餉銀於秋冬兩季餉內扣除還項等語 臣等看得直隸上年被水今當青黃不接之時兵丁食用自屬艱難索柱所見者止河間協營一帶其他被水米貴之處與此相類者恐不少若蒙

恩借給月餉應令一體均沾但索柱奏請借給一季餉銀未免稍多將來扣還彼時兵丁又恐用度不足應照江南之例令該督查明被水米貴之軍每兵借給餉銀一月於本年九月收成之後分作十個月扣還如此辦理似屬妥協謹擬

上諭恭呈

御覽

乾隆四年三月十二日奉

旨是欽此

(9)

祖尚志奏錢法利弊一摺三條 據稱八旗新添兵丁搭放錢數宜急為籌畫今軍餉既加而鼓鑄卯數仍然照舊目下雖有雲南額解錢文通計一年搭放兵餉之外亦所存無幾臣愚以為欲平錢價莫如錢多欲令錢多莫如加卯每年各省額解銅鉛除額鑄外約餘銅三十九萬餘兩鉛七十八萬餘兩儘可照依兵餉之數量加五六卯而銅鉛數用有餘雖現今各省額解銅餉或較從前稍有加減而向來掛欠銅餉甚多請令辦銅各省督撫將每年額解銅餉照數催辦解送不得仍前拖欠並將向來掛欠銅餉按限盡行補解到局合之局庫積貯銅鉛則加卯鼓鑄永遠無虧等語 查每年局鑄錢文與解到滇錢按單月一成雙月二成搭放約畧已可敷用今新添兵餉自應加增搭放錢數如祖尚志所奏加卯鼓鑄使錢充文充裕且錢多

價賤自屬有益之事然必有餘銅始可加卯向來各省辦解銅筋掛欠遲延皆所不免祖尚志所稱餘銅之數乃按每年定額計羨應餘若干非實在存貯局內每年有如許餘銅也若祇憑各省照數催辦銅筋並將向來掛欠之筋銅筋補解到局以資加卯鼓鑄仍恐不能如期應用臣等查上年戶部議覆張允隨京錢初運已竣一摺令於今年額辦銅筋之外多解一二百萬筋供用又廣東等處產銅礦山現經該督撫奏准開採又採辦洋銅已經奏明令官商范毓誦等承辦是部臣多方籌畫原為使銅筋充裕足資鼓鑄應俟各處銅筋解到之日部臣臨時酌量將作何加卯鼓鑄之處再行定議

又稱雲南新解錢文銅質甚高宜防銷燬之弊應令照依現在京局銅鉛搭配則鉛不過少銅不過多是亦預杜銷燬之一端等語查雲南鼓鑄錢文曾經部行文令其銅鉛搭配合宜亦為預防銷燬起見據該督撫以加鉛過多難於鼓鑄咨覆在案今看雲南解到錢文其銅質與

京錢亦不相同上下自應仍聽照式鼓鑄祖尚志所奏改照京局搭配以防銷燬之處應毋庸再議

又稱近日淘洗局鑄渣土設立爐竈恐借淘洗之名為銷燬之便宜不時派委專員嚴行查禁并定以處分等語查錢局經歷年鼓鑄所有溶銕土渣本係無用棄物工匠舖戶人等買出淘洗銅屑設爐燒煉得銅售價今祖尚志以伊等明立爐竈又在曠遠之地恐其借名銷燬制錢亦屬防範宜周之意但查伊等搬運渣土於水次淘洗以及設爐煎煉等事非數人即可能辦雖或奸民圖利亦不敢於夥眾之中公然銷燬制錢即使夥謀而人多亦未有不犯者查役緝緝私銷自於此等處所尤加探伺果其多挾錢文希圖銷燬則空曠之地形跡更易顯露今若專派官役巡查嚴定處分恐胥役人等借端索詐反滋擾累應仍聽官役人等照舊暗行察訪為使祖尚志所奏應亦毋庸議

第一條於乾隆四年三月十五日奉

旨依議欽此

(10)

直隸總督孫嘉澍一摺 據稱八溝地方原設有理事同知通判二員分疆管理嗣將八溝通判移駐四旗土城子將通判所管地方俱歸同知管理一切旗民事務案件繁多請照舊制添設通判一員將喀喇沁貝勒扎薩兩旗蒙古民人俱歸新設通判管理其八溝龍鬚門了頭溝三汛併喀喇沁王子一旗仍歸同知管理并請添設巡檢一員管理監獄千總一員防守汛地再查承德州八溝四折及喀喇沁三旗地方綿亘數千里設有知州同知通判雖隸霸昌道所屬而該道駐劄口內遠隔重圍勢難遙制且熱河武弁有副都統總管副將等皆係大員而文職不過同知以下等官品職相懸不無牽制遇有巡緝事件同知等不能兼轄武弁往呼應不靈請於古北口外沿邊一帶地方添設兵備道一員於承德州駐劄將熱河等處同知知州通判等員俱歸統轄等語 臣等伏查八溝地方遼闊旗民雜處案件繁多前蒙

皇上俯念沿邊重地止有理事同知一員應否添設佐貳協辦之屬令 臣等寄信孫嘉澍斟酌妥議

今據孫嘉澍議稱八溝原設有理事同知通判二員分管嗣於乾隆元年經前督李衛奏准將通判移駐四旗土城子而同一員專管八溝龍鬚門了頭溝三汛併喀喇沁王子貝勒扎薩三旗幅員既廣事務甚繁自應如該督等所議仍於八溝添設理事同知通判一員將喀喇沁貝勒扎薩兩旗蒙古民人事件俱歸新設通判管理其八溝龍鬚門了頭溝三汛喀喇沁王子一旗仍歸同知管理庶分疆而理各有職守又議稱通判有審理刑名稽查盜匪之責應添設巡檢一員管理監獄千總一員防守汛地亦應如所奏添設又議稱承德州八溝喀喇沁三旗地方綿亘數千里同知知州通判等官現隸霸昌道統轄而道員駐劄口內勢難遙制且熱河武職有副都統等皆係大員而文職不過同知以下品職相懸未能接洽且同知等不能兼轄武弁遇有巡緝事件往呼應不靈似應於古北口外添設兵備道一員駐劄承德州將熱河八溝等處同知以下俱歸統轄其兵馬錢糧俱令該道經管其武弁都司守備等官俱令稽

查察核等語查八海等處同知等官雖隸霸昌  
道管轄而沿邊地方綿亘數千里該道駐劄內  
地誠有鞭長莫及之勢再熱河武職設有副都  
統等大員而文職不過同知以下品級相懸體  
統自不相屬且同知等不能兼轄武弁遇有巡  
緝等事實不能無牽掣用之事該督所請添  
設兵備道一員以重彈壓之慮似屬可行應請  
飭交該督孫嘉淦詳悉妥議具題可也伏候

諭旨

乾隆四年三月二十一日奉

旨依議欽此



1165 乾隆四年四月初一日奉

旨吏部月官於初三日在宮內帶領引見欽此

1166 乾隆四年四月初三日吏部奉

上諭徐士林著實授江蘇布政使即赴新任孔傳煥  
翁藻著各回奉任欽此

1167 乾隆四年四月初四日內閣奉

上諭據浙閩總督郝玉麟浙江巡撫盧焯奏稱浙省  
温州府屬之永嘉樂清瑞安平陽四縣暨温州衛  
台州府屬之臨海黃巖二縣暨台州府於乾隆二  
年曾被水災已荷恩施多方賑恤閩閩均沾實惠  
惟是勘不成災之處有緩徵之錢糧扣至三年歲  
底尚未完納者永嘉則有銀八百九十八兩米一  
千石瑞安則有銀一千三百三十七兩米四百八  
十石平陽則有銀九百九十九兩米九百二十六  
石黃巖則有銀五百七十七兩米二百七十九石  
以上共銀三千八百一十一兩共米二千六百八  
十五石茲當開徵之期例應帶徵完項查各該縣

三年分未完錢糧尚多又有四年分應徵新糧若  
將二年分未完之銀米一併催令全完小民未免  
艱難可否寬至四五兩年分年帶徵謹此請旨等  
語著照該督撫郝玉麟盧焯所請將此四縣二年  
未完之銀米寬至四五兩年分年帶徵以紓民力  
該部即遵諭行欽此

1168 乾隆四年四月初七日內閣奉

上諭巡視長蘆鹽政著御前侍衛安寧去欽此

1169 乾隆四年四月初七日內閣奉

上諭朕御極以來仰體

皇考誠求保赤視民如傷之至意廣咨博訪庶幾民瘼  
得以上聞至於水旱災荒尤關百姓之身命更屬  
朕心之所急欲聞知而速為經理補救者是以數  
年中頒發諭旨不可勝數務令督撫藩臬等飛章  
陳奏不許稽遲亦不許以重為輕絲毫粉飾倘或  
隱匿不陳或言之不盡朕從他處訪聞必將該督  
撫等加以嚴譴蓋年歲豐歉本有不齊之教惟遇  
災而懼盡人事以挽之自然感召

大和轉禍為福若稍存諱災之心上下相蒙其害有不可勝言者是以孜孜不怠惟恐民隱不能上達即天下想亦洞悉朕心矣乃昨冬寧夏地動災傷甚重朕聞奏即宣示於外特遣大臣馳驛前往會同該督撫將軍地方官等逐戶賑濟安插撫綏毋使一失失所且不惜帑金數百萬兩以為招集流移繕完室廬之費此皆明降諭旨者彼時都統弘昇奏稱寧夏地動情形發抄時宜從簡畧恐有好事小人借端捏造煽惑愚民等語此奏識見甚屬偏小朕不以為然但其中有軍機要務恐似此傳播於外之語是以朕令內閣識之蓋謂國家政務原有應密之件如軍機查穿要犯皆不可不密以防洩漏別生事端至於旱潦飢饉災稜之類則斷斷不應密者即數十年來亦從無刪減情節發抄者乃內閣誤將弘昇此奏播傳於外一似朕俞允彼言者近日朕始聞之因思此奏傳播各省督撫等必致錯認以朕心諱言災傷始而觀望繼而欺隱則黎元將何以得受國家賑恤之恩耶是朕力行而猶恐未逮者將轉而為改弦易轍之舉豈朕之初志耶夫民瘼所關乃國家第一要務用是特頒諭旨通行宣示嗣後督撫等若有匿災不報

或刪減分數不據實在情形者經朕訪聞或被科道糾叅必嚴加議處不少寬貸該部即遵諭行欽此

1170 乾隆四年四月初九日內閣奉

上諭南方號稱水鄉長江大湖洪濤巨浸每遇風浪驟發人力難施向有設立救生船之處每年頗多救濟但恐經費不足則為數無多而稽查未周則為善不力著各省督撫確查所屬地方有險阨之處應設救生船隻者酌動存公銀兩估計修造每年給與水手工食若干并交與地方官載入交盤冊內永遠遵行毋許始勤終怠欽此

1171 乾隆四年四月初十日內閣奉

上諭今春正二月間雨雪霑足麥穀以次播種朕心甚為慰籍乃三月望以後彌月不雨炎風屢作麥根雖幸無恙而麥苗已將萎矣若十日不雨則無麥朕甚憂之著傳諭該部即速虔誠祈禱雨澤朕時常召見九卿詢問政事利弊諸臣率多以目今無甚弊改陳奏者審如是以水旱頻仍以致上蒼屢示警即抑政務之小者原未見有過而朕躬之闕失陷於不知者諸臣不肯言之耶或所用之大臣不洽衆望而諸臣以為朕信任之不肯以其過即有一於此皆足以致災肯用是剴晰肺腑廣開言路大學士可詢問九卿科道等官俾各直陳無隱欽此

1172 大學士張 徐 尚書公訥 字寄 兩江總

督那 乾隆四年四月十一日奉

上諭前日御史盧秉純條陳慎罰弛徵三款朕以前二款現在纂修律例如有未協之處該總裁等自然酌量更改候朕裁定其江寧地畝一款其事甚

細該御史陳奏之意或公或私俱未可知是以將原摺發還今盧秉純又復以地畝一件懇切奏請爾等可將此摺抄出家寄那蘇圖令其秉公確查如果應行豁免即具本題請或別有情由不應豁免亦著據實具摺密奏欽此遵旨寄信前來

1173 乾隆四年四月十一日內閣奉

上諭大學士趙國麟向有足疾不能騎馬著坐車進紫金城到內閣辦事欽此

1174 大學士張 徐 尚書公訥 字寄 雲南總督慶 乾隆四年四月十二日奉

上諭那蘇圖奏稱據常州府屬之江陰縣稟報訪得本縣東鄉長涇鎮一帶有民人夏天佑等五名為首設立邪教誘引愚民茹素誦經男女混雜當將夏天佑等查拏審訊據供所奉西來教其教頭名張寶泰居住雲南大理府蒼山年已八十餘歲自稱連摩四十八代嫡派江陰在教者有二百人伊

曾於乾隆三年正月親往雲南面見張寶泰傳授經卷又每人取銀一二錢給授記一張不過喫素念經並無別情等語臣查伊等雖無不法之處但遠赴雲南受教傳播恐行之日久將為風俗之害不可不加懲禁以杜將來已批飭兩司轉飭該縣將為首五人枷責示眾勒令改教經卷悉行焚燬其轉相授受之人立限自首並咨會滇省督撫查禁以絕根株等語從來邪教煽惑愚民敗壞風俗初起之時不行禁約迨蔓延日久必致累及多人覽那蘇圖所奏西來教首張寶泰既在雲南可密寄信與慶復令其轉飭有司查訪根柢懲治首犯散其黨羽但無得牽累無辜欽此遵

旨寄信前來

1175 乾隆四年四月十二日内閣奉

上諭近來京師微覺亢旱已降旨令該衙門虔誠祈禱朕思清理刑獄亦祈求雨澤之一端近日刑名若從寬大亦更無可輕減之處著刑部堂官等將杖徒以下等罪查明情節或應釋放或應減等語

旨完結其尋常案件亦速為辦理毋得牽累稽延欽此

1176 乾隆四年四月十三日内閣奉

上諭大學士查郎阿患病著即派太醫前往看視欽此

1177 乾隆四年四月十六日内閣奉

上諭據河東河道總督白鍾山奏稱山東管河道王鴻勳奉旨內陞自應候部開缺令其赴京陞補惟是該道係專管山東通省河道之員目下糧艘盛行正需熟練之人指示督率蓄水濟運又兼伏秋大汛接踵而至黃河工程尤為緊要王鴻勳在任十載修防調度均合機宜可否仰懇天恩暫令王鴻勳在任料理黃運河工俟伏秋二汛過後給咨送部引見等語山東河道員缺朕已降旨將陳法補授白鍾山既稱王鴻勳熟習河工現屆大汛緊要之際正需該員料理王鴻勳著暫留東省協同陳法辦理河務俟伏秋二汛過後送部引見欽此

1178 乾隆四年四月十九日内閣奉

上諭朕訪聞得山東按察使白映棠劣蹟種種著解任令侍郎班第副都御史田懋馳驛前往東公察審具奏其按察使員缺著李珣補授欽此

1179 乾隆四年四月二十一日翰林院奉

上諭新科進士著拉親王和親王平郡王張廷玉詢親尹繼善照上科例分別揀選其奏欽此

1180 乾隆四年四月二十二日大學士張廷玉等將

散館修撰編修庶吉士六十四員帶領引見奉

諭旨清書修撰于敏中已經授職其庶吉士甄錫白

瀛襲應海李質穎周煌俱著授為編修郭肇鑽朱

若炳蔣允原陸儀俱著授為檢討漢書編修任端

書秦憲回林板春沈文錦已經授職其庶吉士張

映斗張若需李龍官孫宗溥王會汾錢琦許其馮

印朱荃歐瑛善周玉章劉懋陸嘉穎玉錫璋馮東

仁吳統丁一燾路斯道何其睿黃明鏡觀保俱著

授為編修洪世澤李時勉周禮周連登德保俱著

授為檢討高繼光盧憲觀程廷棟納國棟王秉和帥家相鄭筆奎杜鶴翔覺羅德成格孫維彭遵泗俱以紳屬用牛琳張大宗焦以敬謝廷瑜生寫張元龍葆霖潤辛有光俱以知縣即用吳喬齡劉炯林維雍莫世忠方簡俱著歸進士原班銓選欽此

1181 乾隆四年四月二十二日内閣奉

上諭據御史倪國璉奏稱戶部認採人參一案因行賄發覺株連幾至百人其畏罪自經者已有二人當此甘雨未足之時此案或宜少緩或非要犯應令省釋等語戶部認採人參一案該部官吏受賄作弊事蹟昭著國法可在豈可寬容所謂兩澤未降而輕減刑罰者乃尋常案件可以不必深究之事今此案干犯國憲証象多非質審明確難成信讞倪國璉欲廢棄法紀以為祈禱而澤之道甚屬非理至稱畏罪自縊者已有二人此乃伊等身臨法網自知無可逃避情虛自盡並非株連畏罪而然也倪國璉又請將伊奏摺留中朕更不解此係戶部發覺例交刑部查審之件伊奏請留中竟似究訊此案出于朕意者更屬悖謬似此徇私妄

奏若不加意處無以儆戒將來俾國運著交卸嚴  
察議奏欽此

1182 乾隆四年四月二十三日內閣奉

上諭數年以來兩浙鹽價較前平減仍當加意經理  
勿令鹽務廢弛查江南蕪松常鎮四府及大倉州  
皆邊海隣場為浙饘之門戶更為私鹽之要區該  
地方文武官弁倘或巡緝懈弛必致有妨引課而  
藉端滋擾又必有累平民著江南督撫提鎮諸臣  
時飭所屬官弁實心稽查善于辦理務期有裨公  
事不擾閭閻勿以為隣省之鹽改而淡漠視之欽  
此

1183 乾隆四年四月二十三日內閣奉

上諭上年直隸米糧騰貴曾降諭旨准南甯等將奉  
天米石由海洋販運以濟畿輔民食以一年為期  
今弛禁之期已滿而京師雨澤未降恐將來民間  
不無需米之虞聞奉天今歲收成頗稔著再寬一  
年之禁南甯等有願從海運者聽其自便可行文  
直隸總督奉天將軍等知之欽此

1184 乾隆四年四月二十三日內閣奉

上諭福建糧驛道員缺著莊柱補授浙江温州府知  
府員缺著揚士鑑補授山西潞安府知府員缺著  
李尚筠補授山東登州府知府員缺著鄭方坤補  
授河南彰德府知府員缺著劉德成補授欽此

1185 乾隆四年四月二十三日內閣奉

上諭御史博爾和奏奏聞浙總督赫王麟以吳琳芳  
不勝知府之任奏請改補部屬甚屬不合而引朕  
從前所降諭旨以為部王麟並不聲明具奏希圖  
濫混應交部議處等語朕前旨以內外原屬並重  
其不勝道府之任者不應請改部曹原為未經歷  
任部曹之員而言吳琳芳原由部郎出任知府赫  
王麟見其不宜外任仍請內用與朕前旨並不相  
違博爾和過於前求妄行奏奏著交部察議具奏  
欽此

1186 大學士張 徐 協辦大學士尚書公訥 字

寄 直隸總督孫 乾隆四年四月二十四日 奉

上諭數時畿輔一帶雨澤未降倘再不得雨收成歉薄民食艱難不可不預為留意今歲南漕到津頗遲沿河地方或有應須截撥之處著總督孫嘉淦悉心酌定於尾幫內截留若干亦有備無患之道爾等可密寄信前去令其確議回奏欽此遵

旨寄信前來

1187 乾隆四年四月二十五日內閣奉

上諭大學士朱軾向撫浙江正躬率屬潔已愛民浙人至今感頌之大學士嵇曾筠管浙江督撫事暨修海塘具有成效民生受其利益此二臣者均應予浙省賢良祠以旌勞績以慰輿情該部即遵諭行欽此

1188 乾隆四年四月二十七日內閣奉

上諭上年江安兩省歲旱歉收朕竭賑兼施多方籌

畫并令豁免米糧賦稅俾商販流通源源接濟于地方甚有裨益續經該督奏請將淮安揚州許墅鳳陽等關免徵米稅俟乾隆四年麥熟時停止朕降旨允其所請今屆麥熟之期聞各屬雨澤尚有未曾霑足之處且上歲歉收之後米價一時未能平減若商販怖至仍恐民食艱難著將上下江各關口米稅照舊免徵俾商賈踴躍從事則米船衆多價值自平而民食有賴俟本年九月米穀盛行之時再照定例徵收該部可即行文江南督撫等知之欽此

1189 同日內閣奉

上諭聞直隸青縣靜海霸州武清等縣蝻子萌生甚可憂慮著地方文武官弁加緊撲滅毋使滋蔓江南淮安等近水之處去年被旱今春雨澤不足亦恐蝗蝻萌動為害田苗其他各省雨少之處均當思患預防毋得疎忽從來捕蝗之事原可以人力勝者倘地方大員董率不力及州縣文武官弁奉行懈弛經朕訪聞必嚴加議處不少寬貸該部可即通行各省知之欽此

1190 乾隆四年四月二十八日翰林院奉

旨著趙國麟甘汝來尹繼善陳大受陳德華魏廷珍  
阿克敦閱奏欽此

1191 同日內閣奉

上諭今年三四月間畿輔一帶雨澤不足二麥歉收  
不知後此雨暘何若朕軫念民艱為先事預籌之  
計此時漕船陸續北上正可酌酌截留以為備用  
著將南漕尾幫內截米十萬石在天津北倉存貯  
將來倘有不時之需即可酌撥領運於畿輔民食  
大有裨益該部可即遵諭行欽此

### 附錄

(1) 西安巡撫張楷啟陳陝省社倉事宜一摺 據

稱社長宜定年更換社糧宜地方官交代而春  
借之時酌留一半備用至麥收之時以一麥  
抵還二穀其已借之後粘貼曉示等語臣等伏  
查設法立社倉多屬百姓之所樂輸是以奉行

之法原與常平不同雍正五年六月內欽奉

上諭社倉之設所以預積貯而備緩急原屬有益民  
生之事朕御極以來令各省舉行曾屢頒訓諭務俾  
民間踴躍樂輸量力儲蓄不可絕以官法誠以此事  
若非地方官勸率照者則勢有所難行若以官法  
相絕則又恐勉強催迫轉滋煩擾朕之舉行社倉實  
曰民生起見是以令各省酌量試行以觀其成效何  
如並非責令一概施行也自古有治人無治法必有  
忠信樂善之人良民方可以主社倉之出入必有清  
廉愛民之良吏方可以任社倉之稽查各省官民果  
能實力奉行而善全無弊朕實嘉之欽此仰見

世宗憲皇帝睿慮周詳

聖諭已極明晰是社倉之設全在各省督撫地方有司

因地制宜斟酌辦理今張楷所奏社長限以三  
年更換一條 查舊例內載社長經營社糧定

以五年更換交代今該撫限以三年亦屬可行

又奏春借酌留一半備用一條 查例載春借

倉糧只動一半仍留一半以防秋款該撫所奏

與原例相符

又奏社糧宜每年清還麥穀兼收一條 查例

載春借之家秋收後至立冬不還者勒限還倉



是每年清還原屬定例至麥穀兼收亦變通宜  
民之法應令該撫酌量辦理

又奏社糧借戶粘貼曉示一條 查例載借貸  
之戶造排門細冊註明姓名用印存案該撫奏  
稱粘貼曉示亦地方官應行之事

以上所奏四條於原定條例稍為變通應令該  
撫分別辦理咨部存查至所奏陝省社糧係官  
為採買請專責成地方官交代分賠等語查陝  
省穀石於雍正七年經陝督岳鍾琪奏明於本  
省加二耗羨銀兩內留銀五分留備社倉穀石  
是陝省社穀實與他省本地方紳士捐輸者不  
同該撫請專責成地方官之處就陝言陝亦屬  
因地制宜之途但交代分賠事關考成應令該  
撫具題到日交部定議至所稱陝省社穀民借  
未完二十九萬九千餘兩石現飭立限催完等  
語查直省正項錢糧其歷年實欠在民者俱蒙  
皇上浩蕩之恩概予豁免今陝省社糧應令該撫查  
明或係民欠未完或係社長侵蝕分別酌辦可

奏  
也謹

乾隆四年四月初一日奉

旨依議欽此

(2) 侍郎方苞選擇時文告竣奏請

御製序文并定標明名等目一摺臣等伏查乾隆元

年六月內我

皇上念制藝一道為文風士習攸關

欽頒諭旨哀集有明及

本朝諸大家時藝以為士子程式今方苞司選文  
之事今既選擇告成應遵

旨將原奉

上諭冠諸奏首再令方苞擇擬進書奏摺一併刊入

似可毋庸另製序文其標名應請用

欽定字樣至所奏酌定凡例校閱校對分別列名

及鐫板格式等條應如方苞所請辦理可也伏  
候

諭旨

乾隆四年四月初八日奉

旨依議欽此

(3)

檢討張鵬紳錄進經史講義內稱學校之士當察其甚貧者如學田學廩之類量加增給如稍有產業別為矜戶充其差役併擇其秀其者養之書院館之義塾毋使或濫至教士之官宜令量減出貢之年俾無及老等語 查士習之端誠在於教養崇實無浮資以糜餽原所以振人材宏樂育也今各直省儒學既設有廩膳銀兩又有學租例得給濟貧生凡徵糧應役議有成規原與齊民有間其各處書院蒙

聖恩歲給膏火銀兩并額外加增以示鼓勵是養士之法已備張鵬紳所養奏皆現今舉行之事惟在師儒之官加意體恤自足以育士興賢又查出貢受職向例視學之大小定以年分近復於年貢之外加以選拔各省學臣報滿又舉優生入監錄用兼之科舉中式進身之途視昔加廣則出貢之期較前已速若將歲貢年數更為量減恐人愈多而班次壅滯銓授愈遲張鵬紳所奏意非不善事屬難行至

殿試勿拘舊格業經欽奉

上諭禁用碩聯大學士九卿現在遵

旨會議酌定款式張鵬紳所奏亦毋庸議謹

奏

乾隆四年四月初九日奉

旨知道了欽此

(4)

御史沈懋華陳奏一摺 據稱積貯之法社倉不如常平而常平之倉又不如立常平之田以為經久之計各直省之田有入官者有關懇起科者有欺估清出者請盡立為常平之田其無前項田者以地方羨餘銀兩公平估價買民田募民耕種倘有富家大室願輸田畝量予議叙等語 查直省州縣設有常平倉每年出陳易新遇歉歲較貴則減價平糶以濟民食惟在地方官大吏有司加意整理實力奉行自於民生大有裨益今御史沈懋華請將入官田畝並開懇起科及欺估清出者盡立為常平田等語查入官田地數年來除已經變價之外多奉

恩旨給還本人且此等田產本非各州縣所均有恐亦無從撥置再查各省新懇起科之田為數甚少且皆係民間自出工本耕種成熟以固永遠

管業若既已陞科復令入官孰肯徒費膏力不  
不便民之甚矣又如該御史所奏以羨餘銀兩  
估買民田但田價勢難盡一過重恐浮開以啓  
官吏之侵濫過輕又恐抑勒以奪小民之恒業  
且募民耕種計畝收租若酌定成數則年歲之

豐歉無常額數難以預定若完納聽其多寡則  
奸胥無吏得以上下其手又將有將收多報少  
之弊至所稱欺佔清出之地請立為常平之田

查各省此項地畝本亦無幾非給還本人即已  
承佃起科亦非竟屬閑田可以立為公產又所  
稱大家富室願輸田畝者量與議叙查捐輸必  
稽其田數而田有上下其價懸殊富人思議叙  
之優但期多其畝數必致多輸瘠薄久後官佃

均受其累更有賣買不明疆界未定以及頑佃  
侵租者皆舉而輸之於官踏看無暇爭煩不休  
是民未受田之益已先受田之害矣况常平倉  
未穀存貯有地出納有數高且難于盤查若復  
設有田地疇零阡陌散處各方更難管理是常  
平之田種滋弊事屬難行應無庸議

乾隆四年四月初十日奉

旨知道了欽此

(5) 查上年四月內兩路軍營俱

賞賜藥物今將西北兩路應需藥物照上年例開馬

數目恭呈

御覽謹

奏

\* 擬

賞西北兩路駐防將軍大臣等藥物單

副將軍額駙策令

各色錠子藥一大匣平安丸一百九人馬平

安散一瓶四兩

參贊大臣海蘭等三員

各色錠子藥一大匣平安丸一百二十九人

馬平安散三瓶每瓶二兩

獲軍統領阿琳等五員總兵官銜吳開增一員

喀爾喀貝勒貝子公台吉等九員計共十五

員

各色錠子藥三中匣平安丸三百九人馬平

散十五瓶每瓶一兩

駐防哈密提督李繩武

各色錠子藥一中匣平安丸五十九人馬平

安散一瓶二兩

總兵王邦寧一員

各色錠子藥一小匣平安丸三十九人馬平

安散一瓶一兩

駐防赤靖總兵官王友詢一員

各色錠子藥一小匣平安丸三十九人馬平

安散一瓶一兩

哈密等處官兵

各色錠子藥二大匣平安丸一千九人馬平

安散二筋紫金錠盞水錠各六筋

乾隆四年四月十一日奉

旨知道了欽此

(6)

御史褚泰敬陳儲才要務一摺

一據稱進士用庶常宜詳擇老成宿學之士等

語查新科進士選用庶常例於

殿試後復行考試帶領引

見俱蒙

皇上量材酌用有因文采優瞻選取者有因老成宿

學選取者亦有因年力富強可以玉成而選取

者選用後教習三年至散館時分別等第或授

編檢或用部屬知縣等官是選取庶吉士原視

其才質錄用並非專以年歲為去取也褚泰此

奏應毋庸議

又據稱館課散館俱宜摘閱經史等語查經

史原屬士子所宜究心但博涉群書貫穿經史

亦非旦夕所能驟致庶吉士考校詩賦原以備

館閣之用舊例遵行已久不必更張至教習庶

吉士之大臣於一切經籍原可隨時教導不必

著為成例該御史所奏六毋庸議

又據稱進士舉人將屆選期考試律文一條再

於刑部現審事件摘舉一案使之剖斷合者准

選不合者量改教職等語查律例固屬史治

之要務但州縣膺民社之寄撫字惟科其事甚

繁刑名特其一端耳若如該御史所奏考試律

文一條剖斷成案一件亦難以攝定該員之優

劣次銓用之去取徒於選法越次紛更致滋弊

竊應六毋庸議

乾隆四年四月十三日奉

旨知道了欽此

(7) 查雍正十一年欽奉

世宗憲皇帝特旨將雲南等六省落第舉子內有情願

小就以圖即行錄用者派出大臣揀選奏聞續

經揀選得人才可用並堪就職者共一百二十

二名引

見奉

旨交部記名俟揀選庶吉士時一同引

見者三十六名人交與督撫以教職用者四十三人年

尚少杜文禮部記名俟下科會試後奏

聞請

旨者四十三人續於乾隆元年會試後禮部將上次揀

選記名未經中式之舉人等奏

聞奉

旨雲南貴州廣東廣西四川福建六省舉人赴京應

試未經中式者著照雍正十一年之例奏聞請旨

其上次記名舉人一併入于此內請旨欽此隨經

派出大臣揀選得人才可用者二十八名交吏

部帶領引

見次等者三十七名交禮部帶領引

見分發各省以教職用後經吏部奏明人才可用之

舉人黃天章現在丁憂俟服滿補行引

見其餘二十七名人帶領引

見奉

旨以知縣委署試用者二十二人以主事用者一人

以教職用者四人

以上二次出自

特恩其餘各科俱未舉行

乾隆四年四月十三日查奏奉

旨此事不必常行隔數科內閣奏聞請旨欽此

(8) 御史張重光條奏一摺

據稱進士在部學習期滿外用者歸班候選三

載勤勞轉不能早得授職應請與即用人員分

班銓選等語 臣等伏查雍正十一年七月內

欽奉

上諭上科進士分部學習者已滿三年之期著該部

堂官東公分別其應用部屬者著以六部主事歸

班選用其應用知縣者即照進士甲第名次歸班

選用爾等詳志定議具奏欽此經吏部議覆將在

部學習進士其應用主事者留京以主事用其

應用知縣者各歸本班銓選是此等應用知縣  
人自不得與引

見時奉

特旨即用知縣之員可比再查額外主事之用已經

御史程盛脩條奏停止現今在部學習者為數

無幾此等人自即歸知縣班選用亦將次就選

未為遲滯所奏應無庸議

又據稱新科進士以知縣即用者守候三四載

不得掣缺應分發鄰省委用等語 查進士分

派各省學習係雍正八年奉

特旨舉行並非成例是以此後俱無分發人員今新科

進士以知縣即用者皆蒙

聖恩簡拔例得分班即選視本班按名候選者已屬

優異即至二三年並未過遲該御史所奏分派

鄰省學習之慮亦毋庸議

乾隆四年四月二十一日奉

旨是欽此

(9)

御史張重光敬陳末議一摺 據稱內部書吏

肆行需索一有風聲聞令督撫察究但恐人心

叵測藉有恭究之條又生挾制誣指之弊請嗣

後將說合何人需索若干見証何人一一指出

傳集研訊分別治罪若並無需索憑空控撰或

係挾制嚴誣指審明反坐等語 查各部院書

吏舞弊法營私借端駁詰種種弊竇不可不嚴

行禁止因其誦求瀟託積習沿相沿在京難盡

覺察是以令外省據實奏奏使予授分明情節

炳據勢難潛隱庶幾弊絕風清今該御史奏稱

替撫題恭必將說合見証等人及需索數目一

一指出如係誣捏審明反坐等語查事件到部

或替撫藩臬著人料理必皆直知灼見實有可

指原令將某事用費若干某項何人經手之處

據實恭究所奉

諭旨至為明晰並非風聞無據致有勝臆控報之弊

況外省希圖案件易於完結即令指奏猶恐代

為容隱倘復嚴以條例孰肯據寔直陳若如該

御史所奏反於去弊防奸之法多所阻抑應毋

庸議

乾隆四年四月二十一日奉

旨是欽此

(10)

御史倪國璉奏請巡漕設立檔案一摺 據稱  
巡漕諸臣大概事竣之後不存檔案恐滋弊端  
請嗣後俱令記檔回京時交河南道收存次年  
出差之臣請稿帶注以備稽查等語 查淮安  
濟寧天津通州等處設立巡漕諸臣所以禁絕  
陋規肅清運道使過淮抵通趨行無誤其職在  
於稽查原與地方官不同今該御史奏稱任內  
事件既經

查閱或發部議等案皆令排號存稿鈐蓋印信等語  
查巡漕任內奏

聞事件或發部議行者內部皆有案可稽其文移注  
來則倉場總督漕運總督及生糧廳各衙門自  
有卷宗可考若未奉

諭旨准行及未經部議之件必保平常瑣屑細事原  
不必存案且歷任相承辦理無誤自有成例可  
循不至前後互異所奏應毋庸議

乾隆四年四月二十五日奉

旨知道了欽此

(11)

脩撰金德瑛進經史誦讀內稱

國家制科取士體用兼該二場設判語五條以考  
其律令存名失實徒為其文宜恭酌變通刪去  
判語五條改命二題於律內擇其同類參差割  
斷不齊之處每題徵引數條俾士子推原其故  
斷以已見謂之律解列於試錄同刊進

呈等語 查制科取士設立三場原以經義為重  
故頭場專用四書經文二場例用表判蓋於經  
義之餘觀其駢體又以刑名為居官之一端故  
用判五條意本在於明決詞無取乎冗長果能  
剖晰精當又何拘于文體考唐制取人用自言  
書判以判試士由來已久其詞本用四六今金  
德瑛所奏請改為律解亦不過化駢語為散文  
士子尤易於揣摩且三場試策亦間問刑律所  
謂當代之典常正可抒其明允之學况科場定  
例相沿已久士子應試者不下數萬人一時更  
易其所素習恐徒多煩擾究于制科之道無益  
應毋庸議

乾隆四年四月二十八日奉

旨知道了欽此

(12)

提督永常請恤佃戶一摺 據稱直省地畝除  
旗地而在紳矜富戶者居多小戶窮民皆租  
地耕種今恭遇

皇恩地主既受蠲免之益又復照額收租窮苦佃戶  
不能沾

恩情實可憫請

勅督且通行出示曉諭令租地之佃戶將應交地主

租息悉照應行蠲免之官租原數扣除并請嗣

後遇有收成稍歉之處如有地主諒佃戶之窮

苦年歲之早潦減讓租息者或請旌獎或令有

司給匾獎屬等語 查雍正十三年十二月內

欽奉

諭旨蠲免之典大概業戶邀恩者居多彼無業貧民

民終歲勤動按產輸糧未被國家之恩澤尚非公

溥之義若欲照所捐之數履畝除租絕以官法則

勢有不能從滋紛擾其合所在有司善為勸諭各

業戶酌量寬減彼佃戶之租不必限定分數使耕

作貧民有餘糧以贍妻子若有素置業戶能善體

此意加惠佃戶者則酌量獎賞之其不願者聽之

亦不得勉強從事欽此欽遵在案蓋業戶之與佃

戶本休戚相關租額雖有一定原視歲之豐歉  
以為多寡彼此通融體恤各省皆然至於歉歲  
蒙

恩蠲免在

國家正供尚蒙格外加

恩民間地糧業主即欲按額起租佃戶斷不肯如數

交納今永常奏請令租地之佃戶將應交地主

租息悉照應行蠲免之官租原數扣除地主無

許多索如敢陽奉陰違許該佃赴有司控告定

行責罰等語是純以官法從滋紛擾且恐啓頑

佃抗租之漸事屬難行至所請嗣後遇有收成

稍歉之處如有諒佃戶之窮苦年歲之早潦減

讓租息者或為請旌或令有司給匾獎屬等語

夫業主為田產起見其與佃戶原屬休戚相關

有無相濟此乃閭閻常行之事况素置業戶加

惠佃戶者原奉有酌量獎賞之

諭旨是在地方官善為鼓舞令永常奏請題旌給匾

無論題請旌獎因為逾格即按戶給匾地方官

亦不勝其煩豈能遍及應毋庸議

乾隆四年四月二十九日奉

旨依議欽此



1192 乾隆四年五月初一日內閣奉

上諭各府州縣設立養濟院原以收養鰥寡孤獨廢瘵殘疾之窮民近聞山西陝西一帶多有老病廢瘵之人在途行乞行旅見之惻然朕思各處既有養濟院若有司運力奉行何至小民之困苦無依者飢寒難支乞食於道山陝一路如此則他省與此相類者不少矣著各省督撫各飭所屬州縣官體國家設立養濟院之意興朕哀此獨筑之心實力奉行毋得視為具文故事該督撫亦當特時留心訪察之欽此

1193 乾隆四年五月初二日內閣奉

上諭據閩浙總督郝玉麟奏報上年運閩備用之穀二十萬石已於本年三月初八日運送到閩等語此次運閩穀石江南蘇松水師總兵官陳倫炯自請親往督運今糧艘到閩諸事辦理妥協甚屬可嘉陳倫炯著交部議叙具奏欽此

1194 乾隆四年五月初三日奉

旨吏部月官著於初六日帶領引見欽此

1195 乾隆四年五月初六日內閣奉

旨申珠渾不必管理三庫事務其職掌著吏部侍郎喀爾吉善兼管欽此

1196 同日內閣奉

上諭福建糧驛道員缺朕前降旨將莊柱補授今閩浙總督郝玉麟奏稱汀漳道高衡在閩日久以之調補糧道人地相宜其所遺汀漳道員缺請以候補道陳樹著補授等語著照郝玉麟所請行莊柱不必前往福建俟有道員缺出該部請旨欽此

1197 大學士張 徐 協辦大學士事尚書公訥

字寄 直隸總督孫 乾隆四年五月初六日 奉

上諭朕聞得直隸乏食窮民有散往隣近地方以求餬口者從前李衛為直隸總督時每於接壤交界之處委人防範令其不得出境是以不聞有散往他處之事此乃迫以勢力強勉禁遏非安輯貧民之正道但百姓當歉收之際而聽其轉徙他方則

廬舍田畝必致荒棄深可憫念可寄信與孫嘉淦  
留心稽查善為籌畫務令此等貧苦之人本籍可  
以自存不至輕去鄉井以副朕愛養黎元之意欽  
此遵  
旨寄信前來

1198 乾隆四年五月初十日內閣奉

上諭都察院左副都御史員缺著王安國補授欽此

1199 乾隆四年五月初十日翰林院奉

上諭一甲三人揀選一等三十人揀選內文字入選  
者二十五人著於十一日帶領引見其餘於十二  
十三日分作兩班引見欽此

1200 乾隆四年五月十二日內閣奉

上諭朕御極以來廣開言路擴充見聞做效古帝王  
詢於芻蕘之意原期有益於國計民生是以於大  
臣九卿科道外並准部屬叅領及翰林等俱得具  
摺奏事以收明目達聰之效乃行之一年有餘伊  
等條奏雖多殊無可採或迂濶而不達於事情或

瑣屑而無關於治體又其甚者假公濟私挾嫌施  
巧俱難逃朕之洞鑒朕仍恐顯加申飭有妨言路  
間或留中不發而伊等每揚言於外以為嘉謨碩  
畫惜未見之施行甚且以朕所用之人冒稱為已  
之薦引朕所斥之人冒稱為己之叅劾種種作威  
作福搖惑衆聽以致外間人言藉藉科道等屢行  
奏聞夫古人所謂詢於芻蕘者蓋以卑近之論亦  
足以備採擇並非置是私公私于不問而使之各  
稱臆說無所忌憚也即如今日正白旗佐領鄂泰  
本條不應奏事之人越例言事而所言又極卑鄙  
荒唐朕已發與八旗大臣閱看鄂泰摺內有請瞻  
仰天顏之語是伊本意不過借條奏為名希圖召  
見以僥倖於萬一年年來語臣奏事者其意大半  
類此若行之日久毫無裨於國政徒有害於人心  
不可不防其漸著將部屬叅領及翰林等官條奏  
之處仍照例停止欽此

1201 乾隆四年五月十三日辦理軍機大臣奉

上諭原任大學士二等伯馬齊在

皇祖時即簡任機務毗甚殷及

皇考即位特命總理事務嘉子勞績賞給伯爵世襲罔

替朕即位之初伊以年老力辭解退朕重違其意

俞允致仕願養高年以示優禮著舊之意念伊歷

相三朝年逾大耋抒忠宣力端謹老成領袖班聯

名望夙重舉朝大臣未有若此之久者昨聞在家

患病即命太醫加意調治今聞病勢沉重朕心深

為悽惻本欲躬親着視祇因

北郊在即時值齋戒不獲親命特命和親王大阿哥永

璜公訥親前往代朕着視望其痊可倘病果不起

著賞銀五十兩辦理後事其他加恩之處再降諭

旨欽此

1202 乾隆四年五月十三日辦理軍機大臣奉

上諭方苞在

皇祖時因南山集一案身罹重罪蒙

恩曲加寬宥令其入籍在修書處行走効力及

皇考即位特沛殊恩准其出籍仍還本籍又漸次錄用

授職翰林音階內閣學士朕嗣位之初念其稍有

文名諭令侍直南書房且陞授禮部侍郎之職伊

若具有人心定當痛改前愆矢慎矢公力圖報効

乃伊在九卿班內假公濟私黨同伐異其不安靜

之痼疾到老不改衆所共知適值伊以衰老請辭

侍郎職任朕俞允之仍帶原銜俸俸上年冬月因

伊條奏事件朕偶爾召見一次伊出外即私告于

人曾在朕前薦魏廷珍而叅任蘭枝以致外間人

言藉藉經朕訪聞令大學士等傳旨訓飭伊奏對

支吾朕復加寬宥未曾深究近訪聞得伊向廷珍

廷珍之屋魏廷珍未奉旨起用之先伊即移居城

外將屋讓還以示魏廷珍即日被召之意又庶吉

士散館屆期伊已將人事奏聞內閣定期考試矣

伊復于前一日將新到吳喬齡一名補請一體考

試朕心即疑之今訪聞得伊所居之屋即吳喬齡

之產甚覺華煥伊受託為之請請似此數事則其

平日之營私可以概見方苞深負國恩著將侍郎

職銜及一切行走之處悉行革去專在三禮館修

書効力贖罪其武英殿事務著陳大受劉統勳管

理欽此

1203 乾隆四年五月十四日內閣奉

上諭新科一甲進士莊有恭涂逢震秦勇均已經授職其二甲三甲進士陸秩陳大喻裘曰修沈德潛儲麟趾徐景熹曹經梁啟心徐文煜葉酉繆敦仁卸柱官獻瑤軒轅恭揚宗林興濟王覺蓮馮成修鈕汝麒邵其德卜寧一朱權王居正陳士瑛伊貴綬劉斯和伊興阿表枚蔣麟昌楊開鼎程景伊徐垣金文淳喻焯唐炳陶鑄管一清洪科捷吳嗣富陳中龍周燾黃澍綸徐孝常傅隆阿程巖周人騏孫拱極鞠遜行姚廷祐王錦王化南詹肯構何時鄭志鯨興國趙德昌孫景烈原格曾尚增出科聯揚培羅惜陳汝麇著以庶吉士用陳鈺高名世王元令揚大琛方世雋楊勳趙天衢孫慶槐著以部屬用費蘭先鄒有舉汪元麟廣霖胡彥輔周世紀和成一王贈華蕭惟耀著以知縣即用胡斯威許元鏐紀宣猷楊禹傳著以教職即用該部即行銓選餘俱歸原班用欽此

1204 乾隆四年五月十五日內閣奉

上諭天道福善禍淫書曰作善降之百祥作不善降之百殃此乃萬古不易之理從來有諛媚鬼神而即可以避災獲福者無如小民知識短淺徃徃惑於鬼神之說祈求禱祀為費不貲雖仰事俯育之謀皆所不計而其中最為耗索者則莫如越省進香一事其程途則有千餘里以及二千里之遙其時日則有一月以及二三月之久初春前往暮春方歸以鄉農有限之蓋藏坐耗於酬神結會之舉以三春最要之時日消磨於風塵奔走之中朕聞直隸山東山西陝西等處風俗大率如此而河南為尤甚自正月至二月每日千百為羣先至省會城隍廟申疏焚香名曰掛號然後分途四出成行結隊填塞街衢樹幟揚幡鳴金擊鼓黃冠緇衣前後導引男女雜還奸良莫辨闕庭揚竊暗滋事端此等劣習在目前則耗費錢財而將來即恐流於邪教惟是相沿已久若驟然加以懲治未免又多擾累著各省督撫訪察所屬有越省進香者著為曉諭化導徐徐轉移俾知惠迪吉從逆凶之正

道時存善心勉行善事必蒙神祇默佑况神靈隨  
慶降格不必遠求即敬奉佛酬願亦止于本境祠  
廟虔誠行之毋得呼朋聚眾跋履山川以致悞農  
耗財漸成人心風俗之害該部可即行文各省督  
撫知之欽此

1205 乾隆四年五月十七日内閣奉

上諭翰林院修撰莊有恭著在南書房行走欽此

1206 乾隆四年五月十九日内閣奉

上諭九卿會議事件皆係該管衙門主稿衆人不過  
於事情大槩畧加參酌即行定議畫題而主稿衙  
門之堂官亦不過將大指說與該司官員書吏創  
立底稿稿成之後但觀其大意無差錯處便呈相  
畫諾至文理之通順與否皆置之不問矣即如大  
學士鄂爾泰查看河工一案據奏稱新運口可用  
不必開舊口惟新口之外挑水壩稍短應再接築  
長壩似屬穩妥等語此指運口而言也又稱新運  
口內頭壩二壩三壩向東轉北即天妃開舊運河  
路自三壩向東南灣轉而北過越開為新河頭舊

河直捷新河紆折為漕運計應行舊河今新建開  
壩現俱未開仍取道天妃開既屬便利永宜遵行  
等語此指運河而言也運口運河原屬判然兩事  
乃九卿會議本內全係照議而其措詞則云請飭  
河道官員不必仍開舊口所有應接築長壩務令  
堅牢寬圍過水口如磨盤墩式至重運糧船惟期  
直捷為便今新河既屬紆折應令河臣照大學士  
所議嗣後糧艘應行舊河仍取道天妃開以利輓  
運等語九卿此議於事原無錯誤而運口運河分  
晰明白此行文牽混不通之所致也朕于河工形  
勢深為究心而又細閱本章方知其因文掩意若  
他人觀之必疑其前後矛盾矣夫撰文乃辦事之  
一端專尚文詞固不得謂之寔心辦事若並此亦  
不留意則其苟且塞責更可概見傳之天下後世  
甚有關係九卿中多有科甲翰林出身者于此等  
文義模糊豈有不能看出之理總之忽畧遷就習  
為固然嗣後當切加警省毋蹈前轍除將議覆河  
工之本發還改正外將此曉諭九卿知之欽此

1207 乾隆四年五月二十日內閣奉

上諭前朕降諭旨蠲免直隸本年錢糧九十萬兩江蘇一百萬兩安徽六十萬兩隨據孫嘉澍具摺請將直隸耗羨一併蠲除朕降旨先行復經陳世倌援照直隸之例請免江南耗羨朕初交廷議旋據議稱此次蠲免乃係特恩非被災可比例不准免耗羨且江南耗羨節年不敷今若再行蠲豁則地方應行公費益致缺乏應毋庸議朕降旨依議今據那蘇圖等奏稱此次蠲免仍因上年地方被災而施恩澤應請一體蠲除耗羨以廣皇仁等語從前陳世倌具奏時朕以伊身在京師南北隔越所奏不過遙度之辭廷議既引定例覆奏遂降依議之旨今那蘇圖身在地方目觀民間情形亦復如是陳情諒非市美邀恩之舉且朕愛養黎元輸將多減一分閭閻即多受一分之益著將江蘇安徽二省所蠲正賦之耗羨一體免征以示格外加恩之意又據直隸布政使范璨奏稱直隸公用不敷查河南耗羨現餘銀四十餘萬兩若動撥十萬兩以協濟直隸則裒多益寡于公事有裨等語此奏現交部議朕思江南蠲免耗羨之後若官員等養

廉不足則河南多餘之銀亦可通融撥補總之以天下百姓之物力仍還之天下百姓一時權宜行之不必過存畛域之見其應撥補若干之處著該部定議具奏欽此

1208 大學士張 徐 尚書公訥 尚書海 納

字寄 川陝總督鄂 乾隆四年五月二十二日奉 甘肅巡撫元

上諭朕訪聞得甘省米糧價值如粟米一項西寧則每石三兩六錢二分涼州則二兩九錢二分小麥一項西寧則每石二兩九錢六分涼州則二兩六錢二分皆以京倉斗計算雖西寧涼州糧價歷來較他處本昂而照朕訪聞之數則未免昂貴小民難以餬口又聞武威等處乏食窮民頗不安靜目下開倉平糶借給口糧民情稍覺安帖爾等可密寄信與鄂彌達元展成令其悉心籌畫善為料理務令糧價不致高昂小民不致失所欽此遵

旨寄信前來

1209

乾隆四年五月二十四日奉

旨總兵周起鳳駐藏有年著撤回四川泰寧協副將  
守宗璋著前往西藏管轄綠旗弁丁所有應得之  
項令該撫照例料理給與欽此

1210

乾隆四年五月二十六日內閣奉

上諭平郡王患病著張肇殷前往看視欽此

1211

乾隆四年五月二十七日內閣奉

上諭各省道府等朕令陸續來京引見以便察看優  
劣倘將來之任使令思道員中有由知府陞授者  
知府中有由同知知州陞授者若伊等先在知府  
同知知州內內已經引見則不必再來多此往返  
該部可傳諭各省督撫知之欽此

1212

乾隆四年五月二十八日內閣奉

上諭朕御極以來內外大臣中教人寔能體朕敬  
天勤民之心輔弼贊襄抒誠宣力有功於社稷有益於  
蒼生勞績茂著宜加優獎大學士伯鄂爾泰張廷

1213

乾隆四年五月二十九日內閣奉

旨朕愛養元元時以輕徭薄賦為念元過各省應免  
錢糧之處一經查確即予蠲除以紓民力至于早  
潦為憂則多方籌畫蠲賑兼施期登斯民於衽席  
此中外臣民所共見共聞者前御史羅彌高條奏  
貴州遵家府浮糧一事朕恐其有累民生乃地方  
應行豁免之項特交與碩色張廣泗會同詳查具  
奏今據碩色張廣泗將從前原委及現在情形一  
一查明具奏是此項皆有地有糧並非額外加添  
應行豁免者羅彌高以本地之人挾私妄奏情事  
顯然若不加意處分則科道等託建言之名假公  
濟私此風斷不可長羅彌高著交部議處並將此  
傳諭衆科道等知之欽此

附錄

(1) 臣張 等謹

奏前噶爾旦策凌奏請欲遣人往西藏熬茶一事  
臣等欽奉

諭旨議定預備料理防範之法知會西北西路軍營  
去後今據鄂爾達以夷人進藏恐滋事端具摺

陳請

硃批軍機大臣等議奏欽此臣等竊思大學士查即  
阿在西路軍營年久於西藏情形甚為熟悉夷  
人進藏關係緊要若俟查即阿病痊時會同老  
心酌議似屬有益為此謹

奏請

旨

乾隆四年五月初四日奉

旨知道了欽此

(2) 乾隆四年四月二十日奉

旨福建糧驛道員缺<sup>著</sup>柱補授浙江温州府知府員  
缺著楊士鑑補授欽此續于五月初一日聞浙總  
督郝玉麟等奏稱福建糧驛道員缺最關緊要

臣等揀選得現任汀漳龍道高衡<sup>請</sup>調補糧驛道  
所遺汀漳龍道一缺將陳樹<sup>著</sup>補授等因奉

硃批著所請行該部知道欽此伏查福建糧驛道員

缺如奉

旨照郝玉麟等所奏將高衡調補其先經補授之莊

柱應伏另有道缺出請

旨簡用如奉

旨仍將莊柱補授其高衡應回汀漳龍道之任陳樹

著仍令候缺補用相應奏

聞

(3) 直隸總督孫嘉淦議覆鍾係條陳一摺奉

硃批該部議奏欽此又河南巡撫尹會一議覆鍾係

條陳一摺奉

硃批著照所議行欽此 臣等以尹會一所奏既奉

硃批照行應交該部存案以便稽查辦理且此件係

各省通行議覆之事若有一二省未見

批示之

旨該部勢必行文催促回奏是以臣等將尹會一奏

摺奉



旨之處抄錄文部至於此案應照省情形議辦之處

旨當面告刑部堂官知之

乾隆四年五月初十日奉

旨知道了欽此

(4) 總督那蘇圖等奏請蠲免耗羨一摺 據稱江

蘇各屬上年被旱歉收

特頒諭旨蠲免江蘇錢糧一百萬兩查雍正七年定

例凡遇

特恩蠲免錢糧者其耗羨仍舊輸納若因水旱蠲免

者不得徵收耗羨所有此次蠲免錢糧雖與現

年扣減分數者有間但恭禱

上諭仍因上年被災蠲免應請將隨正耗羨一併豁

免至各官養廉及辦公之項或有不敷容臣等

另行酌辦等語 查本月內左都御史陳世倌

條奏請將江安所免錢糧之耗羨照直隸之例

一併豁免經臣等奉會議直隸豁除耗羨係格

外

特恩不便引為成例且耗羨銀兩係由為地方官養

廉及一切辦公事之需江南耗羨節年不敷

今若再議蠲豁則地方公費自必益致缺乏况

况江南今歲

恩免正項錢糧係現年之項與上年被災免耗之例

不符所有前項耗銀似難一體蠲豁應將陳世

倌所奏毋庸議等因奉

旨依議欽遵在案今那蘇圖等奏請將江蘇所免錢

糧之耗羨一併請豁等語查定例正額錢糧係

奉

特恩蠲免者其耗羨照舊徵收如係被災蠲豁者不

得仍徵耗羨且耗羨銀兩係各官養廉及辦理

公事所需雖那蘇圖等有另議酌辦之奏未免

又費經營况甫經定議該部行文在案不便即

為更張所奏仍毋庸議

乾隆四年五月二十日

奏有

旨

(5) 臣等閱看瞻岱所奏甘省各處未價糧值單內

粟米一項西寧價至三兩六錢二分涼州價至

二兩九錢六分小麥一項西寧價至二兩九錢

六分涼州價至二兩六錢二分又瞻岱奏摺內

稱涼州府屬之武威永昌平番等縣去歲歉收

至今尚未得雨窮民之食男婦成羣沿村逐堡動以借糧為名不無滋擾等語 查粟米小麥係百姓日用之所必需雖西寧涼州糧價歷來較他處本昂而此次開報稍覺昂貴小民未免度日艱難至武威等處之食窮民雖據奏稱現在開倉平糶借給口糧民情稍帖等語臣等酌議似應寄信該督撫令其即速設法辦理俾米價不致高昂貧民不致乏食今擬馮

諭旨進

呈密寄其瞻岱摺奏之處不必寫出謹

奏

乾隆四年五月二十三日進

呈有

旨

(6) 提督南天祥啟陳弭旱恤刑一摺 據稱直隸江南等省時雨未降或由外省治獄尚未平允亦未可定請差晚暢律例之臣分往各省審理刑獄復今有司每逢十日掃淨圍圉洗滌柵柵械以示矜恤等語 查會典內開順治年間有

五年一次遣官往外省恤刑之例恤刑之年各

直省停止秋審至康熙十八年以後此例遂未

舉行今南天祥奏稱時雨未降請遣官恤刑等

語查熱審之例每年于四月內直省一體通行

今外省熱審已過其審錄冊籍陸續到部若復

差有前往審理殊屬未便況南天祥所奏原為

弭旱起見今直省各該督撫先後奏報俱已

得雨則遣官恤刑之處似可不必至掃淨圍圉

洗滌柵械原屬司獄史卒之專責俱有舊例且

事屬微細亦不必特頒

諭旨南天祥所奏應毋庸議臣等擬將直省各地方

有獄衙門應時加洒掃不可怠弛之處傳諭刑

部行文各直省遵行辦理可也謹

奏伏候

諭旨

乾隆四年五月二十七日奉

旨知道了欽此

(7) 都統佛來等奏銷滋生銀兩一摺 據稱鑲藍旗漢軍於乾隆三年四月內由內務府領出滋

生銀二萬五千兩臣等酌量辦理每月以一分五厘起息有指撥借出按春秋二季交納本利者有指隨甲借出按月交納本利者又有指房借出按月交按利銀者乾隆三年四月二十日起至本年四月二十日止已屆一年之期共應得利銀五千五兩除未完外實得市平利銀四千八百七十餘兩除用過公費等銀外復行借出利銀三千九百二十三兩零尚存銀八百三十八兩零以備每月交納廣儲司一分利銀二百五十兩之用但此項銀兩若不按年奏銷恐滋生日久本利交推勢必完欠不清祈舊牽扯難於稽查嗣後每於一年期滿照例奏銷再查宗人府指借借出各官銀兩俱由戶部坐扣請將臣指借借出各官銀兩亦照宗人府之例將每季應扣本利俱入於各該旗俸檔內由部坐扣俟閱俸後臣旗即行赴部支領庶事不繁擾而銀數亦易于稽察等語 查八旗滋生銀兩於乾隆三年二月內奉

旨仍交八旗大臣辦理嗣經八旗大臣等奏請照宗人府支借之例凡有職旗員兼有產業者准其領借等因奏准在案今都統佛表等辦理銀藍

旗漢軍滋生銀兩已屆一年之期將所領本銀及每月每季所收息銀分晰奏報相應請

勅交內務府查核奏銷至所稱滋生銀兩若不按年清理恐新舊牽扯難於稽察請於一年期滿奏銷等語查滋生出入銀數若按年清查則既易於核算亦可以杜侵扯諸弊該都統奏請定限一年奏銷之處似應照所請行又奏稱各官指借所借銀兩請照宗人府之例由戶部坐扣等語查旗員領借滋生銀兩若在部坐扣恐二十四旗彼此互借勢必逐一行查有需時日致候放俸之期臣等酌議現今錄黃旗滿州錄黃旗漢軍錄黃旗漢軍三旗分生息銀兩俱係該旗大臣辦理請嗣後凡有旗員指借借出三旗滋生銀兩者應令錄黃等三旗將各自應交本利銀兩即於領俸之前造具清冊行令八旗於各員名下照數在各旗坐扣差員交送錄黃等三旗核收可也謹

奏伏候

旨

乾隆四年五月二十八日奉 依議欽此

1214 乾隆四年六月初一日內閣奉

上諭朕覽閱本章見河南盜案多於他省大抵由地方文武官弁平日不留心整理之故夫盜案既經發覺固當嚴行緝拿不使漏網而未經發覺之先必有積盜為之窩藏糾合若能窮究其根剪除淨盡則匪黨無所依附盜風自然止息豫省多盜為居民行旅之害甚有闖擊者巡撫尹會一總兵韓應魁栢之善督率所屬官弁加意稽查嚴行捕緝務使積盜不致潛藏羣盜不致橫肆若有疎縱怠玩者即行嚴參倘因朕此次諭旨而啓諱盜之弊其過更不可違可即傳諭該撫鎮知之欽此

1215 乾隆四年六月初二日內閣奉

上諭聞廣東各府州縣去省稍遠之處必擇長隨中寂照技者令長往省城厚給使用與各上官家人幕賓吏胥深相納允督撫司道平時一言一動必先事探知過辦理要緊事或逆探上官意向巧為迎合或將下面私情先布於上官家人幕賓預為之地然後投遞文書督撫司道往往墮其術中

信以為才保荐要缺誤任匪人者多有之且羣聚省會各爭門戶互競智巧甚且捏造浮言以致同寮不和肆行傾陷弊端種種去冬督臣馬爾恭到任其駐劄之肇慶府較前肅清而巡撫司道駐劄之廣州府省城為錢糧刑名樞滙此輩仍盤踞又聞廣東人命案件有疑似難明者州縣官初次取供於隣里干証或不能細心研訊牽延日久是殺是誣西無確據撫臬無可如何竟將原被一並保釋事由外結又案內或有要犯逃脫口供難以質証則將原案刪截具題以上二事據朕所聞如此此皆於官方吏治甚有關係者著該督撫悉心稽查嚴行禁約毋得仍蹈前轍欽此

1216 大學士伯鄂 張 大學士徐 字寄 各省

督撫 乾隆四年六月初三日奉

上諭往昔帝王之治天下每有沙汰僧道之令誠以緇黃之流品類混雜其間閉戶清修嚴持戒律者百無一二而游手無藉之人借名出家以圖衣食且有作奸犯科之徒畏罪潛踪俾逃法網者又不

可以數計夫一夫不耕或受之飢一女不織或受之寒天下多一僧道即少一力作之農民若輩不耕而食不織而衣且甘食美衣公然以為分所應得而不知愧恥是以上農夫二三人內袒深耕之所入而不足以給僧道一人之用既耗民財復溷民俗在國家則為游民在佛老教中亦為敗類誠不可聽其日引日多而無所底止也惟是此教流傳已久人數繁衆一時難以禁革是以朕今復行頒給度牒使目前有所覈查將來可以漸次減少此朕經理之本意也今禮部頒發各省度牒已三十餘萬張此領度牒之本僧各准其招受生徒一人合師徒計之則六十餘萬人矣目下亦只得照此辦理但朕察看外省官員情形不過循照部文敷衍了事蓋未深知朕漸次裁減之本意爾等可密寄信與各督撫令其徐徐留心使之日漸減少需以歲月不在取必於一時若官吏奉行不善致滋擾累則又不可欽此遵

旨寄信前來

1217 大學士伯鄂 張 大學士徐 宇寄 各省

督撫 乾隆四年六月初四日奉

上諭前侍郎鍾保條奏命案盜案一摺朕發令各省督撫酌議摺奏今據那蘇圖孫國璽覆奏前來俱請勅下各省督撫云云朕思政務之中若遇緊要事件經部行文發出永遠定例通行者則當用勅下各省督撫字樣至於平常事件朕批令該督撫招奏者只應就一省情形而言因時制宜不必奏請勅下各省轉多纏擾可將此意傳諭各省督撫知之欽此遵

旨寄信前來

1218 乾隆四年六月初四日內閣奉

上諭據川陝總督鄂彌達奏報甘省郡縣有雨澤不敷之處而寧夏亦在缺雨之內朕思寧夏當去年地動災傷之餘又值今年早乾之厄吾民何能堪此夙夜焦勞切加修省仰冀感名

天和該地方督撫有司更當恐懼警惕勤修人事以消灾沴而撫郵安全之策也當先事預籌方為有備

無患至于一方之中灾荒叠見

天心仁愛斷未有無端降罰者凡爾小民亦當思所以致此之由或平日人心邪僻風俗澆漓或于地動之後不知悔過省愆而轉有怨天尤人之意有一于此皆足以上干

天怒垂象示儆該督撫等當以至誠之心勤懇懇宣諭勸導俾羣黎百姓各矢天良努力向善以為弭灾求福之本易曰作善降之百祥其理固有斷然不爽者思之勉之欽此

1219 同日內閣奉

上諭原任雲南楚雄鎮總兵南天培之子南應爵着該部帶領引見欽此

1220 乾隆四年六月初七日内閣奉

旨戶部侍郎員缺着盛奇調補刑部侍郎員缺着杭奕補詢補欽此

1221 乾隆四年六月初十日内閣奉

上諭廣徵收糧米支給本省兵食民間因名為兵米聞向來州縣官皆折收銀兩每一倉石照時價多收銀六七錢至加倍不等收銀之後另買稻穀碾米給兵其買穀或派富戶或派米舖每石又照時價短發一錢或數分不等甚至有富家布圖結交因事請託並不領價者似此一出一入之間多收少發小民何堪賠累之苦即云山居遙遠之地折徵銀兩亦可免其輸將量議加增以為運腳亦民所樂從然借端需索為數太多則事之必不可者着該督撫悉心查察務令公平辦理倘有仍前滋弊者即行嚴參毋得姑容欽此

1222 同日內閣奉

上諭朕愛養黎元凡有應行減免之賦稅無不查明豁免以紓民力今聞陝西醴泉縣舊額寬徵糧二萬四十二石九斗零順治十三年清文時因弓口窄小積有地地加糞糧二百五十六石二斗一升零後遂造入全書著為定額其定有糧無地小民

輸納維艱着該督撫出示曉諭從乾隆四年為始將此項永遠寬免俾百姓均沾寔惠欽此

1223 乾隆四年六月十一日奉

旨據工部奏稱直隸山東甘肅等省開報城磚石灰等項價值較原定之價或少一倍或數倍前後多寡甚覺懸殊請將原定價值浮多款項行文各省督撫確查本處實價一一更正凡類此等款項一并查改報部等語朕思今日開銷之價值既大減於前則從前所報之價顯係浮濶工部何以不行指叅而但請行查各省照寔條價改正夫前此所開之價既不足憑則此番改正之價又豈可以為據乎假有狡猾之人避重就輕以開價少者為錯悞以開價多者為寔數該部又何以辨其寔寔耶總之百物價值原屬隨時增各省不同即一省之中各郡縣亦不畫一今預定數目永遠一例遵行則價賤之年必有餘貲以飽官吏之私索弊在侵漁錢糧為害尚小若價貴之年採辦不敷勢必科派閭閻弊在苦累百姓為害甚大惟在各省督撫遇有辦理物料之處留心訪察詳確綜覈既不使

承辦之員恣意浮冒虛糜國帑又不至苛剝擾事過於減少貽累官民庶為公平之道又豈預立成式所能杜絕弊端乎其應如何酌量定例之處着大學士九卿會議具奏欽此

1224 乾隆四年六月十六日內閣奉

上諭蘇霖沕係朕從知府內簡用兩淮運使之員前聞伊不勝兩淮之任特令調補太通運以觀其後茲乃聞伊到任以來仍不悛改舊習如開挑淮揚河道一事關係民生切要督臣委令與監督挑濬場河因運司徐大枚以場河原係商人捐挑詳請委商協同場員辦理蘇霖沕輒生忿怒將工程忿怒將工程錢糧棄置不問率爾越境赴淮經督臣聞知嚴加申飭勒令回工料理仍然不知儆惕與前任運司衙門之書吏往來親密行止卑污官箴不謹深負朕簡用之恩着革職其太通運員缺着王雲銘補授欽此

1225 乾隆四年六月十七日內閣奉

上諭四川提督員缺著雲南昭通鎮總兵官鄭文煥補授雲南昭通鎮總兵官員缺著廣西左江鎮總兵官杜愷調補廣西左江鎮總兵官員缺著李化鎮總兵官李質粹調補欽此

1226 乾隆四年六月十八日內閣奉

上諭直隸宣化鎮總兵官李質粹已調補廣西左江鎮其宣化鎮員缺著贛南鎮總兵官苗國琮調補欽此

1227 乾隆四年六月二十一日內閣奉

上諭安徽優生陶敬信所進周禮正義一書經朕披閱其註解尚屬平妥明順着賞緞二疋令其在三禮館纂修上行走欽此

1228 乾隆四年六月二十二日內閣奉

上諭昔我

皇考惠愛商民恐州縣牙行歲有增添以致奸棍把持

爭奪抽分利息為閭閻之擾累於雍正十一年特頒

諭旨令直省督撫飭令藩司因地制宜著為定額報部存案不許有司任意增添止許將額內各牙退帖頂補之處查明換給新帖再有新開集場應設牙行者酌定給帖報部不許濫增所降

諭旨其為明晰近聞江蘇各屬於額帖之外陸續請增者一縣竟有數十張以至百餘張不等此必州縣官員才識短淺聽信吏胥播弄借新開集場准其添設之例或舊集而捏為新設或裁牙而混詳改充徒使貿易小民受其苛索莫可申訴江蘇如此則各省亦必皆然着該部即通行各省督撫轉飭布政使將朕此旨出示曉諭該地方果有新開集場應設牙行者該印官詳細查明取具印結由府州核實詳司給發牙帖如非新開集場而濫混請添者即行題參從重議處倘有仍前濫鑿失於查察者朕必於該督撫藩司是問欽此

1229 乾隆四年六月二十三日奉

旨御史羅彌高着都察院堂官於二十六日帶領引見欽此



乾隆四年六月二十三日內閣奉

上諭據湖南巡撫馮光裕奏稱長沙府各屬生童因  
 考試齊集省城有童生赴城上乘涼者視城外居  
 民婦女相向戲侮詆民李勝進城理論經衆童生  
 起逐內有攸縣童生文良書走急被同伴擠跌文  
 良書之父文德熾控以被毆受傷喊稟善化縣並  
 未指出姓名隨有好事童生劉樹高謝焱等即同  
 應考多人群赴縣堂嚷鬧逼出差查拿次早知  
 縣韓宗蕃赴文良書寓所驗傷係屬跌磕並非毆  
 打衆童生遂攔街喧鬧將所乘之輪毀壞又復擁  
 至府署嚷鬧經副將等喝拿始散又赴城上搬取  
 碑石打壞居民黃忠克等二十九戶屋瓦臣現在  
 飭司查審究擬等語前據福建巡撫王士任奏稱  
 福安縣生員郭向高等倚恃青衿抗糧藐法率衆  
 挾制官長敢將文廟齋門乘夜塗黑以快私忿又  
 據直隸總督孫嘉淦奏稱昌黎縣生員趙汝楫控  
 告知縣劣款種種經知府審訊皆虛遂邀同邢謨  
 烈等欲將縣門壘砌朕覽王士任孫嘉淦馮光裕  
 前後所奏是數月之內各省生童生事不法之案  
 已有其三夫朝廷之所以優待士子者以其讀書

明理立品修身足為庶民之坊表且備登進之選  
 為國家有用之材也今則涼薄成風驚凌相尚恃  
 列膠庠藐視憲典以安分為耻以抗法為榮平時  
 號為讀書明理者尚切如此彼愚民無知群相則  
 傲其為人心風俗之害何可勝言且此等之人伏  
 處彌下即不自愛將來俸登任籍必至乖戾縱肆  
 傲上虐民尚望其慎守官方砥礪廉隅為國家循  
 良之吏乎古稱狼狽不剪則嘉禾不生朕之嚴飭  
 劣生者正所以培植端人正士也各省學政當深  
 知此義時時訓誡俾頑劣生童改行率德以愛國  
 思其蕩檢踰閑有玷官墻者即行黜革毋得姑容  
 地方督撫大加亦當極力化導並嚴加約束以端  
 士習而厚民風著將此旨刊刻頒布咸使聞知欽  
 此

1231 乾隆四年六月二十四日內閣奉

上諭據河南巡撫尹會一奏稱豫省於五月內連得  
 透雨茲於六月二十三等日開封省城大雨如  
 注晝夜不息十六日復雨水勢加增官民房屋多  
 有傾圮田畝低窪之處俱被水淹所屬陳留中牟

二縣受水亦重當即派委官自查看貧民棲身無所者設法安頓其艱於糊口者散給倉糧賑濟一個月其餘各屬現在飭查再奏等語今年豫省收成未見豐稔五月間雨澤沾濡方幸秋成可望不料六月雨水太多開封所屬縣邑又有水溢之災居民困苦朕心深為軫念著巡撫尹會一督率屬員詳細查明多方賑恤毋使一夫失所若有應免錢糧及應行緩徵之例查明請旨或有續報被潦之州縣亦一體辦理欽此

1232 乾隆四年六月二十四日內閣奉

上諭沈學力乃武職大負其所陳奏各件並非切要之務不過自逞臆見妄事紛更至於請建營學並頒書籍等語更屬悖謬從來文武兩途各有職業若務文事之虛名必妨武備之實効將來營伍漸致廢弛甚有關係沈學力著交部察議具奏欽此

1233 乾隆四年六月二十六日內閣奉

上諭朕因廣西左江鎮總兵官負缺緊要降旨將李質粹調補其宣化鎮員缺將苗國琮調補今據李

### 附錄

質粹奏伊父母年俱七十難以遠離復以路遠不能迎養情詞懇切李質粹著仍留宣化鎮之任其左江鎮員缺即著苗國琮調補欽此

(1) 安徽布政使晏斯盛陳奏地方事宜一摺 據

稱上江地方上年秋旱本年五月內雖次第得雨未甚霑足所幸二麥有秋現在嚴禁販運躡躡等弊并採聽東豫江廣二麥豐收之處採買接濟又購買菜豆蕎麥以備籽種再江北各州縣土地疏瘠多遊手遊食之民樂歲貪于廣種薄收凶年則空穴而走易于滋事惟大興工作伴朝夕所入厚於賑糧人必爭趨顯以開數十年之利益然以收數十百萬之丁壯康熙初年河臣靳輔請開鳳陽濬田一疏甚有條理急切可行方下部舉行因有事闕滇其議遂寢按江北大勢鳳潁二府有淮水為之經而汝潁濡睢渦汴澤減諸水絡繹其間廬州一府以東湖

為之委而大江山河通其流他若六安一州借有塘堰泗州所屬居淮下流滁州所屬亦多溪壑並可一創脩治請照淮揚水利大猷帑金委令諸熟水利之自董集民力大加鑿治貧民既有所資藉而利濟亦可久遠再災歉之後地方無藉之徒往借端滋事州縣文武每因灾姑息所當及時整頓再安省倉儲未能充盈請將減三收捐之例聽江廣兩省併在南省作管及貿易之人俱准赴灾屬投捐仍展限一兩月則倉儲必加充裕等語乾隆四年五月二十九日奉

硃批大學士等密議具奏欽此 臣等查上江地方上年秋旱本年雨澤稍遲豐收難必所幸二麥有秋自應倍加撙節以為儲備晏斯盛所奏嚴禁販運出境晒麩燒鍋等弊自屬地方官應行辦理之事至所奏採聽東豫江廣二麥豐收之慶動銀前往採買以資接濟并購買雜糧以備籽種所需六先事綢繆之舉應請

勅交該督撫酌量辦理又奏稱江北各州縣地土硠瘠請大興工作推廣前河臣新輔請開鳳陽清田之法凡鳳陽潁虛等府六安滁泗等州一例

脩治請照淮揚水利發帑興脩俾貧民有所資藉而利濟亦可久遠等語查河渠之制自昔首重水利農田相為未稟史起溉澤而斥鹵生稻梁鄭國鑿涇而閩中為沃野嗣是而後漢世爭言水利行之六每有成效洵漁志所載班可考唐書地理志於凡一渠一堰記之尤詳明洪武時亦嘗遣人詣天下郡縣集吏民築農隙修治水利蓋引源醜深時其蓄洩導其尾閘疏之束之治水所治田也禹貢揚州之田下下今吳中賦入甲于天下良由三江五湖之利經累代脈分縷刻使通灌溉遂號上腴今大江以北各郡縣瀕江近河諸水絡繹經緯於其間因民力而引以為利亦未始不可化硠瘠為膏壤昔之言水利於江北者壽州之有芍陂舒城之有三堰尤大彰明較著者也其他若安慶之吳塘寧國之薛公堰大農陂等載在郡志亦代不絕書康熙初年河臣新輔請開鳳陽清田俾旱澇有

隆奉  
 上喜文部議行因有事閩滇其議遂寢雍正五年河臣孔毓均亦請於鳳陽府屬之宿州靈璧縣甌浚溝

旨先行委官分督用銀八千餘兩疏浚溝洫俱極深通

是知水利之興行之一處而放行之他處而無

不效昔明臣徐光啓著書詳於水利之學以為

水利不講水日乾而土日積山澤之氣不通焉

得而無水旱而魏呈潤亦言傳曰雨者水氣所

化水利修亦致雨之術也今晏斯盛所奏鳳穎

廬三府六安潯泗等州皆有水利可開請照淮

揚水利發帑興修委令諳熟水利之員董集民

力大加鑿治事屬可行但工程浩大非一時所

能並舉今

欽差總理水利大臣現在江南應請

勅交汪濬德爾敏等會同該督撫及布政使晏斯盛

詳勘熟籌次第舉行應否循照新輔所奏清田

制度及估計動撥之慮悉心妥議具奏請

旨至所奏良農可念富懷之以思頑梗無厭當齊之

以法災歎之後地方無藉往借端滋事是在

地方官稽查約束勿姑息以養奸所謂根秀不

除嘉禾植不植者自應及時整頓轉飭所屬實心

辦理又奏稱安省倉儲現存穀折米三十八萬

石新捐監穀折米六萬石未能充盈請將減三

收捐之例聽江廣兩省併在南省作官及貿易

之人俱赴災屬投捐仍展限一月則倉貯自必

充裕等語查倉儲積貯必足敷支用而後緩急

可恃安省上年賑用既多所存不敷需用捐監

之例似應稍為變通以實倉貯晏斯盛所請聽

江廣兩省并在南省作官及貿易之人俱准赴

災屬捐投捐仍請展限之處請

勅交該部定議請

旨遵行是否有當伏候

諭旨

乾隆四年六月初六日奉

硃批依議欽此

(2) 布蘭泰奏稱敬陳未議一招 據稱各省駐防

八旗開戶人等比另戶較多今奉條陳止許另

戶滿洲披甲不許開戶當差人等當差今兵丁

參差不齊皆因挑選另戶重雅俱得充伍臣伏

思開戶人等世受

國家養養之恩僅以弓馬為事農商俱不諳曉若

爾不准披甲非但俯仰無資抑且棲身無所將

來難免廢棄請將外省駐防旗人內順治康熙

年間開戶人等子孫念伊祖父曾經出力揀選弓

馬可觀年力精壯者仍准挑補馬甲雍正年間開戶人等仍循舊例不准挑甲等語查乾隆三年六月內議政王大臣等議覆趙國政條奏八旗馬甲額兵挑取正戶不便將開戶人等挑取等因議准在案又查本年五月內兵部議覆將軍王常泰稱右衛駐防從前原將另戶滿洲與開檔人等一同派往今右衛另戶人少而開檔閑散甚多其中曾有出征効力者若不准挑補必致廢棄請嗣後右衛披甲缺出先將另戶壯丁挑補如不敷用然後准予開檔分戶內年力精壯技藝可觀者揀選項補等因議覆在案今布蘭泰奏稱各省駐防八旗開戶人等伊父兄從前不無出力之處請將順治康熙年間駐防外省開戶人等之子孫仍准挑補馬甲雍正年間開戶人等不准挑甲等語查八旗滿洲生齒日繁馬甲額兵有數是以定例止許另戶挑取挑披甲不桂開戶人等揀補至兵部議覆王常泰奏右衛披甲缺出仍准用開戶之人實因右衛駐防滿洲另戶人少開戶更多與在京不同是以定議右衛另戶壯丁如不敷補甲方准於開戶內補用今布蘭泰奏稱各省

駐防開戶人等仍請挑補馬甲應照該部議覆王常泰奏之例請嗣後各省披甲缺出仍照定例先將另戶壯丁挑補其另戶中有年力尚未及壯而一二年之後可以造就者亦准挑補外倘再<sup>補</sup>不敷方准於開檔分戶人等內酌量選用可也

又據稱從前

陵寢未設駝騎校時八旗滿洲惟有披甲而止別無進身之階續蒙添設駝騎校二員八旗人等俱皆勉學弓馬演習清話較前頗有起色但定例設立章京駝騎校者必有領催

陵寢重地請援照定例添設領催四名辦理糧餉檔案

派差則有專司遇有駝騎校缺出即於額領催內揀選擬定正陪送旗帶領引

見補授俾進身有階而八旗滿洲愈加踴躍鼓舞等

語 伏查

陵寢添設駝騎校係乾隆二年十一月內總理事務王

大臣於議覆法爾善請張家口等處添設駝騎校並未添設領催今布蘭泰奏請添設領催其

應否酌量兵數多寡一併添設之處請

勅交兵部會同八旗詳志定議具奏可也伏候

諭旨

乾隆四年六月初八日奉

旨依議欽此

(3) 查

南薰殿刊刻

硃批諭旨旨政於乾隆三年六月二十七日奉

旨任館校刻人員効力有年著交部議叙欽此隨經

吏部按各員行走年久暫分別加級紀錄在

案所有在館効力人員已經蒙

恩議叙之處合行奏

聞

乾隆四年六月十四日奉

旨知道了欽此

(4) 臣等看得都統永興請更筆帖式俸米一摺

據稱各衙門筆帖式歲食俸米向例皆在通州

倉內支領零星稀少不能無車價往返之費請

照驍騎校護軍校之例在京倉領給以益微負

等語 查各部院筆帖式約計一千四百餘員

自七品以至九品其需俸米一萬九千餘石向

例皆在八旗官員在通倉支領今據都統永興

以該員所領俸米七品者歲食十六石八品者

歲食十三石零九品者歲食十石零而通倉定

例官員俸米必分六色零星稀少亦不能無車

價往返之費是以食米之人就近變賣於京倉

買米而食請驍騎校護軍校之例在京倉支領

等語查每年漕糧由倉場分派各倉收貯其運

到之數多寡不等如漕糧全行起運則京倉約

收三百餘萬石如有截留捐折則收二百餘萬

石今京倉現貯米六百九十餘萬石除放甲米

外尚存米四百四十餘萬石該都統所奏各衙

門筆帖式俸米在京倉支領每年不過一萬九

千餘石儘可足支給而於筆帖式微員實有裨

益應如所請嗣後筆帖式俸米准照驍騎校護

軍校之例在京倉領給請

勅交部該部通行八旗遵照辦理可也伏候

諭旨

乾隆四年六月十五日奉

旨依議欽此

(5) 臣鄂 臣張 臣徐 臣訥 臣海

謹

奏臣等叨蒙

聖主天恩至深至渥即數年以來仰遵

訓誨勉供職幸無隕越者皆

隆恩之所賜夙夜思省無能報稱方深愧懼啓刻靡

寧今蒙

優旨特頒加臣鄂 臣張 太子少保 太子少保 臣徐 臣

訥 太子太保 臣海 太子少保 臣等聞

命之下感激惶悚莫知所措在戎

皇上為有加無已之恩而在臣等實有展轉難安之

隱若於

君父之前匿不陳奏轉非據實抒誠之誼伏冀

俯鑒惻忱

收回成命庶臣等之分得安而臣等之心亦不至抱

慚無極矣為此謹

奏

(6)

臣查廣西左江鎮總兵官係陸路最要缺江西  
南贛鎮係內地中缺總兵官苗國琮年力精壯  
人亦明晰李賢粹似可以勝左江之任再直隸  
宣化總兵官李賢粹明白精細堪以調補但雖  
屬內地亦係最要缺可否調補統候

欽此

(7)

臣等看得葉一棟進  
呈經史內稱業戶收佃戶租米租銀另造租斛租  
戥於法當禁又田價日貴收租之額日增而日  
浮應使所在有司勸教之務令租價平允等語

查北方田畝有業戶與佃戶分穀者有每年

按畝取租錢一二百文者南方夏麥多係全歸

佃戶間有業戶收麥亦甚微少惟秋成計畝收

租原有定額大約業戶得四佃戶得六如遇歉

年則佃戶所交即減其數業戶與佃戶休戚相

關亦不能不為通融體恤此南北業戶佃戶之

大槩情形也查雍正十三年十二月內奉有素

封之業戶能加惠佃戶者令有司酌量獎賞之  
諭旨即使業戶鮮能加惠佃戶若另造租斛租戥甚

至以子女代償租額等事佃戶亦斷不能受業  
戶如此之剝削也至民間典買田畝雖價值有  
加而佃戶所支租額從無增添之理據葉一棟  
稱高曾以上目覩佃戶之苦如此大約係百年  
以前屬前明江西紳衿富戶之惡習臣等細加  
訪問現在並無其事所奏應毋庸議

(8) 查上年十一月內苗國琮奏請改復米姓一摺  
欽奉

硃批該部議奏後又據原任江寧織造李英以伊之  
祖先原係李氏近日苗國琮妄聽聞傳謂李氏  
祖先原係米姓欲邀合族同復米姓奴才雖至  
愚不敢悖理從事等語具奏奉

旨這所奏情節該部查奏欽此隨經戶部行查核部  
檔案苗國琮之祖過斷繼苗姓已歷四世不應改  
苗為米其李英之曾祖李景和自從

龍入京歷年丁冊俱以李姓造報仍聽其姓李並令  
苗國琮將奏抄錄送部備案今苗國琮奏稱  
俱已欽遵並將原奏抄錄送部外恭繳

硃批原摺 臣等查苗國琮不准復姓一案已於戶  
部議覆李英摺內奏明完結無可再議之處此

次苗國琮奏摺應請

硃批知道了至於上年苗國琮原摺該部既未曾見

自係臣等未曾交部實屬疎忽不勝惶悚謹

奏

乾隆四年六月二十五日



1234 大學士鄂 張 徐 字寄 直隸總督孫

乾隆四年七月初一日奉

上諭今年五六月間雨澤調勻禾稼暢茂可冀有秋惟是直隸山東有數州縣飛蝗尚未全滅深慮朕懷往來之人皆以為蝗由河間蔓延他處該縣不能撲滅淨盡則其怠忽可知前孫嘉淦奏稱屬員內若有捕蝗不力者即行題參今朕所聞如此伊豈無聞見可寄信詢問之欽此遵

旨寄信前來

1235 乾隆四年七月初一日內閣奉

上諭王漪著革職交該部質審亨泰朱士伋據實奏奏可嘉著交部議叙欽此

1236 乾隆四年七月初四日內閣奉

上諭據郝玉麟王士任奏稱福建按察使倫達禮自到任以來為人誠實辦事勤慎惟於上年身體抱病初猶時作時瘥近日胸膈虛脹漸成怯弱之症非解任調理一時難以痊可等語倫達禮著解任

來京俟調理痊愈之後奏聞另用其福建按察使員缺著張嗣昌補授欽此

1237 乾隆四年七月初六日內閣奉

上諭甘肅巡撫元展成請頒書籍著頒發大清會典一部欽此

1238 乾隆四年七月初六日內閣奉

上諭據鄂爾達元展成奏稱甘省五月以來連得大雨間有山水衝壓及雨中帶雹之處如秦州屬之秦安縣涼州府屬之平番縣有被水淹浸之邨庄又西寧渭源河州三州縣有被雹災之邨庄又階州寧遠秦州隴西伏羌會寧皋蘭等處亦被雹傷約二三分不等又武威古浪永昌等處有水衝淤壓之田畝現在分別撫恤俟驗勘是否成災再行題報等語朕念甘省災傷之餘即使年穀順成尚恐地方未有起色今復有此被水被雹之事朕心實切惶悚著該督撫董率有司加意料理毋使一夫失所雖據該督撫奏稱此數州縣中被災者不過邨庄幾處即一邨之內亦輕重不等但一州縣

中既有被災之所則通州縣內料必不能十分豐收米糧未必寬裕必須格外加恩閭閻始能樂業著將凡被水雹之州縣不論成災不成災所有乾隆四年應徵地丁錢糧悉行寬免以示優恤甘民至意欽此

1239 乾隆四年七月初八日奉

旨此摺仍著存貯俟慮度瑾服滿引見之日提奏欽此  
巴凌阿原摺存匣

1240 乾隆四年七月初十日內閣奉

上諭上年江南地方被旱歉收朕於蠲免地丁銀兩外並將倒不蠲免之糧米亦按被災分數蠲除其仍有應徵之漕項又令緩至今年麥熟後改徵折色無非為休養斯民計也今二麥已收所有災緩折漕之項正屆催徵之候朕思淮安揚州徐州海州四屬上年被災獨重本年三四月間雨水又稀麥收未見豐稔目前青黃不接之時若糶麥以完漕項民力未免拮据著將淮揚徐海四屬緩徵折漕米五萬四千餘石再緩數月俟本年秋成之後

照數徵收以紓民力該部即速行文江南督撫知之欽此

1241 乾隆四年七月十一日內閣奉

上諭索柱新授工部侍郎著仍兼內閣學士都察院副都御史員缺著雅爾圖補授欽此

1242 乾隆四年七月十五日奉

旨據河道總督高斌奏稱河庫道張師載以母老懇請終養著准其所請其河庫道員缺著完顏偉調補浙江海防兵備道員缺著莊柱補授欽此

1243 乾隆四年七月十七日內閣奉

上諭據河南巡撫尹會一奏稱豫省自六月以後天雨過驟又因上游之水漫及下游以致被淹處所共計四十餘州縣其間田禾房屋多遭水患現在分別查賑辦理等語朕思豫省今歲麥收未稱豐稔今又罹此水災閭閻困苦深軫朕懷該撫等可督率屬員迅速查勘多方撫綏其田畝被淹無餬口之資者即加意賑濟毋使之食其室廬傾圮無

棲身之所者即設法安插毋使失所至於錢糧應免應緩之處即分別查明具題請旨朕又思豫省今歲既被災傷將來施賑之際恐米穀不能敷用楚省素稱產米之鄉聞今年雨水尚覺調勻秋收在望可以接濟隣省著河南巡撫會同湖廣督撫就近商酌如何轉運楚米以濟中州之用即速妥議一面辦理一面奏聞欽此

1244 乾隆四年七月十八日內閣奉

上諭據總統駐防哈密等處提督李繩武奏稱總兵官王邦寧駐劄塔爾納沁總理東路卡倫於本年三月患病迄今半載尚未痊愈可否准其進口回任以便醫治等語王邦寧著回本任調理其領兵駐防塔爾納沁總理東路卡倫之處著興漢鎮總兵官任懷德前往更換其興漢鎮印務仍著漢中副將呂瀚署理欽此

1245 乾隆四年七月二十日內閣奉

上諭今年糧艘進京漕運總督等約束嚴緊不許旗丁沿途糶賣食米耗米留為歸途出糶以資盤費

朕思旗丁多餘米石原欲賣與民間希圖得價若畿輔地方官出價收買以備賑糶之用似於公私兩便但照官定之價恐減於市糶之數於旗丁無益應照民間時價公平給與不得藉勒強買以致旗丁受虧並擔閣回空日期今回空船隻尚未全數過津但為期已迫著總督孫嘉淦悉心斟酌速行一面辦理一面奏聞欽此

1246 乾隆四年七月二十二日大學士張 徐

尚書公訥 奉  
上諭吏部尚書甘汝來持躬端謹辦事恪勤久歷外任賢聲素著自簡任尚書以來實心供職正資倚用今聞患病滋逝深為軫惻聞其家計寒素且無經理後事之人著賞帑銀一千兩派該部司官代為料理命散秩大臣一員帶領侍衛十員往奠茶酒欽此

1247 乾隆四年七月二十二日大學士張 徐 尚

書公訥 奉

上諭閩浙總督郝玉麟著補授吏部尚書其閩浙總督員缺著湖廣總督德沛調補湖廣總督員缺著兵部侍郎班第補授德沛接到部文之日即赴新任不必俟班第交代郝玉麟俟德沛到任交代之後起身來京欽此

1248 乾隆四年七月二十二日內閣奉

上諭各省府州縣官員均有守土之責不宜輕離職守每聞督撫等遇有公事輒將地方官或調至省城辦理或調赴他府辦理動經數月不回本任且一府之中竟有將郡守牧令全行調辦者如此則本地事務必至廢弛於守土之義大相乖繆嗣後督撫等各宜留心若遇緊要公事不得不調員辦理之時則酌量慎重然後檄委勿使守牧縣令等官全離本地致有顧此失彼之慮再者閩廣向來風氣屬員之於上官以趨謁承奉為能而同寅之中又以宴會酬酢相尚以致廢時失事耗費物力於無用之地此亦有關於吏治官方者朕屢經降

旨訓飭聞馬爾泰到任之後粵省漸知俊改而閩省舊習則未全除為此再加訓諭嗣後倘有屬員無故赴省干謁上司或流連宴集忽視政務者經朕訪聞必加以嚴譴欽此

1249 辦理軍機大臣大學士伯鄂 張 大學士徐

尚書公訥 尚書海 那 宇寄 雲南總

督慶 雲南巡撫張 乾隆四年七月二十六

日奉

上諭據慶復張允隨奏稱安南奸人自稱交江王現今棄眾投誠傾心向化彼在交國雖有應得之罪而天朝固無不徧之仁投訴即難盡信輸情自屬可矜除安揀頭目解散兵眾招撫乾塘餘黨及咨安南等一應事宜俟臣等審明再行具摺恭請聖訓外理合先將交賊投誠情形奏聞等語朕思安南為我朝外藩素常恭順與內地無異今彼國奸人忽思搆釁生亂且捏稱天朝有兵相助更為悖逆前次慶復等移文該國王諭以天朝必無助奸人以兵而加於百年臣服藩封之理此處辦理甚

是今摺內忽稱出具榜文開賊生路賊遂連遣兵頭求降董芳照依榜文許以不死並邀賊首釋兵親來交賊遂解散餘黨止留親兵三百在馬郎三百七馬鞍山一百到界河率領頭目十二人親詣邊營叩懇投誠並呈其上世圖冊董芳等犒以酒食暫安置營內等語據此是安南之叛民該地方官已准其投誠而容納之矣計算奸人糾集不及千人且離滇界甚遠以安南兵力不難擒其首惡而散其黨羽所以不即遣兵者料聞奸人天朝助兵一語不敢不稍存觀望耳今天朝既容其投降則安南自不能過問為彼國王計將何以辦理設使安南國王以為納彼國之叛寬彼國之仇竟行詰問該督等又將何詞以對且與從前行文之意不自相矛盾耶此事辦理之處於情於理均屬不合可即馳信與慶復等就現在辦理情形悉心妥議務有以服安南國王之心而不失統御外藩之大體不可希圖省事苟且完結也欽此遵

旨寄信前來

1250 乾隆四年七月二十七日内閣奉

上諭據雲南總督慶復奏稱前奉諭旨將溫而遜命往雲南以道員委用仍著留心試看該員到滇兩載曾委署糧道事務勤敏幹練辦理妥協但雲南道員止有四缺該員年已六十有餘一時難以試補可否用於內省缺多地方俾得勉力報効等語溫而遜著命往江南交與總督那蘇圖以道員題補欽此

1251 乾隆四年七月二十八日内閣奉

上諭據河南巡撫尹會一奏稱今歲豫省地方六月以後陰雨連綿房屋傾圮糧價較前頓長請將捐監事例照江南被災州縣減三收捐向來豫民食用所需全資小麥今麥價較穀價為貴折中定額每穀一石折麥八斗為率如減三收捐請准穀麥兼收應捐穀一石者收麥八斗雜借之時即可米麥並用於民食更有禱補等語從來養民之道首重積貯而積貯之道必使百姓家有蓋藏能自為計庶幾緩急可恃雖遇早潦可以自存不至流離失所若百姓毫無儲蓄而事事仰給於官無論常

平等倉現在未能充足即使充足矣而已有限之穀給無窮之民所濟能有幾何又如荒歉之歲督撫等動以截漕為請殊不知天庾所關甚重若非萬不容已豈可輕動况以經制之漕糧而供各省之動撥其不敷應用更為人人所共知者去年尹會一曾奏麥收豐稔之時亦當聽民間自為流通而程元章則奏稱嚴禁躉買麩以致民間所收之麥所造之麩皆廢棄於無用之地民甚不便等語今尹會一乃奏稱豫省食用全資小麥可見伊等平時視穀麥等項為無足重輕而一遇歉收則束手無策矣又有以宣化府高粱為苦澁不堪民食僅可供燒鍋之用者此皆未曾經歷民間饑饉之苦而守此安常處順之淺見也豫省上年秋成頗豐今年麥收亦好不過以夏月被水偏災而民間即匱乏若此則平日官民之漫無經理可知一省如是他省自必相同此則朕心所大憂也至尹會一奏請比照江南之例減價收捐亦覺未協緣江南通省上年被旱今年麥復歉收是以如此辦理夫捐監一事原為積穀而設今以偶爾偏災而輒思變通權宜之計恐將來積穀之舉仍屬有名無實其所請穀麥兼收及不拘原額並許外省來

豫貿易之人一體報捐之處似屬可行著大學士會同該部另行定議具奏總之膺封疆之寄者為小民父長之計當預籌於平日不應拮据於臨時當加意於豐年不應猝辦於歉歲此所以裕民饗殮耗民救粟者懇切勸諭多方董率俾閭閻共知仰事俯育根本之所在中心樂從斯可以易俗移風漸臻康阜不愧父母斯民之任若必待朕每次降旨然後奉行於一時則平日之視為具文可知倘一經奉旨即嚴行查禁則又徒滋擾累於事何益將此通諭各省督撫知之欽此

1252 乾隆四年七月三十日內閣奉

上諭浙江按察使員缺甚屬緊要新調河庫道之完顏偉原係記名以按察使陞用之員著即補授浙江按察使其河庫道員缺亦屬緊要著河道總督高斌揀選題補欽此

附錄

(1) 通政使歸宣光奏等奏替撫等謝

恩本章請定畫一之例等因一摺奉

旨大學士議奏欽此 查會典內載直省督撫本章

如係地方公事皆用題本若係本身私事俱用

奏本等語本年三月內

頒頒賜

世宗憲皇帝御製文集乃係

賞賜本人祇領之書籍自應照會典內開本身私事

俱用奏本之例用奏本謝

恩今各省督撫等或用奏本或用題本未能畫一據

通政使歸宣光等奏請定例以便遵行臣等酌

議嗣後有

賞賜書籍如係際行

頒發各衙門存貯交代者其謝

恩應用題本若

賞賜本人祇領者其謝

恩應用奏本如代屬官一人謝

恩者亦用奏本庶奏本題本各有專屬不致互異應

請

勅交部衙門通行直省督撫將軍提鎮學臣等於文

到之日為始一體遵行如有違例誤用者通政

使司衙門照例題奏可也謹

奏伏候

諭旨

乾隆四年七月初二日奉

旨依議欽此

(2) 臣等看御史用祖榮一摺 據稱八旂從前貢

監生員因代昭祖父虧空革去衣頂者此等之

人雖未登仕籍而身有微名無異廢員自奉有

恩旨之後僅與閑散人一例應試不獲與革職開復

之員一體開復請令該旗查核咨部彙奏請

旨給還本人衣頂等語 查八旂褫革之貢監生員

與

恩免銀兩人員停選停補者難以並論亦且非查奏

開復之廢員可比况已欽奉

恩旨旂人有代昭祖父虧空力不能完治以枷責之

罪者准其一體考試則此等被革之生監人等

皆仍可考試以為進身之階無庸將伊等復行

開復且從前虧空案內如有點革之進士舉人  
又必長生希冀不便准行該部御史所奏應毋  
庸議

乾隆四年七月初二日奉

旨知道了欽此

(3)

臣等看得御史傅色納一摺 據稱戶工兩局  
人夫工食費廢浩繁請照舊例將八旗家人有  
肆酒行兇頑梗不肖者送入錢局磨錢入竊賊  
初犯再犯不再充發之條者亦送入錢局磨錢  
而錢局工費可省等語 查寶泉寶源二局匠  
作夫役俱係計工受食如伊等有懶惰及不安  
分者即行驅逐誠以鼓鑄關係錢糧未便令不  
法之人在局充役也康熙年間曾有八旗官員  
將家人之不馴者交在局內拘管磨錢後因此  
等家人不能工作且在局內酗酒行兇鬧毆生  
事經前任戶部尚書趙申喬等禁止是錢局收  
用旗下家人並非成例斷不可行若如該御史  
所奏更以初犯再犯之竊賊送入錢局是竟將  
匪類聚集一處尤必滋事鼓鑄重地實為未便

該御史所奏應毋庸議

乾隆四年七月初三日奉

旨知道了欽此

(4) 大學士伯臣鄂 等謹

奏為遵

旨議奏事白都訥副都統七十五敬陳管見一摺據

稱寧塔古塔將軍遵照部文及

恩詔內款項於吉林烏喇寧古塔白都納三姓此四  
處發遣人犯內已逾三年安靜守分能自悔過  
情罪尚輕者查明王四等一百三十九名造冊  
送部經部以王四等俱係外遣均與乾隆二年  
十月內本部奏准例參分發各省當差並原應  
擬軍流酌量分發各省內地及駐防當差人犯  
查奏之例不符等因駁回在案臣查得向例發  
往寧古塔黑龍江二處者謂之發遣發往內地  
者謂之軍流今部內既將各省將軍等地方發  
遣人犯比照軍流之例查議具奏以廣

皇仁伏思寧古塔黑龍江雖與內地有間伊等罪名  
稍有分別其情罪實與軍流相等且與斬絞免



死減等發遣之人亦稍有不同請將寧古塔將軍造冊送部之遺犯王四等一百三十九名內除吃酒行兇竊盜三次脫逃拐帶及

特旨不准寬免人等無庸查奏外其因別業發遣原擬軍流酌量改發又定擬發遣當差人犯等項伏懇

皇上加恩不分內外交部一體查議具奏請旨如蒙

俞允將軍古塔將軍查造送部之遺犯王四等一百三十九名查奏時內除蒙

恩赦回之人外其餘送部冊內有名人犯若蒙

皇上施恩軫念伊等安分悔過久居配所寬免伊等之罪仍令入于發遣地方之佐領下充當餘丁俾各勤生計懇種地畝得以復為

盛世無罪之人且

恩詔款內情罪重大不應寬免及不能安分悔過一

切遺犯人等似可亦可為儆戒臣更有請者此

等發遣人犯內或有原籍父母祖父母年老實

可比照獨子養親之例者伏祈准令查明造冊

送部詳加查議具奏請

旨如此則

皇上孝治天下之至意俞加推廣矣等因具奏奉旨軍機大臣議奏欽此 臣等伏查雍正十三年十

一月二十一日

恩詔內開一從前發往各處安置人員有情罪尚輕而在外已過三年能安靜悔過者各該管官查明所犯情罪具奏欽此嗣經寧古塔黑龍江打牲烏喇等處將發遣當差人犯可否具奏請

旨之嚴咨部定議刑部於乾隆元年七月內具奏面奉

諭旨爾部將寧古塔黑龍江等處發遣人犯可否擬奉奉恩詔分別情罪輕重令其回京之嚴請旨朕思

此等人犯皆係從前獲罪發遣日久在京未必仍有產業若令回京恐伊等別無生計反滋事端爾部詳查各犯情罪如所犯尚輕可以回京者仍行文各該將軍詢問該犯有情願回京者令其回京其不願者該將軍另行報部欽此歷經刑部定議發遣人犯有按律例定擬發遣者以有特奉

諭旨酌量情罪分別于內外地方發遣者其照例發遣之犯率係強盜免死減等竊盜三犯吃酒行

兇和同畧誘等項均屬兇惡之徒自不應准其

造送具

特旨發遣所犯亦非輕罪但查雍正七年十月內因

發遣廣西之太監人等一案欽奉

上諭若此發遣人犯果能在彼地方安靜奉法無一  
毫長行之處三年之後著該督撫奏聞候朕看其情  
罪之輕重酌予以赦宥之恩著將此旨通行各省等

因欽遵在案是

特旨發遣之犯既先奉有

諭旨期以年限酌量情罪輕重予以赦宥又欽奉

恩詔則凡係先奉

特旨發遣人犯內自應遵照查明原案情罪尚輕者量

題請

旨定奪等因於乾隆元年十月內奉

旨依議欽此欽遵在案續據寧古塔黑龍江打牲烏

喇等處勅次將發遣人犯三年能安靜悔過者

造冊咨部部內查覆情罪輕重分別具題其邀

恩寬免者俱經回籍在案是寧古塔等處外遣人犯

果係情罪稍輕三年能安靜悔過者已經定有

咨部查奏之成例今該將軍造送遣犯王四等

一百三十九名請援乾隆二年十月內刑部奏

准偷創人參發遣各省當差查奏之例原屬不

符是以部駁無庸查辦臣等查該將軍造送各

犯其與例不符不應寬免者固多但其中亦有

與從前刑部查奏寧古塔黑龍江三年悔過各

案內情節相同者又有原擬軍罪改為發遣者

從前部內查奏係將該犯等情罪開明可否准

其寬免恭候

欽定今該將軍咨送之遣犯王四等一百三十九名

應仍交該部照元年十月內奉定之例覆行查

核分別具題其中可否邀

恩赦免之慶恭候

諭旨遵行至該副都統奏稱造送之遣犯王四等一

百三十九名內除有蒙

恩赦回之人外其餘冊內有名人犯請免罪入於遣

所之各佐領下充當餘丁等語查部內查覆不

應寬免之人多係強盜免死減加等竊盜三犯吃

酒行兇和同卷誘等犯且係本身犯罪又非子

孫牽連可比從無免除罪籍入於佐領充當餘

丁之例應將該副都統所奏無庸議又稱遣犯

內或有原籍父母祖父母年老可比照獨子養

親之例者查奏請

旨等語查乾隆三年六月內刑部題覆廣東署撫王

蒼奏請軍流各犯到配以後如果原籍父母

祖父母老疾無人侍養者准其呈地方官轉詳  
移咨配所回籍待養等因一摺經部議以已到  
配所後又准其告孤留養雖似加意推恩但罪  
人之有父母者孰不愛子或無廢疾自殘肢體  
以為由養之巧術或家有次丁設計令其逃亡  
以為告孤之藉口日久弊生情偽百出以致愚  
民玩法應將該撫所請無庸議等因奏奉

旨依議欽遵在案今該副都統所奏准自配所移回  
侍養之處與王譽前奏相同應亦毋庸議為此  
謹

奏請

旨

乾隆四年七月初四日奉

旨依議欽此

(5) 兵部未完都統伊勒慎等奏泰領索柱等一  
案奉

旨詢問 查此案於本年三月二十三日交刑部審

擬經刑部於五月十二日審明具題請將案內

副泰領敏柱泰領福格索柱等交兵部定議等

因奉

旨依議欽此於五月二十日移咨兵部隨即查辦因  
該旗咨覆駢騎校考語未能畫一復行咨查并  
一面移送宗人府會稿於六月十九日該旗核  
定考語送部二十四日宗人府會稿到部現經  
繕本擬於七月十三日進

呈

乾隆四年七月十二日奉

旨知道了欽此

(6) 臣等西奉

上諭前日御史盧秉純條陳慎罰弛微三款朕以前  
二款現在纂修律例如有未協之處該總裁等自  
然酌量更改候朕裁定其江寧地畝一款其事甚  
細該御史陳奏之意或公或私俱未可知是以將  
原摺發還今盧秉純又復以地畝一件懇切奏請  
爾等可將此摺抄出密寄那蘇圖令其秉公確查  
如果應行豁免即具本題請或別有情由不應豁  
免亦著據實具摺密奏欽此又

諭臣等此案爾等記着如那蘇圖查到並無別情則

已如別有情由將盧秉純交部議處欽此今據那蘇圖奏稱得江寧原圖地畝一項有零內應豁糧者實止四十八畝零此項地畝雖事細屬細微究亦小民偏累容臣核查應免銀糧另行具疏題請至御史盧秉純此奏惟應豁畝數未確其有無別情查無確據等因語奉  
硃批知道了欽此臣等因前奉有諭旨各行奏明

乾隆四年七月十七日奉

旨具題到日再定欽此

(7) 查甘省五鎮俱係最要缺除安西一鎮原駐劄關外西寧涼州二鎮現俱係署前所餘肅州鎮為邊塞咽喉職事重寧夏鎮受傷之後正涸料理該總兵等似皆未便差替惟陝西省之興漢鎮地方非屬最要兵官任懷德似可以更換駐防亦金其興漢鎮印務前任懷德給假回籍時原係漢中城副將呂瀚署理今任懷德若派往更換興漢鎮印務可否仍令呂瀚就近署理之處耕候

諭旨遵行

乾隆四年七月十九日

(8) 查明史倣通鑑綱目之例編年纂輯成書臣等從前已曾面奉

諭旨嗣於元年十二月內又經御史金世倬請學士舒赫德條奏臣等議俟明史刊校告竣之日再行請

旨舉行今刊成明史現在陸續進

呈查此書共計十二函已進過第十函請伏全書

進

呈之後臣等遵奉前

旨另擬

上諭恭候頒發再行開館纂修編輯將進所奏應毋庸再議

乾隆四年七月十九日

(9) 臣等看御史官福一本摺據稱大宛二縣向未設立倉儲請照直屬大州縣均貯之例每縣貯穀

四萬石以備糶濟之用於每年秋成之後或於  
隣近豐收之處隨時購糶或於張家古北等口  
委官採買等語 查州縣設立常平倉脩貯穀  
石以資賑糶乃通行之良法惟京師大宛二縣  
向來並未設立者蓋京師之內四方食貨輳集  
不但附近州縣較且輦致為多即邊口各處米  
糧商民求利亦皆販載來京別無去路今若於  
附近州縣或口外購置貯倉每年又須補糶一  
經官買其價必貴將民間本自流通之米穀而  
聚之官因而米少價昂轉有未便之勢況五城  
米廠八折米局原以資平糶之用若遇歉年需  
米賑濟則鄰邑倉糧可以撥助至於通倉米石

上闕

天庾原不許輕易撥助惟需用孔亟之時而隣邑  
倉糧又在不敷始將通米臨期酌量撥用皆係  
現行之成法此大宛二縣向來不設常平倉之  
有異於各省也從前原任直督李樹於捐業內  
亦祇議於大宛二縣將捐穀貯貯並未遽請採  
買此案應仍聽直督從容辦理該御史所奏應  
毋庸議

乾隆四年七月二十日奉

旨知道了欽此

(10)

總漕托時奏請湖廣旗丁行月分別本折量為  
加增一摺 查江南等省行月錢糧俱係半本  
半折其折色價按各省米麥貴賤酌定編徵每  
石七錢至一兩二錢湖廣省本折俱係給價銀四  
錢蓋因該省為產米之鄉當年米價平賤是以  
定價較少先經侍郎陳世倌以定價不敷請增  
折銀七錢於道庫存剩項內下給發九卿議以  
該省運船四百餘隻計應加銀一萬五千餘兩  
倘或道庫不敷勢必加派累民將陳世倌所奏  
毋庸議在今總漕托時既稱該省近年米價迥  
非從前可比一摺折給四錢實屬偏苦請分別  
本折將一半折色仍照舊例給折給其一半本  
色照兵糧例湖北每石折銀七錢湖南每石折  
銀六錢共增銀六千六百兩零於道庫支給尚  
有存利不致加派累民至淮揚等幫雖亦折色  
四五錢然程途較近湖廣二千餘里不許比例  
請增等語 查旗丁運漕食用安家全資行月  
該省米價今昔各殊自應因時制宜量為變通

從前陳世倌未將本折分晰一例稟請加增計  
應加銀一萬五千有餘道庫減存之項多寡無  
定故難議准今提漕托時既深悉行月折價之  
不足又聲明陳世倌原奏之過優并核筭道庫  
錢報尚有存剩更計及推揚等帑不許比例分  
別行月加銀六千餘兩誠以湖廣漕運船起運  
抵通程途獨遠而行月價銀比之他省較少亦  
屬優恤軍丁之意似應如所請嗣後湖南北  
行月本色准其照數加增於解道隨漕銀內支  
給可也伏候

諭旨

乾隆四年七月二十六日奉

旨依議欽此

(11) 總漕托時奏請漕船事故時日稍遲者准其雇  
募一摺查軍船運載

天儲所關匪細定例漕船五六運失風責令賠造凡  
運失風始准雇募所以使官丁知賠造雇募之  
難易不得慎重防範也今提漕托時奏稱本年  
事故之船該丁回次已在十月十一月間為期

甚迫豈能備造嗣後事故在正二三月間者仍  
聽本年賠造外如或遲日稍遲准其雇募一面  
令照例賠造次年應運等語 查各省歲造漕  
船給價成造俱於成造之年四五月內報却仍  
俟該丁完糧回次之日購料興工接濟新運並  
無遺誤失事賠造之船同時回次何致備  
造不及雖從前間有成不及准令本幫各船分  
洒帶運之案但俱係江河漂滿例應題達之船  
必俟奉

旨免賠之後始准成造其題覆奉文均需時日是以  
每屆冬底趕造不遑暫令洒帶若例不准免之  
船一遇失風無庸題達即可回次遵例賠造情  
形各有不同況僉定之丁每年俱親身領運既  
准雇募即復運行焉能在次一面配造勢必年  
復一年終無賠造之期而五六運已以內失事之  
船直與九運之艘同一雇募毫無區別事關輓  
駕未便遽更成例應將托時所奏毋庸議  
乾隆四年七月二十六日奉

旨依議欽此

(12)

總漕托時奏請旂丁代完虧欠照例議叙一摺  
查旂丁支領錢糧駕運漕白受兌之後通帶  
俱有責成空例漕船失風于本丁名下追補船  
米本丁無力補完將本帶衆丁餘米扣底又僉  
丁派運之時取其連名互結如米石缺少除本  
丁責賠外仍令互給之丁分賠是事故之船原  
有通帶扣抵分賠之例分所宜然並非私義今  
總漕托時請將各帶旂丁代完失事虧欠米至  
十石以上者准以一運作為兩運填註功照計  
滿二十運照二十運全完無故之例議叙倘代  
人完欠之後已身遇有失事將功照扣除一運  
等語 查旂丁涉歷風濤二十運船米無故年  
欠功深是以例准優叙給與頂帶禁身若同帶  
之船艱應患難相恤緩急相助代完十石之米  
即准抵運一次似覺輕重失宜且一船失事數  
十船代完各丁俱得抵算運次議叙每年俱有  
事故之船恐致不勝議叙亦屬濫邀

恩典况不肖運丁希圖優獎必致捏飾事故假報代  
完甚至已身失事恃有功照扣抵漸致防範疎  
虞摺究敘不力種：弊端均未可定應將該摺

漕所奏之慶毋庸議

乾隆四年七月二十六日奉

旨依議欽此

乾隆四年八月初二日滿漢文武大臣奉

上諭本日御史張湄奏摺內稱皇上開言路於上而

諸大臣塞言路於下凡奉旨交議事件並不平心

和氣斟酌可否總以無庸議三字駁倒為快甚且

極口詆詆勝於怒罵意欲箝小臣之口而不知剛

傲恣肆已先失大臣之體等語張湄此奏實屬太

過朕觀近日諸大臣能比古之臯夔稷契者固少

而公忠為國實心任事洵無可指摘之處或其中

因循寬緩失之不及者亦不能保其必無而如奏

內所稱剛傲恣肆箝制言官之口者則實無其人

假如果有其人則言官皆受其箝制必不敢有人

攻發其短今以張湄至庸之人而現有此奏則無

剛傲恣肆箝制言官之大臣可知矣况朕御極以

來用人行政事事躬親裁度一切是非情偽莫不

洞悉周知若如張湄所奏大臣中竟有阻塞言路

蒙蔽擅權之人不知彼意中視朕為何如主耶又

張湄奏稱傳為許請申法禁一條九卿以為賭博

之禁未嘗不嚴現在步軍統領之番役五城司坊

之捕役日夕查拏將此議覆夫京城賭博盜賊等

項未嘗禁絕而小民徒受番捕嚇詐之擾累豈衆

人共知而大臣獨不知且立稿之司官亦皆不知

等語凡查拏賭博盜賊之事原係步軍統領五城

司坊之專責倘查拏不嚴或番捕有借端擾累民

間者惟在該管衙門留心懲究若因此而欲變更

成例別無善策至於傳為許條陳各款及九卿覆

議之奏朕皆一一詳閱其原奏多屬通套浮詞並

無切實可行之件九卿就事論事亦祇可如此議

覆又豈得謂有意駁詰阻塞言路耶又張湄奏內

有臣工奏疏伏願宸衷乾斷之請自古設官分職

原以佐理政務兵農錢穀各有專司朕以一身而

萬幾待理

祖宗數百年之章程國家千百條之規制不得不諮詢

於大臣即大臣亦不能不詳考典冊參酌古今遂

驟然可以見諸奏牘也若必欲盡出一人之意事

至即斷不交廷議無論勢不可行且於古聖人之

詢於四岳咨二十二人以亮天功者大相乖繆狂

妄如張湄等輩不又將以朕為專任已見而不博

採衆論耶况朕於臣工章奏中見其確有可行者

未嘗不即降旨施行亦有廷議不行而朕諭令改

正者悉皆審理於當幾而不設成見於先事耳九



卿議駁言官之條奏張湄即以為極口詆詆勝於怒罵而張湄於謹慎供職之大臣槩加以剛傲恣肆阻塞言路之名所謂公道者安在乎張湄為此狂替之奏顯係比附傳為訐而薰染方苞造言生事欺世盜名之惡習此風斷不可長本應加以嚴譴以示懲儆姑念言官從寬免究特召見本日奏事之滿漢大臣面加曉諭咸令知之朕見臣工條奏尋常事件中亦有介在可行可止之間而該部九卿議駁者事本微細而被張湄苛刻之彈章其所以致此之由亦當自愧然不可因此而生畏憚之心辦理公事總以理為準此則朕之所厚望者

欽此

1254 乾隆四年八月初三日內閣奉

上諭近來貴州總督張廣泗陳奏地方之事甚少亦且遲滯若云貴州路途則雲南豈不更遠於貴州何以伊之奏事獨遲可將此旨傳諭張廣泗知之

欽此

1255 乾隆四年八月初七日內閣奉

上諭編年紀事之體昉自春秋宋司馬光彙前代諸史為資治通鑑年經月緯事實詳明朱子因之成通鑑綱目書法謹嚴得聖人褒貶是非之義後人續修宋元綱目上繼紫陽與正史紀傳相為表裏便於檢閱洵不可少之書也今武英殿刊刻明史將次告竣應仿朱子義例編纂明紀綱目傳示來茲著開列滿漢大臣職名候朕酌派總裁官董率其事其慎簡儒臣以任分修及開館編輯事宜大學士詳議具奏特諭欽此

1256 大學士伯鄂 張 大學士徐 宇寄 直隸

總督孫 乾隆四年八月初十日奉

上諭今年直隸地方收成豐稔正當留意積蓄之時但朕若降諭旨廣行採買以裕倉儲恐有司奉行不善以致滋擾且當連年歉收之後甫獲豐收亦當聽民間自為流通庶不至價值增長是在有司善於辦理應買補者即行買補務使公私兩便至於耗費米穀高粱如燒鍋等事斷宜嚴禁小民無

知必因目前偶爾有餘任意糜費於燒鍋造酒以圖一時小利轉瞬即有不足之患所關甚大封疆大吏不可視為泛常而存聽從民便之淺見也爾等可寄信傳諭孫嘉淦知之欽此遵

旨寄信前來

1257 乾隆四年八月十七日內閣奉

上諭今年繙譯會試取中二十二人雖從前有照例殿試之議但此科人數甚少不必舉行殿試俱著賜進士出身吏部帶領引見候朕酌量錄用其優者以六部主事即用次者在主事上學習行走該堂官照例題補又次者照滿洲進士例選用內有現任者即在任候陞不必出缺欽此

1258 乾隆四年八月十七日內閣奉

上諭河南被水歉收朕已降旨多方賑恤因念該省河工埽料林措一項皆採買於沿河州縣今歲既罹水災價值必至昂貴查舊例每草十觔為一束官價九釐倘此價不敷採辦勢將派累里民著每

束增銀五釐共成一分四釐之數河官照價購買不許絲毫扣剋累及閭閻此因歲歉加恩後不為例欽此

1259 乾隆四年八月十七日內閣奉

上諭張肯堂禹殿鰲邵大業姚廷棟汪郊俱著吏部行文調取來京引見欽此

1260 乾隆四年八月十八日內閣奉

上諭今年六月間豫省地方大雨如注川澤交盈分洩不及以致開封等屬被水之州縣甚多小民困苦朕心深為軫念已屢降諭旨多方籌畫賑恤撫綏因思濟饑拯溺目前之補救維殷而破澤河渠善後之經營宜亟查豫省地方有淮潁汝蔡諸水經緯其間凡舊有河道俱達江湖第或因故道淤涇或無支河導引是以水無容納之區勢必旁溢下有壅塞之處滂即難消開撫臣尹會一現在檄令各屬勘估興修但愚民無知上游方事挑濬而下游填實阻攔仍致水無去路於事何益著撫臣尹會一河臣白鍾山布政使朱定元細心熟籌專

委管理河道明晰水利之大員親勘全局通盤計算務使一律疏濬深通毋令各分疆界稍有阻滯再豫省之賈魯河原由江南地方全注入淮是廬鳳等處即豫省之下流也此時現有欽差大臣與修廬鳳河渠亦當同為留意從來疏濬河道時上游十分用力而下游百計阻撓各處人情如此不獨豫省為然是在封疆大臣洞悉其弊勿為所欺庶幾源委暢流永無泛溢之患該部可將朕旨即行文豫省並有河道之各省督撫知之欽此

1261 大學士鄂 張 徐 字寄 河南巡撫尹

乾隆四年八月十八日奉

上諭南方郡邑俱有城河故鮮水患今年開封府不過天雨過多遂至淹浸傷及田廬蓋以省城地勢既窪又無河道以為容納宣洩之地故民人受困如此朕聞府城南門外有舊河形一道俗名乾河涯今若開濬深通即可疏導積水兼設閘洞以備節宣則行潦無阻滯之虞省會免沮如之患可寄信與尹會一令其會同布政使朱定元確加勘視

妥議辦理欽此遵

旨寄信前來

1262 乾隆四年八月十八日臣尹繼善面奉

上諭自古明良之世四海雍熙治臻上理而君臣咨儆猶曰克艱曰無逸誠以致治保邦之道非易易也朕承

祖宗積德累仁之後海宇乂安人民樂業幸共享太平之福矣而謂太平有象稍萌宴逸之心即開怠荒之漸是以御極以來旰食宵衣兢兢業業惟恐一事不得其中惟恐一夫或失其所日與內外臣工開誠布公勵精圖治不敢稍有怠忽少圖宴安此朕夙夜之中所以自勉而實可以自信者但目今政治雖已清明尚未能盡臻於美善間闕雖無擾累尚未能遽躋於豐盈風俗雖不甚流漓尚未能革心而嚮道官吏雖頗為整飭尚未能鑿絕而風清朕嘗論古成康以降數百年而有漢文帝漢文以降又數百年而有唐太宗要之虛心待物損上益下用致天下之盛太宗與文帝率用是道又云人君當上法堯舜遠接湯武不當以三代以下自畫

意謂希聖希天有為者亦若是耳由今觀之不但  
堯舜湯武憂乎難追即文帝太宗亦且有志未逮  
可見天下事責人甚易而自處則難局外旁觀甚  
易而以身閱歷則又難也朕法古誠殷迓躬滋懼  
不敢存自足之見亦不敢存畏難之心惟有慎厥  
身修幾康時凜舉古人克艱無逸之訓與諸臣交  
相儆戒以期翼贊昇平漸臻上理爾諸臣作朕股  
肱耳目雖夙獲契世不恒有而龔黃卓魯元齡  
親徵諸人載在簡編芳規不遠庶其論思啓沃殫  
力抒忠上效汝為汝翼之風共成一德一心之盛  
乎我君臣共勉之欽此

此道二十六日發出

1263 乾隆四年八月十九日內閣奉

上諭廣東布政使員缺著廣東按察使王恕補授廣  
東按察使員缺著廣東糧驛道潘思傑補授廣東  
糧驛道員缺著福建興泉道朱叔權調補福建興  
泉道員缺著王丕烈補授欽此

1264 乾隆四年八月二十日內閣奉

上諭凡補授道府等官於起程赴任時皆詣宮門請  
訓候朕召見嗣後外省送部引見之道府亦著照  
此例於起身回任時詣宮門請訓以便諮訪地方  
情形彼亦得各抒所見而朕益得悉其人材矣欽  
此

1265 乾隆四年八月二十日內閣奉

旨著鄂爾泰張廷玉為總裁官趙國麟陳惠華尹繼  
善楊超曾為副總裁官餘依議欽此

1266 乾隆四年八月二十日內閣奉

旨尹繼善陳大受著為三禮館副總裁官欽此

1267 乾隆四年八月二十日大學士鄂 張

徐 尚書訥 海 那 奉

上諭向來漕運舊例旂丁行月等米於重運進京時  
不許售賣止許於回空途次糶賣以作盤費後經  
科臣條奏欲稍弛其禁而部臣以漕務關係重大

不便更張未經准行朕已依允又因連年直隸歉收米糧短少諭令督臣孫嘉淦發官價糶買不許捐勅以期公私兩便後據孫嘉淦奏稱旂丁餘米利於賣與民間且當進京之時有先用鋪戶之錢而以回空之餘米抵完者是以官買之米甚屬有限等語朕之令直督官買旂丁餘米者偶因今年畿輔地方需米起見原非可常行之事即重運入京之時不許旂丁賣米之禁亦有可變通者蓋重運不許糶賣餘米惟恐旂丁借此盜賣漕糧耳但漕運進京有大員督運不難沿途稽查而抵通之後倉場驗收又不容絲毫挂欠旂丁亦難以作奸而重運當春夏之交正米價昂貴時候既不得出糶未能獲利而回空之際沿途賣米又未免有羈時日且恐旂丁將來慮帶米無利必致少携米石多置他貨於北省地方亦屬無益宜如何變通之處著該部另行議具奏欽此

1268

大學士鄂 張 徐 尚書訥 字寄 直隸

總督孫 乾隆四年八月二十二日奉

上諭前因七月間雨水稍多恐畿輔地方尚須米石

是以諭令孫嘉淦發價收買旂丁餘米以備接濟隨據孫嘉淦以旂丁餘米所賣甚屬無多具摺回奏朕着今秋直隸各屬收成豐稔不須他處米糧接濟其收買旂丁餘米之舉即應停止孫嘉淦尚未將停止之處奏聞可速寄信與孫嘉淦知之欽

此遵

旨寄信前來

1269

乾隆四年八月二十日內閣奉

上諭直隸地方水利未講以致水漲則受其害而平時未獲其益此衆所共知者前屢降諭畧總督孫嘉淦等悉心籌畫善為經理續據孫嘉淦於七月內親身查勘具摺陳奏大槩講論河道情形至如何消除積水俾民間田畝收水利而免水患之虞未曾詳晰奏及朕思此時乃水勢消落之際又值年穀收穫正宜董率官吏及時經營不但工程可以早竣而無業貧民亦可藉以餬口若不趁此時速為料理為未雨綢繆之計轉瞬春水長發又恐難以施工朕為閭閻疾苦時屢於懷為封疆大臣者當體此意可即傳諭孫嘉淦知之欽此

乾隆四年八月二十二日大學士九卿面奉

上諭大學士九卿議覆布蘭泰條奏各款朕一一詳

閱所議亦是但語多籠統尚少切實如布蘭泰奏

稱州縣行保甲之法虛應故事即有匪教兵丁訪

實解送有司置之不問等語爾等議覆即當詢布

蘭泰伊現任總兵何處武弁訪實匪類交與何州

縣如何置之不問之處令其據實陳奏如果有其

事則州縣即當奏劾而失察之總督亦應有處分

倘毫無實據豈得妄以置之不問一語加之文員

如此則真偽不難立辨今但以武弁何難通報上

司按例查叅等語引成例議覆以後弁員視為具

文或竟不具報其弊不更甚耶此處殊未明晰至

布蘭泰所稱督撫遇地方有盜即委千把同兵丁

探拿盜自可弭等語夫盜案委武員緝緝惟李衛

為總督時偶一行之其餘督撫從無如此辦理者

蓋武弁緝盜行之不善不但於地方無益且恐轉

滋擾累弊端百出此則事之必不可行者又布蘭

泰奏稱無論犯竊幾次賊數多寡重則治罪輕則

解回原籍至事主報盜應作逮完結毋令守候並

嚴究衙役需索等語爾等議覆竊盜科罪輕重各

有明條從無不論次數賊數混行問擬及外來匪

類不行解回原籍之事至事主報盜止許列官聽

審一次認賊一次不得拖累並不許衙役需索違

者將承審官嚴加議處現在遵行等語此在成例

則固然矣而州縣中或有不實力奉行或又奉行

不善豈能保其全無布蘭泰既為此奏必有所指

亦當令其指名陳奏不應僅稱無庸議也又布蘭

泰奏稱社倉常平之穀如有雜借秋成即可買補

何必多此買穀之事輒轉累民囤積自官其價愈

昂等語爾等既議稱如或市價增長及民間購買

者衆官即暫行停糶是布蘭泰所奏建議亦以為

是何以又云布蘭泰並不深究其原運思更變其

法殊未允協此則幾有明駁暗准之意矣夫採買

米穀亦原以備民食今前後詞意未符將來或須

採辦又將如何料理總之辦理政務惟應就事論

事其可行者自當議准施行即其人無可取亦不

當以人廢言其不可行者則當實指其不可行之

處使衆心了然免生疑議若以事本難行而但籠

統駁詰如御史張涓傳為訖等輩又將以大臣議

事不過無庸議而奉旨亦不過依議竟似我君臣

於政事不甚留意者即彼所言不當而朕與諸卿亦難辭其責矣此摺發還著另議具奏欽此

1271 乾隆四年八月二十四日內閣奉

上諭雲南黑白琅等鹽井舊有規禮銀二千八百餘兩歸入公件項下充為公事養廉之需在於每年發給新本銀內扣解在當日柴價平減灶戶猶能供辦聞近年以來童山漸多薪價日貴兼之酒淡難煎所領薪本不敷購買柴薪之用灶戶未免艱難所當酌量變通以示存恤著將白琅二井節禮銀二千六百五十六兩黑井鍋課銀二百四十兩免其扣解俾灶戶薪本較前寬裕所有公件項下不敷銀兩統於銅息銀內撥補放給該部可即行文滇省督撫知之欽此

1272 乾隆四年八月二十八日內閣奉

上諭據江蘇巡撫張渠奏稱江蘇按察使孔傳煥先在江寧驛鹽道任內私自多支平餘銀一千七百餘兩本年三月間經署道晏斯盛查出通詳并請另案歸結臣因檢查雍正八年原奏驛道議給養

廉銀五千五百兩內在上江藩庫支銀三千四下江藩庫支銀二千兩其餘五百兩即在該道餘平銀內支給後雖咨請加增部議實未覆准批查去後嗣據孔傳煥稟稱此業已經自行具奏臣以既經該司奏明應俟諭旨另案歸結并據晏斯盛將孔傳煥驛道任內經手正項錢糧先行出結交代茲據江蘇布政使徐士林以奉旨交辦孔傳煥條奏請將江鎮道等衙門鹽規及驛道衙門餘平抵充養廉各項概行提解司庫均於司庫支給養廉一摺與臣面商臣接閱之下不勝駭異伏思孔傳煥多支之項既經自行陳奏理應據實入告乃巧將別衙門支給鹽規一項牽混條陳而原奏五千五百之數及自己私支署官查出各緣由又絕無一語提及其意蓋謂一經奉旨准行不獨可以掩飾從前多支之咎并可查照六千之數在司找給假公事以便私情逞奸偽而誑君父雖鬼域伎倆難逃聖鑒但臣既經察知不敢為之徇隱且孔傳煥平日辦事不獨昏憤糊塗抑且全不寓目計其任事已逾三月審解之案不滿三十件率意關算任催罔應必不能勝臬司之任等語孔傳煥著解任

摺內所奏情由即交與巡撫張渠嚴查定議具奏  
江蘇按察使事務著翁藻暫行署理欽此

1273 乾隆四年八月二十九日內閣奉

上諭自古帝王撫御寰區惟以愛養斯民為第一要  
務朕即位以來仰體

皇祖

皇考勤求保赤之聖心宵衣旰食偶遇水旱災傷真視  
為己飢已溺百計經營散賑蠲租動輒數十百萬  
期登斯民於衽席此薄海內外所共知者無奈蠶  
虫之衆頑朴不齊外省官員多言屢賑之後民情  
漸驕即如今年江南地方初夏未雨即紛紛具呈  
告賑是不以賑為拯災恤困之舉而以賑為博施  
濟衆之事矣更有一種刁民非農非商遊手坐食  
境內小有水旱輒倡先號召指稱報災費用挨戶  
飲錢鄉愚希圖領賑蠲賦聽其指揮是愚民之脂膏  
已飽奸民之囊橐矣迨州縣踏勘成災若輩又復  
串通鄉保胥役捏造詭名多開戶口是國家之倉  
儲又飽刁民之慾壑矣迨勘不成災或成災而分  
別應賑不應賑若輩不能遂其所欲則又佈貼傳

單糾合鄉眾擁塞街市喧嚷公堂甚且凌辱官長  
目無法紀以致懦弱之有司隱忍曲從而長吏之  
權竟操於刁民之手刁民既得濫邀則貧民轉至  
遺漏是不但無益於國並大有害於民言念及此  
殊可痛恨再者荒歲冬春之際常有一班奸棍名  
呼災民擇本地饒裕之家聲言借糧百端迫脅苟  
不如願輒肆搶奪迨報官差緝累月經年塵索莫  
結在刁滑之徒尚可支撐苟活而被誘之愚民多  
至身命不保是災民不死於天時之水旱而死於  
刁民之煽惑者又往往然也今年下江淮北一帶  
及上江鳳穎等處多被水患河南水災較甚山東  
直隸亦有被水之州縣著該省督撫董率有司將  
朕諭旨通行誥誡如有犯者決不姑貸俾災民知  
有必懲之膏澤帖然安釋而不致惑於浮言刁民  
知有難犯之憲章凜然畏懼而不敢蹈乎法網則  
倉儲皆歸寔用而閭閻共沐恩施庶不負朕早夜  
焦勞愛養斯民之至意矣將來地方早潦不能保  
其必無該部可行文各省督撫咸知此意一體遵  
行欽此



1274

大學士鄂張徐尚書訥字寄各省

督撫 乾隆四年八月三十日奉

上諭前因湖廣總督德沛所奏糧價清單甚為明晰  
特抄寄各省督撫令照此式酌量繕寫以便觀覽  
是該省之糧價或貴或賤或中原令該督撫各據  
本地情形核實填報也今山東布政使黃叔琳因  
德沛卑內曾填有價中字樣遂謂令照價中字樣  
填寫特行具摺陳奏錯繆已極恐他省亦有似此  
誤認者亦未可定可寄信曉諭知之欽此遵  
旨寄信前來

附錄

(1)

臣等總兵田玉一摺據稱寧夏賀蘭山橫城口  
平羅等處為蒙古出入之所周圍盡屬草地今  
遭此震撼之餘尤宜急為籌度伏祈

勅諭寧夏在事文武大臣擇沿途緊要城堡汛營  
房務急首先修築軍裝器械上緊修備馬匹速

為買補缺額兵丁及時批充並西北駐防大兵  
各處要隘亦宜嚴加謹飭等語 查邊鎮要隘  
各處塘汛兵丁及馬匹軍裝等項平時原應加  
意修整防範方可有備無患上年地動之後寧  
夏各邊口有將軍總兵道員等彈壓稽查督撫  
前往會同籌畫辦理俱經節次奏

聞在案至賀蘭橫城口外一帶駐牧之蒙古乃俄爾  
多斯等部落平時往來出入傭工貿易無異內  
地人非因地動即應防範者况寧夏城堡工  
程已據奏報漸次興舉地方寧靜將及一年西  
北駐防兩路亦無有因地動可虞之處今若復  
行申嚴防範修備等事致駭聽聞轉有未便回  
玉未能深悉情形所奏應毋庸議  
乾隆四年八月初九日奉

旨依議欽此

(2) 總河高斌一摺 據稱有江南鎮江府金壇縣

貢生蔣振生取石經款式廣購善本詳加考校

手書十三經正文計三百冊共五十函謹先

進易經二函敬請

聖訓可否將金冊五十函令臣送

進恭呈

聖覽至蔣振生書冊可否勒石

孔廟統候

皇上聖裁等因奉

硃批大學士等議奏欽此 臣等查十三經現在奉

旨命

武英殿儒臣詳加校對今據奏稱蔣振生校閱十

三經正文手書全帙共五十函所有

進呈之易經二函臣等公同閱看字畫尚屬端楷

應令河臣高斌將全冊五十函一併送進

發文武英殿再加校定如經文果無訛誤字畫一

律端好臣等再行具奏請

旨謹

奏

乾隆四年八月十六日奉

旨依議欽此

(3) 臣等看總兵柳時昌一摺 據稱都守以下十

把等官請給

封典可否比照生童應試互結事例無論有印無印

同寓同鄉各令連名互結保送該管上司加具

印結呈報彙轉等語 查

恩詔請封例取同鄉官印結以杜過繼再照重封等

弊文武官自俱照例遵行已久都守以下武職

雖不比文官俱有印信然有印之同鄉官豈至

全無可以出結者該管與同寓皆係別省之人

見聞未必確實呈報何憑查核且干把未弁或

彼此皆有情弊互相隱瞞則上司更屬無從核

察豈可與生童應試同府同縣之人連名互結

者一例而論今伊等取結即屬稍難不過請

封稽遲時日非有甚不使之處事關成例未可驟更

所奏應毋庸議

乾隆四年八月十九日奉

旨依議欽此

1275

大學士伯鄂 張 大學士徐 尚書公訥

尚書海 字寄 雲南總督慶等 乾隆四年

九月初一日奉

上諭前據雲南總督慶復奏報安南奸人生事情形  
朕已令爾等傳旨曉諭令譚行義具摺陳奏雖係  
探聽之辭其果否確實亦未可全信但從前慶復  
奏稱安南奸人勾結土目假號奪地其勢頗橫等  
語朕思三奇地方安南駐有重兵並未遣發擒勦  
則彼國或有事故如譚行義所奏亦未可知總之  
事關外藩封疆大吏惟有嚴飭弁兵稽查防範以  
徐觀其動靜即安南將來伊鄭姓或假該國王名  
懇請提勦在安南臣服天朝雖義不可却然彼中  
之虛實此事之順逆尚未確知亦未便輕舉該督  
惟有以具奏請旨為言將情形緩急詳悉奏聞候  
朕酌量指示庶無傷國體亦無誤邊事爾等可寄  
信與慶復並該撫提知之朕批譚行義摺一併抄  
錄寄去欽此遵

旨寄信前來

1276

乾隆四年九月初二日內閣奉

上諭江南淮安揚州徐州海州等屬上年被災獨重  
今年又復被水歉收朕已諭令該督撫加意撫恤  
所有應徵錢糧該督撫自分別蠲緩具奏請旨但  
聞海州贛榆二州縣本地素不產米漕糧俱採辦  
於隣郡今年二州縣被水稍廣民力未免艱難其  
成災地畝應徵漕糧聽該督撫查勘照例題請蠲  
緩外至被水而勘不成災之處民力亦覺艱難著  
將本年應納之漕糧并上年緩徵之漕糧俱准其  
折色每米一石折銀一兩按數交官起解免其購  
運以紓民力該部可即行文江蘇督撫知之欽此

1277

乾隆四年九月初四日奉

旨孫斌楊聖臣著改為應斬監候朱鳳英著革職留  
任餘依議欽此

1278 尚書公訥 字寄 貴州總督張 乾隆四年

九月初五日奉

上諭朕閱部覆貴州總督張廣泗等議奏黔省酌增  
祭祀銀兩一本部議以雍正十一年六月內所奉  
上諭原因除荒減費之州縣於存公銀內撥補以足原

額該督等所題照荔波縣額定祭祀銀數通省支  
給較原數未免過多應令酌減定議朕已照部議  
行黔省州縣原因地方之大小酌定祭祀銀之多寡  
編有定額由來已久從前

世宗憲皇帝諭旨亦只將除荒裁減之州縣令其補足  
原額今張廣泗等乃於原額之外復請加增辦理  
實屬錯悞總之祭祀典禮務期誠敬恪恭以裨鉅  
典如徒請增加銀兩不獨靡費錢糧亦於典禮無  
益可傳旨令張廣泗知之欽此遵

旨寄信前來

1279 尚書公訥 字寄 兩淮鹽政三 乾隆四年

九月初五日面奉

上諭怡親王府所有鹽窩一事向係商人黃光德等

承辦由部查核後經莊親王奏請王府自為辦理  
聞得邇年以來辦理此事甚不妥協著交與三保  
管理令其查辦嗣後如有應具奏者繕摺具奏應  
啓怡親王者具稟啓明欽此遵

旨寄信前來

1280 乾隆四年九月初五日內閣奉

上諭據王常玉山等奏稱建造綏遠城垣衙署營  
房等項工程工部原估工料銀一百七十五萬九  
千四百六十三兩有奇經臣玉山會同臚岱等覆  
估銀一百二十四萬一千九百九十二兩零較原  
估已減去銀五十一萬兩有餘嗣又添兵房窰瓦  
城垣加灰以及增建衙署置買地基等項係續添  
於復估之外已經奏明咨部在案通計按例應增  
添銀五萬八千一百九十四兩零臣等一時愚見  
以物價尚有節省即可抵用未曾奏請錢糧詎料  
物價較前騰貴不敷採辦各商紛紛陳訴臣等前  
經具奏奉硃批該部核議隨經部議從前未經奏  
明不准添給伏查口外工程非比內地原無一定  
價值瞻岱等招商認辦於前臣等接辦於後前後

年歲豐歉不齊近則連年歉收米糧昂貴人工車脚以及物料之價值亦因之而頓加各商環統顧懇添給臣等細察情形此中並無浮冒仰祈天恩俯准照數飭發仍請即於綏遠城糧餉庫貯開墾銀兩暫那散給統於工料冊內彙總報銷則商匠人等均得早回安業臣等從前辦理疎忽並請交部議處等語王常王山均係寔心辦理工程之人其所奏自是實情無有浮冒著照所請增添銀五萬八千一百九十四兩零即於綏遠城開墾銀兩暫那散給王常等不必交部欽此

1281 乾隆四年九月初六日內閣奉

上諭朕奉

皇太后懿旨欲叩謁

祖陵以展誠切朕奏奉天路遠且俟一二年之後今年

請先詣

孝陵

景陵行禮已蒙

俞允其起程日期著欽天監選擇具奏一切應行事宜

著各該管衙門先期備辦欽此

1282 乾隆四年九月初九日內閣奉  
上諭朕此次奉

皇太后謁

陵著怡親王大學士鄂爾泰張廷玉在京總理諸務欽

此

1283 乾隆四年九月初九日內閣奉

上諭江蘇按察使員缺著甘肅按察使包括調補甘

肅按察使員缺著常鎮道趙城補授常鎮道員缺

著六部堂官於本部郎中內保舉交與吏部帶領

引見欽此

1284 乾隆四年九月初十日內閣奉

上諭今年伏汎江南黃河水勢盛長倍於往時仰賴

河神默佑堤工鞏固普慶安瀾豫省夏月雨水過多

沿河各工甚屬危險雖東省小有決口旋即堵築

完竣具徵

明神護佑之切朕心甚為感慶二處

河神均當虔誠祭祀以申報享一切應行禮儀著該

部察例具奏欽此

1285 乾隆四年九月十一日內閣奉

旨署四川巡撫方顯著賞給

硃批諭旨一部欽此

1286 乾隆四年九月十一日內閣奉

上諭據四川署巡撫方顯奏稱川東道陸賜書才具本優乃入夏以來手足麻木不能舉動懇請解任回籍調治等語陸賜書准解任回籍調治俟病痊之日赴部另補所有川東道員缺著發川試用之道員王奕鴻補授欽此

1287 乾隆四年九月十四日內閣奉

上諭直隸總河養廉四千兩實不敷用從前曾賞給六千兩係正副二員分用今藩司因副總河已裁仍照四千兩之例給與未免稍覺拮据以後每年著賞六千兩永以為例欽此

1288 乾隆四年九月十五日大學士徐本尚書公訥

親尚書海望奉

上諭朕此次謁

陵所經由地方見民間收穫甚為豐稔直隸通省大槩

皆然朕懷深以為慰但民以食為天必須積貯於豐年方不告乏於歉歲恐小民無知徒見目前秋成頗裕不加搏節如燒鍋造酒之類耗費米穀弗顧久遠之計實為可慮惟在封疆大吏督率有司善為勸導不獨俾在官者倉廩充實并當使在民者家有蓋藏庶幾漸次蓄積長保豐亨以副朕貴粟足民之意可傳旨與總督孫嘉淦知之欽此

1289 乾隆四年九月十七日內閣奉

上諭據江蘇巡撫張渠奏稱揚州鈔關及瓜州由開稅務自歸併巡撫以來例於道府內選員代管今年五月內揚州知府高士綸一年報滿因不得更換之人曾題請復令再管一年已經部覆議准但揚州上年被旱本年甘泉高郵寶應三邑沿河低御田地又被水淹一切查災辦賑該府往來督察拮据不遑今又帶管權務未免顧此失彼查鹽政三保近在同城稽查便易可否照織造管閘之例就近令其帶管於權稅實有裨益等語張渠既稱鹽政就近管理閘稽查便易著照所請揚州鈔關及瓜州由開稅務交與三保帶管欽此

1290 乾隆四年九月十七日內閣奉

上諭兵部侍郎雅爾圖差往河南承審案件其散賬事宜著一併查奏欽此

1291 乾隆四年九月十七日內閣奉

上諭據貴州總督張廣泗奏稱貴州逆苗絕戶田產賞給屯戶令其選擇形勝建築堡牆以資捍衛官給工價口糧內有小工工價一項每日每名以銀二分米一升給與乃各處屯軍赴工之時止領米一升其工銀二分並未具領俱稱我等荷蒙天恩賞給田地耕種給以盤費口糧復給牛具籽種感激之私無由上報今建築堡牆分應効力每日所領食米一升足資餬口所有工銀二分情願不領等語通計小工銀一萬五千餘兩係題明應行散給之項既據該屯戶等報効心切不願其領應准其所請歸還正項具摺請旨朕思建築堡牆原為各屯戶保衛身家伊等子來趨事不領工價愛戴之意出於至誠但今伊等甫至屯所家計未能充裕而力辭應給之項良民知義實屬可嘉其工銀一萬五千餘兩仍著賞給欽此

1292 乾隆四年九月十八日內閣奉

上諭據兩廣總督馬爾泰奏稱草職知府袁安煜雖經叅革現住省城聞向有洋商陳崇義欠伊本銀二千兩本人身故其弟陳世英因袁安煜勒令追賠即將洋行生業作本利銀五千兩暫押袁處後備銀往贖而袁安煜復索重利發縣追比仍將洋行轉賣銀兩盡歸袁安煜其事始息又韶郡曲江縣煤山向係本地民商輸餉承開袁安煜公然同蕭二捏名佔辦分肥稅銀數千兩更將前商工本及存煤等項吞佔不還後因調任與蕭二說通將煤山頂歸鹽商查復與充當承辦而袁安煜仍暗中搭股均分又在曲江圍佔鐵廠爐座有縱令家人搶鐵賣銀等事其用事家人王泉劉坤實為伊之羽翼至今仍放官債且欲令子入籍廣東袁安煜在廣有年聲名狼籍雖被叅革之後尚敢肆意妄行難以姑容臣現在飭查煤山霸佔緣由草退外商仍歸本地居民并嚴拿伊家人王泉劉坤監禁請旨將袁安煜查審等語著照所請將摺內事情逐一審定擬具奏欽此

1293 乾隆四年九月十九日內閣奉

上諭江南地方連年水旱今歲情形雖較勝於去年而下江之淮安徐州海州等屬上江之鳳陽潁州泗州等屬仍因雨水過多均有積潦為災之處朕心深為軫念除地丁錢糧聽該督撫確查分數請旨蠲免外難漕糧一項向來例不並蠲然地方疊值歉收此時輸納官糧民力甚為竭蹶著將被水成災之州縣本年應納漕糧及從前緩徵折漕之米均緩至明年帶徵其被水州縣內不成災之區團應徵本年地丁銀兩緩至明年麥熟後完納該部可即行文江南督撫知之欽此

1294 大學士伯那 張 大學士徐 字寄 署廣

東巡撫王 乾隆四年九月二十日奉

上諭廣東秋審各案九卿從該撫所擬可矜內改入緩決者二十起朕俱一一覽悉從來獄貴得其平必合乎人心之同始不愧明允之義今王蕃輕擬而九卿改重者如此之多是王蕃有意從寬遂

不能合乎人心之同而獄獄不得其平矣有意從寬與有意從嚴其失均也可傳諭王蕃知之欽此

遵

旨寄信前來

1295 乾隆四年九月二十五日內閣奉

上諭浙江杭嘉湖道員缺著金華府知府葉士寬補授欽此

1296 乾隆四年九月二十六日內閣奉

上諭據鄂彌達元展成奏稱西寧府屬之碾伯縣寧夏府屬之靈州中衛縣俱續有被水被雹之處又碾伯平番西寧三縣乾隆三年分額徵並節年一切借項前經奏明緩至本年催徵今查各該縣夏收除被災處所其餘俱有七八分收成但上年已經被雹被蟲收成僅在五分以上平番現在採買供支駐莊滿兵糧草西碾二邑亦因倉儲缺少正需採買積貯今積年應完各項為數繁多若一時併徵民力不無竭蹶請將三縣今年所借籽種口糧於秋收後照數徵收其舊欠分年帶徵等語朕



因秦安等十五州縣俱有水雹偏災業經降旨特加優恤將本年應徵銀糧草束分別蠲免今碾伯靈州中衛亦有被災之處而碾伯上年已屬歉收靈州中衛又富寧夏災傷之後著將此三州縣應徵銀糧草束與秦安等州縣一體加恩分別寬免其碾伯平番西寧三縣所有三年分額徵並節年借項著於庚申年起分作三年帶徵以紓民力欽此

1297 乾隆四年九月二十六日內閣奉

上諭孟冬

太廟時享朕已有旨親詣行禮因日來體中微覺畏風欲稍避清晨寒氣屆期著和親王弘晷恭代二十八日恭進

冊寶係選定辰時朕仍親詣行禮欽此

1298 乾隆四年九月二十六日內閣奉

上諭甘省之秦安等十五州縣俱有被水被雹之處朕已格外加恩將該州縣本年應徵地丁錢糧降旨寬免但甘省州縣從前多係衛所其額徵之項本色多而折色少亦有全徵本色者朕從前因甘

省州縣屯地皆徵本色而無折色每遇蠲免之年不得一體沾恩曾降旨准免三分之一此次秦安等十五州縣應徵糧草亦著照屯戶之例蠲免三分之一以示朕優恤邊民之至意該督撫即遵諭行欽此

1299 乾隆四年九月二十六日內閣奉

上諭

太廟工程告竣朕親詣敬瞻所修工程堅固整齊其辦理之大臣官員等著交部議叙欽此

1300 乾隆四年九月二十七日內閣奉

上諭據江蘇巡撫張渠奏稱江寧驛鹽道單德謨報丁母憂其員缺甚為緊要查有蘇州府知府黃鶴鳴操守端廉才情敏練若以之補授江寧驛鹽道則要缺可資得人之益等語黃鶴鳴著照該撫所請補授江寧驛鹽道欽此

1301 乾隆四年九月二十七日內閣奉

上諭原任雲南普洱府知府漆扶助以伊母年老告

請終養回江西本籍漆扶助在滇居官聲名素優  
向因離家太遠辭職歸養今出有浙江金華府知  
府一缺與江西相近著將漆扶助補授俾伊母子  
音問時通仍得備國家之用欽此

1302 乾隆四年九月二十七日內閣奉

上諭盛京工部侍郎員缺著護軍統領德齡補授盛  
京兵部侍郎員缺著常安補授常安著來京請訓  
再赴奉天之任其所管軍前糧餉事務著額駙策  
楞委員暫行管理欽此

### 附錄

(1) 給事中邵錦濤請充大典宛平舖面門稅一摺

據稱京城前三門外居民舖面有門面稅一  
項係大典宛平二縣徵收共銀四千五百兩有  
零查居民舖面非係已產即係租房其舖中貨  
物各由地頭進京水陸關津俱已上稅別門面  
一項似可毋庸輸納再行輸納况查兩縣給發舖

戶印照內開毋許差役包攬代交該舖戶亦毋  
許倩人代納及臣細訪各舖戶並非親身赴縣  
交納俱係該縣吏役到舖徵收分別填寫上中下  
戶及銀兩數目給發印照具間難免吏胥浮冒  
侵蝕等弊臣仰請

特沛恩綸將京城舖面門稅志行蠲免等語 查大

典宛平二縣門房租稅自康熙三十七年步軍  
統領凱音布題定照官房例每年徵銀共四千  
四百五十餘兩又康熙四十年經工部將兩廠  
房六照官房例題定每年徵銀共六千三百八  
十餘兩嗣于乾隆五十二年經直督趙弘燾  
分別等次減徵大典宛縣門稅徵銀六百三十  
餘兩宛平縣門稅徵銀八百四十餘兩廠地租  
錢一千三百六十七千文零嗣後仍三年編審一  
次因時增減臣等詳查戶部節年徵收奏報宛  
大兩縣門稅數目雍正十二年報徵銀一千三  
百四十四兩零十三年報徵銀一千三百七十  
七兩零乾隆元年報徵銀一千二百八十八兩  
零二年報徵銀一千三百七十八兩零三年報  
徵銀一千八十八兩零其兩廠房租查乾隆三

年報徵錢租一百九千四百文是每年所徵門稅較原定額數僅三分之一至兩廩房租較原定額數僅三分之一減免既多徵收已久且存為供應經費墊道等需與由夫者無異似不必緊行蠲免但查原題內上戶每戶徵銀五兩中戶每戶徵銀二兩五錢今徵收之數係因時增減每年多寡不一該給事中奏稱各舖戶並不親身赴縣交納俱係該縣吏役徵收分別填寫等語是多寡既無一定但聽吏役徵收其中難免胥吏浮冒侵蝕之弊相應交與直隸總督將此項門房租稅係如何增減之法與原題三年一次編審如何並未另有編審之案並宛大二縣吏役與減徵年分有無侵蝕等弊一併查明辦理可也謹

奏伏候

諭旨

乾隆四年九月十二日奉

旨依議欽此

(2) 川陝總督鄂爾達等奏為奉免秦安等州縣錢糧應否將本色一例蠲免並碾借等縣借欠各項分年帶徵等因一摺奉

硃批大學士等密議具奏欽此 據鄂爾達奏稱本年七月內欽奉

上諭將秦安等十五州縣乾隆四年應徵地丁錢糧志行寬免自應照例止免地丁銀兩但查甘省州縣多係衛所改設每年額徵本色多而折色少其河西各屬除丁銀之外全徵本色且敬釋志行寬免以示優恤之

恩旨深恐奉行錯誤謹將秦安等十五州縣民戶額徵銀糧單暫行停徵應否豁免請

旨遵行至屯地應納糧單於乾隆元年欽奉

上諭嗣後蠲免之年將屯戶應徵之糧單蠲免三分之一永著為例等因欽遵在案今此十五州縣之

屯地糧單似應照例遵行等語 查甘省秦安等十五州縣乃村庄水電偏災仰蒙

皇上軫念甘民以一州縣中既有被災之所則通州縣內料必不能十分豐收將本年應徵錢糧志行寬免實係

加恩格外今該督等以甘省州縣額徵本色多而折

色少其河西各屬全徵本色應否將銀糧一概

豁免等語 臣等查甘省奉免錢糧各州縣內

額徵多係本色如平番縣本色糧八千五百餘

石地丁銀一百四十餘兩武威縣本色糧四萬

三千六百餘石地丁銀四百六十餘兩古浪縣

本色糧六千五百九十餘石地丁銀六十餘兩

永昌縣本色糧一萬一千二百四十餘石地丁

銀一百三十餘兩西寧縣祇有本色並無地丁

亦無折色此次欽奉

恩旨若只免地丁銀兩則應免之數甚微且祇有本

色並無地丁之州縣窮黎不能一體沾被

皇恩但額徵之本色糧料草束又未便一概蠲免伏

查乾隆元年五月內欽奉

上諭甘省從前多係衛所管轄屯戶其屯戶額徵悉

悉係糧料草束為兵丁必需之物是以蠲免地丁

此項不蠲免之內惟雍正十年

皇考格外加恩將民戶屯戶應徵各色糧草一概豁免

此從來古未有之曠典也朕意民屯均為赤子所

當一視同仁兵食或有不敷再當別為籌畫嗣後遇

有蠲免地丁之年著將屯戶應納之糧草蠲免三

分之一永著為例欽此欽遵在案臣等公同酌議

應將秦安等十五州縣除地丁折色銀兩全行

豁免外其本色糧草照屯戶例蠲免三分之一

所有十五州縣內之屯戶地糧草亦照例蠲免

三分之一則民戶屯戶與祇徵本色並無地丁

之各州縣窮黎均得普沾

恩澤而遵奉前後

諭旨辦理俱屬相符矣

又奏稱西寧府屬之碾伯縣寧夏府屬之靈州

中衛俱有被水被雹之處而碾伯上年亦屬歉

收靈州中衛又當寧夏災傷之後似應將此三

州縣銀糧草束一體仰邀

恩免又平番西寧碾伯各州縣上年已俱被雹被虫

收成僅在五成以上况平番現在採買供支駐

莊滿兵糧草而西碾二邑向來倉儲缺少正須

設法採買以備積貯今積年應完各項為數繁

多若一時併徵民力不無竭蹶伏懇

皇上恩外加恩准將西碾平三縣今年所借籽種口

糧於秋收後照數催徵其餘舊欠請自庚申年

起分作三年帶徵等語 查碾伯一縣當連年

欵之後靈州中衛又經宁夏災傷今既據該督撫續行查明復有被水被雹各情形與秦安等十五州縣相同應將此三州縣額徵銀糧卓束與秦安等州縣一體邀

恩令該督撫照例辦理至平番西寧照儀伯三縣乾隆三年分額徵並即年借欠各項經該撫奏明俱緩至本年催徵在案今據該督撫等奏稱各該縣欵收之後又有採買供支倉儲積貯等事若將應完各項新舊並徵民力不無竭度臣等仰體

皇上優恤甘民之至意公同酌議亦應如所請除將本年所借籽種口糧照數徵收外其餘一切舊欠自庚申年起分作三年帶徵則民力寬舒益仰戴

皇仁於無既失查蠲免本色出自

特恩緩徵帶徵之項係該督撫應行奏請之事臣等

謹分擬

上諭二道一併進

呈恭候

欵定頒發謹

奏

乾隆四年九月二十六日奉

旨知道了欵此

(3) 大學士張 字寄 浙閩總督郝 昨 總督

奏報呂宋國王輸誠向化一摺欵奉

硃批內有移文傳旨字樣落一文字 總督若行文

外國及存記檔案可得文字添入此信到日不

必覆奏為此寄信前來

乾隆四年九月二十八日

1303 乾隆四月初二日吏部奉

上諭蘇州知府係最緊要之缺著總督那蘇圖與巡撫張渠於通省知府內揀選一員調補其所遺之缺將江南通州知州劉克齋補授欽此

1304 乾隆四年十月初三日內閣奉

上諭九月內服滿候補道員崔琳履歷內奏稱母年七十有八今籤掣四川松茂道缺與山西本籍相隔路遠難以迎養懇請改補近地以遂烏哺私情等語崔琳著扣除俟有山西隣近道員缺出該部另行請旨欽此

1305 乾隆四年十月初四日奉

旨前據戶科給事中汪榭奏稱科員掌印缺出向例係都察院堂官於不掌印之給事中內揀選二員分別正陪具題補授臣竊謂科臣不比他員若令都察院揀選轉補恐彼此之間有市恩感恩之意異時之黨同瞻徇不免已聞其隙應請通行帶領引見伏候欽定等語朕看來似屬可行已降允行

之旨今都察院堂官奏稱科員轉補掌印舊例按俸具題補授雍正元年欽奉

世宗憲皇帝諭旨掌印給事中責任緊要交與都察院堂官公同揀選保舉欽此欽遵在案本年出有戶科掌印一缺臣等按其俸次擬將汪榭列名在前邵錦濤列名居次嗣因查出吏部原議京察一等人員遇有保舉時即於此項人員內揀選薦舉再查上年京察邵錦濤一等汪榭二等因將邵錦濤列名在前汪榭列名居次今汪榭不將

世宗憲皇帝諭旨及現在辦理情形據實陳明只稱堂官不宜揀選恐開黨同瞻徇之隙此中情隱難逃洞察等語前日汪榭陳奏時並不將

皇考當日諭旨叙入奏中至於都察院保舉掌印時將汪榭邵錦濤移置前後之處伊俱隱匿不陳希圖朦混今覽都察院堂官所奏始知汪榭以名字不能居首懷挾私心飾辭瀆奏欲欺朕以不知遂爾更變舊例且誣憲臣等以黨同瞻徇為己身進取之計也前張湄奏稱一切條陳懇求宸衷獨斷勿交廷議果如張湄所言恐將來之假公濟私如汪

榘者不少矣給事中補授掌印之處仍照舊例交都察院堂官保舉注榘著交部嚴察議奏欽此

1306 乾隆四年十月初七日內閣奉

上諭朕因上年江蘇被旱歉收將乾隆二年江常鎮淮揚徐海七府州屬被水題明緩徵停徵銀米等項降旨豁免今年淮揚徐海等屬又復被水歉收已諭該督撫加意撫恤將所有應徵錢糧分別蠲緩具奏近聞海州安東蕭碭四州縣連年被水在淮徐等府內又屬被災獨重之區朕心深為軫念著將此四州縣所有雍正十三年乾隆元年未完地漕等項悉行豁免以昭軫恤災黎逾格加恩至意欽此

1307 乾隆四年十月十一日內閣奉

上諭河南秋審各案九卿從該撫所擬情實內改入緩決者十六起從該撫所擬可矜內改入緩決者十五起夫獄貴得其平必合乎人心之同方不愧明允之義雖其間所犯情罪不一於彼於此或

輕或重之間亦有介於疑似者內外大臣意見不能一轍然河南一省改輕改重者至三十餘起較他省為獨多則非人心之大同可見矣可傳諭尹會一向後辦理刑名案件必揆情度理期於允當以成信讞欽此

1308 乾隆四年十月十二日內閣奉

上諭據署福建巡撫王士任奏稱建寧府屬之建陽縣有虛糧六百三十一兩六錢久為民累已於乾隆元年蒙恩豁免並將雍正十二年以前節欠銀兩於恩詔內蠲除里民不勝感戴惟是該縣尚有雍正十三年未完民欠銀兩現在徵比可否仰懇格外之恩並予豁免再虛糧項下有應勻丁口銀一百四十九兩七錢應派本色米五十一石六斗五升皆屬有額無徵之數可否一體邀恩特此請旨等語建陽縣所有雍正十三年虛糧未完民欠銀六百三十一兩六錢著寬免其應勻丁口銀一百四十九兩七錢應派本色米五十一石六斗五升俱著永遠免徵該部可即行文閩省督撫知之欽此

1309 乾隆四年十月十二日內閣奉

上諭前因江南海州贛榆二州縣素不產米其應納漕糧俱採辦於鄰郡今年二州縣被水稍廣民力未免艱難除成災地畝聽該督撫照例辦理外至被水而勦不成災之處著將本年應納之漕糧并上年緩徵之漕糧俱准折色免其購運以紓民力已降諭旨矣今聞贛榆一邑地瘠民貧又值連年被災歉收即本年熟田所產之米亦不足以供本邑小民之食所當酌量變通辦理者著將贛邑未被水之熟田應徵漕糧照本地交納粟米例一併改徵折色俾多留米穀於瘠邑庶民食不至匱乏該部可即行文江南督撫知之欽此

1310 大學士伯鄂 張 大學士徐 字寄 直隸

總督孫 乾隆四年十月十四日奉

上諭朕覽各省秋審本章如廣東一省九卿從該撫所擬可矜內改入緩決者二十起河南一省九卿從該撫所擬情實內改入緩決者十六起從該撫所擬可矜內改入緩決者十五起朕以所改太多

已降旨訓飭今覽直隸秋審九卿從該督所擬緩決內改入情實者十二名從該督所擬情實內改入緩決者六名從該督所擬可矜內改入緩決者十一名夫獄獄貴得其平必合乎人心之同方稱明允雖各犯情罪或有在輕重疑似之間者內外大臣意見不能一轍然所改至數十名之多則不合乎人心之大同已可槩見爾等可寄信傳諭孫嘉淦向後辦理刑名案件必揆情度理期於允當勿存一毫欲寬欲嚴之成見欽此遵

旨寄信前來

1311 乾隆四年十月十五日內閣戶部奉

上諭乾隆三年直隸地方歉收米價昂貴朕降旨准商賈等將奉天米石由海洋販運畿輔米價得以漸減今年四月間以弛禁一年之期將滿而直隸尚在需米之際天津等處價值未平又降旨寬限一年民頗稱便朕思奉天乃根本之地積貯蓋藏固屬緊要若彼地米穀有餘聽商賈海運以接濟京畿亦裒多益寡之道於民食甚有裨益嗣後奉



天海洋運米赴天津等處之商船聽其流通不必禁止若遇奉天收成平常米糧不足之年該將軍奏聞請旨再申禁約欽此

1312 乾隆四年十月十六日奉

旨莊親王允祿受

皇考教養深恩朕即位以來又復加恩優待特命總理事務推心置腹又賞親王雙俸兼與額外世襲公爵且昇以種種重大職任俱在常格之外此外內外所共知者乃王全無一毫實心為國家効忠之處惟務取悅於人遇事模稜兩可不肯擔承惟恐於己身稍有干涉此亦內外所共知者至其與弘皙引昇弘昌弘皎等私相交結往來詭秘朕上年即已聞之其悔悟漸次散解不意至今仍然固結據宗人府一審出請治結黨營私之罪革去王爵並種種加恩之處永遠團禁朕看王乃一庸碌之輩若謂其胸有他念此時尚可料其必無且伊並無才具豈能有所作為即或有之何能出朕範圍此則不足介意者但無知小人如弘皙引昇弘

昌弘皎輩見朕於王加恩優渥羣相趨奉恐將來日甚一日漸有尾大不掉之勢彼時則不得不大加懲創在王固難保全而在朕亦無以對

皇祖在天之靈矣弘皙乃理密親王之子在

皇祖時父子獲罪將伊團禁在家我

皇考御極勅封郡王晉封親王朕復加恩厚待之乃伊行止不端浮躁乖張於朕前毫無敬謹之意惟以諂媚莊親王為事且胸中自以為舊日東宮之嫡子居心甚不可問即如本年八月遇朕誕辰伊欲進獻何所不可乃製鴛黃扇與一乘以進朕若不愛伊即將留以自用矣今事蹟敗露在宗人府聽審仍復不知畏懼抗不實供此尤負恩之甚者弘昇乃無籍生事之徒在

皇考時先經獲罪團禁後蒙赦宥予以自効之路朕復加恩用至都統管理火器營事務乃伊不知感恩悔過但思暗中結黨巧為鑽營可謂怙惡不悛者矣弘昌秉性愚蠢向來不知率教伊父怡賢親王奏請團禁在家後因伊父薨逝蒙

皇考降旨釋放及朕即位之初加封貝勒冀其自親乃

伊私與莊親王允祿弘哲弘昇等交結往來不守

本分情罪甚屬可惡弘普受

皇考及朕深恩逾於恒等朕切望其砥礪有成可為國家宣力雖所行不謹由伊父使然亦不能卓然自立矣弘皎乃毫無知識之人其所行為甚屬鄙陋伊之依附莊親王諸人者不過飲食讌樂以圖嬉戲而已莊親王從寬免革親王仍管內務府事其親王數俸及議政大臣理藩院尚書俱著革退至伊身所有職掌甚多應去應留著自行請旨將來或能痛改前愆或仍相沿錮習自難逃朕之洞鑒弘哲著革去親王不必在高牆圍禁仍准其鄭家庄居住不許出城其王爵如何承襲之處著宗人府照例請旨辦理弘昇照宗人府所議永遠圍禁弘昌亦照所議革去貝勒弘普著革去貝子並管理鑾儀衛事寧和以獲罪之閒散宗室因諂媚莊親王王遂奏請與以恩賞伊所得之公爵今既照宗人府議將此公爵革退則寧和在所當革著詢問莊親王若願改令弘普承襲則著以鎮國公管都統事若仍欲令寧和承襲則弘普專任都統之職著王自行奏聞弘皎本應革退王爵但此王

爵係

皇考特旨令其永遠承襲者著從寬仍留王號伊之終身永遠住俸以觀後效朕於天潢支派念一本之親皆欲篤厚而成就之伊等若能仰體朕心循理謹度共受國恩實乃朕之至願倘恃恩放縱已露端倪而隱思姑容不加裁抑則深乖小懲大戒之義將來難以從輕完結殊非防微杜漸先機保全之道也至於宗室諸人彼此聯親親之情亦須嚴公私之辨若果出於公心則廓然大同無比附之跡豈不甚善今以教人私意網密暗地往還尚得為親親之正理乎朕之所以待莊親王與王之所事朕者天下自有公論王試自思之亦知愧赦否也在朕臨御天下固不敢以親親之一節而忘國家之大法而宗室諸臣亦當知國家之法在所必行若不知警惕身蹈法網朕雖欲敦親親之誼亦斷不能寬假也將此並傳諭宗室等知之餘依議欽此

1313 乾隆四年十月十七日內閣奉

上諭據四川松潘總兵潘紹周奏稱本年八月出口  
化者親見衆番感戴皇仁漸知禮法均安住牧惟  
是臣等每年出口應帶弁兵前往所需馱載烏拉  
馬牛一百五十之數例由口內番子送出口外番  
子送回每一馬牛每日給腳價茶葉一觔按日給  
發但衆番貧寒恐不敷往回盤費可否懇恩每日  
賞給腳價銀一錢俾窮番往回敷用等語著照該  
總兵所奏嗣後每年出口化番應用之馬牛按數  
每日賞腳價銀一錢以資路費該部可行文該巡  
撫知之欽此

1314 乾隆四年十月十七日內閣奉

上諭凡河工需用草束俱採辦於本省州縣今年豫  
省遭被水災草束之價較昔加昂朕已降旨每草  
十觔向來官價九厘者著加銀五厘共成一分四  
釐之數今思山東與豫省河道毗連壤地相接今  
年夏月雨水亦多秫稻等物之價非平時可比亦  
著照豫省之例每草十觔一束增銀五厘俾採買

從容官民不至賠累此因年款加恩後不為例欽  
此

1315 乾隆四年十月二十日內閣奉

上諭吏科給事中倪國璉奏進救饑諸四卷猶有鄭  
俠繪圖入告之遺意甚屬可嘉著南書房翰林詳  
加校對交與武英殿刊刻頒發倪國璉著賞賜表  
裏各二疋以示獎予欽此

1316 大學士張 徐 尚書公訥 字寄 安徽巡

撫孫 乾隆四年十月二十三日奉

上諭大學士趙國麟前由安慶進京時曾在安慶府  
庫內借支公用銀一千兩以為路費至今尚未還  
庫昨在朕前偶然奏及爾等可寄信與孫國璉此  
銀即作賞賜趙國麟不必還項欽此遵  
旨寄信前來

1317 乾隆四年十月二十三日辦理軍機大臣奉

上諭岳鍾琪富爾丹馬蘭泰均係軍務獲罪之人岳

鍾琪富爾丹既開恩釋放馬蘭泰亦著從寬釋放  
欽此

1318 乾隆四年十月二十四日內閣奉

上諭翰林院侍讀王圖炳在內廷効力年久今因年老懇請回籍著賞給詹事府正詹銜准其回籍所進繕寫書籍留覽著賞賜內造緞二端寧綢二端  
欽此

1319 乾隆四年十月二十四日內閣奉

上諭據直隸提督永常奏稱今歲口外收成較之往歲倍為豐稔八溝等處民間雜糧甚多艱於出糶一切納糧辦公及禦冬卒歲之資苦於無措似應乘此糧多價賤之時令地方官在於八溝等處按市價給發官銀採買雜糧數萬石分貯口外各倉以備豐歉不時且以接濟民用實於公私兩有裨益等語今歲直隸州縣年穀順成而口外尤稱豐稔實可慶幸永常既稱民間糧多價賤艱於出糶則講求積貯正在此時上年曾有遣官於口外買

運糧石之事頗於民食有濟應著戶部酌量給發帑銀數萬兩交與永常令其會同地方官採買口外雜糧分貯附近各倉以為地方儲蓄並使民間得價以資歲底用度其如何妥協辦理之處著戶部速行定議具奏欽此

1320 乾隆四年十月二十五日內閣奉

上諭據天津總兵黃廷桂奏稱臣養母陳氏係從堂嫡母將臣自少過房雖係養老歸宗而慈愛同於所出以養以教備極辛勤臣是以幸獲有成疊邀恩遇前歲恭遇覃恩臣請將本身妻室應得封典馳封養父母未蒙俞允今接閱邸抄因貴州苗疆一案蒙恩議叙賜臣加銜一等臣展轉思維倘蒙天恩准臣咨部馳封養父母則臣萬不敢再叨議叙之曠典伏乞勅部註銷庶臣心得以稍安等語黃廷桂所請情辭懇切著照伊品級賞伊養父母封典其議叙加銜之處亦不必註銷欽此

1321 乾隆四年十月二十八日奉

上諭朕聞河南陳許一帶有老瓜賊汝寧地方有卦子賊多係鳳陽等處往來大盜而卦子賊則出自汝寧府及光州等處由豫省直至湖廣山陝出沒無常男女同行騾馬資裝甚盛專藉婦女假扮醫巫入人家室盜物潛逃無由捕緝此等匪類多往汝寧等處每至冬間則回本籍所當密為嚴拿勿使漏網以安良善者也又聞山東與豫省接壤之桃源鎮特設同知一員專司捕盜其地積盜甚多每歲春間出外行劫冬底歸家地方官未嘗不知而行踪詭秘欲拿無據若於冬月歲暮之時密行伺察方可弋獲應令豫撫密咨東省飭令該同知預行確訪及時搜捕以清盜藪以上三項皆朕得之訪聞者爾等可作字寄與尹會一令其用心料理不可疎忽至於應行知會隣省之處即著尹會一傳朕諭旨密寄去勿令漏洩以致遠颺更不能以介在隣封互相推諉凡為地方大吏者不能除盜安民何能辭曠職之咎耶欽此遵

旨寄信前來

1322 大學士伯鄂 張 大學士徐 宇寄 江南

河道總督高 乾隆四年十月二十八日奉

上諭王鴻勳在山東河道任內時有人奏其居官辦事致飾於外而中無實際是以朕照例令其內陞以徐徐試看之後據白鍾山奏其在工多年諳練河務且寔心供職為河員中之難得者朕思若將王鴻勳命往河東仍隸白鍾山屬下恐伊已有成見未必能得其居官之實蹟伊既久任河工特命往江南交與高斌再加試用王鴻勳果否諳練河務並居官如何之處著高斌據實陳奏爾等可作字傳諭高斌知之欽此遵

旨寄信前來

1323 乾隆四年十月二十八日內閣奉

上諭朕駐蹕南苑部院八旗等衙門著照圖明園之例輪班奏事天氣寒冷吏兵二部輪班之日大學士鄂爾泰張廷玉不必前往欽此

1324 乾隆四年十月二十八日內閣奉

上諭聞河南總兵官柏之蕃年老昏曠營伍廢弛著革職欽此

1325 乾隆四年十月二十八日內閣奉

上諭北路軍營糧餉事務著降調巡撫法敏前往管理欽此

附錄

(1) 大學士伯臣鄂爾泰等為遵

旨議奏事前據總河高斌奏稱江南鎮江府金壇縣

恩貢生蔣振生者年近七旬品行直方自少窮

經兼工書法曾於陝西碑洞見石經訛缺有志

校定嗣因親瞻

孔廟思以十三經正文刻石兩廡於是取石經款式

廣購諸善本詳加考校敬謹手書積十有二年

之久書全裝潢成帙計三百冊共五十函臣伏

思事關

聖主尊經重道之盛典臣不敢壅於

上聞謹先進易經二函敬請

聖訓可否將全冊五十函送進恭呈

御覽蔣振生書冊可否勒石孔廟統候

皇上聖裁等因奉

硃批大學士等議奏欽此欽遵臣等議令河臣高斌

將全冊五十函一併送進

發交武英殿再加校定如經文果無訛誤字畫一

律端好臣等再行具奏請

旨等因於本年八月十六日奉

旨依議欽此今據總河高斌將蔣振生手書十三經

四十八函送到併前所進二函共五十函三百

冊除

發交武英殿遵即校對外臣等看得蔣振生所書

十三經正文字畫端楷用筆瘦勁該生用力有

年志在刻石

孔廟但查刻石工費既屬浩繁而

闕里兩廡牆壁亦未可輕議折動且聖賢經傳初不

以刻石

孔廟始為尊崇臣等酌議應俟

武英殿校對果無責訛誤即交

武英殿照字帖款式用素木板陸續鐫刻印刷以

備

頒發其原本或存貯

武英殿或送入

大內收貯臨時再行請

旨至該生力學工書生逢

聖世志在尊經所書經文仰荷

聖恩垂覽

命臣等議加獎賞據河臣高斌奏稱該生品行直方

自少窮經今已年近七旬臣等酌議否可將貢

生將振生賞給國子監學正銜職以示

優獎之處恭候

欽定請謹

奏請

旨

乾隆四年十月初五日奉

旨將振生著賞給國子監學正職銜餘依議欽此

(2) 大學士伯臣鄂 等謹

奏為請

旨事錄黃撰漢軍都通統公訥穆圖等咨稱據本旗

叅領即正岐等案呈據本佐領下劉洪基呈稱

切基父劉士瑀原係陝西高淳堡守備奉委駐

劄鄂隆磯地方於雍正十年八月二十三日在

噶順溝遇賊打仗領兵赴衝傷殘賊無數大腿

突中烏鎗復行奮勇直搥山頭不意前冒又中

烏鎗彼時落馬陣亡屍身被賊割去曾經大將

軍奏報荷勞蒙

皇恩賞卹典銀三百兩比因軍務未竣故未議及雍正

十三年九月內欽奉

恩旨將和通呼爾哈諸路官兵內効力陣亡大臣官

員及西路官自兵丁効力陣亡未及加恩者俱

著查明加恩欽遵在案是以兵部將哈密等處

駐防坐卡官自益雍正年間遇賊打仗陣亡之

千總楊文蔚等噶斯坐臺陣亡侍衛冷格等并

康熙五十九年進藏陣亡之叅將馮瑋等俱遵

旨查奏均蒙准與應襲各在案念基父陣亡情節與

旗漢各負戮戮力之處相同仰懇一體欽遵

恩旨查辦等語職等前據劉洪基呈報伊父劉士瑪陣亡情形移送兵部經兵部以此案係交辦理軍機處並未文部無憑查議咨覆今本旗若不行詳細查明事關陣亡題請廢襲未便遽行定議結案可否移咨辦理軍機處將軍守備劉士瑪陣亡一案從前如辦理之處查示以便定議辦理等因呈報前來相應移咨軍機處希將鄂隆磯陣亡官兵案內陣亡守備劉士瑪曾否議奏之處查明咨覆以憑定議等因移咨前來  
臣等查雍正十年九月內嚴寧遠大將軍印務副將軍張廣泗副將軍內大臣常賚奏稱據駐劄鄂隆磯副將許大學恭將表士弼報為殺賊賊情等事據稱八月二十三日辰時賊又從東南噴順溝中擁出攻擊之間賊退走西南守備劉士瑪砲位趕衝傷賊無數該備奮勇直前不意腹中鉛子落馬殞命屍身被賊劫去職等即遣千總陳進孝把總袁政鳳帶兵追奪將劉守備屍身奪回等情前來理合會摺奏明再自移兵移壘以後遇賊陣亡帶傷以仍及奮勇有

功兵丁臣等現在行查確實分別給賞另行奏

間併造冊送部等因在案又西路副將軍福建提督

劉世明等奏為飛報官兵奮勇殺退賊夷等事

案內奏稱八月二十一日辰時起至二十三日

百時止我兵奮勇與賊爭戰三日兩夜陣亡守

備一員劉士瑪等因亦在案查守備劉士瑪於

鄂隆磯噴順溝遇賊打仗陣亡情節經護大將

軍張廣泗副將軍劉世明等具摺奏報因事關

軍機將原摺存案未曾發出文部今既據該旗

咨查劉士瑪西路陣亡情由並劉洪基呈懇遵

照

恩旨查辦等情相應將張廣泗等奏報劉士瑪陣亡

之處請

旨發交該部照例辦理再嗣後如有此等事件咨查

軍機舊案者臣等查明抄錄移交該部查照定

例辦理具

奏請

可也謹

旨

乾隆四年十月初六日奉



旨知道了嗣後如有此等事件着奏明交部欵此

(3)

湖南巡撫馮光裕一摺 據稱楚省乾州鳳凰  
永州三廳所屬苗人惟鳳屬永屬各寨徒未經  
懲創肆行不法甚至打傷外委打死兵丁殺擄  
鄰省之苗緬拿近地之民以圖勒贖地方文武  
或給牛酒或給賞銀方始解散道遊大負帶兵  
曉諭兇首負固不出苗性既縱官法莫加臣愚  
以為頑苗不可姑容良民急宜拯救除已前之  
事無庸追究已解之案不復深求即現在有可  
以照苗例完結者俱令廳道酌量辦理外惟是  
粟林鴉蕪盤若等數寨當此屢行不法之時正  
宜聲明其罪指明兇首勒令擒獻審明正法庶  
各苗知所儆懼以臣熟籌必須撥兵三千名另  
派武職大員以為統領前往然後該寨懼伏不  
敢黨惡兇犯不致漏網可以迅速完結蓋與  
其兵少而苗人畏拖延時日不如兵多而苗  
人畏胆刻期奏功臣已密札商之提臣顏清如  
鎮臣楊國華并令該道楊輔臣面赴商酌俟新  
任督臣到時再備細商定所有從前經理不善

之地方官本應參處但既議用兵一切領兵攻  
打分佈堵截籌辦夫役糧草招撫化導就營審  
訊若易生手不能辦理應俟各員弁軍前事竣  
按其功罪或足相抵或不足相抵核明另奏等  
語 查苗人兇頑成性盜歐劫殺乃常有之事  
惟在該地方官隨時懲治折服使之畏法斂跡  
若希圖省事務為姑息則日漸玩縱馴至官法  
若莫加如該撫所奏鳳永所屬各寨情形皆係  
從前姑息養奸之所致自非派發大兵不能壓  
伏今據撫奏請撥兵三千名派武職大員統領  
前往使該寨懼伏可以迅速完結仍大張曉示  
明立賞罰嚴禁官兵不得妄殺一無辜之人燒  
一無辜之寨等語該撫身任地方既經詳志諮訪  
熟籌整飭事宜應如所奏令該撫會同新任督  
臣並提鎮臣等詳加籌畫查明兇惡苗寨指授  
領兵該員統兵師臨歷將應行捕治之兇犯勒  
令擒獻如仍負固不行發出即指定該寨勒兵  
進勒其餘苗寨如無黨惡等情不可稍有擾累  
致滋事端仍將如何派撥整理之處隨時具摺

奏

聞至從前經理不善應行泰處之該地方官俟事竣

核明另奏之處亦應照該撫所請辦理謹

奏伏候

諭旨

乾隆四年十月初七日奉

旨依議欽此

(4) 兩江總督那蘇圖一摺 據稱江蘇本年被災

各州縣內有安東蕭縣碭山俱係乾隆元二三

年三次被災之區海州係雍正十三年乾隆元

二三年四次被災之區除乾隆二年帶徵之項

業經遵

旨豁免其餘積年尚有停緩舊欠及今年被水又應

停緩之項均應於明歲起分年帶徵可否仰懇

聖恩俯念各州縣水旱民力稍艱將雍正十三年乾

隆元年停緩舊欠酌加寬免等語 查上年上

下兩江旱歉上江地方比下江較重欽奉蠲免

之

恩旨內安徽各屬係將雍正十三年乾隆元年二年

未完舊欠概予豁免江蘇各屬係將乾隆二年

被水停緩等項豁免其雍正十三年乾隆元年

未完舊欠原不在應免之內伏查本月年九月

內欽奉

諭旨淮安揚州徐州海州等屬上年被災獨重今年

又復被水歉收所有應徵錢糧該督撫自分別

蠲緩具奏請

旨欽遵在案淮徐等處災黎仰蒙

聖心軫念

仁恩已極周溥今據該督奏稱安東蕭縣碭山係三

次被水之區海州係四次被水之區是此四州

縣在淮徐等府內又屬受災獨重查上江因係

災重蒙將雍正十三年乾隆元年舊欠

恩賜豁免今海州安東蕭縣碭山四州縣在下江俱

係災重之地所有雍正十三年乾隆元年未完

舊欠地漕等銀三萬餘兩似亦應照該督所請

懇

恩豁免臣等謹擬馮

上諭一併

進呈恭候

欽定至稱蘇松常太等屬雍正十三年以後又有民

次至四十餘萬之多查此等稱積逋或係小民

實在力薄拖欠或係頑戶蠹骨抗捺侵蝕自應

分別稽查悉為清燿應聽該督查明辦理具奏

可也謹

奏

乾隆四年十月初十日奉

旨是欽此

(5) 副都御史舒赫德奏請將秋審緩決過五次以

上者分別減等發落等因一摺 伏查乾隆二

年四月內欽奉

諭旨雍正十三年兩次恩詔後仍行監禁者原係不

應赦免之人上年秋審時已令九卿科道等將康

熙五十二年至雍正三年以前不赦之案覆加分

別減等其雍正四年以後十三年以前所有不赦

各案其中或有介于疑似及屢經秋審緩決之犯

或尚有可矜亦未可定者總理王大臣會同刑部

將秋審朝審招冊詳加覆勘如果有一錢可原應

行減等者即酌定請旨欽此欽遵是屢經秋審緩

決各犯除將稍有可原者已經遵

旨覆勘酌量減等外其未經減等者皆情罪較重之

犯因係久緩不復處決即令終斃因圖已屬寬

典但此等人犯淹禁已久積案漸多今舒赫德

奏請將緩決五次以上案件尚可貸以生路者

逐一分別請

旨比照兇盜之減等者充發邊遠烟瘴等語亦係仰

體

皇上如天好生之心以期清理滯獄之意查免死減

等充發邊遠烟瘴較之可矜人犯減等杖流之

例係從重發落似屬可行仰請

特降諭旨令九卿科道將緩決五次以上各案詳加

分別定議具奏請

旨如蒙

俞允九臣等酌候秋審勾決完竣之後另擬

諭旨進呈恭候

欽定

乾隆四年十月十五日

(6) 大學士伯臣鄂 等為遵

旨議奏事雲南總督慶復等奏明審理交賊矣長等

起事投誠情罪緣由請將矣長等交與安南國

王發落安揀等因一摺欽奉

諭旨安南係本朝屬國今既將矣長等情罪審明即

可定擬完結該督復請送交該國王自行發落殊

未妥協此案或即行辦理或待該國事定報聞

之後再行定議者軍機大臣等議奏欽此 臣等

議得交賊矣長等前因畏懼官兵又見告示許

其投訴平衆來投既經審明情節即當治以應

得之罪

天朝為屬國處分叛人體統應然若復送交該國王

自行發落誠如

聖諭辦理未為妥協且前經該督等出具榜文有許

以不死之語今若將矣長等送至彼國勢必盡

加誅戮則督鎮諸臣亦免失信查該督等原許

矣長投訴之後審定虛實以待咨查今既經該

督等會訊奏稱供詞全無實據雖係投出罪亦

難違等語應請

勅令該督等即行照律分別定擬請

旨發落以結此案仍將矣長等治罪之處咨明該國

王則既不失統馭外藩之體而該國王自必感

服益加愛戴

皇恩矣伏候

聖訓

乾隆四年十月二十一日奉

旨是依議欽此

(7) 臣鄂 等謹

奏本月三十日

皇上南苑大閱臣等辦理軍需機處除臣訥 臣海

總理行營隨往外臣鄂 臣張 臣徐 臣納

隨

駕之處合行請

旨

乾隆四年十月二十六日奉

旨著大學士徐 尚書訥 去欽此

1326 乾隆四年十一月初一日內閣奉

上諭保祝著實授廣東提督譚行義著實授廣西提督河南河北鎮總兵員缺甚屬緊要著大名協副將丁士傑補授欽此

1327 乾隆四年十一月初三日內閣奉

上諭王朝璘人甚庸愚不勝副都統之任著革職欽此

1328 乾隆四年十一月初五日內閣奉

上諭那蘇圖報丁母憂江南總督印務甚屬緊要著吏部尚書郝玉麟署理郝玉麟現由閩省進京著吏部即速行文前去郝玉麟於何處接奉諭旨即由彼處赴江寧新任欽此

1329 乾隆四年十一月初五日內閣奉

上諭楊瑄著回涼州總兵任固原提督印務著韓良卿署理肅州總兵印務著李述泌署理欽此

1330 乾隆四年十一月初六日內閣奉

上諭朕聞湖廣荊州將軍袞泰令右翼副都統於本年十月內帶領八旗官兵自荊州起程過江至洞庭湖邊一帶地方行圍操練兵馬湖南巡撫馮裕以荊州官兵從無越境赴湖南行圍操練之事恐百姓不知來由心懷驚恐轉飭布政使出示通行曉諭朕思八旗駐防弁兵於秋成之後行圍操演亦農隙講武之義但只應在就近常到之地若越境遠行不但居民以為罕見即弁兵路費亦覺繁多至於馮裕惟恐騷擾百姓只應知會將軍等嚴加約束令飭令藩司出示曉諭恐百姓因此生疑轉起驚慌之意此一事袞泰等與馮裕辦理均未妥協爰降此旨特行訓諭並令各省將軍及督撫等共知之欽此

1331 乾隆四年十一月初七日奉

旨尹會一自任豫撫以來屬員怠忽不知畏懼其猷  
獄弭盜多未妥協今年豫省各屬被水災重所辦  
賑恤之事亦未盡善實少幹濟之才不勝巡撫之  
任但其為人忠厚謹慎非有心誤公者可比著解  
任來京候朕降旨另用河南巡撫員缺著兵部侍  
郎雅爾圖補授至於國家設立言官原期公直敷  
陳有裨政治不得撫拾浮辭妄逞私意若內外大  
臣中確有劣蹟應入彈章者指實奏奏方為無忝  
職御史宮煥文所奏尹會一之處皆朕所洞悉並  
非別有私心甚屬可嘉著交部議叙具奏

1332 乾隆四年十一月初八日內閣奉

上諭福建臺灣鎮總兵官章隆著調補廣東左翼鎮  
總兵官廣東左翼鎮總兵官何勉著調補福建臺  
灣鎮總兵官欽此

1333 乾隆四年十一月初九日內閣奉

上諭吏部尚書事務著楊超曾署理安徽巡撫員缺  
著陳大受補授欽此

1334 乾隆四年十一月十五日內閣奉

上諭捐監事例改歸各省令本省之人報捐收納本  
色原期積貯充盈以便民間緩急之用也今聞閩  
省原議定收穀一百萬石之數自報捐以來所收  
之穀不足三萬石而今歲該省收成頗稱豐稔彼  
地之人奢侈成風不知撙節甚至造麴釀酒以供  
燕樂是以僅見之豐盈供其浮費而以有用之顆  
粒助其奢靡習俗難移甚為可惜不若乘此捐監  
事例准外籍民人無論行商過客及暫時流寓之  
輩一體照例捐納另冊報部成衆人之功名即以  
留閩人之粟米似屬兩有裨益俟一年期滿將外  
籍之捐納停止該部可即行文閩省遵朕諭旨行欽  
此

1335 乾隆四年十一月十六日內閣奉

上諭朕慎重刑獄疑惟輕數年之中屢頒恩詔凡有應行赦免之犯俱已在三宥之中矣其不在恩詔中者復於乾隆二年三年特降諭旨令大臣會同刑部將秋審朝審冊詳加覆勘如有一線可原應行減等者酌定奏聞請旨減等發落此次辦理外其未經減免者皆情罪較重之犯因係久緩不復處決即令終釐囹圄已屬寬典無可矜憐但此等人犯淹禁既久積案日多朕再四思維清理滯獄亦法外之仁著九卿等將秋審朝審緩決五次以上之人犯酌其情罪稍輕尚可貸以生路者逐一分別請旨比照充盜免死減等之例充發邊遠烟瘴地方如此辦理則較之可矜減等杖流之例為重而較之永遠監禁之犯為輕是亦清理滯獄之意至於情罪可惡者雖經多次緩決亦不在減免之列欽此

1336 乾隆四年十一月十六日內閣奉

上諭朕聞湖北地方每年額徵糧米二十七萬八千餘石以十五萬一千餘石運赴通倉名曰北漕以十二萬六千餘石為荊州官米名曰南糧此二項糧米雖有不同而徵之於官納之於民則同一乾圓潔淨之米即額定之耗米脚價亦屬一例原可合收而分解者乃有不肖州縣巧為多取分設倉口分點倉書令糧戶分作兩處完納以圖多得贏餘民間未免苦累近年以來上官訪知此弊已出示禁革小民稱便但未著為定例恐將來官吏貪得贏餘仍有復蹈舊轍者著該部行文該省將南北二項漕糧合收之處永遠遵行如有分項徵收零星多取者該督撫即行查參倘別省收漕地方有似此分收者著該督撫酌量查禁欽此

1337 乾隆四年十一月十七日奉

日御前三等侍衛五十七有差往天津事件者馳驛即行前往欽此

1338 乾隆四年十一月十七日奉

上諭長蘆鹽政員缺著內務府郎中伊拉齊補授即速赴任欽此

1339 乾隆四年十一月十七日內閣奉

上諭吏部侍郎員缺著刑部侍郎田懋補授刑部侍郎員缺著副都御史王安國補授副都御史員缺著尹會一補授欽此

1340 乾隆四年十一月十七日內閣奉

上諭武英殿事務著張照管理欽此

1341 乾隆四年十一月十八日內閣奉

上諭各處河工關係緊要而通曉河務之大員甚為難得朕為此留心久矣雍正十一年高斌管理鹽政時

皇考曾降諭旨令其講究河工事務以期熟練備用今果得其力朕聞河南布政使朱定元由河南廳員

出身歷任浙江海防兵備道於河防事宜素所閱

歷今任豫省藩司所有河道地方皆其統屬而山

東為河南下游事屬一體著朱定元將疏濬保護

之法加意講求以備將來之任使但不必協同辦

理有妨本任職掌浙江按察使完顏偉亦曾任海

防道員其浙江海塘事務亦照朱定元之例不時

留心該部可即行文傳諭朱定元完顏偉知之欽

此

1342 乾隆四年十一月十八日內閣奉

上諭嗣後道府大員引見時若有曾任河員及諳練河務者著於履歷內註明啓奏欽此

1343 尚書果毅公訥 字寄 蘇州織造

御前侍衛安 乾隆四年十一月十九日奉

旨海保任內所辦內廷應用物件向係奏明交莊親

王查核數年以來雖有查核之名並未見莊親王

查奏細閱海保開報摺內浮冒情弊甚多著怡親

王尚書公訥親尚書海望逐一查核具奏著落海



保在京家產賠補其任所辦理檔冊等項著安寧  
詳悉查辦具摺奏聞交怡親王等師併辦理不必  
叙入本內至伊所管閩務經巡撫張渠題參侵蝕  
國帑勒索商民各款及或有績參款項著安寧仍  
遵前旨確審賠補錢糧即將海保任所家產查明  
賠補照例具題可寄信與安寧知之欽此遵  
旨寄信前來

1344 乾隆四年十一月二十日內閣奉  
上諭湖廣提督員缺著杜愷補授欽此

1345 乾隆四年十一月二十一日奉  
上諭御前侍衛副都統王扎爾著馳驛前往蘇州協  
同安寧審理海保案件欽此

1346 大學士鄂 張 徐 字 寄 湖南巡撫馮  
乾隆四年十一月二十三日奉

上諭聞湖南地方事務廢弛且府縣印官員常調

至他處辦事數月不歸即如今年春間常德府知  
府武陵縣知縣同時赴調省城半年之久未回本  
任以致匪竊無人查拿詞訟無人判決命案無人  
檢驗一處如此他處可知可寄信傳諭馮光裕向  
後切宜留意勿蹈前轍欽此遵

旨寄信前來

1347 尚書果毅公訥 字寄兩淮鹽政三 乾隆四  
年十一月二十七日奉

旨據怡親王奏稱商人馬鴻如現在行鹽處所伊若  
乘隙遠逸臣難以查緝等語可寄信三保令伊拿  
解王府欽此遵  
旨寄信前來

1348 乾隆四年十一月二十七日內閣奉  
上諭廣東高廉道儲龍光著調補廣西鹽驛道廣西  
鹽驛道黃岳牧著調補廣東高廉道欽此

1349 乾隆四年十一月二十八日內閣奉

上諭已故大學士嵇曾筠前在江南河道總督任內  
悉心籌畫彈力宣防叠蒙

皇考諭旨褒嘉至今河渠受益查前任河臣靳輔齊蘇  
勒俱建有祠宇永享裡祀而嵇曾筠勞績實可媲美  
美西人著照靳輔齊蘇勒之例一體祠祀以示優  
獎以慰輿情欽此

1350 乾隆四年十一月二十八日內閣奉

上諭今年江南淮徐海等屬夏秋被水偏灾因值連  
歲歉收民力艱窘已諭令該督撫於秋冬之間加  
意賑濟以濟窮困俟冬底再降諭旨今聞散賑之  
期將滿而被灾有輕重之不同應分別加賑之期  
以待來年耕種貧民始不至於失所其被灾重者  
如安東邳州銅山沛縣豐縣碭山蕭縣海州沭陽  
等九州縣著將極貧之民加賑四個月次貧之民  
加賑兩個月又次貧民加賑一個月其被灾稍輕  
者如宿遷睢寧桃源清河贛榆阜寧六縣著將極  
貧之民加賑兩個月次貧之民加賑一個月該部

可即傳諭江南督撫董率有司實力奉行務令均  
沾實惠倘有侵漁破冒及胥吏土棍中飽等弊即  
行叅拏從重治罪欽此

1351 乾隆四年十一月二十九日內閣奉

上諭上年寧夏地震之後朕日夕憂思多方籌畫一  
年以來陸續經理地方漸有起色朕心稍慰嗣後  
加意休養方能培復元氣著將寧夏寧朔平羅三  
縣額徵銀糧草束再寬免一年以滋生息以裕蓋  
藏著該部即遵諭行欽此

1352 乾隆四年十一月二十九日內閣奉

上諭寧夏供支滿兵糧草向係每年採買散給共計  
白米一千五百餘石粟米七千餘石草一十三萬  
餘束其所定部價白米粟米每石價銀一兩草一  
束價銀一分今聞該地方自上年被灾之後新寶二  
縣田地被水淹浸不能耕種已少產米糧數十萬  
石目下糧草之價日覺昂貴所定官價不敷採辦  
勢必貽累小民著將乾隆五年應支滿兵糧草白

米每石加銀一兩粟米每石加銀五錢每草一束加銀一分如此則價值增添官民易於辦理但係格外之恩後不為例該部可印行文該督撫知之欽此

附錄

(1)

查原任廣東鹽運使陳洪熙審案緣陳洪熙接徵前任運使陳元方任內各商未完掛額餉銀共三十餘萬兩於雍正十二年正月停止掛額之後陳洪熙違例具詳多掛正鹽價銀八萬六千八百七十餘兩子鹽餉銀一萬二百四十餘兩俱如期完納至於婪收餘利指一派十之處陳洪熙堅不承認各商八十餘人僉供陳洪熙愛惜商人從無加利勒派之弊事將陳洪熙照依違

制例擬伏一百本案已經革職應毋庸議等因經

刑部議覆奉

旨依議陳洪熙著送部引見欽此欽遵經兩廣總督

馬爾泰給咨送部引

見於本年六月十五日奉

旨陳洪熙著交與雲南總督慶復以知府試用欽此

八月內陳洪熙呈稱伊母年老請回籍終養經

吏部代奏奉

旨准其終養欽此

乾隆四年十一月初六日奉

旨知道了欽此

(2) 臣訥 謹

奏本年八月內臣面奉

諭旨命兩廣總督馬爾泰將廣東提塘私書一彙速

行辦理臣遵

旨寄信該督令馬爾泰密咨到臣據稱此案內要犯

竇係蕭二湖字祚二人今蕭二已經病故陶寧祚

原籍浙江屢催浙省未准獲解現犯梁周新只

係代陶寧祚封書入報之人長塘張興訊據全

不知情郭七又非要犯無憑質審定案現在飛

催浙江巡撫盧焯將陶寧祚刻速嚴拿解粵審

明定擬等語合將馬爾泰咨覆現在辦理未結

緣由謹此奏

聞

乾隆四年十一月十六日奉

旨知道了欽此

(3)

河道總督白鍾山一摺 據稱黃河形勢遷移無定河水稍長靡常為河臣者必平時講求成法熟悉情形督察調度方合修守機宜臣意河工出身人負曾經閱歷河務如仍留心講論不致荒疎以備河工之用臣所知河南布政使朱史元係由南河廳汎歷陞今職此外或尚有河工出身者臣未能周知可否仰請

皇上諭令就便留心河工或另

賜記名將來可以於中選擇酌量任使等因奉

旨大學士議奏欽此

查河防關係運道民生最為緊要故簡設官員

慎重其選我

世宗憲皇帝以通曉河道者難得其人從前高斌為兩

淮鹽政時

諭令其學習河工事務誠以河防重任非熟習諳練難

以勝任今白鍾山奏稱河南布政使朱史元曾

任河員閱歷河務再此外尚有河工出身人員

仰請

諭令就便留心河工或另

賜記名將來酌量任使等語白鍾山所奏是亦儲才

備用之意查朱史元現任河南布政使豫省地方

皆其統屬一均切河防事宜自可講究熟悉至

山東係河南下游其河工疏濬保護各務具有

成法可循若加意講求亦可明晰情形得其領

要似應如所奏請

勅令朱史元將河東河道就便留心學習但不必協

同協辦理有妨本任事務至於直省大員有通

曉河務曾歷任河工者於引

見時伏祈

皇上記名以備河工之用則河員不致乏人似於工

務有益臣等愚見如此謹

奏伏伏候

諭旨

乾隆四年十一月十八日奉

上諭  
另記檔

(4) 太子太保尚書果毅公臣訥  
奏為遵

旨查奏事乾隆四年十一月十六日據江蘇巡撫張  
梁恭秦織造海保侵冒國法節授累商民一業奉  
旨海保經收圍稅管理織造事務侵蝕冒銷弊端種  
種種伊現在任所其京中家產難免家人聞風隱  
匿寄頓者查明封貯以備抵補海保織造任內侵  
冒之項欽此除海保家內收貯

御筆及

賞賜物件照例交送內務府外其銀錢衣服什物等

項行封固照例交與該旗步軍統領衙門派撥

官兵看守京中所有房屋并在京及涿州當舖

臣委負查明交與該旗收管屯中房地交該旗

委員查明登記檔冊一應房租地租令該旗接

手按月收取存貯其當內貨物止當候贖男婦

人口交該旗拘管毋致疎脫以上所有家產俱

係現據文約及詢問家人供出者此外或有隱  
漏應行文

欽差副都通汪札爾等訊問海保咨覆該旗查對俟  
海保織造任內冒銷銀兩數目查明之日交該  
旗將伊家產變抵再且查閱海保家中檔冊文  
約書信內檢檢有織解大紅雲緞一業回空船  
隻携帶梨冬一業報銷錢糧一業又報銷減半  
平餘及行查火耗一業海保諭單及伊家人稟帖  
俱有向部負書吏人等囑托行賄之處應請  
勅交該部查審定擬具奏伏候

諭旨謹

奏

乾隆四年十一月二十六日奉

旨依議其囑托行賄等案著交與怡親王和親王

公訥親查審欽此

川陝總督鄂彌達酌改邊地兵屯一摺 據稱安西一鎮在口外極邊環繞者夷寔係西塞咽喉必得兵丁精銳始得能捍禦邊防查鎮標三營額設馬步兵三千名內除駐防哈密暨安塘遊巡各項差遣之外寔在存兵一千八百餘名又有承種官屯地畝約需千兵一應差操勢難兼顧而存城之兵僅有數百名非所以防範鎮也且年來安西民人商賈及兵丁子弟較前日增儘可藉民力營田以供兵食請將安西鎮兵屯籽種地一千六百八十餘石照涼州柳林湖屯田之例召募流寓民人及營兵不入餘丁冊之子弟承種將原派屯種食餉兵丁俱撤回存城差操以寔營伍其屯田每年所收民得六分官收四分按數輸納以備兵糧其籽種牛具料單官為給借秋收扣還交靖逆通判理安西道督率稽查其餘可墾地土有民人與餘丁情願承墾者俱許其報明該通判勘定官給工本承熟照例納糧等語 查雍正四年九月內議政王大臣等議覆岳鍾琪奏摺內稱安西鎮屬口

外屯田約有三十餘萬畝除酌苗五萬餘畝仍查兵之有餘丁者方准撥給耕種外如耕種不完與所餘剩之二十四萬餘畝盡行招民開墾於甘肅所屬八府內將有丁無地之窮民令各州縣衛所各查出三四五六七十戶不等給與盤費陸續發注並給牛具籽種房銀令其承種屯地再商賈貿易有情願開墾者亦准其辦種等因奏准在案是安西屯田定議原係招募民人耕種即酌苗五萬餘畝亦必查兵之有餘丁者方准撥給並非議令食餉額兵承種屯地也但口外地方道途遙遠當設鎮之初人民稀少招募戶口或未即能足數是以將營兵承種地畝此特一時權宜之計耳今鄂彌達既稱年來安西人民商賈及兵丁子弟較前日增儘可藉民力營田以供兵食自應將兵丁領種屯田悉照原議陸續召募農民商賈及兵之有餘丁者承種其食餉額兵應漸次撤回存城差操以寔營伍至屯田所收糧石民得六分官收四分與給借牛具籽種該道與通判管理督率併餘地聽

百姓報懇納報之處悉照該督所奏辦理可也

謹

奏伏候

諭旨

乾隆四年十一月二十八日奉

旨依議欽此

1353 乾隆四年十二月初二日內閣奉

上諭今歲河南被水頗重江南亦有歉收之州縣開豫省及上江民人貧苦乏食轉徙道路有前往九江口而官吏禁止不許渡涉者此雖得之傳聞未必不確著河南安徽巡撫恇心體察安輯撫綏毋使流移失所倘已離本鄉行至他省彼地督撫即應飭令有司設法救濟免於凍餒於春暖時資送回籍毋得膜視或他處有似此出境覓食民人亦照此辦理該部即遵諭行文各省督撫知之欽此

1354 乾隆四年十二月初二日內閣奉

上諭原任貴州都勻府知府孫紹武著吏部帶領引見欽此

1355 乾隆四年十二月初六日奉

旨福寧首告弘皙一案經平郡王公訥親一一審訊內有弘皙聽信安泰邪術捏稱祖師降靈一款詢問安泰據供弘皙曾問過準噶爾能否到京天下

太平與否皇上壽算如何將來我選陞騰與否等語口供鑿鑿殊屬大逆不道應照律革去宗室擬絞立決其家產妻子應如何辦理之處交宗人府議奏請旨莊親王將官物私自換與弘皙應照監守自盜律革去王爵准徒五年係宗室交宗人府完結安泰造作妖言談論國事擬以立絞餘俱按律定擬弘皙父子在

皇祖時身獲重罪哉

皇考御極屢次加恩封為親王朕即位以來又復恩待乃伊並不知感妄以伊父係舊日東宮心懷異志竊與莊親王等交結往來前經敗露宗人府擬以革去王爵永遠圈禁朕從寬但革親王仍准在鄭家莊居住並將伊弟弘瞻襲封郡王以繼理密親王之後今弘皙聽信邪說其所詢問妖人之語俱非臣下所宜出諸口所忍萌諸心者擬以大逆重典以彰國法洵屬允當但朕總念伊係

皇祖聖祖皇帝之孫若革宗室置之重典於心實有不忍且伊亦不過昏庸無知之人耳著從寬免其死罪但不便仍留住鄭家莊著拿交內務府總管在景山東菓園永遠圈禁其家產妻子不必交宗人



皇祖

皇考在天之靈昭鑒而使之敗露乎朕臨御以來敦睦一本加恩九族逾於常格不獨衆宗室知之即內外臣工無不知者乃朕如此加恩而近支之中竟有如弘皙等悖亂之徒朕不能感動其天良朕轉用以自愧至於衆宗室等見朕從寬優待益當思國法之不可犯循理守分永承朕寬厚之恩若至觸法觖禁如弘皙之行為朕雖以不忍之心從寬發落而究未嘗廢棄國法也將此並諭衆宗室知之欽此

1356 乾隆四年十二月初七日奉

旨兵部侍郎普泰時常稱病偷安不肯勉辦事著革職欽此

府另議伊子仍留宗室但亦不便仍在鄭家莊著來京交與弘曉管束莊親王從前種種朋比黨援之事所犯甚大朕已經寬恩免革王爵今侵盜官物之案在王亦宜為尋常之事耳伊亦不必革王爵但罰親王俸祿五年以示懲儆令王返而自思其所庇護者乃如此妄亂之人伊尚靦顏不知愧恥乎安泰係附和弘皙捏為邪說之人著從寬改為應絞監候秋後處決餘依議從前弘皙等朋比往來之事朕命宗人府審奏時朕已矚其有不軌之心因事未顯著是以從輕歸結以見小懲大戒之意彼時無知之人未必不以朕之處分為太過今其悖逆之行彰明較著而朕仍復貸其重罪止於禁錮天下之人亦當曉然於弘皙之所犯法無可宥而朕之所以處之者始終念親親之誼也況數年以來弘皙不過隨班上朝並未辦理公事朕於彼無絲毫喜怒之成心伊之居心行事如此豈非自作之孽乎且弘皙前案已經結局即福寧所首之款亦未嘗及此悖逆之語而安泰於審問之時一一供出豈非天理有所不容

1357 乾隆四年十二月初七日

皇上御門聽政內閣九卿奏事畢面奉

上諭為政之道莫先於勤朕日理萬幾惟日孜孜不

遑暇逸朕既恪恭於上亦必須諸臣勉於下庶

文修不逮疎忽之漸無自而萌近見各部院辦事

尚屬秉公但所奏事件較少於前從來政簡刑清

原屬國家上理若未臻上理之實效而徒務清簡之

虛名必致將應辦事件日就廢弛矣凡朕御門聽

政辨色而起每遣人詢問諸臣曾齊集否數次之

後始云齊集即今日亦復如是諸臣於御門奏事

尚且遲遲後期則每日入署辦事更可想見自古

人君未明求衣聞雞問政人臣夙興夜寐靖共爾

位堂廡之間動色相戒誠以勤怠之關即敬肆之

所由判也凡人之心敬難而肆易敬則日習於勤

勞肆則日流於安逸心果克勤則雖無事可辦亦

不失敬事之意若心圖安逸則雖當辦事之際亦

不過視為具文耳朕非因諸臣齊集稍遲即加責

備但敬肆之介不可不謹其幾書曰君子所其無

逸又曰無曠庶官朕與諸臣當共勉之欽此

1358 乾隆四年十二月初八日內閣奉

上諭陝西榆林一帶地土寒薄居民貧乏向來百姓

所借倉糧因歲歉力不能完者俱蒙

王考施恩寬免自雍正十二年至乾隆二年榆林神木

葭州懷遠府谷綏德清澗米脂吳堡定邊靖邊十

一州縣民借未完常平倉穀四萬四千三百七石

零米五千六百一十二石零應於近年徵收還項

朕思今年西安等處雖屬有秋而榆林等十一州

縣未見豐稔該處地既瘠薄又有本年應徵之正

賦邊民難以一併輸將深可軫念著將此十一州

縣民借未完之常平米穀悉行寬免以昭格外之

恩著該督撫即速出示曉諭俾小民均霑寔惠毋

使奸胥土棍侵蝕中飽欽此

1359 乾隆四年十二月初九日奉

旨王大臣等所奏甚是弘皙情罪重大理應即置重典以彰國法但朕念伊係

皇祖聖祖皇帝之孫若加以重刑於心實有不忍雖弘

皙不知思念

皇祖朕寧不思念

皇祖乎從前阿其那塞思黑居心大逆干犯國法然尚

未如弘皙之擅敢仿照國制設立會計掌儀等司

是弘皙罪惡較之阿其那輩尤為重大但阿其那

塞思黑尚屬小有才之人若弘皙乃昏暴鄙陋下

愚無知之徒伊前後所犯罪惡俱已敗露現於東

菓園永遠圍禁是亦與身死無異凡稍有人心者

誰復將弘皙尚齒於人數乎今既經王大臣如此

奏請則弘皙及伊子孫未便伊留宗室著宗人府

照阿其那塞思黑之子孫章去宗室給與紅帶之

例查議具奏至莊親王前與弘皙私相往來種種

重罪俱經寬免今將官物私行抵換在王亦宜為

尋常之事何足較論著仍遵前旨行欽此

1360 乾隆四年十二月初十日奉

旨書山請將甘肅寧夏等處武弁之缺分用滿洲蓋

欲令其多得俸祿以資養贍之意獨不思滿洲弁

員係朕之臣僕綠旗弁員豈非朕之臣僕乎朕從

來視同一體毫無分別至伊稱武職最重弓馬而弓

馬最嫻者莫如滿洲朕觀甘省兵弁人材壯健騎

射亦未嘗不優書山係旗員為此偏向滿洲之請

殊屬不合著交部議處具奏欽此

1361 乾隆四年十二月十一日奉

旨淮安閩監督準泰現在丁憂其監督事務著李英

管理山海關監督著員外郎江都去欽此

1362 乾隆四年十二月十二日內閣奉

上諭阿克敦著充一統志館副總裁欽此

1363 乾隆四年十二月十七日內閣奉

上諭直隸河間府知府員缺著劉君成補授欽此

1364 乾隆四年十二月十九日軍機大臣等奉

上諭從前定議西路派換哈密等處防兵官員借給一年俸銀馬兵借給銀六兩步兵借給銀四兩其備戰兵遇有調遣官員借給二年俸銀馬兵借給銀十兩步兵借給銀六兩俱於回營之日在俸餉內分年扣還朕念官兵人等遠役勞苦回營之日復將俸餉坐扣其差操防汛以及養贍家口等費未免艱難著將所借銀兩俱行賞給免其回營生扣嗣後如有派撥即照所借銀兩之數賞給以昭朕優恤戎行之至意欽此

1365 乾隆四年十二月二十一日內閣奉

上諭庶吉士朱堪著授為翰林院檢討欽此

1366 乾隆四年十二月二十一日內閣奉

上諭據川陝總督鄂彌達甘肅巡撫元展成奏稱上年寧夏等處陡遇震災旋被水溢搖壞三渠損塌老埂荷蒙天恩多方撫恤同於再造所有委辦各員皆能仰體皇仁實力急公其總理賑務者則寧夏道今調肅州道鈕廷彩總理賑務兼督渠工老埂者則寧夏府知府臧珊兼辦賑務渠工者則有裁缺新渠水利通判劉效隴西縣縣丞高封試用州同何世寵趙錫毅錢孟揚原任金縣知縣楊駒原任西和縣知縣李壽澎原任全縣知縣劉元藻原任西和縣知縣馬履忠等九人其專辦一事者則有寧夏水利同知費楷等二十一人可否邀恩議叙以示鼓勵等語朕思賑恤災傷原係地方有司及試用人員職分應為之事但上年寧夏等處之災非平時水旱可比應將總理之鈕廷彩臧珊及兼辦賑務渠工之劉效等九人交部分別議叙後不為例其專辦一事之費楷等二十一人不必議叙該部即遵諭行欽此

1367 乾隆四年十二月二十二日軍機大臣奉

上諭據署西寧鎮總兵李如柏奏稱西寧鎮自雍正十三年起至乾隆四年共應存缺贖銀三萬一千五百六十餘兩蓋因辦理軍需以來款項紛繁不能按年銷算是以存貯如許之多營中官兵因而那移動用錢糧率多不清應將缺贖一項不必待至銷算時即為解繳司庫自無那移牽混之弊再查標下生息銀虧欠四十六百餘兩現在勒補者勒補其不能補還者業已揭叅已具稟督臣鄂彌達會商提臣瞻岱俱照覆辦理等語陝甘自軍興以來各提鎮營內錢糧多有不清朕久已聞之據李如柏所奏西寧鎮如此其各該提鎮自應一體查辦以清夙弊可即行文該督提等知之欽此

1368 乾隆四年十二月二十二日內閣奉

上諭翰林院侍讀劉藻著在阿哥書房行走欽此

1369 乾隆四年十二月二十七日奉

旨據提督李繩武奏稱哈密札薩克貝子額敏於十二月初十日病故將額敏遺摺一併具奏等語貝子額敏原係哈密札薩克伯克自軍興以來竭誠誠効力蒙

皇考查沛隆恩加封貝子今聞伊溘逝朕心深為憫惻着行令提督李繩武動支銀一千兩與駐劄哈密辦事之理藩院章京一同前往奠祭茶酒賞給銀兩將此曉諭額敏妻子其如何加恩致祭承襲伊職之處着該部察例具奏欽此 此道係清字音漢

1370 乾隆四年十二月三十日內閣奉

上諭

皇太后以朕數日來微有咳嗽今雖全愈天氣寒冷尚宜避風免朕行禮朕謹遵

懿旨其陞殿行禮之處亦著停止欽此

附錄

(1) 大學士伯臣鄂 等為遵

旨議奏事據廣西巡撫安圖奏稱安南祿平州土

官章福培因諒山夷官勒索錢茶害百姓帶

領官兵民攻破諒山口稱會同七州同殺鄭王等

語又據該國文淵州守關員目阮廷璜等帶領

家眷到關僦居關外夷官貢房之內夷民阮公

廷呈稱鼓噪諒山原為除此賊官汚吏並非謀

為不軌等語又據夷目阮廷璜等呈稱祿平州

兵民已破諒山府城奉國王遙速諸路堵截未

及投報乞發兵急救等語隨經都司等傳諭速

回守土以待伊國王之命臣思該夷目等僦居

關外夷地不便驅逐遂飛咨該國王作速調度

又思祿平州土目既有會同七州共殺鄭王之

流言必係與恭鷲合謀啓釁將來不徒擒殺鄭

姓兼有希圖復位之事該國王恭維禱佑臨時

叩關求救臣即會同總督提鎮調撥官兵前往

鎮南關駐口還為聲援以張

天威一面曉諭投誠免其死罪倘不能解退再為和

機辦理若俟請

旨俞允然後策應緩不及濟等語 該臣等議得

安南祿平州土官兵破諒山府城一案既以除

貪官汚吏為名則屬一時鼓噪之事即所稱會

同七州同殺鄭王等語在鄭姓之順逆尚未顯

著是否叛背國王亦難以懸定封疆大吏值邊

界有事惟應整備預防以資調度俟得確情然

後佈置庶不致失體亦不至誤事今該署撫奏

稱尚安南國王叩關求救臨時請

旨然後策應恐緩不及濟等語是竟欲急援速進殊

不思順逆未知形勢未悉固未可以造次舉事

也且既已往援原為誅叛若復張示招降許免

其罪將來如何歸結此尤事理之必不可行者

臣等愚見此際該撫提等既據夷目稟懇自應

派兵臨邊並極要隘口以固我疆以防內窺如

該國王果具文求救再詢問原委一面作聲援

之勢一面告以奏聞請

旨此往返候

旨之時愈可察其情形得其原委然後徐為料理似

屬妥協至於文淵州員目既來關外自應撫恤

並將該國王官吏如何貪污鄭姓如何專擅之處備細問明先行奏

聞恭候

聖鑒訓示以便遵行臣等愚見如此是否有當奉謹

奏請

旨

乾隆四年十二月初三日奉

旨依議速行摺督馬爾泰著前往廣西省城駐劄辦理此事俟事竣仍回廣東欽此

(2) 臣等看得李錦進

呈經史內請令直省府州縣學確查一員極中極

貧次貧者於濟貧藍額缺賑以外量給以衣

食之資照國子監養士例寬給等語查各

省學租通融散給極貧次貧生員俾需實惠或

遇歉年即於存公項內量給銀米俱經奉有

恩旨欽遵在案若其平時衣食之資直省府州縣學

人數繁多亦豈能偏為著及至國子監之肄業

貢監生徒月給膏火銀兩所以資其旅食又非

各省貧生可比未便援照為例應將所奏毋庸

議又稱各省州縣零星村庄戶口應一併附

編隣近村庄保甲之內不必拘定十家之限等

語查從前原任巡撫俞兆岳條奏力行保甲

將零星居住之戶民一村一庄止數家者亦俱

編設稽查經總理事務處議履行令各省督撫

自行酌量辦理毋滋紛擾等因奉

旨依議欽遵在案李錦所奏應毋庸再議至稱翔望

宣講

聖諭及刊刻刑律科條以曉愚頑俱係久經奉行之事

均亦毋庸置議

乾隆四年十二月初六日奉

旨知道了欽此

(3) 臣等看得王興吾進

呈經史內稱六部司官似宜做周禮之制於每年

封印前後令各部堂官將各官所辦事理之當

否奉職之勤惰分為三等繕摺進

呈三年之內志居優格則入京察一等以備

簡用其三年之內每考志居下等者則於京察時照

而去之等語謹按虞書三載考績黜陟幽明

周禮三歲則大計群吏而誅賞之戒

朝法古為制內外計典三年一次舉行遵循已久

如三年之內辦事司員果有才能堪以擢用者

原准官堂官隨時薦舉有不稱職者察出即行

叅處其材具中平資俸尚淺者則寬之三年以

觀其效而後人材可知職業可考叅之周禮正

治受會之文正所謂師其意不泥其法者也今

若將六部司員每於歲底考察第其等次在該

員之優劣既恐難驟定且所辦事件係一司滿

漢十數員同辦一事其當與否究應屬之何員

亦難以分別况所謂優等下等每年祇繕摺進

呈一次而黜陟之行仍待至三年京察之時或有

不肖官員因滋奔競今年已俱優等未歲並用

營求實恐考覆過煩轉非所以勵官常而靜士

氣王興吾所奏應毋庸議

乾隆四年十二月十一日奉

旨知道了欽此

(4)

臣等看南昌府知府吳同仁一摺 據稱江西

當豐稔之年每穀一石價值不過三錢五六分

不等若隨時採買分貯南昌九江二府既有益

於本地復可備鄰封又湖廣武昌漢陽兩府均

係濱臨水次通衢俱循照積貯等語 查江西

湖廣素稱產米之鄉若於豐年預備穀石積貯

水次通衢俟地方既有益於本地復可接濟隣

省吳同仁所奏此條似屬可行其如何辦理之

處應請抄錄

勅交湖廣督撫江西巡撫酌議具奏但不必為出吳

同仁姓名 又稱江西安徽湖廣等省行使制

錢攬和小錢甚多請嚴加查禁等語 查小錢

原有例禁但江西等省向因大錢缺少是以大

小錢並用今若禁用小錢則大錢不足數民間

之用轉多未便吳同仁所奏應毋庸議

旨依議欽此

乾隆四年十二月十二日奉  
前一條摘發湖廣江西督撫於本月十日行文訖



(5) 大學士伯臣鄂 等謹

奏為請聖悖逆之罪宗以正

天誅以伸

國法事臣等查平郡王公訥親審訊福寧首告弘

哲一案內據弘哲家人安泰供稱弘哲曾令請

神問

國家太平與否

皇上出行與否我隨往與否年歲如何我選陞騰與

否準噶爾反與不反能至京師否

皇上壽算如何等語經平郡王等審定將弘哲革去

宗室照謀叛未行為首者故律宜絞立決等因

具奏欽此奉

上諭弘哲聽信邪說其所詢問妖人之語俱非臣下

所宜出諸口所忍萌諸心者擬以大逆重典以

彰國法洵屬允當但總念朕總念伊係

皇祖聖祖皇帝之孫若革宗室置之重典於心寔有不

忍且伊亦不過昏庸無知之人耳著從寬免其死

罪但不使仍留鄭家庄著拿交內務府總管在景

山東果園永遠圍禁其家產妻子不必交宗人府

另議伊子仍留宗室著來京交與弘曉管束欽此

臣等閱看審案內安泰供詞弘哲信奉邪神所

問諸語寔為大業逆不道其心懷悖亂已屬顯

然臣等閱看之下不勝髮指不獨在

廷大小臣工驚心切齒即凡具有人心者亦無不

深憤恨平郡王等擬以革去宗室按律絞決寔

屬允當我

皇上念切親親於法無可貸之中

特從寬典不即加誅止於禁錮在戒

皇上思同

天地無不包涵但弘哲之別款罪惡已屬難以姑容至

詢問妖人之語不特背負

聖恩寔屬獲罪

宗社即

聖祖在天之靈亦必為之恫恨所當亟正刑章斷難再

加曲宥臣等謹會同九卿滿漢文武大臣合詞

具

奏伏祈

皇上立賜乾斷仍照平郡王等原議將弘哲革去宗

室即行正法以肅

王章以抒公憤為此謹

奏

此稿底編入彙簿

(6) 太保大學士伯臣鄂 謹

奏為遵

旨酌議事太醫院院使錢斗保等奏為欽奉

上諭纂修醫書等因一摺奉

旨著大學士鄂 酌議具奏其一應纂修事宜并

著總管考核欽此臣查修書各館舊例所用纂修

官提調官收掌官及考取勝錄生監以及供事

紙匠俱酌量人數足用多寡不等請

旨遵行在案今蒙

皇上特命纂修醫書以正醫學臣謹詳加酌議所修

醫書不必另行開館即於太醫院衙門內將現

在閑房照例量加修葺儘可充用該醫院官員

到館辦事亦稱近便其纂修官祇需八員總修

官須用二員御醫吳謙劉裕鐸應令充總修官

仍兼纂修外其餘纂修官八員應令太醫院堂

官並吳謙劉裕鐸等將平日真知灼見精通醫

學兼通文理之人保舉選派如不足數再於翰

林院及各部院官員內有通曉醫學者酌量查

派蓋因前代醫書詞義深奧詮解不易而分門

別類考訂成書既欲理明又欲詞達既貴詳晰

尤須貫串此醫理文理分修總修四者缺一不可

不能成完書以垂諸久遠者也再院使錢斗保

院判陳止敬王炳俱有本衙門辦理事件且

內廷差事所關重大難以分任修書之事請將該

館一切應行事務令錢斗保等三員照常經理

其收掌官酌用二員亦令該醫院堂官於所屬

人員內選派再於該醫院効力人等內選取字

畫尚好者以備勝錄如不敷用照例行文圖子

監直隸學政將生監秉公考試務擇字畫端楷

咨送本館以憑選取供事酌用四名紙匠二名

亦照例於內閣取用其在館官員人役月支桌

飯飯工食餼銀兩俱照八旗志書館例支領其

應用桌檯什物紙張筆墨等項照例酌量向各

處咨取至院使錢斗保等奏摺內請將

大內所有醫書發出冊請

勅下直省除書坊現行醫書外有舊醫書無板者新

醫書未刻者並家藏秘書及世傳經驗良方著

地方婉官婉諭購買或暫借抄錄或本人自願

呈獻者俱集送太醫院等語應照所奏查明該

部行文各省督撫轉飭地方官遵照辦理可也

臣未敢擅便謹

奏請

旨

(7) 查各館纂修官給工公費銀八兩五錢收掌官

月給銀四兩五錢膳錄生監月給銀三兩八錢

志書館纂修官月給公費銀六兩收掌官月給

銀三兩五錢膳錄生監月給銀二

乾隆四年十二月十二日奉

旨醫書館與修書各館不同該館纂修等官公費著

照修書各館例減半支給餘依議欽此

(8) 臣等看得一統志內所有口外邊疆形勢及種

種事蹟例用通曉滿漢文之副總裁一員督率

辦理今德齡補授

盛京侍郎其副總裁自缺可否將阿克敦充補謹此

請

旨

(9) 臣等看徐以升進

呈經史內稱奸商大賈知鹽為小民所必需故高

其值以邀厚利宜令所司驗其貨物之高下量

其道路之遠近險易而酌定其價等語查各

省鹽價時有貴賤益因場灶產鹽多寡不一運

到口岸先後不齊是以歷來鹽法俱照時價銷

售具有任意昂貴及攪雜砂石等弊則官為稽

查嚴禁現在各省內如果有鹽價太昂病民之

處該督撫身任地方自應陳奏辦理從前湖督

楊宗仁平減鹽價行之太驟遂滋紛擾蒙

世宗憲皇帝特遣大臣前往湖廣會同辦理始得寧貼

此時未聞有鹽價甚貴之省分不便畫一平價

以致滋事所奏應毋庸議

(10)

甘肅提督瞻岱一摺 據稱甘省備戰官兵屆  
議內開遇有調遣官負借給二年俸銀馬兵借  
給銀十兩步兵借給銀六兩俟回兵之日於俸  
餉內陸續扣還臣於本年經辦換防哈密官兵  
照上次之例官員借給一年俸銀馬兵借給銀  
六兩步兵借給銀四兩統於回汛之後分作二  
年扣還至臣上年在直隸提督任內經辦直隸  
山西官兵前往北路軍營換防俱照例官弁賞  
給二年俸滿銀馬兵每名賞給整裝銀二十六  
兩步兵每名賞給整裝銀二十四兩每兵九名  
給跟役一名每名賞皮服銀二兩以上兩省換  
防官兵俱臣經手辦理而兵丁賞給銀兩苦樂  
大相懸殊伏思直隸甘肅綠旗官兵皆我

皇上士卒而遠駐邊防均同艱苦仰懇

天恩准將陝甘備戰官兵遇有調撥照直隸山西  
之例官負自副將以下至于把總每員賞給二  
年俸銀馬兵每兵賞給整裝銀十五兩步兵每名  
賞給整裝銀十二兩其駐防換班官兵每員賞  
給一年俸銀馬兵每名賞給整裝銀十二兩出

兵每名賞給整裝銀十兩跟役一項俱照直隸  
之例每兵九名給跟役一名每名賞給皮木銀  
二兩其鹽菜口糧照例支給等語奉  
硃批軍機大臣等詳議具奏欽此 臣等查派換非  
路四省官兵於雍正十二年七月內欽奉

上諭所有一應米裝等項令各該省於存公銀兩內重  
支應用務須預備齊全欽此欽遵各該督撫請照雍

正七年

恩賞車兵之例守備以上等員官賞給二年俸銀千把  
等員賞給二年俸薪兵丁每名賞銀十兩又製  
備銀裝銀六兩每兵九名合跟役一名賞給製  
辦皮服銀二兩俱於存公項內動支等因經該  
部覆准在案又於雍正十三年二月內原任直隸  
李衛等請將四省換班步兵照雍正七年

恩例每兵二十六兩之內量減二兩經該部覆准亦在  
案至西路備戰官兵於雍正十三年十二月內  
查即阿等議於調遣之日領兵官弁各借給二  
年俸銀馬兵借給銀十兩步兵借給銀六兩俟  
回兵之日於俸餉內陸續扣還等因經總理事

務處覆准在案其派換哈密赤金等處防兵于  
雍正十三年十一月內查即阿等酌議官員借  
給一年俸銀馬兵借給銀六兩步兵四兩俟回  
汛之後分作兩年扣還等因經總理事務處覆  
准在案節年西北兩路派換官兵俱係照前例  
辦理查北路出張家口外皆係野地道路遼遠  
濶從前欽奉

恩旨兵丁每兵賞給銀二十兩原屬格外

加惠體恤至整裝一項馬步兵亦係六兩四兩之數

路官兵俱由本省調撥派換是以從前酌定數

目借給今瞻岱奏請分別加增未便據議准行

但官兵人等遠役勞苦其所借銀兩復於回營

之日在俸餉內坐扣該弁兵回汛差操以及養

贍家口等費未免艱難查北路派防官兵俱係

賞給俸餉臣等議可否將西備戰官兵遇有調

遣官兵應借給之二年俸銀馬兵之應借給銀

十兩步兵之應借給銀六兩派換駐防官兵應

借給之一年俸銀馬兵之應借給銀六兩步兵

之應借給銀四兩俱照北路四省官兵之例子

派撥時即行照數賞給免其于回汛之後坐扣

則西北兩路官兵丁俱一體沾戴

皇恩于無既矣再跟役一項平時藉以供役遇有兵

丁廢疾事故即可挑選補額以免臨期招募實

于行伍有益應如所奏嗣後西路換防及備戰

兵遇有調撥俱照四省官兵之例每兵九名合

給跟役一名每名賞給皮服銀二兩其鹽菜口

糧按例支給如蒙

俞允臣等另擬

上諭進

呈恭候

頒發謹

奏謹請

旨

(11) 臣等看張鵬紳進

呈經史內稱月朔視朝宜酌為定制令翰詹科道

分班遞進俾各得從容獻納又元旦大廟朝錫

燕歌鹿鳴四詩其勤奏雖不可考第令工歌倡

歎使在廷臣工咸喻視民不怵示我周行之至

意直省政績宜亟加振刷以圖日新之功月吉

始和之布尤於歲首月朔為重等語 謹按禮經人君日聽政於治朝魯文公頻月不出故書公四不視朝漢唐以來或間日或三日五日始

一臨朝視事我

皇上勵精圖治每日省覽章奏

召見大臣引

見庶官又於一月中屢次

御門聽政又

命翰詹科道諸臣分班進呈經史常蒙

召見詢問較之月朔視朝精勤不啻數倍亦何待專

定月朔之制沿襲虛文且謂百姓官庶事皆得

以此課其勤惰而策勵之尤屬膚論古者天子

有燕禮或諸侯來朝或王朝無事而與群臣燕

然後升歌鹿鳴之三間歌魚麗之三未聞正月

朔日燕羣臣而作樂之禮也且不知古詩合樂

之音節豈可第令工歌意為倡嘆乎周時王畿

千里凡治教政刑王朝所更易者列國無由

知也或因一國之事而有更易他國無由知也

故于正月吉日和而布之頌其法于邦國都鄙

使遠方之吏民皆聞之懸其法于象魏使國中六卿之吏民皆見之今萬事皆由直省達六部下廷議其有更易得

旨即頒督撫通行于郡縣矣乃拘泥古義而也歲首

月朔為重殊無所謂所奏均應毋庸置議

(12)

查雍正五年遵化府地方令舖戶承辦九鳳山應用沙城磚七十萬塊沙滾子磚五十萬塊尺

七方磚七百五十塊雍正八年八月內經辦理

太平峪事務處奏請將前項磚塊收貯以備石門

工部歲修應用等因奏明在案嗣經工部劄令

石門工部官員當同承辦舖戶將磚塊逐一盤

查如有破損短少之處即行報部以憑著落賠

補其磚塊仍交舖戶照常看守備用後因該舖

戶承辦

大平峪工程不能分身前往盤查復經工部屢次

行催但據石門工部官員兩次報有查等數目

俱係丈量堆垛並非實在確數且前後所報數

目彼此互異是以本年十一月內工部復差派

郎中色墨立主事西安前往該處會同石門工

部官員將堆貯磚塊逐細盤查據報除各工用過沙城磚五十六萬六千二百二十三塊外現存沙城磚七千八百塊被損沙城磚二百十二方五分折整磚十一萬八千四十塊實少沙城磚一萬四千二百五十塊現存子磚二十一萬四千三百五十餘塊破損沙滾子磚二十三方二分五釐折整磚五萬四千九百六十餘萬塊實少沙滾子磚二十二萬七百餘塊現存尺七方磚六百八十塊破損方磚七十塊今工部議奏除現在整磚及有方可折之破損磚塊按方折算准銷外其短少之數著落原辦鋪戶賠補等語

臣查此項磚塊前經工部奏准交石門工部官查核以備歲修之用經工部屢次傳令該鋪戶前往面同查交因該鋪戶承辦工程不能分身前往是以此項磚塊至今仍係鋪戶看守並未交官所有短少磚塊自應鋪戶賠補據工部議稱碎磚磚塊俱係堆積年久將有方可接者按方折算等語查整磚碎磚價值懸殊其碎磚如有應用之處自當照碎磚價值計方抵銷如無應用碎磚之處即應令鋪戶另行燒造賠補

旨查奏

或於該鋪戶應領錢糧內扣除方為妥協謹將工部辦理此案情由通

(13)

喀爾吉善等請添宗學教習一摺 據稱兩翼宗學現經宗人府王公挑選取定准其入學肄業者連前共計二百餘人所有滿漢教習十四員雖勉勉訓練難免顧此失彼臣等酌議每有學生五十名以上即呈報宗人府轉行禮部咨取教習一員其有未滿十名者即均派在各教習名下毋庸另議咨取等通計在學生徒名數除按十名以上分撥現在之教習十四員管教外所有尚須添設之滿漢教習並嗣後有須添設之處悉行遵照辦理再查宗室學生五年大考一次除照例遵請

旨考試外臣等再嚴核學生功課學業果有進益者照常留學訓課其五年之內學業未知增長臣等告知宗人府王公驗看令其出學庶成材者益加鼓勵其未能成材者知自奮勉等語 查兩翼宗學從前生徒人數無多是以設立教習

十四員已敷足數用令喀爾吉善等奏稱宗學生徒現有二百餘人而教習僅十四員未免難於訓課應如所請通計宗室在學生徒按十名派設教習一員以專責成其未滿十名者即均派在各教習名下訓課毋庸另議添設除現在之教習十四員外尚須添設滿漢教習應令宗人府移咨禮部按數增添並嗣後有應添設之處亦應如所奏遵照辦理至所稱宗學五年大考一次其學業果有進益者照常留學如五年之內學業不加增長者令其出學亦應如所奏分別去留以示鼓勵可也謹

奏伏候

諭旨

乾隆四年十二月十二日奉

旨依議欽此

(14)

臣等看知府李暉條奏摺內如酌定禮制規則立法裁減僧道及纂修賢良昭忠諸臣事寔三條俱係已行之事無庸置議至積貯勸輸之法應雍正二年已定有通加獎賞及奏給八品項帶

之例捐納職銜久奉停止未便復開其端清釐田戶冊籍即係本年江安兩省查核貧富戶口分別蠲免之法然孫加塗即不能行之于其真直隸曾將緣由奏明至各州縣佐貳教諭訓導皆有定制豈可遽議添至數千員之多各府州縣原有義學未便于各州府照省會建立書院廩膳生視州縣大小定額故多寡不同豈能均平編額復資其家口之養聽博學鴻詞科係

國家曠典殊難著為定制舉行佐雜等員各省銓選人數及缺數多少至為不齊斷不能派定附近省分銓用又科歲試分正續案及增修州縣規條皆屬煩碎無益此十條其言似覺近理其勢俱屬難行且多糜費錢糧於無益之地益地方隅之見殊于各省情形未能周悉至嚴禁種煙及孤貧額數宜畫一均平又抵補虧空之墓田祠屋准繳價給還並回贖等三條尚屬可行但應各該督撫隨時隨地酌量辦理難以特頒

諭旨應亦毋庸議

乾隆四年十二月二十五日奉

旨知道了欽此



(15) 大學士伯臣鄂 等謹

奏為遵

旨議奏事西提督譚行義奏報安南國內興兵情形

等因一摺奉

硃批軍機大臣等議奏欽此 臣等查譚行義奏稱

恭薦帶兵駐劄三奇地方祿平州土官韋福瑄

攻破夷地諒山府夷目阮廷瑾等避難到關呈

請救兵夷民又呈訴諒山夷目貪酷激變等情

即與巡撫安圖所奏俱屬相同查安圖前奏經

臣等議覆比際該撫提等既據夷目稟懇自應

派兵臨邊並極要隘口以固我疆以防內窺如

該國王果具文求救再詢明原委一面作聲援

之勢一面告以秦聞請

旨此往返請

旨之時愈可察其情形得原委然後徐為料理至

於文淵州員目既來關外自應撫恤等因具奏

奉

旨依議速行總督馬爾泰著前往廣西省城駐劄辦

理此事俟事竣仍回廣東欽此遵隨即行知該督

撫等在案今譚行義奏稱夷目阮廷瑾等具呈  
求救並非國王印文理應緩拒竊思該國王  
即有文求救尚須斟酌情形奏請

諭旨定奪現在操演兵馬以備緩急并檄飭沿邊將

士嚴謹閩隘不可使夷匪窺入內地並理諭近

閩之夷目夷民立等止許在波國界內暫行安

靜居住等語據行譚行義已于十月二十二日

接奉嚴整疆宇以徐觀其動靜之

諭旨欽遵辦理俱與臣等前議相符現在督臣馬爾

泰奉

旨移駐廣西省城一應機宜應令該督提就近商酌

料理隨時奏

聞至稱嗣後夷目夷民投遞文詞不妨接受轉報請

示一以釋遠夷疑畏之心一以通彼國近日確

實信息又安南諒山府被韋福瑄攻破向在彼

地貿易之廣東廣西內地民人紛紛結伴攜帶

眷口行李陸續俱入內地稱回原籍臣一面飛

飭各隘口如有此等民人進口必須會同地方

官確訊實係某省某府州縣民人加謹獲押遣

回籍安插倘係安南失氏即刻諭阻出口不得聽其潛入內地等語俱應如所奏令會同該督撫商酌嚴謹辦理可也伏候

諭旨

(16)

西廣總督馬爾泰一摺 據稱安南國內與兵情形已據撫臣安圖移咨詢問該國王僕彼覆到如果已安輯無事自應將逃來官目押回該國聽其發落倘餘孽未降該國王呈請救援臣商同提臣譚行義酌派官兵先聲致討分別招安等語 查逃撫安圖前奏經臣等議以該國王果具文求救再詢明原委一向作聲援之勢一面咨以奏聞請

旨此往返候

旨之時愈可察其情形得原委然後徐為料理似屬妥協至于文淵州員目既來閩外自應撫恤

等因具

奏于十二月初三日奉

旨林議速行總督馬爾泰著前往廣西省城駐劄辦

理此事俟事竣仍回廣東欽此續又據提督譚行

義奏到辦理情節與臣等前議相符經臣等議

以馬爾泰奉

旨移駐廣西省城一應機宜應令該提就近商酌料

理隨時奏

聞等因奉

旨依議欽此俱經行文知照在案今馬爾泰奏摺

係十一月二十六日具奏尚未奉到

諭旨其安南一切事宜應令該督遵照前議會同撫

臣提臣妥酌辦理無庸再議至稱該國如已安

輯應將逃來官目押回該國聽其發落等語查

前經譚行義奏稱據夷目夷氏等訴稱小的等

並不敢背國王之恩棄官脫逃奈因祿平州勢

重人多務求寬恩暫住待兵退即便回去今只

在首房躲避再不敢擅出禁地等語已據譚行

義諭令伊等祇許在彼國界內暫行安靜居住

是伊等寔因逃難來近圍口暫住並未擅入內

地如該國安輯無事伊等自應各回本處馬爾

泰所奏押回該國聽其發落之處似不必如此

辦理謹

奏伏候

諭旨

乾隆四年十二月二十九日奉

旨依議速行欽此

(17) 大學士伯臣鄂 等謹

奏為遵

旨議奏事據湖廣提督班第等會商辦理苗地情形

等因一摺奉

硃批軍機大臣等議奏欽此 查鳳永所屬苗寨此

次派撥官兵原為壓伏該寨擒治克犯今該督

等會同商定張示勸獻調兵備勦循序辦理各

情形俱與臣等原議相符今入據班第奏稱龍

三保已經投到等語其餘克犯自應逐一令其

擒獻不可因係附案之亨遂爾輕縱如各犯既

獲並無抗匪黨患等情即可審理完結不必調

集別標兵丁應令該督撫等加意酌量辦理至

稱此番軍鎮永協之兵名雖遊巡實係出師仰

懇

聖恩每名每日賞給食米一升已酌撥正項銀兩以

為催夫運送軍糧軍裝賞犒之用如將來仍調

別標之兵會數其夫船口糧鹽菜等項所用銀

兩一體造入軍需冊內報銷如不須調別標之

兵即可竣事止將軍鎮永協之兵一千二百

名之口糧各項核實題銷等語應照所請現在

已撥之軍鎮永協兵一千二百名每日每名

應給食米一升其催夫運送軍糧軍裝及賞犒

之用俱令於事竣日核實確數於正項銀兩內

題銷其別標之名或將來仍有調用之處應帶

之夫船口糧鹽菜等項所用銀兩俱應准其一

體核實造冊題銷可也伏候

諭旨

乾隆四年十二月二十九日奉

旨依議速行欽此

1371 乾隆五年正月初三日內閣奉

上諭海保狂縱貪婪一案前曾降旨命王札爾安寧同該撫張渠審理今總督郝玉麟已經到任著會同王札爾等確審定擬此案原係張渠奏張渠不必會審該部可即行文該督等知之欽此

1372 乾隆五年正月初五日內閣奉

上諭本月初九日為上辛祈穀之期朕已降旨親詣行禮但數日以來天氣嚴寒朕躬咳嗽初愈覺尚畏風

郊壇典禮重大誠恐勉強從事不足以展誠敬著和親王宏晝恭代行禮欽此

1373 乾隆五年正月初五日內閣奉

上諭上年兩江地方均有被災歉收之州縣其江蘇所屬如安東邳州宿遷睢寧等處除秋冬散賑安插外又分別輕重加賑四個月兩個月一個月不等可以接濟至今年三月矣其安徽所屬宿州靈璧虹縣泗州阜陽潁上亳州蒙城等八州縣被災較重已經護撫印布政使晏斯盛題請將極貧次

貧二等饑民於正賑之外加賑三月一個月朕思

此八州縣被災既重其又次貧民亦須照下江之例加賑一個月庶不至於失所朕又聞廬江鳳陽懷遠臨淮盱眙五河太和七縣及鳳陽泗州長淮三衛被災稍輕但值連歲歉收之後民食未免艱窘今當青黃不接之時應將極貧次貧之民加賑三月一個月以資其力昨又聞宣城銅陵巢縣鳳臺含山五縣宣州一衛雖勘不成災而收成亦薄懷寧桐城二縣均有水旱缺米之村莊俱在朕心軫念之中其如何發穀平糶及確查貧民分別賑恤之處著該督撫即速辦理毋得稽遲該部可即行文前去欽此

1374 乾隆五年正月初十日內閣奉

上諭甘省所屬肅州涼州二鎮甚為緊要署西寧鎮總總兵官李如栢著調署肅州鎮總兵印務其西寧鎮印務於周起鳳未到之前著該督在副將內揀選委署楊琮年老不勝涼州鎮之任延綏總兵官王廷極著調補涼州鎮總兵官楊琮著調補延綏鎮總兵官副將李述泌著回原任欽此

1375

大學士伯鄂 張 大學士徐 字寄

雲南總督張  
雲南總督張  
浙江巡撫盧

乾隆五年正月十二日奉

上諭浙江巡撫盧焯請動庫銀十萬兩前赴滇省採買銅餉運浙鼓鑄該部議以所買銅餉與運京銅鉛有無阻碍應令盧焯會同慶復張允隨妥議具題到日再議朕已降旨依議速行但思浙省錢價昂貴必因錢文缺少民間需用孔急是以盧焯有赴滇買銅之請若事屬可行著慶復張允隨盧焯等一面即行辦理一面奏聞俾得早資鼓鑄以利民用不必俟具題交議多稽時日也爾等可寄信與該督撫知之欽此遵

旨寄信前來

1376

乾隆五年正月二十日內閣奉

上諭山東布政使員缺著西安按察使魏定國補授  
西安按察使員缺著倫達禮補授欽此

1377

乾隆五年正月二十日內閣奉

上諭河州總兵官張存孝年力衰老不勝總兵官之

任著原品休致其河州總兵官員缺著署潼關副將焦景璇署理欽此

1378

乾隆五年正月二十日內閣奉

旨依議湖州府知府員缺甚屬緊要著詢問巡撫盧焯若寧波府同知梁永福可以勝任即將梁永福補授若不勝湖州之任著於現任知府內揀選一員調補其所遺員缺即將梁永福補授欽此

1379

乾隆五年正月二十日內閣奉

上諭今日御史朱績焯條奏三摺第一摺內稱人君之務但當精選賢能任以要職則處躬不勞而收效甚大其餘煩碎之事不足留意伏願皇上寡欲以養身握要以圖政謹持大綱保愛精神等語朱績焯此奏大約見朕舊臘微感風寒偶爾遠和遂以為煩勞所致殊不知寒暑中人衆時時有舊臘新春因冒寒而咳嗽者甚多不獨朕躬為然豈帝王之身便不容小有寒暑之不適耶一有違和即謂由於煩勞嗜欲此亦狂愚之見耳况新正以來朕恭侍

皇太后筵宴並賜宴諸王大臣及外藩王公等皆歷來

應行之典禮豈可一概停止至於節一身之勞遂將國家政務不事躬親尚執要之名而開叢脞之漸則錯繆已甚第二摺內稱近日羣工大概優柔暇豫之意多而震動奮發之意少其勤者亦密於小節而疎於大體此乃人情疲玩之幾政令怠弛之漸等語此數言頗中時弊不獨朱績暉言之朕亦早見及此內而九卿外而督撫俱當時時愷惕各矢忠淳以盡職業務為根本遠大之圖毋徒從事於簿書案牘貽小臣之指摘是我君臣所當共勉者古云王道無近功雖為治有本然亦推行有漸轉移風氣實非一朝一夕所能旋至而立效也朱績暉以為效法漢之文帝唐之太宗不若效法唐虞三代法漢唐而不至則去之愈遠弊端叢生法三代而不至猶無一偏之弊可享中和之福朕再四思維以今日風氣言之不但不能遠追三代即文帝太宗亦豈易幾企亦惟有以實心行實政不期近功不圖遠治徐以俟之或可漸臻上理若浮慕虛名有意規仿則效法漢唐高屬虛假而況於唐虞三代乎第三摺內奏稱督撫舉劾不能弊絕風清舉循良而循良不盡舉劾貪昧而貪昧不盡劾又其狡者循良本不必舉而舉之中必間以

循良以塞人口貪昧本不必劾而劾之中必間以貪昧以厭人心等語夫舉劾不當亦有有心無心之別為督撫者所轄通省屬員甚多或識見不到或訪察不周致有錯悞尚屬無心之過至於徇情受賄顛倒是非則事出有心罪不可貸近日督撫中尚未必有其人朱績暉既為此奏想伊必有實據此處甚有關係著朱績暉逐一舉出據實具奏再朱績暉三摺內既云不貴煩勞又云乘時振作是伊前後立言自相矛盾朕將何適之從耶將伊三奏一併抄發俾內外臣工共知之欽此

1380 乾隆五年正月二十二日內閣奉

上諭雍正三年定例湖廣地方每年派往巡察御史一員專司稽察盜賊巡視驛站烟墩操閱民壯等事嗣因盜賊減少於雍正十二年奉

旨停止朕看得湖北襟江帶漢素稱四達之區且幅員遼闊藪澤瀾漫盜賊易於藏匿近日河南盜賊繁多衆論頗以為隣近楚省之故朕思此時若專遣御史巡察恐地方又添供應之煩該省原設有守道巡道三員平時有督緝之責事發有處分之條

應於每年冬月各出巡一次輕裝減從過歷所轄州縣稽查保甲操閱民壯即順便驗視烟墩點查汛兵如有疎懈即移知營員照例究治至於驛站夫馬原係驛道職掌亦應每年巡查一次如有馬匹瘦瘦排夫缺額以及騷擾驛站濫應夫馬等弊即行詳揭請叅以肅郵政該督撫可遵旨酌派施行著為定例欽此

1381 乾隆五年正月二十三日內閣戶部奉

上諭國家一應賦稅無論正雜羨餘凡徵之官府者均係出之閭閻而究其實乃以天下之物力供天下官弁兵民之用為上者不過為之權衡調劑於其間若經理其事者稍有纖毫假借則大不可也前此各省臣工不能砥礪廉隅取之民者既極煩苛而侵於官者又多虧空計其職私動逾累萬以致以身罹法網貽害妻孥仰蒙

皇考世宗憲皇帝聖慈矜憫提撕警覺剔釐肅清所有  
一切陋規悉行裁禁以紓民困俯允直省督撫所  
請將舊有耗羨一項酌定額數用資各官薪水及  
地方辦公之需名雖提解耗銀而較之從前私派

私扳固已輕減數倍矣自奉行之後官員無拮据之憂百姓免需索之累吏治民生稱為兩便此實中外所共知共見者朕御極之初曾降諭旨飭令督撫毋得重耗浮徵致因閭里凡賦多稅重之地屢加寬減民捐官墊之項悉動存公乾隆三年又將解部減半平餘一項扣存司庫以備荒歉應用蓋因各省公用甚繁而耗羨無多惟恐入不敷出是以不惜部庫之盈餘留備地方之不足各省督撫藩司皆當加意慎重不時查核減官吏一分之浮費即留百姓一分之實惠此理顯然可見乃比年以來或無關緊要之事遽行動用即例應支給之項亦有浮開部駁核減時見章疏其扣存備賑平餘銀兩各省有已經報部者亦有未經報部者遇有應辦賑務仍多臨時請撥由此類推則司庫所存公項未必盡歸實用雍正十三年六月內曾奉

皇考諭旨將各省耗羨存公銀兩勅令清查原屬防微杜漸之至意朕嗣位之初念耗羨不同正項從前原未定有章程且歷年已久各省規條不一官員更換亦多况復恩詔屢頒縱有那大亦當在寬免之列是以諭令暫行停止清查今看各省情形漸

滋冒濫若不早加整頓立法防閑必致那移出納  
弊實叢生一經敗露國法難寬擬之朕愛養敦誨  
之心固有不忍即經辦各員噬臍知悔已屬難追  
是及今綜核清理亦預為保全之道也戶部可行  
文各省督撫將地方必需公費分晰款項立定章  
程報部核明彙奏存案嗣後務將一年之內額徵  
公費完欠雜支同餘剩未給各數目逐一歸款各  
官養廉照依正署起止月日應將分數並扣除空  
缺詳悉登記其收數內有拖欠未完者分別應否  
著追其支數內有透動加增者分別是否應給有  
無那移虧缺之數俱於歲底將一切動存完欠確  
數及扣貯減半平餘銀兩造冊咨送戶部核銷如  
此年清年款則民力輸將均歸地方實用而經理  
之員亦免罹於泰處矣欽此

1382

乾隆五年正月二十四日內閣奉

旨原任浙江金華府知府馬日炳著該部帶領引見  
欽此

1383

乾隆五年正月二十五日內閣奉

上諭前日御史朱績暉奏稱督撫舉劾不能弊絕風  
清所舉不盡循良所劾不盡貪昧又其狡者循良  
本不必舉而舉之中必間以循良以塞人口貪昧  
本不必劾而劾之中必間以貪昧以厭人心等語  
朕以此處甚有關係想伊必有實據令其逐一舉  
舉出指實具奏今朱績暉奏稱安慶府知府郭朝  
端衛永郴道許登瀛皆大計卓異之員而又以貪  
婪被劾灤州朱煌保題方及數月而以貪革靜海  
令劉浩基保題甫經一載又以貪革等語朱績暉  
之意即以此為督撫舉劾不公之明証耶殊不知  
居官之人初終改操前後易轍者往往不免書云  
惟聖罔念作狂惟狂克念作聖固未可以一時之  
操履而遂定其生平也是以各省督撫考察屬員  
有先舉而後劾者又有前後督撫此舉而彼劾者  
若謂一舉之後不可復劾其勢必至於回護本身  
瞻顧他人置公道於不問豈非蕩天下以徇情怙  
過之大弊乎其所見甚屬鄙陋朱績暉又稱風聞  
現審未結事件內如王德純一案有與督撫關涉  
之處雖風聞未可遽以為實而有心與無心有不



敢遽信者又稱臣所愧者學識鄙淺言辭拙滯徒抱獻納之志無能効一得之愚等語朱續悼前日條奏其中或是或非朕皆一一指示至稱督撫舉劾不公所關綦重豈可徒託空言而不究其實事是以令其明白陳奏此正諄切求言之意伊乃奏稱徒抱獻納之志無能効一得之愚竟似朕不採納其言者朕深鑿拒諫之非是以即位以來虛懷納善研求治理惟恐涉於偏倚之心人所共知自有公論豈因朱續經一人巧語微詞欲自盜忠直之名而天下臣民遂疑朕為不受諫之主乎朕若因是而將彼文部議廢未為不可但朕聽此等狂替之言實不介意而巧詐譏刺者亦不可不明白指出以示人耳至王德純一案據伊所奏頗有闕係著伊即馳驛前往福建會同督撫詳確審明具奏如能審出實情則伊為行願其言之人矣欽此

1384

大學士張 徐 尚書公訥 字寄

湖廣總督 湖南巡撫 馮 乾隆五年正月二十五日奉

上諭鎮守總兵官楊國華來京陛見朕着其人才具平常問以鎮守事情亦不甚明曉恐未必勝鎮守要缺之任可寄信詢問班第馮光裕令其將伊居

官辦事如何之處據實陳奏欽此遵

旨寄信前來

1385

尚書公訥 字寄 副都統王 蘇州織造女

乾隆五年正月二十九日奉

上諭王扎爾安寧審理海保一案甚屬遲緩寬宥著

即速寄信伊等知之欽此遵

旨寄信前來

附錄

(1) 臣查署西寧鎮總兵李如柏辦事勇往今周起

鳳自歲撤回已將次抵鎮若將李如柏調署肅

州鎮似可勝任再延綏鎮總兵官王廷極稍有

才幹堪以調補涼州鎮其延綏鎮總兵駐劄榆

林雖亦係沿邊要地然較之涼州尚易供職可

以將楊瑛調補謹擬

上諭進呈伏候

聖訓

(2) 查焦景璠係延安營叅將署理潼關印務尚未實授副將是以

上諭內臣等擬寫署理字樣

(3) 崔紀請令道員巡察一事謹遵旨擬寫

上諭進呈臣等省得各省規制不同地方情形亦不一崔紀既為此請應先試行於湖北一省若行之有益他省可以仿行者該督撫自然陸續奏請此時似可不必通行伏候

聖訓

(4) 臣等看辰州府知府永泰摺內奏稱沅陵縣比接壤之瀘溪縣每畝科糧獨重一條查各省州縣徵糧科則原不畫一其有偏重至數倍者俱已屢蒙

特降恩旨豁免今據秦沅陵比瀘溪每畝祇多糧一升五合各處似此稍輕稍重者甚多難以驟行比照減免所奏應毋庸議又奏稱澧州等屬驛站運送軍需追繳夫價一條查從前運送解

點軍需所過驛遞夫少之處將公項添催民夫經該撫於軍需案內報銷部議未准今據奏此項銀兩俱於各驛丞名下追繳自四五百兩至千兩不等查各驛夫價如實係運送軍需叅催民夫之用並無浮冒今乃着落徵員賠補情屬可憫且恐於錢糧亦終屬無著似應令該督撫查核辦理如蒙

俞允臣等將此條摘錄寄信該督撫不必寫出永泰

名姓謹

奏

乾隆五年正月二十七日奉

旨是欽此

1386 乾隆五年二月初一日內閣奉

上諭據河南巡撫雅爾圖奏稱豫省盜賊繁多蒞任以來遵旨訪拿不惜重賞以獎勤勞並立嚴罰以懲積玩現獲裕州卦子賊劉子成等男婦多人又拿獲山東桃源鎮積盜田小猪子郭二狗販子等俱係歷來行劫害民之大盜又梁朝鳳案內逸犯孫牛兒等及邪教案內玉蘭老母郝成兒等亦已就擒現在飭審等語雅爾圖到任未及兩月即將豫省積盜多人設法捕緝不使漏網具見經理有方實心任事從前尹會一之因循玩愒於此益見雅爾圖著交部議叙以示嘉獎欽此

1387 乾隆五年二月初二日內閣奉

上諭朕覽河南巡撫雅爾圖整理營伍事宜各條具見實心任事若豫省總兵官等皆能實力奉行自於營伍有益可於韓應魁丁士傑奏事之便抄錄寄去並將朕旨傳諭知之欽此

1388 乾隆五年二月初二日內閣奉

上諭聞陝西榆林府知府高紱居官平常不勝沿邊要缺之任著將乾州知州王以觀調署榆林府知府事即令高紱署理乾州知州事此二員俱交與該督撫留心試看俟一二年後將居官如何之處據實奏聞欽此

1389 大學士伯鄂 張 尚書公訥 字寄 山東

巡撫碩 乾隆五年二月初五日奉

上諭朕聞得近來山東一路往來行旅之人多有被饑民搶竊行囊貨物者一報到官該州縣即將一起行人盡數拘留聽候追比其人驟車脚價及眾人飯食日費不少算來得不償失况追比未必得贖以致道路相傳遇有失脫吞聲竟過此皆州縣料理不善商旅甚以為苦等語此朕得之訪聞者可寄信與碩色令其留心體察申飭各州縣嚴行禁約並善為料理以靖盜竊以安行人毋得疎忽

欽此遵

旨寄信前來

1390 乾隆五年二月初六日內閣奉

上諭據湖廣總督班第奏稱岳常道倉德之父覺和圖年老多病該道係獨子不能親自奉養朝夕難以自安詳請據情代奏仰懇聖恩准令其父隨任奉養并請令伊子傅肅隨伊父至署兼可隨任助理等語即照該督所請令其前赴任所就養倉德之子傅肅著該旗查明與隨任之例相符亦令一同前往欽此

1391 乾隆五年二月初六日內閣奉

上諭鎮守總兵官楊國華來京陛見朕看其才識平常且疾疾尚未全愈不勝苗疆要缺之任著解任調理暫留楚侯病愈之後該督酌量以相當之缺請旨補用其鎮守總兵官缺著永綏協副將劉策名補授欽此

1392 乾隆五年二月初七日內閣奉

上諭隆昇在福州將軍任內劣蹟種種著解任差副都統策楞馳驛前往省同總督德沛將奏摺內各款及有名人犯逐一嚴審定擬具奏其已經回京

之筆帖式滿什圖亦著帶往聽審福州將軍印務即著策楞署理其關務亦著策楞兼管隆昇賍蹟甚多此旨到日著德沛將伊嚴行看守並查收其檔案貨財毋使藏匿寄頓欽此  
二月二十七日補發衙門

1393 乾隆五年二月初十日內閣奉

上諭寧夏將軍員缺甚屬緊要著都統杜賚補授欽此

1394 乾隆五年二月十一日內閣奉

上諭據河南河北鎮總兵官丁士傑奏稱到任後考驗各兵馬步弓箭技藝多屬生疎疲軟蓋由各營中有從前出師一等兵丁四十名若遇把總外委缺出例應將伊等拔補但伊等本係車騎營步兵弓馬非其所長漢仗不皆雄偉今將伊等儘數補用則衆兵志無冀望未免怠惰自甘不知奮勉嗣後凡有把總外委等缺應請於各營兵丁內挑選漢仗技藝以及馬步俱優者與出師一等兵丁參酌補用庶幾人知策勵等語丁士傑此奏甚是夫

出師兵丁効力疆場者固宜加以恩澤而營伍中技勇出群之人亦不可久令淹滯阻其上進之路查河南直隸山東山西等省俱有車騎營一等兵丁陝西兵丁亦有出征列為優等遇缺先補之例嗣後遇有把總及外委缺出如何酌量揀選補用兩無偏枯之處著該部妥議具奏欽此

1395 乾隆五年二月十二日內閣奉

上諭魏廷珍凡事推諉不肯實心供職因循懈怠始終一致有負簡用之恩已降旨將伊革職朕恭閱皇祖實錄載有諭旨云九卿會議時但一二人發言衆俱唯唯其漢大臣則必有涉於彼之事方有所言若不涉於彼之事即默無一語尤可異者前人畫題後人亦依樣畫題不計事之是非但云自有公論甚至有畫題已畢始問為何事者如此寧不愧於舉國之清議此

皇祖當日申飭之

諭旨也

皇考御極十三年時加訓誠力為整頓此風已經悔改乃觀近日情形漸有復蹈前轍之意如朕所簡用

之大臣內楊起曾陳德華田懋未為習氣所染至於任蘭枝吳應茶凌如煥革俱非不能辦事之人而徒事模稜依違而可此等陋習若不知儆惕改悔或反以為得計則廢弛之漸又將從此而開所關非細從來有實心者斯有實政既無實心自無實力既無實力安望其有實政故因處分魏廷珍特行曉諭九卿等嗣後務矢惻怍毋蹈魏廷珍故轍朕實有厚望焉欽此

1396 乾隆五年二月十三日內閣奉

上諭據鄂彌達元展成奏稱寧夏府西路同知員缺係沿邊孔道有分防之責並監督渠道管理驛務必得諳練幹員熟悉水利者方能勝任查有以同知銜管柳林湖北田通判事傅樹崇勤練老成克稱斯職至所遺通判一缺地方廣濶帖近邊外每年查看渠工興脩水利若非勤幹之員亦難勝任查有西寧縣知縣沈予績在甘年久練悉邊情且勇往任事勤勞素著若以陞補柳林湖通判於地方有益等語著照鄂彌達元展成所請將傅樹崇補授寧夏府西路同知沈予績補授柳林湖通判

其西寧縣亦係要缺著該督撫揀選調補欽此

1397 乾隆五年二月十四日內閣奉

上諭朕聞裏塘土司二員每年所得養廉不能敷用生計未免艱窘查裏塘地方徵收錢糧內有應交打箭爐充餉者著將四百兩加增賞給土司官二員俾用度得以從容示朕優恤之意欽此

1398 乾隆五年二月二十一日內閣奉

上諭豫省盜案繁多營伍亦覺懈弛該省止設河北南陽二鎮與巡撫不相統屬諸事不能畫一著照山西之例河南巡撫兼提督銜以便節制稽查欽此

1399 乾隆五年二月二十五日奉

旨九江關稅務著唐英再管一年欽此

1400 乾隆五年二月二十九日奉

上諭八旗官員有平日指俸借支官銀以及抵買入

官房地俱應扣俸還項如該員遇有罰俸處分即應照數補交現銀此乃該員借用及置產之私項部旗理應按限催交無庸復從寬緩但念該員既罰本俸復措現銀併在一時未免生計拮据朕心軫念用是特降諭旨嗣後罰俸之旗員如有應扣之雜項銀兩著照舊按數坐扣俟完項之日再行扣罰俸銀若扣完雜項之外尚有餘俸即將餘俸陸續扣足所罰之數不必勒補現銀至該員所罰之俸未經扣完之日亦不許再行借支別項銀兩如該員遇有喪事仍准照例借四個月俸銀亦著展限扣還該部該旗可即遵諭行欽此

1401 大學士鄂 張 徐 宇寄 山東巡撫碩

乾隆五年二月三十日奉

旨 上諭山東巡撫碩色奏周紹儒才具平常不勝糧道之任等語周紹儒既不勝山東糧道之任碩色便應在本省道員內揀選一員調補將所遺事簡之缺補用周紹儒爾等可寄信與碩色知之欽此遵旨寄信前來

附錄

(1) 大學士伯 臣 鄂 等謹  
奏為遵

旨議奏事貴州總督張廣泗奏明查勘南溪河道等

因一摺奉

硃批軍機大臣等詳議具奏欽此 查張廣泗從前

奏稱楚省船隻由鎮遠施秉可至黃平舊州不

能直達省城查貴陽城外現有河流一道名曰

南溪河由開州可以通至黃平舊州僅隔一山

不過二十里即係由施秉開修至黃平之河道

等語今據稱委員查勘開州所屬之天生橋以

下至綿花渡之仙人洞約長四十里高灘大石

綿亘擲比又震天洞魚子洞各等處兩岸懸崖

陡壁石梁橫截中流奇險天成實難為力必須

鑿開中流大石仿照斗河之法於下流建築石

壩層層蓄水使上流水勢寬緩舟行自可無虞

從前勘估約需工費銀七十餘萬兩今核減估

報尚需銀五十二萬兩容親往詳勘情形如果

可以開修再確實估計詳細陳奏等語 查南

溪一河僅隔黃平舊州一山果能開通使舟船

真達省城豈不甚善但據查勘自開州以下地  
勢層層險阻既屬天成似難全恃人力開鑿若  
不慎之於始一經工作勢難中止即使勉強施  
工可令通流而水石險峻湍激之處未能悉歸  
平穩則舟輯終屬難行至於斗河築壩等法皆  
須歲有培修將來或更轉為地方之累在該督  
亦以錢糧所費太多工程重大奏請親往查勘  
再行具奏臣等愚見以為此項河道工程既非  
因勢利導之舉恐難收商旅流通之益宜令該  
督停止辦理至所程上游附近府州縣之河道  
數處現在委員勘估應俟該督將查勘確實情  
形並果否有益地方之處具奏到日再議可也

謹 奏伏候

聖訓

乾隆五年二月初二日奉

旨依議欽此

(2) 內閣學士張煦一摺 據稱武英殿翰林等俱兼各館辦事殿直既非奉

旨自必轉以餘力及之難免日漸廢弛請以後武英

殿行走並皆開列請

旨補用永以為例等語 查在

武英殿行走翰林向不專給公費皆係於各館翰

林內各取差辦今張煦奏請以後並皆請

旨補用亦係鄭重職守之意應如所請嗣後

武英殿翰林有更換補用之處俱令該總裁奏明

請

旨著為定例遵行至稱將現在所有

武英殿翰林詳加揀擇之處查現在提辦官陳浩

等四員俱經奏明其條翰林亦係節次挑取補

用之員所辦校對經史等事尚可勝任且行走

漸已熟習似無庸另加揀擇至於行走勤惰該

總裁日與共事自必知之甚悉應聽該總裁隨

時查察有應奏聞者即行奏聞又夫單內稱辦

理雜項校對六員尚未足用應添二員校對經

史需二十員應添一員今將告假出缺之洪世

澤馮祁路斯道三員補足恰可敷用等語亦應

如所請令將洪世澤等三員分派補用可也謹

奏伏候

諭旨 乾隆五年二月初七日奉

旨依議欽此

(3) 行兵部片一紙

署福州將軍副都統策楞奉

旨馳驛前往福建應交兵部照例辦理 二月初八日

(4) 行鑲白旗都統衙一件

筆帖式滿什圖奉

旨交與署福州將軍策楞帶往福建應交兵部給與

驛馬三匹沿途撥給兵丁二名照管約束與將軍

策楞一同行走 二月初八日

(5) 趙世勳奏請歸化城設立州縣等因一摺 查

設立州縣必有地畝耕農歸化城附近盡屬土

默特之地現在駐防官兵墾種係查出舊存各

項零星官地每年所種尚不足以資兵食更無

餘地可充田賦且歸化城所有民人多係各省

商販去來無定並非土著有業之人建置州縣



事屬難行亦殊無益詢之將軍王常與臣等意見相同趙世勲所奏應毋庸議

乾隆五年二月初八日奉

旨知道了欽此

(6)

查巴塘裏塘土司官品職俱屬相同因巴塘地方所徵收錢糧較多是以該土司官二員每年共賞給養廉銀一千兩至裏塘地方所收錢糧無多是以該土司官二員每年共止給養廉銀一百三十五兩該土司官品職既同而養廉多寡懸殊裏塘土司官用度不敷生計未免艱窘今若勸支別項錢糧加增給與亦屬未便臣等查裏塘地方有徵收錢糧四百兩原交打箭爐充餉如即將此項銀兩加

恩賞給裏塘土司官二員分用則該土司官用度即可

從容矣如蒙

俞允臣等繕寫

上諭進

呈

乾隆五年二月十四日奉

旨是欽此

(7)

查豫省向未設有提督止設河北南陽二鎮與巡撫不相統屬今朱定元奏請照山西巡撫之例加提督銜以便稽查統轄似屬可行如蒙皇上准其所請臣等另擬

上諭進

呈

(8)

布政使朱定元奏稱河南中牟等州縣地畝近歲河潰頻年潦礮共計五百六十頃零實係額賦無出積年賠累請查明豁免等語查此項地畝或係向來額徵正賦或係近年報墾陞科加增新額摺內並未分晰聲明難以遽議查免應請降

旨交與巡撫雅爾圖查明酌議具奏到日再議

乾隆五年二十日奉

旨依議欽此

(9)

副都統王進泰奏請將罰俸之旗員應扣雜項銀兩展限坐扣等因一摺查旗員指奉借支宗人府等處滋生銀兩以及指買入官房地人

奏

乾隆五年二月二十九日

口俱應扣俸還項如該員遇有罰俸處分則其應扣銀兩即須照數交納現銀原不便復從寬緩但旗員既有應扣之項一遇罰俸必須措辦現銀交納倍加拮据亦屬實情今王進泰奏請除應罰之俸如仍有餘俸再行坐扣雜項銀兩若係全數扣罰即將應扣雜項展限移於下季坐扣等語查旗員借支官銀雜項如宗人府等處滋生銀兩例應按季坐扣本利歸款未便展限移於下季臣等酌議如罰俸之員本身有應扣雜項銀兩應仍照舊按數坐扣俟完項之日再行扣罰俸銀若坐扣雜項之外尚有餘俸即將餘俸陸續扣足所罰之數其罰俸未經扣完之日宗人府等處各項銀兩不許再行支借如該員遇有喪事仍准照

恩例借給四個月俸銀展限扣還如此則官項既不

致又懸而罰俸之員得免勒交現銀則生計亦

得寬舒矣是否可行出自

隆恩臣等未敢擅便如蒙

俯准所請臣等另擬

上諭進呈恭候

欽定謹

1402 大學士鄂 張 徐 宇 寄 山西巡撫石

乾隆五年三月初一日奉

上諭從前石麟咨部請將晉省所屬不論有無尊經  
閣之府州縣俱照江南之例各給以欽頒經史諸  
書部議不准石麟又復題請該部議稱此奏與原  
議不符且與江南辦理之處亦不相合仍不准行  
所議甚是石麟身為巡撫於部行事件並不遵照  
原議辦理乃欲輕動公項銀兩屢行請備他省  
效尤必至公項不敷地方之用將來於必應舉行  
之事轉有妨碍殊屬不合爾等可寄信中飭之欽  
此遵

旨寄信前來

1403 乾隆五年三月初二日內閣奉

上諭今年二月中旬朕躬偶爾感冒陳止敬吳謙劉  
裕鐸敬謹調理甚屬勤勞今朕躬全愈且奏效甚  
速陳止敬吳謙劉裕鐸俱著授為五品食俸該部  
院知道欽此

1404 聖祖實錄內載康熙四十八年十月己亥

上幸暢春園庚子

皇太后聖壽節

上率王以下文武大臣侍衛等詣

皇太后宮行禮遵

懿旨停止筵宴

乾隆五年三月初三日太學士等奉

旨以後駐蹕圓明園恭遇

皇太后萬壽聖節行禮之處起居注照此式記載欽此

1405 乾隆五年三月初六日內閣奉

上諭山西布政使胡瀛著來京引見其布政使員缺  
著高山補授四川布政使員缺著湖北按察使閻  
亮熙補授湖北按察使員缺著吳龍應補授欽此

1406 乾隆五年三月初六日內閣奉

上諭據山西巡撫石麟奏稱河東道劉毓岳患病難  
以供職例應休致等語河東道員缺甚屬緊要著  
將太原府知府郭一裕補授欽此

1407 大學士鄂 振 徐 字寄 山西巡撫石

乾隆五年三月初六日奉

上諭聞山西布政使胡瀛時常患病一月之中有二

十日不能辦事何以石麟不將實情奏聞可寄信

詢問申飭之欽此遵

旨寄信前來

1408 乾隆五年三月初八日內閣奉

旨蔣林回籍終養將來補官之日仍以鹽運使用欽

此

1409 乾隆五年三月初九日內閣奉

上諭川陝總督鄂彌達著來京候旨尹繼善著補授

川陝總督刑部尚書事務著鄂善暫行兼理欽此

1410 乾隆五年三月初九日內閣奉

上諭盜賊劫奪固為地方之害法不容寬而鼠竊狗

偷之輩昏夜潛踪伺隙乘便亦足以侵傷良善擾

害行人不可以為非重大之案而置之不問也朕

聞直隸山東江南河南等省頗有行客單少不能  
禦侮被匪類邀截於路強取銀錢行李而走者又

有扮作進香之人或乞丐之類以肆其搶奪者在

本人失物不多未必俱行報官而地方官則希圖

省事或隱諱不查或緝捕不力以致宵小無所懲

儆此風漸不可長著該省撫督等嚴行申飭不時

稽查倘有仍蹈故轍者必加以叅處毋得寬縱欽

此

1411 乾隆五年三月初十日內閣奉

上諭河南巡撫雅爾圖請將開歸陳許道胡紹芬調

補糧驛道朕已降旨允行其開歸陳許道缺即著

崔琳改補欽此

1412 乾隆五年三月十三日內閣奉

上諭綠旗武職軍政年老官員朕前降旨將曾經出

兵効者准其原品休致仍令子弟一人入伍食

糧如無子弟者給與守糧一分以終養贍至軍政

有疾曾經出兵受傷得功之員雖有子弟食糧之

例其無子弟者向未議給養贍朕心軫念著嗣後

軍政有疾官員曾經出兵効力者俱照有疾之例辦理再武職出兵効力之員有以老疾告休者因未屆軍政之年轉不得援養贍之例情殊可憫嗣後各省除副叅等大員外都守以下員弁有以老疾告休者著該督撫提鎮查明該員實有出兵効之虞於題咨內分別聲明亦照軍政年老有疾之例一體加恩優恤欽此

1413 乾隆五年三月十四日內閣奉

上諭刑部郎中孫陳典著川陝總督尹繼善帶去辦事遇有道府缺出酌量題補欽此

1414 乾隆五年三月十四日奉

上諭各省舊有閘隘或以屏蔽一方或以控扼數省皆屬形勝衝要之地雖建置沿革今昔異宜而其最關險要者保境防奸實為封疆所繫因係年久多有傾圮所當以時修脩可令各省督撫將所屬境內舊有閘隘因便查勘講求孰為一省之藩籬孰為數省之要害將應行修葺防守并緩急先後

事宜詳悉具摺奏聞候朕酌量降旨爾等遇各省督撫奏事之便將朕此旨抄錄封寄令該督撫等從容查辦欽此

1415 乾隆五年三月十八日內閣奉

上諭浙江湖州府屬之歸安烏程二縣於乾隆三年曾被雹災朕已加恩分別蠲免帶徵改折以示優恤惟有漕糧并改徵正耗灰石行月食米共七千九百三石五升零漕項漕截等銀四千一百八十九兩六錢零定例不在蠲免之例朕思乾隆三年歸安烏程二縣被災頗重收成歉薄四年雖稱豐稔而民間元氣一時未復今以一歲所入既完本年額賦又完緩徵帶徵各項民力未免艱難著將此二縣乾隆三年分被災田畝之漕項銀米分作五六七三年帶徵俾閭閻力量寬舒從容完納該部可即傳諭該督撫知之欽此

1416 乾隆五年三月十八日內閣奉

上諭武英殿事務著許希孔與張照一同辦理欽此

1417 乾隆五年三月二十日奉

旨今日都察院因紅帶子宏暉等懇請迎養嫡母查克丹即接呈轉奏夫迎養嫡母乃是好事朕若不允是不能成人之孝矣但其中情節宗人府該旗無不備知今朕面詢查克丹云汝摺內但稱宏暉等曾在宗人府具呈宗人府不曾接奏至伊等曾在該旗具呈與否汝亦查明否查克丹回奏未經詢問不知曾否具呈等語夫都察院為申寃理枉之處若人在宗人府具呈不接該旗具呈又不接都察院原可代接轉奏未有不經該旗而都察院竟代人奏事者且自查克丹為左都御史以來為人所申者何究所理者何枉而亟亟代人奏聞此事查克丹原係庸碌無能之人伊何敢冒昧代人奏此等事且宗人府託故不奏亦知其不應代奏耳乃查克丹並不詢其曾在該旗具呈與否輒為代表明係受人指使且引錫類之文令朕不得不從即此豈查克丹意料所能及查克丹著革職交部嚴審其與何人商量受何人指使之處該部將情由究出定擬具奏宏暉等乃身獲重罪之人朕即位以來格外加恩給與紅帶子並賞以田宅乃

伊等不知感恩守分仍復生事者未終不安靜著該旗嚴行管束如再有生事之虞朕惟該旗大臣是問欽此

1418 大學士鄂 張 徐 宇寄 漕運總督托

乾隆五年三月二十日奉

上諭托時題請糧船副丁管押回空准帶土宜二十担免其輸稅部議不准甚是托時將從來未行之事欲變更成例取悅於細民甚屬不合爾等可寄信中飭之欽此遵  
旨寄信前來

1419 乾隆五年三月二十一日內閣奉

上諭據直隸總督孫嘉淦奏稱順德府知府鄭為龍年已七旬近有足疾雖勉供職而辦理未能裕如應照原品令其休致廣平府知府徐洹瀛意見浮淺不諳政體無以表率屬員應令回京酌量改補等語著照該督孫嘉淦所請鄭為龍以原品休致徐洹瀛著來京引見其順德府廣平府二缺著孫嘉淦於通省屬員內揀選題補欽此

1420 乾隆五年三月二十五日內閣奉

上諭安徽布政使晏斯武丁父憂其員缺著江蘇按察使包括補授江蘇按察使員缺著天津道陳宏謀補授其天津道員缺著孫嘉淦於屬員內揀選題補欽此

1421 乾隆五年三月二十五日內閣奉

上諭湖北驛鹽道朱倫瀚著來京以御史用其驛鹽道員缺著李梅賈補授欽此

1422 乾隆五年三月二十五日內閣奉

上諭據署理福建巡撫王士任奏稱莆田縣民人陳協順自置商船出洋貿易行至山東洋面陡遭颶風隨浪飄流至朝鮮國楸子島幸遇島民扶救得生該國王給以薪米衣服又為脩整船隻加給食米三十石俾民得以回籍等語中國商民出洋遭風朝鮮國王加意資助俾獲安全其屬可嘉著該部行文傳旨嘉獎之欽此

1423 大學士伯鄂 張 大學士徐 尚書公訥

尚書海 宇寄 江寧織造管理龍江關稅務 韓 乾隆五年三月二十五日奉

上諭朕聞韓世格自上年九月內患病至今未曾理事一切關務恣委家人巡役等主張多有營私累商等弊有休寧縣商民程洪度等從鹽城買有鹽魚一百四十擔載往江西發賣於本年二月間船至江心被風打至大閘對峙暫泊老鶴嘴地方另坐刊船赴閘報稅路遇閘後王華王培並韓世格家人盛四詢知其事即同程洪度等回船盤貨聲言漏稅將程洪度等用繩拴至花船要銀五兩程洪度給銀一兩一錢五分王華等不允次日將船人俱帶至閘口其船繫在大江溜水不能躲避風浪之所將程洪度等押解到閘鎖在班房過夜韓世格發與茶引大使賀子溶訊明實係遭風並非偷越而王華等仍不發放以致忽起暴風船在大溜無人搶護將船打沉所有魚貨行李銀錢盡行淹沒程洪度赴閘呼冤韓世格反以商人越閘沉沒發江寧縣查驗尚未完結又有商人羅日升販

有藥材鉛觔至闊因止報藥材未報鉛觔計漏稅銀二十兩韓世格批罰五倍銀一百二十兩亦太苛刻又江寧向來婦女出入城門所帶隨身箱籠俱不開着今韓世格將大小箱籠無一不開怨聲載道又辦理閩務各雜職人員應得飯食銀數月不發稟話不得一面俱有怨言等語此朕得之訪聞者爾等可寄字傳諭韓世格令其速行悔改並將管閑不妥之家人巡役懲治革退以恤商民倘仍蹈前轍朕必加以處分欽此遵

旨寄信前來

1424 乾隆五年三月二十八日內閣奉

上諭都察院左都御史員缺著刑部侍郎杭奕祿補授刑部侍郎員缺著工部侍郎阿克敦調補工部侍郎員缺著盛京工部侍郎德齡補授欽此

附錄

(1) 昨雅爾圖請將開歸陳許蕙管河務道胡紹芬調補驛監糧道奉

硃批著照所請行欽此查河南驛監道員缺已於前月奉

旨補用崔琳今可否將崔琳改補胡紹芬所遺之缺謹此奏

聞請

旨 又查崔琳係服滿候補之員本籍山西於上年銓補四川松茂道以親老懇請改補近省蒙恩俞允於前月補授河南道員

(2) 臣等看提督永常一摺奏稱可否將軍政內有

疾實難復用曾經出兵効力之員雖有子而未成立者亦照年老優恤之例終其養贍又未屆軍政之期以老疾告休勒休之將備千把悉令該督撫提鎮查其實有出兵効力之勞於題咨內分別聲明一視同仁之處出自

皇上之特恩等語 查康熙六十一年十二月內兵部等衙門遵



旨旨定議軍政內除貪婪行劣不謹官外其罷軟年老

有疾才力不及浮躁官負有曾在軍前行走受

傷得功之負例應革職已無職銜者仍給與本

身空銜例應休致降調本身尚有職銜者俱令

其子孫一人入伍食糧等因遵行在案又乾隆

二年閏九月內九卿遵奉

諭旨定議軍政年老官員如從前曾經出兵効力者

准其原品休致仍令其子弟一人入伍食糧如

無子弟給與守糧一分以終養贍等因亦遵行

在案我

皇上憫念出兵受傷得功之負其年老無子者已蒙

恩旨給糧養贍至軍政有疾曾經出兵受傷之負或

即回疆場積勞年久衰廢雖准令其子弟入伍

食糧其無子弟者乃不能照年老無子給糧養

贍之例似稍未得其平應請嗣後軍政內有疾

官員曾經出兵受傷無子弟食糧者亦准照年

老無子之例給與守糧一分以資養贍又永常

奏稱未屆軍政之期以老疾告休勒休之將備

干把悉令查明出兵効力之處等語查老疾勒

令休致者既係被祭之負且其中或係別有事

故未便復議

加恩優恤惟是以老疾告休者該員亦曾出兵効力

轉不得與軍政之効休者一體仰邀

恩典情實可憫查定例八旗告休官員曾經出兵者

帶給半俸以養餘年又各省功加外委兵丁有

老病不任差操者准給半餉養贍終身

國家軫念微勞

恩施至為優渥惟綠旗老疾告休之員向未著有定

例臣等酌議嗣後各省武職除副參遊擊大員

外其都守干把等員有以老疾告休者令該督

撫提鎮查明實係有出兵効力之處即於題咨

內聲明照軍政年老休致之例准令子弟一人

入伍食糧如無子弟給與守糧一分以資養贍

則內外員弁兵丁著有微勞者咸得一體沾戴

聖恩於無既矣如蒙

俞允臣等另擬

上諭進呈恭候

欽定謹

奏 乾隆五年三月十三日奉

旨是欽此

(3) 雲南總督慶復等奏報交趾情形等因一摺奉  
硃批軍機大臣等議奏欽此 查慶復等探報安南

黎鄭仇殺情形與馬爾泰安圖譚行義等從前  
所奏大槩相同據稱彼國護送投文人說黎王  
因鄭王困逼不堪忍加謀害曾令親弟削髮為  
僧潛往中國告狀又稱安南黎氏國人稱為開  
王不但不預國事並不得與國人接見惟進貢  
借用其姓名又稱有設郡公係鄭王母舅已將  
鄭氏衛南王謀害又稱清化邵郡公將到宜京  
居鄭王之位辦事等語查鄭姓貪殘恣橫乃安  
南致亂之由該國王既被禁制不預國事則此  
次回文自亦出于鄭姓之手今鄭姓被殺之事  
傳聞不一難據為實前安圖奏稱舊安南王之  
子黎驚借邵公兵勢不徒欲擒殺鄭姓兼有希  
圖復位之事是邵郡公乃係黨附黎驚之人今  
據探稱設郡公殺害鄭姓又邵郡公將到宜京  
居鄭王之位辦事此皆有闕彼國順逆情形應  
令該督設法密行偵探確實以便嗣後酌議辦  
理至矣長餘匪偽土官余襲與都奄土兵互相  
奪取乾塘彼國因內亂不暇遠救今矣長已經  
投到該督等惟當加謹防範以靖邊圉再安南

行文要猛梭土司刀美玉領兵同禦各路賊寇  
許以三崗民人充賞等情既據該土司稟報臨  
元鎮臣應飭該鎮密為稽查有應指示該土司  
之處即行指示辦理仍將辦理情節奏  
聞并將摺內所稱安南回文速行抄錄

進呈謹  
奏

乾隆五年三月十四日奉

旨是欽此

(4)

雲南巡撫張允隨奏請葺直省扼要之關隘等  
因一摺 查各省關隘必係險要之地或以屏  
蔽一方或以控扼數省因其形勝加以修備既  
可以防奸究亦足以壯兵威張允隨所奏原屬  
有益之事但建置機宜隨時各異亦有舊稱衝  
要今則無關重輕者若果行修葺不徒糜費錢  
糧太多難遽舉行且一時修理各省要隘亦未  
免稍感衆聽應交各省督撫將所屬舊有關隘  
因便查勘講求孰為一省之藩籬孰為數省之  
要害將應行修葺事宜詳悉具摺奏

聞視其緩急先後并地方年歲豐歉酌量次第舉行

則經費易充而於地方亦有裨益如蒙

俞允臣等另擬

上諭進呈恭候

欽定過各省督撫奏事之便抄錄封寄令該督撫等

從容查辦可也謹

奏伏候

諭旨

乾隆五年三月十四日奉

旨是欽此

(5) 大學士伯臣鄂 川陝總督臣尹繼善謹

奏為遵

旨議奏事據雲南總督慶復具奏孟連頭目召賀白

遷禁普洱一摺奉

硃批大學士鄂爾泰總督尹繼善會同議奏欽此臣

等會議得孟連頭目召連白先因滋釁結訟經

督臣慶復欽奉

諭旨委刀派春承襲土司仍寬召賀白之罪監禁省

城奏明在案今據該督奏稱召賀白之母白眉

毛年老思子央求頭目圈冒等具呈普洱鎮總

兵崔善元懇求放回經該鎮稟請將召賀白遷

禁普洱俟各頭目誘獻漢奸仍著刀派春具呈  
領回召賀白等因伏思撫輯夷人之道惟在處  
置有法緩急得宜方可永遠寧帖今該督既以  
夷性反覆不常釋放恐生事端仍宜羈禁以待  
誘獻漢奸則遷禁普洱與拘禁省城無異何必  
多此遷移臣等酌議應令該督確查土司現在  
情形如果刀派春承襲以來漸能成立足以懾  
服夷人各頭目實心恭順而釋回召賀白之後  
不致別生事端則竟宜俯順夷情將召賀白放  
回使之感戴

天恩永守法紀倘如刀派春不克樹立夷情未服其

頭目圈冒等具呈情由或即係召賀白餘黨指

使自仍應收禁省城以杜滋事俟刀派春成立

夷情帖服之後刀派春果情願領回召賀白再

將召賀白釋放庶為允協臣等愚見如此是否

有當伏候

聖裁謹

奏

乾隆五年三月十七日奉

旨這所奏是依議欽此

(6) 查各省掛印總兵共十一員直隸惟宣化一鎮掛印山西惟大同一鎮掛印福建惟臺灣一鎮掛印其陝西省延綏興漢河州西寧寧夏涼州肅州安西等八鎮俱係掛印總兵相沿已久大約皆因沿邊以及海外重聲威資彈壓而設

(7) 按五經要義云南山長安南山也福地記云終南山在長安西南五十里東接驪山太華西連太白至於隴山南入楚塞連屬東西諸山周迴數百里通典云長安縣南有終南山廣輿記云終南山在府城南即中條山也今鄂彌達繪圖內西安府城南一帶山即終南山

(8) 編修林枝春進

呈經史內稱使臺省大僚及地方大吏皆以求才儲用為先務其已列班聯者國家已有薦揚之典若銓叙未及罷局已成則科目中未必無可儲之才也稽古有獲經綸素裕則庠序中未必無可儲之才也至若奇材勇士或在草澤之中

高識卓行遠居巖谷之內采諸眾評徵其實蹟分晰科等列狀上聞朝廷酌其優崇之法與其成就之方等語查科目庠序本以儲才科目則已有進用之階庠序中文行兼優堪膺孝廉方正之選者原許隨時薦舉若復行官員保舉之法恐未必皆得真才而已先啟奔競之風伏

查雍正五年六年兩次欽奉

諭旨令內外臣工於滿漢文武內或係現任職員或係候補候選之人或係進士舉人貢監生員或係山林隱逸各舉一人乃舉者與受舉者不思欽承

德意鑽營請託私弊百出轉致士心不靜士品不端而

所舉之人多被叅劾舉者亦被嚴譴旋蒙

降旨停止今林枝春所陳保舉三項即係從前行之未

久旋奉停止之事似可無庸置議

乾隆五年三月十八日奉

旨知道了欽此

(9) 伏查康熙四十五年

聖祖仁皇帝刊刻全唐詩原係內府所藏前人纂輯舊本而以唐音統籤諸編校對增補非一時蒐輯

所成是以刻期告竣且詩莫盛於三唐衆體大備足為後人楷式歷今千有餘年其流傳不朽者大抵皆精華所聚一為哀集盡屬可觀又經宋元以來傳錄鈔選正偽刪訛在當年篇什散逸雖多而即今海內所存可信其志登秘府此全唐詩之名所由立也宋元以降作者滋衆然大家可傳者數十家而此外此名章秀句雖不乏可選之篇而白葦黃茅靡望皆是又自坊刻盛行刊布甚易刻集動輒百餘卷或數十卷篇幅繁多百倍前代是以

御定四朝詩祇從選刻蓋由多不勝枚勢必不能無漏即今果存全帙亦不盡可傳故也其全金詩乃貢生郭元鈞所進自元好問中州集而外所增無幾因經進呈

御覽後自行刊刻遂冠以御釘之目非奉

旨刊刻之書也前明詩集考之明史藝文志所載幾數千卷其間猥雜凡庸之作實不足傳之久遠且為時甚近若廣加蒐訪則凡子孫之欲表章其先人者競以家藏遺集為名適滋附會若仍為去取又非一代全詩辦理殊難妥協且時日未

免遲久工費亦屬浩繁似屬無益伏候  
皇上睿鑒指示

(10) 署綏遠城將軍印務副都統甘國璧為敬陳未  
議一摺五條奉

硃批軍機大臣等議奏欽此

一奏稱案查綏遠城糧餉同知具報各協理通判經徵乾隆二三四五年分米草本折有未完三四分至五六分不等者皆由考成未定以致積欠過多應請

勅部定議自乾隆五年為始照內地錢糧考成以各協理為經徵糧餉同知為督催每年照限分別完欠數目造冊由該同知徑申布政司核轉聽候撫臣查核奏銷等語查綏遠城屬各協理通判應徵米石草束關係兵食若照內地錢糧例立定考成分別查核自屬有益但查和林格爾等處從前查報地畝未經墾種者尚多其舊墾續墾地畝及分別肥瘠等次是否畫一均平定有成規再乾隆二三年分未完米草本折或係墾民積欠逃戶拋荒抑或另有情由俱未據聲明難憑遽為定議應將此條

勅交山西巡撫石麟會同新任將軍查明報部議奏

一奏稱民人認墾糧地及覓保借領籽種銀兩應令各協理通判按照糧戶及保人所開籍貫移查明確即勸諭搬取家口編戶入籍等語

查晉省地少人多其出口認墾者多係本地無業之人伊等在外尋覓衣食或係久離鄉井若俱移查本籍辦理似覺煩難但民人一經認墾之後即需借籽種銀兩覓保不實恐有拋荒逋欠等弊立法自應詳慎嗣後民人認墾開具籍貫令再覓墾戶久業之人作保其借領籽種銀兩先取其同墾之人連名互結然後准其借領如有逃戶拖欠之處即著落原具保結之人名下追賠至伊家口有在內地情慮搬處入籍者聽其自便不必強迫滋事

一奏稱各協理地方相距較遠城路有二三百里以至四五百里不等民運交倉種種不便請嗣後令各協理通判就近徵收給串歸農除草折銀兩不許加收耗羨外其糧米每倉石加耗米二升以為貯倉折耗每倉石百里仍照民運原議給與脚價一錢隨收隨解等語查歸化城等處開墾地畝應徵米石草束在五十里以

內者聽民赴倉交納五十里以外者每倉石百里官給脚價銀一錢令甘國璧奏稱糧多路遠者民運猶多未便請令各協理通判就近徵收照民運脚價官收官解並加耗米及分設斗級等事宜是否官民兩便應請將此條

勅交山西巡撫會同新任將軍詳議具奏

一奏稱薩拉齊協理通判一缺並無招墾寸地刑名亦少應請裁去就近歸於善後管理等語查從前吏部議准歸化城都統丹津奏請於歸化城南和林格爾東崑都崙西托克托城西角薩拉齊四處各添設筆帖式一員就近辦理相驗開啟詞訟細事以免蒙古民人長途牽連守候之勞是各處添設筆帖式原不專為招墾地畝而設今若歸併善後管理恐筆帖式微員難以兼顧自仍以就近辦理為便所奏應毋庸議

一奏稱和林格爾等處各員以筆帖式辦理通判若該員論俸年限仍照筆帖式之例揆陞恐無以勵其向上之志懇

恩准其以到任六年為滿該員果能經徵全完地方寧謐許保題送部引

見以筆帖式應陞之缺即陞等語 查條設和林格爾等處筆帖式原議該員等俱令三年一換如三年內勤勞好者報部議叙不好者更換查議是該員三年期滿果屬勤勞稱職已有議叙之例未便復議更依所奏應毋庸議  
乾隆五年三月二十五日奉  
旨依議欽此

(11) 大學士伯臣鄂 等謹  
奏為遵

旨議奏事乾隆五年三月二十四日據

武英殿奏請將

世宗憲皇帝清文上諭照依八旗清文

上諭款式刊刻頒發等因奉

旨令臣等議奏 臣等伏查八旗

上諭皆係訓飭旗人是以兼清漢文頒發至內閣

上諭為頒布中外之書現有漢文人人通曉似不必更

兼清文刊刻臣等敬謹酌議八旗

上諭及內閣漢文

上諭自雍正八年以後均仍照成式刊布外其內閣清

文

上諭應請繕寫三部將現在進

呈一部即存貯

大內再寫二部一交內閣敬謹收貯一送

實錄館俟

實錄告成之後送

皇史宬收貯可也謹

奏伏候

諭旨

乾隆五年三月二十六日奉

旨好欽此

(12) 失火處分例

官員該管地方失火燒燬房屋者罰俸三個月

如不能救援以致延燒文卷及官倉米石者罰

俸一年如將錢糧文冊不貯公所妥藏私家或

交衙役以致被焚者降一級調用

雍正六年九月十四日奉

上諭大凡省會之區民居稠密人烟湊集或弗戒於火

每年至比屋延燒著各省督撫於省會之地多設水

桶水銃鈎鑷麻搭之類分貯各門文武各官派定人

役兵丁倘遇火警齊集救護即時撲滅欽此

1425

乾隆五年四月初二日內閣奉

上諭張廷杖著父與總督尹繼善帶往陝西以道府酌量題補欽此

1426

乾隆五年四月初四日內閣奉

上諭浙江提督李燦以伊身患病虛弱一時難以即痊奏求解任調治情辭懇切著照所請准其解任調治其提督印務著裴斌署理欽此

1427

乾隆五年四月初四日軍機大臣吏部大臣總督尹繼善奉

督尹繼善奉

上諭河南巡撫雅爾圖奏稱田文鏡在豫百姓至今怨恨不應入豫省賢良祠朕批示曰此等事何須亟亟為之若行徹去豈不有悖於

前旨乎使田文鏡尚在朕不難去之罪之今已沒矣在祠與不在祠何礙於事況今日之在祠將來應徹者政不知其幾何也何必亟亟於一田文鏡乎若出於識見之迂尚可若出於逢迎與彼不合之人之意則朕所望於汝者又成虛矣朕觀雅爾圖此

奏並不從田文鏡起見伊見朕降旨令李衛入賢良祠其意以為李衛與大學士鄂爾泰素不相合特借田文鏡之應徹以見李衛之不應入耳當日王士俊請將田文鏡入賢良祠係奉

皇考諭旨允行者今若又將伊徹出是翻從前之案矣試思田文鏡留於祠中於國計民生有何關係而此時必欲行此翻案之事乎又如前日查克丹奏請宏暉迎養嫡母一事宏暉係獲重罪之人朕所以給與紅帶子者誠恐日久之後漫無分別多有未便乃事之不得不如此辦理者至於迎養伊母之奏朕若允行在伊一家自必感激朕恩然以今日之迎養為恩必以從前之治罪為怨似此市恩翻案之舉朕必不為也當日鄂爾泰田文鏡李衛皆督撫中為

皇考所最稱許者其實田文鏡不及李衛李衛又不及鄂爾泰而彼時三人素不相合亦眾所共知從前蔣炳條陳直隸裁兵一事又有人條奏直隸總督應改為巡撫者外間皆以為出於鄂爾泰之意前日李衛之子李星垣初到京師即摺奏稱伊父李



衛平日孤身獨力恐不合之人欲圖報復朕命納  
訥親嚴行申飭云汝不過一武職小臣即有與汝  
父不合之人欲圖報復者朕乾綱獨攬洞察無遺  
誰能施其報復之私心汝係新進之人即存此念  
甚屬糊塗將來豈能上進李星垣陳奏時雖未明  
言朕即知其指大學士鄂爾泰也從來臣工之弊  
莫大於逢迎揣摩大學士鄂爾泰張廷玉乃

皇考簡用之大臣為朕所倚任自當思所以保全之伊  
等諒亦不敢存黨援庇護之念而無知之輩妄行  
揣摩如滿洲則思依附鄂爾泰漢人則思依附張  
廷玉不獨微末之員即侍郎尚書中亦所不免即  
如李衛身後無一人奏請入賢良祠者惟孫嘉淦  
素與鄂爾泰張廷玉不合故能直摺已意如此陳  
奏耳朕臨御以來用人之權從不旁落試問數年  
中因二臣之薦而用者為何人因二臣之劾而退  
者為何人即如今日進見之楊超曾田懋皆朕親  
加簡拔用至今職亦何嘗有人在朕前保薦之手  
若如衆人揣摩之見則似二臣為大有權勢之人  
可以操用舍之柄其視朕為何如主乎但人情好

為揣摩而返躬亦當慎密即如武古爾德爾因派  
出坐臺托故不往朕加以處分又刑部承審崔起潛  
一案擬罪具題時鄂爾泰曾為密奏後朕降旨從  
寬而外間即知為鄂爾泰所奏若非鄂爾泰漏泄  
於人人何由知之是鄂爾泰慎密之處不如張廷  
玉矣嗣後言語之間當謹之又謹又額駙策令到  
京曾奏武古爾德爾年老請令回京又法敏富德  
常安輩策令亦曾在朕前獎以好語又謂富德宜  
補隨印侍讀此必鄂爾泰曾向伊言之故伊如此  
陳奏也今鄂爾泰奏辯並未向伊言之夫向伊言  
之而奏固屬不可若未向伊言而伊揣摩鄂爾泰  
之意即行陳奏則勢力更重額駙且然何況他人  
鄂爾泰亦能當此語乎朕於大臣視同一體不但  
欲其保全始終且於疑似之際亦每為留意以杜  
外人之議論即如前日刑部侍郎缺員朕原欲批  
用張照因彼時鄂爾泰亦曾入直而張廷玉在內  
朕恐人疑為張廷玉薦引是以另用楊嗣琛又如  
勵宗萬人不安靜鑽營生事朕因其小有才具尚  
可驅策令其在武英殿行走亦足滿其分量矣而

外人以為張廷玉所核不得起用其實當日勵宗萬保舉受賄一節果親王曾經奏聞並非出張廷玉也朕之用舍悉秉至公朕之繼述期於至當若謂

皇考當日所用之人不應罷黜當日所退之人不應登

進如大學士鄂爾泰豈非告退閑居而朕特用之大臣乎又如前日吏部為恒德襲職事具摺請旨朕因摺內奏稱雖與銷滅之例相符而與奉有特旨多顯羅之案似同一例等語恒德係親一族不應如此措辭朕不准行且面加訓諭之鄂爾泰張廷玉乃

皇考與朕久用之好大臣衆人當成全之使之完名全節永受國恩豈不甚善若必欲依附逢迎日積月累實所以陷害之也朕是以將前後情節徹底宣示深欲保全之二臣更當仰體朕心益加敬謹以成我君臣際遇之美欽此

1428 乾隆五年四月初四日吏部奉

上諭吏部侍郎程元章為人卑庸不肯實心任事留於衙門不過備員而已著革職其員缺著蔣溥補授欽此

1429 乾隆五年四月初十日軍機大臣奉

上諭據奉天府尹吳應枚奏稱奉天自開例捐監積數以來報捐者寥寥無幾蓋緣直隸山東各省水陸俱通商賈絡繹有數之家俱各貪圖貴耀瞻望不前請照江西安徽二省奏准之例凡外省來瀋行商過客暫時流寓之輩並作宦之生俊人等皆許其照例報捐俾所積益多則所濟益廣似可無拘年限等語各省捐監積數一事原以備民間之緩急先據福建巡撫王士任以本省捐數無多請准行商過客及暫時留寓之輩一體報捐以資積貯朕降旨先行續據江西巡撫岳濬授例以請朕亦允行又據安徽巡撫陳大受援例奏請並添入作宦之生俊字樣朕因安徽等屬連歲歉收從廣儲米穀起見且有福建江西為例故亦批照所請

行是朕一時踈畧處乃吳應枚遂援以為例具摺  
陳奏今細思之作宦之生俊在該地方一體報捐  
其中大有弊竇或多收民人穀石以填補子弟捐  
監之數或少交入倉穀石以致有虧捐款之額或  
那移常平社倉官穀以充捐項之用或礙上官情  
面代為騰挪而開虧空之端此皆事之所不免者  
此事若准行將來何省不援此例請行乎况奉天  
地方非江南等省可比行商過客亦屬無多有何  
益處且朕從前為閩省時降諭旨原限一年期滿  
將外籍報捐之人停止今吳應枚摺內並未定有  
年限但稱俟缺額穀石捐足之日奏請停止是停  
捐遙遙無期矣從前之收穀原欲濟民之食今如  
此辦理是欲巧開一捐納之途矣况吳應枚奏稱  
有穀之家貪圖貴耀此彼地情形也今又准作宦  
之生俊一體報捐則交官之穀愈多穀價豈不愈  
貴乎所奏甚屬錯繆其作宦生俊報捐之慶不但  
奉天不可行即安徽亦不可行著該部即行文傳  
止至於奉天地方應否准行商過客報捐著該部  
定議具奏欽此

1430 乾隆五年四月十四日內閣奉

上諭乾隆二年秋間福建所屬閩縣侯官等二十一  
廳縣偶被偏災除加息賑恤外曾借給百姓穀二  
萬六千二百餘石年來陸續交官尚未完穀九十  
餘石該地方現在催追朕思以三年前未清之項  
責令於一年完納小民未免艱難著將此項借穀  
分年帶徵於本年秋收後還倉一半其餘一半俟  
辛酉年秋收後催補通完該部可即行文該督撫  
知之欽此

1431 乾隆五年四月十五日內閣奉

上諭據福建署布政使喬學尹奏稱有山東蘭山縣  
饑民二起到覓食又有江南海州饑民到閩覓食  
俱已捐給口糧資助路費送其回籍等語朕原降  
旨凡有饑民就食於隣近地方者令有司加意撫  
綏毋使失所至於山東則去閩省甚遠即江南與  
閩亦隔浙江一省何以山東江南之民遠涉長途  
為糊口之計乎若力量可以遠行則非饑民可知  
倘實係饑民則行至隣近省分該地方官即應設

法留養資送還鄉又何以聽其流移跋涉於數千里之外乎此係已經辦理之事不必深問嗣後大小官員當留心體察善為料理欽此

1432 大學士鄂 張 徐 尚書公訥 字寄 直

隸總督孫 乾隆五年四月十五日奉

上諭各省督撫於屬員之賢否皆具摺奏聞惟孫嘉

塗尚未奏到伊蒞任將及二載於屬員賢否諒已

周知應行具奏爾等可傳諭知之欽此遵

旨寄信前來

1433 乾隆五年四月十六日內閣奉

上諭據河南巡撫雅爾圖奏稱定例凡小民零星錢

糧及大戶尾欠一錢以下者概准以制錢交納計

銀一錢完制錢一百文以免用銀折耗此誠體國

閭閻之意惟是各省錢昂貴每制錢百文易銀一

錢二三分不等今若以錢一百文止准作銀一錢

即不加火耗小民已暗折銀二三分况州縣收錢

之後仍易銀起解是徒以百姓之脂膏飽官吏之  
慾察以臣愚見應令州縣將各本處錢文實價報  
明上司每錢若干作銀若干正耗一體科算照時  
值公平交收倘將來錢價平減仍照例完納等語

朕思制錢價值各府州縣不能畫一即一邑之中  
早晚時價亦不相同今若隨時計算無一定之准  
則誠恐有司開報不實上司稽查不周官兵上下  
之間易滋弊竇今雅爾圖以豫省近日錢貴奏請  
如此辦理乃從地方起見著照所請於豫省試行  
一年再行請旨欽此

1434 乾隆五年四月十六日內閣奉

上諭朕從前降旨各省微員離任身故實係窮苦不

能回籍者令該督撫於存公項內酌量賞給還鄉

路費以示軫恤今福建布政使喬學尹摺奏閩省

辦理止於草職解任告病身故等員而丁憂之人

不得均霑恩澤懇請一體賞給等語朕查原旨內

有離任微員字樣則凡係丁憂離任者即在應賞

之內矣閩省既經錯辦或他亦有與閩省相似者

亦未可知該部可行文該曉諭之至於叅草人員其間情罪輕重不可加以區別或雖經叅革而無劣蹟者自應照舊賞給如有貪侵重款則係有罪之人不得仍行賞給亦著行文各省畫一辦理總之此朕格外之恩各省大吏司其事者不得過刻亦不得太濫欽此

1435 乾隆五年四月十八日內閣奉

上諭淮安濱海地方上年遭值水災朕屢頒諭旨蠲賑兼施加意撫恤今訪聞得淮安分司所屬之板浦中正菟瀆臨興等場泰州分司所屬之廟灣場及附近之安東海州贛榆沐陽等州縣去年被災最重直至秋間積潦尚未消退以致春麥不能播種小民謀生無策當此青黃不接之際並無二麥登場糴糴不給雖現在將鹽義倉米石撥發平糶而小民無力糶賣仍不免於饑餒朕心深為軫念應將各處被災之民再照上年散賑之例給賑一次其在州縣地方著該督郝玉麟巡撫張渠委員查辦其在鹽場地方著益政三保委員查辦動用

運庫減半平餘銀兩事竣報部核銷至被災州縣中有去年覓食外方之貧民今移送回籍者亦應一體加賑將饑民戶口重加查點俾無遺漏該督撫鹽政等可仰體朕心迅速辦理務使窮民均霑實惠欽此

1436 乾隆五年四月十九日內閣奉

上諭上年豫省所屬地方雨水過多泛溢為患其被水成災之祥符等州縣及被水未成災之淇縣等州縣原有乾隆元二三四等年民欠未完常平社倉等穀三十一萬七千餘石又加乾隆四年種麥時借給農民籽種銀一萬二千三百餘兩又借給易麥播種常平社穀二萬七千四百餘石均應於本年麥熟時徵收還項朕思該省上年秋收歉薄當此麥熟之際既應納上年緩徵帶徵之賦迨及秋成又應徵本年應納之糧若再令其交還累年積欠并新舊兩年借穀民力未免艱難用是特頒諭旨除未被水之州縣照舊徵收外凡上年被水地方今歲麥熟後祇令完納本年正賦及緩徵帶

徵之數並所借籽種銀穀其餘積年舊欠借穀無論常平義倉社倉統令分作三年帶徵俾從容完納民力寬紓不至竭蹶該部即遵諭旨行欽此

<sup>1437</sup> 乾隆五年四月二十日內閣奉

上諭前經御史胡定條奏工部工程應令陝西道親查一業工部都察院議覆准行具奏時朕即以爲國家設立科道官員專司言責上而朕之用人行政下而大臣及庶司百職之過愆俱得據實入告並非爲查勘工程等事而設也如遇有工程等事浮冒情弊科道原可糾奏又不必專委以查工之任矣但胡定原奏援引順治及康熙初年舊例爲言朕是以降依議之旨今御史官福以部議內稱如有浮冒等弊該科道會同工部題奏該道若不親身到工並不據實查核工部即會同都察院奏奏是部臣之意並欲參科道之權使科道瞻顧而不敢言愈得以行其私弊且專以查工責之該道而置該科於不議顯因條陳出於御史而故爲此語以陰制之等語夫工程果有情弊御史即不親身查驗亦可風聞糾奏如無情節工部堂官又何

憚御史之查核而預先設法以箝制之乎此論殊爲過刻至於部議稱該道而不及科蓋言道而科自在其中豈得於字句之間過爲搜求耶若謂條奏該部之事而該堂官即欲挾私以圖報復伊等俱係國家大臣朕諒其斷不出此科道查核工程之處著照會典所載舊例行官福請將工部及都察院堂官交部議處之處不准行欽此

<sup>1438</sup> 乾隆五年四月二十日內閣奉

上諭刑部尚書員缺著那蘇圖補授鄂善事務繁多不必兼管刑部欽此

<sup>1439</sup> 乾隆五年四月二十一日內閣奉

上諭尚書那蘇圖奏稱現任三品以上之大臣父母病故者例得奏請賜祭伊母似可選恩等語那蘇圖之母著照典禮賜祭一壇可傳諭該部知之欽此

1440 乾隆五年四月二十二日內閣奉

上諭朕覽兵部纂修則例內稱從前進藏出征之官兵及受傷病故官兵所有預借銀兩免其追還係出自特恩未便纂為成例等語朕思兵丁捐軀行陣情實可憫其預借銀兩理應豁免若必待特降諭旨恐其中不無一二遺漏著著為定例凡遇有此等事件該部援例請旨則恩恤之典可垂久遠矣欽此

1441 乾隆五年四月二十二日內閣奉

旨烏合圖此摺著軍機處抄寄總督尹繼善欽此

1442 乾隆五年四月二十二日內閣奉

上諭朕看胡瀛年齒已老未必熟諳外任著留京以布政使相當之京堂補用欽此

1443 乾隆五年四月二十四日內閣

上諭今年春間雨澤尚屬調勻自四月以來漸覺愆期昨雖得微雨仍未霑足若再遲至旬日之後便

成旱象二麥收成必有減分數著禮部虔誠祈禱朕因近日少雨宵旰焦勞無時或失屢向大學士等咨詢籌畫感召

大和惠濟閭閻之道今日特召爾等九卿面降諭旨朕之念切憂勤無非為百姓起見蓋以百姓皆朕之赤子也君臣一體朕之赤子獨非諸大臣之赤子乎倘或年歲歉收朕與諸大臣官員豈至有饑餓之患而百姓饔飧不給嗷嗷待哺是猶為父母者晏然飽餐而聽其子之啼於側於心忍乎此數日中得邀

上天慈恩甘霖大沛自可仍望豐收設或竟成旱象則當預為未雨綢繆之計凡有可以裨益閭閻者爾等悉心籌畫及時料理庶幾有備無患朕御極五年以來畿輔之地雨暘不能時若上年秋成稍覺豐稔今歲春初頻得時雨朕心方為慶慰不意目下又有旱象朕於用人行政之間返躬自省仰承

上天眷顧之隆

皇考付託之重兢兢業業不敢有負此朕心可以自信者然一日萬幾不敢信為一無缺失也即大學士

等預參機務隨朕辦事又豈能保其一無過愆人苦不自知見人之過易見己之過難如鏡之能照物而不能自照也爾等現居九卿之列皆為朕之股肱倘政事或有失於寬縱及失於嚴刻之處爾等宜平心細想有應入告者或聯銜具奏或各抒己見據實直陳務期於國計民生實有裨益倘撫拾虛詞以用入行政為無可置議或搜索瑣事苟且塞責皆非朕所諄諄期望於爾等者夫朋友之間尚有規勸之義况我君臣誼闕一體者乎至科翰林郎中恭領等官皆得建言原冀有裨國是乃數年中條奏雖多非猥瑣鄙見即剽襲陳言求其見施行能收實効者為何事乎近日即科道官敷奏者亦屬寥寥即間有條陳多無可採即如官福奏奏工部一事有意苛求皆係空中樓閣毫無實據朕不准行降旨申飭如此等者謂之不閉言路可手部院奏事近來亦覺減少或因朕躬欠安之後高須調養有意減省遲延耶雖現在事務未至貽誤然如此存心乃婦寺之忠愛非人臣事君之

大義也若因朕此旨又復陳奏一二無關緊要之事以見供職之勤此又毫無識見者矣即如各部司官中頗有年力老邁不能辦事之員該堂官多以無甚過失姑為優容不知此輩久占員缺凡行取知縣及額外候補人員內才具可用者轉致壅滯無缺可補應將現任司員老邁者甄別沙汰令其休致此等素餐之人仍得原品回籍亦非過刻之舉此即各部所應辦之一事也總之我君臣皆當以實心行實事刻刻以民生為念不得稍有粉飾視為具文乃可上感

天和下裨庶政爾諸臣當交相勸勉以仰副朕意并將此旨傳與科道翰林等俾共知之欽此

1444 乾隆五年四月二十五日內閣奉

上諭朕因近日少雨命禮部虔誠祈禱今禮部奏稱尚未設壇即日時雨霽電此皆皇上念切民瘼至誠格

天之所致今四野既已霑足應請止設壇祈禱合無照例謝將之慶伏候欽定等語朕看昨日甘雨移時



麥苗雖已滋潤但恐尚未霑足此時若仍設壇祈  
禱未免為再三之瀆如十數日之後再降甘霖應  
行謝將倘仍復少雨應再行祈禱至禮部所稱昨  
日之雨由朕至誠格  
天所致此語非是朕之敬

天憂民實無時不切若謂降之後遂得時雨為朕至誠  
所感則是必未雨之前朕為民請命之心誠有未  
至朕用滋愧矣欽此

1445 乾隆五年四月二十五日內閣奉

上諭據安徽巡撫陳大受奏稱涇縣拉德二縣民性  
刁頑素稱難治此二邑知縣現經奏革伏乞揀選  
諸練強幹之員補授庶於地方有益等語著吏部  
將曾任知縣現在候補之員及行取在部候補之  
主事情願前往者共選數員帶領引見俟朕簡用  
欽此

1446 乾隆五年四月二十六日內閣奉

上諭兩淮鹽政三保著來京陛見其鹽政印務著運  
使徐大枚暫行護理欽此

1447 乾隆五年四月二十七日內閣奉

上諭朕聞得歸化城一帶近來盜案頗多或於道路  
肆行劫奪各寨內多係土默忒蒙古該同知聞或  
緝獲而歸化城都統等派出會審之員又未免袒  
護蒙古不據實辦理以致積案未結嗣後歸化城  
土默忒等處盜案著綏遠城建威將軍一併管理  
務於平時嚴行查緝以靖地方欽此

1448 乾隆五年四月二十七日臣任蘭枝面奉

諭旨朕前因召見太常寺卿陶正靖面詢政事之闕  
失伊奏稱從前處分魏廷珍一事不無屈抑朕思  
魏廷珍因循推諉毫不實心任事因伊自請罷歸  
乃草其職有何可惜之處而伊乃為之稱屈乎朕  
昨恭覽

聖祖仁皇帝實錄始知魏廷珍與爾同年朕心即疑陶  
正靖必係爾之門生今日問爾爾果云陶正靖係  
爾門生則此事或因爾曾經魏廷珍屈抑之處向  
伊言之故有此奏耳今日問爾奏稱從未向陶正  
靖言及此事若爾並未言及而陶正靖私心揣合

以師生年誼之故欲為袒護竟在朕前妄奏則此周朋黨之漸此風斷不可長陶正靖之人品心術大不堪問矣爾可將此旨傳諭陶正靖嚴加申飭欽此

1449

乾隆五年四月二十八日大學士九卿奉

上諭從來師生同年袒護朋比最為惡習關於風俗政治者不淺我

皇考當日屢垂訓誡力為整頓此風已覺改易近日以來又有復萌之意前日陶正靖因陞授太常寺卿具摺謝恩朕召伊進見面詢云現在兩澤愆期朕用入行政之間或有闕失召爾獨對爾當直陳無隱伊沉思良久奏云並無闕失惟有處分魏廷珍一事不無屈抑朕思魏廷珍歷來居官一味因循推諉從未擔承一事不過師友同年援引標榜博取虛譽有負國恩是以因其自請罷歸降旨革職伊既請離任已不供職與國計民生有何關係而陶正靖獨舉此一事為言豈得謂之直陳無隱乎彼時朕並無責伊之詞亦無疑伊之意及恭閱

皇祖實錄內紀載癸巳科拔取翰林知魏廷珍任蘭枝孫嘉淦等皆屬同年朕即疑陶正靖必係伊等之門生昨日禮部進見朕問任蘭枝伊果稱陶正靖係伊門生如此明係任蘭枝將魏廷珍屈抑之處向伊言之而有此奏據任蘭枝辯稱未曾向伊言及則必陶正靖私心揣合任蘭枝之意互相袒護矣因此事有關於師生年誼比周朋黨之漸特令任蘭枝將朕旨寫出申飭陶正靖並使眾人知所儆戒至於陶正靖係任蘭枝之門生朕問任蘭枝始知之並未向他人問及乃伊書寫朕旨作為問陶正靖而知之其居心詐偽避重就輕欲於筆墨之中逞其伎倆朕豈不讀書之主於字句抑揚間不能辨別其用意之所在乎據此則朕之所疑者確中情事矣且伊奏稱年老耳聾一時誤聽是儼然以舊臣自居試問伊自登仕籍以來為國家宣猷効勞者何事亦不過周旋世故依違觀望如魏廷珍之輩為仕途巧宦耳即此刻朕傳見大臣等而任蘭枝係進呈旨意之人竟在外逍遙自如以致諸臣等候良久屢經尋喚而後至是又何心陶

正靖任御史時似尚肯建言是以屢加擢用至太常寺卿尚欲用為學士侍郎等官此朕之本意也不料其人品心術竟不堪問如此任蘭枝陶正靖俱著交部嚴加議處欽此

附錄

(1) 查上年四月內兩路軍營俱賞賜藥物今將西北兩路應需藥物照上年例開寫

數目恭呈

御覽謹

奏

\* 擬

賞西北兩路駐防將軍大臣等藥物單

副將軍額駙策令

各色錠子藥一大匣平安丸一百九人馬平安散一瓶四兩

參贊大臣阿岱等三員

各色錠子藥一大匣平安丸一百二十九人馬平安散三瓶每瓶二兩

護軍統領阿琳等五員總兵官銜吳開增一員

喀爾喀貝勒貝子公台吉等九員計共十五員

各色錠子藥三中匣平安丸三百九人馬平安散十五瓶每瓶一兩

駐防哈密提督李繩武  
各色錠子藥一中匣平安丸五十九人馬平安散一瓶二兩

總兵任懷德一員  
各色錠子藥一小匣平安丸三十九人馬平安散一瓶一兩

駐防赤靖總兵官李如栢一員  
各色錠子藥一小匣平安丸三十九人馬平安散一瓶一兩

哈密等處官兵  
各色錠子藥二大匣平安丸一千九人馬平安散一勛紫金錠鹽水錠各三勛

鄂爾坤等處官兵

各色錠子藥三大匣平安丸二千九人馬平安  
散二勛紫金錠鹽水錠各六勛

乾隆五年四月十一日奉

旨照例賞給欽此

(2)

查中樞政考開載大臣官員差遣止論緩急不論遠近緩差係按品給馬急差則減從呈馳故較緩差馬數量減如應給十匹者祇給六匹遵行在案續於康熙二十六年兵部於緩急差遣之中又分別省分遠近其遠省差遣仍照中樞政考定例近省又將馬數酌量減如遠省應給馬十匹者近省祇給馬八匹但查歷年兵部支給驛馬俱仍照中樞政考原例其康熙二十六年近省減馬之例並未照行係於何年停止亦無案可稽蓋因近省所給馬數勢不敷用相沿未經奉行臣等查省分雖有遠近之殊而緩急差遣往返辦公則一旦驛馬係按站更換尚無苦累之虞是以兵部纂修則例內謹擬將康

熙二十六年之例毋庸纂入仍照中樞政考論緩急不論遠近

乾隆五年四月二十五日奉

旨知道了欽此

(3)

陳大受奏稱涇縣旌德二縣民性刁頑素稱難治此二缺請

勅部揀發或於引

見月官內酌量人地相宜者補授等語臣等看得涇縣旌德二縣員缺須得諳練強幹之員方克勝任應

勅吏部於曾任縣令現在候補人員及行取在部之額外主事情願前往者揀選引

見候

皇上簡用謹擬寫

諭旨進

呈

(4)

據伊勒慎奏稱歸化城向屬右衛將軍管土默忒俱屬該管之地今綏遠城將軍並未兼管歸化城是以土默忒亦非將軍該管之地等語臣等查得右衛將軍兼管歸化城之處兵部並無檔案可稽又謹查從前

頒給右衛將軍

勅書內並無兼管歸化城字樣與現在伊勒慎

勅書開載俱屬相同謹將新舊

勅書二道抄錄進

呈

(5)

都統永興等奏為查勘石門寨添設官兵等因一摺奉

旨軍機大臣等議奏欽此據稱至山海關踏勘得九

門口義院口二處至石門寨之路僅容一車行

走其城子峪至石門寨惟容一人一騎山路崎

嶇商賈難行再教場之傍地面狹窄實不能蓋

造滿兵三百名之房屋應將何雅圖所奏撥設

滿兵駐防之處毋庸議但石門寨雖非大路實

係九門口城子峪義院口三處之通衢恐有匪類偷竊人參貂皮私越亦未可定請照九門口派兵巡察之例於山海關新添六百名兵丁內派防禦一員驍騎校一員領催共兵三十名輪班前往巡察按半月一換令地方官在於石門寨擇高阜之處蓋造堆房十五間令巡防之官兵居住不時巡察如有徇縱私越等情立即呈揭本處大人官則指名題參兵則按法懲治等語查石門寨應否添駐滿兵必須詳勘該處情形今據都統永興遵

旨會同山海關副都統福和帶領何雅圖親身詳細

踏勘以石門寨各處山險路狹商賈本屬難行

且住屋口糧辦理多有未便難以撥駐滿兵等

因

奏覆永興等既經查勘確實應照所奏毋庸添駐

至稱派委防禦驍騎校各一員領催共兵三十

名赴石門寨更換巡查之處查匪類違禁私越

邊口惟在官兵不時上緊巡緝石門寨雖有綠

旗兵丁巡防今更添派滿兵員帶領兵丁更換

巡查以除熟識徇縱之弊自屬有益應照所奏

辦理仍令該管副都統等與九門口巡防弁兵一體勤加察訪務除宿弊其建應兵房十五間  
應請

勅交直督轉飭地方官估計詳請建造可也謹

奏

乾隆五年四月二十九日奉

旨依議欽此

(6)

皇清文穎內所有諸王宗室詩文已經進

呈外現在選錄諸臣詩文因從各文集陸續採取

篇數零星臣等擬分體繕錄成書一同恭呈

欽定

明紀綱目臣等現在酌定凡例各纂修官分朝

代編纂

1450 乾隆五年五月初一日奉

旨張永祈著授為欽天監八品博士即准食俸欽此

1451 乾隆五年五月初一日內閣奉

上諭內閣學士許王猷著仍帶日講官起居注欽此

1452 乾隆五年五月初四日內閣奉

上諭弭盜乃安民之要務朕聞各省聯界之處多有積窩巨匪久慣拳盜殃民隔省往拿必須赴地方官掛號添差稽遲時日又或地方官不能上緊協拿以致要犯聞風遠遁盜案久懸不結向蒙

世宗憲皇帝洞悉其弊

特降諭旨凡地方失事探實賊盜之處無論隔縣隔府

隔省一面差役執持印票即行密拿一面移文關會聖諭煌煌實為息盜安民之良法乃近年各省督撫奉

行不力以致被盜之省辦理掣肘即如豫省近日盜案於隣省關提查緝者頗多夫膺牧民之任者均有弭盜之責原不容有此疆彼界之分著嗣後

凡有海省聯界地方積窩逃盜訪實之後或徑行差捕或知會密拿庶盜案易結盜源漸清而隣境彼此均受其益如有司等仍前以為具文岐視玩忽經朕訪聞必於該督撫是問欽此

1453 乾隆五年五月初四日內閣奉

上諭各省納粟准作監生原為預籌積貯以裕民食起見若地方有司私收折色是巧開捐納之例矣在州縣之私意不過目前希得餘平將來又可免於折耗不知年歲豐歉難以預定一有緩急倉廩空虛何所倚賴彼時若欲買價值必至昂貴其弊不可勝言然此猶其善者若遇不肖州縣收銀在庫易致侵那從前虧空之弊大率由此豈可又蹈前轍今廣東總督馬爾泰奏稱捐監事例移歸各省交納本色貯倉查有潮州府屬海陽縣報捐穀四萬三千八百石現在實貯於倉者止有三萬一千三百餘石其餘皆收折色又潮陽縣實貯監穀不過十之二三其餘亦係折色現與王暮商酌暫為寬假嚴飭潮州知府勒限買足本色貯倉等語此

等州縣理應題叅而馬爾泰王墓止令勒限買補何以懲儆甚屬錯繆海陽縣知縣張綸炳潮陽縣知縣吳廷翰俱著革職所少本色倉穀於二人名下勒令賠補馬爾泰王墓著交部議處併諭各省督撫知之欽此

1454 乾隆五年五月初七日內閣奉

上諭白嶠著來京引見其淮徐道員缺著王鴻勳補授欽此

1455 乾隆五年五月初七日內閣奉

上諭湖北巡撫崔紀著來京陛見其巡撫印務著總督班第署理欽此

1456 乾隆五年五月初十日內閣奉

上諭朕聞得四川鹽道劉而位不勝鹽道之任著巡撫方顯於通省道員內揀選勝任之員題補鹽道將所遺事簡之缺著劉而位調補欽此

1457 乾隆五年五月十七日刑部尚書那蘇圖奉

上諭現今雨澤愆期朕宵旰憂勞無時或釋因思清理刑獄亦感召

天和之一端爾部現在監禁人犯內有一錢可原者著大學士軍機大臣等會同爾部詳加分別具奏候朕降旨其輕罪人犯有應減等者亦著查奏減等速行發落欽此

1458 乾隆五年五月十八日內閣奉

上諭入夏以來近京一帶雨澤雖降尚未霑足朕心甚切焦勞現在虔誠祈禱聞得山東郟城至蒙陰幾及千里俱成赤地此語雖未必實若果如此則是上年被灾之慶該地方官不實心辦理民人逃往隣省者多以致拋荒故未曾耕種烏望有收且兩月以來顏色未將兩水情形詳悉具奏山東與河南接壤河南二麥俱已登塲山東究屬如何至今總未奏知試問封疆大吏所應辦理之事孰有大於此者顏色豈竟不見及此乎可傳旨詢問令其速行具奏欽此



1459 乾隆五年五月十八日內閣奉

上諭湖廣鹽價一案已降旨令崔紀三保來京會同大學士該部詳定議朕思商民營運貿易亦須酌量情理未可執一偏之見繩之以法蓋商人逐子母之利豈肯虧本以從官吏之令但去其太甚則可耳若繩之以法欲令價值太減則勢不能行或轉至鹽少而價昂於閩關究屬無益崔紀三見未免過偏即如京師從前錢貴之時廷臣條奏設立官局嚴查囤積多方料理而錢價轉昂又如嚴禁燒酒而酒價益增究不能禁絕仍不過令若輩獲利而已議減鹽價一事其名其美而其實難行凡為大吏者必須虛衷斟酌務使商民兩便方可見諸施行毋得徒顧一己之名而不計事之有濟與否也爾等詳記此旨候崔紀三保到京會議時傳諭知之欽此

1460 大學士鄂 張 徐 字寄 直隸總督孫

乾隆五年五月十九日奉

上諭畿輔地方雖陸續奏報得雨但恐多寡不同麥收分數不一河南今年麥秋大稔彼地與畿輔接壤舟楫可通若直隸麥收不足以供本地之食用著孫嘉淦寄信與雅爾圖熟商發價糴買運至直隸以為裒多益寡之計如此辦理則直隸民食充裕而豫省之麥又不致耗費於燒鍋造麵無益之地似為兩便爾等可密寄信去欽此遵  
百寄信前來

1461 乾隆五年五月二十日內閣奉

上諭江南水利朕命汪澄德爾敏前往經理汪澄年老跋涉維艱難於遠行查勘著駐劄適中之地總察辦理德爾敏年力壯盛凡應履勘之處親身前去著於每年應得養廉二千四百兩之外加添銀八百兩以供道路資斧可傳諭江南督撫知之欽此

1462 乾隆五年五月二十一日內閣奉

上諭這所奏王士任著革職併案內人犯著該督會同將軍策楞嚴審定擬具奏福建巡撫員缺著廣東布政使王恕署理廣東布政使員缺著程仁圻署理欽此

1463 乾隆五年五月二十一日內閣奉

上諭湖廣鹽價一案必須商民兩得其平始可遵行無弊是以特降諭旨令在紀三保來京會同大學士該部詳妥定議朕曾向大學士等面降諭旨商民營運貿易亦須酌量情理若執一偏之見絕之以法必致有弊可詳記此旨俟彼二人到京會議時傳諭知之頃聞漢口地方有壅積多人向鹽店強行勒買之事果如此則是以有益之名受無益之實愚民並不靜聽辦理妄行生事自取罪戾矣著總督班第詳記曉諭俾各安本分並將商民現在情形秉公確查據實奏聞欽此

1464 乾隆五年五月二十一日內閣奉

上諭三保奏摺可抄錄密寄與總督班第令其秉公辦理欽此

原摺並漢高呈稿於二十二

日封交赫泰發兵部飛遞訖

1465 乾隆五年五月二十二日內閣奉

上諭順天學政錢陳羣奏請增添順天鄉試南北四字號中額此奏甚屬錯繆國家育才取士自有章程即正途人員所應得之缺亦有定制斷無有因人數衆多而多添官職之理目今進士之途就選者已覺濡遲而舉人之就選者則在二十餘年之外已有難於疏通之勢若希圖士子之稱揚感激再增中式之數則取者逾多而用者益覺遙遙無期彼中中式之人至老方得一官精力衰頹志氣怠惰國家何能收科日取人之實效乎錢陳羣身為學臣不知政體而為此沽名之奏甚屬不合交部察議具奏欽此

1466 乾隆五年五月二十二日內閣奉

上諭王士任由福建道員朕至屢加擢用至巡撫重任伊稍有自富潔已奉公感激圖報乃蕩檢踰閑婪贓作弊朕初不意其負恩一至於此昨據德沛列款奏奏已降旨著德沛等嚴審定擬今觀朱績暉所奏則王士任之喪心病狂小人之情態畢露矣至郝玉麟身為總督以王德純貪婪不法之員不但不行糾劾且題陞知府又於朕前以才情敏練辦事實心具摺保奏是誠何心郝玉麟著交部嚴加議處督撫為通省屬員之表率必操守廉潔品行端方庶幾樹之風聲可收激濁揚清之實效况朝廷厚給養廉使之用度充裕更不應私取餽送令屬吏得以籍口開巧取之門也閩廣風氣向號奢靡而郝玉麟鄂彌達蒞任既久未能屏除一切不知天下事當預防其漸始而食物饋遺食物不已必至玩好玩好不已必至金銀其為吏治官方之害者實非淺鮮朕今用德沛馬爾泰為總督其弊乃得肅清此亦人所共知者郝玉麟鄂彌達皆

皇考簡用之總督使當

皇考時敢於如此則早遭刑憲矣今敢如此是明欺朕年幼也朕非不欲保全其始終乃鄂彌達信用劣員王元樞庇護劣員袁安煜已經敗露革職而郝玉麟保舉劣員王德純又復敗露國家亦何賴於此等封疆大吏耶朱績暉據實陳奏甚屬可嘉交部議叙欽此

1467 乾隆五年五月二十五日內閣奉

上諭郝玉麟已交部嚴加議處兩江總督邱務著楊超曾前往署理其兵部尚書事務著史貽直兼管欽此

1468 乾隆五年五月二十六日內閣奉

上諭楊嗣璟著補授吏部侍郎其刑部侍郎員缺著張照補授欽此

1469 乾隆五年五月二十八日內閣奉

上諭吏部漢尚書員缺尚未補授著那善兼管吏部  
尚書事務阿克敦著調補吏部侍郎常安著調補  
刑部侍郎阿山著調補盛京兵部侍郎欽此

1470 乾隆五年五月二十八日內閣奉

上諭昨據湖廣總督班第奏稱楚粵頑苗勾結滋擾  
亟請用兵擒剿一摺經軍機大臣議復班第所  
請派兵五千名令鎮守總兵劉策名統領前往  
會同辰永道楊輔臣相機撲滅仍令督撫提臣商  
酌調遣再派官兵五千名預備調發分撥朕已降  
旨依議速行但思辦理軍務貴於迅速始不致坐  
失機宜總督班第駐劄武昌遠隔重湖聞報已遲  
文移往返多有擔閣而伊總理全省之事又不便  
令其久駐湖南惟有責成於巡撫馮光裕提督杜  
愷就近部將現在派出官兵圍搗竹岔山將沈老  
野等剿擒并將吳中林等楊高山等逐名勒拿追  
出各案苗盜姓名并廣西咨移內各苗盡行拿獲  
審擬凡有應行派兵運餉及如何料理之處一面

咨會總督一面舉行庶不至稽遲時日且此案經  
廣西巡撫廣東總督屢次移咨楚省督撫該督撫  
雖登檄飭催該地方官弁等而靖協副將姜煊曾  
靖州知州劉尚質通同掩飭希圖苟且了事况徭  
人在綏寧城步二縣明火執械打劫居民之案甚  
多該縣壯捕無幾汛兵單薄眾寡不敵該協坐擁  
重兵管轄武綏二營乃不發一騎一卒前往協捕  
姜煊曾劉尚質身任地方而玩縱苗徭劫擄本地  
隣邑報案累累殊屬溺職姜煊曾劉尚質俱著革  
職焉於軍前効力贖罪事竣之後該督撫提核其  
功罪另行具題請旨欽此

附錄

(1) 大學士伯臣鄂 等謹

奏為欽奉

上諭事乾隆五年四月二十七日禮部奏稱浙江巡  
撫盧焯咨送杭州府府學生員張永祚通曉天

文明於星象等因其奏奉

旨交軍機大臣詢問欽此臣等隨問張永祚據稱永

祚初年留意理數之學於史記天官書漢志太

初三統唐大衍元授時明大統諸書粗得其要

領於太初日法九百四十分積算三統八十一

分積算大衍三千四十分積算授時萬分積算

其多寡不同之處俱為之通算而得其合至

本朝時憲書推步七政之法於七政細草一書日

躔月離等類編為歌訣以資誦習及讀梅文鼎

天學疑問等書內有立象安命之法因窮究天

人合一之理遂一意專學占驗但占驗之法前

人止就一端而言如一時雲物何象一星隱見

何如即從此斷去以決休咎要未究其全局又

讀薛鳳祚天學會通一書內有天步真原與天

文實用互相發明於立象安命之法甚備其原

本於洪武年間譯天文之書其法畧與左傳禪

窳相同永祚不過管窺之見積習日久抄輯天

象原委二十卷俟更稍為增刪繕寫即可成帙

以備占驗之一則等語 臣等看得張永祚於

天官積算諸書俱曾留心於星象占驗之學亦

曾加意講求將來再加學習似可以備用查乾

隆三年十二月內有閩人薛鼎通曉天文經臣

等奏請將薛鼎在欽天監天文科行走奉

旨授為欽天監八品博士今張永祚亦應令其在欽

天監天文科行走其應否照薛鼎之例授與八

品博士之處臣等未敢擅便伏候

諭旨遵行為此謹

奏

乾隆五年五月初一日奉

旨張永祚著授為欽天監八品博士即准食俸欽此

(2) 湖廣總督班第奏為楚粵頑苗勾結滋釁亟請

用兵擒勦等因一摺奉

硃批軍機大臣等速議具奏欽此 擬稱城步縣橫

嶺等寨各苗與粵省勾結生釁敢於捉綁官兵

大屬不法非前草永頑苗自相仇殺可比今既

發兵擒勦未便延緩除飛飭各該標營遵照所  
派兵五千速起程前往聽候分撥防範堵禦并  
委鎮軍鎮劉策名星即前往統領各兵會同該  
道協等和衷商酌相機撲勦務獲各兇掃除餘  
孽以靖邊圉并咨會粵省一體查拿會勦及咨  
點省於交界之處一體防範誠恐所調之兵不  
敷咨商提臣再行派兵五千名預備等語

查楚省城步縣橫嶺等寨紅苗串合粵苗搶奪  
案犯吳金銀並捉禁堡自堡卒聲勢充橫等情  
節前經廣西提督譚行義

奏明在案今楚省官弁前至城屬各寨查訊勾結  
粵苗情事乃長安等寨頑苗復逞兇橫敢於捉  
縛官兵不法已極今據班第奏稱已照提臣杜  
愷咨派兵五千名令鎮軍鎮劉策名統領前往  
會同辰永道楊輔臣相機撲滅等語應如所奏  
令該督會同撫提二臣商酌調遣及時擒勦務  
靖疆圉再橫嶺等處附近苗寨甚多恐其邀結  
煽動致擾內地出須調兵彈壓防範今該督請  
再派兵五千名預備調遣分撥亦應如所奏辦

理又前據譚行義奏稱劫掠村庄搶奪案犯之  
兇苗首惡尚在未獲當此春耕之際山中烟瘴  
已發現今將兵暫駐義寧龍勝地方彈壓今長  
安寨苗口稱去投張將軍來擄殺等語查張老  
金係義寧江底村人則其勾串粵苗已屬顯然  
應令兩廣總督廣西巡撫提督速行會商調集  
官兵策應堵禦相機會勦以防勾結滋蔓並應  
令點省督提等臣於點楚連界之處嚴密添防  
以聯聲勢至稱調遣該地鄉勇應用並一切糧  
餉等項應令該督與撫提二臣協同妥議辦  
理凡緊要情事俱隨時奏

聞可也謹

奏伏候

諭旨

乾隆五年五月二十五日奉

硃批依議速行欽此

(3)

辦理軍機處為知照事

貴部院奏為楚粵頑苗勾結滋釁並請用兵擒  
勦等因一摺軍機處議覆於乾隆五年五月二  
十五日奉

硃批依議速行欽此相應抄錄知照

貴部院遵照辦理再湖南撫提兩廣總督廣西

撫提貴州督提等衙門

貴部院應即行抄錄移咨一體遵奉辦理可也

為此合咨前去

右 咨

湖廣總督

乾隆五年五月二十五日封交長安

(4)

查劉於義因大學士查即阿泰奏沈青崖等私  
運侵帑案內請將軍需道沈青崖等革職同別  
案革職之肅州道黃文煒交部核擬定罪追贓  
署督臣劉於義一并交部嚴察議處奉

上諭大學士查阿即泰奏沈青崖黃文煒張體義楊

肇熙等私運侵帑一事案情重大必須質審明確  
方可定擬著左都御史馬爾泰前往會同大學士  
查即阿甘肅巡撫元辰成逐一嚴審定擬具奏劉  
於義著解任前往聽候質審欽此嗣經左都御史  
馬爾泰等審理具題疏稱署督劉於義總理軍  
需並不實心辦事於奉

旨停運之後不將出口之糧飭令就近收貯任聽沈

青崖等私運糧四萬二千餘石含糊具奏又將

所存車碾巧稱里民情願認領交糧復將糧石

多開銀六分及四錢九錢至一兩不等雖審無

婪贓實跡但徇私故縱情罪顯著又日需物件

令楊汝樞置買致令賠墊貪鄙居心咎亦難追

應將黃文煒沈青崖張體義楊肇熙依監臨主

守將附餘錢糧私下銷補虧折之數瞞官作弊

者並計贓以監守自盜論四十兩斬雜犯徒五

年律應各杖一百徒五年劉於義應請革職交

部治罪等因經刑部議覆黃文煒等均應改照

侵盜錢糧例數滿一千兩以上者擬斬監候劉

於義合依官吏知侵盜錢糧匿而不舉及故縱

者與犯人同罪至死減一等律應杖一百流三

千里至配所折責四十板所有張體義等名下  
多擡車騾銀八千一百二十七兩與劉於義多  
開麥稞時估價值共銀三萬六千三百二十兩  
零及短發買辦物價二千九百兩係楊汝梗逢  
迎之項例應入官應在劉於義名下勒追完報  
等因於

乾隆三年十月內奉

旨依議欽此 今劉於義現在蘭州勒追銀兩

乾隆五年五月三十日奏

留中



1471 乾隆五年六月初四日內閣奉

上諭朕前於五月間聞得山東地方自郟城至蒙陰俱成赤地盖由上年被灾之處該地方官不實心辦理民人逃往隣省者多以致拋荒故土未曾耕種是以不能有收且兩月以來碩色未將兩水情形奏聞巡撫身任封疆野應辦理之事孰有大於此者碩色豈竟不見及此乎特降諭旨詢問之隨據碩色奏稱郟城蘭山蒙陰三縣連歲歉收是以郟城蘭山之民去歲流移獨多經臣奏明招徠據報回籍者二千二百餘名口而郟城一縣共收到貧民一百七十戶共大小五百八十二名口俱已安插接濟並未拋荒故土至上諭所及之郟城蒙陰二縣收成分數業經報到郟城冊開高阜地畝收成確有七分低窪地畝收成確有八分九分蒙陰縣冊開高阜地畝收成確有七分低窪地畝收成確有九分現今時雨疊降秋禾遍野益徵赤地之說毫無確據等語朕覽碩色所奏稍慰屢念之切今據左都御史陳世倌奏稱山東沂州府一帶數百里上年先旱後水冬間二麥並未播種流民

散至湖廣江西者將及萬人湖廣送回饑民經過江寧揚州竟有搶奪之事及回到山東巡撫碩色並不聞加以賑恤且因上年開報收成六分本年尚在徽比錢糧等語陳世倌此奏與碩色前奏迥然不同地方水旱災荒撫綏安輯乃封疆大吏之責碩色稍有人心何至粉飾蒙弊至此今陳世倌所奏如此若降旨詢問碩色恐伊不免回護難以取信惟有特差大臣等前往查勘庶能得其實情著兵部侍郎阿里衮會都御史朱必階馳驛前往沂州一帶地方詳細查勘務期秉公據實不必回護碩色亦不必回護陳世倌即與朕旨有不符之處亦不必絲毫瞻顧方不負朕之任使至彼地情形如何若果有灾荒應速行速辦事宜即一面辦理一面奏聞欽此

1472 大學士張 徐 尚書公訥 字守 湖廣總

督班 乾隆五年六月初四日奉

上諭湖廣鹽價一案朕已屢降諭旨前聞漢口地方有擁集多人向鹽店強行勒買之事又復降旨令

總督班第詳切曉諭各安分守法毋自取罪戾並將商民情形秉公確查奏聞今又聞得巡撫崔紀於三月間飭諭湖北各府議令暫食隣私現有崔紀與各府諭帖為據朕思為巡撫者必無有諭令所屬暫食私鹽之理不知崔紀果有此諭與各府否如果有之則不知崔紀何意而為此悖理之言爾等可作速將伊諭帖稿抄錄密寄與班第令其秉公確查據實具奏並將現在鹽務情形如何一面妥貼辦理一面速行奏聞欽此遵

旨寄信前來

1473 乾隆五年六月初六日內閣奉

上諭江蘇布政使徐士林條奏咨送流民事宜一摺又御史張重光奏為流民宜散不宜聚敬籌先事預防之法以安民業一摺俱交九卿會議昨左都御史陳世倌以九卿議覆遲延具摺奏朕覽兩人所奏其意見不一亦有可採各有未當之處著大學士會同九卿詳酌速議具奏欽此

1474 乾隆五年六月初七日內閣奉

上諭國家政事理惟一是而臣工所見或各不同各抒己意兩議三議陳於朕前不肯隨聲附和亦人臣以誠敷奏之意但其中亦有不可不杜其漸者如近來河道總督白鍾山所題開濬引渠一案九卿為前議訥親梁詩正為後議朕見後議內恐將來河工開冒銷之弊議駁為是以批准後議又廣東署撫王萼所題宋廷達誘姦八歲幼女一案吏禮兵工等衙門為前議刑戶部為後議朕見後議內引上年直隸尉州舊案曾改立決為監後候是以批准後議在朕一秉至公毫無成見披閱本章務加詳慎即兩議三議俱不憚煩勞惟求理之至當者而已矣但留心體察九卿兩議之事大率一部之中尚書倡議而侍郎隨之又或各部自成一局定為兩議未見有無所依傍直抒所見或一人或數人另為一議者是名為不附和而暗有附和之意名為不爭競而潛滋爭競之端朕所宜杜其漸者此也可傳諭九卿等知之欽此

1475 乾隆五年六月初九日內閣奉

上諭工部尚書韓光基丁母憂伊係旗員著照滿洲官員之例過百日後到衙門辦事不必開缺欽此

1476 大學士鄂張 徐 尚書公訥 字寄

山東巡撫碩 安徽巡撫陳 乾隆五年六月初九日奉

上諭朕聞山東之曹單二縣安徽之亳穎等州江蘇之蕭碭等處所生蝻子甚多查閱三省巡撫奏摺張渠曾奏徐州衛等處蝻子發生已極力搜捕務使淨盡至亳穎等州蝻子萌生之處陳大受則未曾奏聞碩色亦只奏稱地方近有蝻子萌動現在督捕並未言及是何州縣且係五月之奏不知近日情形如何可傳旨詢問陳大受碩色令其一面查奏一面即行料理毋致怠忽欽此遵

旨寄信前來

1477 乾隆五年六月十一日內閣奉

上諭貴州總督張廣泗屢次奏請陞見著於八月間起身來京貴州總督事務著雲南巡撫張允隨署理雲南巡撫事務著總督慶復兼理欽此

1478 乾隆五年六月十一日內閣奉

上諭據川陝總督尹繼善奏稱寧夏地方於四月間屢次微動城垣房屋偶有裂縫歪斜幸未倒塌人口無恙等語前歲寧夏地動為灾民人被傷甚眾朕心軫念多方籌畫經理期登斯民於衽席迄今將及兩載元氣未復而動搖之象仍未止息人情未免驚惶朕心深為憂慮因思

上天仁愛下民降灾示儆自非無因該地方人民果能

敬凜

天戒痛自修省斷未有不感格

天心俾其安居樂業者今動象久而未寧或係彼地之人因被灾之後愁困怨懟不知戴

上天垂象示儆之息而但以流移播遷為苦咨嗟憤歎

垂氣致異難以感召

天和亦未可定著該督撫將朕此旨即行傳諭俾各自  
猛省誠心悔改以為轉禍為福之本思之勉之欽  
此

1479 乾隆五年六月十一日內閣奉

上諭御史胡定奏稱慎簡人才吏部之職近日吏部  
選官不過查考冊籍名次某係頂選則令掣籤無  
所為鑒別掣籤之後雖有九卿驗看之例亦多無  
所可否至引見之時固有庸鑒然掌吏部者並不  
加以甄別惟聽取舍於九重殊失權衡之義况知  
人則哲自古為難俄頃之趨蹌奏對人品亦難猝  
定請勅下吏部嗣後選用官員務加甄別九卿看  
驗必加察核其人或宜繁缺或宜中缺或宜簡缺  
或宜調補州同或宜改就教職或宜原品休致俱  
出具考語九卿意見或有不同另出考語候引見  
裁決等語古來銓選之法屢變而皆不能無弊惟  
按冊掣籤尚有成法可稽比之前明之擬缺法選  
者實為公正此天下所共知者蓋吏部大臣與就

選人員素非相習其人品之賢否才具之短長斷  
不能周知即令其注缺亦不過觀其言貌年齒其  
人地之果否相宜亦斷不能保其悉當此皆理之  
顯而易見者至九卿驗看原令伊等將所知有出  
身不正行止不端者據實舉出亦非槩論尋常就  
選之人也今胡定欲委吏部以甄別委九卿以察  
核令其出具考語夫考語者考核其居行政之實  
即虞周三載考績之意今月選官員甫經除授何  
所據而加以考語乎且伊謂引見之時俄頃之趨  
蹌奏對人品難於猝定然則吏部九卿掣籤驗看  
之時獨非俄頃乎又何從而定其人品也至於酌  
量繁簡偶有改調此朕量才授任之意出自親裁  
則可若委之吏部九卿可乎不可乎近日御史中  
又有條奏各省衝疲繁難之缺不可令督撫揀選  
題補者夫以督撫身任封疆屬員之賢否易知現  
任之實蹟可據尚謂不可盡信胡定乃欲責吏部  
九卿周知天下人才於未經歷試之先能乎不能  
乎月官引見時偶有改教休致二項乃因伊等年  
力甚衰不得已而行之近見舉人就選多至二十

餘年以外伊等讀書一生得官垂暮乃無罪而廢  
黜之既無以服其心朕亦有所不忍也若令吏部  
九卿察核其勢必至多所放棄於情亦深為可憫  
此皆事之必不可行者吏部九卿皆朕之股肱耳  
日朕或咨詢採訪原可各行取見若著為成例令  
其甄別察核即在大臣可以信為無私而屬員親  
戚胥吏家人等皆謂其可操黜陟改調之柄必致  
致影射招搖而選人之奔競鑽營妄希趨避百弊  
叢生皆從此始矣胡定此奏甚屬錯繆特降諭旨  
開募之原摺發還欽此

1480 大學士鄂 張 尚書公訥 字寄

川陝總督尹 乾隆五年六月十一日奉  
甘肅巡撫元

上諭據川陝總督尹繼善奏稱四五月間寧夏地復  
微動房舍俱無坍塌已築城垣堅整如故各項工  
程現在修理等語上年八月間據鄂彌達奏報寧  
夏新築滿城土牛已經工竣其漢城以及平羅洪  
廣等處各城堡土牛俱現在次第修築當此地氣

尚未大舒間有微動之際若即令色磚誠恐土厚  
一時難乾磚土不能交合萬一震動難保無虞請  
將滿漢各城垛牆以及色磚之處暫緩目前待至  
地氣寧靜後次第色砌朕允其所奏近復據將軍  
都齊奏稱滿城工程將次告竣朕思寧夏滿漢城  
垣等磚工若已經完竣則已如尚有未竣工程著  
暫緩修理俟地氣寧靜再為興修則工程可以永  
固爾等可寄信與尹繼善元展成相度情形酌量  
辦理欽此遵

旨寄信前來

1481 乾隆五年六月十四日內閣奉

上諭據左都御史陳世倌奏尚書三泰年老貪鄙

各款三泰在

皇祖時即為京卿繼蒙

皇考屢次擢用至禮部尚書並

命協辦大學士事務伊雖無出衆之才而忠厚老成供  
職勤謹於祀典禮儀素稱嫻熟從無貽誤伊係屢  
經簡用之大臣豈有於此微銅鐵之類有所染指

甘盞蓋不飭之咎即據陳世倌所奏皆係伊子及家人匠頭等私相作弊三秦不能約束覺察則誠有之三秦尚無大過不必置問示朕保全大臣之至意其餘摺內有名之人著交與刑部都察院審明定擬具奏欽此

1482 乾隆五年六月十四日內閣奉

上諭江南寧國府知府程侯本著來京引見欽此

1483 乾隆五年六月十四日內閣奉

上諭安徽巡撫陳大受奏報自本年四月起至五月中拿獲盜犯五十餘名現在逐案審訊等語緝盜所以安民陳大受到任未久即能捕獲多盜具見實心辦事甚屬可嘉著交部議叙欽此

1484 乾隆五年六月十六日內閣奉

旨戴八乃屢次行劫之大盜鉅野縣知縣廖開春並不嚴行究問一任混供得脫實屬溺職廖開春著革職其少差解役之荷澤縣知縣并其洵著交部

察議具奏欽此

1485 乾隆五年六月十七日內閣奉

上諭有人陳奏各省遇有水旱成災地畝一經報荒之後即不許種蒔謂之指荒地畝以待州縣勘實出結又候上司委員查驗若復行種蒔便無可憑而歷經查驗動須數月雖有可耕之時往往坐廢以此被災之百姓嘗有不願報災以圖耕種收穫者而賑粟減糶等恩澤又俱不得沾受以救目前等語朕思報災定例夏災不出五月有司查勘易畢何至久稽時日且春田既災全賴及時趕種秋禾以資接濟凡有牧民之責者正當躬親督勸加意經理若因查災反致誤其耕種阻民生計有司之罪為不可逭矣人言如此甚有關係各省督撫務須留心體察如有前弊經朕訪聞惟於該督撫是問欽此

1488 乾隆五年六月十八日內閣奉

上諭原任湖廣總督署西安將軍額倫特於康熙五十七年領兵至喀喇烏素地方因進援色楞被賊衆數萬圍裹身著重傷猶奮勇力戰中鎗陣亡雍正元年議叙賞給騎都尉兼一雲騎尉將伊從前招募多軍功所得之雲騎尉歸併授為三等輕車都尉伊孫現在承襲例應再襲二次朕念額倫特官聲素著忠勇可嘉俟世次襲完之後將伊陣亡所得之騎都尉兼一雲騎尉准其永遠承襲以示朕格外恩之至意欽此

1487 乾隆五年六月十八日內閣奉

上諭據大學士趙國麟奏稱謝道承在祭酒任內訓導有方國學諸生因其陞任具呈懇留朕思內閣學士尚非繁劇之職成均事務可以兼攝且從前邵基隆任之後亦曾行之謝道承著仍兼國子監祭酒欽此

1488 大學士鄂 張 徐 尚書公誥 字寄

江西巡撫岳 乾隆五年六月十八日奉

上諭朕聞江西吉安饒州二府私販甚多皆由地方官疎忽之故夫私鹽充斥則官引必至難銷於鹽政甚有關係可寄信密諭巡撫岳濬嚴飭文武各官實力查拿毋得稍有疎縱欽此遵旨寄信前來

1489 乾隆五年六月十九日內閣奉

上諭國家章服之制所以辨等威重名器也越次踰分尚且不可若以革職之人濫用命官之頂帶其肆妄之咎更不可寬朕訪聞得原任提督楊凱原任總兵楊謙俱係獲罪革職之員今在揚州本籍仍帶紅頂花翎出入衙門與有職之人無異似此違越制度不安本分則其居鄉生事可知不可不加以懲儆著將楊凱楊謙交與該省督撫照例擬罪奏聞請旨並通行各省督撫遇有革職人員違例濫用章服及妄戴頂帽花翎蓋翎者即據實題奏毋得徇隱以滋僭越欽此

1490

大學士鄂張徐尚書公訥字寄

直隸總督孫山東巡撫碩  
湖廣總督班河南巡撫雅 乾隆五年六月

十九日奉

上諭據江蘇巡撫張渠奏稱上年白容丹陽二縣衙

署失盜欽奉諭旨令臣嚴拿毋使漏網臣隨嚴督

各屬選捕密拿於直隸之長垣東明二縣拿獲行

劫邳州衙署盜犯數人委員審訊據供打劫丹白

二縣出入情形逐一脗合且歷供未獲夥黨多人

姓名住址確鑿多係北方之人又招出上年行劫

湖廣沔陽州衙署乾隆三年行劫河南延津縣典

史衙署二案似此劇盜結黨數十人往來於湖廣

河南江南山東數省之間專劫官署庫銀肆肆已

極難容一名漏網臣已密咨直隸山東湖廣河南

督撫轉飭各屬查拿嚴究理合奏聞等語張渠所

奏乃慣劫衙署之大盜干法紀今既敗露若不

嚴究夥黨剪除淨盡將來必仍為地方之害張渠

咨文到日該督撫即密飭所屬加意辦理毋使匪

類一名免脫至獲犯起解之時更當選撥員弁兵

後沿途防範以免疎虞爾等可即寄信前去欽此

遵

旨寄信前來

1491 乾隆五年六月二十一日內閣奉

上諭王柔向帶按察使銜今補授辰沅靖道著仍帶

按察使銜欽此

1492 乾隆五年六月二十四日內閣奉

上諭向來各部題補司員經吏部議准如遇員缺緊

要恐部選之人未能諳練即令該堂官揀選題補

摺內將人缺緣由聲明帶領引見又各部題補人

員必先期咨明吏部倘所題之人與例不符准吏

部駁回如果合例者吏部註冊存案准該部自行

題補今工部題補員外主事四缺雖係奏明通行

題補但該員等合例與否並未知會吏部又未擬

有正陪朕已降旨曉諭近見各部亦間有似此辦

理者可將此旨一併傳諭知之欽此



1493 大學士鄂 張 徐 尚書公詢 字寄

江西巡撫岳 乾隆五年六月二十五日奉

上諭江西巡撫岳濬前在山東任內居官尚屬稱職

及調任江西以來辦理一切事務懶惰遲延朕屢

經批諭訓飭仍未奮勉即如鍾保條陳命盜一招

朕令各省督撫酌議今各省俱已陸續奏覆而岳

濬至今尚未奏到江西非邊遠之方酌議非難結

之事遲至一載置若罔聞經御史王興晉奏現

在交部察議又如屬員賢否朕屢諭督撫留心不

時陳奏岳濬任江西不為不久矣並未一次陳奏

是全不以吏治民生為念也爾等可寄信嚴行申

飭若仍前怠忽不知悔改則封疆重任難以保全

矣欽此遵

旨寄信前來

1494 乾隆五年六月二十六日內閣奉

上諭向來九卿辦理秋審朝審人犯分別情實緩決

可矜三等而惟緩決之內情罪輕重不一其果係

所犯重大實無可原因係久緩不復處決者雖終

弊因固本無足恤其有一緩可原尚在矜疑之列

者九卿承審時或因可矜之犯為數過多遂附入

緩決之內年復一年陳案日積以致此等人犯既

不至正法徒久淹獄底亦屬可憫今秋審在即著

九卿等於秋審朝審招冊內詳加分別凡緩決之

案果係情有可原者俱入於可矜條內以昭示罪

疑惟輕法外施仁之至意欽此

1495 乾隆五年六月二十七日內閣奉

旨均房營參將楊通仁侯苗疆事竣之日送部引見

欽此

此道記存俟事竣日發出

1496 乾隆五年六月二十七日奉

旨三保請扁額一摺俟伊起身之前大學士等提奏

欽此

附錄

(1) 湖南巡撫馮光裕奏為城綏苗徭不法並辦理軍務情形等因一摺奉

硃批軍機大臣等速議具奏欽此 據馮光裕奏城綏等處克苗肆橫情形提臣杜愷請發湖南官兵五千名進勦並另派兵五千名預備調遣之處與督臣班第所奏相同已經臣等於班第奏內議覆奉

旨依議速行欽遵在案茲據馮光裕奏稱廣西義邑小江徐安稱將軍之張老金屯住其地黨羽自必不少橫嶺各寨苗徭與彼勾結聲氣相通若大兵臨壓而各寨苗徭竄入小江固不可若小江奸匪竟合夥黨來助橫嶺尤不可應令廣西連撥兵二千名由粵楚交界之八十里南山早至地名水頭扼要駐紮俟本省官兵由西路入樹而進由北路風界老營盤而進廣西之兵亦由東南而進分路進攻使各苗徭首尾不暇相顧業經移咨廣西撫提廣東督臣如數派遣會

勦等語查橫嶺寨苗與義寧奸匪勾合情事顯然臣等前議原慮其有黨助竄逸之事是以議令兩廣總督廣西撫提速行會商調集官兵策應堵禦相機會勦以防勾結滋蔓今馮光裕既稱廣西會勦之兵應撥二千名先行扼要駐紮自應照所奏辦理其楚粵官兵分路合攻各事宜雖據馮光裕預為籌畫布置然亦應臨時審度地勢隨機決勝未可執一至稱委令寶慶府知府張琳總理軍糧衛永柳桂道劉應鼎監紀官兵功過賞罰俱應照所請委辦又稱審理擒獲苗徭將來審係附和為匪犯順情尚可以免死減等者應同為首倡逆之渠魁解省審擬具題若係下手網官傷兵攻汛之從犯律應斬決無可原情末減者請照貴州勦苗例即聽統兵鎮臣會訊明白於軍前正法示眾等語查網官傷兵之克苗等法無可貸者應聽統兵鎮臣等於審實之後即於軍前正法俾苗眾知所畏懼其稱各犯審擬並家口僉解分賞之處乃事定之後該督撫照例辦理之事應俟結案時該督

撫再行會同查核分別定擬具題至稱城步苗  
猥勾結粵苗為匪在城綏地方疊劫而靖協副  
將姜煊曾不惟不拿並兩縣所報各案俱為諱  
匿且以並無入過粵飾覆靖州知州劉尚質亦  
附和隱匿等情由已於前奉

諭旨內將姜煊曾劉尚質革職留於軍前効力贖罪  
毋庸再議謹

奏伏候

諭旨

乾隆五年六月初二日奉

硃批依議速行欽此

(2) 乾隆元年七月內總理事務王大臣及九卿等  
奉

上諭昨王士俊密奏一摺朕洞鑒其巧詐居心云云  
交與王大臣九卿等會議具奏欽此經王大臣九  
卿等會議得王士俊居心詐偽殘險成性巧於  
彌縫善為欺罔即如墾荒一事按畝加派貽累  
窮民上蔡武生王作孚拂其意指即誣以勒減  
鹽價聚眾鬧堂釀成立決重辟部議革職蒙

恩仍留侍郎之任復令署理四川巡撫而王士俊乃  
敢託於婢直以遂其私誣指臣工條奏為翻駁  
宗憲皇帝前案逆天害理肆無忌憚臣等謹議奸惡  
既已暴著

國法不可暫弛請將王士俊拿解來京交法司嚴  
審定擬明正其罪以為人臣怙惡亂政罔

上行私者戒等因具奏於乾隆元年八月內奉

旨依議欽此嗣經三法司會審將王士俊原奏內狂

悖之處逐加嚴訊王士俊亦自知逆天害理俯

首伏辜其挾私懷詐撰造邪言亂政欺朦負

辜辜

德實為臣民所共憤王法所不容應將王士俊照大  
不敬律擬斬立決等因於乾隆元年十二月內  
奉

旨王士俊改為應斬著監候秋後處決欽此又於乾  
隆二年正月內奉

旨王士俊著釋放回籍為民欽此

(3)

查原任兩廣總督鄂彌達因失察王元樞私自借給銅筋銀兩案內部議照失於查察例罰俸一年事在

赦前免議王元樞依將官錢糧私自借給與人者計贓以監守自盜論一千兩以上擬斬監候例應

擬斬監候援

赦免罪等因具題奉

旨依議欽此又於陳鴻熙掛餉掛價營私指派案內部議以鄂彌達並未具奏據詳批准掛餉掛價之案照應奏不奏之律降三級調用有紀錄二十次銷去紀錄十二次抵免陳鴻熙照違

制律杖一百本案已經革職應毋庸議等因具題奉

旨依議鄂彌達著銷去紀錄十二次抵降三級免其降調陳鴻熙著送部引見欽此又於袁安煜借帶營利恣肆妄行案內鄂彌達一任家人蕭二交

結屬員霸佔民利婪贓盈萬招搖不法部議將鄂彌達比照官員聽親友在任所招搖詐騙者革職之例革職等因具題奉

旨依議鄂彌達身為封疆大臣一任家人交結屬員

(4)

霸佔民利婪贓盈萬招搖不法實屬溺職鄂彌達著革職袁安煜借帶營利恣肆妄行似此貪劣之員鄂彌達曾在朕前獎以好語以致袁安煜肆無忌憚更屬狗庇袁安煜應賠贓銀著鄂彌達照數另賠一倍以示懲儆欽此

查原署兩江總督郝玉麟因閩浙總督任內將貪婪不法之王德純題陞知府又具摺保薦吏部議將郝玉麟照督撫薦舉官員濫將貪酷匪人狗情薦舉者督撫降二級調用雖有加級存紀不准抵銷之例降二級調用又因將王德純列為卓異於

赦後得受贓銀不行糾劾將郝玉麟照官員卓異後別犯貪贓不法之款審實者原薦舉之各上司同在一省不行揭報題參將督撫降二級調用雖有加級存紀不准抵銷之例再降二級調用所有加級紀錄不准抵銷等因具題一本於本月初十日進

呈至御史朱續暉等會審王德純貪劣各款案內祇稱郝玉麟將曾經奉

旨不准卓異之王德純並不將前

旨叙明朦朧保薦福州府知府其為徇情濫舉已無可

辭王德純自實授福州府知府以後貪賄婪贓

已近一載而郝玉麟又奏稱王德純才情敏練

保調漳州府知府查福州府知府係省會衝繁

疲難最要之缺王德純既有敏練之才不應轉

調外郡顯因王德純福州任內劣蹟昭彰斷難

掩蓋故特保調以圖脫卸此其巧為徇庇實屬

有心等語此案刑部尚未具題朱續暉等摺內

並未開有郝玉麟家人婪贓之處

(5) 據署福建布政使喬學尹奏稱候補武職人員

定例有職銜者照依職銜給與一半俸薪無職

銜者給與把總俸薪一半至文職人員奉

命簡發候補候者似應仰邀一例請嗣後按月支給候

補俸銀以資薪水等語查發往各省候補試用

人員於雍正七年奉

旨旨著該督撫等酌量每月給以三四金為薪水之資

本省公用銀兩內支發欽遵在案閩省於乾隆二年

造報存公冊內自雍正七年以後節年俱有候

補人員支給薪水總數惟雍正十三年乾隆元

二年未據開載是該省候補人員從前原有月

支薪水之例近年以來候補人員何以又未支

給該布政使奏內並未詳晰聲明復請月給候

補俸銀似與前奉之

諭旨不符又各省開報冊內候補知縣人員並學習進

士每月給薪水銀三四兩不等湖廣一省試

用文員俱係每月給銀五兩廣西一省學習進

士係每月給銀六兩其府州縣佐貳及雜職等

員各省月支銀兩有無多寡辦理俱不畫一臣

謹分晰另開清單恭呈

御覽應將喬學尹原摺抄錄仰請

勅交各該部詳查定議具奏再查喬學尹奏內所稱

之無職銜武員有係武舉發往各省候補者有

係草職未經開復分發効力酌量補用者定例

俱給與把總一半俸薪至發往各省題補守備

之武進士乃係有職銜之員山東河南二省亦

係給把總一半俸薪雲南貴州二省又係給千

總俸銀辦理亦不畫一應請一併交部定議謹

奏

乾隆五年六月初四日奉

旨知道了欽此

(6) 大學士伯臣鄂 等謹

奏為遵

旨議奏事雲南總督慶復等奏為奏覆遵辦各情節  
並節次會咨安南等因二摺俱奉

硃批軍機大臣等議奏欽此 查據慶復等奏稱都

奄土目翁貴忽帶土兵數百到馬鞍山揚言來  
請領回矣長該汛弁密訪具知其詐實欲藉是  
以恐嚇矣長餘黨令賊不敢再近都奄之計等  
語閱安南圖第二次咨文內開昨者都奄土目

已界首請領兇渠希解來付與接回肆諸市  
朝以示懲艾等情經該督等以矣長等既投到  
逾該土目冒昧邀請發人成何體統現今倫細

訊鞠具讞奏請

聖旨乾斷施行再為咨達等因咨覆又據該國第三  
次回文內開土目邀請矣長的身係在本國檄  
下亦已備在前茲蒙咨示以具讞奏請再為咨

達本國謹合惟命等情臣等看得安南內亂其  
順逆勝負各情形仍在未定所有連界各處關  
隘嚴謹防範及安輯民夷等事宜各該省俱以  
經遵照辦理無庸復議惟是矣長一案前據該  
督於其投降之時照依榜文許以不死隨奉

上諭今天朝既容其投降則安南自不能過問為彼  
國王計將何以辦理設使安南國王以為納彼國  
之叛寬彼國之仇竟行詰問該督等又將何詞以  
對可即馳信與慶復等就現在辦理情形悉心妥  
議務有以服安南國之王心而不失統御外藩之  
大體欽此欽遵寄信在案今據該督等所奏都奄  
土目揚言請領矣長安南兩次回文亦以請領

兇渠為言雖該國擾攘之際未知回文究出何  
人之手但彼既行屢請並聽後命而矣長又斷  
不便復行解送彼國自須酌議咨覆以結此案  
臣等謹公同酌議在矣長乘隙生亂固為該國  
之叛人但構蒙之初勢頗猖獗該國並未遣發  
一兵及時勤捕而密邇內地防範宜嚴彼時若  
非沿途將士既用兵彈壓又明切開諭則羣匪  
益熾煽惑愈眾為該國計實不免大恐是以姑

示招安以散羣黨俟探消息以便籌謀而矣長  
果震懾兵威解散夥衆束身歸誠俯首乞命

天朝覆育羣生義不殺降故稍緩其死押解所司聽  
候審擬此權宜使然亦信義所在嚮使彼時該  
國聞矣長叛亂即便遣兵勦捕並咨請協擊則  
一經就縛自應發交該國明正其罪安南之叛  
人即中國之匪類於彼於此何容區分今總督  
現在核定請

旨與該國自行究治無庸復行解送該國亦不  
必遠行請領臣等愚見如此應令該督酌照此  
意咨覆安南至矣長作何發落之處仍聽該督  
等另行訊擬具奏請

旨可也伏候

聖訓

乾隆五年六月十一日奉

硃批依議欽此

(7)

又查慶復等奏稱去年四月間設郡公已將衛  
南王鄭樞謀害仍扶立衛南王之弟為明都王  
等語而明都王行下告條內又云奉王兄優游  
頤養遜處行宮則是衛南王仍在再安南國王  
稱王其下多稱為公今衛南明都相繼稱王且  
告條內居然云王者受命正始為先語多僭妄  
或係鄭姓已有篡國之事此皆闕彼國順逆情  
形應令該督等再為探訪確信奏

聞

乾隆五年六月十一日奉

硃批知道了欽此

(8) 大學士伯臣鄂 等謹

奏為遵

旨議奏事湖廣提督杜愷奏為楚粵苗獠勾通合夥  
並添派官兵勦捕橫嶺尚寨等因一摺奉

硃批軍機大臣等速議具奏欽此 據杜愷奏稱廣  
西義寧所屬之大羅黃沙等寨獠人千餘會集  
義寧之地林於五月初一日到廣南村致令城

綏一帶苗徭恣橫而長安堡所屬都壘營頭中  
步紫壇等寨皆被勾通合夥現在酌撥官兵並  
鄉勇數百名交該備弁等星赴長安堡分佈彈  
壓一面飛咨粵省督撫提臣迅撥官兵招撫解  
散毋令蔓延楚地等語 查廣西提督譚行義  
與撫臣安圖前因義寧徭人煽惑滋事委令知  
府張永憲參將馬士英等帶兵前往查辦續又  
派兵策應因山中烟瘴已發將兵暫駐義寧龍  
勝地方彈壓嗣於總督班第奏楚粵頑苗勾結  
等事案內經臣等議令兩廣總督廣西巡撫提  
督速行會商調集官兵策應堵禦相機會剿以  
防勾結滋蔓等因奉

旨依議速行欽遵行文知照粵省督撫提臣各在案  
嗣又據馮光裕奏請廣西會剿之兵應撥二千  
名先行扼要駐紮經臣等議照所奏辦理等因  
奉

旨依議速行欽遵行文知照亦在案今義寧等處兇  
徭暗結楚苗漸致恣橫應令乘其與都壘等寨  
尚未顯肆糾結之時及早經理即因現在會剿  
之兵威令其震懾解散毋致蔓延楚地查總督

馬爾泰現赴廣西巡查邊海應將此事交令馬  
爾泰就近會同撫提二臣妥酌辦理又稱橫嶺  
等寨頑苗兇悍所在官兵慮不敷用除前調官  
兵五千名外又派撥湖南提標等營兵一千五  
百名赴城綏軍營聽候領兵鎮臣分佈遣用其  
湖北預備兵二千五百名湖南預備兵一千名  
如有需用即為遣發等語查此項官兵五千名  
原係

奏明另派預備調遣之用今社愷續派之兵即係  
預備兵五千名內之數應聽隨宜分撥遣用可  
也謹

奏伏候

諭旨

乾隆五年六月十二日奉

硃批依議速行欽此



(9) 大學士伯臣鄂爾泰等謹  
奏為請

旨事兵部咨稱據山西巡撫石麟疏稱山西平魯路  
守備李通出征西路雍正十年八月內在庫庫  
扯兒地方陣亡今伊嫡子李先捷請廕查李先  
捷實係李通嫡子理合具題等因奉

旨該部議奏欽此科抄到部但李通陣亡之案從前  
並未交部應行文軍機處有無守備李通陣亡  
之案查明咨覆過部到日再議等因移咨前來  
臣等查雍正十年八月內護寧遠大將軍印務  
副將軍張廣泗副將軍內大臣常賚奏稱署大  
將軍岳鍾琪奉

旨赴京於八月初五日到科什圖副將陳經綸次日  
派山西守備李通千把呼君愛等帶兵二百名  
護送前往於初十日據副將陳經綸報稱本月  
初九日午時據駐防庫庫扯兒守備秦信呈稱  
初七日夜有科什圖差送岳大將軍千把呼  
君愛等帶領兵丁到庫庫扯兒報稱千把總送  
畢岳大將軍於辰時回來行有二十多里遇見

賊有千數前面賊竟穿漢人衣服李守備說  
想是科什圖哨路官兵迎上去問相對至近見  
是賊夷千把總同李守備四敵之時千把總槍  
山李守備已經陣亡等情理合奏

聞等因在案查守備李通在庫庫扯兒地方遇賊陣  
亡情節經護大將軍張廣泗等具摺奏報因事關  
軍機將原摺存案未曾發出交部從前兵部咨  
查守備劉士瑪鄂隆磯陣亡一案經臣等查奏  
請

旨交部辦理奉

旨知道了嗣後如有此等事件著奏明交部欽此茲  
據兵部咨查守備李通陣亡情節相應查叙軍  
機舊案

奏明請

旨發交該部照例辦理可也謹

奏請

旨

乾隆五年六月十六日奉

旨知道了欽此

(10) 臣等看得張渠所奏鉅野縣知縣廖開春開脫大盜實屬溺職自應遵

旨將伊革職至荷澤縣知縣并其洵少差解役之處

亦例有處分應將張渠原摺抄錄降旨交部一併議處

(11) 據和親王奏稱看守

雍和宮原有侍衛九員護軍參領四員共十三員內除

已陞病故侍衛四員外祇有九員輪流看守尚

不敷兩班之數請添設侍衛四員由看守

雍和宮官員人等內揀選補放再看守

雍和宮滿洲蒙古十二個佐領下所有護軍校前鋒護

軍等不敷輪班之用前經八旗護軍統領覆准

護軍統領偏頭條奏於鑲白旗兼在上三旗佐

領內分撥六個佐領護軍校前鋒護軍一同看

守在案但伊等祇敷三班之用現在旗下驍騎

官員兵丁俱隔四五十日進班一次應將此六

佐領下驍騎官兵亦令一同看守

雍和宮各門堆房等語 伏查

雍和宮正門及

琉璃花門等五門現在每處或侍衛或護軍參領

一員護軍校一員護軍九名看守其餘各門堆

房俱係驍騎官兵看守伏思

雍和宮供奉

世宗憲皇帝聖像所有輪直官兵應照

內廷宮殿之例令

大門上侍衛並八旗官兵輪流敬謹看守所奉

諭旨甚明臣等酌議

雍和宮正門應請於

大大門上侍衛內輪派侍衛班領或侍衛十長一

員侍衛十員敬謹看守

琉璃花門等四門應令八旗護軍統領每處各派

護軍參領一員護軍校一員護軍九名看守其

周圍堆房六處及

平安居前門

如意門此八處現係驍騎官兵看守應交八旗每

處各派驍騎章京一員領催披甲十名看守原

看守

雍和宮之滿洲蒙古漢軍十五佐領俱令照例存貯公

中其侍衛尼雅哈等四員今在

大門上當差行走和親王應請仍令照管

雍和宮事務統俟

命下之日行令各該處一體欽遵辦理可也謹

奏

乾隆五年六月十九日奉

旨依議欽此

清漢漁

(12)

查各省督撫走差家人與該省提塘俱相熟識  
是以遇有進獻方物該提塘打聽得知並通知  
各提塘遂致妄行開入邸報各報本省至於

賞賜之物則督撫家人往往告知提塘屬其開載邸  
報以示

愚榮不知此皆不應開入邸報之事應交兵部傳齊

各省提塘面行嚴飭嗣後凡遇督撫以及鹽政

關差所有進獻方物或奉有

賞賜俱一槩不許於邸報內開寫並令奏事官員

諭各督撫等費奏家人等知之謹

奏

乾隆五年六月二十一日奉

旨知道了欽此

(13)

查各省自理贖錢歷來悉由外結部內無案可稽  
每年俱以並無自理贖錢一語題覆遂致積習相

沿因循隱匿著通行直省務須按年報解如再隱  
匿不報一經發覺嚴加議處等因欽遵在案又查

乾隆二年二月內刑部會同戶部議准元展成於  
山西按察使任內條奏晉省每年應解部贖錢

留充因糧衣藥等用將贖錢案件及支用數目  
報部查核如有盈餘留為下年之用如贖錢不

敷支領於該省存公銀內動支補給通行直省  
督撫酌議等因續據各省題覆俱照元展成條

奏之例亦經部議准在案

臣等查各省贖錢除雲貴廣東廣西並無自理  
贖錢外其餘各省贖錢多者二千餘兩少者數

百兩以及數十兩不等自乾隆二年定例以來  
每年各省將已未完數俱於歲底彙報刑部其

用過獄囚棉衣等項數目俱每年歲底彙報戶部如有盈餘留為下年之用如有不敷於該省存公銀內補給遵行在案今臣等酌議若所存盈餘無多應仍聽本省留充下年因糧衣藥等費如或累積不解易放地方官挪移侵隱之弊請嗣後各省贖銀有逾年存積至一千兩以上者應令該督撫解交該部如此則每年既造冊報銷積多又行解部自不致有滋弊竇請將刑部此本發出將臣等所議叙入部議內著為定例可也

乾隆五年六月二十六日奉  
旨是欽此

(14) 大學士伯臣鄂 等謹  
奏為遵

旨議奏事湖廣總督班第奏攻勦克苗一摺奉

硃批軍機大臣等議奏欽此 查城綏苗徭不調法

兵攻勦一案經總督班第巡撫馮光裕提督杜

愷先後陳奏俱經臣等議覆奉

旨依議速行欽遵在案茲據總督班第奏稱大兵齊集先擇克頑之寨攻打一二以壯軍威則烏合苗眾自必喪胆其有被脅附和悔罪投誠者准其協攻克寨出力効命以贖前愆又鎮夷哨係橫坡地間克寨後路長安堡係與廣西義寧懷遠二縣苗徭接壤現今義寧之大羅黃沙等寨狂人歷令綏邑都壘等處徭人合夥附款均須重兵防堵又從前城步徭盜餘孽沈老野等復踞竹岔舊巢乘間為匪但竹岔係在界溪背後相度機宜黃桑營屯劄之兵應由赤板并陽石兩路而進城步縣屯劄之兵應由城雷坡并牛路坡兩路而進約定期先勦界溪竹岔庶糧運無阻然後會同新寨地方攻打長坪橫坡地間等寨始獲萬全再粵省地方已經咨會撥兵協勦現在軍前官兵雖已敷用但寧多為預備於北南二省再備兵三千五百名以待調遣至軍永苗地雖無誘脅情事然不可不重兵防守應否召募餘丁巡防俟會商酌議辦理等語查苗寨山深箐密大兵進勦必酌量緩急次第分路合攻勦撫並用務使兵丁糧運開通并彈壓

附近苗寨不致邀結煽動方可及時撲滅迅奏

膚功伏查本年五月二十八日欽奉

上諭辦理軍務貴於迅速總督班第駐劄武昌遠隔  
重湖文移往返多有擔閣惟有責成巡撫馮光裕  
提督杜愷凡應行派兵運餉如何料理之處一面  
咨會總督一面舉行欽此今該督所奏應請

勅交馮光裕杜愷等相度機宜妥酌辦理其所稱召

募餘丁巡防草未之處查楚粵二省官兵現有一  
萬二千名足敷攻勦防範之用且新募之兵  
俱未嫻習於苗地防守亦無裨益自可無庸召

募至所奏姜端曾現辦軍務叅將薛瑞現派領  
兵叅將鄭元文現今預備官兵聽候調遣俱未  
便交代另易生手俟軍務事竣再行交代等語  
查姜端曾已經革職現留軍前効力毋庸再議  
至薛瑞鄭元文俱應照該督所請仍留辦理軍  
務俟事竣之日再行交代可也謹

奏伏候

諭旨

乾隆五年六月二十七日奉

旨依議欽此

乾隆五年閏六月初一日內閣奉

上諭朕惟民生在勤勤則不匱農工商賈各有恒業以贍其生失業則俯仰無資力勤則衣食自裕誠使國無游民人無遺力則治生之道既廣養生之源日開雖有水旱偏災必不致於流移轉徙周禮大司徒頒職事十有二以登萬民而不任職業者有罰正所以使民各知勤勉而游惰是儆也朕念切民依情殷求瘼農桑衣食之本計所以為萬方赤子經度諮詢者至詳且悉矣惟念游惰之輩罔知生理不農不工不商不賈游手坐食動自誣曰耕則無田工則無師商賈則無資本不知七尺之軀果能服勤務實即惰力亦可資生農工商賈皆樂收而為助不能勤力則雖生長富家受承世業而浮蕩不檢怠惰自安本業日荒饑寒立致生理既窘必且無所不為此等之人在一家則為一家之敗類在一邑則為一邑之盡民一遇偏災輒輕去其鄉轉徙流散國家以愛養為心撫綏為政一切資送安插不加驅別是以農民之復業者固樂遂生而游惰之資遣者轉為得計夫至轉於溝壑

坐視不救固有所不忍而平日之教導約束何可不亟為之籌畫膺牧之任者又何可因循姑息一聽其自為而不加察乎嗣後各省督撫務須董率地方官實力稽查凡有此等無所事事不守本業之人其有父兄族黨者令父兄族黨嚴加管束單丁獨戶令鄉保多方化導使其各尋生理能耕種者服田畝能手藝者習工作知貿易者從商賈勝負擔者備工度日不違約束者量行懲治務使人自食其力各謀其生則生計益覺寬舒風俗自歸淳厚豐年既多善類數歲亦少流民矣地方有司務實力奉行令僻壤窮鄉咸知朕意欽此

大學士鄂 張 徐 尚書公訥 宇奇

直隸總督孫 乾隆五年閏六月初一日奉

上諭緝盜乃所以安民防奸即所以弭盜前因直隸之長垣東明二縣大盜甚多往來於湖廣江南河南山東數省之間專劫官署庫銀大為地方害曾降諭旨飭令嚴拿今聞俱已拿獲密訊確供凡行劫丹陽句容邳州延津沔陽州各案匪類皆出自

長垣東明二縣則該地方風俗惡劣不問可知若  
有司平日果能加意整飭何至積成盜藪蔓延數  
省且行劫之後復歸本地羣盜既得贓物豈無花  
消敗露之處該縣等若有意防奸何難訪拿乃必  
待鄰省嚴捕而後獲則該縣等漫無覺察更百喙  
難辭矣嗣後該督當倍加留意務絕盜源毋得以  
行劫之案已經獲結遂稍存疎忽之意可傳諭孫  
嘉淦知之欽此遵

旨寄信前來

1499 乾隆五年閏六月初二日內閣奉

上諭前以辰沅道楊輔臣不實心辦事已經解任其  
員缺著王柔補授所有楊輔臣委辦總領調度贊  
理軍機等事即著王柔辦理今聞衡永道劉應鵬  
原係委往軍前監紀官兵功過審理苗犯供情之  
員而該員具報情事每彼此互異多不確實亦難  
勝監紀審理之任其所領辦事務亦著歸併王柔  
管理倘王柔一人勢或不能兼顧著該督撫會商  
委員協辦欽此

1500 大學士鄂、張、徐 尚書公訥 字寄

甘肅巡撫元 乾隆五年閏六月初二日奉

上諭甘肅巡撫元展成自到任以來從未將屬員賢  
否逐一陳奏元展成原係貴州巡撫因辦事錯悞  
革職之員朕因其才尚可用復授為臬司隨遷擢  
巡撫乃伊受朕舉廢之特恩並不刻自奮勉于一  
切事務殊未見實心實力為國報効之處是何意  
見爾等可傳旨詢問之欽此遵

旨寄信前來

1501 乾隆五年閏六月初四日內閣奉

諭署邛州知州褚蔚書著來京吏部帶領引見欽  
此

1502 乾隆五年閏六月初四日內閣奉

上諭朕聞廣西思恩府懸缺已久新任知府徐德泰  
引見已逾十月尚未到任苗疆關係緊要若此際  
徐德謙尚未到粵著該督撫等於通省知府內揀

選調補或知府以下有可以勝任之賢員揀選題  
補即令其赴任徐德泰到粵之日遇缺另行補授  
欽此

1503 乾隆五年閏六月初四日內閣奉

上諭廣西宜山縣知縣陳謨前引見時曾降旨以知  
縣補用伊在粵年久熟諳地方情事著仍發往廣  
西交與該督撫以本省知州題補欽此

1504 大學士鄂 徐 尚書公訥 字寄

廣東廣西總督馬 廣西巡撫安 乾隆五年閏六月初五日奉

上諭朕聞五月間廣西興安地方有楚苗糾眾入境  
又有粵西懷遠融縣永安之狗彘聚集千人欲搬  
往城步知縣縣丞巡檢把總等前往撫諭而克撥  
竟不受撫夥眾將知縣倪國正等五員捉回巢穴  
有巡檢魯器受傷深重未卜存亡夫興安義寧地  
方相去廣西省城不過百里而苗彘敢於猖獗如  
此則平日之漫無約束可知朕思楚粵苗彘共為

旨寄信前來

倚角楚省攻捕甚急則潛入於粵若粵省攻捕甚  
急又潛入於楚必須兩省併力會勦務蓋根株庶  
可削平苗逆寧謐地方今楚省已責成巡撫馮光  
裕提督杜愷專辦矣而廣西總督馬爾泰現在廣西  
太平府可速赴桂林省城就近相機調度并將朕  
旨移文知照楚省撫提協同辦理至廣西省城百  
里內外苗彘蠢動若此巡撫安圖竟不奏聞是何  
意見爾等并傳旨詢問之欽此遵

1505 乾隆五年閏六月初八日軍機大臣奉

上諭湖廣總督班第奏巡撫崔紀袒獲崔乃鏞等  
事二摺朕降旨令崔紀明白回奏今據崔紀回奏  
情節意甚狡詐辭復支離如崔乃鏞解漕赴淮擅  
動存公銀兩崔紀奏稱崔乃鏞稟明德沛批有印  
領及朕面詢乃稱德沛於崔乃鏞稟內批候巡撫  
批示是德沛並未批准明矣且德沛即便批准如  
心知其不可亦豈得附和准行乎崔紀又稱伊先  
曾駁二次因崔乃鏞再三苦求始強勉准行夫督



撫之於屬員於事理之當行者雖不求亦應准於  
事理之不當行者雖屢求亦應駁豈有因屬員苦  
求而遂瞻徇情面恃理以從者乎試問崔紀若非  
伊欲袒獲之崔乃鑄亦肯施之於他人乎至於崔  
乃鑄被泰之後查出虧空銀八百兩崔紀奏稱恐  
貽累於己是以代為賠墊夫屬員泰有虧空例於  
本身追賠及力不能完然後著落上司罪亦不過  
失察從未有屬員甫泰而上司即為代賠者伊非  
於崔乃鑄有固結之私情肯如此乎又司道府等  
捐助崔乃鑄一節崔紀奏稱並未授意夫巡撫既  
為代賠即不明授以意司道自必仰承捐助此又  
顯而易見者之情事也崔紀又稱臣若與崔乃鑄  
稍有私弊德沛豈肯不見諸彈章殊不知當日德  
沛奏劾崔乃鑄劣蹟累累原即奏稱崔紀與崔乃  
鑄素有交情若照督泰撫審之例交崔紀承審必  
為開脫朕是以特令新任總督班第審理崔紀猶  
懵然不知乎又委巡捕孟炳署理知縣一節崔紀  
奏稱臣何私於漢軍孟炳而委署之夫同為屬員  
止當論其才具可用與否何論漢人漢軍令崔紀

故為辨別其懷挾私心於此益見矣崔紀受朕深  
恩疊加擢用至於巡撫伊所到之處偏執任性事  
多徇私與總督皆不和表朕尤望其悛改屢有慶  
分恚皆寬宥復加訓誡以觀其後效乃伊全未儆  
省不肯淨滌私心殊負朕委用成全之德意難稱  
封疆之重任著交部嚴察議奏欽此

1506

乾隆五年閏六月初八日奉

上諭江安糧道王之琦年力稍衰不勝糧道之任著  
署總督楊超曾於通屬事簡道員內將可勝糧道  
之員揀選調補所遺員缺即著王之琦補授欽此

1507

大學士鄂 徐 尚書公訥 字寄 山西巡  
撫石 乾隆五年閏六月初十日奉

上諭據石麟奏稱汾州府屬五州縣從前少雨今於  
六月二十六七八等日均得透雨又稱汾州屬二  
麥俱有七分收成乃所開米價卑內汾州米麥價  
值較前增貴夫六月始得透雨已在麥收之後何

以二麥尚有七分收成既有七分收成何以米麥價值比未收之前更貴石麟所奏殊覺矛盾可傳旨詢問之欽此遵

旨寄信前來

1508 乾隆五年閏六月十二日内閣奉

上諭石麟倫達禮俱已丁憂山西巡撫員缺著吏部侍郎喀爾吉善補授西安按察使員缺著甘山道圖爾炳阿補授欽此

1509 乾隆五年閏六月十三日内閣奉

上諭湖南城緝苗徭與粵苗勾結滋擾前已降旨責成巡撫馮光裕提督杜愷辦理而該督撫等會奏以鎮守總兵劉策名統領擒剿事務朕因劉策名平素辦事頗有幹濟是以批允照督撫等所請行今聞湖北湖南先後派發之兵已及萬餘而管兵將弁皆係各標之人非該鎮所屬轄凡有調遣多不能如期會合恐致有悞軍務所係非輕用是特諭該督撫提等務各嚴飭本標將弁凡派往軍前

者均受總兵劉策名約束而劉策名亦須軍令嚴明不得少有瞻顧有應恭揭者即行恭揭庶得肅軍威而振士氣如或總兵劉策名實有不能節制之勢則著提督杜愷親往統領仍令劉策名協同參贊杜凱既親往軍前常德乃通衢要路不可無大員鎮守即著襄陽總兵張天駿暫移駐常德以資彈壓至調兵運餉事宜聽撫提二人辦理務須早奏膚功毋致因循尋師老可傳諭班第馮光裕杜愷等知之欽此

1510 大學士鄂 徐 尚書公訥 字寄 廣東廣

西總督馬 乾隆五年閏六月十四日奉

上諭廣西桂林府義寧縣屬之秦江苗地與湖南城緝二縣之紅苗兩省勾結劫掠滋事湖廣調兵萬餘并移咨粵省撥兵二千名會勦未經寧帖而粵省又聞有義寧地方徇徭不受招撫將知縣巡檢等官五員拿去今復據提督譚行義奏稱廣西慶遠府宜山縣之邱索白土等寨焚劫殺擄甚屬不法現派官兵二十名土兵二十名正在辦理而義

寧秦江界連紅苗事機重大非六七千官兵不足以分撥會勦除慶遠有事及左右二江營汎逼近安南不便輕調外止可得官兵三千六百餘名令梧州副將許應虎總領侯宜山事竣臣即赴義寧調度等語夫廣西近日防備安南勦除猺逆又兼接應楚省正值多事之秋且通省調兵至數千之多而五月至今又經兩月之久總督馬爾泰現在廣西何以並不奏聞前已降旨令其即赴桂林就近調度矣務須速為部署妥協辦理毋得觀望遲延以致債事並目下如何情形如何料理之處令其速行詳奏爾等可傳諭馬爾泰知之欽此遵

旨寄信前來

1511 乾隆五年閏六月十五日內閣奉

上諭梁詩正內廷入直敏勉勤伊父年屆七旬從前所得誥命係翰林品級今特加恩著照侍郎官階給與封典欽此

1512 乾隆五年閏六月十六日奉

旨世臣稽察宗學甚不安靜不必管理宗學事務著吏部另行開列請旨欽此

1513

大學士鄂 張 徐 尚書公訥 尚書海 納 字寄 貴州總督張 乾隆五年閏六月十六日奉

上諭楚粵苗徭勾結滋事勢頗猖獗數邑震恐朕已降旨湖廣責成馮光裕杜愷辦理廣西責成馬爾泰譚行義辦理乃五月至今兩月有餘尚未竣事恐師老於外貽誤地方深繫朕念貴州總督張廣泗熟諳苗情頗具識力前降旨令伊來京陛見湖南係必由之路著便道前往詳察情形細詢機勢與馮光裕杜愷等期會於適中之地而相商論或大局已定佈置無難該撫提即可以完結或事無頭緒尚費周章須張廣泗留楚<sub>理</sub>張廣泗一面據實陳奏有應料理處即一面與該撫提等商酌調度毋得瞻顧亦不必謙讓俟奏到之日朕另降諭

旨至前旨令張廣泗候張允隨到黔署理總督印務後於八月起身來京今此旨到日可一面知會張允隨令速赴黔省一面將地方之事交布政使署理營伍之事交提督署理伊即速起程赴楚爾等可作速傳諭張廣泗并令張廣泗將朕此旨札寄馮光裕等知之欽此遵

旨寄信前來

<sup>1514</sup> 乾隆五年閏六月二十一日軍機大臣奉

上諭三保著留京另有交辦事件其兩淮鹽政員缺著準泰補授現在會議楚省鹽價著準泰三保一同入議欽此

<sup>1515</sup> 乾隆五年閏六月二十三日內閣奉

上諭據浙江巡撫盧焯奏稱海寧尖山壩工實係全塘鎖鑰臣率同兵備道相度指示自開工以來未及五閱月而全工已竣此係跨海填築不比內地工程所有承辦各員弁俱能實心實力克著勤勞謹分別等次繕摺進呈可否仰懇天恩勅部議叙

至志心贊襄稽覈錢糧工料之布政使張若震往未督工之按察使完顏偉與督催運石船隻之蓋驛道趙佃敷均係大員未敢列入等次相應聲明等語尖山壩工辦事人員俱著照盧焯所請交部議叙至盧焯董率有方張若震完顏偉趙佃敷協辦盡力著一併議叙具奏欽此

<sup>1516</sup> 乾隆五年閏六月二十三日軍機大臣奉

上諭據湖廣總督班第奏稱湖南巡撫馮光裕於閏六月初七日病故南省現在辦理軍務一切機宜不可刻緩臣即由陸路星往長沙伏祈特簡賢能大員速行赴任庶無貽誤等語湖南現有用兵事宜甚關緊要朕再四思維不得勝任之人許容雖丁憂在籍然服制將滿況古人於軍旅之際原有墨經從事之禮著即從本籍馳驛前往署理湖南巡撫印務兼辦一切用兵事宜不必來京請訓此朕詳審事理而後降旨者在伊無損於名節而實有益於地方不得以服制未滿奏辭候服闋之日伊自行奏聞朕另降諭旨班第候許容到任受事

後伊回湖北該部即速行文豫楚二省欽此

1517 乾隆五年閏六月二十五日軍機大臣奉

上諭楚粵苗徭滋擾查係上年冬間即有洪奸唆使煽惑滋事該處文武官弁倘能據實稟報上司兩省會商派撥官兵查拿捕緝原可即時撲滅乃兩省官弁既欲彌縫復思推卸及至事變已成粵省始遣發官兵數百名前往彈壓擒獲首犯黃順等數名遽將官兵撤出不知巨寇未獲正在暗中勾結楚省當逆苗焚劫之時不急發兵擒剿尚欲化誨招撫持示曉諭以致逆苗無所忌憚今楚省大兵雲集自應詳查地勢之險夷分別寨分之首從與粵省會商尅期並進蠢茲小醜自不難次第蕩平乃朕察情形仍係各省各辦彼此不相關會其於進剿之始既不能策勵官兵又不知審度地勢使逆苗據險拒敵我兵竟有損傷且冒無定見一舉失利遽將進剿之兵撤退損威示弱無逾於此誠恐勾結漸廣逆苗尚未成擒而內地不免驚惶矣軍務所關綦重辦理務在得人前朕降旨令杜

愷酌量情形應否親往軍前自行定奪今再四思維杜愷以親往統領楚兵為是頃廣西提督譚行義奏報已經起程前往軍營是統領粵兵亦有大員矣兩提臣可就近會商親為指示不存意見不分疆域寅恭和協一秉公忠俾將弁有所遵循兵丁悉皆奮勇則成功自然迅速不至稽延總督班第現赴湖南諸事可以調度前貴州總督張廣泗奏請秋間來京陛見朕允其請今道經湖南著伊詳看軍務情形若事已就緒即便來京若尚未就緒即留楚辦理具摺奏聞班第仍回湖北本署該部可即行文前去欽此

### 附錄

- (1) 查定例載衙署失事責成該州縣嚴行緝拿若一年限滿獲盜未全降一級留任再限一年緝拿如已全獲准其開復等語今邳州衙署被劫一案署知州褚菊書已經緝獲正盜並究出盜

判丹陽句容署庫各案將來無論審係全獲與否不過降級罰俸處分原不至於離任臣等看高斌摺奏之意因褚菊書在江南効力多年總未實授一官而辦理此案著有勞績且係實心愛民堪任守牧之員特具摺保奏仰懇

聖恩令其赴京引

見量材授職臣等謹擬

諭旨進呈伏候

欽定

(2) 大學士伯臣鄂爾泰等謹

奏為遵

旨議奏事湖南巡撫馮光裕奏請預籌勦撫實際等

因一摺奉

硃批軍機大臣等速議具奏欽此 據馮光裕奏稱城步橫嶺之長坪長安橫坡地闊等寨綏寧半里之都壘步頭中步紫檀等寨俱歷來未經懲創不知王法大兵既臨猶敢四處截路與官兵對敵情無可憫法無可寬若不掃淨根株不出

數年該苗生聚日繁恃其深險仍然滋事等語查據該督撫提等節次奏報城步橫嶺長坪等寨首肆兇橫網捉弁兵攻圍營汛長安橫坡地闊等寨皆係附和逞兇其綏寧之都壘步頭二寨苗人俱全入夥中步紫檀二寨苗人一半入夥此其各寨之情形與罪惡之輕重已大概可知馮光裕前奏內亦稱為惡倡首如長坪粟賢汝輩亦屬有數其他諸寨或附和或被脅雖然從逆其志未堅自應招撫以散黨羽如能投誠免其勦洗等語今據奏大兵既臨諸寨猶敢四處截路對敵是此種兇苗既無悔禍之念自應痛加懲創不可借名招撫希圖率結但其中附和脅脅情形猶須詳加審度亦未可概執掃淨根株之說徒恃兵威或轉貽後患也又馮光裕奏稱地險人眾之寨平日無惡不作及大兵到後勢窮力竭方討招安官弁等若憚其深險亦即姑准就撫此斷不可許之事即先已准撫陰持兩端兵不厭詐或權許招撫以開通糧運解散黨羽俟大局既定借勦敵逸兇之名正從前不法之案將伊等首兇並強梁者軍前問明正

法其餘丁口分別議擬等語查苗民就撫惟當審之於始其務應勦除者即應先不准撫如實係畏威悔罪情願立功自贖可以准撫者自未可因其地險人衆即執意不准以阻其投誠之路若權許招撫以為開通糧道解散黨羽之計俟大局既定又復借名捕治追論從前之罪案則我先失信義於苗衆又何以懾服其心况現在大兵進勦如地闊運道而為該苗梗阻何難先即開通而姑為此誘詐之術倘或諸寨內果有已經就撫仍復陰持兩端敢於反覆之寨分則趨此兵勢一律擒勦自屬名正言順若目前既無可指之罪特以為素逋逃之藪慮其將來作逆遽欲窮加誅戮豈得謂情理之平耶向來苗疆官吏多以招撫掩飾希圖完事或以貨誘令投誠或同吃血發誓或別尋易獲之犯割記獻功妄稱竣事如該撫所奏種種錮弊則誠有之此番用兵於就撫之初我之兵力赫然有餘而苗之情偽灼然能辨應撫應勦能定之於先自不致悔之於後該撫所稱地險人衆平日作惡之寨一概不准就撫及權許招撫俟事定借

名勦勦之處均應准行應毋庸議至馮光裕奏稱始而附和作逆繼見官兵勢大率其家口投誠此等苗徭萬不可仍留本地致日後生齒日繁老者已亡少者繼壯年代久遠不知今日官兵誅勦之威惟恃光頑之性再生事端為地方害應請分發本省各州縣令佃官莊或佃民田或即安作屯軍等語查苗人本係附和今畏兵威率其家口投誠又復慮及數十年後少者繼壯再生事端概為遷徙罰役未免過甚亦毋庸議可也謹

奏伏候

諭旨

乾隆五年閏六月初四日奉

硃批依議速行欽此

(3)

查定例各省錢糧於奏銷限內全完者督催徵收等官俱按錢糧多寡予以加級紀錄至士民如期輸納乃其常分原非額外急公者可比且查雍正年間亦並無因錢糧全完奉

特旨嘉獎士民之案今浙江省乾隆四年分錢糧於奏銷限內全完似毋庸

頒諭嘉獎

乾隆五年閏六月初六日奉

旨是欽此

(4)

查資送流民一事近經江蘇布政使徐士林御史張重光條奏九御議覆奉

旨通行遵照在案毋庸另議 又查經徵督徵錢糧

定例按照分數多寡以定考成今若將錢糧完

數於正署官名下通融勻算未免參差難於查

核事不可行 至臺灣俸滿人員例應離任候

部推陞若以應陞之員借補調臺之缺則應行

補用者反致壅滯且此等俸滿人員為數無多

俱歸即陞班內選用近者年餘即可得缺遲亦

旨是欽此

不過二三年較之別項應陞之員選用尚速王士任所奏均無庸議  
乾隆五年閏六月初九日奉

(5)

臣等閱看沈起元請定獲盜捕役之獎賞一摺據稱捕役率皆狡黠無藉之徒素悉盜匪行踪捺縱實出其手自非重賞不足以鼓其實力豫省近日盜風漸息皆由撫臣雅爾圖明示章程提取餘存益規按名給賞故為效甚速可否仰請

勅下素稱多盜之省令該督撫酌提閒款以為獲盜捕役給賞之費等語 查獲盜兵役酌量給賞從無動用公項之例上年豫省偶值盜案繁多而該省適有鹽規贏餘銀兩是以該撫奏請充賞督捕誠如

聖諭原係一時權宜之計蓋捕役緝盜是其專責州縣官固有承緝處分偶爾懸賞以示鼓勵亦不過自顧考成事後補救之策並非按名給賞遂為澄清盜源之良法况盜案之多寡各省不同



公項之有無亦難畫一若著為成例飭令通行不但經費不敷且恐替捕役貪賞誣良並州縣借端冒開之弊誠如聖諭不可通行於各省謹

奏

乾隆五年閏六月初九日奉

旨是欽此

(6) 臣等看潘恩稟奏請添設巡檢民壯等因一摺既稱神安司等要缺已經前任布政使王士俊各省添設民壯四名在案則其餘未經請添者自非要缺可比况前任巡撫楊永斌曾將粵東巡檢各缺分別最要次要亦未議及添設民壯且查雍正十二年各省司道府廳等各衙門民壯俱經議裁巡檢微員尤未便復議添設所奏應毋庸議

乾隆五年閏六月十一日奉

旨是欽此

(7) 查本年閏六月十三日奉

旨杜愷既親往軍前則令襄陽總兵張天駿暫移常德以資彈壓欽此此次不必再派施廷專摺內

硃批有旨諭部諒伊等自然遵照從前上諭行但添派兵丁駐劄常德之處應領

上諭謹擬寫呈覽

覽

(8) 查用兵之事惟在總統得人總兵劉策名該督既稱其幹濟今又奉

旨令該督撫提等嚴飭各標之弁兵凡派往軍前者均歸約兼已可不致掣肘况如有不能節制之勢令提督杜愷親往統領則事權歸一將弁稟令自可辦理無悞至軍前偏裨勤無進退未協機宜功過定所不免班第所參撫標遊擊謝瓏之語亦係得之稟報伊既稱俟確查到日分晰輕重另行具

奏應俟事定奏報到日再行查核應議處者議處似更確當臣等愚見如此伏候

奏應俟事定奏報到日再行查核應議處者議處似更確當臣等愚見如此伏候

訓示

乾隆五年閏六月十四日奉

旨是欽此

(9)

查河南開封府直隸保定府山東德州山西太原府節次添設滿洲駐防官兵均係設立城守尉一員管理惟河南一省前因積盜甚多添設駐防滿兵八百餘名是以將管理之城守尉加以副都統職銜以重職守其保定太原德州三處駐防滿兵俱係五百餘名較河南兵數既少且地方安靜城守尉一員已足統轄管理並非四川成都府地方險要應設副都統以資彈壓者可比若以太原為省會之地宜改設副都統則保定乃總督駐劄之省會亦應改設副都統矣且駐防之設凡兵之多寡官之大小皆係酌量情形參定體制太原兵祇五百名似不便議改設副都統王進泰所奏應毋庸議

乾隆五年閏六月十四日奉

旨是欽此

(10)

查楚粵苗徭勾結滋事雖形似猖狂數邑震恐然地屬腹裏四面皆兵且大軍已集蔓延殊難審時度勢料非古州前事比似可無大慮湖南巡撫馮光裕雖非卓越才而久任滇黔屢經苗案又事由自請旁議無辭諒不敢畏縮貽悞以自取罪戾廣西提督譚行義材具明晰辦事有條理前任總兵時曾出師古州聞伊進取頗有能聲况譚行義總統粵兵復有總督馬爾泰為主馮光裕調度楚兵復有提督杜愷總兵劉策名為之副但能彼此和衷下上戮力乘機趨勢勿失先後緩急則以一萬五六千之官土兵勤撫零星散處之十數苗寨縱不能尅期成功自必可遲竣日事於此而更有不能則過不在苗強亦並不在兵弱矣抑臣等總總慮者事關兩省勢難一心若軍無總制各掌各兵儻會合應援時爾欲爭功我欲逞智各官平等彼此不相下兵家所忌亦敗事之一端貴州總督張廣泗熟諳苗情頗具識見現准來京

陞見湖南係必由之路去城綏亦不甚遠可否

降旨令廣泗便道前往詳察情形細詢機勢與馮光

裕杜愷等悉心商論如大局粗定佈置無難則令張廣泗赴京設使事無頭緒尚費周章即令張廣泗暫駐湖南總制全軍調度一切俟勦撫事定然後赴京則以總督而節制撫提且素有威聲勻當尤易似於事機更有所裨益臣等愚見如此是否有當伏候

聖裁

(11) 前奉

諭旨令張廣泗經過湖南酌看軍情辦理乃臣等密

寄信與張廣泗者此次

上諭內似應明白宣示謹添寫請

旨

(12) 臣等看張鵬紳進

呈經史內稱游惰之民宜驅就本業嚴絕外誘將

無業者另編一籍使之就役其有賭盜窩頓之

跡當做五家為比之法罪及隣比左右責成保

甲稽查胥吏之寄名幫役者盤踞公門當法漢

時推擇為吏之憲使約正里長推舉有罪則舉

者同罰其諺附緇黃招搖都市者宜亟加禁絕

勒令還俗天主回回等教不許中國人服習又

鄉學宜延請良師有不通文義不修行檢者即

為易置冠婚喪祭之禮當裁其侈僭麗以刑章

使漸歸樸寔嚴禁購求風水累世不葬以及火

葬水葬之不經者講求祠堂祭祀立宗聚族之

法再無業之民及時而教之秀異者可引之於

學強壯者亦練之為兵等語凡以清游惰之原

而兼制其流所論不為無見但查保甲稽查之

法各省現在奉行游惰之民令鄉保多方勸導

使各尋生理漸遵約束所奉

諭旨甚明若另編一籍使之就役並賭盜窩頓罪及

隣比恐游惰未必即能遷無而善長者先己不

勝其擾自仍以從緩化導管束為是其諺附緇

黃不法之徒已經欽奉

諭旨寄信各省督撫留心沙汰使之日漸減少又中

國人服習天主回回等教原有嚴禁冠婚喪祭

之禮裁抑侈僭俱經屢奉

諭旨為之禁制現在修葺禮書以便民用將來益可

遵守又累世不葬以及火葬水葬前蒙

特降諭旨禁止近日旗民舊俗頗知變易此數條俱係現在遵行之事毋庸再為置議至推擇為吏之法漢以前史胥皆士人為之故其法可行近世吏役既非其類而推舉仍不過責之約正里長雖嚴其罰究亦何益鄉學延師民間自教其子弟亦不便官為易置祠堂宗法必守禮之家兼有力者始能行之且禮制具在亦無待官為標準督率至於無業之民欲使移郊移遂引之於學則又拘牽古義執不全之說而難見之施行者再團練鄉勇惟可暫用於地方有事之時豈宜平時一槩行之以為收集游惰之法張鵬紳所論此數條文理可觀而事屬難行應毋庸

議

乾隆五年閏六月二十七日奉

旨知道了欽此

1518 乾隆五年七月初一日內閣奉

上諭楚粵逆苗不法現在用兵征勦必得武職大員統領弁兵始能早奏實功前已降旨令杜愷親赴軍營就近與廣西提督譚行義會商辦理並令張天駿移駐常德以資彈壓吳弟愚常德為通省要區且所屬營汛多係苗邊現今各營官兵抽撥進勦內地未免兵單著該督提酌派官兵數百名前往常德暫行駐劄欽此

1519 大學士鄂 張 徐 尚書公訥 字寄

廣西巡撫安 乾隆五年七月初一日奉

上諭廣西義寧頑苗勾結楚苗肆行不法現在用兵乃地方最緊要之事安圖再人齎摺來京並無一語奏及祇將安南國土官將完結之事敘述以塞已責其意蓋欲以義寧之事全推卸於督臣馬爾泰也不知馬爾泰甫到桂林而安圖久在地方且與義寧相去甚近從前如何情形近日如何辦理安圖豈可視同膜外巧為推卸之計乎即如粵省雨水收成亦必待朕降旨詢問而後陳奏則其不

以民瘼歲功為念可知封疆大臣如此居心行事地方何所倚賴可傳旨嚴行申飭之欽此遵旨寄信前來

1520 乾隆五年七月初二日內閣奉

上諭八月十三日為朕誕辰聞內外臣工以今年為三十萬壽之期欲行慶賀首獻之禮朕甚不取今年春間外省督撫提臣中如德沛王郡王任任等曾請八月進京陸見朕批諭心之蓋朕年甫及壯不言慶賀且朕所望於內外臣工者總在實心寔政為國家宣猷効力不在稱觥祝嘏之儀文著即傳諭內外臣工等仍照常年之例行若有在常例之外者俱著停止欽此

1521 大學士鄂 張 徐 尚書公訥 字寄

江西巡撫岳 乾隆五年七月初二日奉

上諭婁近垣奏龍虎山廟宇工程一摺爾等俟岳濬奏事之便寄去令其酌量查辦具奏朕思此項廟工從前係奉

世宗憲皇帝特恩發帑興修工程頗稱完備並給有田

畝歲收租息若隨時加以粘補何至數年之間輒

多傾圮嗣後廟內工程何項必應報官查辦何項

應自行葺補若不加以區別伊等心無贖足惟恃

官為修理則將來必至瑣屑滋弊可將此旨一併

密寄岳潘知之欽此遵

旨寄信前來

1522 乾隆五年七月初三日內閣奉

上諭戶部侍郎事務著阿里衮暫行兼理欽此

1523 乾隆五年七月初五日內閣奉

上諭湖北巡撫負缺著江蘇巡撫張渠調補江蘇巡

撫負缺著江蘇布政使徐士林補授江蘇布政使

負缺著安寧補授署廣西巡撫安圖著來京候旨

其員缺著署四川巡撫方顯補授山東巡撫碩色

才識不能開闔不宜大省伊前任四川於地方情

形尚係熟悉著調補四川巡撫山東巡撫負缺著

河南布政使朱定元補授河南布政使負缺著金  
鉞補授欽此

1524 乾隆五年七月初七日內閣奉

上諭朕從前曾降諭旨將阿爾台兵丁減撤之處詢

問喀爾喀汗王扎薩克等伊等俱以事尚未定大

兵駐札防守足以保護遊牧甚屬有益求暫停減

撤等因奏請是以仍留兵駐防去年準噶爾台吉

噶爾丹策凌一切俱遵奉朕旨將伊等卡倫遊牧

不過阿爾台山烏梁海人等仍在原處住牧天朝

卡倫照舊安設每年於應遣圍爾舒爾之時差人

二三十名稽查兩界餘留地方喀爾喀遊牧不過

札卜堪等處差宰泰哈柳等履奏情詞甚屬恭順

朕是以將喀爾喀遊牧指明不得過札卜堪齊克

吉哈薩爾圖庫庫達巴罕等處其阿爾台山梁以

南仍照從前指定哈卜他克拜他克烏蘭烏素羅

卜諾爾至噶斯口作為邊界及伊所請遣使貿易

之處俱皆酌定降旨與噶爾丹策凌現今邊疆一

應事務既已定議和好則西北兩路不應仍住內

地兵丁理宜減撤若北路喀爾喀札薩克等果能

同心協力約束屬下人等令於指定地方住牧各遊牧預備兵丁不時操演滋養牲畜應防秋時仍照現在防秋如圍獵之勢聚集防守至應遣圖爾舒爾之時額駙策令揀派能負率領二三十人前往按照議定地界查看其準噶爾所差圖爾舒爾未至何處查看回巢之處仍行奏報現在卡倫照舊派委喀爾喀台吉官兵輪流駐札如此辦理斷然無事可以永期寧謐是日前情形並非從前事體未定之時可比着行文喀爾喀四部落汗王札薩克等將撤回內地兵丁伊等同心協力教養屬下人等嚴守卡倫巡哨防範預備之處詳細妥議具奏倘謂非滿兵不可則不如即照現今胡倫貝爾地方索倫駐札之例將東省索倫烏拉齊等揀派數千名攜帶家口前往令其永遠遊牧駐札尚屬於事有益蓋既與準噶爾定議和好若仍令內地兵丁戍守不但於和好之誼不相符合而喀爾喀人等供應預備亦未免徒勞喀爾喀副將軍汗王札薩克等可仰體朕為伊等周詳籌畫之意妥協定議務期於事永有裨益可並將朕此旨行文額駙策令及軍營大臣等令其詳細定議具奏至

於西路又非北路可比阿爾台一帶有額駙策令居住且喀爾喀汗王札薩克等俱係土著之人曾經閱歷戎行防範預備相機而行自可無虞西路哈密地方與準噶爾接壤回民等又甚怯懦非喀爾喀人等可比則哈密之兵似且不便撤回然內地兵丁遠行調派更換行走亦非久遠之道或於數年後將哈密之兵的量裁減計其足用存留駐防或此項兵丁即就近於安西等處兵丁內輪流派往其兵丁若干名即可敷用並兵糧如何籌畫預備務期永遠有益着行文揔督尹繼善提督李繩武令其詳悉妥議具奏欽此

1525 乾隆五年七月初九日內閣奉

上諭前降諭旨將金鉷補授河南布政使今吏部奏稱金鉷病故所有河南布政使員缺著甘肅按察使趙城補授甘肅按察使員缺著浙江杭嘉湖道呂守曾補授欽此

1526 乾隆五年七月初九日內閣奉

上諭伊勒慎著來京其綏遠城將軍員缺著補熙補授欽此

1527 乾隆五年七月初十日內閣奉

上諭八旗兵丁赴靈溝橋操演鎗砲定例三年一次於九月內舉行兵丁人等雖預領有本月分錢糧但家間養贍典在稿日費不能兼顧未免拮据今屆操演之期朕心軫念著照訓練營舊例賞給一月飯銀以示優恤再應用帳房亦著照訓練營之例赴工部關領俸營制齊一以肅觀瞻仍交該管官於完操之日查明繳部嗣後三年一次赴橋操演俱著照此例行欽此

1528 乾隆五年七月十二日內閣奉

上諭編修余棟已經服闋著來京供職欽此

1529 大學士鄂 張 徐 尚書公訥 字寄

川陝總督尹 乾隆五年七月十二日奉

上諭白嶸來京引見朕看來人似明白或尚能辦事是以命往陝西交與尹繼善酌量以道府試用但伊所到之處屢被參奏並言其不甚安靜或伊為人小有才具不稱道府之任或有與伊不合之人詆毀之爾等俟尹繼善奏事之便傳朕諭旨令其留心試看一二年後秉公具奏欽此遵

旨寄信前來

1530 乾隆五年七月十四日內閣奉

上諭據班第奏稱湖南學政陳象樞報丁母憂例應回籍仰懇即簡賢員速赴新任等語提督湖南學政著給事中倪國璉去欽此

1531 乾隆五年七月十五日內閣奉

上諭據署理四川巡撫方顯奏稱雍正八年川省曾准部議捐納監穀以實倉儲乃奉行既久歷經三載通省僅捐監生十七名細加體訪皆因州縣各



官畏殺禁多難於照料文盤過有赴捐之人多方阻抑臣於各官進見時極力開導且刊刻告示通行曉諭嗣後各屬咸知踴躍目下報竣者甚多等語地方積穀備用乃惠濟窮民第一要務而州縣有司惟恐貯穀過多平時難於照料難任難於交盤瞻顧遲延寔為通病朕知之甚悉已屢降諭旨矣今年直隸山東河南江南等省俱獲豐收而各省奏報年穀順成者頗多況江西湖廣原係產米之地皆當乘時料理積貯之事如捐監一項固宜極力勸導多方鼓舞將抑勒阻撓胥吏苛索等弊悉行革除勿致納粟之人裹足不前其他凡可以積之於官藏之於民者皆當於此時悉心籌畫並切諭小民博節愛惜勿糜費於無益之地如造酒造麴諸事尤宜禁約庶不有虛

上天之恩賜夫豐年不知積貯一至歉年束手無策是誰之咎耶各督撫有司均有父母斯民之責應視民事如己事毋得徒奉具文仍蹈苟且便安之習  
欽此

1532

大學士鄂張徐尚書公訥字寄  
貴州總督張

乾隆五年七月十六日奉

上諭楚粵逆苗不法現在用兵朕前降旨令張廣泗於經過湖南時詳看軍務情形若事已就緒即便來京若尚費周章即據實奏聞朕加以統兵大銜留楚辦理今據班第奏報彼地情形知官兵連克三寨逆苗喪胆逃匿若乘此兵威弁兵努力向前似不難於尅期平定但朕思此時軍旅之事固須調度有方而將來善後之計尤宜區畫周備始可永靖苗疆不留後患爾等可即馳信與張廣泗即軍務已有頭緒亦且不必來京俟將善後事宜料理妥協詳細奏聞候朕降旨可也欽此遵

旨寄信前來

1533

乾隆五年七月十六日內閣奉

上諭江寧織造韓四格著撤回其織造並龍江閩事務著李英管理淮安閩事務著長蘆鹽政伊拉齊前往管理巡視長蘆鹽政著三保去蘆州織造及潯豐閩事務仍著安寧兼管欽此

1534 乾隆五年七月十六日內閣奉

上諭朕聞滇省鶴慶府城及所轄之觀音山於前明時分設驛站後因驛站裁革驛馬分給驛丁將觀音山編為三十馬頭每馬人丁十七丁每丁歲徵銀五錢四分在城驛站編為二十馬頭每馬人丁五十六丁每丁歲徵銀二錢五分共徵驛站丁銀五百五十九兩有零至今相沿每歲交納而窮丁無力輸將以致官役代為賠補前經地方官將自首額外條編并折徵稅秋銀六十二兩九錢抵充外其餘仍屬無著朕念此等歲無出產之民徒以先世貽累賠納丁銀情殊堪憫嗣後將此項應徵銀兩悉行豁免以示朕加惠邊氓之至意欽此

1535 乾隆五年七月十六日內閣奉

上諭聞雲南中甸喇嘛每年所領青稞不敷食用著加賞青稞三百石即於歲徵中甸額數內支給其喇嘛等應給典度牒以便查考應定為若干名之處著總督慶復等酌議具奏欽此

1536 乾隆五年七月十七日內閣奉

上諭武職官負專司營伍服習騎射是其本分向因將弁偷安坐轎並不乘馬曹家皇考頒發諭旨嚴行禁止煌煌

聖訓自應永遠欽遵乃近聞江南武弁復蹈從前陋習多不乘馬自副泰以下至都司守備俱公然乘坐四轎甚至有前呼後擁喧耀街衢者江南如此他省諒亦不免夫人情習於勞則精神振作習於逸則志氣萎靡况身為武弁而憚於乘騎開騶惰之端啟廢弛之漸又何以飭戎行而率士卒乎各省督撫提鎮務將朕旨通行中飭如仍不遵奉即指名題奏交部議處欽此

1537 乾隆五年七月十七日內閣奉

上諭江蘇太倉州知州負缺甚屬緊要著將高郵州知州傅椿調補其高郵州知州負缺著山陽縣知縣沈光曹補授欽此

1538 乾隆五年七月十八日奉

旨依議著江蘇巡撫徐士林會同兩淮鹽政準泰確核定議具奏欽此

1539 大學士鄂張 徐 尚書公訥 字寄

山西巡撫 直隸總督 奉天將軍 額 乾隆五年七月十九日奉  
上諭沿邊省分與蒙古地界相連者夷用雜處互相

貿易耕種聞地方官凡遇夷民交關事件心存袒護並不秉公剖斷兼以口外之事無足重輕不肯加意辦理實為向來積弊蒙古各部落世受國恩輸誠向化中外一家豈容岐視各該督撫將軍應嚴飭地方文武官弁以後約束兵民不許欺凌蒙古辦理夷民事務令彼此公平以免生端擗釁仍責成該管大員不時稽查如有仍前視同膜外剖斷不公者即行揭叅以示懲儆爾等可遇便傳朕旨曉諭之欽此遵

旨寄信前來

1540 大學士鄂張 徐 尚書公訥 字寄

直隸總督孫 乾隆五年七月二十日奉

上諭朕聞直隸興修水利開濬河道如河間一府所屬地方差委河員俱不妥協向例每逢開月聽貧民盡數到工執後若農忙之時即有緊要工程大率三丁抽一其餘任其耕種今則一槩拘令到工指稱欽工不許違誤以致百姓有妨農作又所發工食多有扣剋不能照例給與民間頗有怨言地方有司以為此係河員專司之事不肯置問小民無可告訴朕得之風聞者爾等可遇便寄信與孫嘉滄令其留心確查將實在情形具摺陳奏欽此遵

旨寄信前來

1541 大學士鄂張 徐 尚書公訥 字寄

直隸學政錢 乾隆五年七月二十日奉

上諭朕聞錢陳羣考試通州多取冒籍發業之日新進二十三名實在通州本地只有三名其二十名

俱係江浙各省之人頂冒以此衆論沸然錢陳羣  
行令提調官查問業將二十名俱係頂冒逐一查  
明拘齊而錢陳羣又令釋放仍復取進入學通州  
本籍之人甚不心服朕所聞如此爾等可傳旨詢  
問錢陳羣令其明白回奏欽此遵  
旨寄信前來

1542 乾隆五年七月二十日內閣奉

上諭川陝總督尹繼善奏請將張廷枚補授甘山道  
查張廷枚於閏六月間因漳州府知府趙琳辦銅  
遲誤案內降二級調用此甘山道員缺著尹繼善  
於所屬知府內可以勝任者揀選一員陞補其所  
遺知府員缺即將張廷枚補授仍帶降二級於新  
任欽此

1543 乾隆五年七月二十日內閣奉

上諭積穀乃養民之要務今年直隸山東河南江南  
湖廣等省俱慶有秋朕已降旨諭令各督撫於豐

收地方乘時講求積貯以備將來緩急之用今聞  
福建今歲雨暘應時年穀順成爲向來所罕見朕  
心深爲愉悅閩省環山濱海米販不通惟賴本省  
及臺灣之米以資接濟從前歉收之年則遠赴吳  
楚由海道運致不憚涉險繁勞供民日食今當多  
稼之秋地方大吏有司自當留心籌畫凡可以積  
之於官藏之於民者多方經理以寔倉儲益勸諭  
閩閩摺卽愛惜仰承

上天之恩賜如此則官有餘粟戶有蓋藏即便歲或不  
登而民無飢餒之患矣該督撫等可共體朕心以  
盡父母斯民之職欽此

1544 乾隆五年七月二十二日內閣奉

上諭據御史沈世楓奏稱近年以來之督撫每以尋  
常政務不足以結主知而動衆聽於是逞臆見以  
變法矜一得以邀功其說以爲利民而其寔利未  
見而害隨之如崔紀令開井灌田却玉麟欲以嚴  
刑重困流民張渠請禁糧艘帶酒惟爾圖抑令業  
主免租李衛禁止踴躄鄂彌達勒令益商領帑開  
礦之類又如陳大受見豫撫因捕緝多盜蒙恩議

叙亦將所獲盜犯陳瀆天聽凡若此者不過以月  
居大吏欲見長以示振作得可邀功失不遭譴如  
勸農催科積貯賑卹諸務皆所未遑伏乞特降明  
旨中諭各省督撫毋矜奇鬻異以逞其聰明毋好  
大喜功莫邀夫嘉獎等語朕臨御寰宇執一中以  
理萬幾大臣為國宣猷亦惟能協於中方無過不  
及之弊乃數年以來朕見督撫中閹茸委靡苟且  
因循如碩色石麟岳濬尹會一之流寔未見其惻  
惻無華日計不足月計有餘也故遇有努力向前  
勇於任事者宛勝於持祿尸位之輩是以量加獎  
許以示鼓勵若謂朕之簡用督撫所尚在此而督  
撫意中以為如此即足以副朕之期望則全不知  
朕心者矣沈世楓所奏亦不為無因而亦有似是  
而非之處如崔紀之開井灌田張渠之請禁糧艘  
帶酒寔皆事之不可行者至於禁止躡繩一節雖  
目前未有太益而行之日久於米穀豈無裨節儲  
蓄豈無裨補即沈世楓奏摺中所謂不應責效於  
旦夕者正此類也伊所陳奏皆指辦事失之太過  
者而言若如碩色之報荒不實尹會一之捕盜不  
力不又失之不力乎過與不及皆非中道為聖人

之所不取天為百姓而立之君君不能獨為治也  
而分其任於督撫凡百姓之事皆君之事即皆督  
撫之事也如沈世楓摺中所奏勸農積貯等務朕  
何嘗不屢降諭旨責之督撫而督撫中之寔在留  
心者果不多見蓋此等事即留心經畫而一時難  
以見功宜之不問亦一時未必見過是以悠悠忽  
忽竟視為具文矣殊不知治天下之道莫大於教  
養二端朕之初意欲俟養民之政漸次就緒閭閻  
略有盈寧之象則興行教化易俗移風庶幾可登  
上理豈封疆大臣能辦地方一二事遂足以滿朕  
之望乎朕日以臯夔稷契望天下之督撫天下之  
督撫亦當以臯夔稷契自待不可識見短淺過自  
菲薄徒沽名譽徒邀嘉獎為言官之所輕也要之  
安靜與廢弛振作與紛擾差之毫釐繆以千里如  
安靜與振作則為朕之所取廢弛與紛擾則為朕  
之所斥是非判然無難決擇為督撫者有則改之  
無則加勉以副朕教導期望之至意沈世楓原奏  
並發欽此

1545 乾隆五年七月二十二日內閣奉

上諭翰林院編修檢討人負朕多未認識著翰林院該班之日每次帶領二十員引見欽此

1546 乾隆五年七月二十五日內閣奉

上諭今歲夏秋以來雨暘時若各省奏報有秋者甚多朕心深慰浙省收成亦稱豐稔惟是蘭谿諸暨二縣於六月間山水陡發田禾被淹乏食貧民該督撫已動存司公用銀兩按戶賑恤諒不至於失所其餘沿溪傍澗之各屬邨莊如有被水收成歉薄者亦應一體撫綏至於水冲沙壓之田畝若有應加恩澤者俱著該督撫委員確查分別辦理欽此

1547 乾隆五年七月二十六日內閣奉

上諭從來野無曠土則民食益裕即使地屬畸零亦物產所資民間多闢尺寸之地即多收升斗之儲

乃往往任其閒曠不肯致力者或因報墾則必陞科或因承種易滋爭訟以致愚民退縮不前前有臣工條奏及此者部臣以國家惟正之供無不賦之土不得概免陞科未議准行朕思則壤成賦固有常經但各省生齒日繁地不加廣窮民資生無策亦當善畫變通之計向聞邊省山多田少之區其山頭地角閒土尚多或宜禾稼或宜雜植即使科糧納賦亦屬甚微而民夷隨所得之多寡皆足以資口食即內地各省似此未耕之土不成坵段者亦頗有之皆聽其閒棄殊為可惜用是特降諭旨凡邊省內地零星地土可以開墾者嗣後悉聽該地民夷墾種免其陞科並嚴禁豪強首告爭奪俾民有鼓舞之心而野無荒蕪之壤其在何等以上仍令照例陞科何等以下永免陞科之虞各省督撫悉心定議具奏務令民沾定惠吏鮮阻撓以副朕子惠元元之至意欽此

1548 乾隆五年七月二十八日內閣奉

上諭浙江温州鎮總兵官黃有才著調補福建汀州鎮總兵官汀州鎮總兵官吳開增著調補浙江温州鎮總兵官浙江處州鎮總兵官丁山著調補河南河北鎮總兵官河北鎮總兵官丁士傑著調補浙江處州鎮總兵官欽此

1549 乾隆五年七月二十八日內閣奉

上諭順天府府尹負缺著張鳴鈞補授欽此

附錄

(1) 尚書史貽直一摺 據稱楚粵苗疆事務已奉

旨令張廣泗道經湖南詳看軍務情形若尚未就緒即留楚辦理似宜請

旨暫給以行軍大臣應用印信俾得相機調度尅日

奏功又常德乃滇黔楚粵之門戶張廣泗既至湖南請即令駐劄常德並議給養廉令其謹烽

設謀犒獎有資不至臨時掣肘又稱新任辰沅靖道王柔性情偏執膽大心粗其在苗疆誑擾多事喜於自見其才素不為被地民夷之所帖服但其人尚有局幹以之調補內地猶可勉奉公若仍在苗疆恐其故智復萌徒滋紛擾等語奉

旨軍機大臣等議奏欽此 臣等伏查苗疆事務現在欽奉

諭旨著張廣泗道經湖南詳看軍務情形若事已就緒即便來京若尚未就緒即留楚辦理具摺奏聞張廣泗如須留楚辦理於其具奏到日應給與何等職掌已另奉有

諭旨毋庸再議其張廣泗軍前應給養廉如辦事日久有應需用之處該督撫自必奏請屆期再為定議至稱張廣泗宜駐常德殊不知常德雖為數省扼要之區而西南至城綏高遠張廣泗既到湖南自應親赴軍前以便相機調度若令遠駐常德仍屬無益應亦無庸議再王柔原屬好事之人蒙

皇上念其尚有幹材且曾任辰沅靖道是以令伊仍

補原缺且所辦乃承審苗犯查核將弁功過係  
監紀之任並不參預用兵之事如果詎擾多事  
該督撫自能據實奏

聞諒無姑容之理此時亦毋庸置議謹

奏

乾隆五年七月初六日奉

旨知道了欽此

(2)

查額設主事五十五缺在部之候補候選主事  
與各部額外主事俱有應選班次分班輪選並  
非必俟額外補完之後方用也但各部主事缺  
出而額外主事才具好者原有留於本部題補  
之例故所出之缺歸部選者為少現在各部額  
外主事由進士分部者三十二員由散館分部  
者七員由行取分部者二十九員共六十八員  
尚未題補其丁憂開復即用特用並廕生捐納  
等項候補候選者六共十二員人多缺少班次  
甚繁原覺壅滯然欲驟行疏通實無法查行  
取知縣已經欽奉

諭旨以候補需時嗣後令其在任候缺又經吏部議

准巡撫石麟條奏將來行取之年將未用人員  
奏明或暫行停止或照舊舉行候

旨欽定學習進士亦經御史程盛修條奏停止分部

又經御史馬宏琦奏請仍行分部經總理事務

處議准原非成例俟新科進士引

見之時候

旨欽定是以丁巳己未兩科分部者甚少至庶常散

館每次亦祇數人是此等額外行走之員數年

之後亦可漸次用完至在部候補候選人員內

即用特用及降調廢員起用人數無多服滿開

復人員俱應坐補原部遇有缺出吏部自即照

例補用廕生主事先經吏部議准王奕清條奏

主事壅滯於引

見之時將內用外用之處請

旨其應外用者以通判改補現在守候者亦祇數人

俱係奉

旨內用自應令其照例候缺其捐納候選者尚有三

十餘人現在候供者三人俱係按照雙單月班

次候缺選用奏片內所稱主事壅滯之處實因

人多缺少故選期較遲而銓選各有班次不能



違例另為變通護將查明情節

奏

聞

乾隆五年七月初六日奉

旨知道了欽此

(3) 據吏部稱金鉷已於本年四月內病故其河南

布政使員缺應請

旨另補

(4) 臣等看于振進

呈經史內稱江西棚民宜查明現在數目就其所

居各編保甲其願回籍者聽之嗣後來者每遇

編審之期陸續增入并教之務本畜用以植其

生或令與土著之民通好以蕃其族或申嚴入

山盜採之禁以絕其不肖之萌或教之誦詩讀

書以馴其禁教之習如此則數年之後無籍者

皆為土著等語 查雍正三年總理戶部和碩

怡親王等會議江南江西總督查弼納閩浙總

督覺羅滿保疏奏江西福建浙江三省安輯棚民一案內稱將各縣棚民照保甲之例每年按戶編查責成山地主並保甲長出保具結造冊稽查內有已置產業并情愿投順倒絕丁糧承納入籍者俱編入土著一體當差照例查管有愿回籍者聽其自便冊內即將姓名開除至邑中棚民如有四五百戶或六七百戶以及千戶以上者即於棚民內揀選保甲長承充巡查并添撥官弁防守其有膂力技勇與讀書嚮學者人果係入籍二十年以上置有產業墓有墳墓者准其報縣考試至各縣設立義學應令棚民先入義學讀書五年後許報明應試於額外的量取進文武童生造冊報部等因在案是安輯稽查棚民各事宜已為詳備于振所奏應毋庸

議

乾隆五年七月十一日奉

旨知道了欽此

(5) 尹繼善請將張廷枚補授甘山道一摺奉  
硃批著照所請行該部知道查張廷枚於本年閏六

月因漳州府知府趙琳辦銅遲悞案內部議降  
二級調用奉

旨依議是張廷枚應於道府上降二級調用今或另  
簡甘山道或

批令張廷枚帶所降二級於新任謹此奉

聞請

旨

(6) 七月初二日奉

旨交出甘肅巡撫元展成奏摺一件令臣等查奏據

元展成摺內奏稱會寧一縣地本砂瘠得雨均

未透足夏禾不及五分業經題報旱災又涼州

寧夏等府屬夏禾亦成旱災現俱陸續題報等

語查會典內開凡直省災傷先以情形入奏

夏災限六月終旬秋災限九月終旬州縣官遲

報逾限一月以內者罰俸六個月逾限一月以

外者降一級調用二月以外者降二級調用三

月以外者革職撫按道府官以州縣報到日為

始如有逾限者照例一體處分仍限一月內續

將報災分數查明造冊題報各官如有違限者

亦照前定之例議處永著為例等語元展成所

奏會寧等縣旱災乃例應題報之事已據元展

成將會寧等三縣題請緩徵並酌給災戶口糧

經戶部覆准在案但查夏禾旱災應蠲應賑各

各項歷來辦理舊案不同康熙四十六年因浙

江江南奏報旱災九卿遵奉

諭旨定議令浙江江南督撫既奏之後若得雨州縣

有無成災之處逐一查明具奏其查勘時將應

徵正項錢糧暫緩三月俟查明具題之日再行

催徵倘未獲雨一面將被災分數情形奏報一

面選委賢能道府等官動常平倉所存米穀酌

量均勻散給等因又康熙五十三年戶部覆

准甘撫疏題平涼府屬被旱請將本年錢糧停

徵查係窮民動支倉糧減糶借賑等因又康

熙六十一年直隸山東河南山西陝西五省被

旱二麥無收各督撫欽奉

上諭定議辦理直隸將倉穀動賑仍行減糶陝西撥

運米穀賑濟山東山西南河南俱動支倉穀復於通省知縣以上俸工銀內分三年捐補還項等因 又雍正元年甘肅疏題康熙六十年平涼等廳州縣衛所夏禾被災將被災分數糧石蠲免經部駁此案俱係春夏被旱該督撫等陸續題報雨水調和秋禾豐收不便遽議蠲免應行令督撫查明具題經該撫保題蠲免等因 又雍正元年戶部覆准河撫疏稱彰德等府來收甚薄不足接濟民食得雨之後雖在乘時播種但收成必至八月百姓待食艱難即動用存倉穀石併截留漕米賑給六七兩個月口糧等因 又乾隆二年戶部覆准甘肅疏稱平番等處夏禾枯槁請動支倉糧酌給籽種責令補種秋禾以望收成其乏食窮民照例賑給口糧查明被災地畝分數蠲免錢糧草束等因各在案 臣等查自康熙四十六年因江南浙江旱災九

卿遵

旨定議以來各省凡遇旱災按限題報並查明被災分數將本年錢糧暫停徵俱係照例辦理又乾

隆三年五月內奉

恩旨將水旱被災五分之處亦准報災蠲免錢糧

分之一永著為例是旱災蠲免分數亦已奉有

恩例至於災民應賑濟者向來各省或請散賑或請

借賑或秋苗雖經得雨而麥收不足接濟仍請

散賑雖災傷無一定之形原應隨時酌量極救

然亦因賑濟未有定例是以從前各省督撫有

將情形擬實入告請賑者亦有未經奏請而奉

特旨賑恤者或動正項或捐俸工或動存公銀兩辦

理又不畫一竊念賑濟事關民命而夏災較之

秋災稍有不同其如何分別加賑及應給應借

籽種補種秋禾並秋禾雖經得雨而待食艱難

應否仍行接濟之處俱應斟酌定例仰請

勅交該部詳悉定議具奏俾各省督撫辦理有據則

極災不敢有誤而錢糧亦有考核矣臣等通查

舊案公同酌議如此謹

奏請

旨

乾隆五年七月二十三日奉

旨依議欽此

(7)

雲南總督慶復一摺 擬稱滇黔粵蜀各省邊界雖有管轄之殊而靖地安民原無彼此之別現在各地方民夷安分俱稱寧帖從此立定界限各專責成分設汛防聯絡彈壓自應仍循舊貫不必紛更其有田在彼境糧在此境者應令推收交割將應納錢糧歸入田土坐落州縣徵收以免牽混以清積案經臣分飭各照原管分立界限有應添設汛防添撥弁兵之處催令定議繪圖彙詳以憑咨商會核具題等因奉

硃批軍機大臣等議奏欽此 查邊省山川險遠苗犛境地攙雜其接壤之區必須查明界址庶文武官員各有專責不致遇事彼此推諉是以從

前奉有

諭旨令滇黔粵蜀四省督撫提鎮商酌定議具奏自應各就現管地方會同查勘立定界限責成官弁防範稽查乃各該督撫聽信有司詳請欲將毗連相錯之寨村土田改移歸併率議更張以致查勘多年轉滋推諉迄無定見辦理原屬錯誤今慶復奏請各照原管分立界限聯絡彈壓

諭旨

不必紛更所見甚當應照所奏將四省邊界並應添設防汛添撥弁兵之處速行會商定議具題不得仍前諉卸遲延至所稱田在彼境糧在此境者名為寄糧現在各省多有題請改正者亦應令各該督撫一併查明具題以憑核定可也伏候

乾隆五年七月二十四日奉

旨依議欽此

(8) 大學士伯臣鄂 等謹

奏為遵

旨議奏事雲南總督慶復等奏為開鑿東川府以上

通川河道事宜等因一摺奉

硃批軍機大臣等議奏欽此 查滇省水利有富及

時興修疏濬者前已欽奉

諭旨加惠邊民至為詳備而開鑿通川河道一事尤

為滇省之大利向因勘估未實舉行有待今據廣復等奏稱自東川府由小江口入金沙江沂

流至新開灘一路直通四川瀘州兩次委員逐  
加查勘雖崎嶇險阻要皆人力可施堪以化險  
為平以資利濟惟沿江一帶人烟稀少募匠設  
廠遠運米糧工費約需數十萬金滇省現運銅  
餉若得改由水運每歲可省陸路運脚之半巨  
等悉心核計要在省出三四年陸運銅餉之脚  
費與修滇民永遠之鉅工等語查東川府以上  
直通四川瀘州河道既經該督撫等兩次委勘  
確實人力可施工費雖屬浩繁而為滇民開水  
遠之利原無所愛惜前奉

諭旨甚明現今每年滇運銅餉脚費不下十餘萬兩  
若能改由水運歲省其半則以久遠計之節省  
亦多且催覓牛馬馱運亦可減除民累惟是此  
項工程千數百里之中長灘石巨必令興修之  
後永為舟楫之利俾食貨轉輸一勞永逸則錢  
糧始不至虛糜該督撫等務須籌及久遠詳慎  
舉行遴委諳練賢員確寔估計並一切撥帑添  
防事宜俱應詳加規畫應具題者具題應奏

聞者奏

聞以憑核定至稱經秋水涸估計一定題請部覆有

需時日倘應先為動帑趨水涸之際將緊要工  
段開鑿疏通及於明春先扎木簾將銅餉試行  
水運如有成效則省一分脚費即省一分民力  
又可移辦一分工程容臣等隨事熟商相機酌  
辦臨期逐一另摺奏

聞等語查此項工程有應乘時酌辦者實難拘以常  
格該督等請趨水涸之際動帑將緊要工段開  
鑿疏通應照所請令其悉心籌畫隨時具摺奏  
聞辦理至來春先用木簾試運銅餉之處查河道動  
工伊始險處未平遽欲試運銅餉若稍不妥順  
及足以抗成議應令從緩酌辦毋求速效再古  
欺木夷境擬稱為新開河道必經之地其各頭  
人自應善為招撫稽查俾其永沐

聖化不獨施工之日期於安輯無事將來河道通行  
必令愈加寧謐沿河千餘里凡屬荒曠之區夷  
獠之境皆該督等所當預為經理者也伏候

諭旨

乾隆五年七月二十九日奉

硃批依議欽此

(9)

查浙江處州一鎮雖亦巖疆尚非最要缺除東南近省最要各鎮俱不便調換外河南省河北鎮總兵官丁士傑江西省南贛鎮總兵官于文輝地既相同人亦相等而丁士傑曾任福建於處州形勢又較熟悉可否即於丁士傑于文輝二員內酌用一員與丁山對調之處伏候

諭旨

1550 乾隆五年八月初二日內閣奉

上諭朕聞江省歲額錢糧地丁漕項蘆課雜稅之外  
又有名為雜辦者不在地丁項下編徵仍入地丁  
項下彙作分數奏銷其款目甚多沿自前明迄今  
賦役全書止編應解之款未開出辦原委即有開  
載出辦之處亦未編定如何徵收則例於是有缺  
額累官者有徵收累民者有累在官而因以及民  
者有累在民而因以及官者種種不一朕心軫念  
特頒諭旨除有款可徵積久相安無累官民之項  
仍照舊徵解但須查明則例立定章程明白曉示  
以杜浮收隱混等弊其實在缺額有累官民者著  
總督楊超曾巡撫徐士林詳確查明請旨豁免以  
示朕加惠地方之至意欽此

1551 乾隆五年八月初四日內閣奉

上諭據署兩江總督楊超曾奏稱常州府知府員缺  
最為緊要查有奉旨以知府試用之魏化麟昔年  
曾任常州潔已愛民輿情感戴若令其署理常州  
府事俟試用一年如果稱職再請實授庶駕輕就  
熟入地相宜等語魏化麟著照楊超曾所請署理

常州府知府事試看一年後如果稱職題請實授  
欽此

1552 大學士鄂 張 徐 尚書公訥 字寄

直隸總督孫 乾隆五年八月初十日奉

上諭聞得居庸關之北閱年久未曾修理有傾圮殘  
缺之處此係蒙古來往之路閱係觀瞻可寄信與  
總督孫嘉淦令其委員相度估計應作何修治酌  
量辦理欽此遵

旨寄信前來

1553 乾隆五年八月十一日內閣奉

上諭鄂容安著在阿哥師傅處隨福敏行走欽此

1554 乾隆五年八月十二日軍機大臣奉

上諭湖廣總督班第奏稱楚省頑苗不法現在用兵  
征勦七月二十八日據統領官兵總兵官劉策名  
署辰永道馬靈阿文報閏六月二十一日攻打岩

寨大寨長平寨二十五日攻打欄頭寨勦洗焚燒  
之後苗人竄匿官兵遂自長平拔營直抵長安對  
面山梁苗民公然拒敵劉策名等分兵三路奮勇  
爭先不顧矢石衝鋒直入苗寨四散奔逃遂乘此  
得勝之兵長驅直進攻打鹽井口客寨龍家溪三  
寨又進至飛毛竹林二寨頑苗不敢拒敵當將長  
安之鹽井口客寨龍家溪飛毛竹林五大寨及三  
五家十數家無名小寨悉行焚燬容再陸續搜尋  
捕頑所有得獲首級耳記另行查報外其楚省造  
逆之各苗寨俱已勦盡緣由理合奏聞等語楚省  
頑苗不法劉策名馬靈阿等督率官兵奮勇  
爭先不避險阻攻克苗寨計日可以竣事甚屬可  
嘉劉策名馬靈阿著交部議叙其在事有功之官  
弁兵丁著總督班第一一查明分別等次交部議  
叙具奏欽此

1717  
1555

乾隆五年八月十三日奉

上諭今日朕詣

皇太后宮行喜慶禮瞻仰

慈顏典禮恭重禮部自當敬謹按時請朕行禮乃天尚  
未明遽行奏請該部所司何事於此等大典攸關  
之處漫不經心甚屬不合著將該堂官交部嚴加  
議處欽此

1556 乾隆五年八月十五日內閣奉

上諭據江蘓巡撫張渠奏稱署江都縣知縣事五格  
捕盜有方將上下兩江行劫多案之積盜甫經入  
境即時拿獲可否懇恩量予鼓勵等語五格著即  
實授江都縣知縣欽此

1557 乾隆五年八月十六日內閣奉

上諭河道總督高斌奏請陛見著於霜降後起程來  
京其總河印務著河庫道孫鈞暫行護理欽此



1558

乾隆五年八月十六日

上御經筵面諭經筵講官等經筵之設原欲敷宣經旨以獻箴規朕觀近日所進講章其間頌揚之辭多而箴規之義少殊非責難陳善君臣咨儆一堂之意蓋人君臨御天下敷政寧人豈能毫無闕失正賴以古証今獻可替否庶收經筵進講之益若頌美過甚不能實踐躬行反滋朕心之愧此後務剴切敷陳期有裨於政治學問勿尚鋪張溢美之虛文而無當於稽古典學之實義欽此

1559

乾隆五年八月十七日軍機大臣奉

上諭據兩廣總督馬爾泰等奏稱義寧逆苗不法派兵進剿分爲三路副將許應虎領兵進石村一路大敗賊衆險寨賊巢俱已掃平參將張霖領兵進貝子堡一路燒燬逆巢招撫多人遊擊楊剛領兵進龍勝一路燬平各寨四處聞風投誠招撫有二十餘寨今石村一路官兵已直破四峒會合龍勝

貝子堡兩路併力直攻五峒更易蕩平粵疆清此二寨之外與楚省會合夾勦事可立竣等語朕觀此奏大率多屬粉飾而意中仍欲草草了事以朕所聞許應虎於六月二十六日領兵進攻石村寨逆苗奔入山箐官兵就於石村劉營閏六月初二日許應虎派令弁兵三百名搜箐即遇苗徭對敵陣亡千總馮選外委廖定邦石永貴謝策又陣亡兵丁八十六名帶傷兵丁七十四名失去兵丁四十三名失去大砲五位譚行義復派撥官兵二千餘員名於閏六月初十日到鞞里駐劄十三日甫准徭苗招安隨於十四日夜苗徭即來攻劫營盤十五日徭衆復來乘勢搶奪又傷多人失去炮位是許應虎等係屢次挫衄之劣員理應嚴參究治以正軍法而馬爾泰等前後摺內並無一字言及反欲姑息議功如此賞罰倒置何以鼓軍士之氣而安靖邊疆耶且從前義寧縣知縣倪國正縣丞吳嗣昌巡檢魯器吏目魯懋把摠潘貴等俱被拘

徭劫去旋即被害譚行義因派兵二千前往石村  
援勦而馬爾泰等奏稱石村一路接近楚界苗徭  
聚集者衆是以撥兵獨多此其粉飾之尤彰明較  
著者尚有何顏復為此奏耶督撫身任封疆平日  
既無料理一經有事又復玩忽漫不經心徒事掩  
飾反若視為易事縱使目前可以苟且完竣將來  
釀成後患伊誰之罪可將朕旨嚴行申飭馬爾泰  
譚行義等俾其洗滌肺腸審思職守實心努力以  
贖前愆欽此

1560 乾隆五年八月二十一日內閣奉

上諭東南沿海一帶如山東江南浙江福建廣東廣  
西等省俱設有戰船以為海防之備今承平日久  
官弁漸覺疎忽朕聞船隻數目竟有報部之虛名  
而十分之中不無缺少二三甚至於大修小修之  
時每因船數太多難以查核該防營弁及州縣官  
員通同作弊將所領帑銀侵蝕入己報修十隻其

實不過七八隻而又塗飾顏色以為美觀仍不堅  
固且更有不肖官弁令子弟親屬載販外省或貨  
與商人前往安南日本貿易取利者以朕所聞如  
此雖未必各省皆然亦難保必無其事可傳諭  
該省督撫提鎮等嗣後嚴行稽查加意整頓務令  
諸弊盡絕以重海防倘將來再有風聞經朕特遣  
大臣前往查出則虛冒廢弛之咎唯於該管之大  
臣是問欽此

1561 乾隆五年八月二十二日內閣奉

旨貴州安籠鎮總兵員缺著陝西潼關副將王友詢  
補授欽此

1562 乾隆五年八月二十四日內閣奉

上諭山東按察使李珣病故員缺著冀寧道陳惠正  
補授冀寧道員缺著大同府知府盛典補授山東

糧道嚴有禧員缺著綴疋庫員外郎明德補

授欽此

1563 乾隆五年八月二十八日軍機大臣奉

上諭前吏部議尚書郝玉麟因薦舉劣員王德純一

案議以降四級處分朕命福建總督德沛確查郝

玉麟有無得受王德純賄賂之處具奏到日再降

諭旨今據德沛奏稱郝玉麟保薦王德純時並未

受賄唯王德純心懷感激每年呈送禮物則皆收

受等語朕思此等饋遺唯清操可信之大臣方能

舉行屏絕若尋常督撫中難保其一無收受此與

因事納賄者尚屬有間且郝玉麟係

皇考簡用之大員歷外任甚久人亦諳練老成若照部

議降調稍覺可惜著從寬降二級調用以示薄懲

欽此

附錄

(1) 原任御史邱玖華於乾隆三年監試武場分點

黃字圍有武生趙大武高震高乾茹崑山四人

催覓姚成治張東里蕭天玉張挺頂替入場經

步軍統領衙門訪拿奏奉

旨武闈鄉試大典攸關趙大武等輒散代倩作弊目

無法紀著交部嚴審定擬具奏科場設立稽查各

員原以防範弊端今代倩竟至多人伊等毫無覺

察著將稽察之御史及順天府辦理科場大員交

部嚴加議處欽此欽遵經吏部議覆監試之御史

邱玖華陳豫朋趙瓚提調之府丞梅穀成等一

任武生趙大武與姚成治入場換卷代作並不

查拿究治查定例中式之人如有聯號換卷傳

遞等弊將不行查出之監臨提調各官照容隱

例降二級調用應將梅穀成邱玖華陳豫朋趙

瓚均照例降二級調用查梅穀成邱玖華陳豫

朋趙瓚均有加一級應各銷去加一級抵降一

級仍降一級調用再邱玖華分點黃字圍失察

姚成治等頂替入場之處應比照吏員考職假

冒頂替等弊巡緝官失於查察罰俸一年例罰  
俸一年查邱玖華已於本案議以降調應於補  
官日罰俸一年等因具奏於乾隆三年十二月  
二十日奉

旨依議欽此今邱玖華現在吏部投供應補從五品

員外郎

乾隆五年八月十四日奉

旨知道了欽此

(2) 乾隆五年六月二十七日奉

旨三保請匾額一摺俟伊起身之前大學士等提奏

欽此今三保已奉

旨補授長蘆鹽政其兩淮鹽政區額應否仍行賞發

交與準泰之處謹此請

旨

乾隆五年八月十七日奉

旨不必欽此

(3)

查楊剛係廣西提標右營遊擊總督馬爾泰於  
乾隆四年十一月內題陞廣西融懷營參將經  
兵部定議楊剛係功加署都司僉書題補參將  
越銜三等且係廣西人與例不符但該督既稱  
楊剛人地相宜應令該督給咨送部帶領引

見恭候

欽定奉

旨依議欽此楊剛現在軍前尚未送部引

見今馬爾泰復具摺奏請將楊剛陞授新大協副將

乾隆五年八月十八日奉

旨知道了欽此

(4) 乾隆五年八月十九日奉

旨王友詢著仍回副將任俟有摺兵缺出大學士等

提奏欽此查廣西右江鎮總兵員缺已奉

旨將貴州安籠鎮總兵張朝宣調補現出有貴州安

籠鎮總兵一缺為此謹

奏

(5)

查王友詢係陝西潼關協副將於雍正十三年十月內經原任陝督劉於義奏署興漢總兵張傑駐防員缺乾隆元年十一月內回潼關副將任乾隆二年閏九月內回署西寧總兵周起鳳駐藏員缺之范時捷患病來京奉

硃批駐防赤靖等處總兵官著王友詢去欽此今西

寧總兵官周起鳳已經回任副將王友詢駐防

期滿應回潼關原任

乾隆五年八月二十日奉

旨知道了欽此

(6)

查岳濬將鍾保條奏關駁命案事件議覆遲緩本年六月二十五日經御史王興吾奏奏隨於二十六日欽奉

諭旨令臣等寄信申飭至閏六月初四日岳濬始將

議覆鍾保條奏一案奏到奉

硃批該部議奏是奉

旨申飭在前而岳濬奏到在後今看伊回奏之處竟

似已經覆到交部而復傳

旨申飭者臣等謹將辦理此事日期查明奏聞

(7)

大學士會同戶部議奏各關盈餘銀兩數目應用奏摺等因於乾隆五年八月二十五日奉旨依議欽此

尚書公訥 交記

嗣後各關任滿所報盈餘多寡及缺少緣由摺

奉到日奉有

硃批交部者交部查核其未

批交部而應交部者看摺大臣提奏交部

1564 乾隆五年九月初一日內閣戶部奉

上諭據河南巡撫雅爾圖奏稱豫省地土原有水田旱田二項而現在旱田之中可改水田者尚多祇以旱田賦輕水田賦重一經改種必須題請加賦小民既費工本又增糧額是以因循觀望等語朕思水田收穫倍於旱田若可改種則易瘠土而為沃壤於民間自有裨益至加增科則為數無幾且此係現在輸糧之田畝非新墾隱匿者可比嗣後有情願將旱田改作水田者悉從其便錢糧仍照原定科則徵收免其呈報有司改則加賦但各州縣地形不同土性迥別其不便改種者地方官不得勉強抑勒以致功難成而事滋擾可傳令雅爾圖令其妥協辦理以副朕體恤閭閻之至意欽此

1565 乾隆五年九月初四日內閣奉

上諭徽州府知府楊雲服病故員缺著承德州知州李珏補授欽此

1566 乾隆五年九月初五日內閣奉

上諭楊超曾著調補吏部尚書仍署理兩江總督印務史貽直著調補兵部尚書韓光基著調補刑部尚書陳世倌著補授工部尚書欽此

1567 乾隆五年九月初八日內閣奉

上諭楚粵兩省蕞爾苗人猖獗不靖半載有餘官兵擒勦尚未竣事夫苗之為賊本非巨寇利則鷹攫敗則獸散東攻則西奔南誅則北竄今之不能蕩平者在於兵力之不齊非闔賊勢之克猛也查楚省出征官兵共一萬餘員名防護各處者十之七進勦逆寨者十之三其零星四布惟以坐守為事而提兵對敵又不能窮追極搜是以寨頻克而棄

寨逃避之賊猶足以為民害其報捷之文不過云斬獲數人割耳記十數人餘則奔入深箐難於追勦而已夫苗可以入深箐官兵獨不可以入深箐乎至於粵省則以附近省城百里之逆苗不能早為勦撲并不奏聞及至報捷又多粉飾之語縱使苟且完結於目前將來難免後患此皆兩省督撫提鎮辦理未善不知機宜之所致也張廣泗素有幹濟之才於苗疆事務更所熟諳今既到軍前定能體察情事調度合宜但須事權歸一方可以資彈壓用是再頒諭旨凡在軍前文武無分楚粵自提督總兵官以下俱受張廣泗節制一切功罪聽其賞罰應奏聞者奏聞應辦理者辦理該督撫等俱不得掣肘並著該部將欽差大臣關防一顆遣官馳驛送往欽此

1568 乾隆五年九月初八日內閣奉

上諭從來安民之要莫先於弭盜而誣扳之弊使盜賊逞其奸良善受其害尤不可不嚴為防也蓋盜賊中狡黠者多平日之窩夥不肯實供每誣扳素封之家及向有嫌隙之人以圖陷害而捕役從中播弄借此索詐弊端百出縱有司審出誣扳實情准予省釋而被拘候審已不勝擾累矣朕思各省臬司為刑名總匯審理盜案是其專責當檄行所屬凡盜賊供扳窩夥必先詳加訊問得有確據方可拘拿隨到隨審如係誣扳立即省釋並將誣良之盜賊先行重懲以免再有妄扳至於是盜是良雖本人口供難以盡信而其人平日行止如何鄰里斷無不知之理虛心傳訊自無適情倘有應搜賊贓務令委員往查不得專任捕役以故藉端抄掠之弊各省督撫轉飭臬司實力奉行以副朕息盜安良之至意欽此

1569

乾隆五年九月初九日内閣奉

上諭上年山東有被水歉收之州縣朕屢降諭旨令地方官加意撫綏幸今歲雨暘應時收成豐稔惟是荒歉之後元氣未復其被水較重之東平東阿嘉祥汶上壽張濟寧金鄉荷澤單縣曹縣濮州范縣館陶等十三州縣有帶徵之漕項等米三萬三千三百餘石改徵之黑豆二萬二千四百餘石俱應於今年徵收還項者朕嘉惠小民著將此二項米豆分作庚申辛酉兩年隨同各現年應完之項帶徵全完則民力寬舒不致竭蹶該部即遵諭行欽此

1570

乾隆五年九月初十日内閣奉

上諭今日大學士等擬寫山東寬期帶徵米豆以紓民力之諭旨內有今歲雨暘應時收成豐稔萬民樂業之語朕思山東當荒歉之後今歲雖獲有秋而元氣未復若遽以為萬民樂業則言過其實非

朕心所敢安也凡豐亨豫大萬民樂業等語即臣工見之章奏朕且謂其過於鋪張在朕諭旨中亦豈可以告天下爾等可記朕此旨嗣後毋得稍忽蓋朕之事

天亦猶臣工之事朕若朕承

上天恩眷而稍有侈然自足之心即非永承恩眷之道亦如臣工受朕恩眷而侈然自足亦豈能常承弗替乎且今吏治未盡循良風俗未盡淳厚人材亦尚未振興兵民生計亦尚未充裕此我君臣所當憂勤惕勵亟為籌畫者况民猶水也澄之則清濁之則濁若示以振作則才幹者或失之乖張若偏於安靜則委靡者又流於闒茸此中調劑實屬甚難固不可欲速尤不容稍懈惟有時刻加之意以期潛移默化終底於成而已欽此



1571 乾隆五年九月初十日奉

上諭民間懋遷有無官立牙行以評物價便商賈其  
頂冒把持者俱有嚴禁近聞外省衙門胥役多有  
更名捏姓兼充牙行者此輩倚勢作奸壟斷取利  
必致魚肉商民被害之人又因其衙門情熟莫敢  
伸訴其為市廛之蠹尤非尋常頂冒把持者可比  
所當亟為查禁嗣後胥役人等冒充牙行作何定  
例嚴禁及地方官失於查察作何處分之處交  
部定議具奏欽此

1572 乾隆五年九月初十日內閣奉

上諭湖南衡永郴道員缺著侯嗣達補授山西大同  
府知府員缺著通安布補授欽此

1573 乾隆五年九月初十日奉

旨吳家驥准給假半年回籍營葬其禮部侍郎不必  
出缺欽此

1574 乾隆五年九月初十日奉

旨史貽直著教習庶吉士欽此

1575 乾隆五年九月十一日奉

旨此奏依議賑濟之事最關緊要固不可不先定條  
例以便遵行然臨時情形難以預料雖定例千百  
條亦終不能該括惟在該督撫因時就事熟籌妥  
辦而已蓋雨暘不能必其時若早潦不能保其全  
無即一省一邑之內亦或參差不齊如果應行賑  
濟即於常例之外多用帑金朕亦無所吝惜倘該  
督撫不留心稽查以致有司奉行不當徒飽奸胥  
滑吏之私橐小民不沾實惠則虛糜國帑究何裨  
益耶蓋各省遇有水旱皆係朕與督撫諸臣平時  
政事不能感名

天和潛消灾沴已應抱愧若復經理未善使閭閻至於  
失所則父母斯民之責返躬自問又何忍乎將此  
并諭督撫等知之欽此

1576 乾隆五年九月十三日內閣奉

上諭甘肅提督瞻岱病故員缺著韓良卿補授固原提督印務著周開捷署理寧夏總兵印務著總督尹繼善揀選委署欽此

1577 乾隆五年九月十五日內閣奉

上諭據湖廣總督班第奏稱新補湖北武漢黃道孫元雖本籍江南而其族人多在漢鎮行鹽應隸武漢黃道管轄似應將孫元調補他缺使無牽制等語著將孫元調補河南南汝道將李慎修調補湖北武漢黃道欽此

1578 乾隆五年九月十七日內閣奉

上諭乾隆四年山東所屬鄆平等三十九州縣秋禾被水所有應完漕米經撫臣奏准動撥臨德二倉原存漕穀按一米二穀碾米隨漕運通其應徵漕米緩至乾隆五年秋後改徵穀石還倉今屆徵收

還項之期每米一石即應交正耗之穀二石三斗是小民從前受緩征之益而今則不免有多輸之累重運之難所當加以體恤者著照欠漕之例仍按原數徵收米石暫存臨德二倉於來歲青黃不接之時出難存價俟秋成再行買穀還項於小民似有裨益該部遵諭行欽此

1579 乾隆五年九月十八日軍機大臣奉

上諭直隸河道關繫緊要總督孫嘉淦總河顧琮現在辦理江南河道總督高斌久任河工素稱諳練原欲俟其陞見來京差令前往會同商酌今思高斌進京取道直隸若就便會同該督等詳悉相度確商定議來京面奏更為妥便著即傳旨與高斌並將前後河道各案件抄錄寄去高斌從何處接到諭旨即從何處前往并令該部傳知孫嘉淦顧琮等欽此

1580 乾隆五年九月十八日軍機大臣奉

上諭貴州總督張廣泗奏稱楚粵苗徭軍務將次告竣不過兩三月即可由湖南入京陛見等語朕看彼地事情尚未就緒即善後之策亦正須詳籌前已將欽差大臣關防頒給張廣泗俾事權歸一伊自當周詳妥辦務期萬全以副朕倚任至意至從前兩省督撫提鎮等起初調度嗣後進取均未諧機宜多有錯悞以致將弁因循事延兵老日久未能告竣今雖大局粗定而軍前之文武官弁前後勇怯各異功罪不一非詳摺區別不足以懲勸著張廣泗將楚粵兩省自督撫以下以至文武官弁何人前雖有過後能奮勉何人始終退縮毫無出力之虞秉公據實即行詳查於事竣之後一一陳奏朕將權其賞罰焉欽此

1581 乾隆五年九月二十一日內閣奉

上諭江南徐州府海州所屬州縣地濱河海頻遭水

旱數年以來屢加賑卹復將正項地丁漕糧分別緩征蠲免以拯災黎今屆秋成之後所有乾隆三年四年分緩征折征之米例應同五年分漕糧一併輸納但聞今年黃運兩河秋汛長發又值七月多雨以致沿河各處低窪地畝多有被淹者雖係偏災輕重不等惟是災祲之餘民氣未復若將新舊三年漕米一時並徵民力未免拮据且一邑之內偏隅偶有被災則通邑之米糧亦必騰貴惟民間多留數萬石米穀以本地之蓋藏充本地之民食於閭閻庶有裨益用是特降諭旨著將徐州府屬之銅山沛縣蕭縣碭山豐縣邳州并海州及所屬之贛榆縣帶征乾隆三年四年分漕糧共五萬一千三百八十石零今年仍緩輸將俟辛酉年起分作五年帶征以紓民力著傳諭該督撫嚴飭所屬實力奉行並不時查察如有私征等弊即行嚴叅毋得疎忽欽此

1582 乾隆五年九月二十一日內閣奉

上諭署兩江總督楊超曾因淮安府山陽縣知縣員缺緊要奏請揀發人員著吏部揀選數員帶領引見候朕簡用欽此

1583 大學士鄂 張 徐 尚書公訥 字寄

閩浙總督德 浙江巡撫盧 乾隆五年九月二十二日奉

上諭據河南巡撫雅爾圖奏稱河北總兵官丁士傑已調任浙江處州伊未調任之前在司庫透領俸餉銀四百兩又借動該鎮親丁隨糧應扣馬價銀四百八十兩現在赴浙路途遙遠盤費浩繁一時未能歸補應於處州總兵應得俸餉之內照數扣解還項再查丁士傑雖小有才具一切訓練之事經臣嚴加稽查尚不敢懈弛但未免好事逞才不知大體必須該省督臣察查督率方於營伍有益等語丁士傑借動帑銀一事可諭令德沛盧焯知之至其居官辦事如何之處著德沛盧焯留心試省密行奏聞欽此遵

旨寄信前來

1584 乾隆五年九月二十四日內閣奉

上諭總督孫嘉淦現在會同高斌查議河務朕此次謁

陵沿途有應辦事宜著派員辦理孫嘉淦不必前來欽此

1585 乾隆五年九月二十四日內閣奉

上諭朕於十月初二日恭詣泰陵行禮一切應行事宜各該衙門備辦欽此

1586 乾隆五年九月二十四日內閣奉

上諭朕此次恭詣泰陵行禮著怡親王大學士鄂爾泰張廷玉在京總理諸務大學士徐本隨往欽此

1587 乾隆五年九月二十四日內閣奉

上諭六月間都察院奏稱有湖廣民人楊從清呈稱今年歲次庚申西方不應動土現在修造天主堂甚為不冝今冬主有地動等語朕以修造視年歲方向原屬日者陋見或伊與天主堂之人不睦故為此說亦未可定遂置之不問但令毋得造作妄言以惑眾聽乃近聞京城闕傳十月三十日有地動之事此必楊從清不肯安分復將前言傳播所致若不嚴加懲治無以鎮靜人心著將楊從清拿交刑部以為妖言惑眾者戒欽此

1588 乾隆五年九月二十五日內閣奉

上諭據四川提督鄭文煥奏稱巡撫方顯自四月以來染患目疾近又肚腹不寧氣虛體弱現在調治等語方顯患病朕心深為軫念四川路遠難以遣醫朕視著傳旨令其在川加意調理俟痊愈時再赴廣西新任欽此

1589 乾隆五年九月二十七日內閣奉

上諭江南徐州府海州所屬州縣地濱河海年來頻遭水旱幸今歲收成豐稔而所屬州縣內又間有虫灾獨傷粟米一種現屆徵收漕糧之期所有應納粟米之戶若仍徵收本色則購買未免艱難著將應徵粟米之數照部定價值准交折色俾小民易於輸將無貴價買米之苦著該部即行文江南督撫遵旨辦理欽此

1590 乾隆五年九月二十八日內閣奉

上諭前日直隸總督孫家淦奏請照例隨駕朕念伊甫經勘河回署諭令不必前來今伊復奏稱現在涿州懇請照例在拱極城接駕著允其請傳諭知之欽此

1591 乾隆五年九月二十八日奉

旨王鴻勳在山東河道任內白鍾山曾經保薦朕者其人平常是以諭令內用後因白鍾山復以伊語練河務為言特命前往江南交與高斌委用試者經高斌題補淮徐道令覽高斌恭奏情由王鴻勳平時似屬才能而臨事則畏縮不前且於朱家閘極險工程藉端推諉實屬溺職白鍾山與王鴻勳俱係旗人從前之保薦未免有庇護之意王鴻勳著交部嚴察議奏欽此

1592 乾隆五年九月二十八日內閣奉

上諭據御史齊軾奏稱今秋收穫較往歲為倍豐畿輔盈寧視外省為更盛惟是商賈雲集嗜利多人而麴蘖一端耗糧最甚雖禁令已經詳定而農場多粟必樂於聚財倘奉行一有廢弛則以酒居奇者必以糧覓利竊見近日京師九門每日酒車啣尾而進市價每燒酒一觔值大制錢十六文數年

以來無此賤價是必網利之富賈販酒者多故其價大減亦必附近之州縣私燒者眾故車載日來也應請勅下近省督撫轉飭所屬地方官恪遵定例實力稽查然不得借端生事擾累民間等語御史齊軾所奏甚是孫家淦為直隸總督所辦諸事俱屬盡心惟有燒鍋一事禁約太寬朕素知之今當秋成豐稔之時正宜講求民間儲蓄之計何以酒車愈加於前酒價日見其減是必有富商大賈踴躍開燒肆行無忌者著孫家淦轉飭所屬地方官嚴緝治罪不得姑容至於零星沽賣者不必過於深究倘因朕降此旨將二三無力小戶查拿以為塞責之具致使閭閻滋擾而奸商巨販轉以納賄於官吏而脫然事外藐法公行則州縣官之咎更不可逭可傳諭直隸及隣近省分一體遵行欽此

1593

乾隆五年九月二十八日內閣部旗文武大臣等奉

上諭記云莊敬日強安肆日偷自古及今未有不以勤而興事亦未有不以怠而敗事者朕曉夜孜孜勵敬天勤民之心為熙事寧人之本爾大小臣工理宜恪供乃職夙興夜寐以事一人近見各部奏事率過辰而至已朕昧爽而興惟留連經史坐以俟之而已此豈君臣交儆勤於為治之意耶夫善始者實多克終者蓋寡朕即位之初即以敬天勤民之心時刻自勉並以訓誨百爾臣工今甫五年耳朕慄慄危懼惟恐少涉於懈而有違初志爾百爾臣工皆有補助凝承之責乃反自即於安肆乎夫君逸於上臣勞於下自然之理也今朕尚不敢少自暇逸而汝諸臣乃不能自勉於勞詩云夙夜匪懈以事一人易曰王臣蹇蹇匪躬之故嗣今以後務宜振作奮興繩愆糾謬以副朕期聖汝諸臣之意若仍自暇逸則朕戒之在前矣將視成於後毋謂朕暴也欽此

1594

大學士鄂張徐尚書公訥字寄

閩浙總督德乾隆五年九月二十九日奉

上諭福建臺灣換班兵丁遠戍重洋向蒙

皇考聖心軫念於本身應領月餉外添賞伊家口留住

內地者每月米一斗銀二錢八分零以資養贍誠

屬格外之恩今朕聞得班兵更換之時一切行李

衣裝不能無費甚為拮据每於本營私派幫貼而

後啓行是行者居者均有未便可寄信與總督德

沛令其將閩省生息銀兩查算餘剩之數每年共

計若干即于此項內分別班兵路途遠近賞給往

來盤費永禁營中幫貼之弊庶于內外兵丁均有

裨益欽此遵

旨寄信前來

附錄

(1) 怡親王敬陳管見七條一摺奏

旨軍機大臣等議奏欽此

一 理藩院則例宜脩輯成書一條 查理藩院辦

理事事件俱係酌量口外蒙古情形相度機宜辦理若將從前所有成案編纂著為定例將來遇有事件或與從前之情事不符應隨時變通者因著有定例轉難斟酌辦理怡親王所奏編輯該衙門則例之處似可不必惟所奏蒙古律書一本係頒行內外扎薩克各旗遵照辦事斷罪之書歷年久遠未加纂輯且原刻係蒙古字未兼清文出差口外官員查閱多有未便應請勅交該衙門逐一校閱增刪改正繕寫進

呈恭候

欽定交與刑部律例館兼刻清字蒙古字頒發但查此卷書帙無多不必開館給與桌飯銀惟令該衙門堂官總領其事至應用司員筆帖式亦令該堂官酌量派撥定議具奏

一 蒙古偷盜牲畜宜分別首從一條 查蒙古定

例內偷盜駝馬牛羊者一人盜不分主僕絞二人盜絞一人三人盜絞二人三人以上夥盜者以二人為首餘俱為從等語蓋口外蒙古原賴牲畜為生是以偷盜牲畜例禁甚嚴但三人與

三人以上夥盜不問其是否均係起意為首之人概以二人為首論絞定例原未允協應如所

奏嗣後口外偷盜牲畜若係一二人者仍照舊例辦理外若係三人或三人以上者止將起意之一人照為首論絞餘俱照為從例發附近旗下為奴若臨時分途盜有數處或前後偷盜數次先係為首而後為從先為從而後為首者仍各歸各案論其首從從重歸結

一 蒙古陋習宜嚴行禁止一條 查蒙古娶妻之禮馬五匹牛五頭羊五十隻所費甚多故貧難無力再娶之人亦間有與已故服屬之妻配偶者陋習相沿未經議禁今怡親王奏請禁止違者照刑部內亂律治罪等語查五方之風土不同四夷之情形各異

本朝撫馭外藩立法務從簡便似此陋習在蒙古中知禮守法者固恥而不為其為此者必係貧難無力至愚至蠢之人且有配偶多年生育子女者一旦嚴禁遽以內地法律繩之重則斬絞輕亦流徙蒙古人等不無驚擾駭懼且啓刁徒告訐之端似非綏靖遐荒之要務也且舊俗相



沿已久則治之亦必以漸惟在管旗扎薩克等平時訓導有方使其習知綱常倫紀之親內外尊卑之辨將陋習不禁而自止毋庸嚴設科條責效於旦夕至蒙古聘禮應酌議減省以便遵行嗣後蒙古婚姻聘親之禮准給馬二匹牛二頭羊二十隻再有力不能者聽從減省總不得有逾此數違者照進入官如此則蒙古人等聘禮既減娶妻亦易從前陋習自漸能改易矣

一添鑄印信關防一條

查理藩院柔遠司於康熙四十年間因該司事務繁多分作前後兩司凡朝貢賞賚照例辦理之事俱歸前司辦理其軍機夷情議奏事務俱歸後司辦理官吏均勻撥派並未奏明另鑄印信但該司事件既已分司各辦其所用印信自應分別前後兩司字樣以專責守應如所奏另鑄柔遠前司後司印信一顆其舊有柔遠司之印繳銷至稱寧夏神木哈密州郭爾羅斯等處駐劄官員請各鑄關防之處查寧夏地方於康熙四十七年添設理事官二員前往駐劄辦理蒙古民人交涉案件鑄給關防一顆嗣因神木榆林地方距寧夏遠

遠於康熙六十一年將寧夏理事官一員移駐神木未經另給關防兩員各辦地方事件合用一印路途遙遠每致耽延誠有未便應如所奏駐劄神木理事官添給關防一顆再哈密地方於雍正三年添設部員駐劄探聽準噶爾來人信息瓜州地方乾隆元年亦照哈密之例派部員前往駐劄此兩處部員遇有軍機夷情應行報部知會各處事件俱關緊要亦應如所奏添給關防以上應行添給印信關防之處應請交與理藩院擬定字樣移咨禮部鑄造頒發至駐劄郭爾羅斯等旗部員係協同該扎薩克辦理蒙古事務之員與內地各衙門並無交涉即有報部事件有該扎薩克印信可以鈐用毋庸更議鑄給關防

一協辦旗務之台吉塔布囊請給俸祿一條

查外藩各旗閣散王以下台吉以上定例揀選引見補於協辦台吉令其協理本旗事務今怡親王奏稱協辦之台吉塔布囊等遇旗務參罰等案與扎薩克一體治罪而無恤勞之典非所以示鼓勵等語查協辦台吉係康熙二十年添設後於

康熙三十年奉

旨賞給扎薩克台吉俸祿之時並未議給協辦台吉俸祿至於與扎薩克一體治罪之處查外藩各旗所屬人等犯罪與內地之例將該管上司一併議處者不同惟本身有犯情罪較重者始有處分而歷年參罰舊案亦屬寥寥無幾况伊等自頭等以至四等閑散台吉於補放協辦台吉之後即與該王公等職掌相同沾受

國恩至為榮幸而自賞給扎薩克台吉俸祿以來並未議給俸祿已歷數十年之久應將所奏協辦台吉等賞給俸祿之處毋庸議

一理藩院各司事務宜設督催一條 查乾隆二年吏部覆准郎中五十三條奏嗣後六部俱設立督催專員專司稽查事件一年一次更換其已未完事件三月一次具奏等因遵行在案今理藩院職司外藩封爵授官朝貢賞養與一切蒙古刑名口外夷情軍機等項事務俱關緊要若設專員催查於公事有益應如所奏照六部例設立督催所官二員於衙門司員內派出專司稽查事件鑄給關防一年一次更換其已未

完事件亦三月一次奏

聞

一歸化城協理筆帖式宜酌其陞轉之路一條 查雍正十二年十二月內都統丹津奏稱歸化城地方遼濶案件繁多請添駐筆帖式四員與同知協辦事務乾隆元年五月內辦理歸化城事務尚書通智奏請水河善岱二處添設筆帖式二員俱經臣等議覆准行在案此項人自原議照定例三年一換如三年內勤勞供職者報部議叙平常者更換查議續經理藩院覆准王案條奏嗣後歸化城等處同知並協辦之筆帖式等俱俾其三年更換等因各遵照在案今怡親王奏請或照各省理事同知之例以三年為滿准於應陞之缺輪班補用或伊等俱係熟悉刑名之人俟歸化城多倫諾爾等處理事同知缺出交與該管上司保舉一二人送部與部內筆帖式一同引

見錄用等語查定例各邊地同知員缺於各部院衙門滿洲蒙古主事小京官筆帖式揀選各邊地通判員缺於小京官筆帖式揀選俱送部考試

帶領引

見奉

旨記名之員俟有缺出引

見補授今歸化城等處與同知協辦事務之筆帖式

等原係揀選發往俱有辦理刑名徵收錢糧之

旨此內俸深才能之員轉不得與在京各衙門

之筆帖式等一例陞用寬無以示鼓勵應照怡

親王所奏嗣後將歸化城等處協辦筆帖式人

員任事已滿三年果能勤勞供職廉謹自持於

地方旗民事務實堪勝任者令該管上司據實

保舉送部帶領引

見後仍回原任其奉

旨記名者遇有應陞缺出吏部於帶領在京記名人

員引

見之時將該員記名之處一併繕寫名單進

呈恭候

簡用如此則內外揀選筆帖式之例皆屬畫一矣謹

奏伏候

諭旨

乾隆五年九月初七日奉

旨依議欽此

(2)

德沛盧焯奏請將杭州府知府姚淮陞補杭嘉  
湖道杭州府知府員缺請將寧波府知府色起

調補寧波府知府員缺請將奉

旨交德沛以知府之林興泗補授等語 查杭嘉湖

道已奉

旨將德希壽補授 又查現出道缺有湖南衡永郴

道一缺

(3) 張廣泗辦理苗疆軍務未有印信似應

頒發欽差大臣關防今該部差官馳驛送去臣等愚

見如此已添寫

上諭內謹此奏

聞請

旨

(4) 給事中朱鳳英進講摺內奏稱

聖祖仁皇帝時廷臣按值分班趨侍

講幄請

敕諭館閣覆查康熙年間儒臣進講班值典禮詳議

請

旨酌定施行等語臣等竊惟為學之要以實而不以

文當

聖祖仁皇帝冲齡御極

親政初年經籍史編自句讀訓詁之間進而深於義理

之蘊所資於講肄者甚切其時簡拔儒臣若故

大學士臣熊賜履臣張英臣陳廷敬侍郎臣孫

在豐臣勵杜訥等先後侍直恣由

特簡至為慎重該給事中謂廷臣按值分班趨侍

講幄殆未深考當時進講之有專員而非廷臣分班入

值也哉

皇上紹登宸極

聖學業已大成

臨御以來法茹經史典學緝熙孜孜罔倦則所謂遜

志時敏者乃在

敷政寧人之實而非徒口耳之勤且在

躬行心得之要而不在儀文之節舉充舜禹湯文武

之道設誠而致行之

綜攬萬幾無在而非講學也該給事中知以進講為

念典之成憲而不知判講學聽政為兩事則所

講者章句而分班值講乃具文矣現在

經筵進講已奉

旨切實敷陳而翰林御史等輪日錄進經史寒暑不

輟雖所見有淺深所陳有當否而所引据皆先

哲之格言苟葑菲之不遺諒芻蕘之可採該給

事中所奏請查康熙年間講幄典禮酌定施行

之處應毋庸議

(5) 奉

旨武漢黃道孫元員缺著於河南道員內酌量調補

欽此今查河南道員共五缺河北道張學林係

因語練河務補授之員糧驛鹽道胡紹芬係該

撫雅爾圖以要缺題請調用之員開歸道崔琳

係因親老奉

旨以近省補用之員俱不便調補外其南汝道李慎  
修係山東進士河陝汝道劉兆畿係正紅旗人  
相應請

旨於此二員內調補一員

(6) 臣等看夏之咨進

呈經史內奏稱學官課士取宋胡瑗經義齋治事  
齋二條詳明規制其屬之經義者易詩書三禮  
春秋三傳二十一史通鑑諸書或傳通或兼通  
分其差等以時稽之以月試之以歲省之合者  
留不合者去其屬之治事者為田賦為兵法為  
刑律為禮制為歷律各令自署所長分條考核  
期於貫穿古今通達政體為主果有德藝可觀  
拔萃出類之士大司成列諸薦牘以備擢用諸  
不率教及不通一藝者悉皆罷遣等語 查成  
均所以造士而取士貴乎實學立教儲材原不  
外經義治事二條但近日肄業諸生多係講習  
時藝雖有月課歲試之法亦皆以時藝之優劣  
為差等求其殫精經術講研有用之學可以坐  
言起行者正難其選夏之咨所奏宋胡瑗蘇湖

旨是欽此

(7) 臣等看秦蕙田進

教授之法於大學養士之道原屬有益若果能  
敦崇實學師法立而程課嚴行之日久則人材  
自多成就大學士趙國麟現管國子監事其如  
何詳立規制及考核去取之處似應將夏之咨  
原奏交大學士趙國麟及該祭酒等定議具奏  
乾隆五年九月十三日奉

呈經史內奏直省採買官穀以致產米之鄉價皆  
騰貴州縣積貯應隨宜辦理一條 查近年歉  
收省分因散賑之後倉貯空虛不得不動帑採  
買以備儲積雖產米之鄉或致價貴而需米之  
地水旱賴以有備所關甚鉅乃一時救急之舉  
而非常行之事至今年各省豐收本地收糶既  
易自無須遠出採買其價值微貴微賤乃州縣  
臨時酌劑之事未便謂其不應辦理過急以致  
逾時缺額致滋弊玩  
又奏佃戶刁頑抗欠之弊一條 查佃戶霸種  
欠租以致業戶之苦轉無所愬南省固實有此

弊而北省則又佃戶多受業戶之苛刻是以前  
經河南巡撫雅爾圖奏請寬佃戶之租額益各  
省情形不一宿弊相沿惟在地方官留心曉喻  
化導未便特降

諭旨施行

又奏不勝外任之郡守歸於部用輕重失宜一  
條 查道府不勝外任督撫不得妄請調京改  
補已於乾隆二年八月內奉有

諭旨欽遵在案近年即間有一二改補部員者或係  
該員由部屬外陞該督撫以其不宜外任送部

引

見蒙

皇上念其原係部屬仍令在部補用或係因其才力

於部曹尚屬相宜

特旨錄用並未有一郡之廢材轉歸於部用輕重

失宜之事

以上三事屢經巨工條奏雖奉行不能無弊而  
調劑要在隨宜各省情勢不一先後事理或異  
難以執一而論秦蕙田所奏應無庸議

(8)

臣等閱者顧琮摺內稱金門關之上開堤放水  
目下時逾霜降河流細緩可無淹決之虞恐明  
歲夏秋陰雨連綿衆水匯集濁流暴漲由現在  
開掘之口奔騰而出勢必全河奪溜一往莫禦  
關係甚鉅臣愚以為既已開堤放水改河只可  
試者凌麥二汛請俟麥汛後仍行堵築並將下  
口一帶照例疏濬等語 查金門關開堤放水  
一案直督孫嘉澍以永定河口河流自鄭家  
樓逆折而北歷龍河鳳河雅拔河之下游俱有  
壅滯且去北運河不遠倘再沖泛恐碍運道必  
於上游放水始為經久之圖親至金門關相度  
見石堤之上不過數十丈即係河流頂沖之所  
於此處開一土堤則全河水之一出堤口即入  
金門關之引河可以順流暢達等因會同顧琮  
合詞具奏經臣等議准奉

旨遵行現於本月初七日興工十六日開堤放水在  
案今顧琮以目下流河細緩可無淹決之虞恐  
明歲雨水暴漲勢必全河奪溜一往莫禦關係  
甚鉅等語在顧琮身任河臣河務是其專責欲  
為永久之計自應思慮預防但前據孫嘉澍摺

內亦奏稱金門閘西股引河下口入中亭河有王莽店逼近河岸中亭河入淀之處有苑家口蘇家橋等處村庄尚須保護中亭及玉帶河南堤尚須加鑲等語則是一切應辦事宜開堤放水之後正須通盤計莫詳勘定議於小害權其重輕於大患籌其補救並非一開堤放水便已竣事竟無需善後之策也况永定河水性速徙無常其防護之策固當預定於平時而相機辦理尤必隨時斟酌顧琮身在河干如果確有所見何不於未請開堤放水之先與孫嘉淦詳切商議或自行陳奏乃既合詞奏請甫經定議奉行始復以全河奪溜難保民生請於麥汛後即行堵築為辭是顧琮原無定見意屬兩可恐將來或有沖決故為此奏先以自為地耳况秋汛已過水涸時原無須放水所以開堤放水者本欲及早試行俟大汛漸至便可令河水就道庶幾故道可復淀口免淤此正為麥汛以後計並非為目前或有關礙不得已而為此也若將水涸時開放之堤至麥汛後仍行堵築則此時之糜帑費工殊何為者無乃自相矛盾竟同兒戲

予至顧琮所稱現在上流無橫溢之苦下稍無淤淀之累等語查兩年來汛水未甚漲發而鄭家樓以下地方已被沖淹則下流之淤墊已可概見今以故道難復反謂下流無阻前孫嘉淦會奏摺內有下游清水壅滯已無可行之路等語則又何說顧琮面訂會商時曾不置一語竟以意見相同列銜了事耶臣等愚見明年麥汛為期尚遠江南河臣高斌將次來京伊久於河務諳練誠實請

勅令前往永定河將全河形勢與目下辦理情形會同孫嘉淦顧琮詳勘熟籌妥議具奏庶於河工有益應將顧琮此摺暫行收貯可也謹

奏伏候

諭旨

(9) 大學士伯臣鄂 等謹

奏為遵

旨議奏事總督張廣泗一摺奏稱綏寧城步二縣為湖南邊界緊要夷疆綏寧營原額兵丁五百八十二名除分防塘汛外存營不過二百餘名城步縣係武岡營分防存城亦不過百餘名兵勢未免單弱義寧縣相距廣西省城僅六十里汛兵祇有數十名省會北面全無藩蔽是以苗犛敢肆鴟張今若欲各守邊界湖廣應於城步綏寧縣治并黃桑營等處廣西應於義寧縣治并龍勝縣里等處酌量安兵大約每省各需添兵七八百名即數分佈但苗犛合聚於內兩省分守於外聲勢仍屬不通兵威之下可以暫安而不可以經久將來仍不免有勾結情事若欲兩省通達必需設大營於內則苗勢始能渙散臣詳加察看楚省惟有現駐兵之長安五寨地勢寬敞粵省則應在廣南平鄧等處相度形勢扼要安營每省約需添兵一千五六百名分駐彈壓庶足以鞏固地方昭垂永久惟查善後事宜

必先酌定章程於用兵剿撫之時即預為布置則軍務報竣即諸事已妥等因奉

硃批軍機大臣等議奏欽此又湖南巡撫許容一摺

奏稱綏寧城步相距粵西之義寧等處中間三

四百里重山複嶂皆係苗犛窟穴雖目下平定

保無更起事端應否於楚粵適中既經剿洗之

處相度地勢添建一縣設立文武官員招募墾

種積粟屯兵以資控制正在躊躇今張廣泗欲

於長安設營與臣添建縣治設立文武員弁之

意見亦大略相同查長安五寨駐兵則扼要設

防四面提挈且粵西亦逼近設營兩相呼應洵

足鞏固地方至一切規條如築城堡蓋營房等

項需用人夫似應即於掃蕩大捷之後趨此大

衆齊力版築不日告成需用材木苦草似應即

於進剿之時砍伐林木以備間架廣收稻草以

備苫蓋需用土石磚瓦似應即於就近開鑿燒

造及賊遺房屋拆改需用匠人似應即在附近

州縣調發需用畚鍤木掀鐵釘等物似應即為

約略估計預備製送需用錢糧似應即於軍需



軍前人員內選派其安營駐防兵丁似應即於  
隨征官兵內抽存令內地另募補額至於添設  
將官如副叅守千等類總轄分領約束操練添  
設文官如同知通判之類聽理詞訟宣諭化導  
似應即為預擬職銜員數

奏請

欽定凡諸設塘分汛放卡遊巡以及種種事宜務期

及早酌定一而具奏一而飭辦等因奉

硃批軍機大臣等一併議奏欽此 查湖南之綏寧

城步廣西之義寧等縣俱係苗疆要地自充苗  
搆逆以來大兵剿捕之際該縣居民尚有被劫  
多案固屬該地方員并防範疎虞亦係汛兵單  
弱之故其黃桑營龍勝縣里等處均闕楚粵苗  
界門戶自應各添設弁兵以資防守今張廣泗  
奏每省各需添兵七八百名即數分布又稱兩  
省聲勢不通必須安設大營於內查看楚省惟  
有現駐兵之長安五寨地勢寬廣粵省則應在  
廣南平卸等處扼要安營每省約需添兵一千  
五六百名分駐彈壓等語該撫許容亦以長安  
五寨駐兵則扼要設防四面提挈且粵西亦逼

近設營兩相呼應洵足鞏固地方與張廣泗意  
見相符臣等復詳加酌議增置汛兵於各縣邊  
界以防護城民安設大營於苗犴腹裏以聯絡  
聲勢同為善後要策自當籌酌舉行但兩省添  
兵將及五千名之數不但久遠安設事關錢糧  
且祇因苗犴數寨蠢動之故於三百餘里之內  
建兩大營增置多兵於通省兵制亦未免畸重  
應令張廣泗會同各該督撫再加詳議酌定兵  
數在於該省就近各鎮協營內查明腹地間汛  
可以分防移駐者儘數抽撥如實不敷用再行  
招募增添其應添之將弁亦照此辦理又許容  
奏請添設文員聽理詞訟宣諭化導查長安五  
寨地方安立大營自須設副叅一員統領彈壓  
其文職應令同知一員協同駐劄該督撫即於  
該省同知內酌量移駐一員無庸另行添設至  
廣西平卸等處應於何地駐兵添防應否亦移  
駐文員並楚粵兩省一切善後應行事宜俱聽  
張廣泗會同各該督撫詳加妥酌應預為辦理  
者隨時具摺奏

聞即行飭辦應具題者即會同具

題可也謹

奏伏候

諭旨

乾隆五年九月二十八日奉

旨依議欽此

(10) 大學士伯臣鄂爾泰等謹

奏為遵

旨議奏事據奉天府府尹吳應枚奏稱兵部劄開議  
政處議准兵部侍郎舒德赫等條奏奉天事宜  
八條內所開未入籍民人給限半年勒令回籍  
限滿不回派官兵押解送回籍貧乏不能起  
身者應如何官辦令其起身該將軍府尹詳議  
定奪一條實有難以遵行之處蓋

本朝自順治八年招民開墾以來迄今九十年矣  
即就承德一縣而論未入籍民人男婦已有二  
萬七千三百名之多統各州縣計算其數約有  
十五六萬以十五萬之衆散遺於半年之中難  
免遷延滋累此等民人寄居日久故鄉毫無親

族可攀業已棄如敝屣奉天復有恒業可托早  
經視為樂郊一旦勒令回籍所有房屋器皿等  
項難以攜帶之物勢不得不變價以充路費而  
一時又苦無售主欲留則限期已屆欲去則資  
斧維艱不得已官給盤纏人眾既糜

國帑再不得已派官押解情急慮督事端切惟侍  
郎舒赫德條奏之意無非欲杜絕匪類使之肅  
清據臣愚見事宜緩圖無容急驟今山海關既  
議給票放行海口復議照票查點則水陸兩途  
俱經禁阻游食之民之續來者已無由留滯其  
現在寄居民人請照侍郎舒赫德等原奏有情  
愿入籍者准令取保入籍其現在寄居商賈工  
匠若照原議俱令赴山海關領票往返二千餘  
里未免廢時失業請即令就近地方 員給與  
印票俾各自謀生既不侵佔旗人地畝又可通  
工易事實與旗人生計有益而無損仍請令該  
旗大臣轉飭城守尉等員明白曉諭旗人所有  
地畝不許全僱民人耕種取租必須三時力作  
相率務農并酌定賞罰之條以勸勤而懲惰等

語謹查奉天地方土沃民淳風俗質樸歷年以來關內民人寄籍其地者甚多其已經入籍者即為土著之民其有雖閱多年而未經入籍者經議政處議覆侍郎舒赫德條奏令奉天將軍府尹詳議辦理志令回籍等因奉准在案今該府尹奏稱各州縣未入籍民人男婦約有十五六萬口之多寄居已久置有恒業若一旦勒令回籍難免遷延滋累請仍照侍郎舒赫德原奏有情願入籍者准令取保入籍等語在該府尹所奏情形祇欲目下取其相安即議政處原議亦非不知民情託業年久遷徙為難但以奉天久遠之圖論之必須力為清理始可望其俗尚還淳食貨無耗于本地旗民生計大勢有益若照該府尹所請概行取保入籍是已經入籍之外轉增添十五六萬人口仍于旗民生計無補徒多一番煩擾至原議勒限半年者乃係事期必行之意今擬該府尹查開各州縣應令回籍之男婦約有十五六萬名口人數既眾實有不能迫促辦理之勢自應寬其限期毋致民人苦累以仰體我

皇上一視同仁兼容並育之

聖心臣等詳加酌議似應行令該將軍府尹會同商酌從緩辦理不必勒定期限查明實係置有房產器具者如何令其從容變賣回籍其老弱孤寡疾病貧乏者如何遵照原議官給路費令其不致饑寒道路其生長奉天年久無籍可歸無親眷可投者如何令其不致顛連失所其無籍匪類游手游食之徒如何速令各回本籍不致潛留滋事一一飭令旗民官員分別查辦仍將回籍民人戶口人數每年于年底彙冊報部如此則數年之後自然漸就清理加以嗣後山海關海口驗票查點始許放行則流民之續至者無從得出各旗民地方查核更易該將軍府尹務須實力奉行不可因循係緩辦理遂致因循推諉並嚴飭旗民官員約束兵役人等毋得藉端嚇詐騷擾致滋事端如有故縱等情交該管上司立即嚴行叅處至現在寄居之高賈工匠各執藝人等應照該府尹所奏即令就近地方民員給與印票以備稽查令各照舊安業其續出山海關貿易之人仍照原議給票填寫放行

凡各地方官並該關口給發印票之處交與各該上司不時嚴行稽查如有勒捐需索等弊即行原叅究處再奏稱旗人所有地畝不許全雇民人耕種取租必湏三時力作相率務農并酌定賞罰之條以勸勤而懲惰等語查關東旗人皆籍地畝為恒業其未經當差之間散人等自應務耕作習勞苦以勤生計應令該管大臣官員立法勸懲如有游手好閑不事耕種以致拋荒地畝者照例將該管官議處其當有差事者僱覓民人耕種之處應仍聽其自便其或本籍民人傭工者少原議關內三百里以內居住之民人准其出關耕種其或耕已田或為旗人傭工如該關給有文票耕種田傭工處所取有該旗民印官文票者俱令各安耕作俾該旗民生計均屬有益而無藉匪類不得借端潛匿自可常行無弊矣謹

奏伏候

諭旨

乾隆五年九月二十九日奉

硃批情愿入籍之民准令取保入籍之處著照該府

尹所請行其不愿入籍者定限十年令其陸續回籍餘依議欽此

(11) 大學士伯臣鄂爾泰等謹  
奏為遵

旨議奏事據奉天府尹吳應枚奏為調劑奉天現行事宜等因一摺六條奉

旨軍機大臣等議奏欽此

一安置奉天之例應請停止一條 查定例內載貪贓官役及蠹役索詐夾帶私錢民人無票私出口外等犯俱發奉天遼陽等處安插今吳應枚奏稱此等人犯作奸犯科原非善類最易敗壞風俗請

勅部定議改發別處等語查現議奉天寄籍民人俱勒令回籍遊食無業之人禁止出關原為清理

地方起見今若將有罪之人發往安插種莠混濁實仍于地方無益應如所請

勅交該部將嗣後應發遣奉天之犯改發別處詳酌定議具奏至現在安置各犯在配已過三年安靜悔過者原有該管將軍府尹咨部奏

聞請

旨之例應仍照舊例行

一禁止隻身出關之民宜分別辦查一條 查旗民往來出關人等惟以路引口票為據其貿易之人到關給票者則一以貨物為憑若係單身無業之游民俱一概禁止出關原議已令通行曉諭直隸各省民人俟半年後再照新例遵行今吳應枚以奉天民人有進關貿易得銀隻身回奉天者有各省商人赴奉天貿易貨物由水路隻身出起早出關者有挈眷來奉父母仍在關內進關省視未回者既係隻身又無貨物恐被攔阻請分別查辦應再行令各直省通行曉諭嗣後隻身出關人等有前項情節者令於所在各該地方領取路引印票到關查驗放行以杜詐冒並令該關於文到之日半年後再照新定之例遵行至半年之內如有從前自奉天進關未領有本地印票今隻身出關又未知定有新例等情節者若照該府尹所奏在關呈明行查奉天該地亦俟查覆到日再為放行既恐啟胥役刁難勒索之弊而行者亦不免于羈滯苦

累應令本人在該關稟明情由取具有本關口熟識之人保結者准其出關俟半年期滿即照新例查驗路引印票始許放行

一耕種蠶織等事宜飭旗人學習一條 查旗人宜勤耕種之處已於吳應枚奏為據實奏請等事摺內議覆請

旨應毋庸再議至習為放蠶紡織等事均屬有益旗人生計自應令該管旗員勸諭立法教導以廣自然之利其器具工本應俟實能遵行之後或傳之未廣或力有未周聽該將軍再行查奏此時未便遽議賞給

一關外各邊門應一體稽查一條 據稱奉屬各邊隘如九關臺峯時牧等邊及柳條邊一帶應令該將軍設法給票嚴飭稽查其九關臺設立同知管理邊外東西土墨特佃種民人請飭該同知即照所編保甲門牌式樣另給一牌如欲進邊貿易將牌呈遞守邊員弁驗放若無牌票擅放並該同知不給與牌面及借端需索留難者俱照議處山海關員弁例議處等語此條應交該將軍府尹照所奏詳議辦理

一採參到煤之事宜預為經理一條 查到採人參利之所在人咸樂趨本地旗民甚多何慮招募乏人似不必預為定議至遼陽州等處煤窰原議令旗人採或須催募夫役即催彼處入籍民人今據吳應枚奏稱到煤係取勞苦之事本地旗民不識煤線亦不耐勞苦現在到煤一千餘人俱係另編保甲從無滋事會請同該將軍嚴飭員弁取其原管業旗人保結准其暫時到採將來若去一名即招募本地旗民一名補數漸次澄汰庶無歧悞等語查外省民人聚集煤窰恐仍為流匪假托之地是以原議俱令驅回原籍至到煤雖屬勞苦而民間趨利如鶩豈有本地旗民即不諳到採之理但據稱到煤現有多人俱係另編保甲若一時悉行散遣窮民不免有失業之苦然亦不聽便其逐名自去以致借端遷延為日久應將此等人眾開具花名按依原籍遠近限於五年之內設法逐漸散遣回籍隨時招募本地旗民補數仍飭該管員弁不時稽查約束則到採既屬無誤而窮民

亦可寬期改業矣

一地畝請免丈量一條 查議政處原議請將奉天旗民地畝交與各該地方官遵照議准即中徐萬卷所奏清查菜園英額林圍場蘆廠馬廠等處陸續再行查丈將餘出之地增收錢糧其原文出之餘剩生地及此次查出之生地悉令旗人墾種等因今吳應枚奏稱奉天旗地十居七八民地十居二三屢經清丈又欽奉

世宗憲皇帝諭旨准令自首至臣抵任後復嚴行清查止據首出地六百畝乾隆四年五年並無首報之人亦無告發之人此時即有餘地亦屬畸零不成片段仰懇

天恩給限一年容臣等明白曉示莊頭旗民許其自行首報嚴定科條如限內再不自首發覺丈出除照例治罪外並將餘地入官按年追取花利等語查戶部議覆即中徐萬卷條奏請將英額林子菜園馬廠圍場葦塘等處四至詳細查丈各立界限其丈出荒地出示招墾至熟地之內從前倘有遺漏未入冊檔地畝應行

盛京戶部出示曉諭勒限一年准其自首補入冊

檔如限滿不行首報者查出照例治罪等因具  
奏奉

旨依議欽遵在案是奉天旗民熟地之內若有遺漏  
欺隱者已經定議奉

旨准勒限一年令其自首該府尹所奏應毋庸再議  
若限內再不自首應照該府尹所奏嚴定科條  
除照例治罪外並將餘地入官按年追取花利  
應令該將軍府尹等嚴行曉諭並飭所屬各員  
弁實力稽查至英額林子菓園馬廠等處詳細  
查丈並將丈出生地悉令旗人認墾之處應仍  
照議政處原議辦理

乾隆五年九月二十九日奉

旨創煤一事著照該府尹所請行餘議欽此

1595 乾隆五年十月初一日內閣奉

上諭天津地勢低窪年來屢被水災今歲雖有七八分收成而民力尚未充裕所有乾隆三年四年緩徵之錢糧若照前議徵收仍不免拮据用是特頒諭旨著將天津所屬州縣帶征之項自本年為始分作五年徵收以紓民力欽此

1596 乾隆五年十月初一日內閣奉

上諭刑部侍郎常安著補授漕運總督托時著調補刑部侍郎欽此

1597 乾隆五年十月初六日內閣奉

上諭前因江南徐州府屬之銅沛等州縣及海州贛榆縣本年七月內偶被水災閭閻拮据所有乾隆三年四年分帶徵漕糧特頒諭旨今年仍緩輸將俟辛酉年分起作五年帶徵以紓民力近又聞海

州所屬之沐陽縣今歲雖有七分收成而三四兩年緩征之漕糧與現年應徵之項俱令交納以一歲之所入完三年之額賦其勢亦屬難支用是再降諭旨除乾隆三年分折徵正耗米六千四百石有零仍隨本年漕米一併徵解其四年分正耗米一萬一千三百石有零著於辛酉壬戌兩年分徵帶運庶小民得以從容完納不致苦累可傳諭該督撫即轉飭遵行欽此

1598 乾隆五年十月初九日內閣奉

上諭阿里衮著調補戶部侍郎其兵部侍郎員缺著鄂彌達補授內閣學士員缺著石麟補授欽此

1599 乾隆五年十月初九日內閣奉

上諭安寧以江蘇藩司兼管關稅又管蘇州織造事務繁多難以兼顧著圖拉前往蘇州專辦織造事務仍著安寧不時照管查看欽此



1600 乾隆五年十月十二日內閣奉

上諭朕命翰林科道諸臣每日進呈經史講義原欲探聖賢之精蘊為致治寧人之本道統學術無所不該亦無往不貫而兩年來諸臣條舉經史各就所見為說而未有將宗儒性理諸書切實敷陳與儒先相表裏者蓋近來留意詞章之學者尚不乏人而究心理學者蓋鮮即諸臣亦有於講章中係以箴銘者古人鑑鑒几杖有箴有銘其文也即其道也今則以詞藻相尚不過為應制之具是岐道與文而二之矣總因居恒肄業未曾於宗儒之書沉潛往復體之身心以求聖賢之道故其見於議論止於如此夫治統原於道統學不正則道不明有宋周程張朱諸子於天人性命大本大原之所在與夫用功節工之詳得孔孟之心傳而於理欲公私義利之界辨之至明循之則為君子悖之則為小人為國家者由之則治失之則亂實有裨於化民成俗修己治人之要所謂入聖之階梯求道之途轍也學者精察而力行之則蘊之為德行學皆實學行之為事業治皆實功此宗儒之書所以有功後學不可不講明而切究之也今之說經者

間或援引漢唐箋疏之說夫典章制度漢唐諸儒有所傳述考據固不可廢而經術之精微必得宗儒參考而闡發之然後聖人之微言大義如揭日月而行也惟是講學之人有誠有偽誠者不可多得而偽者托於道德性命之說欺世盜名漸啓標榜門戶之害此朕所深知亦朕所深惡然不可以偽托者之獲罪於名教遂置理學於不事此何異於因噎而廢食乎蓋為己為人之分自孔子時早已明辨而切戒之學者正當持擇審處存誠去偽毋蹈徇外騫名之陋習崇正學則可以得醇儒正人心厚風俗培養國家之元氣所係綦重非徒口耳之勤近功小補之術也朕願諸臣研精宋儒之書以上溯六經之閫奧涵泳從容優游漸漬知為灼知得為實得明體達用以為啓沃之資治心修身以端教化之本將國家收端人正士之用而儒先性命道德之指有功於世道人心者顯著於家國天下朕於諸臣有厚望焉

1601 乾隆五年十月十二日奉

旨依議成均課士之道惟貴躬行實踐不在多立科  
條大學士趙國麟等所奏經義治事諸款皆從前  
孫嘉淦所奏准者若果實力奉行自能成才育德  
有裨學校如徒視為具文雖再增條款又復何補  
是惟在國子諸生自知黽勉則古稱先務為明體  
達用之儒勿役役於祿位功名之念而司訓課之  
責者又復善為誘掖切加勸懲則辟雍鐘鼓教化  
聿興而珪璋特達之士亦從此輩出矣欽此

1602 乾隆五年十月十七日內閣奉

上諭河南河陝汝道劉兆畿經巡撫雅爾圖題叅革  
職其員缺著河北道張學林調補河北道員缺著  
淮安府知府胡振組補授欽此

1603 乾隆五年十月十七日內閣奉

上諭從前寧夏等處地動為災民人困苦朕百計籌  
畫加意撫綏始不至於失所惟是瘡痍甫起戶鮮  
蓋歲本年平羅地方又有被水被旱之處若照分

數成例捐免錢糧恐民力仍不免於拮据著格外  
加恩將銀糧草束槩予全免至未被災之材莊及  
夏朔二縣從前被災較重雖兩年以來均屬有收  
而工役繁興人夫雲集米糧物價猝難平減亦應  
酌量加恩與民休息著將夏朔二縣及平羅未被  
災村莊辛酉年額徵錢糧草束寬免一半戶部可  
即行文該督撫遵旨辦理欽此

1604 乾隆五年十月十七日內閣奉

旨昔年

皇考曾降諭旨禁止民間埋藏多金者不過懲戒貪鄙  
之意是以頒

諭之後並未舉行今順天府尹張鳴鈞因許秉義出首  
伊妻父有埋藏銀兩即差人前往刨掘且得銀僅  
二萬餘兩亦並不在從前禁止之內此事張鳴鈞  
並未奏聞請旨遽然如此辦理甚屬不合著交部  
察議具奏許秉義是否係俞君弼之婿及有無挾  
讐報復圖利詐騙之處交刑部查審定擬具奏欽  
此

1605 乾隆五年十月十九日奉

旨從來宮室苑囿古帝王所不廢其或年歲稍久量加修繕亦勢所不免然而惜民力節嗜慾戒奢華乃圖治之大經養心之要道朕御極以來一切服御務從省約即圓明園臨駐之地亦一仍

皇考舊規並未別有營造以蹈土木繁興之戒今年偶

因苑中東偏尚有隙地增構臺榭數月訖工稍覺華壯朕心已用為疚蓋雖絲後無煩於閭井經費不藉於司農而內帑所出獨非民脂民膏耶且朕日去奢崇儉訓示臣民正當躬行以為天下先乃一時游覽之娛不能自克以此知抑損嗜慾敦行節儉之難而謹小慎微誠不可不加之意也今

會都御史劉藻奏請停減營建謂奢靡之漸不可稍開侈蕩之源不可不杜此語深獲朕心年來廣開言路而諸臣所陳率不過一二政令之更張無大裨補劉藻此奏甚屬可嘉實所僅見者夫以營造一節即能因事獻規直陳無隱倘或政有闕失諸臣亦必各思獻納朕得以隨時儆省收作礪從繩之效為益不亦多乎劉藻著交部議叙再內務府總管前以瀛臺建造多年不無損缺奏請修葺

朕已允行可傳諭內務府總管等但取完整不得過於華飾以蹈前失劉藻摺并發欽此

1606 乾隆五年十月二十一日奉

上諭馬蘭峪鎮標所屬之窄道子楊樹溝二汛經總兵布蘭泰奏請將楊樹溝一汛移駐板谷嶺與窄道子汛兵均就近改隸曹家路屬管轄戶部議令二汛兵丁即照依曹家路屬改支小餉乃為營制畫一之意朕念二汛以現在之防兵改隸並非新設可比若遽改支小餉兵丁不免拮据著將二汛馬步兵丁六十名仍照舊支給大餉以昭朕優恤之恩該部即遵諭行欽此

1607 乾隆五年十月二十一日內閣奉

上諭州縣設立仵作因係命案所關故從前定例甚詳並曾蒙

世宗憲皇帝諭旨將仵作三年無弊者賞給銀兩以示鼓勵凡以慎重民命至為周悉乃近年以來聞外省並不實力奉行照額募補惟藉鄰封調取應用

以致命案遲延拖累相驗未能明確此固州縣之怠忽亦該管上司不能留心查察之故著各該督撫嚴飭查明未設之州縣即行勒限募補悉遵定例辦理嗣後若州縣仍然忽視督撫等不行查參應如何分別定以處分之處交部定議具奏欽此

1608 乾隆五年十月二十一日內閣奉

上諭昨張鳴鈞奏許秉義謀占俞君弼家產一事因其辦理錯謬已交部議處今聞俞君弼原充工部鑿匹積有家資病故無子有義女之婿許秉義欺其嗣孫年幼圖占家產竟以婿名主喪因向與內閣學士許王猷聯宗託其遍邀漢九卿往弔欲借聲勢彈壓俞姓族人九卿中如陳惠華陳世倌梁詩正張廷璐等託故不往其餘往者頗多夫身為大臣而向出身微賤之人俯首拜跪九卿縱不自愛其如國體何著傳旨嚴行申飭許王猷行止卑鄙有玷官箴著交部嚴察議奏欽此

1609 乾隆五年十月二十一日內閣奉  
上諭鹿邁祖著巡視中城鍾衡著巡視西城欽此

1610 乾隆五年十月二十六日內閣奉

上諭朕因向來秋審朝審各案內緩決人犯年復一年既不至於正法徒久淹獄底以致陳案日積特降諭旨令九卿詳加分別凡緩決之案果係情有可原者俱入於可矜條內具奏請旨今閱九卿所奏直省各案由緩決改為可矜者甚多且其中有定案未久即邀寬典者在九卿審擬之時惟論其情罪有無可原不復於年分之遠近更加區別而愚頑之輩或至妄逞臆見以為甫犯重辟即得未減全無悚惕之心轉滋僥倖之念於國法人心殊有關係用是再降諭旨明開示此次辦理秋審朝審各案多從寬減乃朕法外施仁加意欽恤祇今年一次舉行並非常例直省人民當思大法不可輕干殊恩非可常冀共洗心滌慮以仰承國家寬大之恩各該督撫可轉飭府州縣徧行出示曉諭知之欽此

1611 乾隆五年十月二十九日內閣奉

上諭士為四民之首而太學者教化所先四方於是觀型焉比者聚生徒而教育之董以師儒舉古人之成法規條亦既詳備矣獨是科名聲利之習深入人心積重難返士子所為汲汲皇皇者惟是之求而未嘗有志於聖賢之道不知國家以經義取士使多士由聖賢之言體聖賢之心正欲使之為聖賢之徒而豈沾沾焉文藝之末哉朱子同安縣諭學者云學以為己今之世父所以詔其子兄所以勉其弟師所以教其弟子弟子之所以學舍科舉之業則無為也使古人之學止於如此則凡可以得志於科舉斯已爾所以孜孜焉愛日不倦以至乎死而後已者果何為而然哉今之士惟不知此以為苟足以應有司之求矣則無事乎汲汲為也是以至於惰遊而不知返終身不能有志於學而君子以為非士之罪也使教素明於上而學素講於下則士者固將有以用其力而豈有不勉之患哉諸君苟能致思於科舉之外而知古人之所以為學則將有欲罷不能者矣觀朱子此言洵古今通患夫為己二字乃入聖之門知為己則所讀

之書一一有益於身心而日用事物之間存養省察闡然自脩世俗之紛華靡麗無足動念何患詞章聲譽之能奪志哉况即為科舉亦無碍於聖賢之學朱子云非是科舉累人人累科舉若高見遠識之士讀聖賢之書據吾所見為文以應之得失置之度外雖日日應舉亦不累也居今之世雖孔子復生也不免應舉然豈能累孔子耶朱子此言即是科舉中為己之學誠能為己則四書五經皆聖賢之精蘊體而行之為聖賢而有餘不能為己則雖舉經義治事而督課之亦糟粕陳言無裨實用浮偽與時文等耳故學者莫先於辨志志於為己者聖賢之徒也志於科名者世俗之陋也國家養育人材將用以致君澤民治國平天下而囿於積習不能奮然求至於聖賢豈不謬哉朕膺君師之任有厚望於諸生適讀朱子書見其言切中士習流弊故親切為諸生言之俾司教者知所以教而為學者知所以學欽此

附錄

(1) 大學士伯臣鄂 等謹

奏為遵

旨議奏事雲南總督慶復奏訊擬矣長緣由等因一

摺奉

硃批軍機大臣等議奏欽此 據稱查矣長等圍困  
都竜彼時餘黨正盛矣長一聞天兵駐口釋兵  
內投情殊可原惟在交倡眾攻奪自有應得之  
罪隨將矣長等一千人犯飭審定擬請將為首  
之矣長為從之雷侯鄭漢附和之翁丁李博暖  
張騰鳳矣臨黃博高儂博寧矣蚌等均照謀畔  
自首減二等律各杖一百徒三年但該犯等均  
係交趾及廣南夷人若僅擬徒恐擇回故土復  
滋事端應請酌發廣東貴州四川交與該管官  
安插嚴行管束餘犯分別發落再附和之翁丁  
係都竜土目翁貴堂弟有兄弟爭位情節投訴  
理應咨查該國另行發落但此時該國兵亂都  
竜土目又嚴阻中外往來此案暫緩咨覆該國

遵照之處合并陳明等語 查矣長一犯係交  
趾民人常往來中國廣南之地遽敢勾結倡亂  
稱王劫寨且控稱

天朝有兵相助種種悖逆法所當誅緣該督從前曾  
經張桂榜文許以不死已於該督具奏矣長投  
誠情形摺內奉有

諭旨訓示復經臣等議令該督將矣長作何發落之  
處另行訊擬具奏今既據該督訊擬矣長一千  
人犯請將為首之矣長為從之雷侯等附和之  
翁丁等酌發廣東貴州四川安插餘犯分別發  
落等因應如所奏辦理以結此案但查貴州與  
雲南連界與伊等故土猶近應令分發廣東四  
川兩省交與該管官安插嚴行稽查管束並令  
該督照例繕疏具

題又奏稱翁丁係都竜土目翁貴堂弟別有兄弟  
爭位情節投訴理應咨查該國另行發落但此  
時該國兵亂都竜土目又嚴阻中外往來此案  
請暫緩咨覆該國等語查翁貴已受鄭姓封爵  
嚴阻中外道路其翁丁情由咨查該國之處應

聽從緩辦理可也伏候

諭旨

乾隆五年十月初十日奉

旨依議欽此

(2) 大學士伯臣鄂 等謹

奏為遵

旨議奏事據雲南總督慶復奏探聞安南陪臣鄭姓

廢立改元大送昭著該國叛亂四起皆以興黎

滅鄭為名黎氏係

天朝貢臣但地處海隅事體重大勞中國以勤遠畧

前哲所非雖屬變亂究在化外蠻荒應否姑以

風聞未審虛實行文該國詰詢廢立緣由責以

大義令彼知

聖朝天高聽卑萬里之外洞燭奸克足使逆臣視魄

時存畏忌不敢遽絕黎裔雖文誥之詞義同斧

鉞將海曲藩維僉矢恭恪等因一摺奉

硃批軍機大臣等議奏欽此 查安南鄭姓專權亂

政禁錮黎王由來已久今復擅行廢立則該國

目下情形黎氏之祀甚危鄭姓之奸叵測所不  
待言黎氏為我

朝貢臣即行文該國詰問廢立緣由亦義所應行  
者但此事既不能確知虛實又未知新立者係  
舊王何人縱行文詰問責以大義而回文仍出  
鄭姓之手諒必有所託辭有所諉卸轉或以宗  
社大義狡飾支吾無從究察且一經詰問該國  
無不聞知即便鄭姓知所畏忌暫緩送謀而以  
滅鄭為名者必將紛紛請兵求申大義轉恐彼  
時難以猝應據臣等愚見既稱該國兵亂四起  
皆以興黎滅鄭為名此時正當靜觀成敗以驗  
屈直俟該國將廢立緣由奏

聞請封之時然後酌其情事慎重辦理則前後緩急  
之間措處得宜庶於邊事有益亦於國體無傷  
應將該督所奏行文詰詢之處毋庸議可也伏  
候

諭旨

乾隆五年十月初十日奉

旨依議欽此

(3) 大學士伯臣鄂 等謹  
奏為遵

旨議奏事雲南總督慶復奏有擦哇隴人頭桑阿到  
汛口稱三艾營官欲點三路土兵往攻懋子與  
阿墩子汛官借路等因一摺奉

硃批軍機大臣等議奏欽此 查懋子與三艾土番  
仇殺乃屬外夷常事今擦哇隴頭人桑阿口稱  
三艾營官寫信報與藏王藏王回信教三路出  
兵去殺懋子等語臣等竊思該土番等皆隸西  
藏管轄如果有報與藏王之事則頗羅烏自應  
奏

聞且土目三路點兵三千餘名其勢甚張即駐藏副  
都統紀山亦應聞知大槩此事起於六月度而  
頗羅烏及紀山至今並未具奏或係土番等詐  
謾之語亦可未定今該督以雖無確據事已有  
因已派撥官兵五百名帶同土練人添防沿邊  
內地緊要卡隘分別堵禦並令副叅大員親赴  
督率辦理俱屬妥協總之內地所屬邊境應防

各隘應不時偵探毋得容伊透越不獨阿墩子  
一汛因伊曾借路為當防範也臣等並行文群  
王頗羅烏及駐藏副都統紀山令將實在情節  
偵探的確即行奏

聞又據奏稱劍川州中甸州判辜文元在任一十四  
載經理新疆撫循夷探寬嚴得宜寔係熟悉夷  
情出色好官今有甯我縣知縣員缺最為緊要  
例應揀選題補伏祈

皇上天恩俯准將辜文元署理庶為人地相宜再辜  
文元現係布政司照磨職銜係從八品於陞授  
知縣雖似越職一級但臣因地方需人起見且  
該員在極邊之任歷俸一十四年將屆俸滿應  
陞伏祈

聖主破格陞署俟試署二年果能稱職另請實授送  
部引

見等語查辜文元係以吏目借補州判推陞布政司  
照磨以陞銜留任之員今該督請將該員陞授  
知縣之處雖與定例不符但甯我一縣係夷獯



要缺該督既稱辜文元熟悉夷情為出色好官  
乃為要地需人起見可否准其陞署出自

聖恩臣等未敢擅便伏候

諭旨

乾隆五年十月初十日奉

旨辜文元著照所請行餘議欽此

(4)

臣等看徐士林奏稱徐州府屬之銅豐沛蕭  
碭邳六州縣海州及所屬之沐陽贛榆二縣四  
年分緩征漕米若與五年分新漕並徵民力寔  
覺艱難等語此即楊超曾從前所奏之州縣查  
徐州府所屬之銅豐沛蕭碭邳六州縣海州及  
所屬之贛榆縣緩征漕糧分作五年帶徵沐陽  
縣緩征漕米分作三年帶徵俱已明降

恩旨欽遵在案無庸再頒

諭旨至徐士林所稱帶徵漕米改徵折色之處夫漕

糧關係倉儲折徵原非長策誠如

聖諭不便准行且分年帶徵民力已覺寬舒無庸再

行准折臣等請於

硃批內酌改一二字則與前後情節俱屬脗合謹  
奏

(5) 臣鄂 臣張 臣訥 謹

奏為奏

聞事據禮部咨稱貴州學政鄒一桂咨呈內稱乾隆  
三年十二月初四日摺奏請定黔省主員幫增  
補廩限期一條奉

硃批該部議奏欽此迄今將及兩載尚未奉議覆理

合咨呈將前項事宜如何議奏之處即祈示覆

等因據此部內細查檔冊並無貴州學政鄒一

桂條奏請定黔省幫補限期一摺奉

硃批該部議奏之案相應移會內閣典籍廳查明咨

覆過部等因到內閣臣等隨將內閣並軍機處

檔冊細加查檢亦並無貴州學政條奏前摺今

既據該學政咨稱奉有

硃批該部議奏兩年未奉議覆自係臣等遺漏未經

交出疎忽之咎寔所難辭謹奏

聞請

旨將臣等交部察議臣等速行文貴州學政令將原  
奏抄錄送部以憑定議具奏謹

奏

乾隆五年十月十四日奉

旨知道了大學士等不必交議欽此

(6) 查李珣條奏夾棍驗烙濶布增價二條一摺於

本年六月十三日奉

硃批該部議奏欽此已據該部議准於閏六月十四

日覆奏奉

旨依議欽此

(7) 前奉

旨更換道員查係河南南汝道李慎修與湖北武漢

黃道孫元對調今雅爾圖請將河北道張學林

調補河陝汝道事屬可行但河北道缺查在部

並無記名諳練河工可用道員之人似應

勅交該撫會同山東巡撫河東總河揀選題補謹擬

批諭恭呈  
御覽

(8) 查窄道子楊樹溝二汛原係馬蘭峪鎮屬關支

大餉布蘭泰奏請將楊樹溝一汛移駐曹家路

屬之板谷嶺於巡防有益又因板谷嶺與窄道

子汛地均離鎮標寫遠請附近改歸曹家路屬

管轄如此二汛雖經改隸仍係原兵巡防本汛

若遷改支小餉寔無以勵防守似應照舊仍令

支給大餉戶部所議照依曹家路屬改支小餉

以一營制之處據布蘭泰奏內從前點魚口等

處四汛兵丁原係小餉後改隸鎮標仍循舊制

支給小餉則板窄二汛原係大餉者改隸路屬

仍令支給大餉亦係各循其舊分別造支亦於

營制無礙事屬可行臣等謹寫

諭旨進

呈恭候

欽定

(9)

雲南總督慶復奏各省額設件作命案攸關滇省各州縣並未遵例將件作募補現在飭查辦理倘遷遠各省有似此未經募補之處所在官司或多忽視可否仰請

皇上諭旨訓飭令各督撫實力舉行其有廢弛不行募補之員酌定處分以示儆惕等因一摺蒙

硃批知道了待朕酌量降旨欽此 此摺蒙

交臣等查奏臣等查雍正六年刑部議覆各督撫題請設立件作將大州縣設三名中州縣額設二名小州縣額設一名仍於額設之外再募一人令其跟隨學習等因奉

旨依議件作三年無弊事繁之州縣賞銀十兩稍簡者賞銀六兩最簡者賞銀四兩永著為例欽此欽遵通行在案又乾隆元年刑部議履周紹儒條奏務遵定例將額設件作如數召募補足如額外有情願充當者亦即多募一二名以備頂補將洗寬錄等書督令講解熟習其有留心檢驗無弊者仍照例分別賞給等因奉

旨依議欽此通行亦在案今慶復既稱州縣募補多

不足額且有並未設立者請

降旨中嚴前例酌定處分事屬可行臣等謹擬

諭旨進

呈恭候

欽定頒發

(10) 大學士伯臣鄂 等謹

奏為遵

旨議奏事綏遠城將軍補熙奏為查辦開墾地畝請

因地變通以收實效等因一摺奉

硃批軍機大臣等議奏欽此 據補熙奏稱綏遠城

已墾未墾地畝前後查報數目不符積年弊竇

多端必須地方文職大員與臣重重稽察著定

章程方可遵行永久查歷平道每年必出口盤

查倉儲若令就近協同管理開墾事務頗覺便

當俾該道於所屬內遠委大員臣亦量委折負

會同查丈庶可將地畝不清民欠不實等弊查

明擬實參奏等語 查綏遠城等處報墾地畝

數目及節年未完糧草各項久經查辦俱未徹底清釐向來該將軍衙門所派旂員不諳錢穀亦且呼應不靈而六路通判係承辦之員自多迴護隱匿同知一員又不能徧查六路皆係實在之情形應如該將軍所請嗣後開墾事務令雁平道協同管理稽察會同該將軍各於所屬內派委能員查辦務將地畝核明確數並各通判管內所有民欠各項如查有挪移侵蝕等弊即行參奏至平時稽察之法令六路通判由朔平府申詳雁平道查核轉行該將軍題達亦應如所奏辦理再奏稱原奏內俟本年秋收後派員查丈但口外早寒認墾百姓一經收穫即各回本籍難以傳集查對請今歲暫行停止俟明年歲秋收後臣與該道詳細酌查報等語查清大地畝必須按照認墾名冊查對口外種地民人多非土著今既於收穫之後各回本籍勢不能按照墾戶一律查辦恐於查丈公務轉多勞費無益亦應如所奏今年暫行停止查丈該將軍仍會同雁平道預為妥商俟來年秋收之後

諭旨

即為及早清查可也伏候

乾隆五年十月二十二日奉

旨依議欽此

(11)

直隸總督孫嘉淦為上年直隸秋審案內原擬可矜經九卿改入緩決者十一名今年仍擬可矜具題合隨疏奏明等因一摺於本年六月初六日奉

旨此摺著抄錄存記如九卿等秋審與該督孫嘉淦所擬不符於本章進呈之日將此摺一併提奏欽此今臣等查閱直隸秋審本內孫嘉淦摺奏仍擬可矜者共十一名九卿所擬與該督相符者九名改為緩決與該督所擬不符者祇鄭國才張成孟二名臣等請於本內將此二名標貼浮簽並將孫嘉淦原摺及所開鄭國才張成孟二案仍擬可矜情節一併抄錄進

呈

(12)

臣等查近思錄乃理學入門之書為士子所應誦習者卷帙無幾坊刻亦甚多南北近省處有之無庸特降

諭旨刊刻印發但據御史徐以升奏稱廣西士子未

見此書想遠近省分僻壤遐陬流傳未遍亦未

可定應令廣西雲南貴州四川巡撫轉飭藩司

刊刻頒發各州縣務令流布俾人人得以研究

似屬妥便如蒙

俞允請將徐以升所奏及臣等此議抄寄廣西等四

省巡撫遵行可也至誦習此書亦士子之常不

必加以獎賞該御史所奏毋庸議

乾隆五年十月三十日奉

旨依議欽此

(13)

查各省編審戶口定例五年一次舉行乾隆元年編審冊籍俱經各該督撫造報具題在案各省積貯未報數目係每年造冊報部奏銷亦有

該省曰別有動支緣由造報未齊者今於擬寫

上諭內令該督撫將戶口積貯數目均於年底具摺

奏

聞該督撫等自常欽遵倍加鄭重辦理再乾隆辛酉

又屆編審之年戶口數目造有底冊以後逐年

照冊增除庶易於辦理是以臣等於擬寫

上諭內令各省具奏戶口數目於編審後舉再查僧

道度牒自乾隆元年起至四年十月共頒發過

三十四萬一百一十二張已於四年十二月內

禮部題請遵照定例不再行給發在案計自乾

隆元年十一月起至本年十月各省繳過牒照

共一萬二千九百三十五張俱係陸續繳送到

部今於擬寫

上諭內令各該督撫將每年減少實數於年底具摺

奏

聞則該督撫等自益留心實力奉行不敢怠玩矣

有

旨

1612

乾隆五年十一月初一日奉

上諭周官之法歲祭司民司祿而獻民數穀數於王  
王拜受之登於天府非獨冢宰據之以制國用之  
通凡授田與勑賜急平輿以及歲有災移移民通  
財薄征散利皆必於民數穀數若燭照數計而後  
可斟酌調劑焉秦漢以降戶口之數雖間見於史  
冊而其文甚略惟唐貞觀之初定口分世業之法  
比歲登籍三年獻書以養以教致治之盛幾於成  
康固用此為根柢也在昔

聖祖仁皇帝以生齒日繁恐有司慮加丁賦匿不以聞  
特詔據實開載新增人戶不另加丁賦

世宗憲皇帝勤恤民隱廣儲倉穀常懼一夫不得其所  
德意至為周渥然各省督撫雖有五年編審之規  
州縣常平倉雖有歲終稽核之法而奉行者僅亦  
於登耗散斂之間循職式之舊殊不知政治之施  
設實本於此其自今以後每歲仲冬該督撫將各  
府州縣戶口減增倉穀存用一一詳悉具摺奏聞  
朕朝夕披覽心知其數則小民平日所以生養及  
水旱凶饑可以通計熟籌而預為之備各省具奏  
戶口數目著於編審後舉行其如何定議令各省

畫一遵行著該部議奏又僧道亦窮民之一朕不

忍禁從沙汰故復行頒給度牒使有所覈查今禮  
部頒發牒照已三十餘萬張而各省繳到者尚少  
是或仍事因循僅奉行故事則甚非朕所以禁游  
惰勸力作之本意矣著各該督撫留意善為經理  
並著於歲終將所減實數具摺奏聞欽此

1613

乾隆五年十一月初二日奉

上諭湖廣總督班第丁憂員缺著那蘇圖前往署理  
刑部尚書事務著工部尚書來保兼理欽此

1614 乾隆五年十一月初二日內閣奉

上諭周禮造言之刑次於不孝不悌而王制假鬼神時日卜筮以疑衆者殺誠以浮誕之言易於煽惑人心所關甚重而敢於造作妄誕之說者多係狂悖惡逆之徒是以置之重典以警愚頑而熄邪說今年六月間有楊從清在都察院具呈云庚方動土十月三十日地動之語朕惡其造作說言命加監禁而其言流布京師人情不無驚恐今十月三十日已過是可共知其言之荒誕無稽矣此等浮言本無足信無如庸人一聞邪說即深信不疑樂為傳道古來史籍所載如行西王母壽之類不一而足甚至別生事端搃由於人不明理故不能不為所動耳楊從清本應嚴加懲治姑念其實屬無知交刑部杖責遞解回籍交與該地方官嚴行管束不得令其出境生事嗣後倘有造言惑衆之人定行從重治罪決不如此輕恕其聽信流言妄為傳播者該管官不時查拏欽此

1615 大學士鄂張徐尚書公訥字寄

貴州總督張 乾隆五年十一月初二日奉  
上諭近有人奏稱湖南逆苗就撫甚多首惡已經獻出告竣在即惟是楊清保等之就獲係多方買線設計誘擒而就撫者多係兇黨雖其中或有可原要之此輩均非善類官兵於山箐掃蕩之後凡屬投誠必宜嚴查果實有可原即編戶安插其本屬通同謀叛及持械拒敵者乘此兵威以漸迅拿毋俾稔惡羣兇致有漏網等語爾等可寄信與張廣泗令其斟酌妥協辦理欽此遵  
旨寄信前來

1616 乾隆五年十一月初三日內閣奉

上諭尚書來保職掌繁多難兼兩部事務著調補刑部尚書工部尚書員缺著公哈達哈補授欽此

1617 乾隆五年十一月初三日內閣奉

上諭朕奉

皇太后懿旨今年冬至次日免行慶賀禮欽此

1618 乾隆五年十一月初三日內閣奉

上諭原任睢寧縣試用知縣高聯登原署泰州知州劉瑛著江蘇巡撫徐士林給咨送部引見欽此

1619 乾隆五年十一月初三日奉

旨此項工程俟江都差滿回京之日著前往山東辦理欽此 泰山頂廟工程

1620 乾隆五年十一月初三日內閣奉

上諭刑部郎中王槩著那蘇圖帶往湖廣以道府題補欽此

1621 乾隆五年十一月初四日內閣奉

上諭鑲紅旗滿洲都統員缺著永常補授古北口提督員缺著苗廷桂補授天津鎮總兵員缺著副都統傅清補授欽此



乾隆五年十一月初四日內閣奉

上諭從來為治之道不外教養兩端然必衣食足而後禮義充故論治者往往先養後教朕御極以來日為斯民籌衣食之源水旱之備所期薄海烝黎益蔽充裕俯仰有資以為施教之地而鮮愠阜財之效尚未克副朕懷弟思維皇降衷有物有則衣食以養其形教化以復其性二者相成而不相妨不容偏廢正如為學之道知先行後然知行並進非劃然兩時判然兩事又安得謂養之道未裕遂可置教化為緩圖也今學校徧天下山陬海澨之人無不挾詩書而遊庠序願學徒以文藝弋科名官司以課試為職業於學問根本切實用功所在槩未暇及司牧者盡心於簿書筐篋或進諸生而譁舉藝則以為作養人材振興文教其於閭閻小民則謂是蚩蚩者不足與興教化平時不加訓迪及陷於罪則執法以繩之無怪乎習俗之不淳而詬誶澆凌之不能禁止也朱子云聖人教人大槩只是說孝悌忠信日用常行底話人能就上面做將去則心之放者自收性之昏者自著此言深探立教本原至為切實蓋心性雖民之秉彝而心

為物誘則放性為欲累則昏存心養性非知道者不足與樂若夫事親從兄則家庭日用人人共由孩提知愛少長知敬又人人同具不待勉強要之堯舜之道不外乎是即如得一食必先以食父母得一衣必先以衣父母此即是孝能推是心而凡所以順其親者無不至則為孝子父之齒隨行兄之齒雁行此即是悌能推是心而凡所以敬其長者無不至則為悌弟一人如此人人從而效焉一家如此一鄉從而效焉則為善俗孟子曰人倫明於上小民親於下又曰人人親其親長其長而天下平由是道也惟在上者不為之提撕警覺則習而不察而一時之明不勝夫積習之漸染重昏銅蔽日入於禽獸而不自知任君師之責者奚忍不亟為之中重而切諭之也哉

聖祖仁皇帝頒

聖諭以教士民首崇孝弟

皇考世宗憲皇帝衍為廣訓往復周詳已無遺蘊但朔望宣講秋屬具文口耳傳述未能領會不知國家教人字字要人躬行實踐樸實做人倫日用正是聖賢學問至切要處堯舜之世比戶可封只是

能盡孝弟放僻邪侈觸蹈法網只為不知孝弟記  
曰將為善思貽父母令名必果將為不善思貽父  
母惡名必不果誠能如此存心豈復有縱欲妄行  
之事苟不從此處切實做起雖誦讀詩書高談性  
命直謂之不學可耳凡有牧民課士之責者隨時  
隨事切實訓誨有一事之近於孝弟則從而獎勵  
之一事之近於不孝不弟則從而懲戒之平時則  
為之開導遇事則為之剖晰如此則親切而易入  
將見父詔兄勉日積月累天良勃發率其良知良  
能以充孝弟之實藹然有恩稜然有義豫順積於  
家庭太和翔於宇宙親遜成風必從此始凡吾赤  
子其敬聽諸凡厥司牧其敬奉諸欽此

1623 乾隆五年十一月初五日內閣奉

上諭據貴州總督張廣泗奏稱城綏逆苗案內有生  
員戴名揚與伊父戴榮華倡首糾眾投入苗地附  
從為逆更極兇悍等語戴名揚身為生員輒敢助  
苗作亂罪不容誅膠庠之中竟有此等惡類該管  
教官既不約束又不揭報該學政亦漫不稽查辜

無摘發且平日所講明訓導者何事著該部查明  
嚴加議處具奏欽此

1624 乾隆五年十一月初五日內閣奉

上諭各省兵丁應鄉試者於中式武舉之後仍准食  
本身馬糧隨營差操遇有把總缺出與營兵一體  
較拔千把此現行之例也若中式武進士除選取  
侍衛外餘者皆離營候選開除名糧此雖優待武  
進士之意但伊等開糧之後衣食匱乏未免拮据  
且恐離營日久漸疎技藝應酌量變通辦理嗣後  
兵丁中式武進士之後有情願回營効力者准仍  
留本身馬糧隨營差操遇有署事之處准一體酌  
量委署學習該部可通行各省知之欽此

1625 乾隆五年十一月初六日內閣奉

上諭戶部侍郎員缺著歸宣光補授欽此

1626 乾隆五年十一月初六日內閣奉

上諭巡視南城御史蘇霖渤奏趙永孝將未經具奏之條陳刊刻刷印呈送朝列實為狂誕請交部查議等語朕覽趙永孝所刻之書其援引古人舊事尚屬習見陳言至於指陳時務則不當事情無可見之施行者其意不過希圖倖進而書中反言將欲長往深山此尤詐偽之甚矣趙永孝以未奏之條陳而刻印遞送罪實難辭姑念其鄙陋無知從寬免交部議但將伊巧於奔競之心指出使知所儆戒嗣後倘有以未奏之條陳而私自刻印布散者必當加以嚴譴欽此

1627 乾隆五年十一月初六日內閣奉

上諭各省官役俸工皆出於庫帑唯是州縣錢糧或遇水旱停緩及分年帶徵之處其俸工既無現徵之銀可以起交而例不轉撥必待屆期徵足始得給補此通行之例也朕思正印有司養廉稍裕尚可支持而佐雜微員則恐無以養贍食用艱難至於胥役等人尤難枵腹奔走該管官員勢不得不借墊庫項以致多有賠累且恐啓將來那移虧空

六六六

之漸用是特頒諭旨凡遇州縣錢糧停徵緩徵及分年帶徵之時其佐雜微員應得俸銀及胥役應領工食若有墊發及未給者准於司庫存公銀內如數撥補仍將應徵民欠依限催收解還藩司以清庫項如此則微員胥役得以如期支領庶無借墊守候之苦倘有玩延侵隱等弊著該督撫嚴行查參欽此

1628 大學士鄂 張 徐 尚書公訥 字寄

浙江巡撫盧 乾隆五年十一月初六日奉

上諭盧焯自調任浙江以來其所設施未見有切要於地方之事一味沽名邀譽欲以取悅於人如舉報鄉賢名官絡繹不絕他省未有如此之多者伊前任閩省過於刻薄近日行事又多因循前後迥異判若兩人至於浙江海塘已漲沙數十里草塘尚可不用何況石塘且請停草塘歲修即係盧焯之奏今又會奏改建石塘則其胸無定見惟事揣摩又彰明較著矣爾等可傳旨嚴行申飭欽此遵旨寄信前來

1629 乾隆五年十一月初十日奉

旨丁皂保効力已久年近九旬著照伊現在品級賞給俸祿欽此

1630 乾隆五年十一月初十日內閣奉

上諭江西巡撫員缺著安徽布政使包括署理安徽布政使員缺著戶部郎中託庸署理欽此

1631 乾隆五年十一月初十日尚書公訥 奉

上諭阿思哈著調補戶部銀庫郎中欽此

1632 乾隆五年十一月初十日

上諭大學士九卿等朕恭閱

皇祖聖訓內載

諭九卿之旨曰爾等俱為大臣天下督撫之賢否應於平時留心細訪以備顧問誰貪誰廉即行公舉雖門生故舊不為狗庇庶人皆知畏懼而勉勵矣乃者朕問時或謂未經同衙門辦事或自謂平日不接見人知之不真以此推辭非理也

聖諭煌煌切中情事近日在廷諸大臣之習亦甚類此

即如郝玉麟鄂彌達從前議處之案皆從外省發

覺廷臣並未有參奏之者又如王士任之劣蹟德

沛參劾之岳濟之劣蹟楊超曾參劾之豈伊等未

經敗露之前在廷大臣等竟一無聞見而必待督

臣之舉發耶朕統御寰區一人耳目豈能周知中

外臣工之臧否惟大學士九卿等留心訪察有聞

即奏庶人人知所做戒共凜官箴朕可以收明目

達聰之益乃不時召見諮詢而陳奏者寥寥殊不

足以副朕之望大臣受國家股肱心膂之寄朕不

於大臣是任而誰任耶大學士九卿等果能留心

於平時則各省大吏中作弊營私蓋不飭者諒

無有不燭照之理若既已知之復存避嫌之心而

隱忍不言尤非公忠體國之誼易曰王臣蹇蹇匪

躬之故人臣事君如果自問無私更有何嫌之可

避且如王士任等事以督撫而自不能保一身之

操守

皇考時並未有此也朕用是愈滋愧懼焉嗣後各矢丹

誠無稍瞻顧則於朝廷進賢退不肖之道必大有

裨益矣欽此

1633 乾隆五年十一月十二日內閣奉

上諭本月二十五日恭遇

皇太后萬壽聖誕普天同慶凡大小臣工俱著穿蟒袍

七日不理刑名永著為例欽此

1634 乾隆五年十一月十二日內閣奉

上諭署廣東巡撫王謩著來京候旨王安國著以左

都御史銜管廣東巡撫事王謩在廣東居官平常

不勝封疆之任朕素知之又曾有人參奏朕原欲

令其來京並非因近日王安國之奏也况左都

御史官階在巡撫之上亦非相當之缺祇因地方

緊要一時未得其人是以特行簡用將此並諭中

外知之欽此

1635 乾隆五年十一月十二日奉

旨尚書來保著充律例館總裁官欽此

1636 乾隆五年十一月十二日奉

旨山東巡撫朱定元著賞給

硃批諭旨全部欽此

1637 乾隆五年十一月十四日奉

旨律例告成總裁纂脩等官及該館在事人等俱著

交部分別議叙具奏欽此

1638 乾隆五年十一月十五日內閣奉

上諭署江南總督楊超曾參奏岳瀟一案前已降旨

令高斌會同楊超曾審理但思原參之官即令查

審究屬未便著戶部侍郎阿里衮前往協同高斌

審擬具奏欽此

1639 乾隆五年十一月十五日內閣奉

上諭左都御史員缺著副都御史劉吳龍補授提督

江蘇學政著工部侍郎張廷璩去欽此

1640 乾隆五年十一月十五日內閣奉

上諭甘省提鎮各營歲需糧料例係本折兼支於額徵糧內估撥如遇歉收緩徵之年本色不敷則將應估本色之糧料亦行酌估折色朕聞乾隆三年分原估涼州鎮標本色糧料共三萬二千九百餘石係於乾隆二年預為估撥嗣因乾隆三年涼屬收成歉薄例應緩徵原估前項額糧除將現有之糧供支外尚不敷本色糧一萬二百餘石照例改估折色每石按部價估銀一兩緣兵糧例係季首闕支於未經改定之時已值應支季冬兵糧之兵食嗷嗷遂借採買積貯糧三千六百餘石暫資五營兵丁之急需至估撥乾隆四五年分兵糧又因涼屬連經歉歲民欠難徵每年本色糧俱僅數一月有餘而今年涼屬又遇偏災現在預估辛酉年本色亦止敷兩月之糧是窮兵餬口尚且不足難以再行扣還借項是以三年分所借積貯糧石至今尚未還倉其改估之折色銀兩現存司庫查積貯糧石向無供支兵食之例而涼屬連歲歉收糧價昂貴若令將扣存改折之項買糧還倉則市價較之部價相懸過半朕深念邊塞窮兵丁度

日艱難准將此項糧石作正報銷免其扣還本色其存庫銀兩留作折色之用以示朕加惠邊兵之至意欽此

1641 乾隆五年十一月十八日內閣奉

上諭從來為治之道首在得人故書美闕門額俊之風易著拔茅連茹之盛詩曰濟濟多士禮曰或以德進或以事舉或以言揚蓋自古邗隆之世君若臣所以加意於興賢育才者固如此其切也朕臨御以來時以得人為念不憚再三咨訪而所謂出眾之才足以慰側席之求者則未嘗槩見昔在皇祖時如湯斌陸隴其輩學術純正言行相符陳瓊彭鵬輩操守清肅治行卓越此數人者允為一時之望至今稱之夫以天下之大人才之眾豈無有與此數人相頡頏者旁招俊又朕心維殷舉爾所知廷臣是賴况大學士九卿等受國家股肱耳目之寄自當留意於平時盡以人事君之義其有真知灼見者秉公舉出以備朕採擇焉欽此

1642 乾隆五年十一月二十一日內閣奉

上諭向來御門聽政大學士等俱不設禮墊惟圓明園奉

皇考特旨鋪設而乾清門尚仍其舊原定制之意蓋以君尊臣卑預防專擅之漸然亦不係乎此况古有三公坐論之禮大學士等皆年老大臣當此嚴寒就地長跪朕心特切軫念嗣後著鋪禮墊以昭優禮至意欽此

1643 乾隆五年十一月二十一日內閣奉

上諭左都御史管廣東巡撫事務王安國之父王曾祿年屆七旬著照王安國現在品級賞給應得封典欽此

1644 乾隆五年十一月二十二日內閣奉

上諭兩淮鹽運使徐大枚著調取來京引見其運使員缺著朱續暉補授欽此

1645 乾隆五年十一月二十七日奉

旨一統志書告成總裁纂修等官及該館在事人等俱著交部分別議叙具奏欽此

附錄

(1) 臣等看御史周祖榮奏為永定河近水村莊遷

徙事宜一摺據稱請將固南霸北一帶近水村莊查確水道所經必應遷徙之窮民令地方官先擇附近村莊安插得所仍計其人口給予盤費併給發修葺房間價值再將水勢必經必不免淹沒之地畝先期查係何人產業勘明數目詳報存案將來一遇衝沒該督據實奏聞或於該地方入官地畝內酌量撥給或按畝確估價值散給銀兩等語查永定河歸復故道一案經臣等議覆准將東引河修理通順令河水東趨其近河村莊應遷徙者遷徙應防護者防

護均應詳慎辦理又慮水漲之時匯流東注村莊不無淹沒之患是以議令將應遷徙人戶酌量給費務期不致流離失所至於如何分別給資安插得所之法應聽該督等飭令地方官隨宜料理未可懸議並非不行詳叙至預防淹沒地畝須先期查明存案將來撥補或給價之處查永定河水既係由引河漸次漫溢田間自鮮衝決之虞但河口溜急處所並水道經由衝刷既久必至漸成河身則民間地畝亦不無淹沒然亦不能預計水勢所向及淹沒為何處地畝若先期查勘亦恐難以周徧妥確但事關民間生計不妨過為詳慎應將周祖榮原摺請

旨發交直督孫嘉淦等有應採擇之處令其酌量辦理可也謹

奏

乾隆五年十一月初一日奉

旨依議欽此

(2)

前任山東巡撫碩色奏報泰山頂廟被焚一事臣等查頂廟岱廟並沿山盤道及各廟神像等項於雍正七年欽奉

上諭老郎中丁皂保前往督工普行修理共動用過司庫存公銀九萬七千五百七十餘兩由內務府奏銷在案從前於康熙十二年曾經官為重修日年遠無案可查至頂廟岱廟內每年有願施銀約六七百兩除賞給道人及各夫工食銀三百餘兩外餘存道紀司為平時補葺之費此外並無別項存貯銀兩今查頂廟赫燬正殿五間東西配殿各三間爐亭一座皆須重新修造此項工程自不似從前所費之多然必先行確估應用若干銀兩始便酌議動撥應行令該撫委員將所需一切工料價值確實估計具

奏到日再行定議可也伏候

諭旨

初三日奏有

旨



(3)

臣等看許容摺奏城綏軍前各武職虛報購買馬匹及冒支行營料草等緣由並稱官員衆多軍務將竣若遽照例議處則人人負罪可否仰懇

聖恩俟事定功成然後

特頒諭旨分別定議其原存馬價及冒支料草數目

追還歸款等語應如所奏俟軍務告竣之日再

行查辦臣等將許容原摺抄存軍機處屆期提

奏請

旨謹

奏

乾隆五年十一月初四日奉

旨是欽此

(4)

查雲南永北府金廠係康熙二十四年總督蔡毓榮於謹陳籌滇等事案內奏定每淘金株一張月課金一錢每年應課金一十四兩五錢二分遇閏加金一兩二錢其定額徵收之初自係

諭旨

所產之金足供課項今編修劉慥奏稱邇來金漸不產淘戶久已散亡有司以正課不敢虛懸攤派於江東江西兩岸居住之夷探按戶徵收夷探人等並不淘金賠納金課苦累無窮等語查永北歲金徵課為數無幾如果有前項積弊自屬貽累地方相應請

旨將劉慥此摺交總督慶復查明據實具奏伏候

諭旨

乾隆五年十一月初四日奉

旨知道了欽此

(5)

黃廷桂奏天津府屬濱河窪下之歉收村落本年應納之丁糧輸將無力等因一摺奉

硃批大學士等密議具奏欽此 查本年直隸各屬

多慶豐收米價亦稱平賤至天津府屬地方濱臨河淀原多窪下之區今黃廷桂既稱積水成潦處所仍多歉收之村落小民輸將無力等語事關民隱自應速為查明應將黃廷桂原摺交

直督孫嘉淦將天津府各屬積水歉收地方即  
行確查並應如何辦理之處據實奏

聞請

旨遵行謹

奏

乾隆五年十一月初六日奉

硃批依議速行欽此

(6) 據協辦大學士事三泰等奏稱

大清律例告成除臣等總裁官不敢仰邀議叙其提

調纂修收掌繙譯謄錄生監等員以及供事等

照例分別等次交部議叙之處出自

天恩等語查各館書成俱有議叙之例雍正六年纂

修律例告成奉

旨將總裁纂修等官俱交部議叙欽遵在案今纂修

大清律例告成應如協辦大學士事三泰等所奏將

該館提調以下等官及供事人等請

旨交部分別議叙其奏其總裁等官應一併照例交

部議叙臣等謹擬寫

諭旨恭呈

御覽

(7) 大學士伯臣鄂 等謹

奏為請

旨事兵部咨稱據川陝總督尹繼善咨據陣亡甘提

標千總李浩之妻呈稱氏夫李浩於雍正八年

出征西路在科什圖地方對敵身亡有氏嫡女

李之盛未邀難廕之典懇請咨部准廕等情又

據在部具呈陣亡西寧鎮標千總李馥之子李

登榜呈稱切榜父李馥出征巴爾庫爾於八年

十二月內逆賊準噶爾侵犯科什圖榜父帶兵

進剿殺賊盡節同事陣亡徐宗仁等均照例准

廕榜父陣亡未蒙飭准伏乞行查等情查雍正

九年正月欽奉

上諭此番準噶爾賊眾侵犯西路陣亡副將徐宗仁

著給與拜他拉布勒哈番守備劉貴才劉芳兩李

國勲俱著給與拖沙拉哈番其應得卹典仍著該部察例具奏千總王大謨徐維新外委把總方正劉世勲俱著該部從優議叙此外如有應加恩卹之弁員俱著大將軍查明具奏欽此嗣准原任大將軍岳鍾琪查明陣亡官兵造冊送部並聲明現在繕摺具奏等因後因日久並未交部議叙隨咨查軍需蒙覆稱此案經岳鍾琪具奏奉

旨交辦理軍機處欽此咨覆在案今查岳鍾琪原冊內陣亡官兵除千總李浩李馥二員外尚有守備千把十九員外委十五員功加十五員領催一名馬步兵丁跟役及蒙古番兵共二千零三名相應行文軍機處將此案陣亡官兵應否辦理之處查明咨覆過部再議等因前來臣等查雍正八年十二月賊夷侵犯科林圖峨嶮磯所有陣亡之副將徐宗仁等八員俱於雍正九年正月內欽奉

上諭交部從優議叙兵部照例議給廕卹加贈題覆在案又於九年五月內欽奉

上諭西路軍營千總馬建功奉差探聽賊兵信息帶

領兵丁十人前往因人少力單遇賊被害並傷兵丁石玉張秀閔得三人深可憫惻馬建功等俱著照陣亡之例加恩卹賞欽此亦經兵部照例議給賞卹題覆在案續於九年十月內岳鍾琪奏為擬報奏明事一摺內稱有奉派查看駝廠之千總白忠義帶兵王彥成張土清王自魁三名於賊人竊發之後在沙山身亡又奉差買羊之撥什庫達蘭泰遇賊右手刺中矛傷冒風身亡俱應造入陣亡冊內等因奉

旨著交辦理軍機處存案併知會兵部照例卹賞欽此又於十年正月內岳鍾琪奏為遵

旨查明奏

聞事一摺內稱征戰有功及陣亡各官兵俱分晰核造清冊咨送兵部候聽議叙議卹應將欽遵查造緣由具奏等因奉

旨交辦理軍機處欽此查此案陣亡官兵除已經奉恩旨議卹之徐宗仁等九員外其岳鍾琪查報冊內

未經卹賞者尚有守備千把二十一員外委十五員功加十五員領催一名又馬步兵丁及跟役等共二千零三名從前兵部因岳鍾琪造冊報部文內曾聲明現在繕摺具奏其後並未奉有交部之

諭旨是以不便據咨查辦今李之盛稱係陣亡千總

李浩之子李登榜稱係陣亡千總李馥之子各

呈請照徐宗仁等之例一體遞

恩議卹伏查雍正十三年九月內欽奉

恩旨將和通呼爾哈諸路官兵効力陣亡大臣官員

及西路官員兵丁効力陣亡未及加恩者俱著

查明加恩欽遵在案又臣等查奏鄂隆磯陣亡

之守備劉士瑞請交部辦理等因一案奉

旨知道了嗣後如有此等事件著奏明交部欽此今

查李浩李馥俱係雍正八年西路陣亡冊內未

經議卹之員據伊子請卹情節與前後所奉

諭旨俱屬相符其岳鍾琪咨送兵部陣亡官兵原冊

係具奏摺明交軍機處有案相應請

旨將李浩李馥議卹之處並原冊內所有未經議給

卹賞各官兵交該部一併查照定例辦理具奏可也伏候

諭旨

乾隆五年十一月十六日奉

旨依議欽此

(8) 奏

旨發出奏片一件令臣等閱看據奏經史館校刊十

三經註疏二十一史諸翰林有各出已見為之

刪削改纂者臣等因未能深悉經史館現在如

何辦理隨傳詢總裁張照等據稱現今刊刻經

史博求善本校對其監本非而別本是顯然明

白者即行改正別本亦係舊本非新改也若兩

本互異理皆可通則將互異之處聲明附刻卷

末若諸本皆同而詳其文義實係錯誤者則仍

其錯誤字樣刻入書而將錯誤之處聲明附

刻卷末此皆遵照原議辦理並無自出意見改

動本支一文字等語為此謹

奏

乾隆五年十一月十九日奉

旨知道了欽此

(9) 大學士伯臣鄂 謹

奏為遵

旨議奏事杭州副都統齊斌奏稱駐杭滿洲蒙古漢軍生齒日繁閑散壯丁共二千餘名各有家口別無產業悉皆附食於兵生寡食眾拮据難支請將閑散壯丁挑選六百名在牧場之內每名授地六十畝並房基地五畝每丁借給銀二十兩益房開墾立為恒產等因奉

硃批軍機大臣等同盧焯議奏欽此 查杭州駐防旗兵牧馬場地在錢塘江南北兩岸南屬西興錢清二場北屬仁和許村二場均係沿江沙地其中地勢高低不等高處草生茂盛足資牧放亦間有可耕之田低處則鹹潮浸潤生草且甚稀疏又何可墾種今若挑選壯丁六百名每名授地六十畝並房基地五畝則共應撥去高阜草地三萬九千畝所餘多屬低窪草稀之地勢

必不敷旗兵分牧且向例馬場界內不許民人墾種尚有資利旗兵私自租與竈佃若一經撥墾更易影射每名六十畝之外再有私闢則牧地益少將來馬匹難免越界踐食課地益啓旗民爭訟之端蓋此項牧地原與各場竈民課地接壤因沿江坍漲靡常每多相爭訐告之業近經臣盧焯委員查勘甫經定界而向來馬場遇有坍缺例將沿江竈地通融改撥若於墾後熟地被坍必須另撥高阜可耕之地歲有紛更既未足為壯丁恒產而爭高棄下竈民又必致失業況駐防兵丁耕作究非所長必仍招佃代墾沿江沙地租息甚微所借官銀殊難按年完納或再遇地有坍沒工本悉歸烏有官項必致虛懸壯丁轉滋苦累是公私俱屬無益齊斌所奏雖係為駐防旗兵生計起見而實有種之未便之處應毋庸議謹

奏

乾隆五年十一月二十日奉

旨依議欽此

1646 乾隆五年十二月初二日內閣奉

上諭湖北巡撫員缺著直隸布政使范燦補授直隸布政使印務著劉於義署理欽此

1647 乾隆五年十二月初二日內閣奉

上諭浙閩總督德沛屢任封疆恪守廉潔伊既一介不取而因公事犒賞之處又復繁多所得養廉不能敷用以致京中逋負不能清還且棄舊有之產業朕心深為軫念此等清官應格外加恩以風有位著將福建藩庫銀就近賞給一萬兩示朕嘉獎之意欽此

1648 乾隆五年十二月初六日內閣奉

旨楚粵苗獠不法朕特簡張廣泗前往辦理伊任事以來調度有方三月之內克奏膚功甚屬可嘉張廣泗著交部議叙具奏欽此

1649 乾隆五年十二月初六日奉

旨此摺著交兵部俟張廣泗將楚粵官弁功過奏到之日一併議奏欽此

杜愷摺

1650 乾隆五年十二月初七日內閣奉

上諭前將薄奏稱世臣稽察宗學性情偏執不甚安靜朕因其尚無關係祇令世臣不必稽察宗學並未加以處分今屆伊奏書之期乃引即墨阿大夫之事而將伊不管宗學之案叙入以為必有進言毀臣者此端一開其陷害將由漸而入世臣此奏竟似朕聽諛言而退伊職掌矣夫即墨阿大夫之毀譽乃顛倒是非之事伊安得引以自比况奏書原以陳講書理豈可借以辦白己事甚屬不合著交部議處具奏欽此

1651 乾隆五年十二月初七日內閣奉

上諭周學健著充三禮館副總裁欽此

1652 乾隆五年十二月初七日內閣奉

上諭據川陝總督尹繼善奏報韓良卿病故甘肅提督員缺甚為緊要李繩武久駐邊外朕心軫念著調補甘肅提督伊執諳邊情辦事幹練倘口外有應行料理之事仍可就近調度至安西一帶雖現在無事亦不可無大員統轄未常才具強幹人亦持重著以都統銜前往辦理李繩武俟交代清楚後再赴甘肅之任永常應備軍裝著照例賞給欵此

1653 乾隆五年十二月初七日內閣奉

上諭韓良卿久任邊陲勤勞頗著今伊身故尹繼善等已捐資助其歸櫬但伊家計艱難朕心軫念著賞銀一千兩示朕格外加恩之意欵此

1654 乾隆五年十二月初八日內閣奉

上諭八旗都統副都統因辦事錯悞遲延罰俸之案甚多此皆係例應處分者但伊等俱仗俸祿以資用度若俸祿無支則用度不繼朕心時為軫念著

將現在罰俸之案悉行寬免從前曾經寬免一次今復再行施恩伊等自應感激奮勉若嗣後仍不經心再有延悞則定例具在朕恩亦不可屢邀也欵此

1655 乾隆五年十二月初八日內閣奉

上諭前經吏部議覆御史條奏後滿書吏應飭令回籍其中願就揀選之人於三個月揀選一次帶領引見將奉旨准用者註冊令其回籍俟將來外省請人時派往等語昨日已經引見一次為數亦止五人朕思此等微末之員一年之中頻頻引見亦覺非體嗣後著交與大學士會同吏部堂官三月揀選一次將姓名奏聞請旨永著為例欵此

1656 乾隆五年十二月初十日內閣奉

上諭原任編修鄂倫著賞復原官供職欵此

1657 乾隆五年十二月初十日內閣奉

上諭永常著賞銀二千兩令乘驛前去其應得軍裝著在肅州給領欽此

1658 乾隆五年十二月初十日內閣奉

上諭鑲紅旂滿洲都統員缺仍著哈達哈署理欽此

此道係清字

1659 乾隆五年十二月十一日內閣奉

上諭獄案務嚴濫及治獄無令淹留所以重民命也朕欽恤為懷凡於刑獄案件無不至詳至審誥誡丁寧期成協中之治諒廷臣亦莫不共知朕心矣惟是外省之監獄較之在京事勢不同緣督撫駐劄省城府縣散居遠近不一上司耳目不盡周知雖有監犯月報之虛文不無隱匿遺漏之積弊每有一案人犯証佐未齊或拘喚不至或關解不前有司又不上緊催提以致經時累月囚繫不釋者有之又有事涉牽連因人呈誤有司不分輕重緊與正犯同繫囹圄遂有無辜受累濫被拘禁者有

之是以圜扉之內常見充盈屋既湫隘人復衆多濁氣薰蒸疾病傳染因此致斃者不一而足其在問擬之重罪尚須附疏題達然亦處分甚輕若罪輕譴薄及拖累干連之人每至患病垂危始令的屬具保旋報在外病故督撫無可糾參至於州縣自理事件並不報聞上司更無稽考草菅人命視為固然此皆朕留心訪察而知種種情弊外省實有不能免者朕矜全民命每於重犯之中有一線可原者必諭令廷臣往復商酌而後定案無如牧民之有司不能仰體朕心遂致刑獄不慎上干天和凡地方之旱澇災稔未不由乎此用是特頒此旨著各該督撫嚴飭司府州縣將現在刑獄逐一清釐有屢案經久未結者勒限審詳有一案牽涉多人者速為開豁或應省釋寧家或應取保候質其已經擬罪應行監禁各犯務飭該管官加意清查無使禁卒凌虐至於困苦並將牢獄不時掃除以免疫癘傳染倘有獄各官奉行不力者著該上司即行查參不得寬縱以副朕哀矜庶獄之意

欽此



1660

大學士鄂張徐尚書公訥字寄直

隸總督孫乾隆五年十二月十一日奉

上諭近日朕聞得永定河改歸故道一事州縣辦理殊未妥協即如築隄防護村莊勸令百姓各自出力朕思工作之屬原不易舉况小民無知豈有遠見未免自惜物力苟且從事州縣官又不能善為化導必至有名無實難於防險似此地方公務即動存公銀兩未為不可又聞現在冬底該州縣即令小民遷移民間甚為不便夫移民防患乃為麥汎而說今為期尚早何不待至來春稍暖時而急行於嚴寒歲暮之際耶爾等可寄信與孫嘉淦令其悉心商酌妥協辦理毋使小民苦累而生怨咨

欽此遵

旨寄信前來

1661

乾隆五年十二月十四日奉

旨據北路叅贊大臣阿岱奏報總兵官吳開增於十一月十四日在軍營病故深可憫惻著賞銀一千

兩所有應得卹典著該部察例具奏欽此

1662

乾隆五年十二月十五日內閣奉

上諭據署貴州總督張允隨奏稱前因楚粵苗獠不法派撥黔省弁兵前往楚南協勦今逆苗蕩平弁兵俱已凱旋歸伍等語查弁兵赴楚之時東裝需費俱有借領俸餉銀兩例應此時按季扣還者朕念千把外委馬步兵丁等所得俸餉無多若再扣抵未免日用艱難伊等既遠涉隣省著加恩賞給免其扣還該部即行文諭張允隨知之欽此

1663

乾隆五年十二月十六日內閣奉

上諭山東蒲臺縣地畝向因科則互異於雍正十三年題明丈量後經文出瘠薄地并缺額荒地共四百四十二頃有零其應減應除之賦一千九百餘兩已經降旨豁免惟是瘠薄改則地內有乾隆元年未完銀一千一百四十七兩零因係舊欠不應在豁免之數至今尚在催追朕念瘠土窮黎艱於輸納可為軫念著格外加恩一體豁免以紓民力該部可即遵旨行文山東巡撫等知之欽此

1664 乾隆五年十二月十八日內閣奉

上諭廣西東蘭州知州魏運景著吏部調取來京引見欽此

1665 乾隆五年十二月十八日奉

旨候選員外郎王鐘著以戶部員外郎用欽此

1666 乾隆五年十二月十九日奉

上諭前因八旗大臣辦事錯誤遲延罰俸者甚多伊等俱賴俸祿以資用度如俸祿無支則用度不繼是以特降諭旨將都統等罰俸之處悉行豁免但錯誤遲延案內亦有將章京等一併議處罰俸者今既將大臣俱行寬免其章京等罰俸之處亦著寬免嗣後伊等自宜感激朕恩竭力辦公勉行走倘仍前怠忽遲誤公事斷不寬貸欽此

1667 乾隆五年十二月十九日內閣奉

上諭昨御史仲永檀奏稱人君辦理政務一有暇逸之心即開怠荒之漸每歲上元前後燈火聲樂日

有進御伏願酌量裁減預養清明之體等語書云不後耳目詩云好樂無荒古聖賢之垂訓乃朕所夙夜兢兢而不敢忽者仲永檀所陳亦即此意惟是歲時燕賞慶典攸關自古有之况我朝統一中外元正獻歲外藩蒙古朝覲闕廷錫宴同懽有所增可缺之典禮朕亦惟踵舊制而行之未嘗有所增益至於國家政務朕仍時刻留心照常辦理並未蹈怠荒之戒而畧有稽遲也因仲永檀不能深知爰頒此旨至伊胸有所見即直陳無隱是其可嘉處朕亦知之欽此

1668 乾隆五年十二月二十一日內閣奉

上諭原任廣東知縣鹿謙吉著吏部行文調取來京引見欽此

1669 乾隆五年十二月二十六日內閣奉

上諭國家惠育悉黎鰥寡孤獨皆使有養各省州縣俱設有孤貧口糧於正項內留支遇閏加增俾無缺乏乃有司多不留心經理以致胥役中飽或伊

等同類中之奸黠者復有冒領吞蝕之弊著該督撫轉飭地方官勤加稽核實力奉行務使窮民均沾實惠欽此

1670 乾隆五年十二月二十七日內閣奉

上諭太僕寺卿蔣漣將服官以來紀恩述事稱功頌德之篇彙為一集名曰湛露章進呈朕覽朕思人臣進獻著作詩文摠期有裨於政治有利於民生有益於身心學問在獻者既得箴規之誼而朕披覽之下亦可收作礪從繩之助若徒為頌揚之辭則文恭雖工又何取焉揆之古人頌不忘規之意殊不爾也朕以實心行實政屏棄一切虛文惟恐政事或有闕失日冀臣工獻納論思繩愆糾繆匡其不逮至於頌揚溢美之語祇增朕心之愧且耳聞目見實厭其煩屢經降旨曉諭而諸臣積習仍復不免將連所進姑且存覽嗣後著槩行禁止欽此

1671 乾隆五年十二月二十七日內閣奉  
上諭順天府府尹員缺著蔣炳補授欽此

附錄

(1) 給事中汪楫一摺 擬稱請將

世宗憲皇帝硃批奏摺許每衙門各領一部司道衙門係專員令其敬謹收讀永遠流傳其部寺翰詹科道等衙門交與該堂官收貯今在任諸臣輪流領讀使內外諸臣皆得仰觀

世宗憲皇帝訓誨臣工之苦心共知勸戒等語 臣等伏念

世宗憲皇帝硃批臣工奏摺皆係因人因事隨時加以訓誡指示故或一人而前後互異或一事而彼此不同聖意深遠亦非小臣人人讀之所能領會者况部院大臣及外官藩臬以上已蒙

頒發今汪楫奏請每衙門各領一部查各衙門如部

院之內滿漢官員甚多若概令在任諸臣輪流  
領請亦殊褻慢汪懋所奏似不必行謹

奏

乾隆五年十二月初六日奉

旨知道了欽此

(2)

署湖南按察使彭家屏一摺 據稱湖南幅員  
遼澗州縣不便兼署所有試用人員今已詳題  
全完邇來每遇一缺選人署理甚費躊躇合無

仰懇

皇上俯念地方南北不同用人時勢各異或於部選

及開復候補各項引

見官員內陸續

命來湖南數員以備委署差使之等語 查從前摺

理事務處議覆侍郎李紱條奏除雲貴川廣四

遠省如有需人之處仍准該督撫題請酌量揀

發外其餘各省不得濫行題請揀發等因奉准

遵行在案今據彭家屏指奏湖南州縣缺出之

人署理請於引

見官員內陸續發往數員查引

見官員內間有特奉

諭旨發交督撫委用題補者彭家屏所請發往湖南

人員之處尚非濫行題請揀發可比既稱於地

方有益亦屬可行但州縣委署需人乃督撫應

辦之事應令彭家屏稟知該督撫聽其酌量如

湖南實係委用需人該督撫密行奏

開請於開復等項引

見人員內陸續

命往數員備用庶成例不致紛更而該省亦收任使

之益矣伏候

諭旨

乾隆五年十二月初九日奉

旨知道了欽此

(3)

發出奏片一件內稱各省孤貧口糧皆有定額有人少之處及或缺額之時此項口糧即為官吏侵蝕又江浙等省因三藩變逆於籌畫軍需案內將口糧一項酌減應令查明增復等語 查各省具題請均孤貧口糧一案節經戶部覆准將該省額編銀米原數按照孤貧口額散給其銀米不足者於地丁項下撥補有餘即裁充兵餉等因現在遵行在案是銀米不足之省分已經增補其人少之處亦已經裁減定額但於定額內胥役人等尅扣侵蝕有司不能加意查察亦係常有之弊臣等謹擬

上諭進呈恭候  
欽定

(4) 大學士伯臣鄂 等謹

奏為遵

旨密議事據廣西按察使唐綏祖奏稱廣西白土村逆苗藍明反等一案與湖南蒲寅山之案情事

相同案內從犯家口應照例變賣分賞其正犯之妻妾子女應給功臣家為奴者因律應緣坐非欲置之於死地也今白土各正犯家口自拿赴省城之後尚係本省水土已不習服相繼病故又安能遠涉長途聽候解部給發勢必陸續告斃可否仰邀

皇仁將白土應行解部家口數十餘名免其解部亦照蒲寅山之案辦理至義寧逆苗正犯各犯家口與白土家口同一種類今解省者已報故有十之五六可否亦照蒲寅山之案辦理等因奉 硃批大學士等密議具奏欽此 查拒敵官兵依謀叛律將正犯家口給付功臣之家為奴凡係被脅持械隨行者均免死發遣禽妻解部分發寧古塔黑龍江等處給與披甲人為奴其湖南蒲寅山案內之從犯家口於乾隆四年三月內欽

奉

諭旨著照昔年黔省安插之例在於附近省會隔越苗疆之處變賣得價即以分賞有功兵丁欽遵辦理在案本年十月內署湖南巡撫許容奏請

將現獲并嗣後再有擒獲各苗犯家口除伊夫男實係為首叛逆者仍俟結案時分別定擬其題餘其餘各從犯家口俱照黔省之例分發變賣等因奉

硃批著照所請行該部知道欽此是逆苗首犯家口應行食解之處湖南現在照律定擬又經奏明奉

旨交部在案廣西白土村並義寧各逆苗首犯家口與湖南各犯情罪相同自應照律解部畫一辦理若以白土等苗犯不習水土一槩免其食解是首從全無分別兩省辦理互異未便准行應將唐綏祖所奏毋庸議

乾隆五年十二月二十一日奉旨依議欽此

(5) 雲南總督慶復奏開修金江通川河道事宜一

摺八條奉

硃批軍機大臣等議奏欽此

一奏修鑿各灘工程應分別緊緩次第施工一條據稱金江自五月至九月瘴氣最盛江水驟漲應即停工惟自十月至四月可以施工謹將工程分作緊工次緊緩工三項今冬明春先將最緊要之大毛灘大漢灘應鑿旱堪之處首先開鑿俟鑿完一灘再鑿一灘接續辦理等語查前據該督奏稱通川河道請趙水涸之時動帑將緊要工段開鑿疏通等因經臣等覆准在案今該督乘冬春水落之時將險要各灘先行修鑿如果有效則依次施工為力較易其分別緊緩及應停工施工之處俱應照所奏辦理一委辦人員應各專責成一條據稱候補道家壽圖廣南守陳克復現委總理工程事務昭通鎮遊擊韓杰委令督理工務原署東川營參將繆弘委其監理藍米銅斤運務其餘分工按段俱陸續遴委其一切在工文武官役兵弁均應照滇省舊例按月分給養廉飯食盤費統於疏內詳悉題報等語查通川河道工費浩繁自應遴委文武各員分任辦理至各員役照滇省

舊例分給養廉飯食盤費之處均應入於工費估題冊內分晰題報以憑核議又據稱有因公參草試用知縣劉嗣孔並留滇在鹽務効力之候選州同朱國標該二員俱年力精壯熟諳地方情愿投工効力臣已批准赴工差委另行咨部如果著有勤勞臣一體題明俟工竣將在工人員分別題叙等語 查鹽務候選州同朱國標因公參草知縣劉嗣孔二員既據該督奏稱供年力精壯熟諳地方應准其赴工効力咨部存案如果勤勞出力於工竣後該督查開効用實蹟與在工任事人員一體具題請

### 旨分別定議

一雇募工匠宜寬裕給與工價一條據稱現於省城雇募鐵石船木等匠六十名每名給安家銀三兩於工價內扣除在途盤費每日給銀四分到工之日鐵石木匠人每日工銀一錢二分食米一升小工就該地雇募赴工每日給銀一錢食米一升其匠工所用器具現委員製造趕辦等語 查鐵石木匠每日工銀一錢二分小

工每日工銀一錢俱仍給食米一升較之尋常工價寔屬寬裕在該督以工匠等遠出而工所食物又俱昂貴是以如此辦理但必須再為確實查核如該地情形寔有難於減少之處即照所奏之數支給仍嚴禁吏役侵蝕剋減等弊一現修築灘應設草房安設站舡以資住宿防獲一條查工所堆貯物料鹽米以及匠役人等住宿即資沿江竹木搭蓋草房所費無幾均應照所奏辦理又預籌鹽米以資食用一條據稱設立站舡五十五隻轉運鹽米一站一交接濟無缺所用舡舡并雇募水手每隻每日酌給銀六錢如站舡不敷即先安上站其近川下站續雇舡隻接遞一體支銷等語 查安設站舡轉運川省米鹽而更番往來又可以熟習水性俱屬妥協其需用站舡工費及雇舡接運等銀兩俱應准其體一支銷一請動項以濟諸用一條據稱通河辦理各務均需支給臣檄行布政司先動現存銅息銀四萬兩以資工程盤費採買鹽米舡隻工匠之用

俟估計題報部撥款項到日歸還原款等語應照該督所請暫將銅息銀兩動支應用俟題請部撥到日再為歸還原款又大工需用殷繁應給青錢以資實惠一條據稱在工匠役俱係食力貧民應給錢文以資食用且眾目昭彰不能短少等語查東川開設鼓鑄爐座以濟開河工匠之用各匠可沾實惠且較之給銀更多節省等因已經該督另摺奏明在案毋庸再議

一米鹽均應預為赴川購買一條據稱川省秋收豐稔米價不昂趨此大工未集之時臣先後委員費銀五千兩在于川省乘此秋收備買米石再所用鹽斤赴川買運一并核貯公所等語查工所米鹽最關緊要自應趨川省秋收之後預行採買米石併買鹽斤存貯備用其需用銀兩已擬于現存銅息項內暫行動支應照

所奏辦理

臣等再查前據慶復等奏請開修通川河道為滇民興未遑之利等因一摺經臣等議覆必令

興修之後永為舟楫之利俾食貨轉輸一勞永逸則錢糧始不致虛糜該督撫等務須籌及久遠詳慎舉行等因於本年七月內具奏奉

旨依議欽遵行知在案續據前任天津總兵黃廷桂

奏稱金沙一江不下千里長灘巨石即使闢鑿

誠恐罔利舟楫且經過夷穴載銅往來慮滋蒙

端請

勅下四川撫拱二臣及川陝總督尹繼善會商熟籌

萬全辦理等因奉

硃批黃廷桂此奏著各該督撫和衷詳議具奏欽此

已經密交行文各該督撫在案今據慶復具奏

通川河道工程現在動項委員次第興備並將

安設船舩試運銅斤及沿江野夷木敗古等輸

誠歸賑各事宜俱另摺奏

聞在該督身任地方力擔辦理自係確有所見其所

奏八條臣等謹據現辦事宜議覆應仍令該督

將今冬明春所有開鑿過險要工段並安設站

舩赴川通運可否常行及經過夷地有無他慮

之處隨時詳悉奏



聞則現辦之實在情形可以槩見而工程之興舉是

否永遠妥協益有確據矣

乾隆五年十二月二十三日奉

硃批依議欽此

(6) 大學士伯臣鄂 等謹

奏為遵

旨議奏事雲南總督慶復奏稱新開金江河道經由

木欺古夷境查木欺古夷人先于雍正五年經

前督臣鄂 題明歸滇准有部覆歷任文武

未經管束所有每歲會澤縣編徵葭折一十兩

有零印官畏滋夷寨從未催徵相循墊解以致

久棄化外臣于委員查勘金江河道始行查出

臣即經飭行兩司查取從前文武遺漏管束職

名請恭一面檄委東川管恭將緣弘知府田震

給示曉諭招撫隨咨明川省督撫併就近照會

建昌鎮委員會同土目等指明木欺古歸滇夷

界今先後招出木欺古以西努晏等寨及附近

木欺古之則呢期等寨共二十一寨投出頭人

以租等十名造具戶口各冊實呈現飭該弁等

與川員分清疆界繪圖詳報但嚮化之初夷地

遼濶應加管束以定善後章程應于木欺古適

中地方安千摠一員外委一員帶兵一百名添

設一汛以資彈壓安設六塘以備江防並酌移

文員與千摠同城相資化導除現在委員查勘

何地為二十一寨摠卡何處可以設汛安防俾

各寨夷村控制得宜詳報到日臣酌定移駐文

職千摠及抽撥兵丁建造營房衙署分別辦理

另疏

題請再從前東川文武各員遺漏管束事在

恩詔以前其現任文武今已實力招徠可否免其查

恭

恩出自上至臣到任之始未經查出今因查勘河道

方悉原委亦屬踈忽相應據實陳明等因奉

硃批軍機大臣等議奏欽此 查木欺古夷人于雍

正五年即歸滇省管束今該督檄委東川文武

官員出示曉諭即相率輸誠向化先後受撫者

二十一寨其夷地各界址自應早為清析以專  
管束而杜爭端至于木欺古適中地方安設防  
汛以資彈壓亦屬應行其應于何地設立為控  
制得宜並移駐文職干摠相資化導之處該督  
尚在委勘未定應俟查明具題到日再議至從  
前遺漏管束木欺古夷人之該文武各員查事  
在屢奉

恩詔以前相應照例免其查叅其現任該管文武各  
員據該督奏稱已實力招徠可否免其查叅至  
該督現在指明夷界招撫多寨頭人其從前未  
經查出之處已據該督自行陳明可否一并免  
議出自

聖恩臣等未敢擅便伏候

諭旨

乾隆五年十二月二十三日奉

硃批著從寬免議餘依議欽此

(7) 大學士伯臣鄂 謹  
奏為遵

旨議奏事雲南總督慶復一摺奉

硃批軍機大臣等議奏欽此 據稱西藏三艾營土  
官欲往懋子地方報仇一案緣懋子一種住居  
維西邊外與西藏管轄之擦哇龍擦哇岡土番  
並口外拈捺野人界址相連拈捺人等進至  
懋地遇懋子打柴草之男婦即行擄掠不時侵  
害雍正七年懋子見滇省維西新設營堡雖遠  
在十餘站之外情願貢納麂皮等物輸誠內  
附上年拈捺將頭人女一口欲行拉去懋子不  
憤將擦哇隴人殺了致三艾營土官帶領土兵  
欲與懋子報仇今奉諭開導已照伊夷例賠償  
人命錢各俱依允和解完結在案至懋子所居  
貼近西藏界址應否咨明西藏管束拈捺毋令  
越境滋事之處伏候

訓示施行等語 查口外土夷互相仇殺乃常有之  
事滇省維西邊外懋子野夷與拈捺野人構難

稱兵現據該督飭令維西文武開諭化誨已照夷例和解完結但夷性靡常若不重加管束雖息爭端于目前難必其永靖於日後該督以總子所居貼近西藏界址請咨明西藏管束拈捺毋令越境滋事之處自應照所請令該督移咨該藏王巨羅烏將所轄之夷拈捺探、野人並擦哇隴擦哇岡土番等嚴加約束務使各安本境毋得侵害隣封構釁滋事至總子原屬番夷性非良善雖附近羈縻亦應令維西沿邊文武轉飭該管土酋嚴切開諭加意管理毋令擅行仇殺以靖邊徼可也謹

奏伏候

諭旨

乾隆五年十二月二十三日奉

硃批依議欽此

(8)

署甘肅提督王廷極奏稱軍興以來河西一提五鎮馬步兵丁製辦軍裝共借支過銀二十四萬五千九百九十兩除連年扣還外尚應扣銀四萬九千九百九十餘兩窮兵家屬力難完補仰懇聖恩特予豁免等語 查本年正月內鄂彌達奏請陝甘兩省兵丁共借過銀五十七萬餘兩除扣還外尚有未扣銀三十萬兩有奇請緩至五年之後陸續分案扣除經部議行令該督另行妥議具題等因今據提督尹繼善查奏現除扣還外尚有未扣銀二十二萬二千四百餘兩請俟辛酉年為始均作五年帶扣現交部議尚未題覆 臣等查王廷極所奏扣未銀四萬九千九百九十餘兩係就河西一提五鎮而言尹繼善所奏未扣銀二十二萬二千四百餘兩係統計陝甘兩省而言王廷極所奏之數即在其內臣等伏思此項銀兩原為兵丁製備軍裝接濟糧草之用雖本兵現在食糧有餉可扣已屬拮据况歷年事久兵丁事故更換者甚多而此項銀

兩若令該管各官及兵丁家眷賠累並著落頂替之新兵名下代為扣還過陞兵弁寔多苦累臣等竊念軍興以來陝甘兵丁或効力行間或守戍邊圉或供應糧糈雖職分當然而其出力已覺疲困此項未扣銀兩無論窮卒妻孥萬難完納即代扣之員弁亦艱於賠補今戶部議覆必案自必照尹繼善所奏令其五年扣還則弁兵終屬苦累營務亦難清楚可否仰邀

聖慈俟戶部議覆此案本章進

呈之日

特降恩旨將陝甘兩省兵丁借項一槩全行豁免則

於兵丁營伍均有裨益此係格外

殊恩臣等未敢擅便謹將前後情節陳明伏候

聖訓

十二月二十三日奏

(9)

據朱鳳英奏稱苗徭頑梗已悉剿除存者必多善類應令有司招恤餘苗各歸本業其田疇室廬仍令給還該處苗人收領其人苗子女仍於本處安插况碗碗之產若令悉輸入官不但絕其自生之路且恐奪此與被將來易起叢端再卿勇急公赴義亦有微勞仰請

聖恩量加酬賞再附近州縣前被苗頑肆擾夏秋二

季田稼失收亦併著地方官查明題請蠲免以

甦民困等語 查楚粵苗徭不法一案除各兇

犯本身及家口應分別首從業律究治如係被

脅寨分及並未從逆之良苗其田廬子女曾受

擾累者統軍大臣及該地方官自必查明安撫

令歸本業剿<sup>至被</sup>究寨之絕產現據張廣泗題請照

黔者苗產之例辦理若悉聽餘苗收領必轉致

爭奪滋擾事不可行再鄉勇急公量加獎賞乃

軍前文武應辦之事其附近苗疆民田如有因

頑苗肆擾禾稼失收應加蠲免之處該督撫日

擊民艱心行奏請今若懸揣定議恐於該處情

形轉多不合碍難辦理應將朱鳳英所奏均毋

庸議

乾隆五年十二月二十八日奉

旨知道了欽此

(10) 大學士伯臣 等謹

奏為奏銷紙張事臣等查得乾隆五年正月至十

二月辦理軍機處所取戶部紙張數目謹照例

開列

奏

閱

計開取用戶部紙張數目

本紙四千張 繕寫奏摺及抄錄各樣奏摺並行文等項用現  
存九十張

白榜紙一千張 抄寫檔案用 現存一百單張

黃榜紙一百張 釘輯檔冊包封案卷用 現存四十五張

高麗紙三百張 轉發各部院文書加封用 現存七十八張

台連紙七千張 繕清詳漢草案用 現存五百四十張

1672

乾隆六年正月初二日內閣奉

上諭陝甘兩省自軍興以來出征兵丁等俱有賞養而平時製備軍裝器械等項陸續借支司庫銀五十七萬兩有奇例應在本兵名下按季扣還者除年來已經扣除外西安司庫未扣銀約二萬六千四百餘兩甘肅司庫未扣銀約一十九萬六千餘兩前任總督鄂爾達以現今兵力不敷請緩至五年之後營伍漸充公費稍裕再為扣除部議以五年之內不免再有借支作何辦理行令總督尹繼善另行妥議今尹繼善議稱此項銀兩應均作五年帶扣如有營伍需用之處亦未便竟不借給應請酌定數目不許過多指定期限不准過久以便隨時帶扣等語朕思兵丁等現領之餉僅足供養贍家口之資若將新舊借支之項一併帶扣則所存無幾食用艱難且此項借欠歷年已久若本人更換勢必至貽累妻孥及該管之將弁朕心深為憫惻況西陲軍興以來陝甘兵丁備極勤勞而甘省兵丁尤為出力著將借欠未完帶銀二十二萬二千四百餘兩悉行豁免以示朕優恤邊兵之至意欽此

1673

乾隆六年正月初二日內閣奉

上諭初八日

太廟孟春時享遣怡親王弘曉行禮欽此

1674

乾隆六年正月初二日內閣奉

上諭楚粵苗疆軍務已竣張廣泗著來京陛見欽此

1675

乾隆六年正月初四日內閣奉

上諭從古右文之治務訪遺編目今內府藏書已稱大備但近世以來著述日繁如元明諸賢以及國朝儒學研究六經闡明性理潛心正學醇粹無疵者當不乏人雖業在名山而未登天府著直省督撫學政留心採訪不拘刻本抄本隨時進呈以廣石渠天祿之儲欽此

1676

乾隆六年正月初六日內閣奉

上諭陳邦彥向在內廷行走多年後經革職回籍今已年老著賞給原品令其休致欽此

1677 乾隆六年正月初九日內閣奉

上諭廣西巡撫方顯病目已久至今未愈粵省未必有善於療治之人著太醫院挑選眼科一員馳驛前往醫治方顯著辭任調理或伊仍住廣西或欲即歸本籍志聽其便所差太醫著相隨診視欽此

1678 乾隆六年正月初九日內閣奉

上諭廣西巡撫印務著布政使楊錫綬署理布政使員缺著按察使唐綬祖署理按察使員缺著給事中蘇昌前往署理欽此

1679 乾隆六年正月初十日內閣奉

上諭乾隆二年八月間福建閩縣侯官等處遭涉風災居民困苦朕已加惠賑恤務令得所更借給倉穀二萬六千餘石銀五千四百餘兩令其分年陸續交官以清公帑數年以來除有力之民已經清完外尚有閩縣侯官長樂連江建安五縣未完穀五千七百七十四石零未完銀一千二百八十六兩零寔因五縣被災較他邑獨重而乾隆三年五年該地方又值歉收疫氣民力輸納維艱是以懸欠至

今未楚朕心軫念著將此項銀數全行豁免俾閭閻無追呼之擾得以肆力於春耕該部可即傳諭該督撫知之欽此

1680 乾隆六年正月十二日內閣奉

旨此奏甚是欽天監所奏本年不宜大修營造原指在官工程而言至于民間一應興作自不在禁止之列本月初五日中城地方偶遭回祿延燒多家若以禁止營造之故而使小民設席支棚樂於靈慶朕心更為不忍著該管衙門速行出示曉諭居民准其蓋造俾得安妥經營以資生計其餘條奏事宜著步軍統領會同五城御史妥議具奏欽此

吳元安奏摺

1681 乾隆六年正月十八日軍機大臣奉

旨永常著補授安西提督目今夷使已到李繩武仍留原駐劄之叢與永常一同辦理摺內一應事宜俟夷使熬茶事畢回去之後次第舉行李繩武於彼時再赴甘肅新任欽此

1682 乾隆六年正月十八日軍機大臣奉

上諭永定河工關係重大著大學士伯鄂爾泰尚書公訥親  
乘驛前往會同總督孫嘉淦總河顧琮悉心查勘所帶官  
員亦著給與驛馬欽此

1683 乾隆六年正月二十一日吏部奉

旨安徽潁州府知府員缺著蘇州府同知項喻補授欽此

1684 乾隆六年正月二十二日內閣奉

上諭各省上司收受屬員餽送土宜物件有關吏治官箴者  
蒙

皇考嚴行禁止朕又屢加訓飭近年以來漸知凜遵惟是同官  
僚友禮文往來雖非屬員可比但文武大吏各有職掌事  
務繁多即屏棄一切殫心竭力尚恐精神未能周到若再  
留意於聚采之應肅如時節生辰餽送禮物酒食彼此累  
昨來往頻仍以此分心甚屬無益可曉諭各省文武大吏  
及學政織造闕差等共知之欽此

1685 乾隆六年正月二十三日內閣奉

上諭聞山東巡撫朱定元之母年已八十有餘迎養在署朕  
念朱定元宣力封疆著加恩於其父母照伊品級賞給封  
典欽此

1686 乾隆六年正月二十三日內閣奉

上諭陝西寧夏總兵官員缺朕已將呂瀚補授但寧夏鎮缺  
甚屬緊要著詢問總督尹繼善若呂瀚不勝此任即於所  
屬總兵官內揀選一員調補其所遺員缺將呂瀚補授欽  
此

1687 乾隆六年正月二十四日內閣奉

上諭今之督撫即古之岳牧宣化承流為百僚之表率必須  
誠實無偽中正無偏方可以整飭官方澄清吏治收封疆  
得人之效方今督撫皆朕慎重簡用其間實心供職不愧  
任使者固不乏人然嘗留心體察向來有積習數端一時  
未必人人盡能悔改如督撫共事一省每以意見不同參  
商偏執甚至各立門戶引用私人暗挾猜嫌互相疑忌此  
所獎而彼惡之彼所喜而此疾之其於地方公事則又彼



此推諉以致屬負無所適從政令每多舛誤此督撫不和之弊也若其朋比為奸則又外托和衷之名各自營私彼此瞻徇回護致使不職屬負皆得姑容在位以貽地方之害此又和合之不以正者又如新用督撫每一到任必極言前任之廢弛地方之凋敝以為日後卸過之地以見己身振作之功而究竟實在情形不至於是或前任陞遷則為之彌縫其闕若蒙分解退則極力吹索其與此皆私意不除而有妨於公事者又如奉勅屬督督撫審察督審原屬持平慎獄之意而承著各負不論案情之是非止論督撫之聲勢如原奉之督撫已經離任或遭放廢則承審者即可避重就輕巧為開脫而督撫審題亦遂漫不經心容易結案如原奉之督撫尚係現任或居要津則附會原題刻意鍛鍊而督撫亦不復詰問使獄不得其平者往往有之又如一省之中屬吏繁多而巧詐者不少督撫意指一為所窺則百計違迎以取歡悅偶發一言偶行一事必趨踴躍厥惟恐後時如昔年河南之饑荒陝西之開井祇以有司迎合上司奉行不善遂大為閭閻之擾此亦積習之所當省察者也以上數事乃朕平時體察所及是以降旨明白宣示各省督撫多人居心行事亦不一轍有則改之無則加勉體朕大公至正之心共成無黨無偏之

治朕實有厚望焉欽此

1688 乾隆六年正月二十五日內閣奉

上諭在京官貢三年京察一次乃國家黜陟明激濁揚清之大典各該堂官分別等次必應矢慎夫公至確至當舉一人使眾皆知勸退一人使眾皆知儆始足以澄清吏治整飭官方況國家定有一等加級之例倘舉劾不公則獎所不當獎而劣者仍得苟且姑容將視京察為具文矣本年察典屆期為此特頒諭旨著各該堂官等一秉公心屏除私念去瞻徇之習享與論之同以副朕旌別淑慝之至意欽此

1689 乾隆六年正月二十八日內閣奉

上諭自上冬及新正以來直隸山東河南山西陝西五省陸續奏報均得瑞雪重降疊見允稱優渥朕深感

上天垂佑之恩為百姓額手志慶知茅簷蔭屋懼忭同情也春日載陽土膏滋潤力勤播種不可後時著五省督撫轉飭有司宣朕諭旨過為勸導俾小民努力東作以冀豐登其有貧乏之家籽種不足者量為借助以副朕仰承

天貺俯恤民隱之至意欽此

1690 乾隆六年正月二十九日奉  
旨班第仍在軍機處行走欽此

1691 乾隆六年二月初一日內閣奉

上諭昨因永定河放水經理未善以致固安良鄉涿州新城  
雄縣霸州各境內村莊地畝多有被淹之虞難以耕種且  
居民遷移不無困乏朕與孫嘉淦不能辭其責也用是寤  
寐難安深為軫念著大學士鄂爾泰尚書訥親會同總督  
孫嘉淦詳悉查明被水處所應免錢糧若干速行奏請豁  
免先將此旨曉諭百姓知之欽此

1692 乾隆六年二月初一日內閣奉

上諭聞八旗兵丁在部具呈買置官地及到該地方領地之  
時往往移甲換乙將瘠薄更易膏腴非復原指之產業而  
歸旗之限又迫不得回京師及向部中具呈部中據呈  
行查該地方官又復支吾塞責不能為之清理大失公平  
之義著該部定議作何稽查以清弊竇欽此

1693 乾隆六年二月初二日奉

上諭西北兩路尚有駐防兵丁如準噶爾差遣夷使及一切  
緊要事務彼此互相寄信通知庶於邊事有益著行文兩  
路將軍大臣等知之欽此  
此道係清字音漢

1694 乾隆六年二月初五日內閣奉

上諭春秋舉行經筵例應先期告祭

傳心殿當年

皇祖曾經親詣行禮以昭誠敬本月經筵屆期朕親詣

傳心殿行禮所有應行事宜著該衙門敬謹察例具奏欽此

1695 乾隆六年二月初五日奉

旨班第著仍充

實錄館副總裁官欽此

1696 乾隆六年二月初七日內閣奉

上諭從前建議捐監事例准本籍之人納穀以備民間荒歉  
緩急之需繼因甘肅一省為極邊要地民貧土瘠非他省  
可比講求積貯更為急切之務該省應捐貯倉之穀共計  
三百八十萬石而年來本地報捐者甚屬寥寥倘過一時  
歉收則民食無所資藉甚為棘手是以部議暫准外省之  
人在甘報捐俟穀石充裕再行停止此不得已改例之意  
近朕聞得該省報捐並無行商過客惟有各州縣有司以  
及伊等之子弟親戚幕客輩希圖漁利廣為包攬折收銀  
數以飽私囊及至買穀交倉則低定價值高收斛面或抑  
勒富戶奔走交官種種弊端大為民累是以國家預籌養  
民之政而奉行不善重為閭閻之擾矣以朕所聞如此雖  
未必通省州縣皆然而不肖有司假公濟私者則恐不免  
似當酌量變通以期無弊可否將甘肅收受外省報捐之  
例停止并如何補實該省倉儲之處著九卿悉心妥議具  
奏欽此

1697 乾隆六年二月初八日奉

旨所奏知道了古者春蒐夏苗秋獮冬狩皆因田獵以講武  
事我朝武備超越前代當  
皇祖時屢次出師所向無敵皆由平日訓練嫻熟是以有勇知  
方人思敵愾若平時將狩獵之事廢而不講則滿洲兵弁  
習於宴安騎射漸至生疎矣  
皇祖每年出口行圍於軍伍最為有益而紀綱整飭政事悉舉  
原與在京無異至巡行口外按歷蒙古諸藩加之恩意固  
以寓懷遠之略所關甚鉅  
皇考因兩路出兵現有徵發是以暫停圍獵若在撤兵之後亦  
必舉行況今昇平日久弓馬漸不如前人情狃於安逸亦  
不可不加振厲朕之降旨行圍所以遵循  
祖制整飭戎兵懷柔屬國非馳騁畋遊之謂至啟行時朕尚欲  
另降諭旨加恩賞賚令其從容行走亦不至苦累兵弁朕  
性耽經史至今手不釋卷游逸二字時加警省若使逸樂  
是娛則在禁中縱所欲為固愾國事何所不可豈必行圍  
遠出耶朕廣開言路叢洞曾有所見即行陳奏意亦可嘉  
但識見未廣將此曉諭知之欽此

1698 乾隆六年二月初八日奉

旨從前停止各項捐納之時在廷諸大臣及翰詹科道等官  
議留捐監一條俾各處積穀以備民間荒歉之需且使士  
子廣其應試之路洵為兩便並非捐官可比朕已允行昨  
據御史趙青泰復請停止捐監又經大學士九卿會議以  
為事屬難行應仍其舊朕已降依議之旨矣今據海望奏  
稱外省收捐繁難赴捐之人甚少原議各省捐貯較數應  
三千餘萬石今報部者僅二百五十餘萬石合計尚不足  
十分之一不若停止各省之捐較仍照九卿原議在部交  
銀將所收之銀扣抵各省買穀銀 俟倉儲充盈之後將  
應否停止之處再行請旨等語朕思納粟貯倉原為備荒  
糶賑預為善畫之計外省捐較繁難且有弊竇不若在部  
報捐之易誠如海望所奏朕亦知之嗣後仍准在部收捐  
折色至於外省收捐本色之例亦不必停在內在外悉聽  
士民之便地方積穀不厭其多賑恤加恩亦所時有正未  
易言倉儲充盈既係士民兩便之舉將來亦不必奏請停  
止朕看州縣有司往往慮及寡變賠補以多積穀石為憂  
其如何酌量定例俾其從容不至賠補之憂交與該部另  
議具奏如此則有司不以積穀為苦而倉庫漸次可實不  
致虧缺於民食大有裨益矣欽此

1699 乾隆六年二月初九日內閣奉

上諭本月二十日祭

歷代帝王廟朕已降旨親詣行禮查是日節屆清明朕詣

壽皇殿

雍和宮行禮

歷代帝王廟著和親王弘晝致祭欽此

1700 乾隆六年二月初十日內閣奉

上諭滿漢進士原屬一體嗣後滿洲進士亦著照依甲第名

次選用知縣俾其漸悉民瘼學習外任之事欽此

1701 乾隆六年二月初十日大學士鄂 張 徐

尚書訥 海 奉

上諭近見居官者家計多覺艱難而旗員為甚朕思百姓尚  
欲其盈寧而况居官者乎因欲措一久遠利益之道而先  
思其所以致此之由細推其故蓋由于查辦虧空時其囊  
橐不足抵補則將房產入官以致資生無策棲身無所且  
不獨本身為然旁及弟兄親戚平日沾其餘潤者亦皆牽  
帶于中以補公項而仕宦之家遂多致貧乏矣又思當日

所以如此辦理者蓋以其先各省火耗聽其自取漫無稽查而闕稅正額之外贏餘盡皆入已以致官負縱欲敗度恣意奢靡親族肥于一時而不計後日之波累若不加意整飭則官箴不恆國法漸弛大為人心風俗之害是以

我

皇考旋乾轉坤審籌默運然後定有章程世風丕變雖滿漢官貧等用度不能充餘然無甚貧甚富之別且不貽後日身

家之患此我

皇考仁至義盡之舉非言利也若云言利則未解火耗之前地方一切公務皆係官民承辦今則動用公項公項猶前之火耗也然以公項不足而請動正帑者不知其凡幾矣眾所共知國家亦豈利此而為之乎又如闕差一項從前司稅之人歸之私囊者後令報出即為贏餘耳並非現徵之外有所增加也雖管關之人賢愚不一或有奉行不善欲增課以見長因而需索累民者然此十之二三耳較之未經澄清以前已覺減少者蓋多矣朕臨御以來又復核減稅課不下數十萬兩且不特嚴飭該管諸臣剔除諸弊至再至三今條奏闕稅者尚屬紛紛如海望係

皇考及朕簡用之大臣豈不知國體而但知言利者比其管理崇文門稅務不過儘收儘解盡行報官不似先前之入私

七〇〇

索因而見其獨多耳朕即另派大臣管理想亦如其數也若如御史胡定齋奏苛索種種朕可以信其必無何為加此過甚之詞耶崇文門稅務不必另議至外省闕權皆久經該督撫就近稽查除現設口所報部有案者照舊設立外其有私行增添之口所逐一詳查題報應留者留應革者革此者清查之後司權之負若再有違例苛索者督後嚴覈官吏嚴奉該督撫不行查察經朕訪聞必於該督撫是問至許登北新二處係江浙火關尤為緊要文與楊起曾德沛照此稽查辦理楊起曾德沛皆係國家公忠大臣必不肯徇庇管關之負而貽累小民亦斷不肯似腐儒妄生議論違道以干譽也此番定議之後各官風聞不實之言不得再行瀆陳恣之天下之事盈虛消長相為倚伏從前官員取盈以圖快意未幾而有缺正帑國法具在清查者追而家計蕩然不但取盈者不為己有且並失其祖父所留之業子孫並受其困比比皆然莫之或矣近觀臣工之意頗有以現在所行之例為不便者意欲將耗羨盡與本官司權悉從內遣謂可多得養廉食用豐裕不知豪奢之習起於有餘日下多獲資財不過三數年間俯仰從容欣欣得意未幾而匱乏隨之且必致仍前之虧缺公帑而清查著追之事隨之朕縱不能措之得當使受目前之患

又何忍縱之敗度以隱貽日後之憂乎况古云王者之國富民霸者之國富士僅存之國富大夫如果百姓家給人足即居官者不甚豐饒猶不失輕重之權衡也且言居官貧乏者仍出於居官者之口而入於朕耳朕亦不過疑信各半究之忍所以富之心未如思所以富萬民之心之切也朕仰承

皇考貽謀速畧一切章程惟有守而不失間或法久弊生隨時酌量調劑則可若欲輕議更張不獨勢有不可亦且朕之薄德力有所不能可將此曉諭內外大小臣工並八旗知之欽此

1702 乾隆六年二月十一日內閣奉

上諭天津總兵官傅清現在患病不能辦事著解任回京調理俟病痊再行赴任其提兵官印務著該督於副將內揀選勝任之員署理欽此

1703 乾隆六年二月十二日內閣奉

上諭完顏偉著授為河南副總河隨高斌學習河務其浙江按察使員缺著兵部郎中徐琳補授欽此

1704 乾隆六年二月十二日內閣奉

上諭據湖南巡撫許容奏乾隆元年兵部議准武職親丁馬匹俱准備價存營遇有需用馬匹之時即將所存馬價銀兩購實備用今臣於五年八月抵任本標因城綏用兵呈報購實親丁馬匹日期查五六月間各營皆已報買因查乾隆二年擒勒蒲寅山亦是城綏用兵並未買備親丁馬匹此番何以忽行購買細加察訪乃知各武職俱屬虛報且有銀兩存營未領而已報沽連買就布支草料者臣既查明並無馬匹隨營喂養豈便聽其朦混捏冒以肥私索且今日報買迨至凱旋非捏報倒斃即捏報疲瘦不堪又可再請帑項存營此事勢之必然者臣不敢扶同欺飾理合據實奏聞等語朕恐捏報買馬固干吏議但官員眾多又在軍前出力今軍務已竣應從寬完結著傳諭湖廣督撫查明城綏用兵以來各營捏報買馬若干及冒支行營料草若干俱照數追還外一概免其處分其該管上司濫行批准者亦免其議欽此

乾隆六年二月十三日內閣奉

上諭朕臨御以來廣開言路原係明目達聰懸詔設鐸之意所以集思廣益補闕失而裨政治也為言官者理應精白乃心講求治體上則絕惡糾謬足以匡襄君德下則揚清激濁足以砥礪官方如內而大臣擅權不公外而督撫甚職枉法以及庶司百職作弊營私者確有實據秉公題奏其有關於國計民生之要務則不時陳奏如此方克稱言官之職而不負朕諄切求言之本懷乃數年以來臺垣中之建言者率多撫拾細務苟且塞責而近日支離乖謬之說尤多即如今日科道奏事三人李清芳則稱國家既將捐納停止不如徹底廓清其未選者一概給以職銜頂帶等語夫同一捐納也已選者俱早得官而未選者無故而擯棄不用只給頂帶先後互異何以昭政體而服人心且捐例既停則選用者日見其少再久則無捐納之負矣而而李清芳尚稱商賈之人一旦替笏組綬列於卿大夫之位竟似目前現開捐納者何昏憤刻薄至此耶又如傅森奏稱致祭

壇

廟時年逾七十之大臣眼力昏花舉動狼狽應降旨免其陪祭等語殊不知臣工陪祭自可酌量如果精力不逮原可告

之該衙門不與駁奔之列而在朕以昭格神明之大典沾沾於體恤臣工之小節特頒諭旨有是體予最可異者如邵錦濤奏請蠲免宛大兩縣鋪面門稅一摺此事伊於乾隆四年間曾經條奏經直督孫嘉澐議不可行上冬金溶又復具奏請免大學士九卿仍議不應准行今邵錦濤又將此事陳奏朕查其籍貫金溶邵錦濤皆係順天進士如此細事有何關係而兩人前後數陳有意附會顯係懷挾私心袒護鄉里而邵錦濤為再三之瀆尤不可恕著交部嚴加議處凡言官彈劾本省督撫及條陳本省事宜其真知確見有裨政治者少而假公濟私者多此風斷不可長著通行訓飭朕之開言路所以盡為君之道而為科道者亦當盡言官之道古之言官忠君愛國出於至誠毫無富貴利達之念介於胷中是以能言人之所不能言盡之簡冊為古今之所共稱今之科道其居心先不可問見朕虛懷廣攬凡事包容意謂言之不當亦不至於處分言之偶中即可希冀遷擢遂不顧理之是非事之可否而此倡彼和累牘連篇以僥倖於萬一每當二八月內陞外轉之時筆疏更為紛雜此等情形伊等迂躬自問實屬可鄙似此皆出於迎合之私表假使平日不肯納諫則伊等又必藉默不言無一建白者矣天下之事不可嘒嘒重使科道

不得盡言固不可然任其狂聲而無節制則又不可從來  
言官之弊莫大於羽黨朋末之事人所痛恨可為炯鑒近  
日習氣若不悔改則迎合不已必致營私營私不已必致  
結黨所關於國家者甚大朕是以嚴切降旨曉諭臣工等  
共知之欽此

1706 乾隆六年二月十三日內閣奉

上諭欽奉

皇太后諭旨嘉嫻著晉封妃貴人海氏貴人相氏貴人葉赫勒  
氏俱著封嬪欽此所有應行典禮交與該部察例具奏欽此

1707 乾隆六年二月十四日內閣奉

上諭打箭爐迤西瞻對无述各部落番夷例應每年納貢馬  
狐皮折價銀八十九兩五錢今朕聞得彼地年來積雪嚴  
寒牛羊受凍多有傷損者夷困苦納貢艱難著將乾隆五  
年六年應納折價銀兩豁免以示軫恤著該部即行文四  
川巡撫出示曉諭番夷等知之欽此

1708 乾隆六年二月十六日內閣奉

上諭前因楚粵逆苗不法派撥弁兵前往征勦今苗疆平定  
軍務已竣朕念黔省路遠所有出征之千把外委馬步兵  
丁等力量單薄其啓行時借領俸餉銀兩免其扣抵還項  
今思湖比雖屬楚省然去城綏亦甚遠濶弁兵遠涉勞苦  
著將千把外委馬步兵丁等原借庫銀一體豁免其扣  
抵該部可即傳諭該督撫等知之欽此

1709 乾隆六年二月十七日內閣奉

上諭張照告假省親刑部左侍郎事務著蔣溥兼管郝玉麟  
告假養病刑部右侍郎事務著周學健署理欽此

1710 乾隆六年二月二十五日內閣奉

上諭狼山鎮總兵官員缺著蘇松鎮總兵官陳倫炯調補蘇  
松鎮總兵官員缺著湖廣襄陽鎮總兵官張天駿調補襄  
陽鎮總兵官員缺著衡州協副將治大雄補授欽此



1711 乾隆六年 月 日內閣奉

旨許任威著往陝西交與總督尹繼善遇有總兵官缺題補  
欽此

1712 乾隆六年二月二十七日內閣奉

上諭據署福州將軍策楞奏稱各旗開戶人等定例不准挑

取馬甲先將另戶壯丁挑補其另戶中有年未及壯一二

年後可以造就者亦准挑補再有不敷方於開檔分戶人

等內酌量選用此通行之例也查福州四旗並未照例遵

行緣閩省披甲之開戶戶下人等通計二百餘戶內有康

熙十九年初撥駐防之時原披甲未闈者一百四十餘戶

迄今將及百年伊等父子兄弟互相傳項家口重大惟籍

甲糧養贍漢仗弓馬與另戶無異且伊等祖父有原係官

未闈並在閩曾經出仕者若缺出裁汰俟另戶不敷始行

挑取必至失所况原來之一百四十餘戶駐防日久滋生

繁衍現在家口至一千七百餘口之多伊主在京在杭無

可依倚非京旗隨主募養家奴可比實有不得不挑之勢

似應陳明分別辦理嗣後除駐閩官兵之開戶戶下遵照

定例不准挑取馬甲俟有缺出舉行裁汰外其初移駐時

本身雖係開戶戶下或原係官未闈或原披甲未闈人等

之子孫准其與另戶一體挑補則伊等養贍有資不至失

所等語福州四旗開戶人等中既有不同情節自應分別

辦理著照策楞所請查明初移駐時或由官未闈或披甲

未闈之子孫准其與另戶一體挑取馬甲其餘戶下不得

違例濫挑以致另戶壅滯該部可即行文該將軍等知之

欽此

1713 乾隆六年三月初一日內閣奉

上諭今年鄉試屆期簡用各省主考官向有考試之例著將

翰林科道部屬等官應差主考者照舊例通行考試其有

不願出差者亦聽其意將此交與該部查例辦理欽此

1714 乾隆六年三月初一日內閣奉

上諭梁詩正汪由敦著充皇清文穎館副總裁欽此

1715 乾隆六年三月初一日內閣奉

上諭周學健李紱著充明史綱目館副總裁欽此

1716 乾隆六年三月初二日內閣奉

上諭朕因近來條陳關稅者紛紛不一特降諭旨交與各省督撫清查既經此番定議之後不得以風聞不實之言再行續奏此專指關稅一事而言也閱數日又見科道條陳有言不當理且懷挾私心者漸不可長另降訓飭言官之旨兩事絕不相侷並未禁科道風聞言事也今御史趙青蔡將二次諭旨牽合一處以為言官仍當准其風聞言事不應禁飭朕令大學士等詢問之伊稱錯會旨意不勝有味趙青蔡一人如此倘眾言官亦復錯會不敢風聞言事則大非朕集思廣益之本懷朕方求言之不暇豈有阻塞言路總之科道條陳言之當者自可採擇其未當者亦可訓諭若果懷挾私心亦難逃朕心洞鑒特將前後情節宣諭科道等知之欽此

1717 乾隆六年三月初三日內閣奉

上諭近見九卿辦事亦皆昏勉効勤不至曠廢蓋我皇考訓誨整飭十有餘年朕守而不失復時時砥礪臣工是以人知自愛盡蓋不飭之習無自而萌但國家之所以簡用大臣者上以資匡勳下以資幹濟遇大事而籌及遠就一事而計萬全方克稱股肱心膂之寄若徒循分供職立身

於無過之地其自為計則得矣若大有裨益於政事則未

也朕就近日九卿風氣論之大抵謹慎自守之意多而勇往任事之意少朕之所望於諸臣者實不止此嗣後當實體公忠擴充器識視國事如已事以古大臣自期許佐朕孜孜圖治之心方為無忝擢用棟樑舟楫之任也即如朕前降旨令廷臣保舉理學清廉如湯斌陸隴其等輩為時已久未見應詔在諸臣遲回慎重之意或從避嫌起見或恐開人奔競之風殊不知為大臣者遇有奔競干謁之人即據實糾奏正可為整頓風俗之一助豈可因噎而廢食至於避嫌之見若過庸主則不得不爾諸臣尚可信朕於人之情倘罔不坐照倘稍存私意難逃朕之鑒察則諸臣果問心無愧更有何嫌之可避將此並傳諭知之欽此

1718 乾隆六年三月初三日奉

旨依議國家武備不可廢弛朕於本年秋月出口行圍原以訓練兵丁仿古獮狩之禮昔我皇祖每歲舉行所經由道路及一切事宜俱有章程朕今歲雖行志遵舊制但恐歷年已久地方官員或借端派累隨從之人或有恣意需索及強買物件不按時價者著總督孫嘉澐不時查叅毋得容隱欽此

1719 乾隆六年三月初五日內閣奉

上諭山西布政使員缺著甘肅按察使呂守曾補授甘肅按察使員缺著直隸通永道鄂昌補授欽此

1720 乾隆六年三月初八日內閣奉

上諭朕御極以來信任大臣體恤羣吏且增加俸祿厚給養廉恩施優渥以為天下臣工自必感激奮勉砥礪廉隅實心盡職斷不至有貪黷耽檢以干憲典者不意竟有山西布政使薩哈亮學政喀爾欽穢跡昭彰駐私票粟寔朕夢想之所不到是朕以至誠待天下而若輩敢於狼藉至此豈竟視朕為無能而可欺之主乎哉

皇考慈飭風俗澄清吏治十有餘年始得不變今不數年間而即有蕩檢踰閑之事既不知感激朕思並不知深遵國法將使朕

皇考旋乾轉坤之苦衷由此而廢弛言念及此朕寔為之寒心昔日俞鴻圖賄賣文武生童我

皇考將伊立時正法自此人知畏懼而不敢再犯今喀爾欽賄賣生童之案即當照俞鴻圖之例而行若稍為寬宥是不

能仰承

皇考慈飭澄清之意矣朕必不出此也薩哈亮喀爾欽二案著

吏部侍郎楊嗣琛前往會同巡撫喀爾吉善秉公核實嚴

審定擬若楊嗣琛有意為之開脫是伊以己之身家博二

人之感悅亦斷難逃朕之洞察也且此二案係朕先有訪

聞降旨詢問喀爾吉善伊不能隱匿始行奏奏一省如此

他省可知矣喀爾吉善著該部嚴察議處凡為督撫者遇

該省貪官汚吏不思早發其奸或題奏一二州縣以塞責

而於此等大吏反置之不問且妄意朕心崇尚寬大遂爾

苟且姑容以取悅於眾返之於公忠體國之義甚可愧殺

且國法具在朕豈不能效法

皇考予可傳諭各省大小臣工知之欽此

1721 乾隆六年三月初八日內閣奉

上諭提督山西學政著御史燕霖勸去欽此

1722 乾隆六年三月初九日內閣奉

上諭楊嗣琛差往山西著馳驛前去欽此

1723 乾隆六年三月初九日九卿面奉

上諭人臣之所巽尚者惟廉近日山西布政司薩哈諒學政喀爾欽貪婪敗檢朕訪聞諭令撫臣喀爾吉善查奏劣跡種種并降旨通飭各省督撫爾九卿為國大臣現今雖無黨黨不飭之事然師生故吏往來交際未能保其必無或其中有久經左斥因朕復加倚用而向日之故習復萌遂尔放縱不自檢束者亦未可定朕非無所見聞也但以一二小事輒為舉出未免國體有傷朕御極以來崇尚寬大體恤臣工於常俸之外特加雙俸而教職微員皆需祿賜並非市惠邀名原以君臣一體俾得日用充裕庶乎保其操守爾等正宜仰體朕心愈加謹飭倘不自儆勉必待朕明白指斥尔等又何以自立且務崇寬德朕之本性然遇有貪官汚吏朕亦斷不肯姑容也現今滿尚書六人朕可保其無他而漢尚書中不可信者不過新用之一二人而已古云知足不辱知止不殆實誼云上設禮義廉恥以遇其臣而臣不以弗行報其上者則非人類也我皇考懲飭官方十有三年朕續承統緒惟日孜孜所以戒諭臣工者無所不至若大臣等或至敗檢踰閑不惟負朕教養之恩亦何以對越

皇考在天之靈乎尔九卿勿謂朕蒙深宮無一訪聞即如薩哈

諒喀尔欽二人朕早聞其劣蹟九卿中並無一人言及如石麟曾為山西巡撫廷臣中亦有山西人豈竟漫無見聞即科道等動云風聞言事所奏率多無關緊要之言而遇此等事轉未有入告者若以不知為解朕又何從得聞耶現在仍有謂喀尔吉善奏奏喀尔欽之事為過當者豈復有人心者乎夫九卿為朕股肱心膂才具雖有短長操守何難自勉若於此不能自持其他更復何望自茲以往務宜各砥廉隅互相勸勉以成大法小廉之治用副朕厚望焉特諭

1724 乾隆六年三月初九日內閣奉

上諭八旗護軍前鋒人等除候本佐領下護軍校驍騎校等缺補用外並無別項陞轉之路昔年

皇祖

皇考曾於此等人內揀選漢仗好者用為綠旗守備千總著八旗護軍統領前鋒統領於護軍前鋒內擇其弓馬好人明白屯勉向上者每旗各揀選四名帶領引見內務府總管於內務府三旗護軍內每旗亦各揀選一名帶領引見分發步軍統領及兩處

陵寢提兵官令其在千總上効力行走其如何分用如何予以

陞缺幾年揀選一次之處著兵部議奏欽此

1725 乾隆六年三月十二日奉

旨湖北均房營恭將楊通仁著送部引見欽此

1726 乾隆六年三月十三日內閣奉

上諭湖廣提督員缺著貴州提督王無黨調補貴州提督員

缺著古州提兵官韓勳補授古州提兵官員缺著鎮遠提

兵官劉永貴調補鎮遠總兵官員缺著清江協副將崔傑

補授欽此

1727 乾隆六年三月十三日內閣奉

上諭貴州總督張廣泗之父母著賜祭一壇欽此

1728 乾隆六年三月十六日內閣奉

上諭朕聞福建福州府屬之閩縣鼓山里舊有學田一千八

百四十八畝每年徵學租銀五百三十三兩二錢有零司

給廩生貧士為膏火之資後因田久荒蕪租無所出至康

熙三年招民墾復改為民業報墾糧色輸納正供已非昔

日官置民佃之學田矣乃廩生貧士仍欲復還學租以致

墾額額告免於康熙五十三年該知縣將丈出通縣田

地溢額等銀詳抵學租各業戶始獲相安雍正五年通查

溢額之時該縣知縣辦理錯誤將從前已報溢額詳抵無

著學租之項復報溢額詳請墾科又將康熙三年墾復之

民田文實只存洲田一千六百二十畝加徵學租勻進符

額以致民若失業佃苦馱賠節年追比無完徒滋擾累以

朕所聞如此著交與總督德沛巡撫王恕悉心查辦將後

前詳抵無著學租之項即行豁免以甦民困該部即遵諭

行欽此

1729 乾隆六年三月十六日奉

旨滿洲緒譯正卷五十五本蒙古緒譯正卷九本俱照所擬

名次取中滿洲備卷四本蒙古備卷二本不必取中欽此

1730 乾隆六年三月十八日內閣奉

上諭據總督倉場侍郎塞爾赫等奏報長淮衛戴幫漕船於

三月初四日失火焚燒軍船五號共計燒燬米豆二千二

百零八石大小男婦傷損十一口押運官弁例應處分米

豆應著落賠補等語朕覽本內情節乃因時值昏暮一船失火延及五船風烈火猛人力難施情殊可憫除將押運官弁照例議處以儆疎忽外其各船應賠米豆著加恩寬免欽此

1731 乾隆六年三月十八日內閣奉

上諭戶部侍郎員缺著周學健補授仍兼管刑部侍郎事光祿寺卿員缺著李紱補授欽此

1732 乾隆六年三月十八日內閣奉

上諭宗人府府丞張國棟太僕寺卿蔣連俱已年老光祿寺卿劉藩長人平常俱著以原品休致欽此

1733 乾隆六年三月十九日內閣奉

上諭湖南鎮寧鎮總兵官員缺著冶大雄調補湖北襄陽鎮總兵官員缺著宋慶補授欽此

1734 乾隆六年三月十九日奉

上諭向來八旗佐領根源未能清晰每致互相控告因特派王大臣等會同八旗大臣徹底清查以期永息爭端今據伊勒慎等奏奏終鑲佐領一案辦理仍多錯誤復滋告訐不知從前所清查者何事此摺著軍機大臣看各旗有無似此錯誤之案一併查明具奏伊勒慎所奏是米震弘暉等交部嚴察議奏欽此

1735 乾隆六年三月十九日內閣奉

上諭據御史仲永禮奏提督鄂善於張鳴鈞發掘銀兩案內有李長庚妻父孟晉瞻轉託范毓麟與提督說合送銀一萬兩囑其照拂並侍郎吳家驥亦嘗得俞姓銀二千五百兩又稱原係風聞言事據實密奏以備訪查等語鄂善係朕倚用之大臣非新用小臣可比伊意欲朕訪查不知應委何等之人若委之禁近小臣豈大臣不可信而小臣轉可信乎若委之大臣又豈能保其必無恩怨乎況命人暗中訪查而朕不明言藏於宵臆間是先以不誠待大臣矣此事甚有關係若不明晰辦理其黑白則朕何以任用大臣而大臣又何以身任國家之事耶著怡親王和親

王大學士鄂爾泰張廷玉徐本尚書訥親來保秉公查審

使其果實則鄂善罪不容辭如係虛捏則仲永擅自有應得之罪王大臣必無所偏徇於其間也仲永擅又奏稱向來密奏留中事件外間旋即知之此必有串通左右暗為宣洩者則是權要有耳目朝廷將不復有耳目矣等語朕於左右近侍訓約甚嚴防閑甚密數年以來凡密奏留中之件皆朕親自緘封並有覽閱之後默記於中比時即焚其稿者寔無宣洩之隙其有宣洩於外者則皆係本人自向人言以避名譽而反謂自內宣洩以為掩飾之計朕猶記方苞進見後將朕欲用魏廷珍之意傳述於外並於魏廷珍未經奉召之前遷移住屋以待其來京此人所共知者又李紱曾經召對朕以君不察則失臣臣不察則失身之義訓諭之伊稱臣斷不敢不察但恐左右或有洩露耳朕諭云朕從來召見臣工左右近地曾無內侍一人並無聽聞亦何從洩露如此二人者即皆此類也至於權要串通左右一語朕觀此時並無可串通之左右亦無能串通左右之權要伊既如此陳奏必有所見著一併詢問具奏朕之所以廣開言路者原欲明目達聰以除壅蔽若言官自謂風聞言事不問虛實紛紛瀆陳徒亂人意於國事何益是以此案必須徹底清查不使含糊歸結亦正人心風

俗之大端也仲永擅摺并發欽此

1736 乾隆六年三月二十日奉

旨凌如煥著給假數月省視伊父如伊父身體已健仍未京供職若尚須在家侍奉調養再具摺奏聞兵部侍郎且不  
必開缺欽此

1737 乾隆六年三月二十日內閣奉

上諭據河東總河白鍾山奏報本年正月初一日封邱縣汛內荆隆工所料塚火起延燒料物七十餘塚應著落署廳葉仰高賠補其疎忽之咎請勅部議處等語朕覽本內料塚夫火情節乃因曠野之地火起風烈料乾易燃一時難以撲滅情有可原其已燬物料從寬免其賠補至署廳葉仰高疎忽之咎寔所難辭著交部照例議處欽此

1738 乾隆六年三月二十五日和碩和親王弘晝等奉

上諭御史仲永擅奏鄂善得受俞長庚賄賂一案朕初以為必無之事仲永擅身恃言官而誣陷大臣此風斷不可長但事不查明何以治仲永擅之辜因而派王大臣七人秉公查審屢經研訊逐日奏聞乃鄂善家人及過付人等

俱各應承是鄂善受賄之處已屬顯然朕特召和親王大學士鄂爾泰尚書訥親來保同鄂善進見面加詢問鄂善始猶抵飾朕諭之曰此事汝家人及過付之人皆已應承汝能保汝家人捨命為汝而自認此賍為已吞乎若能如是事亦可已若不能如此數人者出將秉公嚴詢彼時水落石出汝一身之事所關甚小而朕用人顏面所關則大汝若實無此事則可若不妨於朕前實奏朕另有處置而諭此數大臣從輕審問將此事歸之汝家人以全國之體設非朕有指示此數人者但知秉公而已敢如是辦理乎鄂善熟思乃直認從家人手中得銀一千兩是實朕以鄂善在朕前已經自認毫無疑竇以

皇考及朕平日深加信用之大臣而負恩至此國法斷不可恕若於此等稍有寬縱朕將何以臨御臣工但朕心尚欲以禮待大臣以存國體實誼曰其有大辜者聞命則北面再拜跪而自裁上不使人捋抑而刑之朕之愛鄂善亦猶是耳因垂淚諭之曰爾輩按律應絞念爾曾為大臣不忍明正典刑然汝亦何顏復立人世乎汝宜有以自愛也乃彼既出之後朕猶恐如此辦理或有過刻之處又令和親王等四人會同大學士張廷玉福敏徐本尚書海望侍郎舒赫德再加詳議據王大臣等奏稱鄂善婪賍負恩國法所

不容人心共憤理當明正典刑乃蒙天恩容其自盡實無過刻之處等語朕因令訥親來保前往將王大臣奏帖與鄂善閱看并傳諭曰朕於大臣視同手足今爾負朕至此朕萬不得已如此辦理自降旨之後心中戚戚不能自釋如人身之手足是也汝心中若有欲言之事不妨向二人再行陳奏鄂善忽奏稱我錯聽皇上諭旨以為我家人已供我得銀一千兩又聽得諭旨云爾係

皇考及朕信用之大臣如果有受賄實情可在朕前據實奏出朕另有辨處以全大臣之體我因皇上屢次降旨滿尚書皆可信其無他今我被人奏劾審有得銀之供恐皇上辦理為難是以一時應承我實無賍私入已如家人供出我來我情願與之質對等語朕當爾等面訊鄂善時總以至誠開導欲得其實情爾等皆為之感泣鄂善亦良心發見俯首無辭因而直認不諱此時並未以威懾之以言誘之以刑訊之也旋命訥親來保傳旨與伊朕意彼若自知辜重誠心悔過或以罪當監候懇切哀求尚欲緩其湏臾之死乃鄂善無耻喪心至於此極其欺罔之辜即立時正法亦不為枉夫朕之所以令彼自愛者故全國家之體而賜彼以顏面也乃彼自不惜顏面朕將何惜哉

皇考在天之靈不容此負恩之輩冒恩苟免欲使明正典刑以



儆戒大小臣工即可將鄂善革職拿交刑部著福敏海望舒赫德會同爾等嚴審則虛實自見或因鄂善愧懼一時錯認亦未可知王大臣必不阿朕旨而故入人以重辟也夫奸盜等輩朕尚熟思審憲期於至當况鄂善曾為大臣者乎朕為此事數日以來寢不安席食不甘味深自痛責以為不如

皇考之仁育義正能使百爾臣工兢兢奉法自不致身陷重辟水弱之病朕寔痛之若再不明彰國法則人心風俗將未何所底止朕之苦衷亦惟

皇考在天之靈鑒照之耳垂淚此書王大臣其體朕意焉布告天下咸使聞知欽此

1739 乾隆六年三月二十五日

上諭步軍統領事務著舒赫德辦理兵部尚書員缺著班第補授班第現在奉差著哈達哈暫行兼理欽此

1740 乾隆六年三月二十六日內閣奉

上諭前據御史仲永檀奏鄂善得受賄賂一案朕初心疑為必無此事特令王大臣等秉公察審務得實情令據王大臣等悉心根究逐日將情形奏聞鄂善顯有納賄情弊

昨朕召伊進見面加詢問伊亦自行承認及朕遣訥親來保傳旨宣諭伊忽支飾改供小人之情狀畢露其為納賄確實無疑矣仲永檀身為言官能發奸摘伏直陳無隱甚屬可嘉應加超擢以風臺諫著將僉都御史鄭其儲調補順天府府丞其餘都御史員缺即將仲永檀補授至仲永檀摺內所奏大學士等到俞姓送帖吊奠一事今查詢問白全屬子虛然伊得之于榜之口則非伊捏造可知又奏留中察摺宣洩於外一事伊既舉出吳士功奏吏賄賂直一件查上年吳士功果有此奏現在交王大臣等查詢是伊亦並無妄言之咎俱不必向伊置問朕始疑仲永檀妄言誣陷大臣故欲加舉今查詢有據旋即加恩擢用朕大公至正之心可以對

天地亦可以對臣民自今以後諸居言官之職者皆當以仲永檀為法而不必畏首畏尾矣欽此

1741 乾隆六年三月二十七日大學士張廷玉侍郎舒赫德

面奉

上諭朕諭旨一道御史吳士功奏尚書史貽直一摺目今姑且不究著與二人閱看後封貯內閣若伊等將來不知悔改再有過犯將此取出一併從重處分欽此

所奉

硃筆上諭并吳士功原摺張中堂封交侍讀定長收貯內閣

1742 乾隆六年三月二十七日內閣奉

上諭據著湖廣總督那蘇圖奏稱臣於上年十二月到任後有山東江南等省流民稟請賑恤查乾隆四年山東沂州等處被災江南亦有歉收之虞所有流移到楚之窮民俱已賑恤安頓至于乾隆五年山東江南等省並未被災何至有飢民流至楚省者隨諭布政使確查具報旋據查覆外省飢民到楚者共計五十餘戶內中實係貧苦者不過數戶其餘或有先經到楚資送回籍復行潛來者或有年力少壯儘可自謀生計者或有出外多年積有餘資堪自經營者或本有棲止手藝可自食其力者均與賑恤資送之例不符祇因楚省曾有留養飢民之例伊等妄希賑恤未便任其冒濫使各省游惰之民間風效尤而至應各聽

其自便但武昌漢陽二府乃五方雜處之地若漫無稽查

則此等之民行踪莫定或生事端已飭各該縣查明如有情願在楚營生者即於烟戶冊尾附編研零戶後俾該地保甲就近稽查以防滋事有自願回籍者即諭令各回本籍等語養贍飢民乃國家恤災濟困之恩澤若使游蕩之人得以借名冒濫則無知愚昧將以愉情為得計而荒其本業者不少矣那蘇圖所辦是著通行各省督撫知之如有與此相類者著照依辦理欽此

1743 乾隆六年三月二十八日內閣奉

上諭科場懷挾之弊例禁甚嚴今鄉試在通聞得外間不肖士子故智復萌預先賃情善寫細字之人抄錄文藝為入場夾帶之具若不嚴行禁止則僥倖獲售者必多而真才轉至黜落於掄才大典甚有關係著步軍統領五城御史等必須嚴加搜檢不可靈應故事臨期朕或另遣人看視倘有寬縱疎漏之弊必將該管官員從重議處欽此

1744 乾隆六年三月二十九日內閣奉

上諭劉元錫王廷琬夏力恕任弘業蔡時豫著吏部行文調來引見欽此

1745 乾隆六年三月二十九日內閣奉

上諭

太祖

太宗

世祖

聖祖

皇考實錄實訓朕已敬謹捧閱一週著再按次進呈朕循環覽

誦用展景慕紹述之悃忱欽此

1746 乾隆六年三月二十九日奉

旨仲永擅奏奏大學士等弔真俞姓之事經王大臣等查訊

明白全屬子虛其捏造之說出於于枋伊已自認與大學

士等毫無干涉趙國麟被誘之處已明著照舊供職不必

以解退陳請該部知道欽此

大學士題 奏摺

1747 乾隆六年四月初一日奉

旨雍正七年以前之

上諭從前已經頒賞臣工今將雍正八年以後之

上諭刊刻告竣其應賞之官員著內閣查例開列職名具奏將

新刻之書頒賞欽此

1748 乾隆六年四月初三日內閣

上諭據福建布政使喬學尹奏稱父年已屆八旬迎養在署  
不服閩省水土懇請調補隣近省分以遂私情等語著將  
嚴瑞龍調補福建布政使喬學尹調補湖北布政使欽此

1749 乾隆六年四月初七日內閣奉

上諭外省之吏治繫於督撫督撫果能清正公明則屬員咸  
知效法而成大法小廉之治朕御極以來訓諭督撫者屢  
矣其間能體朕心者固不乏人而持躬不謹致貽愆尤者  
亦未嘗無之細察其故固由於本人之居心不正恭守不  
堅亦由於信用家人為其所愚日積月深遂成尾大不掉  
之患蓋家人本係至屬極劣之人識見生來卑鄙心性又  
復貪污日以小忠小信要結主心及至用為堂官凡文武  
官吏謁見稟事者藉其先容賴其傳達與之分庭抗禮視  
若朋儕若輩遂虛張聲勢竊弄威柄甚且導主營私臨以  
不義彼得從中舞弊挾制要求難欲踈遠之而不可得吏  
有賈送奏摺之人經過本省驛站而不肖州縣希圖探聽  
信息往往餽送盤費什物得其歡心其有不能應付周旋

者則借端需索歸向主人橫加詭謗奸蠹種種不可悉數  
是以我

皇考洞悉其弊嚴降諭旨將堂官及家人丁出入生事擾累屬員  
之輩永行禁止無如日久漸弛頗有仍蹈前轍者用是再  
頒諭旨通行訓飭嗣後各督撫等如有復用堂官或差遣  
家人出入在所屬地方需索生事若經朕查出或御史叅  
奏必從重議處決不寬貸此亦澄清吏治之一端毋得玩  
忽欽此

1750 乾隆六年四月初十日內閣奉

旨許仕威著往陝西交與總督尹繼善遇有總兵官缺題補  
欽此

1751 乾隆六年四月十四日內閣奉

上諭馬爾泰現丁母憂廣東廣西總督印務著慶復前往署  
理雲南總督印務著雲南巡撫張允隨署理欽此

1752 乾隆六年四月十四日內閣奉

上諭喬學尹著實授湖北布政使欽此

1753 乾隆六年四月十五日內閣奉

上諭八旗記名人員內看來不無人材可用者著大學士等  
傳齊考試或能詩文或能繙譯各就所長不拘一格考試  
後分別等次進呈朕覽欽此

1754 乾隆六年四月十五日內閣奉

上諭殿陛韶樂音律與樂章有未協之處典禮攸關尚須審  
定著大學士禮部會同內務府詳酌妥擬具奏欽此

1755 乾隆六年四月十八日內閣奉

上諭查康熙四十六年經鎮海將軍馬三奇奏請借給京口  
駐防兵丁帑銀四萬五千兩以資生理按月一分起息於  
月餉內扣除至康熙五十八年經何天培奏請以餘利銀  
九萬一千九十兩作為帑本照廣善庫之例以五釐起息  
奉

旨允行在案至乾隆元年朕又降旨嗣後免息銀立限二十  
年照數扣還原項今又數年矣尚有未扣完銀六萬七千  
四百九十九兩六錢朕思此項銀兩歷年已久兵丁多有更  
換若仍按月扣除應領之餉未免用度拮据良可軫念著

將未完銀兩全行豁免該部可即行文將軍王斌等宣朕此旨通行曉諭務令兵丁等均需實惠以副朕優恤戎行之至意欽此

1756 乾隆六年四月十九日內閣奉

上諭前因貴州總督張廣泗奏稱原任雲南迤東道王廷琬才具明晰辦事努力因稍欠謹飭是以前在雲南管理銅務致被叅劾等語曾降旨調未引見今聞王廷琬係貪劣之員前經部議有永不叙用字樣著將原案查明具奏欽此

1757 乾隆六年四月二十一日內閣奉

上諭舒赫德所辦事務甚多繕書房之事著交與內閣侍讀學士德通管理欽此

1758 乾隆六年四月二十二日內閣奉

上諭前貴州總督張廣泗在京奏薦原任雲南迤東道王廷琬朕隨降旨令吏部調未引見昨聞得王廷琬當日係被叅貪劣之員前經部議有永不叙用字樣特令查取原案具奏今查得王廷琬任內多收耗銅入已律應治罪援赦

寬免係貪官永不叙用夫各省督撫保題屬員乃眾所共知自不敢有所假借至密行奏薦則惟朕獨知若不其難其慎則開倖進之門矣張廣泗將永不叙用之貪官保奏縱其才有可用亦非以人事君之意著嚴行申飭王廷琬不准引見欽此

1759 乾隆六年四月二十八日內閣奉

上諭署廣西巡撫楊錫斌奏稱黔省黎平府屬逆苗不法株官兵活擒苗人供稱有廣西七寨與黔苗互相勾結又據差往查探兵後稟稱探得首逆石金元係廣西人帶領大羅山強人百餘名截匿弄頂山內與諸寨暗結生事查石金元係義寧庖田寨有名惡苗上年曾開單行知軍前在事文武官弁設法擒拿據軍前文武官弁報稱九月二十三日在麻隴山菁將石金元用鎗打傷斬首級并取具各苗頭並無假捏甘結申報在案今又有石金元其人則從前報斬石金元之案或係假捏或係漏網餘孽竄入滇境復行生事均未可定等語從末苗寨要犯常有已報身死而逃匿他處未幾復行敗露者如廣西之石金元即目前顯著者矣此皆在事之官弁等辦理草率希圖了事以致匪類漏網仍為地方之害此處甚有關係著管理苗疆

之督撫提鎮等嚴飭領兵官弁於勒捕惡逆時務將正犯擒獲毋據假捏之報文俾兇頑得以免脫并於各交界地方易於竄匿之處嚴密稽查不得彼此推諉養奸貽患倘先期不慎日後發覺責有攸歸欽此

1760 乾隆六年四月二十八日內閣奉

旨蘇州巡撫徐士林現在患病著太醫院派好太醫一員馳驛前往診視欽此

1761 乾隆六年五月初一日內閣奉

上諭國家愛養黎元莫先於輕徭薄賦朕御極以來加惠閭閻凡所以厚其生計而除其弊端者無不留心體察次第舉行近聞各州縣徵糧一事尚有巧取累民之虞每至開徵之際設立派單將花戶姓名及應完條銀數目開列單內散給鄉民原使鄉民易知得以照數完納前人立法本善而無如奸書蠹役日久弊生視各戶銀數之多寡於額種之外或多開數錢至數分不等鄉民多不識字且自知種額者甚少既見為官府所開遂爾照數完納即有自能核算者又以浮開為數無幾不肯赴官控告結怨吏胥且恐匍匐公庭虞時失業往往隱忍不言勉強輸納其多收

銀兩或係書役先將別戶錢糧侵收那用而以此彌補其

數或通賄錢糧正額業經報完而於捲尾之時兜收入己更有不肖有司暗中依分以飽私橐其申送上司冊籍則仍是按額造報並無浮多至於一州縣派單之多動以萬計而上司難以稽查無從發覺其為民間之害固不減於重耗也朕聞此弊各省有之而江浙為尤甚用是特頒此旨通行曉諭是在各省督撫仰體朕心時加訪察如有仍蹈此弊者即行嚴叅不稍寬貸則官吏不得假公營私而小民共受其惠矣欽此

1762 乾隆六年五月初七日內閣奉

上諭余棟不必在上書房行走欽此

1763 乾隆六年五月初七日內閣奉

上諭巡捕三營兵丁向未給有生息銀兩查步軍統領衙門有入官房租一項除歷年公用外現存銀一萬餘兩著以九千兩賞給巡捕三營生息以為惠濟兵丁之用其如何派員經管著步軍統領舒赫德酌量辦理欽此

1764

乾隆六年五月初七日內閣奉

上諭雲南總督慶復已命往廣東著理兩廣總督事務伊在滇省奏明承辦之事如開金江河道以利濟滇蜀兩省派撥兵丁以防範安南邊境開墾嘉大路之荒地以增農田開挖姚安沙地之滷源以增鹽勸種種善盡皆係有關地方有裨民生之事現在經理尚未就緒慶復既經調任署督張允隨自當接辦著慶復與張允隨詳細講論一一交代張允隨當念此係地方公務不可以係前人奏辦之件稍存推諉之念視慶復所奏之事即同己奏慶復所委之人即同己委無分彼此無論前後方不失同寅協恭體國利民之誼若果事有難行必須變通者則亦不可瞻顧以致遲就欽此

1765

乾隆六年五月初十日內閣奉

上諭知府一官承上接下為州縣之表率誠親民最要之職也蓋小民之休戚惟州縣知之最周而州縣之賢否亦惟知府知之最悉知府精明諸練即庸常之州縣亦存奮勵之心知府闒茸無能即自愛之州縣亦敢玩弛之漸是以雍正六年

皇考特頒諭旨令各省督撫甄別所屬知府以昭懲勸今各省

1766

乾隆六年五月初十日內閣奉

郡守中未必無庸碌衰邁之員著該督撫秉公甄別如有年老龍鍾者即應勒令休致或才具不勝知府方面之任尚可內用部屬外用同知通判等官者亦分別具奏與年老之員一同送部引見請旨庶守令相因整理而於吏治民生大有裨益該部可傳諭各省督撫知之欽此

上諭從來誣告越訴最為良民之害蓋一州一縣之內必有一二狡黠之徒以殷實之家為可擾稍不遂意輒尋釁與訟且捏造謠言拖累株連以洩私忿更或未控州縣即控道府未控道府即控院司比比若是為有司者審理詞訟既得其虛誑之情而不治以誣告之辜為大吏者濫准詞訟不思上下之體而但沽肯管事之名于是刁健之人以興訟為得計而告訐成風閭閻不勝其擾累深可痛恨難誣告越訴律有明條而實力奉行者少嗣後州縣審理詞訟凡理屈而駕詞誣控者必按律加等治罪若故行寬縱經該上司查出以罷軟論凡未經在下控告者院司道府不得濫准其業經在下控理復行上控者必其情理近實先將原告窮詰然後准理若發審屬虛誣告與越訴二辜並坐如此庶刁徒共知斂跡而良懦小民均享無事之福

矣其如何酌量定例之處著刑部妥議具奏欽此

1767 乾隆六年五月十一日內閣奉

上諭今歲直隸自春徂夏雨水調勻麥秋甚為豐稔乃數年所罕見者外省督撫亦多以二麥有收奏報朕心深為慰悅即江浙閩楚等省春雨稍多而水畊之鄉莫於秧田有益現在各處禾苗秀發稼價平減將來秋成亦大有可望夫積貯之道必講求於豐年而後可以濟儉歲之用若至儉歲而追悔從前之未曾預籌亦已遲矣今茲禾麥盈疇實屬田家難遇之景象各省應貯穀數自應及時經理買補足額以備緩急但積之於官難倉庫無虧其為數終屬有限惟當於民間有餘之時教以撙節之方使人自為計戶有蓋藏庶幾長保盈寧不致有辜

上天之隆貺夫欲籌積穀之法必先去其耗穀者如踴趨燒鍋等事宜為耗穀人所共知而小民無知止貪目前之利而不計異日之飢饉是在地方有司化導而禁遏之今惟河南趨禁頗嚴直隸山東山西安等省俱未實力奉行販賣流通去路既廣則踴造必多及至此省較耗價昂或官府撥運或商賈私販則彼省之穀亦為之耗此相因之勢有必然者是在各該督撫等共體朕心深思民事有應為

之籌畫者則切加勸諭有應示以嚴禁者則勿視為具文務使

上天之恩賜得以儲蓄為萬民俯仰之資如此則無忝父母斯民之職而有以慰朕宵旰之勤矣欽此

1768 乾隆六年五月十二日內閣奉

上諭江蘇松太海防道員缺著湖廣漢陽府知府鍾昭補授欽此

1769 乾隆六年五月十二日奉

旨河炳安著解任摺內所恭情由交與總督尹繼善秉公審明具奏

1770 乾隆六年五月十五日內閣奉

上諭福建臺灣地方上年秋間缺雨收成較常歉薄聞今春以來米價日漸昂貴小民謀食艱難而納課尤為竭度查臺灣縣自雍正十三年起至乾隆三年未完人丁正雜錢糧餉稅銀共二千二百一十六兩零未完供粟共四萬三千七百一十石零鳳山縣乾隆三年未完人丁正雜錢糧餉稅銀共三百五十六兩零又未完四五六年等年帶徵三



年分被災官莊銀四百三十六兩零未完供粟五千一百四十七石零諸羅縣乾隆元年起至三年未完官莊銀共四百三十九兩零未完供粟共二千六百三十二石零此皆多年舊欠今若責償於儉歲之後民力未免拮据朕心軫念特沛恩膏概行豁免至乾隆四年以後未完銀粟統俟本年十月成熟之後再行徵收庶民無擾力量寬舒海疆百姓共受蠲賦優徵之益該部即遵諭行欽此

1771 乾隆六年五月十五日內閣奉

上諭各省主考回京時例於該省存公銀兩內賞給路費朕念伊等出京時資斧艱難一時無家稱貸著戶部每員先給銀二百兩知會該省於應給路費內扣除欽此

1772 乾隆六年五月十八日內閣奉

上諭湖廣漢陽府知府員缺甚屬緊要著總督那蘇圖巡撫范琛於所屬知府內揀選一員調補其所遺員缺將武昌府同知馬惟德補授若馬惟德能勝漢陽府之任即將馬惟德題補欽此

1773 乾隆六年五月十九日奉

旨盧度瑾著交與慶復以恭將用欽此

1774 乾隆六年五月十九日奉

旨周儀著補授河州鎮總兵官欽此

1775 乾隆六年五月二十六日內閣奉

上諭八旗隨圍官負兵丁應領秋季俸餉已准令於七月內支領以為添補行裝之資朕念各官員兵丁內有指俸借宗人府及旗下資生銀兩者有指俸餉認買官房官地者若仍照例按季按月扣除則所餘無幾恐不敷用著將此次隨圍官員本年秋季應扣俸銀展至壬戌年春季再行起扣兵丁八月分應扣錢糧緩至十月內再行起扣該部該旗即遵諭行欽此

1776 乾隆六年五月二十七日內閣奉

上諭閱浙總督德沛前奏請陛見著准其來京其總督印務著將軍某務暫行署理欽此

1777 乾隆六年五月二十七日內閣奉

上諭承平之時不忘武備乃經國要務近年以來各省營伍整飭者少廢弛者多良緣將弁盡率不力所致今細加訪察各營守備千把等官尚知演習弓馬以圖上進之階及陞任奏進以上率皆耽於安佚騎射荒疎已身如此安望其訓練兵丁整飭營伍此風若不悛改則武備漸不可問矣用是特頒諭旨通行訓飭各該督撫提鎮等務須力為振刷毋得苟且因循且提鎮乃武職領袖必身先習勞講武為偏裨之倡并督率副將以下不時操練躍馬彎弓投石起距使末弁鼓勵士卒奮揚若一二年後積習不除軍容未見改觀朕惟統領大員是問欽此

1778 乾隆六年五月二十七日內閣奉

上諭大小臣工凡有摺奏朕皆詳細覽閱不遺一字遇有差訛必指出令其改正朕日理萬幾尚不肯偏爾疎畧尔等

臣工理宜倍加敬謹以防怠忽之漸乃近見部院奏摺中往往有訛寫之字蓋由堂官辦事不過看稿而繕寫清摺時便未寓目無怪乎承辦司官漫不輕心也即稿已定而重閱奏摺一番既以熟悉其事之原委而亦非甚勞苦之事此尚懶為則何事不懶耶朕每遇摺內一二字之訛不欲將堂官報文部議而諸臣當思奏摺進呈中有訛錯字樣殊非敬君之道况沿習日久屬員胥吏共知堂官不看奏摺倘遇緊要字樣增減一二豈不重滋弊端嗣後各當留心毋蹈故轍欽此

1779 乾隆六年五月二十八日內閣奉

上諭山西地方自石麟為巡撫以來因循舊習吏治廢弛繼以薩哈諒喀爾欽貪縱無忌而各屬浮收濫取之弊更相習為固然如徵收地丁錢糧每兩例加耗羨一錢三分今加至一錢七八分不等更有加至二錢者若如此徵收民何以堪至鄉村編氓有以錢納糧者每兩收大制錢一千三十文就時價合算計一兩加重二錢有餘是耗外又加耗矣小民有限脂膏豈能供官吏無厭豁壑他如需索並店當商陋規及買取貨物任意賒欠或短發價值或勒定官價若累行戶種種積弊不一而足以朕所聞如此在晉

省官吏中豈無潔己自愛之員然積習已久致充成風故貪贖者常多廉潔者常少民生吏治關係匪輕朕特施寬大之恩既往不究自今以後著嚴行禁革務使痛改前非潔已恤民奉公守法巡撫喀爾吉善毋得徒事文告而不實心奉行以致屬員陽奉陰違恬終不改一二年後朕倘有所聞當特遣大臣徹底清查水落石出必將大小官員從重治罪不少寬貸並非不先行誥誡速然絕之以法彼時不得謂朕辦理過刻也欽此

1780

乾隆六年五月二十八日內閣奉

上諭科道職司言路為朝廷耳目之官凡有關於民生利弊之事皆當留心訪察據實上聞即如山西省巡撫石麟之廢弛布政使薩哈克之貪贖各屬浮收重耗甚為民累科道等官每將無干瑣務陳奏朕前而於此等緊要大端並不指實糾參豈果出於不知耶抑明知而不言耶本省之人於本省事務見聞尤切知之必悉如給事中盧秉純即係山西人石麟蒞任甚久薩哈克劣蹟多端盧秉純豈得推為不知而並未一經奏奏何也用是特頒諭旨通行申飭科道等此次訓飭之後各省有聞民生利弊之事俱當

留心訪察一有確據即當指實糾參倘知而不奏責有攸歸至于本省之人明知其事而隱匿不言倘別經發覺朕必將本省之科道議處一二以示警其有假公濟私挾制本省大吏以為自便之計者亦斷難逃朕之洞鑒欽此

1781

乾隆六年五月二十九日內閣奉

上諭德惟善政政在養民以天下之大天時固有不齊地形又復不一雨澤稍愆則高阜之地防旱雨水既足則低窪之地慮淹愆期先事預籌始可有備無患言念及此雖當豐稔之年而朕宵旰憂勤寔不敢暫釋於懷也向來各省報災原有定期若先期題報便不合例朕思按期題報者乃指具本而言至於水旱情形為督撫者察其端倪早為區畫隨時奏則朕可倍加愴省而人事亦得以有備若過拘成例則未免後時矣至于督撫之報災有欲為掩飾不肯奏出實情者亦有奸行其德希冀取悅於地方者惟公正之大臣既不肯匿災以病民亦不肯違道以干譽外此則不能無過不及之失朕痼痼在抱再四思維匪災者使百姓受流離之苦其害甚大違道干譽雖非正理以二者較之究竟此善於彼寧可國家多費帑金斷不可令閭

圖一夫夫所此朕之本念也各省督撫俱當仰體隨時留心以副朕惠鮮懷保之意欽此

1782 乾隆六年六月初一日內閣奉

上諭外省官員事務繁多勢不得不延致幕賓相助為理然其中賢否不一易滋弊端向已屢經申禁但恐日久玩生且聞各衙門幕賓有暗中聯結私通線索者各省不能全無而山東為甚上司幕賓往往借端出外與各官往來款洽事通信息又或薦引親友入於下司之幕講定年規遇事則彼此開照作弊營私高下其手居官者一時不能覺察往往墮其術中及至敗露追悔莫及著通行外省大小官員加意防範嚴密稽查務使各守閭防屏除弊竇如此則可以得幕賓之益而不受其累矣欽此

1783 乾隆六年六月初二日內閣奉

上諭蔡平府屬逆苗不法擾貴州廣西湖廣督撫提鎮等陸續奏報數月以來用兵擒勦軍務業經就緒但為首之石金元吳老四未經拿獲現在搜緝朕覽三省摺奏俱有彼此推諉之意殊非實心任事之道况石金元吳老四均屬苗逆之首犯此時略有疎縱必致貽患於將來可傳諭三省督撫提鎮等著伊等督率官弁加意訪緝此等一二逋逃之苗匪縱有潛藏總不外三省之苗寨豈有官兵實心合力而仍容其免脫之理此次勅諭之後倘尚有要犯漏網或又似從前捏報擒斬石金元故智朕必於該督撫提鎮等是問欽此

1784 乾隆六年六月初三日內閣奉

上諭江蘇巡撫徐士林奏稱現在患病難以辦事且母年八十有餘更欲回家省視情詞懇切著給假數月俾伊既得省親兼可安心調理俟冬月病痊之後即行奏聞仍回江蘇之任其江蘇巡撫印務著安徽巡撫陳大受署理安徽巡撫印務著西安巡撫張楷署理西安巡撫印務著戶部侍郎岱奇前往署理張楷未到任之先安徽巡撫印務著總督楊超曾署理欽此

1785 乾隆六年六月初四日內閣奉

上諭朕此次行圍著履親王和親王大學士鄂爾泰張廷玉在京總理諸務欽此

1786 乾隆六年六月初七日內閣奉

上諭朕向來聞得廣東徵收糧米支給本省兵糧者州縣官折收銀兩每一倉石照時價多收銀六七錢至加倍不等收銀之後另買稻穀碾米給兵則分派富戶米行又照時價短少似此需索扣剋甚屬累民特於乾隆四年六月頒發諭旨令該督撫悉心稽查嚴行禁革今留心訪察廣東徵收糧米之弊并未革除故本色則浮加斛面收折色則高糧價銀以及管倉家人倉書斗級各項陋規合算民間納米每石費至加倍有餘且上司衙門所用食米名曰發價其實繳還種種弊端上下朦混從前奉行不實之咎誠屬難違若非痛加整頓何以除民困於將來著交與巡撫王安圖徹底清查實心辦理務令弊端悉剔苛累永蠲始於地方有益如再有玩忽之虞朕於該撫是問欽此

1787 乾隆六年六月初九日奉

旨郝玉麟准其原品休致欽此

1788 乾隆六年六月初十日內閣奉

上諭戶部侍郎岱奇現署西安巡撫其員缺著三和署理欽此

1789 乾隆六年六月十一日內閣奉

上諭刑部侍郎員缺著劉統勳補授俟服滿之日即速來京供職劉統勳未到任之前仍著周學健署理欽此

1790 乾隆六年六月十三日內閣奉

上諭黎平府屬苗匪竊發軍務已經告竣而為首之石金元等至今尚未拿獲夫苗逆縱有巢穴料亦無多實所賊能至兵豈不能至乎賊能藏兵豈不能追乎總由地連三省彼此推諉貴州之兵弁曰出境非吾事也當問之廣西廣西之兵弁曰出境非吾事也當問之湖廣如此辦理無論隣省之督撫等率多膜視即一接咨移立速調遣而賊則停留智生兵亦緩不濟事亦何怪乎曠日持久而渠魁終

不全獲也當無事之時各省自有疆界原不可越組各有  
專司原不可使權至於地方有事已經用兵則總領大員  
凡賊之所至皆當隨勢乘機親至其地以完勾當在貴州  
者何嘗不可至廣西在廣西者何嘗不可至湖廣只須隣  
省凡所過之軍營兵官并皆聽其調度如有呼應不靈者  
即係隣省督提掣肘亦咎有攸歸此非越俎也非侵權也  
實心體國事者固當如是耳用是特頒諭旨遍諭各邊省  
督撫提鎮等嗣後凡有統領之責者毋得謬分彼此視同  
秦越如果能仰體朕意實力奉行不獨一二苗匪自不難  
尅日成擒縱或更有盜賊之事亦斷無免脫蔓延之慮畛  
域之胥化封疆實攸賴焉思之勉之欽此

1791 乾隆六年六月十四日內閣奉

上諭錢局匠役控告爐頭行賄監督一案屢經戶刑二部審  
理戶部堂官偏於開脫刑部堂官偏於刻求不足以成信  
據藍督立柱洪文瀾抱納俱著解任著和親王大學士鄂  
爾泰尚書訥親來保步軍統領舒赫德會同審理具奏欽  
此

1792 乾隆六年六月十五日內閣奉

上諭前經韓光基奏請錢局工料向給錢文者俱改給銀兩  
後復經戶工二部會奏辦料應給銀兩匠役工價仍請酌  
給錢文今爐頭扣尅行賄之弊即從此生看來以蕪銀兩  
為是且爐頭等知行賄之無益亦可速得此案實情著  
仍照韓光基前奏行欽此

1793 乾隆六年六月十六日內閣奉

上諭浙江巡撫盧焯著解任所有奏奏情節著總督德沛副  
都統汪扎爾逐一查審具奏欽此

1794 乾隆六年六月十七日內閣奉

上諭福建海壇鎮總兵員缺著汀州鎮總兵官黃有才調補  
欽此

1795 乾隆六年六月十七日內閣奉

上諭從來順天鄉試易滋弊端多招物議必須稽查嚴密始  
可期試事肅清今年秋闈適值朕行圍口外誠恐人心玩  
忽諸弊乘間而生深慮朕念如進場之懷挾場內之傳遞

皆向來人所共知且有通曉舉業之人假充膳錄為舉子  
改寬文藝者其他弊端種種難以悉數又聞有應試士子  
於場前結納新進翰林互相標榜遂成奔競鑽營之惡習  
夫國家之所以重士者謂其品行端方足備異日公卿之  
選若苟且僥倖於目前而始進不正貽誤終身尚安望其  
受爵服官克自樹立為朝廷有用之材乎著都察院五城  
御史步軍統領衙門順天府內外廉監試御史嚴行稽查  
凡有闖涉科場情弊者即行嚴拿按律治罪不稍寬貸在  
京之總理事務王大臣亦應不時查察以肅賓興大典副  
朕進士育才之至意欽此

1796 乾隆六年六月十八日內閣奉

上諭山東曹縣知縣王維慈著調取來京引見欽此

1797 乾隆六年六月十八日奉

旨江蘇按察使陳弘謀著賞給唐宋文醇一部明史一部俱

不必裝釘欽此

1798 乾隆六年六月十八日內閣奉

上諭前給事中盧秉純奏大學士趙國麟之摺內有二條

一稱皇上面問趙國麟姓真俞姓之事初則佯為不知再

問則略為傳擯既出之後告之至戚劉藩長自鳴得意又

稱劉藩長休致之後趙國麟告伊王安國未嘗察尔乃係

蔣炳泰爾等語朕恐大學士有贊襄密勿之責不應向親

戚為此等之言是以降旨令劉藩長來京命大學士鄂爾

泰張廷玉徐本尚書訥親來保將伊二人詢問實對逐日

進呈所錄口供其趙國麟在朕前回奏往吊俞姓一節劉

藩長曾向盧秉純言之至佯為不知略為傳擯告之至戚

自鳴得意之蒙乃盧秉純揣摩彼時情狀之詞劉藩長告

知盧秉純者並不如是此處無大闕碍不必深問至趙國

麟告知劉藩長王安國並未恭爾乃蔣炳泰爾之語劉藩

長供稱聞之他人並非聞之趙國麟而盧秉純則堅供不

移此事有無尚在疑似之間但劉藩長乃市井庸人趙國

麟身為大學士既締姻親又曾在朕前奏薦甚屬不合朕

已悉知不必再問至于盧秉純供出劉藩長許多悖謬之

語甚有關係從前盧秉純初聞之時何以不行奏奏及恭

劾趙國麟摺內又無一語及此直至于今劉藩長到京對

質不肯應承趙國麟之說符伊原恭始行供出並將朕名

見之語混入於供詞之內又將朝臣牽引多人幾欲一網打盡而與此案問語俱毫無干涉似此妄亂無賴豈可留於言路處秉純者革職劉藩長係奉旨休致之員而凡遇知交輒探問罷官之故則其不自安分可知亦著革職其悖繆之語若果出於劉藩長之口自當按律定擬倘係盧秉純挾嫌妄供亦當治以誣陷之罪著原問之大臣詳悉審明具奏欽此

1799 乾隆六年六月二十日奉

旨此摺內奏稱額外筆帖式往辦糧餉其議叙之處比現任之員應行分別朕思軍營辦事人員從前用兵之際期滿更替議以應陞即用者所以重軍務示鼓勵也今既已罷兵酌留駐防伊等人員原與尋常差遣無異若仍照舊例議叙則無事之時與有事毫無輕重將來萬一有事又何以示鼓勵是不獨額外筆帖式即凡現任之員所有議叙條例較從前亦應分別其如何酌定之覆著吏部再行詳議具奏揆義仍著前往欽此

吏部奏摺

1800 乾隆六年六月二十一日內閣奉  
上諭雲南提督蔡成貴年力衰老江南提督南天祥年亦就衰俱著以原官致仕欽此

1801 乾隆六年六月二十一日奉

旨據沈世楓奏稱刑部高書來保誠懇有餘而習練不足韓光基優於異順而短於決裁是以近來辦事漸有委靡舛錯之憂等語來保人實可信伊與韓光基二人在刑部辦事亦無大過但沈世楓所奏頗中二人之病人之才智各有短長難以求全責備若因人指摘自知省惕益加奮勉則心志虛公即才幹識力亦將日益精進此聞過而喜所以稱賢也特將原摺發出令諸大臣知之欽此

1802 乾隆六年六月二十二日內閣奉

上諭江南淮安府之山陽清河桃源安東海州及沐陽等處連年遭值水災聞今歲又復被潦朕心深為軫念著該督撫加意賑恤鳳陽府之宿州虹縣等處聞亦被水歉收亦著留心軫恤毋使黎民失所欽此



1803 乾隆六年六月二十二日內閣奉

上諭近觀各省營伍整飭者少廢弛者多固由將弁董率不力亦因提督總兵官等狃於晏安不肯習勞講武且其中不無年老衰邁之人精力已頹而貪戀祿位不堪為戎行之表率為督撫大員者又祇留心於文事而視武備為不急之務其待提鎮等則博和衷之名不肯直陳其短無恆乎日積月累漸成怠惰之風也朕着各督撫中如尹繼善雅爾圖尚屬留心於武事其餘率不免因循嗣後諸臣均當體朕鄭重武備之意時加整頓遇提督總兵官之年邁才庸不能勝任者即行奏聞請旨令其休致毋得姑息容隱致滋貽誤若平時有勞績昭著者不妨據實奏請賞給俸祿以養餘年豈可以折衝禦侮之職任為庸勞養老之地乎如此實心整理庶各省武職大員俱可得人而於軍旅大有裨益矣欽此

1804 乾隆六年六月二十三日內閣奉

上諭朕惟士農工商各有恒業衣食由此而裕教化由此而行惟游惰之民實為閭里之蠹我國家昇平休養生靈滋繁而游惰亦以日眾此等之人性好佚游習成驕恣不畏

刑憲罔恤鄉評酒食流連拳勇是尚黠者為豪為俠柔狡者為詐為姦大凡鄉曲之中其誘民以奢靡沈湎者游惰也誘民以博奕鬪訟者游惰也誘民以作奸犯科者游惰也愚懦無知轉相慕效往往棄本業而從之戕生敗家比比而是甚至如近年逆苗蠢動皆由內地游手奸徒幸災樂禍或啗以財帛或誣以鬼神煽惑頑速近要結蜂屯蟻聚致生事端遂不得不用兵勦捕正孟子所謂無恒產而無恒心放辟邪侈無所不為者朕撫育群黎深念正德厚生之要劬農敷本訓飭不啻再三上年因游惰之民不務生計曾特頒諭旨令各督撫董率該地方官實力稽查多方化導責令父兄族黨嚴加管束不遵訓約者加以懲治邇來留心體訪有司並未實力奉行夫養稂莠者傷禾稼患姦宄者賊善良游惰者姦宄之源也當其游惰而董教之懲戒之使悟而知返則可納於善良若聽其游惰而不早為之所是縱之使為姦宄也父母斯民之義何居現今保甲之法在在舉行稽查甚易為力而一切視為具文置之膜外尚安望其阜財求而興禮讓哉地方有司有不實心整飭化導仍前怠玩者朕必於該督撫是問欽此

1805

乾隆六年六月二十三日大學士鄂爾泰張廷玉徐本

尚書訥親來保奉

上諭從前仲永檀奏大學士趙國麟往奠俞姓之事已經  
 審結之後趙國麟具摺辭職朕降旨慰留伊又覆具奏朕  
 前情加激切語吏瀾翻是伊初次為嘗試之計及見慰留  
 之旨知朕不因此令其去官故為煩瀆之奏以示退讓朕  
 早已洞燭隱微特以待大臣之體亦以已經姑留仍復優  
 詔答之靈秉純前奏亦曾及此可見伊之居心雖妄亂無  
 賴如盧秉純者亦且窺見趙國麟反而自思更有何願立  
 於百僚之上乎盧秉純奏伊之摺朕摘出二事令大臣等  
 詢問一件無大關係一件尚在疑似之間朕已從寬不問  
 至趙國麟素講理學且身為大學士與市井庸人劉藩長  
 締結姻親且在朕前保薦朕已明降諭旨較之仲永檀奏  
 奏之事其過孰為重大趙國麟亦知此番之事非引過求  
 退所能了乃轉詣宮門奏請面見朕知其意不過為迫切  
 之詞強為辨訴希冀朕之復留是以不令進見著大學士  
 鄂爾泰張廷玉徐本尚書訥親傳旨諭以大臣之義進退  
 之禮伊自當朝聞命而夕拜疏矣乃遲之數日伊竟無求  
 退之本是其意中以為朕一時雖降責備之旨而稍遲時  
 日或仍復轉念優容以此觀望不前耳朕御極之初趙國

麟以安徽巡撫來京陛見朕名對於易州行在見其人屬  
 老成且素聞伊留心理學是以內陞尚書繼因大學士缺  
 出一時不得其人將伊補授數年以來間或召見與之講  
 論經義凡諭及用人行政伊並未獻可替否有都俞而無  
 吁咈此朕所深知而熟見者祇以人才難得曲為姑容即  
 屢被言官彈劾朕尚保全之而彼不自省悖妄謂朕入其  
 彀中欲逞其伎倆則大謬矣試問舉朝之大臣居心行事  
 何一不在朕洞鑒之中豈獨於趙國麟而有不知哉趙國  
 麟在大學士之任所匡贊者何事所建白者何言為朕所  
 倚任而必不可棄者何具伊清夜捫心能不愧報而尚可  
 忝竊大學士之職乎伊現有福建巡撫任內薦舉劣員王  
 德純一案部議降調朕留中未發尚欲其進退以禮全其  
 始終今既不知自愛不得不明加處分趙國麟著降二級  
 調用留京候補此番處分並非因盧秉純之奏奏特將前  
 後用舍情節一一宣示令諸大臣知之欽此

1806

乾隆六年六月二十三日內閣奉

上諭雲南提督員缺著四川松潘鎮總兵官潘紹周補授欽

此

1807 乾隆六年六月二十四日內閣奉

上諭安徽按察使劉柏著來京候旨其員缺著署廣西按察使蘇昌署理廣西按察使員缺著右江道李錫泰署理欽此

1808 乾隆六年六月二十五日內閣奉

上諭陝西延綏鎮總兵官楊琮年老著以原品休致其員缺著西寧總兵官周起鳳調補西寧總兵員缺著許仕威補授欽此

1809 乾隆六年六月二十六日奉

旨依議盧秉純係奏趙國麟之人趙國麟既經降調今又將盧秉純革職治罪彼不知者必以為原奏之人與被奏之人一同受罰不無疑議殊不知朕之賞罰本屬公平不稍偏向即如仲永檀之恭郭善審明郭善得賊是實比即將郭善寔之於法而嘉獎仲永檀超擢僉都御史今趙國麟自有本身應得之震分並不因盧秉純之奏奏前旨甚為明晰而盧秉純此案之治罪因其與劉藩長廣對峙見劉藩長口供不符伊之原奏心懷忿恨遂於本案之外別牽枝蔓日加過甚之詞無所底止搃欲迫之以不得不認

之勢居心如此甚屬陰險可惡且於公堂之上揮拳肆毆卑污苟賤至此已極此等之人斷不可留於言路且凡為科道者亦必耻與同列其人其事與仲永檀有天淵之別是以將伊革職照例治罪並非因其奏劾趙國麟也且亦並不因伊捏造悖謬之語此不過如雀噪蛙鳴耳豈足介意而加以罪哉朕之待大臣與侍言進退于奪志本大公至正之心合乎天理人情之準可以告之

天地可以告之臣工若以偏私之意卑淺之識妄行揣度則大謬矣特降此旨令大小臣工知之欽此

1810 乾隆六年七月初一日內閣奉

上諭浙江巡撫慶焯已經解任其巡撫印務著總督德沛兼理德沛前請陛見且不必來京俟慶焯之案查審具奏到日朕再降諭旨欽此

1811 乾隆六年七月初一日奉

上諭兵部主事方觀承著補授吏部文選司員外郎欽此

乾隆六年七月初一日內閣奉

上諭近來鄂善等爾欲薩哈克及趙國麟盧焯等案皆朕準情酌理不得不如此辦理者而外人不能深知未必不以為涉於嚴峻即進言進誣諸臣頗有以做法

皇祖崇尚寬大為敦陳者則外人之議論可知矣殊不知

皇祖當日固以寬大為政而如幫貝索顏圖陶和氣噶禮明珠等未嘗不執法懲治今鄂善以大臣而妻賊無恥噶爾欽以學政而賄賣生童此等之人不寔之於法則國法將何所施乎從古帝王以優柔寡斷而致敗者恒有之從未有振綱肅紀生殺予奪大權不移而致敗者也朕自幼讀書研究義理至今來子全書未嘗釋手所謂廓然而大公物來而順應者朕時時體驗實踐躬行凡有人行政弊疏施令之際寔皆本於憂勤出以乾惕自信公正無私不稍偏倚可以對

天地可以告天下臣民諒六年以來在廷諸臣無有不共知共見者試問政治之因革大宜者何事官僚之舉錯失當者何人乎易云元者善之長也書云御眾以寬朕即位之初原降諭旨本欲減去煩苛與眾休息所望諸臣凜遵法紀以成朕之寬大若因此而即於廢弛放縱是諸臣迫朕以不得不嚴之勢非朕之本意也夫栽培傾覆惟人自取或寬或嚴從歸一是或心不可有定者不可無朕豈中無主

乾隆六年七月初二日奉

旨依議從前此案承審時刑部堂官意在刻求戶部堂官意在開脫均非此案之實情夫偏於開脫其弊在於疎縱尚不過失出偏於刻求則監督三人皆將陷於重辟其所關甚大朕是以另派王大臣等秉公研訊期於平允誠慎之也在部臣平日辦事尚不至輕重失宜如此因此案先於事前已各存意見遂致於一偏而不自知倘他事亦皆類

宰忽然而寬忽然而嚴者乎並因物付物惟正斯中以人治人期改而止若有意從寬必且流為市惠姑息而失寬之正則所謂寬者即嚴之因而所為嚴者即寬之害是則有意從寬尚且不可矣而況有意於嚴乎無如大小諸臣私心揣度務為觀望朕於事之當寬者寬之而議事條陳遂相率而起於嚴之一路朕於事之當嚴者嚴之而議事為重以為善於迎合即可以希冀陞遷保全祿位此等陋習不但小臣如此即大臣以或不免九卿中往往自為身家之計而公爾忘私爾忘家者不可多得諸臣底裏何一不在朕洞鑿之中伊等清夜捫心果能無愧乎嗣後當各自警省痛加悔改矢公忠之心去觀望之習以副朕之厚望焉欽此

此朕豈能恣派王大臣審理不獨王大臣故人日不暇給亦豈為政體乎彼時兩部審供因未嘗定案是以不將諸臣加以處分至兩部再審時詢親未嘗入署而以為全屬子虛者海望也在伊有意寬縱固屬不公然尚係自出主見不肯扶同如陳惠華梁詩正周學健等則並無主見漫無可否矣可見寔心任事者之難其人而虛分明決之訓尤不可不時加之意也可傳諭旨申飭之欽此

1814 乾隆六年七月初三日奉

旨

皇太后萬壽表文交內閣敬謹收貯屆期用寶仍由內閣恭進欽此

1815 乾隆六年七月初三日內閣奉

上諭向因閩省漳泉地方民俗剽悍好勇鬪狠而族大丁繁之家往往恃其人力強盛欺壓單寒偶因細故微嫌輒聚眾逞兇目無憲典漳泉大率如此而他府亦復不免蒙我皇考特頒諭旨諄切周詳令該督撫董率有司時加勸導訓誨提撕務期草蕩從忠共成禮讓之俗無如積習難移而官員又奉行不力今朕聞得數事皆出乎理法之外者本年四月間福州府屬之屏南縣典史下鄉徵糧鄉民竟將典

史毆打網縛又興化府屬之仙遊縣告病知縣邵成平赴省領咨有縣民李姓因訟事未結頃其即行離任竟於中途截住肆行辱毆至於漳泉等府民人凡遇爭奪地土集場以及口角等事輒率多人執持器械以決勝負大姓欺凌小姓小姓不甘又復糾集鄉人復仇報怨又廣東之惠潮兩府與閩之漳泉壤地相接江西之寧都一縣與汀州府亦屬毗連悉皆薰染刁風號稱難治數處之人犯罪發覺則互相寬匿彼此為遁逃之藪奸宄叢生州縣等官未免自顧考成曲為隱諱而前任督撫又於屬員專稍欲振作者嗔為多事苟且玩愒視為固然即如前任永春州知州汪廷英於乾隆元年因鄉民兩姓爭鬪前往彈壓竟被先毆其後不過以枷責完結姑息養奸莫此為甚此有關於人心風俗之要務著閩廣及江西督撫時刻留心化導整頓務令循理運善革其非心倘有怙過不悛仍蹈故轍者即分別輕重實之於法不必寬貸如此庶人心知所儆懼而惡俗可以轉移矣欽此

1816 乾隆六年七月初五日奉

旨前署廣西巡撫楊錫綬奏稱桂平縣知縣李孝源係李駿之子為早幼相親恐涉物議請改調廣東補用朕因其從避嫌起見且粵東粵西皆係邊省尚無趨彼避化之私意

是以降旨先行令楊朝鼎陳奏此實一開將來屬員與上司有姻親者皆得援此請調善地恐滋弊端亦屬防微杜漸之道嗣後著照所請如各省上司于屬員中有例不應迴避而欲令迴避者令其奏明請旨赴部銓補欽此

1817

乾隆六年七月初五日内閣奉

上諭外省官員現任之時不許建立生祠創有明禁或去任之後實有功德在人甘棠留誥後地官民建祠以志去思者准其存留外此一禁不准雍正元年欽奉

皇考諭旨甚明蓋此等事多出於下屬獻媚逢迎及地方紳衿與出入公門已攬詞訟之輩倡議糾合假公欺費上以結交官長下以私飽其囊橐而非出於輿論之同然德之好也朕近訪聞外省此風尚未盡革即如郝玉麟履輝之在閩省居官平常並無出來之名譽而建立生祠書院肖像置牌安行崇奉似此濫觴之舉何以示旌揚而昭激勸閩省如此恐他省亦復相同著通行各督撫秉公察核以定去留慎勿瞻徇情面務使群情允協公道長存庶於人心風俗有所裨益欽此

1818

乾隆六年七月初七日内閣奉

上諭從前給事中朱鳳英奏請順天鄉試同考官照會試分省迴避之例北籍祇閱南卷南籍祇閱北卷該部以房官南北籍人數不一分閱之卷多寡不齊難以均派未議准行蓋部議祇將南北二冊較論固難分派若將通場滿漢生員貢監各卷并數合算自無不均之慮且立法必期無間而防範不嚴過周與其留滲漏以滋弊端無寧嚴界限以絕物議嗣後順天鄉試同考官南省人舉令迴避南四卷北省人舉令迴避北四卷邊省人舉令迴避中四卷滿洲漢軍舉令迴避滿字合字卷如此分別可以清弊實而息浮議亦防微杜漸之道也欽此

1819

乾隆六年七月初七日奉

旨王者輔著吏部帶領引見欽此

1820

乾隆六年七月初八日内閣奉

上諭林君陞著調補福建金門鎮總兵官其廣東碭石鎮總兵官員缺著魏國泰調補欽此

1821

乾隆六年七月初八日內閣奉

上諭左都御史劉吳龍著兼管國子監事欽此

1822

乾隆六年七月初八日內閣奉

上諭武備關係緊要前已屢次降諭旨令督撫提鎮等力為

振刷不得苟且因循大約外省營伍整飭者少廢弛者多

而撫標為尤甚蓋巡撫專留心於文事其標下將弁又屬

專轄別無統率之人該撫少不留心則怠惰成風武備漸

不可問矣嗣後各督撫提鎮等當謹遵朕諭以畫職守以

勵戎行如一二年後朕派公正大臣前往驗其優劣如騎

射果否嫻熟軍營果否改觀皆顯而易見難於掩藏者倘

有仍前廢弛之處朕必將該管大臣嚴加處分毋謂朕不

教而罰也又聞各省營伍中仍復多有空糧此弊經我

皇考暨朕屢行禁革而陽奉陰違至今不免若云兵額本多不

必足數即當將冗數減汰若在所必需則一糧必收一兵

之用又豈可以缺額朱子曰兵甲說名不可免善兵者亦

不於此理會縱有一人可用便令其兼數人之料軍中若

無此便不足以使人故朝廷只是擇將以其全數錢米與

之只責其成功不屑屑計較朱子此語蓋指用兵時言也

平居無事時豈可虛冒若此況古人之所謂一人無數人

1823

乾隆六年七月初九日內閣奉

上諭朕惟保天下者求久安長治之規必為根本切要之計

昔人謂持盈守成艱於初業非有德者不安非有法者不

久夫正紀綱修制度可謂有法矣然此特致治之具而未

可為根本之圖則所謂制治未亂保邦未危者必以風俗

人心為之本人心正則風俗淳而朝廷清明國祚久遠者

胥由於此我國家受

天景命統一寰區

皇祖

皇考厚德深仁漸被海宇實皆不世出之君朕以涼德繼承大

統早夜孜孜

天法

祖不敢稍自菲薄歷觀史冊繼世相承愛民勤政若是其積累

深而涵濡久者蓋不教親且內無諛諂之女寵干政之宦

官朝無擅權之貴戚大臣外無擁兵之強藩巨鎮凡歷代

以來所為腹心之害跋扈之奸不但無其人無其事抑且

無幾微之萌禁夫勵精圖治如此立法無弊又如此宜其

教化興行風俗美盛不令而行不禁而止措天下於泰山之安縱不能遠追唐虞亦可以媲美成康矣乃朕澄心靜觀今日之人心風俗居官者以忠厚正直為心而身家利祿之念齷沓未能也為士者以道德文章為重而僥倖冒進之志不萌未能也民昏家給人足漸臻端良朴愚之風未能也兵皆有勇知方足備干城腹心之選未能也由此以觀數十年來惟恃

皇祖

皇考暨於朕躬以一人竭力主持謹操威柄是以大綱得以不亂耳倘或遇庸常之主精神力量不能體萬事而周八荒則國是必致凌替矣此寔朕之隱憂而未嘗輕以語羣工亦終不能默而不以略舉工也今國家當太平無事之日承重熙累洽之後所以立萬年不拔之基者誠不可不及是時而加之意也在朕中夜以思朝乾夕惕不敢恃豐膏而忘治蓋求治之心不敢安小成而緩長慮深謀之意若臨虎尾涉於春冰惟恐墮成業而失事幾然此非朕一人所能獨理也內外諸臣當股肱心膂之任必當以率獲獲却為心屏畏難之見除苟安之習凡吏治之得失人才之賢否民生之休戚皆宜熟籌而切慮夫王道雖無近功而未始無成效唐虞之治方策具在不師其速師其心為之有其漸施之有具力寔非不可舉之政朝廷者風化之原

封疆者方伯連帥之任惟在正其心術固其本根整綱飭紀謹小慎微勿為目前之計而為久遠之圖迎導善氣祇

道

天和我國家無疆惟休實有厚望語云取法乎上僅得乎中陰陽否泰之幾不長則消不進則退斷無中立之勢致唐虞不至尚可冀為成康假令畏難圖便晏然自謂已治已安則禍患即已潛伏不可不懼也雖移風易俗不能責效於旦夕但及今不講則日復一日年復一年狃於便安因循怠忽上何以仰承

謀烈下何以垂裕後昆乎易曰安而不忘危治而不忘亂是以身安而國家可保也我君臣其共勉之欽此

1824 乾隆六年七月初十日奉

旨王岐明係投充莊頭作為開戶固屬不可入於內務府當差亦不可釋鄂渾曾將王岐圍禁年餘其暴戾可知未便仍行給與王岐一戶著賞給怡親王欽此



1825

乾隆六年七月十一日內閣奉

上諭嗣後奉旨考試官員試卷著於彌封姓名下註明某省人欽此

1826

乾隆六年七月十二日內閣奉

上諭周學健現在出差刑部侍郎事務著楊嗣琛暫行兼理俟周學健回京之日仍著伊兼辦欽此

1827

乾隆六年七月十六日奉

旨副奉等分別等次之慶歷年各省咨部具奏者俱不畫一且各該員新舊不一復不時陞調若不定以限期各省督撫勢難遵行嗣後著以五年舉行一次永著為例欽此

1828

乾隆六年七月十六日內閣奉

上諭廣西左江鎮總兵官苗國琮奏稱伊母衰病不服粵西水土著調補浙江處州鎮總兵官左江鎮總兵官員缺緊要著丁士傑調補欽此

1829

乾隆六年七月十六日奉

旨元辰成著解任摺內各款著副都統新任前往蘭州與總督尹繼善會同審明定擬具奏欽此

1830

乾隆六年七月十七日內閣奉

上諭雲南布政使員缺著江西布政司阿蘭泰調補江西布政使員缺著江蘇按察使陳弘謀補授江蘇按察使員缺著山西按察使陳高翔調補山西按察使員缺著雲南驛道張無咎補授所遺員缺著該督撫於候補道員內酌量題補欽此

1831

乾隆六年七月十七日奉

旨太常寺奏銷錢糧著交工部查核嗣後永以為例欽此

1832

乾隆六年七月十八日內閣奉

上諭朕因講武行圍口外其辦理一切政務與在宮中無異在京部旗諸臣理應益加勉勵精勤奉職倘或稍有懈弛不但遲誤公事且重負朕宵旰圖治之本懷可傳諭文武臣工共知之欽此

1833

乾隆六年七月二十日內閣奉

上諭石金元乃廣西逆苗首犯上年粵省軍前曾報在麻隴山箐被鎗打傷斬首級今除省之事復係石金元為首乃知從前之捏報今粵西又報石金元等獲及閱三省奏報之摺察其情節石金元係東條西並伊親屬忽死忽存與伊弟石金喬旋獲旋逸俱屬恍惚無據今廣西巡撫稱石金元并伊母妹妻子在懷遠汎鬼門隘等處似乎活口可憑非同影嚮然恭將劉寬於六月初四日等解黔營者既曰石金元母妹妻子而鬼門隘等獲者又曰石金元母妹妻子在逆犯親屬既重見叠出恐逆犯本身亦不無假借且聞劉寬條令營內說不是石金元是楊老信等語即此觀之石金元之果否等獲及從前所報未結等語即老四果否身死空洞俱尚在疑似之間夫石金元吳老四一日不獲則三省軍務一日不竣若草率完結以致克捷漏網貽害將來可闕甚鉅著張廣泗務將要犯究訊確實不使倖脫如有疎漏掩飾等情將來發覺之日朕惟伊是問欽此

1834

乾隆六年七月二十一日內閣奉

上諭今年秋審朝審照例辦理其情寔人犯著停止勾決欽此

1835

乾隆六年七月二十一日奉

旨依議著交武英殿依仿原式繕寫進呈後再行刊刻欽此

1836

乾隆六年七月二十四日內閣奉

上諭朕巡幸口外辦理一切政務與在京無異惟是七八兩月文武大吏官員引見之期稍遲時日文員內之通判州縣等官武員內之年滿千總并外省送到之補放水手官駝騎校等官俱著交與在京總理事務之王大臣即行驗看令其赴任其中若有年老才庸不勝繁劇之缺者酌量調補隨事奏聞可傳諭該部知之欽此

1837

乾隆六年七月二十五日內閣奉

上諭銜廷璞奏署知州李寶然一摺著封寄直隸總督孫嘉澐令其查明奏欽此

1838

乾隆六年七月二十七日內閣奉

上諭朕初次行圍所有經過州縣前經屢降諭旨不令絲毫擾累但安營除道未免有資民力朕心軫念者將該地方本年應征額賦酌量蠲免統計十分之三以昭朕體恤閭閻之至意欽此

1839

乾隆六年七月三十日內閣奉

上諭古北為畿輔藩籬該提標所屬弁兵素稱勁旅朕今因出口行圍親臨簡閱見隊伍整齊技藝嫻熟洵由統領大員董率有方將弁兵丁勤於練習所致朕甚嘉之提督已賞馬二匹茲再加恩著賞上用緞二疋副將著賞官用緞二疋恭遊以下守備以上官員每員賞給金牌一面千把總每員賞給銀牌二面兵丁每名賞給銀牌一面以示鼓勵至武備以弓矢為要務向來綠旗弁兵亦知留心隊伍而騎射未為長技該提督當不時訓練並將朕旨傳諭各弁兵等知之欽此

1840

乾隆六年七月三十日高書公訥親奉

旨善撲演藝之守備等五員每員加賞官用緞一疋馬步兵丁八十九名每名加賞銀二兩欽此

1841

乾隆六年八月初二日內閣奉

上諭朕觀外任督撫往往於初到任時將地方事務整理數件及到任漸久遂不如前今偶舉一二事言之如始初查拏盜賊一二起以儆匪類繼則以盜息民安居然自許謂所屬並無獲符之擾而屬官里民迎合其意遂有諱盜不肯聲揚者矣又如興行教化一節易托空言而難徵實效若浮慕其名以為風俗已經轉移而遇有作奸犯科之事上下相蒙互相掩飾以致奸民窺伺妄行詭視國法可為有益於風俗者安在乎其他吏治官方鮮不類此朕臨御以來朝乾夕惕保泰持盈深惟古之賢君哲后當豐亨豫大之時憂民永艾圖治彌勤惟恐蹈有初鮮終之失用是寤寐之間不敢幾微少懈各省督撫有封疆之寄為朕所委任當體朕心以為心共加勉始終如一俾志氣常奮而職業益修倘謂蒞任日久已得官民之稱譽朕旨之嘉獎遂改移初念漸就因循則吏治民生復何倚賴豈不有負委任之恩可傳諭各督撫知之欽此

1842

乾隆六年八月初二日奉

旨嗣後請安摺著大學士九卿鑒儀銜併一摺領侍衛內大臣都統前鋒統領護軍統領併一摺上書房南書房併一摺內務府仍舊另摺具奏欽此

1843

乾隆六年八月初四日將軍烏合圖奏聞夷使以天寒馬瘦不能進藏欲行回巢一摺奉

旨前因噶爾丹策凌尊崇黃教為伊父遣人赴藏布施熬茶脫誠懇奏是以朕特施恩准其所請賞賜口糧牲畜派委大員兵弁照看護送今伊所差之人攜帶貨物因講價不定之故停止進藏欲行回巢夫貿易之事係與商民交易各聽其便不可官為強制今伊等不得重價即欲回巢此或係噶爾丹策凌於伊等來時即如此吩咐抑或係伊等之意欲如此行若噶爾丹策凌如此吩咐則噶爾丹策凌即係一無定見之人矣亦耻笑之矣伊等回巢之後再欲赴藏亦不便准行如噶爾丹策凌並未如此吩咐而伊等任意反覆妄行嗣後伊之人等斷不再令赴藏之處伊等如能擔當亦即聽其回巢朕乃天朝大君所降之旨從無更改之理欽此

1844

乾隆六年八月初六日內閣奉

上諭許希孔現充順天主考工部漢堂官辦事無人朕回京之前著大學士陳世倌暫行兼理欽此

1845

乾隆六年八月初八日內閣奉

上諭前因山西吏治廢弛已甚而澤州府知府李肖筠汾州知府張坦讓於喀爾欽賄賈生童案內防範不嚴例應處分是以均照部議革職今據喀爾吉善奏稱李肖筠辦事實心張坦讓老成歷練寔係知府中傑出之員懇請革職留任以觀後效等語朕思山西知府降革者甚多盡行更換新任之人恐於風土民情未能熟悉措置得宜著照所請李肖筠張坦讓俱革職從寬仍留原任伊二人應感朕格外之恩倍加勉勵著喀爾吉善留心訪察如或持身稍有不檢辦事稍有不力即行嚴參治罪若喀爾吉善徇庇不舉經朕別有訪聞必將該撫一併嚴加議處具新補澤州知府李為棟吏部現有潞安府一缺著即將伊補授欽此

乾隆六年八月初九日內閣奉

上諭前因錢局工役給發錢文以致爐頭鑽管滋生事端是以降旨仍給發銀兩今據署侍郎三和奏稱七月給發工價之時匠役藉稱不敷應用四廠俱各停爐隨行詳悉曉諭西南北三廠俱遵照開爐惟東廠內有翻沙匠童光榮唆使諸匠不肯支領工價因磨錢匠張文倉不聽唆使彼此角口童光榮即行兇將張文倉戳傷雖未殞命不法已極現在擊交大興縣審訊等語夫錢局改發銀兩係朕降旨辦理之事其中或有不敷之處管理錢法之堂司官自必妥議奏請該匠役等理宜靜聽乃敢違背朕旨擅自停爐復行兇傷人此較之外省罷市之惡棍情罪更為重大僅交大興縣審訊不過照尋常金及傷人律完結殊不足以蔽辜且以工匠而敢於停爐違兇暗中不無指使之入著將童光榮拿交刑部嚴加審訊從重治罪欽此

乾隆六年八月十一日內閣奉

上諭從來澄清吏治必大法而後小廉督撫司道有統率屬員之責不但賄賂醜遺亟當屏絕即承辦公事亦不可有絲毫沾染稍留指摘之端使州縣藉詞玩縱無所顧忌朕聞得各省督撫司道同駐會城凡一切捧演兵馬考試吏

員行香講約因公勘驗等事需用酒筵鋪設香燭祭品均於首邑取辦甚至葺理衙署修整執事置備器物首邑俱造家人工房在轄承值分而計之為數無多而合一年所費每至盈千累百在上司止領取携之便資費不問從來在屬員但期迎合之工備辦惟恐不及其定首邑之養廉公費原有定數既多賄墊勢不得不派累科斂作獎營私以彌補缺乏而督撫念其捐項多往往曲加體諒姑息優容或且喜其逢迎題陞保薦是非顛倒其流弊有不可勝言者雖係積習相沿亦當嚴行禁止嗣後各省會城遇有應辦事件如寔係公務應於公項開銷若係各衙門私事應自行捐賞辦理不得驟取之首縣首縣亦不得差家人工房在各衙門承值如此則屬吏既得免賄累之苦兼可杜奔競之門為上司者亦可毫無瞻顧秉公察核以盡正己率屬之誼實澄清吏治之要務也可傳諭各督撫等知之欽此

乾隆六年八月十七日內閣奉

上諭吏部尚書楊起曾著回部辦事江南江西總督負缺著那蘇圖補授湖廣總督負缺著孫嘉澂調補直隸總督負缺著高斌調補江南河道總督負缺著完顏偉補授欽此

1849

乾隆六年八月十七日內閣奉

上諭直隸河道必須總督一人兼理事權歸一始於河務民生均有裨益高斌係熟悉河務之人今補授直隸總督河工一切機宜俱著伊相度辦理河道總督顧琮著回京候旨其河員河兵及効力人等應留應去高斌到任之後由心查察次第奏聞効力人等必需由工者應酌定額數以杜冒濫著高斌一併詳議具奏欽此

1850

乾隆六年八月十九日內閣奉

上諭寧古塔將軍吉當阿著來京候旨其員缺著鄂彌達補授兵部侍郎員缺著馬爾恭著理欽此

1851

乾隆六年八月二十一日奉

旨朕躬甚安王大臣好麼承天眷佑賜以豐年上下一體歡樂從事蒙古等亦皆奮勉朕心愈為嘉悅今履曆以行約計九月二十間可以到京可傳諭在京王大臣等知之欽此 請安相上 林批音漢

1852

乾隆六年八月二十二日內閣奉

上諭廣東左翼總兵官章隆著來京引見其員缺著副將焦景璇補授欽此

1853

乾隆六年八月二十七日奉

旨遠所奉孔毓珪著革職摺內各款及沈斯厚受饋曲庇情由著交與侍郎周學健一併嚴審定擬具奏該部知道欽此

1854

乾隆六年八月二十九日內閣奉

上諭山西布政使員缺著湖北按察使吳龍應補授江西布政使員缺著湖南按察使彭家屏補授湖北按察使員缺著江南驛鹽道石去浮補授湖南按察使員缺著貴州貴東道王价補授欽此

1855

乾隆六年八月三十日奉

旨前御史齊斌摺奏在京大小臣工近日進署遲延朕令其指名奏今齊斌奏稱各衙門多係飯後進署至都察院大小官員素多飯時前後進署近來仍然如是等語是在京臣功進署遲早原係照常齊斌此奏不過見朕啟行之

前曾降諭旨令在京臣工覓勉辦事勿致懈弛因而窺伺取巧甚屬可鄙著飭行至齊軾所稱本月二十三日停止秋審都察院大臣俱未進署二十五日又停止秋審御史亦多有不進署者此處著都察院堂官查明回奏欽此

1856

乾隆六年九月初一日內閣奉

上諭巡視河東鹽政著內務府郎中尚琳去欽此

1857

乾隆六年九月初九日內閣奉

上諭福州左翼副都統著沈之仁署理欽此

1858

乾隆六年九月十一日內閣奉

上諭著福建巡撫王恕署廣西巡撫楊錫綬署湖南巡撫許容俱著寬授欽此

1859

乾隆六年九月十二日內閣奉

上諭前據山西巡撫喀爾吉善列款奏河東鹽政白起圖已降旨令該撫嚴審今白起圖奏辨摺內稱喀爾吉善挾私誣奏伊既有此奏自不便專交該撫承審著副都統塞楞額前往山西會同該撫審理如喀爾吉善果有挾私之

處塞楞額自必據寬陳奏如白起圖所辦屬虛著將伊虛捏妄奏情節一併歸入案內從重治罪欽此

1860

乾隆六年九月十三日內閣奉

上諭前降旨著陳弘謀補授甘肅巡撫但陳弘謀自江西赴任甘肅道途甚遠有需時日著調補江西巡撫其甘肅巡撫員缺著黃廷桂補授即行赴任包括著回安徽布政使原任託庸著回京古北口提督員缺著副都統塞楞額補授塞楞額現在奉差著總兵官卞銓暫行護理欽此

1861

乾隆六年九月十三日奉

上諭御史胡定春奏元展成一案總督尹繼善都統新佳現在承審黃廷桂到任後著會同審理欽此

1862

乾隆六年九月十五日內閣奉

上諭朕於十六日至湯山駐蹕數日二十日至圓明園自十六日以後每日照常進本各部院衙門及八旗亦著照常輪班奏事湯山去京不遠有應行引見官員即著帶來引見欽此

1863

乾隆六年九月二十二日內閣奉

上諭浙江寧紹台道王坦著吏部調取來京引見欽此

1864

乾隆六年九月二十二日內閣奉

上諭廣東瓊州府知府員缺著屠用中補授嘉應州知州員缺著于霽補授欽此

1865

乾隆六年九月二十三日內閣奉

上諭德爾敏汪澄所辦江南水利工程大局俱已告竣不過一二處因水大尚未完工德爾敏汪澄俱著回京伊二人經手錢糧令其報銷所有未完工程交與督撫會同總河著委道府相機辦理欽此

1866

乾隆六年九月二十三日內閣奉

上諭陳大受著寔授江蘇巡撫張楷著寔授安徽巡撫欽此

1867

乾隆六年九月二十五日內閣奉

上諭劉統勳著補授都察院左都御史欽此

1868

乾隆六年九月二十五日內閣奉

上諭塞楞額副都統員缺著石麟補授欽此

1869

乾隆六年九月二十五日內閣奉

上諭那蘇圖與安寧乃翁婿至親安寧奏請迴避伊二人皆係朕所深知諒無瞻徇私情之處不必迴避欽此

1870

乾隆六年九月二十五日奉

旨此案甫行定議不便據改但高斌既有此奏著抄錄密寄那蘇圖令其酌量具奏欽此

1871

乾隆六年九月二十七日奉

上諭秋審乃民命攸關輕重出入必須至詳至慎歸於平允今四川秋審冊內凡情寔緩決可矜各案經九卿更定者不一而足朕細閱其案情九卿所改俱屬允當巡撫碩色並不留心鞠勅以致錯誤甚多著該部傳諭申飭欽此



1872

乾隆六年九月二十八日奉

上諭定例文武官員犯侵貪等罪者於限內完贓俱減等發落近來侵貪之案漸多照例減等便可結案此輩既屬貪官除奉款外必有未盡敗露之贓私完贓之後仍得飽其囊橐殊不足以懲儆著尚書訥親來保將乾隆元年以來侵貪各案人員實係貪婪入己情罪較重者秉公查明分別奏聞陸續發往軍臺効力以為贖貨營私者之戒嗣後官員有犯侵貪等案者亦照此辦理欽此

1873

乾隆六年九月二十八日內閣奉

上諭據凌如煥奏伊父年踰八十病患未克痊愈更兼兩目昏盲舉動需人扶掖實有不能遠離之勢懇請將兵部侍郎開缺另補等語凌如煥准其在籍侍奉伊父其兵部侍郎員缺著汪由敦調補禮部侍郎員缺著趙國麟補授欽此

1874

乾隆六年九月二十八日奉

上諭朕行圍回京之後恭讀

太宗皇帝實錄內載昔

太祖時我等開明日出獵即豫為調鷹蹴毬若不令往泣請隨

行今之子弟惟務出外遊行閒居戲樂在昔時無論長幼爭相奮勵皆以行兵出獵為喜爾時僕從甚少人各牧馬披鞍析薪自費如此艱辛尚各為主効力國勢之隆非由此勞瘁而致乎今子弟遇行兵出獵或言妻子有疾或以家事為辭者多矣不思勇往奮發而惟耽戀室家偷安習玩國勢能無衰乎此等流弊有關於滿洲風氣是以蒙

太宗皇帝諄切訓諭朕此次行圍諸王大臣中竟有耽戀室家託故不願隨往者朕已為姑容亦不必明指其人夫行圍出獵既以操演技藝練習勞苦尤足以奮發人之志氣乃滿洲等應行勇往之事若惟事偷安不知愧耻則積習相沿寔於國勢之隆替甚有關係嗣後倘有不知悔改仍蹈前轍者朕斷不輕為寬宥可徧行傳諭諸王大臣及官兵人等知之欽此

此道清無漢

1875

乾隆六年九月二十八日內閣奉

上諭各省進呈鄉試題名錄向例將中縫黏連裁口向外雖係舊式相沿然單篇篇幅頗不便於翻閱今湖廣巡撫許容所進試錄用書本裝法於披覽為宜嗣後各省俱照此式進呈欽此 後俱封寄

1876

乾隆六年九月二十九日內閣奉

上諭監督湖廣荊州稅務著顏料庫員外郎西寧去欽此

1877

乾隆六年九月二十九日內閣奉

上諭能督那蘇圖奏刑宜施道姜邵湘管理刑關稅務肆志貪婪橫征重耗侵蝕帑項愆戾刑罰稅課每年雖正餘銀三萬餘兩而實在約可征五六萬兩除去應用公費每年侵蝕亦幾及一半該關凡遇繳銀之日係四六扣存如征銀一千止持六百兩繳官其四百兩俱為管關員役侵肥等語姜邵湘著革職將原奏各款并摺內有名人犯交湖廣總督孫嘉澐嚴審定擬具奏款摺并發欽此

1878

乾隆六年十月初五日內閣奉

上諭刑部侍郎員缺著戶部侍郎周學健調補戶部侍郎員缺著彭維新補授欽此

1879

乾隆六年十月初五日奉

旨楊嗣琛准給假十個月回籍省視母疾其吏部侍郎不必開缺現今待溥出差在外伊未回京之先吏部侍郎事務著梁詩正暫行兼理欽此

1880

乾隆六年十月初六日內閣奉

上諭浙江昌化縣知縣羅朝彥著調取京引見欽此

1881

乾隆六年十月初八日內閣奉

上諭河南巡撫雅爾圖奏穡陳州府屬之太康縣係繁劇之區知縣員缺緊要請特簡幹練之員補授等語著如所請交吏部於候補知縣人員內揀選數員帶領引見欽此

1882

乾隆六年十月初九日內閣奉

上諭朕聞得廣東崖州及感恩陵水二縣今夏雨水短少迨後雖經得雨而為日已遲播種不能遍及撫臣王安國曾飭州縣官發穀借糶以資接濟而彼地連年歉收其中極貧之民無力借糶者仍苦不能餬口深可軫念著該督撫即飭有司加意賑卹務令窮黎不至失所又瓊州雷州二府屬於本年八月十四日風雨大作吹揭屋瓦其田禾室廬有無損傷之處亦著酌量辦理欽此

1883

乾隆六年十月十二日內閣奉

上諭昨據福建巡撫王恕奏稱今科該省鄉榜第一名邱鵬飛係侯官縣武生以五經中式士論不服朕已降諭旨令邱鵬飛來京覆試今據署總督策楞奏稱該生兄弟三人其弟邱振芳素有文名今歲同填五經入場實係聯號代作等語此素情弊既已確鑿邱鵬飛且不必解京即交與該督撫嚴行覆試並將聯號代作等情逐一審明定擬具奏其邱鵬飛試卷解部到日仍發與該督撫等欽此

1884

乾隆六年十月十二日內閣奉

上諭浙江衢州鎮總兵官康華齡著調取來京引見欽此

1885

乾隆六年十月十二日奉

旨福建試卷解送到部之日著將第一名邱鵬飛三場卷交送內閣欽此

1886

乾隆六年十月十四日內閣奉

上諭律例一書原係提綱挈領立為章程俾刑名衙門有所遵守至于情偽無窮而律條有限原有不能纖悉必到全然該括之勢惟在司刑者體察案情隨事酌量期於無枉

1887

乾隆六年十月十六日內閣奉

無繼則不可一人一事而即欲頻改或法也本朝大清律周詳明倫近年以來又命大臣等斟酌重修朕詳加釐定現在刊刻頒行而新到任之臬司科道等條陳律款者尚屬紛紛至于奉天府府尹吳應枚竟奏請酌改三條夫以已定之憲章欲以一人之臆見妄思變易究竟不能盡民間之情弊而朝更夕改徒有爭於政體嗣後毋得輕議紛更如果所言實屬有當該部亦止可議存檔案不得擅改成書欽此

1888

乾隆六年十月十七日內閣奉

上諭今年上江鳳陽等十六州縣夏秋被水有傷禾稼且彼地土瘠民貧連年被潦朕心深為軫念著將勘寔成災地畝應征漕米漕項照分年帶征之例緩至來歲分兩年帶征其勘未成災之地畝亦被久雨淹浸顆粒細難以交

1889

乾隆六年十月二十一日內閣奉

上諭據貴州總督張廣泗奏稱苗疆素內拿獲之要犯戴老四細加審訊乃實係楊光三因在廣西營盤內有人教供戴老四拿了數月未曾拿獲如今拿著你說是戴老四你但承認便罷若說不是何時纔能結案等語朕思苗人狡獪性成每多捏造詭名希圖免脫全在地方官弁究訊確實以免詐偽今明知其非實而令其妄認以圖結案是明縱要犯使遠颺也辦理此事之廣西督標參將劉寬著交部嚴加議處提督譚行義等不行詳察亦屬不合著飭行欽此

倉准照杖銀之例每石折銀一兩完納至宿州靈璧虹縣

三州縣被災更重且屢年歉收民情艱窘尤當格外施恩毋使輸將竭蹶著將成災地畝應完漕米漕項各照成灾分數與地丁一體豁免其勘不成灾之地畝所有應完漕米漕項亦准緩至來年帶征並將此三州縣及宿州銜勘不成灾之地丁亦准緩至來年支收後開征俾閭閻無追呼之擾官吏無催科之勞得以專心於撫恤該部可即傳諭該督撫遵行欽此

1890

乾隆六年十月二十一日內閣奉

上諭湖廣提督王無黨貴州提督韓勳俱著即赴新任古州鎮總兵官員缺著安籠鎮總兵官王友詢調補安籠鎮總兵官員缺著黔西協副將史載賢補授欽此

1891

乾隆六年十月二十一日內閣奉

上諭貴州銅仁協副將溫朝宰著調取來京引見欽此

1892

乾隆六年十月二十二日內閣奉

上諭據四川提督鄭文煥奏稱建昌鎮臣趙儒重慶鎮臣蘇應選俱年逾七旬精神雖可支持而年力已就衰暮一切辦事待屬似覺優容之意多迅奮之氣少逢迎瞻顧恐致董率有疎在趙儒久任邊陲頗著勞績蘇應選和平直樸人亦効力多年等語似此等年老之總兵官朕因其効力有年邊疆若有勞績而於營伍尚不至於廢弛往往容留任在莫甚奮勉供職並非以折衝禦侮之任為酬庸養老之地也前降諭旨甚明今再頒諭各省督提等留心查察所統總兵官內有年齒雖老而精力未衰能親身操練弁兵整飭營伍者仍准由原任其於營伍雖未至于廢弛而本身精力已衰不能董率操練則當奏聞令其休致至于

人已衰頹，揀演又復懈忽，不免貽誤之矣。即當據實奏  
毋得瞻徇。欽此。

1893

乾隆六年十月二十五日內閣奉

上諭：陳瓚之孫陳子良、蔡世遠之子蔡觀瀾，俱賜為舉人。准  
其一體會試。欽此。

1894

乾隆六年十月二十七日內閣奉

上諭：今年廣東地方有被灾數收之處，瓊州所屬為尤甚。聞  
得署崖州陳士恭一味粉飾，捏報崖州有八分收成。恩縣  
有七分收成。經道府等屢次駁查，而陳士恭押令鄉保  
出具實有六七分收成，不為成灾之甘結。似此匿灾病民  
之員，若不據實糾參，何以使玩視民瘼者知所儆戒。巡撫  
王安國今年辦理荒政，未免失之疎緩。不滿朕意。陳士恭  
著廣東督撫即行查參，交部嚴加議處。朕思各省地方遼  
闊，其水旱情形又復不齊，或本不至成灾，而鄉里刁民借  
端生事，妄希恩澤，地方大小官吏，輒便請謁請賑，好行其  
德，違道干譽，固屬不可。然其為害尚小。倘寔屬灾荒，而諱  
匿不報，以致小民流離失所，弱者轉手溝壑，強者流為盜  
賊，其為害甚大。朕已屢降諭旨，繼之凡事自有中道，過猶  
不及。朕觀各省督撫能得中者甚少，然輕重之間亦當執

籌可將此旨傳諭各省督撫知之欽此

1895

乾隆六年十月二十七日內閣奉

上諭：閩浙總督德沛，甄別浙江知府，摺內奏稱温州府知府  
楊士鑑人品亦屬端謹，但初歷外任，地方事務不能整頓。  
於知府之任不宜，若仍用部屬，猶可造就。今給咨送部引  
見等語。朕思德沛既稱楊士鑑人品端謹，是非不可造就。  
之人，則當教訓勉勵，使之漸次諳練，以徐觀其後。乃以初  
歷外任，遽謂不能整頓，奏請改補部屬，甚屬不合。楊士鑑  
若仍回原任，該部不必帶領引見。且朕前降旨，令各省甄  
別知府者，原係整頓吏治，澄叙官方之意。其治行卓越者，  
則當薦舉，庸劣不職者，則當糾參。而各省督撫往往以一  
二人改調塞責，如此者頗多。因其立言尚不大悖於理，朕  
是以未行申飭。今德沛則以初歷外任為言，夫以部屬陞  
授道府之員，孰非初任初任之人，豈能即著成效。若執此  
課吏，持何人可任方面之寄耶。况朕本意原欲該督撫時  
時留心考察屬吏，上而司道下而州縣，何一不在旌別淑  
慝之中。昨不過偶舉知府以例其餘，今觀各督撫奉到諭  
旨，不過於知府中毛舉無關輕重之事以為改調。張本一  
奏之後，便為遵奉辦理，無愧察吏之職。掌矣。是豈朕之本  
意哉。德沛乃督撫中之優者，尚不能深知朕意，則天下之

錯會者不少矣近來又見督撫奏官甚大都揀拾細事加以重款及至審虛不得不請開復夫國家獎勵人材必須養其廉恥方可望其分猷宣力若既被嚴劾於獲罪受辱之後審明復職而覲然不以為耻則後此之蕩檢踰閔恐不可問若稍知愧怍之人又必志氣頹頹不能復振是豈督撫仰體朝廷培植人材之道此皆不能慎始之故也嗣後若因朕此旨又一味寬宥姑息雖有貪官酷吏亦不悉劾則更蹶矣總之近來臣工辦事率狃於觀望迎合之陋習內而九卿外而督撫朕諄諄開導不啻至再三而此風尚不能改朕於事之應寬者寬一二事而諸臣遂相率而爭趨於寬朕於事之應嚴者嚴一二事而諸臣遂相率而爭趨於嚴自外觀之似有君令臣共風行草偃之象而究竟諸臣之趨承惟謹者多出於自私自利之念不識大體妄為揣度此乃為功名爵位得失趨避之計耳其於朕大公至正因物付物之心何曾符合耶在京部院衙門承辦之人尚多偶有不協察家猶可救正朕亦可面加指示令其更改至外省督撫專任封疆若務為迎合毫無定見為屬吏者又羣然迎合以取悅於上官則公事之顛倒錯者非鮮淺矣九卿督撫皆朕股肱大臣國計民生均有攸賴宜深體朕懷各自省察警惕以襄治理欽此

1896

乾隆六年十一月初三日內閣奉

上諭朕覽大學士會同九卿議奏衍聖公題補各員一本內稱大學士等業於議覆侍郎周學健奏內飭令屏絕夤緣停止劄付則可無流弊等語此處止稱大學士等並未將大學士之名寫出經朕降旨詢問大學士鄂爾泰等自認疎忽請勅部察議并請將原本發出交吏部改正朕已降旨將原本發改大學士等免議矣朕觀近日各部院本章內錯誤遺漏之字樣甚多俱經朕看出諭令更改若不經朕看出則傳抄于外天下之人必疑朕不詳閱本章矣此皆部院大臣不實心辦事之故向後切宜省改又見近日部院本章往往將無關輕重之語叙入本內重見疊出繁雜支離甚覺非體此乃前明陋習奈何仿而行之各部院大臣均當留意欽此

1897

乾隆六年十一月初五日內閣奉

上諭本年十一月二十五日恭遇

皇太后五十萬壽普天同慶伏查康熙四十二年

聖祖仁皇帝五旬大慶曾經賞養八旗年老人等今年朕亦欲

將在京八旗官員及男婦太監等年六十以上者加以恩

賞此等老人於

皇太后自暢春園回宮之日歡瞻仰跪接者不必禁止其年老艱于步履者亦不必勉強所有跪接禮儀及如何分別賞賜之處著戶部內務府大臣會同酌議具奏欽此

1898

乾隆六年十一月初五日和碩莊親王侍郎張照面奉上諭朕因元旦冬至諸大節臨朝樂章句讀與樂音不相比合考其本末樂章則係康熙二十二年所定而博樹考擊之數則又仍明代之舊是以命大學士該部會議重定樂章期合於正恭查康熙五十二年纂修律呂正義重造中和韶樂既經

皇祖聖祖仁皇帝欽定豈得樂章樂音尚乃如此遲延及閱律呂正義凡

宗廟朝廷所用樂章並不在內查樂章開載會典古今圖書集成內亦有之律呂正義一書專為發明樂律而設何以闕如及觀

御製序文則係雍正三年

皇考可撰意此書在

皇祖時尚屬未完之本至雍正三年刻成未暇補足欷歔

皇祖聖意待製造樂器審比樂音之法具有成書之後再行考

定續纂入帙欵否則該館辦理之時未經定議奏請是以尚少樂章字譜也夫大樂與天地同和嘉感神祇茂豫民

壇

物其事甚鉅不可少有闕遺繼志述事責在後人如果有所未備理宜結續前典著莊親王會同張照將此書原委悉心查明具奏朕思臨朝樂章如此則

廟樂章恐亦不相符合者一併查明具奏履親王何國宗當日

與莊親王同辦律呂正義又聞彭維新通於音律俱著一同辦理欽此

1899

乾隆六年十一月初八日奉

旨原任四川巡撫楊秘書著吏部行文調取來京引見欽此

1900

乾隆六年十一月十七日內閣奉

上諭尚書徐元壽人品端方學問優裕踐履篤實言行相符歷事三朝出入禁近小心謹慎數十年如一日謂之完人洵可無愧且壽踰大耋亦廷臣中之罕見者前因年老乞休朕特加尚書銜復加太子少保照現任食俸俾得優游願養以享遐齡今冬在家患病即命太醫加意調治並賜參藥近聞病勢日增漸次沉重朕本欲親行看視因舉行

慶典在即不便前往著大阿哥永璜往視其疾莫其痊可倘至不起著賞銀二千兩辦理後事令和親王大阿哥往奠茶

酒再加贈太傅准入京師賢良祠以示朕優禮耆舊格外加恩之至意欽此

1901

乾隆六年十一月二十一日內閣奉

上諭今年江南下江地方秋間雨水連綿其收穫之穀石顆粒未色自不免稍減除已降旨截留本省漕糧外所有應交官之米不必照往年較論從前原有紅白兼收之例該地方官酌量可收即日收兌至於抵通之後或慮此等米石不能久貯即先發為俸米之用可速傳諭該督撫及漕運倉場總督知之欽此

1902

乾隆六年十一月二十三日內閣奉

上諭各省副將恭將從前曾降諭旨令督撫提鎮會同分別等第五年舉行一次現在陸續咨部著將所保一等之副將恭將俱著送部引見嗣後永著為例欽此

1903

乾隆六年十一月二十八日奉

旨徐湛恩著吏部行文調取來京引見欽此

1904

乾隆六年十一月二十九日內閣奉

上諭廣東布政使員缺著託庸暫行署理接到諭旨即前往赴任不必來京欽此

1905

乾隆六年十一月二十九日內閣奉

上諭古者黨有庠術有序民生八歲入小學十五入大學不獨秀而為士者聲居樂業天下實無不教之民是以教化興而風俗厚後世設立教官專以課士已非先王有教化類之意而近來教職多係衰老庸劣之輩不但不能以道德禮義化導齊民並其課士之責亦不克舉則安用此教官為也朕御極之初念其俸薄不足自贍特命增給乃望其修舉職業助興教化非以廉餼為養老之具各員亦不當以司鐸為養老之官也著該督撫會同學政嚴飭所屬教官務以寔心寔力勸學興文恪盡課士之責具有年力衰頹貪戀祿位及庸劣無能不稱師儒之席者秉公甄別咨部罷斥庶訓迪得人而於造士育材之道庶幾其有裨益各督撫學政仍當時刻由心永久奉行不可苟且塞責也欽此



1906

乾隆六年十一月三十日內閣奉

上諭廣東惠潮嘉道員缺著江蘇糧道姚孔鈞調補江蘇糧道員缺著四川建昌道李學裕調補建昌道員缺著淮徐道姚廷棟調補淮徐道員缺著徐州府知府石杰補授欽此

1907

乾隆六年十二月初二日內閣奉

上諭直隸山東河南三省有老瓜賊一種狠毒異常大為行旅之害雖現在有司官設法查拿而匪黨甚眾行踪詭秘究竟不能盡其根株况今節屆嚴冬正宵小竊發之際尤當加意防範著三省督撫各飭所屬員弁稽察緝緝嚴密周詳不使兇惡之徒一名漏網俾途次永遠寧靜過客可以坦行如再有疎虞該督撫即行嚴參毋得寬縱欽此

1908

乾隆六年十二月初三日內閣奉

上諭各省關稅定有正額而儘收儘解自有贏餘此不過社司權者侵蝕之弊並無有累於商民也但各省年歲之豐歉不同貨物之多寡亦異其盈餘原不能每年畫一近見各關報滿之時如盈餘浮於上年則部中不復置議如減於上年之數則部中即行駁查司權者唯恐部駁必致逐

1910

乾隆六年十二月初四日奉

旨左都御史劉統勳奏大學士張廷玉親族居官人多應請裁抑一摺又奏尚書訥親承辦事務太多並任事過銳一摺朕思二臣若果聲勢赫奕擅作威福則劉統勳必不敢如此陳奏今既有此奏則二臣並無聲勢可以箝制係家可知此國家之祥瑞也朕心轉以為喜且大臣辦公責任繁重原不能免人之指摘即伊等辦事亦豈能竟無差錯閱過而喜古人所尚朕若臨天下兢兢業業如有能指陳

1909

乾隆六年十二月初四日內閣奉

上諭江南松江府知府員缺著雅爾哈善補授欽此

歲加增年復一年持何所底止苦累商民事有所必然之勢朕恩闕稅盈縮相去本不致懸殊若乙年所報盈餘之數稍不及甲年原可不必駁查若過於短少亦必有情由惟應令督撫確查則地方實在情形自難逃於公論總之查核過嚴則額數日增其害在於眾庶查核稍寬則司權侵蝕其損在於國帑此中輕重固有權衡况清庶之吏斷不肯侵帑肥家而不顧行止者終必敗露亦斷無安享無事之理海保單豈非其明驗耶其如何定例之處著大學士會同該部詳議具奏欽此

闕失者未嘗不嘉納之大臣為衆所觀瞻見人直陳已過  
唯當深加警惕所謂有則改之無則加勉若有幾微芥蒂  
於胸臆間則非大臣之度矣大學士張廷玉親族人衆因  
而登任籍者亦多此國家運使然其親族子弟等或有  
矜肆之念為上司者或有瞻顧之情則非大學士所能料  
及也今一經查議人人皆知謹飭檢點轉於大學士張廷  
玉有益劉統勳所請裁抑之處者該部查議具奏至訥親  
身為尚書若於本部之事稍涉推諉不肯擔當則摸稜成  
習公事何由辦理但所辦之事其中未協之處亦所不免  
况朕時加教誨戒其自滿自足年來已知恪遵朕訓矣今  
見此奏益當由心自勉至于職掌太多如有可減之處候  
朕酌量降旨近來奏大臣者每多過當殊不知旁觀責  
人則易而親身任事則難今之指摘大臣者若任用至此  
地位正恐未必能及也朕之為君固不逮堯舜諸臣亦遠  
遜皋夔稷契若責諸臣以不如皋夔稷契諸臣其奚辭然  
朕自揣不能為堯舜又安可徒責諸臣乎但我君臣又豈  
可因不能為堯舜皋夔稷契遂不加勉乎是自棄也然以  
今日之勢論之若有擅權營私者朕必洞照隱微斷無不  
能覺察而陷於不知之理至于彈劾大臣有關國體此等  
奏摺若不發出宵小無知者必且以忝大臣為倖進之階  
其為害於人心風俗寔非淺鮮是以將二摺發出並將朕

意曉諭衆人知之欽此

1911

乾隆六年十二月初五日內閣奉

上諭今年更換各省學政凡應開列出差人員著該部傳齊  
擇日於保和殿考試其不願與試者亦聽其意欽此

1912

乾隆六年十二月初七日內閣奉

上諭浙江今年截由漕糧十八萬石又該督撫等以杭湖二  
府被水災田題請蠲免漕糧現交部議將未糧艘停運者  
必多向未定例每遇減運之年運丁月糧支給一半停給  
一半今浙省停運既多恐一半月糧運丁不足養贍家口  
著於停給項內再減半給與此係格外加恩後不為例該  
部可即明晰行文諭令該督撫知之欽此

1913

乾隆六年十二月初八日內閣奉

上諭前降旨將姚廷棟調補四川建昌道石杰補授江南淮  
徐道今據高斌奏稱姚廷棟諳練河務著仍為淮徐道其  
建昌道員缺著石杰補授欽此

1914

乾隆六年十二月初八日奉  
旨編修觀保著在南書房行走欽此

1915

乾隆六年十二月初九日內閣奉  
旨光祿寺卿員缺著岳瀟補授欽此

1916

乾隆六年十二月十一日內閣奉  
上諭江南淮徐等屬地方今年被災歉收朕已諭令該督撫  
加意賑卹無使窮民失所今聞江浦六合海州沐陽清河  
桃源安東銅山沛縣宿遷此十州縣民情甚為艱窘而其  
中江浦六合海州沐陽為尤甚此處飢民明歲開春之時  
非賑無以餬口著將此四州縣極貧飢民從未年正月  
起至二月止加賑兩個月次貧者加賑一個月其清河桃源  
安東銅山沛縣宿遷六縣將極貧飢民加賑兩個月該督  
撫可督率有司實力奉行務令小民均沾惠惠該部即遵  
諭行欽此

1917

乾隆六年十二月十四日內閣奉  
上諭今歲夏間臺灣地方因米價昂貴曾借撥潮州倉穀六  
萬石運臺接濟平糶俟閩省秋成豐足買穀還粵朕聞閩

省目今穀價仍昂尚需購買於隣省若再買運還粵恐一  
時艱於採買著將借撥潮州倉穀六萬石免其買運還粵  
其平糶穀價即由閩買穀以備倉儲至潮屬因借撥閩省  
所缺穀數著將該處收捐之項照數補足欽此

1918

乾隆六年十二月十九日內閣奉  
上諭提督直隸學政著林令旭去提督江蘇學政著劉藻去  
提督安徽學政著葛壽去提督浙江學政著彭啟豐去提  
督山東學政著李治運去提督河南學政著林枝春去提  
督福建學政著吳華孫去提督廣東學政著梁文山  
去提督廣東學政著金洪銓去提督雲南學政著楊  
廷棟去提督貴州學政著佟係去欽此

1919

乾隆六年十二月二十日內閣奉  
上諭浙江巡撫員缺著常安補授漕運總督員缺著顧琮補  
授顧琮到任後常安再赴浙江之任常安到任後德沛來  
京陛見欽此

1920

乾隆六年十二月二十日奉  
旨查勘浙江海塘著劉統勳去會同總督德沛新任巡撫常  
安詳議具奏德沛俟此案定議之後再起身來京欽此

1921 乾隆七年正月初二日內閣奉

上諭史貽直著補授吏部尚書兵部尚書員缺著任  
蘭枝調補禮部尚書員缺著趙國麟補授欽此

1922 乾隆七年正月初四日內閣奉

上諭向來旗員子弟自幼隨任在外年至十八歲者  
例應來京若有欲留任所協辦家務者准替換代  
為題請聽候部議其新授外任之員子弟在京長  
養年過十八歲以上者非奉特旨不得隨往此舊  
例也朕思旗員子弟不許擅隨任所者一則恐在  
地方滋事一則留京以備該旗當差如外任旗員  
能嚴加約束為替撫者又不時稽查則皆知守分  
循理可毋慮其多事至該旗佐領若本有可以當  
差之人而父兄外任者將子弟帶往則本人既可  
省兩處之食用該佐領閒散之人又得當差支領  
錢糧以資養贍洵為兩便之道嗣後外任旗員子  
弟年至十八歲以上者在外仍令該替撫題請在

內著呈明該都統查奏俱准其隨任其不願隨任  
者亦聽之若隨任之後或出署交遊及干預地方  
之事著該替撫即行查奏從重議處欽此

1923 乾隆七年正月十一日奉

上諭考定樂章訂正律呂欲以垂之永久非祇用之  
一時也爾等因萬壽節樂章兩議請旨朕思黃鐘  
為聲氣之元同於穆之運帝王誕生昊天有成命  
萬壽節以黃鐘為宮俾人君聞樂做心思保明於  
夙夜義甚深遠不必因朕誕辰在八月而以南呂  
為宮已降旨准履親王所議行矣朕又思朝會之  
樂法天之運旋相為宮是以萬壽節不妨仍用黃  
鐘若云朝廷大典必當用黃鐘則編鐘之內必有  
不用之鐘反墮於啞鐘之謂矣且此鐘律非朝廷  
之上孰敢用之似不必拘于黃鐘之說也爾等又  
議稱

皇太后樂應用大呂夫大呂者即黃鐘之呂也朕萬壽

節用黃鐘律而

皇太后萬壽節用黃鐘之呂似猶未安况以律呂相生

次第言之一黃鐘二林鐘三太簇四南呂今既遵

古三統之說以其序為尊卑用黃鐘尊

上帝用林鐘尊

后土用太簇尊

宗廟而議

皇太后樂用大呂大呂之序在南呂之後爾等既議皇

后樂用南呂是皇后樂先於

皇太后也尤為未協禮記帝日后月之義固不易之經

皇太后母后也此古今之通稱似亦宜用南呂為宮朕

意如此爾等悉心詳議畫一具奏欽此

1924 乾隆七年正月十七日奉

旨這所恭也承聖奇書俱著革職其侵盜稅銀朋比

作奸各款交與該撫嚴審定擬勒追具奏該部知

道欽此

1925 乾隆七年正月十八日內閣奉

上諭盛京刑部侍郎吳拜因伊母年老懇請留京侍

養著准其所請盛京刑部侍郎員缺著兆憲補授

其內閣學士員缺即著吳拜調補欽此

1926 乾隆七年正月十八日內閣奉

上諭廣東督標中軍副將張元佐著調取來京引見

欽此

1927 乾隆七年正月二十日內閣奉

上諭廣東廣州府知府員缺甚屬緊要著將惠州府

知府張士璉調補其惠州府缺著將四川成都府

水利同知朱介圭補授欽此

1928 乾隆七年正月二十一日內閣奉

上諭朕於二月初二日恭謁

泰陵一切應行事宜各該衙門備辦欽此

1929 乾隆七年正月二十二日內閣奉

上諭朕前因直隸山東河南三省有老瓜賊一種狠毒異常大為行旅之害是以特頒諭旨令地方官設法查拏近又聞得此種老瓜賊北五省皆有而陝省固原河州等處尤多每于春月空身而出俱走潼關分散各處謀劫及至秋冬各挾贓物而回恐被捕役盤獲多于山僻小徑遠回本籍行踪詭秘變遷百端必須該地方官齊心協力不分疆界互相查拏庶可淨厥根株著尹繼善岱奇黃廷桂等檄飭委員將老瓜賊出入取道之處躡訪查捕務期嚴密周詳毋使漏網欽此

1930 乾隆七年正月二十四日內閣奉

上諭上江鳳穎等屬於上年夏秋連被水災朕已降旨加意賑恤蠲緩各項錢糧並於定例賑濟月分之外將災重地方加展兩月一月不等項聞滁和

二屬及無為州偶爾偏災得賑之後已足支持惟鳳穎泗三屬連年被潦民困為甚今春秋之期尚在五月其加賑至三月止者仍有四月一月之食加賑至二月止者仍有三四個月之食賑至正月止者有三四三個月之食雖該州縣例有平糶倉糧而貧民無錢糶買深可軫念著將鳳穎泗三屬已賑貧民再借與口糧一個月其正月止賑之處去來秋高遠應查明最貧之民借與口糧兩個月至五分災不賑者定倒于春月酌借口糧應同六分災不賑之次貧一體照例酌借以接濟之統於秋成交穀還倉若近處穀石不敷由遠處撥運恐緩不濟急即照上年之例用銀折給俾小民買食大麥林、等雜糧以餬其口該部即速行文江南督撫知之欽此

1931 乾隆七年正月二十四日內閣奉

上諭甘省地處邊徼土瘠民貧朕所加意撫恤頃聞

涼州府屬之武威平番永昌古浪四縣頻歲歉收

上年又被旱災民情甚苦積欠頗多查自雍正十

三年至乾隆四年武威縣未完額糧八萬一百餘

石草六十四萬二千餘東平番縣未完額糧一萬

三千八百餘石草一十九萬二千餘東永昌縣未

完額糧一萬五千二百餘石草九十二萬四千餘

東古浪縣未完額糧四千三百餘石草九萬三百

餘東又西寧府屬之西寧縣自雍正十三年至乾

隆三年未完額糧二萬八千餘石草二十九萬八

千餘東碾伯縣未完額糧一萬一千一百餘石草

一十三萬七千餘米以上六縣皆西陲寒苦之地

雖上年尚屬有收然積歉之餘元氣未復若將新

舊額糧草米于一歲之內合并徵收民力寔為艱

窘著將舊欠之項分作三年帶徵俾閭閻易于輸

將昭朕加惠遠氓之至意欽此

1932 乾隆七年正月二十五日內閣奉

上諭朕此次恭謁

泰陵著怡親王大學士鄂爾泰張廷玉在京總理事務

欽此

1933 乾隆七年正月二十七日奉

旨翰林秦蕙田著在阿哥書房行走欽此

1934 乾隆七年正月二十九日內閣奉

上諭六部纂修則例次第進呈朕皆逐一詳覽其中

中或有更正或有刪除俱照新定之書遵行夫舊

舊例有未協之處理應變通者自應酌量刪改但

從前舊本各衙門仍當存貯以備稽查且數年之

後或又有更易之例亦可將舊例恭訂此亦愛禮

存羊之意也可將此傳諭各部知之毋如現今更

部進呈則例內擬刪官員考校律例一條云內外  
官員各有本任承辦事件律例款項繁多難概責  
以通曉嗣後將官員通曉律例咨明註冊之例刪  
去止智吏攢通曉律例一條朕思律例有闕政治  
即以司官而論若于各部律例未能盡行通曉則  
可若謂本部本司律例茫然不知辦理事件徒委  
之書吏之手有是理乎此條著仍舊例不應刪去  
欽此

1935 乾隆七年正月二十九日內閣奉

上諭從未苗地匪類詭名甚多即如點粵逆苗石金  
元戴老四乃業內之首犯一人而有數名易于勝  
混免脫令經數省合力查拏不遺餘力始得正身  
似此則為從之黨羽借詭名而漏網者恐不少矣  
著傳諭廣西貴州湖南雲南等省之督撫提鎮嗣  
後於始初拿獲苗犯之時將一人幾名詳細訊問  
開寫明白知會辦理此案之隣省員弁不許稍有

隱匿則彼此易于查察庶可杜奸究詭名煽惑之  
伎倆欽此

1936 乾隆七年正月三十日奉

上諭前曾降旨大學士徐本每年賞銀二千兩今徐  
本出差之處甚多每年著再加賞銀二千兩欽此

1937 乾隆七年二月初一日內閣奉

上諭準泰所管鹽政事務繁多其揚州關稅務難以  
兼顧著陳大受於屬員內遴委一員管理欽此

1938 乾隆七年二月初二日內閣奉

上諭劉於義著實授直隸布政使欽此

1939 乾隆七年二月初二日內閣奉

上諭直隸清河道魯之裕年已衰老現患痰症著原  
品休致欽此



1940 乾隆七年二月初四日內閣奉

上諭沿途得雪甚有裨于田功但道路泥濘隨從之  
兵丁拜唐阿校尉太監等衣服未免濡濕著各賞  
一月錢糧欽此

1941 乾隆七年二月初四日內閣奉

上諭山西布政使懸缺著嚴瑞龍調補湖北布政使  
員缺著安圖署理欽此

1942 乾隆七年二月十三日內閣奉

上諭國家定制漢軍人員俱歸併漢缺一體錄用其  
另置有漢軍額缺者雖選<sup>用</sup>之法微有不同亦仍由  
漢缺陞轉惟外官主簿以下等微員舊例不用漢  
軍故員監考職至縣丞而止朕意嗣後漢軍貢監  
應一體准其考取主簿吏目等職銜有願改降各  
項雜職者亦准改降其如何另立班次分別銓選

之處著該部酌議具奏欽此

1943 乾隆七年二月十三日內閣奉

上諭楊瀾著吏部行文調取來京引見欽此

1944 乾隆七年二月十三日內閣奉

上諭國家於科目取士之外又有拔貢一途所以收  
未盡之人材以廣備用之數也我朝教澤涵濡人  
文日盛又復屢開恩科加添中額是以所取進士  
濟多而舉人則日積日累竟有需次多年而  
不得一官者此亦事勢之必然無足怪者朕為缺  
時慮於懷屢籌疏通之策若又添取拔貢以分其  
缺數年一次舉行則人愈多而缺愈少舉人銓選  
更遲無期矣朕思拔貢乃係生員中之優者夫  
既為文學華瞻之青衿則應科舉時自可脫穎而  
出又不專藉選拔以為呈身之路也查漢前選拔  
或十數年一舉或二十年一舉今則六年一舉為

期太近理應酌量變通嗣後著定為十二年選拔  
一年<sup>次</sup>永著為例再者各省應試生員貢監由學臣  
錄送入場向例每舉人一名額取科舉三十名嗣  
後加至一百名亦不為不多矣乃學臣等博寬大  
之名於科舉之外遺才大收一槩錄送且有督撫  
好行其德普收送考者以致文理荒疎之人皆得  
濫冒入場試卷太多不但試官於倉猝之中難於  
別擇即浮薄之士子將以觀光為游戲而不復改  
苦於寒窓於賓興大典甚有關係嗣後學臣各宜  
留心慎重辦理毋得濫溢永著為例欽此

1945 乾隆七年二月十四日內閣奉

上諭湖北宜昌府知府員缺著鶴峯州知州毛峻  
德補授欽此

1946 乾隆七年二月十五日內閣奉  
上諭原任廣東左翼提兵官章隆現在表京引見著  
兵部記著有事簡提兵缺出將章隆請旨欽此

1947 乾隆七年二月十六日內閣奉

上諭朕愛養黎元所食宵衣惟恐薄海內外有一夫  
不獲其所遺徵疲乏之地尤所矜念不惜沛恩施  
于常格之外固已屢降諭旨矣頃思甘肅一省地  
處西陲民貧土瘠前此頻歲軍興嗣後連遭亢旱  
雖去年各屬內有收成稍稔之州縣而民間元氣  
未能遽復加意培養正在此時查自雍正六年  
至上年春夏止各屬民欠借糧積至一百一十四  
萬餘石例應按數徵收以清公項但思小民當積  
困之後若將新舊糧石一時並徵恐因竭蹶輸將  
以致生計窘迫非朕撫綏培養之本懷著將雍正  
六年至十三年借欠之項一槩蠲免其乾隆元年

以後借欠之項從壬戌年為始分作六年帶徵至涼州西寧二府所屬之武威平番永昌古浪西寧碾伯等六縣乃甘省最寒苦之處上年又被旱災深可憫惻昨已降旨將此六縣民欠額糧草束等項分作三年帶徵今既加恩通省將雍正十三年以前舊欠悉行蠲免此六縣民欠雖在雍正十三年以後而彼地民力艱難甚于他邑著將此帶徵之項一併蠲免以昭朕加惠遠氓之至意欽此

1948 乾隆七年二月十六日內閣奉

上諭江南廬鳳宿州淮徐等處上年遭值水災黎民乏食朕已屢降諭旨多方賑濟期蘇閭閻之困近聞百姓餬口無資仍不免于流離艱苦蓋由該地方屢年疊遭飢饉督撫等雖照例辦理尚不能淪洽普周登之衽席當此春耕之時黎民苟失其所秋成何望焉用是深為軫念著刑部侍郎周學健

馳驛前往會同總督那蘇圖巡撫陳大受張楷實心體察和衷籌畫務使朝廷德意得以下達無致一夫失所至于此等地方屢被水患必有致此之由不可忽視即如陂塘溝洫之類亦當加意講求使除其害而收其益著周健<sup>學</sup>一并會同該督撫悉心妥議具奏欽此

1949 乾隆七年二月二十三日奉

旨此三卷著照所擬取中文與主考官酌量名次填寫入榜欽此

1950 乾隆七年二月二十四日內閣奉

上諭畿輔近地上冬少雪今春雖有得雪之處而京師一帶未曾霑足茲當耕種之時待澤孔殷而春霖未降朕心甚為憂惕著禮部太常寺擇日敬謹祈禱以展朕為民請命之忱懷欽此

1951 乾隆七年二月二十四日內閣奉

上諭上年浙江杭州二府屬之仁錢等九州縣田禾被水民力拮据其成災田畝所有應徵漕糧朕已降旨按分蠲免其蠲剩並歛收田畝應完米石部議令於今年照數徵收起運計此時正民間應行完納之期矣朕思田畝既屬歛收所獲自然不足自<sub>上</sub>秋以至今春為時已久即有餘粒業已日食無存若令按期完納勢必買米交倉輸將竭蹶查漕糧早已開免<sub>上</sub>此米尚可緩期著將歛收田畝應徵漕糧并改漕米石緩至今冬徵收起運俾閭閻容輸納以紓民力該部即行文該督撫知之欽此

1952 乾隆七年二月二十六日內閣奉

上諭原任江南六安營參將王<sub>送</sub>繩著該部行文調取行文來京引見欽此

1953 乾隆七年二月二十七日內閣奉

上諭朕聞福建崇安縣有荒缺田額一千二百五十一項零雖載在賦役全書實係坍塌年久並無現在可墾之土雍正七年清查地畝分別限墾知縣陳同善不行查核惟將原額內約舉三分之一捏報可墾田四百一十九項零照例限年墾復雍正十年知縣劉靖亦照三分之一捏報墾復田一百三十九項零雍正十一年又捏報墾復田一百五十項零共加徵銀二千二百三兩零米二百六十石零此項錢糧俱係灑派里戶代完實屬無田浮賦朕心軫念特頒諭旨按數蠲除以免小民之累至從前捏報之歷任知縣及失察之上司理應交部議處姑念事在恩詔以前免其察議欽此

1954 乾隆七年二月二十八日內閣奉

上諭從前廷臣議准張渠買補倉穀一事以本邑之贏餘為本邑之撥補其他州縣不得通融如歲歉穀價昂貴不敷採買准其展限朕思地方積穀原以備民間緩急之需必及時買足方於儲蓄有益若一槩不准通融而無贏餘之州縣或又值歲歉價昂咨部展限則倉儲必至久懸非濟民利用之道也嗣後如該州縣當秋成之時穀價高昂不能買補而該處存倉穀石尚可接濟者照例詳請展限於次年買補倘穀價既屬不敷而貯倉穀石又係不足者准其詳明上司以別州縣穀價之贏餘添補採買為酌盈劑虛挹彼注茲之計該管督撫不時查察一面辦理一面奏聞又從前張渠奏請減價糶穀於成穀之年每一石照市價核減五分米貴之年每一石照市價核減一錢此蓋欲杜奸民賤糶貴糶之弊也但思尋常出陳易新之際自

應遵此例行假若荒歉之歲穀價甚昂止照例減價一錢則窮民得米仍屬艱難不能大展恩澤嗣後著該督撫臨時酌量情形將應減若干之處預行奏聞請旨如有奸民賤糶貴糶之弊嚴拿究治目今江南督撫即同欽差遵照此旨一面辦理一面具奏欽此

1955 朱定元進張爾岐儀禮鄭註句讀一書乾隆七年三月初三日奉

旨此書交與三禮館總裁官閱看如有可採擇者留於該館以備採擇欽此

1956 乾隆七年三月初八日內閣奉

上諭朕御極以來廣開言路虛心納諫其言之是者不次超擢未是者亦曲予優容科道官當體朕心於國家綱紀政事利弊官吏賢否民生休戚一一據實指陳方為無忝厥職乃屬勉盡言者固不乏

人而或者以計為直務自取為名高而朝廷卒不

官不稱職

獲其益者亦復不少此皆用匪其人朕亦不能辭

其咎也夫言官為風紀所關若止為身謀則將來

或因以分門樹異或因以植黨營私必至惑人心

而搖國是史冊所垂足為殷鑒古者諫無專官故

進言之路廣三代而下始設官而責之以言然如

馬周陽城之起布衣而為御史其事猶可風也茲

特降諭旨著大學士九卿擇其素所深知其人

骨鯁之氣質樸之風而復明通內外政治者不拘

資格列名封奏朕將量加錄用焉其外而督撫於

各屬員中有深知灼見可脩繩糾之任者亦准列

名封奏欽此

1957 乾隆七年三月初九日內閣奉

上諭福建福州府知府員缺著淡水同知莊年補授

江蘇江寧府知府員缺著刑部郎中官保補授直

隸永平府知府員缺著服滿知府徐景曾補授欽

此

1958 乾隆七年三月初十日內閣奉

上諭朕惟惠養萬民之道以輕徭薄斂為先自御極

以來於蠲租減賦外豁免各省關稅不下百萬又

令將稅課規條刊刻木榜通行曉諭不許額外徵

收宜其商民均沾惠澤行旅各安牧園乃近聞各

關過往商旅尚不能普被恩施怨聲噴噴究其由

來皆因司權之家人胥役巧立名色重賦徵收勒

捐需索弊端百出不飽其欲則逗遛不肯放行大

為行旅之害是國家徒有減稅損上之德而商民

未受減稅益下之惠無知者尚曉曉於稅課之重

所謂不揣其本而齊其末即使再減數百萬額稅用是以往朕知其於商民仍屬無益也夫司權官員一任家人胥役肆橫無忌漫無覺察商旅其何以堪朕思督撫有稽查通省之責凡屬地方利弊何一不當鑒別而關稅弊竇若此朕在京尚有所聞督撫身在本省豈竟一無聞見乎總因視非已事故爾漠不關心耳嗣後著各該督撫嚴行訪察遇有此等弊端立即嚴拿重究如司權官員瞻徇袒護亦即據實奏聞不得視為具文以奉旨之後一奏即可了事務期實力稽查俾商旅永無苦累倘朕再有所聞或被科道知有實據恭奏朕惟該督撫是問欽此

1959 乾隆七年三月十一日內閣奉

上諭江南淮徐等處年來叠被水灾黎民乏食朕屢降諭旨令該督撫加意撫綏昨又特差侍郎周學健前往會同辦理務使貧民不至失所但平糶加

賑俱需米糧若本地倉儲不足何以濟用日今江廣漕船尾幫正在過淮之際著截留七萬石分撥被災各州縣地方其如何減價平糶及動用散賑之處令該督撫欽差侍郎悉心商酌妥協辦理倘從前所報徵民冊籍之外再有困苦不能餬口者亦一體查明賑恤該部即速行文該總漕督撫及欽差侍郎等知之欽此

1960 乾隆七年三月十二日內閣奉

上諭向來直隸山西沿邊副叅等缺准以侍衛章京等員補用原以滿員騎射素優防禦關隘自屬相宜而於綠旗營伍恐未能周知是以止將邊缺補用朕思直隸一省為京畿重地所有營汛均屬緊要若將已任邊關將備滿員之內擇其通曉營務者調補內地以在京滿員補用邊缺則於職守既無貽誤而滿員亦得藉與疏通向來沿邊副叅等

缺以三分補用綠旂以七分補用滿員今內地副  
參等缺應酌以七分補用綠旂以三分補用滿員  
在綠旂將弁原於各省通行陞轉非若滿員之有  
界限分缺無多寔無佔礙之虞而滿員應任邊疆  
留心營伍亦收駕輕就熟之益其如何分缺揀補  
及如何定例題陞之處該部詳悉妥議具奏欽此

1961 乾隆七年三月十三日內閣奉

上諭去年上下兩江及浙江之州縣被水偏災收成  
有歉收之處朕恐民間米糧不足降旨截留三省  
漕糧八十萬石以為備用向來定例漕糧停運之  
年運丁月糧止給一半停給一半朕念運丁等當  
歉收之歲食用艱難已降旨將浙省停給項內再  
減半給與資其養贍江南運丁亦應一體加恩著  
將停給項內照浙例減半賞給以昭特恩後不為  
例該部即遵諭行欽此

1962 乾隆七年三月十三日內閣奉

上諭朝廷定有行取一途原欲州縣內陞使知部務  
部屬外用使知民情且此等人拔置言路亦能通  
達事體有所獻納近來因行取人員陞補無期令  
其在任候陞於單月補用生事究之缺少人多得  
用部屬者甚屬寥寥自應酌量疏通其現在由行  
取在部之司官著該堂官秉公保舉候朕分別簡  
用至行取人員內大率拘謹守分之人多而明通  
幹濟之才少蓋由該督撫止照例將無恭罰者咨  
送即有揀選保舉者亦不過以該省次等州縣塞  
責甚非國家立法之本意嗣後各省督撫當行取  
之時務將有守有為聲名卓越者舉出其有因公  
恭罰者亦准其入選以收得人之效著該部詳悉  
妥議具奏欽此



1963 乾隆七年三月十四日內閣奉

上諭湖北各標鎮協營於雍正九年派調馬兵一千名赴陝出口駐劄涼州隨帶馬一千匹所有曾經支領乾銀以部例折算該扣還一千三百一十三兩此項雖不在豁免之列朕念各兵効力邊陲勞苦可憫且事歷多年其中事故更換者不少奉兵家屬既不可以著追而現在之兵丁所領糧餉又僅每日之食用難以扣抵從前之欠項朕心軫恤著將長支草價銀一千三百一十三兩悉予蠲免俾戎行得沾恩澤該部可即行文該督撫知之欽此

1964 乾隆七年三月十五日內閣奉

上諭河南按察使員缺著廣西蒼梧道儲龍光補授欽此

1965 乾隆七年三月十六日內閣奉

上諭御史沈廷芳奏摺可即寄與那蘇圖陳大受張楷周學健閱看商酌情形辦理欽此

1966 乾隆七年三月十六日內閣奉

上諭數月以來雨澤稀少朕宵旰靡寧虔誠祈禱雖得微雨未為霑足茲前因天時亢旱曾降旨清理刑獄今著刑部將在部各案內有牽連待質者及輕罪內情有可原者或應省釋或應末減會同都察院大理寺悉心詳查妥議具奏至於直隸山東江南三省目下雨暘不均亦著照此例行嗣後各省如遇災青之年著該督撫將清理刑獄之處奏聞請旨欽此

1967 乾隆七年三月十七日奉

旨萬年吉地定於勝水峪其一應工料等物著該部

照例辦理至動土興工日期俟朕詣

陵之使親臨閱視再降諭旨欽此

1968 乾隆七年三月十九日內閣奉

上諭據山東布政使魏之國奏報巡撫朱定元丁母

憂山東巡撫員缺緊要著將原任安徽布政使晏

斯盛補授晏斯盛此時服制將闕俟除服後即速

赴山東新任伊未到任之先巡撫印務著魏定國

護理欽此

1969 乾隆七年三月二十一日奉

旨御史董洞奏稱請停修理墊河一帶行宮以節帑

金而昭聖德等語夫墊河等處行宮乃當年

皇祖巡幸駐蹕之所雍正年間

皇考未經出口行圍是以各處行宮皆置之閒曠然亦

未嘗不略為繕補以免傾圮今朕仰承

祖制欲舉臨邊講武之禮舊日所有行宮酌加修葺此

亦事理之不得不然者我朝土木之工甚少偶有

興作亦皆不煩編戶之差徭不動司農之經費斷

不至於勞民傷財為盛德之累但念人主一心於

土木上多一分即於政治上減一分此理甚明乃

朕時時用以省察者雖修葺不比營造雖難盡廢

其工作有可緩者著該管官此時緩之董洞身為

言官有見即行陳奏意亦可嘉所奏知道了欽此

1970 乾隆七年三月二十一日奉

旨方苞著賞給翰林院侍講品級頂帶准其回籍欽

此

1971 乾隆七年三月二十二日內閣奉

上諭各省常平倉穀每年存七糶三原為出陳易新

亦使青黃不接之時民間得以接濟當尋常無事

之時自然循例辦理若遭值荒歉穀價昂貴小民難於謀食而仍復存七糶三則閭閻得穀幾何大非國家發粟平糶之意矣嗣後凡遇歲歉米貴之年著該督撫卽飭地方官多出倉儲減價平糶務期有濟民食毋得拘泥成例著該部卽行文各省督撫知之欽此

1972 乾隆七年三月二十五日內閣奉

上諭前據河南巡撫推爾圖奏請學臣停帶眷屬以杜弊竇經九卿議准彼時朕降旨如學臣差滿之後復留原任或調別省欲攜帶家眷者著本人自行具奏請旨今思學臣之廉潔貪污視乎其人之自主初不在眷屬之有無如謂携眷卽滋弊竇則外省自替撫藩臬以下又何嘗不携眷屬耶卽使不准携眷而隨任之家人幕客又豈能保其一奉法惟謹耶况父母妻子相隔三年之久不免內顧

之處於情理亦未允協嗣後不必禁止欽此

1973 乾隆七年三月二十六日奉

旨這所恭青阿立著革職其恣意妄為奉官與家人通同婪索各款及摺內有名人犯該撫一併嚴審定擬具奏該部知道欽此

1974 乾隆七年三月二十六日內閣奉

上諭江西吉南贛道員缺著贛州府朱陵補授欽此

1975 乾隆七年三月二十八日內閣奉

上諭蔣溥著暫兼管刑部侍郎事務欽此

1976 乾隆七年三月二十九日內閣奉

上諭侍郎周學健奏摺可卽抄錄寄與河南巡撫推爾圖護理山東巡撫卽務親定閱閱看令其立達查辦欽此

1977 乾隆七年三月三十日內閣奉

上諭朕嘗見各省督撫等奏報查拏盜賊皆稱隣封境上萑苻潛匿搶奪橫行而本省則極安靜並無滋事如江南則指稱山東河東山東南又指稱江南湖廣其他處所報亦往往類此、固由於該督撫有互相推諉之心亦由所屬官員欺誑上司以卸已責而盜賊因得以肆志無所忌憚矣獨不思督撫皆朕簡用大臣當視國事如家事視隣省如本省豈可存此疆彼界之心蹈恕已責人之習此風不改國家何所倚賴伊等又何以副朕之委任耶可即傳諭各督撫知之欽此

1978 乾隆七年四月初二日內閣奉

上諭國家設關權稅定其則例詳其考核凡以崇本抑末載諸會典著為常經由來已久其米豆各項向因商人販賤鬻貴是以照則徵輸第思小民朝

暮夕殮惟穀是賴非他貨物可比關口徵納米稅雖每石所收無幾商人藉口額課勢必高擡價值是取之商者仍出之民也朕御極以來直省關稅屢次加恩減免又恐闕吏額外浮收刊立科條多方訓飭每遇地方歉收天津臨清許野蕪湖等關口商販米艇概給票放行免其土課皆以為民食計也但係特恩間一舉行未能普遍夫以養民之物而權之稅轉以病民非朕已飢已溺之懷也今特降諭旨將直省各關口所有經過米豆應輸額稅悉行寬免永著為例俾米穀流通民食充裕懋遷有無者不得藉以居奇小民升斗之給不至有食貴之虞以昭朕惠恤黎元之至意至各關口徵收則例不一有徵商稅者有徵艇料者有商稅艇料並徵者今既蠲免米稅其艇料一項若不分晰明確著為規條恐致混淆滋弊應如何辦理之處著交該部詳查妥議具奏欽此

1979 乾隆七年四月初四日奉

旨董怡曾題覆到日著訥親提奏原任浙江鹽運司  
運副孔毓鎰遇有派換軍臺効力人員之時將伊  
派往欽此

訥公查奏所奉

諭旨

1980 乾隆七年四月初五日内閣奉

上諭閩浙總督德沛著調補西江總督西江總督那  
蘇圖著調補閩浙總督江南現有賑恤事務德沛  
著即赴新任料理那蘇圖不必來京俟德沛到任  
後著即赴新任欽此

1981 乾隆七年四月初五日内閣奉

上諭今日引見月官內如王華賁王兆鰲俱已年老  
劉歧亦不勝繁劇之任朕已降旨分別改補此皆  
經九卿驗看之員也夫州縣為親民之官若稍從

姑息必致貽誤地方所關匪細向例月選吏部過  
堂後復令九卿驗看者原屬慎重吏治之意如其  
中行止不端等類或一時不能辨別而年老衰庸  
者原可一望而知乃吏部九卿從未舉出是非不  
能知乃出於避嫌知而不言耳蓋視驗看為具文  
故示寬容俾得引見赴任即可了事所謂銜人  
材者何在况庸員赴任之後督撫即見其衰老不  
能辦事亦須試看數月始行題奏而於地方事務  
已貽誤不少矣且該員甫經到任旋被奏回籍往  
返道途資斧拮据於該員亦有何益嗣後務須秉  
公詳加驗看有庸老不勝任者或應勒休或應改  
補教職等官即據實具奏不得仍前因循聊且塞  
責欽此

1982 乾隆七年四月初五日内閣奉

上諭獄必依乎律律本準乎情理之平刑部為執  
法之官辦理案件固當執法而其中情節不一又

當參酌核擬以期歸平允人命至重尤不可不慎也  
朕每於刑部所奏重犯其中稍有一綫可原者或  
降旨從寬末減或交九卿定議皆於法外原情以  
示矜恤但日理萬幾恐披覽之際一時或有未周  
照簽批發雖論法不枉而原情較疎矣嗣後刑部  
進呈本章及秋審各案著大學士等詳閱其中有  
應加覆核者即擬寫雙簽並將情節聲明進呈待  
朕酌量則周密慎重益可副朕哀矜庶獄之至意  
欽此

1983 乾隆七年四月初六日內閣奉

上諭辦理耗羨一事乃當今之切務朕夙夜思維  
無善策是以昨臨軒試士以此發問意諸生濟濟  
或有剴切敷陳可備採擇見諸施行者乃諸貢士  
所對率皆敷衍成文全無當於實事想伊等輩等  
新進未登仕籍於事務不能曉徹此亦無怪其然  
今將此條策問發與九卿翰林科道閱看伊等服

官有年非來自田間者可比可悉心籌畫各行所  
見具摺陳奏候朕裁度若無所見亦不必勉強塞  
責至外省督撫奇重封疆諒已籌畫有素並著各  
據所見具摺奏聞務期毋隱毋諱以副朕集思廣  
益之意欽此

1984 乾隆七年四月初八日奉

上諭據河南巡撫雅爾圖奏稱豫省今春雨澤及時  
二麥暢茂異常四月下旬即可刈獲收成十分豐  
稔等語朕覽之甚為欣慰因思直隸地方今春雨  
澤未為普遍恐二麥未必豐收不能不資藉於隣  
省可傳諭高斌令其酌看本地情形須用接濟與  
否若須接濟或將豫省倉儲運借來直或直隸遣  
官資銀往豫採買應於何時辦理緩急遲早之間  
著高斌與雅爾圖彼此熟商具摺回奏江南淮徐  
鳳穎等處被災之後米糧不敷若有須用二麥之  
慮亦著江南督撫與雅爾圖妥商辦理欽此

1985 乾隆七年四月十二日內閣奉

上諭據兩廣總督慶復奏稱廣西蒼梧道儲龍光有  
母現年八十三歲邊地不能迎養懇請回籍終養  
等語儲龍光已降旨補授河南按察使矣其蒼梧  
道員缺著廣東肇羅道王河調補肇羅道員缺著  
徐大枚署理欽此

1986 乾隆七年四月十二日內閣奉

上諭地方偶遇火災若平日救火器具完備臨時又  
實力搶護原可早為撲滅不至延燒多家雍正六  
年欽奉

皇考世宗憲皇帝諭旨令各省督撫於省會及府城做  
照京城之例置備水鏡鈎簾麻搭之類分貯各門  
令文武官弁派定人役兵丁一遇火警迅速齊集  
搶救不使蔓延並將搶火惡棍查拏從重治罪如  
有司官有赴救不力具報不實者該上司嚴查奏

勅加倍議處其救火器具動用何項銀兩製備不  
得派累民我

皇考為民禦患之諭旨至詳且悉朕御極以來又復再  
三訓飭矣今者各省情形似有視為具文之意且  
器具日久敝壞亦應隨時修整方有濟於實用著  
該部行文各省督撫將軍等務遵

皇考諭旨嚴飭所屬敬謹奉行倘有怠忽慢事者經朕  
訪聞必於該管大臣是問欽此

1987 乾隆七年四月十三日內閣奉

上諭八旗漢軍自沒龍定鼎以來國家休養生息戶  
口日繁其出仕當差者原有俸祿錢糧足資養贍  
第閑散人多生計未免窘迫又因限於成例外任  
人員既不能置產另居而閑散之人外省即有親  
友可依及手藝工作可以別出營生者皆為定例  
所拘不得前往以致袖手坐食困守一隅深堪軫  
念朕思漢軍其功本係漢人有沒龍入關者有定

鼎後投誠入旂者亦有緣罪入旂與夫三藩戶下  
歸入者內務府王公包衣撥出者以及召募之砲  
手逼繼之異姓并隨母因親等類先後歸旂情節  
不一其中惟沒龍人員子孫皆係舊有功勳歷世  
既久自無庸另議更張其餘各項人等或有虛墓  
產業在本籍者或有族黨姻屬在他省者朕意欲  
稍為變通以廣其謀生之路如有願改歸原籍者  
准其與諛蒙民人一例編入保甲有不願改入民  
籍而外省可以居住者不拘道里遠近准其前往  
入籍居住此外如有世職仍許其帶往一體承襲  
其有原籍並無倚賴外省亦難寄居不願出旂仍  
舊當差者聽之所有願改歸民籍與願移居外省  
者毋論京外官兵閑散俱限一年內具呈本管官  
查奏如此屏當原為漢軍人等生齒日多籌久遠  
安全計出自特恩後不為例朕格外施仁原情  
體恤之意並非逐伊等出旂亦非為國家俸餉有

所不給可令八旂漢軍都統等詳悉曉諭仍詢問  
伊等有無情願之處具摺奏聞欽此

1988 乾隆七年四月十六日內閣奏

上諭各省辦理耗羨一事朕恐或有不便於官民之  
處是以於廷對時入於策問之內乃諸生無所敷  
陳甚且有不知耗羨為何事者又降旨詢問九卿  
翰林科道並外省督撫等庶幾合衆論以求一是  
此朕集思廣益之意也諸臣如有所見即當就事  
敷奏待朕採擇如無所見亦不必勉強塞責昨降  
諭旨甚明乃近見諸臣奏對竟有於耗羨一事之  
外旁牽側引以狂瞽之見為無稽之言所答並非  
所問即說到耗羨亦究竟不知原委萬難見諸施  
行甚至如潘乙震之請開捐路斯道之請鑄幣尤  
為荒謬之極方今天下承平海宇寧謐無擾攘之  
兵戈無繁興之土木上而府庫充實下而滿漢安



堵並非財用不足亟須籌畫之時此人所共知者  
在我君臣惟當節制謹度未雨綢繆為持盈保泰  
之計若侈言豫大豐亨而流於奢靡荒縱固非安  
不忘危之道但如諸臣所奏沾沾以國用為言竟  
似國用實有不足不得不沒權計議者此風一開  
將見言利之徒接踵而起其為害甚大豈止有妨  
政體而已不但諸臣不當揣摩及此陳奏紛紜即  
專司錢穀之臣惟應通計出入平準制用亦不當  
託言國計徒以綜核為盡職也數日來無知妄奏  
之輩原當加以處分因係降旨詢問之使言故雖  
乖謬姑沒寬宥此番訓諭之後如再有節外生枝  
悖理傷道者必從重治罪以為妄言者之戒欽此

1989 乾隆七年四月十七日內閣奉

上諭盧焯身係旗員審案已定現經三法司核擬著  
即解京交刑部監禁欽此

此道卷文刑部

1990 乾隆七年四月十八日內閣奉

上諭朕念甘省地瘠民貧前特降旨將民欠借糧自  
雍正六年至十三年者一舉蠲免其乾隆元年以  
後借欠之項從壬戌年為始分作六年帶徵至最寒  
苦之武威平番永昌古浪西寧碾伯等六縣則將  
帶徵之項一併豁免今思民欠借糧內從前有因  
倉糧缺少以銀一兩作糧一石借為籽種口糧之  
需者計自雍正十年至乾隆六年如武威平番永  
昌古浪西寧碾伯等六縣欠銀八萬八百七十三  
兩有奇又蘭華平慶寧夏五府屬之全縣河州靖  
遠隴西會寧通渭鹽茶廳平涼崇信靜寧固原涇

州華亭合水平羅花馬池等處欠銀四萬六千五百四十二兩有奇此項借銀原係以銀作糧即與借糧無異其自雍正十三年以前者既已加恩蠲免其在乾隆元年以後者又分作六年帶徵至武威等六縣又復全予蠲豁此等抵借之銀事同一例著照乾隆元年以後借欠糧石之例從乾隆七年為始分作六年帶徵俾民力愈得寬舒愛國家休養之澤著該部即傳諭該督撫知之欽此

1991 乾隆七年四月二十日內閣奉

上諭庶吉士伊青綬於考試之日夾帶文字著革職交與該部照例治罪欽此

1992 乾隆七年四月二十二日內閣奉

上諭雍正七年川省標鎮協營派往西路駐防官兵內有脫逃兵丁支過草料馬乾蘆菜銀一千六百九十餘兩此項自應著追無可完貸但川省兵丁

非盡土著其脫逃者類皆外來隻身無所顧戀之輩既無產業又無親屬遠窳日久查訊無跡其當日管領之弁員又多更換難以責其追償徒滋營伍之擾著將此項銀兩開恩豁免以息追呼該部即傳諭川省督撫及提臣等知之欽此

1993 乾隆七年四月二十四日內閣奉

上諭包括著調補山東布政使護理巡撫印務速赴新任其員缺著魏定國調補欽此

1994 乾隆七年四月二十四日內閣奉

上諭刑部侍郎鍾保年衰重聽不能辦理部務著以原品休致盛安以都統兼管刑部侍郎事欽此

1995 乾隆七年四月二十四日內閣奉

上諭山東上年有歉收之州縣直隸今春二麥亦未見豐稔恐二省將來有須用米糧接濟之事此時糧船經過山東著即速行文與漕運總督將尾幫漕糧截留十萬石酌量於臨清德州二處分貯備用該部即遵諭行欽此

1996 乾隆七年四月二十四日內閣奉

上諭朕聞山東運河水淺糧艘較往年濡滯沿途起剝甚覺周章看來抵通遲緩未能如期而至朕所聞如此白鍾山及巡漕御史俱未奏聞但稱漕運進行無阻並非實在情形著傳旨詢問白鍾山及巡漕御史等令其明白回奏並將如何辦理之處等畫辦理欽此

1997 乾隆七年四月二十六日內閣奉

上諭八旂為國家根本凡有闕教養之處朕無時不繫於懷著各旂都統副都統等悉心籌畫或有益於生計或有益於風俗者各行所見繕寫交與大學士彙齊之後著大學士會同各都統詳加斟酌擇其果有裨益者公同舉出抑或有益於目前而將來不無流弊抑或初行似屬未便而歷久可漸收其效者一併舉出彙奏候朕採擇施行欽此

1998 乾隆七年四月二十七日內閣奉

上諭刑部尚書劉吳龍患病溢逝朕心深為軫惻著散秩大臣一員帶領侍衛十員往奠茶酒伊平日居官廉謹家道清貧著賞帑銀五百兩為喪事之用欽此

1999 乾隆七年四月二十八日內閣奉

上諭張照著補授刑部尚書具刑部侍郎員缺著趙弘恩補授欽此

2000 乾隆七年五月初一日內閣奉

上諭今年春夏以來畿輔地方除宣化大名二府及古北口外熱河一帶雨澤霑足二麥可望豐收至順天保定永平正定河間天津順德廣平等屬暨易州冀州趙州深州定州等州屬雨水均未霑足普偏麥收分數勢必減少此時農事正忙又值青黃不接之際若仍照例催科恐有妨於力作著將各府州屬新舊應完錢糧一槩暫停徵比俟秋成之後再行徵收該部可即行文直隸總督通行曉諭知之欽此

2001 乾隆七年五月初八日奉

旨朱必增准給假回籍營葬欽此

2002 乾隆七年五月初九日內閣奉

上諭西安按察使圖爾炳阿著調補山東按察使山東按察使陳應正著調補西安按察使欽此

2003 乾隆七年五月十一日內閣奉

上諭江安二省之鳳穎淮徐各屬連歲被荒閭閻積困朕心軫念頻加賑恤又特遣大臣前往察看於常例之外大沛恩膏不使一夫失所至於應徵錢糧有已經蠲免者亦有例應帶徵者朕思災後之後即偶遇有年一時難以驟致豐裕若令完納現年應輸之正供又加以逾年帶徵之積欠小民未免拮据著將江省之清河桃源安東銅山沛縣宿遷蕭縣邳州睢寧徐州海州沭陽安省之宿州靈璧虹縣臨淮懷遠泗州五河十九州縣衛被災

各戶所有乾隆五年以前未完帶徵銀兩統行停  
緩俟各處年歲屢豐民間元氣漸復之後該督撫  
再行酌量定限分年帶徵具奏請旨俾民力寬舒  
漸登康阜以慰朕勤恤災黎之至意至各州縣內  
有未經被災各戶仍照常例辦理該部即行文該  
督撫知之欽此

2004 乾隆七年五月十四日奉

旨前刑部侍郎缺出一時未得其人因趙弘恩才高  
可用其從前被恭之案乃收受舊屬餽遺尚非禁  
贓可比是以將伊補授今胡定奏稱納賄之人不  
應復用趙弘恩雖非婪賂究屬受賄胡定指名恭  
奏亦屬可嘉趙弘恩不必用其刑部侍郎員缺著  
該部另行開列請旨欽此

2005 乾隆七年五月二十二日內閣奉

上諭春夏以來京師雨澤愆期仰望殷切昨十七日  
夜荷蒙

上天降賜甘霖秋成可冀朕心為萬姓稱慶今年畿輔  
遠近地方得雨多寡不勻有先後需足者有未曾  
普遍者是以二麥收成數豐歉不齊日據高斌  
奏報朕時刻留心體察如磁州永年曲周邯鄲成  
安肥鄉廣平鶴澤等八州縣麥收甚為歉薄計此  
時去夏田收穫尚遠貧乏之民餬口維艱恐致失  
所應加恩於常格之外著於六月內將窮民給賑  
一個月以資接濟并令各該州縣動銀購買高糧  
穀豆蕎麥等項籽種因地隨時借給補種以待有  
秋再將現存倉穀減價平糶倘有不敷即於隣近  
倉貯盈餘州縣撥運濟用仍俟赴豫採買麥糧到  
日多撥平糶該部即速行文該督高斌轉飭有司  
實力奉行欽此

2006 乾隆七年五月二十三日內閣奉

上諭甘肅地方遠在邊陲土瘠兵貧內地可比向來散給兵丁口糧俱係四本八折而倉貯不敷之處又於四本之中多給折色是兵丁之得本色愈少矣每當米價昂貴之時所領折色不敷糶米之用度日未免艱難朕心深為軫念用加特恩著將舊例每糧一石折銀一兩者增銀二錢定為一兩二錢之數料豆亦照此加增從乾隆七年秋季為始永著為例俾邊遠寒苦兵丁俯仰寬裕他省亦不得援例以請該部可即傳諭陝甘督撫知之欽此

2007 乾隆七年五月二十五日內閣奉

上諭粵西地處遙遠漢土交錯村寨最易藏奸而文武官弁稽察廢弛相沿成習以故逆首李梅自雍正八年在廣東散劫事發逃入粵西十年有餘後

同李彩等往來北流播州容貴鬱博等處勾結匪徒為地方之害幸得發覺次第擒擒然已蔓延多時兵民勞頓此皆平日各州縣文武不能查察防範之所致也似此怠忽養奸不可無以示懲著將李梅自某年月逃過粵西某年月住在何處又某年月轉移何處夥同李彩等往來各州縣輾轉聯結起止日期分別多寡該督撫一一核明分別題奏議處以儆怠玩至于李梅李彩兩案內文武官弁出力獲賊著有勞績者亦著查明題請議叙該部即遵諭行欽此

2008 乾隆七年五月二十五日奉

旨譚行義所奏一摺大學士等可抄寫寄與慶復楊錫級閱看令其酌量辦理具摺奏聞請旨欽此

2009 乾隆七年五月二十六日奉

旨明史綱目據該館奏稱草本編纂將竣著即陸續  
進呈欽此

2010 乾隆七年五月二十七日內閣奉

上諭甘省涼州府屬之柳林湖肅州所屬之三清灣  
赤達堡毛日城雙樹墩九渠等處各屯民戶舊借  
牛具口食共銀八萬一千八百七十餘兩原請自  
乾隆二年起分作五年帶徵迄今年限已滿除已  
完外柳林湖未完銀二萬七千七百八十餘兩三  
清灣赤達堡未完銀八千六百一十餘兩毛日城  
未完銀五千八百二十餘兩雙樹墩九渠未完銀  
二百七十餘兩粟米一十五石二斗零白麵五千  
四百九十九觔例應如數催徵完納者又查口外  
之安西柳溝布隆吉沙州等處屯民原借牛具口  
糧共銀五萬七百八十餘兩糧二萬一千四百四

十餘石除已完外安西衛未完銀一千二百六十  
餘兩柳溝布隆吉未完銀八十餘兩糧二百七十  
餘石沙州衛未完銀三萬五千五百四十餘兩糧  
八千三百一十餘石亦應如數催完者朕思此等  
屯戶原係招徠窮民素無蓄積自開墾以來若遇  
年較豐收尚可完繳舊項倘值收成歉薄則力量  
維艱應加體恤况此借欠之項乃屯民領借製備  
牛具口糧以為公田之用非小民自種地畝者可  
比今歷年已久帶徵為難著加恩全行豁免以息  
追呼之擾該部即傳諭該督撫知之欽此

2011 乾隆七年五月二十九日內閣奉

上諭據浙江提督裴斌奏稱江南商民徐維華等五  
十三人被風飄入琉球國葉壁山地方彼處官員  
撈救人貨供給養贍該國王遣都通事阮為標護  
送福建交部等語中國商民被風飄入外洋該琉

球國王加意照者養贍資送不令失所甚屬可嘉  
著該部行文傳旨嘉獎其遺米之都通事阮為標  
著該部撫賞資之欽此

2012 乾隆七年六月初一日奉

旨總管覺和托患病著太醫院吏目金國柱前往診  
視欽此

2013 乾隆七年六月初三日內閣奉

上諭張廷塚自行檢舉一案該部何以未曾查出著  
詢問欽此

2014 乾隆七年六月初四日內閣奉

上諭明日清晨無雨照常御殿如或遇雨臣工難於  
行禮即行停止陛殿日期鴻臚寺另行請旨欽此

2015 乾隆七年六月初六日內閣奉

上諭昨日陛殿遇雨謝恩大臣官員及御前侍衛乾  
清門侍衛大門侍衛內務府官員等冠服未免濡  
濕比命尚書來保等查奏今據查得行禮隨轎大  
小臣工內被雨濡濕者共三百三十五員著即交  
該部各賞給正俸之半欽此

2016 乾隆七年六月初七日內閣奉

上諭朕聞今年交倉漕糧江南泗州滁州二處米色  
不好隨令查看據內務府豐益倉所呈泗州糧米  
不但色已改變兼多攙和沙土即云該地方收成  
歉薄米色不佳亦不應壞爛至此一倉如是他倉  
亦未可定著交戶部派堂官一員前往各倉查驗  
將米色高下并應如何分別辦理之處該堂官詳  
議具奏欽此



2017 乾隆七年六月初七日奉

旨依議此事著汪扎爾前往如賊匪已獲則已如尚

未獲即著汪扎爾督催緝拿其分界址酌立章

程等事著汪扎爾會同辦理欽此

議覆高斌等奏張家口外捕盜事宜

2018 乾隆七年六月初九日奉

旨據熱河副都統達爾黨阿奏稱伊母患病口外並

無良醫請賞太醫診視等語著派太醫院御醫王

鳳翔前往欽此

2019 乾隆七年六月十二日奉

旨御史薛澂所奏著抄寄包拈令其上陳查辦欽此

2020 乾隆七年六月二十日內閣奉

上諭今年糧艘抵通較往年為遲若回空再復滯

則明春更不能如期北上矣可傳諭倉場侍郎再

派御史二員於收米之後督令迅速南回並行文

沿途督撫催趲毋令停擱該部知道欽此

2021 乾隆七年六月二十日奉

旨這所奏治大雄著革職其貪縱不法各款及摺內

有名犯證著該撫嚴審定擬具奏該部知道欽此

2022 乾隆七年六月二十四日內閣奉

上諭各省地方每遇歉收米價昂貴國家動撥倉儲

減價平糶乃養民之切務然有司經理不善即滋

弊端是以乾隆四年張渠奏請減價糶穀於成熟

之年每石照市價減五分於米貴之年每石照市

價減一錢蓋欲杜奸民賤糶貴糶囤積網利之弊

也朕思尋常出陳易新之際自應照此例行若遇  
荒歉之歲穀價高昂非減價一錢可以濟窮民之  
困者是以本年二月間特降諭旨令該督撫等於  
地方歉收平糶之時酌量情形應減若干之處預  
行奏聞請旨今朕再四思維地方當飢饉之時黎  
民之食朝廷百計區畫方且開倉發粟急圖救濟  
一賑再賑以安全之豈有於平糶一節預防奸民  
之賤糶貴糶不為多減價值而使嗷嗷待哺之窮  
民仍復艱於餬口乎况赴倉糶買官米與赴店糶  
買市米其難易判然又可歷數銀色有高低之不  
等或頭有輕重之不同道里有遠近之各殊守候  
有久暫之莫定必在平時且然何況年荒乏米之  
歲若官價照市價畧為減少則所差幾何是國家  
徒有平糶之恩而閭閻未受平糶之益也朕痼疾  
在抱言念及此再行明白宣諭凡各省大小官員  
皆朕設立以收養斯民者倘於此等要隘政事視

為具文苟且塞責則罪不可逭嗣後務將該地方  
實在情形必須減價若干方於百姓有益之處確  
切奏聞請旨至於奸民當歉收之年囤積將  
官穀賤糶貴糶則惟在州縣官嚴行查拿倘或疎  
漏隱匿該督撫即刻嚴奏從重治罪是亦並行而

2023 乾隆七年六月二十四日內閣奉

上諭朕臨御天下期於政簡刑清近來內外各衙門  
俱無久而未結之案惟有甘肅一省從前屢次軍  
需前後約四十餘年凡供億經費大端俱已核算  
奏銷完結惟其中部駁清查核減各款尚有未楚  
者即如寧夏則有康熙三十年至三十八年供應  
進勒大兵及駐劄滿漢官兵喇嘛等案肅州一路  
則有康熙五十四年至雍正四年辦過大軍需各  
案又有康熙五十四年至雍正十三年供支出口  
人員馬駝鍋帳食物等案西寧一路則有康熙五  
十四年至雍正六年辦過軍需各案又有康熙五

十四年至雍正十三年供支出口人員馬駝鍋帳  
食物等案又有雍正元年剿撫西海用過錢糧等  
案陝甘二提涼寧肅三鎮則有康熙五十四年至  
雍正元年拴養馬駝各案以上諸件事歷多年官  
經數易往返駁詰不但案牘紛繁地方滋擾且使  
已故之員累及子孫現任之員代人受罰朕心有  
所不忍用是大沛恩膏將康熙三十年至雍正六  
年以前未清之項悉予豁免其究問著追至雍  
正六年以後之案為時未遠尚易清查著總督尹  
繼善巡撫黃廷桂遠委賢員於一年限內秉公確  
查將其中應免不應免者一一分別造具清冊該  
督撫具奏保題到日朕再降諭旨該部可即行文  
該督撫知之欽此

2024 乾隆七年六月二十七日內閣奉

上諭周禮太宰以九職任萬民一曰三農生九穀二  
曰園圃毓草木三曰虞衡作山澤之材四曰數牧

養蒼鳥獸其為天下萬世籌贖足之計者不獨以  
農事為先務而兼修園圃虞衡數牧之政故因地  
之利任圃以樹事任牧以畜事任衡以山事任虞  
以澤事使山林川澤邱陵之民得享山林川澤邱  
陵之利夫制田里教樹畜岐周之善政管叔亦  
云積於不涸之倉者務五穀也藏於不竭之府者  
養桑麻育六畜也如果園虞衡數牧之職以次  
修舉於民生日用不無裨益國家承平日久生齒  
日繁凡資生養贖之源不可不為亟講夫小民趨  
利如鶩亦豈甘為惰窳舉山林川澤天地自然之  
利委為棄壞哉良以疏闢之初豪強既羣起而爭  
管業之後奸民又多方戕賊地方有司每視為贅  
產細故不為申理此所以寧荒其業耳督撫大吏  
身任地方所當因地制宜及時經理其已經開墾  
成產者加意保護或荒埽榛蕪以及積水所滙有  
可疏闢者多方相度籌畫俾地無遺利民無餘力

以成經久優裕之良法至于竭澤焚林并山澤樹  
蓄一切侵盜等事應行禁飭申理之處轉飭地方  
官實力奉行該地方不時稽察務令從容辦理以  
期實效毋致絲毫滋擾尤毋得日久因循以仰副  
朕惠養斯民之至意欽此

2025 乾隆七年六月二十九日內閣奉

上諭國家設兵原以衛民不可使之稍有累於民朕  
聞得粵西地方看守城門之兵丁徃徃借盤詰為  
名逼小民肩挑薪蔬米豆等物入城貨賣者必搜  
取些須以資食用民間嫁娶經由城門出入者則  
先期需索酒食方無阻滯又分防塘汛之兵丁每  
驅使邇邨民人雜草取水并令輪值代送公文或  
塘房破損即令村民出錢承攬代為粘補以餘資  
入已通省皆然而偏僻之地為尤甚又如賭博一  
節輒自恃身充營伍差役不敢擅拿而同類人多

風信便捷即拿亦易於走脫以致開設賭場引人  
入夥肆無忌憚此種弊端係朕得之風聞者該省  
督撫提鎮皆當加意訪察共相整刷以除積習毋  
得視為具文他省或有似此者封疆大吏亦應一  
體留心辦理欽此

2026 乾隆七年七月初八日內閣奉

上諭禮部尚書員缺仍著任蘭枝調補兵部尚書員  
缺著陳惠華調補戶部尚書事務著大學士徐本  
篤管欽此

2027 乾隆七年七月初八日內閣奉

上諭河防漕運俱關係重大漫前中河原一分黃河  
之水由竹絡壩灌入一引駱馬湖之水由董家溝  
皂河口灌入以濟漕運近年以來因黃水灌注日  
眾中河淤沙墊積河流湍悍不異正河復經高斌  
議將竹絡壩堵築截斷黃流然在中河得免冲潰

固可保固兩堤但黃水既不灌入而駱馬湖之水  
又聞平淺不能引出其上流山東開河之水春月  
挑浚之後每封閉蓄水以待糧舡抵境啟板放  
行是中河上無來源河身既高河流微細勢所必  
然矣現今糧舡雖已抵通然將來中河既不使黃  
水灌入駱馬湖之水或又不能引出濟運而河身  
中節節築壩束水亦非經久之計應將中河如何  
使河流深通每年不致阻滯糧舡之處著完顏偉  
顧琛會商妥議具奏請旨欽此

2028 乾隆七年七月初十日內閣奉

上諭張若震以母老多病屢請歸養情詞懇切准其  
回籍養親浙江布政使員缺著王恕補授欽此

2029 乾隆七年七月十二日內閣奉

上諭江南淮徐等處連年遭值災傷朕時深廬念所  
以籌畫而安全之者亦既殫竭心力矣今擬巡撫

陳大受前後奏報阜寧安東山陽桃源海州沐陽  
清河邳州銅山蕭縣沛縣睢寧興化等州縣於本  
年五六月間大雨連綿凡低窪之處未刈之麥俱  
被水傷已種秋禾亦多淹浸現在委員確勘酌量  
撫恤併借給籽粒令其補種以冀毋誤秋收等語  
朕覽奏深為惻然因思淮徐等處荒歉為屢已經

累歲

上天慈愛下民萬無疊降災殃於一方之理從來和氣  
致祥乖氣致異或本地大小官吏政治不脩愆尤  
暗積或民人心術險偽風俗澆漓均足以上干

天和於雨暘旱潦之間顯示儆戒倘仍不知恐懼修省  
視為氣數之適然或轉懷怨尤之心口出憤懣之  
語則是冥頑不靈怙過不悛無怪乎

天譴屢加災眚頻告此天人感應之道捷于影響斷無  
或爽者也用是特頒此旨諄諭地方有司思過省  
愆以各盡父母斯民之責豈可因已身獲戾而使  
困厄及於吾民於心忍乎並通行勸諭紳衿百姓

等各自悚惕痛改前非其有力之家毋得幸安居  
奇務教任恤之道且彼此誠勉同歸於善以此上  
承

天意仰報

天恩朕知災沴潛消必獲屢豐之慶矣至于撫綏患濟  
之方著摠督德沛巡撫陳大受悉心商酌妥協辦  
理隨時奏聞毋使一夫失所欽此

2030 乾隆七年七月十四日內閣奉

上諭京城內外水道甚有關係近年以來但值雨水  
少驟街道便至積水消洩遲緩此水道淤墊之故  
也向來城內原有泡子河等水櫃數處以資容納  
而城外各護城河道原以疏通衆流使不致滯蓄  
今日久未經修濬皆多淤墊而街道溝渠亦多阻  
塞以致偶逢霖雨便不能暢流此亦應及時籌畫  
者著海望哈達哈韓光基舒赫德帶同欽天監官  
員逐一相度其應如何疏濬之處詳議請旨辦理

欽此

2031 乾隆七年七月十五日內閣奉

上諭湖南地方遼闊且離京路遠部選之員一時難  
到若州縣缺出無人署理未免周章著吏部於候  
補候選州縣人員內揀選十員發與巡撫許容以  
備署委試用遇有相當之缺酌量題補他省不得  
援以為例欽此

2032 乾隆七年七月十九日奉

旨滇省銅餉運京鼓鑄關係犖下錢法甚為緊要從  
無外省截留之例但念江西錢文太少錢價太昂  
較他省為甚只得為權宜之計况目下戶工二部  
現有餘餉足供鼓鑄著照陳弘謀所請將應解戶工二部滇  
銅截留五十五萬五千觔以濟該省之用該省陸  
續赴滇採買仍著解京補項他省不得援例以請  
餘著該部妥議具奏欽此

2033 乾隆七年七月二十一日內閣奉

上諭江安二省之淮徐鳳穎各屬連年被水歉收朕心屢念屢頒諭旨蠲賑頻施不使小民失所昨又降旨將江省之清河桃源安銅山沛縣宿遷蕭縣邳州睢寧徐州海州沐陽安省之宿州靈璧

虹縣臨淮懷遠泗州五河九州縣衛被災各戶

所有乾隆五年以前未完帶徵銀兩統行停緩俟各處年歲屢豐之後該督撫再行酌量定限分年

帶徵具奏請旨朕思上下兩江九州縣衛被災

既重所有乾隆五年以前未完帶徵銀兩既已降旨停緩其未完帶徵緩漕項銀米事屬一例亦著一體停緩俾小民無追呼之擾再查乾隆六年

山陽阜寧清河桃源安銅山沛縣邳州睢寧蕭

縣宿遷豐縣碭山海州沐陽並淮安大河徐州三

衛應完乾隆六年漕項銀米經巡撫陳大受奏請

緩至今冬帶納朕已俞允今聞淮陽山陽等處夏

麥被水又復歉收即將來秋禾豐歉亦尚未定若將新舊漕項一歲並輸民間未免拮据著將山陽等十八州縣衛各灾戶未完乾隆六年漕項銀米本年仍緩輸俟乾隆癸亥年起分作五年帶徵以紓民力著該部遵諭速行欽此

2034 乾隆七年七月二十三日內閣奉

上諭國家舉行大計乃三載考績黜陟幽明之要典

督撫大臣職司其事必當秉公去私杜絕請託精

明鑑別無黨無偏舉一人而衆皆知勸勅一人而

衆皆知儆則官方以肅吏治以清百職修舉而民

生受其福矣昔我

皇祖

皇考嚴降諭旨訓飭再三乃朕見近來各省計典頗有

視為具文苟且覆責者或賢員不行薦舉或劣員

不行糾劾或就目前一端而不察其居官之素

或任一己之愛憎而不合乎輿論之同又或庇護

私人瞻徇情面使貪墨不職之人姑容在位而將  
教職及佐雜微員草草填注以充其數所謂旌別  
泚惡者安在乎甘撫受朕股肱心膂之寄於此等  
切要政務等語朕將何所倚賴今年乃大計  
之期用是特頒諭旨各督撫等務精白乃心矢公  
矢慎以肅鉅典倘有仍蹈前轍者經朕訪聞或被  
科道糾劾必當加以嚴譴該部即通行曉諭知之  
欽此

2035 乾隆七年七月二十三日奉

旨修理京城內外河道溝洫著原任副提河定柱一

同辦理欽此

海大人奉

2036 乾隆七年七月二十四日內閣奉

上諭巡視河東鹽政著內務府坐辦郎中吉慶去欽  
此

2037 乾隆七年七月二十六日內閣奉

上諭今年糧船北上時適值河水淺涸各船盤駁加  
絳實多繁費運丁力量艱難只得借支庫銀以為  
歸途之用將來照例扣除還項查江西南昌等郡  
借銀四千四百兩江南興武等郡借銀一千七百  
零四兩揚州等郡借銀一千九百二十一兩朕念  
今歲運丁艱苦甚於往年著將所借銀兩悉行賞  
給免其扣還此係格外之恩後不為例該部即傳  
諭倉場侍郎漕運總督知之欽此

2038 乾隆七年七月二十六日內閣奉

上諭江南下江之淮徐揚州等處上江之鳳潁泗州  
等處屢被水災民人困苦朕心深為屢念今春特  
遣侍郎周學健會同該督撫加意撫綏始不至於  
失所今聞上下兩江去年受災之所六七月間糧  
被淹沒田禾似此饑饉迭告小民其何以堪朕已



切諭該督撫等急為賑恤妥協辦理但思兩江要

地水潦頻仍因近年雨水過多亦由地勢低窪

宣洩容納經理無方之所致再四思維高斌深悉

河務且久任江南於地方事宜亦所熟悉著伊同

周學健前往會同德沛完顏偉陳大受張楷將一

應賑恤水利之事確勘詳議具奏請旨務救目前

之災荒永除將來之水患即從前周學健所奏水

利各摺部議行令江南總河督撫查議想伊等亦

未必即能善畫妥協亦著高斌周學健會同查勘

定議議定之後高斌先行回任將應辦之著周

學健暫留江南會同督撫辦理俟大局已定周學

健亦即回京此旨到日著高斌來京請訓直隸總

督印務著文昭直前往署理欽此

2039 乾隆七年七月二十七日內閣奉

上諭內地米穀偷載出洋例有嚴禁昔我

皇祖

皇考訓諭地方文武官弁至再至三但恐日久法地人

心玩忽上年冬月巡撫陳大受奏稱崇明一縣坐

落海邊舊例准其採買隣近地方之米及查考清

冊竟有指稱崇明多買並不裝運回崇發賣者是

其私販下海情弊顯然用是再頒諭旨著沿海地

方之督撫提鎮等轉飭文武官弁申明禁約實力

奉行務絕偷越之弊倘或視為具文仍有疎漏經

朕訪聞必於該督撫提鎮是問欽此

2040 乾隆七年八月初一日內閣奉

上諭各省州縣考試童生乃士子進身之始文武雖

有殊途各宜秉禮自愛以敦士風朕聞粵東俗尚

澆漓每遇生童齊集考試之時或赴攤舖短價強

買什物或與市人扭結稟官稍不遂意即 衆喧

罵挾制罷考地方有司視以為常每多寬縱今聞

得高州府石城縣本年五月間考試文武生童有

武童李三某赴考被蒙姓民人拾土馬箭一枝比

時稟知縣令已諭典史查追給還而諸生以知縣不能立刻拘責洩忿於本日上燈時乘縣署月臺下失火遂有武生林翰芝武童林翰權及李芬源等擁進宅門攫取衣服錢文而散現據該地方官查究尚未結案又聞電白縣考試武童外場因馬道擁擠唱逐闖人有武生扭役毆打之事又右翼鎮親赴教場操演有武生不衣不冠雜入衆中擁攆馬道驅令遠立遂毆打兵丁肆行詈罵似此身列官場不遵禮教恃青衿以為抗法橫行之具士習如此風俗何由而淳此皆地方大小官員及學政教官平時不能化導之所致用是特頒諭旨著該督撫學政等董率有司教導官嚴切訓諭務令士子專洗心滌慮痛改前非倘冥頑不靈仍不率教即按律繩治不稍寬貸如官員等有徇隱姑縱者一經查出定行分別處分欽此

2041 乾隆七年八月初二日內閣奉

上諭各省軍政五年一舉乃黜陟將弁鼓勵戎行之要務為甘撫提鎮者留意於平時而舉行於此日必公正無私甄別允當舉所當舉而衆人皆知奮與勅所當勅而衆人皆知儆戒將見人材輩出士氣益勵國家於以收干城腹心之效所關匪鮮淺也昔我

皇祖

皇考加意武備訓諭諄諄其因舉勅不公降

旨申飭者至嚴且切今當軍政之期倘司其事者或瞻徇情面庇護私人將居官貪劣及衰懦關算不能騎射之人姑容在職止將微末弁員數人填註充數而使技勇過人勞績素著或素性質樸實心効力者過抑隱藏無所表見則賞罰不明賢否倒置人心懈怠戎政廢弛重負朝廷委任之意其罪不可逭矣用是特頒此旨務各洗心滌慮將從前情

弊陋習一一屏除以肅鉅典倘有仍蹈前轍者經朕訪聞或被科道糾參必當加以嚴譴該部即通行曉諭知之欽此

2042 乾隆七年八月初二日內閣奉

上諭今歲六月間江南淮徐揚州一帶淮黃文漲水勢漫溢甚於往時朕已屢降諭旨令該督撫等加意撫綏現又命高斌周學健前往會同辦理茲據陳大受奏稱揚州日下河水日逐增長民間自中人之家以及極貧下戶皆流離四散雖有平糶之官糧撫恤之公項亦不能奔走領糶似此情形實非尋常被災可比朕心深為軫惻該督撫等不得拘於常例務須多方設法竭力拯救使災黎稍可資生以俟水退倍加撫綏俾得安其故業毋致失所該部即遵諭速行欽此

2043 乾隆七年八月初四日內閣奉

上諭江南上下兩江今年水漲逾常該督撫陸續奏報者不下數十州縣朕每一覽奏宵旰靡寧已屢降諭旨令該督撫加意撫綏毋使失所又特命直隸總督高斌刑部侍郎周學健前往會同該督撫等拯救目前之災荒永除將來之水患但念此等被災之地夏已無收秋更失望小民困苦其何以堪況此數十州縣有今年被災特甚者有今年稍輕而連年被災者現又水漲未消亟待賑恤其流離顛連之狀時在朕心目中所有本年應納錢糧朕欲加恩豁免著該督撫查明被災各州縣先行緩徵次第將確數分別具奏請旨該部即遵諭速行欽此

2044 乾隆七年八月初五日內閣奉

諭直隸總督高斌刑部侍郎周學健差往江南辦理賑恤水利事務著給與欽差大臣關防俱著馳驛前往欽此

2045 乾隆七年八月初五日內閣奉

上諭前據漕運總督顧琮奏稱江西南昌等幫江南興武揚州等幫運丁力量艱難共借銀七千八百餘兩以為歸途之用朕已加恩賞給免其扣還今紹興前後兩幫船一百五十隻亦經倉場侍郎塞爾赫等每船借給銀八兩共一千一百四十四兩此項借銀事同一體亦著加恩免其扣還欽此

2046 乾隆七年八月初六日內閣奉

上諭直隸河間府知府永寧著調補永平府知府永平府知府徐景曾著調補河間府知府欽此

2047 乾隆七年八月初六日奉

旨高斌周學健奏稱此番賑務水利需費浩繁請令情願急公人員仿照樂善好施之例出資効力按其効力多寡酌予議叙分別錄用等語近年上下兩江水患頻仍朕心軫念多方籌畫如果有益於災黎帑金原所不計但照高斌等所奏此等人員若准其効力自必踴躍急公輻湊而至此商賈流通貨物充裕於屢年飢饉之餘可臻富庶之家地方民生似均有裨益此一時權宜之計也况京官自中行評博以下外官自同知通判以下於正途仕進之階尚未有碍事屬可行但此舉因江南屢被災荒非常年可比他省亦不得援此請然不定以年限恐日積月累從事者多與現在因時制宜之意轉有未合其應如何酌定條例至於何時停止之處該部一併定議速奏欽此

2048 乾隆七年八月初六日內閣奉

上諭朕愛養黎元特沛殊恩將關權米豆等稅悉行蠲免以為充裕民食之計但船料一項議論不一現發九卿會議尚未覆奏朕思此時並無難辦之處向徵船料者應照例徵收向不徵船料者豈可因免米豆之稅而轉加徵船料該部即速行文各關知之欽此

2049 乾隆七年八月初六日內閣奉

上諭前因京倉漕糧有一二處米色甚屬惡劣且有摻和草根沙土者是以派委戶部堂官等細加驗省將該管官分別議處此皆漕運總督及倉場侍郎辦理疎忽沿途旗丁作弊之所致與完糧之百姓毫無干涉或辦糧之州縣於收糧之時因此過于吹求而受允之運弁旗丁又借此刁難需索則小民之受累不淺矣該部即行文各督撫令其留

心稽查倘有此等情弊即行查奏欽此

2050 乾隆七年八月初八日內閣奉

上諭今日舉行經筵典禮禮部據向例以天雨奏請改期朕思魏文侯將出獵而雨左右不欲行文侯曰吾已虞人期矣豈可無一期會哉乃往身自罷之夫田獵之娛尚不以過雨失期况經筵大典業經祭

告自應舉行但執事諸臣例應在丹墀內排班行禮未免沾濕著穿雨衣排列駕到即入殿進講講畢即奏禮成其階下行禮殿內賜茶諸儀俱著停止嗣後凡遇雨俱照此例行欽此

2051 乾隆七年八月初八日內閣奉

上諭覽貴州提督韓勳奏安籠鎮總兵官吏載賢係  
伊兒女姻親同省辦事自不免嫌疑史載賢著調  
補湖廣襄陽鎮總兵官宋愛著調補貴州安籠鎮  
總兵官欽此

2052 乾隆七年八月初八日內閣奉

上諭載永椿著吏部隨便帶領引見欽此

2053 乾隆七年八月初九日內閣奉

上諭江南上下兩江淮徐鳳穎等所屬州縣疊被水  
災今年水勢更大朕心時切憂勞多方籌畫期登  
斯民于衽席此等被災地方州縣官最關緊要必  
忠誠惻怛實有與民休戚相關之意而其才具又  
能展布設施者俾得久於其任方於地方有益若  
徒以才具見長而無實心為民之念雖致飾於外  
而於撫恤之義又何補乎著該督撫留心察看如

現在各負果能勝任令其加意經理以觀成效如

有不能勝任者或于通省屬員揀選補授或于命  
往江南人員內揀選題補苟得其人即令久於其  
地不必速陞漢之賢才二千石有賜級賜金而不  
屢遷者其道猶可法也如此則瘡痍可起元氣可  
復庶慰朕痼疾在抱之至意欽此

2054 乾隆七年八月十一日內閣奉

上諭江南上下兩江有疊被水災之州縣朕心深為  
軫念已命大臣前往會同該督撫加意賑恤以蘇  
民困茲據安徽巡撫張楷奏報連年水潦歉收今  
年被災最重者則有鳳陽臨淮宿州靈璧虹縣懷  
遠壽州鳳臺蒙陰泗州五河盱眙天長十三州縣  
次重者則有定遠霍邱太和穎上亳州阜陽六州  
縣朕思此等地方民人於積困之餘又罹災患非  
加恩於常格之外不足以拯陷危其最重者著於  
定例應賑月分之外加展三個月其次者著於定

例應賑月分之外加展兩個月至於災止六分次  
貧不賑者亦俱賞賑一個月其被災七衝軍丁著  
照坐落州縣一體加展月分又無業貧民乏食生  
監各隨所居鄉村准其照例領賑其應於何時開  
賑該撫即酌量情形舉行務派賢能有司官員殫  
竭天良實力撫恤其下江被災等處即著欽差大  
臣會同該督撫照此旨酌量辦理務使災民均沾  
實惠該部即遵諭速行欽此

2055 乾隆七年八月十二日內閣奉

上諭朕御極以來愛養黎元於蠲免正賦之外復將  
雍正十三年以前各省積欠陸續豁免以息民間  
追呼之擾今查雍正十三年正月起至十二月江  
蘇安徽福建三省未完民欠正項錢糧銀共一十  
七萬七千六百七十四兩六錢零甘肅福建江蘇  
等三省共未完民欠正項米豆糧共九萬五千二  
百六十九石零甘肅省民欠未完正項草一百七

萬四千二十一束零又直隸江蘇安徽甘肅廣東  
福建等六省民欠未完雜項錢糧銀二千九百二  
十四兩零福建省民欠未完雜項租穀四百四十  
八石零此等拖欠各項歷年已久多係貧乏之戶  
無力輸將況江蘇所欠獨多目今彼地現被水災  
待恩撫恤豈可復徵逋負著將以上各項悉行豁免  
若諭旨未到之先或有續完之項即咨部扣除  
再查江浙二省尚有雍正十三年未完漕項銀七  
萬一千二百七十兩零米二萬九百四十九石零  
麥四千三十七石零豆一百八十五石零向來漕  
項不在豁免之列今既蠲除各項著將漕項一體  
免徵此旨到日各該督撫可即出示通行曉諭並  
令各州縣官實力奉行務令閭閻均沾實惠倘有  
不肖有司朦混私收或蠹役土棍欺隱中飽等弊  
該督撫即行嚴參密拿從重治罪著交該部速行

欽此

2056

乾隆七年八月十二日內閣奉

上諭今年上下兩江被水州縣賑濟之處甚多俱需米穀應用明歲春夏之交米價諒必騰貴雖然商賈流通恐地方米糧究不能充裕朕意若將乾隆癸亥年運京漕糧內酌留本省自有裨益上江應留截若干下江應截留若干著高斌周學會同該督撫察看本地情形酌定數目具奏請旨欽此

2057 乾隆七年八月十三日內閣奉

上諭向來外省地方災荒有司官員辦理不善每將應賑人數有意裁減以致人多賑少國家雖沛恩膏而小民仍有不免飢餓者今年江南被水甚重且當連年災荒之後更非尋常可比凡屬應賑災民務須將大小口數據實造冊不得仍蹈前弊致有遺漏可速傳諭欽差大臣及該督撫加意查察轉飭有司實力奉行欽此

2058

乾隆七年八月十四日奉

旨于文輝著解任其刻薄貪鄙等情交與德沛查實具奏贛州總兵官員缺著章隆補授欽此

2059

乾隆七年八月十五日內閣奉

上諭今年上下兩江水災甚重朕宵旰憂勞百端籌畫以拯吾民之困厄但思此等窮民在本地引領待賑者固多而挈家四出覓食於隣省隣郡者亦復不少著江南及河南山東江西湖廣等省督撫各嚴飭地方有司凡遇江南災民所到之地即隨地安頓留養或借寺廟或蓋蓬廠使有棲止之所動用該處常平倉穀計口授糧據實報銷並訓諭約束不得借端生事至於災民聚集衆多之處則更委道府大員專行督察至冬月水消及春初耕種之時有願歸本鄉者即資送回籍知照本籍照例安插並給以麥種俾得及時趕種其不願回籍者亦不必強悉遵前諭行欽此



2060 乾隆七年八月十六日內閣奉

上諭上年山東歷城等一十七州縣衛秋禾被災朕特降諭旨將應徵新舊錢糧並漕米黑豆一概緩至今歲及癸亥兩年帶徵於麥熟後起限嗣因今歲二麥不登復緩至秋成後完納現在秋收豐稔自應按款輸將但各州縣中有疊被災傷之歷城等十三縣今歲雖獲有秋而民力未甦舊欠新徵令其一時並納未免拮据著將歷城章邱齊東濟陽長清陵縣鄒平臨邑平原肥城平陰茌平博平等縣并歷城章邱濟陽長清肥城等五縣收併之衛地除現年錢糧及帶徵六年之米豆照常徵收外其應徵四五兩年舊欠及帶徵六年之地丁并災粟出借之口糧籽種概緩至乾隆癸亥年麥收後起徵仍照例分年完納以紓民力又聞齊河禹城清平高唐四州縣并齊河縣收併之衛地今夏雖勘不成災究屬歉收且去歲被災尤重著與歷城等縣一例辦理使小民糊口有資輸將不致竭

歷該撫即遵諭行欽此

2061 乾隆七年八月十七日內閣奉

上諭山東兗沂曹道員缺著萬國宣補授欽此

2062 乾隆七年八月十八日內閣奉

上諭今年上下兩江被水情形非常年可比朕宵旰焦勞凡拯救撫綏之道亦屢經籌畫矣今又思周禮荒政載有緩刑之條是舉行矜恤之典亦感召和氣之一端現在江蘇安徽兩省秋審人犯中或情有可原當在矜疑之列者或多年緩決不至正法久繫囹圄者皆應減等完結以示因災恤刑之意著大學士會同刑部詳閱招冊分別妥擬具奏欽此

2063 乾隆七年八月十八日內閣奉

上諭王泰姓倪之錮熊會珍鄧瀾王又樸著吏部行文調取來京引見欽此

2064 乾隆七年八月十九日內閣奉

上諭兩江總督德沛奏稱高郵寶應淮安等處被水地方現在查賑在城居民有力之家例不在賑恤之列者聚眾罷市撞神鬧鬧公堂衙署勒要散賑而高郵則係劣紳朱愷士指使寶應則係劉師起族人指使淮安首數人亦不盡係百姓現在查賑即具疏題奏等語夫地方遇有水旱災祲在官斯土者固當加意撫恤以盡父母斯民之責而為士民者則當各安本分以受國家恩澤乃敢玩視功令鬧官罷市似此等刁惡之舉出於尋常百姓猶可藉口鄉愚飢驅迫身以致無知犯法至於紳衿之家非有迫不及待之情且附於請書明理之列而倡率棍徒從中指使將必核制官長之漸尤為法所不容此等惡習自我

皇考整飭以來已漸次改易今豈可使之復萌潛長以為人心風俗之憂從前湖南劣生戴名揚在苗疆多事朕曾降旨將該省學政教官等加以處分今

江南有如此劣生學政教官所司何事亦應議處

以為革率不嚴之戒至劉思起族人肆行無忌伊實難辭不能約束之咎著德沛一併查明奏交部察議德沛在浙閩總督任內侍紳衿未克遏於優容此事務須秉公執法嚴處以儆其餘不可稍存姑息之念革率了事著該部即傳諭知之欽此

2065 乾隆七年八月十九日內閣奉

上諭王喬林吳穀著吏部行文調取來京引見楊廷璋俟服滿之日該部帶領引見欽此

2066 乾隆七年八月二十六日內閣奉

上諭上下兩江現在辦理散賑事務至數十州縣之多恐現任諸員不敷更調即從前揀發之人亦未必人人足供差遣著九卿於候補知府以下知縣以上等官內各舉所知即交吏部帶領引見務期秉公慎選不得徇情濫舉欽此

2067 乾隆七年八月二十七日內閣奉

上諭據福建提督那蘇圖巡撫劉於義摺奏漳州府詔安縣有匪類聚眾為盜未經舉發隨即偵探擒獲不致漏網等語匪類聚眾為盜大干法紀那蘇圖劉於義即時訪聞按名拿獲甚屬可嘉著交部議叙提督蘇明良提兵官龍有印亦著議叙所有訪察緝捕用力之文武官弁著該督撫分別具奏交部議叙其先期出首及率領義民擒賊之紳士耆民等著該督撫查明嘉獎賞賚欽此

2068 乾隆七年八月二十八日內閣奉

上諭閩省為濱海之區百姓多藉魚鹽之利以為生計朕聞該省鹽課內頗有苦累商民之處蓋有司於應繳銀兩外輒以雜費無出借端加派習以為常如每鹽百觔加增錢二十文至七八十文不等名之曰長價又各場肩魚販買鹽請領道印給

2069 乾隆七年八月二十九日內閣奉

上諭據湖廣督撫奏報湖北之荊州安陸漢陽襄陽德安湖南之長沙衡州岳州常德澧州等府州所屬之州縣及沔陽武昌襄陽三衛有夏月被水之處淹沒田廬禾稼民人困苦現在勅支常平倉穀按名賑濟又據江西巡撫陳弘謀奏報贛州吉安南安三府所屬州縣有被水較重之處現在災民

俱已照例賑恤安頓不使流移朕覽湖廣江西督撫等所奏深為軫念比即嚴切批諭該督撫加意撫綏悉心籌畫務登災民於衽席今思江廣二省雖係偏災而被水之民未嘗有偏全之別著該督撫於被水地方將應徵錢糧先行出示緩徵然後查勘照例題請蠲免該部即傳諭知之欽此

2070 乾隆七年八月二十九日內閣奉

上諭朕思江南水災之後賑恤乃一時之補救而所以安養民生者全在明歲之農功自被水迄今已經兩月雖水漸減退不為大害而彌漑之勢仍似從前若疏濬稍後機宜則今歲田地斷不能盡皆涸出小民春耕無望彼嗷嗷待哺者何以為生況此時搭棚棲止於長堤者亦豈可以久處亟宜謀因地制宜之策其如何疏洩水道涸出田畝以安民業以奠民居著欽差大臣河道總督江南督撫悉心妥議速為經理毋得稽遲該部遵諭速行欽此

2071 乾隆七年八月二十九日內閣奉

上諭朕於九月十一日前往馬蘭峪恭謁祖陵所有應行事宜著各該門先期備辦欽此

2072 乾隆七年八月二十九日內閣奉

上諭朕此次恭謁祖陵著和親王怡親王大學士鄂爾泰張廷玉在京總理諸務欽此

2073 乾隆七年九月初一日內閣奉

上諭江南淮徐鳳穎等處今年被水甚重民人困苦朕宵旰憂勞百端籌畫為養民裕食之計查山東德州臨清兩處有截漕米共十萬石原以備山東直隸緩急之用者今兩省秋成豐稔無需米糧接濟若以之撥發下江淮徐等處則順流而下一水可通於地方甚有裨益著江南督撫知會山東巡撫將如何運送公同妥議速行辦理毋得遲延至

於江南賑濟需米甚多據德沛陳大受摺奏已將江南各州縣倉穀撥運三十萬石並准揚等處現存穀二十四萬石為平糶賑恤之用又借浙江倉糧十萬石又從前上下江巡撫奏稱發銀十萬兩前赴河南採買麥石運江應用等語<sup>朕</sup>又降旨令將江南明年漕糧應截留若干之處著該督定議具奏并降旨將山東登州貯穀六萬石由海運送江南今又添運山東截留漕米十萬石不知江南被水地方已足敷用否著德沛陳大受張楷等通盤計算現在有米若干陸續運送若干如或接濟至明年春夏之交共湏米糧若干始可敷用一一具摺速奏該部即遵諭行欽此

2074 乾隆七年九月初三日內閣奉

上諭從來節烈之婦祀於其鄉所以旌善端化樹之風聲也刑以弭教其致死本婦之犯法無可貸是以乾隆五年福建秋審蕭克一案該撫擬以情實

九卿改為緩決朕曾降旨申飭蓋以烈婦之死由於該犯之調戲若將該犯輕入緩決非所以重名教而端民俗也今正值九卿秋審之時其在蕭九以前定為緩決之案俱係九卿集議經朕覽閱降旨者毋庸改為情實其在乾隆五年以後此等案件各省督撫多入於情實之列九卿執法自不得輕縱但強姦未成本婦因調戲而羞忿自盡者其中情形不一朕辦理勾到之時自有權衡如果一線可原仍當免勾既<sup>經</sup>一次免勾之後下年即可改為緩決如係停止勾到之年入情實者下年不得即改緩決將此傳諭九卿知之欽此

2075 乾隆七年九月初四日內閣奉

上諭朕車駕所至鴻臚寺堂官有帶領地方官接駕之例從前查斯海隨從時在途騷擾甚不安靜有玷鴻臚之職其人亦甚平常著解退以旗員用其次德山隨去嗣後鴻臚寺官員派出隨駕者務須謹慎小心不得需索生事倘仍蹈前轍經朕訪聞

必嚴加處分欽此

2076 乾隆七年九月初五日內閣奉

上諭福建按察使王丕烈著調補河南按察使河南按察使儲龍光著調補福建按察使儲龍光不必來京請訓即赴福建新任欽此

2077 乾隆七年九月初五日內閣奉

上諭福建福寧鎮總兵官雷澤遠著調補漳州鎮總兵官漳州鎮總兵官龍有印著調補福寧鎮總兵官欽此

2078 乾隆七年九月初九日內閣奉

上諭哈密赤靖等處防所現有馬駝皆係昔年陸續騎馱撥往軍營者用力已久勞傷過甚連年以來多有倒斃亦非防所弁兵不盡心經理之故今仍照常例責令買補弁兵未免苦累著該督提變通辦理將現今齒老有病之馬駝查明不拘價值就

地發賣若一時無人購買即分羣收放如有倒斃委員驗看准其開銷其尚足備防所之用者仍令弁兵加意收放如倒斃過額照例著賠又安西收放之駝隻前後倒斃一千有餘定例每百隻內准其開銷四隻其餘俱著弁兵賠補但塞外弁兵多係寒苦若令賠償此項力有不支查該管官弁報稱歷年所養駝隻產獲駝羔六百餘隻不在交收之額朕思若以孽生之駝羔即補倒斃之駝數免其賠補于弁兵甚為有益著該督撫查明遵諭辦理其餘駝隻若有年久勞傷者亦照哈密赤靖等處之例行該部即行文該督提知之欽此

2079 乾隆七年九月初十日內閣奉

上諭朕回鑾至湯山時總辦事務王大臣不必前往接駕部祈文武大臣亦不必前往俟朕到圓明園之日再接若有應奏之事朕在湯山駐蹕時各大臣輪班往奏欽此

2080 乾隆七年九月十四日內閣奉

上諭今年直隸古北口地方收成甚屬豐稔朕已降旨  
令將河南山東所有供應

陵寢官兵米石運往江南接濟令提督塞楞額兵備道八

十於本地購買以補原額此外再著廣為收買以備  
將來撥用如無撥用之處即存貯常平倉以備緩急  
之需再黑豆一項今年亦屬豐收亦著塞楞額委員  
採買以為明歲謁

陵喂養馬匹之用此項黑豆可存貯八溝遼中之地應運  
何處臨時再行酌議欽此其採買之道視收成豐稔  
之處照依時價採買不可勒派亦不可急於多糶使  
民間反致價昂此不過恐穀賤傷農之意耳欽此

2081 乾隆七年九月十四日內閣奉

上諭據白鍾山晏斯盛會奏江南銅山境內黃河北  
岫之石林黃村二口減水濟運原係舊制今歲黃  
水甚大減洩過多由石林等處瀾漫而下淹及東

省滕嶧等州縣查石黃二口遠在江南隔越東省  
地界一百七八十里至二百餘里非會同南河總  
督協力堵禦莫能奏效伏乞勅諭完顏偉立速親  
至漫口會同相度下埽使得剋期斷流等語朕覽  
此奏白鍾山頗有推諉之意今年江南異漲衝決  
堤工甚多今命高斌周學健前往查勘在在須完  
顏偉經理若因此一處工程又令其親赴會商則  
顧此失彼能無遺悞他處乎且隔越東省不過一  
二百里何難往彼料理若云隔屬呼應不靈朕思  
公正大臣以國事為己事下吏斷無不聽從者况  
同屬河官乎若如此拘泥甚非當日分設河臣之  
意矣此相度漫口之事著白鍾山親身前往詳加  
確勘速行堵禦有應行商之完顏偉者令其行文  
咨商庶免歧視延緩之弊該部即遵諭行欽此

2082 乾隆七年九月十五日內閣奉

上諭向例河南山東兩省有每年供應

陵寢官兵米糧四萬石明歲係河南應辦之年朕思河

南去江南甚近著將此項米石運往江南以備賑

濟之用甚為妥便現在直隸古北口一帶地方收

成豐稔著提督塞楞額兵備道八十委員採買四

萬石分運薊遵豐三州縣以補

陵寢支放原額俾移遠就近兩得其便該部即遵諭行

欽此

2083 乾隆七年九月十五日內閣奉

上諭各省學政考試生童為士子進身之始甚有關

係為學臣者固當各矢公慎嚴密周防而在外棍

徒撞騙之弊地方官尤置嚴行訪查以期肅清近

江西巡撫陳弘謀奏稱江省積棍每年尾隨學臣

按試各郡假冒學臣親戚內幕哄誘士民營求入

學講定謝儀若干面同包封仍存士民之手俟業

出有名方求收銀營求之人見其不先取銀以為  
有益無損遂將銀兩付伊包封盡押棍徒預用錢  
文假作銀封臨時同夥設計掩飾調換携銀潛逃  
名曰掉包迨至業出無名士民啓視銀封方知墮  
計而棍徒早已遠颺在被騙者既不敢為官以取  
累又不肯告人以貽羞遂致此風各處多有不能  
杜絕朕思一省若是他省諒亦相同著各督撫於  
學臣按試之前將此等掉包串騙之弊詳明曉諭  
凡有指稱營求考取將銀封貯出業收取者無論  
真假冒即嚴拿究處并許被騙之人報官查拿則  
應考生童識破機關自不致墮其術中而棍徒知  
有法紀亦不敢公行無忌亦肅清學政之一端該  
部即遵諭行欽此



2084 乾隆七年九月十六日內閣奉

上諭今歲江南被水需費浩繁從前部臣查奏下江所有藩糧益三庫現存銀九十四萬兩米穀一百一十餘萬石上江藩庫存銀八十餘萬兩米穀一百二十萬石又將本年應徵鹽課存留以為賑恤之用今查實徵存庫銀一百三十萬兩又將本年運京漕糧令督撫酌量截留為數若干雖未奏到即就兩者現在所存銀米計之已不下五百餘萬矣但賑恤之務必須接濟至明年麥收以前需用既多而經收錢糧陸續徵解尚需時日尤當早為預備期于充裕著於隣省撥銀一百萬兩於歲內解往江南聽該督撫等量地方情形需用緩急酌定數月分貯江蘇安徽藩庫以備按期散給不致臨時缺乏其應撥何省帑銀該部速議具奏欽此

2085 乾隆七年九月十六日奉

上諭原任郎中洪文瀾著仍以戶部主事用欽此

2086 乾隆七年九月二十一日內閣奉

上諭尹繼善已丁母憂川陝總督員缺著馬爾泰前往署理欽此

2087 乾隆七年九月二十四日內閣奉

上諭今歲江南淮徐揚鳳潁泗等處水災甚重米價高昂此等營汛兵丁雖有月給糧餉恐食用尚有不敷著於司庫內各借給餉銀一季俟明年再作四季扣還該部即遵諭行欽此

2088 乾隆七年九月二十四日內閣奉

上諭兵部右侍郎員缺著副都統吉三補授欽此

2089 乾隆七年九月二十五日內閣奉

上諭原任河庫道張師載熟悉河務現在江南河工需員料理著仍命往南河交與完顏偉差遣委用俟有河道缺出題補欽此

2090

乾隆七年九月二十八日內閣奉

上諭前據晏斯盛白鍾山奏報黃河由江南石林黃

村二口漫溢貫注微山南陽等湖所有滕縣魚臺

嶧縣金鄉濟寧臨清衛等六州縣村庄田畝廬舍

多有滄沒朕即降旨令白鍾山前往堵築又據高

斌完顏偉奏稱八月二十七日黃河汎水陡長石

林口減水過多沛縣城池被淹現在竭力運料集

夫無分晝夜緊趕進埽備築臣等坐守該工約計

十月可以完竣等語但查上年六月巡漕御史都

隆額即奏稱石林黃村一帶黃河大勢北趨二口

洩水之處俱被衝刷深濶竟與黃河平接沛縣城

郭形如釜底甚為可危倘旁流漸熟正流漸阻始

則為患民田必妨漕運經工部議令於本年

汎水未至之先將原築土壩修補堅實平整如遇

盛漲有汕刷溝漕即行填補本年三月又經侍郎

周學健奏稱二口雖築有土壩然河水洶湧土壩

单薄倘汎再由此進水則銅沛又被淹沒民將

何堪是石林黃村二口之急宜堵禦自都隆額陳

奏以來已經一載有餘該總河等即應嚴飭廳汛

各員星夜相機修守以為先事預防之計乃並不

竭力董築以致滕沛等縣田畝廬基被冲小民流

移遷徙雖今年河水異漲不比尋常但果能先事

綢繆當不至如此之甚完顏偉已具摺引咎現交

部察議此時正值三冬水涸務必上緊料理倘不

能如期堵築將來或致奪溜阻運定將完顏偉等

從重治罪該部即遵諭行欽此

2091 乾隆七年九月二十九日內閣奉

上諭據高斌德沛等奏稱江南被水地方已漸消退

其高阜之地現諭農民趕種秋麥但低窪處所尚

有積水等語朕思積水未退之處秋麥播種已不

及期若不及早辦理至不及種春麥小民將何以

為計著高斌周學健會同該督撫等多方籌畫務

令水潦速消不誤明年春種庶收穫有望該部可

即行文督撫等知之欽此

2092 乾隆七年九月二十九日奉

旨正紅旗漢軍參領郭威寧著仍以部院郎中用欽

此

2093 乾隆七年九月二十九日內閣奉

上諭現在候補副將恭將遊擊守備內著兵部揀選  
才技優長精明幹練者數員帶領引見候旨欽此

2094 乾隆七年十月初三日內閣奉

上諭據總督高斌奏稱石林水口現在進埽上緊堵  
築約計十月半前可以合龍等語覽之稍慰朕懷  
從前高寶等處低窪積水之地朕已降旨令該督  
撫等多方籌畫務使水潦速消不誤播種春麥茲  
沛縣及山東滕嶧等州縣皆係廣種春麥之地地  
方官尤宜速為料理俾水落田出可以藝麥庶春  
秋可望接濟有資毋得遲緩有妨小民生計該部  
可即傳諭該督撫知之欽此

2095 乾隆七年十月初四日內閣奉

上諭直隸按察使多綸丁憂員缺著江安糧道翁藻  
補授江安糧道員缺著河庫道孫鈞調補河庫道  
員缺著張師載補授欽此

2096 乾隆七年十月初四日內閣奉

上諭秋審為民命所關凡輕重出入必須詳慎以歸平  
允乃今歲山東秋審冊內其緩決之案經九卿改為  
可矜者不少可矜之案經九卿改為緩決者亦多至  
十餘起朕細閱案情九卿所改俱屬允協該署撫魏  
定國並不留心鞠勘辦理該部傳諭申飭之欽此

2097 乾隆七年十月初五日內閣奉

上諭廣西柳州府知府員缺著兵部主事陶士橫補  
授欽此

2098 乾隆七年十月初九日內閣奉

上諭乾隆四年朕曾降旨將秋審朝審緩決五次以上之人犯酌其情罪稍輕尚可貸以生路者比照克盜免死減等之例充發邊遠烟瘴地方較之可矜減等杖流之例為重而較之永遠監禁之犯為輕其情罪可惡者雖經多次緩決亦不在減免之列今已隔數年監禁之犯倍多於前久繫囹圄亦屬可憫著大學士九卿做照乾隆四年之例悉心辦理分別請旨再情實未勾人犯內或有情罪稍輕可以照此辦理者亦著大學士會同刑部分別具奏欽此

2099 乾隆七年十月初十日內閣奉

上諭今年江南淮徐鳳穎等府被水之後籌畫民食需米甚多因山東與江南接壤較易彼地今年歲收成尚好是以降旨將登州穀石及德州臨清兩處所截漕米運往江南以資接濟續據該撫晏

斯盛奏稱登萊等處現需米穀難以撥運江省朕降旨停止今查東省沿河之濟寧臨清二處貯有倉穀一十八萬餘石若以八萬留存本地以十萬石碾米載運江南一水可通甚為有益所有運費悉照前運截漕之例一體報銷著該督即傳諭山東巡撫江南督撫速行妥辦毋得稽遲欽此

2100 乾隆七年十月十一日內閣奉

上諭湖廣廣西秋審情實內饒鳴鶴周鍾瑄許登瀛俱係貪官原應置之重辟但朕按其款蹟與枉法婪贓者尚稍有間特從寬典將三人免死發往軍臺効力贖罪若實係枉法舞弊蹟昭著之員則斷不寬宥將此曉諭中外知之欽此

2101 乾隆七年十月十二日內閣奉

上諭浙江提督員缺著狼山總兵官陳倫炯補授狼山總兵官員缺著黃巖總兵官林祖成調補黃巖總兵官員缺著温州總兵官蔣麟經調補温州總

兵官員缺著湖州協副將陳訓補授欽此

2102 乾隆七年十月十六日內閣奉

上諭福建福州府知府員缺著署晉州知州陸福宜補授欽此

2103 乾隆七年十月十七日內閣奉

上諭由懋著補授吏部右侍郎欽此

2104 乾隆七年十月十九日內閣奉

上諭朕覽今年秋審冊內創墮之案奉天江南江西陝西山西湖廣福建雲南諸省皆有之而山東河南較多直隸為尤甚此等人犯按其情節法所難寬查雍正年間凡為首一次者俱行正法近年以來朕辦理稍寬實出一時不忍不意掘墮之案數倍於前是此等兇惡之徒不可以德感或且因寬而啓玩法之心也夫愚民即為飢寒所迫不免作奸犯科何遂以貪取財物而殘及枯骨慘毒至於

此極此雖人心之無良或亦由平素未知國法視發掘為行竊之常以至干犯嚴條斷無可貸著奉

天府尹及各該省督撫通飭地方有司留心開導諄切勸戒以感動其天良並將律文於各憲明白曉示俾知創墮之情罪如此其重一犯此律即不免於死則奸徒畏法故習不敢復萌而薄俗可因而止息該部即傳諭各該督撫知之欽此

2105 乾隆七年十月十九日奉

旨山西毛清奇不准拔貢發回本學肄業該學政交部嚴加議處餘依議此番進呈各省拔貢試卷朕着取在一等者文理即屬平常則其餘更可知矣至毛清奇將論語本文竟爾錯記尤為荒謬夫拔貢乃造就人才之典今各省所取淺陋若此何以振起文風司衡鑒者不得辭其責嗣後務須矢公矢慎遴選出衆之材以鼓勵多士毋得苟且塞責自干嚴譴欽此

2106 乾隆七年十月二十日內閣奉

上諭廣東水師戰船工准給隨糧一業係

呈考格外之恩乃當時各員辦理未協於未經定例之

先即行支給實屬錯誤理應扣追還項但事隔八

九年現在充役之人多非昔日領糧之人若於各

官名下責令代賠伊等又甚艱窘可為憫惻用是

加恩將粵省應追船工隨糧銀一千三百九十七

兩零米四百三十二石零悉行豁免以示優恤該

部可即行文該督撫提鎮知之欽此

2107 乾隆七年十月二十日內閣奉

上諭西安巡撫員缺著色楞額補授直隸提督員缺

著保祝調補廣東提督員缺著武進陞補授欽此

2108 乾隆七年十月二十日內閣奉

上諭四川布政使員缺著湖南按察使王玠補授湖

南按察使員缺著山東糧道明德補授欽此

2109 乾隆七年十月二十日內閣奉

上諭三和著實授戶部侍郎欽此

2110 乾隆七年十月二十日奉

旨所奏知道了朝鮮國民人越境犯法屢荷寬典乃

朕格外柔遠之恩若無知之人見朕屢次從寬而

漸流於縱肆則犯法者轉多非朕保全外藩民人

之本意該國王當嚴加約束不時稽查俾各安分

不致再罹法網該部即行文該國王知之欽此

禮部摺

2111 乾隆七年十月二十日奉

旨提督永常任內應得之項僅足供伊日用之費若

所給夷使緞足恭布等物皆出自己費未免拮据

著照北路軍營之例准其動用公項欽此

2112 乾隆七年十月二十一日內閣奉

上諭福建提督蘇明良著調補廣東提督新授廣東提督武進陞著調補福建提督欽此

2113 乾隆七年十月二十七日內閣奉

上諭朕覽給事中楊二酉條奏內稱滿洲用為外任恐伊等於子民之道多未講習一旦驅為民牧有失開檢頓罹叅處殊為可惜等語夫天之生才原不因地而異徒前滿洲之未用府縣者因人數不多僅足敷京員之用今教養已及百年人材數倍於前登用之途因而壅滯夫內任外任莫非王事除授守令正可使通民情習吏治也豈在京刑名錢穀之屬無一不辦而獨不可辦郡縣之事乎且在外督撫司道皆可勝任獨至郡縣乃不可乎今之狡黠者又謂朕之此舉為滿洲生計起見而滿洲中之卑鄙者亦安於此而不以為恥其實不喻朕意之至矣今楊二酉稱以為滿洲未諳子民之

道獨不思漢人中或係膏粱纨绔徒事輕肥或學究卑寒專心時藝如農夫之蓄畬耕獲商賈之貿遷有無以及催科誦盜聽訟察姦講律令防胥吏諸務頭緒紛繁情偽百出豈能一一通曉亦不過延請幕賓隨時學習而已朕每當月選引見進士舉貢等官其中衰老遲鈍者甚多朕不過擇其龍鍾頹憊者二三人或令休致或改教職此外各員因其需次多年未有過失不忌緊令廢棄姑且試用此等人豈能熟練政治勝民社之寄稱循良之選今所用之滿洲比之此輩勝甚况居官者果能隨地留心即仕為學識見日日增長未有學養子而後嫁此非聖人之明訓哉且滿員之例其用為道府者先由堂官保舉用為州縣者皆係科甲出身而考試履歷時朕必閱其文理帶領引見時朕又看其人材再三詳審可用者用之不可者仍復留京豈至銓選非人為地方之累耶楊二酉又稱噶爾吉善奏齊拉渾寶平一葉雖營弁非親民之官然官方治體殊無二致欲培植之不可不求

所以成全之又稱督撫身任地方固不敢滿漢歧視稍示姑容而於此等初任滿員必加意訓勉俾知鼓勵倘怙終不悛仍登白簡以儆官邪等語楊二酉一人之奏前後自相矛盾蓋彼胸中先存歧視滿洲之見故持論不得其平若此如謂督撫護庇滿洲則喀爾吉善滿洲也而叅劾滿屬員其不敢護庇亦已顯然如因滿洲有齊拉軍寶平之勇員而遂謂滿洲不可外任則累年以來漢人之以劣蹟被叅者不知凡幾亦將謂漢人不可用乎朕君臨天下一本大公滿漢臣工視為一體栽培傾覆悉視乎其人之自取初無所屬心於其間即現在之督撫亦未必有庇護滿洲者但歲月久長賢愚不肖倘用出之滿洲有沾沾以生計為念而蘆篋不飭者朕必重治其罪諒督撫若稍有瞻顧徇情之意即非公忠體國之大臣朕一有見聞必加以嚴譴並將滿洲外用之例停止為督撫者諒不肯以己身之功名而博他人之感悅並阻將來滿洲仕進之階是非愛之實以害之也楊二酉既有

此奏或將來應用府州縣之員其中有不諳文義恐被幕友所欺者亦未可知著吏部於伊等未用之先每年考試一次朕派大臣檢閱分別優劣進呈御覽記名候缺其文理不通者不准外用如此庶於吏治人材均有裨益矣朕恐內外臣工不識朕意特行宣諭俾共知之楊二酉摺並發欽此

2114 乾隆七年十月二十八日內閣奉

上諭巡視南漕都隆額著即速前往淮安一應查看事宜協同顧琮辦理欽此

2115 乾隆七年十月二十八日內閣奉

上諭保祝未到任之前直隸提督印務著宣化提兵官李質粹前往署理欽此

2116 乾隆七年十月二十八日內閣奉

旨提兵李質粹之子送到京時著提管內務府大臣帶領引見欽此



2117 乾隆七年十月二十九日內閣奉

上諭革職知州史載魁曾在臺站効力著仍發臺站効力贖罪保三年無過管臺官員奏請開復欽此

2118 乾隆七年十月二十九日奉

上諭革職巡撫王士任著發往軍臺効力欽此

功公奉

2119 乾隆七年十月二十九日內閣奉

上諭前據漕運總督顧琮具奏江南漕米耗贈請免停支一案朕交大學士會同該部議奏茲據議稱停支之例相沿有年應仍照浙省之例辦理今顧琮摺奏浙江與江南情事種種不同江省此項始以軍興而議裁繼以欠糧而請復自復給之後已三十餘年現在全支尚多拮据若行裁減則丁力既絀轉運維艱等語旂丁挽運辦公朕所軫念此漕耗一項既有歷年支領之成規著照舊給領永免停支俾丁力寬舒轉漕無誤他省亦不得援以

為例該部即傳諭漕運總督等知之欽此

2120 乾隆七年十一月初一日內閣奉

上諭雲南楚姚鎮總兵員缺著董芳補授開化鎮總兵員缺著賽都補授欽此

2121 乾隆七年十一月初一日奉

旨載臨前因其懶惰朕曾降旨永行停俸今著賞給原俸嗣後若仍然懶惰不思勉供職不但停俸必將伊沒重治罪欽此

2122 乾隆七年十一月初四日內閣奉

上諭浙江布政使王恕病故其員缺著東按察使潘思傑補授廣東按察使員缺著江蘇糧道李學裕補授江蘇糧道員缺著西安糧道納敏調補西安糧道員缺著御史舒輅補授欽此

2123 乾隆七年十一月初五日內閣奉

上諭國家設兵所以衛民而將弁則又管轄兵丁者

也各宜整飭營伍操練騎射修葺器械精熟技藝

且時時訓誡得之有勇知方凜遵法度一切地方

事務不得越俎干預斯為能稱厥職乃聞省向未

武備廢弛兵丁久染惡習而武弁又復袒護姑容

遂至肆無忌憚即如漳浦縣殺死知縣一業子龍

小刀會內即有兵丁連結此則干犯法紀之尤甚

者朕又聞得彼地積習如會盟結黨逞兇聚毆並

造作匿名揭帖等事或有兵丁串通或係兵丁誣

捏凡屬百姓之作奸犯科者多有兵丁在內至恭

遊都守等官並不將如何訓練禁約兵丁之處稟

報該上司惟將地方瑣屑之件朦混具稟以為挾

制有司之具無怪乎兵氣日驕目無國憲重為官

民之害也著該督撫提鎮等嚴飭各將弁自今以

後務令約束兵丁申明條教俾洗心滌慮痛改前

非倘再有百姓不法之案營兵在內指使牽連者

發覺之日將該管弁員即行糾參從重議處決不寬貸該部即行文閩省使眾知之欽此

2124 乾隆七年十一月初六日奉

旨

南郊之日著於日出前五刻請駕即於是刻恭請

神位朕由齋宮仍入更衣幄次候安奉畢詣壇行禮餘

依議欽此

太常寺摺

2125 乾隆七年十一月初七日內閣奉

上諭今年畿輔地方秋成豐稔米糧饒裕正當樽節

愛惜以備將來之用朕聞私開燒鍋者頗多蓋愚

民無知止貪目前小利而不計日後之匱乏著署

督史貽直嚴飭所屬實力禁止毋得視為具文其

他省豐收地方該督撫應一體遵行欽此

2126 乾隆七年十一月初九日內閣奉

上諭天時有兩勝地土有高下而年歲之豐歉因之以天下之大疆域之殊歟於此者或豐於彼全賴有無相通緩急共濟在朝廷之採買撥協固自有變通之權宜斷無有於米穀短少之虞而強人以糶責者若有收之地商賈輻湊聚集既多價值自減則窮黎易於得食此隣省之相周與國家賑卹之典相濟為用者也

皇考與朕俱曾屢領暹羅之禁惟是地方官民識見未廣偏私未化未免以米糧出境稍多價值漸貴雖不敢顯行遏糶之事靡不隱圖自便之私羣相禁約有司又從而偏袒之遂視隣省為秦越矣用是再頒諭旨著各省督撫各行勸導所屬官民毋執畛域之見務敦拯卹之情俾商販流通裒多益寡以救一時之困厄將來本地或值歉收又何常不於隣省是賴並將此曉諭官民共知之欽此

2127 乾隆七年十一月初十日內閣奉

上諭錢糧之有耗羨蓋經國理民事勢之必不能已者未歸公以前耗羨無定制有司之賢者兢守法不敢踰閑不肖者視為應得之項盡入私囊一遇公事或強民輸納或按畝派捐濫取橫徵無所底止且州縣以上官員養廉無出於是收受屬員之規禮節禮以資食用而上官下屬之間時有交際州縣有所藉口恣其貪婪上官瞻徇而不敢過問甚至以餽遺之多寡為黜陟之等差吏治民生均受其弊

皇考俯允臣工之請定耗羨歸公之法就該省舊收火耗之數歸於藩司酌給大小官員養廉有餘則為地方公事之用小民止各循其舊有之常有輕減無加溢也而辦公有資捐派不行有司之賢者固無所用其矯廉而不肖者亦不能肆其貪取此愛養黎元整飭官方之至意並非為國用計為此舉也且以本地之出產供本地之用度國家並無所

利於其間然通天下計之耗羨數用之處不過二三省其餘不足之處仍撥正供以補之此則臣民未必盡知者此十數年中辦理耗羨之梗槩也朕御極以來頗有言其不便者朕思古人云琴瑟不調甚者則解而更張之此事若宜變通何可固執是以留心體察並於今年廷試時以此策問諸生乃諸生奏對不過敷衍成文全無當於實事旋降旨詢問九卿翰林科道並各省督撫等今據諸臣回奏大抵皆以為章程一定官民久已相安不宜復議更易眾論僉同其中偶有條陳一二事者不過旁枝末節無關於耗羨歸公之本務也朕再四思維耗羨在下則州縣所入既豐可以任意揮霍上司養廉無出可以收納餽遺至於假公以濟私上行而下做又不待言矣則向日朕所聞者未必不出於願耗羨之在下以濟其私者之口傳曰作法於涼其弊猶貪作法於貪弊將若之何朕日以廉潔訓勉臣工今若輕更現行之例不且導之使貪重負哉

皇考惠民課吏之盛心乎此事當從眾議仍由舊章特

領諭旨俾中外臣民知之餘著照大學士等所議

行欽此

2128 乾隆七年十一月十二日内閣奉

上諭直隸順德府知府員缺著保定理事同知王麟

補授欽此

2129 乾隆七年十一月十二日奉

旨兵燹所奏情節著完顏偉明白回奏欽此

2130 乾隆七年十一月十八日内閣奉

上諭卽念祖託庸唐綬祖俱著實授布政使蘇昌李

錫泰俱著實授按察使欽此

2131 乾隆七年十一月十八日内閣奉

上諭近年以來外省保送年滿千總似覺過多伊等一時不能得缺未免轉致壅滯嗣後著各省督撫

提鎮於保送時留心揀擇如果才技優長及有軍功勞績者方可咨部引見毋得濫行保送欽此

2132 乾隆七年十一月十八日內閣奉

上諭朕御極以來廣開言路凡臣工條奏有當於事理者無不見諸施行其在可行可止之間者則發交部議外廷皆知之至於陳奏錯悞乖舛必不可行者往往姑畧留中未發又或有所言近是而尚須緩酌者或有陳奏之件出於淺識曲見朕明知其無益即勒交該部亦必不議行者或有勸襲規勉之陳言而不達事情無補政治者如此等類俱在留中之內朕畧陳奏之是非寓隱揚之深意正欲導之使言惟恐伊等有所顧忌而甘於緘默也乃近日御史中有謂一切條奏皆不應留中者一人所奏如此衆人未必不存此見竟似朕不樂聞諫將應施行之事故為中寢此則不知朕意之甚者矣特頒此旨曉諭言路諸臣知之欽此

2133 乾隆七年十一月二十日內閣奉

上諭今歲江南疊被水災河防水利甚關緊要深為懸念大學士陳世倌屢次陳奏朕見其有中肯綮者必有以成底績之功也著即馳驛前往會同高斌等查勘辦理欽此

2134 乾隆七年十一月二十日內閣奉

上諭明罰勅法貴乎持平過於寬則失之縱過於嚴則失之刻俱非明允之道今年朝審秋審情寔累件因兩年停刑是以勾決者較往時為多此皆九卿公同議定之成讞朕於刑部進招冊之後逐一詳閱及勾到時又與大學士刑部堂官等再三推究凡有一線可生者姑且沒緩必求其生而不得然後寘之於法在朕心惟期至平並非有意沒嚴而如此辦理也但恐外省督撫揣摩觀望之習不能盡除見今年勾決之人稍多遂妄臆朕意在嚴凡承辦刑獄之事相率而趨於刻覈則大違

朕之本懷若見此諭旨或又以朕意在寬相率而流於姑息則更非明允之道於明刑弼教之訓大相逕庭矣今日給事中倪國璉所奏與朕意相合特頒此旨諭各省督撫等知之倪國璉摺并發欽此

2135 乾隆七年十一月二十四日奉

旨據禮部奏稱冬至前一日視

祝版常例御補服今恭遇

皇太后聖誕係穿吉服日期視

祝版詣齋宮俱應御龍袍補服等語朕思乘輦前往齋

宮鹵簿全設大禮所關自應御龍袍補服嗣後若

遇預日應詣齋宮齋宿之祭其視

祝版詣齋宮俱應龍袍補服隨從人等俱穿吉服永著

為例欽此

2136 乾隆七年十一月二十七日內閣奉

上諭四川重慶總兵官邵銓著調補松潘總兵官松

潘總兵官杜凱著調補重慶總兵官欽此

2137 乾隆七年十二月初二日內閣奉

上諭科道為朝廷耳目之官關係最要朕前降旨令大學士九卿督撫各舉所知以備選用乃公聽並觀博採衆論之意今諸臣俱已奏到特將原摺發交吏部內侍郎周學健所保三人皆係江西人夫三人之多別省豈無一二入選者而均係伊本鄉此風不可開周學健著飭行所保三人不准考試引見外科道職司言路必通達古今明曉政體方能隨事敷陳有所裨益所謂明試以功必先敷奏以言也其在京各員著吏部傳齊擇日請旨考試再候旨帶領引見其在籍人員行文調取來京考試引見外任各員俟伊有公事到京吏部奏開考試引見至於或宜內用或宜外用總於引見時量材器使若所舉之人既用之後有行止不端貪贓犯法者將原保大臣嚴加議處欽此

2138 乾隆七年十二月初二日內閣奉

上諭福建詔安縣知縣王宏珏恭革其員缺甚屬緊要現在自有署理之人著傳諭該督撫若署員能勝此任即著補授若尚不能勝任可於通省知縣中揀選調補嗣後缺出仍歸部選欽此

2139 乾隆七年十二月初二日內閣奉

上諭左副都御史仲永禮著馳驛速往江南會同周學健辦理查賑事務欽此

2140 乾隆七年十二月初三日內閣奉

上諭貴州古州總兵官員缺著鎮遠總兵官崔傑調補欽此

2141 乾隆七年十二月初三日內閣奉

上諭朕令翰林科道輪進經史講解原以闡發經義考訂史學也而年來諸臣所進往往借經史以牽引時事或進獻詩賦與經史本題無涉甚失朕降

旨之本意即如今日翰林周長發進呈禮記講章內稱皇上先詣齋宮齋宿審定郊祀樂章禮明樂備千載一時宜其誠敬感格未郊之先瑞雪屢降齋祀之際風日晴和大禮既成宜宣付史館等語夫

郊

廟禮樂乃

皇祖

皇考久定之成規朕不過畧加恭定並非創為制作也至於

郊祀之時風日晴和亦適逢其會耳况江南淮徐現被水災朕方憂勞徹場宵旰不遑豈肯聽受諛辭而遂以為瑞應乎周長發著嚴飭行並將此旨傳諭翰林科道等知之欽此

2142 乾隆七年十二月初十日內閣奉

上諭廣東按察使李學裕著調補江蘇按察使江蘇按察使陳高翔著調補廣東按察使欽此

2143 乾隆七年十二月初十日內閣奉

上諭江南山陽阜寧安東清河桃源淮安大河等七縣衛壘被災稔民困苦今年賑濟夏災時每米一斗照例折銀一錢嗣因地方米價昂貴一錢之價不能買米一斗朕加恩增至一錢二分今部中將秋災案內米價准其折給一錢二分而夏災案內仍照一錢之數此遵定例辦理者但山陽等七縣衛被水較他處更重自應格外施恩著將夏災所賑米價准與秋災一例報銷每米一斗准折銀一錢二分該部可即傳諭江南督撫等知之欽此

2144 乾隆七年十二月十一日莊親王允祿等奉

上諭仲永檀密奏留中之摺鄂容安如何問及仲永檀如何告知臣工密奏之事豈容如此宣洩仲永檀鄂容安俱革職拏交慎刑司著莊親王履親王和親王平郡王大學士張廷玉徐本尚書訥親來保哈達哈審明具奏欽此

2145 乾隆七年十二月十一日內閣奉

上諭我朝文臣無封公侯伯之例大學士張廷玉伯爵係格外加恩彼時伊奏請給與伊子張若靄承襲之處不合今著帶於本身伊子張若靄不必承襲欽此

2146 乾隆七年十二月十二日內閣奉

上諭湖北黃州府知府王繹曾著調補襄陽府知府荊州府知府塞克圖著調補安陸府知府安陸府知府劉士銘著調補荊州府知府黃州府知府員缺著禹殿鰲補授欽此

2147 乾隆七年十二月十三日將廣州將軍阿爾賽

之子候選州同常永遵

旨帶領引

見奉

旨常永著交與河南巡撫雅爾圖以相當之缺對品

補用欽此



2148 乾隆七年十二月十四日內閣奉

上諭安徽巡撫張楷年逾七十該省現有辦賑之事恐其精力不能周到著來京候旨安徽巡撫員缺著喀爾吉善調補即速赴任欽此

2149 乾隆七年十二月十四日內閣奉

上諭王夔年逾七十精力衰憊著免其坐臺准回原籍欽此

2150 乾隆七年十二月十五日內閣奉

上諭廣東潮州府屬新設豐順一縣在於黃岡潮二  
二協營抽撥兵丁二百名前赴豐順駐防查黃岡  
至豐順計程二百七十里潮陽至豐順計程三百  
一十里兵丁搬移家眷未免盤費艱難其黃岡移  
駐者每兵一名酌賞銀四錢眷口大口每名賞給  
銀三錢十五歲以下小口按名減半其潮陽移駐  
者每兵一名賞銀五錢眷口大口每名賞給銀四  
錢小口按名減半即於該營收存公費內支給該

部可傳諭該省督撫等知之欽此

2151 乾隆七年十二月十六日和碩莊親王臣允祿

等奉

上諭朕細閱鄂容安仲永檀供詞伊等往來親密於未奏以前先行商謀既奏以後復行照會二人俱已供出明係結黨營私糾恭不睦之人爾等祇擬以洩漏機密事務之律不合著會同三法司另行嚴審定擬具奏欽此

2152 乾隆七年十二月十七日內閣奉

上諭江西巡撫陳弘謀奏稱按察使凌燾母年已逾八旬懇請終養著准其回籍養親江西按察使員缺著四川按察使李如蘭調補四川按察使員缺著福建延建邵道姜順龍補授延建邵道員缺著汀漳道陳樹著調補汀漳道員缺著泉州府知府王廷諍補授欽此

2153 乾隆七年十二月十八日奉

上諭王大臣等審詢仲永檀鄂容安一案今日奏請刑訊仲永檀鄂容安並將大學士鄂爾泰革職拿問此奏又屬錯誤此案前經王大臣會審時仲永檀鄂容安已將平日往來親密並將具奏事件前後商量情節一一供出夫以仲永檀如此不端之人而鄂爾泰於朕前屢奏其端正直率則其黨庇之處已屬顯然久在朕洞悉之中若欲將伊革職拿問則已於前日降旨何待爾等今日之奏請蓋以鄂爾泰乃

皇考遺留之大臣於政務尚為諳練朕不忍以此事深究若以此事深究不但罪名重大鄂爾泰承受不起而國家少一能辦事之大臣為可惜耳但其不能擇門生之賢否而奏薦不實不能訓伊子以謹飭而葛藤未斷之處朕亦不能為之屢寬也鄂爾泰著交部議處以示薄罰朕辦理此事

皇考在天之靈自能洞鑒鄂爾泰嗣後當洗心滌慮痛

改前愆以副朕恩倘仍前不檢鄂爾泰自思之朕從前能用汝今日能寬汝將來獨不能重治汝之罪乎至爾等奏請將仲永檀鄂容安加以刑訊伊等俱曾為三品大臣又豈可以盜賊罪犯重加三木則不過套夾一訊為汝等斷案章本又何必多此一番奏請乎況此事情跡已明無庸刑訊仲永檀受朕深恩由御史特授副都御史乃依附師門將密奏密奏之事無不預先商酌暗結黨援排擠不睦之人情罪甚屬重大鄂容安在內廷行走且係大學士之理應小心供職閉戶讀書乃向言官商量密奏之事情罪亦無可逭但較之仲永檀尚應未減爾等可定擬具奏欽此

2154 乾隆七年十二月十九日內閣奉

上諭據駐防哈密安西提督永常奏稱乾隆三年十一月十八日接軍機大臣議定防所倒斃駝馬每年分款按額准銷之文迄今俱遵照辦理惟有自乾隆二年八月十五日之後至三年十一月十八

日接奉定例之前此年餘之間哈密赤金廠內共倒馬八百二十六匹因俱在未定額數之前屢經提臣援照寬免之例送部請銷部覆按例准銷五百九十七匹其餘二百二十九匹乃逾額之項非奏明之項可比應令著賠臣查經官弁兵久已換班回營其中不無陞遷事故若逐一行催勢必累及妻子可否邀恩准銷等語此項例前逾額之馬雖無准銷之例然邊地弁兵力量艱難朕所軫念著格外加恩准其一體報銷以示優恤該部可即行文該督撫等知之欽此

2155 乾隆七年十二月二十一日內閣奉  
上諭浙江按察使員缺著山東兗沂道萬國宣補授  
欽此

2156 乾隆七年十二月二十一日奉  
上諭據四川提督鄭文煥奏總兵杜愷性氣剛戾行事過急地方大小公務未免任性矜張辦理頗多

失宜更於夷情不諳等語杜愷性氣剛急朕所素知前已降旨將伊調補重慶總兵官今鄭文煥既有此奏杜愷著來京候旨其所遺重慶總兵員缺著三格補授欽此

2157 乾隆七年十二月二十一日奉  
上諭盛京工部侍郎偉璉人糊塗不勝侍郎之任著原品休致欽此

2158 乾隆七年十二月二十一日內閣奉  
上諭浙江溫州鎮總兵官陳訓著調補廣東高廉鎮總兵官高廉鎮總兵官楊恩著調補浙江溫州鎮總兵官欽此

2159 乾隆七年十二月二十一日內閣奉

上諭廣東提督員缺著金門鎮總兵官林君陞補授  
金門鎮總兵官員缺著澎湖副將孟仕進補授令  
總督那蘇圖試看如或不稱此任可於本省總兵  
內揀選一員奏調補所遺員缺即將孟仕進補授  
欽此

2160 乾隆七年十二月二十一日奉

上諭我朝崇尚本務原以弓馬清文為重而宗室誼  
屬天潢尤為切近向來宗室子弟俱講究清文精  
熟騎射誠恐學習漢文不免流於漢人浮靡之習  
是以順治年間

世祖章皇帝諭宗人府朕思習漢書入漢俗漸忘我滿  
洲舊制前准宗人府禮部所請設立宗學令宗室子  
弟讀書其內因派員教習滿書其願習漢書者各聽  
其便今思既習滿書即可將繙譯各樣漢書觀玩著  
永停其習漢字諸書專習滿書爾衙門傳示所以敦  
本實而熟浮華也近因雅爾哈善條奏設立宗學

以漢文教習宗室子弟迄今已歷數年昨經考試  
並無佳卷即繙譯諸卷亦屬平常此非過求文字  
出色其實在明通者甚難其選即所取三三人不  
過就短取長文理稍順而已尚恐未必盡出心裁  
或不免彼此商榷湊集成文之事其於造就之方  
究無裨益但既經考試著宗人府將所取之人照  
例帶領引見嗣後宗室子弟或有不能學習漢文  
者應聽其專精武藝其在宗學肄業者考試之時更  
應益加嚴肅至宗室進身之階原有製封世職又  
可揀選侍衛及護軍恭領等缺與其徒務章句虛  
文轉致荒廢本務不如嫻習武藝崇實黜浮儲為  
國家有用之器也可傳諭宗人府將此旨明白曉  
諭宗室人等知之欽此

2161 乾隆七年十二月二十二日內閣奉

上諭福建泉州府知府員缺甚屬緊要著該督那  
圖於通省知府內揀選一員調補其所遺員缺  
將俞敦仁補授俞敦仁著往福建候補欽此

2162 乾隆七年十二月二十六日內閣奉

上諭臺灣地隔重洋一方孤寄實為數省藩籬最關

緊要雖素稱產米之區通來生齒倍繁土不可闢

偶因雨澤愆期米價即便昂貴益緣撥運四府及

各營兵餉之外內地採買既多並商舡所帶每年

不下四五十萬又南北各項米臺小舡巧借失風

名色私裝米穀透越內地彼處緊給失風舡照奸

民恃為護符運載遂無底止且將手之徒乘機偷

渡米臺莫可究詰聞此項人等俱從廈門所轄之

曾厝垵白石頭土擔南山邊劉武店及金門所轄

之料羅金龜尾安海東石等處小口下舡一經放

棹不由底耳門入口任風所之但得片土即將人

口登舡其舡遠棹而去愚民多受其害况臺灣惟

藉鹿耳為門戶稽查出入今任游匪潛行往來海

道使契將鹿耳一門亦難恃其險要殊非慎重海

疆之意朕所聞如此著該督撫提鎮嚴飭所屬文

武官弁將以上各弊一一留心清查並於汛口防

範圍容不使稍有疎縱庶民番不至缺食港路亦  
可肅清該部可即傳諭知之欽此

2163 乾隆七年十二月二十六日奉

上諭江南河道總督職任最為重大必得熟悉情形

經練幹濟之人方有裨益今年河湖異漲原非尋

常可比而議者皆以不能先事預防及時捍禦歸

罪於河臣甚非情理之平即條奏之人亦並未身

歷其地輒以臆度之論紛紛陳說及加考查皆必

不可行之事其為害於河工甚大若因議論紛起

即將河臣加以處分則後之庸此任者愈難辦理

矣但完顏偉由按察使陞任河道總督素未諳練

河務且到任未久驟遇如此水災未免措置倉皇

此實有之朕思河東河務較之江南尚易料理完

顏偉著調補河東河道總督白鍾山歷任南河頗

稱練習著調補江南河道總督欽此

2164

乾隆七年十二月三十日內閣奉

上諭江南水災之後幸冬間地畝涸出者多明春耕  
種刻不容緩然非耕牛則農功不能興舉小民於  
荒歉之時餵飼艱難往往賤價鬻賣甚至私宰者  
有之況前巡撫陳大受早見及此曾將籌畫辦理  
之處奏聞今正當春融播種之際著該督撫飭諭  
有司勸諭災民愛護牛隻或照陳大受所奏借給  
草價以資餵養倘有圖一時之利輕鬻耕牛者即  
行懲治毋得以為民間細事淡漠視之欽此

2165 乾隆八年正月初二日內閣奉

上諭上年江南淮徐鳳穎等府遭值水灾朕宵旰焦勞無一時釋於懷抱特遣大臣會同督撫百計經理不惜千萬帑金期登斯民於衽席頃據陸續奏報被水之地漸次涸出冬間可以種麥石林决口亦已堵築水勢減落朕心稍慰但念兩江受水之地甚廣其現在已經涸出者民間努力耕種自不待言其沮洳將涸者開春佈種春麥大麥及雜糧之屬亦可冀望有收惟是最窪之地積水較深有非人力所能計日宣洩者倘春月不能趕種春麥雜糧而停賑之期已屆窮民何以為生朕思慮及此深為憫惻用是特頒諭旨著欽差大臣及該督撫將實在不能涸出耕種之地一一確查所有饑口若干按其情形酌定月分接續賑恤毋使失所此朕格外之恩該大臣等應共仰體妥協辦理以副朕保惠黎元之至意欽此

2166 乾隆八年正月初二日奉

上諭湖廣總督孫嘉淦著來京候旨俟審理謝濟世一案完竣後即由湖南起身湖廣總督員缺著廣東將軍阿爾賽補授廣東將軍員缺著福建將軍策楞調補兼管粵海關

事務福建將軍員缺著都統新柱補授兼管閩海關事務

欽此

2167 乾隆八年正月初二日內閣奉

上諭仲永檀漏洩密奏一案由于仲永檀趨附鄂容安而鄂容安因向伊詢問原屬多事理應懲治但鄂容安從前在阿哥書房行走尚好伊父大學士鄂爾泰年老有疾鄂容安從寬免發臺站仍在阿哥書房行走嗣後當閉戶讀書不預外事倘因現在革職在書房行走不似從前盡心朕必重治其罪大學士鄂爾泰當嚴切教訓之欽此

2168 乾隆八年正月初二日內閣奉

上諭江寧織造李英著回京候旨江寧織造員缺著管理粵海關稅務伊拉齊補授兼管龍江西新關務欽此

2169 乾隆八年正月初十日內閣奉

上諭據甘肅巡撫黃廷桂奏稱蘭州府知府宋安仁現在題參其員缺請以甘州府知府李元英調補甘州府知府員缺請以寧夏府知府年融調補寧夏府知府員缺請以楊瀨補授俱著照所請行該部知道欽此

2170 乾隆八年正月十三日內閣奉

上諭前據浙閩總督那蘇圖等奏稱閩省需用米數懇請截留江浙漕米二十萬石運閩備用部議未會准行在部臣持籌全局立議固屬允當但閩省產米無多轉輸不易那蘇圖為預籌積貯起見恐一時豐歉不齊臨期難于部署復申前請著照所奏將浙江尾幫漕米截留十萬石運赴閩省以裨並緩急計漕臣奉到此旨之日正浙省尾幫抵蘇之時查乾隆三年撥江廣之米運往閩省總兵陳倫炯曾將米石由長江換海船出口海運直抵閩省此番亦應就近由海運閩更為便捷該部即速行文漕運總督及江南督撫並崇明總兵張天駿知之欽此

2171 乾隆八年正月二十日內閣奉

上諭吳拜著補授倉場侍郎賽爾赫著調補內閣學士兼禮部侍郎欽此

2172 乾隆八年正月二十日內閣奉

上諭國子監祭酒員缺著開泰補授欽此

2173 乾隆八年正月二十二日內閣奉

上諭今日永謙奏請隨往奉天謁陵大典文武臣工孰不願隨行若聽自行奏請豈能驟准前往自應候朕派出遵行為是著傳諭滿漢文武臣工知之欽此

2174 乾隆八年二月初八日奉

旨李紱准以原品休致該部知道欽此

2175 乾隆八年二月初九日內閣奉

上諭昨因考選御史試以時務策杭世駿策稱意見不可先設畛域不可太分滿洲才賢雖多較之漢人僅什之三四天下巡撫尚滿漢參半總督則漢人無一焉何內滿而外漢也三江兩浙天下人才淵藪邊隅之士間出者無幾今則果于用邊省之人不計其才不計其操履不計其資俸而十年不調者皆江浙之人豈非有意見畛域等語國家選舉人才量器使隨時制宜自古立賢無方乃帝王用人之要道滿漢遠邇皆朕臣工輿為一體朕從無岐視若如杭世駿之論必分別滿洲漢人又于漢人之中分別江



浙違省是乃設意見分吟域之甚者何所見之悖謬至此  
況以現在而論漢大學士三缺江南居其一浙江居其二  
漢尚書六缺江南居其三侍郎內之江浙人則無部無之  
此又豈朕存吟域之見偏用江浙之人乎至于用人之際  
南人多而間用北人北人多而又間用南人皆撫之中有  
時滿多于漢或有時漢又多于滿惟其才不惟其地亦因  
其地復量其才此中裁成進退權衡皆出自朕心即左右  
大臣亦不得忝預况微末無知之小臣乎且國家教養百  
年滿洲人才輩出何事不及漢人杭世駿獨非本朝臣子  
乎而懷挾私心敢于輕視若此若稍知忠愛之義者必不  
肯出此也杭世駿著交部嚴察議奏欽此

2176 乾隆八年二月初十日奉

旨這所奏情節著與孫嘉淦秉公據實一併審理具奏原札  
詳冊并發欽此 都察院據碩額咨據倉德彙摺摺

2177 乾隆八年二月初十日內閣奉  
上諭今歲秋間朕恭謁

祖陵所有內外本章按日呈覽部院臣工摺奏隨本進呈一切  
辦理事宜與朕在京無異惟是外省督撫提鎮等奏摺向  
來俱係差人賫奏此等賫摺之人道途遙遠萬一馬驟疲  
乏風雨阻行未免稽遲時日著自起鑿之日為始凡有外  
省奏摺俱賫赴在京總理事務王大臣處加封文內閣隨  
本呈送行在候朕批示隨本發回仍于總理處交付賫摺  
之人祇領該部即傳諭該督撫提鎮等知之欽此

2178 乾隆八年二月初十日內閣奉

上諭張楷著補授內閣學士兼禮部侍郎山西巡撫員缺著  
劉於義補授福建巡撫員缺著孫嘉淦署理孫嘉淦俟謝  
濟世一案審題完竣即由湖南前赴閩省不必來京請訓  
劉於義奉到諭旨之日即赴山西之任不必候孫嘉淦交  
代欽此

2179 乾隆八年二月十二日內閣奉

上諭據奉天府府尹霍倫奏稱奉天一省山海文錯幅頓遠  
濶止有一府十三州縣牧令之外並無佐貳協辦一切應  
查辦之項事屬紛繁非本任所能兼顧又無閒員可以差  
委請于候補候選知州知縣人員內揀選四員來奉委用  
俟著有勞績酌量題補等語著照該府所請吏吏部于候  
補候選州縣人員內揀選帶領引見欽此

2180 乾隆八年二月十五日內閣奉

上諭江南河防水利現在興工關係緊要國家不惜數百萬  
帑金期為地方久遠之計倘錢糧不無虛冒工程不能堅  
固則莫安民生之舉適以飽官吏之私索向來河員樂于  
興工希圖溢銷前車可鑒現今督撫止泚道員數人督率  
辦理但該道等兼有地方之責未免查核不周以致專護  
工員多滋獎賞于巨工無益著九卿于候補候選道府內  
各將所知家道報實才可辦事之員照例舉出交與吏部  
帶領引見發往江南令督臣河臣分別派委與現泚之道  
員一同辦理工務如果實心辦事該督等酌量題補倘有  
侵剋貪劣等情除按律治罪外仍將保舉之人照例處分  
欽此

2181 乾隆八年二月十六日內閣奉

上諭江南地方緊要且現在賑恤河防尚多未竟之緒更須  
加意經畫德沛未能勝任著來京候旨兩江總督員缺著  
尹繼善前往署理並協同河道總督白鍾山料理河務即  
馳驛赴任會同大學士陳世倌總督高斌侍郎周學健將  
現在定議辦理之處悉心講論再加商酌定局後陳世倌  
高斌周學健俱各回任欽此

2182 乾隆八年二月十六日奉

旨御史胡定奏湖南巡撫許容一摺朕細覽閱若許容  
懷挾私心誣奏屬員欺蹟皆虛則許容有玷封疆之任自  
有應得之處分倘胡定因謝濟世曾為御史有心袒庇或  
係彼此交結暗通信息亦未可定若止係風聞則謝濟世  
被奏未久京師傳聞不能如此迅速亦不能如此詳盡何  
以胡定摺內竟若目覩者然此案關係封疆言路必須徹  
底審明辨白是非以示懲儆著侍郎阿里衮馳驛前往會  
同孫嘉淦秉公察審具奏胡定著帶往看當欽此

2183 乾隆八年二月十七日內閣奉

上諭據總理青海夷情副都統宗室莽鵷齊奏代奏玉樹莊百戶楚胡魯台吉之子達什策令稟稱所屬番人米拉等二十五戶被郭羅克賊搶奪馬牛牲畜餉口無資所有應納馬育求暫免二三年俟元氣稍復照例輸納等語番民寒苦深可憫惻所有每年應納馬貢著寬免五年欽此

2184 乾隆八年二月十九日內閣奉

上諭朕君臨天下受養黎元拯災恤困夙夜孜孜惟思去其顛危登之衽席並望風俗茂美人心淳樸各葆天良以召和氣夫然而朕責始盡朕心始慰上年上下江夏秋被水朕痾瘵念切蠲賑頒施特命大臣前往會同該督撫等加意撫綏又令興修水利整理河防救目前之災荒弭將來之水患所費帑金以千萬計而倉庫漕儲遠近接濟凡有關於民食者莫不移緩就急養欲給求所以體

上天仁愛之心盡父母斯民之道亦既殫宵旰之經營矣為士庶者當知國家恩恤已逾常格務各安其本業共勸勉為馴良始無負朝廷勤恤民隱之至意乃聞各屬災民其實知感恩靜待給賑者固多而無知愚氓有以查賑稍遲聚眾強求者且有並未遲緩已得賑糧仍隨眾扳號希心分

外者更有狡猾之徒本籍賑過即携眷逃荒復赴鄰境留養及至下月又奔回本籍領賑者甚而非無業貧民串通胥吏混入賑冊或依籍聲勢冒濫與賑種種情弊層出不窮且沿途呼索男女混雜喧譁悍潑罔顧廉恥而各屬生監有貧生一體賑卹之例即家非貧窶亦異恩所求不遂即送中生事煽惑阻撓身列衣冠恬不知檢士習民風沈瀆若此其有關於人心風俗實非淺鮮夫蠲除賑貸原屬國家之恩澤各屬災民平時不知為未雨綢繆之計及遇荒歉復不思刻苦營生竟若仰食公家可忘儉嗇甚且不以荒歉為可憂而以荒歉為可幸恃沛之恩膏啟無窮之希冀本計不敷驕風益熾勢將何所底止習俗之漓莫此為甚朕思德為善政政在養民而厚生尤宜正德安集之後化導為先其地方有司雖有教民之責而刑名錢穀政務艱繁難以遍及即學政教職衡文課士亦不能無理民事必特設專員巡行整飭實心化導方有裨益著大學士等子翰林科道內揀選品行端謹通曉民事者四員授為宣諭化導使馳驛前往江南以二員整理下江之淮徐揚海四府州以二員整理上江之鳳潁泗三府州令其親歷各屬鄉城計其道里巡行一遍周而復始所至之地傳齊紳衿士庶宣講

聖諭廣訓反覆開導使知驕詐之習不難懲之以法念此無知之輩皆屬赤子朕心有所不忍務在感發其天良鼓動其廉恥俾明于大義務本安分則革其頑惰而薄俗可以還淳倘如此開導而猶有怙過不悛者即加之以罪夫復何辭奉差官員毋得視為具文虛應故事其儀制文移悉照各省學政之例給與欵差官員關防道府以下凡有關於宣諭化導者聽其節制其餘一切地方事務不得干預以專責成倘地方有司恃有宣諭化導使遂自怠其教民之職准宣諭化導使會同該督撫題奉欵此

2185 乾隆八年二月十九日奉

旨長蘆鹽政三保患病著派好太醫一員前往診視欵此

2186 乾隆八年二月二十一日內閣奉

上諭內閣學士員缺著彭啟豐補授都察院副都御史二缺著彭樹葵趙大鯨補授欵此

2187 乾隆八年二月二十一日內閣奉

上諭提督江蘇學政著開泰去欵此

2188 乾隆八年二月二十一日內閣奉

上諭據閩浙總督那蘇圖奏稱閩省幅員遼濶戶口殷繁積貯最為緊要從前議定各府廳州縣收捐監穀共一百六萬四千石每石價銀六錢及五錢四分監生一名捐穀二百石及一百八十石不等與戶部收銀一百八兩之例相符計開捐已逾三載而報捐之數僅三十九萬石零蓋因穀價昂貴與原定銀數大相懸殊是以從事者甚少查康熙五十二年閩省捐監每名止收穀一百二十石未及三年捐穀至百餘萬石至今尚受其益合無懇請將閩省捐監一名收穀一百二十石每石定價九錢以符戶部一百八兩之數其餘廉增附生捐監者均一例分別辦理所有福建生俊在戶部各省報捐之例停止一年俟捐有成數再行酌議等語閩省地方山海交錯產穀無多轉運不易不得不于平時預籌儲蓄之道著照該督那蘇圖所請捐監一名收穀一百二十石每石定價九錢其廉增附生照此分別辦理所有該省生俊在戶部各省報捐之例著停止一年俟捐有成數該督撫奏聞請旨欵此

2189 乾隆八年二月二十一日內閣奉

上諭向來山西巡撫無管提督事務劉子義辦理政務為有餘而整飭營伍非其所長者歸化城將軍補熙暫行兼管

欽此

2190 乾隆八年二月二十一日內閣奉

上諭浙江衢州鎮總兵官康華齡年已衰老不勝總兵官之任著來<sub>字</sub>候旨欽此

2191 乾隆八年二月二十一日內閣奉

上諭陝西固原提督員缺著豆斌補授提督永常著回安西駐劄肅州總兵員缺著西寧總兵官許仕斌調補西寧總兵員缺著永昌協副將張世偉補授欽此

2192 乾隆八年二月二十三日內閣奉

上諭據令旭奏稱現患風痰難以辦理學政事務林令旭著回京調理提督順天學政著趙大鯨去欽此

2193 乾隆八年二月二十三日內閣奉

上諭福建南澳地方甚屬緊要現任總兵官李琨于外海事務不甚諳練臺灣鎮總兵官何勉現已年滿應回內地即著補授南澳<sub>鎮</sub>總兵官李琨著調補浙江衢州鎮總兵官其臺灣鎮總兵官員缺著總督那蘇圖於所屬總兵內揀選一員請旨調補欽此

2194 乾隆八年二月二十四日內閣奉

上諭據江南河道總督白鍾山奏稱次子白永淳係州同職銜在南河投効已經五載今應迴避仰懇來京遇有効力之處學習行走等語白永淳著在河東河工効力欽此

2195 乾隆八年二月二十五日內閣奉

上諭江南宣諭化導官員缺著於參熟後起身前往欽此

2196 乾隆八年二月二十五日內閣奉

上諭湖廣鎮守鎮總兵段起賢著調補陝西涼州鎮總兵官涼州總兵王廷極著調補湖廣鎮守鎮總兵官欽此

2197 乾隆八年二月二十六日內閣奉

上諭廣西提標革職參將劉寬廣東瓊州府降調知府屠用  
中著該部行文調取未京引見欽此

2198 乾隆八年二月二十六日內閣奉

上諭上下兩江上年被水地方已經漸次涸出此時東作方  
興正有資于牛力查雜稅款內有牛稅一項雖為數無多  
然以農民被災之餘即減省雜費分毫亦未嘗無益著該  
督撫即飭被災地方官將牛稅暫免一年凡民間買賣牛  
隻者俱聽其自相論價交易不許牙行從中需索有司亦  
不得視為細事一任胥吏侵蝕中飽該部即速行文傳諭  
知之欽此

2199 乾隆八年二月二十七日內閣奉

上諭趙國麟年老有病難以在咸安宮行走准回原籍欽此

2200 乾隆八年二月二十七日內閣奉

上諭大理寺少卿員缺著七達色補授欽此

2201 乾隆八年二月二十九日奉

上諭向來

先農壇親祭始用中和韶樂違官則同小祀之例不用中和

韶樂查

朝日

夕月等中祀雖違官仍用中和韶樂但不飲福受祚而已朕

思國之大事在農

先農宜在中祀之列此次違和親王恭代即著照

朝日

夕月等壇之例用中和韶樂永著為例欽此

2202 乾隆八年三月初二日宗人府將考取之宗室玉鼎柱

等帶領引

見奉

旨考取之宗室玉鼎柱達林圖福喜俱准作進士與乙丑科

會試中式之人一體殿試引見或選入翰林或以部屬等

官補用候朕臨時降旨嗣後俱照此例行欽此

2203 乾隆八年三月初五日奉

旨外省官員告病准督撫題請解任留于該省調理病痊復用者乃國家愛惜人才之意且以杜借名規避之弊也今田懋所奏該員既以患病解任又復留於該省調理未免貪用艱難情亦可憫等語似亦實情况原有病痊補用原缺之例亦不慮其借端規避朕思同知以下官員亦無甚規弊情節其告病者俱准其回籍調理病痊照例銓補不必留于該省若道府等員著該督撫具題請旨其有無規避情節臨時自難逃朕之洞鑒著定為例高鈔准其回旗  
欽此

2204 乾隆八年三月初六日內閣奉

上諭王原圻著回原籍交與地方官約束不許出境生事欽此

2205 乾隆八年三月十二日內閣奉

上諭山西按察使張無咎因患足疾步履維艱難勝臬司之任著以原品休致其員缺著多綸前往署理欽此

2206 乾隆八年三月十二日奉

旨阿山准以原品休致欽此

2207 乾隆八年三月十二日內閣奉

上諭國家體恤臣工文武均屬一體文員則額給養廉武職則給親丁名糧以資養贍自康熙四十二年部議由提鎮以及千總核定數目之後復于雍正六年內特奉

皇考上諭令武員去任之時將名糧停扣募補即留與接任之員所以體恤之者更為周至是以武員親丁雖年年造冊究係虛名開載實無其人名實不副眾所共知朕思既為武員養廉即應改為養廉名糧若干將親丁姓名裁去無容虛造冊籍其各省武員親丁名糧向來如何分別多寡今如何定之處著該部查議具奏欽此

2208 乾隆八年三月十五日內閣奉

上諭朱藻著往江南交與總督尹繼善于河工水利等處以佐貳官委署試用欽此

2209 乾隆八年三月十五日內閣奉

上諭福建臺灣總兵官員缺著江南崇明總兵官張天駿調補欽此

2210 乾隆八年三月十六日內閣奉

上諭安徽巡撫喀爾吉善著調補山東巡撫山東巡撫晏斯盛著調補湖北巡撫湖北巡撫范琛著調補安徽巡撫欽此

2211 乾隆八年三月十六日內閣奉

旨御史薛澂請停京員題陞之例以抑奔競一摺朕思各部司分有繁簡之不同司員才具有短長之不一定例之准堂官揀選保題者乃不得不然之勢若如薛澂所奏外官應准上司遴選題補而京官則不當准豈在外之督撫皆可信而在京之滿漢尚書等皆不可信乎至薛澂摺內所舉情事雖未必盡然亦不能斷其必無即如以言取人失之宰予以貌取人失之子羽以孔子至聖尚有此語況其下焉者乎為大臣者見此等議論當留心體驗有則改之無則加勉務使保舉毫無徇徇其為所舉者可以不愧而

未舉者亦足以服其心不至稟頹志氣方足以副朝廷黜陟之大典薛澂原摺並發欽此

2212 乾隆八年三月十九日奉

旨都察院摺奏岳常道倉德通揭上司抑勒換詳一事曾申詳總督孫嘉淦孫嘉淦批令該道婉曲善處且云審時不問此款等語孫嘉淦身為總督又承旨審辦此案接到倉德揭帖時即應奏聞將揭內情節審理乃故覆其事不行陳奏而審案內並無一語及倉德所揭情由扶同許容草率完結甚屬徇庇有失封疆之體俟此案結後著該部嚴察議奏其都察院原摺文與阿里衮將此案前後情節逐一查審具奏欽此

2213 乾隆八年三月二十日內閣奉

上諭上年淮徐一帶水災米價騰貴朕念漕標兵丁食用艱難准借一季餉銀於今年分作四季扣還今朕聞得彼地被災之餘糧價不能平減兵丁額支糧餉折色為多若再按季扣除則食用愈覺難支可為憫惻著將上年借支之項目下暫緩俟本年秋成後米糧價平再行扣除還項該部即遵諭行欽此



2214 乾隆八年三月二十二日內閣奉

上諭據青州將軍欽拜奏稱從前借俸銀六年至今尚未扣完懇恩補借俸銀二千五百兩將每年應領半俸扣除分作十年完項等語著照所請准其借給欽此

2215 乾隆八年三月二十三日內閣奉

上諭公弘普自幼蒙

皇祖

皇考養育宮禁讀書內廷原欲造就成材其人亦聰慧謹慎可  
恪任使今患病溢逝朕心深為軫惻意欲親臨其喪經大臣等再三勸阻已降旨著大阿哥前往奠酒但念莊親王當中年以後忽遭喪子之戚朕欲親往慰唁著即預備弘普著賞給世子品級應得卹典該部察例具奏欽此

2216 乾隆八年三月二十三日內閣奉

旨著賞給莊親王銀一萬兩料理弘普喪事欽此

2217 乾隆八年三月二十六日內閣奉

上諭山東兗沂曹道員缺著江西南昌府知府吳同仁補授  
欽此

2218 乾隆八年三月二十七日內閣奉

上諭內閣學士員缺著伍齡安補授欽此

2219 乾隆八年三月二十七日奉

旨廣西按察使李錫泰著賞給

殊批上諭一部欽此

2220 乾隆八年三月二十九日奉

旨鑾儀衛鑾儀使員缺著張謙補授欽此

2221 乾隆八年四月初一日內閣奉

上諭國家政務俱資九卿辦理朕之語誠訓勉亦不啻再三  
乃就近日觀之雖未顯有廢弛之實蹟而諸臣情形寬緩  
因循之意多而恪共振作之意少此則速宜省改者凡人  
之心習勤甚難而習怠甚易今日所辦之事減少于昨日  
則明日之事復又將減少于今日矧于便安耽于逸樂久  
之習為固然精神不能復振矣此等習氣朕亦無替謀之  
法即位之初曾令其輪班奏事而諸臣所奏不過撫拾細故  
苟且塞責無裨益于政事仍臨龔爭虛文朕無所取惟在

諸臣各矢盡誠視國事如家事毋涉因循毋稍瞻顧殫心竭慮以効贊襄副朕之期望古人所謂夙夜匪懈者蓋志氣奮興表裏一致無一息之或情不佳奔走趨承之謂也朕願九卿共勉之欽此

2222 乾隆八年四月初一日內閣奉

上諭近來各省督撫奏事較前甚少而此三日內竟無一奏摺實數年以來之所未有豈地方果無可陳奏之事耶抑督撫漸趨于寬緩之習有事而不奏耶夫政簡刑清自古以為上理然必治行廉平風移俗美而後可收政簡刑清之實效若徒驚乎其名則不過習於苟安身自暇逸久之而事皆廢弛百弊叢生其害非淺鮮矣即如督撫摺奏屬員賢否一事原欲其常為留心隨時訪察陳奏朕前以備簡用乃督撫等多有於奉旨之後陳奏一次虛應故事後遂置之不辦者夫一省之中二三年之久屬員更換者不少豈不當秉公甄別將才守可稱者舉以奏聞耶嗣後各省督撫奏舉屬員著定以三年一次舉行又見督撫等所奏皆係藩臬道府等官此等大員朕皆知之或較該督撫更為明晰若即以此塞責豈朕造就人才之意況今日之道府即將來之藩臬今日之州縣即將來之道府若督撫

不將州縣等官治蹟據實上聞朕何由知悉而量材器使耶即武職總兵副參等官亦所以儲干城之選各督撫均應留心至于藩臬在雍正年間原不時奏事而比來亦覺寥寥學政亦有奏事之責今竟有蒞任三年未奏一事者夫有意搜尋以滋紛擾固非政體而應奏不奏誠默因循朕何以收明目達聰之益可傳諭各省督撫等其各振作惕勵悉朕意焉欽此

2223 乾隆八年四月初六日內閣奉

上諭江南淮徐揚鳳潁泗等處上年水災甚重米價高昂朕念各處營汛兵丁食用艱難准在司庫內借支一季餉銀于今年分作四季扣還今朕聞得各處被災之餘春間糧價漸增無減目下又值青黃不接之際兵丁不無窘乏若再扣還借項則食用更苦不支朕心深為軫念著將前借一季餉銀緩至本年秋成後于散給冬餉時扣起勻作四季扣除還項以紓兵力該部即遵諭行欽此

2224 乾隆八年四月初七日奉

上諭前因補殿丁毋憂曾降旨令吉黨阿暫著山西提督事務今聞吉黨阿現在患病其提督印務著馮吉品暫行護理欽此 無清

2228 乾隆八年四月十一日內閣奉

上諭今年初舉寧祭之典朕已降旨親詣行禮因今春偶患小瘧朕以典禮初行必欲親祭以昭誠敬特命太醫上緊醫治日來漸次平復朕約計屆期已可躬親行禮縱使尚不能行禮仍擬親詣壇所以展肅將祀事之意而太醫等奏稱慮處初愈皮膚未蒼正宜靜養不宜行走勞動左右大臣等又奏稱四月寧祭係每年常行之典不必今歲一定親行且皇上誠敬之心至朕至切實足以昭格

穹蒼與親行無異此時微病初愈正當節勞保重不但不宜行禮過勞即親詣壇所未免步履牽動亦甚非所宜再三勸阻朕勉從所請著遣弘昭恭代行禮欽此

2226 乾隆八年四月十三日奉

旨鄒一桂奏內情節固不能保其必無但彼既以孝道陳請而先以不孝疑之是逆詐僥不信矣朕無取焉所奏知道了欽此

2227 乾隆八年四月十六日內閣奉

上諭湖廣武昌府知府員缺著張肯堂調補所遺宜昌府知府員缺著山西蒲州府同知李瑾補授欽此

2228 乾隆八年四月十六日內閣奉

上諭編修檢討中有能勝知府之任者著大學士等揀選數員交與吏部帶領引見欽此

2229 乾隆八年四月十六日內閣奉

上諭朕惟萬民以食為天八政以農為本朕御極以來重農貴粟薄賦輕徭諸如籌積貯蠲米稅凡所以為民食計者既周且悉直省地方宜乎糶梁充裕價值平減閭閻無艱食之慮矣乃體察各處情形米價非惟不減且日漸昂貴不獨歉收之省為然即年穀順成並素稱產米之地亦無

不倍增于前以為生齒日繁耶則十數年間豈遂眾多至此若以為年歲不登則康熙雍正年間何嘗無歉收之歲細求其故實係各省添補倉儲爭先糴買之所致從前議於各省額設常平二千八百餘萬石之外令各省舉行納粟入監之例增定穀數三千二百餘萬石原期寔倉廩以備緩急乃諸臣奉行不善經數年之久所收捐穀僅六百餘萬石而米價無處不昂是未收積儲備用之益而先貽敵貴病民之擾豈朝廷立法之本意哉蓋買穀貯倉原恐民有餘粟不知撙節以致糜費是以令官廣為收買以為儲蓄之計若民間需用之際而急于購買商賈悉皆裹足此贏彼絀其理顯然况一省所出應足供一省之用今因一省產米獨多而各省羣趨而糴之則多米之省亦必至缺乏而後已再捐監之人即係本地百姓納捐之數並非運自外省在田間所收止有此數積穀之家既已納之于官無穀之戶又必買之于市將不能蓋藏于家又不能流通于外穀愈少而價愈昂亦何怪其然也朕思天下米價頻增乃民食不足之漸大有關係當令各省督撫從長妥計其常平原額固不可闕至於鄰省採買及捐監收米之例俱應一概暫停俟豐稔之後米價如常再徐徐辦理其如何酌定之處著大學士會同九卿詳議速奏欽此

2230 乾隆八年四月十八日內閣奉  
諭戶部員外郎覺和托禮部員外郎寧福著該部帶領引見欽此

2231 乾隆八年四月十八日內閣奉

諭各省定例督撫盤司庫司盤道庫道府盤州縣庫所以杜虧空防挪移也從前各省上司或借端需索貽屬員之累或虛應故事無查察之實且或肆筵設席以相娛樂納賄受禮以相交結種種弊端甚非立法之意二十餘年以來諸弊皆已肅清矣但奉行日久上下司賢愚不一雖顯然復蹈前轍者尚無所見聞而或漸露端倪故相容隱則亦未定此各督撫所當留心者司道之庫原不過照例盤查至道府之于州縣一年亦止可盤查一次不得屢行滋擾而盤查之時必須詳核不得徒存其名並當各嚴其守不獨已之一身不可絲毫沾染即家人吏役亦不可稍有縱容如有犯此等弊習者督撫等即行奏處庶盤查皆有實際常行不致滋擾若督撫等漠不關心倘別經發覺朕惟督撫是問可傳諭各督撫等共知之欽此

2232 乾隆八年四月十八日內閣奉

上諭禮部主事畢宗高著發往直隸交與總督高斌以州府佐貳酌量題補留心試看欽此

2233 乾隆八年四月二十日內閣奉

上諭布蘭泰因伊母年逾三十守節多年懇請特恩旌表在伊固出于孝思但于國家成例不合布蘭泰身為大員因得奏請其何以處夫官職卑小以至齊民不能陳請者伊摺朕不便批發可傳諭知之欽此

2234 乾隆八年四月二十三日內閣奉

上諭朕從前降旨將江省清河等十二州縣衛所有乾隆五年以前未完帶徵銀兩統行停緩俟各處年歲屢豐民間元氣漸復之後該督撫再行酌量定限分年帶徵所以紓民力恤困乏也茲又念山陽阜寧鹽城甘泉興化泰州高郵寶應淮安大河揚州等十一州縣衛上年被災亦重豐縣碭山贛榆三縣災雖稍輕而均係連年被水之地民力甚屬拮据所有十四州縣衛乾隆五年以前未完丁地漕項銀米著照清河等十二州縣衛一體停緩並將清河等十二州縣衛及山陽等十四州縣衛乾隆六年帶徵丁地

漕項銀兩同五年以前未完之項一體停緩俟年歲屢豐之後該督撫再行酌量奏聞分年帶徵又淮安分司所屬板浦徐清中正完瀆臨洪興莊等六鹽場所有乾隆二三四等年未完帶徵折價銀一萬六千三百六十餘兩該督撫等因係鹽場名目未曾歸入停緩之內朕思海濱灶戶輸納折價錢糧與民人無異屢遭水患之餘元氣未復今屆麥熟啓徵若令新舊錢糧一時并納未免艱難著與民戶一例停緩以示朕優恤民灶之至意欽此

2235 乾隆八年四月二十四日內閣奉

上諭孫嘉淦現在候旨福建巡撫員缺著周學健前往署理周學健接到諭旨即速赴任不必來京請訓欽此

2236 乾隆八年四月二十四日內閣奉

上諭上冬今春仰蒙上天屢賜瑞雪二月間又曾得雨方冀二麥有收以裕民食不意一月有餘時雨未降麥苗微旱待澤孔殷若再遲遲不雨二麥將有損傷朕心甚為憂慮已在宮中虔誠默禱著傳諭禮部即行擇日祈雨遵照典禮敬謹奉行欽此

2237 乾隆八年四月二十五日內閣奉

上諭河南開歸陳汝所屬之鄭州等十三州縣舊有乾隆五  
六七年民借未完之常漕義社等穀共一十一萬八千  
石有零例應今年一併催徵完項但此十三州縣上年收  
成歉薄若于本年麥熟之後既徵應納之新糧又完累年  
之舊欠則民力艱難可為軫念著將乾隆五六七三年動  
借各項倉穀于乾隆甲子年起分作三年帶徵以紓民力  
該部即傳諭河南巡撫知之欽此

2238 乾隆八年四月二十五日奉

旨朕前因八旗漢軍戶口日繁生計未免窘迫又限于成例  
不能出外營生特降諭旨除從龍人員子孫無庸更張外  
其餘各項入旗人等有願改歸民籍與願移居外省者准  
其具呈本管官查奏原指未經出仕及徵末之員而言至  
服官既久世受國恩之人在伊等本身及伊等子弟自不  
應呈請改籍而朕亦不忍令其出旗此奏內文職自同知  
等官以上武職自守備等官以上俱不必改歸民籍餘依  
議欽此

2239 乾隆八年四月二十六日內閣奉

上諭河東運使員缺著河東道郭一裕調補欽此

2240 乾隆八年四月二十六日內閣奉

上諭前因淮徐一帶上年被水目下米價不能平減特降諭  
旨將漕標河標兵丁應扣所借一季餉銀此時暫緩俟本  
年秋成之後米糧價平再行扣除今查河標之外尚有河  
葦二營上年亦經借餉此時正當照例扣還之際念伊等  
修防河工頗屬勞苦且同居被災之地食用亦必艱難其  
上年所借一季餉銀亦著緩扣與標兵一例俟秋成穀賤  
再扣還項欽此

2241 乾隆八年四月二十八日內閣奉

硃筆上諭古者創冊府于西崑閣其臺于東壁是以木天儲  
彙石渠掄材由來尚矣乾隆二年朕曾親試翰詹諸臣因  
文以考其行所取者如陳大受等頗不愧此選也越今數  
載頗聞翰詹諸臣率從事于詩酒博奕而四庫五車鮮有  
能究心者將何以華館閣而垂采葉哉其依往例自少詹  
講讀學士以下編修檢討以上著于本月三十日赴圓明

國候朕出題視試其託詞不至者列名具奏大學士等即承旨行欽此

2242 乾隆八年四月三十日內閣奉

上諭吏部右侍郎事務著德沛署理欽此

2243 乾隆八年四月三十日內閣奉

上諭上下江去年被災之州縣今麥秋在即縱使豐收閭閻亦僅可餬口若即令輸賦民力未免艱難本年應徵錢糧著候至十月後開徵該部即行文該督撫遵行欽此

2244 乾隆八年四月三十日內閣奉

上諭上下江驛站馬匹現行之例芻豆每日給銀六分在豐稔之年自足敷用今歲歉價昂州縣不無賠累昨歲被災州縣其驛馬每日准銷八分俟秋收豐稔停止其有收地地方不得援以為例欽此

2245 乾隆八年閏四月初二日內閣奉

上諭據侍郎阿里袞摺奏承審許容泰劾謝濟世一葉與從前孫嘉淦會同許容審理之處情節多有不符朕思湖南北下各官瞻徇成風因結難解許容張琛係現任撫藩通省畏懼誰敢吐露實供難成信讞許容張琛俱著解任知府張琳知縣樊德貽李澎俱著革職交與阿里袞審明定擬具奏再藩撫一時解任不便令按察司一人兼行護理湖南巡撫印務著蔣溥遵行前往著理蔣溥未到任之前著阿理泰暫管其布政司印務著按察司照例署理孫嘉淦既草率扶同于前此時不便會同審理該部即速行文前去欽此

2246 乾隆八年閏四月初三日內閣奉

上諭陝西寧夏滿兵乾隆六七兩年應需糧草前因寧郡地震新渠寶豐等縣倉貯空虛不敷估撥在于平羅縣估撥糧一十七百二十五石草一萬八千三百餘束中衛縣估撥糧一萬六千六百餘石所需腳價因從前無給予之例是以部議未准但寧夏當震災之後物價昂貴不能概估折色使兵自買故于改支折價之外于附近之中平二縣搭估供支以濟兵食其運費一項勢不能免况彼時已經

照數運支滿兵支用今若不准找給小民力難賠補用是特頒諭旨將乾隆六七兩年較運報單脚價准其找給其乾隆八年滿餉已經循照舊例辦理亦不至遂為成例該部即遵諭行欽此

2247 乾隆八年閏四月初四日內閣奉

上諭昨於正大光明殿考試翰詹事等官朕親加詳閱按其文字優劣分為四等一等王會汾李清植表曰修等三員二等觀保萬承蒼于振張若霽周長發陳兆崙沈德潛秦蕙田周玉章等九員三等夏之蓉朱荃宋楠周煌董邦達雙慶齊召南金文淳沈昌宇張鵬翀周禮秦勇均世臣程恂于敏中夏廷芝于辰等十七員四等孫人龍吳紱阮學濬張九鑑葉賈張灝聞棠張映斗邵鐸周正思馮元欽朱良衷潘乙震萬年茂歐堪善蔡新官獻瑤李文銳張為儀吳嗣富何其睿宋邦綏徐文煜楊開鼎田志勤陸秩興泰金相對熈沈景瀾唐進賢白瀛傅隆阿姚廷祐陸嘉穎德保肇敏陳世烈黃明懿鍾音朱桓吳泰朱璣林蒲封雙頂路斯道朱若炳馮秉仁喻燁倪師孟龔勛孫景烈楊黼時鄭志鯨陳中龍蔣允焄蔣祖培趙德昌李質穎鞠遜行王錦甄錫伊興阿丁一燾鄂倫王居正常保住羅惜周連登

陸儀吳兆雯等七十一員內編修王會汾著陞授侍讀學士庶子李清植著陞授少詹事編修表曰修陞授侍讀學士編修觀保陞授侍講編修萬承蒼陞授侍講學士中允于振陞授左庶子編修沈德潛陞授左中允編修秦蕙田陞授侍講其二等未經陞用之張若霽周長發陳兆崙周玉章四人於伊等應陞之處具名題奏中允孫人龍著降補編修侍讀學士潘乙震降補編修侍讀學士金相降補編修侍講學士馮秉仁降補編修庶子龔勛降補右中允檢討朱若炳編修倪師孟楊黼時檢討鄭志鯨蔣允焄蔣祖培周連登俱著以知縣用檢討趙德昌著以主事用編修甄錫著以同知用檢討伊興阿編修鄂倫俱著以七品筆帖式用編修吳紱阮學濬聞棠何其睿陸嘉穎朱桓檢討吳泰編修路斯道喻燁檢討孫景烈編修陳中龍李質穎鞠遜行王錦丁一燾王居正常保住檢討羅惜陸儀編修吳兆雯俱著休致其四等未經降調休致者均罰俸一年以示懲儆欽此



2248 乾隆八年閏四月初五日內閣奉

上諭昨考試翰林時由部屬等官用入翰詹衙門者皆不與朕思伊等已墮用翰詹讀書作文乃其職分事既不似侍衛之足供差遣又不似部曹之日辦簿書若徒虛糜俸祿豈不貽素餐之譏且伊等雖不由庶吉士陞轉實俱科甲出身縱使不能詩賦如作論語譯亦豈得謝曰不能著傳諭于初七日齊集圓明園候朕出題考試嗣後考試翰林時即將此等由別衙門改授者一併傳集另置考試永著為例欽此

2249 乾隆八年閏四月初五日內閣奉

上諭湖南長沙府知府員缺著江西南康府同知葉建封補授欽此

2250 乾隆八年閏四月初六日內閣奉

上諭李清植著為三禮館副總裁閣休致之編修吳紱通曉三禮著仍留編修任在館纂修照四等例罰俸一年欽此

2251 乾隆八年閏四月初八日內閣奉

上諭昨因考試休致之翰林十九人著于初十日齊集圓明園候朕覆試欽此

2252 乾隆八年閏四月初八日內閣奉

上諭初七日考試滿洲由別衙門墮用翰詹諸臣既閱其文理又驗其人才分列等次一等石介赫瞻共二員二等世貴文保朱蘭泰懷保共四員三等法亮阿琳吳爾泰官保僧格勒共五員四等孔泰春臺色臣蘇依桐保共五員內庶子文保侍讀赫瞻俱著陞授侍講學士侍讀世貴陞授庶子其侍讀學士孔泰春臺俱著降補侍讀諭德蘇依降補中允中允色臣降補贊善贊善桐保著以旂員對品用侍講學士石介遇伊應陞之缺具名題奏此係初次考試朕是以從寬辦理伊等既為翰詹學問乃其本業若不加勉勵仍復荒疎下次考試時不能屢選寬典也欽此

2253 乾隆八年閏四月初八日內閣奉

上諭山西提督印務前命歸化城將軍補熙暫行兼管朕思山西提督印務向係巡撫兼理並未另設標營一切提督衙門承應即用撫標兵弁今將軍駐劄之地去晉省路遠如欲調太原將備兵丁赴彼承應殊屬未便且營員調考亦未免跋涉之苦其提督印務即著太原鎮總兵官馮吉品暫行署理補熙服滿後不必交代欽此

2254 乾隆八年閏四月初八日奉

上諭直隸山西沿邊地方滿洲補放綠旗官員原議如果弓馬嫻熟諳練營伍者不拘年限以應陞之缺題補其餘未得題補之員五年為滿該督提出具考語咨部帶領引見發往有題缺之省遇缺題補如不能熟悉營伍不宜外任者咨回各該旗仍在原處當差近見五年俸滿保題發往各省題補之滿員漸多不惟伊等一時不能得缺致有拮据之虞於綠旗人員陞用之途亦恐有碍著交兵部再加詳酌議奏欽此

2255 乾隆八年閏四月初九日內閣奉

上諭湖廣吏治廢弛已極前謝濟世一葉許容寬誣煇煉孫嘉淦賄徇扶同朕已降旨將許容解任孫嘉淦不准會審今又聞楚省盜案甚多營伍更屬廢弛水路無巡江船隻陸路無會哨官兵所謂遊巡皆虛應故事以致盜賊肆行全無畏懼其水師營汛竟有哨船久泊江岸無人駕用致有船多于兵之謠是孫嘉淦許容身任封疆惟事敷衍虛文並無一毫實際因而文武效尤上下頹廢其罪已至不可問矣謝濟世一葉情節現已顯著孫嘉淦許容亦無可再問著即來京候旨若有應行質審之處著阿里衮奏明留彼俟事竣帶回欽此

2256 乾隆八年閏四月初九日內閣奉

上諭據廣東巡撫王安國奏稱惠潮嘉道姚孔鈞因母老懇請終養著准所請其員缺著廣州府知府張士璉補授廣州府缺甚屬緊要著督撫于通省知府內揀選一員調補所遺員缺著謝王生補授欽此

2257 乾隆八年閏四月十一日內閣奉

上諭前次考試休致之翰林朕于本月初十日復行考試其  
阮學濬何其睿陸嘉穎王居正路斯道王錦俱著仍留原  
任照四等例各罰俸一年欽此

2258 乾隆八年閏四月十一日內閣奉

上諭中程章劉嵩齡江洪何經文著吏部行文調取來京引  
見欽此

2259 乾隆八年閏四月十三日內閣奉

上諭朕聞山東今年春夏雨澤愆期二麥有歉收之處查歷  
城章邱齊東濟陽長清陵縣鄒平臨邑平原肥城平陰在  
平博平等縣並歷城章邱濟陽長清肥城等五縣收併之  
衛地有未完四五六等年舊欠錢糧并六年災案出借之  
口糧籽種因六年秋木被災七年夏麥不登經朕降旨緩  
至乾隆八年麥收後起徵今屆開徵之期而麥收又復歉  
薄朕心軫念著寬至本年秋收後起徵仍照例分別帶緩  
以紓民力該部即遵諭行欽此

2260 乾隆八年閏四月十四日內閣奉

上諭國家子惠黎元教養由來並重朕君臨天下宵旰維勤  
重農桑輕徭賦所以養民者惟恐不周至于正人心厚風  
俗皆國之大務尤所時慮於懷者凡中外臣工莫不諄切  
誠諭務使民間習尚馴良訟獄衰息以漸臻風移俗易之  
效乃數年以來民風仍未遠淳習俗每輕犯法豈小民之  
不可牖迪歟抑牧令之教化不決而德意未孚也古者朝  
廷之政象魏懸書閭里之教月吉讀法三物六行匪徒具  
文哉

聖祖仁皇帝聖諭十六條筋紀敦倫型方正俗精義超越前古  
世宗憲皇帝萬言廣訓益加詳明剴切開導所以牖民覺世者  
至矣使地方有司竭誠宣布雖甚愚頑誰無天性亦必洗  
心滌慮草蕩從忠駁駁於上理無如實力奉行者甚少即  
朔望宣講不過在城一隅附近居民聚集觀聽者僅數十  
百人而各鄉鎮間有講約之所亦多日久廢弛全無實際  
至所奉諭旨有關於教民者亦惟張掛告示視為通行之  
常例焉能使之悅耳革心翻然悔悟是以尚氣輕生狃於  
性成作奸犯科常為俗染及其怙終不悛而刑罰隨其後  
朕甚憫之夫守令者民之父母古所稱忠信之長慈惠之  
師惟本至誠惻怛之意以感動愚民使之各自警省又能

隨時隨事委曲勸誘諒無有不可化誨之人亦無往而非  
敷教之地即聽訟一端兩造具在鄰佑親族齊集公庭正  
百姓耳目所屬推誠曉諭最易提撕不徒現犯者各自愧  
悔並使旁觀者亦因此傳播交相勸勉若公事稍暇或講  
讀編審或勸課農桑即可單車減從親歷鄉村遇父老子  
弟獎其善良懲其不率申之以勸誠示之以榮辱循謹者  
益加鼓舞即強悍者亦知戒懲漸摩日久性情和順貪利  
好勝之心不作而一道同風之盛可幾矣惟是百姓以守  
令之行事為觀感守令以督撫之意指為從違為督撫者  
果能率屬留心化導定力奉行日計不足月計有餘斷未  
有為其事而無其功者若徒視為具文接到諭旨轉行牌  
示遂以為已經遵奉則亦何益之有各省督撫等受朕深  
恩畀以封疆重寄尚其儆惕勉勉以無負朕諄諄誥誡之  
至意欽此

2261 乾隆八年閏四月十六日內閣奉

上諭天津巡漕御史濟安布現在患病著回京調理稽察天  
津漕務不必另行派員即著稽察通州漕務之御史李敏

第兼管欽此

2262 乾隆八年閏四月二十日內閣奉

上諭長蘆鹽政三保現在患病一時難以痊愈著解任回京  
調理其員缺著江寧織造伊拉齊補授伊拉齊未到任之  
前著傳清暫行兼管江寧織造事務著西寧管理西寧所  
管荊州關稅著照例交與該撫兼管欽此

2263 乾隆八年閏四月二十二日內閣奉

上諭湖南布政使員缺著刑科給事中長柱補授欽此

2264 乾隆八年閏四月二十五日內閣奉

上諭甘省地方山土硠瘠風氣苦寒民力艱難甚於他省一  
遇歉收所有應徵錢糧往往不能按期完納如蘭州府屬  
之鞏蘭狄道金縣靖遠平涼府屬之平涼涇縣等

並茶廳鎮原靜寧華亭慶陽府屬之安化寧夏府屬之中  
衛花馬池甘州府屬之張掖等處既有本年正額銀糧及  
本年借貸籽糧口糧又有從前借欠籽糧口糧分作六年  
帶徵之項統應完納加以積年舊欠地丁銀糧為數繁多  
一時交集小民力難兼營深可軫念朕思本年係惟正之  
供例應輸納本年所借籽糧口糧春貸秋償亦應如數交  
還至于從前借欠之籽糧口糧已分作六年帶徵無庸再

緩惟有舊欠地丁銀糧自乾隆元年起至二三四五六七等年積算其數較之一歲正額幾至加倍若責令一時輸將民實為竭蹶著將寧蘭等十六廳州縣節年舊欠地丁銀糧分作四年帶徵以示朕優恤遠民之至意該部即遵諭行欽此

2265 乾隆八年閏四月二十七日內閣奉

上諭江南淮揚道陳景瀛著調取來京引見其淮揚道員缺著尹繼善陳大受白鍾山等于命往人員內揀選一員請旨補授欽此

2266 乾隆八年閏四月二十九日內閣奉

上諭國家愛養斯民惟恐一夫失所為百姓者正當奉公守法以受國家惠濟之恩乃看近來情形地方偶爾歉收米糧不足價值稍昂著撫未嘗不籌畫辦理而刀頑之民遂乘機肆惡招呼匪類公行搶奪日無法紀如果係窮民乏食自當赴州縣衙門告糶若官員辦理不善亦當赴上司衙門申訴豈有借穀少之名遂擾害良善挾制官長逞其兇鋒行同光棍此則鄉邑之大蠹不可不重加懲治以儆頹風者乃無識之輩撫間遇聚眾搶奪等事欲自諱其平

時化導之不力與臨時禁約之無方止將州縣官奉初一二員以卸已責而于搶奪之業朦混歸結毋怪乎刁風日長而無有底止也至于有司或營私作弊激成事端或玩視民飢困苦莫恤該督撫自應據實嚴奏未有百姓罷市哄堂恃強凌弱而可以姑息養奸者又如國家設立營制原以彈壓地方乃近日汛弁兵丁遇有搶奪之事類皆觀望淡漠視之豈設兵衛民之本意著督撫提鎮嚴飭所屬弁兵協同文員實力查拏若有推諉不前者亦即嚴奏交部議處欽此

2267 乾隆八年五月初一日內閣奉

上諭朕恭奉

皇太后前往奉天叩謁  
祖陵擇于七月初八日啟行一切應行事宜著各該衙門先期備辦欽此

2268 乾隆八年五月初二日內閣奉

上諭江南淮徐等處從前疊被水災淮安分司所屬板浦徐濱中正莞濱臨洪興莊等六鹽場所有乾隆二三四等年未完帶徵折價銀兩朕已降旨令與民戶一例停緩俟屢

豐之後再行分年帶徵今聞秦州分司所屬鹽場亦皆坐落阜寧鹽城興化秦州等處所有廟灣富安豐東臺何塚梁塚丁漢草堰劉莊伍佑新興等十一場上年被災亦重竈戶力量艱難其未完乾隆二三五六等年帶徵折價銀通計一萬六千六百七十二兩零應與淮安分司所屬板浦等場一例緩停以示優恤其淮安分司所屬板浦等六鹽場尚有乾隆六年被災帶徵未完銀四千一百一十餘兩彼地民戶未完六年分丁地漕項朕既已降旨停緩此項未完折價錢糧亦准照民戶一例停緩該部即遵諭行欽此

2269 乾隆八年五月初三日內閣奉

上諭本日御史沈懋華進呈經史講義朕方將召見訓諭伊已散去科道等官輪班進呈經史數月不過一次安知朕不召見竟不候旨而去殊非人臣敬爾在公之道著該部嚴察議奏欽此

2270 乾隆八年五月初五日內閣奉

上諭上年河南有被水歉收之州縣除已經該撫報出者將本年應徵之錢糧緩徵外其未經報出之處該地方官酌量撫恤者民力亦屬艱難此時方屆麥秋正當加意培養著該撫查明將應徵錢糧分別停緩俟秋收後再行徵收該部即速行文前去欽此

2271 乾隆八年五月初七日內閣奉

上諭五月十三日祭  
闕帝廟原遣行禮之慎郡王現在告假著遣平郡王福彭行禮欽此

2272 乾隆八年五月初七日內閣奉

上諭奉天錦州府知府員缺著編修金文淳補授欽此

2273 乾隆八年五月初八日內閣奉

上諭廣東肇慶府知府員缺著廣西桂林府同知李增補授欽此

2274 乾隆八年五月十二日內閣奉

上諭甘肅平慶道恒文著調補直隸通永道道周彬著  
調補平慶道欽此

2275 乾隆八年五月十五日內閣奉

上諭外省佐雜等官朕俱已賞給養廉各就該省公項所餘  
以分多寡之數查福建一省每員止給銀二十兩未免用  
度不敷可為軫念著從本年為始將通省大使佐雜等一  
百九十八員每員加倍賞銀二十兩以資養贍在藍道庫  
盈餘項下支給該部即傳諭該省撫等知之欽此

2276 乾隆八年五月十五日內閣奉

上諭朕聞臺灣換班兵丁一切行李俱係各番社撥車供應  
原議每里給銀五厘資其飯食三年合算共需銀六百九  
十九兩五錢乃以彼地無公項可動以致文移往來不能按期  
給發查臺地有官莊項下徵收租票銀兩撥充內地各官  
養廉者著每年扣出銀二百三十三兩一錢零每逢三年  
合扣銀六百九十九兩五錢以為換班兵丁備修車輛之費  
至內地養廉之項則于司庫另行撥修庶兵丁無慮運載  
之艱而番黎亦免候領之苦著該部即傳諭該省撫知之

欽此

2277 乾隆八年五月十五日內閣奉

上諭項朝選現交部嚴加議處著辭任聽候部議其建寧總  
兵印務著總督那蘇圖暫委員署理欽此

2278 乾隆八年五月十七日內閣奉

上諭下江淮揚徐海四府州屬上年被災甚重其地漕錢糧  
朕已降旨停緩所有應完雜稅向無因災停緩之例自應  
照常催徵惟是各處既被水災貿易稀少行商完納稅銀  
未免拮据且本年又有應徵之項若令新舊並徵民力更  
覺艱難朕思積歉之餘元氣未復全在商販流通地方庶  
有起色著將山陽阜寧東清河桃源鹽城高郵泰州江  
都甘泉興化寶應銅山豐縣沛縣蕭縣碭山邳州宿遷睢  
寧海州沐陽贛榆等二十三州縣應徵乾隆七年未完牙  
行各項雜稅概予寬免以示朕體恤商民之至意該部即  
遵諭行欽此

2279 乾隆八年五月十七日內閣奉

上諭山東臨清關向征銅補商補相沿已久報部則統名之為船料前撫臣岳濬改為計石上稅而將銅補商補歸入石頭征解是名羊而實存也今朕既降旨蠲免各省米糧之稅此項亦應一體邀恩概行豁免著該部即行文山東巡撫知之欽此

2280 乾隆八年五月十七日內閣奉

上諭任啟運著充三禮館副總裁官該館奏稱現有繪圖之事擬揀選善繪圖之人二名充補勝錄亦照所請行欽此

2281 乾隆八年五月十八日內閣奉

上諭山東運河道陳法著調補安徽廬鳳道廬鳳道高越著調補運河道欽此

2282 乾隆八年五月二十四日內閣奉

上諭據直隸總督高斌奏稱通永道周彬奉旨調補平慶道周彬之母年已八十有二迎養在署今調任平慶地處極邊難以迎養伏乞天恩准令周彬回籍終養但伊不早請終養奉調後乃始陳請應請旨交部議處等語周彬著准

其回籍終養伊母向係迎養在署故未陳請從寬免其文議欽此

2283 乾隆八年五月二十四日內閣奉

上諭據江西巡撫陳弘謀奏稱江西州縣現在需人辦事請將在部候補知縣及記名保舉人員內曾經任州縣者揀選五六員發往委署題補等語著照陳弘謀所請行嗣後不得援以為例欽此

2284 乾隆八年五月二十四日內閣奉

上諭四川巡撫碩色著調補河南巡撫兵部侍郎吉三著補授四川巡撫河南巡撫雅爾圖著來京候旨欽此

2285 乾隆八年五月二十四日內閣奉

上諭奉天乃我朝發祥之地  
歷朝寶錄俱應繕寫滿漢文各一部送往尊藏俟現在  
皇史宬內閣藏本寫成後即在館人員敬謹繕寫其送往儀  
注大學士會同禮部詳議具奏欽此



2286 乾隆八年五月二十五日內閣奉

上諭本年七月內朕恭奉

皇太后前往奉天叩謁

祖陵著履親王平郡王大學士鄂 張 在京總理諸務欽此

2287 乾隆八年五月二十六日內閣奉

上諭慶復著補授川陝總督馬爾泰著補授兩廣總督張允

隨著授為雲南總督兼管巡撫事務欽此

2288 乾隆八年五月二十六日內閣奉

上諭直隸宣化鎮總兵官李質粹著補授廣西提督譚行義

著調補宣化鎮總兵官欽此

2289 乾隆八年五月二十六日內閣奉

上諭今年天氣炎熱蘇祿國使臣等在京著禮部派官員加  
意照看多給冰水及解暑藥物並遣醫人不時看視欽此

2290 乾隆八年五月二十八日內閣奉

上諭前屠用中到部引見朕已降旨交與尹繼善以知縣用

矣今聞該員在粵西年久熟悉苗疆風土著仍發往廣西

交與巡撫楊錫紱以知縣題補欽此

2291 乾隆八年五月二十九日內閣奉

上諭今歲夏至以後天氣炎熱甚于往年省刑之典允宜舉

行者刑部堂官于在京徒杖以下輕罪查明即或應釋放

或應減等即速分別請旨完結其重罪人犯雖法無可減

際此炎天身禁固圍實堪憐憫著該部添蓋蓆棚給與冰

湯藥餌無致病渴該部即遵諭行欽此

2292 乾隆八年五月二十九日內閣奉

上諭本年朕以叩謁

祖陵親往奉天往來約計四月所有七月以後文武大選官員

若候回鑾引見未免稽遲時日著照乾隆六年之例文員

內之州縣通判等官武員內之八旗護軍校駝騎校及外

省送到之補放水手官駝騎校等官并各省年滿千總俱

著文與在京總理事務之王大臣即行驗看令其赴任其

中若有年老才庸不勝繁劇之缺者酌量調補隨本奏聞  
可傳諭該部知之欽此

2293 乾隆八年六月初一日內閣奉

上諭近日京師天氣炎蒸雖有雨澤並未霑足若再數日不  
而恐禾苗有損且人民病暍者多朕心深為憂惕著禮部  
即速虔誠祈禱欽此

2294 乾隆八年六月初一日內閣奉

上諭今年天氣炎熱甚於往時九門內外街市人衆恐受暑  
者多著賞發肉帑銀一萬兩分給九門每門各一千兩正  
陽門二千兩預備冰水藥物以防病暍可傳與步軍統領  
舒赫德即速遵旨辦理其就近圓明園地方亦賞發銀二  
千兩著王扎爾永興帶同圓明園恭將辦理欽此

2295 乾隆八年六月初一日奉

旨陳仁而奏亦是朕前日考試翰林原有論題以覘其學問  
經濟並非專用詩賦也如李清植即因其論有根柢是以  
拔置一等至於詩賦原係翰林素應通曉者聲韻之學難  
以猝辨以此考試亦可驗其平日用功與否如必試以經

學註疏全史原委更恐難其人矣且即有其人亦遂能保  
其文行相符坐言而起行乎陳仁有進言之責其意原屬  
可嘉也原摺并發欽此

2296 乾隆八年六月初二日內閣奉

上諭近來天氣炎熱臣工有奏請暫停引見者朕思寒燠關  
乎庶徵今年蒸暑倍常即是

上天垂象示儆朕當省愆思咎惕勵龜勉勤於政事以感台休  
和若因此習於晏安則大非祇承

天戒之意所有部院及八旗引見人負照常引見其應辦事件  
亦按期速辦毋得稽遲欽此

2297 乾隆八年六月初二日奉

旨陳大珩所奏亦是但目下正值溽暑難以考試著吏部於  
立秋後請旨欽此

2298 乾隆八年六月初三日內閣奉

上諭前據喀爾吉善奏稱山東各屬於閏四月二十二二十四五二十七八九及五月初三四等日各得雨二三寸至六七寸等語此一月以來其未經霑足之地曾否得雨喀爾吉善並未陳奏現在情形如何曾否祈禱又色括前曾奏稱春夏之間雨澤愆期請行恤刑之典朕已允行其如何辦之處喀爾吉善亦未奏聞可傳旨詢問如祈禱省刑借種撫恤等事有應行速辦者即一面辦理一面奏聞該部速行文該撫知之欽此

2299 乾隆八年六月初三日內閣奉

上諭前據雅爾圖奏稱河南通省九府四州所屬俱於五月初二日得雨深透又彰德府屬之安陽武安等縣於初七八得有雨澤惟開封府所屬雖於五月十一日得有微雨未能霑足若旬日之內大沛甘霖秋禾尚無妨碍等語今既旬日矣曾否得雨霑足或應祈禱及應照往例省刑之處著該撫一面辦理一面奏聞毋得怠忽稽遲該部遵諭速行欽此

2300 乾隆八年六月初三日內閣奉

上諭 太皞伏羲氏之陵河南陳州府郊外向來祠宇巍我廟貌整飭歷年既久不無傾圮有失觀瞻著該撫飭令地方官於秋成之後動項修葺欽此

2301 乾隆八年六月初三日內閣奉

上諭朕前往奉天恭謁 祖陵典禮重大所有祭文理應盡心擬擬今滿漢文俱甚屬平常語意亦多重複著將擬擬之于振緒譯之文保德通各 刑俸三箇月以示懲儆欽此

2302 乾隆八年六月初三日內閣奉

上諭南寧國貢象舊例以五年為期朕思該國僻處天末遠道致貢未勉煩勞著改為十年一貢以示朕柔遠之意欽此

2303 乾隆八年六月初五日內閣奉

上諭京師自五月杪以來天氣亢旱且溽暑炎蒸甚於往歲  
明係

上天垂象以示儆朕夙夜憂惕莫釋于懷皆曰朕躬之闕失或  
用人行政之失宜著九卿科道悉心思維直陳毋隱並將  
實有裨於國計民生之務據實敷奏俟朕採擇見之施行  
庶幾感名

天和潛消沴戾諸臣毋得視為具文負朕諄切求言之至意欽  
此

2304 乾隆八年六月初六日內閣奉

上諭前降旨將李質粹補授廣西提督今據伊奏稱父母年  
老有病廣西路遠不能迎養情辭懇切李質粹著調補陝  
西固原提督其廣西提督員缺著固原提督豆斌調補欽  
此

2305 乾隆八年六月初六日內閣奉

上諭山東春夏以來雨澤愆期二麥有歉收之處近雖漸次  
得雨尚有未嘗霑足之州縣若照例徵收錢糧民間未免  
拮据朕心軫念著該撫將麥收歉薄之州縣逐一查明所  
有六七兩月應徵錢糧緩至八月後徵收以紓民力該部  
即速行文傳諭該撫知之欽此

2306 乾隆八年六月初七日內閣奉

上諭河南巡撫推爾圖現已來京候旨碩色未能即日  
到任阿里衮湖南審理事竣路經河南著即赴開封暫署巡撫  
事務俟碩色到任後再來京復命碩色接到部文亦即赴  
河南新任不必候旨三文代亦不必來京請訓欽此

2307 乾隆八年六月初七日內閣奉

上諭本月初四日進愛奏請進見朕因伊係欽天監堂官當  
此亢旱炎蒸或星象有無變異關係朕治之得失是以面  
加詢問伊奏稱星象並無變異之處但日下天氣亢旱有  
應行調劑者約舉四條朕令寫出交大學士等議奏及覽  
所議之摺第一條內開向例禁止燒鍋賭博鬪鷄鶴鷄之

類應大弛其禁使民自便則和氣感召自可雨暘時若第  
二條內開從來官負原皆定有陋規到任即能充裕又加  
以耗羨是以辦事從容今一槩禁革以致蒞任後不能備  
還借貸等語悖理傷道莫此為甚至三條之言稅課四條  
之言刑罰皆係現在已行之事勉強湊合經大學士等議  
駁朕尚怒其無知置之不問今日忽又封奏云五月初九  
等日金星晝見初九十九等日屢次流星夜見苛語若其  
言果寔何以彼時不奏且朕前日面詢又以為並無災異  
今忽為此語豈非幸災樂禍任意捏造以鼓惑人心乎且  
其摺內又稱去歲彗星現象時伊曾將淮揚水災今歲京  
師感暑預先奏過此皆伊並未奏及之事捏為已奏更屬  
無耻愚而詐之甚也又條陳時事數件如大學士於一切  
本章應行夾籤九卿應時常召見督撫等官應行選擇等  
語大學士之籤與否伊何由得知且現今何嘗不夾籤朕  
以得人則諸事就理雖道府等官概令陛見請訓而况九  
卿九卿之未嘗數召見者則留保木和林滿色張廷璠張  
廷琛王承允許希孔數人也且此數人即今日日召見能  
有裨於政治耶若夫督撫之慎選更不待言廷璠獨全不  
聞知耶又稱京官外用則以為樂外官內用則以為苦宜  
加調停不知伊意欲如何調停想不過欲貪贖公行賄賂

交通亦如民間之燒鍋賭博聚弛其禁乃為快意耶至若  
內務府何至開張鋪面與民爭利此人所共知共見者伊  
不知何處來此喜囂之語朕因數日天氣亢旱炎熱倍常  
明係

上天垂象以示微想因朕躬之闕失與用人行政之失宜時加  
省惕倍切憂勤若人臣進言苟有可採朕必樂聞若似此  
卑鄙悖謬任意捏造且有意惑人聽聞者則不可不加懲  
治况欽天監職司推步豈可妄逞邪說蠱亂人心進愛著  
該部嚴察議奏并將伊摺內謬誕之處曉諭臣工知之欽  
此

2308 乾隆八年六月初八日內閣奉

上諭朕前降旨將山東運河道陳法調補安徽鳳道目下  
正當伏秋大汛河防關係緊要運河道有督率經理修防  
調劑之責恐易生手未免不甚諳練陳法著暫留運河道  
之任俟秋汛過後再與高越對調各赴新任欽此

2309 乾隆八年六月初八日內閣奉

上諭今年既多閏月又值炎暑商販未糧到來更遲近日雖經得雨尚未需足米價比往年增長應將京倉官米速行發糶以平市價俾八旗五城兵民俱得需惠如何辦理之處著戶部速議具奏再黑豆價值近亦漸貴官私馬匹俱須喂養亦應酌量平糶著該部一併議奏欽此

2310 乾隆八年六月初八日內閣奉

上諭前因河南開封府所屬兩澤徂期朕已降旨令該撫虔誠祈禱清理刑名績據雅爾圖奏稱近日雖得微雨未能深透此不過雅爾圖塞責之語朕聞得彼地竟未得雨大田多未栽種此際正須籌畫平糶借種等事如已成災更宜撫恤著該撫趙城即速查辦俟阿里衮到豫詳細辦理奏聞該部遵諭速行欽此

2311 乾隆八年六月初九日內閣奉

上諭本年七月朕前往奉天謁陵戶刑二部堂官派出隨駕者多俟朕啟程後著史貽直暫兼管刑部尚書事盛安暫兼管戶部侍郎事欽此

2312 乾隆八年六月初九日內閣奉

上諭朕聞湖廣營伍甚屬廢弛提督提理通省軍務練修整是其專責王無黨到任已及兩年全無整理亦未將營伍情形奏聞甚屬不合著交部察議具奏欽此

2313 乾隆八年六月初十日內閣奉

上諭杜愷著交典川陝總督慶復帶往以忝將遺孽酌量甄補欽此

2314 乾隆八年六月初十日內閣奉

上諭原任浙江衢州鎮提兵官康華齡年已衰老著以原品休致欽此

2315 乾隆八年六月初十日內閣奉

上諭直隸各屬雍正十二年以前民欠錢糧已於恩詔內寬免惟有慶都靜海冀州武邑四州縣民欠未報共一萬一千九百餘石向經部議以係出借之項不在寬免之例朕思此項歷年已久尚事追呼小民未免苦累著一體開恩悉予豁免俾窮黎均沾惠澤該部即遵旨行欽此

2316 乾隆八年六月十二日內閣奉

上諭在京各衙門事務俱係滿漢堂司公同辦理至遇罰俸處分旗員則註冊合算漢員則照常罰俸例未盡一嗣後凡在京臣工有罰俸案件不至銷去一次紀錄者俱照旗員之例註冊合算欽此

2317 乾隆八年六月十五日奉

旨從前苗京提理事務之王大臣是兩人一班在紫禁城內直宿此次為時較久著一日一人在內輪班直宿欽此

2318 乾隆八年六月十六日奉

上諭御史西成所奏似是而非未免言之太過不知朕意前日進奏摺內有請時常召見九卿可以知其才品有裨政治之語夫朕於九卿召見者甚多不但確知其行事并且深悉其隱微進愛竟以朕為不常見九卿若不知九卿之底裏者是以明白曉諭並及九卿中數人不數召見之故其寔此數人者竊以啟沃加以諮詢固不足以有裨政治亦尚各恭謹奉職勉不遑並無過愆即應罷斥之處何至不可居位而責以避賢路乎假使陞卿貳之負累

有傑出之才高出諸臣之上朕早進彼黜此使推賢讓能矣而無如現在各員亦皆中等才具若用為卿貳未必不與諸臣等或且不及亦未可定又何必輕棄舊人而擢用新進乎朕聞人主臨下之度在於色荒用人之道貴乎造就內外大臣衆多豈盡能才全德備一無可議亦惟量才器便用其所長教其所短以合乎古帝王與人不求備之義耳前日進愛條陳召見九卿朕憤于彼之謂朕不知人是以評論及此數人而無知之小臣遂以諸臣不應晏朕居位為言夫非朕兼容曲成之意朕轉悔前言之有失舍弘也今特將朕用人之本意采材之苦衷曉諭諸臣共知之西成摺并發欽此

2319 乾隆八年六月十六日奉

上諭今年天氣炎熱甚於往年聞山東山西河南陝西兩處地方民人有病腸或致傷損者該督撫等自必為之經理此等窮苦之人無所依倚全在地方官善為撫恤令各該督撫轉飭有司悉心查辦有應動存公銀兩者即行動用嗣後如有類此之事毋得漠視該部遵諭速行欽此

2320 乾隆八年六月十六日內閣奉

上諭御史胡定泰劾許容誣森謝濟世一業今據侍郎阿里  
衷遜審明胡定所奏俱實此業朕特命孫嘉澍前往湖南  
會同許容虛公查審倉德又復揭報張燦等致札換詳等  
獎亦交孫嘉澍審理乃孫嘉澍一察朦混具題經侍郎阿  
里衷研審始得實情朕思胡定身為言官若言事不實自  
有應得之處分今既實矣若止為謝濟世辨白究抑其事  
尚小因此察出督撫等之挾私誣陷徇隱扶同使人不知  
所警戒此則有裨于政治為益良多胡定著交部議叙至  
于各省督撫身任封疆舉劾悉秉公心方不負朕之委任  
若以愛憎為舉劾如許容孫嘉澍之居心行事豈不抱愧  
大廷負慚夙夜各督撫等當深自警省以許容孫嘉澍為  
炯戒欽此

2321 乾隆八年六月十六日奉

旨劉藻因母老陳請終養情詞懇切著准其回籍侍養欽此

2322 乾隆八年六月十六日內閣奉

上諭滿色年已衰老著以原品休致禮部侍郎負缺著理藩  
院侍郎勒爾森調補理藩院侍郎員缺著汪北爾補授欽  
此

2323 乾隆八年六月十七日內閣奉

上諭朕惠養兵民視同一體即如地方米少價昂之際或平  
糶以濟民食或借穀以濟兵糧均當斟酌其時而後行之  
方於兵民有益而無如無識武員欲博兵丁歡心好行其  
惠不計候之早遲與倉儲之多寡輒冒昧請發迨後米糧  
不繼而民兵俱受其困矣今年春夏間廣西提督譚行義  
欲借柳州倉穀五千石與提標兵丁既已咨商撫臣自應  
聽其酌覆乃該撫尚未回覆而譚行義竟將三千石借與  
兵丁且欲全省照此通行是其意但知有兵而不知有民  
矣獨不思兵丁每月既有餉銀又有額米非貧民無計營  
生者可比譚行義識見卑鄙不知大體著交部察議具奏  
從來武官陋習一味袒護兵丁以博稱譽兵丁又恃強負  
氣難於約束西北邊境以及苗徭地方並濱江沿海之處  
營汛居多一鎮之中兵丁幾於相半一人食糧而弟  
兄親戚遂有倚勢生事之意及至發覺該管弁員又復為



之請託承審有司未免顧惜同官處分不加窮究而兵丁益無忌憚矣著各省督撫提鎮時刻留心查察嚴切訓飭倘有仍蹈故轍者將該弁即行糾叅兵丁重加懲治不得姑容欽此

2324 乾隆八年六月十八日内閣奉

上諭儲龍光到京候補之日著該部帶領見欽此

2325 乾隆八年六月十九日内閣奉

上諭驛遞關係郵傳最為緊要濫騎濫應例禁甚嚴而外省擾害之弊究不能免朕聞雲貴督撫曾奏入京路經湖南地方所用駟馬在勘合大牌額數以內者固當應付乃陋習相沿有額數以外者地方官亦不得不應更有並無勘合大牌而私索強騎亦者不得不應及被該省上司查出又以州縣濫應駟馬照例奉處甚為苦累著雲貴提督嚴飭差弁家人深遵功令不得於勘牌之外多索一騎如何仍前不改經朕訪聞惟該督撫是問各省有類此者當一體深遵欽此

2326 乾隆八年六月二十日内閣奉

上諭河間天津地方今年雨澤愆期米價昂貴不得不速籌接濟之道查上年通倉存貯有口外採買備用之粟米著先撥十萬石運送天津其何以分貯賑恤聽總督高斌酌量辦理可即傳諭倉場侍郎催船運送並著坐種廳恩特督運速赴天津至一應搬運之費照例開銷該部遵諭速行欽此

2327 乾隆八年六月二十一日内閣奉

諭據貴州提督張廣泗奏稱黔省自文夏以來米價昂貴已通飭各屬查察地方情形將倉穀減價平糶至於無錢赴糶之人正自不乏其中年力未衰者尚可傭工度日惟有鰥寡孤獨以及夫男遠出祇存妻子在家者除前經收入普濟堂足資存養外尚有不願收入普濟堂者敬啟待哺急宜撫恤臣與司道酌議通飭各屬逐一確查按照普濟堂之例大口日給米八合小口減半以兩月為期可以接至秋成現在一面查報一面散給州縣若州縣力不能捐臣等公同捐給務使貧獨不致失所等語此等窮困之民國家自應加恩惠養其養贍之資動用存公銀兩為是若散給州縣令地方官捐資豈朕保赤之意張廣泗不識

大體可申飭之欽此

2328 乾隆八年六月二十一日內閣奉

上諭朕惟養民之本莫要於務農州縣考成固應用是為殿最而向來功令不專以此課吏者固其事甚樸無可炫長其迹似迂驟難見效又或上官之察勘難周有司之條教易飾不似催科聽斷捕盜等事之顯而有據也督撫察吏每於此等本計轉視為老生常談漠焉不甚加意以致州縣之吏趨承風旨專以簿書期會為先而農事反居其後職司民牧之謂何不知為政之道本舉而未自隨之如果南畝西疇人無餘力于稻舉趾日無暇時則心志自多淳樸風俗自鮮薰後人知急公而閭閻無待這呼矣人知畏法而盜賊因以浸息矣本計既端末事亦次第就理如此則州縣之考成似疎而實密即督撫之察核可簡而不煩日計不足月計有餘民生大有裨益即治道亦漸致郵隆若夫朝夕申意非不美矣東縛馳驟適以擾民為督撫者當善體朕意毋視為具文無事於塗飾誠以實心化導其屬俾屬吏亦以實力勸課其民庶幾野無游惰之風家有蓋藏之樂朕以此計訓示督撫業已至再至三不啻耳提面命今復降此諭實願與天下共敦本計故不厭其重言之重而詞之複也各省督撫其共勉之欽此

2329 乾隆八年六月二十二日內閣奉

上諭江蘇巡撫陳大受奏稱金壇無錫等縣田沒蘆田請豁免錢糧部議以於例不符未經准行等語從來民間田畝田沒者免課漲墾者陞科此定例也即如陳大受摺奏中稱請自今每歲丈量田者即予以豁免等語言田而不言漲則扭于一偏矣朕觀近日各省督撫見朕加恩百姓於地方一切事務不詳察事理不深籌國計凡有可邀民譽者一概巧思請寬請免者以見其為民請命之意且以為縱干部駁而此事已上請可以便民知感部臣議事又以為職司出納慎重錢糧於督撫題奏之事可駁者固議駁即情節可准者亦無不議駁專以綜核為盡職而待恩出自上夫事事必思出自上豈成政體德之內外工情形督撫多失之寬部臣多失之嚴寬與嚴皆非中道督撫與部臣職任雖有內外之分而為體國之大臣則一朕以建中之理治天下而二三大臣尚不能化此夙習是朕之誠有未孚也用是特頒諭旨宣示俾共知朕意欽此

2330 乾隆八年六月二十二日內閣奉

上諭介福着調補安徽學政萬壽著調補陝西學政欽此

2331 乾隆八年六月二十五日奉

旨此摺着抄錄寄與直隸河南總督撫該省如有得雨稍遲應須補種之處著酌量土宜仿照辦理欽此

2332 乾隆八年六月二十五日內閣奉

上諭據山西巡撫喀爾吉善奏東省雨澤愆期之州縣秋成漸致失望民人多外出謀而隣省貧民亦有轉入東省覓食者夫地方雨暘不時例有借給籽本督令補種設或得雨已遲補種無及亦應酌量撫恤何致一時紛紛轉徙即逃荒亦所時有然必俟果似至秋收無望或流他處覓食可耳豈有尚在六月可望續種之時即流移至此喀爾吉善又奏稱在愚民之意不過希冀隣省收養多沾恩澤細察此輩非習慣求乞即游惰愚民如竟行留養不惟時日尚早難乎為繼且愈滋覬覦輕出之風若任其過往漫無稽查又恐流離四散不無為匪滋事請即飭地方官勸令各回故土以待本處自有之恩并令遞留撫馭毋許再有外出等語所見甚為得體各省督撫須當留心於平居無

事之時委曲開導使知敷本務實力田逢年若輕棄其鄉則本業拋荒夫所依倚即國家收養資送亦不得已之計非可恃為長策也平日既導切勸諭俾各知安土重遷及至歉象已形百姓有漸不能支之勢即設法安頓使之各守鄉里不致越境四出如此則先事綢繆臨期補救於扶危濟困之道斯為兩得而閭閻寔被其澤矣若平時漫不經心以致貧民遇歉轉徙留之不能驅之不可豈經國子民之善計乎可將朕意傳諭各省督撫共知之欽此

2333 乾隆八年六月二十五日內閣奉

上諭據山東巡撫喀爾吉善奏稱東省雖屢經得雨未能一概霑足恐將來查勘災賑事務繁多需員辦理請將候補州縣之員揀發數人來東以備委用等語著照喀爾吉善所請交與該部速於候補州縣人員內揀選七八員命往山東聽喀爾吉善差委試用如才可辦事即酌量題補若才具平庸即咨部請旨欽此

2334 乾隆八年六月二十五日內閣奉

上諭今年直隸山東河南等省有缺雨之州縣將來或至成灾亦未可定其經理之虞不容刻緩若該督撫有請免請賑本章應照例辦理者朕祇謁

祖陵事閱鉅典而民瘼之念時時在懷若候行在降旨則未免稽遲著留京提理事務之王大學士等四人一面交部查辦一面奏聞部議之後亦即一面行文該省一面奏聞如此則事得速辦不至有滯滯之慮矣欽此

2335 乾隆八年六月二十七日奉

旨二十二三及二十五六等日京師連得透雨不知天津河間一帶亦得透雨否如已得雨尚可補種晚蕎麥等糧否凡可以補種者著高斌上緊料理即速奏聞欽此

2336 乾隆八年六月二十七日奉

上諭武舉內有隨幫効力年滿人員應以衛千總用者其選用之法按其從前揀選等第分班銓選一等人數無多選期尚速其二等者有數十人三等者多至二百餘人每年選用不過三四人甚為壅滯朕思衛千總與營千總雖屬有間但武職人員俱尚技勇亦當及其強壯之時而用之

且此項武舉既係隨幫年滿非閑散武舉可比若遲至二三十年之久方得錄用未免精力就衰難為國家宣力所當酌量疏通著該部詳悉妥議具奏請旨欽此

2337 乾隆八年六月二十七日奉

上諭朕聞修書各館膠錄人員內竟有不能繕寫之人夤緣而進及上館之後轉行債募以致承修各書不能刻期告竣夫國家開館纂修典制蕃重書成之日膠錄人員亦有議叙錄用之例何得將不能書寫之人濫行充補從前滿洲繕譯膠錄亦由各館自行挑補後御史觀音保條奏請簡派大臣考選試取送館經部議行嗣後各館漢膠錄需人亦應另派大臣秉公考取其如何考校送館錄用并現在各館漢膠錄應如何查核之處著該部定議具奏欽此

2338 乾隆八年六月二十七日內閣奉

上諭德山前為給事中原屬中等之員及任鴻臚寺卿行走平常又復多病著以原品休致欽此

2339 乾隆八年六月二十八日奉

上諭民間貿易官為設立牙行以平市價所以通商便民彼此均有利益也是以定例投認牙行必係殷實良民取有結狀始准給帖充應蓋殷實則有產業可抵良民則無護符可恃庶幾顧惜身家凜遵法紀不敢任意侵吞為商人之害乃聞各省牙行多有以矜監認充者每至侵蝕客本拖欠貨銀或恃情面而曲為遲延或藉聲勢而逞其指勒以致羈旅遠商含忍莫訴甚屬可憫從前外省衙門胥役有更名換姓兼充牙行者已經降旨勒部定議嚴行禁革積弊始除而矜監充行其弊與胥役等應將現在牙行逐一詳查如有矜監充認者即行追帖令其歇業永著為例嗣後如有應仍騙故轍而州縣官失於查察者著該上司查叅議處其如何定例之處該部妥議具奏欽此

2340 乾隆八年六月二十八日內閣奉

上諭湖廣荊州關稅務著內務府總管於司員內揀選數人帶領引見欽此

2341 乾隆八年七月初二日奉

旨科道職司言路凡有見聞自應陳奏但如鄒一桂所奏據拾浮囂撓越清陳種種情節則大不可嗣後有交部議事件而科道不待部覆參差具奏者該部於覆本內將伊等意參差之處聲明請旨欽此

2342 乾隆八年七月初二日內閣奉

上諭長蘆鹽運使倪象愷現在患病著解任回籍調理其員缺著鄧釗補授欽此

2343 乾隆八年七月初三日內閣奉

上諭河防關係重大茲值秋汛長發之候一切脩防搶護機宜事存呼吸其應行辦理之務督河諸臣自可相機速辦若有具疏應交部議者著留京理事務之王大學士等四人一面部議一面奏聞部議之後亦一面行文該省一面奏聞庶不致稽遲時日欽此

2344 乾隆八年七月初七日内閣奉

上諭

溫惠貴太妃侍奉

皇祖多年淑慎素著朕幼年蒙

皇祖養育宮中

貴太妃時加撫視今欲晉封

皇貴太妃以申敬禮之意奏聞

皇太后欽奉

懿旨欣允所有應行典禮著該部察例具奏欽此

2345 乾隆八年七月初七日内閣奉

上諭朕前降旨將河南上年未經報災之州縣所有應徵錢

糧分別停緩俟秋收後再行徵收聞雅爾圖止將鄭州等

十三州縣中勘不成災之村莊展至秋收後開徵而新野

汝陽西平遂平項城扶溝等六縣同屬勘不成災未經一

例題請朕思該地方既被水淹秋收自減其應納錢糧亦

着加恩停緩又太康一縣雖未被水去秋亦屬歉收上年

民欠錢糧并着緩至本年十月後徵收以紓民力該部即

遵諭速行欽此

2346 乾隆八年七月初七日内閣奉

上諭福建按察使岳濟已丁憂其員缺江南糧道納敏補授

欽此

2347 奉

旨漕運關係京師積貯原未便輕議截留但目前京倉尚屬

充裕而各省倉儲正在需米孔亟偶爾變通尚屬可行著

將乾隆甲子年江蘇安徽浙江江西湖北湖南六省應運

京漕糧各留十萬石於本省再着江蘇浙江各將十萬石

運往福建着江西將十萬石運往廣東以備緩急之用此

朕格外之恩不得援以為例欽此

2348 乾隆八年七月初八日内閣奉

上諭朕奉

皇太后前往盛京恭謁

祖陵所有經過州縣不令絲毫擾累但安營除道未免有資民

力朕心軫念著直隸提督高斌奉天府尹霍備查民各地

方本年錢糧應徵數目請旨蠲免以昭朕體恤閭閻之至

意欽此

2349 乾隆八年七月初八日内閣奉

上諭前因直隸天津河間等屬夏間被旱米價昂貴朕特降諭旨令倉場提督撥通倉米十萬石分貯被旱各州縣以備平糶撫恤之用今據高斌奏稱被旱之地已經成災除先行酌量撫恤外現在查明分別賑恤照例於冬月開賑等語朕思開賑之後需米必多著倉場提督於通倉撥粟各色米內再撥四十萬石於現撥十萬石運完之後即行接運務於八月內全數運津令提督高斌分撥各處水次次就近乾運接濟冬賑恤該部速遵諭行欽此

2350 乾隆八年七月十一日内閣奉

上諭直隸宣化提兵官員缺著廣西左江提兵官丁士傑調補左江提兵官員缺著廣西義寧副將楊剛補授欽此

2351 乾隆八年七月十一日内閣奉

上諭譚行義已經降調伊到京之日著該部帶領引見欽此

2352 乾隆八年七月十七日内閣奉

上諭准北上年被災各屬一應錢糧朕已降旨分別蠲緩惟海州沭陽贛榆三州縣年連疊被災稔今春又因亢旱二麥歉收雖五月以後得雨可望秋成但積歉之餘小民元氣究難驟復地漕兩項一時並納未免拮据除地丁銀兩仍於十月後開徵其本年漕糧二萬二千六百石有零并七年分蠲剩緩漕俱著於次年分限帶徵緩一分之輸將即可紓一分之民力該部即遵諭行欽此

2353 乾隆八年七月十七日内閣奉

上諭淮揚徐海四府州屬疊被水旱朕心軫念於賑恤之外復借給籽種牛草銀兩此等借給之項例應秋收後催還但此四府州屬六七年水災尤重借給更多有已借冬種旋因無收又借春種者有春種無收復借秋種者數年之積欠一時恐難全完著該督撫轉飭地方官酌量情形其力能清償者自應照例交納若實屬艱窘無力不能完繳者著於來歲麥收復後再行分限催還以示朕軫恤積歉災黎之至欽此

2354 乾隆八年七月二十五日内閣奉

上諭據沈廷芳條奏三摺其一摺內開賑恤之法一曰地方官親身督賑一曰散賑宜各處設廠一曰災民宜計月給糧一曰流民宜隨地留養皆係現行之事敷衍陳奏毫無裨益至請部頒冊式一條更屬無謂蓋地方官呈報水旱皆係就地情形豈能限以一定之式乎又稱北五省連歲有荒歉之虞民病正劇士女化離流轉載道強者鹿麋弱者填壑伊豈不知上年直隸山陝俱屬豐收而捏造此無稽之語乎又一摺奏稱雨澤時降遺方類多發水密雲雲濼州河橋衝壞道路阻隔礙舟祇候凡駐蹕之地需用水漿須鑿井數十輩道兩旁復築扈從臣工運路經過路不能耕種至濼州所築三橋費頗不貲申詳大吏止派千金應請益廣皇仁令直隸提督奉天府尹確查地方官倘有墊應悉給帑金其辦差勤敏者量加獎賞農民於蠲免之外六稍予賞給等語此次經過橋梁俱係乾隆六年舊有木植不過稍加添補皆動正項錢糧何貽墊之虞且處且經行數月之久豈能免無雨雪前者密雲等處偶被水衝亦常有之事有司文吏不諳奔走其密雲懷柔等處因訥親率庵人員先行朕令其親身督理官兵修造其近口橋陸令提督保祝率領所屬官兵修造朕已悉加賞費由

是言之地方官全無尊君親上之意應責而已有何應責

加獎之虞至於濼州乃由山海關回臺之路此當並未經由其橋梁尚未修建有何被水衝壞以致道路阻隔至費用幾何地方大吏自必照例估撥焉有冰累之理現在出口經行華路皆向來通行大道凡屬臨幸理應修治並非開闢由崎如遇寬廣之虞則扈從人員在兩旁行走至狹隘之虞統歸御道並未將舊路開展有妨田畝沿途禾黍如雲如錦可望豐登此隨從數萬人所共知共見者一路俱有水泉儘足供闈營之用何須鑿井每處至數十口之多且巡幸亦時有官吏之經理百姓之力役皆分所宜然若此即加獎勵賞養不但無此政弊並使官民不知尊君親上之義又豈可為訓况朕前因安營除道未免稍用民力特降旨蠲免錢糧且沿途年老農亦時加賞給此皆出自朕之特恩非臣工所可奏請者沈廷芳又稱車駕謁陵內外臣工自七品以上皆宜一體賞給誥封大軍恩乃朝廷大典康熙年間

皇祖因奉天

陵寢告成是以謁

陵時特頒恩詔後兩次恭謁亦未舉行朕今初次叩謁

祖陵國家典禮自有定制而未舉行之前臣下輒妄行謁觀有



是理乎科道職司言路必有益政治方可建白今沈廷芳並未隨駕何以能知途間之事非係地方官中有伊親朋或慮此次奉公不力將有處分傳進信息令伊陳奏希冀邀恩即係伊遣人跟隨密行偵探如此居心行事其屬卑鄙其所奏又皆妄誕若不加以處分無以示警沈廷芳著交部嚴察議奏欽此

2355 乾隆八年八月初四日內閣奉

上諭據署廣東提督策楞等奏上年十一月內英吉利國巡哨船隻遭風壞船飄至澳門海面并遣夷目撐駕三板小船徑至省城懇求接濟水米沿途水塘沉弁絕無盤詰稽查後經督撫准令灣泊內海接濟口糧採買木料修理船隻俟風信便時飭令出口策楞隨將海口毫無查察之副將王璋并不早為揭報之總兵焦景竑題奏夫題奏固當然亦該省向來因循之所致也馬爾泰到任後當亟力整頓之至於王安國雖無節制兵之責但地方官公務皆職守所關必協力同心諸凡商酌於事乃克有濟若撫臣於海疆諸務推諉武職而肩承不力或鎮臣玩巡撫而呼應不靈不但失和衷之道且于地方公務必致貽誤豈朕委任之意用是特降諭旨著該部即行文該省督撫鎮臣等知之欽此

2356 乾隆八年八月初四日內閣奉

上諭廣東雷瓊道張昭美緣事降調著吏部行文調取來京引見欽此

2357 乾隆八年八月初四日奉

旨者下尊丹巴胡圖克因萬壽進釋迦牟尼佛一尊著隨本報送往京城交養心殿首領太監王守貴收欽此

2358 乾隆八年八月初七日內閣奉

上諭前因孫嘉淦許容將地方一切政務廢弛不理而於謝濟世一案許容則扶私誣陷孫嘉淦則扶同作弊二人大負朕恩是以令其順義縣城工効力贖罪今金溶奏稱孫嘉淦操守不苟中外共知且言歷任以來其辦事之能否才具之優絀未敢深論是意中明以孫嘉淦為才守兼優之人不當廢分者矣獨不思孫嘉淦自朕簡用直隸提督並不能辦一事即如經理永定河務先請放水後倡築臺之議人人以為笑談及調任湖廣奏明往襄陽親閱堤工行至中途聞有匿名書帖之事即行回省此豈封疆大吏

所為至於諸事廢弛扶同許容其錯謬認難以枚舉即其  
操守一節亦不過見功令森嚴未敢肆行貪黷耳豈一塵  
不染者可比金溶係伊門生力為陳奏其意全為孫嘉淦  
而發乃并為許容巧恩可謂巧矣當

皇考時臣內有負恩弱職之員多令於河工城工効力將罪  
者彼時言官從未見有人陳奏何至今日乃敢喋喋以行  
其私耶且金溶摺內更明不敢避師生之微嫌忘國家賞  
罰之大計巧詐已極朕即位之初陳樹萱曾荐伊兄弟二  
人托言內舉不避親之義朕深悉其私衷曾經處分金溶  
此舉事同一轍夫言路為國家耳目若以師生私誼擾亂  
是非所關匪細朕不惜處一言官而使臣僚知假公濟私  
必難逃朕之洞鑒庶幾少知儆惕亦挽回風氣之一道也  
金溶著交部嚴察議奏欽此

2359 乾隆八年八月初七日內閣奉

上諭山西一省民間需用小麥雜糧全資閩中接濟前聞陝  
省禁止商販朕已密諭塞榜額令其弛禁通商此現辦之  
事也今葛德潤係山西人而市惠桑梓以此陳奏謂之無  
私可乎夫以本省言官條陳本省之事未免易滋與實近  
來此風漸熾不可不防微杜漸也葛德潤著飭行欽此

2360 乾隆八年八月初八日奉

旨准閩監督印務著圓明園總管倭赫前往管理倭赫係朕  
素悉之人不必前來請訓著即赴新任俟一二年後再來  
京欽此

2361 乾隆八年八月十一日內閣奉

上諭河南永城鹿邑夏邑三縣乾隆四年被水成災其地丁  
錢糧經朕降旨分別緩徵以紓民力迨六七年該處復  
遭水患不特前項未完而該年錢糧又復停緩今年秋收  
屆期俱應照數催徵朕念三邑連年被災閭閻未免艱窘  
現今即屆有秋而以數年逋賦並徵於一年之內恐有妨  
小民仰事俯畜之計著再加恩將永城鹿邑夏邑三縣乾  
隆四六七年未完帶徵緩徵銀一十四萬餘兩就各縣  
原欠數目自乾隆甲子年為始再均作三年徵收俾輸將  
不致拮据以示朕優恤之意欽此

2362 乾隆八年八月十七日内閣奉

上諭山東今歲夏間雨澤愆期齊東陵縣德平德州平原惠民樂陵陽信涇州利津商河恩縣夏津武城十四州縣俱有被災之處所有本年應納漕糧黑豆例應十月開徵朕念該州縣被災屢雖輕重不同收成均屬歉薄按期輸納實屬艱難著將東省被災州縣本年應納漕糧黑豆及原有帶徵之處視被災之輕重分別年分緩帶輸納以紓民力著該部即行文喀爾吉善令其查明具題辦理欽此

2363 乾隆八年八月十七日内閣奉

上諭山東今歲偶被偏災現在開倉賑濟但積貯未能在在充裕如有倉穀不敷之縣勢必銀穀兼賑向例折銀五錢作穀一石按口散給朕思東省被災之地穀價必昂五錢之價恐有不敷著加恩每穀一石於舊例外再增一錢折給俾領賑貧民購買不致難艱共沾實惠該部即遵諭行

欽此

2364 乾隆八年八月二十日内閣奉

上諭廣東糧驛道朱叔權著吏部行文調取來京引見其糧驛道員缺著陝西西安府知府朱開聖補授欽此

2365 乾隆八年八月二十四日内閣奉

上諭江南狼山鎮提兵官林祖成著來京陛見狼山總兵官員缺著福建海壇提兵官黃錫申調補海壇總兵官員缺著廣東左翼總兵官焦景鏡調補左翼總兵官員缺著閩安副將陳林每補授欽此

2366 乾隆八年八月二十四日内閣奉

上諭蘇松糧道員缺著徐淮防道王雲銘調補徐淮海防道員缺著黃蘭谷補授欽此

2367 乾隆八年九月初五日内閣奉

上諭上年八月內降旨將江蘇安徽福建甘肅直隸廣東浙江等省雍正十三年分未完民欠地丁漕項一切銀米加恩豁免今聞福建閩縣等處尚有寺租歸公一項原係廢寺田畝入官收租完糧雍正十三年分尚有民欠未完租

穀四百餘石因係另奏造報未獲一體邀恩朕思寺租雖屬另奏題報之項但窮佃無力輸將事同一轍所有閩縣古田霞浦寧德四縣十三年分民欠寺租著加恩一併寬免該部即遵諭行欽此

2368 乾隆八年九月初五日內閣奉

上諭朕軫念民艱以米糧為民食根本是以各閩米稅行概蠲免其餘貨物照例徵收至於外洋商人有航海運米至內地者尤當加恩方副朕懷遠之意上年九月間暹羅商人運米至閩朕曾降旨免徵船貨稅銀聞今歲仍復帶米來閩貿易似此源源而來其加恩之處自當著為常例自乾隆八年為始嗣後凡遇外洋貨船來閩粵等省貿易帶米一萬石以上者著免其船貨稅銀十分之五帶米五千石以上者免其船貨稅銀十分之三其米聽照市價公平發糶若民間米多不需糶買即著官為收買以補常社等倉或散給各標營兵糧之用俾外洋商人得沾實惠不致有糶賣之艱該部即行文該督撫將軍並宣諭該國王知之欽此

2369 乾隆八年九月十三日內閣奉

上諭貴州都勻府同知陳于中著補授廣西慶遠府知府刑部郎中譚襄世著補授廣西柳州府知府欽此

2370 乾隆八年九月十五日奉

旨朕廣開言路虛懷採納原為或有閭君德或有裨政治或內外大臣有婪贓不法劣蹟昭著言官能直言無隱朕始可收明目達聰之益若止於勸襲陳言敷衍套語則載籍具備朕一覽之餘自能深悉何待伊等陳奏似此殊負朕虛已求言之意乃近日科道習氣更不止此如沈廷芳之捏無稽而希惠澤金溶之用巧詐而逞私情並非限於識見無心之過若不加意處分無以示儆但以二人相較而論沈廷芳不過卑鄙狂瞽不稱言職尚無情弊實據金溶則袒護師門假公濟私漸開朋比黨援之習其為人心世道之害甚非淺鮮二人該部雖俱議革職其情罪却有輕重之不同沈廷芳著從寬降二級調用金溶著照議革職并宣示科道等共知之欽此

2371 乾隆八年九月十七日內閣奉

上諭前漕運總督顧琮督運來京奏請舉行限田之法每戶以三十頃為限以為如此則貧富可均貧民有益朕深知此事名雖正而難行即去年盛安均田之說也因示諭云爾以三十頃為限則未至三十頃者原可置買即已至三十頃者分之兄弟子孫則每人名下不過數頃未嘗不可置買何損於富戶何益於貧民况一立限田之法若不查問仍屬有名無實必須戶戶查對人人審問其為滋擾不可勝言夫果滋擾於一時而可收功於日後亦豈可畏難中止今輟轉思維即使限田之法地方官勉強奉行究於貧民無補是不但無益而且有累也而顧琮猶以為可行請率領地方官先於淮安一府試行之持論甚堅至於大學士張廷玉公訥親等動色相爭朕見彼如此擔當勇於任事意尚可取是以令其再與尹繼善熟商今據尹繼善陳奏難行之處與朕語不約而同則是此事之斷不可行斷不能行實出人人之所同然文豈可以嘗試茲特降旨曉諭顧琮此事著停止并令各督撫知之欽此

2372 乾隆八年九月十九日內閣奉

上諭去歲春季京師雨澤稀少朕虔誠祈禱曾降旨將輕罪人犯分別減免因推廣於各省如遇災青之年著該督撫將清理刑獄之處奏聞請旨又恐各省遠近不同請旨行文辦理已不及時因令該督撫除徒流等罪外其各案內牽連待賢及笞杖內情有可原者一面量行減省一面具摺奏聞務使恤刑弭災之意不致羈遲也今據陳大受奏稱江南海州并所屬之贛榆沐陽二縣今夏被災已經咨部減刑但三州縣災青已成較他處為重減刑之事應請於九月初一日為始至明年麥熟後停止等語夫散非善政古人論之朕從前所降諭旨原為地方偶有水旱間修省刑之典亦感召天和之一端非謂災傷之地即應一例赦罪也今海州既已成災而始清刑獄是為時已遲且明示以麥熟為期則小民無知以為此半年之間可以觸法礙禁肆行無忌是誘民為非也陳大受所見甚為卑謬朕已於伊摺內批示訓飭恐各省督撫尚有似此錯會朕意者故特降諭旨該部即行文知之欽此

2373 乾隆八年九月二十一日內閣奉

上諭巡察山東漕運着御史張涓去不必赴行在請訓即往山東協同完顏俾辦理挑淺事務欽此

2374 乾隆八年九月二十四日內閣奉

上諭據河南巡撫碩色奏稱今歲河南被災通省共有二十七處查辦賑務需用多人著該部將候補州縣人員即送總理事務王大臣揀選十員令其速往豫省以資該撫差委欽此

2375 乾隆八年九月二十四日內閣奉

上諭河南今夏雨澤不齊其查勘成災者已據該撫題報照例賑恤聞開封府屬之陳留滎陽汜水彰德府屬之湯陰衛輝府屬之淇縣延津並陝州縣等七州縣雖不成災然高阜之虞收成究屬歉薄朕念此等鄉農薄有收穫僅足供三冬饗殮之計若將應徵錢糧一體催收未免拮据著將此七州縣勘不成災之地畝錢糧緩至明年麥熟後徵收以紓民力該部即遵諭行欽此

2376 乾隆八年九月二十四日內閣奉

上諭朝鮮列在外藩世篤忠貞謹守侯度今因朕親詣盛京恭謁

祖陵該國王遣陪臣齋奉朝貢具見悃忱宜格外加恩以嘉恭順

其應如何錫賚之處著內務府提管議奏所遣陪臣如何賞給亦著察例一併議奏欽此

2377 乾隆八年九月二十四日奉

上諭朝鮮使臣入貢係國王族人稱君者始召見其餘祇賜宴於禮部此定例也朕明日宴諸王大臣官員於崇政殿朝鮮使臣亦著與宴以外藩陪臣得廁朝臣之末係朕格外殊恩該部傳諭使臣知之欽此

2378 乾隆八年九月二十四日內閣奉

上諭盛京戶部莊頭每年交納糧石預備陵寢祭祀各項供應外其餘交收入倉以為撥給各處匠役口糧之用朕恭謁

祖陵親詣盛京軫念各莊頭終歲勤苦輸將無悞著將乾隆八年分應交倉糧一萬餘石加恩寬免其各處匠役口糧著

於舊存倉糧內撥給再各莊尚有乾隆七年分未完米豆  
草束俱著該部查明一併豁免以示朕優恤旗莊之至意  
欽此

2379 乾隆八年九月二十八日奉

上諭盛京為王化始基之地自昔人心淳厚風俗敦龐甲于  
天下但旗民雜處恐無知之輩尚存畛域之見殊非一道  
同風之盛惟在該管大臣董率有方則民力自知觀感府  
尹亦一官為各屬地方有司之統領其所職掌亦不甚繁  
凡有旗民交涉事件務須與將軍等和衷商確一秉虛公  
則諸務自能妥協倘先存一為旗為民之見則意見差參  
辦理錯悞既失寅恭之義何以端人心而厚風俗乎此於  
根本重地甚有關係故特降旨訓諭該府尹霍倫等知之  
欽此

2380 乾隆八年九月三十日內閣奉

上諭據碩色奏稱伊子光祿寺署正穆克德因民人爭灘地  
一事寄字與伊家奴妄真照應請革職發審等語朕思碩  
色因伊子干預外事據實奏甚屬可嘉此事尚在未行  
碩色既能奏自必嚴束其子不致滋事穆克德著革職

交與伊父收管其餘人等亦著碩色自行辦理就近外結  
碩色著交部議叙欽此

2381 乾隆八年九月三十日內閣奉

上諭常平等倉穀石民間於春月青黃不接之時借碩者例  
應秋後加息還倉朕曾降諭旨若值歉收之歲祇應完納  
正穀不應令其加息永著為例後經部議秋成八分以上  
者徵收息穀收成七分者秋後止徵本穀免其加息但專  
指本年春借秋還者而言其常徵舊欠穀石不在此例列  
今聞河南秋後多有歉薄之慮若本息兼徵民力未免難  
支著將豫省常徵乾隆七年以前民借未還穀四十六萬  
四千餘石止徵本穀概准免息俾輸將不致拮据據該部  
即遵諭行欽此

2382 乾隆八年十月初一日內閣奉

上諭朕恭謁

祖陵巡幸盛京所有奉天府屬錢糧及各庄頭粮石俱已豁免  
尚有盛京等處旗地未得沾恩著將盛京興京遼陽牛庄  
蓋州熊岳復州金州岫巖鳳凰城開原錦州寧遠廣寧義  
州等十五處旗地應納本年米豆草束徵一半其乾隆七

年以前積欠與七年分因灾緩徵之項俱著該部查明一併寬免再盛京高維邦取化祿名下壯丁應交本年丁米及上年緩徵米石亦着一例免其輸納俾旗民一體邀恩普沾惠澤該部即遵諭行欽此

2383 乾隆八年十月初五日內閣奉

上諭朕登極詔內四品以上官員例得恩廕刑部尚書張照因彼時緣事未與今特加恩著照伊品級補行給與恩廕欽此

2384 乾隆八年十月初六日內閣奉

上諭廣西太平府知府員缺著東路同知梁萬經補授欽此

2385 乾隆八年十月初六日內閣奉

上諭前據廣西巡撫楊錫綬奏稱拿獲在安南附近為匪之黃漢周道南亞項等犯奸狡兇悍反覆無常已飭府羈禁俟再有拿獲漢奸一併從重擬議等語朕硃批此等即應重處以是警何必令其展轉偷生耶今楊錫綬又奏稱已行令鎮安泗城二府將黃漢周道南亞項三犯即提出當眾杖斃朕覽之不勝駭異朕從前批示蓋因向來獲罪人

犯知罪無可逭往往扳引多人使案情不結以圖延緩偷

生楊錫綬前奏有再拿獲漢奸一併擬議之語似有任其展轉延緩之意是以批示即應重處所以令其速審具題明正典刑以彰國法也乃楊錫綬錯會朕旨竟將黃漢等三犯立斃杖下夫黃漢等三犯均屬應死之人楊錫綬尚未至於謀殺三命然亦應明正其罪設使不應死之人以如是誤會則死者不可復生矣楊錫綬此舉寔屬純繆之至著交部嚴察議奏欽此

2386 乾隆八年十月初八日內閣奉

上諭江西按察使員缺著直隸按察使翁藻調補直隸按察使員缺著清河道方觀承補授欽此

2387 乾隆八年十月初八日內閣奉

上諭貴州提督員缺著宣化提兵官丁士傑補授丁士傑尚未到宣化着即於廣西速赴貴州新任不必來京請訓其宣化提兵官員缺著署宣化提兵通州副將蕭良金補授欽此



2388 乾隆八年十月十三日內閣奉

上諭封疆大臣具摺奏事或現辦之件奏報情形或疑難之事奏請訓示奏有殊批理當鎮密方為慎重近聞廣西巡撫楊錫綬凡有密奏之事及所奉諭旨每多揚言於人且或抄發屬員移咨察案機事不密則害成於國家政體甚有關係昔年

皇考曾為此嚴行通飭莫不凜遵楊錫綬獨未之聞耶嗣後各省督撫除以奏代題事件奉旨之後始許通行其餘奏報大概情形并密請訓示以及覆嘉申飭之奏摺一概不許輕洩一字如有抄錄咨行仍然宣洩經朕訪聞必交部嚴加議處該部即行文各省督撫知之欽此

2389 乾隆八年十月十六日內閣奉

上諭據直隸總督高斌奏稱直隸天津河間等屬今年夏間被旱業已蒙恩賑恤第歉收之後米價尚屬昂貴聞奉天米穀豐收請弛海禁俾商民販運米穀流通接濟天津等處民食等語奉天一省今年朕親臨幸目親收成豐稔米價平賤以之接濟直隸洵屬良多益寡著照高斌所請准其前往販運自奉旨之日至次年秋收為止令該地方

官給與商人印票聽奉天將軍府尹查驗收買之後給以回照仍行文知會直隸總督并令沿海官弁時加稽查毋令私出外洋庶需穀者得以餬口而糶販者又藉以獲利於奉天直隸二省均有裨益該部即行文該總督將軍府尹等知之欽此

2390 乾隆八年十月十七日內閣奉

上諭奉天將軍額洛圖因朕恭謁祖陵經行口外恐危從人眾沿途米糧不敷供給奏請巡幸之先禁止米糧入關今已回鑾自應開禁通商第恐各處關口胥役人等仍或借端阻遏希冀勒索以致米糧一時不能流通著該將軍府尹等即速行文關口各員弁稽查毋後毋許借端阻遏并出示曉諭關外商民聽其運往關內各處販賣俾米糧流通民食充裕以副朕病瘼民瘼之至意欽此

2391 乾隆八年十月十七日內閣奉

上諭近聞京師黑豆價值昂貴今回鑾在即扈從官兵馬兵  
匹進京用豆益多戶部現存官豆應行平糶著在京戶部  
堂官即行查明定議速奏請旨欽此

2392 乾隆八年十月十九日內閣奉

上諭置署直隸正定府王師著該督送部引見欽此

2393 乾隆八年十月二十日內閣奉

上諭昔蕭何相漢終舉曹參羊祜佐晉亦進杜預薦賢自代  
青史稱焉是以宋有詔觀察薦忠勇自代之條全有勅宰  
臣奏賢良自代之諭今三載考績熟涉幽明邦之要典大  
臣徒遵例自陳乞賜罷斥而不舉賢自代使遂其高尚職  
將誰任乎宜服夢寐求賢寅亮天工之意也其以明歲為  
始凡大臣自陳乞罷者令各舉德行材能堪以自代之人  
隨疏奏聞若一人兼數職者材恐難全舉二三人或三四  
人聽食祿及章帶之士均許但不得舉同列及位在己上  
者著為令欽此

2394 乾隆八年十月二十日內閣奉

上諭山西巡撫劉於義著補授戶部尚書大學士徐本仍著  
兼管山西巡撫員缺著戶部侍郎阿里衮補授兼管提督  
印務戶部侍郎員缺著內務府提督傅恒補授蔣溥著實  
授湖南巡撫吏部侍郎員缺著歸宣元補授周學健著實  
授福建巡撫刑部侍郎員缺著內閣學士彭啟豐補授欽  
此

2395 乾隆八年十月二十日內閣奉

上諭江西巡撫陳弘謀著調補陝西巡撫陝西巡撫塞楞額  
著調補江西巡撫欽此

2396 乾隆八年十月二十日內閣奉

上諭兵部右侍郎開泰尚未滿學政之任著雅爾圖暫行署  
理欽此

2397 乾隆八年十月二十一日內閣奉

上諭河南撫標中軍參將蕭奏認著調補山西撫標中軍參  
將山西撫標中軍參將林從春著調補河南撫標中軍參  
將欽此

2398 乾隆八年十月二十三日內閣奉

上諭車駕東行數月在京揔理事務王大臣稽查妥協安靜無事著熙恩詔內尾從王大臣例履親王平郡王紀錄一次大學士鄂爾泰張廷玉加一級欽此

2399 乾隆八年十月二十四日內閣奉

上諭山東巡撫著照山西河南之例兼提督銜給與印信欽此

2400 乾隆八年十月二十六日內閣奉

上諭上年將山東截漕貯穀撥濟江南原屬移緩就急之計今歲夏秋之間山東濟南武定東昌三府屬偶被偏災曾撥運登萊穀八萬石以資賑濟嗣據各灾屬補種之慮及續報之臨邑縣復被霜侵收成歉薄又增賑糧目下賑給尚可敷用而來春借糶不可不預為之計著將山東本年漕糧截留八萬石以預備倉儲為灾屬來春借糶之需該部即遵諭行欽此

2401 乾隆八年十月二十六日內閣奉

上諭前降旨將塞楞額調補江西巡撫陳弘謀調補陝西巡撫塞楞額接到諭旨著即赴新任其巡撫印務交布政使帥念祖暫行護理陳弘謀俟塞楞額到後再赴陝西之任欽此

2402 乾隆八年十月二十六日內閣奉

上諭聞人驚悍成習而漳泉為尤甚我皇考暨朕亦既屢頒訓諭令地方有司誠心化導朝夕提撕務感發其天良痛改其夙慝無如怙過不悛藐視法紀邇來辱官毆差之事源源有之朕細察其故大抵因州縣官姑息養奸每遇惡棍不法等事輒私自寢息以圖省事並不申報上官而上官又復苟且消弭不行究詰以致兇頑之徒習為固然無所忌憚養雖貽患非一朝一夕之故也夫地方有司原有父母斯民之責必平日有休戚相關之誼視民如子至誠感孚則民亦莫不視之如父母其尚有桀驁難馴甘蹈法網者無此情理也蓋恤民之與懲奸二者原相濟為用欲恤民斷不可不懲奸而非懲奸又斷不能恤民今閩省司牧之道兩者俱失何以厚民生肅吏治挽

薄俗救頹風用是特頒此旨該督撫等當時體朕心時時訓飭有司務期寬嚴並濟懲勸兼施洗因循之積習弊歸平康之淳風朕於督撫有厚望焉欽此

2403 乾隆八年十月二十七日內閣奉

上諭據湖南巡撫蔣溥奏稱湖南離京路遠部選之員一時不能到任委署現在需人請揀發候補候選州縣十員以備差委等語著照所請交吏部於候補候選州縣人員內揀選帶領引見候朕降旨發往欽此

2404 乾隆八年十月二十七日奉

旨准閱監督倭赫奏請內務府營造司筆帖式薩哈亮暢春苑筆帖式蘇保住幫辦閩務著交內務府總管令其前往欽此

2405 乾隆八年十一月初一日內閣奉

上諭朕君臨天下勤求治理小民生養之源無日不為深計而勸諭之術尤在久道化成是在督撫諸臣董率羣吏日就月將實用其心於興化致治之要以駸駸於上理非徒奉文守法循分苟安遂謂無忝厥職也朕聞雅爾圖之在

河南官署鞠為茂草許容之居湖南至以文書廢紙糊窗此即孫樵所謂以官為傳舍醉醲飽鮮笑與秩終而已雅爾圖許容尚稱勤於職事者而猶有此則推而至於他省等而至於州縣其在官無異一驛耳古之人臣履官事於如家事試問今之為官者其料理家務果肯若此之草率簡陋沒不經心乎此雖細務可見其心不在官欲望其曲體民情而代謀家室此必不可得之數也張九齡云縣得良宰萬戶息肩州有賢牧千里解帶蓋吏數變易則下不安業久於其任則民服教化若當官而存苟且之心將百事皆從廢弛矣漢時治尚循良璽書勉勵增秩賜金以儲以公輔之用意在久任以安民也雖朝廷用人量才審器必酌人地之宜自不能一無更調而欲吏於民相接俾氣協而情通究以久任為常法居是職者暫不忘久即一日而為數十年之計久不生倦數十年仍當如一日之心則訓俗型方自必視為切已事也今親民之官不至苞苴肆行而多兢兢職守然僅惕於功令以遏其貪饕迫於考成以策其勤敏簿書期會之外豈真有以民心之淳薄為念者歟此閩閩之所以不盡馴良而化導之未洽也夫身膺民社即為其父母師保官之視民如子弟則民之視官若父兄官民同其休戚而情意相決斯叩之而即應感之而

易從今之州縣於黎元之身家性習視同膜外平時不相  
聯屬而誠諭俱屬具文流瀟溺於其心凌競扭於所習此  
則所謂痼疾外視若無所苦而病隱中於本根愈久愈大  
治之甚難誠不可不亟為究心者試思身為牧令若但司  
簿領事承接則一書吏之能事何以官為昔韓延壽聞閭  
思過而民自悔吳佑以身率下而民不忍欺是民非無  
良而權操之在上惟教深於隱微故其樹績益顯為督撫  
者果以此為課最使有司提撕微覺百姓觀摩漸漬日計  
不足月計有餘將見官與民相習情與事相通一氣感孚  
不致扞格於以興教化而移風俗無難也倘任其波流無  
以發其孝弟廉讓之至性豈能使之奉長吏之命而孱然  
率從乎朕聞駟馬不馴御者之過也百姓不治有司之過  
有司與民漠不相關咎在督撫督撫不能使有司化誨其  
民咎即在朕今吏多玩愒而風不古若朕實愧之國家承  
平日久治具畢張雖久道化成未易驟至而整吏治以戒  
因循正人心以除積習凡有蒞民之責者皆當審時務之  
急先愚致治之根本而加之意焉其各遵奉毋忽特諭欽  
此

2406 乾隆八年十一月初一日內閣奉

上諭安徽省鳳潁泗三府州屬壽宿等二十四州縣衛連年  
被災歉收民生艱苦朕加恩撫恤蠲賑兼施務期登之祚  
席所有未完帶徵之舊欠原降諭旨令俟民間元氣漸復  
之後另行定限帶徵今思此等地方當積困之餘既有本  
年應納之錢糧又有昔年帶徵之舊項勢難竭度輸將深  
可軫念著將鳳潁泗三府州屬壽宿等二十四州縣衛乾  
隆七年舊欠地漕銀兩隨同新報於本年十月徵收其六  
年以前現應帶徵地丁及折漕銀兩緩俟甲子年麥熟後  
起限徵收應改徵穀石之舊欠漕米於秋收起限徵收仍  
照定例分年帶納所有宿州靈璧虹縣臨淮懷遠泗州五  
河等七州縣五年以前未完帶徵銀兩及漕項銀米仍俟  
年歲屢豐後定限帶徵其本年水旱地方照例另請停緩  
如此則民力得以稍紓庶副朕撫綏惠養之意該部即遵  
諭行欽此

2407 乾隆八年十一月初三日內閣奉

上諭山東布政使包括著來京候旨其原缺著原任湖北布  
政使喬學尹補授欽此

2408 乾隆八年十一月初四日內閣奉

上諭巡察山東漕運御史張涓丁憂此差著李敏第去欽此

2409 乾隆八年十一月初六日內閣奉

上諭兵餉有搭放錢文之例江南省於乾隆六年於設局鼓鑄僅設爐十二座鑄出之錢不敷搭放兵餉又核計成本每銀一兩鑄出錢八百九十六文是以題明每銀一兩止折給餉錢八百八十八文餘錢一十六文充作錢局公費及運送餉錢之水脚等項經部議覆搭放兵餉暫照八八折發俟將來銅鉛減價錢價漸平再行酌增錢數或照舊制每錢一千文作銀一兩搭放等語朕思兵丁所得月餉僅足以敷食用若搭放錢文又行除扣則所得減少朕心軫念特頒諭旨將江南省搭放餉銀自乾隆甲子年為始仍照定例每銀一兩給錢一千文其錢局公費運錢水脚准動公項報銷不敷成本照例准其銷算至現在鼓鑄各省如有折扣搭給者亦一體加恩照江南之例給發該部即遵諭行欽此

2410 乾隆八年十一月初七日內閣奉

上諭前經降旨令江蘇安徽浙江江西湖北湖南等省各截漕糧十萬石存貯本省以備一時缺乏之用今聞湖南地方本年雨水調勻中晚二稻收成豐稔民食有賴廣西今秋收成稍薄恐將來不無需米之虞湖南與廣西接壤一水可通若將截留之漕米酌撥四萬石運往廣西以備明春糴濟似為有益著該部即行文湖南廣西巡撫遵旨會商速辦欽此

2411 乾隆八年十一月初八日內閣奉

上諭四川松茂為川西邊要之地設立道員原以控制彈壓使內外大小土司部落皆奉令守法無敢滋事方為稱職朕聞前後各任道員往往僑寓省會希圖與上司相近並不親至其地以致官吏兵民相隔疎遠邊番情事不能周知重負國家設立方面大員之意著該督撫嚴行申飭務改前轍不得借口公事久居省會以曠職守倘有無故逗遛者督撫即行題參欽此

2412 乾隆八年十一月初八日內閣奉

上諭今年上江所屬地方有早潦偏災之處如桐城宣城南陵桐陵繁昌無為廬江建平等八州縣所有勘實成災之地朕心軫念其應完漕糧項著緩至來歲徵收以免歲內催科至壽州鳳臺鳳懷遠臨淮泗州盱眙等七州縣雖成災止有五分而地土瘠薄連年荒歉之後民力均覺艱難著將此七州縣及生落七州縣之衛田應完漕糧漕項概行緩至來歲徵收以紓民朕原降旨截留江南漕糧十萬石於本省以補倉儲今將所緩即算在截留之內不過補倉畧遲而閩閩得以從容輸納自可免於竭蹶該部可速傳諭該督撫知之欽此

2413 乾隆八年十一月初九日內閣奉

上諭張廷璐自隨駕回京以來并未到衙門辦事著交部察議具奏欽此

2414 乾隆八年十一月初十日內閣奉

上諭向來在京八旗武職及外省駐防官員并在京文武官員遇有罰俸案件准其將議叙加級改為紀錄抵銷惟在外文武各官不在此例朕思大小臣工雖分職有內外之殊而以功抵過俱屬一體嗣後外省地方文武各員有情願將議叙加級改作紀錄抵銷罰俸者著照在京文武官員之例准其抵銷欽此

2415 乾隆八年十一月十一日內閣奉

上諭各省兵丁全以冊籍為憑必姓名年貌人冊相符始足杜贗營侵冒之弊從前項名食糧之人屢經飭令首報更正定有處分不許復行徇隱近聞各營尚有頂冒之習皆緣舊冊相沿稽查不力以致弊實漸開於營制甚有關係今特再降諭旨此次仍許其據實首報更正造冊報部以嚴考核并令各將軍督撫提鎮出結報部嗣後仍留心稽查倘再有頂名冒功等弊或經奏奉或經訪聞定將各官并照例嚴加議處該將軍督撫提鎮等亦各有攸歸該部即遵諭行欽此

2416 乾隆八年十一月十五日內閣奉

上諭甘肅提督李繩武著來京陛見欽此

2417 乾隆八年十一月二十一日內閣奉

上諭林祖成著以原品休致該部知道欽此

2418 乾隆八年十一月二十一日內閣奉

上諭近來京師黑豆價昂朕已諭令將倉貯豆石分發各米局減價平糶將來價值自可漸次平減但思黑豆為喂養馬匹之所必需務令充裕然後喂養有資今年奉天地方收成豐稔豆價平減著戶部簡派賢能司官一員前往奉天會同該將軍府尹等採買數萬石接濟京師其如何運送之處著該將軍府尹等速議奏聞欽此

2419 乾隆八年十一月二十九日內閣奉

上諭湖南設新長安營乃楚南極邊苗疆要地山多田少又無商販可通兵丁所領月糧止敷本身糊口其餘眷屬雖有官貯米石聽其支領扣餉銷筭而兵丁又因價值脚費繁多難以支領是以設營以來業經三載而營丁中接到

眷口者甚屬寥寥深可軫念查該營實兵九百二名著加

恩每兵每月增費眷米一斗每年共米一千八十二石四斗俟數年之後兵丁家室團聚開墾荒地日食有資該督提再行奏聞酌減此係軫念苗疆新營兵丁難苦他處不得援以為例欽此

2420 乾隆八年十一月三十日奉

旨大學士陳世倌准其給假不必開缺其教習庶吉士著尚書史貽直管理欽此

2421 乾隆八年十二月初一日內閣奉

上諭陳邦彥原係舊日翰林著由京俟有講讀學士缺出補授欽此

2422 乾隆八年十二月初一日內閣奉

上諭陝西按察使陳惠正已交部嚴察議奏其員缺著山西河東道赫慶補授欽此



2423 乾隆八年十二月初三日內閣奉

上諭今年直隸所屬河間等處偶被偏災彼地貧民赴京覓食者俱已加恩賑濟不令失所但其間尚有不在賑濟之數者或手藝營生或傭工度日適值米價漸昂當此歲暮天寒情殊可憫著戶部將京倉米石酌量給發各旗局及五城米廠照依時價核減平糶青與零星肩販之人俾得沿途糶買使僻巷窮簷皆沾實惠再京城近日錢價尚未平減著仍照夏間平糶之例將賣米錢文赴市易銀解部以平錢價該部即速妥議辦理欽此

2424 乾隆八年十二月初三日內閣奉

上諭朕聞浙省溫台二洋為魚船採捕之所從前玉環未經展復以前凡漁船在洋採捕者汛兵需索陋規無異私稅後因展復玉環該地方官惟恐經費無出遂將陋規改收塗稅以資經費之不足此一時權宜之計也而每年所委徵未負弁及丁役人等往往借端苛索上司查察難周不無苦累朕思濱海編氓以海為田每歲出沒於風濤之中捕魚以糊其口生計淡薄應加軫恤况自玉環展復以來地方所有錢糧已敷公事之用無庸收塗稅著將此項承

遠革除免致不肖官弁丁役苛刻需索擾累貧民該部即行文該督撫知之欽此

2425 乾隆八年十二月初三日內閣奉

上諭大學士陳世倌告假回籍吏部尚書史貽直著協辦大學士事務欽此

2426 乾隆八年十二月初三日內閣奉

上諭福建布政使張嗣昌已起身來京引見候到時朕另降諭旨福建布政使負缺著高山補授欽此

2427 乾隆八年十二月初五日奉

旨陳邦彥著在武英殿行走欽此

2428 乾隆八年十二月初六日內閣奉

上諭山東今歲濟東武三府偏被旱災雖現在加恩蠲賑但念來歲麥秋未接之候被災獨重之區遽行停賑小民艱以謀生著於今冬例賑之外將陵縣德平平原德州德州衛志民樂陵海豐濱州商河霑化武城等十二州縣衛成災六七八九分之極貧者加賑兩個月七八九分之次貧

者加賑一個月其糧即於撥穀漕清內通融散給其或本色借糶需用即照恩加一錢之例均勻折給此十二州縣衛成災五分之戶不得與賑者仍照例酌借口糧該部即遵諭速行欽此

2429 乾隆八年十二月初九日內閣奉

上諭昨歲江蘇安徽兩省被災獨重是以竭力賑恤復恐民隱未能上達民俗或未休溥宵衣軫念用是差負前往巡視宣化真今年仰蒙

天恩兩江薄有收獲民情業已相安朕思移風易俗非可期以歲月之事而三四人亦豈能遍及閭閻若徒視為虛文毋寧省其繁令惟在地方有司實心體朕愛養百姓之念與民休息彰善瘴惡則風穀樹而日計不足月計有餘矣所有命往宣諭化真使著於明春迴京欽此

2430 乾隆八年十二月初九日內閣奉

上諭前因川省松潘引多茶壅故將天全州之積引改撥成都灌等縣行銷每年空繳引張貽納稅課官商交累乾隆六年朕降旨開除成都彭灌三縣積引四千四十九張併課稅銀二千四百一十七兩二錢從乾隆七年為始官商

均受其益惟是乾隆七年以前之美餘截角尚屬拖欠成都有未完銀五百六十五兩二錢彭縣有未完銀四百三十九兩九錢六分零灌縣有未完銀一千二百九十七兩九錢二分零川省茶商資本微薄無力復完舊項朕心軫念著將所有三縣舊欠悉行豁免以示朕優恤商民之意該部即遵諭行欽此

2431 乾隆八年十二月初十日內閣奉

上諭京師米價昂貴現在平糶尚恐未能驟減明年八旗春季甲米向於二月給放者著改於正月初十日放起欽此

2432 乾隆八年十二月十一日內閣奉

上諭本日刑部覆奏福建二案因此事係該督摺奏刑部亦即用摺朕思此二案該督以事應密奏故無揭帖但俱閱人命該部仍具本題覆為是可将原摺發交該部換本具題奉旨之後六科接旨亦不必發抄即令該部密行文該省遵旨完結嗣後各省督撫摺奏事件有關係人命發交部議者俱著照此辦理欽此

2433 乾隆八年十二月十一日內閣奉

上諭山東登州提兵官員缺著諱行義補授欽此

2434 乾隆八年十二月十二日內閣奉

上諭廣東按察使陳高翔年老不勝繁劇之任著來京候旨  
其員缺著張嗣昌補授欽此

2435 乾隆八年十二月十三日內閣奉

上諭哈密向派章京二員筆帖式一員前往駐劄辦理回民  
事務新舊交錯二年一換瓜州亦派章京筆帖式各一員  
前往辦事照哈密之例二年交錯更換朕思二年一換為  
期太速未能熟悉邊情嗣後著定期三年仍照例新舊交  
錯更換庶于邊方有益欽此

2436 乾隆八年十二月十四日內閣奉

上諭四川按察使姜順龍著來京候旨其員缺著岳常道倉  
德補授欽此

2437 乾隆八年十二月十四日內閣奉

上諭大學士福敏以年老求退朕已降旨慰留但掌院學士  
事務恐不能兼顧著大學士鄂爾泰兼管欽此

2438 乾隆八年十二月十五日內閣奉

上諭陝西延綏道周廷燮不勝道員之任著來京照例以部  
員補用延綏道員缺著總督慶復于所屬道員內揀選調  
補其所遺之缺亦著慶復揀選題補欽此

2439 乾隆八年十二月十五日內閣奉

上諭陝西蒲城縣王幼女被殺一案陳惠正用刑誣服牽連  
無辜經塞楞額題奏已降旨將陳惠正交部察議今據慶  
復奏稱陳惠正西稟此案巡撫將本司附忝心有不甘已  
具密摺辨明並將揭部科印文交家人帶往京中若摺子  
已蒙恩准即將原文帶回不必再揭若摺子不准即令投  
揭部科於回陝日再向提督衙門補揭等語陳惠正前有  
奏摺乃請嚴抑勒換招改詳之例並未申辨王幼女被殺  
一案乃於督臣前捏稱密奏並稱若蒙恩准即將通揭部  
科印文帶回若摺子不准即令投揭夫朕之批示奏摺伊

家人何由得知即使將摺發出而不准則投揭准則中止又豈家人所能主持其中顯有探聽商謀情弊似此居心行事甚屬狡詐欺罔陳惠正著革職交與該督嚴審定擬具奏欽此

2440 乾隆八年十二月十六日內閣奉

上諭昨據慶復奏稱陳惠正曰王幼女一案被巡撫塞楞額題參陳惠正具密摺申辯並帶有揭部科之文若奏而不准則將揭帖投遞部科准即中止朕覽奏即知其必與伊允陳惠華商量特命大學士等詢問據陳惠華奏稱惠正原有辨摺及部科揭帖遣家人膏送來京寄信與臣以惠正係被參現交部議理宜靜候何得瀆辯立將奏摺並揭帖令家人帶回等語陳惠正以密奏之摺及用印之文膏送來京與伊允陳惠華相商投遞與否伊既欲駁回豈有不奏知於朕之理况伊身為大臣既深知其非即當據實奏奉乃隱匿不發及朕詢問始行奏出大臣事君豈容如此詐偽夫父為子隱子為父隱直在其中朕非不知以此風示天下朕君臣之倫實在第凡之上陳惠華著交部嚴察議奏欽此

2441 乾隆八年十二月十六日內閣奉

上諭三年京察之期朕命自陳之大臣舉賢自代者原係朕寤寐求賢欲多得人才之意且視其所舉亦可覘其人之識見心術也乃臣工守不能深喻朕旨陳奏紛：如御史陳其凝奏稱自陳之人若人：可信其言則不宜聽其言罷遂其高尚而無庸舉賢以自代等語夫舉賢自代在大臣為推賢讓能朕為備才備用豈有大臣中舉一人即將舉人者更換之理乎又云自陳之大臣有意避嫌勢必博採名望而處士虛教終南捷徑所謂賢者不賢矣如必親知而後舉則呈身識面自昔所誤又能保其無攀援黨附之私等語夫大臣薦賢必當孚公論而協眾望若親知者既疑其黨援而採望者又謂為捷徑是薦賢竟屬必不可行之事古云進賢受上賞蔽賢蒙顯戮又何以稱為又云為大臣者如無可信之人即照例具本自陳不必拘於定例勉強塞責等語如此勢必至於人：緘默不舉一人豈闡門籟後之典獨不可行於今日乎禮云爵人於朝與眾共之昨李清植奏請明舉尚屬可行朕已勅九卿科道集議矣夫朝廷綸綍下頒如果事有未當雖面折廷諍亦為朕所取若徒於語言文字之間深文辯駁既大昧事君之體而適見其識見之卑矣此風斷不可長陳其凝著嚴

飭行欽此

2442 乾隆八年十二月十七日內閣奉

上諭廣西李梅案內李捷三賸士美等乃緊要重犯緝拿已經二年而兇徒尚無一獲則地方文武官弁疎忽怠玩可知其潛匿經過之地此時固無從指叅朕將東拿獲之後必一一究出將該管員弁加以嚴處不稍寬貸著該督撫提鎮等出示通行曉諭俾知儆惕無遺後悔欽此

2443 乾隆八年十二月十八日內閣奉

上諭涼州將軍烏合圖著調補西安將軍西安將軍綽爾多著調補涼州將軍欽此

2444 乾隆八年十二月十八日

奏奉

旨滿洲蒙古字交內閣繕寫漢字交張照寫出格式預備明年朕書所需匠人等不必盡行遣往守候著先遣石匠平石俟刻字之時再遣刻字匠人餘依議欽此

2445 乾隆八年十二月十八日

上御門聽政畢諭大學士鄂爾泰張廷玉徐本查郎阿協辦大學士事務史貽直等曰今年冬至以後天氣過暖京師得雪甚微且星象見異至今未退數日之前其芒為月所掩故不甚顯昨月出稍遲則不減於前矣朕思

天心仁愛垂象示儆必政事之間有所缺失我君臣當夙興夜寐勤加修省以回

天意惟是應天以寔不以文修省之說非徒托之空言也且書不云乎王省惟歲今歲序將周正其時矣我君臣必深思所以致此之由缺失何在亟圖速改庶幾盡事天之道有以感召和氣而消未萌之眚也欽此

2446 乾隆八年十二月十九日內閣奉

上諭據湖廣總督阿爾賽奏稱湖北湖南二省塘汛營房墩臺廢壞不整相沿已久寔須急為興修以固邊防除向來已交代者仍著落各州縣修整外其應行設立而廢置未舉者自當照本地成式辦理今約畧估計南北每省各需銀一萬兩上下為費既多非地方官所能措辦仰懇天恩准於司庫公項內動支銀一萬兩應用至湖南公項現在不敷難以支撥臣與撫臣蔣溥查勘洞庭湖舵桿洲石

臺情形另摺奏請無庸歲修所有原存歲修石臺本息銀兩既可不用請即於此內動支一萬兩以為修理塘汛之費修理之後兵丁住房應令自行隨時修整毋許推諉其官廳墩臺望樓等項照依定例文身修整移交營員收管每年冬月道員出巡時由心查看如有傾圮頽敗等弊即行揭奏等語楚省武備廢弛已極不獨塘汛墩臺一項也今欲修建完整費用浩繁詎非地方官所能措辦著照阿爾賽等所請動用公項銀兩興修但此後保固修整之處該督撫提鎮應不時查察若稍有疎忽仍蹈前轍明責有攸歸矣欽此

2447 乾隆八年十二月二十日內閣奉

上諭據盛京兵部侍郎春山奏稱盛京等處驛站每年大驛各出銀十六兩小驛各出銀八兩餽送侍郎盤費又出銀四百兩餽送正副監督此外逢節又有規禮其二十九驛丞一年所得俸銀三十餘兩又皆賂遺侍郎合計有一千餘兩凡此皆係驛丞自送因而驛丞有所恃以無恐將錢糧任意花費雖馬匹疲瘦短少侍郎與監督俱置不問等語餽送陋規原干例禁盛京陋習相沿料非一任若事窮究未免拖累多人今姑寬其已往嗣後著永行革除如

有再蹈前轍者必從重治罪至於各省驛站或有此等情弊亦未可定向來設有巡察御史稽查今巡察既裁督撫更當由心查察使積習漸除驛務不致廢弛若日久弊生或經科道糾奏或欽差大臣經過查出朕惟爾督撫是問該部即遵諭行欽此

2448 乾隆八年十二月二十一日內閣奉

上諭直隸天津河間等處今年被災業已加恩賑恤第歉收之後米價頗昂未歲青黃不接之時民食未免艱難所當預為籌畫者除督臣高斌已遵旨遣官在奉天買米八萬石外朕思明春山東河南漕船經由直隸地方若截留漕米十萬石令高斌視州縣大小酌量分派存貯以數糶借之用於民食自有裨益其如何截留東豫各船及分貯沿河州縣之處該督即會同倉場侍郎逐一詳志妥議辦理欽此

2449 乾隆八年十二月二十四日內閣奉

上諭昨召見大學士陳世倌據奏近日彗星見宜下修省之詔以宣示百官使天下共知之將來並可垂之史冊等語朕思人主君臨天下敬天勤民之心必嚴恭寅畏無時不

凜

上帝之鑒觀念兆人之休戚以期弭咎於未庶誠以修省全在乎平日此朕之所以夙夜兢：者事

天以寔不以文以誠不以偽也若平日不能時幾交初及至

上天垂象方事修省已屬臨事做惕所為緩不濟急若災異既

徵又不竭力補救但托於文告飾為敬慎警懼之辭而無

引咎責躬之寔徒務臣民之觀聽以塞責是明以示戒而

更加粉飾則慢天斯世其過愈大豈能感台天和潛消滲

戾乎前日御門時朕以京師得雪甚微且星象見異而降

諭旨原欲與大臣等交相儆省深恐所以致此之由缺失

何在亟圖悔改並非欲眾人聞知冀垂史冊掩一特之耳

目示後世以虛文乃陳世倌身為大學士見不及此而勸

朕為文飾之事是朕心不能見白於大臣朕深以為愧此

正朕之所當修者朕雖不及古之帝王而誠敬事天之心

無一刺之敢懈可以自信可以質諸神明今星象示儆乃

僅欲以修省一詔謂可了事即此一念誠乎偽乎此朕夢

寐中所不敢萌者是用特降此旨俾知格天之道惟在乎

修省之寔而不在修省之文我君臣其共勉之欽此

2450 乾隆八年十二月二十七日內閣奉

上諭翰林院衙門年久未經修葺傾圮之處甚多著哈達哈

海望三和料估修理欽此

2451 乾隆八年十二月二十七日內閣奉

上諭色括著由京以京堂照例補用欽此

2452 乾隆八年十二月二十八日內閣奉

上諭硝磺為邊關嚴禁之物久有定例聞各省沿邊口隘奸

民嗜利往：勾通守口兵役夾帶出口以圖重利又聞準

噶爾境內不產硝磺每令內地往來之番夷喇嘛私偷夾

帶出重價購買各督撫提鎮當時刻留心嚴飭文武員弁

一體實力搜查以防偷漏再遣委員於各口隘之外細行

訪察如有出產硝磺之處作何設法防範毋得稍有疎忽

該部即行文各省督撫提鎮等知之欽此

2453 乾隆九年正月初二日內閣奉

上諭上年直隸天津河間等處收成歉薄貧民乏食  
朕宵旰焦勞多方區畫惟恐一夫失所提督高斌  
又遵旨酌議明歲加賑並奏請動支司庫閒款銀  
兩於停賑後為接濟民食之用朕俱已允惟是  
上秋被旱之後冬月雨雪又少麥苗待澤甚殷東  
作方興之時麥秋收成未卜窮民尤堪軫念著高  
斌詳察本地情形若於從前定議之外有應加賑  
月分者據實陳奏朕當格外加恩欽此

2454 乾隆九年正月初三日內閣奉

上諭前因大學士陳世倌告假回籍懇求開缺朕曾  
降旨不必開缺令尚書史貽直協辦閣務今大學  
士徐本又復患病調理尚須時日况陳世倌亦稱  
在家頗需擔閣不能即回供職現今內閣辦事人  
少著史貽直實授大學士吏部尚書員缺著戶部  
尚書劉於義補授協辦大學士事務其戶部尚書  
員缺著張楷補授欽此

2455 乾隆九年正月初三日內閣奉

上諭兵部尚書陳惠華現有處分著解任候旨兵部  
尚書員缺著廣東巡撫王安國補授廣東巡撫事  
務著將軍策楞署理欽此

2456 乾隆九年正月初四日內閣奉

上諭朕君臨天下愛育黎元厚生正德時切於寤寐  
蓋教養雖為二端而實則相為表裏衣食足乃可  
興禮義飢寒迫則罔顧廉恥是不能養民不可以  
言教不能教民仍不得謂之能養故教即在養之  
中養即可收教之効其理其勢固如此也乃今之  
司牧者但知用心於刑名錢穀自顧其考成苟免  
無過便為得計上官亦即以為稱職求有視百姓  
為一體視民事如家事以實心行實政經畫有方  
勸課有法使地無遺利家有蓋藏者百不得一雖  
遇有收之年而小民之生計亦窘及荒歉偶形議  
蠲議賑已非上策而胥吏作奸豪強侵蝕種種弊  
端不可枚舉其百姓之狡猾者又復捏虛領賑欲  
無饜足以致效尤囂凌刀風日熾此雖百姓之無



良亦由有司之不能教養于平日賈誼所謂移風易俗使天下回心而鄉道類非俗吏之所能為也朕以教養之責付之天下督撫督撫分任之州縣此古所稱親民之官與百姓最為近切其所轄之地不過數十里或一二百里形跡不甚隔絕情意易于流通果能視百姓如赤子察其飢寒恤其困苦治其田里安其室家以父母斯民之誠心行父母斯民之實政凡茲小民具有秉彝斷無有不中心感激服教從風者外省向設宣諭化導使究之一二人之身難以家喻而戶曉且經年累月一至其地未免一暴十寒終不若州縣官各于其民勤勤懇懇惟教養是務以養為教之本以教成養之功不事具文不沽虛譽但期寔有裨于民生初不責劾于旦夕為督撫者又當開誠布公諄切訓誨遇良吏則嘉獎成全之其不及者則督率勸戒之聖人曰至誠而不動者未之有也如督撫果以誠心課吏有司果以誠心治民歲月既久漸摩淪洽庶幾教養有成可副朕之厚望焉欽此

2457 乾隆九年正月初六日內閣奉

上諭廣東潮州鎮總兵官武經謀之子武舉武肇域著兵部隨便帶領引見欽此

2458 乾隆九年正月初六日內閣奉

上諭博士黃施鏗著國子監隨便帶領引見欽此

2459 乾隆九年正月初九日內閣奉

上諭上年直隸天津河間等處收成歉薄冬月雨雪又少今當東作方興之時表秋未卜深廑朕懷是以前經降旨令高斌詳察本地情形若於從前定議賑恤之外有應加賑月分者據實陳奏朕當格外加恩今據高斌覆奏天津府屬之天津縣河間府屬之肅寧故城寧津順天府屬之大城保定府屬之東鹿深州本州並所屬之饒陽安平冀州屬之衡水又續報保定府屬之新城共十一州縣原屬偏災業按分數給賑民情大勢寧謐但與災重之十六州縣地畧毗連青黃不接之際生計仍屬

艱難應請遵照恩旨按前賬戶口再加賑一月以資接濟於地方實大有裨益等語著即照高斌所奏將此十一州縣按冊再加賑一月該部即遵諭速行欽此

2460 乾隆九年正月初十日內閣奉

上諭直省州縣地方繁簡不同屬員中才具短長亦不一是以准各省督撫酌量人地相宜題請調繁調簡以收器使之益惟是調繁之員該督撫既已特疏保舉向後非踰閑蕩檢未必不格外優容調簡之員該督撫既已置之下考向後縱奮勉向上未必肯即登薦章朕看各督撫於屬員調繁之後因其貪劣改操而檢舉糾叅者尚偶有之至於調簡之後因其政績可觀復行薦拔者十不獲一此則成見私意之未化非虛公察吏成就人材之道也嗣後督撫等於調繁調簡之員均當秉公體察屏去成心覘其後效凡先舉而後叅者國家原有檢舉之條若先調簡而後保薦亦著於疏內摺內聲明具奏如此則被薦者必倍加敬惕之心即更

調者亦獲免勉自新之路庶整飭吏治之一策歟  
欽此

2461 乾隆九年正月初十日內閣奉

上諭山東巡撫喀爾吉善前經奏請陞見著即起身於正月內到京欽此

2462 乾隆九年正月十一日內閣奉

上諭安西道屬沙州衛有原招戶民六百五十九戶因所置牛隻節年倒斃不能買補恐誤耕作雍正十三年經撫臣奏明每戶借給銀十五兩購買牛騾以資力田之用共借給銀九千八百八十餘兩分作五年帶徵還項自乾隆元年起至今止徵完銀七千二百九十餘兩尚有未完銀二千五百九十兩零朕念沙州地處邊外天寒土瘠招徠之民力量單薄既有本年應完之正賦若兼顧舊欠未免拮据可憫著將此未完牛騾價銀從乾隆九年起分作三年帶徵俾邊民從容完納該部即遵諭行欽此

2463 乾隆九年正月十三日內閣奉

上諭新歲朕奉

皇太后駐蹕圓明園所有燈節恭進

皇太后筵宴及賜蒙古王等筵宴關係國家典禮不可

廢缺應照舊舉行至於王大臣本應同沾湛露酌

茲春酒但三冬雪澤稀少近日呈示災異朕心儻

惕無時暫釋於懷知王大臣等之心與朕相同不

待朕之宣諭也其王大臣等賜宴之處著停止欽

此

2464 乾隆九年正月十六日內閣奉

上諭朕此次恭謁

泰陵著莊親王和親王大學士鄂張 在京總理事

務欽此

2465 乾隆九年正月十六日內閣奉

上諭朕於正月二十五日恭謁

泰陵所有應行事宜著各該衙門先期備辦欽此

2466 乾隆九年正月二十日內閣奉

上諭查閱外省營伍著尚書公訥親去從河南至上

下江一帶及淮徐山東一路查閱營伍并看驗河

工俟事竣回京此次朕恭謁

泰陵訥親不必隨往可令其束裝於二月初間乘驛起

程欽此

2467 乾隆九年正月二十一日內閣奉

上諭直隸天津河間等處去年歉收入冬又復少雪

現在加恩賑濟一切地方民隱時屢朕懷訥親現

奉差前往河南一路查閱營伍著便道從天津河

間二府查看奏聞再海塘情形亦著訥親就近由

江南前往勘視欽此

2468 乾隆九年正月二十二日內閣奉

上諭雲南昭通鎮總兵官張士俊現患耳疾重聽請解任調攝著伊解任來京陛見再降諭旨昭通鎮總兵官員缺著雲南永順鎮總兵官陳綸調補永順鎮總兵官員缺著陝西金塔寺副將張聖學補授欽此

2469 乾隆九年正月二十二日內閣奉

上諭王安國報丁父憂兵部尚書員缺著彭維新補授其戶部侍郎員缺著湖北巡撫晏斯盛補授湖北巡撫印務著許容前往署理以觀後效欽此

2470 乾隆九年正月二十三日內閣奉

上諭本日欽天監值班朕召見該堂官詢問星象據奏不能深悉及問危宿分野亦皆不能對在星學甚微觀占殊難若輩猶不足怪至於各宿分野書籍詳載乃人所共知而亦漫不經心則其平日之曠廢官守已可概見監正雅琦監副法林湛露俱著交部嚴察議奏原任監正進爰因其妄行條陳

時務是以治罪但彼人雖糊塗於職分內事向曾問彼尚能留意著帶革職仍辦理監正事如果努力無過再請開復欽此

2471 乾隆九年正月二十三日內閣奉

上諭盛京工部侍郎德新以伊母老病奏請留京情辭懇切伊原由內閣學士陞用著留京仍補內閣學士盛京工部侍郎員缺著內閣學士留保補授欽此

2472 乾隆九年正月二十三日奉

旨前喀爾吉善奏總兵馬世龍一案朕已降旨交該撫審擬今御史薛澂援引著叅撫審擬叅督審之例請另遣大臣前往審定總兵馬世龍貪贓營私劣蹟種種即在京科道亦應有風聞該撫兼管提督自應據實題叅其與馬世龍亦有何嫌隙不可以審訊至摺內所稱武職之總兵猶文職之巡撫今提督叅總兵即令兼管提督之巡撫審擬若提督叅巡撫勢必即令提督審擬等語巡撫原不

此提兵如或有其事朕臨時自有定奪乃薛激憑  
虛引証更屬牽強著將原摺發還欽此

2473 乾隆九年正月二十四日奉

旨訥親此次奉差著給與欽差關防帶往欽此

2474 乾隆九年正月二十四日內閣奉

上諭積貯民食所關從前各省倉儲務令足額原為  
地方偶有水旱得資接濟是以常平之外復許捐  
貯多方儲蓄無非為百姓計後因糶買太多市價  
日昂誠恐有妨民食因降旨暫停採買俾民間米  
穀自相流通價值平減亦無非為百姓計也乃近  
聞各省大吏竟以停止採買為省事州縣等官又  
多素畏積穀之累因而倉貯缺少不思常平之設  
不特以備荒歉即豐稔之年當青黃不接之時亦  
得藉以平糶於民食甚有關係從前所降諭旨總  
在督撫大吏奉行之時將實在情形籌酌妥辦其  
間因時制宜原不可執一定之見今因有停止採  
買之令遂任倉穀缺少置而不理一處如此各處

效尤將來必致糶借無資又似昔年倉穀有名無  
實如此因循固非設立常平本旨又詎朕停止採  
買之本意乎用是特頒諭旨曉諭各省督撫務須  
斟酌地方情形留心辦理應買則買應停則停摺  
在相機籌畫不可膠執定見希圖省事以副朕軫  
念民食之至意欽此

2475 乾隆九年正月二十八日內閣奉

上諭上年上下兩江秋收大稔豐稔間有偏災地方  
朕已加恩蠲緩賑恤其壽州鳳臺鳳陽懷遠臨淮  
桐城泗州盱眙八州縣勘不成災地畝所有新舊  
錢糧原應照例催徵但念該處連年積歉之後雖  
未成災收成不無歉薄目下正當青黃不接之時  
若仍事追呼閭閻未免拮据著將壽州等八州縣  
並坐落八州縣之衛田應納新舊錢糧俱緩至本  
年麥熟後徵收以示朕體恤蒸黎之至意該部即  
遵諭行欽此

2476 乾隆九年二月初二日內閣奉

上諭直隸按察使方觀承前經隨往江南看視河道  
此次著隨訥親前往即從天津馳驛起程其按察  
使事務著德督高斌酌量委員署理欽此

2477 乾隆九年二月初三日內閣奉

上諭上年御史沈廷芳條奏行營事件顛倒膠妄金  
溶保奏孫嘉淦袒護師門二人身居言路顯扶私  
心不得不加處分以示懲儆是以降旨分別降革  
諒伊等此時亦自知愧悔矣朕以廣開言路為心  
於諸言官寧可待之以寬沈廷芳金溶俱著復還  
原官遇缺補用以觀後效欽此

2478 乾隆九年二月初八日內閣奉

上諭給事中陳大珩奏許容裡款誣陷謝濟世以  
致民怨沸騰許容身為大臣敢肆其欺罔罪既無  
所逃於刑書位何堪列於寮案伏乞收回成命另  
簡賢員庶欺罔知儆而於封疆有益等語鄒一桂  
所奏亦同朕因湖北巡撫員缺一時不得其人許

容久歷外任頗能辦事是以宥過令其署理以觀  
後效今陳大珩等既如此陳奏其言亦是許容不  
必署理湖北巡撫印務晏斯盛著仍留原任戶部  
侍郎員缺著汪由敦調補兵部侍郎員缺候朕另  
降諭旨向曾用趙弘恩石麟皆以言官糾論而罷  
夫人材難得豈可一棄終不復用若果新進之人  
師師濟濟朕亦何樂於必用已罷之人用人之難  
外臣何由得知其出於不得已者往往類此然言  
官各行已見陳奏朕前乃其職掌今陳大珩鄒一  
桂兩人所奏相合顯有商謀扶同之處且近日有  
旨金溶沈廷芳仍以御史用獨非棄而復用者乎  
言官何無論列者此風亦不可長但朕既不用許  
容此中情事姑不究問莫謂朕終不知也將此並  
諭諸臣知之欽此

2479 乾隆九年二月初九日內閣奉

上諭上年江南淮徐所屬欽州之州縣朕已諭令該  
督撫悉心體察撫綏安輯不使窮黎失所但聞海  
州贛榆二州縣地瘠民貧又當積歉之後其艱窘  
之狀較之他處為甚計賑濟之期正二月便當停

止此時去麥熟尚遠民食艱難朕心軫念著於原議之外將極貧者加賑四十日次貧者加賑三十日以恤窮困又聞鹽城銅山沐陽三縣其情形較海賴為輕而較他處則稍重停賑之後亦應量為籌濟著該督撫酌速辦欽此

2480 乾隆九年二月初九日內閣奉

上諭朕聞閩省地方因循廢弛之習不獨有司為然武職各官尤甚衙門兵役均有緝捕查拿之責文職衙門之壯捕豈能如營汛兵丁之衆多遇有大夥梟販武職弁兵自應首先擒捕方不至於免脫乃上年十月內晉江縣梟販莊翳三等持械押護私鹽二百餘擔兵役攔截擒獲竟被殺傷兵丁將器械奪去又十一月內長樂縣江田地方梟販陳德賜等八十餘人哨捕向前擒拿反被剝衣捆打巡兵繼至見鹽梟勢衆不敢擒拿盡被走脫其餘十數人及數人一起之私梟在地方肆行者甚多而弁兵捕獲者甚少朕所聞如此鹽梟既敢抗拒玩則其他衆衆不法等事一任其踈縱可知著提督那蘇圖巡撫周學健加意整頓體國家設兵衛民之

意大破從前積習嚴飭弁兵緝奸禁暴以靖地方倘或仍蹈前轍將弁兵嚴加處分毋得姑容欽此

2481 乾隆九年二月初九日內閣奉

上諭山東沂州府知府田爾易年齒已老精力就衰著休致欽此

2482 乾隆九年二月十一日內閣奉

上諭上年天津河間深州等屬十六州縣被災較重朕已格外加恩賑濟撫綏毋令貧民失所但今已屆仲春雨澤未降二麥收成不能期必倘青黃不接之際已經停賑恐貧民仍不免乏食朕心軫念殷切此十六州縣著於從前定議之外再加賑月分以濟民食提督高斌可分別妥議具奏早為辦理其或米穀不敷著一併預籌以備臨時之用該部遵諭速行欽此

2483 乾隆九年二月十一日內閣奉

上諭江蘇布政使安寧現丁母憂其布政使並閩務著吏部郎中慶必達署理即前往赴任欽此

2484 乾隆九年二月十三日內閣奉

上諭安西提屬卜隆吉凌塔柳溝等處營兵於乾隆元二兩年屯種恒田寨內喂養牛騾馬匹採買豆草用銀一千八十七兩當時無項可動是以於屯糧內借給後經該督撫以成卒寒苦請於元年秋救糧內作正開銷部議不准朕思此項銀兩已歷多年當日屯種各兵事故開除正復不少難以責令現在之兵丁還項著將此項銀一千八十七兩准於元年秋收糧內扣抵開銷以示朕優恤邊兵之意該部即遵諭行欽此

2485 乾隆九年二月十三日奉

旨各省案犯有因患病遲延至一二年未結者著刑部查明行文速催完結在京各案亦照此辦理欽此

2486 乾隆九年二月十三日奉

旨此件著交與刑部會同雅爾圖一併審理欽此

雅爾圖摺

2487 乾隆九年二月十四日奉

旨戶部尚書張楷著寬給假限令其安心調理俟病愈後到部辦事此際戶部事務著彭維新署理欽此

2488 乾隆九年二月十五日內閣奉

上諭大學士史貽直著於紫禁城內騎馬欽此

2489 乾隆九年二月十八日內閣奉

上諭本月二十二日皇后千秋節適值清明未便照常行禮是日行禮之處著停止欽此

2490 乾隆九年二月十八日內閣奉

上諭京師及附近府屬如天津河間等處自冬徂春雨雪稀少今清明已屆農事方殷朕心深為憂惕宮中默禱已非一日矣此時雖未至雩祭之期亦當敬謹祈求以期膏澤早降著禮部順天府虔誠祈禱速議舉行並傳諭直隸總督高斌知之欽此



2491 乾隆九年二月十九日內閣奉

上諭朕因直隸天津河間深州等屬上年被災較重今春雨澤未降麥收未能期必恐停賑之後貧民不免乏食著高斌分別妥議於從前定議之外再加賑月分以接濟窮民並預籌米穀以備臨時之用今據高斌奏稱查現在次貧之民前議賑至二月止極貧之民賑至三月止今遵旨加賑應將次貧再加三月一個月極貧再加四月一個月但次貧情形不一各村莊被災輕重亦不同除次貧內現在乏食仍需接濟者照常加賑一月外其有加賑一月尚不能支持無異極貧者若止照次貧加賑一月仍恐不能自存應同極貧一例加賑至四月為止此應賑之民若全給本色更於民食有益約計需米三十萬石仰懇勅下倉場侍郎於通倉內照數給發即令被災州縣自僱船隻赴通請領其水脚照例報銷等語著即照高斌所議速行其一切查辦事宜著飭原辦之道府親赴各州縣督率辦理務令貧民均沾實惠欽此

2492 乾隆九年二月二十四日內閣奉

上諭山東上年濟南東昌武定等屬之州縣被災歉收朕已加恩賑濟毋使小民失所聞該省今春雖已得雨尚未霑足將米豐歉難以預定應及時籌畫以備臨時之用目今東省開內現有運京漕糧四萬餘石著就近截留以濟借糶不敷之州縣再將北上糧缸內截留漕米二十萬石分貯沿河臨清德州二倉倘遇需用之時即動撥接濟戶部即速行文倉場侍郎及山東巡撫遵諭速行妥辦欽此

2493 乾隆九年二月二十四日內閣奉

上諭山東齊東等十九州縣衛被旱歉收朕已降旨將應徵錢糧照例分別辦理但被災州縣尚有勘不成災之地畝例不在緩免之列朕念此等地方既屬薄收自冬徂春民食未免拮据今當青黃不接之際餬口維艱若令其輸納國課實為竭蹶著將濟南府屬之齊東陵縣德州德平平原臨邑德州衛武定府屬之惠民海豐樂陵商河濱州霑化陽信利津東昌府屬之武城恩縣夏津沂州府屬

之日照縣南鄉并安東衛等十九州縣衛應徵乾隆八年地丁及帶徵錢糧寬至本年秋成後再行徵輸以紓民力該部即遵諭速行欽此

2494 乾隆九年二月二十四日內閣奉

上諭陳惠華著補授兵部左侍郎欽此

2495 大學士徐 奏請解任調理一摺

乾隆九年二月二十五日奉

旨覽卿奏具志漢大學士事務現有張廷玉史貽直辦理劉於義協辦卿可安心靜攝不必管理閣部諸務亦不必懇請解任欽此

2496 乾隆九年二月二十五日內閣奉

上諭積貯為備荒之要務不可不為預籌從前因採買過多市價昂貴是以降旨停止今停止已及一年各處米價穩未減平減如常揆厥所由米價之貴原非一歲驟長自不能一時驟平蓋奸商狡貪之故智猶存而百姓圖獲厚利之積習未改也夫採買既有妨於市價而倉儲又不可以虛懸雖令

各督撫按地方情形應買則買應停則停相機籌畫不得膠執定見但年歲豐歉不齊即隨時零買恐所入不抵所出終非經久之計朕思欲停採買而使原積仍不至有虧惟有復開外省本色捐監之例蓋米價之貴貴於官買不貴於捐監官買則商民聞風增長或吏胥作奸舞弊往往致於累民若捐監則各出其有餘以輸之官於市價原無闕碍是外省多收監穀採買即可以久停於倉儲民食而有裨益若在戶部收捐發銀各省雜穀仍是未停採買也著將戶部捐銀之例停止其各省捐監生後俱令於本地交納本色至投捐穀數從前所定不無過多之處今照各省時值酌定其穀數如江南每監生一名捐穀二百二十石今江南米價時值一兩七八錢不等若照例收穀二百二十石則值銀一百六七十兩捐者仍必觀望不前今應照數減二每穀一石酌以六錢計算每名收穀一百八十石如將來穀價平減該督撫具奏到日仍照舊例收捐其各省如何照此酌減並官吏需索捐勒等弊如何嚴行查禁之處著該部即速妥議具奏欽此

2497 乾隆九年二月二十九日內閣奉

上諭戶部尚書員缺著湖廣總督阿爾賽補授湖廣總督事務著荊州將軍鄂彌達署理鄂弥達到任後阿爾賽起身未京欽此

2498 乾隆九年二月二十九日內閣奉

上諭布蘭泰著實授馬蘭口總兵官欽此

2499 乾隆九年三月初五日內閣奉

上諭江西南昌鎮總兵官李如柏著調補直隸宣化鎮總兵官直隸宣化鎮總兵官高琦著調補江西南昌鎮總兵官欽此

2500 乾隆九年三月初五日內閣奉

上諭工部尚書員缺著戶部侍郎汪由敦補授戶部侍郎員缺著鑲紅旗漢軍副都統李元亮補授此

2501 乾隆九年三月初六日內閣奉

上諭鑲紅旗漢軍副都統員缺著王承宗調補其正紅旗漢軍副都統員缺著趙弘恩補授欽此

2502 乾隆九年三月初七日內閣奉

旨廣東順德縣知縣許龍章著吏部行文調取未京引見欽此

2503 乾隆九年三月初七日內閣奉

旨提督李繩武之子廕生李棠著帶領引見欽此

2504 三月初八日大學士伯張 遵

旨帶領引

見奉

旨李棠著吏部照例補用欽此

2506 乾隆九年三月初九日内閣奉

上諭廣西巡撫楊錫綬著來京陛見其巡撫印務著廣東布政使託庸前往署理廣東布政使印務著福建按察使納敏前往署理福建按察使印務著汀漳道王廷諍署理欽此

2506 乾隆九年三月初十日内閣奉

上諭外省鎮將等員不許在任所置立產業例有明禁在內地且然況海外番黎交錯之地武員置立莊田墾種取利縱無佔奪民產之事而家丁佃戶倚勢凌人人生事滋擾斷所不免朕聞臺灣地方從前地廣人稀土泉豐足彼處鎮將大員無不創立莊座名佃開墾以為己業且有客民侵佔番地彼此爭競遂投獻武員因而踞為己有者亦有接受前官已成之產相習以為固然者其中米歷總不明是以民番互控之案絡繹不休若非徹底清查嚴行禁絕終非寧輯番民之道著該督撫派高山前往會同巡臺御史等一一清釐凡歷任武職大員創立莊產查明並無侵佔番地及與民番並無爭控之案者無論係本人子孫及轉售他人均

2507 乾隆九年三月初十日内閣奉

今照舊營業外若有侵佔民番地界之處秉公清查民產歸民番地歸番不許仍前朦混以啓爭端此後臺郡大小武員創立莊產開墾草地之處永行禁止倘有託名開墾者將本官交部嚴加議處地畝入官該管官通同容隱並行議處欽此

上諭近來各省錢價日漸昂貴民間日用不便朕時時留心籌畫曾諭山東山西等省巡撫於該省開局鼓鑄以濟民用銅勛取於何處令該撫悉心妥議具奏今據阿里衮奏稱山西購覓銅勛惟有招選殷實商人採買洋銅之一法現有平陽府洪洞縣監生劉光晟家道殷實呈稱世受國恩心切報効情願領辦洋銅以資鼓鑄少盡犬馬微勞仰答涓埃等語阿里衮既稱劉光晟情願承買洋銅辦公効力著即准其承辦其如何給與銅勛價值及一切運費等項之處著該部詳志定議具奏欽此

2508 乾隆九年三月十五日內閣奉

上諭據江西巡撫塞楞額奏稱驛道陳浩呈稱親母譚氏年已七十五歲迎養在署近來疾喘日甚亟圖歸里以終餘年伏乞轉奏恩准送母回籍終養等情查陳浩現有兄弟與終養之例未符但該道呈稱母子相依為命不忍遠離情詞懇切是以據情代奏等語陳浩著准回籍終養欽此

2509 乾隆九年三月十九日內閣奉

上諭科場為掄才大典其正副考官必精於衡鑒者始克勝任今年鄉試屆期著大學士尚書侍郎於翰詹科道部屬等官應差主考人員內擇其人品端方學問醇正堪膺衡鑒之寄者各舉所知交送內閣彙奏候朕簡用其非科甲出身及無真知灼見者亦不必強舉欽此

2510 乾隆九年三月十九日奉

旨科場乃國家大典必期遴拔真才以收實用積習相沿學臣於科舉之外復有錄遺大收等事臨場之際督撫大吏又將不取者不問文藝之優劣盡送入場濫觴已極是以上科經臣工條奏朕勅令九卿定議每舉人一名准取科舉百名此亦不為不多矣夫國家之所以慎重科舉者原欲士子奮力於學業試官盡心於蒐羅以副掄才之典也今科臣吳焯乃請仍照舊例並蓄廣收則士子見入場之易不肯專心學問將應試者日益衆多主考官官不過一二十人為期不過二三十日豈能精心校閱盡得真才且試卷既多而中額不廣則多取科舉仍屬無益若因此而議加中額則現在舉人非二三十年不得一官亦斷無因候選者多而議增天下職官之理不幾終身無任進之日乎所謂及鋒而用者何居是中額尚應酌減即科舉百名亦屬浮多祇因積習既久不復議裁朕方自咎不免姑息而况可輒轉增添無所限極耶總之此輩非能為國家實心求賢以佐國是不過取悅士類釣譽沽名動以人文日盛為辭實則使士子徒

懷僥幸之心不肯勉向學而國家亦不得收登進之實效也吳煒識見卑淺特行曉諭並使衆知之吳煒又稱順天鄉試南人看北卷北人看南卷則南人無所展其長北人不能勝其任等語向順天試卷原未定有分閱之例後因臣工條奏恐有弊端是以勅令南北各自迴避但思文字短長南北原有微別且房考南人多而北人少士子則北卷少而南卷多人多而閱卷少未免於閱卷人少而閱卷多又慮其不精且主考官閱通場房官即有營私之處主考官肯任其朦混則作弊之源不在乎此自可無庸膠柱鼓瑟其順天鄉試閱卷之處著仍照舊例行至吳煒所稱今當望雨之時適多士鬱望之際等語此言甚為悖謬目今場期尚遠士子何人自知不在百名之內而即懷鬱望之心且雨澤未降與科舉多寡何涉而吳煒乃欲借此為言期朕必從其奏予朕於人言不可者不行可者則自行之從不以人廢言也吳煒牽引無理之處甚屬不合著嚴飭行吳煒摺並發欽此

2511 乾隆九年三月二十二日內閣奉

上諭江西吉南賴道朱陵丁憂員缺著廣信府知府陳世增補授欽此

2512 乾隆九年三月二十三日內閣奉

上諭尚書彭維新汪由敦著充三禮館副總裁欽此

2513 乾隆九年三月二十三日內閣奉

上諭禮部侍郎員缺著楊錫馥補授欽此

2514 乾隆九年三月二十三日內閣奉

上諭人君以養民為急務養民之道在使之上順天時下因地利殫其經營力作以贍其室家非沾沾于在上之補苴救恤遂長恃為資生之策也在昔善國國是者謂以君養民則不足使民自養則有餘誠不易之論國家歲轉漕粟以實京師乃補天庾之出納關係家重或因偶暹災歉萬不得已而為截留之計僅可問一行之豈遂視為常法今內外臣工動以截漕為請朕念切民依亦屢次允從

出於一時之急濟其實京倉所貯雖云可備五年可備十年要僅為官俸兵糧所必需若統為京師人民計即一二年恐亦不足供支况欲更示此以賑貸直省何未之思也漢文景間太倉之粟陳亡相因至紅朽不可食彼時豈無一方之凶歉而未聞輕議分戒者誠以經國之大計務籌久遠在官在民於內於外莫不各有本圖舍本圖而謀兼濟事多未便勢且不能一有虧則兩俱損依古以來無取焉上年各省倉儲需米孔亟朕因偶爾變通將江蘇安徽浙江江西湖北湖南六省漕糧各留十萬石於本省並著江蘇浙江各將米十萬石運往福建江西將米十萬石運往廣東又因直隸天津河間被災前後撥通倉米八十萬石備賑今年又令山東截留二十萬石分貯接濟凡此皆因民命所關不得不變通辦理若小民不知各務生計而惟官糧是賴無論官兵之外斷不能徧給窮黎即近漕之處可以議截留其邊遠省分更無漕可截留又將何以取給乎朕思一方之地利原可以養一方之人一家之人力原可以養一家之人古者九職任萬民一曰三農生九穀二曰園圃毓羣木三曰虞衡作山澤之材四曰藪牧養蕃鳥獸何

一非資生養贍之術為民父母民事即家事宜寔心勸課隨時區畫俾地無遺利民無遺力則家有蓋藏自可引養引恬俯仰不遺倘督撫不能董率有司有司復不以田里樹蓄為事及歛收之年但請給發倉糧截留漕米為督撫有司備賑之良策將使民間謂水旱可以不備不圖自食其力甚至游惰成風舉身家衣食之切務皆委之在官是非受之實以害之矣天下之大億兆人民之眾惟正之供祇有此數焉得人人而濟之用是特降諭旨通諭直省督撫並飭守牧等官各思所督何事所撫何事所稱知府事知州知縣事實應知何事凡以為民計即所以為身計既為民計而不使民知各為其身計其能為民計者幾何雖自今督撫尚各體朕心毋忽民懇切開導并勸良有司務使百姓各知自謀以裕生養之源不徒望恩俸澤而恩澤之加斯實足以利濟則豐年樂其降康歉歲亦可恃無恐朕願與諸臣共勉之欽此

2515 乾隆九年三月二十四日內閣遵

旨將涼州將軍綽爾多之子廕生實格帶領引

見奉

旨交部照例補用欽此

2516 乾隆九年三月二十五日內閣奉

旨綏遠城副都統那明患病著太醫院派太醫一員

前往診視欽此

2517 乾隆九年三月二十六日內閣奉

上諭甘肅地方向來民間積欠繁多朕曾降旨將張

張掖臯蘭狄道靖遠安化平涼涇州靈臺中衛九

州縣民欠自乾隆八年為始分作四年帶征又將

武威西寧二縣帶征雍正十三年至乾隆三四年

之項一併蠲免此外應徵舊欠錢糧理宜按期輸

納但念該省土瘠民貧地處邊陲非內地可以比

一年而清積年之欠未免艱難著將張掖肅州高

臺臯蘭河州狄道靖遠安化平涼涇州靈臺靈州

中衛十三州縣及武威西寧二縣累年未完積欠

銀糧草束等項再行寬緩自乾隆九年為始分作

六年帶征以紓民力該部即遵諭行欽此

2518 乾隆九年三月二十六日內閣奉

上諭乾隆三年寧夏地震被災鎮標及外路協防兵

丁在於寧夏府庫共借支銀一萬三千五百五十

九兩除扣完司庫銀二千六百四十八兩外未扣

完銀尚有一萬九百一十一兩現在著追朕思寧

夏自昔年地震之後屢值歉收兵丁倍覺艱苦可

為憫惻且此借支之項已歷數年人多更換難以

責令還項著將未完銀一萬九百一十一兩悉行

豁免以示優恤該部即遵諭行欽此

2519 乾隆九年三月二十七日內閣奉

上諭山東德州海豐樂陵陽信德州衛五州縣衛上

年遭值旱灾聞今春又復少雨麥收失望窮民艱

於謀食著該撫酌量各處情形加賑四月一箇月

毋令窮民失所該部即速傳該撫知之欽此



2520 乾隆九年三月二十七日內閣奉

上諭四川松茂道劉文誥著調補湖廣襄陽道其松茂道員缺著襄陽道王際調補欽此

2521 乾隆九年四月初一日李清芳回奏保舉試差

一摺奉

旨李清芳所奏原屬含糊朕令其列名指參完無實據其風不可長著交部察議欽此

2522 乾隆九年四月初一日內閣奉

上諭諭德雷鉉著來京供職欽此

2523 乾隆九年四月初二日內閣奉

上諭京察乃國家考績大典現在舉行之際恐各部院臺官瞻徇情面有濫列一等著著大學士於驗看過堂時慎重分別凡不稱一等著俱行裁去欽此

2524 乾隆九年四月初三日內閣奉

上諭

雩祭之典所以為百穀祈膏雨也從前大臣等定議一應禮儀悉照恭祀

園丘之制行朕思目下畿輔雨澤愆期此次舉行

雩祭正望懇切之時非每夏常雩可比其先期前詣

齋宮及祭畢回鑾朕俱御常服不乘輦不設鹵簿不作樂以示虔誠祈禱為民請命之意可傳諭各該衙門知之欽此

2525 乾隆九年四月初五日奉

上諭湖南按察使明德著解任欽此

2526 乾隆九年四月初九日內閣奉

上諭湖南按察使員缺著准揚道徐德裕補授欽此

2527 乾隆九年四月十三日內閣奉

上諭直隸河間天津深州等屬十六州縣上年被災較重今春雨澤愆期朕恐二麥收成不能期必小民東作方興已降旨於停賑之後再加賑四月一個月以資其力作目今雨澤稍遲麥收已經失望而秋田收穫尚早此際若不格外加恩恐貧民仍不免於乏食著再加賑五月一個月該部即傳諭總督高斌先期籌畫速行辦理欽此

2528 乾隆九年四月十五日內閣奉

旨提督保祝患病著太醫院派好醫官一員令伊子傅景帶同前往看視欽此

2529 乾隆九年四月十八日內閣奉

上諭  
順懿密太妃侍奉

皇祖三十餘年淑慎溫恭慈祥和易誕育賢王壽躋七秩福德兼備亦史冊所罕見朕心敬禮虔祝康寧近日體中違和方期調治痊可今日聞病勢沉重朕已降旨親往看視乃啓駕之先奏報

太妃薨逝本日朕不便過往俟明日殯殮之後躬親

奠醊輟朝三日著和親王大阿哥穿孝一應典禮該部內務府察例具奏欽此

2530 乾隆九年四月十八日內閣奉

上諭王保補授正黃旗滿洲副都統著仍兼理藩院侍郎欽此

2531 乾隆九年四月十八日內閣奉

上諭湖北武漢黃德道員缺著姜順龍補授欽此

2532 乾隆九年四月二十日奉

旨大學士陳世倌所奏是著抄錄密寄與喀爾吉善照此辦理欽此

2533 乾隆九年四月二十二日內閣奉

上諭今年各省雨澤尚屬應時惟京師及畿內數府甘霖未降二麥歉收目下已屆佈種大田之時望恩尤切朕脩省祈禱宵旰靡寧因念清理刑獄亦感名

天和之一端著刑部堂官於在京各案內徒杖以下輕

罪一一查明情節稍有可原者或應釋放或應未減即速分別請旨完結其重罪人犯雖法無可貸而天氣炎熱身繫囹圄亦屬可憫著於夏至前後遵照舊例暫寬刑具添蓋蓆棚給與冰水藥物免致病暍以上省刑寬禁二事並即傳諭直隸總督高斌於所屬地方一體速為辦理欽此

2534 乾隆九年四月二十三日內閣奉

上諭提督保祝患病著解任調理提督印務著傅清前往署理其天津總兵印務著高斌委員署理欽此

2535 乾隆九年四月二十三日內閣奉

上諭今年歲內數府雨澤愆期二麥收成歉薄若照向例麥熟開徵民力拮据可憫朕心軫念著傳諭高斌令其酌量地方情形其應行緩徵之處所有額徵錢糧暫停催納俟將來可以完糧之時該督再行奏聞開徵該部即遵諭行欽此

2536 乾隆九年四月二十四日內閣奉

上諭前因山東德州海豐等五州縣衛上年被旱今春又復少雨已加<sup>降</sup>旨加賑四月一個月以濟貧民今據喀爾吉善奏稱德平陵縣平原商河濱州雷化惠民利津八州縣雨澤未沛二麥黃萎小民艱於謀食請照德州等五處之例加賑一個月等語今四月將盡而該撫始<sup>行</sup>奏請殊屬遲緩著飭行所請依議速行所需米石即予截漕內補給如有不敷即照海穀一石折銀六錢之例動項折補該部即行文山東巡撫喀爾吉善令其速為辦理欽此

2537 乾隆九年四月二十七日內閣奉

上諭工部右侍郎員缺著呂熾補授欽此

2538 乾隆九年四月二十九日內閣奉

上諭據楊錫綬奏稱粵西武緣縣知縣赫昇病故所遺員缺例應歸部銓選但武緣乃思恩府首邑地廣民刁又承審各土司一切命盜案件素稱難治若聽候部選未必即得相宜之員查有岑平州州判施敏政曾經大計薦舉奉旨准其卓異回任候

陞該員在粵已二十年熟悉風土堪膺牧民之任  
若陞署武緣縣頗為入地相宜等語施敏政在粵  
年久又經薦舉卓異著陞授武緣縣知縣欽此

2539 乾隆九年五月初二日內閣奉

上諭一春以來雨澤稀少二麥黃萎今逾芒種之期  
甘霖猶未普降切恐秋禾難以佈種民食堪虞朕  
心憂灼思過省愆無一時之暫釋朕詣

暢春園問安

皇太后雖慈訓屢頒寬慰朕躬而每見

皇太后以天時亢旱憂形於色朕心更為不寧今日

太后從寢宮步行至園內

龍神廟虔誠祈禱朕竊聞之下惶恐戰慄此皆朕之

不德不能感召

天和而累

母后焦勞至於此極為人子者實無地可以自容即刻

刻前往請

安禱懇謝罪惡眾不知以為別有他故並諭內外臣工  
知之欽此

2540 乾隆九年五月初三日奉

旨據禮部奏稱早雩之禮於五月初二日七日期滿  
又七日不雨應致祭

太廟因初五日節屆端陽請於初六日齋戒起於初九

日祈禱等語此奏甚屬錯誤朕以天時亢旱宵旰

焦勞敬舉早雩之典惟祈甘露早沛尚何間於節

令宮庭之中偶逢節令朕奉侍

皇太后意在承歡蓋恐因朕宵旰憂勤之事上煩

慈慮耳今

皇太后愛朕之切憂朕之憂昨且從寢宮步禱於

龍神之前朕惶恐戰慄莫知所措如復以逢節而議

改齋期不大拂

后之聖心乎著即於初五日齋戒起初八日致祭悉

照議定典禮行欽此

2541 乾隆九年五月初四日內閣奉

上諭乾隆七年十一月內漳州城守營把總馬鹿管

帶班兵赴臺更換在洋遭風折舵輒至廣東瓊州

府文昌縣地方彼時各兵借支盤費口糧銀五百

七十九兩六錢例應於各名下均攤扣追還項朕

念兵丁等於海洋遭風備歷艱險情殊可憫所有

借支銀兩此時難以扣抵著加恩豁免以示優恤  
該部即行文該督撫提鎮知之欽此

<sup>2442</sup>乾隆九年五月初六日內閣奉

上諭京師自春徂夏雨澤愆期風霾時作朕心憂

親製祭文遣平郡王福彭虔禱於

風神廟著禮部太常寺遵照典禮即於初八日敬

舉行欽此

<sup>2543</sup>乾隆九年五月初六日奉

旨歐堪善所奏部院督撫議覆臣工條奏祇應就事

論事揆情度理固不得有意苛取更不宜節外生

枝以肆其譏責如常安之於楊二酉條奏兵餉一

案指為東野不經虛謬踪妄刑部之於薛澂條奏

贖罪一案既責其不學又訾其憐詞氣之間甚

於怒罵此輩一聞漸成爭角之風有乖國體等語

朕思臣工議事自當平心和氣折中事理以求一

是即如刑部常安議駁二詞意原屬稍過而言官

所奏豈必盡實亦豈能盡合歐堪善同為言官而

為此奏亦不得謂為公論彼此詆訶愈多畛域於

協恭和衷之道均未有當猶之乎非有與非非有

此固失矣彼亦未為得也將此曉諭內外臣工等  
知之欽此

<sup>2544</sup>乾隆九年五月初九日內閣奉

上諭夏至致祭於

方澤去歲新葺齋宮朕先期一日住宿但彼地樹木新

植尚未成陰天氣炎熱扈從人多不免有病暍者

今歲炎熱甚於舊歲此次不必前詣壇內齋宮仍

在宮內齋宮住宿將未過親祭之年該衙門兩請

旨意俟樹木成陰後仍照例齋宿壇內此者前往

致祭正當祈雨之時不乘輦不設鹵簿著即傳諭

各該衙門知之欽此

<sup>2545</sup>乾隆九年五月初九日內閣奉

上諭直隸天津鎮總兵官員缺著督標中軍副將羅

俊補授湖廣襄陽鎮總兵官員缺著施南協副將

張大猷補授欽此

2546 乾隆九年五月初十日奉

旨通州著派永興去沙河著派德保去盧溝橋著派五十七去黃村著派馬爾拜去欽此

查辦平糶

2547 乾隆九年五月十四日內閣奉

上諭朕前降旨將襄鄖道王際調補四川松茂道今據巡撫晏斯盛等奏稱王際生母年老多病難以入川懇請改補近地等語王際著仍留襄鄖道任其松茂道員缺緊要著總督慶復巡撫紀山於所屬知府內揀選一員題補欽此

2548 乾隆九年五月二十三日內閣奉

上諭為治以安民為本安民以教養為本二者相為表裏而不可偏廢務求實效而不事虛名乃克盡父母斯民之道蓋人君提其成於上而分其任於督撫督撫提其成於上而分其任於州縣州縣者民之司命而又與民最親者也身居此官身履此地耳聞目擊切近易知非地遠情疎遙為揣度者可比是則民生之休戚民俗之醇疵鷄犬桑麻之

細日用飲食之常良好之不一其類勤惰之各異其情必一一洞悉於中而後可以加之調劑所謂知州必能知一州之事知縣必能知一縣之事顧名思義循名責實豈簿書錢穀無誤期會遂謂可勝任而愉快耶朕御極以來孜孜圖治訓飭大吏廣勵羣僚至再至三詞煩慮復無非欲措斯民於衽席之安復斯民以降衷之性而細察近日有司究不免奉行故事罕有能深體朕意以行寔行而收實效者夫一州一縣之事既不周知洞見則官之與民益相隔而不能相親欲其視民之疾苦如家人之困厄視民之作偽如子弟之惱淫救拯極溺竭力殫心不可得矣州縣所屬地方雖廣狹不一事務亦煩簡不同然一月之中豈無齋戒傳刑之日亦有因公下鄉之時果能乘此餘暇不辭勞瘁親履田間與父老子弟歡然相接如家人父子言孝言慈啓其固有之良化其惰窳之習因而詢問疾苦講求利益度其原隰相其泉流審物土之宜因閭閻之便利所當興者舉之害所當除者去之則養與教兼施善政莫大乎是至于身所不能適及之處則有約正值月人等或給之廩餼或加

之獎誘使之分佈四鄉代為化導亦可冀其分任耳目以助官之不及務使一州一邑之民情聯勢合如父兄弟之相為扶掖如頭目手足之相為捍衛一州一邑如此他州他邑從而效之一郡一省如此他郡他省從而效之始若艱久則漸近自然所為日計不足月計有餘古之循吏獨不可再見於今歟是在為督撫者實心以勸課屬吏為州縣者實心以愛育群黎勉強力行毋憚勞勩政成于上民悅于下事有必至理有固然語曰至誠而不動者未之有也為其事而無其功者亦理之所無也用是再頒此旨通行訓誨自督撫以至州縣各官皆當身體力行以奏治效毋徒視為具文焉

特諭

2549 乾隆九年五月二十四日內閣奉

上諭福建閩安協水師副將員缺著廣東平海營叅將教臨補授欽此

2550 乾隆九年五月二十五日內閣奉  
上諭協辦大學士吏部尚書劉於義前往保定辦理直隸水利事務著乘驛前去嗣後凡有往來查勘之處俱著乘驛行走欽此

2551 大學士伯都 等 議覆御史柴潮生請興水利一本 乾隆九年五月二十六日奉

旨依議畿輔興修水利乃地方第一要務必簡用得人始能有益無弊總督高斌事件繁多難以專心水利之事協辦大學士吏部尚書劉於義曾任直隸總督及布政使於合省情形素所練習若與高斌悉心籌畫經理自可成利濟之功而收永遠之效此時著劉於義前往保定會同高斌詳加計議酌定規條將來興修之時二人同心合力督率辦理務期有成以副朕望欽此

2552 乾隆九年五月二十六日內閣奉

上諭工部侍郎張廷璩著調補內閣學士兼禮部侍郎工部侍郎員缺著趙弘恩補授仍兼副都統行走欽此

2553 乾隆九年五月二十六日內閣奉

上諭荆州將軍事務著德敏前往署理其正白旗漢軍都統事務著李元亮署理欽此

2554 乾隆九年五月二十七日內閣奉

上諭朕聞直隸灤州知州李鍾偁不勝繁劇之任著擢回交與提督高斌以簡缺另行題補灤州知州員缺緊要著盧見曾補授欽此

2555 乾隆九年五月二十七日內閣奉

上諭據山西學政蘇霖渤奏稱籍隸滇南親母居住本籍因路途不能迎養今母年已七十有九現今患病懇恩俯准給假俾由晉省造歸一為省視所有錄送遺才等事俟接任學臣辦理等語蘇霖渤准給假回籍省親其山西學政員缺吏部即行開列請旨欽此

2556 乾隆九年五月二十八日內閣奉

上諭上年陳弘謀在江西巡撫任內辦理截漕運赴湖南一事今據該撫蔣溥奏稱此項米色皆熟難發變聞有霉爛蓋因上年奉有截留之旨江西各屬以無庸兌軍續收之時不免草率所雇民船不能堅好稽察難周刁奸船戶潛竊挾水遂至米色不齊竟有難於變價者現在嚴查明確據實題參等語漕糧關係正項徵收本係好米何得因截運他省遂至草率不堪陳弘謀辦理此事漫不經心著交部察議其承辦各員俟蔣溥查奏到日交部嚴察議奏欽此

2557 乾隆九年五月二十九日內閣奉

上諭翰林院庶吉士張泰開著在阿哥書房行走欽此

2558 乾隆九年五月二十九日內閣奉

上諭四川重慶鎮提兵員缺甚屬緊要著邱策普調補其川北鎮提兵員缺著韓應魁調補欽此



2559 乾隆九年五月二十九日內閣奉

上諭朕命尚書公訥親前往河南等省原係查驗營  
伍並看河道海塘工程訥親素性謹慎公正朕所  
深知今奉差委自然臧、否、事、據實陳奏豈  
因地方官之趨避與否遂意為軒輊今聞江南浙  
江河南數省預備公館供應過於華盛而江浙為  
尤甚揣摩逢迎無所不至訥親一槩却避並不延  
留有司奔走不遑報言辦理欽差大差其餘公事  
串皆停閣甚且有言訥親此行乃朕將來南巡之  
意是以

皇祖向曾駐蹕勝槩無不整飾以待訥親觀覽此語更  
屬荒唐該督撫等皆朕簡用大臣如是逢迎是不  
但不知訥親之為人亦並不知朕心矣為此降旨  
中飭並俾眾知之以解其惑欽此

2560 乾隆九年六月初二日內閣奉

上諭安慶府知府倫達著吏部行文調取來京引見  
欽此

2561 乾隆九年六月初三日大學士徐 請解任調

理一摺奉

旨卿才品優長宣力中外簡預機務正資倚任去冬  
偶患痲疾特遣御醫診視莫其速痊今覽奏以病  
體未愈求請解任情辭懇切著加太子太傅准其  
解任俾得安心調攝俟病痊即行赴闕以副朕眷  
注之意欽此

2562 乾隆九年六月初七日內閣奉

上諭安徽巡撫范璨著來京候旨安徽巡撫印務著  
兩淮鹽政準泰前往署理兩淮鹽政印務著河東  
鹽政吉慶前往署理河東鹽政印務著內務府即  
中眾神保前往署理欽此

2563 乾隆九年六月初七日內閣奉

上諭據四川巡撫紀山奏稱恭華署新寧縣知縣周  
昭代因周公騰控告張公拔搶親一案長隨龍二  
妻莊脫逃比將周昭代監候待質查定例監候待  
質人犯已過三年俱得分別減等保釋今周昭代  
監候將及十年伊父母年老侍養無人可否仰懇  
聖恩暫行釋回原籍養親等語著照所請周昭代

准其釋回原籍養親俟緝獲龍二之日另行審明  
結案欽此

2564 乾隆九年六月初八日内閣奉

上諭安徽之鳳穎泗三府州屬連災之後朕屢經降旨將舊欠銀兩分列緩徵俟豐收後起限收納此時二麥登場正宜催輸積欠之候但查壽州等州縣衛從前被災稍重實為積困之區若令新舊銀米同時並徵小民未免拮据著將壽州鳳陽阜陽亳州蒙城太和盱眙天長八州縣並附入各州縣之鳳陽鳳中長淮泗州宿州五衛應征乾隆五年以前未完舊欠銀兩緩俟六七八等年應徵民欠全完之後啓限徵收以紓民力該部即遵諭行欽此

2565 乾隆九年六月十五日内閣奉

上諭和其衷奏額洛圖情節著刑部尚書朱保國子監祭酒鄂容安乘驛前往奉天會同侍郎兆惠查審定擬具奏欽此

2566 乾隆九年六月十六日内閣奉

上諭福建汀漳道員缺著雅爾哈善補授即從蘇州速赴新任其蘄州知府員缺甚屬緊要著摠督尹繼善於通省知府內揀選能勝任者調補所遺之缺即通行題補欽此

2567 乾隆九年六月十九日内閣奉

上諭朕前聞江南昭陽湖去冬水涸魚子化為蝻孽遂爾成蝗飛至山東地方將為禾稼之害近又聞河南永城縣有飛蝗從江南蕭縣飛入境內夏邑縣有飛蝗自江南宿州由砀縣之韓家道口集地方飛過夫蝗蝻之患原可以人力驅除摠當乘其初起盡心設法捕治若稍遲緩便難捕滅今江南之蝗至將貽害隣省則江南督撫辦理此事不能盡心可知著飭行仍令速行查明飛蝗起自何處將捕蝗不力之各該地方官逐一指參示儆欽此

2568 乾隆九年六月十九日内閣奉

上諭趙弘恩著兼辦內務府摠管事欽此

2569 乾隆九年六月二十日奉

旨額洛圖所奏四摺情節及侍郎兆惠奏摺俱交與  
來保鄂容安一併查審具奏欽此

2570 乾隆九年六月二十五日御史歐堪善奏廣東

不宜開礦一摺奉

上諭御史歐堪善奏摺可抄錄寄與廣東督撫馬爾  
泰策楞悉心定議務期妥協無弊不可拘執前見  
欽此

2571 乾隆九年六月二十五日內閣奉

上諭湖南巡撫蔣溥奏稱驛道謝濟世以誣道廢  
廢不敷公用會同布政使長柱詳請於司庫內再  
支養廉銀一千二百兩合計公費共銀五千兩庶  
辦公不至拮据謝濟世又稱去年被奏之後此地  
紳士頗有為濟世鳴冤者因此往來熟識今復補  
授道員凡受理詞狀之處若從公決斷則理短之  
人必多怨謗此輩甚屬可懼懇求代奏調補廣東  
臣訪得紳士等實多與謝濟世往來并有拜為門  
生者且捏造私書謬附輿論種種詭幻任褒讚臣

已嚴行禁緘不敢清陳謝濟世年已老邁每常託  
疾在署復自稱與紳士情熟碍難辦事則其不能  
表率僚屬可知合并奏聞等語謝濟世係獲罪發  
遣之員朕特赦回用為湖南監司昨在湖南任內  
誤被許容恭劾經朕降旨開復仍用為湖南驛監  
道乃伊不知感激朕恩乖張狂妄且欲徇紳士之  
私情而忘國家之公義又復自請調補廣東尤無  
忌憚之甚非人臣之體况伊現得養廉較之他處  
道員已加倍豐厚而伊不知知足更請加增甚屬  
無恥蔣溥既奏其老邁有疾著勒令休致回籍欽  
此

2572 乾隆九年七月初一日內閣奉

上諭副將瑚寶著賞給總兵銜再留哈密駐防三年  
欽此

2573 乾隆九年七月初一日內閣奉

上諭從前直隸河間天津等屬被災之地一應新舊錢糧經總督高斌奏請停其徵比緩至本年秋成後催徵完納朕已降旨俞允今幸甘霖疊沛秋成可望所有應完錢糧例應於秋收後徵收但朕思二府被災既重又當積歉之後元氣一時難復當格外加恩以滋培養著高斌確查災重之十六州縣將本地應徵新舊錢糧緩至明年看彼地收成光景奏聞再行開徵其被災稍輕之州縣各處情形亦不一或有應行緩徵者併著高斌詳查奏聞請旨務俾民力得以寬紓不至輸將竭蹶又據高斌奏稱天津府屬之慶雲縣地僻民貧商販罕至米糧缺乏民食艱難請於河南大名等處買到雜糧內酌撥二千石確查窮民酌量散給以資接濟等語著照高斌所請即行散給並即照大城等州縣出借口糧之例免其秋收還倉該部即遵諭速行欽此

2574 乾隆九年七月初三日內閣奉

上諭馬爾泰著調補閩浙總督那蘇圖著調補兩廣總督部文到日各即速赴新任欽此

2575 乾隆九年七月初五日內閣奉

上諭向來邊省地方官員缺部選之員因途遠不能即到往往懸缺需人是以准督撫等奏請預發人員以備委署之用近省縣不准行至其中或有萬不得已奏請發員者朕亦間允所請然此終非經常之道近據川陝提督慶復陝西巡撫陳弘謀山西巡撫阿里衮浙江巡撫常安署廣東巡撫策楞等陸續具摺請發人員備用自因本地一時情形出於不得已之苦衷著該部將候補候選州縣人員內於此四省各揀選數員帶領引見候朕降旨分發別省亦不得援例奏請欽此

2576 乾隆九年七月初九日內閣奉

上諭四川成都府知府員缺著成都府水利同知李盛唐補授欽此

2577 乾隆九年七月十二日內閣奉

上諭舒敏著巡視西城增壽保著巡視北城欽此

2578 乾隆九年七月十二日內閣奉

上諭山東濟南府屬之歷城章邱鄒平齊河濟東濟陽禹城臨邑長清陵縣德州德平原德州衛武定府屬之惠民陽信海豐樂陵商河濱州利津霑化青城蒲臺泰安府屬之平陰肥城東昌府屬之博平臨清高唐恩縣館陶沂州府屬之沂水蒙陰蘭山青州府屬之博興高苑樂安等三十七州縣衛勘不成災之地畝應徵錢糧例應輸納但朕念各州縣麥收原屬歉薄若因此時勘不成災將新舊錢糧一時並徵小民未免拮据著將乾隆九年應徵地丁寬至本年十月後啓徵其歷年舊欠緩至來歲麥熟後徵收以紓民力欽此

2579 乾隆九年七月十六日內閣奉

上諭廣西鎮安府知府員缺著將太平府同知張光宗補授欽此

2580 乾隆九年七月十七日內閣奉

上諭本年未經保舉考試之臨臈檢討及庶吉士著吏部傳齊於二十外赴圓明園候旨考試欽此

2581 乾隆九年七月二十三日內閣奉

上諭李質粹現丁父憂固原提督印務著涼州總兵官段起賢署理欽此

2582 乾隆九年七月二十三日內閣奉

上諭甘肅地方土瘠民貧非內地可比朕所軫念其有舊欠錢糧一年難以併徵者已加恩寬緩矣頃聞甘州府山丹縣積年民欠亦屬繁多乾隆元年至八年共欠屯糧一萬二千六百餘石又自三年至八年共欠籽種糧六千五百餘石又自元年至八年共欠草六十萬一百餘束此時若按例一併催徵民力未免艱窘著從本年為始分作六年帶徵俾小民從容完納該部即傳諭該督撫遵行欽此

2583 乾隆九年七月二十四日內閣奉

上諭科場大典為人材所由出關係甚重我

皇考加意整飭今內場之弊雖覺漸清而日循日久外

場弊竇多端尚有不可枚舉者即如懷挾一事情

入代作文字夾帶入場主司憑文取中無從知非

已出僥倖弋獲相習成風則是讀書作文皆可不

用立身行己皆可不問何以名為士子何由得見

真才而國家賓興鉅典竟成虛設矣朕已嚴飭所

司於今年科場實力稽查毋得虛應故事而凡為

士子者亦宜返心自省以讀書之本業進身之階

梯而不務研求於平日惟思竄取于他人詭詐潛

藏行同盜賊此等之人尚何望其滋官分職為國

為民清夜自思得不深自愧赧乎至於內簾職司

文字雖暗通關節之弊近日未有所聞然銜鑑罕

能精當文風未見振起且專意頭場而不重後場

頭場之中又專意四書而不重經文夫設科之始

定有經義論表判策者任所以考其根柢論所以

試其識見表所以覘其淹洽判所以觀其斷制策

所以驗其經濟事皆切于士人之實用而不可

偏廢夫然後名通淹雅之儒經倫幹濟之士庶幾

出於科目之中為國家臂指之用也今表文率皆

雷同竟為南北通病在北人於聲律素所未協尚

應稍寬其限今得加意習學至於南人本屬易能

而不肯盡力勤艱相沿豈可任其暴棄自今以後

司文衡者務思設立三場之本意于經義表判策

論逐一詳加校閱以定去取毋得軒輊其間俾僥

倖之徒無從獲售若尚積習相沿倘經九卿磨勘

或科道指恭或被朕查出將主司典房官從重議

處如是則雖未能奏效于旦夕而數科之後趨向

自定實學共勉真才可得於國家設科取士之事

庶有裨益矣將此永著為例欽此

2584 乾隆九年七月二十四日內閣奉

上諭科場為國家掄才大典關係綦重向來外場與

實多端士子懷挾文字入場希圖弋獲此等無耻

之習一日不除則真才何由得出今年順天鄉試

朕已降旨嚴飭所司實力稽查聞外省夾帶之風

亦復間有不可不嚴行禁止著各省監臨提調等

官於點名時嚴加搜檢片紙隻字不許攜帶入場

務使弊絕風清毋得虛應故事至于主司衡文向

未專重四書文字而忽于經義後場其實任文所以考其學後場所以驗其用各有深意無容軒輊其間嗣後主司應將三場文字悉行盡心閱看就優劣以定去取毋得草率從事該部論連行欽此

舒赫德奏

2585 乾隆九年七月二十五日奉

旨著照所請行其先期前往貢院稽查之處著添派永興德保安寧索凌阿去欽此

2586 乾隆九年七月二十五日內閣奉

上諭段起賢已經降旨署理固原提督涼州總兵員缺甚屬緊要著交與提督慶復於所屬總兵內揀選調補所遺員缺以候補總兵施廷專補欽此

2587 乾隆九年七月二十五日內閣奉

上諭國家承平日久各省營伍日就廢弛朕早已知之並非因稽璜之奏始遣尚書公訥親前往查閱亦非因訥親此番查奏而後始諭令整理也現今據奏各處情形大槩甲仗旂幟尚屬鮮明而鳥鎗

騎射各種技藝則皆屬平常蓋該管大臣聞朕命訥親查閱無不倉猝屏當然器械可以猝辦於臨時而技藝則向來生疎一時驟難熟練其間情事顯然該管大臣平日所司何事而輕視武備若此乎本宜舉行從重議處但人數衆多但將甚屬廢弛者交部議處外為此特降諭旨嚴行申飭該將軍督撫提鎮等各宜痛改舊習勤加練訓俾士皆精銳戎行改觀務期平時可資捍衛有事可以折衝禦侮孔子曰不戒視成謂之暴今朕興以三年之限著兵部請旨遠省地方亦必差員查閱其就近省分已經閱過者亦必再行考驗該管大臣等皆朕信任之人於職分所在未能辦理以致營伍廢弛負朕委任之意豈不可愧此次派往查看之訥親及將來所遣之人俱係朕親信簡用者自必據實陳奏斷不肯代為容隱倘此番訓諭之後尚不知自勉仍復因循怠忽視為具文或經朕訪聞或被欽差查出則曠職之咎朕不能為該大臣等寬也著通行曉諭知之欽此

2588 乾隆九年七月二十六日內閣奉

上諭近來外省吏治率多欺蔽即如江南浙閩閩乾  
隆六年十一月至七年十一月稅銀缺少一案經  
戶部駁查去後今巡撫陳大受署布政使愛必達  
查奏覆稱實係按月計算未經減少並無絲毫侵  
隱等語朕之裁減各關稅課並免米麥稅銀無非  
普惠商民之至意從前有旨盈餘減少戶部不必  
過於苛察惟今督撫就近查奏乃自有此旨之後  
各處所報盈餘無不減少者而督撫之查奏亦不  
過虛應故事該管官員未必不無濫指或委用不  
得其人旁有透漏該員以正課不虧遂爾疎忽究  
之非實在徵收之數目其奏報短少緣由則皆以  
年歲不齊為詞豈有各省之殊數年之久歲收盡  
皆不齊乎至督撫之查核亦祇據屬員回覆並無  
實力查出畧有異同者近來部中竟有以此等為  
刊板稿案之語此豈成政體哉故自減免稅課以  
米米豆價值仍然昂貴而於商民未見有益於稅  
課日見有虧轉使官吏得以高下其手也朕頗覺  
其弊用頒此旨通行訓飭朕既寬免稅課數百萬  
兩之多豈較量此些小盈餘之數各督撫及司稅

官員毋得錯會朕意以報增盈餘為念但嗣後務  
須核實辦理無欺無隱不得視為具文朕從前降  
旨時會計之臣有以此旨若下各關稅必至一年  
少於一年者朕謂之曰此弊朕豈不知但得商民  
獲一分利益則難稅額缺數亦可不顧行止者  
終必敗露海保輩即明驗也以今觀之商民並未  
得一分利益則大非朕從前降旨之本意矣而不  
令符朕前旨則又非朕所厚望于各督撫及司稅  
者也欽此

2589 乾隆九年七月二十七日內閣奉

上諭各館所修之書理宜上緊纂輯漸次告竣乃纂  
修人員皆怠忽成習經歷年久率多未成雖天心  
月窟討論務須精詳魚豕考據恐其訛謬亦  
何至易成者亦不即成輟轉耽延竟視為不急之  
務韋編三易非積日以成者乎其意不過借此多  
得公費以資養贍所為事君敬其事而後其食者  
何居且現在所修之書告成後尚有應行編纂者  
又當開館修輯未嘗不可載筆從事也夫今日之  
翰林即異日之公卿若所見如此卑鄙其器識豈



足以當鉅任嗣後除內廷所修各書未經開館者不必稽查外其餘各館俱著稽察上諭館之大臣按月察核倘仍前怠玩責有攸歸其該管大臣應如何稽查之處著即定議奏聞欽此

2590 乾隆九年七月二十七日內閣奉

上諭今日朕閱者刑部本章尚有尚書未保銜名未保已出差一月有餘是預先畫題於月餘之前矣向因刑部本章繁多每先行畫題以待臨時依次進呈然亦止應在數日之前不應歷月餘之久又聞海望辦理部務亦往往於十數日前畫十數日後之稿夫果於部件詳細閱者則本日一日之事尚恐未能周到豈能旁及十數日後之案是該部堂官等但以畫題為辦事而於事件之情節並未悉心詳度草率塞責可知矣為此特行訓飭並令各部堂官共知之欽此

2591 乾隆九年七月二十八日內閣奉

上諭福建寧鎮總兵員缺著廣東督標副將蕭球補授海壇鎮總兵員缺著廣東香山副將陳汝健補授欽此

2592 乾隆九年七月二十九日內閣奉

上諭甘省涼州府屬之柳林湖肅州所屬之三清灣柔遠堡等處及口外之安西河州柳溝布隆吉等處屯田民人從前開墾之始借有牛具口食銀兩日久未得全還朕已於乾隆七年五月內降旨全行豁免惟肅州所屬之九家窰一處當時未經議及是以尚在帶徵朕思此等原係窮苦之民責令完納不免拮据著將九家窰未完牛具銀一千六十餘兩一體加恩豁免以息追呼之擾該部即遵諭行欽此

2593 乾隆九年七月二十九日內閣奉

上諭據倉場侍郎吳拜等奏稱本月初七日夜間風雨猛驟外河水勢陡長丈餘將武興三幫旂丁鄭士元張映陳九如鄭子明漕船四隻遭風碰壞淹沒人口虧折米石又武興七幫旂丁蔣堯臣楊俊崇回空船二隻八幫旂丁尹禧逸回空船一隻亦是夜遭風碰擊破損雖因風起倉猝不及隄防然疎忽之咎究亦難辭應請將漂折漕米照例責令賠補損壞船隻責令賠造押運官弁移咨吏兵

二部議處等語今年七月初旬暑雨滂霈河流驟長昏黑之夜漕船被風人力難以搶救尚非運官旂丁疎忽之故查雍正十一年六月曾因風大水湧撞沉漕糧船隻蒙

皇考聖恩免其賠補賠修並官弁處分今年情事與雍正十一年相類著將賠補米石賠修船隻并官弁處分之處悉行寬免倘將來運官旂丁等因有屢次寬典不加意防護或有捏報等弊一經查出定行從重治罪欽此

<sup>2594</sup>乾隆九年八月初二日內閣奉

上諭禮部所脩禮書每次進呈俱有錯誤該部專司典禮而於職分內事漠不經心是何體制著將該堂官交部察議至任蘭枝乃翰林出身文章之事是其所能而亦一味推諉過誤多端著嚴察議奏欽此

<sup>2595</sup>乾隆九年八月初三日內閣奉

上諭臺灣雍正七年以後陞墾田園欽奉

皇考諭旨照同安則例陞科後經部議以同安科則過輕應將臺地新墾之田園按照臺灣舊額輸納朕念臺民遠隔海洋應加薄賦之恩以昭優恤除從前開闢田園照依舊額毋庸減則外其雍正七年以後報墾之地仍遵雍正九年奉

旨之業辦理其已照同安下則徵收者亦不必再議加賦至嗣後墾闢田園令地方官確勘肥瘠酌量實在科則照同安則例分別上中下定額徵收俾臺民輸納寬紓以昭朕加惠邊方之至意欽此

<sup>2596</sup>乾隆九年八月初四日內閣奉

上諭今日朕親祭

社稷壇張鵬翀於站班之地連聲咳嗽甚屬不合著交部察議欽此

2597 乾隆九年八月初八日奉

旨海澄公黃任簡著賞給資治通鑑康熙字典各一部上用緞二疋寧絢二疋仍令回籍伊係功臣裔朕深望其成立以繼家聲在籍之日可勤勉學習聞至督撫衙門聆其教導俟可以來京効力之時再行奏聞請旨欽此

2598 乾隆九年八月初九日內閣奉

上諭據江南提督尹繼善奏稱准徐海道黃蘭谷總理銅蕭等處水利工程漫不經心從未親身一到以致承脩之員任意草率偷減甚屬曠悞應請旨嚴加議處等語黃蘭谷著交部嚴加議處其淮徐海道員缺著徐州府知府莊亨陽補授徐州府知府員缺著內閣侍讀定長補授欽此

2599 乾隆九年八月初九日內閣奉

上諭國家賓興大典原欲得品行端方文學優贍之人以為朝廷有用之材成菁莪棫樸之治無如科場之中易蔽弊竇我

皇考加意整頓數科以來內簾之閑節已覺肅清而外

簾夫帶等弊一時難除近則日益加甚朕早已聞知屢行申飭至再三並非不教而罰也今當鄉試之年又復先期告誡以為若輩自謹遵功令痛自悔改矣乃昨日頭場點名朕命親近大臣數人前往監看竟搜出懷挾二十一人或藏於衣帽或藏於器具且有藏於褻衣禪袴中者其喪心無恥至於此極朝廷之取士蓋欲用之也既欲用之朕安肯不重待之乃朕欲重待之而若輩自輕自賤若此以稱先法古之徒竟同氣竊狗偷之輩冥頑不靈不可化誨若不立法嚴查則諸弊何由而除真才何由而見若欲擇人而施又何從預知其情弊之有無而為之區別乎滿洲原有呈身之路弓馬技藝何者不可見長而必勉強於文場以思僥倖於萬一既欲讀書取進則當潛心於學恥為穿窬至於江浙之人未必不能作文而乃存弋獲之心為苟且之計以致惡習相沿視為泛常違條觸法而不知虧體辱親而不顧士習日壞風俗日漓朕於執法之際實惻怛哀矜而深以不能化導愧於心也查懷挾生員內同慶奉乃少詹事僕保之子生員圖敏乃原任禮部郎中穆臣之子伊等

平日既不能教訓其子又復縱容犯法咎亦何辭科場懷挾原有慮分父師之例茲特申明其令僉保穆臣俱著交部嚴加議處嗣後倘有犯者將父師一併查完今年懷挾如許之多而從前各科志皆朦混了事著將乾隆元年以後監試之御史除內簾外俱交部查出議處至京師如此則外省情弊不問可知該撫藩等專任監臨提調之責總視為具文一味姑容取悅於眾深負委任嗣後著照京師之例監臨官董率各官盡心嚴查務使作弊之人不得漏網倘仍蹈舊轍經朕訪聞或被科道糾參或朕差人前往搜出必將監臨提調等照今年處分從前疎防御史之例一併從重議處欽此

2600 乾隆九年八月初十日內閣奉

上諭帥念祖著調補廣西布政使西安布政使員缺著慧中前往署理欽此

2601 乾隆九年八月十一日內閣奉

上諭各省科場懷挾之弊朕已降旨令各該省監臨提調照京師今年之例嚴行搜檢務使諸弊肅清

以裏大典嗣後每科有無懷挾及查出懷挾若干人俱著該督撫具摺奏聞欽此

2602 乾隆九年八月十四日內閣奉

上諭託庸泰布政使唐綏祖一案著交與提督那蘇圖審理欽此

2603 乾隆九年八月十六日內閣奉

上諭國家設科取士原欲遴選真才以備任使典至重也近來士習不端不惟文風未見振起抑且懷挾作弊行類穿窬詭計百出竟有思想所不到者朕早已聞知屢行訓飭今年順天鄉試特遣親近大臣嚴密稽查頭場搜出夾帶二十一人其四書三題係朕親出不過取其略冷不在外間擬議之中而場內多人遂爾闖筆交白卷者六十八人不完卷者三百二十九人真草違式及文不對題者二百七十六人頭場如此伊等尚不知儆二場仍有搜出夾帶者二十一人及見稽查嚴密點名時散去者竟至二千八百餘人之多士子品行如此學問如此是全仗懷挾作弊以為應試取科名

之具而猶且嘵嘵肆出誹言以為搜查太過夫不如此搜查則盜風將日熾矣風俗澆漓至於此極然摠朕不能正己以正士風實增慙愧而言之可為浩歎者也况朕所出三題並非在四書之外豈有身列儒林一部四書尚不能通解而公然矢口觀光應國家賓興之典乎生員由學政錄科貢監由祭酒等錄科伊等所司何事而將不能終奉之人濫行咨送甚屬不合著交部察議嗣後文藝荒疎者俱不准錄送京師既然若此則外省防檢疎畧瞻徇情面苟且姑容奸弊叢集亦不問可知士子讀書稽古先崇品行應試之時乃伊等進身之始理宜循規蹈矩豈應作奸犯科無論外省之遠朕不便遣人前往查察即在京師每科委員搜檢如防盜賊亦無此政體而為士子者願乃頑鈍無恥習為固常以致人心士風日益墮壞尚何望人才蔚起為國家分猷宣力之寄乎至於內場之弊則又預擬題目勒讓雷同千篇一律摠由平日不肯專心向學惟務僥倖於一時希圖利祿朱子云場屋之文必皆道其平日之學胸中之蘊而不說于聖人由是而仕皆供其職勤其事心乎國

心乎民而不為身計試問今之為士者能乎不能乎二三場表判策論既懸為令甲士子自當一併留心而平日視為具文憲下並未寓目惟有臨時抄寫之一法若朕亦如四書之命題則不能完場者又不知幾千人矣朕心不忍是以仍循其舊以全伊等顏面然嗣後若不留心研究如向之弊因循而不改朕將亦如四書之命題矣彼時莫謂朕不戒而視成也不然者豈科場之題例應士子自擬不應獨闢生面乎從來為治之道貴乎敦實一切因循姑息之習皆當痛除近者士風之蕩一至於此而好諛之人浮薄之士動言國家人文日盛以美聞恩科廣解額者往者有之初不以士習之邪正文品之醇疵為念嗣後若有以加科廣額為請者必加以違制之責分著為令至於議減中式之額則非眾所樂聞或言士子類皆寒素專藉科目為進身之階或言一習舉業則不能更為農商謀生無計甚至有言士心失望或妄生議論或別生事端者此皆毫無識見之人不知為政之體要國家科目豈為養老恤貧而設乎若有造言生事者是身投憲網國法其在何能逃於天壤哉夫國

家旁求俊又本欲量能授官以庶庶績若一味濫取廣收如何可收真才實濟現在解額已多壅滯日甚舉人需次知縣約非三十年不可得少壯登科及乎筮仕已屬衰遲昏憤龍鍾難司民社則是以無用之人塞有用之路既于吏治有妨而伊等當可用之輩又未遇應用之會必相率而同歸于無用當此之時為上者欲棄置之則無罪欲姑用之又不可在伊等固自貽伊戚而辦天下事者又安可委曲遷就以從人便而貽誤公政乎朱子曾言取士之流弊已極不可不一變以今之士習觀之種口醜劣之行既盡已敗露朕明知濫收之為害精遠之有功若仍復大度包荒不為整頓朕不忍為也蓋愛惜培養者朕之本懷而慎重清釐者政之大體與其寬登送以啓倖進之門不如嚴俊造以收得人之實此朕寓矜惜于整飭之中曲為調劑萬不得已之苦衷也其抑試中額作何量為裁減之處著大學士九卿會議具奏此次徑朕嚴訓以後如果文風日盛士習克端朕又何難停罷諸途專用科目之人并將此曉諭中外知之欽此

2604 乾隆九年八月十六日奉

旨吳燾所奏知道了科場懷挾之弊甚多勢不得不嚴行搜檢至於搜到聚衣之內原屬非體然若果無其人則朕將治哈達哈等以太過之罪矣而無如竟有藏匿于禪褲中者委查之員何由預知其孰為有孰為無而分別之則不得不舉行搜檢而朕雖欲全諸士子之顏面竟無辭以責派查之臣為太過矣然此等敗類必係目不識丁之人而得與觀光之列搃由學政濫行錄送以致紊亂考場清濁不分如此將來學政等如何慎選錄送並將搜檢等事如何詳悉定例之處著原議之大員一併議奏欽此

2605 乾隆九年八月十六日內閣奉

上諭吏部郎中王應綵之弟王應綸以懷挾搜出在弟兄之間原可不問及但王應綸當哈達哈面前從口中吐出表判文有何栽害之弊而王應綵遂入極口稱冤則是伊弟犯法伊並不以為非尚欲袒護亦屬不合著文部察議欽此

2606 乾隆九年八月十六日內閣奉

上諭江南海州沐陽贛榆三州縣連歲被災今年雖  
收成較好然元氣未必全復所有帶徵之漕糧係  
七八兩年未完之項今若分限兩年與本年新糧  
並徵是仍於一年之內並徵兩年之米小民未免  
拮据著將此三州縣七八兩年未完田地緩漕於  
本年起分限四年徵收以紓民力該部即遵諭行  
欽此

2607 乾隆九年八月十九日內閣奉

上諭廣西桂林府知府員缺緊要著宋家虞凱不能  
勝任著將江南松江府知府楊纘緒調補松江府  
知府員缺著尹繼善於所屬知府內揀選一員調  
補其所遺之缺將朱一鳳補授宋家虞凱著留京俟  
有事簡知府缺出吏部請旨欽此

2608 乾隆九年八月二十一日內閣奉

上諭向來主考官同考官之子弟俱令迴避不准入場  
雍正年間蒙

皇考准其一體應試亦未著為定例是以每科該衙門  
以應否准其考試請旨朕著來各科迴避官生多

寡不一若遇人少之年則入數甚易於科場條例  
亦不畫一自以照舊迴避為是嗣後不一體考試  
欽此

2609 乾隆九年八月二十一日內閣奉

上諭大學士徐本老成謹慎宣力有年今以抱恙懇  
請回籍調理朕心眷念特賦詩為寵其行並賜  
御用冠服及內府文綺貂皮諸物令御前侍衛都  
統永興齎往宣朕諭旨朕於本月二十五日行幸  
南苑當親至大學士邸寓慰問之欽此

2610 乾隆九年八月二十一日內閣奉

上諭福建漳州府知府員缺甚屬緊要著該督撫于  
所屬知府內揀選能勝任者調補其所遺員缺著  
刑部郎中胡寶琳補授御史高景蕃著金溶工部員  
外郎舒成俱著往福建交與該督撫以道府酌量  
題補山東兗州府知府秦仁亦著前往福建交與該  
督撫以知府同知酌量題補欽此

2611 乾隆九年八月二十二日內閣奉

上諭上年天津河等處被旱成災朕於常格之外加恩賑恤不使窮民失所今春雨澤又復愆期麥收歉薄朕心更為憂慮幸於五月半後

天賜甘霖通省霑渥禾稼豐稔倍常朕為萬民額手稱

慶念從前天津河間被災最重之二十六州縣並續報偏災之霸州等五州縣目下秋田雖獲有收恐元氣一時未復著將所借麥種牛力牧費制錢等項悉行豁免俾積歉之區民力寬裕示朕加恩休養之至意該部遵諭速行欽此

2612 乾隆九年八月二十三日內閣奉

上諭江西巡撫塞楞額奏稱江省所屬玉山德興樂平宜黃四縣于七月初六七等日山水陡發居民被淹已飭布政使遴委官員分頭查勘隨帶銀兩撫恤賑濟至有應行題奏之處俟臣出關之日逐一分別辦理等語江省玉山等四縣山水陡發居民被淹朕心深為軫念雖據塞楞額奏稱已經委員查勘賑恤其一切應奏之處亦應即行題奏辦理不必待至出關之後可即傳諭塞楞額知之欽此

2613 乾隆九年八月二十四日內閣奉

上諭今年磨勘不得照往年之例著該部臨時請旨朕另派官員磨勘欽此

2614 乾隆九年八月二十四日內閣奉

上諭昨順天府尹蔣炳條陳外省中式之人應於榜後覆試一事朕已降旨先行但如何覆試之處未曾奏及各省難以奉行必至參差不一亦屬非體從來科場取士首重頭場四書文三篇士子之通與不通不出四書文之外今應令中式之人填寫親供時在巡撫衙門內嚴行防範該撫會同學政出四書閒冷二題不在擬議之內者當面考試聽其盡一日之長試畢即將原卷與中式卷一併解部聽候磨勘如有文理荒謬及不能完卷者該撫該學政不得瞻徇即行舉出另行奏聞候朕降旨餘照原奏行該部即速行文該省知之欽此

2615 乾隆九年八月二十四日內閣奉

上諭浙江杭州府知府員缺著紹興府知府周範蓮調補紹興府知府員缺著刑部郎中袁珂補授欽此



[General Information]

书名=乾隆朝上谕档（乾隆元年至九年）

作者=

页数=935

SS号=10004964

DX号=000005779405

出版日期=

出版社=